ハイイロ ノ カナタ

mild

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハイイロ　ノ　カナタ

【Ｎコード】
Ｎ９４００Ｋ

【作者名】
ｍｉｌｄ

【あらすじ】
その青年は永い時を狭い部屋で過ごしていた。日々襲ってくる狂気と退屈を振り払いながら時間を潰す。そんなときある少女との思わぬ出会いから、青年の運命は外の世界と絡み合っていく。

処女作なので生温かい目で見てやってください。

退屈の終わり（前書き）

よろしくお願いします

退屈の終わり

一面が灰色だった。

大地は争いと死で、空気は爆煙と硝煙で、風は腐った匂いで、そして、心は絶望で。本当に何もかもが灰色で色彩を失っている。

そこに命は存在しなかった。すべては灰色に浸食されて息をしていない。――たった一つ、静かにたたずむ、どんな灰色よりもくすんだ鈍色をのぞいて。

それはどんなに色あせていても、しっかりと血が通っていて、ありふれた人の形をしていて。

そばには無造作に捨てられた無骨な剣が一本。

その剣を掴んでいたはずの手は硬く堅く握りしめられて、拳となったそれは向け先を見失っている。

◆

◆

◆

――夢を、見ていたようだ。

過去の夢だったが、今更何も感じることはなく、無意識の中に消し去った。そしていつものようにけだるげに目を開ける。軽く周りを見渡したあと、日本人らしい黒髪の上から頭を掻きむしる。

は、と仰向けに寝転がったまま短く息をついた。そしていつもと同じように思考を巡らせる。たいして意味はないがもう習慣だ。

果たして、ここに閉じ込められてどのくらいの時が経ったのだろう、と。

何日では単位が足りない。月でも年でもまだ足りない。何世紀というレベルの時間をここで過ごしたのではないだろうか。

寝起きで何もしたくない気分だが、じっとしていると孤独と退屈で気が狂いそうになる。仕方なしにベッドから身を起こし、頭を振って眠気と狂気を追い出した。

部屋の後ろのほうに永久灯がひっそりとささやかに部屋を照らしている。１０メートル四方のこの部屋を照らすには十分すぎる光量だ。

軽く屈伸をして凝った体を解すが、何をするにしても離れない思考が邪魔をする。

全く。

自分はなぜこんなところに閉じ込められているのか、と。実にふざけたことに、ここにいる理由も経緯も俺には分からないのだ。

目を覚ますといつの間にかここにいた。最後の記憶は兄の実験のモルモットにされて、それから一体どうなったのか、俺の記憶はそこでぷつりと綺麗に途切れている。

俺の身体の調整のためだと言いながら、好奇心に満ちた目でマシンを操作しているのを見て不安に駆られたことだけは、はっきりと覚えている。あの実験で何か不具合でもあったのだろうか。

まぁ、このことをいくら考えても答えが出ないことは分かり切っている。これまで何十、何百と思索してきたのだ。今更、わかるはずもない。

そこで思考を打ち切り、次の眠気をまつ…事もできず、何か暇をつぶせるものはないかと部屋の中を見回すが、昨日と変わったものは当然見つからない。

こんな狭い部屋に新しい何かを与えてくれるものなどあるはずがない。そんなことは分かっているが、何かしていないと不変の日常が作る狂気が俺を狂わせようと襲ってくる。一人で奇行に走るのも好い加減に飽きてしまった。

何度見てみても、何もない。しょうがないのでベッドから身体を離し、いつもの様に体を動かすことにする。

この部屋では汗もかくことができないが、動いていると汗の代わ

りに狂気が落ちていくのを感じられる。

一心不乱にやっていると自分と世界の境界が曖昧になっていく感覚に襲われる。そんな時には狂気も襲ってこないのだ。

――さて、どれくらいやっていただろうか。

集中しすぎると、時間の感覚まで曖昧になってしまう。体の疲労具合からして９～１０時間ぐらいだろう。さすがに腕もだるくなってきたので、今日はここでやめることにした。

ベッドに転がり、またぼんやりと時を過ごす。身体能力は前とは比べられないほど上がったと思う。以前より体力も腕力も格段に上がった。成長してきたのはうれしいが、競い合う相手もいないので少々張り合いがない。

しかし、別に気にすることもないだろう。

ここでの行動のすべては、次の眠気が来るまでの暇つぶしだ。何一つとして意味のあることじゃない。俺の知っている世界などもう確実に消え去ってしまっている。ここで外の世界に思いを馳せる事ほど、意味のないことはない。

それはもう好い加減学習した。しかし、どうしても諦めきれない思いはある。と言うより舌を噛み切って死んでいない時点で一欠けらも諦めていないのだろう。

だからこそ、こんなどうしようもない気分になってしまう。

自然と意味もなく口の端が吊り上がる。狂っているからだろうか。今の自分は既に狂っているのではないか。狂い直してまともになっているのかもしれない。

自分の考えの馬鹿加減に好い加減辟易しながら、体から力を抜く。また底の底方から狂気が首をもたげるが、眠気のほうが先に到着したようだ。意識が黒く濁っていき、瞼が重くなる。

とにもかくにも、今日もいつも通りに終わった。

……そう思った矢先、

「い、やあああああーーーーーー！！」

なんか落ちてきた。

金色の髪、緋色の目

「あ、いたたた……」

久方ぶりに自分以外が発する声が鼓膜を揺らした。つまりは落ちてきたのはどうも生き物だという事。

このシチュエーションでなければ、諸手を挙げて喜んだだろうが今はそいつが落ちてきて、いまだそいつが座りっぱなしの腹が痛くてそれどころではない。

「……おい」

「こ、ここは……ひゃあっ！」

腹の痛みに唇を噛み締めながらもとりあえず話しかけようと肩に手を置こうとしたが、腕が上がらない。目をやると俺の腕は…俺の腹の上、つまりそいつの股間の間にあった。

「……不可抗力だ」

そいつは俺の上から飛び退くとベッドから1メートルほど離れた所から涙目でこちらを睨み始めた。

年はおそらく10歳程だろうと言う小さくて華奢な体。金髪、緋

色の眼でどうみても日本人ではない。言葉は通じないだろうが、どうにかしてコミュニケーションを取ろうとして、

「おまえは誰だ！　変態か！？」

言葉は通じるらしい事は分かった。

「おまえが誰だ。娘っ子」
「しらないのか？」
「知るかよ…」

この年頃の子供は自分が世界の中心だと思っていることが多いらしいが、ここまで顕著なものなのだろうか。自分の矮小さを教えてやろうか、――いや、これでも大事な客人だ。紳士的に。

「んー、……ユキネ。わたしのなまえだ。変態の名前は？」
「それはつまり、俺の名前を聞いてるんだな？」

変態の名前を聞かれて自分の名前を言うのは流石に抵抗があるが、迅速に話を進める為にここは涙を飲む事にした。

「春雪、志貴野春雪（しきのはるゆき）だ。因みに断じて変態ではない」
「変態ではないのか」

「ああ。近年稀に見る超紳士だ」
「引っかかったな！　変態はみんなじぶんが変態ではないと言うんだぞ！」
「ああ、お前馬鹿な子なんだな？　分かった理解したよ」

神様にどうかこいつの知能指数を今すぐ２０ばかり上げて欲しいと頼んだが、まあそこは俺の永年の願いを頑なに拒否し続けた神様。無視を決め込む事だろう。

もし会う事があったら必ず鍛え上げた右拳を見舞ってやろうと、固く誓いながら天井に逃げていた視線を目の前の子供に移す。

「変態じゃないのか？」

そして、堂々巡り。もう一度言うが俺は早く会話の進展が欲しいのだ。どれだけ刺激に飢えていると思っている。

「…実は変態なんだ。全く幾度親を泣かしたことか」

しかし、これは良くなかった。幾ら進展を願ったとは言え、これでは知能指数が低いなどと馬鹿には出来ない。

「近よるなぁ！　変態！」

「……よし決めた。小娘、そこに正座しろ」

こいつの場合は、馬鹿と言うより幼いと言ったほうが近い気がする。よって、言葉で伝わらない分には体で伝えるとしよう。愛のある体罰も教育には必要不可欠だ。

◆

「変態ではないということはわかった」

「そりゃよかった」

小一時間かけて、その上己の趣味嗜好まで晒した結果、やっとここまで行き着くことが出来た。俺は色即是空の仙人だと半ば闇雲に言った事が功を奏したらしい。これから仙人を騙るのは骨だが、それはおいおいばらすとする。

心身共に距離が縮まってきてはいるが、それでもユキネは警戒はまだ解いてないらしく、腰が引けている。なんとか警戒を解きたい。なんと言っても初めての客人だ。

ふと、ユキネの腰に目がいく。もちろん変態的な意味ではない。

黄金色の大輪。一見すると秋桜（コスモス）のようだが、それにしては少し花

びらが広く大きく、永年の埃を被った記憶とは合致しない。

「その花、……1本くれないか？」

「…花？　ああこれかいいぞ、ほら」

そう言いながらまた1歩近付いてきたユキネから1本だけ花を受け取る。

途端に、懐かしさが穴という穴から染み渡ってきた。下品な言い方だが本当に、匂いやその色や、花びら同士が擦れる音でさえも、驚くほど敏感に感じ取り、俺の心を甘く痺れさせる。

決して言い過ぎではなく、口に入れて咀嚼してどこまでもその花の味と匂いを吟味したい程に。しかし客人の手前。喉を鳴らして花から目を逸らす。

「…これ、何に使うんだ？」

「これはイーラの花と言ってな。王冠をつくろうと思ったんだ。けど取りすぎちゃったみたいだ」

確かにユキネの頭の上には豪華な花の冠ができているのに、まだ腰には大量に花が残っている。

それだけあれば一つくらい食べてしまっても構わないだろうか、

と本気で葛藤しながら手元の花に視線を戻す。と、そこで一片だけ花びらが欠けていることに気付いた。

何となく、そこから一枚おきに花びらを取り除いていって、何とも奇妙な花が一本出来上がった。因みに花びらも食べるのはきちんと我慢した。

それを、ベッドの上に立ち上がりそっと手放してみる。

「――お、お？」

くるくると回転しながら、ユキネの手の中にそれは着地した。まるで魔法でも見るような目で驚くユキネの目には、子供らしい好奇心が見て取れた。

「まぁ、プロペラだな」

「ぷろぺら？」

驚くほど分かりやすく、ユキネの瞳の中で警戒が好奇心に押し流されていった。苦笑しそうになりながら、必死に柔和で子供受けしそうな笑顔を作ってみせる。

そんな顔など一切見ていないことに気付いて、直ぐに止める事になったが。

「ほらこっち来い。教えてやるから」

無理して表情を作るのにも疲れたので、愛想などそっちのけでそう言った。

少し躊躇うかと思ったが、ユキネは自身の好奇心に従って、ちょこんとベッドの隣りに腰かけた。

「こうして、ほら出来た」

「む……？」

「いや、1枚ずつ間を開けて抜くんだよ」

「お、おおできた！　できたぞ、ハルユキ！」

警戒はどこへやら。キャッキャ、キャッキャと笑って騒ぐ。うるさいのは嫌いだったはずだが、降り積もった年月で大分人格が矯正されたのか。つられる様に自分の口元も綻ぶ。

何度も何度もベッドの上からそれを飛ばして遊ぶユキネを、邪魔するのも抵抗があってとりあえずそれを見つめていた。

ユキネはひとしきり遊び終えると、こちらの視線に気付いたのか、少し気まずそうな表情を見せた後、ちょっと考えてポンと手をたたいた。

「んー、よしちょっと屈んで、目をつぶってくれ」

何をいきなりと訝しむが、いわれた通りに目をつぶる。呆れるほど警戒していない事に目を瞑ってから気付くが、まあ悪い気分ではない。

ぱさっ、と渇いた音を立てて頭の上に何かが乗った。何が乗ったのかと確認する前にユキネが答えを言ってしまう。

「お礼だ。ぷろぺらの」

先程まではユキネの頭の上に載っていたはずの、花の冠だった。

頭に手をやると、まだ瑞々しさが残った花びらと碧い茎の感触が心地いい。

「いいのか？」

「いいよ。また作るから」

頭からはずして、手に取り眺めてみる。不格好だった。花は片方によってるし、太さもバラバラ後ろの方は今にもちぎれそうだ。

調度品としては当然役には立たず、観賞用とも言い難い。しかし、何とも変え難い。何故か食べてしまおうと言うよりは、手元に置いておきたい、とそう思った。

「ありがとな」

「ム……、それはお礼だから、またお礼を言ったら終わらない」

「いいんだよ。色々あるんだ。俺は大人だからな」

頭をぐりぐりと、強めになでつける。子供らしくその髪は驚くほど柔らかい。癖になりそうな手触りに区切りを付けて手を離した。

ユキネは頭の上に載せられた手に一瞬きょとんとして、しかし、嬉しそうに顔を綻ばせた。

「んで？　ユキネはどこからどうやってここに来たんだ？」

「……うえからおちてきた」

「……お兄さん、具体性のない子は嫌いだなあ…」

先程の自愛に満ちた手付きとは対極のような荒々しい手付きで、頭に手を置いて、僅かに握力を加える。

痛みは無くとも、言いたい事は伝わったのか、ユキネはたじろぎ

出した。

「ほ、本当のことなんだ！」

「知ってるよ」

冗談はさておく事にして、ユキネが落ちてきたのであろう天井を眺めてみるが、天井だ。どこまでも天井でしかない。コンクリートのような、しかし硬度は他に類を見ない灰色の天井。

「と、ところでなんだが、ハルユキはなぜこんな“いど”のなかにすんでる？」

他にこの憎憎しい天井をどう例えてやろうかと腐心していると、ユキネが僅かにビビリを残した声で質問を返してきた。

そして、その答えに――いや質問にまた疑問が沸く。

いど。ＩＤＯ。イド。緯度。異土。井戸。

前半の三つは意味不明。ここが地下なら緯度の下にいるのは当たり前。こんな子供が異土にいるはずも無く、ならば答えは最後の選択肢。

湿りも潤いも感じた事などないが、井戸の下にこの部屋はあるらしい。

「……ここ井戸の下だったのか？」
「しらなかったのか？」
「いつの間にかここいたんでな。ここがどこかも俺には分からん」

ホントは俺死んでいるだとか、世界は俺だけを残し消えてしまっただとか、そう考えたことは一度や二度ではない。ユキネが落ちてきた事で僅かにそれらの可能性は薄くなりはしたが、こいつもまた死んでここに来たとも考えられる。

しかし、二人しかいないと言う事は何か共通点があるわけで。そんな物は見当たらない訳だ。

大体井戸の下などという捻りが無い場所に居たとしたら、これほど長い間誰とも会わないのはおかしい。

「なぁ、ハルユキ」

古くなって使われなくなった井戸なのか。はたまた入室に何か条件でもあるのか。

「なあってば」

そもそも、俺が閉じ込められる前にあった井戸ならば間違い無く朽ち果てているだろう。ならばここに来てから建設された井戸とい

うことになるが、ただこの部屋が地中にあるのならば分からないはずも無い。

「……」

それに、俺が外にいたときには、井戸なんて骨董じみたものはほとんど存在してなかった。ならばまた兄貴の技術（オーバテクノロジー）でも関わっているのか。

「ムシするなあっ！」
「あいた…」

猫のじゃれ付きのような可愛らしい感触に、目を向ければ、ユキネが涙ぐみながら俺の頭に打撃を与えていた。

どうやら話しかけていたらしい。

「ああ、よしよし泣くな泣くな」
「な、泣いてない……！」

ユキネは明らかな強がりを口にしながら、ぐしぐしと背中を向けて目尻を服の袖で拭い始める。折角の客人だ。いったん考えるのをやめてユキネの相手をすることにしよう。

「ハルユキは、ここにひとりなのか？」
「まぁ……、そうだな。」

何か話題でも探すか、と思考を巡らせる前に、ユキネがまた質問をぶつけてきた。今までとは毛色が違う質問で、とりあえず正直に肯定を返すと、考えるように顔を伏せて目を泳がせだした。

何かを言い淀んでいるような、そんな表情。沈黙を受け流しながら待つ事数十秒。意を決したようにユキネが顔を上げた。

「な、ならわたしがトモダチになってやろうか……？」

気でも使っているのかとも想ったがどうやら違う。言葉によると、どうやら友達がほしいらしい。天邪鬼な物言いからか、それとも純粋に嬉しさからか、最大の好意を持って頭にポンと手を置いた。

「おお、そりゃ助かる。ぜひそうしてくれ」

大人の対応。もう子供ではない。

一瞬、ぽかんとした表情で言葉の意味を咀嚼すると、ユキネの表情に花が咲いた。

「そ、そうだろう？　よし！　きょうからわたしとハルユキは友達だ！」
「よしよし。友達だ」

またユキネの頭をなでくりまわす。柔らかな髪の感触がやはり堪らなく気持ち良い。

……抱きついて良いだろうか。いや、決して変態的な意味ではなく。

何しろ何十世紀以上の孤独だ。舌は味を忘れ、肌は風と人肌を忘れ、体は性欲を忘れている。
だからお前は狂っているのだと言われれば強く否定は出来ないが、どちらかと言えば、長い月日が赤子のように好奇心を鋭く大きくさせているのだと信じたい。

「えへへ……」

俺のそんな葛藤などいざ知らず、撫でられたユキネはご満悦の顔である。改めて見れば驚くほど整った顔立ちをしている。いや、久しぶりに女を見たからだろうか。
そう考えると今の所性欲が枯れていて助かった。こんな年端もいかない少女に手を出したとあらば、史上最高のロリコンに認定されてしまう。

「よし、きょうはかえってまたあしたくる！」

そして、遂にその話題が出てしまう。ひく、と口の端が強張って痙攣するのが自分でも分かった。

「どうやって出るんだ？」

眩しい笑顔のまま部屋を見渡して、どうやって出るか分からなかったのだろう。その眩しい笑顔をこちらに向けてきた。咄嗟に目を逸らした俺を許して欲しい。

俺が悪い訳では決して無い、とは思うが、それでも全く、――申し訳なくて顔が見れない。

しかし、黙っていてもしょうがないので慎重に話してやることにした。慎重に言葉を選んで。

「……俺はここから長い間、出ていない」

「……？」

「いや、出られていない。壁を殴り続けた事数知れず、壁を相手に３２コンボを決めたのは俺ぐらいだろう」

「…？　……？」

「つまり！」

「つまり…？」

一呼吸おいて言い放つ。

「ここからは出られない、んだよね」

一瞬間が開いて、ユキネの驚きの声が部屋の中に響き渡る。非常に喧しい同居人が出来た、いつもとは少しだけ違う一日だった。

◆
◆
◆

――結論から言えば、ユキネは2週間ほどしか一緒にいなかった。

それはまあ、ユキネにとっていい事だったと思う。

こんな所に閉じ込められるなど、不健康この上ない。しかし、帰れないと言った後ユキネは一旦落ち着くと、それからはあまり気にしなくなったように見えた。

「ハル」

ハルとはユキネが考えた俺の愛称のこと。ユキは自分の名前に入

っているから駄目なんだそうだ。

「……ん？」

いつものように遊んで。笑って。けんかして。仲直りして。疲れて。ベッドに寝転がって。もう今日することは寝ることしかなくなったとき、ユキネがそう呟いた。

その声は、ひどく沈んでいて、最初誰の声かわからなかったほどだ。

「わたしはな、じつは――王女なんだ」

「……は？」

突拍子も無い言葉に咄嗟に気が聞いた言葉を返せるほど、俺の会話力はウィットに富んではいない。

それより王女だと？　いつから日本は王政になったのか。それもこいつは金髪。欧米か欧州にでも乗っ取られたのか。

いや待て、それより”これ”が王女だと？

「……気品って知ってるか？」

「……なぜいまそんなことをきくんだ？」

以外に頭が回ったのか、ぴくぴくと額に可愛らしい青筋を浮かべ始める。返答如何では暴力に訴え始める兆候だ。

「（笑）」

「器用なわらいかたをするなぁ！」

ゲシゲシと手加減無しで向こう脛を蹴られる。まあ痛くも何ともないが、とにかく日本人の十八番（あいそわらい）は通じなかったらしい。

「で、王女がどうした。王女だからって何も特別扱いはしないぞ。甘えんな、ここは俺の城だ」

少し目を見開いて、驚いたような、嬉しいような、怒ったような顔になった。変な顔だった。

「そうじゃにゃくて……」

噛んだ。絶対に噛んだ。そして今言い直すかそのまま話を進めるかで葛藤しているのが、ありありと伝わってくる。如何にして馬鹿にしてやろうかと、俺の頭が本日最高速度で回りだす。

「そうじゃなくて…」

前者を選ぶらしい。そして言葉は未だ沈んだまま。舌っ足らずをいじってやりたいが、まじめな話みたいなので、無言で先を促す事にした。

「城には私のいばしょが無くてな、つまらないんだ。みんなきっと私をじゃまだと思っている」

「……そうか」

「い、いやなぐさめてほしいわけじゃないんだ。その……わたしが言いたいのは……」

ユキネはまたいい難そうに口ごもり始めた。顔を真っ赤にして、俺を睨むように見上げると勢いに任せて口を開いた。

「こ、ここは、ここにはハルがいるから楽しくて……。だからずっとここにいてもいいなぁ……なんて」

今度はこっちが驚かされる番だった。俺もユキネも楽しくやっていけてるのはわかっていたが、多かれ少なかれ帰りたいと思っていると思っていた。

その時は止めてはいけないということもわかっていて、少し寂しい思いもした。

黙っている俺に不安になったのだろう。ユキネが重そうに口を開

く。

「ハルは、……わたしと居て楽しくないか？」

どう答えるべきか少し迷うが、こういう時に自分の気持ちに嘘を付ける程器用ではない。ただし見栄を張るのは得意だが。

「おまえが居ると……うるさいし、疲れるし、ほこりが立つ。悪口は言うし、暴力もふるう」

「……ご、ごめん」

涙目。やばい、言い過ぎた、泣かないでくれと心中で慌てふためきながら、言葉を探す。

それはもう、必死だったのだ。見栄を張るのも忘れて、考え無しの発言をしてしまったのは、きっとそのせい。

「……けどな、退屈はしてねぇよ。おまえが居るとだな……まあ嬉しいって言うか……楽しくないことも、ないんだよ」

危ない。一時のテンションに任せてあまりに恥ずかしい台詞を口走るところだ。

しかし、いくらか身を削ったおかげで、涙目でぽかんとしていた

顔が、笑顔に変わってくれた。自分でも情けない程に胸を撫で下ろす。この表情が一番好きなのだ、仕方ない。

――もう、狂気を感じることはない。以前の俺には想像も出来ないだろう。朝起きて、目の前で笑顔と挨拶を貰う度にぞわぞわと歓喜が爆発しそうになるのだ。

そのせいか寝起きで抱き締めそうになった事１４回、もれなく毎日。因みに我慢できずに抱き締めてしまって、殴られた事６回。

正直、感謝している。悔しいから言わないが。

「そっか、ハルユキも楽しいのか……そっかぁ」
「……楽しくない事もない、だ。拡大解釈すんなもう寝ろ俺も寝るまた明日な」

早口でそう言って背中を向けて眠気を迎えることに全力を尽くすことにした。ユキネに背中を向けて、熱い顔を意識しないように目を瞑る。

「おやすみ、ハル。また明日」

それから、眠りにつくまでどれくらいかかったか定かではないが

――。

眠りに落ちる直前。何かが体の上に覆い被さり、頬に柔らかくて温かい何かが触れた、――気がした。

そして次の日。

部屋で待ちかまえていたのは少女ではなく、静かな孤独だった。

金色の髪、緋色の目（後書き）

実際に書いてみると書く難しさがよく分かりました・・・・・・。

愚王と親友（前書き）

今週はここまでです。

愚王と親友

ハルと会えなくなって４年になる。

どうやってあの部屋を出て来たのかは分からないが、とにかく目を覚ましたらここに寝ていた。

城の裏庭にある花畑の隅にある井戸の底で意識を失っている私を担ぎ込み、それから私は城でずっと眠っていたらしい。

もしかすると。

いやきっと、あれは夢だったのだろう。

少し空しい気もするが、つまらない記憶ではなかった。勢いでしてしまったキスも今となってはいい思い出だ。

何はともあれ、また私は城で生活している。

……城といっても軟禁という形で、だが。

私が眠っていた2週間でこの国の王家は、没落していた。

元々、母上に次いで、王が突然の病で死んでしまってからは、宰相であるリュートンが政治を行ってきたはずだ。私がいきなり原因不明の眠りについてしまったのをきっかけに国取りを行ったそうだ。

たいしたものだと思う。なにせ、かなり横暴な手段をとったにもかかわらず、ちゃんと自分を正当化している。

この国の王家は暴利をむさぼり、国に仇なす愚か者だと言い切ったのだ。

これに反発した王家派の人々と争いになったが、準備も整わないうちに攻められ私を人質にしたおかげで、ただ一方的な虐殺だったらしい。

……国王縁のものはすべて殺され、子供だからと見逃されていた私も数日後の１６歳の誕生日にめでたく処刑だそうだ。

ちなみに王、…父上はそんなことはしていない。むしろ横領や賄賂などに手を染めていたのはリュートンの方だ。

自慢げに父上を無能の馬鹿だと貶しながら、自分でそう言っていた。

「……ユキネ」

「ん……どうした？　フェン」

今日もいつもの淡白な服に袖を通していると横から声がかかった

透き通るような青い髪の小柄な少女・・・私の世話役もとい、友達のフェンが不思議そうな顔をしてこっちを見ていた。
ハルユキ以外の唯一の友達だ。

「どうした？」

ここは敵の高い地位の捕虜を監禁するための施設なので、姫だった頃の自室と比べてもなんら遜色はない。
そこにフェンと４年間閉じこめられている。無口な少女だが、慣れてくれればきちんと話してくれる。

「諦めちゃ、駄目」

そういうことか。もう会えないであろうハルのことを思って自分でも知らないうちに落ち込んでいたらしい。
なるほどそれを諦めの色だと感じたのか。

「あのな……「駄目」」

別にネガティブな事を言おうとしたわけではないのだが、フェンが無理矢理言葉を切った。

……まあ、実際私は殺されてもいいと思ってはいる。

むしろ死ぬべきなのだ。あんなに人を死なせてしまったのだから。

ここには前もっと人がいた。王族の関係者や親密だった使用人達が大勢いたのだ。

しかし、閉じこめられて最初の辺りで次々に処刑されてしまった。子供だったフェンと私を残して。

あの人達は優しいから、どんなことがあっても生きてくれと言ってくれたが、私は王族としてあの人達のあとを追う義務がある。

私達王族のせいで死んだようなものだから。

だから。

フェンは知らないだろうが、私は処刑を受け入れているんだ。それに私が殺されるだけで、フェンだけは助けてもらえることになっている。

フェンは怒るだろうが、やはり唯一となってしまった友達には生きててほしい。

フェンに何か言おうと口を開こうとすると、同時に乱暴に扉が開かれた。

「フェン・ラーヴェル！　来い！明日の処刑に向けての審問だ」

耳を、疑った。

「ど、どういうことだ！　私が抵抗しなければ、フェンは自由にしてくれるはずだろう！」

いきなりの話に驚愕しながらも、ほぼ反射的に口を開いた。そんなわたしをあざ笑いながら兵士が告げた。

「王はそのようなことは知らないそうだ。」

王、だと…！　約束も義理も果たそうとしない奴が、王だと！？

「ふ、ふざけるな！」

一番近くの兵士に殴りかかる。懇親の力を込めた。意表も付いた。しかし所詮は魔法も宿っていない女の細腕。当然敵わずに逆に殴り飛ばされた。

「あうっ…！」

「ユキネ！」

フェンが小さい体でこちらに駆け寄ろうとしているのが見える。が、兵士に力尽くで引っ張られていく。

唇をかみしめて立ち上がろうとするが、よほどひどく殴られたのか、体が動かない。しかし何よりつらかったのは、体の痛みではなく、親友を助けられないことだった。

悔しさが頭の中に、血の味が口の中に広がっていく。結局、歳をとっても王女であっても。私には何もできないのだ。

バタン、と扉が閉まる音と同時に、ユキネの意識は遠のいた。

◆◆◆

ここは。

私は、どうしていたんだろうか。

そう、そうだ。兵士に殴られて、それから気絶でもしてしまったのだろう。記憶がすっぽりと抜け落ちている。

「フェンは……！！」

「まぁ、もうそろそろ死んでるんじゃないですか」

不快な声にはっとして顔を上げると、ぶよぶよと脂肪の付いた顔がいやな笑みを浮かべていた。

「リ、リュートン！お前ぇ！！」

飛びかかろうとするが足が引っ張られてひき戻される。

「野蛮ですねぇ。これだから、没落王家は」

「く……」

見れば体中が鎖で拘束されている。動くのは指と首ぐらいだ。

「とは言っても、いきなり決まった処刑ですから、シャミラの森の真ん中に手ぶらで放り出すぐらいしかできませんがね」

「シャミラだと！？」

フェンは優秀な魔法使いだが杖も何もなくては、一般人と変わらない。シャミラには凶暴なモンスターが山ほど居るはずだ。万全な状態ならともかく、無手では、どうしようもない。

「は…なせぇ！！」

今まさに命の危機に襲われているかもしれないと思うと、居ても立ってもいられなかった。だが力を込めても鎖はびくともしない。

「すぐに、会えますよ。」

「ッ……？」

「2日後ですよね。16歳の誕生日。あの世で感動の再会でもしてください」

その言葉を聞いたとたん、怒り一色だった感情の波に何か冷えた感情が流れ込み、胃に何か重いものでも落ちた感覚をかんじた。

やはり覚悟をしていても、いざ死ぬとなると、恐怖と不安が全身を駆けめぐるのだ。

しかし、下唇をかみ締めそんな事はすぐに頭から追い出す。

今はフェンを助けるために、頭を下げなければならない。私一人では、どうしようもない状況なのは教えられるまでもなかった。

「……フェンを助けてくれ。頼む……！」

「……頼み方ってのがあるでしょう？」

ニヤニヤと脂肪がたっぷりと乗った顎を撫でながらリュートンが汚らしい眼でそう言った。
屈辱的ではある、がそんなことは今は気にしてられない。

「……お願い、します…！」

王家としてのプライドも捨て頭が地面に着きそうなくらい必死に頭を下げる。しかし、返ってきた言葉は半ば予想していた言葉。

「いやですよ。めんどくさい。」

下げた頭を踏みつけられた。地面に顔がこすり付けられ血と地面の味が口の中に滲んだ。

「あ、そうですね。助けて兵士たちの慰み者にしてもおもしろそうですね。」

今まで耐えた怒りと屈辱が全身で爆発し、目の前が真っ赤に染まっていく。

「貴様ぁあああ！！」

頭の上の足を振り払い、掴みかかるが、鎖に邪魔され届かない。

怒りを顕すように、手首の拘束具と接触している部分から血が滲み、鎖がけたたましい金属音を響かせる。

「ま、もう死んでますかね」

リュートンは見張りの兵と何か言葉を交わし、部屋の出口へと向かった。

「ゆる…さ、ない…！」

兵士に何か薬をかがされる。

爆発しそうな怒りを抱えたまま、再び意識が沈んでいった。

自分の色

必死に体を動かし拳を打ち出す。ユキネが居なくなってからというもの、ひたすらに体を動かす時間が増えた。

狂気が後から後から襲ってくるのだ。逃げるように足を動かし、振り払うために拳をふるう。

思っていたよりもずっとユキネに助けられていたのかと実感する。ベッドの脇にはまだ不格好な花の冠が置いてあった。

これを見ていると、外の世界を、ユキネがいる世界を想像してしまうようになった。

それはここにいる今において、決して良い意味ではない。

外に出たい、外に出たいと、世界を渇望する感情が狂気と結託して心を苛めてくる。しかし花の冠もその気持ちも捨てることなどできなかった。

捨てる場所もないし、何よりどれだけ苦しくても、捨てたいと思わなかった。

直にそれの近くでないと眠れなくなった。これが狂気を助長しているのに不思議だった。ホントに宝物だといっていい。何度も助けられた。

もう何十回目かの一週間徹夜だ。

もう、アレのそばでも一睡もできなくなっていた。

仕方ないので、何日も何日も意識を失うまで徹夜で体を動かす。

そうやって、強制的に睡眠をとると、今度は時間の感覚も完全になくなった。

起きた瞬間から体を虐めて、長い眠りに就く。

もう何回繰り返しただろうか。

ひょっとするともう狂ってしまっているのかもしれない。ここまでやるのは気が触れているからかもしれないと考えると体から力が抜けていく。

（・・・もう疲れた。）

倒れる。疲れからか、同時に意識もなくなり、狂気が部屋を包んでいく。

最後の最後、妙な色の花の冠が視界の端に映った。

◆
◆
◆

「おい」

何か聞こえる。

「起きろ。」

何だ・・・？

目を開けると・・・闇が広がっていた。

「うわっ・・・！」

飛び退く。

「そんな警戒しないでくれよ。」

そう言ったそいつは、俺から1メートルほど離れたところに胡座を

かいて座り込む。
先ほどの闇はそいつの体だったらしい。真っ黒な影のようだ。

（ここは・・・。）

ハルユキは目の前の影を警戒しつつ、周りを見渡す。真っ白。それ故にさっきの影がより異質に見える。

ここには、ハルユキと、黒と白しかなかった。

「落ち着いたか？」
「お前は何だ。ここはどこだ。俺をどうするつもりだ。」
「いっぺんに聞くな」
「……俺をどうするつもりだ。」

黒い影がいう事ももっともだったので、一番優先すべき質問を定め警戒しながら言葉にした。

「そう、それなんだよ！」

予想外の大きな声にびくっと体が反応する。

「お前をあの部屋から出してやろうかと思ってな」

何、だと……!?

「出せ!!!」

可能性を提示されただけで外を渇望する心が暴れ出しそうになる。

「まぁ待て。俺は質問されたんでな。答える義務がある。」
「…さっさと話せ」

「まずは何だったかな…そう。俺が誰かだったな。　俺は、あれだ。…お前の分身みたいなもんだ。厳密には違うがな。ま、一心同体ってやつだ。
　ずっとお前の中にいたんだぜ。」

「……そう、みたいだな。」

何故か俺がここでこいつと対話していることに微塵も不思議がない。会ったばかりなのに親の顔でも見ているようだ。違和感が違和感を塗りつぶしている、そんな感覚。

「・・・で、なぜこのタイミングで出てきた。」
「出てこなかったんじゃなくて、出てこれなかったんだよ。」
「どういうことだ?」
「ここまで成長したからこんなことができたんだ。つまり栄養のあ

るものを食って成長したってことだよ。」
「・・・？」
「わかんねぇかなぁ。お前から供給されるモンで大量に有り余ったモンがあっただろうが。それをおいしく頂きましたってことだ。」」

何だ？どういうことだ？

こいつはつまり俺が心の中で生み出したものなんだろう。

ってことは・・・・・・。

「狂気……ってことか？」
「イグザクトリィ。大正解だ。いい味出してたぜぇ。お前の狂気は。ま、あんなとこに何世紀もいりゃ当然だがな。」

何世紀・・・。やはりそれだけの時間が経っていたか。

「…どれくらい経ったんだ？」
「あぁん？」
「俺はどれくらいあそこにいたんだ」
「そうだなァ。一億年くらいじゃねぇか多分」

なっ…

「い、一億年……」

……うそだろ。
ずいぶんと陳腐な数字だ。数字がでかすぎてとても実感できない。

「へぇ、思ったより気にしないのな」

いやな笑みを顔に貼り付けて聞いてくる。

「まぁ、俺が知ってるものが何もなくなる位の時間は経ってると思ってたからな。」

千年も一億年もかわりはしない。どっちにしろ、俺の知ってる国、いや世界ではなくなっているはずだ。

あまり反応が大きくなかったのがつまらなかったのか、黒い影は淡々と話を続ける。

「あとここがどこかだが、・・・まぁ、お前の心の中だな。」

そんなとこだろうな。

「で、何が望みなんだ?」
「オイオイ、そんな疑うなって。裏なんてねぇよ。お前にはメリッ

トしかないんだぜ？　ここから出れるし、ハッピーな脳内友達もできるし、・・・強くなれるぞ？」

あからさまに含みがあるだろうが。

「俺はもう十分強いんだよ。」

「確かにな。確かにお前の拳術はたいしたモンだ。閉じこめられてる時もやってきたせいか、史上最高の錬度といってもいい。…けどな、それでも速さも強さも、拳銃一丁にも届いてない。…ああ、お前の場合は拳銃にも勝てるかもしれんが、剣はもう握らないんだろ？」

「……！！！」

「なに驚いてんだ？いったろ。俺とお前は一心同体だって言ったろ。お前のことなら何でも知ってる。もっともそのときは自意識もなかったがな」

「ストーカー野郎が・・・」

「そんな趣味はねぇよ。見えてるんだよ全部。お前は確かに秀でていたし、優れてた。でもなそれじゃ駄目なんだ。今更誰かがたどり着けるところに意味はないだろ。

・・・・・外れちまおうぜ。人からな。」

ここら一帯を包む雰囲気からは、まるで悪魔と契約しているかのようだ。

唾を飲み込み、更に慎重に対話を重ねる。

「・・・お前には何のメリットがある。」

「ボランティアだ。・・・・・・っていうのは建前でな、俺もお前の兄貴の被害者なんだよ。」

兄貴？

「兄貴と話したことがあるのか？どうやって？」

「たまたまな。ともかくもういい加減退屈なんだよ。寝心地はいいし、飯も旨いんだが、そろそろ外に出たい」

嘘は…ついてるか？表情がないからわからん。結局兄貴とどんな繋がりがあるかは分からないが、それよりも早く、早く外に出たい。

よどんでいない空気を肺いっぱいに吸い込みたい。

「よしわかった。どうすればいい？」

「・・・・・・」

「どうした」

「自分で言うのも何だが、信用していいのか俺を？」

「信用してるわけないだろ」

「・・・・・・」

「考え得るデメリットをすべて足しても、外に出たい気持ちの方が強いんだよ。それに考えてばかりなんて考えてみりゃ俺のキャラでもない」

「・・・はっは！そりゃそうだ。信頼なんてつまんないモンより、ギブアンドテイクの方が安心するか！？普通はもっと疑うだろう？　いいねぇ、そのひねくれ具合！惚れちまいそうだぜ！」

「お前は生理的に信用できないしな。」

くっく、と含む様な笑い声を本来口がある場所から漏らす。

「そうかい。じゃ、さっさといくぜ。・・・誓え。お前が世界を切に望むことを。」

「誓う。」

「そんなら、【契約】だ。」

その言葉をきっかけに、周りの白が目の前の黒と混じり合い、変色していく。何の意味も、意義も、善悪もない灰色に。

その色は、どこか俺によく似ている気がした。

世界

――――目を覚ました事を自覚しゆっくりと瞼を開けた。

またしても目の前には闇が広がっている。だが、今度の黒色は所々に赤や黄色の光がちりばめられていて輝かしく美しい夜の空。

（星……）

頬を撫でるは風。鼻を擽るは鼻と草の香り。空に散りばめられた宝石はまるで旧友のように俺の体に身を寄せてくれている。

「……ぁ」

思ったよりも感動が無いなと嘆息していた所に、ぞわりと背中に何かが這い上がった。

それは、余りに濃密で凝縮されてそれでも体から溢れ出しそうな開放感。快感となって体中を走り回り始める。

何の事は無い。感動が無かったのは体が現実に付いて来れなかっただけ。

だって目に映るすべてが。
だって花をくすぐる匂いが。
だって聞こえてくる木々のざわめきが。

　まるで自分を歓迎しているように感じるのだ。

「――、ぁあ、ああアアあああああああああああ亜あああッ！！！」

　止まらない。止められるわけが無い。
　風が欲しかった。匂いが欲しかった。草の湿り気が、星の瞬きが。それが一度に体に降りかかるのだ。それはもう快感が襲い掛かってくるといってもいい程の感情の奔流で、言ってしまえば。
　――タマラナイ。この世界をしゃぶり尽くして咀嚼したいほどに。

（うるせぇよ。キャラ変わってるぞ……）

だから、その咆哮をやめたのは頭の中にその声が響いてからだった。無視してこのまま丸三日は景色を楽しみたい所だったが、こんなでも俺を外に出してくれた恩がある。

「……よお脳内友達」
（九十九（つくも）だ。）
「…つくも？」
（俺のことだ。そう呼んでくれ。）

九十九・・・ね。まぁ、大して知りたい情報でも役に立つ情報でもない。なにしろ脳内友達だ。役に立ちそうな要素が皆無である。

（俺は基本寝てる。たまに起きてくるかも知れんが。）
「は？　退屈なんじゃなかったのか？」
（・・・ｚｚｚ）

脈絡を無視していきなり寝やがった。…まぁいい、それより。

「ここどこだ？」

辺りを見回す。

森だった。紛う事なき、教科書通りの森が周りに広がっている。今いる場所は森が開けたとこにある小さな丘の上のようだ。

今度は自分の格好を見渡す。全裸ではない様で安心した。あの部屋に居たころと変わらない、パーカーに大きめのカーゴパンツ。

比較的動きやすい格好だが、文化も全く変わっているかもしれないので、すぐ着替えることになるかもしれない。

まあとりあえず、人を探すかと思い立ち森に向かう事にする。

もう一度だけ、世界を感じる為に深く深く深呼吸を行ったその後で。

◆
◆
◆

「はぁ…っ、はぁ」

少女が、木の間を服を所々引っかけながら走り抜けている。かれこれ一時間近く走り続けているだろうか。もう限界だと少女の足が悲鳴を上げ、もつれ転倒した。

「あっ…！」

転んだ瞬間、殺気が体を貫いた。必死に身をかわすと、先ほどまで少女がいた場所に獣の爪が突き刺さった。

”ワーウルフ”

一般人には倒せないだろうが、傭兵や兵士なら倒すのは難しくないモンスターだ。

だが、少女……フェン・ラーヴェルは典型的な魔法使いであり、魔法媒体がない今、満足に魔法も使えない。つまり逃げるしかないのだ。

動きが一瞬止まったワーウルフの目のあたりを思い切り蹴りつけ、怯んだのを確認しないまま、また走り出す。

元々フェンは体力がある方ではない。もうそろそろ限界だ。仕方なくある程度走ったところで、木の陰に隠れた。

（撒いた……？）

うまくタイミングの死角をついたのか気配が近付いてこない。

ふぅと息をつく。

とりあえずここで休憩しようと思ったとき、夜の森に遠吠えが響いた。ここからあまり遠くはないようだ。

体が過剰に反応し肩が跳ね上がる。本能的にここは危険だと判断を下した。

木の陰から出て移動しようとするとまたしても遠吠え。しかも今度は正面から。恐怖からか思わず息をのむ。

（……まさか…）

一呼吸おいて、周りからいっせいに遠吠えが始まる

（囲まれた…）

逃げ場はないと悟ったのに気づいたかのようなタイミングで、がさがさとあちこちからワーウルフが顔を出してきた。

全部で十匹ほどだろうか。目で何か合図しているように見える。

何匹かがじりじりと近寄ってきて、その中の一匹が堰を切らしたかのように飛びかかってきた。

その動作はとてもゆっくりに見えたが体が反応しないので避けようがない。

（・・・ユキネ・・・ごめん・・・・・・）

こんな時なのに、思い出すのは４年前、軟禁部屋で一緒になった友達のことだった。

あの人のことだから、自分のことはそっちのけで私の心配をしてくれているだろう。

その心配を無駄にしてしまうのが一番心残りだった。

しかし最期の最後まで、無感動な自分が自分を見下ろしている感覚が消えなかった。

目をつぶって鋭い牙と爪が死を届けるのを待ちかまえる。

けど・・・代わりに届いたのは人の声。

「もう、大丈夫だ」

それと、頭に乗せられた手のひらの温かさだった。

◆　◆　◆

ハルユキは迷っていた。歩けども歩けども、誰にも会わない・・・

のは仕方ないとして、
どこにも出ない。ずっと同じような景色を見続けている。
このままじゃ状況はよくならない。変わらない景色に嫌気がさし、
手近な木の下に座り込んだ。

（はぁ・・・どうせなら人のいるところに出してくれよ。）

まぁそんなこと言っても、どうせ九十九は寝てるにで反応すらない。
１０分ほど経った後、そろそろ行くかと腰を上げると、視線の先の
枝に何か引っかかっているのが目に入った。

（布・・・いや、服の切れ端か？）

それはまだ新しく、よく見れば何かが通ったようなあとが続いてい
る。

「人だ…！」

服の切れ端を手に取り、通った跡を辿って走ると今度はいやなもの
を見つけてしまった。誰かが転んだ跡と獣の足跡。

「まずいな……」

ほぼ間違いなく誰かが何かに襲われている。

何か考える前に足が前に出て体を動かしだした。

木を追い越し風を追い付いてひた走る。先程までもかなり速いスピードで走っていたのだが、木が邪魔しなければまだまだ速く走れそうだ。

（……外れたってことか。）

確かにそれは人間を外れた動きで、獣でさえもこの森の中をこんな速さでは走り抜けられないだろう。

あっという間に追いついたのか、目の前にゆっくりと何かに近寄るオオカミの様な獣が見えた。

周りにも同じようなのが数匹いて、内一匹は今にも飛びかかろうとしている。

ハルユキは軽く舌打ちをすると、そのオオカミ1匹を見据えて、集中する。

オオカミまでは7～8メートルほど、今の身体能力なら一息で到達

できる。

ただその直線上に別のオオカミが３匹。最短距離を走りつつ、邪魔なオオカミを無効化するしかない。

そう一瞬で判断すると同時に、空気を切り裂いて走り出す。

まずは未だ気づいていない１匹の首根っこをひっつかむ。そして目の前の邪魔なオオカミに思い切りたたきつけた。

悲鳴を上げて２匹がはじき飛んでいく。予想以上に力が上がっているようだ。

だが最初のオオカミは、もう襲いかかろうと飛び上がって空中にいる。まっすぐ行けば間に合うだろうが、まだ邪魔な一匹が残っている

残る１匹はこちらに気づいたのか、獣らしい目をハルユキに向けるが、

（遅い！）

ショートアッパーで空中に浮かせ、おもいきり前蹴りを放つ。襲いかかっているオオカミに向けて。

蹴られたオオカミが襲おうとしたオオカミを巻き込んで十メートル程先の木の幹にぶつかり、動かなくなった。

（何とかなったか・・・）

この程度なら、人間の自分でも何とかなっただろうが、それでも、この体の異常具合は計ることができた。

実感できた・・・・・人間から離れたことを。

少しさみしい気がするが、自分でも望んだことだ。うじうじはしてられない。

気を取り直し、周りを見るがオオカミたちは逃げ出した後だった。

（えーと・・・）

少し探すと、木の影で小さい女の子が目をつぶって震えている。

おびえさせないように、ゆっくりと近づく。

短い青い髪の小さい女の子だ。白いシャツにローブを来ている。先程の切れ端はこのローブだろう。

……何となくユキネを思い出し、つい頭の上に手をのせてしまう。

「大丈夫か？」

安心させるためにゆっくりと、声をかけた。

世界（後書き）

誤字を修正させていただきました、指摘ありがとうございます

少女と丘まで（前書き）

なんとなく題名変えました。

少女と丘まで

少女はおそるおそる目を開いた後周りを見渡してからこっちぽかんとした顔で呆けていた。

まあいきなりの事で状況が理解できていないのだろう。

「もうあいつらはいないよ。立てるか？」

「……え？……あ、腰…。」

「…腰？」

「腰…、抜けちゃった。」

ああ、そう言うこと。転んだ跡の場所からでも結構距離あったからな。疲れと安心からそうなってもおかしくはない。

とりあえず、安全な場所に行くか。どこかないかと見渡すと森からくり抜いたかのように木々が途切れている丘が木の上から見えていた。

そして思う。

なんか見覚えあるな、と。

……うん、ばっちり戻ってきてる。ちょっと気持ちが沈んだ。

「とりあえず、あそこの丘まで行こう。見晴らしがいい方がいいだ

ろ。」
「……腰…」
「だからほら、おぶされ。」
「……」
「いいんだよ。子供はそんな遠慮しないで。いいからほら。」
「…む…子供、じゃない」
そう言われたので改めて足先から、頭のてっぺんまで見直す。そして結論。
……子供だろどう見ても。
「これでも、１６」
「……マジか」
「・・・・・まじ？」
マジが死語になってる……。ジェネレーションギャップ…。
まぁ、いいか。こんなこと言ってる場合じゃない。
「いいから、乗れって。早く。」
「…子供じゃない。」
そういいながらも器用に背中に上ってくる。
「わかった、わかった。」
「・・・胸だってある。」

ぎゅっと首に回した腕に力を入れ、胸を背中に押しつけてくるが、
悲しいかな、堅いだけだ。

「ないじゃねぇか。」

さらに腕に力を入れ、強調してくるが

「ないもんは、な、ゲェ！！」

締まる！入ってる！入ってる！！

十分だと思ったのか少女が腕をゆるめる。

「げほっ！ごほっ！！……仮にもワタシ命の恩人なのですがぁ！」
「……フェン。」
「ああん！？」
「私の名前…。そうよんで。」

マイペースな奴だな、おい。

「はぁ・・・、春雪だ。志貴野　春雪。」

自己紹介した後、会話は途切れる。本来無口な奴なのだろう。しかししばらく歩くと、フェンが少しだけ遠慮がちに口を開いた。

「ハルユキ……」
「んー？」
「…ありがとう、…とても、助かった。」
「どーいたしまして」

コロコロと態度を変えるこの子供がなんだか無性に可笑しくなり苦笑いを零しながら、フェンに定型句を返した。

ふい、とフェンが顔をそらした。

「どうした？」
「……なんでもない。」

なんでもないって事はないだろうが、たいした事でもないんだろうと当たりをつけ前に向き直る。

まだ狼がそこ等にいるだろう。ゆっくりしているのは得策ではない。

丘に、急いだ。

◆
◆
◆

ガクンと振動を感じて、フェンは目を覚ました。

目の前には真っ黒の髪の毛。

今、フェンは先程ワーウルフから助けてもらったハルユキという男におんぶしてもらい、比較的安全だと思われる丘に向かっている。

ハルユキはこの辺りでは珍しい黒髪黒目の男で、助けてくれたすぐの顔は怖い印象だったが、おんぶしてやると言いながら笑った顔を見たら、不思議と警戒は薄れてしまった。

それに何気なく見せられた笑顔になぜか赤面して顔をそらしてしまった。心臓が暴れていたのを覚えている。

そしておんぶで移動すること数分、何時間も走った疲れと命が助かった安心から、少し眠ってしまっていたらしい。

突然、目を覚ましたからか、体がずり落ちそうになる。

落ちないように、腕に力を入れて体を密着させた。

（…温かい…）

実はもう、歩けるようにはなっていたがこの背中が近くにあると不思議と心が落ち着いた。

だから…、

（…もうちょっと、だけ）

5分ほどで降りるつもりだったが、ハルユキの背中でよほど安心したのか、フェン本人も知らないうちに、さっきよりも深めの眠りについてしまった。

◆
◆
◆

丘には比較的早めについた。

おおよそ15分ぐらいだ。

丘はだいたい30メートルぐらいの半径の円の形をしていて、その丘の中心つまり俺が目を覚ました所の近くには木が一本だけ立っている。

木の下につくとフェンに降りてもらおうと声をかけようとしたが、

「寝てやがる…」

そう言いつつも起こさないようにゆっくりと木のそばに寝かせてやる。

「…ん…」

不意にフェンが背中を丸めて体を震わせた。
…火を熾したほうがいいか。が、当然ライターもマッチもない。

（ライターならあるかもしれんぞ）

不意に嫌な声が聞こえた。

「どういうことだ。九十九」
（いやな、お前の兄貴が仕込んでんだよ、いろいろ。）

いまいち話が見えない。・・・・・嫌な予感はするが。
恐る恐るながらも話を続けるように促すことにした。

「いいから、場所だけ教えろよ。」

嫌な予感が後から後からでてくるが、今は火を熾すことが優先だ。

（お前の体の中だよ。）

「・・・は？」

（ほら、ナノマシンってお前の兄貴が作ってただろ？　あれの改造版がお前の中にうようよいる。）

「あのクソ兄貴…！！！！」

フェンを起こさないように静かに怒る。

あの馬鹿。人の体になんてことしやがる・・・・・・！！

（まぁ、体に害はないだろ。今まで大丈夫だったし。でそのナノマシンがな、一つ一つ記憶域とやらを抱えてんだとさ。で、お前が命じればその記憶域の中に入った設計図通りにそのナノマシンが核になって、
周りの原子やらなんやらを変換したりなんたりして即席で精製するらしい。もちろんナノマシン本来の神経端末としての機能も自己増殖機能も万全、だそうだ。）

「……俺が知ってる科学と比べても、かなりのオーバーテクノロジーなんだが。」

（俺もお前の兄貴の言葉をそのまま言っただけで、いみなんてわかんねぇよ。とりあえず一回やってみろや）

そんなこといってもどうやるんだよ。とりあえず、手をかざして念じる。

（ライター、を、精製…。）

念じた瞬間、手が何かをつかんだ。

「出来んのかい！　……っておい！！」

確かにできたことはできた。失敗ではないだろう
驚きに突っ込んだことは全部で二つ。お手軽に成功した事と。

（立派なライターだな。ちょっとワイルドだが。）
「ああ、めちゃくちゃ立派だな。まるで火炎放射器だ。」

ライターではなく、完璧に火炎放射器だった事。

（それが一番、ライターに近かったんだろうな）
「もっと、ましなの入れろよ！　使い勝手、悪すぎだろ……！」

だがまぁ、ほかには何もないので、しかたないからこれを使うことにする。

「っていうかお前、もっと前に教えとけよ。」
（ああいや、ここまで成長したからお前に接触できたんだよ。だからナノマシンのことを教えんのはこのタイミングしかない。）

ため息をついて火炎放射器を持ち上げる。とりあえず火をつけることはできるか。

なんだかんだあったが焚き火をつくることができた。

幸い（？）にも俺の前髪の先が少し焦げた以外の被害は出なかった。

「う・・・ん・・・。」

たき火に辺りからもってきた薪をくべていると、フェンが目をさました。

「よ。おはよう、ってもまだ夜だけどな。」

フェンはきょろきょろと周りを見渡して、横の少し離れたところで火にあたっている俺を見つけるとそろそろと近寄ってきた。

「これ、火・・・」

「ん?・・・ああ」

どうやって火をつけたかってことか。

説明しようにもあのライター（?）は15分くらいしたらひとりでに消えてしまった。九十九も即席だと言っていたし、そう長持ちはしないんだろう。

説明した方がいいんだろうが、あのライターをまた出すのもいやだな。物騒だし。

よって次善策で、適当なこと言ってごまかすことにする。

「・・・魔法、・・・だよ。」

おーい、それはないだろ俺。イタイ人認定されても知らんぞ。

「・・・そう・・・」

・・・納得しちゃったよ。っていうより相手にされてないだけか？
それはそれでショックなんだが。

「・・・ハルユキは、どうしてここに？」

うーん、なんと答えるべきか。実際俺にも、何でここにいるのかは知らない。ここが何処かもわからないのだ。

しょうがないので、正直に答えることにした。

「いつの間にかここにいたんだよな。目を覚ましたらここに寝転がってた。

だからここが何処かもわかってない。」

「・・・・・・そう。」

そう言って、一つ息を吐くと続けた。

「・・・ここはたぶんシャミラの森、ワーウルフがいたのが証拠。」

ワーウルフ?シャミラ?・・・なんじゃそら。

まぁ、俺の時代よりも一億年も経ってりゃ、世界もそりゃ変わるか。

と納得する。

人類も衰退した可能性が高い。あんな身勝手な生き物が発展し続けられるはずもない。

まぁそれは別にいい。無くなってしまった文化より、新しい文化の方が興味がある。

「フェンは街からきたのか?」

「・・・そう。」

好都合だな。このまま、町まで一緒させて貰うとするか。

「なぁ、なら一緒に・・・」

――――瞬間、月の光が遮られ、影が俺とフェンの周りを包みこみ、重力が何倍になったかのような重圧が襲った。

背中に冷たい汗が流れ落ちる。横ではフェンが足を震わせながら、上空を見上げている。

何事かと空を見上げる。

そこには決して日本には、いや地球にはいないはずの生き物がこちらを見下ろしていた。

「龍、種・・・・・・・・。」

フェンが絶望に満ちた声でその名を告げ、その場に膝を付いた。

「り、龍って、じゃああれはほんとに・・・」

――”ドラゴン”

冗談じゃない。ここからでも野生の殺意が伝わってくる。少なくとも物語で中ボスを張るくらいの存在感はあるだろう。

呆然としているハルユキに、フェンがつぶやいた。

「・・・・・・シャミラ。」

「シャミラ？」
「・・・この森の、王」

フェンの反応で敵の危険度はわかる。

最悪だ、と。

そうこうしている間にドラゴンの殺気が膨れあがっている。赤い翼、紅い角、朱い身体、そして血の色の眼。そのすべてが不吉と凶気をまき散らしている。

ここはお気に入りの場所なのだろう。
眼が語っている。邪魔者は食らって退かす、と。

…どうする。
自身に命題を投げかけると、途端に頭が回転を始める。
選択肢は逃げるか、戦うかだが、逃げたところで周りは森、先ほどのオオカミがまた襲ってくるかもしれないし、何よりフェンをつれて何時間も逃げるのはフェンの体力が持たないだろう。

……なら殺すしかない。フェンでは先ほどのオオカミもどきも撃退できなかったのだ。戦力として考えることはできない。

「フェン、その辺に隠れてろ。」

言うと同時に全身からあふれ出るほどの殺気を眼に込めてドラゴンを睨み付ける。

瞬間、ドラゴンも俺を敵と認識したのか、捕食者の目から獣の目に変わる。しかしそれでも、退く気も屈する気も無いと、前以上の殺意とプライドを込めて睨み返してくる。

その眼には油断も慢心も見受けられない。一人と一頭の間に緊張が充満していく。

俺に注意を引きつけることはできた。

だが、相手は十五メートルほど上空に浮かんでいる。こちらからの攻撃は届かないだろう。

思考に詰まり、フェンが無事隠れたか目線だけを動かして確認する。

――いや、してしまった。

俺の意識が自分から離れたのを敏感に感じ取ったドラゴンは目をそらした瞬間と同時と言っていいほどのタイミングで。

俺に向かって、呆れる程巨大な炎を放っていた。

俺がドラゴンに視線を戻したときには、炎はもう目前視界の全てをその鮮やかな色で覆っていた。そのあまりの熱量に、そして非現実的な光景に思わず呆然としてしまう。

「ハルユキッ！！」

フェンが叫ぶ声が聞こえる。その声ではっと肩を揺らして、我に返る。しかし。

次の瞬間、炎が爆裂し、とてつもない轟音が森に響き渡った。

◆◆◆

「っが！！！」

身体が木々にぶつかり、スピードを殺してくれた。

なんとか、・・・・・なったか。

体中を見渡してみるが、少なくとも先程の炎で傷を受けた形跡はない。

体勢を立て直して、先程まで自分がいた地点に目を向けた。

先程の炎の着弾地点からもうもうと煙が上がっている。どうやら着弾地点から直径１０メートル程がふき飛んでいるようだ。

「なんて威力だよ…」

ドラゴンはこれまたすごい爆音で勝利の咆吼を轟かせている。

この森に君臨してる者としての風格がにじみ出ている。

（それにしても…）

ハルユキは炎の威力よりも自分のことの方に驚いていた。

（ただ横に飛んだだけだぞ…）

思い切り地面を蹴ったといっても避ける動作だ。近場にとどまれるように避けたつもりだった。

それが爆風の力もあっただろうが、こんな丘の端まで約４０メートルほども移動してしまっていた。

しかも、ドラゴンの目にもとらえられない速さでだ。先程オオカミを退治したときより明らかに格段に力が上がっている。

（体がなじんできたって事か…）

これほどの身体能力があればやれることなど山ほどある。

（よし、これなら……）

ハルユキは上空で勝利に酔いしれているドラゴンを再び睨み付けた。

だが正面からいっても勝てる保証など無い。

まず攻撃が効くのか？　あれは。

そこまで考えたところで、

（…！　あの馬鹿！！）

未だドラゴンを見つめたまま、動こうともしないフェンを見つけてしまった。

（やばい！）

ドラゴンは既に勝利の余韻を飲み込み、ボーッと立ちつくしているフェンに向かって急降下を始めようとしてる。

フェンに向かって、全力で走り出した。

紅色の龍（後書き）

初のバトルです。
勉強させていただきます。

死闘

「あ……」

轟々と燃え上がる地面を見て、フェンは呆然としていた。

あの人は強かった。たとえ城の剣士１０人を相手にしても負けないだろう。

ワーウルフの群れを撃退したことを考えればそれは明白だった。

だがドラゴンは格が違った。一瞬で種族の壁の前にあの人は死んでしまった。

・・・死んで、しまった。

（私の・・・せい・・・で）

最後の炎を食らう少し前、あの人はフェンのことを心配していた。

フェンのために熾してくれたであろう火のそばにいたあの人の前髪は少し焦げていた。

腰を抜かしたフェンをここまで運んできてくれた。

だがもし、フェンががここにいなかったら

隙などできず、あの炎をくらうこともなかっただろう

フェンのために火を熾さなかったら、ドラゴンは私たちに気づかなかったかもしれない。

私がちゃんと動けたら、ここに移動することもなく、そしたらドラゴンにも出会わなかっただろう。

フェンに対する優しさが、いや・・・

（私が・・・殺してしまった・・・）

命が助かった時は安堵で、泣きそうになった。

触れた背中はとても温かかった。

（私は死ぬためにここにきたのに・・・みっともなく足掻いたせいであの人は、死んだ。）

ドラゴンはまだ勝利の咆哮をあげている。

真っ赤な血の色を森中に見せつけるかのように、丘の上を飛び回っている。

周りの森から、ドラゴンをたたえるかのように、様々な動物や、魔物の声が聞こえてくる。それに聞き惚れ、さらにそれに応えるように咆吼を飛ばす姿はまさに王、にしか見えなかった。

……シャミラ。この森の王として１０００年以上君臨し続けているという古龍。

近隣の町を荒らすことこそ無いが、この森に立ち入ることを極端に難しくしているので、何度も討伐隊が組まれたものの、すべて全滅。その身体には今まで啜ってきた血と肉の色が染みついている。

いつしか、この森に立ち入る者はいなくなったという、伝説の龍だ。と言っても、森に入れば必ず見つかるわけでもない。見つかったのは運が悪かったとしか言いようがない。

今隠れたら生き残れるのかもしれないが、ユキネを守れず、あの人も死なせてしまい、もう自分だけが生き残ることには耐えられそうになかった。

罪悪感に絡め取られているフェンにドラゴンが思い出したかのように捕食者の眼を向けた。先程までの歓喜の咆吼とは違う、気合いと殺意のこもった咆吼に森全体が震える。

ものすごい恐怖と威圧感がフェンに襲いかかる。それはワーウルフ

のそれとは比べものにならないものだった。

今からフェンはほぼ確実に死ぬ。

だがそれでも、もうフェンには死への抵抗は薄くなっていて、迫ってくるドラゴンの牙をフェンは他人事のように見つめていた。

だが次の瞬間、ドラゴンはその巨体を地面にこすりつけながら吹き飛び、頭にはつい最近感じたものと同じ感触。

「大丈夫か？」

2回目の台詞、2回目の感触、既に知っている手のひらの温度。

それでもそれは、前と変わらないか、それ以上の安堵を届けてくれた。

風を追い越し、空気を切り裂きながら、フェンの元まで走り抜ける。

フェンより先にドラゴンにたどり着いたみたいで、ほんの数歩で手の届くところまでドラゴンに迫ってる。が、まだドラゴンは気づい

ていない。
だから走ってきた勢いのまま、
「……吹っ飛べ、ヘビ野郎！！」
迷わず右拳を横っ面に叩きつけた。ドラゴンの横顔が歪み、拳を振り切った後に、一瞬遅れて、炸裂音が響き渡る。
ドラゴンが錐もみしながら、地面に身体をこすりつけ森まで吹っ飛んでいく。
拳がブレーキ代わりになったのかフェンのすぐそばで勢いはなくなっていた。
ぼけっとしているフェンの頭に、再び手を乗せて、あえて同じ台詞を言う。
「大丈夫か？」
「・・・大、丈夫・・・。」
「なんちゅう顔してんだよ。」
怖かったのだろう。まだ呆然としていて表情に色んな感情がわかり

辛く混じっていて……なんとなくその顔が気に障った。

「待ってろ。　悪いドラゴンは俺が退治してやる。」

ま、これはあのヘビにぶつけてやろう。

言うが早いかドラゴンに先程と同等のスピードで突っ込む。

このスピードならばドラゴンには捉えられないはずだ。

が、体勢を崩したままのドラゴンにあと2~3メートルまで近づいたとき死角からドラゴンの尻尾がうなりを上げて襲ってきた。

「ちぃっ・・・！」

何とか上体を反らして避ける。

が、尻尾の次は爪また尻尾と次々とハルユキを襲ってくる。それを紙一重でかわしながらバク転で距離をとる。

（誘い込まれたか・・・）

スピードについてこれないと思っていたが1度目は火炎で視界が狭まり、2度目は意識の外だったから気づかなかっただけらしい。

そうでなければ、誘い込むなどという真似はできないだろう。

ならば両者ともうかつに飛び込むことはできない。

自ずとじりじりと牽制しあう。

すると、虚をついてドラゴンが翼を広げ飛びだとうとしだした。

（やばい…ッ！！）

空に飛ばれてしまえば、一方的に炎で攻撃されることになる。

ドラゴンを地面に縫いつけるために、再び突っ込む。その神速ともいえるスピードにしっかりと反応したドラゴンは、翼を素早くたたみ応戦してくる。

爪を振り上げ、尻尾を叩きつけてくる。

そのスピードもまた神速。

しかし、強化されたハルユキの動体視力は、一度見たこともあってか、それをしのぎながら、さらに前へ。

地面に刺さり、一瞬だけ動きが止まった腕に足を運び、それを足場

に前宙転返り。

そしてその勢いのまま、まずは飛行能力を奪おうと、羽の付け根へと、踵をたたき落とした。

「なにっ……！？」

しかし、驚愕の声を上げたのはハルユキの方。目の前には口の中に炎をため込んだドラゴンの顎。視界の端には、引きずられた足。

（飛ぼうとした振り……だと！？）

あの足では飛び立つことはできないだろう。つまりまた誘い込まれたのだ。

「――――ッらああッ！！」

ドラゴンの顔が本当に近くにあったのが幸いで右拳を握りしめ、足場のない状態から、右拳を顎にたたき込んで炎の軌道から外れる。

しかし、完全には防ぎきれなかった。

左腕に、炎が、掠った。それだけだ。たったそれだけで、着火地点が一瞬で肘まで広がり、しかも、その周辺が爆発した。

「ゴァッ・・・・・・！！」
「ぐあああッ！！」

両者共にうめき声を上げ、ドラゴンはのけぞり、ハルユキは吹っ飛んだ。

状況確認よりも、とりあえず、ハルユキは距離を取った。あの炎は強化された体でも危険すぎる。

１０メートル程離れたところで、左腕の状態を確認する。強化されているおかげか、焼けこげてはいるが、死んではいないようだ。

――再び均衡状態。

こちらが飛び込もうとすれば、小さな火球を無数に飛ばして、こちらの出だしをくじいてくる。着弾しても爆発しないのを見る限り、先程とは違う種類の炎だろう。

しかし小さいと言っても直径５０?程だ。あたれば軽くないダメージを負うだろう。

こちらがダメージを与えるには近づかなければならないが、気づかれては先程の二の舞だ。

（もう一度、あいつの意識から出られれば……）

にらみ合うこと数十秒、ドラゴンが動いた。

やったことはただ火球を吐き出しただけだ。

数はあろうが、難なく避けることはできるし、当たっても死ぬことはない。

…ハルユキならば、だが。

ドラゴンが吐き出した火球は真っ直ぐに、…フェンに向かっていった。

「ちぃッ……！」

フェンは突然のことに驚いて硬直しているようだ。

急いで走ろうとするが、間に合わない。フェンに目をやるが先程の位置から動いていない。

だが、口だけがせわしなく動いたかと思うと、決して大きくないが

不思議とよく響く声で言い放った。

「――――”氷欠泉”」

瞬間、フェンの前に地面から氷柱が突き出た。俺の身長を優に超える長さをほこるその氷柱はさほど大きくない火球などものともせずに防ぎきる。

それだけにとどまらず、丘のあちこちから氷柱がつきだしていく。

「魔・・・・・法・・・・・・・・・・・？　・・・・・・・はは っ。すっげぇ。」

それに注意を奪われたのはハルユキだけではなかった。ドラゴンも至る所から出てくる氷柱に警戒をあらわにしている。

そうハルユキを意識から追い出して。

それに気づいたハルユキはとっさに氷の陰に身を隠した。

（どうする…。見つかっていない今なら気づかれずに接近できる。けど…）

氷柱は未だ新しい場所から突き出で続けている。
このまま突進すれば氷柱が邪魔になるかもしれない。

（…そうだ。あれを使えば）

思いつくが早いかハルユキはおもいきり垂直に飛び上がった。
地上２０メートル付近で体の上昇が止まる。

「はっ…！」

そしてその場でライターもとい、火炎放射器を精製する。
体内でナノマシンが増殖を繰り返しているのでそれをありったけだ。
総計３００個ほどそれを作り上げるとライターの中に走る疑似神経に命令を下し、すべてを一カ所に集める。
総重量は一トンを軽く超えているだろう。これならきっちりと足場になる。

その鉄の塊となったものを、思い切り蹴りつけた。

その脚力に鉄塊はあさっての方向に飛んでいくが、ハルユキは地上での踏切と変わらない速度でドラゴンに接近した。

重力も合わさって、ドラゴンまで４０メートル程の距離をゼロコンマ何秒かでつぶす。

「そらっ！！！」

近づきざまブレーキ代わりにと右前蹴りをたたき込んだ。

だが、正面からの接近だったため気づかれはしたのか、今度は足を踏ん張って吹き飛ばない。

それに、ドラゴンの硬い鱗の前には”打撃”では致命傷を与えられない。ドラゴンはダメージにひるみながらも爪を振り下ろしてくる。避けなければ致命傷だ。

だが、

（ここで離れたら勝てるモンもかてないか…！）

ハルユキはあろう事か焼けただれた左腕でそれを受け止めた。踏ん張った足が地面に沈み、左腕が皮膚が裂け肉がえぐれ骨が悲鳴を上げる。

「がッ……！？」

想像以上の圧力と痛みにハルユキの顔が歪む。しかし、受け止めた次の瞬間には、ハルユキはもう既に次の攻撃に移っていた。

右の手のひらを軽く相手に付け、先程のドラゴンの攻撃の圧力も合わせて沈み込んだ足を引き抜きさらに地面に叩きつける。

と、同時に体を螺旋状にねじり力を右の手のひらに集中させる。

そこでドラゴンは仕留めきれなかったと悟ったのか今度はその牙でハルユキの頭を噛み砕こうとする。

が、それはもう遅すぎた。

――――”裏当て”

瞬間、音もなくドラゴンの体内を、内蔵を、その細胞一つ一つを、バラバラになりそうな”衝撃”が襲った。

飯（前書き）

どうやら作者にはコメディの才能が一番足りないみたいです。

飯

重苦しい音と共に、ドラゴンがその巨大な体を地面に沈ませた。

見た目ではわからないが、間違いなく絶命しているだろう。体の内部は見るも無惨な状態になっているはずだ。

その起因、命を奪うきっかけになった右手を睨め付け、握りしめる。

何の感慨もわかなかった。人ではないにしろこれだけ大きい命を奪ったのに、だ。

だが、人は必要とあらば命を奪うのに抵抗すらないということを、俺は知っている。俺もその例外ではない。

（さてと・・・・・。）

気をとりなおして、フェンと合流する事にする。

フェンはさっきの魔法を放ったところにそのまま横たわっていた。

ちょっと心配になり駆け寄るが、その顔に深刻なものは見つからない。

「なーにやってんだ、ロリっ娘。」

ハルユキの軽口にむっとしながらも、簡単に説明してくれる。

「魔法具がないと、魔力が一度に出てしまうから、回復するまでは動けない。」

「んじゃ、またおんぶだな。」

「ん……。…それ……！」

フェンの視線を追い自分の左腕に目をやる。

ズッタズタにスプラッタだった。痛みが麻痺していたので忘れていた。

「ああ、まぁたいしたことねぇよ。」

俺に限りこの程度の怪我は、そのままの意味でたいしたことはない。

だが、血がボタボタと滴っているのはちょっと後々面倒なので、止血だけはする事にした。

ズタボロになったパーカーの袖をちぎり、上腕部に巻き付ける。

黙々と止血をする俺を横目で見ているフェンに思ったことを告げた。

「お前さ、死ぬためにここに来たんだろ」

「っ……どうして？」

「いや、ちょっとしたことなんだけど、なんつーか、お前は生きようと抵抗することより、諦めることを優先してるように見えたって感じかな。……そう言う奴は見慣れてるてな。割とすぐにわかったよ」

「……生きていても、できることがないなら……しょうがない」

拳骨。

「っ！？」

「諦めたふりしてんじゃねぇよ。お前が諦めなかったからアレを倒せたんだろ？」

「……」

「陳腐な台詞だがな。人生の秘訣は最後まで諦めないことだぜ？」

ほとんど適当に巻きつけただけだが、何とか血は止まったようなので最後に歯で結んで止血を完了する。

「で、お前はあと何を諦めてんだ？」

できることがないって事は、やりたいことはあるって事だろう。

「……助けたい人が、いる」

どんだけ時間が経っても変わらない。やりたいことをやるだけだ。
結局それが一番楽しいんだから。

「で、出たぁ～～。っておい」

人の苦労も知らずに眠り込んでいるフェンを上に放り投げる。
悲鳴も上げやがらない。落ちてきたフェンを無視するわけもいかず、
キャッチして地面に立たせる。

そこからフェンは一息ついて、周りを見渡して、最後に俺を見て、
もう一呼吸おいてやっと一言、

「・・・・・・何？ハルユキ。」

「はぁ・・・もういいよ。」

再びマイペースモードである。まったく最近の若いもんは。

「ともかく、お前が来た町ってのはあれなんだな？」

「……うん、あれ。」

「あそこに行って、スノウ・フィールド・・・何タラ王女を助ければいいんだな？」

「スノウ・フィラルド・ボレアン・メリストエニス・ド・メロディア王女。」

「まぁ、何はともあれまずは・・・・・飯だ！」

一億年ぶりのな！

「ば、馬鹿な・・・・・・め、飯・・・」

実に一億年ぶりの飯は残念なことに食えなかった。実に切実な問題が立ちはだかったのだ。

「金がねぇ・・・。」

あの部屋ではなぜか食う必要がなかったし、食う物もなかったので、外の世界に出たときに一番期待していた物の一つが食事である。

「たのむぅ、少しだけぇ・・・。」

街のはずれにあった酒場らしき店のカウンターにしがみついて店の店主であろういい年のおばさんに拝み倒す。

「だめだね。金がない客は客じゃないんだ。帰って働いて金ができたらまた来な。」

このクソババァ！少しはひもじい人間を助けようとぐらい思わねぇのか！！　ヤンキー上がり見たいな顔しやがって、手前みたいな奴がいるから襟足長い子供が増えるんだよ、と叫び散らしたくなるが、そこは必死に飲み込む。

諦めるな。先ほど偉そうに説教かましたばっかりだ。投げ出さずに観察し思考を回せ。――あ、小じわ発見。

「頼むよ、お姉さん……」

「モアル貝のリゾットと特製野菜スープだ。残さず食べな。」

あー、バカなんだな、こいつ。

「・・・あいかわらず・・・・・・モガル・・・」

飯にがっつく隣を通り、ヤンババにフェンが親しげに話しかけた。

ヤン（キー）ババ（ア）が目を見開く。

「！　あんた、フェン……かい……？」

「うん。……久しぶり」

「生きてたのかい……？あたしはお上から４年前に戦いに巻き込まれて死んだって聞いてたから、てっきり、もう……」

「ごめん……とにかく、ただいま。」

「あ、……ああ！お帰り！！　腹へってるだろう？　ちょっと待ってな、今何「ババァ、おかわり！！最優先で！」か……」

「……」

「おかわり」

すいっと首筋に薄ら寒い空気を感じた。

「・・・・・一つ、あんたは金を持ってないんだからおかわりなんてしゃれたモンはない。食った分もしっかり働いてもらう。二つ、私はまだ花の３０代であり決して、決してババァではない。これだけでも（特に二つめ）十分有罪だ。だがあと一つ……」

今にも爆発しそうな声でヤンババが続ける。あれ？　だれこの悪鬼羅刹。

「空気は積極的に読もうぜ？」

その怒号と共に罰の一撃は俺の意識を奪い、代わりに精神的な傷を

置いていった。

「なるほど、リュートンにねぇ・・・・・・。」

今フェンが昔世話になったというモガルという、ババァにいきさつを話している。

俺もついでに聞きたいところなんだが、今俺は絶賛皿洗い中。

「……チッ、ババァが」

ぼそっと悪態をつく。ホントにぼそっとだ。隣にいても聞こえないぐらいだろう。がしかし、それでも俺の頭を何かが鷲掴む。

「……痛いです。お姉さん」

「はい。お姉さんだよ。手が止まってるけど、つまらないかい？皿洗いは。」

言いながらヤンババの右手が俺の頭を砕かんばかりに力を増していく。

「とんでもありません。ここで食器類を洗っていると、まるで自分の心まで洗われていくようです」
「そうかい。ならこれも追加だ。これだけ洗えばあんたの心もずいぶんと綺麗になるだろうよ。」
「おまっ……！　今洗った分の十倍はあるじゃねぇか！ふざけんなクソババァ！！」
「ババァ……？」

言葉は要らない。再び俺の頭蓋骨が悲鳴を上げ始めるのならば。

「よぉし！じゃんじゃん皿持ってこい！！ありったけだ！片っ端から俺がかた付けてやるよ！！」
「それでいいんだ」

俺の憎しみの視線を軽く流してモガルはフェンの元に歩いていった。

「それじゃ、直ぐに王女様を助けに行くんだね」
「……うん」
「なら急ぎな。確か明日が処刑日のはずだ。もうあまり時間はないだろう。……ほらこれ使いな。少ないけど必要だろ？」

小さな布袋をフェンに差し出した。金属がじゃらつく音がする。

この時代のお金が何かはわからないが、タイミング的にはおそらく中身はお金だろう。

俺はその袋をしっかりと受け取った。横からさっと。

「ありがとう、ババァ。このご恩は三時間もすれば忘れるよ」

「……折って、刻んで、潰して、それから埋める」

「……完全犯罪？」

悪鬼、再び。

飯（後書き）

予定よりも長くなりました。

「全く何なんだい。あいつは・・・・・・。」

俺を文字道理ボロ雑巾にしたあと、モガルはフェンにあらためてお金が入った布袋を手渡した。

「私の恩人。大丈夫、・・・悪い人じゃない、多分。」

「まぁ、それはまぁ何となく分かるけどさ。」

「大丈夫、信頼、できる。」

「・・・・・そうかい。あんたがそう言うならそうなんだろうね。」

そう言ってため息をつくと、つかつかと俺の方に歩いてきた。

「ほら、受け取りな。」

ポン、と胸の上に布袋を放り投げた。中には少なくないお金。

「いいのか？」

「あんたよく見りゃ、靴も服もぼろぼろじゃないか。ん？そりゃ血かい？

何処かに怪我でもしてんのかい？」

「見ての通り健康そのものだ。”怪我なんてどこにもない”。」

「まぁいいけどね。そんなことよりそれはただでやる金じゃないよ。

それは報酬だ。フェンを手助けしてやってくれ。」

フェンとモガルはおそらく家族関係ではない。フェンがモガルを呼び捨てにしているので間違いないだろう。

俺にそんなことはほとんど分からないけど。でもフェンのことを心配してる目には、家族を想う気持ちがあふれていて。

少しだけ、昔を思い出して、そしてやっぱり少しだけ、心が揺れた気がした。

「ほら、さっさと行った行った。ささっと救い出して、ほとぼり冷めたら王女サマもつれてまたここにきな。

そん時は豪華な飯をごちそうしてやるから。とびっきりのやつをね。」

「タダで？」

「働き次第だね。」

よーし、後悔すんなよ？

「じゃ、張り切っていってみますか！」

俺が立ち上がると、フェンがトコトコとそばに寄ってくる。

「まずは、武器屋にいく。」

「りょーかい。じゃーな、ヤンババ。飯、おいしかった。」

振り向いた瞬間、包丁が飛んできた。もうババァと呼ぶのはやめよ。

身が持たん。

「・・・・・まったく。変なやつだったわね。最後までババァ呼ばわりしやがって・・・。」

今度来たときには挨拶代わりに伝説といわれた右ストレートをぶち

込もうと心に決めた。

「あ・・・皿洗いしないで行きやがった。・・・ま、今度来たときにさせるか。」

そうつぶやきながらキッチンにつながる戸を開けた。

「なっ・・・・・・・!!」

キッチンにはいると直ぐに目に入る物があった。

これでもかと言うくらいに積み上がった大中小の大きさそれぞれの皿。

昨日の分の皿のほとんど、しかも昨日は団体客が入ったから軽く５００枚はあったはずだ。

それが、綺麗に洗われて積まれている。

「あれだけの時間でこれを全部やったのかい・・・!」

天井に届きそうなほどに積み上げられた皿を前にただ呆然とする。

「・・・・・・やっぱり、とことん変なやつだったねぇ。」

思わず、苦笑がこぼれた。

店を出て一時間ほど歩いているが未だにお目当ての武器屋に到達できていない。この町は城下町だけあって、城の周りに半径１０キロメートル以上の巨大な街として機能している。

まだ朝だが、少なくない数の人が往来を闊歩していて、昼に近づくにつれて、まだまだ人数は増えていくだろう。

「ずいぶんにぎやかな街だな」

「うん、変わってない。でも町並みは少し、かわってる」

「四年ほど捕まってたんだったな。」

一時間ほど歩いている内に、だいたいの事情は聞いていた。魔法の腕を認められ、王族の近衛に決まったその日にクーデターに巻き込まれ、王女様の世話係として一緒に閉じこめられていたらしい。

「・・・・・着いた、武器屋。」

そうこうするうちに武器屋に到着したようだ。剣と斧が交差した絵

に板が乗って看板になっている。

武器屋だそうだが俺にはなんて書いてあるかも分からない。この街の到着して気づいたのだが、俺はこの時代の字を読むことができない。

しかしどういう訳か話している言葉は分かるのだ。何とも変な感じだが、まあ話している言葉が分かるのだけよしとしている。

「いらっしゃい。」

武器屋にはいると人の良さそうな声が聞こえてきて、それと同時に奥の方から、年齢は５０歳ほどのこれまた人の良さそうな顔したおっちゃんが顔を出した。

「・・・・・魔装具を一つ欲しい。お金はあんまりないので、指輪型のものを。」

「へぇ、お嬢ちゃん魔術師なのかい。まだ若いのにたいしたもんだ。そっちのお兄さんはどうする？」

「・・・・・俺は魔法なんて使えないからいらない。」

おっちゃんはそうなのかという顔をして、奥に注文の品を取りに行

った。高価なものは裏に置いてあるらしい。それはともかく，

「何でお前が驚いてんだよ。」

フェンがびっくりした顔でこちらを見ていた。

「・・・・・・・・ハルユキ、魔法使えるって言ってた。」

あーそう言えば、丘で火つけたときにそんなことを言ってたな。でもまさか魔法があると思っていなかったから、冗談だったんだけど。

「いやいや、俺が使ってるところ見たことないだろ?」

「でも・・・じゃあ、”その左手は、どうやって?”」

「まぁ、体質なんだよ。昔からな、今ほどひどくはなかったが、普通のやつより力が強くて、怪我なんかも直ぐに治るんだ。」

会話をそこまで終えたとき、奥からおっちゃんが出てきた。

「うちにあるのはこれだけだね、えー・・・と銀貨5枚だね。」

「・・・・・・高い。」

「しょうがないだろ。このところ税が高くて、うちも火の車なんだ。必要経費だって国は言うけど、

　ホントのところはどうなんだろうね。私は昔の国王の方がよかったと思うんだけどね。」

その話を聞いて普段はポーカーフェイスなフェンの表情がほんの少しだけ、曇った。

真正面から戦うわけではないにしろ。これから挑むのは国王つまり、国なのだ。それを再認識して不安になっているのが伝わってくる。だから、

「大丈夫だよ。俺がいるだろ。」

できるだけやさしく頭をなでてやった。実際俺もそこまで自信があるわけでもないが、この少女の前では少なくとも王女を救いだすまでは拠り所であってやりたいのだ。

と、元気づけるためにやったのだが、今度は顔が真っ赤でうつむいている。あ、あれ？怒ってんのか？

そっか、子供扱いは嫌だったのか。

「あ、すまん。」

さっと手をどける。

「あっ……」
「ん？…どうした？」
「……なんでもない。」

ああ、やっぱりご機嫌斜めだ。

「やれやれ、兄ちゃん、ずいぶん女泣かせだねぇ。」

泣かせてはいない。怒らせたけど。

おっちゃんが、非常に憐れんだ目で俺を見つめてため息をついている。小さいことに気が回らないのは昔からだ。ほっとけ。

「さてフェン、そろそろ行くか。次は宿でも探そうぜ。」

しばらく店の中を見て回り、もう見る物もなくなってきたので、フェンの機嫌も取り直そうとフェンに明るく声かけてみる。

しかしフェンは俺が手を離した後、顔を真っ赤にしたまま、ふらふらと鎧とかがあるコーナーに行っていたので、声が届かなかったようだ。

…何で鎧なんだ？

不思議に思いながら、一心に鎧を見つめているフェンに近寄った。

近くに来てみると鎧を見ているというより、ぼーっとしているようだ。ときおり、自分の頭に手を載せ何か確かめるようなしぐさをしている。

「フェン…？聞いてるか？」

声をかけると同時に右手で肩に触った。

「ひゃっぁ！！」

「うおっ！」

な、なんだ？俺何かしたか？

「ハ、ハルユキ。な、なに…？」

「い、いや、そろそろ次に行こうって言おうとしたんだ、」

「わ、分かった。行く。」

フェンには珍しいくらいのあわてっぷりに俺の方もなんだか落ち着かなかった。

「よし。じゃあ行くか。もうそろそろ宿も取ったりしたほうがいいだろ。」

時間はまだ昼ごろだが、明日のことも話し合わなければならないし、宿をとってから動いたほうが何かと都合がいいだろう。

「うん。…あ、ちょっと待って。」

いつものクール&ビューティにもどったフェンが出て行こうとする俺を呼び止めた。

「ハルユキは武器、いらないの？」

「……いや、俺は素手で十分だ。」

一瞬、剣を持って戦う昔のおれが脳裏によみがえる。苦い思い出だ。……でもだからこそ俺はもう剣は持たない。

剣以外の武器なんて持ちたくない。

だから、武器は己のこぶしで十分なんだ。そのために鍛え上げたのだから。

「……そう」

俺に何か含むところを見つけたのか、フェンは少しだけ、間を開けたが、何も言わなかった。

まぁわざわざ言うことでもないので、助かった。

「よし、じゃ行くぞ。」

武器屋のドアを開けて外に出た。

「うおっ。まーた人が増えてんなあ。」

「・・・・・もっとこれから増える。」

まだ増えんのか?もう人の海みたいになってるんだが・・・・・・。

「こりゃ、はぐれたら一大事だなぁ。」

しょうがないので、はぐれないようにフェンの手を掴んで歩き出す。

「あっ・・・。」

ハルユキはフェンの顔がまた赤く上気していたことには気づかなかった。

魔法、剣、拳（後書き）

ドラゴンとの戦闘書くのが一番楽しかったなあ。

折れた意志

「そら・・・飯だ。王女サマ。」

その声と、ガン！と荒々しくお盆と床石ががぶつかって立てた音で目を覚ました。どうやら、もう昼時のようだ。

目の前ではどこかで見たことのある兵士が醜い笑みを顔に貼り付けながら、こちらを見下している。

かつての王族を見下して優越感に浸っているのだろうが、こちらまでつきあってやる義理はない。無視して両手足の中で唯一鎖につながっていない右手でお椀を掴む。

中身は冷えていて、具などかけらも入っていないスープだが栄養はとっておかなければならない。

「待て。」

自分を無視されたのが、気にくわなかったのか、スープを飲もうとした私の右手を掴んで、

「ほら、隠し味だ。」

そういってスープの中に・・・・・・・・・自分の唾を吐き入れた。

・・・・・だめだ。ここで怒ってしまっては、相手を喜ばせるだ

けだ。そう思い唇をかみしめる。

（・・・・・我慢、）

我慢して我慢して我慢して我慢して、我慢我慢我慢・・・・・！

（できるかあああ！！！！！）

そして、突然笑顔になった私の顔を怪訝そうに見ていた兵士の顔面に容器ごとスープを投げつけた。

「ぐあっ！！」

下から投げつけたので鼻や目にも入ったのだろう。悲鳴を上げて、鼻と目をこすっている。

「ははははは！！どうだ！隠し味が聞いてて格別に美味いだろう？」

兵士を馬鹿にするのに口を動かしながら、同時に右手も動かし、自分の顔面に夢中になっている兵士の右足を掴むと思い切り引っ張る。

「ぐあっ！！」

バランスを崩し後ろに転んだ兵士は、鉄格子に思い切り頭をぶつけた。相当な勢いでぶつかったのか、頭を押さえてのたうち回ってい

る。

その姿を見て、笑う、見下す。こいつらがいくら私を侮辱して、痛めつけたとしても、私は笑っていよう。

そうすれば、負けたことにはならないのだ。

その笑顔が気に障ったのか、すごい形相で私を睨み殺さんとばかりに睨み付け、足を振り上げた。

軽くない衝撃が私の腹を打つ。

「この！クソ！女があ！！」

それでも笑う。殴られる。あざ笑う。こいつがどれだけ力が強かろうが私の誇りを折ることはできない。

しばらく暴行を加え続けた兵士の手が疲れからか、一旦止まる。しかし、その顔は殴っているときのそれと何ら変わらない。

当たり前だ。私はまだ笑っているのだから。

さらに、肩で息をしている兵士に向かってぼこぼこに腫れ上がっているであろう顔で吐き捨てる。

「・・・・・気は済んだか？平民。」

表情に疲れが混じってきていた兵士の顔が再び怒り一色に染まる。
雄叫びを上げながら再び足を振り上げる。

が、なにかに気づくと足をおろし、汚らしい笑みを顔に貼り付けた。

「そういや、あのちびも同じような目してたなぁ。やっぱりクソはどれも一緒って事かぁ？」

笑顔が凍った。

そうだ。どこかで見たことがある顔だと思っていたが、こいつ私を殴ってフェンを連れて行った男だ。

「フェンは・・・・・どうした・・・・・！」

笑顔など消し飛び、顔が怒り一色に染まる。

「どうしたんだ！！！！言えぇ！！！」

必死な様子の私を満足そうに嘲りながら、兵士は続けた。

「さぁなぁ。途中までは生意気な顔してたけど。ワーウルフの縄張りのど真ん中に放り捨ててからは、泣きそうになりながら逃げてたぜぇ！

何度もすっ転びながらなぁ！！ぎゃっはっははっはははあぁ！！！！」

「貴様ぁ！！！！！　殺す！　殺してやる！！！！」

飛びかかろうとするが鎖に阻まれて届きもしない。

次の瞬間、また兵士の蹴りが私の腹にたたき込まれ、続けざまに殴られて、意識が半分飛ぶ。

「がっ・・・はっ・・・！」

これまでのように意志で我慢することができなかった。フェンのことを考えると意志が折れてしまう。

今までにない手応えに気分をよくしたのか、再び拳を振り上げる。

「その辺にしときなさい。ダリウス。」

今にも振り下ろされそうだった拳が止まる。だが別に希望がやってきたわけではない。この耳障りな声には聞き覚えがある。

リュートンだ。

「明日処刑なんですから、顔がそれ以上ぼこぼこだと、王女サマもかっこうがつかないでしょう?」

言葉とは裏腹にその口調と表情には私を心配する気持ちなど微塵も含まれてはいない。

「悪いな、親父。このクソ女があまりにも生意気だからよ。」

「親父・・・・・・だと?」

「おや、気づかなかったのですか?この男はダリウス”王子”。私の実の息子です。どこかの落ちこぼれ王女と違って魔法もちゃんと使えるので、兵士長もやっていますがね。」

よくよくみれば、嫌な笑い方が二人ともそっくりだ。二人は牢を出て行こうとするが、私にはまだ聞きたいことがある。

「フェン・・・は・・・」

腫れ上がった口で懸命に声を絞り出す。二人がめんどくさそうに振り返り、リュートンがあごで私を指し、ダリウスがうなずいてこちらに歩いてきた。

「がッ・・・！」

近づきざまに私の腹に蹴りをくれると、髪を掴んで私の顔を引きずりあげた。

「あのちびがどうしたかって？死んだに決まってんだろうが！！ワーウルフが１０体は追っていったんだぜ。今頃バラバラにされて食われてんだよ！」

実際に言われると、絶望が身を包んだ。フェンが、私の友達が・・・・・死んでしまった。

さらにダリウスは言葉を続ける。

「どうせ、てめぇも明日死ぬんだよ！そうだな、首つらせて殺したあとはどっかの変態にでも売ってやるよ！！　餌にされた女と玩具になった女！　いいコンビじゃねぇか！」

必死に唇をかみしめるが、目にこみ上げてくる物がある。だが絶対にこれを零すわけにはいかない。負けたくないから。

「っ・・・・・っ・・・」

「いいざまだな、平民。」

勝ち誇ったようにダリウスがそう言い捨てた。

「・・・・・ダリウス。もう行きますよ。そうですね。その哀れな平民に消毒でもしてあげなさい。唾でもぬっていれば、腫れも引くんじゃないんですか？」

もちろん私を気遣っての言葉ではない。私をさらに侮辱するために行った言葉だ。ダリウスはにやにやと笑いながら口に唾をため私の顔に吹き付けた。

「消毒完了しました。親父殿。」

「これで少しは綺麗になりましたかね。ではもう行きますよ。こんな女にかまっている時間はそんなにないんですから。」

二人が笑いながら牢を出て行った。

わたしは屈辱と絶望と痛みに耐えかねてまたしても気を失った。

侵入

「・・・・・・おいおい」

今俺がいる部屋の中には膨大な量の兵器が転がっている。

あのライターが兄貴の部屋で見た覚えがあったのを思い出して、兄貴が持っているであろうものを想像して作ってみたのだ。

そう、兵器である。

兄貴は兵器だけではなく、ありとあらゆる物をだだっ広い部屋に、足の踏み場もないほど散らかしていた。

おそらくあの辺の物を参考にナノマシンは記憶していると見た。

そこで、襲撃に備えて武器を作ってみると出るわ出るわ。名前まではよく知らないが、ハンドガンを始め、アサルトライフル、サブマシンガン、スナイパーライフルにロケットランチャー、ＴＮＴ火薬や、作ってはいないがあの部屋には戦車もあった気がする。

作ってから一時間ほど経つが、武器の類はまだ消滅する気配を見せない。おそらく、先のライターと比べて、慎重に作ったせいだろう。

半永久的には無理そうだが、２，３時間は持ってくれるだろう。

ふいにドアがノックされる。

おそらく、情報収集と食料調達に行っていたフェンだろう。

とりあえず、武器をすべて分解して消し去る。
そして、ドアにナノマシンを送り疑似神経を使って、３メートルほど離れたドアを開けた。
ドアの向こうでフェンが片手に食べ物を持ってキョトンとしている。
まぁ、自動ドアなんてないだろうしな。

「やっぱり、ハルユキは魔法使い？」

「違うって。ま、それはいいから座れ。飯食いながら作戦会議だ。」

「そうかやっぱり明日処刑なのか、その王女は」

フェンは、無言でこくんとうなずく。その眼には不安はなく、宿っているのはただ覚悟。ただ怯えているよりはずっといい。

「じゃ、やっぱり今夜忍び込んで助けるか。」

当然のことを言ったつもりだったが、眼の中の意志が緩み、フェン

は意外そうな顔をしている。

「・・・・・・どうした？なんか変か？」

「ハルユキは正面から突っ込むと思ってた。」

・・・・・・・・こいつ俺のことをどういう目で見てんだ。

「そんな訳あるか。城だぞ？一人で突っ込めるかそんなモン。」

あの武器と、新しい身体能力があればまったく不可能ではないと思うが、効率が悪いし、人質とかとられたら面倒だ。

こっそりとやるに限る。

「お前もそのリュートン？ってやつに目に物見せてやりたい気持ちも分かるが、時間がない。まずは救出が優先だろ？」

またしても無言でうなずく。

「だがまぁ、そうだな。正面から突っ込むか・・・・・・。そうだな、それでもいいかもな。」

いろいろ忙しかったので昼飯は食べられなかったので、腹の虫が作戦会議の中断を告げる。

窓の外を見ればちょうど暗くなってきた頃だ。もう晩飯を食べてもいい頃合いだろう。

実はさっきからフェンが持ってきた食べ物が気になってしょうがないのだ。

フェンに飯を食べようと切り出し、袋の中から現れたそれに手を伸ばした。

「いやー、それにしてもおいしかったな、ありゃ。」

先程食べたフェンのおすすめとやらの料理が収まっている腹をなでながら感服しながら城の門を見上げる。空の真ん中では中途半端な形の月がこちらを見下ろしている。

門番が二人ほどいたが、今は気絶している。

「さて、行こうか。」

持っていたろうそくが燃え尽きる。フェンは俺と一緒に下準備をしたあと、別行動をしている。このろうそくが燃え尽きたら行動開始だ。フェンも動き出しているだろう。

とにかく俺の役目は、目立って暴れることだ。

ゆっくりと門のまえに近づき、手を触れる。

硬い門だ。

それなりに古いが、この城を長年守ってきた歴史が感じられる。

少しだけ気が咎めたが、息を思い切り吸い込み、拳を振りかぶる。

「せい！！！！」

全力で、拳を扉に叩きつけた。

ものすごい轟音に空気が揺れる。

一瞬遅れて、高さ１５メートル横幅１０メートルほどの巨大な扉が、その重さを感じさせない、まるでミサイルの直撃を受けたかのよう

に吹き飛んだ。

扉は城の入り口の辺りまで吹き飛び、数人の兵士を巻き込み停止した。

ちらほら兵士がいるが、一番俺に近い兵士で3メートルほどしか距離がないのに、口をぽかんと開けたまま動かない。

・・・おっといけない。

「お邪魔しまーす。」

紳士のマナーを忘れてた。

そこでようやくその兵士が反応した。

「し、侵入者だぁぁーーーーー！！」

城中に響き渡った轟音を合図に、フェンはハルユキに開けてもらった進入用の穴をくぐって城内に入り込んだ。

この壁は魔法干渉がやりにくいように作られているのにハルユキは苦もなく必要なだけの穴を開けた。

いったいハルユキは何者なんだろうか、という疑問がフェンの頭によぎるが、直ぐに思考を切り替え、ユキネのいるはずの軟禁用の部屋に向かう。

位置は把握できているので、直ぐにいけるだろう。そう遠くもない。

幸運にも兵士の一人にも会わずに到着することができた。

もともとそんな大きな国ではない上にクーデターの時に半分ほどの国王派の兵士を殺し、さらにそれを隣国に悟らせないために町や国境に兵を集中させているので、実際この城には２００人ほどしか兵はいないということだった。

それも欲にくらんだリュートンにつれられた惰弱な兵ばかりだ。

それを見越した上での陽動作戦。

しかしそうそう思いどうりに進むものでもなかった。

（門番が・・・・・、いない？）

さすがに敵襲で、夜中を狙ったとはいえ門番さえいないのはおかしい。扉に近づいても中から人の気配もしない。扉を開けて中に飛び込むが、

人っ子一人いない。

「・・・・・・どこ。」

部屋を何度も見渡すがユキネの姿は見えない。

ここにいないとなれば、おそらく、

「・・・・・・牢、地下牢。」

人を捉えるところと言えばもうそこしか思いつかない。本当にそこにいるかは可能性としては微妙だが、とにかく行ってみるしかないだろう。

踵を返して、部屋を飛び出した。

「……せっ！」

首筋に手刀を叩きつけ6人目の兵士の意識を奪う。

ハルユキの役目は時間稼ぎなので、派手にふるまう必要はない。かかってきた敵を無力化するだけで十分だ。

曲がりなりにも兵士なのか俺の動きを見た兵士たちは無暗に襲いかからずハルユキを囲んでじりじりと間合いを詰めてきている。

その間にも次々と兵士が出てきている。…が、せいぜい３０人ほどだ。相手が一人しかいないのを見て城に戻って行った兵士もいた。

（やっぱり一人だけじゃ囮にもならんか……。）

「何をやっている！そんな奴は囮に決まっているだろうが！」

「副長！しかしこいつなかなか腕がたちます！」

「それでもこんなに人手はいらんだろう。魔術兵3人を残してその他の兵は城の見回りに戻れ！」

指示役の人間が出てきたことで、ますます人数が減っていく。だがこれくらいは想定内だ。

「はっ、もう遅いんだよ。」

「なん……」

兵の副長の言葉を遮って再び轟音が城の敷地内に響き渡った。

それは、俺が扉を突き破ったときの音をも超える轟音だったため、周りの兵士たちも俺への警戒を忘れ、周りを見渡している。

その隙に一瞬でハルユキは兵士達の視界から消えた。

「何が起こった!?　報告しろ!」

いち早く我に返った副長が声を荒げる。まだハルユキが消えたことには気付いていない。

その後はゴニョゴニョと一人で呟いている。

どうやら離れた人間と連絡を取る術が存在するようだ。

・・・・・それをハルユキは遠く離れた城の2階の壁から眺めていた。

報告を受け終わったのか、俺を見ていた時の何倍も緊張を含んだ目で叫んだ。

「全兵に告ぐ!!敵襲だ。敵の数は詳しくは不明。場所は城の塀沿いに合計6カ所!それぞれの場所にそれなりの数の敵がいると予想される!
兵は2班ずつに分かれ、敵の応対に回れ!!……おい、さっきの奴はどうした。」

「すみません。いつの間にか…。」

「くそっ!やはり囮だったか。お前らはさっきの奴を探せ。私は直接上に報告してくる。」

「はっ!」

おーおー結構何とかなるもんだな。

視覚神経、触覚神経やその他もろもろ、つまり最低限の自律神経をつけた銃器たちが崩れた壁の向こう側で奮闘していた。

一か所の壁の穴につき7機のガトリング銃を配置してある。

同時にスモークを大量に使ったので崩壊した壁の土煙と相まって、

相手は何と戦っているかもわかっていないだろう。
また一人ガトリングガンをまともに受けて吹っ飛んだ。
まぁ結構分厚い鎧を着ているので死にはしないだろう。

つまり、作戦とは二重の囮だった。

単純な手だが、俺が囮だとも分からなかった連中がほとんどなら、銃器達の襲撃もまた囮だとは思いもしないだろう。

今日は風もないので、後２０分ほどは時間稼ぎができるはずだ。
この後は俺もフェンのように、城を歩き回って姫を捜さなければならない。

この時間になっても合図がないということはおそらく元いた部屋にはいなかったのだろう。

まだ兵士の何人かは城の中に残っているだろうが、見る限り十分の一以下だろう。

いったん目立たないように地面に降りて、窓から城の一階に飛び込んだ。

ひとまず周りを見渡そうとするが、そんな余裕はなかった。

「え？」

右から土の、左からは水の槍が俺に向かってきていた。

侵入（後書き）

感想、アドバイス、募集しています。

フードと関西弁（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます

「・・・・・地下牢はどこ？」

フェンは足下の手足を氷で拘束された兵士にこれまた氷でできた槍を喉元に突きつけながら、質問をぶつける。

侵入から5分ほど経つがやはりすぐには目的地は見つけられず、業を煮やして、たまたま歩いてきた兵士をたたき伏せて、尋問することにしたのだ。

「そ、そこの階段を下れば、す、すぐだ！　だからそれをどけてくれ！」

運が良い。どうやらこれ以上ない進み方で来ていたらしい。というよりそこから出てきたこの兵は交代した見張りか何かなのだろう。

「・・・・・・・・・」

すっと槍を引くと兵士はほっとするが、すぐに頭上には兵士の頭と同じくらいのサイズの氷塊が浮いていることに気づく。

表情も変えられないままにほっとした顔のまま兵士は、落ちてきた氷塊に頭を痛打されて気絶した。

兵士が完全に意識を失ったことを確認すると、フェンはあたりを警戒しながらも、早足で階段を下っていった。

しばらくすると曲がり角が見えた。そっと角の先を見ると、手に槍を持った兵が1人。
そのさらに先にはもう一つ角がありその向こうに地下牢の扉があるんだろうと、当たりをつけるが、その奥に兵がいないとも限らない。その兵がさらに人を集めたりすれば面倒なことになる。つまりは一瞬で通路全体を攻撃する必要があるということだ。
それにこの狭いところであの長い槍はそれなりにやっかいだ。できれば気づかれる前に無効化したい。
だがフェンは慌てずに水の砲弾を作ると角の向こうに相手も見ずに発射した。ものすごい数を。

「なんだ!?」

見えていた一人は声を上げる間もなく気絶したというのに、まだ奥から声が聞こえる。やはりもう一人いたようだ。
すぐにでも上に連絡しようとするだろうが、水の砲弾を放った次の瞬間にはもう発動していた魔法によりそれは成し遂げられなかった。通路には高さで言ってフェンの腰のあたりまでの氷が張っている。むろんフェンは凍り付いてはいない。最初にはなった水を使って通路ごと兵士を凍らせたのだ。
一人は氷の下で、もう一人は太ももまで氷に埋まり、上半身は彫刻のように凍り付けにされて、意識を失っている。

このままでは死んでしまうので氷を消滅させ、二人を解放する。呼吸はしているようだ。
実はちょっと心配だったフェンだが、いつまでもかまっているわけにはいかず、片方の兵士の腰についていた鍵を取ると奥の扉を開き、

さらに奥へと入っていった。
中にはいると、また通路が続いていたが、今度は通路の両側に扉がずらりと並んでいる。が、人はあまりいないようだ。
その中に今度は鉄格子があってその中に囚人を閉じこめるようになっているようだ。ひとつひとつ扉を

開けて確認しながら、進んでいくと突き当たりに扉があるのが見えた。もうここにいなかったらお手上げだ。

軽く息を吸い込むと、じめじめした空気がのどを突く。

意を決して扉を開けた。
中に明かりがないようですぐに全体を把握することができなかった。
それでも目を凝らしていくとぽつんと人影があった。
どうやら鎖につながれているようだ。すぐに扉を開けて近寄るが、

「そこのかわいいお嬢ちゃん。どうかここから出してくれへんやろうか？」

そこには変になまった言葉を使う男しかいなかった。

「・・・・・・っく。」

こんな男に構っている場合ではない。ここには、ユキネはいないようだ。男を無視し、扉から出て行くことにした。

「あぁ！　待ってぇーな！　あれやろ？　王女様さがしてんのやろ？　さっきワイと入れ違いに連れて行かれたで？」
「・・・・・どこに行ったか、知ってるの？」
「そっから先は、鎖が解けてからや。」

にこにこと笑って表情は読めない。、敵か味方かはわからないがもう手詰まりなのは確かだ。ここはリスクを負ってでも情報を仕入れるべきかもしれない。
仕方なしに、鉄格子の中に入り鎖につながった手錠を外してやる。

「あぁーーやっと自由になった、で！！」

いきなり視界がぐるんと回り、地面にたたき伏せられる。なかなか強い力で抑えられているのか、びくともしない。

「と、まぁ今回はワイみたいな紳士だったから良かったものの、あんまり知らない人を信用しちゃだめやでー？」

すっと力が弱まって体の自由がきくようになる。

「……信用？」

何の動作もなしに男の後ろから男の耳をかすめてでかい氷の塊が飛んできて、壁に激突した。壁はどうやら陥没しているようだ。

「あと一秒経っても離してなかったら……」

「……おっかなぁ！」

「ユキネは？」

「王女様か？　それなら兵隊長サマが連れてったで。あの顔はたぶんエロいことしか考えてへんやろうから、急いだ方がええ。　たぶんそいつの部屋や。」

「ッ・・・・・・！　じゃ、後は好きにして。」

言うが早いか牢を飛び出して階段へと向かう。兵隊長とはダリウスのことだろう。あんな男にユキネを穢させるわけにはいかない。

「まあまあ、せっかくやし、ワイも手伝ったるわ。　恩もあるしな。人手は多い方がええやろ？」

さっきの男が後ろから付いてきていた。まぁ邪魔ではないので放っておくことにした。さっきの身のこなしを考えれば、それなり以上の実力はあるはずだ。

「ワイはジェミニ。しがない傭兵や。よろしゅうな。」

「・・・・・フェン。」

「フェンちゃんかー。　かわええ名前やなー。抱きついてもええ？

って、あああああ！うそうそすんません不謹慎でしたぁ！！」

ジェミニに向けた氷の槍を引っ込め出口を目指す。

しばらくすると廊下に出たは良いがどこにユキネがいるかもわからないし、問題がひとつ発生。

「・・・・・ジェミニ、時間かせぎ、おねがい。」

氷の槍を引っ込めると同時に、ジェミニの足を払って転ばせる。数メートル先には数人の兵士がこちらに走ってきている。通路は一本道なのでジェミニを倒さなければ、進めない構図になるだろう。ジェミニも負けはしないはずだ。たぶん。

「んな、殺生なって、うわ！」

後ろの兵をジェミニに押しつけて、ユキネを目指して全力で廊下を走る。

◆
◆
◆

「・・・ッぶねぇ！！」

咄嗟に両側から飛んできた茶色と青の槍を握りつぶす。その後で改めて左右を確認する。

左右どちらにも魔術師らしき人がいて、こちらに杖を向けたまま、いきなり飛び込んで魔法を握りつぶしたハルユキを見て口を開けて呆けている。片方は中年の細っこいおじさんで、もう片方は、フードをかぶって顔は見えない。

どうやら俺を狙ったわけではなく、この二人が戦っていたところに俺が飛び込んで巻き込まれただけのようだ。

一瞬早く中年の方が早く我に返りハルユキに杖を構え直して、呪文を唱え始める。

「貫け！【土そ・・・・・・ぁがッ！」

一瞬で精製したハンドガンで額を打ち抜く。気絶しているだけで死んではいない。安全安心のゴム弾使用だ。

「さて、と・・・・・・」

フードの魔術師の方に向き直る。フェンかなと思ったが、どうやら違うみたいだ。こちらに警戒心をあらわにしている。

「く、来るな・・・止まれ！」

「……急いでんだけど。」

「し、城の人間じゃないの？　じゃ、じゃあ侵入者ってあんたなの

?！　どうしてくれんのよ！　あんたがいなかったらこんな騒ぎにならなかったのに！」
「なぁ、なんか王女様っぽい奴見なかったか？」
「聞けよぉ！」
「なんだよ。要するにお前はあれだろ？　泥棒的な奴な訳だろ？　そんな奴が文句いうな。図々しい。」
「あ、あんたも同じようなもんでしょ！？」
「だから俺は、人助けだよ。世のため人のための行動だ。とやかく言われる筋合いはない。」
「ぬ、ぬぅ～～。」

そこまで言うと腕を組んで考え始めた。もう行っていいのだろうか？ここにとどまっているのはお互い得にはならないと思うんだが。

「よし。じゃあこうしましょ。私はさっき見た高貴な感じの人の居所教えるから。その、何、筒？　あいつを倒した魔具、それちょうだい？　それでチャラ。」

そこでのびている、中年魔術師を指して思い切り胸を張って俺に取引を持ちかけてきた。こんな物いくらでも作り出せるのだが、これたぶん十分くらいすれば消えるよな・・・。いいか。別に。

「はいよ。持ってけ。」
「え？　いいの？　ホントに？　返せって言っても返さないわよ？」
「言わねぇよ。ほら、今ならもう一本サービスだ。だからさっさと言え。」

もう一丁背中で隠して右手の中にを作成して二丁とも渡してやると、拳銃をいろんな角度から眺めながら、ついでのように言った。

「そこの角曲がったところ。」

「近ッ！！　ま、まあいいや。じゃあな、変なことに使うなよ。」

十分で消えるんだが。

「はーい♪　・・・・・・いい物貰ちゃったわ。ぬへへ。」

斬新な笑い声で笑っているフードの横を通り、角に着く。

角を曲がると上に行く階段があった。ここにいたのがどれくらい前かを聞いていないので、急いだ方が良いだろう。

「ん・・・・・・？」

何か、聞こえた、か？

分からない。何の音だったかも、どこから聞こえたかも分からないが、

何かが、早く早くと、俺を急かしだした。

「何なんだ・・・・・・。」

何故か焦っていく心をごまかすように、一息に階段を飛び越えた。

フードと関西弁（後書き）

読み直してみると展開が早いし、強引ですね。これ

再会は怒りに染まり

「ん……」

目を覚ませばまた周りの景色が変わっていて、今度はいつもの軟禁部屋でもなければ牢獄でもない。それらとは少し趣を異ならせた無骨な壁が続いている。

「ダリウス様、王女が目を覚ましました」
「元、王女な」
「ダ、ダリ……ぐッ…！」

喋ろうとすると、口の中がひどく痛んだ。おそらく殴られたときの物だろう。あまりまともには喋られないようだ。

思い出そうとすると頭も痛い。確かダリウスにひどく痛めつけられて……それから、どうした？

そう、またみっともなく気絶したのだったな。

ここは、廊下だろう。結構深刻なダメージがまだ残っているのか。頭にもやがかかっているように、働いてくれない。

「で、ですが……」
「いいんだよ。どうせ明日には処刑だしな。あのフェンっていったか？あれはチビすぎてやる気起きなかったからよ。――お前、元とはいえ王女とヤれるチャンスなんて滅多にないぞ？」

ごくり、と私を抱えている兵士の方から唾を飲む音がした。

何を言ってるかは分からないが、私にとってはろくでもない話題だろう。

それより、わずかに聞こえた単語単語の中に、思い出したくない記憶を引き出させる単語があった。

――フェン、と。

死んでしまった。唯一無二の友達の名前。

意識も定かではないくせに、また涙はこみ上げてくる。今度こそ零れてしまう。歯を食いしばって目頭にこみ上げる熱い物にあらがい、そして呆気なく敗北した。

頬を、涙が伝う。

それを見たからか、全く関係ない事がきっかけなのか、兵士とダリウスは、嫌らしく、悪魔のように笑い合っている。

怖かった。どうしてこんなに悲しい時にこんな表情ができるんだろう。まるで人間ではないようだ。

怖かった。死ぬこともそうだが、こいつらの近くにいることが、

こいつらに触れられることが怖くてたまらない。

怖かった。世界にわたしを想ってくれる人がもう一人もいないことが。

涙をきっかけにしたのか、弱い自分が次々に顔を出して強がっていた自分を飲み込んでいく。

もう、周りには誰もいない。居るのは悪魔のような表情をした本能と欲の化物ばかり。体が妙に震えてガチガチと歯が鳴り始める。

限界だった。

「助……け……て……」

だから思わず零れたのは願いではなく、ただの逃避だった。

本当に小さい、抱きかかえられている兵士にも聞こえない声でつぶやいた。

のども痛めたのか、もうほとんど声も出ない。

誰かに届くはずもない。届いたとしても、助けてくれる人はいない。唯一の友達は死んでしまった。

でも、そんなただの弱音を、拾ってくれる人が、居てくれた。

「ユキ、ネ……？」

懐かしい、しかし聞き慣れたような声が届いた。声の主にダリウスが顔を向ける。

「なんだ？　おま……」

ダリウスが言い終える前に、いきなり現れたその声の主がかき消えた。

視界がぶれたかと思うと目の前に夢の中にしか存在しないはずの懐かしい顔があった。

「ハルユ……キ……？」

絞り出した精一杯の声は、しっかりと、確かに、届いていた。

◆

「ハルユ……キ……？」

ユキネは信じられない物を見たかのように目を見開いて、それが限界だったのか瞳から光を無くしてそのまま気を失った。

土とほこりが付いてどろどろの服を着ているが、腰の辺りまで伸びた金髪や緋色の目は間違いなくユキネの物。

なぜ気絶したかは一目で分かった。ここ何年かで美しく成長したであろう顔は所々腫れ上がれ、金糸のようだった髪も汚れたくすんでいる。

無邪気な笑顔など、この顔からは想像できなかった。

「ふん、その女を助けに来たってことか。残念だったな。俺がここにいなければ助けられたかもしれないのに。……もう、死ね。」

そうつぶやくと同時に水でできた剣が数本俺とユキネに向かって飛んでくる。

避けられる。受け流せる。受け止められる。

しかしそのどれも選択しなかったのは、間違いなく心がささくれ立っていたからだろう。

蹴りの一振りで吹き飛ばす。思ったよりかなり強く蹴ったために触れていない剣も吹き飛び、石造りの壁が震える。

「な、に……！？」

こいつの声聞いてると、更に心がささくれ立った。目の前が真っ赤に染まっていく。

久しぶりの感覚に気付かなかった。これは怒りだ。

――俺は怒っている。

それを自覚した途端、頭の中で何かがゴボリと沸騰したような音を立てて体中を燃やし始める。

「お前が……やったのか？　これ。」

ユキネをゆっくりと廊下に下ろし、漏れだそうな殺気を押さえ込みながら、男に尋ねる。

「あ？　ヤるのはこれからだよ……。殴るのにも飽きたしなぁ」

頭に血が上る。激昂する。それが妙に陳腐な言葉に思えた。

気付けば体中に溶岩が流れ始めたかのように力が行き渡り、時々筋肉が痙攣を繰り返す。

焦点は限界まで引き絞られ、目の前の男以外の景色は雪化粧でも施したかのように白く消えていく。

絶えられない。

――何を？

決まっている。

あの男がまだ人間のような姿形をしている事が。
不細工な笑顔を晒している事が。
当たり前のように息をしている事が。

絶えられない。

――ならば、殺してしまおう。

警告も、罵倒も合図もなく、一瞬で距離を詰めて拳を固める。
右拳がそいつの腹を打ち抜いた。

「お……！」

汚い声をあげる前に顎をかち上げて顎と歯を破壊する。

しかし、結局汚らしい声が歯の間から零れた。

顎を、胸をを、内蔵を、次々と打ち抜く。一瞬でそいつはユキネよりもひどい、目も当てられない身体になっていく。

「げぁっ……！　っはっぁ……！！」

残りは一つ、命を、討ち抜くために拳を振り上げる。

俺は正気のまま、冷静にこいつを殺すことができる。それはやっぱり悲しくて、こんな奴を殺すことにも、俺の身体のどこかで何かが、痛みを訴えていた。

しかし、止めるつもりは、ない。

「ユキネッ！！」

そこで、フェンがどこからか現れて、ユキネに駆け寄り悲痛の声を上げた。

男を片手で吊り上げたまま、怒りを無理矢理下火に抑え込んでフェンに声をかける。

「……フェン、こいつが王女で間違いないな？」

「う、うん……」

俺の口からは誰の声か分からないほどの殺気に濡れた声が出ている。昔を思い出しまた身体のどこかが痛む。

「そいつ連れて先に戻れ。俺はやることがある。」

ユキネから俺へと移した瞳が俺の目を見た瞬間、揺れ動いた。恐怖か、畏怖か、困惑か。なんの色かは分からないが、その瞳はなにかの感情に染まっていた。

不意にフェンが俺の服の裾を掴み軽く引っ張った。

「何してんだ。早く……」
「殺しては駄目」
「退け。こいつは殺す」

つまらない正義感は要らなかった。
こいつがこの先の人生で一つでも幸せがあるのかと思うと、それを摘み取ってやらなければ気が済まない。

「駄目！！」

フェンの初めて聞く怒声に、眉を顰めた。

正義感ではない。そんな物とは無縁の感情がフェンの目に込められていてそれは寧ろ言葉以上に強く晴之に伝えてきていた。

俺に対する恐怖が一握りに、そして心配がほか全部。
ユキネと、そして、俺も。指先一つで殺せるような娘が、俺はいつでも殺す立場でしかないのに。

――そこで居心地の悪さを感じてしまったのが、いけなかった。

「……判ったよ」

せめてもの気晴らしに、思い切り顔を引いて男の顔面に額を叩き付ける。
潰れた蛙のような声を上げて、男が廊下をバウンドしながら転がっていった。

「これでチャラだ」

頬をひっぱたいて、漏れだしそうな狂気を飲み込む。

当初の目的。やる事やって皆でさっさと帰る。それが一番重要だ。

下火になった怒りが燃料を注がれる前に、フェンとユキネを抱き上げて、そのまま外に飛び出した。

「どうだ？　ユキネは？」

「わからない・・・・・けど、すぐに治療した方が良い。」

「お前の魔法で治療できるか？」

「1時間くらい時間がかかるけど・・・・・今なら、傷跡も残さない。」

悔しそうに顔をゆがめてそう言った。怒っているのは俺だけじゃない、ってことか。全く一億年も生きてきてこんなガキンチョに後れを取るとは全くもって情けない。

屋根づたいに跳んで前庭に到着した。少し先では、兵士達が未だ武器達と戦っている。

「よし、なら頼む。ここでできるか？」

「場所は、関係ないけど、……ここで？」
「まあ言いたいことはわかるが、治療は急いだ方が良いんだろ？
それにあのスットコドッコイに何もしないまま帰るのは気に障る。
ああ、殺しゃしないよ。ただこいつに謝らせるくらいはしないとな。
」

そう言ってる間にも、兵器達と戦っているところからも、正面の門からも兵が集まってきている。

「だから、俺はそのバカ娘が治って目を覚ますまで、時間稼ぎをしなきゃいかんわけだ。」
「・・・・・・でも、この数じゃ。」

ぱっと見ただけで５０人ほどは集まってきている。先程の副長が指示をとばしたのだろう。手練れがいるから人数をあつめろと。

魔導師っぽい奴も大勢いるし、フェンが治療に集中するなら、俺が守らなければならないだろう。

簡単にはいかないかもしれない。でも、

「まあ、任せろ。」

「・・・・・・・・・・・・任せる。」

やってやろうじゃないか。

１００対１

ダリウスは半殺しの目に遭いながらも、部下に治療して貰い、まだ腫れた顔のまま、入り口まで降りてきていた。

一瞬でやられたのが何より幸いだったといえるだろう。その心に、ハルユキにたいしての恐怖の記憶はほとんど存在しない。

それでも、体のほうにその恐怖がこびり付いているのか、自分が今まさに始まろうとしている戦闘に加わろうという気持ちは、頭の隅にも浮いてはこなかった。

前で３人倒せば、前以外でそれぞれ３人襲ってくる。それも俺だけじゃなく、俺たちにそれぞれ、だ。

目の前のもうあと二十センチ拳を進めれば倒せるであろう兵士を無視し、フェンに向かってすでに剣を振り下ろしている兵士に蹴りをぶち込み、吹き飛ばす。

フェンはそんなものに、目も向けずに一心に呪文を唱えている。

おそらく治療は風の魔法なのだろう。フェンを中心に空気がせわしなく動いている。

全力で信頼してもらっているのが、分かってしまう。……
なら、応えなければ。

もっと速く。もっと強く。

――――信頼には全力を。

また3人の兵士を吹き飛ばし、肺の中に一瞬で酸素をため込む。その一瞬で兵がいっせいに三歩ほど引いたかと思うと、いっせいに魔法が降り注いだ。

土の。風の。水の。火の。

槍が。刃が。矢が。弾が。

弾幕となって降り注ぐ。

もし人事だったならば、鮮やかな色とりどりの光に感嘆の声を零していたかもしれない、がそれらは全て凶器でそれも全てこちらを向いている。

すべてを防ぐ時間はなかった。弾けば、二人に被害が出る恐れがある。なら、

「吹き、飛べ！！」

渾身の蹴りを放ち、その風圧でほとんどの魔法を吹き飛ばす。だが、土の重量があるものは身を削りながらも俺まで到達する。

数は二本。このままだと一本は俺にもう一本は二人に突き刺さる。

だが遅い。拳銃にも届いていない速さでは、俺には追いつけはしない・・・・・・！

二本ともつかみ取り、苦もなく握りつぶした。すかさず、拳銃を即席で作り出し、魔導師を数人仕留める。

・・・・・・まだだ。もっと速く。もっと強く！

続けざまに第二の弾幕。どうやら、三隊に分けて魔法攻撃を行っているらしい。再び色とりどりの凶器たちが殺到する。

だが同じこと。

再び風圧ですべてを吹き飛ばす。そして残っているであろう土の凶器を耳と目で探す。……が見当たらない。

（やっぱり……）

土の魔法が残らなかった理由は単純だ。一度目のそれより明らかに強かった。強力になった風圧が今度はすべてを吹き飛ばしただけ。

戦いに身をおくたびに細胞が活性化され、最適化されていく。そんな感じだ。おそらく今の俺は、昨日の俺より確実に強い。

（いや、それどころか……！）

そこで、三隊目の魔導師達が、全員集まって、詠唱しているのが見えた。その頭上には巨大な火球。まるで太陽のように周りに熱気を振りまいている。

一瞬で思考を先頭に切り替える

あれは、吹き飛ばしても……。いや、それどころか近づけただけでもアウトだ。目の前では兵士達が盾になっていて、魔導師を狙うことはできない。

（なら……）

体の左半身を火球にむけ、腕を引き絞り、右手は人差し指と中指、親指だけを使い、御椀のように形る。

ドラゴンのときのように床石に足の裏をたたきつけ、体を引き絞り、同じように引き絞っていた右腕をカタパルトのように突き出し、右手の先から凝縮された衝撃波を火球に向けて打ち出す。

――――”空当て”

衝撃波が激しく回転しながら周りの空気を巻き込んで肥大化し、火球に真正面から激突した。

この空の覇者のようにらんらんと夜空を照らしていた小さな太陽が、爆発霧散し、消え去った。

火の粉が兵士たちに降り注ぎ、パニックになる。

ここで初めて俺は攻勢に出た。俺は視力、聴力などの五感も強化されているらしく、目の前に魔法で土煙が上がっているが相手がどこにいるかくらいは

目をこらさずとも分かる。

ここに来て攻めに出たのは、パニックと土煙のせいもあるが、何よりある程度敵が減ったからだ。敵が減れば、攻撃は減り、防御をすることも少なくなる。

魔術師も剣士も、等しく拳をたたき込み、敵を次々となぎ倒していく。

煙が晴れていくと立っているのは俺と後一人、副長と呼ばれていた男。

片手に短い杖と、もう片方の手には剣、鎧の肩当ては吹き飛んでいて、むき出しになった肩は激しく上下に揺れている。

俺を睨み殺そうかという風にこちらをその眼で見つめているが、その視線は俺が構えた銃に遮られている。

「・・・・・・・・・バケモノ、が。」

乾いた銃声が前庭に鳴り響き、戦いの終わりを告げた。

プツン、と音がしたかのように、集中が一気にとけた。目の前にある静かに寝息をたてている二日ぶりの、しかし何年も会っていなかったかのような感慨で、親友の頬を優しくなでる。

間に合わないかと思った。元の部屋にいなかったときは愕然として、最悪のパターンを思い描いた。万が一、もう殺されていたら、と。

森に放り捨てられたときにも、諦めていた。

あの世で再会できればいいな・・・・・なんて本気で考えていた。今、お互いが生きたままで、触れていられるのが信じられない。

――――私にとって初めてできた友達だった。なぜかいきなり城に閉じこめられて、呆然としていた私に声をかけてくれた。

二人だけになってしまって、心が折れそうなとき、私もそうなりそうな事を気づかないうちに、励ましてくれた。笑ってくれた。私は

器用に笑えなかったけれど。

いや、笑えなかったから、ユキネの笑顔はまぶしかった。だから私もユキネが時々つらそうなときは、励ますことにした。

ユキネのように上手くはいかなかったけど、それでも支え合ったいれたと思う。

ユキネと引き離されたとき、とたんに私は弱くなった気がした。実際弱くなったのだろう。心は折れて、体の震えが止まらなくて、

そんなときに今度はハルユキが助けてくれて。

私は助けられてばっかりだ。ユキネにも、ハルユキにも。支え合っていきたい。今はまだ助けられることの方が多いけれど、どれだけ借りがたまっているのかもわからない

けれど、今ひとつ、今まで助けられた事に比べたら本当にちっぽけだけど、この親友を助けられたことがとても嬉しくて、少しだけ・・・誇らしかった。

「ユキネ・・・。」

私の親友は未だ目を覚まさない。

城の前庭に王女をさらった男が降り立ってから、もう３０分程がすぎた。

「な、なんなんだよ！　あいつは！？　８０人いや、１００人はいるんだぞ！？　なんで、なんでまだ立ってるんだよ！」

それどころか、もう７０人程が、そこら中に倒れ伏せている。

あの男は、”守っている”にもかかわらず、だ。

ただ来る相手だけを倒しているのであって、積極的に倒していこうと思えば、こちらはもうとっくの前に全滅しているのではないだろうか。

また一人また一人倒されていく。

「なんですか、この騒ぎは・・・・・・。ダリウス、なんなのですか一体。」

親父が、欠伸をしながら前庭まで降りてきていた。

もう眠りに就こうとしていたのか寝間着姿で、その顔にはけけらの緊張感も感じられない。

「お、親父、逃げよう！　侵入者だ！」

「し、侵入者！？　数は！？　まさか、反乱ですか！？」

「い、いや、あの王女を助けに来たみたいで、数は・・・・・ふ、二人、だ。」

侵入したのが二人だと聞いて、親父が大きく胸をなで下ろした。

「二人？　そんなもの、殺してしまえばいいでしょう。それにあの王女は逃がすわけにはいかないでしょう。

王族は根絶やしにして、私の王座を不動のものにしなければならないのですから。」

「だ、だけど、もう五十人以上は倒されて・・・・・。」

「お黙りなさい！！　五十人がなんです？　五十人倒されたのなら、もう五十人戦わせればもう生きてはいませんよ。

ほら、もう静かになったでし・・・」

庭に顔を向けた親父が顔面を蒼白にして、言葉をなくしている。

な、なんだ？

恐る恐る顔を庭に向ける。

そこでは、ぽつんと男が一人だけ立っていて、こちらを向いて笑っていた。

１００対１（後書き）

感想お願いします。

灰色の狂気

城の入り口のところで、なにやら言い合いしていた先程の男と、そばにいた偉そうな男もついでに、ロープを出そうとしたら代わりに出てきたビニールひもでふん縛って

フェンのところまで引っ張っていった。

近くまでいくとフェンも予定より早く治療を終えているようで、周りに転がる気絶した兵士を見渡している。

「・・・・・もう、驚かないけど、相変わらず・・・・・・むちゃくちゃ。」

近くまで俺が近づいたことに気づくと、そう言った。

「まあ、自覚はしてるよ。で、まだユキネは起きないのか？」

そう声をかけると、ピクンと肩が揺れて、俺の目を見つめてきた。

「ハルユキはユキネのこと、知ってたの？」

「・・・・・なんで？」

「ユキネはあだ名。本当の名前しかハルユキには言ってない。」

しっかりとユキネと俺の間に体を入れてから、言葉をぶつけてきた。
もしかしたら、いや、おそらく警戒したのだろう。よくよく考えれば、俺は怪しすぎる。

「ハルユキ、あなたは・・・・・・。」

「ユキネの友達、だよ。お前と同じようにな。」

説明不足かもしれないが、これ以上言うこともないし、これ以上、上手く伝える方法も思いつかなかった。

しかし、フェンは警戒を解く。

「・・・・・・・・・・・そう。」

「そうなんだよ。」

これだけで相手を信用するのはどうかと思うが、俺は思ったよりこの小さな魔法の騎士に信頼されているのだろう。

「さて後はこいつが目ェ覚ますのを待つだけなんだが・・・・・・あーあ、団体様がご到着だ。」

ここから城の入り口からは５０メートル弱。

そこに今倒した兵士の三倍ほどの数の兵士が集まってきていた。

「城の中の兵もすべて出てこい！　・・・・・・全力で、叩く！」

また先ほどの副長とは別の指揮官ががものすごい大声で指示をとばす。

「た、助けてくれ！助けてくれた者には好きなだけ金と地位をくれてや、ぶッ！」

「うるせぇよ」

そこらに倒れ伏している、兵士を見て、警戒しているのか安易に近寄ってこようとはせずに、二の足を踏んでしまっているが、

準備が整い次第、仕掛けてくるだろう。一刻の猶予もない。

「フェン、こいつらと一緒に下がってろ。」

逃がしたいところだがフェンではユキネ一人連れて行くのも無理だろう。

「・・・・・・・・・いや。」

「フェン。」

「先に、・・・・・・宿に帰ってる。疲れた。」

・・・・・・・・・・・・・・・えー。

「あ、やっぱ行かないで。なんか寂しくなってきた。」

「お疲れ、さま」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・えー。

「大丈夫。ちゃんと、帰ってくるまで、待ってるから。」

・・・・・そう言ったフェンの髪の間からかすかに見えた耳はほんのりと赤く染まっていた。

まったく、恥ずかしいなら言うなよ。

「りょーかい。先行ってろ。」

フェンは小さくうなずいて、つぶやいたかと思うと、ユキネと縛った男二人がふわりと浮き上がった。

おそらく風の魔法だろう。３人とも歩いて去っていくフェンにしっかりとついて行っている。兵士はほとんど全員あちらに集まっているようなので、

後は任せて大丈夫だろう。

「・・・・・・さて。」

こちらの人数が減ったからか、それとも目の前で主が連れ去られたからか、少しだけ兵士達に動きがある。おそらくあと一分もしないうちに

こちらに突っ込んでくるだろう。

正直あの人数はめんどくさい。ま、やるしかないんだけど。

（よう、いろいろ面倒くさいことになってんな。）

突然頭の中に声が響いた。

（九十九か。なんだ起きたのか。まぁ見ての通りだ。お前の力があれば何とかなる。悪いがまた借りるぞ。）

（・・・・・・・・・・・・・・・・はァ？　なぁに言ってんだ、おまえは？）

（何って・・・・・・・だから・・・）

（お前がいつ！　”俺”を使ったんだよ？）

どういう事、だ？　あの飛躍的なまでの身体能力の上昇はこいつの仕業じゃないのか？

ならこの力は一体・・・・・・？　いや、こいつが言った力ってのは・・・・・・・・・？

（あー勘違いしてんのな。俺が言った強さってのはお前の思ってる

のとはまったく別モンだよ。けど確かにな、お前何でこんなに強くなってる？

まあいいや。ついでだから、・・・・・・・・魅せてやるよ。）

――――――”其れは唯、其処に在る”――――――

・・・・・・・どこかから声が聞こえた。

瞬間、右肩と額に、激痛が、走り抜けた。

ほんの一瞬だ。もう痛みはなく、代わりに、違和感。それも圧倒的な。

視界の端に怒濤のごとクこちらに走ってくる兵士が見える。駄目だ来るな。これは駄目だ。駄目だ駄目だ駄目だ。

視界の端にもう一つ見える何かがある。なんだこれは？

色がない。まるで色彩を失っている。アあ、俺の・・・腕か。でかい。肘から先だけで五メートルはある。

もう一つの違和感を訴えてくる額に左手を運ぶ。そコには、あり得ない物が存在していた。

――――――角。

驚く暇もなく、今度は、腕の中に何かがいることに気づいた。

腕の中で何かが暴れテいる。つい最近まで感じていた、懐かしい、しかしおぞましい感触。

これをどうにかするには、発散する。それだけだ。だが、殺さない。約束した。

走ってくる兵士たちを見ルと、この腕を思いのまま振り回してやりたい衝動に駆られる。

それもこれは殺意からくるものではない。それだったらまだ良かった。

俺を突き動かそうとしているのは”好奇心”、これを振るったらどうなるのか、それだけの理由で、殺したがっている何かを感じル。

・・・・・・・・アあ、狂っテイる

しかし、これをそのままにしておくわけにはいかナイ。視界の先に城ガ目に入り、決断を下した。

跳ぶ。易々と兵士達ヲ飛び越え城ノ真上へ。

不思議と意識はシッカりしテいる。上空からしッカりト城を見据えた。耳かラ目カら鼻から肌カラ異常なマデに鋭敏化した情報が城に人はいナイコとヲ教えテクレル。

ソレヲ確認シテ、腕ノ中デ暴レル狂気ゴト、

――――――真上から城に叩きつけた。

轟音。

一瞬遅れて風が衝撃となって、周囲を襲った。兵士達はとっさに近くの者と一塊になり、吹き飛ぶのをこらえている。

石でできた壁にひびが入る。

結果、城はその下の何十層もの地層ごと、この世から消失した。

ハルユキは兵士達と穴をはさんだ反対側に着地した。

（おいおい・・・・・・。）

反対側にいる兵士達はここから見ても分かるくらい戦意を失っている。呆然と膝をつく者、口を開けて呆けている者、武器を投げ捨てて逃げ出す者。

いろんな奴がいたが、喜色の表情を浮かべている者はいないだろう。

（んー、手加減はしたんだけどなぁ）

（やり過ぎだバカ野郎・・・・・・。）

城のあった場所に堂々と鎮座する大穴をのぞき込む。俺の強化された視力を持ってしても底は見えない。

そうだ。それよりも。

（九十九、説明を・・・・・・。）

（ｚｚｚ・・・・・・ｚｚｚ・・・・・・）

「この野郎・・・・・・。」

・・・・・・・・・まあいいや。後で聞くか。今は帰って寝よう。

待ってる奴と待たせてる奴がいる。さっさと帰ってやらないと。

ゆっくりと、帰路についた。

再会はやっぱり涙と喜びで。

――――目を覚ますと見知らぬ部屋の見知らぬベッドで見知らぬ天井を眺めていた。

ここは……どこだろうか？

この頃は硬い地面としか面識が無かったからか、柔らかい日差しと暖かい布団の感触に疑問が先立つ。

城ではない。単調な目作りの屋根と壁だ。ベッドから身を起こしながら天井を伝って部屋の様子を見渡していく。

そして、ちょうど腰を浮かせた所で。

ドアのすぐ横の壁に誰かが寄りかかって眠っているのに気がついた。

――――時間が止まった。

「んあ……お、よう。起きたのか」

久しぶりに会ったというのに、相変わらず緊張感というものが欠

けたしゃべり方だった。

ゆっくりと時間が融解して行くのを感じながら、ハルユキの声があまりにいつも通りで少し気持ちがむくれた。

四年振り。

それなのに、私だけが大騒ぎして、喜んで、声を弾ませるのはなんとなくいやだったので、私もなんでもないように話そうと口を開いた。

――が、喉から声は出ずに、零れたのは目から、何やら妙に熱いものが。

手でぬぐっても、目をこすっても後から後から涙が零れてきて止まらない。

「お、おい……、どこか痛むのか？」

違う、と伝えようとして、また代わりに感情の塊が目から零れた。

顔がぐしゃぐしゃになる前に、ハルに飛びかかって顔を胸に押しつけた。ハルの服は汚れるだろうが、知ったことではない。

汚い顔をハルに見られたくなかったというのもあった。なんとなく。

結構な勢いで突っ込んだからか椅子が倒れ、ハルと一緒に床に転がった。それでもハルの上から顔を押しつけたまま離れなかった。

「痛いんだが……」
「……うるさい」

気恥ずかしくて思わず言ったその言葉が再会の挨拶になってしまった事に気づいて、自分に嫌気が差す。でも回した腕の力は強くなるばかりで、恥じらいを持とうともしない。

そのままいくらか時間が過ぎた後、ハルユキが口を開いた。

「久しぶりだ」
「うん」
「泣いてんのか」
「……ううん」

嘘だけど。嘘だとばれてるけれど。ばれてることも判っていたけど。

「辛かったか」
「……別に」
「寂しかったか」
「……少し」
「背ェ、伸びたな」
「……うん」
「相変わらず、泣き虫だな」
「……うん。ごめん」

「しっかし相変わらず気品ってもんが見あたらないな相変わらずピーピー泣くし微乳だしいきなり飛びつくし嘘つくし精神的にガキだし久しぶりにあったと思ったらぼろぼろだし終いにはなんか殺されそうになってるし、ホントどうしようもねぇなおまえは」

「……」

この男はどうも空気を読み込む機能が故障しているようだ。直してあげないと。うん、拳で。

「――っ、――、――ッ――っ」

冗談なのだろう。半分自分も笑いながら胸を殴りつける。

「はっはっは。がっ！　ごっ！ふがっ！はっは、あ待ってそこみぞおｔ……」

思い知ったか。

でもまあ、許してやろう。こんな奴でも、私の大切な、友達だ。

「……変わんないなぁ、ユキネ」

「ハルもだ」

いつの間にか涙は止まっていて、いつもの通りに仲直りをしようと顔を上げた。

「よう、やっと顔出したな」

待ち構えていたかのように笑顔で迎えてくれたのが、恥ずかしくて少しだけ悔しくてまたハルユキの胸に顔を伏せる。

宥めるかのように背中を軽く叩かれた後、柔らかく抱きしめられた。

小さく声が漏れたのはその拍子。慌てて顔を上げたのは自分でも驚くほど甘えた声が出てしまったから。

でもそれより何より。

四年前と変わらない顔が目の前にあって、思ったより顔が近かったのがいけなかった。

顔と顔との距離は十?ほどしかなくて、みるみる顔が赤くなっていくのが自分でも分かった。それにイヤに優しく頭をなでてくるものだから。

「……だ、大丈夫か?　まだどっか痛むか?」

勘違いしてくれているのが幸いだが、心配してくれたのがまた嬉しくて。

「ハ……ル……」

自分でも驚くほどの熱っぽい声が口から漏れた。顔どころか体中が燃えるように熱い。

熱い。熱い。

「ユキネ……？」

何も分かってない朴念仁が私の顔をのぞき込んできて、ハルの灰色の瞳に私の顔が写った。目が潤んで顔が上気している。

あれ。ハルの瞳の色はこんな色だったかな。

かすかな疑問が頭をよぎるがすぐに消えてなくなり、ハルの名前をつぶやきながら、ハルの頬に手を伸ばした。

「ハルユキ。ユキネの具合は……」

固まった。そして一気に正気に戻った。

「お邪魔しました。……ごゆっくり」

バン、と思ったよりも大きな音で戸を閉めて去っていった。

――――フェン？

「ほら。行ってこい。ついでに誤解も解いてこいよ」

その言葉を聞き終える前に廊下に飛び出し、こちらを振り向いたフェンに抱きついた。

後から考えると、私は抱きついてばかりで恥ずかしいが、フェンもハルユキも……そして私もちゃんと体温があったのが感じられて。

とても、とてもとても嬉しかったのだ。

「そうかい。そんなことが・・・。」

モガルの店で食事をとりながらハルユキ達はことの顛末をユキネに話した。

食事の途中にリュートンとダリウスが町人に連れられてすごい勢いでユキネに謝ってきた。その姿は疲弊しきっていてあまりに哀れだった。しかし、ユキネは顔も見たくないと、もう連れて行ってくれと頼んで即座に姿を消した。

ハルユキもユキネが我慢するなら、と手は出さなかった。

この町には実はかなりの数の反乱軍がいて、虎視眈々と機会をまっていたらしい。リーダーはなんとモガルだ。

ハルユキ達が帰ってきたら、混乱に乗じて一気に攻め入ろうとしたらしい。

が、ハルユキ達が王族の二人を捕まえてくるし、城に行ってみれば、城があったところにできていた巨大な穴と、戦意喪失している兵士達しかそこにはなく、しょうがなく兵士を捕らえて、

それで反乱はあっけなく成功したらしい。

「本当にすまない。利用するようなことしちまって・・・・・・。」

そのことをハルユキとフェンに話した後、膝に頭が着きそうな勢いでモガルはハルユキ達に謝ってきた。

おそらく、苦渋の選択だったのだろう。しかしリーダーである以上安全でなおかつ成功の可能性が高い手段を選ばなければならなかったのだ。

「モガル、私は・・・・・・。」

「な、なんだい？」

責められると思ったのか、ハルユキを殴るときには想像もつかない表情だった。

「ユキネが起きたら、おいしいご飯を二人分・・・お願い。」

「俺はメニューのここからここまで3つずつな。約束は守れよ、ババァ。」

モガルはしばし呆けた後、大声で豪快に笑った。

（敵わないね、全く・・・・・・。）

「・・・・・よし。分かった。気合い入れて作るからね！　残したら許さないよ?！」

「はっはっはっ。誰にものを言ってるんだ、ババァめ。一欠片も残さん。」

大宴会になった。

「はっはー！　このイサド様に勝てる奴はいないのかぁ!?」

「よっしゃ。鍛冶屋のエドガーがそのけんか買った!!」

「3番、ジェミニ！　”俺のリビドーはノンストップ”　歌うで～！」

ハルユキが大量に食べたり飲んだりしていくうちに、まわりで食べ始める人たちが出てきて、どこかで飲み比べが始まり、力比べが始まり、

誰かが歌い始め、そしてみんな笑っていた。

私はハルユキの横で初めて飲むお酒と格闘していたのだが、一口目を飲もうとしたところで、食材が切れるまで料理を作りきったのか、

手の空いたモガルが話しかけてきた。

「ユキネ・・・。ちょっといいかい？」

そう言って店の外まで連れて行かれた。外に出ると夜空に星が広がっていて思わず息をのむ。

モガルは店先に設けたテラス席に腰を下ろすと、言いにくそうに話し始めた。

「ユキネ……。こう…いうのは言いづらいんだが。」

「私はもう必要ない…だろう？」

モガルの顔が驚きに染まり、目が見開かれた。しかし自嘲的に笑うと、続けた。

「そりゃ分かるか。王女だもんな。……そうだ。私たちはお前の父親が無実だって思っているが、この国の人全員がそうではないし、本当のところは誰にも分からない。だから、国民みんなで国を作ろうという意見が多い。いや、ほとんどだ。いやこういう言い方は卑怯だね。私も、そう思ってる。」

「……国とは人だ。人とは国だ。王とは従える者でも束ねる者でもなく、ただ支える物だ。」

「……？」

「父上が一緒に食事をする度に言っていた言葉だ。私もそう…思う。王がいなくても、人々がお互いを支え合っているのなら、王はいる必要がない。」

「……本当に、すまない。」

しょうがない。それにこんなこと言う方が辛いに決まっている。ほら、あんなに強そうなモガルが泣きそうじゃないか。

「でも、ここは私の故郷だから。時々、戻ってきてもいいか？」

モガルは私の顔を見てまた自嘲して、本当に敵わないなとつぶやいた。

「ああ。すごいご馳走を食べさせてやる。ここを故郷にする者は皆、家族なんだからな。・・・忘れないでくれ。」

「ああ、じゃあ戻ろうか。」

また、ああと短く返事をしてモガルは先に賑やかなところへと戻っていった。

私は綺麗な星をもう一度だけ眺めて扉をくぐった。

いつの間にそこにいたのか、ハルユキが扉のすぐそばに立っていた。
恥ずかしいのか、顔は騒ぐ人たちを向いている。

「泣きたいときぐらいは、胸貸してやるよ。」

泣く？　誰が？

「あ・・・れ・・・・・？」

いつの間にか頬が涙で濡れていた。

故郷から出て行かなくてはならなくて悲しいのか、家族だと言ってもらって嬉しいのか、父上を思い出して哀しいのか。使用人達の後を追えずに申し訳ないのか。

涙の理由は分からないが、理由も分からない涙は止めようが無くて。

「少し、だけ・・・・・。」

またハルユキの胸に顔を埋めハルユキの胸を濡らす。

私はハルユキの前だと泣いてばっかりだ。

私はまだまだ子供で弱い。それでも、それでもいつの日か。

――強く。

故郷の空（後書き）

更新、遅れるようになるかもしれません・・・・・・。

四人旅

モガルに見送られて町を出た俺たちは主体性もなく、貰った馬車でゆっくりと整えられた道を走っている。

まずは俺、ユキネに、フェン、あとはなぜかジェミニとかいう男が一緒だ。外見は茶髪でがっしりとしていて、身長は俺と同じくらいだ。

馬車を貰ったはいいものの誰も操縦できないことに気づいて途方にくれているところに、

「あ、ワイ操縦できるで。その代わり仲間に入れてくれへん？」

と、なにか軽いノリでついてきたのだ。なぜ仲間になりたいんだ？

と聞くと、

「面白そうやから」

だそうだ。

「というか、よく初対面の人間を連れてきたな」

と、ユキネ。ま、それはそうなんだが、馬車を使える人間もいないし歩いていく訳にもいかないだろ？

「初対面やないで？」

え?と3人の顔がジェミニに向く。

「宴会の時必死に、存在をアピールしてたんやけどって言うかフェンちゃん?　なんでキミまで覚えてへんの?」

「ん?　フェン知り合いか?」

「……知らない人」

「嘘ォ!?　そんだけ考えても出てけぇへんかったの!?　そんなにワイ印象薄い?　ねぇ?」

いやむしろ濃い方だと思うが……。

「……あ。地下牢の。」

「そう、地下牢や!　地下牢のジェミニ!」

「地下牢…の…ジェミニ……」

「……ちょっと待って?　思い出してくれたことはええんやけど、地下牢と関連づけて覚えようとしないで?　なんかじめじめしたイメージつくやろ?」

「……覚えた。地下牢」

「そっちメインなんやねぇ……」

地下牢といえばジェミニ、みたいなことで解決したらしい。よかったね。

「ところで、今どこに向かってるんだ？」
「ワイの、ワイの長年培ってきたイメージがっ」

ジェミニは遠い目をして別の世界に行ってしまったので、ユキネに話を振る。

「モガルに貰った地図によると、・・・えーとドンバ村ってところだな」
「ドンバ村？どんなところなんだ？」
「私もよく知らない」
「ドンバ村かー。行くのは久しぶりやなー」

二人してドンバ村なる物を想像して首を捻っていると、こっちの世界に帰ってきたジェミニが会話に加わった。

「行ったことがあるのか？」
「ああ。なかなか賑やかな村やで？　いや村ってレベルじゃあれへんかったな、あそこは。広さで言えばさっきの町の半分ぐらいはあるし、ギルドがあるで」
「ギルド？」
「冒険者ギルドはたいていどこにでもあるけどな。あそこは商人ギルドもあるから、人が集まるんや。ハルユキ達は金が無いんやろ？じゃあまずはギルドに行かないとなぁ。」
「ふーん。それは楽しみだね、っと」

そこで会話を打ち切り、ごろんとその場に大の字に転がる。すると、何の混じりもない群青色が目の前に広がった。あの部屋の天井とは違い、大きく広く、優しい。

風の匂い。温かい日光。世界に溶けたかのような偉大な開放感が気持ちいい。……そして、何より眠い。

それを雰囲気で察したのかジェミニが言った。

「3人とも寝てていいで。何かあったら起こすわ」

言われずとも、もう起きていられる自信がない。すると、こてんとユキネが俺の腕を枕にして横に寝っ転がった。

ちょっとそれじゃ眠れないだろと言おうとすると今度は逆側の腕にフェンの頭が乗った。

「……えーと」

「羨ましい事してるなぁ。はっはっは、……勢いあまって死んでまえ」

「代わるか？」

「……ええの？」

「やっぱだめだ。お前が死ね変態」

危ない。二人の貞操の危機だったようだ。まあ返り討ちに遭うのが落ちだとは思うが。

「変態やないでー。紳士っぷりで有名なジェミ兄さんやでー？」

はいはい、おやすみなさい。

◆

本物のハーレムを目にして都市伝説やなかったのか、とジェミニは嘆息した。

当たり前のように鈍感だ。普通は気付きそうなものだが普通に当てはめることのほうが不自然ではある。……しかしこうやって見るだけなら至って普通の青年だ。

しかしアレは。あの灰色の体は。中に詰まった狂気は。……洒落にも使えない。

真上からの攻撃だったからあの程度の被害で収まったものの、もしそのまま横から殴りつけるようにあの兇器を振るってたら、おそらく町の半分ほどは消し飛んでいただろう

……今思い出しても鳥肌が立つ。ただ恐怖が半分、好奇心が半分で。

口元が上がるのを感じながら前に向き直ると、道の先が夜の帳で

見えなくなってきているのに気付いた。この辺りで今日は野宿かと馬車を止めようと腕に力を入れる。

「止めろ……」

ぞわっと背中に鳥肌が立った。気配すら感じなかったというのに、声は耳の直ぐ近く。心臓にも喉元にも手がかけられる決死の領域。

「……って、なんやハルユキか。あんまり驚かさんといてぇな」

冗談混じりに言葉を濁しながら、後ろの化物に声を掛ける。しかしジェミニには目もくれずにハルユキは夜の帳に目を凝らしている。

「あの坂を越えたところに山賊……か？　とにかく１０人くらいが殺気むき出しで隠れてる」

暗がりのせいで坂さえもまだ見えていない。しかし直後に道がせり上がり始めているのが見て取れた。つぶさに教えられる異常さに身が震える。

もちろん、好奇心半分で。

「どうする？　引き返すん？」

とは言ったものの、自分でも多分一分かからず全員倒せるとは思うが、とジェミニは笑みを保ったまま想像を巡らせる。

「……いや、いい。やっぱりこのまま進んでくれ。俺が適当に片付けるから。」

しかし、この男がやってくれるのなら憂いは無い。

りょーかいや、とにこやかに言って馬車を止めた。

◆
◆
◆

ハルユキのデコピンを食らってまた一人山賊が吹っ飛んでいく。

ハルユキは文字通り指一本で山賊達を倒してのけていた。

わざわざデコピンで倒しているのも、また自分の力が上がっていっているのに気づいたからだ。

（まぁ、手加減すれば大丈夫だとは思うが……）

デコピンで倒せるのなら構わないだろう、ということだ。

「それにしても変な奴らやなぁ。」

山賊達の格好は所謂、世紀末的な格好で地面にのびている。

「まあ、こういう体張ったボケができる人材は貴重だろ？」

馬鹿にされたと思って突っ込んできた最後の山賊をまたしてもデコピンで迎撃してあっけなく戦闘は終わった。

「よし、それじゃもうちょっと進んでから野宿するか。」

ここまで実力差があると分かっていれば、もう襲ってくることはないだろうと思ったハルユキは少し離れたところにとめてある眠ったままの二人がいる馬車に向かおうとした。

「ちょい待ち、ハルユキ。」

山賊達の近くにあった馬車を物色していたジェミニが馬車の中を指さして、ハルユキを引き留めた。何事かと小走りでジェミニに近寄り、ハルユキは馬車の中をのぞき込んだ。

「……なんだこれ」

馬車の中にはいくつかの木箱と、袋、そして真ん中に大きな革袋があったのだが、その袋がなんというか、じたばたしていた。

「中に誰か入っとるみたいやなあ。開けてみる？」

「そうだな。危険じゃなさそうだし。」

そう言って袋に手を伸ばそうとすると、何かを思いついたジェミニがハルユキの手を掴んで、袋から手を遠ざけた。

「……なんだよ」

「……これ、中には美少女が入ってる気がするわ。よってワイが助ける！　お前にフラグはわたさへんで！！」

「なんじゃそら。……まあいいや。んじゃ任せた」

「任されたー！！！」

ヒャッホーと袋を開けにかかるジェミニを置いて馬車へと戻る。

あと馬車まで１０メートル程の地点で、後ろからジェミニの悲鳴と、どう考えても５０歳ぐらいのおっさんの歓喜の声が聞こえてきた。

四人旅（後書き）

感想・アドバイスお待ちしてます。

「がっはっはっは！！　いやホント助かったぞ。あのまま、連れて行かれるかと思ったよ！」

先程のところから一キロから進んだところで馬車を止めて、野営の準備をしたところで、火を囲みながら、助けたおっちゃんの話を聞いていた。

「よく殺されなかったなぁ、おっちゃん。何であんな袋の中に入れられてたんだ？」

「ああ、その場で殺されるかと思ったんだがな、俺がまだ金を隠してることを仄めかしたらな、確認してから殺そうってことになったらしくて、

運ばれる途中に兄ちゃん達が来たって訳だ。」

ちなみに、おっちゃんは行商の帰りを狙われていただけで、荷物は持っておらず、あの馬車もおっちゃんの物ではないそうだ。

「おまけに、ドンバまで連れてってもらう事になっちまったしなあ、ホントに頭あがんねえわ、えーと、名前なんだったっけ？」

「俺はハルユキ。」

「ワイはジェミニ、いいます・・・・・・。」

「ユキネだ。」

「・・・・・・フェン。」

「俺はダイノジだ。ドンバ村で何か困ったことがあったら、言ってくれよ？　できる限りは力になるからよ。」

「・・・・・・それは助かりますなぁ・・・。ははは・・・はぁ。」

元気のない声の元に目を向けると、肩を落として、落ち込むジェミニがいた。

「お前は何でそんなに、テンション下がってるんだよ。ジェミニ。」

「うるっさい！　お前にこんなおっさんとフラグ立てた上に抱きつかれて頬ずりされたワイの気持ちが分かるか！？」

「分かるか！！」

そんなやりとりを聞いたおっちゃんが豪快に笑いながら、ジェミニをフォローするように言った。

「がっはっは！　なら俺の娘を紹介してやるよ。なかなかの美形だぞ？　俺に似てな。」

「おっちゃんに似た女の子なんていらへんわい！！　いいんや！わいにはフェンちゃんとユキネちゃんがいるもんな、なあ？」

「あ、ハル。そこの水を取ってくれないか？」

「・・・・・・・・氷塊。」

ユキネには無視され、フェンには氷の塊をぶつけられたジェミニは吹っ飛んでいって動かなくなりました。

「へぇ、氷の魔法って事は、嬢ちゃん異文字（イビルスタンプ）か。」

「イビルスタンプ？　なんだそれ？」

「ああ、ハルはずっとあそこにいたんだったな。小さい頃からいたんだったら知らないのも無理ないか。」

いや、そういうことでもないんだが、……ま、いいか。それよりユキネの様子がおかしい。

何で。

何でそんなに無理に笑ってる。

「……あそこ？」

「ああ、まあいつの間にか出られたんだけどな。まあ、俺の話はいいよ。魔法について教えてくれよ。」

聞きたそうにしているフェンを流して、おっちゃんに話を振る。

「俺もよくは知らんのだがな、そうだな、ほら、まずはこれを見てみろ。」

おっさんは手の甲を俺に向けると、何か力み始めた。

「これが、どうし・・・・・いや、なんだこれ。」

おっちゃんの手の甲に「火」という漢字、いや違う。「ＦＩＲＥ」

とも読めるし「ｆｕｏｃｏ」とも「ｆｅｕ」とも読める。

・・・・・これは、イメージか。

見た者が「火」をイメージするようになっているのだろう。

「これが、普通の文字だな。だいたいの人は火、水、土、風の文字が刻まれててな。魔力を使おうとすると文字が体のどこかに顕れる。

ちなみに、ノーマルの奴は刻まれたスタンプの属性の魔法しか使えん。誰でも何かしらの文字は必ず入っている。ま、威力なんかは魔力次第だから俺はこの程度しか使えない。

使える奴はだいたい傭兵になったりギルドに入ったり、城に仕えたりするのが普通だな。」

そう言いながら、指先に小さな火をともす。

「んで、時々この四つ以外の文字を持った奴が生まれる。見たところ嬢ちゃんの文字は「氷」じゃねぇか？」

「違う。・・・・・私は、これ。」

服の袖をまくって二の腕を露出させる。その腕には既に「混」の文

字。おっちゃんと違って文字を出すのに時間がかかっていない。
これが魔力の差という事だろう。

「水と風で氷、土と水で木、火と土で溶岩、と、いう感じに、やる。三つ以上組み合わせることは、いつかはできると、思う」

しゃべり終わったあとにふうと息をつく。長い台詞は慣れないらしい。

「それは、お前・・・全部の属性を使える上にさらに応用もできるって事か？」

「そういう、こと。」

「マジか・・・・・・。」

「まぢ。」

マジの使い方は覚えたらしい。ちょっとたどたどしいが。
こいつ意外に結構すごい奴だったんだな。話だけ聞くと、魔法使いではほとんど勝てないことにならないか？・・・いや、やっぱり能

力次第か。

だいたい戦闘において”絶対”なんてのはあり得ない。

「は～～～、スゲェなぁ。あ、じゃあジェミニ・・・・・・は意識がないから、ユキネ。」

名前を呼ばれた瞬間、びくっとユキネが体を竦ませた。

「お前はどんな魔法を?」

俺と目を合わせないようにしながら目を泳がせて、火に目線が行き着くと、そのままじっと火を見たまま口を開いた。

「・・・・・私はな、魔法が・・・・・・使えないんだ。」

「使えないって・・・・・・。」

必ず文字は入ってるんだろ? 魔力が足りないって事か?

「あー・・・・・・まずいこと聞いちまったか? ひょっとして。ごめんな。」

「・・・・・・ユキネ。」

フェンが心配そうにユキネに声をかける。

「あ、いや、大丈夫だ。私は、ほら、剣が得意だしな。剣を使えれば戦えるし、そうそう負けない自信はあるぞ？」

そう言って、俺たちに笑ってみせる。無理してるのがバレバレだ。表情隠すのが下手くそだな。・・・・・相変わらず。

「よし、今日はもう寝るぞ。明日、早くにでれば昼には村に着くはずだ。女連中は馬車の中で寝な。男はその周りだ。見張りは・・・・・。」

「あ、俺がやるよ。昼間寝てたからな。」

空気を上手く読んでお開きの合図を出したおっちゃんにのっかることにした。

ユキネとフェンは馬車に向かい、俺は焚き火に薪を足す。

別れ際にちらっと見えたユキネの顔は、やはりどこか曇っていた。

魔法の文字（後書き）

ちょっと短いですかね。

横になって目を瞑っても眠れはしなかった。

馬車の中で寝ている分、外のジェミニたちよりは眠りやすい状況なのに、眠気がやってこない。

原因は、分かっている。

今、私が幸せだからだ。それが・・・・・・、それがこんなにもつらいなんて思わなかった。

しかし、心が締め付けられてそれがまた孤独を嫌い、際限なく幸せを求めてくる。それのせいで苦しんでいるというのに。それを、毛布に包まりながら、必死に抑える。

（強くなるって・・・・・・決め、たんだ。）

寝返りを打って、空を見上げると、星空が広がっていた。体を起こし周りを見ると、地平線まで光の粒が広がっている。

そこで同じように星空を見上げるハルを見つけた。

気絶したジェミニを運び、おっちゃんも寝て、一人になった俺は夜

空を見上げる。

ここの周りには、目の前の火以外に明かりはなく、目の前には星が本当に隙間がないくらいにちりばめられている。

俺が生きていた時代の、ビル群の間から見える星も悪くはなかったが、これとはやはり比較にならない。

思わず、ため息が出た。

一人になったことで、少しだけ孤独を思い出したが、際限なく続く大地と広がる星空を見ているとそんな気持ちは吹っ飛んだ。

すると、今度はユキネの落ち込んだ顔が浮かんできた。

「ふぅ・・・・・。」

またもため息が出てしまう。先ほどよりも息は重い。

「どうしたんだ？　ため息なんかついて。」

ユキネがいつのまにか俺の後ろまで来ていた。どうやら、めちゃくちゃに気が抜けているらしい。

「・・・・・・俺の知り合いに、無理して笑う馬鹿野郎がいてな。全く困ったもんだな、ってな。」

「ッ・・・・・・。　敵わないな。そんなに分かりやすいか？　私は。」

「誰でも分かるさ。俺はお前が話したくないなら話すまで待つ。・・・なんて事は言わねぇぞ。お前がそんな顔してると悲しむ奴だっているんだよ。

・・・・・・フェンとかな。だから何かあるなら今すぐ話せ。」

「・・・・・・ふふっ、ハルも心配してくれるんだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・暇だったらな。」

まったく生意気に育ちやがって。

「正直、こんな空を見ていたら、どうでも良くなってきたんだがな。

・・・・・・よければ聞いてくれるか？」

「・・・・・・おう。」

その時間は、まるであの時に戻ったかのようで、悪い気分はしなかった。

はじめに言っておくと、私の両親は実に立派な人だった。

父は王としてかなりの有力者で、周りの国々の王に慕われ、民からの信頼も厚かった。その上、魔法剣士で負け知らずと言うほどの腕前だった。

母はそんな父を負かした唯一の人だったらしい。母は大陸でも有数の魔術師で、世界で五本の指にも入るほどの実力を持っていたらしい。

父上が魔法兵長だった母上に、結婚を懸けて決闘を申し込み、逆にぎったんぎったんにされたらしい。

これを、執事に聞いたときは笑い転げたものだ。

結局、父上はそれから一度も勝てなかったらしいが、母上は父上がだんだん気になり始めていて結婚まで至ったそうだ。

二人は幸せだった。そう、私が生まれるまでは・・・・・。

私を身籠もったとき、二人はそれはそれは喜んでいたらしい。王家を継ぐのには男が必要なはずだが、男と女どちらが生まれてもいいように、名前を考え、生まれたらあれをしよう、これをやろう、誕生日には何を贈ろうと毎日のように話していたらしい。

そうして、皆からの期待と祝福を受けて生まれた私は、とんだ出来損ないだった。

生まれたと同時に母は死んでしまい、魔力は微弱、文字はどこにも見あたらず魔法を使うのは不可能だと見切りをつけられた。

それでも、父は代わりに剣を教えてくれ、魔法も教えようとしてくれたが、結局魔法は使えるようにはならなかった。

母の死と私の面倒で体をこわした父は病にかかり死んだ。

そして、私は飾り物の王にされ、ついには王権を剥奪され、私に親切にしてくれた人たちも全員死んでしまった。

「つまりは、私の無能さが、みんなを殺してしまったのかと、そう思う、いやそうとしか思えないんだ。それなのに私だけが、こんな・・・・・・」

話を聞いていて思った。ユキネは、自分だけ助かった事を罪に感じている。どうでもいいなんてのもまた強がりだろう。
……見上げた馬鹿野郎だ。

「それで・・・・・終わりか。」

「ああ、つまらないだろ？　こんな話。」

「ああ、つまんないな。それにしょうもない。」

「・・・・・・・・・ッ！」

めずらしくユキネが本気で俺に怒っているのが伝わってくる。

――説経をしたい訳ではない。臭い台詞も恥ずかしい。しかしそんな言葉で目の前の馬鹿の馬鹿みたいな理由の馬鹿みたいな気持ちが少しでも軽くなるのなら、慣れない大人でも演じてみせる。

「考えてもみろ。皆な、命を懸けて生きてんだ。お前の母ちゃんは命を懸けてでもお前を生もうとしたし、父ちゃんは死んでもお前と国を守ろうとしたし、お前の周りの人たちもお前を幸せにしようとしてくれたわけだ。フェンだってな、オオカミやドラゴンに襲われながらもお前助けたいって命張ってたんだ。
……結果として死んでしまったとして、お前は文句を言うか？
フェン。」

「……自分で決めた事」

馬車の影からフェンの声が聞こえてきた。ユキネを心配しているのは俺だけじゃないってことだ。

「フェン！？」

「みんな自分の魂に命懸けて、死んだんだ。お前なんかのせいなんかにしていい訳無いだろ」

「・・・・・・・・・」

ユキネはうつむいて震えている。泣いているわけではない。ただ、まだ許せないのだ。多分、自分を。その怒りを俺にも向けて激昂する。

「でも！　でも私がもっと上手かったら！　魔法を使えだら！　リユートンなんがに王権を奪われながったら！　誰も死ななぐてよかっだ！」

いや、泣いていた。上げた顔に、ぼろぼろと乾涸らびそうな量の涙を零しながら怒っている。

「そうだな。俺やフェンとも出会わなかったな。」

卑怯な手だ。・・・・・知ってるか？　ホントは俺も一緒に泣いてやりたいんだぜ？

「ぞれはッ・・・・・・！」

「まあ、それはいま関係ないな。それが無くても出会ってたかもしれないし。

ただ、思い出してみろ。そいつらの、お前のために死んだ人たちは、最期どんな顔をしていた。悲しんでたか？　怒ってたか？　それともお前を憎んでいたか？」

少しだけ沈黙がやってきて、

「……みんな、笑って、た」

そう、答えが返ってくる。

「当たり前だ。みんなお前が好きだったんだから。お前が背負っているのは罪じゃない、命でもない。ただ『想い』だ。お前は皆の想

いで今、ここにいるんだろ」

本当にただ当たり前でしかない。俺でも、二週間ほどしか一緒にいなかった俺でも命を賭したかった。なら、その大人達はどれ程の想いで命を投げ出したのか。

「・・・ぐ・・・・・・・ひぐっ・・・・・！」

「その想いは馬鹿みたいに重いけどな、それを幸せって言うんだよ。それをお前は一生かけて、返していくんだ。自分に。それに世界中に。

それはとても辛いし、大変だし、時間もかかるだろうが、そんなときはその人達がちゃんと残してくれた友達（おれたち）に頼ればいいんだよ。……無理なんかしないでな。」

ぼろぼろと泣いているユキネを抱き寄せて無理矢理頭をなでる。

「……あああああぁあぁ！」

「また泣いてんのか。」

「泣いで、ない！！」

「今日は良い。別に泣いても。……明日があるだろ。ちゃんと、お前には」

「うん……うん……！」

これは俺のわがままだ。俺は自分が何もできないせいでこいつが落ち込んだままなのが嫌だから。無理矢理話させて、無理矢理助ける。

俺は白（正義）でも、黒（悪）でもないから。自分のためにしか動かない灰色（わがまま）だから。だから俺は、こういう奴らのためにわがままになりたいと、そう思う。

「世界はこんなに優しいじゃないか」

遠い夜空では、瞬く星達がいつまでも見守ってくれている。

星は彼方に（後書き）

ユキネの話はこれで終わりです。
ちょっとくどいですかね？
感想お待ちしてます

破滅

――――――――とある町。

その町の中で一番大きな酒場では、ほっそりと光がついて、ささやかな酒盛りが行われていた。

「……やっと、だな。」

十数人いたその酒場の中で一番大柄な男が、店で一番高い酒を口に運びながら、嬉しそうに口を開いた。

その言葉に、少しだけ酒場の雰囲気が浮つく。

「ええ。やっと……、やっとよ。長かった。後はあいつを殺すだけ……。」

「おいおい。それが一番難しいんじゃなかったのか？……相手は、あの”怒涛”なんだろ？」

真ん中で周りに肩をたたかれたり、酒を飲まされたりしていた少年があきれたように口を開いた。

「あなたがいなかったらね。あなたがいれば……きっと。」

先ほど物騒なことを言っていた少女が熱っぽい声でささやいた。

「おいおい。そりゃ告白か？　まずいな、今日は眠れないんじゃないか？　ミスト。」

先ほどの大男が、笑いながら少年に冷やかしを入れる。

「ちょッ…！　そういう意味で言ったんじゃ……。」

「ん？　どういうことだ？　それ。」

一瞬、部屋の時間が止まり、一人を除いた全員がため息をついた。

「お前……鈍すぎ……。普通わかんだろ。リーヤはお前のことが……。」

「わーーー！！わーーー！！」

微笑ましい光景に皆が笑い。思う。こいつらとならやれないことはない、と。

しかし、――――――破滅はやってくる。

いきなり何の前触れもなく、扉が吹き飛ばされ、人が飛び込んできた。

赤い髪に、銀色の篭手、この町の周辺にいる人間なら誰もがその人物の名を知っている。知らないとしても、それはこの男がまだ潜伏段階にあるからだ。

この男が大々的に動き出せば、世界も動く。

「・・・・・・・・・”怒涛”！」

それを確認すると、酒場の全員が一瞬で剣を抜き、杖を構える。

怒涛は、飛び込んできた勢いのまま天井近くまで浮かび上がると、重力に逆らわずに、着地・・・・・・・するかと思われた。

どん……。と鈍い音がして、男の体は床に”墜落”すると、少年の足元まで転がってきた。皆、いっせいに後進し、その男から離れる。

しかし怒涛は、動かない。それもそのはず。

怒涛は・・・・・・息絶えていた。

胸に穴が開いていて、そこにあるべきの心臓が存在しない。死んで

時間が経ったのか血もあまり流れていない。

目の前で死に顔をさらしている男があの狡猾で強大な力を持った男だとは誰も信じられない。いや誰も信じていなかった。

これも何かの策なのだろうと。そのほうがよっぽど納得できる

しかし何もしないわけには行かず、少年の仲間の一人が死体を調べるが、何も変わった点はない。少年たちの最大の敵が変死を遂げていること以外は。

誰も現状を認識できていなかった。なぜこの男が死んでいる？

最大の敵の撃破には喜びがついてくるはずだった。

しかし誰も武器を下げず、たぶんにもれず全員が顔を強張らせて扉がなくなった入り口を見つめている。

だんだんと空気が自然と張り詰めていく。部屋の気温が１０度は下がったのではないかというほどの不吉が皆の体を包み込んでいく。

誰かの歯が激しく音を立て始め、足が震え始める。自然と皆が一まとまりになるように密着していく。更にきつく入り口を睨み付ける。

そこに破滅が、立っていた。

破滅が一歩踏み出す。

堰を切ったかのように数人の仲間たちが、焦ったかのように飛び出し、武器を振るう。

消し飛んだ。信を置いていた仲間たちが。首が飛び、腕がもげ、足がちぎれて、臓物が舞う。

その余波が酒場の壁を傷つけ、ほかの仲間たちをも傷つける。

「あッ・・・！！」

先ほどの少女が腕を傷つけたのか、声を上げて杖を落とす。

「リーヤ！」

目の前の状況が飲み込めないせいで、正気をかろうじて保っていた少年が怪我を負った少女に駆け寄った。

「だ、だいじょ・・・・・・」

無事を教えようと、端正な顔で作られた笑顔が、・・・・・・・・・・・・横から伸びてきた手に頭ごと握りつぶされた。

少女の脳髄が少年に降りかかった。

また、現実に取り残される。

気づけば、少年以外に息をしているものはいない。目の前の血に染まった破滅を除いて。

「あ、あああああああああああ！！！！！！！！！」

少年は、皆に知り合うことができたきっかけとなった歴然の強さを持つその剣を振り上げる。

しかし、それが何かを斬ることはなく、倒すべき敵だった男と同じように心臓を引きずり出されて絶命した。

血溜まりの中でそれはただ自分に嗤う。

「・・・・・・・・・きろ、起きろ。ハル！」

「んあ？」

目を開けると、ユキネが俺の顔をのぞき込んでいた。・・・・・・昨日である程度は吹っ切れたようだ。その顔に無理している痕跡は見あたらない。

「な、なんだ？　そ、そんなに見るんじゃない・・・・・・。」

ふい、と顔を背けて、ユキネは馬車を降りていってしまった。

ん？　降りたって事は・・・・・・。

「着いたのか・・・・・・！」

一瞬で目が覚めた。あちらの町ではゆっくりとはできなかったので、実は心待ちにしていたのだ。

馬車の上に立ち上がり、振り返ると、村の全容が目に入った。

「うおぉ・・・・・・。」

まず目に入ったのは、山、だ。雲のすぐ下に山の頂上が来るほどの高さの山が目の前に鎮座している。

ここら一帯は畑になっているのだが、それを遮断するように巨大な山脈が並び立ち、その中でも一際大きい目の前の山の麓に家や宿屋や、お店が並んでいる。

その山の頂上にはまだ雪が被っていて、神秘的な雰囲気がにじみ出ていた。山の隙間を縫うように巨大な川も通っている。

今馬車がいるのは村の入り口。

昨日、山賊に襲われたことを、ダイノジがおそらく自衛団か何かだろうが、なにやら兵士っぽいやつと話しているようだ。

「悪い。このところ山賊が増えているらしくてな。ちょっと詳しいことを聞きたいらしい。悪いがもう行く。まあ、困ったことがあったら言ってくれ。

一度言ったが、力になるからよ。んじゃな。」

そう言ってダイノジは去っていった。

さてどうするか。

「ま、とりあえずはギルドだったな。」

「何しろ文無しやからなぁ。俺ら全員。」

とりあえず、金がないと動くに動けない。飯も食えない。

「すぐに仕事ができるのか？」

「多分なー。そんなに忙しくもないやろうし、簡単な依頼は多分あまってるぐらいやろうし。」

「そこへ行くための道はわかっているのか？　ハル。」

あー、と場所は……。

「ジェミニは、前に来たことがある、って言ってた。」

「わかるでー。えーと、こっちやな。」

ジェミニ続いて、村の中に足を踏み入れた。

破滅（後書き）

グロすぎた……。

大通りには、出店や屋台がところ狭しに並んでいて、市のようになっていた。

その中をいろいろ冷やかしながら、歩いていると、どうしても周りに興味がわいたので、いったん別れてそれぞれ面白そうな店を少しだけ見て回ることにした。

「うおっ！！　動いた！　んじゃこりゃ？　え？　食べ物？」

「ああ、シラグラの腹身だよ。動いてんのは中の肉汁がはじけてんだ。皮が厚いから肉汁が外まで出てこないんだよ。皮を剥いて肉汁がたれる前に食うのがうまいんだ。食べてみるかい？」

うおお……何だこれ超食べたい。

「さっきの3人はお仲間だろ？　3本買うなら1本まけとくよ？」

しかし、しかしまたしても……！

「金が、ねぇ……」

「帰りな」

とぼとぼと店先から離れ、ほかに何か面白そうなもんがないか探していると、フェンが店の前で何かを手に持って覗き込んでいる姿を見つけた。

ここは……銀細工店？

「お前……こういうの、好きなのか？」

「ハルユキ。……どうしたの？」

「いや、お前を見かけたからなにやってんのかなー、と。アクセサリーか。金がねえもんなあ、今。」

「お金……？　ある、よ…。」

「……え？」

じゃらっと、音がして、フェンが見覚えがある布袋を二つ取り出した。

「こっち、が、ハルユキの。」

そう、モガルからもらったお金だ。俺は貨幣の価値がわからなかったから、フェンに預けていたのだった。

あれだ。タンスの裏から、なくしたと思ってたお年玉が出てきた気持ちだ。今、まさに。

はやる気持ちを抑えながら、フェンに聞く。

「その金で、あの肉どれくらい買える？」

「……割と。」

「よし、じゃあ……。」

さっそく肉を購入しようと視線を上げたところで、ふと、ユキネの目の前の綺麗に並べられた指輪のコーナーの中に無造作に置かれた小さな髪飾りが目に入った。指輪のコーナーの上にはいろいろな髪飾りが飾ってある。

「……その、髪飾り買うと肉は買えるか？」

「……少し、なら。」

「よし、んじゃこれは秘密な。二人にも言うなよ？　俺らだけの秘密だ。」

「……うん。」

こころなしか嬉しそうに頷いたのを見て、髪飾りを購入した。

その後、なんとちょうど二本分の先ほどの肉が買えたので、フェンと一本ずつ食べる。

フェンは髪飾りはつけずにじーっと見つめあいながら、小さめにしてもらった肉を少しずつほおばっていた。

「着けないのか？　それ。」
「……着けたら、見えない。」
なんじゃそら。
フェンは肉を食べ終えると、トコトコと歩き出した。
「行こう、ハルユキ。」
混んできたからと、手を引っ張られて歩く。
後ろから見たフェンの足取りはなんとなく弾んでいるように見えた。

「とーちゃく、やー。」
あの後、２人と合流した後、俺たちはギルドに到着した。でかい看板がこれでもかと言うように堂々と大きい扉の前に掲げられ、扉のほうは来る者拒まず、去るもの追わずの精神を体現しているかのように開け放してある。

そこからは絶えず人が出入りしている。ローブを着た者、鉄の胸当てを当てて剣を腰に差している者、果ては二メートルを超える大男が全身に鎧を着て歩いている姿も見受けられた。

「まずは登録やな。あのカウンターに……。」

ぽかんと口を開けて周りを見渡している俺に、ジェミニが何か言ったと思ったら、すぐに言葉を詰まらせた。

……何かあったかと顔を向けてみると、何か信じられないものをみたかのように唇を震わせている。

「ジェミニッ。どうした。」

肩をつかんでこちらを向かせようとするが、顔は先ほどの表情でまだその先を見つめている。しかし、俺のことには気づいたのかゆっくりと、口を開いた。

「すまん。ハルユキ……。ワイの、ワイのリビドーが止まらないんやッ！！」

目線の先を見ると、妙に露出の高い服を着た、巨乳の女。

……この変態、もうだめだな。

「行って、きますっ」

目にも留まらない速さで接近し、話し始めた。

「行ってらっしゃい……。」

もういいや。ほっとこ。

ギルド（前書き）

どんどん短くなってる・・・・・・。

「いらっしゃいませ。依頼ですか。それとも受託ですか？」

先ほどジェミニが言っていたカウンターまで行き、見事な営業スマイルを回りに振りまくお姉さんに話しかけると、そう言ってきた。

「……いや、俺と、あとこの二人を登録したいんだけど。」

「登録ですか？　ではお名前の提示と、一人ずつこの水晶玉を思い切り握り締めてください。」

そう言われて、一つ水晶玉をカウンターの下から出してきて一番近くにいたフェンに渡した。

渡されたフェンは俺を見上げてきた。

「……先に頼む。俺は最後で。」

こくんと頷くと、小さな両手で包み込むように握り締めた。

ぼうっと、水晶が淡い光を発した。最初はオレンジ、次に黄色、青、緑、紫、赤、と続いて光の色が変化していき最後に白い光に変わる

と変化が落ち着いた。

「……白！　すごい！　白まで行く人はめったにいませんよ？　すごいですねえ。しかも、その歳で。これは引っ張りだこになりますよー。」

「これは何を測ってるんだ？　魔力とかか？」

「はい。それもあるんですけど、ほら、って、おまけにイビルスタンプですか！」

フェンから受け取った水晶球には、「混」の文字。

なるほど。魔力とどんな文字を持っているかを見るってことか。

「この水晶が代わって言った順に魔力が高いってことです。オレンジが一番弱くて、白が一番上ですね。白以上の人はまだ確認されていません。

大体平均で青ぐらいですかね。」

・・・・・こいつはやっぱりすごいやつだったんだな。

一人感心していると、ユキネが一歩前に出た。

「よし。なら次は私だ。その水晶玉を貸してくれ。」

内心は嫌なのだろうが、自分からそう言ってユキネが水晶玉を受け取る。

力をこめて、握り締めるが、色の変化は薄いオレンジで止まる。

「あーっ、とオレンジですか。……これはこれでめずらしいですね。あ、す、すみません……！」

「いや、いいんだ。かまわない。」

そう言って、水晶玉を受付に返した。

「あれ？　故障ですかね。文字が・・・・・・。」

「あ、大丈夫だ。故障じゃないぞ。私は最初から文字がないんだ」

「も、文字がない？　そ、そんな人はじめてみました・・・・・・。あ！　す、すみません、また・・・・・・！」

いいんだいいんだと、ユキネが手を振りながら一歩下がる。

次は俺の番。受付さんは、良くも悪くも、珍しい結果が続いたことで、俺の結果に目を皿にして注目している。

（プレッシャー・・・・・）

前から強い視線を感じながら水晶玉を受け取る。

更に強くなった視線を無視しながら、覚悟を決めて握り締めた。目、瞑ってだけど。

数秒たった後、恐る恐る目を開ける。

水晶球には……変化なし。文字はおろか、色も透明のまま、まったく反応していない。

「これまた、珍しい・・・・・・。」

もう一度握り締める。が、やっぱり変化なし。・・・・・・よおし、いい度胸だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・フン！！」

バァンと音がして、手のひらの水晶球が粉々になった。

「どうやら、俺の絶大な魔力に耐え切れずに壊れ・・・・・・・・。」

「はい。予備です。これ壊したら弁償になります。」

「すんませんでした。」

結果は、言わずもがな。

「はい。これで登録完了ですね。フェン・ラーヴェル様はクラスCから開始できますが・・・・・・。」

「・・・・・・・・・いい。」

「かしこまりました。では、こちらを、契約の指輪ですね。それを見せれば、どこの町のギルドでも、受注ができますよ。

すみませんがユキネ様、ハルユキ様は魔力が規定値以下なのでGランクからになります。フェン様はFからですね。」

そう言ってフェンに白の、俺とユキネにはオレンジ色のそれぞれGとFの文字が入った指輪を渡された。

「それでは、説明に入りますね。えっとまずギルドの中の登録者、依頼、チームにはランクが存在します。

ランクは全て低い順にGからSSSまでありまして、登録者のランクに合わせて仕事を行います。登録者は自分のランク以下の依頼しか受けられません。」

「つまりCランクの奴はB以上の依頼は受けられないということか・・・・・。」

「そうですね。しかし、例外が存在します。それがチームです。チームにもランクがあって個人のときと同じようにチームランク以下の依頼は受けられません。

しかし、低いランクの人が高いランクのチームにいるならそのチームランクの依頼を受けることができます。」

「どういうことだ?」

「例えば、Fランクの人がいて、その人がBランクチームの人間として依頼を受ければB以下のランクまでの依頼なら受けることができるってことです。」

なるほど。よく分からんことは分かった。

「チームをお作りする事もできますが、どうしますか？」
「いきなり言われても、よく分からねないからなぁ」
「蛇足ですが、チームから発展して国を作ったチームもあります。それだけ効率的になりますので作っても損は無いかと思いますが」
「……どうする？」

俺の一存では決められず、後ろの二人にも意見を求める。

「・・・・・・・・・・任せる。」
「ハルの好きにしていいぞ。」
まったく、主体性のない奴らめ。
「んー、いや。よくわかんないから止めとくわ。」
「かしこまりました。説明は以上になります。何かご質問は？」
「大丈夫だ。細かいことはやっていけば分かるだろ。」
「ほかに何かご用件はありますか？」
「今から仕事できるか？」

「はいそちらのリクエストボードに張ってあるものはいつでも受注できますよ。あ、でも今はGランクの依頼はリクエストボードにはないようですね。

珍しいですね。いつもは余ってる位なのですが。すみませんまた後日、お越しください。」

つまり今日は働けないってことか。フェンだけならできるだろうが、それも申し訳ないかな。

「じゃ、今日は帰るか。」

「宿はどうするんだ?」

「おっちゃんに頼ろうぜ。一日だけなら構わないだろ。」

ジェミニはどこかと探すと、先ほどとは別の女と頬を緩ませて話し込んでいる。

首根っこを引っつかんで、引きずりながらギルドを後にした。

ギルド（後書き）

次回からもうちょっと長くしようと思います・・・。

巡り合わせ

「見つかんねえ・・・・・・。」

この村は思っていたよりもずっと広く、もう日は沈みかけているというのに、おっちゃんは見つからない。

何しろ、手がかりは名前だけだ。

もう何時間も歩きっぱなしだ。それも飲まず食わずで。俺はまだ我慢できるんだが、フェンやユキネたちにも疲れが見え始めている。

・・・・・・どうするか。

これから夜になれば、更に人通りは減り、おっちゃんを見つけるのは更に困難になるだろう。

「・・・・・・どうするかなあ。」

いったん、ベンチで休むことして、四人で並んで座りながら頭を抱える。

しばらくボーっとしていると、フェンがくいくいと俺の服の袖を引っ張っていることに気づいた。

「なんだ？　どうした、フェン。」

「・・・・・・・・・・・あれ。」

フェンの指が指した先には、

「ちょっと、やめ、やめてください！！」

「いいじゃねぇかよぉ。へるもんじゃねぇだろ？」

と、お約束な光景。

助ける→ありがとうございます→いえいえ、当然のことです→お礼をさせてください！→実は泊まるところがなくて、→ならうちに泊まっていってください。

「その手を離せ！！」

ハルユキのデコピンが火を噴いた。

「あ、ありがとうございます。」

少女は目の前のおそらく自分を助けてくれたであろうその人に丁寧にお礼を言った。

おそらくと言うのは少女はそのとき目を瞑ってしまっていて目の前の少年がどうやって助けてくれたのかも分かっていないからだ。

「ええ。実は泊まるところがなくて・・・。」

「・・・・・・はい？」

「一つ早いわ！！」

そこで、いきなり少女が現れて少年の頭をはたいた。金髪で暗がりの中でも端正に整った顔がよく映えている。

（きれいな、人・・・・・・）

「・・・・・・・・・・・・馬鹿。」

そこにもう一人今度は透き通るような青い髪の何だかまだ体に幼さが残るものの、落ち着いた雰囲気でこれまた美少女が近づいてきて少年にツッコんでいた。

「ああっ！！　今度は美少女やった！！　またおっさんかと思って躊躇せんやったら・・・・・・！　クッソォ！！！」

あっちで、膝を突いて地面を殴りつけている第一印象変態がいたが、少女は無意識的に、危機感的に記憶から消去した。

（へ、変な人達・・・・・・）

未だにギャーギャー騒いでいる目の前の人たちを見ているとどうも先程より、状況は悪くなっているように思える。

（お父さん、早く帰ってきて・・・・・・）

その願いが通じたのか、角から少女の父親が顔を出す。

「お、お父さん・・・・・・・！！」

「な、なんだどうした！？」

あれ、でもよく考えたらむしろお礼をするべきなんじゃないのか？

と少女は思い直した。しかし、

「もしフラグ立てとったら□□□や、〇〇〇もヤリたい放題やったのにぃ！！！」

「へへへ、変態が！！！」

変態の言葉がそんな思考を消し飛ばし、父に助けを求める。

「な、なんだと!?　コンの野郎!　人の娘に何を!!」

父親が娘の声にただならぬものを感じたのか、大声で怒鳴りながら、変態に飛び掛かる。

「ん?　あれおっちゃんじゃないか?」

「ああ、そうだな。」

(へ?　知り合い?)

「はっ!　ってまたお前か!　おっちゃ・・・んあああああ!!!」

ダイノジに二度目の抱擁(タックル)を食らいながら、またしてもジェミニの悲鳴が鳴り響いた。

「いやいや、つくづく縁があるなぁ、お前らには!」

今俺たちはおっちゃんの家で飯をご馳走になっている。しかも、何日でも泊まっていってくれということだ。

「本当にすいません。まさか父の命の恩人の方々だとは。」

「ええよ、ええよ。それにしても、イシルちゃんはホンマにおっちゃんの娘かいな？　とてもそうは思えへんのやけど。」

「？　何でですか？」

「だってこんなにかわええやないかーーーーー！！！！」

酒を飲みすぎたのか、いつもよりはやめの暴走を起こし、イシルに抱きつこうとしたジェミニに、

「・・・・・・・・・・・・氷塊。」

お約束。という神の鉄槌が下った。そして、意識と身体がさよならしたジェミニをおいて話は進む。

「つまり、せめて明日にならなきゃ仕事がねぇってことか。」

「そうなんだよ。ま、仕事が有り次第ここから出て行くからさ。それまではよろしく頼む。」

「なぁに言ってんだ。お前らにしてもらったことと比べりゃ、一年泊まってってもらったとしてもお釣りがくらぁな。

・・・・・そうだな。まだ、いまいち土地勘もないだろうから、明日イシルに付き添ってもらえ。いいだろイシル？」

「うん、もちろん。私も助けてもらったんだからそれぐらいしないとね。」

そう言って、俺たちに笑いかけてきた。どうやら警戒は完全に解いてくれたようだ。最初のあたりはびくびくしてたからな。

ジェミニ（へんたい）は別だろうが・・・・・。

「そういうことだ。すまんが、面倒を見させてくれ。こいつはこれでもギルドのトップチームのメンバーなんだぞ？

しっかし、魔法使いは魔装具がないと途端に無力だからな。いつでも持ち歩けっていってるんだが、なにせドジでな。さっきのようなことになっちまうんだ。」

へぇ、この子も魔法使いなのか。俺には魔力だのなんだのはよく分からないので小声でフェンに話を聞くことにする。

「なあ、この子の実力はどれくらいかかってのは分かるのか？」

「・・・・・・・・・ん。」

そう言って右手でイシルの手を指差す。そこには白い手と、その指には紫色の指輪が薄く光を放っている。

そうか。素人でも指輪で魔力の量は分かるんだったな。紫ってことは白の一つ下か。・・・・よく分からん。

「魔力が、使われていれば、大体分かる・・・・・・私は。」

「俺には分からん・・・・・・。お前とことん、規格外なんじゃないか？」

ぐりぐりと頭をなでながらほめてやる。無表情だが、跳ね除けないのでおそらく嫌じゃない・・・と、思おう。

・・・・・・足、パタパタさせてるし。

そこで、フェンの伸ばされた指にはっと気づいたように、イシルが驚きの声を上げた。

「え？え、え、あーーー！　プラチナリング！　すごい！　フェンさんだったんですね！！」

いすを弾き飛ばしてフェンの手を握り締め、目を輝かせ始めた。

「・・・・・・・・・・・・なにが？」

「今日、ギルド内ですっごく話題になってたんですよ！？　二十年ぶりにプラチナビギナーが出たって！　今日はみんなで探し回ってたんですよ？

それがこんな、かわいらしい女の子だったなんて・・・。　うわぁホントにプラチナリングだぁ・・・・・・！！」

そう言って、まじまじとフェンの手を覗き込んでいる。しかし、

「そんなにすごいのか、その白い指輪は・・・・・・。」

いきなりキャラが変わったかのように興奮しているイシルに弱冠、引きながら尋ねる。

「すごいに決まってるじゃないですか！　三十年に一人いるかいないかぐらいですよ！？　そうだ！　明日ギルドに来るんですよね？　そのときに紹介したい人がいるんですよ。構いませんか？！」

「・・・・・・・・いい、けど。」

その勢いに押されたのか、フェンは思わず頷いていた。

「それにしてもあれか？　だいぶ仲がいいようだが嬢ちゃん達二人ともハルユキの恋人なのか？」

「ぶッ！！！　ゲホッ、ゲホ・・・、ち！　違う！　私とハルはただの友達だ！　そそそんな恋人とかそういうのじゃ・・・・・・。」

最後のほうはユキネにしては語調が弱く顔を赤くしてうつむいてしまった。

「あんま、からからかわないでやってくれよ。そんなんじゃないからさ。」

「へぇ、じゃフェンちゃんが本命ってことか。・・・・・・犯罪じゃないか？」

ダイノジのその言葉にフェンが反応する。

「私もそんなのじゃない。ハルユキは私の命の恩人だから。私はただのハルユキの・・・・・・奴隷。」

・・・・・・は？

「な！　なら私もそうだ！　私もハルのドレーだ！　いいだろう！？　ハル！」

みんなの冷たい視線が突き刺さる。

「ちょっと待て、フェン！　ほら冗談だよな。・・・・・・いい子だから冗談だって言ってくれ。」

小声で隣に座るフェンにだけ聞こえるように頼み込む。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・冗談。」

少しだけ視線がやわらいだ。一安心だ。

「いい子にしたから・・・・・・ご褒美。ご主人様。」

・・・・・・・・・・・・はァ！！？

視線が再び復活。

「私も！　私もいい子にするからごほーび！」

そう言いながら、机の向こうからユキネが、隣からフェンが顔を近づけてきた。

っていうかさっきから顔が赤いと思ってたら・・・・・・・・・。

「おっちゃん、未成年に酒飲ますなよ！！！！」

「はっはっは！　ばれちまったかあ！」

「・・・・・・・・・・・・キス、しよ。」

ちょっと待てやああ！！！　俺の意思を尊重しようとする気がまったく感じられないぞ！？　その台詞！！

「なんや？　モテ男の匂いがするで？　ああそれは消し去らんとなぁ？　そうやろ？　ハルユキイイイイイイイイイイイイ！！！！」

今度はジェミニが奇声を上げて襲い掛かってきた。

「・・・・・・・・・・・・うるしゃい。」

お約束。の絶対的な力により、ジェミニは再び沈んだ。

夜は楽しく更けていく。

距離

翌日、朝から俺たちはギルドに来ていた。

ギルドに着き次第、イシルは俺たちを二階のチームルームという、上位のチームが使用することができる部屋に連れて行った。

部屋の前には「ＢＬＵＥ　ＴＡＩＬ」と青色の文字で書かれた地位だな掛札が掛かっている。

バン！とフェンを引っ張りながらイシルは部屋に飛び込んだ。

部屋の中にはすでに十人ほどの人数がたむろっていて、談笑していたが、勢い良く開かれたドアにきょとんとしてこちらを見ている。

それはかなり気まずい空気だったが、イシルはそんな空気も何のその、自信満々に言い放った。

「見つけましたぁ！！　この娘がプラチナリングです！！」

一瞬空気が止まって、ワッと歓声が上がった。

「すごい！すごい！　こんなちっちゃな子が！？　わ、ホントだぁ

！！」

「なに、本当にか・・・。すげぇな、おい。」

「やーー！　しかもこの子かわいいいいい！！！」

「おい、この子がいればいけるんじゃないか？」

フェンは、イシルと一緒に揉みくちゃにされて、質問攻めにあっている。

一人がこちらを向き、質問してきた。

「えっとこの二人は・・・・・・？」

二人？　・・・・・・・・・ってどこ行ったあの変態（ジェミニ）・・・！

「私たちはそのフェンの連れだ。」

俺がジェミニの事を目で探しているうちにユキネがぱっと答える。

しかし、俺たちが、オレンジの指輪をしているのを見つけると、苦笑いしてすぐに去って行った。

少し鼻に付いたが、まあ当然の反応だなと、俺はすぐに気持ちを切り替えた。

（んー、昨日は無かったわけだし、早く見といたほうがいいかな。）

未だフェンに群がっている光景を見ていると、これは長くなりそうだと察して、俺は先にユキネと依頼を確認しに行くことにした。

「んじゃ、フェン。後でな。」

「あっ・・・・・・・・・！」

フェンが俺に向かって小さく伸ばした手に俺は気づかなかった。

「おお、あったあった。」

リクエストボードとやらに行くと薄くGと書かれた紙の上に依頼が書いてあるのを3つほど見つけた。

「これを持っていけばいいんだよな、多分。」

どれも同じような依頼だったので、あまり見もせずに、依頼が書かれた紙をむしりとる。

「俺はこの依頼をやるが、ユキネとジェミニは・・・・・・っていうかあのアホはどこに行った?」

と後ろを向くが、そこにいるのは当然ユキネのみ。

「ジェミニなら・・・・・・」

ユキネが指差した先には、女の前で熱弁をふるうジェミニを発見した。

「ユキネはどうする？」

ジェミニを完全に無視し、ユキネに聞きなおす。

「んー。フェンが戻ってきてから決めようと思っているんだが・・・・・。」

そこに、タイミングよくユキネとイシルが降りてきていた。

「おおい、フェン。依頼のことなんだが・・・・・・・・・・。」

俺の言葉をさえぎるようにフェンではなく、イシルが口を開いた。

「ごめんなさい！　ユキネさん。ハルユキさん！　あの・・・・・・フェンさんを貸していただけないでしょうか！」

「・・・は？」

「フェンを？」

俺に続いてユキネも呆けながら声を出す。

「お願いします！　実は私たち、結構難易度が高めの依頼に挑もうって話になってて、そこにフェンさんがいれば助かるなって。皆にも大丈夫だっていっちゃって。」

まあ、別に・・・・・・、

「俺はフェンがいいなら構わないが・・・・・。」

「ホントに！？　ありがとうございます！　みんなに報告してきますね！」

飛び上がって喜んでからイシルは階段を上がっていった。

「ふーん。頑張ってこいよ。フェン。気をつけてな。」

「・・・・・・・・うん。」

どこか沈んだ声でフェンは頷いた。

「今日も元気だ。鍬が軽い！」

そう言って鍬を地面に叩きつける。

今ハルユキ達3人はあの一番高い山ではない山の一つの中腹にある畑で鍬を振るっている。山といっても丘ほどの大きさなのでさほど高さはない。

フェンと分かれてからは3日が経っていた。なんとも時間が掛かる依頼だそうで、3日前から山に篭っているらしい。

その間にハルユキたちは3つの依頼をこなしていた。

こなしたといっても、迷子のペット探しやら、おばあちゃんの世話やらだ。

もっと働き甲斐がある仕事がいいと主張するハルユキのために今日は身体を動かす仕事を選んだというわけだ。

「あーーーー！もう嫌だあ！！」

先程まで自分に暗示をかけながら鍬を振るっていたハルユキが鍬を投げ出した。

「だからやめようと言ったんだ。この依頼はもともと4人で行う依頼だったんだろう？」

「もうフェンが帰ってくると思ってたんだけどなー。ほらそうすり

ゃ魔法でちょちょいと。」

「そのときにいないフェンを頼るからだ。なんにしてもこれを終わらせるまでは次の依頼は受けられないんだから。」

そう。この依頼というより、Gランクの依頼にはそもそも失敗というものがない。途中で投げ出せばそれまでだが、Gランクは魔法がなくても根気があれば達成はできるので

失敗するというのはほとんどありえないそうだ。

しかし、この広さはさすがに骨が折れすぎる。どうしたもんかと周りを見ると、ハルユキの視界の中に意外とまじめに鍬を振るうジェミニを見つけた。

「そうだ!ジェミニ。お前の魔法でどうにかできないか?」

「あいにく、この状況の助けになるような魔法は使えんのや、ワイは。」

鍬を杖にして、トントンと腰をたたきながらそう言った。

「あ、そう。」

あーーー。もうヤダ。

もう一度ハルユキは畑を見渡した。もう昼を過ぎているが、まだ半分ほど耕していない土地が残っている。

そこでちょっと思い切った手段をとることにした。

「よし、もう一気にやる。ちょっと二人とも離れてろ。」

「お、おいハル。何をする気だ!?」

「いいからいいから。離れてろ。あ、ここから上にな、あとは俺がやるから。」

そう言って、ハルユキはまだ手が着けられていない畑の中心あたりに歩いていく。

なんとなく思いついた適当な手だが、今すぐに終わるならやってみる価値はあるだろう。

ユキネとジェミニも、やれやれといった感じで山を登り比較的安全なところまで行ったのを確認すると、ハルユキは、足を広げて構えを取る。

「あれ、何をするきなんやろ?」

「さあ・・・。」

（多分、ノリでいけるだろ・・・・・・）

そんな適当な考えで、

「せッ・・・・・・・・・・！！！」

思い切り拳を地面にたたきつけた。

重々しい音がして振動が畑全体に伝わり、周りの地面が盛り上がっていく。

「おお！　うまくいった！！」

ハルユキは喜びの声を上げるが、人生そんなに甘くない。ユキネたちのほうを振り向くと、あることに気がついた。

「なんで俺動いてんだ？」

山の真ん中でひどい衝撃を与えればどうなるか、しかもそもそもこの依頼があったのは前日に大雨が降って地面が柔らかくなっていたからだ。

当然、地滑りが起こった。

「あああああああああああああ！！！！！！」

ハルユキは畑と一緒に坂を滑っていってユキネ達からは見えなくなった。

「・・・・・・・まあ、死んではおらへんやろ。多分。」

「はあ・・・。まったく。」

「おい、あいつらだぜ。Gランクを失敗させた奴らってのは・・・・・。」

畑自体を破壊してしまったので当然依頼を続けることはできずに、依頼は失敗という形に終わってしまった。

Gランクの依頼を失敗したというのは思っていたよりも珍しいことらしく、有名になってしまったらしい。

「いやーみんなこっち見てるぜ？　名が売れるってのはつらいね、ホント。」

「悪い意味でだがな。はあ・・・ハルがあんな無茶をするからだろ

う。」

「気にすんな。いいことあるさ。」

「もうつっこむ気も起きないよ・・・・・・。」

受付のお姉さんにGランクを失敗だなんてとことん珍しいこと好きですねと長々と嫌味を言われてめんどくさかったが、畑の修復代はギルドに出してもらうことになっているらしいので、嫌味は甘んじて受けた。

さんざん嫌味を言われてきた帰りにユキネに声をかけたら、ユキネは意外にも怒っていなかった。

「怒ってないのか？」

「ハルは昔からそうだっただろう？　それにこういうのはなんだかんだで・・・・・・楽しいぞ。やっぱり。」

「左様で。」

ユキネもあまり怒っていないことも分かり、そのまま外で待っているはずのジェミニの所まで行こうとすると、入り口のところですれ違うように男が一人飛び込んできた。

「おい！！ＢＬＵＥ　ＴＡＩＬの奴らほんとに仕留めてきやがったぞ！！『マダラ』だ！！」

その言葉で一気にギルド内が騒然となる。そして我先に我先にと椅子から立ち上がり、やってくるはずの一団を少しでも早く見よう入り口に殺到した。

ハルユキたちは、その波に押されたことで意図せず大通りまで出てしまって、大通りの向こう側からやって来ているそれを偶然見ることになった。

ドラゴンだった。

緑色と黒色のドラゴンで大きさは１０メートルほどだろうか、体には2色の色が毒々しく入り混じっていて『マダラ』という名前が似合う外見をしている。

それが台車にくくりつけられて、馬に運ばれている。ピクリとも動かない所を見ると、どうやら死んでいるようだ。

ドラゴンを見るのはシャミラの森以来だったので、ハルユキ達も見物していると、台の端にちょこんと乗って、イシルと話している、というよりイシルが一方的に話し込んでいる光景を見つけた。

「おーい。フェン！」

ハルユキが大声で名前を呼ぶと、ぱっと顔を上げて近寄ってきた。

「よく倒したなー。こんなの。お前も手伝ったんだろ？」

ハルユキは一度戦ったから分かるがドラゴンというのはかなり強い。

ハルユキでも一筋縄では行かない相手だった。

「・・・・・うん。ハルユキ。・・・・・あのね。」

そこでハルユキはフェンの頭越しにこちらを見ているイシルとその周りの何人かの人がこちらを見ているのを見つけた。

「あ、ほら呼んでるぞ。いや、宿の場所を教えとこうかと思ったんだけどな、今から多分宴会とかやるんだろ？　まあゆっくり楽しんで来い。」

「ほら、フェンちゃん行こうよー。今日の主役なんだから！！」

「あっ・・・・・・・・・・！」

そう言ってハルユキ達には名前も分からない誰かに引きずられていく。

それを最後まで見送った後、ハルユキ達はその場を後にした。

その手は遠く

ドラゴンを討ち取ったことがＢＬＵＥ　ＴＡＩＬの名を上げて、同時にフェンの名前まで有名にすることになった。

先週にもドラゴンを一体倒してきて、その時の大通りには一度目のときに見れなかった人たちが集まって人の海のようになっていたらしい。

フェンは作戦の要となる役目を担っているらしく、まあ俗に言うエース、というやつなのだろう。

そうしてフェンは、ＢＬＵＥ　ＴＡＩＬの『パレット』という異名を持つまでになっていた。

何通りもの魔法の混ぜ合わせをつかって戦うゆえの異名だろう。

それに対してハルユキ達は、Ｇランクを失敗したということで逆に有名になっていて、フェンを仕事に誘いづらくもなっていた。

そのせいか、ハルユキ達とはまったく別の仕事をやるので、フェンとは2、3日会えないのは当たり前で、今はもう5日ほど会ってはいない。

考えてみれば一度もフェンと一緒に仕事をやっていないということ

になっていた。

「祭り？」

「ああ。なんかこの町ではドラゴンを倒した年は祭りをやるそうやで？　ほらあそこの広場にドラゴンの角が飾ってあるやろ？　あそこを中心にやるんやて。

結構大規模らしいで？　あそこの広場めっちゃ広いしな。」

「ふーん。」

「興味ないか？」

「そうでもないけどな。」

ハルユキはボーっと宿のベッドで天井を眺めたまま、適当にあしらうようにジェミニの相手をしていた。

実はもうかなりの金がたまっていて、それはほとんどがフェンが稼いだ金だったが、次の町に行くまでの資金ぐらいは十分にあった。

もういつでも出発していいんだが、

「どうせだから、祭りまで見ていこうか。」

ハルユキはなぜか今は何もしたくなく、無気力に動かないための口実を作るためにそう言った。

「よっしゃ、やっぱ祭りには参加せんとなあ。」

そう言いながら、ぐびぐびと酒を飲む。もう外はすっかり暗くなっていて、ユキネはもう寝ただろう。フェンは・・・・・分からない。

おそらくまだギルドにいる。

ジェミニはひっくり返っていびきをかき始めた。

俺はそれからなんとなく眠ることができずに部屋を出て、階段を下り宿の玄関の前に腰掛けた。

今日は曇ってはいないが、大きい月が出ていて、星の光は控えめだった。

どれくらいそうしていただろうか。ザッザッと土を掻くような足音が聞こえ始めて、暗闇の向こうからフェンの小さな姿が現れた。

「よう、おかえり。」

向こうはすでに気がついていたのか普通に挨拶を返してくる。

「ただいま。何・・・してるの？」

「なんとなく眠れなくてな。」

うそだ。多分、俺は待っていたんだ。フェンが帰ってくるのを。無意識的に。

「・・・・・・・・そう。」

フェンはいつものように無表情のまま答えると、俺の隣にちょこんと腰掛けた。

「・・・・・今日、イシルに呼び出された。」

腰掛けるとわりとすぐにフェンが話し始めた。

「へえ。なんだって？」

大体察しは付いていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・この村に残って、正式にＢＬＵＥ　ＴＡＩＬに入らないかって。」

「・・・へぇ。良かったじゃないか。」

そのせいか俺の返事には淀みも動揺もあらわれてはいない。

「・・・・・・・・・・良かっ・・・た？」

何で、そんな顔してんだよ。

「悪い話じゃないんだろ？」

肩なんて振るわせんなよ。

「でも、・・・・・・・・・・・・私、どうしたら、いいかな。」

いつもよりもう少しだけ、たどたどしくフェンが俺に聞いてきた。

どんな表情をしているかは分からない。

俺はユキネの顔を見ていなかった。いや見れていなかったから。

「そんなの自分で決めろよ。それは俺には関係ないだろ。」

正論だった。正論過ぎるほどに。

「ッ・・・・・・・・・そう、だね。ごめん。」

そう言ってフェンは急ぎ足で立ち去っていった。その時フェンの体温が残ったままの雫が俺の頬に当たっていた。

「何で、泣くんだよ・・・・・・・あいつ。」

一人ぼやく。

次の瞬間、衝撃と痛みが俺の頭を襲った。

「・・・・・・んだよ。ジェミニ。」

ジェミニが近づいてきているのは分かってはいたが、無視していたら拳骨をやられた。

「お前が、ドアホやからや。」

「・・・・・・・・・訳わかんねぇよ。」

「お前はホントに、子供か、大人かよう分からんなあ・・・・・・。」

ジェミニもため息をついて宿の中に戻っていく。

俺もなんとなくため息が出て、夜空に鎮座している月を眺める。

――――今夜はまだ眠れそうにない。

「フェンちゃん。この前の話のことなんだけど考えてくれた？」

フェンは今、ＢＬＵＥＴＡＩＬの団員たちと、食事をしていた。食事といっても、適当に下で頼んだものをチームの部屋まで運んで食べているというだけの”いつも”のことだ。

「・・・・・・・・・・・・・・。」

「うーん。ほら悩むのはよく分かるけどさ・・・・・・。

できればお祭りの日までには答えがほしいなーって思ってさ。」

「・・・・・・・・・・・・・・よく、分からない。」

小さい手で口にアルコールの入っていないただのジュースを飲みながら、フェンはつぶやいた。

「それならもう、うちに来ちゃいなよぉ。今から戻っても浮いちゃうだけかもしんないしさ。

・・・・・・・・・言っちゃ何だけどさ、フェンちゃんには合わないよ。あの人達。」

思いがけない言葉に思わず息が詰まる。

「・・・・・・・・・どういう、こと？」

むしろ、突然すぎて意味を履き違えているのかも知れないと、フェンは聞き返す。

「ほら、だってさ、あの人達Gランクの依頼を失敗したって噂になってたよ？

そんな落ちこぼれみたいな所にはフェンちゃんは勿体ないと思わない？」

ドン！！　とグラスの底を机にたたきつけた音が鳴り響いた。

その音は部屋中よ良く響いて、そのせいで、それまで和やかに賑やかだった空気がシン、と静まり返った。

「あ・・・・・・、ご、ごめ・・・。」

「・・・・・・・・・・・・今日は、帰る。」

そのまま、出て行こうとしたフェンの背中に、少女が声をかける。

「ふぇ、フェンちゃん。もう依頼は当分請けないつもりだけど、お祭りにはちゃんと来てねー！」

祭りではその年一頭目、と言っても一頭も取れない年が普通なのだが、とにかく一頭目を倒したチームが主役になって看板となるしきたりだ。

そこにフェンがいなければ盛り上がりに欠けてしまうことはフェンも理解していた。

しかしフェンとしてはもうこの村にいることだけで、苦痛になってしまっていた。

祭りに参加するかどうかを考えながら、ハルユキ達がいる宿に向かって歩いていると今となっては見慣れてしまった珍しい黒髪の後姿が目に入った。

ハルユキだ。

何かを考える前にフェンは人ゴミを掻き分けながら走っていた。ハルユキに頼んで、もう村を出て行こうと言おうとしたのだ。もちろん４人で。

――今から戻っても浮いちゃうだけかもしんないしさ。――

突然、心の中に先程の声が蘇った。

途端に足が鉛のように重くなり、気づけば小走りになっていた。しかしそれでも、もう少しでハルユキに追いつける。

必死に、足を進める。

――フェンちゃんには合わないよ。あの人達。――

歩みが止まってしまう。が、もう手を伸ばせばハルユキに手が届く。

何も考えないようにしながら手を伸ばす。

――そんなの自分で決めろよ。それは俺には関係ないだろ。――

――

ビクッと腕が震えて手が止まり、その隙にハルユキの背中は遠ざかってしまった。

まだ、もう一度走れば追いつくことは容易だった。

しかし、フェンは伸ばした手を引っ込めてうつむいたまま歩き出してしまう。

フェンはもうハルユキを追って足を踏み出そうとしなかった。

フェンはある日を境に宿に帰ってこなくなった。

時々ギルドで姿は見かけるが、仕事はしていないようだった。会っても特に話すことも無く、挨拶と、上手くやってるか？　とか、元気か？　とかしか言葉を交わさなかった。

言ってしまえば、距離が開いてしまったのかもしれない。

それがどこか俺の心を焦らせていた。

俺は、なんだか胸の中にわだかまりを抱えながら、広場に一番近い家の屋根でぼけっと祭りの準備が整っていくのを見つめていた。

今日はドラゴンを狩ったチーム、つまりＢＬＵＥＴＡＩＬを中心に祭りがある。別に興味も無かったのだが、祭りのせいで、ギルドが休みになり、暇だったのでこうして眺めているというわけだ。

ユキネはフェンの所へ、ジェミニは途中まで一緒だったがナンパに行った。

フェンが帰ってこなくなったことにユキネは何も言わなかった。別にフェンと会えば普通に話しているし、俺とも普通だ。

なんとなく折り合いが悪い俺とフェンにも何も言ってこない。

そのため、と言うのは嫌だが、何かあったわけでなく、何も変わらない状況のまま祭りの日を迎えている。

忙しそうに、それでも皆嬉しそうに祭りの準備を行っている。沈んでいく太陽と競うようにステージが出来、準備が整っていく。

それをやっぱり俺は、どこか気の抜けた気分で見つめている。

もうすぐ日が沈み、祭りが始まる。

最後の最期でも

それは雄たけびを上げる。

誇りの、野生の、忠誠の、そして、災いの。

その雄たけびは空気を震わせ、周りの木々ですらも威嚇する。

それはゆっくりと歩を進めていく。

たどり着いたのは切り立った崖。

眼下には、華やかに光を躍らせる一つの村。

賑やかに祭りは進んでいく。

広場の周りには出店がずらっと並び、広場のいたるところに大きな組木が建てられてその中で煌々と炎が燃え、村中を照らすんじゃないかと言うほどの光を作り出している。

中心のステージでは、演奏や、芸や、劇などが行われている。

ハルユキはそれをまだそれを屋根の上で見つめていた。

おそらく、ＢＬＵＥＴＡＩＬは最後のメインイベントとして出てくるのだろう。と言っても、もうあの舞台裏で準備しているだろう。

そこをまた力なく見つめていたハルユキの耳にトン、トンとリズム良くなって近づいてくる足音が聞こえてきた。

その足音の主は、ハルユキの隣で止まると、そのままハルユキの横に腰を下ろした。

「こんな所にいたのか。ハル」

「ここからだと祭りが良く見えるんでな」

「そうか」

「そうだよ」

それをに会話は途切れた。しばらく二人で黙って祭りを見つめていると、直にユキネが口を開いた。

「・・・・・お祭りに参加するのは初めてだからよく知らないんだが、こういうのは一緒に騒いだほうが楽しいと思うんだ。」

「まぁ、・・・そうだろうな。」

「よし。なら行くぞ。」

そう言うと、俺の手をつかんで立ち上がった。その頬は強すぎる炎のせいか赤く染まっていて、いつもよりどこか大人びて見えていた。

ぐん、と握った手が引っ張られる。

ちょ、ちょっと待て、そっちは。

「えい。」

と、なんだか気の抜ける掛け声で、躊躇いもせず屋根から飛び降りた。言い忘れていたが、ここは3階建ての屋根の上で、普通の人間が飛び降りれば怪我ではすまない可能性もある。

仕方なしに、うおーと緊張感などかけらもない声を出しているユキネの手を引き寄せ、抱き寄せると、できるだけ静かに衝撃を殺して地面に着地した。

周りの人間はお祭り騒ぎなので俺たちのことは目にも入っていない。

「本当に、ハルは強かったんだなあ。」

抱きかかえているユキネからのんきな声が聞こえてきた。

「おまえなあ、なんつー無茶を・・・・・・」

「いやな、フェンからお前は本当はすごく強いって聞いたからな、ちょっと見てやろうと思って。」

「・・・・・・嘘って言うか、間違ってたらどうする気だったんだよ、お前」

そこで、いつかのように、にへらっと笑うと、当たり前のように言った。

「私は、友達のことは信じることにしてるんだ。フェンの言うことも、お前の強さもな。」

「・・・・・・・・・そうか。なら、しょうがないな。」

・・・・・ああ、こいつは凄い奴だなと、そう思った。多分こいつは皆のために命をかけられる。だからこそ皆こいつのために命をかけられるんだ。

当然、俺も。やっぱり、恥ずかしいから言えないが。

ちょっとだけ泣いてしまいそうで上を向いていると、周りからヒューヒューと口笛が聞こえてきた。

よく考えれば、ユキネを抱きかかえたまんまだ。最初こそ注目されなかったものの、だんだんと気づく人たちが出てきてからかわれ始めた。

「あっ・・・・ちょ・・・・！」

ユキネもそれに気づいたのか、じたばたと暴れだす。放さないと殴られそうなので地面に下ろしてやると、今度は周りを威嚇して人を掃いだした。

周りの人たちが笑いながら去っていくと、ユキネは俺に向き直った。

「よし！　せっかくのお祭りだ。楽しもうじゃないか！」

そう言って最後まで離そうとはしなかった俺の手を引っ張り、喧騒の中に一緒に入っていく。

焼き鳥（？）を食べ、何か妙な味の焼きそばをかっ食らい、ステージの前で火の魔法を使った芸を見て一緒に笑った。

「はっはっはっ！　楽しいなあ、お祭りは！」

「・・・・・そうだなぁ。」

手に飲み物とフランクフルト的なものを持って、ステージの前に大量に用意された椅子の一番後ろの席に座って次の出し物を待っていると、ステージの脇に設置された演目台がＢＬＵＥＴＡＩＬに変わった。

おそらく、もうすぐメインイベントが始まるのだろう。

それをユキネも見つけたのか、持っていた飲み物を一口飲んでから、先程までとは違うトーンで俺に話しかけてきた。

「さっきな・・・フェンの所に行ってたよ。」

「知ってるよ。」

「このところ元気がなかったから、ちょっとだけでも励ましてやりたいなって思ってな。・・・・・でも、駄目だった。」

「・・・・・・・・・そうか。」

駄目だった、ね。

「でも駄目だった理由は、分かったよ。」

「そうか。」

そこでステージの周りの火が消えて、あたりが薄暗くなった。

うつむき気味なので見えはしないが、ステージからは人が動く気配がする。おそらく、スタンバイが終わってＢＬＵＥＴＡＩＬのメンバーたちが出てきているのだろう。

「私が出る幕じゃなかったんだ。私が解決する問題じゃなかったんだよ。」

・・・わかってるよ。どれだけ考えたと思ってんだ。・・・・・・わかってんだよ。嫌になるほど。

そこで、ステージがいきなり明るくなり、歓声が上がった。

おそらく顔を上げれば、ＢＬＵＥＴＡＩＬとフェンがいるだろう。

「私が、フェンのところに行ったのは友達が心配だったからだ。で

な、今ここにいるの理由も、同じだ」

「・・・・・・・・・・わかってる。」

「私と話してるのにな、私を見ていないんだよ。何を見てるのかって、・・・・・・あの髪飾り、ハルが買ったんだろ?」

「・・・・・・ああ。」

顔を上げると一列に並んだ列の一番右にフェンがいつものローブに大きな杖を持って突っ立っていた。

頭には、銀で作られた髪飾りが申し訳なさそうについていて、今は、はじめて見た時ほど綺麗には見えない。

当たり前だ。着けた奴があんなシケた顔してたんじゃ、輝きもくすむだろう。

嫌なぐらいによく見える目にはユキネがどんな表情をしているか、よく分かった。

いつか、どっかの蛇もどきに出会ったときと同じような表情(かお)と目。

・・・・・俺が原因でいつまでもあんな顔をさせていたくなかった。

「なら、さっさと行け。」

座ったままぐるっと広場を見回すと、村人たちは今にもステージに上りそうなほど盛り上がっているのがよく分かった。

それを見て少しあきれながら思わず俺は言葉をこぼす。

「めちゃくちゃ、盛り上げってるよな。広場中。」

ユキネもステージを見渡し、こちらを見ずに楽しそうに笑いながら言う。

「そうだな。じゃあ明日にでも行くか？」

「冗談。今行くに決まってんだろ。」

「わかってるさ。」

これ以上、俺が原因でこれ以上あんな顔させているわけにはいかないだろう？

「・・・・・・・・・明日、Gクラスの依頼を受けるんだが、私は4人で行きたいぞ。」

苦笑いしながら席を立つ。ここからでは、いくら声を出そうが手を伸ばそうが届きはしない。

そして一歩目を踏み出した時、それが、来た。

突如轟音が鳴り響いたかと思うと、ステージの後ろの壁がばらばらになって吹っ飛んだ。

破片と土煙が舞い、その中からまず出てきたのは黒ずんだ大きな足、顎、そこから覗く鋭い牙、そして血の色の目。

静まった観客席に見せ付けるように前足を掲げ、おそらくここまで飛んでくるのに使ったのであろう黒ずんだ翼を大きく広げ、咆哮した。

それをかわきりに広場が混乱に包まれた。

「ドラゴン・・・・・・。」

いつか見た覚えのある眼を見てハルユキは呟いた。

その眼はこちらに向いてはおらず、会場中を彷徨っている。

（加勢に行くか・・・・・・。）

何度か倒している連中といっても、街中ではあまり長引かせないほうがいいだろうと考えてハルユキは足に力をこめた。

いざ、飛び出そうとしたとき、ドラゴンの眼がこちらを向いている

ことに気づいた。

いや、こちらでは正しくない。

（ユキネ・・・・・・？）

その眼は確かにユキネを捉えていた。

次の瞬間、２度目の咆哮が鳴り響いた。狙いは・・・・・明らかだった。

「ちぃっ・・・・・・・・。」

横で放心しているユキネを担ぎ上げ、とりあえずこの場を離れようとドラゴンとは逆の方向に跳躍した。

後ろからは轟音が鳴り響き続いている。

理由は分からないがドラゴンの狙いは、間違いなくユキネだった。

ハルユキがまずはＢＬＵＥＴＡＩＬを信じて、ユキネを避難させようとしたのは当たり前の考えだっただろう。

広場を抜け、屋根を飛び移りながら、今日まで泊まっていた宿まで行った所で地面に着地した。

広場では、また轟音が聞こえてくる。

（苦戦してるみたいだな・・・・・・）

ユキネを地面にゆっくりと下ろして

「ここにいろ。ジェミニが来たら一緒に出来るだけ遠くまで逃げるんだ」

それだけ言うと、踵を返して広場に向かおうとした。しかしそんなハルユキの服をユキネが掴んだ。

「わ、わたしも・・・・・・！」

目には微かな戦意が宿っている。しかしハルユキはそれを見ないようにもう一度ゆっくり言った。

「大丈夫だから・・・・・・ここにいろ」

手を振り解いてハルユキはまた跳んだ。

残されたユキネは歯を食いしばり、きつく拳を握っている。

――――しばらくうつむいていたユキネは覚悟を決めたように顔を上げると、着た道を戻って広場に走って行った。

「な、何でこんな所にドラゴンが！？」

幸いにもドラゴンを倒した時の装備でステージに上がっていたため、怯みはしたもののＢＬＵＥＴＡＩＬはすぐに戦闘の意思を見せた。

「待て、こいつ、眼が・・・・・赤、い？」

喉を低く鳴らしながら、自分を取り囲んでいる人間達を見つめるその眼は確かに赤く染まっている。

連想するのは、血。林檎の鮮やかな赤でもなく、夕日の淡い赤でもない。ただ、生々しい残酷な赫。

「古、龍・・・・・だと？」

奮起した戦意が冷え切っていく。

古龍。普通は特定の場所にしか姿を見せないドラゴンだ。

「なんで、・・・こんな街中、に。」

漏れる声は恐怖にかすれて、更に戦意を奪っていく。

ふらふらとさまよっていた目線が一箇所に留まり、再び咆哮が轟いた。目線の先は・・・・・目の前の戦士達には向けられていない。

「ひるむな！　ここは村の真ん中だぞ！　俺たちがやらないと村は滅茶苦茶だ！　最初から全力で行くぞ！」

リーダーである男の声に答えるように全員がいっせいに剣を杖を掲げ四方八方から未だ動きを見せないドラゴンに魔法をたたきつけた。

その魔法の威力でステージは更に破壊され、土煙が舞う。

「や、やったか？」

その声と同時にヒュンッと風を切る声が聞こえた。

「なッ・・・・・・！！」

煙の向こうから水平に振るわれた尻尾が、まずはすぐ近くにいた剣士を一人、更に二人、続けてまた二人、何の工夫もなくただ力で吹き飛ばした。

しかし、それだけでは止まらない。尻尾は軌道を変え縦横無尽にその巨大な尻尾を続けざまに何度もたたき付けた。

――――乱打の嵐が止まった。

魔法が直撃した時、勝利を期待したメンバーもいた。しかし、一瞬。

一瞬で、それも尾を振るわれただけでＢＬＵＥＴＡＩＬは、壊滅した。

観客のために用意された椅子は完全な木屑となり、その下の地面は出鱈目に陥没している。

しかし、兇刃のような尻尾の圏内にありながら、壊れずにたっているものがあった。

氷の壁。その表面にはひびが入り、壁の前にはおそらく同種の壁であったであろう氷の屑が散らばっているが、結果的にその壁の向こう側は守りきっている。

向こう側には人影が二つ。一人は、フェン。壁の向こうに力なく倒れているメンバーを見て、唇をかむ。

一人助けるのが精一杯だった。

「イシル、逃げて。ハルユキを・・・・・。」

そこで言葉が止まったのは、ここ最近のハルユキとのこともあったが、イシルの意識がないことが分かったからだ。

その一瞬の隙に死を含んだ尻尾が頭上から襲い掛かった。

氷の壁はもろくも崩れ去る。

当たったわけではない。ただの余波だ。それでも二人は吹き飛んで一番後ろの席にまで吹き飛んだ。幸い何かにぶつかる事もなく地面を滑りながらもほとんど無傷のままだ。

そこでいきなり、ドラゴンは体を震わせながら体を一回転させると体にまとわりつくように存在しているステージを完全に吹き飛ばした。

そこで、ようやくドラゴンの全貌が明らかになった。

黒ずんだ足に首、いや全身がその一色で包まれている。

「・・・・・・鎧龍。」

文字通り全身が鋼に包まれているドラゴン、鋼のような鱗、ではない、全身の表面が鉄で出来ているのだ。当然先程の魔法など毛ほども効いていない。

赫の眼がフェンを捉える。古龍特有のその眼は否応なく、いつか森で出会った龍と恐怖を思い出す。体の自由を恐怖が縛っていく。

・・・・・・諦め始めている自分がいることに気づいた。

「・・・・・・・ああああ！！」

フェンが今まで出したこともないほどの大声を上げ、魔力を練り上げる。

「・・・・・・・諦め、ない・・・！」

尤もらしい理由で恐怖から逃げようとした自分を心が許さなかった。慣れない大声で心を奮い立たせ、漏れ出す魔力を一箇所に凝縮して、巨大な氷の槍を精製する。

「――――攻城氷槍（バリスタ）！！」

全長１０メートル、直径も一メートルはあろうかという巨大な槍が鎧龍めがけてその大きさに似つかわしくないスピードで襲い掛かった。

それを、鎧龍も硬い鎧で包まれた尻尾で迎撃する。火花が散って力

は拮抗し、ユキネの渾身の一撃は、尻尾を押しのけ鎧龍の胸のド真ん中に激突した。

鎧龍はたたらを踏み一、二歩後ずさる。

しかし、それだけだ。氷の槍は勢いを失い、踏み出された鎧龍の鉄の足に踏み潰された。

鎧には微かに傷がついているが、ダメージ自体はほとんどないだろう。

フェンを敵だと判断しなおしたのか、フェンに血の眼を再び向ける。

「くっ・・・・・・！」

一人では勝てない。そんなことは分かっている。だからフェンは待っていた。私が諦めなければきっと、来てくれる。来ないはずがない、そう確信して。

だから死ぬまで、いや死んでも

「・・・・・・・・・・・・諦めない・・・！」

”人生の秘訣は諦めないことだぜ？

――――そう言ってくれたことをまだ覚えている。

ポン、と頭の上に手のひらの感触。

「・・・・・・手伝うか？」

鎧龍が現れてから、いや祭りの朝から、・・・・・・違う、何日も前から待ち望んでいた声が耳に届いた。

「・・・・・・・・・よろしく。」

何の驚きも含まない声で即答する。それで十分だったから。

頭に付けた髪飾りが炎の光を受けて、綺麗に光っていた。

最後の最期でも（後書き）

空回り

「こんな場面、前にもあったなぁ。お前憑かれてんじゃないの？」

こちらにむき出しの殺気を飛ばしてくるドラゴンからは決して目を放さずに言った。

「……私じゃない。ハルユキのせい。」

まあ、俺もそう思うけど。

「とりあえず、俺があれの相手をしてるからお前はあいつらを避難させてくれ。多分、全員気絶してるだけだ。」

俺はぐちゃぐちゃになったステージ前を顎で指しながらフェンにそういった。

さすがはトップチームというべきか、ふらふらになりながらももう立って周りの奴らを起こそうとしている奴もいる。

しかしもう戦える状態じゃないだろう。それは一目見ただけで明らかだった。

フェンは何も言わずに頷くと、ステージ前に走って行こうとする。

それを少しだけ呼び止めて俺は言った。

「明日、依頼に行くってさ。Gランクだけど。……4人で行こうな。」

「……うんっ」

一言で、それでもどこか嬉しそうに返事をして今度こそ走って行った。

「さて、と……」

俺も気分を切り替え、ドラゴンに向き直る。

ドラゴンは先程俺がユキネを連れて行ったのを覚えているのか俺をじっと見つめて低く唸っている。

黒ずんだ鎧を全身に纏っているその姿は確かな威厳を放っている。

見たところ相当分厚いようだ。剣も魔法も銃弾も、ただではその鉄壁に傷を作ることも出来ないだろう。

しかしいつまでも膠着しているわけにもいかない。万が一にもフェンのほうに注意を引かせることは許されない。

とび出す。最初の5歩目ほどで一気に最高速まで到達して接近した。およそ15メートル離れたドラゴンまで走るのにほんの一息。

ドラゴンは未だ微動だにしていない。

目が合って分かった。こいつは動けていない訳ではない。動かないのだ。

その装甲はおそらく今までどんな攻撃も防いできたのだろう。ましてや目の前にいるのは、無手の人間が一匹だけ。

攻撃を受け止めてから、技後硬直の間に爪でも尻尾でも牙ででも攻撃を確実に直撃させれば、いとも簡単に勝負はつく。

種族としての差、そのことをよく知っている目だった。

メチャクチャ……気に、障った。

「なめてんじゃねえぞ　蛇もどき」

それなら、その考えを覆してやるまで。

堂々と張られたその胸に。全力をたたきつけた。

ドラゴンの紅の目に驚愕の色。右上から叩きつけるようにはなった拳の衝撃に、ドラゴンは一度地面に叩きつけられ、その巨大な体が弾み宙に浮く。

十メートルほど転がった所で勢いがなくなり、ドラゴンが再び立ち上がる。

「人間が弱いから、俺も弱いってか？　そんなもんわかるわけないだろ。俺とお前は今、はじめて会ったんだから。」

俺はお前を殺せるんだから。

「本気で来いよ。俺は”敵”だぜ？」

人間の言葉が通じているかは分からないがその言葉に答えるように咆哮を放つ。その胸の鉄板には拳の痕が深く刻まれている。

立ち上がったドラゴンは今度はこちらをしっかり警戒している。

ドラゴンは体を低く前屈気味に構え、戦闘態勢を整える。

この距離なら炎でも吐いてくるかと思いきや、翼をたたみ始めた。

翼は器用に折りたたまれ、鎧の中に素早く収納されていく。

「なんかカッコいいな、それ・・・・・・」

目が乾きを覚え一度だけ軽く瞬きをする。

次の瞬間、後ろから殺気。目の前に既にドラゴンはいない。背筋を寒気が通り抜ける。

経験か、運か、直感か、咄嗟に身をかがめるとその上を轟音を立てながら鉄の爪が通過する。

そのままドラゴンは一回転して今度は尻尾を見舞ってくる。体を地に伏せた体勢から腕と足の力で跳び上がりながら尻尾をかわす。

「結構速いじゃねえか・・・・・・！」

再び今度は俺が距離をとる。視線を戻すとドラゴンは既に先程の前屈体勢、隙を見せでもしたら即座に襲い掛かってくるだろう。

瞬く間に両者に緊張が満ちていく。

先程の攻防で分かったことがいくつか。こいつは分厚い鎧を纏っている、がそれでも動きは以前の火龍よりも上だ。おそらくそのスピ

ードを生み出すためにパワーも相当なものだろう。

しかしこいつはその代わり遠距離攻撃手段を持っていない。そもそもこれだけ動きが速ければ確かにそれは必要ではない。

つまり、超近距離戦特化のドラゴン。地上戦では邪魔な翼を収納できるようになっているのも証拠の一つだろう。

しかし、それは俺の土俵でもある。

ところが、何故かドラゴンはもう戦意を収め始めていた。

先程収納したばかりの翼を広げ、一気に空に舞い上がる。

（逃げる……のか？）

逃げるのならばそれを追う必要はない。しかしもしかすると遠距離攻撃が可能かも知れない。警戒しながら上空を飛び続けるドラゴンを睨み付ける。

が、そのまま山のある方向へと向かい始めた。

どうやら、本当に逃げるらしい。身体から力を抜きドラゴンを見つめていると、ドラゴンが広場の端の辺りで下降し始めているのが目に入った。

ドラゴンの向かう先には、金髪の少女。

「あの、馬鹿！！！」

ハルやフェンの何か助けになれないかと私は入り口を開けっ放しで逃げてしまった武器屋から剣を拝借し広場に向かっていた。

助けられてばかりなのはもう耐えられなかった。

「私だって、……戦える！」

絞り出した声は後にして思うと、おそらく恐怖に震える身体をどうにかしようとして出したものだったんだと思う。

必死に自分を励ましながら、最後の角を曲がり広場へと付く。そこ

には既にハルユキとドラゴンが対峙していた。広場に満ちた殺気に思わず後ずさる。

それでも歯を食いしばり一歩踏み出す。

しかし、そこでドラゴンは翼を広げ飛び上った。

いきなりのことで展開についていけず、ただ何も考えないで空のドラゴンを見上げた。

そして見えた。ドラゴンがその血のような紅い眼で此方をいや、私を見ていたことに。

気づいたときには、目の前までドラゴンの爪が迫っていた。

ユキネを見つけたときにはもうハルユキは走り出していた。しかし、間に合うはずもなく、ドラゴンは後ろ足でユキネをつかむと再び空へと舞い上がる。

ドラゴンから一番近い位置にある家の屋根に飛び乗り、ドラゴンまで跳躍しようと足に力をこめる。

まだドラゴンは地上から２０メートル程度の位置にいる。まだ余裕で間に合う位置だ。しかし、屋根が木で出来ていたのを失念していたのが致命的だった。

「しまッ……！？」

飛び上った瞬間、強すぎる衝撃で足元が崩れ中途半端な位置までしか飛べず、ドラゴンに届くことなく落下していく。

再び地面に到着したときにはもうどうやっても届かない位置までドラゴンは飛んでいってしまった。

「くそッ！」

自分に悪態をつきながらドラゴンを見つめる。推定で高さ８０メートル程度。その高さまでは俺が飛んでこれないと分かったのか、方向転換し荘厳と聳え立つ山へと帰っていった。

すぐに後を追おうとすると、後ろからフェンが声をかけてきた。

「ハルユキ！　今ユキネが……！」

「分かってる。今すぐ行くぞ！　準備は……」

そこまで言いかけたところで目の前の角から男が現れた。

「お手伝いしましょうか？　お坊ちゃん方？」

この村には場違いな格好、黒の燕尾服にシルクハット更に手にはステッキを持ち、顔には貼り付けたような感情のない笑顔。

「なんだ？　お前は……？」

外見も、話し方も、雰囲気も明らかに普通の村人ではない。

「名乗るほどのものではありませんよ。私はあの鎧龍が守っているものに用があるだけです。」

「一人で行けばいいだろう？　何で俺たちにそんなことを頼む。」

露骨に疑われているのを悟ったのか、やれやれといった感じで話し出す。

「見ていた訳ではありませんが、あなた達2人であの龍をやり過ご

したのでしょう？

それだけの腕をぜひ私に”利用”させていただき、その代わりにあのドラゴンの居場所を教えましょうと、そういう取引です。

ああ、私も多少は腕に自信がありますので足手まといにはなりませんよ？」

あまりにも胡散臭すぎる話だが、あの山はかなり大きいし広い。闇雲に探しても見つかる可能性はかなり低い。

罠かもしれないが乗ってみるしかないだろう。今は悩んでいる暇さえありはしない。

「……分かった。連れて行ってくれ。」

俺の苦悶の表情を見て面白そうに男が口を開いた。

「分かりました。フフフ、大丈夫ですよ。私の見立て通りなら彼女はすぐには殺されはしないはずです。

…まあ、あくまで見立てなので断言は出来ませんが。」

「……今から行けるか？」

「もとよりそのつもりです」

不安の種を抱えて、俺とフェンは山へと向かった。

目まぐるしく、廻るめく

夜の闇の中をすべるように移動している。

大きな月が出ているとはいえ、ここは夜の山の真ん中だ。正確にはその上空だが。とにかく視界が悪いということだ。

最初のあたりこそじたばたと抵抗していたが直に疲れてやめた。足を持っていた剣できりつけようとも思ったが、もし驚いて私を放そうものなら間違いなく死ねる自信がある。

なんとなく恐怖が薄れているのは、傷つかないように気遣って私を運んでくれていることに気づいたからだろうか。

とりあえず、今すぐ食べられるということもないようなので、とりあえずは着地してから考えることにした。

どれくらい飛んでいただろうか。ドラゴンが下降し始めていることに気づいた。山の頂上に来たというわけではない。

ただ、着地地点には半径１０メートルほどの穴、その穴に器用に身体を滑り込ませながら、さらに下降していくと地面が見えてきた。

地面まで３０センチほどの地点でゆっくりと私を地面に降ろすと、ドラゴンはその場にうずくまった。いやひざまづいているようにも見える。

とりあえず現状を理解するために、周りを見渡す。

広い。どうやら半球状の洞窟になっているようだ。洞窟の端は見えないがおそらく生半可な広さではないだろう。

「確かにウィーナの娘ですね。ああ、あの子が若い時にそっくりに育ちました」

不意に、決して大きくはないが洞窟中に響くような不思議な声が聞こえた。

「誰……だ…？」

口ごもってしまったのは、その声に懐かしさを感じてしまったからだ。記憶からか心のどこからか、よく分からない場所がその声に郷愁を感じていた。

「フフ、久しぶりですね、スノウ。といっても会ったのは生まれてすぐ後に一度きりですけど」

――――次の瞬間、目の前に星空が広がった。

と、同時に意識が遠のいていった。

◆◆◆

目の前の燕尾服男に少し後ろで並ぶように走る。

思ったよりも高速での移動となったため、俺の背中にはフェンがおぶさっている。

道など存在しない、時には木と木を飛び移りながら移動していく。

「あとどれくらいだ？」

いつまで経っても同じような景色にいらだってすぐ斜め前を走る男に声をかけた。

「……見えました。あそこです。」

男の指が指す先に目をやるが、そこにあるのはただの岩壁だけ。

大きい。奥にそり返るように伸びていて、頂点を見極めることも出来ない。

しかし、ここには当然ユキネはおろか、ドラゴンさえも存在しない。

「……どういうことだ？」

やはり罠だったのかと目の前の男から距離をとると、後ろからフェンが肩を叩いてきた。

「ハルユキ……あそこ。」

右にかなり行った所かに何かくぼみがあり、そこから光が漏れている。あの中、ってことか。

「行くぞ。急いだほうがいいだろ。」

そう言ってくぼみがある位置まで即座に移動する。

間髪いれずに洞窟に続くくぼみにに足を踏み入れた時、違和感に気づく。

（待て、ここにいるのはドラゴンだろ？　なんで……光が？）

決して強くはないとはいえ、確かに洞窟から光が伸びている。そう思ったのもつかの間、開けた所に出て、視界が一気に広がる。

そして、星を見た。

洞窟に広がっていたのは星空、その光が洞窟内を青白く照らしていた。

「……なんだ？」

その幻想的な光景に思わず足が止まり、驚嘆の声が漏れた。

フェンも同じように呆気に取られているようだ。

「……星屑、龍」

後ろに背負ったフェンがつぶやいた。その声は恐怖ではなく、どちらかといえば畏怖がこもっている。

「何なんだ……あいつは。星屑龍って何だ？」

「物語とかに出てくる、幻の龍……。本当にいるか誰も確認できな

かったから、今までずっと、伝説だった…。けど」

今目の前にいるってことか。

確かに星が散りばめられたかのような体は星の名を持つに相応しい美しさを誇っている。

それは確かに龍だった。しかしあまりに違いすぎる。マダラと呼ばれていた2色の龍とも、森で出会った炎の王とも、ついさっき戦った鎧の化身とも。

大きさも、瞳の色も、纏う空気も。何もかもが凌駕して卓越している。

体長は小さく見積もっても５０メートルほど。そのあまりに長すぎる身体をドーム上に広がったこの洞窟の壁面に沿って横たわらせている。

目の色は今まで見てきた血に染まった赤色ではなく、星が散りばめられたかのように輝く身体よりもいっそう神々しい輝きを放つ金色。

その外観だけで歴史と神性を感じさせられる。

「思ったよりも早く到着しましたね。この子は確かに愛されているようだ」

俺のでもなくフェンのでもなく、燕尾服の男のでもない声が洞窟内に響いた。信じがたいがこの場で他に意思を持つのは目の前の龍しかいない。

「喋った……！？」

俺の驚きの声にいつの間にかそばまで来ていた燕尾服の男が落ち着いて答える。

「驚くことではありません。あれは百の世を超えて生きる、『霊龍』です。」

「霊龍……？」

男はこちらに目だけを向けてそこまで説明してる暇はないと伝えるとその霊龍とやらに接近する。

霊龍は男が近づいてくるのを見ると、不思議と穏やかな声で告げた。

「すみませんが、此方は急ぎなのです。早くしないと私は死んでしまうので。――――ベイル、ここは頼みます」

その言葉に答えるように、先程の鎧を纏ったドラゴンが、天井の暗闇より躍り出て頭上から男に襲い掛かった。

それを男は舌打ちしながらも綺麗にかわす。

「ふっ、今の言葉で確信しましたよ。確かに私にはこの古龍にも勝てませんが、……その娘があなたの目的だというのならば私はその娘を殺すまで。

あなたたちとの同盟は意味がないものになりましたが…」

唐突に男の雰囲気が変わり、殺気をむき出しにしてきた。……龍とユキネに向けて。

この瞬間、敵味方だけは全てはっきりした。

――――全員敵だ。

龍は自分の命のために、そして男はそれを阻止するために。

俺とフェン以外全員がユキネの命を狙っている。

「出来ませんよ、あなた一人では。」

「誰が私一人だといいましたか？　ジェミニ！　出番ですよ！」

飛び出そうとした俺と一緒に隣のフェンまで固まってしまったのが分かった。このタイミングでその名前が出てきた意味が理解できなかったのだ。

ジェミニ、だと？

いつからそこにいたのか男の影からすっと人影が出てきた。

しかし現れたのは俺たちが知っているジェミニとはまったくの別人。それどころか見たところまだ子供だ。

どうやらただの同名人物らしい。

どうにも安心してしまい、思わず胸をなでおろした。

「なるほど。ではこちらも急ぐとしましょうか。」

そう言うと、今度は一瞬で、星のような輝きを保ったまま霊龍が人の形まで圧縮していく。

人の形に収まると、星の輝きは姿を潜め一人の壮年の女性がユキネを抱えて立っていた。そのままさらに奥へと続いてそうな通路に入

っていく。

「待て！！」

めまぐるしく変わって行き過ぎていた状況にあっけにとられていたことに気づき、ユキネへと駆け出す。

が、ベイルと呼ばれていた鎧龍が俺の進行方向に爪を突き立て、接近を妨げられる。

その隙にユキネを連れた龍は見えなくなってしまった。

「ハルユキ、私が足止めするからユキネを……。」

フェンの言葉に黙って頷く。

やることだけは変わらない。ユキネを助けるために動くだけだ。

――――しかし状況の変化はとどまることを知らなかった。

ポツン、といつのまにか入り口に何かが立っていた。

初めに捉えたのはなんだったか。その姿ではない。気配でも、殺気でもない。嫌悪しながらも以前一番近くにあった感情。

ハルユキが捕らえていたのはただ渦巻く『狂気』。

ザッと砂をかむ音が聞こえた。それは微細な音で本来なら気にも留めないほどのものだったが、誰もがお互いを牽制しあう中、ハルユキだけは洞窟の入り口に釘付けになっていて、その音すらも感じ取っていた。

頭から汚れた白いボロを纏っていて、口だけがその隙間からのぞいている。

不意にその口が動いた。

――――見つけた、と。

ゾッと背筋が寒くなるほど、洞窟内の温度が下がった気がして

次の瞬間、目の前まで拳が迫っていた。

「……え？」

間の抜けた男の声が聞こえる。

視界の端にはたまたま俺とこいつの一直線上にいたために一瞬でばらばらにされた、どこか不敵だった燕尾服の男の姿。何があったか分からないという顔で絶命している。

唸りを上げて顔に向かって来ていたそれをぎりぎりで掌で受け止める。急停止したときの慣性エネルギーが背中へと風となって吹き抜ける。

「何だ……お前は。」

そのあまりに異形な雰囲気に勝手に動いたように俺の口が開いた。

そしてそれはまた、今度は俺に聞こえるように言い放つ。

「そりゃあ、……お前次第だァな。」

頭からボロがはずれその顔が明らかになる。割と整った顔立ちに白髪と白い眼。三日月形に不気味にゆがめられた口。

男の拳を受け止めた左手からは、しきりに痺れが伝わってくる。

「答えろ……。

テメェは、正義の味方か？　それとも悪の魔王か？」

しかしそれらよりも深く印象にこびりついてくるのは、不吉な血の匂いと破滅の香り。

狂宴

謎の男が乱入してきてさらに状況は混乱を極めた。

男は突然現れると、ハルユキに殴りかかった。たまたま一直線上に存在していた燕尾服の男の命を邪魔な小石をどけるかのような手軽さで摘み取って。

死んでしまった男の仲間だった子供は男の死体を確認すると、闇にまぎれるように消えていった。

残されたのは、私とハルユキ、鎧龍に、謎の男。

混乱の中心にいる男は未だハルユキに拳を突き出したまま不気味に嗤っている。

余りに簡単に、死を迎えた男から目が離れない。初めて見る死体だからか、自然と息が上がり心臓の音が頭に響いて集中力を消していく。

「フェン！　ユキネを頼む！」

ハルユキが険しい顔をしたまま私に向かって叫んだ。そこで、一気に正気に戻る。

「……分かってる」

分かる。私ではおそらくあの男には太刀打ちできない。鎧龍もそうだが、危険度だけで言えばやはりあの男。あれは危険すぎる。

燕尾服の命を一瞬で奪った戦闘力も、未だ陽炎のように漏れ出している空気を歪めるほどの強大で凶暴な魔力もそうだが、男の危険度を表しているのはそれらのことではない。

強いて言うなら雰囲気。狂気にまみれた空気を身体に纏っている気がする。

さらに、ここからではわかるはずもない吐き気がするほどの血の匂いを感じる。……どれほど人を殺したんだろうか。

……本当に、吐き気がする。

場が完全に緊張してしまい、誰も動かない。動けばその瞬間に殺される。そんな空気が場に満ちている。

でも、大丈夫。

一歩踏み出す。

途端に2つの殺気が私を突き刺した。

後ろから男が横から鎧龍が迫ってきているだろう。しかし私は止まらない。振り返る必要すらない。

「行け！」

すぐ後ろにはハルユキがいる。私がここを突破するまでの時間稼ぎをしてくれるなら心配も要らない。

背中から連続して轟音が聞こえてくる。

私はまだ肩を並べては戦えない。だから……出来ることくらいやらないと。

背中を信じてただ走る。

◆
◆
◆

フェンが奥に行ってしまってから短くも激しい戦闘は静まり、再び場は膠着していた。

瞬く間に再び緊張が満ちていく。

すると、男の様子がおかしくなり始めた。

「ふはッ。ははははッ！　あっはははっはっはっはっはっははっはははははははははっはっはっはっはっはっはっはっははっはははははあ！！」

声を裏返しながら腹を抱えて笑い続ける。しかしこちらに向けた、いや洞窟中に満ちた殺気は以前と変わらないまま。

今何かを仕掛けようとしても何事もなかったように迎撃されるのが想像できる。

「最っ高だよ、お前ぇ……。初めてだよ！　やっと見つけたよ！　俺の相手(てき)はァ！」

誰かと話しているわけではない。一人で陶酔しながら言葉を零してしまっている。そんな感じだ。

「俺が殺そうと思っても死なない！　睨んでも震えない！　千切ろうとしても、裂こうとしても、潰そうとしても！　全ッ部防ぎやがった！

おまけに見ろよ！　……血だ！！　俺のォ！」

俺が先程殴り飛ばした口元が切れて、出ていた血を手でぬぐって俺に見せ付けてくる。

「……おい、そこのハイテンション。」

男は俺に目の焦点を合わせると、うって変わったような低い声で答えた。

「ラスト、だ。そう呼んでくれ。お前は？」

意外とめんどくさい奴だな。しかし、名乗られたら名乗り返す主義だ。

「ハルユキだ。それで、」

その場に残像を残すようなスピードで男の背後に回る。男は反応できていない。背中を向けたままだ。

「急いでるんでな。……消えろ。」

しかし、俺の拳は空を切る。

同時に横からそれだけで人が殺せてしまいそうな絶大な殺気。

「楽しいおしゃべりの途中だろォ？」

右足が唸りをあげて俺の顔へと迫る。

「楽しくねえから、お開きだよ！」

それに拳を叩きつけて軌道を変え、逆に俺の右足でラストを蹴り飛ばした。

岩壁にまで吹き飛んでいったラストを追おうとするが、今度は後ろから野生の殺気。

「そういや、お前もいたんだったな！」

空気を切り裂きながら迫る鉄の爪を身体をかがめてかわし、そのまま身体をひねりあびせ蹴りを側頭部に叩き込む。

頭のほうは装甲が薄いのか、ぐらつきながら後退する。

「はっはははははっはははは！！」

視線を元に戻すと、頭から血を流しラストが不気味に破顔しながら迫ってきていた。

横から飛んできた拳をかわし、腹を下から殴りつける。派手に天井に打ちあがるが、その割には手ごたえが軽い。

（自分から跳んだか……）

ダンと短い音がして、ラストが天井をけり接近してくる。最小限でよけて反撃しようとしたが、背中に悪寒が走った。

「アアアあァぁァああァァァアああ！！」

裏返った叫び声をあげながら、ラストが迫る。

握りこんだ拳を解き全力で後ろに跳ぶ。一瞬遅れてラストの拳が地面に突き刺さった。

もの凄い轟音と共に地面が割れ、衝撃が周りを襲った。着弾地点から半径5メートルほどが陥没しクレーターのようになっている。

その中心からは白い靄が立ち上っている。

土煙ではない。先程までは陽炎のようにラストの体から出て空気を歪めていただけの何かが、今は色づいて明らかな異様を周りに放っている。

「……あれで、本気じゃなかったってか？　ふざけてんなあ、おい。」

ラストは立ち上がり俺を見て楽しそうに口をいびつに歪めて笑っている。

俺しか視界に入っていないと思ったのか、後ろから鎧龍がラストの首元に爪を振り下ろす。

まだラストは反応しない。

首筋まであと、３０センチ。

そこでいきなり鎧龍が後方へと吹き飛んだ。

ラストは相変わらずこちらを見て不敵に笑っている。

鎧龍が吹き飛んだ原因はラストの何の種もないただの後ろ回し蹴りだ。ただ、俺の視力でも霞むほどの速さの、だが。

それも残り３０センチで爪があたる位置から爪が自分に届くよりも速く直撃するほどの速さ。

「……化け物だな…こいつも」

ラストのはるか後方でドラゴンが怒りの声を上げながら立ち上がった。

蹴りがあたった場所は運悪く、村で俺が痛めさせていた場所だったのかその周りだけひびが入り、中心には穴が開いている。

もはやあいつの戦闘力は半減してしまったと言ってもいいだろう。

ダメージ事態はさほどないようだが、鎧のないところを狙えるならもう鎧にほとんど意味はない。

それにいくら動きが速いといっても、俺とラストに届くほどではない。

それをラストも感じ取ったのか、視線をよりはっきりと俺に合わせてきた。

飛び込んでくるであろうラストに、俺も前屈姿勢で身構える。

数秒にらみ合った後、ほぼ同時に動いた。

床を踏み砕き、空気が切り裂かれる音を耳に感じながら接近する。

近づきざま、両者二人とも右拳を振り抜いた。両者の身体に触れる前に、拳同士が衝突してその場が爆発したような轟音が広がった。

衝撃で再び地面が割れ、爆風が巻き起こる。

「……らあっ！！」

「……ひゃはっ！！」

しかしその力も俺にはまだ届かない。

異様な力が発生させた斥力に弾き飛ばされ、ラストは地面をバウンドしながら向かいのの岩壁に派手に激突した。

……しかし次の瞬間、俺に向けて龍の逆襲が襲ってきた。視界の端から空気を切り裂きながら尻尾が迫ってきている。

全力で拳を振るった後で満足に動けず、脇腹に吸い込まれるように直撃した。

「ぐっ……！」

派手に吹き飛ばされ、俺も岩壁に叩きつけられる。しかし、ほんの少しであったが、自分で跳んで威力を殺したためダメージは深刻ではない。

反撃に出ようと顔を上げる。

……しかし。

予想していたものとはまったく異なる光景がそこにあった。

目の前で鎧龍が爪を振りかぶっていた。いくらなんでも速すぎる。明らかに今迄通りのスピードではない。

避ける間もなく、腹部に鋭利な爪が突き刺さり、腹に４つの風穴が開いた。

「がッ……！！」

（いつの、間に……！？）

激痛に霞む目で視界を広げると、龍を今まで守っていた鎧がその身体に纏われていない。

遠く離れた地面に分厚い鉄板が転がっている。おそらく５００～６００キロはありそうな分厚さと大きさだ。

それを脱ぎ捨て捨て身の攻撃を俺にぶつけてきた、ということだろう。

鎧を取り去った龍は劇的にスピードが上がっていた。俺に気づかれる前に近づけるほどのスピードだから相当なものだ。

その隙にも連続して、今度は逆の腕を振り上げている。

（しまッ……！！）

再び、無防備な腹に爪が突き刺さった。

「……ッ！！」

口から血が吹き出るが、今度は悲鳴も上げず腹に突き刺さったままの腕を両手で、掴みとる。

「らあッ！！！」

それを力づくで引き抜き、振り回すようにドラゴンの身体を地面にたたきつけた。

ドラゴンは地面に叩きつけられ、力なく真上に3メートルほどバウンドする。

一瞬で身体をひねり力を溜める。鎧はもうないものの、まだ岩のような鱗が身体を覆っている。拳では足りない。

失血でふらつく足を踏ん張り、落ちてくるドラゴンに狙いをつける。

俺の横まで落ちてきた所に、ぶちかます。

――――裏当て。

ゴバッ！と弾けるような音が響き、ドラゴンがそのまま背中から激突し、動かなくなった。

しかし、怪我で踏ん張りが足らなかったのかまだ生きているようだ。

それでも意識はないようなのでそのまま踏み越え前に一歩進む。

途端に腹から激痛が伝わってきた。

ゴボッと驚くほどの血が口から零れ落ちる。いくら回復が早いといってもこれほどの傷を治すのは今すぐには無理だ。腕にもまだ痺れが残っている

それよりもまずいのが、血が流れすぎていることだ。死にはしないだろうが足もとが落ち着かない上に、視界が霞んでいる。

思わずその場に膝を突く。

と、同時に前方から土を踏む音。

顔を上げると、擦れた視界に狂気と愉悦を笑みに変え唇を歪にゆがめて不気味に破顔しているラストがこちらに歩いてくるのが映った。

「くそ……っ…たれ」

次の瞬間ラストが消えるように俺の目の前まで移動し、首筋に首がもげるんじゃないかというほどの衝撃が直撃して、俺はまたもや端の岩壁まで吹き飛んで背中から叩きつけられた。

狂宴（後書き）

感想、アドバイス、誤字脱字報告お待ちしてます

ちから

――――ここは、どこだろうか。

記憶は懐かしい声を聞いた所までで途切れている。

立ったまま気絶していたのか、目を覚ましたとき、私は立ちっぱなしだった。いやそうじゃない。今も果たして立っているのかどうか分かっていない。

何しろ一面真っ白だ。今の私から見て上も下も右も左も。白い空間に浮いているといった感じだ。

と言ってもまだおきて5分も経っていないだろうが。

「……出れるのか？　ここ」

「出れますとも。その前にやることがありますけどね。」

突然何処からか、懐かしさを彷彿させるあの声が響いた。そして目

の前が歪んだかと思ったらそこから優しそうな顔の壮年の女性が現れた。

「あなたは……？」

「質問に質問を返すようで申し訳ありませんが、ウィーナを、知っていますね？」

知っているも何も……。

「私の……母上だ。」

そう答えると目の前の女性はにっこりと優しく笑うと安心したように言った。

「……私はその母君、ウィーナの”友達”です。」

「母上を知っているのか！？」

「当然です。親友でしたからね。あなたをお腹から取り上げるときもそばにいたんですよ？　覚えていませんか？」

「さすがにそれは覚えてないだろう……」

あきれたようにそう言うと、慌てたようにまくし立てた。

「ああ。こんな世間話をするためにここにいる訳じゃないんですよ。急がないと時間がないので本題に入ります。

質問ですが……今、あなたは魔法が使えませんね？」

今その話が来るとは思わなかったので、少々驚いて返答に詰まってしまった。

「どうなんですか？」

「…ああ、魔力は少しあるが、文字がないからか魔法はまったく使えない」

そこで、今度は目の前の女性が驚いたような声を上げた。

「魔力がある？　……本当に？」

思っていたのと驚かれ方が違ったのが気になったが、嘘をつく必要もないので正直に答えた。

「ああ、魔法は全く使えないが、魔力は少しだけ。」

「漏れ出しているのでしょうか？　……分かりました。

では説明しますと、まずあなたが魔法を使えないのは、私とウィーネが文字を取り出し魔力を封じ込めたからです。

あなたには本当に気の毒なことでしたが、赤子のまだ耐性ができる前にしかできない方法でしたし……」

最後のあたりは何を言っているか聞いていなかった。

――まずあなたが魔法を使えないのは、私とウィーネが文字を取り出し魔力を封じ込めたからです――

最初のそれを聞いてから、頭の中に死んでいった人達の顔が蘇っていたから。

「なぜ……そんなことを…！」

そんなことをしたせいで、私の故郷と家族は……！

「……最後まで話を聞きなさい。私はともかくあなたのお母さんが何の理由もなくそんなことをするかと思いますか？」

「じゃあ、……なんで…」

「そうしなければ、あなたの魔力は赤ん坊のあなたの体では耐えられない程のものだったからです。あなたは王女だ。死なせるわけにもいかなかったそうです。

あなたと国を守るためにはそうするしかなかった。

あなたのお母さんは、…ウィーネは泣きながら決断をしました。

それを笑ったり、怒ったりすることは例えあなたでも許しません。」

顔を歪めて、本当に悔しそうに顔をゆがめてそう言った。

少しだけ頭の中が冷めた。

「……すまない。続きを、頼む。」

「いえ、私も年甲斐もなく言い過ぎました。それで、その封印した力は私が預かっています。それを今から返します。

誘拐したり、気絶させたりしたことは謝ります。しかし、もう私には時間がないのでそういう手段を用いました。ウィーネとの約束を果たすために。

……あの娘との約束は、何よりも私にとって大切だったから…」

そう言った顔は友達を想うどこか悲しくも、優しい顔だった。

「そっか……。母上は何て言ってたんだ？」

「時が来て、この子が来たら力を返してやってくれ。その時はこの子も強くなっているだろうから、と。」

その言葉に思わず身がこわばった。

「私は強くなんか…。」

城の人たちに、フェンに、ハルユキに助けられてばかりだ。強さなど一つも持っていない。

私が言いたいことが分かったのか諭すように女性が言った。

「あなたが言っているような強さではありませんよ。私たちが魔力を奪っているのだから、戦いの力がないのは当たり前です。

私たちが言っているのはそういった強さではありません。

驚くほどの速さであなた助けに来た人たちがいましたよ？　おそらく今も戦っています。……敵も混じっていたので、何も話せませんでしたが。

何はともあれ、ああいった人達が命を懸けてくれる。そういった

魅力もあなたの力ですよ。」

……そういう風に、仲間の力が私の力というのならば、私は確かに強いだろう。

けど、それは私が強くなる必要がないということじゃない。

あいつらに頼ってばかりは嫌だったからもっと強くなりたいと願っていたはずだ。

そうだ。……迷う必要なんかないじゃないか。

「力を。私はもっと、強くなりたい。自分のために、仲間のために。」

それを聞いて女はフッとやわらかく微笑むと優しい声で言葉を紡いだ。

「……此処に力を返還する。龍の王より、力の聖女へ。還れ。主の下に」

私たちが立っているところに一瞬で巨大な魔法陣が広がった。

その魔法陣が端から崩れ始め私の身体に入っていく。

次第に意識が薄れていく。その時耳に優しい声が届いた。

「――――に、よろしく言っておいてください。」

よく聞こえず、聞きなおそうとしたが、その前に私の意識は暗転した。

◆

◆

◆

目を覚ますと私は部屋の中心に仰向けで横たわっていた。

目線の先には、天井に開いた穴から月が見えている。

周りには誰もいないし、何もない。天井の岩壁に生えたヒカリゴケが狭い洞窟の中を照らしている。

見回した限りで言うと、１０メートル四方の四角い空間の中心にいるらしい。

――――夢、だったのか？

…いや、違う。さっきまで話していた記憶がしっかりと残っているし、確かに体のどこかに力が息づいている。

……これがおそらく魔力なのだろう。

考えても埒が明かず、とりあえず前方にあいている出口であろう入り口に向かって一歩踏み出すと、いきなりどこからか不快な声が聞こえた。

「くッ…。結局枯死しましたか。あの身体で魔力を使い尽くせばこうなることぐらい分かったでしょうに。」

上から聞こえている声に振り向くと燕尾服を着た男が帽子を押さえて天井に立っていた。

「天井に……！？」

そのまま、天井からふわりと床に降りると地面に手を置いて悔しそうにつぶやいた。

「魔力も欠片も残っちゃいないか……」

得体が知れない男に少しだけ後ずさった。どこか不吉な空気を纏っている。

「何だ？　お前は……？」

その声に反応してその男はこちらに向き直った。

「ああ、失礼。私ゾディアックのサジタリウスと申します。いきなりの相談なのですが、ちょっとあなたを誘拐したいと思いましてね」

「……嫌に決まってるだろ、馬鹿なのかお前は。」

「これは手厳しい。いえね、私はある魔力を狙っていたのですが、それはあなたのために使われてしまったみたいでして。

ひょっとしたらあなたの中に残ってるかもしれないじゃないですか。だから……バラバラに解剖したいと思っているのです」

声のトーンが一つ下がり、嫌な風が走り抜けた気がした。一瞬遅れてこれが殺気なのかと気がついた。

――怖い。

今この瞬間にも目の前の男が私の命を狙っているかと思うと怖くてたまらない。

でも、逃げたくはなかった。絶対に。

「私だって……戦えるんだ。」

「へえ？　それはつまり私に勝つって言うんですか？　どうやって？」

どうやって？　そんなもの、

……どうやるんだろう？

と、一瞬気が抜けた隙に、男から何か鋭利な鉄の紐が私を貫こうと迫ってきていた。

避けきれるタイミングではなく咄嗟に身体を腕で庇う。が、その紐は私の腕にも届かなかった。

ヒュン――…、と短い音がして何処からか何かが飛来してきた。

それは、紐をはじくと私の目の前に突き刺さった。

一振りの大剣（クレイモア）。

私が武器屋から持ってきたものではない。

無意識のうちにその剣を手に取り、中段に構える。

――その瞬間、剣の根元が輝き出した。光の元となっているそこには、荒々しく刻まれた文字。見たことも無い文字だが、イメージが伝わってくる。

『破』、と

光は止まらず、むしろその強さを増していく。

膜のように光が広がり、中から再び剣、いやそれを持った腕、兜と、続いて鎧。最後に足まで出てきた。

人型のそれは周りを見渡し始めた。

鼻まで隠れた兜に、首から足先まで鎧で覆われている。しかし、それよりも目立っているのは、背に浮かんでいる9本の剣。

刃のほうを外にして柄が背中で隠れるように浮かんでいる。

「……メサイア……」

なんとなく、本当になんとなく頭に浮かんだ単語を口にすると、それはこちらを振り向いて跪いた。まるで主に忠誠を誓う騎士のように。

「精霊、獣……だと？」

……精霊獣？

「ははははははっ！！　それも普通の精霊獣ではないようですね！　どうりで必死に守ろうとするわけだ！　ますます解剖したくなってきましたよ！」

殺気がより濃厚になる。男は懐から石を取り出すとそれを握りつぶした。

「ですがね、精霊獣なら私も持っているんですよ。」

光が走り、全身を赤い布で巻かれたミイラのような2メートルほどの人間が光の中から姿を現した。

出てきた勢いのままこちらに突進してくるが、メサイアの剣の一振りで叩き伏せられる。

「……一撃ですか。さすがにこんな偽物では太刀打ちできませんね。

しかし時間稼ぎにはなったようだ」

気がつくと先程の鉄の紐がこちらに先端を向けて、ぐるっと取り囲むように無数の数で私たちを取り囲んでいた。

しかし、またしてもそれは届くことはなかった。

いきなり何の前触れもなく、男に無数の氷の雨が降り注いだ。

それを防ぐために、男は舌打ちをしながら鉄の紐を総動員して目の前に壁を作ってそれを防ぐ。

「この魔法は……、フェンか？」

「ユキネ！」

右後ろにあった穴からフェンが息を切らして出てきた。

「これは……精霊獣？」

私の傍らに浮かんでいるメサイアをみて、警戒をし始める。

「大丈夫だ、フェン。こいつは敵じゃない。……多分」

私の言葉に少し考えて頷くと私のそばによって来て、今度は男を見ていった。

「お前、死んでなかったの？」

「いえ死にましたよ。ただ身体が死んでも完全には死なない人間だっているってことです。それでも一瞬で殺されるとは思っていませんでしたがね。

あんな化け物みたいな人間がいるとはさすがに想定外でしたよ。見たところ、あの場に彼を一人だけ残してきたようですがいいんですか？　死にますでしょう？　あなたの連れの男。

……しかし、そのおかげでこちらはちょっと形勢不利ですかね、身体もないわけですし。此処はいったん撤退するとしましょうか」

そう素早く決断すると、男は私たちに背中を向けた。その背中にフェンが魔法を放つが、男の身体に変化が現れ、その魔法は当たらなかった。

男の身体は先程の針金に変化すると上に飛んで行く。いや巻き上げられていると言ったほうが正確のようだ。

その先に目をやると天井にあいた穴に人影、その人物が持つ何かに巻き上げられているようだ。あれはブローチ、か？

そのブローチから声が響いた。

「では、またお会いしましょう」

そう言って、サジタリウスであろうブローチとそれを持った人物は立ち去っていった。それを確認したようにメサイアは薄れていくように消滅した。

サジタリウスの気配が遠ざかって分からなくなった後フェンは私に向き直って聞いてきた。

「ユキネ……今の精霊獣は…」

「ああ、多分私に関係あるものだと思うんだが……よく分かんないな」

手に持った剣を見つめながらそういうと、フェンも考えにふけようとしてはっと顔を上げた。

「急がないと、ハルユキが一人で戦ってる。ユキネは……」

「私も行く。絶対、行く。」

剣を握り締めて必死に訴えた。

「……分かった。」

一瞬迷うような表情を見せたが、フェンは頷いてくれた。

足並みをそろえて、洞窟を進む。曲がりくねった一本道をしばらく進むと目線の先に出口が見えてきた。おそらく私が気を失った場所だろう。

そのままスピードを緩めずに洞窟を抜けると、信じられない光景が広がっていた。

狂鳴

地面に身を削られながら、岩壁に激突する。

「がっ……はッ……！」

否応なく肺から空気が吐き出され、体から力が抜けてしまいそうになる。

頭に何かいるかのように、ガンガンと頭の中で何かが叫んでいるような音が遠く鳴っている。

ハルユキは落ちてしまいそうになる意識を、懸命につなぎとめ、岩にめり込んだ身体を何とか外に出す。

ガクン、と体がいうことを聞かず思わず膝をついてしまう。

（血が足らない……か）

しかし今のハルユキに、ゆっくり回復を待っている時間などない。

再びじらすようにゆっくりとラストが歪に笑いながらこちらに歩いてきている。

震える膝に拳で喝を入れ、無理やりに膝を立たせてラストに向き合った。

ラストはそれを確認するとさらに笑みを深く顔に刻んで、突っ込んできた。

右拳が進行先の空気を押しのけながら、俺を殺そうと襲ってくる。

それを間一髪でかわし、左に回り込む。

それを予期していたかのように、ハルユキの体を狙ってラストの左足が飛んできた。それを、反応が遅れながらも屈んでかわし、そのまま立ち上がりざま右のこぶしを突き上げる。

しかし、キレが足りない、力が足りない。当たりはしたもののダメージを与えられる程のものではない。

自分の腕だとは思えないほど力が入らなかった。

こちらを見て笑っている余裕のラストから一旦距離をとる。しかし、間髪いれずに襲いかかってくる。

その腕には、靄のような魔力が集中している。

「っぁあああああああ！！！！」

らしくない大声で自分を高ぶらせ、力の限り拳を握りこむ。

互いに渾身の右拳を振るった。

またしても拳同士がぶつかり、洞窟が揺れる。

そして、同じように拮抗するがその均衡はまたもやすぐに崩れる。

違うのは、押し切られたのはハルユキの方だということ。

……失血でもう、足がついてきていなかった。

ガクン、と膝が折れ力のバランスが崩れる。

ハルユキの拳は押し返され、ラストの拳が胸に直撃し、再び後ろの岩壁まで吹き飛び背中を強く打ち付けた。

「がァッ……！！」

口からもとんでもない量の血が飛び出し、さらに意識が遠のいていく。

もう目の前の少ししか視界が存在しない。

「まだ死なないのか……。ホントに凄すぎるだろ。ハルユキィ…」

岩からはがれ前のめりに倒れこもうとしたときに首をつかまれ壁に押し付けられた。

「惜しかったなあ。多分あの爬虫類がいなかったら、お前が勝ってたぜ？　まあ、言ってもしょうがないことだが。
何はともあれ俺は今からお前を殺すが、……できれば死なないでくれよ？」

当たり前のように唐突に死の宣告。

ガンガン、ガンガンと頭の中の何かが暴れ続けている。

何のためらいも猶予もなく、ハルユキに決死の拳が迫る。

しかしハルユキの目にはそれはとてもゆっくり映っていた。

――――――ぱしっ

短く乾いた音。

何の音か、何が起こったのか理解できずにラストは驚き、それを見た。

ハルユキの手が、ハエでも捕らえるかのようにゆっくりとラストの拳を受け止めている。

「……は？」

ラストが目の前の光景に思わずあっけに取られ、間抜けな声を上げる。

先程まで、いや今でも虫の息の男が自分の渾身の拳を、大して力も入れていないような腕で受けとめている光景に不自然さを感じざるを得ない。

その、目線が不意にハルユキの目に、何かに吸い寄せられるように移動する。

何も映さないような灰色の眼。

しかし、何も映していないわりに、何かがその中で蠢いている。

――不意に、ラストは〝それ〟と目が合った。

そして、流れ込む。

ｈｊｄｈｖじゃｋｆジェｋｊふぁｊｈｌｄｋｒｊｄ：；ｒペ理ｊｋｊ智恵ｋｒｐ：お江ｗｐ@取とｓ６５おア０知うｂｓ狂：：日ｔ５：：ｓｋｂ；ｐ：お機ｂｓ・ｄｋｆｊｇ死ｊｂｋｌｓ；江ｋｒｂ¥ｇ、ｓｄｌｋｂとｊｔｇ¥ｓｋｒとｓ：ｋｔｌん¥ｋｓｌｂ、ｇｌｓ・ｋｇｓ・於ｒｋｔじぇｒ¥ｋｊｓｊｍンｂｓｌｊレグｋｊｇ伊ｄｊンｔｇｍン所ｋｆｇｔｊロｊｍｂｆｊｍｖｓ；ｌｋとｔりぃばｋｓｐレｋびてょｍｓｒ智愚ｊｇｙ市ｒｋｂｍｂｇｌｄｍイヒッｋｖｆ；ｍ九ｓｋｆｌｄ；ｋｖンｒｊとｂｔ炉れヴぇまｖ】十おｓｐと

ｒｍｋｒｈヴィれ所ｖン理恵ｊｆ：：おア九ｊふぇｒｋｒｇた家ｊｂｆｄｓｍふぃおｓｊ地派得ｊｔｌｒｙｋｙｆ死ｓｋｌ；ｆｋｌｋｖ儀かｓｋｌｇｊｓｒｖｋｄｆｊｈ；：『ｖふぃおｄｋｔ、俺ウェｋｖｔ家ｗｔｋｙｓｒ家ｌとぇｒ知恵ｐウェ４ジィおｒｔくいｙｒと@ｄｋｖふぃおとｒｌウェｋｖｔ家ｗｔｋｙｓｒ家ｔｗｌ殺す殺す殺すｐ：：ａｏ、ｆ；：ｓｇｆ、ｌｇ、ｆｋｓ時ｇｋ氏ｓｄｌ；絵おｐｒｄ：：ｐｋｙｌｄ、ｋｓ：：ｒｌ』ｚ、ｆｇｌ、ｔ愛ｆ、ｌ；ｄ：：、湯：：ｒｋｔ、おｒｊ』@ぺｒ個ｐれ：：@狂――……

「っあああああああああ！！！？」

脳髄が掻き回されているような感覚が駆け巡る。たまらず発した絶叫が洞窟を震わせた。

何かに怯えるようにハルユキから手を離し、一瞬で後ろに下がる。

「お…前ぇ……。ハルユキ…。心（なか）、に…何、飼ってやがる…！！」

怯えた声に怯んだ眼。口の端からは苦悶からか涎が垂れる。

しかし、しかしその声には狂気の驚喜が含まれていて、口の端はつり上がったまま。

「お前は、ホントにおもしれえなァ……！　ほらもっとだ！　まだ

まだだろォ！　楽しませてくれんだろォ！！？」

そう言って、立ち上っていた白い靄を全て右腕に集めていく。それだけで動いてもいないのに、空気が揺れ、地面が悲鳴を上げる。

ラストはその、もはや完全に人智を超えてしまった拳をハルユキを殺すためだけに振り上げる。

それをハルユキは、ずれた時間軸の向こう側から見つめていた。

（何だ……？　この声…）

ラストの声ではない。

先程から頭の中だけに響いてくる声。

ぼそぼそ、ぼそぼそと頭の中に少しずつ入り込んでくる。しかも染み付いてしまったように離れない。どんどんと、その音が大きくなっていく。

そしてハルユキは、何かに導かれるように頭の中で暴れるその言葉を反芻した。

――――其れは唯、殺して啜る――――

一気に、視界が広がった。ただ、見える世界には色彩が存在していない。

色あせた世界の真ん中では、狂気にまみれたラストがこちらに拳を振りかざして近づいてきているのが見えた。

額には既に違和感。そこには在るのは恐らく異形の角。

次第に意識がはっきりしてくる。覚醒した意識のせいか、ハルユキは神速で迫るそれを首を傾けるだけで避けた。

ラストの攻撃の余波で拳の先の壁が捲れて巨大な穴があき、空気がびりびりと震える。

しかし、ハルユキは傷つきもせず、気にも留めない。

ただ、避けざまにその手を掴み握力だけでへし折った。

目の前で、自分の折れた腕を押さえて、ラストが絶叫している。

目の前にいるのに、それはとても遠くのことのように感じる。

不思議で不快な感覚。

しかし自我ははっきりと残っていた。

この暴れまわる狂気の中、自我を保っていられる自分がどこか悲しかった。

手を握る。

硬く堅く握り締めて、それはやがて拳に変わる。

「……じゃあな」

その拳をラストの腹にまっすぐ叩き付けた。

ラストの強靭な体が悲鳴を上げる。臓物をつぶし、アバラを砕き、背骨を叩き折る。

そのまま貫通するかと思ったところでラストの体は力に追いつき、吹き飛んだ。

風を押しのけ、音に追随するかのようなスピードで。

やがて、岩壁にぶつかるが、勢いは微塵も止まらない。

直撃した所の3メートル付近を一緒に吹き飛ばしながら、彼方に消え去った。

穴からひびが伝わり、洞窟のおよそ三分の一の部分が崩れ落ちていく。

崩れた所から覗く月が、気絶した鎧龍と唯一立っているハルユキを照らしだし、決着を示し出した。

ハルユキの顔には歪さを感じる程に何も浮かんではいない。

◆

◆

◆

――――山の中腹。

「まったく今回は災難だらけでしたね。」

生い茂った木々の中にポツンと立った少年の手の中にあるブローチが声を発していた。

「そうだね。サジタリウスは身体もなくなっちゃったし。」

それを手に持った少年がさらに追い打ちをかけると、サジタリウスと呼ばれた男はブローチでは顔も分からないが、明らかに落胆しながら続けた。

「……私を殺したあの男。調べてみたほうがいいでしょうね。あれは、もはや人外の域です。今後あれが敵に回ることになれば厄介なことになるでしょう。」

少年がこくんと頷いたのを確認すると、サジタリウスはさらに話を進める。

「しかし、今回は収穫も確かにありました。あのユキネとかいう娘！　あれは素晴らしい…！　あんな精霊獣ははじめて見ましたよ。今度の聖会にででも報告して……」

しかし、闖入者の登場によってそこで話は中断させられる。

森の陰に人の影。気づく前にかなりの接近を許してしまっていた。

「久しぶりやなあ。サジタリウス。それが本体やったんかあ。」

子供はその変に訛った言葉を使う男を不思議そうに見つめ、サジタリウスは絶句して言葉を失っている。

「……貴様ァ、生きていたのか…！」

「そんな言い方あらへんやろ？　せっかくかつての仲間がわざわざ会いに来てやったちゅうのに。」

サジタリウスはさらにうろたえるが、体のない今の状態では後ずさることさえできはしない。

「ジ、ジェミニ！　私を連れて今すぐ逃げなさい！　早く！！」

ぴくっと二人の〝ジェミニ〟がその声に反応する。

瞬く間に殺気が満ちていく。少年のジェミニはそれだけで足が地面と同化したんじゃないかというほど足を重く感じ、一歩も動けない。

「そうか……。今はその子が『ジェミニ』、か。ホンマはサジタリウスだけのつもりやったんやけど、すまんけど

……死んでくれな？」

静かな森に、二つの断末魔が響き渡った。

◆　◆　◆

どれほどの宙を跨いだだろうか。

やがて、高度が下がり地面にぶつかり、木々を2，3本なぎ倒してようやく勢いが止まる。

止まった瞬間、ゴボッと信じられない量の血が口からこぼれて、上半身が血に染まった。

運よく唯一折れていない左腕を使い、何とか仰向けに寝転がる。

「……生き…てんな、あ…ひゃはっ……ごぶッ…！」

口を動かすだけで、体が悲鳴を上げ口から血が零れる。

内臓はほとんどが破裂。

左腕以外の骨は粉々、おまけ血も足りない。

「ま……なんとか、するか……。」

生き残ってまた続きを紡ぐために、寝たまま体の治療を始めた。

白い靄が体全体を包み込んでいく。

そんな中、ラストは先程の最後の一撃を思い起こす。意思に反して体が震えだした。

……怖いのだ。

「ははははっははははっははははっははははっはははははははははっははははっはははは！！！」

笑う。嗤う。哂う。自分を。世界を。宿命と運命を。

恐怖さえもワラい飛ばし、狂気で飲み込み尽くす。

「やっと……やっとだ……！！」

体は震えていても、心と魂は歓喜にうち震えているのだから。

帰宅

目を開けると、灰色だった。

世界も灰色、自分も灰色。世界に溶け込んで個を失っている。

ラストを倒して、崩れた洞窟を眺めていると、ふと瞬きした瞬間に、世界が完全に灰色に変わった。

しかし、俺の心はその変化に驚きもしていない。

不意に世界の中心に歪が生まれる。

歪が歪のまま歪として安定すると、相手が生まれたことをきっかけに”俺”も世界から分離する。

――自分でも俺を使えるようになったんなら僥倖だ――

九十九、か。

目の前の歪は世界に溶け込んだまま言葉を発している。

それとも世界が歪みに溶け込んでいるのか。

……それとも、世界と九十九は同一なのか。

――世界（これ）はお前だよ――

俺は言葉を発していたのか、俺の思考に九十九が返答する。

いや、唇すら存在しない世界では、話すことなんかそもそもできないのかもしれない。

――お前と俺が混ざっているのは、お前が俺を使ったからだ――

…助かったよ。

お前の力がなかったらもう少し苦戦してた。

――その言い方は正しくねぇな。俺の力じゃなく、お前は俺を使ったんだ。俺は”俺”じゃない。ただの力、だ――

よくわからないぞ。

――俺はお前の一部ってことさ――

ますます意味が分からない。

お前は一体なんなんだ。

お前が俺の一部ってんなら、お前は…

――そう、お前だよ――

……だからわかんねぇって。

何も、分からないんだ。

――俺は正義でも悪の味方でもなく、お前の味方だ。それだけ覚えてろ――

言ったろ。

お前は生理的に信用できないって。

――じゃあ、お前は他の何かを信じてんのか――

俺以外は信じてるさ。

だから俺はお前も信じない。絶対に。

――ふん。…お迎えだ。お前は帰れ――

お迎え？

「……ハル？」

その声をきっかけに灰色の世界は崩れて、また世界が戻った。

しかし、その目に映る景色に相変わらず色彩はない。

◆

◆

◆

穴を抜けて元の洞窟に戻ってみると、洞窟の3分の1ほどが崩れ落ちていた。

ドラゴンはその巨大な体を地面に横たわらせて、気絶している。いや死んでいるのかもしれない。

体にはあの何もかもを防いできたであろう鎧は存在しない。

洞窟の崩れた所から射しこむ月の明かりの中にハルユキが全身を真っ赤に染めて立っている。

ユキネとフェンはそれをほぼ同時に見つけると息を呑んで瞬時の後、全力で駆け寄った。

酷い怪我をしている、それももちろんある。

……しかしそれ以上にハルユキに対して感じる印象がどことなく違ったからだ。

ハルユキはいつだって強くて、時々バカをやって、失敗して、でも背中は二人にとって何よりも信じられる。

しかし、今こちらに向けている背中からは、触れれば崩れて壊れてしまいそうな、まるで体温が存在しないような希薄な印象しか伝わ

ってこない。

「……ハル？」

すぐ後ろまで近寄って声をかけると、ハルユキは二人に話かけてきた。

「……よ、無事だったか。悪いな、助けに行けなくて。」

纏う空気は先程と変わらない。まるで中に別の誰かが入っているような気すらしてくる。

「ハル…！　その傷……！」

悲痛そうなユキネの声にハルユキが苦笑して、答えた。

「大丈夫だ。まだ痛むけど、傷口自体は……」

そこまで言ってハルユキの体がぐらっと傾いた。

そのまま強かに地面に身体を背中から打ちつけた。

ハルユキが倒れることなど想像もできなかった二人は、それを呆然と見送っていた。

「ハル！」「ハルユキ！」

倒れてしまって動かないハルユキに二人が同時に駆け寄る。

無理やりに再生させた身体には、今はもう力が残っていなかった。

「……悪い悪い。ちょっと体が動かなくてな。」

身体は動かさないまま口だけを動かせて、ハルユキが力ない声で言った。

顔は、顔だけは不器用に笑っている。

「けど、とりあえず戻らないとな。……よっ、と。」

震える手で身体を起き上がらせようとするハルユキの肩をユキネが押さえつけた。

「……無理を、するな」

俯いて顔が見えないユキネに笑いかけながら、ハルユキは言いかえした。

「大丈夫だって。俺は体が丈夫だから……」

「じっとしていろ！！」

シン、と元から静かだった洞窟がさらに静かになった気がするほどに音が消えた。

「無理をするなって、お前が言ったんだろう……？」

ユキネの目に怒りが宿る。怒っているのは何に対してなのかは、少なくともこの場の3人には分からない。

「一人じゃないなら無理をするなって、お前が…！　私に言ってくれたじゃないか……！」

その目にたまった、しかしそれでも零れそうにないのはユキネが少しは強くなった証なのだろうか。

いつの間にか、世界に色が戻っていることにハルユキは気づいた。

「私のせいでハルが無理したのも分かってる。でも、ただの我侭だけど、お前だけが我慢しているのは、嫌なんだ。だから……」

血だらけのシャツを握り締めて、言葉を搾り出した。

「だから、……無理、しないで……！」

ちょっと驚いた顔で、次に少しだけ苦笑してハルユキは体から力を抜いた。

「わかったよ……」

ゴツンと頭を地面につけた音がしてから、答えた。

ただ硬いだけだった地面が、ひんやりと気持ちいいのはハルユキに体温がしっかりと戻ってきている証拠で。

下がった頭の横に今度はフェンがちょこんと座っていた。

「……お疲れ様。」

「お互いにな」

「……私は、そこまで疲れてない。」

「なら、明日。ちゃんと４人で依頼に行くからな。忘れるなよ？」

「……うん。無理は、しないで」

「Ｇクラスだから大丈夫だよ」

フェンとの、いつも通りに短い会話が終わる。

今はほとんど動きもしない身体で明日依頼に行くってのも変な話だと自分で思いながら、天井に視線を戻した。

「あー、手遅れやったか」

そこで４人目が洞窟中に入ってきて、こちらに近づいてきた。

「ジェミニ…？　来てたのか」

「ハルユキはひょっとして動かれへんの？　……ふーん、なら」

ハルユキの声を無視してどんどんと近づいてくる。

フェンとユキネを素通りして、ハルユキへと手を伸ばす。

……その手からほんの微かに血の匂いがしていることは、弱ったハルユキも、フェンもユキネも気づかない。

そしてそのまま……、

「よっと。…んじゃ、みんなで帰るで？」

ハルユキを肩に担ぎ上げた。

「聞こえたで？　明日はやっと四人で依頼に行くんやろ？　なら、はよ帰ってしっかり休まんとなあ」

「ああ、行くらしいぞ。なあ、ユキネ。」

「Gクラスだけどな。」

「……ジェミニも、来るの？」

「…こんな大の大人を泣かして、楽しい？」

「「「わりと」」」

賑やかに山を下る人影、４つ。

◆

◆

◆

山を下りている途中で、ダイノジのおっちゃんとＢＬＵＥＴＡＩＬのメンバーが、全員ガチガチに武装して山を登ってきているのを見つけた。

俺たちの姿を見つけると、イシルが杖を放り出してフェンに抱きつき、大声で泣き出した。

「ごめんね……。私たちなんにもできなくて…。フェンちゃんが生きててホントに良かった…」

「おい。気持ちは分かるがまだ大声出すな。古龍が追ってきたらどうするんだ……！」

「それは、大丈夫。倒したから」

何気なく言ったフェンの一言に、その場が凍りついた。

「……倒したって、え？　古龍を？　たった４人で？」

「違う」

そうフェンが答えると、その場の雰囲気が元に戻った。

左腕に包帯を巻いたリーダーの男が笑いながら言った。

「そりゃ、そうだろ。４人で古龍を討伐なんて前代未聞にもほどがある。ん？　じゃ何を倒したってんだ？」

「倒したのは、古龍で間違いない。違うのは４人で倒したってところ。戦ったのはハルユキ一人だけ」

一気に言った後、いつものようにふうと息を吐いた。

空気が凍って、きっちり１０秒後、

「「「「「えーーーーーーーーーー！！！？」」」」」

「ホントかよ……！」

「はっはっは！　ハルユキなら不思議じゃないだろ」

様々な大声が森中に響き渡った。

旅日和

山から下りてきて2日。

俺たちはその日の依頼をを2，3個終わらせてから、宿屋の中庭に集まっていた。

俺の怪我も疲れも完全に回復し、以前と変わらない、いや更に少しだけ強化されたといっても過言じゃないぐらいの健康状態に戻った。

今ここにいるのは、ユキネの魔法を見るためだ。

ユキネは一人で魔法を習得して、皆を驚かせようとしたらしいのだが、どうにも上手くいかずフェンに相談して、中庭にいた所に俺とジェミニが来て、しぶしぶ事情を話させたところだ。

聞くところによると、文字と魔力を知り合いから返してもらったとかなんとか。

魔法のことはよく分からないが、そう言うんならそういうことなんだろう。

知り合いというのは、おそらくあの霊龍のことだと思う。

ユキネを攫ったのは別に自分の命をどうにかするためわけではなく、

もう生きていられないから早くやるべきことをやるためだったのだろう。

「まずは魔力を感じて、文字を浮かび上がらせる、とこから」

「やり方がまったくわからないんだ……」

申し訳なさそうにユキネが答える。

「魔力は感じてる？」

「ああ、前は少なすぎて分からなかったが、今は身体の中に何かがある気がする……たぶん」

「それが何処から流れてきているかは、分かる？」

「ちょっと待て

……右肩、と左手？」

「どっちやねん」

「……分からない。本当にどっちもなんだ」

フェンとジェミニは不思議そうな顔で顔を見合わせてから、二人で少しだけ話すとフェンが言った。

「とりあえず、肩のほうに集中して、やってみて。やり方がわかっていれば、簡単」

「わかった」

そこからもう一度集中し始める。するとすぐに、右肩が白く光り始めた。

「文字は……『白』か？　それ。」

肩の辺りに服越しにぼんやりと文字が浮かび上がっている。

「……できた」

いとも簡単にステップが進んだことにユキネは驚いているようだ。

「そこまでできれば、後は自分のイメージで魔法を作っていけばいいだけや。

それにしても、『白』かあ。ワイたちは全員異文字なんやなあ」

「俺は使えもしないけどな。そういえば、俺ジェミニの文字知らな

いな。どんなんなんだ？」

「ワイか？　ワイはこれや」

そういうと、首筋の辺りが光り始める。

刻んであるのは『流』の文字。

「おいおい、異文字ってのはかなり珍しいんじゃなかったのか？」

「んー、まあ５０人に１人ぐらいやからそんな驚くほどのモンでもないんやけどな。まあ３人いて３人とも異文字ってのは珍しいやろうな」

そう会話している間に、フェンとユキネは次のステップに進もうとしていた。

「じゃあ、そのまま何か魔法を……魔装具は、……え？」

ぼっとユキネの手のひらに白い炎が燃え上がった。

「魔装具なしで、安定してる……」

「へえ、そりゃ便利やなあ」

「そんなに違うのか？　魔装具があるのとないのは」

「魔法の威力やらなんやらは変わらないやろうけど、基本的に魔導師は魔装具がないと戦えへんからな。弱点ともいえる部分がないのはかなりお得やろ」

「……そうか、そりゃそうだな」

「そう言えば、左手のほうはなんだったんだ？　結局」

「ん…？　ああ、忘れていた。えっと、左手に集中……」

すぐにも左手に変化が現れる。

先程とは違う、煌く金色の光。

左手に現れた文字を見ると頭の中にイメージが送られてくる。

顕れたその文字は、『破』。

光の膜ができ、その中から空気を切り裂きながら何かが飛来してきて、ユキネの足元に突き刺さった。

「これは、あの時の……」

一振りの大きな剣。

古いが良い剣だ。刃こぼれもなく刀身のバランスもいい。

俺は自然と手が伸びそうになっているのを逆の手で掴んで制止する。

それをそのまま背中に隠し、ユキネに問う。

「知ってるのか？　この剣」

「この前山で使っていた剣だ。手に持ってたら消えてしまったから、何かは分からなかったんだが……」

見ると、剣にも『破』の文字が刻まれている。

（漢字……じゃないか…？）

その剣からはイメージももちろん伝わってくるが、刻んであるのは間違いなく漢字である。

それを言おうとした所で、横から出た驚きの声に妨げられた。

「文字が二つある、なんて、聞いたことない…」

「確かに異常なほどに特殊なケースやな……」

「ユキネ……そういえば、あの精霊獣は…」

「！　精霊獣まで出せるんか……」

「精霊獣ってなんだ？」

俺が当の本人のユキネに聞いてさあ？　と首を傾げてくる。

そんな俺たちに、何で知らへんねんとジェミニがため息をつきながら説明してくれてた。

「精霊獣っちゅうのはな、まあよくは分かってはおらへんのやけど、極々稀に魔力が高い魔導師に突然発生する守護獣のことや。

何が原因で顕れるかも分かってへんし、滅多に出ることもないから謎に包まれとるわけやな」

それがユキネにも宿ってるってわけか。

「スゲェな。ちょっと見せてくれよ」

「……どうやって？」

……さあ？

「前は、どうやって……？」

「あの時は勝手に出てきたんだ」

精霊獣はとりあえず置いておくことにして、更に魔法の練習を重ねることになった。

結論から言えばユキネもフェンと同じように４つの属性を扱えるということは分かった。

ただ、決定的に違う点が一つ。

白い炎、白い土、白い水に白い風。

その全てが肩の文字に習うように白に染まっていることだ。

これにどんな意味があるかは分からないが魔法の練習をしているユキネは特別楽しそうで、あまり気にしていないようだ。

◆　◆　◆

フェンが買い物に行き、ジェミニがナンパをしに村へ言った後もユキネは一心に魔法の練習をしていた。

俺も特にやることもなかったのでそれをボーっとと見ている。

日が真上から傾き始めたころ、ユキネは動きを止めた。

じっと目の前の手に乗った火の魔法を妙な顔で覗き込んでいる。

「なんちゅう顔してんだよ」

そう言いながらユキネの後ろに回り頭を軽く小突いた。

「い、いや、魔法を使っている自分を、ちょっと不思議に思った、のかな。改めて、びっくりして」

「なんじゃそりゃ……」

言いながら設置されたベンチの上に座り込む。

視線を上げると、椅子のそばに寄り添うように立った木の、葉の間から木漏れ日が差し込んできている。

「……魔法さえ使えたらと、そればかり言ってきて、今実際に使えるようになってわかった。そして、決めた」

ユキネも空を見上げて、光に目を細めながらそう言った。

「……何を？」

「……この前な、あなたの強さはそういうことじゃないって私に言った人がいてな。

その人が言っていた強さも、戦える強さもまだよく分からないし、持ってもいない。それが気づいたこと。

そして決めたこと。……私は強くなる、誰よりも。もちろんハルよりもな」

「……俺よりもか」

「お前よりもだ」

二人してニッと笑いあう。

「私は強くなるために旅を続ける。天国に行った皆には待ってもらうことになるけど、私は私の我侭で強くなって我侭で私がもらった想い（もの）を世界に返していく」

「……じゃ、俺も強くならないとな。最強にくらいならないと、超え甲斐がないだろ？」

そりゃ大変だ、と言ってユキネは俺の隣に座り込んだ。

「ハルは？　ハルは何で旅をするんだ？」

「俺か？　俺は、そうだな……ただ、世界を見たいだけだよ。世界がどれだけ広いのか自分の目で確かめたいだけだ。

果たして世界は両手で囲えるくらいに小さいのか、それとも目も届かない程に広大なのか」

世界の広さは、1億年を生きた俺でも知らないことをきっと教えてくれる。

容易なことではない。でも不可能でも決してない。

ユキネは嬉しさとちょっとだけ悔しさが混じったような顔で、そうかと言って笑った。

その顔に無理はなくて、いつもよりも少しだけ、強く見えた。

◆

◆

◆

「じゃあな、おっちゃん。世界を一周でもしたらまた来るよ」

「おう！　そん時はまた飯でも食わしてやるよ」

そう言って最後の荷物を馬車に乗った俺に手渡した。

と言っても、荷物はこれで全部だが。

「この近くで一番近いのは、……そうだな、セシ村だがあそこは何もないところだから素通りして、次の町に行ったほうがいいかもな」

「どっちみち通るんだろ？　ならそこに着いてから決めるよ」

「そうか。ま、好きにやればいいさ。方向は川を渡って馬車道をまっすぐ行けばいずれ着く」

「わかった、色々世話になったな。ジェミニ、3時の方向に全速前進ー」

「ジェミニ馬車は安全運転第一が信条なんやでー」

馬車が全速とは程遠いゆっくりとした速度で走り出す。

相変わらず屋根がない馬車からは、雲一つない空が良く見える。

本日も、快晴なり。

実に旅日和だ。

夜の訪問者

カラカラと、馬車の車輪が回る音でハルユキは目が覚めた。

傾いた日が横から照り付けてくる。

もう太陽は半分山に隠れている。

喉の渇きを感じ、寝癖の付いた頭を掻きながら身体を起こそうとすると、服に抵抗を感じた。

いつの間にか横で眠っていたフェンが両手で服のすそを握っている。

勢いで起きてしまったのか、しょぼしょぼした目でハルユキを見ている。

「ん……おはよ…」

「ああ、起こしたか？」

「……ハルユキが起きるなら、起きる」

「あーあ、お前髪ぐちゃぐちゃじゃねえか」

ハルユキはそう言いながら座ったままフェンの頭の後ろに手をやり、後ろ髪を撫で付ける。

「えっ……？　あっ……！」

「こら暴れんな」

胸の中でじたばたするフェンを押さえつける。

しばらくすると、大人しくなったので乱れた髪を整え始める。

「ハルユキ……ちょっと、汗臭い」

…この野郎。

「……夜になったら、水浴びするから我慢しなさい」

「……うん」

フェンは両手でハルユキの服のすそをまた握り締めている。ちょっとだけフェンの重心がハルユキのほうによったがハルユキは気づきやしない。

「お前、髪ぐらい気にしないと嫁の貰い手がないぞ？」

ため息をつきながらハルユキが言った。

「……ハルユキは、恋人がいるの？」

「……すいません。独り身が調子に乗りました…」

「……恋人、いないんだ…」

フェンがつぶやいた少しだけ喜色が混じった声を聞くことなく、白い土の塊が跳んできてハルユキは吹っ飛んだ。

顔を真っ赤にしたユキネがハルユキに向かって手をかざしていた。

「お、お前、私が寝てる間に……」

「ま、待て…！　俺はフェンの寝癖を直してただけで……」

「うるさい！　死ね！！」

また、ユキネの手に魔力が集まっていく。

「それは、洒落にならんって……！」

そう言うと、ハルユキは馬車を飛び降り逃げていく。

「おのれ……！　猿みたいな奴め…」

俺を追おうと馬車の縁に足をかけたユキネが、まだ少し赤みが残った顔でフェンの方に向き直った。

「ふ、フェンはやっぱり、……その、なんだ。ハルが……」

スポン！　とユキネの額に矢が突き刺さってユキネの言葉を邪魔した。先は吸盤だが。

独特のエンジン音を立てながら、ハルユキが手に小さい弓を持ってオートバイに乗って馬車を抜き去っていった。

「ふはははははははははは！！！……って、ぎゃあああ！！」

即席で作ったためか、一分も持たずにオートバイが消えて、ハルユキは人身事故を起こし地面を転がっていく。

「はっはっは……馬鹿だなあ。あいつは。さぁ、教育教育」

血管が浮かんだひたいの吸盤を取りながら、手に剣を持ちハルユキの所へ向かう。

「……ワイ、影薄いわあ」

◆
◆
◆

「夕飯の準備、終わりましたあ」

干し肉とライ麦パンに薄いスープ。

それだけの食事だが空腹ならばおいしく感じるものだ。

今、俺は何とか夕飯の準備をやることでユキネに許してもらうことになっていたのだが、ユキネはそんなこと忘れてパンを既に頬張っている。

俺たちの前には森が広がっている。

暗くなってから森に入るのは危険だということでここに野宿することになった。

別に獣ぐらい物の数ではないのだが、この森は見るからに異様だったからだ。

木が所狭しと並んでいるだけで、獰猛な獣の気配が満ち溢れているわけでもない。

ただ、端が見えないほど続く森に花も葉も存在せず、全て枯れ果てて生気を失ってしまっていた。

この森の境界線までは、草が青に緑にと生い茂っているのに、森の中になるといきなり地面と枯れ木のくすんだ茶色が支配してしまっている。

「なんだろうな、この森」

「不気味だな」

「でも、馬車道はこん中に続いてるんやから、通るしかないしなあ」

心なしか冷たい空気がこちらに流れ込んできている気すらする。

「ま、飯食ったらさっさと寝て、早めに出ようぜ。とりあえず村まで行けば飯も寝床もあるだろ。見張りはまた俺がするから。昼寝てたし」

「いや、私も寝てたから…」

「こういうのは男の仕事だよ。ほら、さっさと寝ろ」

既に少ない食事を平らげてしまっていたユキネとフェンを馬車へと促す。

「ジェミニも…っていないし」

「ハルユキー、あとよろしくなー」

そう言って、もはやジェミニの特等席となった御者台に潜り込んでいた。

それから何時間か。

少しずつ火に薪をくべながらデカデカと空に鎮座する月を見ながらドンバ村から少しだけ持ってきた酒をちょびちょびと飲んでいい気分に浸っていると、火が弱くなってきていることに気づいた。

慌てて薪を足す。

しかし上手く火は燃え移らずどんどん火が小さくなっていく。

このままでは消えてしまうのでちょっと思いついたことをやってみた。

火に手をかざし、ナノマシンに意識を集中する。

パチッと木が爆ぜ一気に燃え上がった。

「……やってみるもんだな」

『酸素を集めろ』そうナノマシンに命じただけで、木の周りに酸素が集中し、一気に燃え上がったのだ。

目に見えるものは今までも操れたが、空気とか地面とか集合体の物質にはなんとなく効かないかと思っていたのだ。

だが考えてみれば、壁やドアも原子の集合体だ。それができて他ができない理屈もない。

試しに、そこらの地面にナノマシンを潜り込ませて操ってみると、簡単に土が盛り上がった。

そのまま、なんとなく何処かで見たような石造を作ってみる。

操れないのは原則生き物だけ、というより別に意思を持った命令系統を持っているものにはナノマシンは効かないということだ。

「”高度に発達した科学は魔法と見分けがつかない”か。ホントだなぁ」

思ったよりもかなり強かった酒の残りを芸術を肴に一気に飲み干して、酒瓶を横に置きまた火に薪をくべた。

「……出て来い」

そして先程から、気配を消してこちらを伺いながら近づいてきている何かに声をかけた。

「ほう…、気づいておったか。気配は完全に消したつもりだったんじゃがな」

焚き火の火が届かない暗闇の所から、そいつが姿を現す。

その予想外の姿に目を見張った。

ユキネよりちょっと高いくらいの身長に豊かではないが、均整のとれた体。

その話し方とは似つかわしくない若く整った顔立ちに、膝ほどまである長い黒の後ろ髪を緩い三つ編みで一本にして後ろに垂らしてい

る。

そして一番気を引くのが、着ている物。

闇に溶け込んだ様な深い藍色の服に、黒い帯。

着物。

いや、振袖だろうか。袖は長く振られているものの、振袖ほどまで重々しくはなさそうだ。

「……いきなりじゃが、少し血をもらうぞ。人間」

――――ただ、人形のようだ。と、そう思った。

しかし、それとこれとは話は別だ。

「血？……嫌に決まってんだろ」

「なら、奪うまでじゃの」

ニッと、不敵に笑った口からは普通のそれより明らかに長い犬歯。

「吸血鬼って訳か？」

「ほう、驚かんのか？」

「ドラゴンもいるんだ。吸血鬼ぐらい、居てもおかしくないだろ」

女は俺の言葉にほう、と驚いたかのような声を出した。

「面白い小僧じゃな」

「生意気な小娘だな」

…一億歳のこの俺を、小僧扱いとは笑わせる。

夜の訪問者（後書き）

更新が不定期になると思います
感想は随時歓迎です

女の姿が再び闇に消え、すぐさま闇の中から何かが複数飛来してきた。

一瞬で俺も暗闇の中に飛び、後退する。

しかし、吸血鬼の狙いは俺ではなかった。

「明かりか……！」

飛来した何かが焚き火に殺到して、ここら一帯から人工の光の一切が消えた。

「用心深いことで…」

吸血鬼というからには、やはり人間よりも夜目が数段きくのだろう。

星と月が照らしてはくれるものの、やはり視界は狭い。

これで圧倒的に吸血鬼が有利となったわけだ。

短い音と共に凶器が飛来する。

それを寸前で掴み取る。

赤い…針のようだ。

「血……か？」

「安心しろ、殺しはせん。ただ動くと手元が狂うやも知れんぞ？」

ヒュッと後ろに女の気配。

相当動きも速いようだ。

それをまたすれすれでかわす。

チラッと見えた手の先には血が固まって剣の様になっていたようだ。

また気配が闇に紛れ遠ざかっていく。

それを追って走るが、さすがに途中で見失ってしまう。

馬車からは、恐らく３００メートルほど離れたか。

むしろ好都合だろう。

これだけ離れてればあいつらに被害が出ることもない。

少し気を抜くと、いきなり横から気配が現れた。

振り向いてみると、血でできた人の形をした分身が此方にゆっくりと拳を振り上げていた。

「趣味悪いんだよ…！」

それに拳を叩き込む。

いとも簡単にそれは崩れ去った。

しかし次々と周りから同じように結構な数の分身が出てくる。

「……ちょっと、面倒だな」

拳銃を精製する。続いてアサルトライフル、サブマシンガン。次々と銃器が俺の周りを取り囲んでいく。もちろん銃口は外側に向けて。

「何を……？」

見慣れぬ、物体を警戒する吸血鬼の声が聞こえた。

角度を調整して、３人には銃弾が届かないようにする。

「トリガーハッピー、ってな」

声と共にパチンと指を鳴らすと、銃器が一斉に火を吹いた。

弾幕が周りを蹂躙する。

血の塊を吹き飛ばし、地面を削っていく。

5秒ほどで弾幕を止め、銃器達を消し去った。

しかし、既に地形は変形し、血がそこら中に撒き散っている。

「滅茶苦茶、じゃの…」

「大丈夫だ、当たっても死なないようにはなってるし」

「なかなか出来る様じゃな

……本当は気絶させるだけのつもりだったんじゃが、……ちょっと痛い目に遭ってもらうとしよう」

周りの地面が蠢いた。いや、動いているのは俺が吹き飛ばした血だ。
いや何処からかまだ増えているようだ。

それらが今度は無数の剣に変わり、上下左右に俺を取り囲んだ。

「こりゃ、すげえな」

本当に無数、だ。明らかに人一人分の血液量では足りていない。

「なに。お主はかなりの実力者のようだし、これくらいなら死にはせんじゃろ？」

「……いや、普通死ぬだろ。これ」

「武運を祈る」

そう言って手を振り下げようとした瞬間。

先程の銃声で起きたのだろう、此方に向かって走ってくる三つの影。

「ちッ！　ここまでかの…」

流石に形勢が不利だと判断したのか、女が背を向ける。

「おい！　この剣どうにかして帰れ！」

その声を聞いてぴたっと止まると、こちらを向いて悪戯な笑顔を浮かべた。

「…おい。コラ、小娘…！」

「……儂はな、小娘ではないんじゃよ」

何のためらいもなく、指を鳴らした。

「おまッ……」

途端に一斉に剣が襲い掛かってきた。

先程までの攻撃より段違いに速度が上がっている。

避けて通れるほどの隙間はない。銃器を再び精製するほどの時間もない。

考えている内に既に最初の剣は目の前。

咄嗟に掌でそれを弾く。弾くとそれは力を失い地に落ちた。

「ちょっとは…、手加減しろや……！」

言いながら二本目をまた弾く。三本目弾く。四、弾く。六、七、八、九、弾く弾く弾く弾く。

弾く。

弾く。

肘で、脚で、拳で。

体のありとあらゆる部分で下以外のあらゆる方向から襲ってくる赤い剣を次々に弾き飛ばしていく。

「おらあああああ！！」

最後の一本を怒りの雄たけびと共に叩き落とした。

「……ハル？　大丈夫か？」

怒り心頭の俺にちょっと引きながら駆け寄ってきたユキネが話しかけてきた。

「…ちょっと、いけない子を教育してくるから。朝までに帰ってこなかったら、先に行っててていいぞ…」

言うが早いか女が帰っていった森に飛び込んだ。

「……何なんだ、一体」

「何やったん？」

「いや、誰かを教育してくるらしい」

「……また、アホな事やっとるなあ」

「……フェン、寝なおそうか」

「うん」

三人はやれやれと首を振りながら、馬車へと戻っていった。

◆
◆
◆

ハルユキが森に入って、僅か五分。

「……迷いましたとさ」

勢い勇んで飛び込んだは良いものの、入る前から見失っていたものを土地勘もない人間が見つけられる訳もなく。

「そしてッ、帰れない…！」

もうね、泣きたい。

と心の中で、ハルユキは一人ごちる。

周りを見渡しても、枯れ木のみ。無茶苦茶に走ってきたからどっちから来たかも分からない。

まだ真夜中なので視界も暗い。

試しに一直線に走り抜けてみるが、正直本当にまっすぐ走っているかも自信がない。

「あ、上から行けばいいのか」

と思いつき上を向くと、

「あっ…と」

くらっと眩暈を感じ、その場に座り込んだ。

どうやら、アルコールを取ってすぐに激しく動きすぎたらしい。

再び上を向くとクラクラと世界が回る。

「だめだ……寝よ」

迷子。気分悪い。何かあの女もどうでもよくなってきた。

との理由で、ハルユキは現実の世界に別れを告げるとその場に大の字に寝転がり目を瞑ると、瞬く間に眠りに就いた。

◆
◆
◆

ハルユキが眠りに就いて、１０分ほど後。

ザクザクと連続して土を踏む音が聞こえたかと思うと、着物を着た先程の女が姿を現した。

「ん？…って、のわっ！！」

地面で寝息を立てているハルユキを見つけると、驚きながら飛びの

いた。

女は確かに目的地まで、最短距離を走ってきたはずだった。

しかし、目の前の男は間違いなく先ほどの男。

「……寝ておるのぅ」

信じられないが、私より遅く森に入っておいて、とことん回り道をして、それでいて私より早くここに現れたのだろう、と女はあたりをつける。

「……こやつ本当に人間か？」

見たところあの剣群を無傷で切り抜けているようだし、身体能力も恐らく吸血鬼の女よりも明らかに上だ。

「なぜここで寝ておるのかは、皆目分からぬが……」

放っておいてもいいのだろうが、この辺りには何故か結構な数の魔物が残っている。

このままでは餌にされてしまう可能性が高い。

「……おい。起きろ、ってこやつちょっと酒臭いの。

この様な所で酔いつぶれておるのか。この男……」

近寄って揺さぶってみてもまったく反応がない。

「……はぁ。何故に儂がこの様なことを」

ぶつぶつ言いながらも、ハルユキを担ぎ上げる。

「後でしこたま血を頂く事にしよう」

男の身体を担いでいるとは思えないほどの軽やかさで森を迷わず進

んでいった。

血の遣い（後書き）

感想、随時歓迎しております

森を越えて

「んあ……」

日の光が顔に当たり、目を覚ます。

目の先には規則正しく並んだ木の天井。

昨日は確か、森で寝たような気がするんだが…。

「ごくごく…ごく、ごくん。……ちゅー…ごくごくごく…」

地面は硬くない。というよりどうやらベッドの上のようだ。

すぐ隣の窓からは枯れ木が乱立しているのが見える。森の中ではあるらしい。

「ちゅーーーー……ごく、ごくん」

「……おい。人がスルーしてるからって調子にのんな」

人の上に乗って首筋に歯を立てて、血を飲んでいるそいつに遂に声をかける。

「……ゴッキュッ！　ゴッゴッゴッゴッゴッ、ゴキュッ、ゴックン……！」

「…ラストスパートですか？」

ええい、と首を振ってそいつを引き剥がす。

「なんじゃ、うるさいのう…」

やっと首から離れたそいつをベッドから振り落とす。

やれやれと首を振るそいつを蹴りつけたくなるのを抑えつつ、紳士的に尋ねる。

「とりあえず聞いとくが、何やってんだ？」

「血をな？　飲むんじゃよ」

「……その言い方だとまだ血を飲むといってるように聞こえるから、きちんと言い直そうな？」

「ちゅーーー…、……んむ？」

目にも留まらぬ早業ですね。

お兄さんとっても感心。

「するか！！！」

俺の怒りがツッコミ（強）となって腕にかぶりついている女に迫る。

「（ひょい）……ちゅーー…」

避けやがった…！　ツッコミを受けるのはボケの義務だろうが…！

再びツッコミ（最強）が迫る。

「ごくごく（ひょい）…ごくごくごく」

「ぬあああ！！」

ツッコミ（鬼）が迫……

ゴスッ！！　↑カウンター

「……俺、何か悪い事したっけ？」

「ごく、ごく、ごくごくごく……」

◆
◆
◆

俺の意識が再び遠のこうとしていると、ようやく満腹になったようで腕から口を離した。

「……お主本当に人間か？」

「開口一番それかい…。なんだ？　あまりに神々しすぎたか？」

「いや、外見は目を瞑りたくなるほど普通なのじゃが……」

なんとなくボケただけなのに、なぜこんな再起不能になるほどのダメージを……。

膝を突いた俺に構わず女は続ける。

「血がありえないほどに熟成しとるの。まあ美味いからいいのじゃが」

「……よく考えたら、いきなり血を飲むってどうなんだ？　ってい

うか俺お前に殺されかけたんだけど…」

「いや、あまりに美味かったからの。一口のつもりだったのじゃが、ついついというやつじゃ。
普通は年を取るごとに熟成して行って、代わりに黴臭くなっていくんじゃがな。お主の血は、いや血だけは、自慢していいぞ」

「待て待て待て。色々言いたいことはあるが、割とそんなことはどうでもいいから、まずは説明してくれ。
ここは何処だ。なぜ俺はここにいる？」

「……お主、昨日森の中で酔いつぶれていたのは覚えておろう？
酒臭い血など飲みたくないからの。ここまで連れてきたわけじゃ」

じゃあ、ここはこいつの家なのか。

…普通だ。別に城ってわけじゃないし、日光が入ってこないように黒いカーテンで日光を遮断しているわけでもない。

きょろきょろと部屋を見渡していると、ガチャッと扉を閉める音が聞こえた。

どうやら、話すことだけ話して出て行ってしまうらしい。

「ま、待て待て、どこ行くんだよ」

「仕事じゃよ。お主はもう帰っていいぞ」

「……勝手じゃね？」

「知らん」

いや、まあベッドに寝れただけマシだった気もするが。

でも帰り方わかんないし。

「近くの村まで連れて行ってくれたりは…？」

後ろについていきながら質問する。

「しないのう」

言いながら、女はずんずんと廊下を渡りその先にあるこじんまりとした扉を開け放った。

目の前に幻想的な光景が広がった――…

、訳でもなく、というよりさっき窓から見たとおりの殺伐とした枯れ木の森だった。

振り返ると、先程まで入っていた一軒家と、そばに森から孤立するように一本だけ生えたやっぱり枯れた木が目に入る。うっすらと苔が生えていて目立たないが、井戸らしきものもある。

家は、こじんまりとしてだいぶ年季も入っているものの、きちんと手入れをしているのが分かる。

いつの間にか、女が周りを見渡す俺をおいて、森に向かって歩いて行っているのを見つけた。

駆け寄って声をかけた。

「ひょっとして本当は村まで案内してくれたり…」

「しないのう」

先程のようにそう言い切って、森の入り口に立つと、着物の袖をまくりいきなり自分の手首を噛み千切った。

ブシュッと尋常じゃない程の血飛沫があがり森の木とその下の地面にこびりつく。

「お前ッ、何を……！」

ばっと女の手をとるが、その腕には傷どころか血さえ付いていない。

「これは魔術的な儀式じゃ。実際に傷をつけたわけではないわ。アホめ」

そう言いながら女が顎でしゃくる先に目をやると、飛び散った血が地面に潜って行っている。

「それとも、心配でもしてくれたのかえ？」

そう言いながら悪戯好きそうな、にやけ顔で俺を見上げてきた。

「……紳士なもので」

「やはり、小僧じゃのう」

くっくっと笑いながらまくった袖を戻すと、家へと戻っていく。

「……人間。飯でも食っていけ。血を貰った礼じゃ」

「意外と義理堅いんだな。吸血鬼って…。普通に昼間に出歩いてるし」

「ちなみに玉ねぎは血に良いから好物じゃし、教会に祈りに行ったこともあるぞ？」

世界観はきちんと守りましょう。

「飯つってもあれだろ？……えーと？」

「麗じゃ。そう呼べ」

「んじゃ、レイ。……お前ただ栄養補給させたところで、また血を飲むだけだろ」

「ようやく立場を理解したようじゃの」

◆

◆

◆

「ハルはやっぱり帰ってこないか」

「……大丈夫、でしょ」

「誰も心配してるわけやないけどな」

そう言いながら、出発の準備を終えて3人は馬車に乗り込む。

「結構激しい戦闘があったみたいだが、まあ怪我はしていなかったし、村で待ってればいいだろ」

「じゃあ、出発するでー」

そう言いながら、馬に鞭を打つ。

ガタンゴトンとその身体を揺らしながら、馬車はゆっくりと走り出した。

――枯れ並木道を行くこと3時間。

当初４人がおもっていたとおりこの森はかなり広いようだ。

「まだ着かないのか？　確かこの森の中に村があるんだろう？」

地図を広げて、ユキネが村の場所を確認する。

「……一本道だったから、間違ってはいない、はず」

「この森は広いことで、だいぶ前は有名やったらしいからなあ」

もう太陽も完全に昇りきってしまった。

森を太陽の日から防ぐ緑も存在しないので、地面がからからになり、森独特の湿気も感じられない。

「……草木一本ないな」

異常なほどに何も存在しない。

まるで、違う世界に潜り込んでしまったかのように、不自然さを振りまいている。

それから更に３０分。

やっと、景色の先に変化があらわれた。

「……やっと、見えたでー…」

思ったよりも長くなってしまった道のりに、生気がないジェミニの声に２人は前を向いて、確認する。

枯れた森を越えた先には、枯れた村が存在していた。

森を越えて（後書き）

感想いつでもお待ちしております

吸血事情（前書き）

気合で投稿

吸血事情

「これは、なんとも…」

馬車をとめ村の外に用意された馬車小屋に馬を繋ぐと、村を改めて見渡した。

「……何にもあらへんなぁ」

ドンバ村よりははるかに小さいものの、そこまで小さい村ではない。

しかし、まだ昼だというのに人通りが極端に少ない。

ちらほら店も開いているようだが、それにしても活気がなかった。

馬車小屋を見る限り、ユキネ達以外に旅人もほとんどいない様だ。

「……とりあえず、宿屋」

フェンがユキネの服を引っ張りながら、意見を言う。

「そうだな。ここは物価が安そうだからいい宿に泊まれるだろうし」

「飯付きの宿がええなあ。見たところあんまり店も開いてへんし」

宿屋を探すために、村の中に足を踏み入れると村の様子が変わった。

ざわざわと、道行く人々が騒ぎ出した。

最初は少なかったもののだんだんと人が集まってき始め、周りの家からもどんどん出てくる。

「な、なんだ……！？」

パッと見ただけで５０人以上の人間がユキネ達を取り囲んでいる。

別に襲ってくるわけではない。

ただ、ざわざわとお互いに顔を交し合い、……縋る、様な目で此方をちらちらと伺っている。

「二人とも、準備はしとき」

何の、とは言うまでもない。フェンは杖を構え、ユキネは剣をいつでも出せるように準備をする。

「……お待ちください」

ユキネ達が臨戦態勢に入ると人垣を掻き分け、雰囲気が違う人間が3人の前に現れた。

「戦闘の意思などありません。どうか武器をお納めください」

50歳ほどの男。頭には白髪がところどころ混ざっている。

「……いきなりの不躾な質問をお許しください。
あなた方はドンバから来られた、フェン様、ジェミニ様、ユキネ様で間違いありませんか？」

「そうだが…」

それを聞いて、男はばっと地面に膝を突け頭を下げた。
それに続くように、周りの人々も膝に地面をつき頭を垂れる。

「……どうか、どうかその力をこの村にお貸しください…！！」

「あ、頭を上げてくれ！」

「どうか…！」

立ち上がってくれと頼み込んでも一向に土下座の姿勢を崩さない。

「……とりあえず、話だけでも聞いてあげたいと思うんだが…」

「……うん」

「やることもあらへんし、いいんちゃう？」

その言葉を聞いてもう一度深く頭を下げると、男は立ち上がった。

「では、此方へ。食事と宿のご用意をいたします」

◆◆◆

「ふーん、結構上手いじゃねえか」

レイが昨日のうちに作っておいたというスープを一気に掻きこんだ。

目の前ではレイがスプーンで同じ料理を食べている。

「吸血鬼も飯を食べるんだな」

「血はあくまで魔力を得るための手段じゃからの。栄養分はほかで取らんといかんのじゃよ」

「ん？　俺は魔力なんて持ってないはずだけど」

「魔力を持ってない？」

「ああ」

それから少し考えるような顔でスープを口に運びながら、俺を観察し始めた。

「……儂ら吸血鬼はの、血の中に含まれている魔力がほしいのではない。

儂らは血を魔力に、魔力を血に変えることができる。だから重要なのは、含まれている魔力ではないのじゃ」

「んじゃ、重要なのは？」

「そんなものがあるわけじゃないが、あえて言うなら霊力じゃの。どれだけ神聖な血かということじゃ」

――――不意にガチャっとドアノブが回る音が聞こえた。

「あら、お客様でしょうか」

５０歳ほどの綺麗に老けた女性が横のドアから姿を現した。

髪は赤毛、目は翠で壮麗という言葉がよく似合いそうな女性だ。

俺に向かっていっているのかと思ったが、その目線はレイにも向かっている。

「おい……お前、ひょっとして」

「ん？　ここは儂の家じゃないぞ。言っていなかったか？」

「いえいえ。良いんですよ。久しぶりのお客様です。ゆっくりしていってください」

……いやいや。

「駄目に決まってるでだろ、おばさん。俺たちが強盗とかだったらどうするんだよ」

「強盗なのですか？」

「いや、…それは違うけどさ」

「なら、話し相手になって頂けますか？　一人は寂しくて」

調子が狂う人だった。ニコニコと笑って嘘や企みがあって言っているとは思えない。

「んじゃ……おかわりもらうわ」

「ほれ、イサンもここに来て食え」

そう言って、レイが女性を隣の椅子にくるように促す。

「あれ？　イサンってこの人だろ？　何で名前知ってんだ？」

「ん？　…ああ、表札に書いてあったからの」

スープに目を落としたままそう答えた。

表情は見えない。

◆◆◆

「ふう。…ごちそうさまでしたっと」

「ああ、お皿はそこにおいておいてくださいますか？　後で洗いますので」

「ああ、ありがとう」

手を合わせて食材に感謝を表した後、皿を流しに置き外に出る。

これといってやる事がない。

森の中に行くのもいいが間違いなく帰って来れない自信がある。

ぼーっと周りを見渡していると、一つ先程とは違っているものを見

つけた。

森の入り口に向かって歩いていく。下からそれを見上げて驚いた。

「……桜か」

咲いてはいない。もちろん葉もない。しかし、確かに桜の蕾がそこに膨らんでいた。

改めて、ここら一帯に埋め尽くされている枯れ木を見渡す。

どうやら蕾が芽吹いているのはこの木の周辺だけのようだ。

「これ、全部桜かよ……」

ここは外からでも端が見えないほど広大な森だ。その木の全てが桜。

全てが咲いたらそれは綺麗な光景だろう。

それを見てから進むのもいいかもしれない。

「なんじゃ、帰らんのか？」

その声に振り向くと、風に髪をなびかせながら此方に歩いてくるレイがいた。

「だから、連れてけって言ってんだろ」

「何で、儂がそこまでしてやらんといかんのじゃ、アホめ」

「……酒あるか？」

「……脈絡ないのう、お主。

酒などなんに使うのじゃ？」

桜の蕾を指差しながら言った。

「まだ咲いてないけど、花見には酒がいるだろ？」

「何を…」

そこまで言って俺が指差す場所見て固まった。

「……これは…！」

蕾を見て、地面を見て、俺を見て、それから俺の指に視線が移って、その指に手を伸ばすと、

……噛み付いた。

「……何でやねん」

これも魔術的な何かなのだろう。痛みはない。

意外にもレイは、俺が引き離す前に自分から口を離した。

口にたまった俺の血を嚥下すると、キッと鋭い目線を俺に向けた。

「お主本当に、何者だ？」

「……ただの人間だって。それ以上でも以下でも以外でもない」

そう答えると、レイは今度は自分の手首を噛み千切って、血をまた振りまいた。

血は桜に降りかかり、染み込んでいく。

変化が、始まる。

血が掛かった所からではない。ぐるっとこの空き地を取り囲んでいた枯れ木たちが蕾を生み出し始める。

「お主の血を魔力に変えて、木に注いだ。この木はちょっと特殊での。蘇生させるのに途方もない魔力が必要だったはずじゃった。

しかし、お主一人の血でこの有様。ありえんことじゃ」

「……」

「考えれるとするならば、人間ではないか、それとも・・・」

「俺は人間だよ」

ぎりぎり、な。

「……もし、おぬしが人間だと言うのならば。一体、どれほどの……」

そこでいったん言葉を切って、深く呼吸をしてから言った。

「どれ程の時を、生きてきたのじゃ……？」

俺に向けたその顔は永遠のつらさを知っている顔だった。

俺と、同じ。

吸血事情（後書き）

感想、アドバイスお願いします

「一億才歳、らしいぞ。俺の歳」

「い、ち…億…」

レイは、愕然とした表情で俺を凝視している。

「部屋にずっと一人でな。まだ出てきて一ヶ月ほどだ」

「・・・・・・そこで一億も・・・？」

少しだけ間を置いてから、レイは真っ直ぐと俺を見つめなおして続けた。

「・・・・・・死のう、とは、思わなかったのか？」

死ぬ、か。

・・・それだけは、ありえないんだよ。死ぬのはあんなに独りで怖いのに。

「吸血鬼ってのも不死なのか？」

あえて、質問には答えずに逆に質問で返して話題を変える。

「・・・・・ある程度成長すれば老いは止まるが、死なないということはない。まあ老衰で死ぬよりも先に何らかの理由で死んでいるだけかもしれぬが。
ちなみにわしでもまだ８００歳ほどじゃな」

無理に変えた話題にレイは何も言わない。

「意外と歳食ってんだな」

「……儂より、年上の人間なんぞ久しぶりに見たわ」

「だから言っただろ。”小娘”」

小娘。その言葉にピクンと反応して、呆れたように笑った。

「・・・・・お前なんぞ”小僧”で充分じゃ」

「然様で」

「……少しばかり手伝ってほしいことができた。悪いが儂に少しお前の時間をくれ。
何、３日ほどじゃ。そうしたら村にも連れて行ってやる」

上目遣いとは程遠い挑戦的な目でこちらを見つめてくる。

「……断ったら？」

「3日分の血を一気に頂くことになるだろうの」

「……協力したら？」

「3日間毎日少しずつ血を頂くことになるじゃろうの」

オーケイ、治外法権だな理解した。人権がミジンコほども存在しない。

ま、別にいいんだけども。

「俺はよく食うぜ？」

「それは大変じゃの」

「自給自足なの…！？」

「冗談じゃ。まあ人並みには出してやる」

レイはニッと楽しそうに目を細めて笑った。その顔はとても云百年も生きた生き物とは思えない、見た目相応の可憐な少女のものだった。

◆
◆
◆

村人たちの包囲から解放された後、ユキネ達は村長だというマクスという男に連れられて、村で一番豪華な家だといわれるマクスの家に連れて来られていた。

「ここです。女性のお二人はこちらに、ジェミニ様は隣にもう一部屋用意してあります」

「・・・・・・いや、ワイも何卒、この部屋でお願いしますっ」

「・・・・・・・・・・不潔」

「男子禁制だ！」

「だ、男子禁制？　それほどそそられる単語が他にあろうか！　いや！　ない！！」

ガスッ！　ドコッ！！

一瞬でボロ雑巾に変えられ、廊下に叩き出されたジェミニはすごすごと隣の客室へと入っていった。

「全く、ハルユキはまだ放浪してるし、うちは碌な奴がいないな…」

「……ハルユキ、ここ、分かるかな？」

「外を回ってみるか。ハルユキを探しがてら」

「うん」

ユキネが外に出ると、ちょうどジェミニも部屋に荷物を置いて部屋を出てくる所だった。

「出たな。変態は変態らしく部屋の隅で大人しく体育座りでもして

いろ！」

「……していろ」

「顔見た瞬間それなん！？　ていうかそんな無害な奴が、変態なわけないやろ！？」

結局、三人でわいわいやりながら村へとくりだしていった。

「――――吸血鬼？」

「そんな生き物が本当にいたのか？」

「らしいで。さっきの店でおばちゃんたちが噂してた。ホントかどうかは怪しいところやろうけどなー」

道を歩くたびに、村人たちがちらちらと隠れながら送ってくる視線を無視しながらぶらぶらと村中を回る。

もう日は傾き始めていて、あと一時間もすれば完全に日は沈むだろう。

「それが本当だとしたら、あの村長の相談事はそれ絡みかもしれないな」

「……十中八九」

結局ハルユキはまだ帰ってきていなかった。

ハルユキを探してぐるっと村をゆっくり一周してから宿へと戻る途中、大きなしかし寂れて活動の痕跡さえも見られない建物を見つけた。

「まさかギルドも潰れとるとはなー。そりゃ廃れもするわ」

それだけではない。

村の郊外には畑がいくつもあったものの一つとして、畑としての役目を果たしているものはなかった

ギルドもないから、旅人や商人も来ない。畑もないから自給もままならない。

村が潰れるのも時間の問題。

いや、むしろ未だ村としてまだ機能を保っていられているのが不思議なくらいだった。

「……こんな現状を見てしまったら、おいそれと断るわけにもいかないな」

宿に着いたので宿のドアを開けようとすると、ドン、とユキネの身体に横から衝撃が伝わってきた。

「あっ・・・・・・！」

視線を落とすと、怯えた表情で小さな女の子がこちらを見ていた。

「ご、ごめんなさい・・・！」

そう言ってますます子供は身体をちぢ込ませた。

足元にはお使いか何かの途中だったのか、何かの果物がそこら中に散らばっていた

「こちらこそ悪かったな。前を向いて歩いていなかった私が悪い」

一緒に落ちた果物を拾ってから、頭に手を載せて頭を撫でながら謝った。

すると、女の子の目がが此方をチラチラとうかがっていることに気づいた。

「ん？　どうした？　私の顔に何か付いているか？」

女の子はそれからまた少しもじもじしてから、心を決めて顔を上げた。

「お姉ちゃんたちが、吸血鬼を倒してくれる、の？」

どうやら、予想通り吸血鬼がらみの依頼だったようだ。

「・・・・・・・・・・ああ、お姉ちゃんたちは正義の味方だからな」

そう言ってやると、パッと子供らしい無垢な笑顔をユキネ達に見せると、お礼を言って去って行った。

「・・・・・・・・・・吸血鬼、か」

「聞かれましたか・・・」

ユキネがパッと後ろを向くと、そこにマクスが立っていた。

「んじゃ、やっぱりワイ達に頼みたいことってのは・・・・・・」

「それはこれから説明させていただきます。どうぞ。

夕食の準備もできました」

マクスに続いて三人共、宿の中へ入っていった。

◆
◆
◆

「お前、このスープしか作れないのか・・・・・」

俺の前には昼間全て平らげたはずのスープが鎮座していた。

「文句があるなら食うな」

そう言いつつも、不味いわけではないのでスプーンは進む。

「イサンは呼ばないのか」

俺がそう言うとスープを口に運びながらこちらを見ずにレイは言っ

た。

「直に来るだろうよ。それまでに飯は食っておけよ。すぐに外に行くからの」

言われなくても後一口ほどしかスープは残っていない。

小さい野菜の屑が残ったスープを皿を傾けて飲み干すと、それに会わせたかのように扉が開いた。

「あら、お客様でしょうか」

――嫌でも既聴感を呼び起こす声。

一度目にはどこか気を抜けさせるようだった優しいそれが、今はとても残酷に聞こえた。

「・・・・・・は？」

「すまんの。他人の家だったが、勝手にあがっとる。飯を作ってしまったから食べてくれ」

「いえいえ。構いませんよ」

レイは”いつもの様に”初見の挨拶をする。

そして、それにイサンもおそらくは何度も繰り返したであろう、返答をする。

「そういうことかよ・・・」

レイも最後の一口を口に運ぶと、表情も変えずに言った。

「よし、ご馳走になった。行くぞ、人間」

椅子から立ち上がると、玄関へと続く廊下に出て行った。

「あなたは行かないのですか？」

「・・・気をつけろよ。俺たちが強盗だったらどうするんだ」

わざと、同じ質問をしてみる。

「強盗なのですか？」

「・・・・・・いや、違う」

「なら、話し相手になって頂ければ。一人は、寂しくて」

返って来た声も、残酷なほどに同じだった。

「・・・・・・悪い。もう行く」

「あら、それは残念」

一人ニコニコと病的に笑顔を保っているイサンを残して家を出た。

家をでて少し探すと、家のすぐそばに生えている木の根元でこちらに手招きをしていた。

近くまで行くと、やれやれと言いたそうな顔をしていた。

「まあ、つまりああいうことじゃ。あやつはもう記憶がぼろぼろでの。

2時間会わなかったらほとんどのことを忘れてしまう」

「お前は・・・・・いつから、ここにいるんだ?」

「かれこれ30年ほどじゃのう。まさかこんなに長居することになるとは思わんかった」

何でもないようにそう言った。

「話を、聞かせてくれるんだろ?」

「ああ。協力してもらうからには聞いてもらおうかの。

儂の目的と、そのきっかけを」

目的ときっかけ（後書き）

感想、アドバイスお待ちしてます。
一言だけでもけっこうです

桜月夜

――一歩一歩足を進める。

歩くたびに体のどこかが軋みを上げ、致死量並みの血液が零れ落ちる。

この世に生を受けて、早八百余年。

そんじょそこらの存在には後れを取らないほどには強くなっていた。

熟練の兵士が束になっても勝てる。

かすり傷すら負わない自信もあった

しかし、代わりに慢心が生まれていたようだった。

何でもない所で出会った魔法使い。

いつもの様に吸血鬼である儂を狙った人間だった。

今まで出会った中では強い部類に入るものの、苦戦はしないレベルだった。

止めを刺す寸前の油断した隙に、それと同じレベルの術者が１５人ほど乱入してこなければ、だが。

それがなければ、血だらけでこんな所で身体を引きずっていることもなかっただろう。

何とか軽くない手傷をほぼ全員に負わせたので、追ってくる事はないと言える。

血も魔力となって霧散するので後を追われることもない。

「・・・・・ま、ぁ、このまま生き延びたらの話、じゃがの」

言葉と一緒に力が抜けたかのように、ほんのちょっとした段差に足を引っ掛け倒れこむ。

ゴボッと口からも血が吹き出る。内蔵も相当やられているようだ。

吸血鬼は人間と比べるとかなりの身体的な開きがある。自然治癒力もまた然り、だが。

「こ・・・れは、もう無理、かの」

しかし、心に恐怖もないし、顔には自嘲の笑みしかない。

不思議なことではない。・・・・・・長く生き過ぎた、それだけだ。

日常とは凶器だ。

少しずつ少しずつ、自分のどこかを削っていく。

自分はもう削れる所など残っていないのだろう。

ならもう出てくるのは笑いしかない。

くくっと笑いをこぼしてずりずりと身体を引きずらせて近くにあった木に背中をもたれさせ、後頭部も木に預ける。

雲で隠れていた月が姿を現し始めたのが目に入り。

そこではじめて気付いた。

木が乱立したこの森の無数にあるうちの変わらない木の内のただ一本。

それに、目を奪われた。

周りを見渡すと更に立て続けに目を奪われる。

「これは・・・・・・」

月の光を吸収して薄ぼんやりと光っている。

・・・・・神と言われるものがいるのならば。

なんとも、粋なことをしてくれるものだ。

死ぬには、いい夜だと、そう思った――・・・

・・・・・ガザッ

しかし、無粋に草を掻き分ける音。

「・・・・・・やっぱり儂は神が嫌いじゃのう・・・・」

現れたのは、黒ずんだ茶色の熊のような獣。

身の丈は3メートルはあるだろうか。

僅かに残った血の匂いをかいでここまでたどり着いたのだろう。

ぐるぐると喉を鳴らしながらこちらに近寄ってくる。

こちらがもう瀕死なのが分かっているのか、その歩みに淀みはない。

まっすぐとすぐ近くまで来ると、獲物を見定めるように見下してきた。

「・・・・・・・・最期は、獣の餌、か。神もよほど儂のことが嫌いなのか・・・」

獣は最初そのまま牙を剥こうとした様だが、獲物がまだ生きていることに気付いたのか、牙を引っ込め爪を振り上げる。

最期まで笑っていよう。

儂に冷たかった世界へのせめてもの反抗。

死が迫る。

笑ったまま目を閉じる。

ザン、と獣の爪が何かを引き裂いた音が耳に響いた。

不思議と痛みはない。

それどころか、どうにも温かい。

目を開けて気付いた。

儂が感じていたのは人の体温だったことに。

「・・・・・・大、丈夫・・・？」

儂を抱きしめ、庇ってくれているようだ。
目の前では血が吹き上がっている。

しかし、儂の血ではない。

目の前が一枚一枚切り替わっていくように、変化していく。

獣がまた爪を振り上げている。

二人まとめてやるつもりのようだ。

「・・・・・死に切れん、だろう、が・・・！」

なけなしの血を使って小さい槍を作って、闇雲に獣に向かって放った。

しかし、血がとうとう足りなくなったのか、その槍がどうなったか見る前に目の前が真っ暗になった。

その後で覚えているのは、風が運んでくる月の光を纏った桜の花びらが、頬を撫でた感触だけ。

◆◆◆

痛みを感じて、

目を覚まして、

そして自分が昨日から明日を迎えたことを知った。

頭を上げようとすると、グワンと頭が痛み枕に倒れこむ。

そこで今度は自分がベッドに寝かされていることを知る。

目だけを動かして部屋の様子を探った。

普通の木でできた部屋。

部屋の真ん中に用意してあるベッド、そこに横たわっていた。

怪我の場所には全て治療が施されているようだ。
そこで、正面のドアからとが開く音が聞こえた。

「あ、目を覚ましましたか」

そう言って近寄ってきて、ベッドに座った。

「勝手に座るな」

「・・・・・私のベッドなのですが・・・」

そう言いつつ、トレイに乗った皿をこちらに突き出してきた。
何とか上半身だけ起き上がり、皿を受け取る。

「食べてください。栄養をつけたほうがいいです」

そう言いながら、自分の分も膝に乗せた。

色とりどりの野菜。所々に一口サイズの肉。疲弊した身体には我慢できないほどのご馳走だった。

スプーンですくって口に運ぶ。

「・・・・・美味い・・・」

思わず言ってしまったその言葉を聞いて女はきょとんとした後、ニコッと子供のように笑った。

「ありがとうございます。母からの直伝で。これが不味いといわれたらもう出す料理がありませんでした」

その言葉を最後に、部屋にはスプーンが皿の底を引っかく音しかしなくなった。

先に全て食べてしまった所で、まだ少しずつスープを口に運んでい

る女に目をやる。
肩の洋服から包帯が見えている事に気付いた。

「・・・・・・助かった。礼を言う。人間」

庇ってもらった、運んで治療して、食の用意もしてもらったその全てに対する謝意だった。

しかしそれを聞いた女は、スプーンを口に運んだ体勢のまま、不思議そうにこちらを見て固まっている。

「・・・・・・お互い様じゃないですか。私も、あのままじゃ食べられてましたし」

お互い様？

「ああ、あの後ですね。あなたの攻撃が魔物の目に当たって逃げてったんですよ。

だからお互い様です。どっこいどっこいですね」

そんなもの、お前が助けに入らなきゃそもそも命の危険もなかっただろう、とそう言おうとした。

が、目の前の何の屈託もない笑顔を見ていたら、自然と違う言葉が出た。

「・・・・・・アホめ」

「・・・アホじゃありません。ちゃんとイサンって言う名前があります」

イサンと名乗った少女はむっとした顔で、残りのスープを飲み干した。

そのまま、儂の食器も奪って扉に向かう。

「じゃ、回復魔法で治療しましたが、まだ傷が開くかもしれませんので安静にしといてくださいね、人形さん」

振り返った顔は、既に笑顔に戻っていた。

「・・・・・・人形？」

「だって、人形みたいに綺麗なんだもの。最初見た時にそう思ったんです。

だから、あなたは人形さんなんです」

「・・・・・・アホめ」

「・・・・・・そうやって、笑ったほうがいいですよ？　その方が元気にもなります」

そう言っていそいそと部屋を出て行った。

鏡はないようなのですぐ横にあった窓で自分の顔を確認すると、そこに慣れない顔で笑っている奴がいる。

こんな顔で笑ったのは・・・久しぶりかもしれない。

儂の顔が映った窓の向こうでは、桜の花がそこら中で舞い踊ってい

た。

桜月夜（後書き）

ちょっと急ぎすぎたかな？
感想お待ちしてます。

花見酒

ここに来て五日。

それだけの時間で人外である私の体からは傷が完全に消えた。

二日目で既に歩けるようには回復した。

その足で周辺を歩いてみて気付いたこと。

ここは、煌びやかで華やかで美しい。

森が開けた場所の枯れた大木の下にポツンと立っている一軒家。

筆を走らせるなら絵になるだろう、詩を歌うならさぞ様になるだろう。

・・・・・しかし、人間が一人で暮らすには寂しすぎる場所だった。

どうしてこんな所で一人でいるのか。かなり最初のあたりでそう聞

いたら当たり前のように

ここが私の家だからです。とそう言った。

・・・・・儂が早々にここを立ち去らなかったのはなぜだったのだろう。

恩を感じたのだろうか。

共感をしたのだろうか。

寂しかったのだろうか。

今考えても。

よく、分からない。

ただ最初のあたりは、ここを離れることなど考えもしていなかったことは覚えている。

◆
◆
◆

「――借金？」

一心不乱に何かを縫っているイサンに向かって、驚きの声を上げる。

「そう・・・・・親が、肩代わりしちゃ、った借金が残って、るんです。・・・・・・できたぁ」

嬉しそうに出来上がった売り物の妙な服を広げてみせる。

もうかなりここにおるのに、まったく気付かんかった。

イサンも隠そうと思っていたわけではないようなので、日常会話のように暴露していた。

「よくもまあ、気付かんかったものじゃ。・・・アホじゃの」

その言葉にむっとしてこちらを睨んでくる。

「もう、”人間”だの、”アホ”だの、どうして名前で呼んでくれないんですか。名前も呼ばせてくれないし。・・・・・このお人形さん！」

別に名前で呼ばないことに意味があった訳ではないが、なんとなく言われて直すのは癪だったので名前など一度も呼ばないまま、もう半年だ。

それにしても、なんとも可愛らしい悪口もあったものだ。しかも本気で言っているのだから、全く。

「アホじゃなあ」

儂の呟きは今度は届かず、イサンは次の布を引き寄せて針を通し始めた。

「それ一つでいくらじゃ？」

「銅貨十枚です」

「借金は？」

「・・・・・・・金貨、二十五枚」

はあ、とため息をつく。

人間が使う金の単位など忘れたが、とてもこのままでは返せそうにないことはなんとなくわかった。

「・・・・・・待っておれ」

そう言って椅子を立ち扉をくぐって、夜の森へと向かう。

今日は月が出ていた。

ここの桜は魔力で一年中咲き誇っている。

花びらは月からの魔力を受けて光っているものだから、家の周りより森の中に入った方が明るいほどだ。

しかし、これだけの広い森でこれだけ魔力を集め続ければ、どこかに必ず溜まっていく。

そこを先日、偶然見つけた。

ポツンと存在する洞窟の中、その奥に夜になると光がほとばしっている場所がある。

そこの周りに落ちている石を一つ拾う。

それも光の奔流を受けてか、うっすらと光っている。

同じようなものをあと二、三個懐に入れると、家に戻った。

「あ、お帰りなさい。あれ、なんですか？　それ」

儂の胸を指してそう言った。

胸を見ると薄ぼんやりと光っている。

その光の元を取り出して、イサンの前のテーブルに置いた。

「ほれイサン、これでも売ってこい。結構な金になるじゃろ」

ゴトンと音が鳴り、部屋の中を少しだけ明るくした。

イサンの目は釘付けだ。

・・・・・・・・儂の顔に。

「呼んだ・・・。イサンって、呼んだ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・しまった。

はしゃぐイサンの横で、自分の顔にほんの少し顔に血が上っていくのが分かった。

「レーイ！　レイ？　レイ！！　ほらほら、私の名前は？　なんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・うるさいぞイサン。アホめ・・・」

目を合わせないように廊下へのドアを熱心に見つめる。顔にあがっていく血は止まらない。

視界の外からバッと抱きつかれて押し倒された。

「レイ！　ほら、もう私たちは家族ですよ？」

「・・・・・・訳が分からんわ」

いいんですわからなくても、と小さく言って、苦しくなるほどに抱きしめられた。

でもやっぱり、おもわず笑顔になってしまうくらいには温かかった。

◆
◆
◆

結果として、イサンの借金はそれから三ヶ月もしないうちになくなった。

あの魔石はかなり高純度のものだったらしく、それを近くのセシ村に持って行かせたら飛ぶように売れたらしい。

それをなんどか繰り返したら、直ぐに借金などなくなり、もうあの洞窟に足を踏み入れることもなくなった。

「お花見をします！」

借金もなくなり、必要な分だけ働いて気ままに生きていたある日。

イサンがそう提案した。

「花見？」

「花見です！」

むん、と胸の前で握りこぶしを作って力むイサンを見た後、窓の外に視線を移した。

相も変わらず桜は咲き誇っている。

「・・・・・いいかもしれんの。たまには」

儂が素直にそう言ったのが珍しいのか、きょとんとした顔で顔を覗き込んでくる。

「なんじゃ？　気が変わったか？」

「う、ううん。　やる。やりますとも！　今夜やりますからね！　お楽しみに！」

「あいよ」

そう言ってイサンは、ばたばたと準備に向かった。

ほんの少し開けた窓から、桜の花びらが机に落ちた。

花見ぐらい付き合うとも。

最後、くらいは。

◆

◆

◆

「かんぱーい！」

グラスを派手にかち合わせた後、一気にコップの中身をあおった。

儂はワイン。イサンは甘酒だ。

「わぁ、綺麗・・・」

今夜は満月。

桜の花びらはこれ以上ないほどに光をいっぱいに吸い込み、瞬きながら散っていく。

春は桜。夏は星。秋は月で、冬は雪。

それだけでも十分に酒は美味いとよく言われる。

それが、雪以外の三つもそろっていれば美味しくないわけがない。

しばらく、景色を褒めたり、酒を飲んだり、料理をつまんだり、イサンをいじめて遊んだり。

いつも通りのやり取りを、少しだけいつもより華やかな雰囲気で過ごす。

そして、宴もたけなわ。

そろそろ、だな。

「イサ・・・」「実は！　ここでレイにお知らせがあります！」

儂の声を遮ってイサンが声を張り上げた。

目で私が先に、と訴えかけてくる。

黙って、イサンの言葉を待つことにした。

それを確認して、イサンが口を開く。

「実は今日でレイが家に来てちょうど一年になります」

ピシッと背筋を伸ばして高らかに告げる。

そうか。もう一年、か。

なら、もう・・・・・やっぱり。

「そこでこれ。キモノー！！」

バッと、大事に持ってきていた箱の中からいつも縫っていた、変わった服を取り出した。

深い藍色の服に、更に深い蒼の帯。

「えへへ。他のよりも豪華なんですよ」

「・・・・・どの辺が？」

「・・・・・・気持ち、とか？」

「出直して来い」

「ひどい！？」

冗談じゃ。と言ってそれを手に取る。

服なんぞに興味もなかったが、この様な服は一年中イサンが織ったり、縫ったりしていたので着る方法ぐらいはだいたい分かる。

本当に正しいかどうかなんぞ分からなかったが、適当に長着を羽織り、帯をつける。

１０分後、少なくとも見た目はおかしくないほどには仕上がった。
くるっと後ろも確認しながら一回転。
それを見ていたイサンが口をあけて呆けていた。

「どうした？」

「ううん。・・・本当にお人形さんみたいだなって」

「・・・・・・ふん」

目を逸らしたのはきっと恥ずかしかったから。

「すごく綺麗だよ。レイ」

嬉しかった。きっと顔は紅く染まっていただろう。

でも儂の目には、桜が舞い散る中それに囲まれて優しく笑っているイサンの方がずっと眩しかった。

いくら着飾ろうと吸血鬼は吸血鬼。殺人者に変わりはない。

だから、もうここには、居られない。

「イサン。儂は・・・「それはね、一年間一緒に居た証」

またしても無理矢理に言葉を遮られる。

しかし、言わなければ。

もう、さよならだと。

「そして、お別れの、餞別」

桜にも負けないほどの明るさを持った顔で、そう言った。

「え・・・・・・？」

自分でも間抜けだと思う声が出た。

「わかるよ、そんなの。だって、家族でしょ？」

「ずっと一緒になんて入られないよ。わかってる」

途切れ途切れに言葉を続ける。

儂の口の方は開きっぱなしなのに、肝心の言葉は出てくる気配もない。

「でもね、私たちは家族だから」

「忘れないで。私も忘れないから」

「あの家は私とレイの家。あの家があって、私がここに居るから」

「そしたら、あそこはレイの家のままだから」

「時々にくらいは、遊びに来で、ね」

――――離れてても、ずっと一緒だよ？

最後に、そう言うと眩しい笑顔のままイサンの目に涙が浮かび始めた。

「・・・・・・ああ」

やっと声が出た。今まで声が出なかったのは目頭がいやに熱いせいだろうか。

だから笑った。イサンのそれに負けないように。

それを見受けたかのように風が吹いて、髪を流していった。

それを手で押さえようとしていると、イサンがフフッと笑った。

「忘れようがないです。こんなに絵になってれば」

「絵に？」

「レイと桜。桜にこんなに囲まれていれば嫌でも思い出しちゃいますよ」

・・・・・今度は頬が赤くならないように我慢する。

こんな小娘にそう何度も後れを取るわけには行かない。

だから言った。儂の後ろに回って髪を結い始めたイサンに向かって。

いつものように。

ひょっとしたら照れ隠しだっだかもしれないが。

「・・・アホめ」

空と大地では、星と桜がお互いの美しさを競い合っている。

花見酒（後書き）

感想、アドバイス、誤字脱字報告何でもいいのでお待ちしてます。

略奪

「じゃあの」

「またね、ですよ」

ほんの少しだけ路銀を貰い小さな手荷物だけ持って、扉の前で小さく別れを交わした。

着ているのは昨日もらった着物。

目立つかもしれないが、そもそも人が多い所に行くつもりはない。

「ハンカチ持った？　お金は？　お弁当は？」

「・・・・・お母さんか？　お前は」

「いえいえ、ポジション的には私はお姉ちゃんですよ」

「ペットじゃないか？」

最後まで憎まれ口。

だがまあ、イサンは楽しそうなのでよしとしよう。

後ろ手に手を振って、扉から離れていく。

しばらくしても、後ろではまだ手を振っている気配が伝わってくる。

森との間で一度だけ振り返った。

ぶんぶんと更に激しく手を振り回しているイサンに苦笑し、少しだけ胸の前で手を振り返し森に足を踏み入れた。

◆
◆
◆

とりあえず森を抜けてから。

そう思っていたのがまずかった。

「迷う、とはのう・・・・・・」

一年居たぐらいで全容を把握できる程この森は狭くない。

それに一度も村に行ったこともないし、そもそも近くの森にしか入ったことがないのだ。

それ以外の森は秘境に変わりないのだ。

「まあ、急ぐこともないのじゃがな・・・」

この人外の身体にどれぐらいの時間が用意されているかは知らないが、まだ体の何処にもがたはきていない。

これから先の退屈を考えれば、この桜を長く眺められるのは得かもしれない。

頭上で咲き誇る桜を見上げる。

そして、違和感を感じた。

淡い。

いつもは仄かにながらも、足元を照らすほどに光を発しているはずだ。

満月の翌日、次点ながらも吸収できる魔力は多い。

しかし今は、明らかに弱い上に遅い周期で明滅している。

まるで、苦しんでいるかのように。

（なんだ・・・・・？）

しばらく呆気に取られながらも思考に耽っているとあることに気が付いた。

明滅しているわけではない。

失光の波が伝わってきているのだ。

ある地点から広がるように、花びらを伝って。

嫌な予感が、背中を撫でた。

知らずに走り出していた。

波の中心に向かって。

苦しみもがく桜の木達を横目にその横を走り抜ける。

波の周期が大分短くなって来た時、不意に波が収まった。

立ち止まって周りを見渡す。

桜達は疲れきったように、光などほとんど残っていない花びらを力なく散らせている。

一年間共にしてきた木達の苦悶の表情に、思わず立ち止まってしまった足を再び動かす。

嫌な予感が背中を突き刺すように急かしてきていたからだ。

走って、走って、走った。

「ここ、か・・・！」

弾む息を整えながら、終着の場を睨みつける。

辿りついたのは、いつか足を踏み入れた洞窟だった。

中にも、何も明かりはない。

まず、おかしい。

ここには、迸る程の光の魔力が存在している。

こんなに暗闇が支配しているはずがないのだ。

警戒しながら、洞窟の中に歩を進める。

警戒した割には、何事もないまま光の元がある、いやあったはずの場所に足を踏み入れた。

「なん、じゃ・・・・・・これは・・・・！」

荒らされているなんてものではない。

何も、なかった。

魔力を吸収して光を放つ石もなくなり、それどころか壁すらも削りとられ、搾取されていた。

魔力を放っていた床の穴も無理やりに広げられ、漏れてくる魔力は弱々しい。

そのそばに忘れられたのであろうツルハシが、無造作に置かれていた。

「人間・・・か・・・・・・・・！！」

いや待て、おかしい。

なぜこんな所に人間が来る？

イサンの話によると、この辺りは森の最深部であり、人が来ることなど滅多にない。

ここから魔力が漏れているのを知っているのは儂と、イサ・・・ン、だけ・・・。

――――気付いた瞬間、不吉ではらわたが裏返った気がした。

全力で洞窟を飛び出る。

儂は、争いの元になるかもしれないとイサンに洞窟のことを秘密にするように言った。

それなのに、この場所がばれたという事は・・・・・！

走っていたときのことはあまり覚えてはいない。
ただ、見当違いであってくれと、願っていたことしか。

気が付けば扉の前にいた。

家には明かりが付いておらず、不気味なほどに音がない。
ギィと軽くドアを開けて廊下が目の前に広がった。

まず、目に入ったのはイサンが作っていたはずの着物。

びりびりに引き裂かれていて、柄を覚えてなければそれが服であったかなどわからないだろう。

幽鬼のようにふらふらと足を進める。

食卓がある居間に足を踏み入れた。

机がひっくり返され、横倒しになった椅子の足は折れているものも

ある。

部屋は割れた花瓶の破片や、叩き割られた壁の木屑、破かれた服の切れ端が散らばっている。

しかしそんなものは目に入らない。

この部屋にはイサンはいない。

それだけ確認すると、最後に寝室に向かう。

小さい家だ。直ぐに扉の前に辿り着いた。

間を空けずに扉を開けた。

そこにあったのは、まず部屋の真ん中に不自然に置かれた椅子。その下にはロープが散らばっている。

そして、イサンが寝ていたベッド。

そして、その向こう側から、裸の足が見えていた。

「イサ・・・・・ン・・・？」

声をかけるが反応はない。

きっとイサンではないのだ。そう自分をだましながらベッドの向こうが見えるように近づいた。

イサンではない。

いや、イサンとは思えない姿がそこに転がっていた。

乱れた衣服から覗く体と手足には、きつく縛られたのであろう、ロープの跡が赤く腫れ上がっている。

いや、体中に殴られた跡があり、所々に血がにじんでいた。

その目は開かれて入るものの何処も見ていない。

あれほど眩しかったイサンの目の輝きは存在しない。

「あ、ああ・・・」

更に近寄るがイサンは身動きもしない。

どんどん心が現実に追いついてくる。

「イサン・・・！」

反応しない。・・・・・・まるで、人形のように。

「っぁあああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああ！！！！！」

心が現実に追いついたとき、

絶望が目の前に広がっていた。

◆
◆
◆

「イサンは縛り付けられ、暴行され、犯されて。さらに強力な自白剤も使われておった」

苦々しい顔で続ける。その顔にはまだ憎悪が残っている。

「イサンが目覚めまで、治療して看病し続けた。

一ヵ月後、目が覚めたらああなっていた。全て忘れて、何も記憶を残そうともしない。・・・・・ただ薄ら寒い笑顔を顔に貼り付けた人形に。

ついでにここら一帯、全ての魔力を人間達に搾取され尽くしていての。

気付いたときにはもう、木は枯れて草木一本育たないような大地になっていた」

「思い出してくれる可能性があるから桜を咲かせる、と？」

「・・・そうじゃ」

「可能性はほとんどないって理解してるか？」

「・・・ああ」

「それで、三十年も？」

「そうじゃ」

当たり前のように言い放つレイにため息をつく。

全く。

「アホだろ、お前」

「・・・・・わかっとるわっ」

顔を逸らしてほんの少し赤面する。

「まあ、アホは俺の周りに結構いるからな。慣れてるっていえば、慣れてるんだが」

「・・・・・ふん」

「まあ、とりあえず俺は血を提供すればいいんだろ」

俺がそう言うと、レイは俺の目を見据えてきた。

「・・・・・先程はああ言ったが、断っても良いのだぞ?」

こちらを探っているかのようなわかりやすい仕草で言ってきた。

「・・・怖いのか？」

三十年を、無に帰してしまうかもしれない事が。

俺の言葉に肩をわずかに震わせる。

「それも、・・・それも確かに、ある」

恐らく、こいつは復讐とかもやっていないだろう。

「この森が死んだのは吸血鬼のせいだ、と村ではそう思われているはずじゃ。儂の手伝いをやるという事は悪の片棒を担ぐと思われるのじゃぞ。

それに儂が本当のことを言っているとも限らんじゃろうが」

もし、もしイサンが元に戻った時、悲しむことがないように。

自分を殺せる奴なんだろう。

「俺がお前みたいな小娘に騙される訳ないだろうが」

「このアホめ！」

「そりゃ、お前だ」

散々言い合った後、お互いふぅとため息をついた。

「・・・・もう疲れたわ」

「とりあえず明日からな・・・」

家の中に戻ろうと背中を向けると、後ろに何かが覆いかぶさってきて、

首筋に、歯を立てた。

「あだっ！　痛い痛い！！　お前吸うなら痛くないように吸えや！！」

ちゃんと魔法を使えば痛みも傷もないだろうに、構わず全力で噛み付いてきている。

「うるさい！　死ね！！」

殺す気！！？

振り落とそうと暴れていると、

「ハルから離れろ！」

いきなり、森の方からそんな声が聞こえた。

略奪（後書き）

感想やらなんやら、お待ちしてます

繋いで、切れて、また繋いで

今私達は、森の中を歩いている。

村長であるマクスに話を聞いた後ですぐに出かけたという形で。

森の中に、凶悪な吸血鬼が巣食っていると聞いた。

毎夜、村人を襲い血を集めているそうだ。

この辺りの自然が死んだのも吸血鬼の仕業と言うことらしい。

一日経ってから出かけようと思っていたのだが、いつまた吸血鬼が現れるかもわからないと、村人達に泣きつかれてここにいるというわけだ。

「では、私はここまでです。・・・・・情けないですが、あなた達だけが頼りです。よろしく、お願いします」

案内役の男は膝に頭が付きそうなほど深々と頭を下げた。

その顔は疲れに疲れている。

「私はここで待っております。朝方までには一度お戻りください」

「帰り道はもう覚えたから帰っとってもええで」

それを聞いて、少し逡巡したもののもう一度深々と頭を下げると悔しそうな顔で去って行った。

ここまで来るだけでも必死に勇気を出して、恐怖を我慢していたことは見ていればわかった。

つい、甘えてしまうのも不思議ではないだろう。

人間だもの。

「これ、多分帰ってくるのは明け方やなあ」

ジェミニが月の傾き具合を見ながらこぼした。

「しょうがないだろ。無視するわけにもいかないし」

そう言うと意外なことを聞いてしまったかのような声でジェミニが言った。

「あれ、てっきりハルユキを探しに行く口実かと思ってたんやけど」

・・・・・まあ、確かにそれがあることも否定はしないが。

「あくまで、人助け、だ」

村の人達は子供まで皆やせ細り、目に光が感じられなかった。

あれを無視できるほど、私は人間的に完成していない。

「まぁ、たまには正義の味方ごっこもいいじゃないか」

そう、これは”ごっこ”だ。

やりたいからやる。そんなものに正義が宿るはずもない。

命が宿っていない木々の枝の間を経て、月が私たちを睥睨している。

ぶるっと悪寒が走った。

「・・・・・吸血鬼、強いの？」

「そうだな。つい忘れていたが、そもそも私達で勝てるのか？」

「まあ、無理やったら逃げればいいやん」

しばらく歩いていると、だんだんと枯れ木の間から空間が広がってきていた。

どうやらそろそろ開けた場所にでるようだ。

各々武器を取り出しながら、ゆっくりと進んでいく。

やがて、開けた場所に出た。

木の陰に姿を隠しながら、様子を伺う。

中心に一本屹立する木の根元に、家が一軒。明かりが付いているので、中に何かいることは間違いないだろう。

他に何かないか視線を巡らせると、木の下で何かが動いているのを見つけた。

「ハル・・・？」

最初に見えたのはハルがポケットに手を突っ込んでふてぶてしく歩く姿。

そこまではいつも通りだった。

しかし次の瞬間、何者かがハルの背中に飛びつき歯を食い込ませた。

信じられないものを見て固まったのも僅か数瞬。

金縛りから解けると、考える前に飛び出していた。

「ハルから離れろ！」

ある程度接近すると、剣の先をハルの首筋に歯を立てる吸血鬼に向けて、そう言い放った。

◆
◆
◆

小生意気な人間に、吸血鬼の恐ろしさを教授していると、妙な闖入者が現れた。

「なんじゃ、お前は？」

腰ほどまであるであろう金色の髪に、赤色の眼。手にはその細腕に似つかわしくない大剣が握られている。

白を基調としたドレスローブに実を包み、その立ち振る舞いは高貴さがにじみ出ている、気が、しないでもない。

気を抜いた隙に、首に噛み付いていた男の手に捕まり、下ろされた。

「ああ、俺の連れだ」

女にした質問に男が答えた。

その声に驚いたのは、女の方。

どうやら、襲っていた後に普通に対応しあっているのについていけないのだろう。

その間に、さらに二人森から出てきた。

一人は茶髪の男。

もう一人は薄い青い髪の小娘。

男は焦った声で、未だ状況についてきていない女に口を開いた。

「ユキネちゃん！　あれや、噛み付かれたせいで操られとるんや。きっと・・・！」

「はいそこ。遊ぶな」

しかし、女に見せないようにしている顔からは完全にからかって遊んでいるのは丸わかりで、横から小僧がツッコミを入れるが、女には届かなかったようだ。

「な、なんだと!?」

それから、ますます勘違いをエスカレートさせていく二人を遠い目で見つめながら小僧は儂に言った。

「な？　アホだろ？　・・・・・ホントにアホなんだ」

そのくせ、どこか楽しそうに見えるのは、きっと気のせいではないのだろう。

「まあ、落ち着け。俺は操られているわけじゃないし、決して珍妙な味わいが病みつきになる高級食材でもないぞ」

いつの間にかよく分からないところまで発展を遂げていた勘違いを、小僧が収めるために近づいていく。

誤解を解こうとあれこれやっているのを見て、悪戯心がむくむくと顔を擡げて、つい、口が動いた。

「そうじゃ。あれはただお互いの愛を確かめ合っておっただけじゃしのう」

びくん、と4人の肩が仲良く揺れた。

ギ、ギ、ギと音がしそうな動きで小僧がこちらを振り返った。

「この小むす「照れんでよいわ」・・・」

「だからぁ、「照れるな」」

小僧の言葉を次々と言葉の弾で打ち落とす。

笑いを堪えるために頬がぴくぴくと痙攣しているのが自分でもわかる。

「・・・・・ベッドの上であんなに激しくツッコんでくれたではないか」

「はァ！！！？」

やがて、小僧を除く三人がプルプルと震え始めた。

「ツッコんだじゃろ？」

「いやツッコんだけど、それは・・・」

ジャキッ・・・

という、後ろから首筋に剣が添えられた音で、またしても小僧の言葉は遮られた。

「・・・・何をどう突っ込んだんだ？　なあ、ハル？」

殺気だった雰囲気で、娘が怖いくらいに優しい声で尋ねた。

「いや、だから・・・」

振り向こうとした小僧の頬を、今度は剣と同じく添えられていた氷の槍が軽く刺し、抵抗も言い訳も無駄だと主張していた。

ここから見てもわかる程の冷や汗をダラダラと垂らしながら首をゆっくりとこちらに戻し、ダッシュで逃げ、出そうとした。

しかし、目にも留まらぬ速さでガッと三本の腕で襟首をつかまれて、最後の選択肢を奪われた。

「・・・ハルユキ。今度はワイも混ぜてな?」

ガスッ!!

実は味方だったらしい男も残った二人に一瞬で吹き飛ばされ動かな

くなった。

残った小僧と娘二人は引き摺り引き摺られて、森に入っていく。

ぎゃあああ、と森から悲鳴が聞こえてきた。

それを聞いてクックッと笑いが漏れた。

笑いが止まらず、どんどん苦しくなってきた。

「結局、全員アホじゃなぁ」

こんなに笑ったのは、本当に久方ぶりだった。

「・・・なにやら賑やかだと思ったら、皆さん楽しそうですね」

横から聞きなれた声が聞こえた。

３０年間、毎日毎日同じようなことしか話してこなかった儂達にはこんな会話が新鮮だった。

「・・・・・・そうじゃな」

目線を逃げ回る小僧達に向けたまま答えると、イサンが言った。

「そうやって笑っていた方がいいですよ。お人形さんみたいでとっても綺麗」

・・・・・・なんとなく、本当になんとなく唐突に聞こえたその声が30年間儂を苛(さいな)めてきた声ではなく、あの一年間の声じゃないか、とそう思って振り向いた。

しかし、そこにあったのは”いつも通り”の酷薄な笑顔。

我ながら女々しいとは思う。

こんなことをしても辛いだけだが、一度知ってしまった。

「儂の名前はレイじゃ。お主は？」

「イサンといいます。よろしく、お人形さん」

だから、今日も儂は繋がりを作る。例え、一日も繋がっていられない弱々しいものだとしても。

・・・全く、いつからこんなに弱く、人間臭く、

「アホになったのかのう・・・」

自分に呆れながらも出てくるのは、笑顔だった。

繋いで、切れて、また繋いで（後書き）

人生、何事も勉強ですね

「まだ、朝じゃねぇかよ・・・」

眠そうに目を擦りながら、ハルユキは前を先導して歩くレイに文句をこぼした。

「イサンが起きてからだと面倒じゃろうが。ほれ、黙って歩け」

レイの言葉は至極もっともで、またぶつくさ言いながら薄っすらと緑の草が生えた地面を進んでいく。

家の近くのこの辺りは、ハルユキの血のお陰か弱冠生気が戻ってきている。

「それはともかく、何でお前らまでいるんだよ」

パッと後ろを向くと、近くから数えてジェミニ、ユキネ、フェンがぞろぞろと付いて来ていた。

「ま、またいやらしい事をしないように、み、見張りだ！　悪いか！」

「またってなんだよ。誤解だって言っただろうが」

昨日散々折檻された後、冷静になった二人にレイが冗談だったと説明して誤解は解けていた。

その時にはもうハルユキは虫の息だったが。

「着いたぞ」

やいやいと、文句を言い合いながら進んでいるうちにどうやら到着していたようだ。

「ここは・・・」

もちろん初めて来た場所だ。ハルユキに見覚えなどない。

しかし、どんな所なのかはすぐにわかっていた。

「あの洞窟か・・・・・・」

木々に隠れるようにぽっかりと口をあけている大きな洞窟の入り口がそこにあった。

もし、木が花を咲かせていたり、葉を付けていたりしたならばきっと見つけるのは困難だったはずだ。

そしておそらくここが、レイの話に出てきたたあの洞窟で間違いはないだろう。

「さっさと行くぞ」

ずかずかと洞窟の中に進んでいくレイに四人は続く。

中に入れば入るほど暗闇に支配されていく。

ハルユキや、吸血鬼であるレイならば普通の人間より夜目は利くためさして問題はないが、他の三人はそうもいかず、代表してフェンがボッと手の平の上に炎を灯した。

「なあ、何でこんな所まで来たんだ？　魔力を与えるだけなら別に何処だっていいんだろう？」

横を歩くレイにハルユキが質問をする。

レイは目線は前に向けたまま口だけを動かして答えた。

「ここに魔力が集まるということは、それはつまり広範囲の地域に魔力路（パス）が繋がっているというじゃ。そこからのほうが手間が省けるし、それにここは完全に塞がんといかんからの」

塞ぐ。

それはこの洞窟を物理的に塞ぐというわけではなく、魔力の流れてくる路を断つとそう、言っているのだろう。

「まあ、もうここで魔力が取れるなど覚えている奴もおらんと思うがの。念のためじゃ」

確かにまた直ぐに搾り取られる可能性も高い。

塞いでしまったほうが確かに有意義だと言えるだろう。

「しかし、そんな簡単に言ってるけど、要は封印だろ？　できんのかお前にそんなこと」

「ふん、伊達に八百年も生きとらんわ。それに、吸血鬼とは魔力のコントロールに長けた生き物じゃ。心配はいらん」

少しだけ得意そうに、そして滅茶苦茶偉そうに、レイはそう答えた。

◆
◆
◆

思ったよりも洞窟は広く長くて、奥に辿り着くのにそこそこの時間を要した。

辿り着いたその空間は今度は思っていたより大きくなかった。天井までは2メートルほど。

広さは人30人も入れない程の広さだ。

不思議と空気はよどんでおらず、むしろ通路よりも息苦しくない。

ハルユキ、レイに続いて三人も入ってくると、明かりを更に強くして周りを見渡し始めた。

「ほえー。なんか独特の雰囲気やなあ」

うろうろとジェミニが興味深そうに洞窟内の探索を始めた。

「おい、そこ危ないぞ」

「え？・・・・・・って、うわッ！」

その声のおかげで、ぎりぎりジェミニは踏みとどまった。

ぱらぱらと砂利がジェミニの目の前に開いた亀裂の中に吸い込まれていく。

「あそこが、例の？」

「ああ、魔力点じゃ」

ハルユキも亀裂の淵まで歩いて穴の中を覗き込んでみた。

「うっわ。深いなここ」

広げられていても割と小さめな穴だが深さのほうはちょっと視認できないレベルだった。

「さっさとやるぞ。ほれ、しゃがめ」

穴に夢中になっていたハルユキは何も考えずにしゃがみ、

「・・・・・・がぶッ」

噛み付かれた。

「・・・・・・なあ、それは首からじゃなきゃいけないのか？」

「ちゅぱッ・・・ちゅーー・・・ごくごく」

血飲中のレイは聞く耳持たない。

無意識のうちに離れようとしているハルユキの首を手を回して引き寄せた。

後ろではまたプルプルと肩を震わせている人間がいたが、今度はある程度事情を話しているので自制しているようだ。

一分ほど血を吸った後、レイは静かに口を首から話した。

すぐさま手首を噛み切ると、どくどくと出続ける血を亀裂の中に注ぎ込んでいく。

変化は直ぐに現れた。

ぼう、と亀裂の底の底に光が点ったかと思うと、光が一瞬で上ってきて亀裂から噴き出してきた。

思わずしりもちをつきそうになる程の勢いで光が迸る。

「相変わらず、とんでもないのう・・・。１００年、血を集めてもこうはいかんぞ」

しばらくそれを見ていると、だんだんと地面に浸透していくかのように光の柱が消失していった。

最終的には亀裂の中がぼんやりと光るぐらいに落ち着くと、それを見たレイが言った。

「よし。封印するぞ。ほれ役立たずは隅に行け」

そう言ってハルユキを端っこまで追いやって、今度は少しずつ血を辺りに振りまくと、一歩だけ前に進んで亀裂に手を翳した。

そのままぶつぶつと詠唱を始める。

すると、詠唱が進むにつれて足元で赤い魔法陣が広がって行った。

「・・・・・儀式魔法・・・・！」

それを見たジェミニが驚きの声を上げた。

「なんだそれ？　儀式魔法？」

ハルユキが小声でジェミニに尋ねた。

「儀陣魔法ってのは、大人数で行う大規模魔法のことなんやけど・・・」

じっと詠唱を続けるレイを額に汗を走らせながら見つめながら続けた。

「普通は魔法使いが１０人がかりとかで、長時間掛けて挑む魔法なんや。流石は吸血鬼ってとこやなぁ・・・」

説明を受けている間に魔方陣はいったん広がった後、亀裂の上に球状に凝縮していった。

レイが、パンと手を合わせると、その魔方陣は穴の中に落ちていく。
一瞬だけ唸りをあげて光が強まったかと思うと、すぐさま光がまた弱りだした。
今度は消えるまで光を失っていき、洞窟内を照らすのは最初のようにフェンの魔法だけになった。

「ここは終わりじゃな。あと何箇所かここと同じ様な地点がある。今日はもう一箇所行くぞ」

そう言うと、さっさと洞窟を出て行った。

「体がもたねぇよ。血をとられる身にもなってくれ・・・」

ふらふらと足元も頼りなく、ハルユキとその一行もそれに続いた。

外に出ると、太陽がもう完全に顔を出していて、桜の新芽がその身に纏った露に光を受けて輝いていた。

◆
◆
◆

「マクスさん！　桜が！　蕾をつけ始めました！！」

秘書の一人が村長であるマクスの書斎に飛び込んできた。

「わかっています。きっとあの方々がやってくれたのでしょう」

まだ全てではないが、一昨日辺りからそこら中で桜の芽が出てきたことが確認され、同時に死んでいた土も息を吹き返してきた。

昨日までは村の中でも半信半疑だったものの、今日の朝村のすぐ外にある桜も芽吹いたことで村人全員がそれを見に行き村が沸いた。

そのせいか、昨日までとはうって変わった雰囲気が村中を包んでいる。

「ほら、外で人手を求めていますよ。ここはもういいですから行ってあげて下さい」

「はい！」

満面の笑顔で返事をすると、バタバタと外へ出て行った。

「まったく、何もわかってない馬鹿共が」

間違いなく秘書が外に行ったのを確認すると、マクスは書斎の棚から何かを持ち出して、それを机の上においた。

それは、交信魔球と言う任意の相手と連絡を取り合うという魔具の改良版で、より遠くの物とも通信ができるというものだった。

どう考えても、こんな寂れた町に必要なものでもないし、手に入るものでもない。

「起動」

その言葉に答えるようにぼうっと淡い光が中に点った。

「レオ様。マクスにございます」

そう言ってしばらくすると、人影がマクスが持った玉から浮き上がった。

『マクス、どうしたんだい？　随分久しぶりだけど？』

そう答えた声も玉に浮かび上がった姿もどう見ても子供だが、玉越しに伝わる雰囲気は老獪なものだ。

鉄のような冷たさがにじみ出ている。

「はい。桜が、咲きました」

『桜？　・・・・・・ああ。随分前に君が枯らしてしまった、あの桜？』

嫌味が入ったその言葉にマクスは思わず苦い顔をする。

「その件に関しては謝る他ありません。しかし、もうあと少しです。もう一度完全に魔力を抽出できれば、完成します」

『それはとんだ僥倖だ。

・・・・・それにしても、よく復活させたね。かなり深刻な状況だったと記憶してるけど』

「ええ、いい獲物が村に迷い込んできましてね。いつもの様に吸血鬼の元に向かわせました。

おそらく血を絞り取られたのでしょう。只者ではなかったようなので、いい魔力になったのではないかと」

『へぇ、計算どおりってわけだ。やるねえ、マクス』

その言葉にマクスは光栄ですと、短く返すと通信をきるために言葉を続けようとした。

『でも、今度失敗したら殺すから。心してよ？　それじゃ・・・』

軽い言葉からは想像できない殺気の篭り方に、呼吸までもが止まってしまった。

ブツンッと、一方的に通信が切れる音がして、マクスは漸く呼吸の仕方を思い出すと、ぶはっと息を吐いた。

途端にマクスは体から力が抜け、背凭れに寄りかかる。

「くそっ、あの化け物が・・・！！」

そう言いながら、乱暴に引き出しの取っ手を掴み、今度は中から一冊の本を取り出した。

その本には鎖が無数に絡みついており、とても本としての本分を果たそうとはしていない。

それを眺めながら、マクスは先程とはうって変わった汚らしい笑顔をその顔に表した。

「もうすぐ、だ・・・」

その声に反応するように、ドクンと本が鼓動した。

◆
◆
◆

「あー、いい天気だ」

一昨日の夜から厚い雲が空を覆い、月も星も太陽も隠してしまっていたから余計に太陽が眩しく感じる。

「今夜の満月にあわせて、魔力を撒いていたからの。晴れてよかったわ」

朝から外に出て、太陽の光を全身に受けて気分をリフレッシュしていた所に、レイが現れた。

「今日、後二箇所行って最後だったか？」

「ああ、それで最後のはずじゃ」

そう言ってずかずかと気持ちよさそうに光を受けながら歩いていった。

続いてまた後ろから、今度は大人しくトコトコと言う足音が聞こえてきた。

「・・・・・・・・・ハルユキ」

「フェンか。どうした？」

「・・・・・・イサンは、どうしたの」

イサン、か。

初日、一度家に帰った後初めてイサンに会わせて、その日は俺とジェミニ、レイと3人だけで行ったため、フェンとユキネの二人はイサンのそばに一日いたのだろう。

そして今日起きて、イサンは二人のことを忘れていたはずだ。

戸惑うなと言うほうがおかしい。

「あいつが桜を復活させようとしてるのは、イサンの病気を治すためなんだとさ」

吸血鬼のくせに、すっかり草原になった地面に寝っ転がって日光浴をしているレイを指差して言った。

「家族だから、だとさ」

「・・・・・・家族・・・・・・・・・」

ぼーっとフェンもレイを見つめる。その顔には少しだけ陰がおちているように見える

「ユキネも戸惑ってるだろうから、教えてやってくれ」

どこか遠い目をしているフェンにそう言った。

「・・・・・・家族、か」

既にフェンは家に戻る路についていて、俺がこぼした言葉は誰にも届くことはなかった。

◆
◆
◆

パン、と手を叩く音と共に魔法陣が圧縮してできた赤い玉が、亀裂の中に落ちていく。

これまでと同じように一瞬だけ光が増すとだんだんと勢いを失っていき、最後には完全に光が消えた。

「・・・終わり、か」

俺がそう言うと、レイは複雑な表情でこちらは振り向いた。

「行くぞ。もう日が落ちるまで2時間もないだろう」

その顔に映っているのはなんだろうか。

不安もあった。期待もあった。達成感も、寂寥も、喜びだってあった。

だが、その顔は決して明るいとはいえなかった。

「これで駄目ならどうするんだ?」

「・・・お主、よくそう、ズバッと聞けるのう、そういうことを。空気ぐらい読めとか言われんか?」

うるせぇよ、大きなお世話だ。

「喜んでいいのか不安でいいのかも自分でもわかっていない奴に、気ぃ使ってもしょうがないだろ」

フン、とレイは鼻で笑った。

俺の言葉に笑ったのではなく、自嘲であったことは見れば分かった。

「先の事も考えられなくて、どうしていいかもわからないなら、ただ成功を信じてりゃいいだろ。他にすることも、もう無いしな」

「・・・・・アホが一丁前に意見をするな」

そう言って今度は俺に向かって不敵に笑って見せた。

まだ背中には不安が見え隠れしているが、見せた笑顔は少しは明るくなっていたので良しとしよう。

「お、そうだ。花見しようぜ、どうせだからな」

「花見？　儂は別に構わんが・・・」

「よし決まりだ。材料とかは大丈夫か？」

「材料はあったが、水が少なくなっとたから川に汲みに行かんといかんな」

「あん？　どっかに井戸かなんかなかったか？」

「あれは儂が来る前から水が出ん。水汲みは川じゃ」

あそこか？

この三日で何度か見かけた小さな水流。

とても川と呼べるものじゃなかったが。

「ああ、いやフェンに出してもらえばいいか」

安心して、川のほうには行かずまっすぐに家がある方向を向く。

――刹那、ピリっと首筋に視線を感じた。

バッと後ろを向く。

だが、後ろには桜の蕾が芽吹いた木が乱立しているだけだ。

ぐっと目に力を入れて周りを探ってみるが、もう暗くなり始めているためたいして遠くまでは探れない。

もう既に視線は感じない。

（気のせいだったか・・・？）

前に向き直るとレイが此方を怪訝そうに見ていた。

「なんじゃ。どうかしたのか？」

「いや、なんでもない。行こうぜ。腹減っちまった」

◆
◆
◆

「へえ、なかなか面白そうな人が居るなぁ」

ハルユキの後方、約３０００メートル地点にそれは居た。

一羽の烏。

その目に生き物としての輝きはない。所謂使い魔というものだ。

その主人は、自分の部屋で柔らかいソファでくつろぎながら、ハルユキの様子を観察していた。

「マクスの予想はてんで的外れだったわけだけど・・・」

この使い魔の目には細工をしていて、ある程度の障害物なら通り抜けて対象のみをのぞき見ることができるという代物だ。

あちらからは木に邪魔されてこの使い魔のことなど見えはしないはず。

それなのに、あの反応。

おそらく、これ以上近づいたのなら途端に見つかるだろう。

「随分と、面白いことになってるみたいだね。捨てた玩具には興味はないんだけど…」

おもむろにソファから立ち上がると、同時に遠く離れた森の中で使い魔が散り去った。

そのまま、まっすぐに部屋を出て”城”の外延部に向かう。

しばらく歩くと、家畜場に出た。飼っているのは決して牛や馬などのそれではない。

「ソドムを使うよ」

家畜上の入り口に控えていた兵士にそう告げると、家畜上の中でも一番の巨躯を誇っている”飛竜”に乗り込んだ。

「レ、レオ様!?　ど、どちらに?」

兵がいきなりの展開にやっと追いついて、龍にまたがる少年に問う。

「んー、ちょっと遊びにね」

無垢に不敵にそして不気味に口元をゆがめると、ものすごいスピードで竜と少年は夕闇の中に消えていった。

◆
◆
◆

「おーい、どんどん料理持ってけー」

イサンと、ハルが作った料理がどんどんと机に並んでいく。

どうせ桜が咲くなら花見をしようということで、夕方頃に帰って来たハルユキがイサンと一緒に料理を始めたのだ。

材料はどうするんだ？　と聞くと、ここに材料やら日用雑貨などを何処にでも運んでくれる特殊な業者に定期的に持ってきた材料がまだ結構残っているのでそれを使うらしい。

それにしても、イサンはともかくハルが料理ができるとは思わなかった。

本人が言うには、覚える必要があったから簡単に覚えただけらしいが、少なくとも私よりもできることに違いはない。

「私も、覚えるべきだろうか・・・？」

自分の手をまじまじと見つめる。

所々に剣ダコができていて、とても年頃の乙女の手とは思えない。

「・・・・・どうしたの？」

自分の手を見つめて落ち込むのを一旦中断して、後ろを振り向いた。

そこには両手に料理がのった皿を持ったフェンが立っていた。

手がプルプルして危なかったので一つ代わりに持ってやる。

「フェンは料理できるか？」

そう聞くと、フェンは一旦料理を見て、空いた自分の手を見て、それから私を見てふるふると首を横に振った。

「そうか。フェンもできないのか」

ほんの少しホッとしたのは内緒だ。

しかし、何も作れないというのはどうなのだろうか。

今までは王族として育ってきたからそんなものは必要なかったが、もう私は普通の人だ。

普通に結婚することもあるだろう。

（結婚かぁ・・・・・・）

私もこれで女だ。結婚に憧れがないわけではない。

自然とウェディングドレスを着た自分を想像した。

しかしイメージは浮かんでこない。

――ただ、代わりに相手のイメージが出来上がっていることにふと気づいた。

タキシードから覗くその顔は・・・・・そこで料理を作っているあいつだった。

「あっ・・・・・・う、あ・・・」

顔にひとりでに血が上がっていくのが自分でわかった。

な、何でここでハルなんだ!?

べ、別にあいつは友達で、仲間で、そんな風に思ったことなんか・・・・・!

・・・・・ない、のか？　本当に？

「・・・・・・ユキネ？」

「ひゃうッ！！」

後ろから肩を叩かれ跳び上がってしまった。

料理がこぼれてしまいそうになるのをどうにか堪えて、ほっと息をつく。

「・・・・・・どうしたの？」

不思議そうにこちらを覗き込むフェン。

ふと、思った。

「フェンは、恋愛とか、わかるか？」

そういえば、最近似たような質問をしたような気がする。その時は有耶無耶になったはずだ。

フェンは私の質問の意味を噛み砕くのに手こずっているようだ。

いつもの私はこんなことを言わないから変に思う気持ちもわかるが、別に深い意味はない。そのままの意味だ。

そのことをなんとなく察すると、フェンは考えながら周りをゆっくり見渡し始めた。

まず、イサンとイサンが作った料理のつまみ食いをしているレイを見て、家の中から酒を運び出しているジェミニを見て。

そして、最後に小皿で料理の味見を確かめているハルユキを見て、視線を動かさないまま、答えた。

「・・・・・・・・・・よく、わからない」

「・・・・・・・私もだ」

二人でため息をついた。

出来上がった料理を置く机とキッチンを往復しているハルユキ。

エプロンつけておたま片手に忙しなく動いている姿は、とても古龍を圧倒したり、城を吹き飛ばしたりした人間だとは思えない。

いきなり、ハルユキが視線に気が付いてこちらを向いた。

ぱっと反射的に目を逸らす。

気付いたらずっと目で追っておいたらしい。途端に恥ずかしくなって、また顔に血が集まってきた。

目を逸らした先には同じようにこちらを向いたフェンの顔があった。

フェンの心の中が手にとるように。顔がほんのりと赤いから。

「・・・・・おい。全然料理が運ばれてないんだが？」

その声は最後まで聞かなかった。

こめかみに血管を浮かばせているハルユキから逃げるように、少しだけ冷めてしまった料理を片手に、もう片方でフェンの腕を掴んで外へ出た。

そのまま外に設置されたテーブルまで走った。

何で逃げ出したかわからない。

自分の気持ちもわからない。

フェンも同じように分かっていないことは分かる。

それ以外は何もわからなかった。

頭上で桜が、花を咲かせる時を今か今かと待っている。

◆

◆

◆

夕刻。

既に太陽の一部が遠い山に隠れ始めている。

もう後数分もすれば、舞台は夜空に、主役は太陽から月へと替わるだろう。

「まあ、とりあえず飯と酒、だ」

乾杯しようと酒をコップに注ごうとすると、横からコップを掠め取られた。

俺の見た目は１８歳位で成長が止まっている。

それで、お酒は二十歳になってからの精神にのっとられたイサンが、酒瓶を奪い去っていったのだ

「小僧はお預けじゃなあ」

クックッと笑いながら酒を口に運ぼうとするレイの後ろにもイサンの影が出現して、酒を掻っ攫っていった。

二人とも未成年じゃないと主張してはみたが、既に酒が入っているのかイサンは聞く耳を持たなかった。

「かんぱーい！」

そして、何故かハイテンションのイサンがさっさと一人で音頭をとってしまった。

結局、二人してフェンとユキネのために作った蜂蜜とオレンジに似た果物の果汁を混ぜたジュースを飲むことになった。

「ん・・・・・・？」

「お・・・・・・・」

だが、これが結構美味い。

酔いはまわらないものの、そこそこ良い気分で日が沈むのを待つことにした。

「イサンさんは、もうちょっと若かったらなあ。こんなベッピンさん、ほっとかへんのに」

「イサンさんなんて畏まった呼び方しなくてもいいですよぉ。それにねぇ、まだ私は現役ですよ？　っていうかイサンさんて語呂悪すぎますよねー。誰がつけたんでしょう、全く」

ジェミニはいつもの事だからともかく、イサンは既にべろんべろんに酔っ払っている。

ユキネとフェンは机の端で熱心に何かを話し合い、俺はとりあえず目の前の飯を食べることに集中していた。

あっという間に太陽が落ち込んでいく。

だんだんと太陽が下がって来るたびに、柄にもなく緊張してきてい

るのがわかった。

もう見えているのは頭頂部だけだ。

目をやると、レイも黙って肘を突き、どこか力なく太陽を見つめている。

・・・そして。

完全に太陽が沈み、空に夜の戸張が下りた。

――同時に何処かでパチッと花が開く音が聞こえた気がした。

光の大元を失ったはずの空が再び明かりを取り戻していく。

一つが光を吸収して魔力に変え、隣り合ったいくつかに魔力をその

魔力を与える。

それが連鎖して、下りたばかりの戸張が上がっていく。

不意に、ひとひらの光の欠片がひらりとレイが持ったコップの中に舞い落ちた。

それを待っていたかのように何処からか一陣の風が吹きぬけた。

それは屋根の上をかすり、俺達を通り過ぎ、森の中を駆け抜けていく。

一気に光の欠片達が空へ舞い上がった。

「すごい・・・」

感嘆の声は誰のものだったか。

太陽が沈んで僅か１０秒足らず。

桜が、咲き誇る。

桜吹雪（後書き）

感想お待ちしています。

無礼講（前書き）

テスト終了。

無礼講

上へ、下へ、右へ左へ。

桜の花びらが視界を埋め尽くすんじゃないかというほどに咲き乱れる。

風が木々の間を通り抜ける音が、桜たちの歓喜の声にさえ聞こえてくる。

森の薄らと生えた草の上。

花びらが降り積もるのはまるで雪のように、空中で輝くのはまるで星のように。

――――幻想的。

その言葉が陳腐に感じるほどに荘厳な光景だった。

「ぅわぁ・・・」

「・・・・・・・・綺麗」

「こりゃ、また・・・・・・」

一旦話すのも、食べるのも、飲むのも、もしかしたら息すらも忘れ

て、ほぼ全員の目が桜に釘付けになる。

しかし、その中でレイだけが未だに力なく、ただなんとなく桜を眺めていた。

レイの視界の中には酒瓶を胸に抱きとめて桜をじっと見つめているイサンがいる。

この瞬間、一目でも視界からイサンがいなくなるのが不安だった。

でも直視するのはもっと怖くて。

だから最後の最後で足が止まってしまっていた。

「…行かないのか」

隣でちびちびと甘ったるいジュースを飲みながら、目線は桜に向けたまま、ハルユキがレイに声をかけた。

レイもそれに倣うようにコップを口に運ぶ。

「・・・・・やることはやったからの。後は待つだけじゃ。”イサン”なら多分此方に来るじゃろうし、の」

そんなことは、建前だ。

待っているんじゃない。ただ、行けないだけ。

そんなことは二人ともわかっていて、お互いがわかっていることもわかっていた。

しかし、ハルユキは思う。

家族なんて、俺は血が繋がっているだけの兄貴（たにん）しかいなかったからよくはわからないが。

きっと、歩み寄って、支え合うものであるはずだ。

なら。

二人が家族だっていうんなら。

偶には片方に片方が頼ってしまってもいいだろう、と。

レイは家族が戻ってくるのをただ待ち続ける。

◆

◆

◆

桜を肴に晩酌を楽しみ続ける。

「やっぱ、酒が欲しいよなぁ・・・・・・」

美味いとはいってもやはりジュース。桜を肴にするには少し物足りないのだ。

ハルユキは空になったコップにこれ以上、甘汁を注ぐ気になれずテーブルの上に突っ伏す。

「やはり、少し酒を持ってくるか。ちょっと待っておれ」

そう言って、レイは珍しく自分から雑用を請け負い、席を立とうとして。

トン、と目の前に酒の瓶が置かれた。

瓶の首には、ほんの少しだけしわがれてしまった、女性の手。

「折角の桜月夜です。硬い事はもう言いません、飲みましょう。無

礼講です」

イサンがいつの間にか、ハルユキ達の後ろに立っていた。

そのまま、ハルユキとレイの間を無理やり空けて、そこに座り込んだ。

自分のコップを何処からか取り出して、机の上に置くと同じく机の上で空になっている二人のコップもろとも酒を注ぎだした。

真っ先にそれに口をつけると、ゆっくりと口を開いた。

「・・・・・わかりません」

脈絡もなく、イサンがそんなことを言った。

「・・・わからない？」

「・・・・・・・・・はい」

その声はどこか、ハルユキ達に向けて話しているというより、自分に言い聞かせているような印象だった。

「綺麗な桜ですよね」

何を言っていいのかわからない二人をおいて更に続ける。

「とても綺麗です。見ているだけで心が躍ります。…でもなぜか、同じところが痛い気も、します」

「イサン・・・・・・」

レイが漸く声を出した。

その声は悲しくも、どこか乾いていた。

「レイ”さん”」

すっと、体ごとレイのほうを向いてつぶやくように名を呼んだ。

その言葉で確信に至る。

レイの３０年は思うような結果を出してくれなかったことに。

それでも、レイは表情を崩さない。

しかしハルユキには、「レイ”さん”」と、そう呼ばれたときから、レイの瞳の奥が辛そうに揺らぎ続けているのが見えていた。

イサンも顔をゆがめながら、叩きつけるように言葉を紡ぐ。

「でも、でもそれ以上に、こうしてレイさんと桜を見ていると……」

イサンの頬を伝う涙が、そこで言葉を遮った。

「あ、れ……？　おかしいですね。こんないい日に涙なん、て……」

無理に笑おうとするが笑えない。

涙を救っても止め処ない。

「・・・・・・すみません。少し、一人に・・・させて下さい」

そう言って、頬を服の袖で拭いながら、小走りで家のほうに走り去った。

３０年という時が乗っかったその背中は、歳をそれなりに重ねているせいか希薄な印象を受けた。

その背中にも、レイの肩の上にも、俺の足元にも、注がれた酒の上にも、桜は等しく花を散りばめる。

家のそばに屹立する、ただ一本この森で完全に枯れている大木がイ

サンの姿を隠して消した。

◆
◆
◆

「駄目じゃった、か・・・・・・」

イサンの姿を枯れ木が隠してしまってから。

レイがどこかすっきりした声でそう言った。

「・・・・・・そうだな」

同情も寂寥も、悲壮も不安も憐憫も怒りも、慰めでさえも。この場にはふさわしくなかった。

だから、一緒に酒飲んで、愚痴ぐらいは聞いてやろうと。

ただ、そう思った。

「この３０年。思えば儂のエゴだったのかもしれんと、さっきそう

思ったよ」

ポツリ、と零れるようにレイの口から音が出た。

「・・・・・・エゴ？」

予想していなかった言葉に、意味を把握しかねた。

「あの症状はな、別に自白剤の副作用ではなく、心因性のものだそうじゃ。つまり、思い出したくないから、何も考えたくないからあなってしまった、と考え始めていた」

「・・・・・・」

「それに３０年じゃ。人間にはちと、時間が掛かりすぎたんじゃ・・・」

椅子に座ったまま夜空を仰ぎ、そう呟いた。

俺もなんとなく空を見上げる。

近くで桜が、遠くで星が踊っている。

「…後悔がないなら、それでもいいんじゃないか？」

少し間を空けて、レイが短く笑った。

「なかったら、楽なんじゃがのう・・・」

俺が見たその笑顔は、悲しく寂しく。

下唇をほんの少しだけかみ締めて。

――――辛い時には、泣く奴がいるし怒る奴もいる。

でも一番見ていて辛いのは・・・無理して笑っている奴だ。

それが、８００年生きた吸血鬼にも言えるかはわからないけれど。

多分、吸血鬼も人間も感じるところは同じだと思う。

「めんどくさいの、家族（にんげん）というのは・・・」

「・・・・・そう、なんだろうな」

めんどくさいし、弱っちぃし、おまけに温かい。

「人間なんて、アホばっかりじゃ…！」

少しだけ湿った、そして少しだけ悔しそうな声でレイが全人類に喧嘩を売るような発言をする。

ま、いいか。だって今夜は無礼講だ。

今この場では、吸血鬼でも人間でも、例え神様でも皆等しく平等だ。

俯いてしまったレイを視界に入れないように、俺は机に残った3つのコップの一番右の、なみなみと酒が注がれたそれを手にとった。

「飲もうぜ、せっかくの酒だ」

レイも俺に倣って左側のコップを持ち上げる。

俺もレイも、コップを掲げた。

イサンが残していったコップの上で、お互い目も合わせないまま、カチン、と無言でコップをかち合わせた。

そして、それを合図に花見は終わりを迎えた。

一瞬で風が止んだ。

同時に不穏な気配が周りを包みこんでいく。

未だ目に見えた変化はないが、不吉な雰囲気に飲み込まれてしまいそうになる錯覚に襲われる。

そう思ったのも束の間、いきなりすっと夜の闇が戻った。

つまりは、桜が、死んだ。

「なッ・・・！！」

声を上げた次の瞬間には、桜の光が戻った。

しかし、明らかに最初より光の勢いは死んでいる。

桜は苦しむように身を揺らしながら明滅を繰り返す。

「これは・・・・・・！」

レイがコップを取り落とし、声を荒げた。

地面に落ちたコップはドッと草の上で鈍い音を立てる。

「おい、もしかして」

この現象。見たことは無いが心あたりならある。

搾取。

魔力を搾り取れている。

「どういうことじゃ・・・！？」

一度消える度に、光の勢いが目に見えて弱っていく。

そこで、辺りを見渡していた俺の目に明らかに異常な光景が入り込んだ。

「あれ・・・、何だ？」

俺が声をあげる前にこちらに走ってきていたユキネが叫んだ。

小さな家の脇に生えた大きな枯れ木の根元に、ひっそりと存在していたはずの井戸。

そこから、うっすらと光が噴出していた。

「灯台下暗しという訳か・・・！」

「・・・どうする？」

この問いかけには二つの意味をこめたつもりだ。

様子を見るのか、それと、そもそも止める必要があるのか。

レイの試みは失敗だったものの完遂はしたのだ。もう桜が必要なわけでもない。

「・・・・・あそこが儂の家なら森は庭じゃ。土足で荒らすやつは叩き潰す」

意味はどうやら伝わったらしく、レイは怒りに燃えた目で言葉を搾り出した。

「ま、俺も花見を邪魔されたのは気分が悪いしな」

そう言いながら井戸に近寄り、中を覗き込む。

漏れている光もほんの少し明滅を繰り返しているようだ。

「ここが魔力点というわけではなさそうじゃな。おそらく、この下に・・・」

レイが言い終わる前に井戸のふちに足をかける。

「先に行く。合図したら下りて来い」

そう言って、躊躇いなく井戸の中に飛び降りた。

ゴッと目の前が光に包まれる。

薄く明るい光の中を加速しながら落ちていく。

無礼講（後書き）

感想お待ちしてます

神に堕ちる

数秒後、井戸の底とは思えない、乾いた地面の上に着地した。

滞空時間から考えると、普通の井戸のそこよりもかなり深いようだ。

恐らくもともと井戸として使うために作られたものではないのだろう。

井戸の底は少し広がっていて、奥に階段が続いている。

明らかに自然の物ではなく、おそらく誰かが人工的に作ったものだ。

とりあえず、状況把握したところで、上の奴らに下りて来いと声を張り上げた。

すると、レイが真っ先に俺と同じように飛び降りてきて、それに続いて、他の3人が風の魔法で空気抵抗を増幅させながらややゆっくりと下りてきた。

「よし、さっさと行くぞ！」

待ちきれないとばかりに、先陣を切ってレイが突き進んでいった。

目に見えてみちていた光が弱っていく。

確かに、ゆっくりしている時間はなさそうだった。

とにかく、レイに続いて小走りでほんの少しだけ進むと、また井戸の底にはそぐわないな物が俺達の進行方向に現れた。

「扉・・・？」

誰の声かはわからない。

ひょっとすると俺の声だったかもしれないが、とにかく誰かがそうこぼした。

石造りの高さ2メートルほどの無骨な扉がそこにあった。

先程までの階段も相当なものだったが、これも完全に人の手が加わっているのは間違いない。

その扉が左右共に少しずつ開いていてそこから光を纏った魔力が漏れ出している。

ここからでも人の気配が中に存在しているのが分かる。

村の人間だろうか？

・・・・・いや。おそらく違う。

正確に言えば、村の人間かもしれないが、一般人ではないだろう。

そうでなければ、３０年ここにいたレイも知らないこの場所を知っているのは不自然だ。

それが他の４人も分かったのか、緊張が生まれだしていた。

そのせいか、背中に冷や汗が落ちる。

「・・・・・・行くぞ」

嫌な予感が満ち満ちているが、ここでグダグダやっていてもしょうがないので一声だけ声をかけ、一気に扉を開け放った。

同時に、俺、レイ、ジェミニが前に飛び出て周りを警戒する。

目に飛び込んできたのは、またしても森の中の小さな井戸の底には相応しくはない光景。

「・・・祭、壇？」

祭壇というには些か大きすぎる気もしないが、ピラミッドのように階段状に延びている土台の先端に台が置かれている姿は祭壇だとしか言いようがない。

ドーム上に広がった空間の奥に壁を背にして建っていた。

その中心に魔力点があるのか、祭壇の上からほんの少し光が下ってきている。

祭壇から生まれ出ている魔力のほとんどは、魔力点に竜巻のように収束している。

そして、その傍に人影が一つ。

「遅かったですね、吸血鬼。それと、ああ、君達生きていたんですか」

俺達が来るのを待ち構えていたかのように落ち着いた声が響いた。

「村長さん・・・？　どうしてこんな所に・・・」

見たところ、壮年の男のようだ。

ユキネが言ったことを加味すれば、村の村長なのだろう。

どう見ても、ただの人間。大して強くもなければ、脅威もさして感じない。

しかし、俺の中のどこかが必死に警報を鳴らしている。

再び冷や汗が俺の背中を伝っていく。

「・・・・・そこで何をしている？　人間」

普段とはうって変わった、低い唸るような声でレイが男に殺気をぶつける。

「あなた達が想像している事で間違ってはいないと思いますよ」

唇の端を吊り上げて、もったいぶった話し方で話す男に嫌悪感を覚えた。

レイは軽く舌打ちしながらも、冷静に言葉を返す。

「なら今すぐ止めろ。今なら殺しはせん」

「生憎、他の所では漏れてくる魔力を拾うしかできないので、ここで搾り取るしかないんですよ」

「もう一度言う。・・・止めろ」

「・・・はっ」

鼻で笑ったような声に、レイが更にイラつきを露にしていく。

「この状況が、あなた達が私に何かを強要できるほど有利だとでも思っているのですか？　ならそれは見当違いだ」

「・・・・・・もういい、やめる気がないなら、とめるまでじゃ」

そう言ってレイが一歩踏み出す。

「信心を持っていませんね。全く程度の低い生き物だ、吸血鬼というのは」

そう言って、右手を掲げた。

「・・・・・・なので、その身に教授して差し上げましょう」

手の上に魔力が凝縮されていっているのが見える。

いや、手、じゃない。あれは・・・・・・。

「・・・・・・本？」

黒い表紙、そしてそれが見えないぐらいに滅茶苦茶に鎖が絡みついている。

ゾクッと背中に悪寒が走った。

「――――”その御身を掌の内に。司るは万能の”」

男が静かに呟いた。まるで、祝詞を紡ぐように穏やかに。

隣で驚きに息を飲む声が聞こえた。

「とめろ！！！」

続いて、普段聞いたことがないようなジェミニの切羽詰った声。

ジャラッ・・・と金属音が響く。

途端に、魔力の渦が掻き消えほんの一瞬だけ静寂が空間を支配した。

「――――”降誕”」

反射的に銃を精製し、流れるようにそのまま人影に向けて撃ち放ち、それに追いつくような勢いで人影に迫る、が。

次の瞬間、魔力とも衝撃波ともつかない力の波が放射状に吹きぬけ、

銃弾を弾き飛ばした。

明後日の方向に飛んでいく弾丸を横目に、魔力波に勢いを殺されながらも男に向かって突貫する。

「騒がしいですよ」

魔力波が一瞬で消えうせ、男がゆっくりとこちらを向いた。

その姿には異様な点が二つ。

一つは、先程まで５０歳ほどの歳だったはずの男が若返っている。おそらく一番肉体的に優れていた年頃なのだろう。その身体にも瞳にも力が漲っている。

そして、もう一つ。

絶対的な力を持ったからか、優越感に歪んだその頬から首筋にかけて、薄らと、しかしそれでも存在を誇示せずにはいられないかのように。

”神”と。

なんとも傲慢な文字が刻まれていた。

それが目に入るだけで、その名に相応しいほどの力が伝わってくる。
人では有り得ない。
そういう類の力が確かに目の前に存在している。

「ッ…ぉおおおおおッ！！」

たまらず歯を食いしばり、大声で喝を入れ、その力の源になっているであろう右頬に向かって拳を叩き付けた。
しかし、拳の勢いは霧散し、悲しくも受け止められた、……否。
”届いてすらいない”。

「ぐッ・・・！？」

頬の直前に見えない壁ができているかのように拳がせき止められている。
バチッと何かが爆ぜる音がして、俺が与えたはずの運動エネルギーが、俺の腕に襲い掛かってきた。

一瞬で視界が乱れ、祭壇の頂点から垂直に空中へと投げ出された。

岩壁に背中から激突しそうになるのを、何とか身体を捻り、足で壁を受け止める。

ピシッと壁にひびが入るほどの勢い。

ほんの少しだけ痺れる足で壁を蹴りつけ、仲間達の下に着地する。

「・・・・・ジェミニ。あれは……！」

先程の口ぶりからジェミニは何かを知っているようにしか思えなかった。

ジェミニはほんの少しだけ躊躇うような沈黙を挟んで口を開いた。

「・・・・・降誕したんや。ふざけたモンがあのオジンにな」

「降誕じゃと？　神でも呼び込んだのか？　そんな馬鹿なことが……」

今にも飛び出しそうな自分を理性で抑えながら、レイも会話に加わる。

レイは半分冗談で言ったのだろうが、あの頬の文字が示すものに間違いがないのなら、あの男の身には冗談ではなく神が宿っているのではないだろうか。

「村で見た時と大分様子、というか性格が違わないか？　あの村長…」

「あれは、良かれ悪かれ影響力が絶大やからな。まだ人間の形を保てとる時点で、良いほうやで…」

見た目は確かに人間だが、物理的に干渉できるほどの魔力を持ち、俺が触れることもできなかった力を持ち合わせている。

そして、纏う空気は明らかに人間のそれではない。

「けど」

一呼吸間をおいて、祭壇の上でじっとこちらを観察している男を警戒しながら、ジェミニは続ける。

「けど、やっぱりまだ不完全なはずや。まだ文字が安定してへんし、それにあの降誕聖典は写本や。完全に降りてきているとは考えられん」

写本とは先程の黒い鎖に絡まった本のことで間違いないだろう。

あれを使ってああなったということか。

しかし、未完成というのもまた頷ける。
強大ではあるものの、万能感というのはあまり感じない。
不完全な完全。

そう言えばうまく伝わるだろうか。

「だからまだ少しずつ魔力を吸収し続けてる。あれは写本やから、あれ以上強大になることもないやろ。それに誰にでも定着するもんやない。
レイちゃんが魔力の元を封印できれば・・・・・、いやそれよりも、あっちに戦いの意思がないなら逃げたほうが・・・」
「却下じゃ」
「ふざけろ」
「・・・・・そう言うやろうとは思っとたけどな」

ジェミニは溜息を一つついて、続ける。

「じゃあ、やっぱり魔力を封印したほうがええな。レイちゃん、できるか？」
「無論じゃな。・・・と言いたい所じゃが、少し時間がかかるじゃろうな。
他の魔力点と違って、ここは規模が大きいようじゃ」

あれ？　ってことは・・・

「まぁた時間稼ぎかよ・・・・・・」

嫌だが、役割的にそうするしかないだろう。

しかし俺こんなんばっかだよ・・・。

囮やら、足止めやら。

…まぁ、いいか。

むしろ、ちょうどいい。

「神様なんてのにもし会えたら、絶対殴り飛ばすって決めてたしなぁ」

ズッと背中に何か圧し掛かったんじゃないかというほどの圧力が全員の体を襲った。

遅れて、男がこちらに意識を移したのだと悟る。

そして前から、カツン、カツンと規則正しく階段の石を踏む音が聞こえてきた。

神に堕ちる（後書き）

感想ください。
ていうか文字の上に点がうてない…

張りぼてのカミサマ（前書き）

もう夜中に書くのはやめよう…
何書いてるのか分からなくなります

「お話は終わりましたか？」

男が階段を下りながら、薄ら笑いを浮かべて声をかけてきた。

大げさに胸を張って、どこの小悪党かと言うほど必要以上に自分を大きく見せたいのが分かる。

しかし、その仕草に全く似合わない力の波が肌にビリビリと伝わってくる。

「待っててくれて、ありがとよ」

圧し掛かる重圧に耐えながら、どうにか皮肉を返す。

男は不快な笑顔を顔に貼り付けたまま、余裕を辺りの空気に滲ませている。

「いえいえ。これから私も少し話そうかと思いましてね。お互い様、というやつです」

「おしゃべりしようってか？」

「いえ、そちらも戦うことに決めたようですから、少し挑発を、と思いまして」

俺達と同じ地面でなく、階段の一番下の段で止まったのは、無意識的に俺達を見下しているからだろうか。

「そこの吸血鬼。そう、あなたです」

男はレイを指名する。レイは怪訝な顔で、しかし警戒は崩さない。

それを男は確認したかのように少しだけ笑みを深くしたように見えた。

「どうして、私がここを知っているのか不思議ではありませんでしたか？」

階段に座り込むと、組んだ手を口にあて話し始めた。

言っちゃ何だが隙だらけだ。

通じないだろうが、とりあえずもう一回殴ってみようとした所をレイに目線で止められた。

男が言っていたことが気になっていたらしい。

「まあ、別にもったいぶる必要もなのでそのまま言いますと、知っている人物に聞いたんです」

「・・・・・・何？」
「わかりませんか？　ではヒントです」
男は話し続ける。
誰かを追い詰めたくて仕方ないのか、もったいぶる必要はないと自分で言ったくせに話を長引かせている。
口は隠れていてわからないが、おそらく歪に歪んでいるだろう。
「イサンがなぜ、あんな所にすんでいるか考えたことはありませんか？」
レイが息を呑み、目が見張っていく。
「・・・・・・まさ、か・・・！」
「ええ、イサンに聞いたのです。しかし、中々話さないんですよ。あれは母親譲りなんでしょうね。あれの母親も妙な所で頑固だった」
口振りからすると昔からイサンのことを知っているらしい。
男は俺たちが何か言葉を発する前に、言葉を更に重ねていく。
顔に浮かべた笑みを更に見難いものに変えながら。

「中々、話さなかったので自白剤まで使ってしまいました。

まあ、井戸の場所を守れ、とかではなく、決して入るな。と言われていただけで、中に何があるかなんて知らなかったみたいですがね」

レイが小さい手を爪を食い込ませながら、音がしそうなほど握り締めていく。

「投与しすぎたせいか、痙攣しながらいらんことまで話してましたよ。

新しい家族がどうとか、一人のときは寂しかったとかね。知りませんよそんなこと。蹴りつけてやったら動かなくなってくれましたが」

男は、やれやれと困ったように首を振って溜息をついた。

それを皮切りに、一気にレイの顔が怒りと殺意に染まっていく。

男は、そんなレイの様子を見つめて嗤っていた。

……しかし、その表情には楽しさも嬉しさも宿っていない。

それはどちらかと言うと――。

瞬間、隣で殺気が爆発した。

これは、先程男が言ったように挑発以外の何物でもない。

そんなことは当然レイもわかっているだろう、が。

「ッ……レイ！！」

止める間もなく、レイが男に飛び掛って行った。

瞬きするぐらいの速さで血の剣を精製すると、男に投げつけ、同時に飛び上がった。

男は、合計４本の剣をそれぞれの指の間で苦もなく挟み込んで動きを止めて、感嘆の声を上げた。

「へえ、……冷静ですね」

しかし、そのまま男の頭上を飛び越えるとレイは階段を十段ほど行ったところに着地した。

「それとも、許してもらったと考えてもよろしいのですか？」

ギリッと激しい歯軋りの音と共にレイが振り返った。

「貴様は殺す。イサンに土下座させた後バラバラにしてやろう。…首を洗って待っておれ」

それだけ言って、階段に向き直り再び上り始めた。

瞬間、一気に場が動いた。

「ああ、怖い。怖くて怖くてたまらないから、…死んでくれますか」

「何ッ……！？」

いつの間にかレイの背後にまで男が迫っていた。

何をする気か知らないが、振り上げた右手は吸血鬼すらも死に至らしめるものなのだろう。

レイは突然のことで満足に反応できてない。

「おっと、お前はこっちだ」

その更に後ろに俺。服の首裾を引っ掴んで、

「ッそら！！」

入り口の壁に向かって力任せに投げつけた。

壁に激突して土煙が上がる、が、あれで倒したと考えるのは浅慮に過ぎるだろう。

「……任せる」

「手早くな」

レイは階段を上しだし、他の三人も既に階段を上がって来ている。

「お前らは、レイの護衛を…」

「いやだ」

言うだろうとは思っていたが、ユキネが狙いすましたかのように俺の言葉を打ち落とした。

「ユキネ」

俺が何か言おうとした所で、意外な所から声がした。

フェンがユキネの服を掴んで、目でユキネに訴えていた。
その声は穏やかながらも、有無を言わせない迫力を含んでいる。

「私達じゃ、足纏い。……今のままじゃ」
「しかし……」

しかしユキネも頑として譲ろうとしない。
俺達の中で、無力の悔しさを知っているのは間違いなくユキネだ。
弱い自分が許せない。
そういうことなんだろう。

「大丈夫だよ。行け」

頭の上に手を置いて、軽く撫でながら諭すように言った。
少しだけ迷ったようなそぶりを見せた後、ユキネはキッと俺を睨みつけた。

「……無理は、するなよ」
「しねえよ」

渋々だが、二人は階段を上がっていった。
それを横目で確認して、改めて男を包んでいる土煙の前に飛び降りた。

「おやおや、服が汚れてしまいました」

服についた埃を手で軽くはたきながら、何事もなかったかのように男が土煙の中から姿を現した。

俺を見て、次に階段を上りきった４人を眺めてから、俺に再び向き直った。

「封印ですか。なるほど、理に適ったやり方だ」
「余裕だな。あれを封じられるとお前は終わりだろ？」

俺の言葉にキョトンとした後、耐えられないという具合で笑い出した。

「はっはっはっはっ！！　あなた達はまだ分かっていない！　時間稼ぎでもしようとのことでしょうがその考えこそ傲慢だ。

私がここからあそこに歩いて行くまでで封印は終わらないでしょ

う？　それはつまり、勝敗は決しているということなのですよ！！」

俺じゃ時間稼ぎにもならない、と。

そう言いたいのだろう。

だが、御生憎。

「ここにいるのが、俺じゃなかったならな。それと、お前が神を演じるのはちょっと役者不足だろ」

ぴたっと高笑いが終わり、俺を睨み付ける。

自然と二人の周りの温度が下がっていく感覚に襲われる。

「不快ですね。傲慢な人間はだから嫌いなんです」

殺気だった顔でそう言うと、ゆっくり一歩を踏み出した。

「そこまで言うなら、私の歩みぐらい止めてみせてくださいよ。矮小な人間風情が……！」

「そうするよ。今日は無礼講だしな」

◆
◆
◆

ちょうど十度目の拳を男の胸元に叩きつける。

しかし、例によって拳は弾かれ俺の体ごと跳ね返される。

階段までは後１５メートル程。

男はそれだけの距離を焦らすかのようにゆっくり歩いていく。

「少し手を出しましょうか」

瞬間、地面が俺に牙を剥いた。

正面からだけではない。四方からでもない。文字通りそこら中の地面から地面が槍となり槌となり剣となり俺に襲い掛かる。

上。

咄嗟に地面が存在しない空中へと身を退避させる。

しかしここは地下。空中にこそ地面は存在しないが、天井にはしっかりと存在する。

俺を挟み込むように地面と天井が接近してきた。

「ッチィ・・・！！！」

地面がないので代わりに空中を思い切り蹴りつける。

容易に音速を超えられるようになった俺の脚は、空気を踏み台に推進力を生み出して俺の体を突き動かす。

俺が範囲から出たと同時に、ものすごい轟音を響かせて大地の顎が空間を噛み砕いた。

避けた所、避けた所に次々と顎が殺到する。

それが高速で物凄い数が連続していく。

やがて、男が俺のいる所まで到達した。

男はそれを視界の端に移す程度の意識で何事もないように通り過ぎていく。

「なめてんじゃ、ねえぞ……！」

上下から迫ってくる地面にナノマシンを大量に侵入させる。

魔力で先に操られている以上、たいしたことはできないが一瞬だけ動きを止めることに成功した。

それを感覚だけで確認すると、限界を超えた速さで空を蹴る。

どれだけ速く蹴ればそうなるのか、もはや蹴った感触は地面と変わらないほど。

そのせいで予想以上のスピードが出ていたせいか、着地の勢いを殺しきれずに地面にひびが入り、俺の頭に絡まっていたのか桜の花びらが一枚ふらふらと舞い落ちた。

その向こうに男が変わらず歩いてきているのを見つけ、即座にありったけの銃器を生成した。

間をおかずに、一斉に放火する。

銃弾と爆薬が辺りを削っていく。

しかし、聞こえるはずはないのに、轟音の中にゆっくり徒歩を進める音が俺の耳に割り込んでくる。

「……分かりましたか？　所詮は人間。力も魔力も劣るあなた達では…」

言い終わる前に砂塵から出てくるタイミングを狙い、接近し全力で右拳を振り上げる。

「だから、……無駄です」

少しは抵抗できたものの、結果は多分に漏れず、俺の拳はまたもや届かず障壁に阻まれる。

次の瞬間には、力が俺に返って来た。

地面に一度思い切りバウンドして階段に叩きつけられた。

「がッ…！！」

肺の中から空気が出て行き、一瞬だけ無酸素状態に陥る。

しかし、寝ているわけもいかないので痛みが引かないうちに唇をかんで立ち上がった。

「人間は弱い。私に触れることもできない。もう、分かったでしょう」

男の不愉快な説法を聞き流し前を見据える。

確かに神を脳裏に思い浮かぶほどの強大な力が男にはある。

だが、勝てないかといえばそれはまた別の問題だ。

「ハル！！」

上から俺の身を案じる声が聞こえる。

だから、座ってなどいられない。格好悪い所なんぞ見せてたまるか。

諦めるつもりも、さらさらない。

なぜなら、男の肩に勝機のかけらが光っている。

さあ、傲慢な張りぼての神様（クソヤロウ）を。

地に堕としてやろう。

神以上、人以下（前書き）

パワーインフレじゃないですよ？

神以上、人以下

「別に行っても良いのだぞ？　ここは儂だけでも構わん」

階段を登りきった途端、レイと呼ばれている吸血鬼がそう言った。

吸血鬼というからにはもっと凶暴で凶悪なものを想像していたが、どうもこの人（？）にはそれらの形容がしっくりこなかった。

今も、額に汗を浮かび上がらせて作業をしているくせにそんなことを言ったのだ。

「大丈夫だ。なんたってハルが大丈夫だと言ったんだからな」

私がそう言うと、レイは私の顔を妙な顔で見つめた後、苦笑い顔で溜め息をついた。

「それが、心配していない奴の顔か…？」

……別に、心配していないとは言っていないのだが。

でも、もし心配しているのかと聞かれたら、私はおそらく意地を張って、していないと答えそうだったので口を噤む。

「こんなに想われて、あいつも幸せ者じゃのう」

一般的に吸血鬼らしい意地悪い顔に一瞬で成り代わった。

「お、想うとか。別にそんなんじゃ…」
「おーおー。初心いのう。自覚なしか。そんなことじゃ、横からとられるぞ？」
「そっ……！」

そんなことはない。と叫ぼうとして、何の根拠もないことも、何でそんな事を言いたかったのかも分からなかったので途中で止めた。

「……アホじゃのう」
「アホじゃない」
「そちらの自覚もないから、アホだというのじゃ」

のらりくらりと老獪な印象を受ける話し方だ。

柳に風。

と、いった感じで押しても押しても手ごたえがない。

舌戦では勝ち目が薄いことは流石に気付いたので、唸りながらも口を閉じた。

祭壇のしたでは絶えず轟音が聞こえてくる。
一際大きい爆音が聞こえてきて、レイが魔力点に向き直った。

「しゃべりすぎたの。これから少し集中するぞ」

そう言って、既に広がった赤い魔法陣の中に存在する六角形のそれぞれの頂点に血の玉が出現しそこを中心に更に魔法陣が展開する。

「儂は完全に無防備になるからの。あの自称神を小僧に預けたというのなら、儂の背中はお主等に預ける。頼むぞ」

そう言うと、こちらが何か言う前に目を閉じ、手を合わせて詠唱を始めた。

もう何を言っても聞こえないだろうと想ったので、手に持った剣をきつく握り締めなおして、無言で頷いた。

手持ち無沙汰でジェミニとフェンの様子を見やると、ジェミニが唖然といった顔で、下で繰り広げられる戦いを見ていた。

「ユキネちゃん、フェンちゃん。いつもハルユキはあんな感じなんか…？」

心なしかその声は擦れている。

「そう言えば、ハルユキが戦っている所は私も見たことない…な…」

強いということはフェンから聞いていたし、ドラゴンを倒したということで分かっていた。

しかし実際に見たことは無かったのだ。

戦いに何気なく目をやって、自然と言葉が封じられた。

戦いの、次元が違った。

おびただしい物量の、それこそ地形を変えて攻撃を行う男に対して、ハルは、ほぼ身一つ。

宙にいるハルが消えたかと思うと、空気の炸裂音が響き、次の瞬間にはそこに上下から大質量の土が柱となって空間ごと噛み砕いていく。

もはや、地上はほとんど原形を残していない。

「ハルユキは……いつもあんな感じ」

ジェミニとは逆のほうから溜め息混じりの声が聞こえた。

「……めちゃくちゃ」

確かにその通りだ。

あれで、魔法を使っていないというのだから尚更異常だといえる。

ハルが地面ごと敵を吹き飛ばし、一気に接近した。

しかし、ハルは男に吹き飛ばされて、物凄い勢いで階段に激突してしまった。

「ハル！！」

思わず声がでた。

それでも、ハルは直ぐに立ち上がる。

その顔に不安の色もなく、諦めの色もなく。

なぜ声なんか上げたのか、と考えてしまうぐらいにいつも通りの背中だった。

◆
◆
◆

自然と唇がつりあがる。

「……気でも、触れましたか？」

この状況で笑う俺は確かに気が触れているように見えるかもしれないな、とゆっくり思考が巡る。

「確かに人間は弱いよなあ」

「……そうですとも」

「身体能力で言えば、そこらの虫にも劣るんだ。人間は人間にしか勝てない」

「分かっているならそこをどきなさい。そろそろ殺しますよ？」

人間は弱い。確かにその通り。

そのままなら。

――――でも多分、俺は神には勝てるが、人間にはきっと勝てない。

「けどな、人間は弱いから戦い方を練り上げ、牙も爪もないから道具を、武器を作ったんだよ」

もっと人間だけの物はある。

けどこの男を打倒するのは、温かい物ではなく冷たい無機質であるべきだと思う。

武器。

そう言えば俺の脳裏に浮かぶのは一つ。

使わない。

理由はただ使いたくないだけだ。

しかし、俺にそれ以上の理由は必要ない。だから、使わない。頼らない。縋らない。

たとえ、それが本当の神を死に至らせることが可能な物だとしても。

「やがて、創意工夫と道具だけで天災も防げるようになった。そして、人間は世界の頂点にさえ立てた」

「何が、言いたいんですか？」

果たして人間にとって今現在、神は手の届かない場所にいるのだろうか。

――否だ。残念ながら。

この男が神だろうが、人間だろうが。

打倒出来ない訳がない。

「お前も、倒せるってことだよ」

（おいおい、……お前は人間を語れるほど人間じゃねぇんだぜ？）

俺の中の住人の言葉を黙殺する。

そんなことは分かってる。でもまだ人間のところも確かに残っている。

体温も仲間も友達も。俺にはまだ残っている。

人間を諦めるのはまだ早かった。

それを証明しよう。人間のままこいつを倒して。

言い終わった後に、黙って男の肩を指差す。

肩に乗っているのは一枚の花びら。

俺の指差す先を見やって、花びらが肩に乗っているのに気付くと、男はそれを手でうっとおしそうに払った。

「…これがなんだというのです。ただの桜の花びらでしょう」

確かにただの花びら、だが俺が吹き飛ばされ際になんとかつけたそれは、確かに壁を越えて自称神に届いた。

「論より証拠。見せてやるから、黙って俺に倒されろ」

言うが早いか、男が何か行動を起こすよりも先に大量のワイヤーを生成した。

その数およそ５００。

次々に男に襲い掛からせる。

同時に俺の周りの地面が蠢きだした。

残像を残しながら高速で移動しながらワイヤーを操り、武器と為す。

短絡的では通用しない。

所々にナノマシンを潜らせ、関節に変え四方八方から男に襲い掛かる。

「ちッ…！！」

余裕綽々の態度が崩れ、男が防御体勢に移る。

土の壁を周りに張り巡らせて。

ワイヤーはその壁に当たった途端、絡めとられる。

目に見える限りの、全てのワイヤーの動きが止まると、土が崩れ男の姿が中から現れる。

額に少し汗をかきながらも、取り戻した余裕の顔ですました声を出した。

「何も変わっていないようですが？」

「――――足が、止まってるぞ？」

ピクッと取り繕った笑顔が引き攣った。

「お陰で、予測が確証に変わったよ」

「……不届きなその口を、閉じなさい…」

踏み出した男の足にワイヤーが絡まった。

ガクン、と男の動きが止まり、前につんのめった。

足元には、土から出てきた幾本かの鋼の綱。

「一つ。その障壁は全自動（オート）じゃない」

「こんなっ、物…！！」

ぶちぶちと力任せにワイヤーを引きちぎる。

その隙に、力から逃れている土に絡まったワイヤーが再び男に接近する。

土を隆起させている時間はないと判断したのか、男は咄嗟に障壁を張る。

「二つ。その障壁は全方向に同時に展開できない」

前面のワイヤーだけは弾き飛ばすが、それ以外からのワイヤーに体を絡めとられる。

「だから何だ…！　こんなもので私は倒せん！　神には届かない！

！」

「はいはい。神ね。そろそろイタイ事言うのはやめとけ。…そうだな。お前の言葉を借りるなら、その身に刻んでやる、かな？」

視界まで奪ってしまった絡み合ったワイヤーを引き千切りながら、自棄になったかのように叫び散らす。

視界を塞いだ状態から、肩関節と頚椎を撃ち抜いて動きを止める。

貫通はしないものの、直撃すればダメージはあるようで直撃地点から血が滲み出した。

「三つ。」

暴れている男の視界を掻い潜り、男に接近して拳を握る。

左手を翳し、右拳を腰に。

先程の銃創が既に塞がり始めていることから、回復力も人外だと考えたほうがいいだろう。

「同質の魔力を持った攻撃にそれは意味を成さない」

だから、一撃。

一撃で、意識を、命を奪う攻撃が必要になる。

更に拳を握りこむ。その中には先程男が掃った桜の花びら。

攻撃の前段階として、拳以外の筋肉を一瞬だけ完全に弛緩させる。

崩れ落ちそうになるその力を利用して、刹那の間に一気に全身の力を爆発させ、膨大なエネルギーを体内に生み出した。

そして今度は剛体術の要領で関節ごと体中を固め、更にまた力を留めて体内に溜め込んでいく。

俺の身体の中で、加速、急止を繰り返した力を全て拳に乗せる。

技として完成させるために、ここまでの工程を約ゼロコンマ一秒で完遂させる。

――――”荒羽根”

今にも爆発しそうな拳を男に向けて振り抜いた。

男は当然、障壁を張る。

しかし、俺の拳はそんなものに意も介さず、男へと届き。

「妄想と現実の区別ぐらいつけろ糞ガキが。神だなんて騙ってんじゃねぇ」

粉砕した。

神以上、人以下（後書き）

技考えるの恥ずかしい…！
でも、それが楽しい…！

参考までに、これは武術でいう無足とエアギアの牙の複合技みたいな感じです

染まる

拳が男の腹部を陥没させ、皮膚、筋肉、骨を破壊していく。

「ごッ…あ……！」

声にならない音を口から漏らし、男が吹き飛んでいった。

３０メートル近い距離を地面にぶつかることなく、宙を飛び壁に激突した。

壁から男がはがれ、地面に激突すると、崩れた岩が男の上に降り注いだ。

ハルユキはそれを確認して、尻餅をついた。

「あー……」

疲れからか、思わず間延びした声がでる。

数秒後、ガラガラと岩をどける音がして、男が足を引き摺りながら這い出してきた。

「ふざ、けるな…！」

その声に応えるように腹に空いた傷口がみるみる塞がっていく。
ダメージが残っているうちに追い討ちをかけようと立ち上がった途端。

「ッ……ごぼッ…！」

男が口から鮮血を吐いた。
傷口の再生スピードが目に見えて落ちていく。
封印がそろそろ佳境に入ったのだろう。

「……あ…！？」

そこで男の様子が変わった。

「あ、ぁあああああああああああああ！！！！」
「なッ……！」

怪我している腹部をそっちのけで頭を押さえてのた打ち回る。
口からは涎が糸を引き、恥も外聞もなく地面に這い蹲る。

そこで気付く。男の顔にへばり付いた陳腐な『神』の文字が。

男の顔の上で暴れていた。

「なん、で……！　さっさと、死な、ない…！！」

男が息も絶え絶えに口から音を零す。

「俺は、殺して壊して消して捨てて、まだ、まだ……！！」

見る見るうちに男が弱っていく。突然の豹変に体を固まらせていたハルユキは少しだけ体から力を抜く。

しかし、それと同時に男の目が封印を施している４人をその目に捉えた。

「……殺す」

狙ったわけではない。ただタイミングが重なっただけ。

「……殺す殺す殺す殺す殺す、殺す！！」

しかし、結果として自体は悪い方向へと転がった。
傷を身体に抱えたまま、男が残った力で跳んだ。

「ッチィ…！」

反応が遅れたハルユキの上を跳び越して、一瞬で祭壇までたどり着く。

ハルユキも行こうとしたところで、目の前で岩が盛り上がり分厚い壁となりハルユキの進行を塞いだ。

殴って吹き飛ばす。

しかし、直ぐ目の前に同じように岩の壁。

それも、ご丁寧に祭壇を囲むように、地面から天井まで余す所なく壁で塞がっている。

「くそッ……！」

こんな壁があっても1分あれば祭壇までたどり着ける。

しかし、その1分は致命的だ。

「持ちこたえろよ…！」

続けざまに壁を叩き壊す。

「さ、て、死んでいただきましょう」

ハルユキが押し始めたところで、いきなり男が消え、見るからに瀕死の状態で一瞬でユキネ達の目の前に現れた。

あっという間に岩の要塞を後ろに作り出して。

「時間がない、ので、手早く、死んでもら、い、ますよ」

傷が深いせいか、最初のような迫力は既に存在しない。

頭を押さえて顔を歪めながら男がそう言った。

戦闘力も相当落ちている事だろうが、それでも決して油断していい

相手ではない。

レイは男を向きもせずに、背中を見せたまま詠唱を続けている。

「余所見はあかんちゃうの？　神様さん」

一瞬。

ジェミニが流れるように、男の傍まで移動した。

グルン、と男が回転し背中にから地面に叩きつけられる。

「潰れろ」

男の体が上から何かに押しつぶされたかのように更に地面にめり込んだ。

「ジェミニ。…どいて」

声と同時に地面から木が生えてきて、男の地面に埋まった身体を更に押さえつけた。

間髪いれずにフェンの前で赤と茶が混ざっていく。

あっという間にそれが巨大な鉄球に変わったかと思うと、それが突進し祭壇の前半分ほどと一緒に男を吹き飛ばした。

鉄球は後ろに控えていた壁に当たると勢いが死に、そこで止まる。

「やったか…？」

そう呟いた途端、瓦礫が爆発したかのように弾け跳んで霧散した。

衝撃の余波が地面を削り3人のもとまで届く。

ユキネは咄嗟に剣を地面に突き刺し、耐えしのぶ。

「フェンちゃん…！！」

一際体が小さく、男の一番近くにいたフェンが吹き飛ばされた。

壁に激突しそうな所を間一髪でジェミニがまた風の中を流れるように移動し、受け止めた。

しかし、勢いを殺しきれず背中から壁に激突して、動きが止まった。

私も無傷というわけには行かない。

頬に足に破片が当たって血が吹き出た。

そして、中から怒気をその身に宿した堕神が現れた。

「あー…、もう、いい加減にィ…！」

頭から更に血を流しながらも、致命傷には至っていない。先程吹き飛ばした瓦礫が掲げたその手に凝縮して魔力により増大していく。

推定で半径２０メートル程度。

「死ねえぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

それを何の躊躇いもなくうち放った。

「避けろォ！！」

真っ直ぐにユキネに向かって飛んで行く。

ジェミニの切羽詰った声が響いた。

避けなければ死ぬ。

咄嗟に横に飛ぼうとしたユキネの視界に我関せずといった風に自分

の役割を完遂しようとしている背中が目に入った。
ちょうど岩とユキネの延長線上。

――――逃げるな。

「ぁあああああああ！！！」

ユキネがとった行動は、愚策といっても差し付けない行動だった。
ただ、自分の魔法をそれにぶつけようとしただけ。
無意識的に同じ土の魔法で。
全力に相応しく、込めた魔力は今のユキネの実力から考えれば、最高の物。
しかし、大きさはせいぜい男のそれの十分の一程度。結果は目に見えている。
だが避けることはできない。
まだ後ろでユキネを信じている奴がいるのだ。

背中を、預かっているのだ。

（私が背を向けるわけには行かないだろう…！）

――――立ち向かえ　其れは最早お前の物だ

しかしまた、それは恐らく無意識的な確信。

自分は今こうするのがベストだと。

差し迫った死の実感が教えてくれているような感覚。

小さい白と、巨大な茶色が接触する。

そして、ユキネの小さい魔法は、理ごと神すらも吹き飛ばした。

◆
◆
◆

何枚、壁を壊しただろうか。

恐らくそろそろ５０に届く数の壁を殴り壊したとき、視界の内包物が壁ではなく空間に変わった。

と、同時に巨大な土の塊が飛んで来た。

「おわっ！！」

咄嗟に横に飛んで避ける。

俺が、たった今壊してきた壁をぶち抜いた後、もはや山のようにでかくなった薄らと白い岩の砲弾は動きを止めた。

「なんだ、ありゃ？」

もうもうと土煙が上がる中でそれに注目する。
色からして恐らくユキネの魔法だろうか。

「ハル……！」
「これ、お前が？」

駆け寄ってくるユキネに声をかけると、ユキネは傍まで来て軽く首を傾げて言った。

「よく、わからないが、多分そうだと思う。何しろ咄嗟だったんだ」
「……ま、何にしろよくやった」

ぐりぐりと頭を撫でてやると、短く息を呑んで俯いてしまった。

「こ、子ども扱いするな…！」

その手を力なく掃うと、レイの所へ戻って言った。
しばらくその背中を見つめていると、今度はジェミニがこちらに歩いてきた。

「大丈夫か？」
「ああ、何とか…、あつつ」
背中を押さえながら、苦笑いを浮かべつつジェミニが小声で俺の耳元で言った。
「あのユキネちゃんの魔法やけどな。
……なんて言うんやろ。なんか、侵食して増えたみたいな感じやったで」
俺がユキネの事を気にしていることを察したのか、ユキネには聞こえないように。
俺に魔法のことはよく分からないが、普通に起こることではないだろう。
つまり、ユキネの能力の一つなのだろう。
「貴、様らあぁ…！！」
ズズッと瓦礫の中から身体を引き摺りながら、神だった男が現れた。
いや、今にも消えそうでもまだ頬に文字が残っている以上、未だに

神なのか。

……それとも、最初から神などではなかったのか。

少なくとも、地を這って少しでも前に進もうとする姿は人間にしか見えなかった。

「まだ、まだだ！　私はこんな所で……！！」

瞬間、すっと洞窟内が暗くなった。

何か不吉なことが起こったということではない。

「終わり、じゃ…」

パン、と、もはや恒例となった両の手を合わせる音が、暗くなった地下に響いた。

すっと音もなく男の頬から完全に光が消え、辞世の句を残すこともなく、その場に崩れ落ちた。

一応、首筋に手を当て生死を確認する。

「死んでる」

何の感情もなくそう告げる。

ジェミニはよく知らないが、ユキネもフェンも人の死ぐらいは知っている。

俺の無感情の宣告を、無感動に受け止めていた。

もう冷たくなり始めている男は神どころか、人間ですらもなくなってしまった。

「……帰るぞ」

死んでしまった男を如何こうする気もないらしく、レイがいち早くそう提案した。

俺達は、どこか後味の悪い気持ちを感じたまま、出口へと向かった。

「なあハル。あれで、よかったのかな」

ユキネがすっと俺の隣に並んで小さい声で呟いた。

あれとは聞くまでもないだろう。

神に成り損ない、結局は物言わぬ死体になってしまった男のこと。

後ろにある扉の向こうで眠っている人間だった男のこと。

「さぁな。それはわかんねぇよ」

もっといい方法もあったかもしれない。けどそれもわかるわけない。

俺にも、多分、神にも。

そうか、と俯いてしまったユキネを横目で見た後、続けた。

その後は階段を上り、井戸のそこに戻るまで無言だった。

何か言う前に、レイは壁を蹴りつけながら乱暴に上っていった。

「ああ、ワイは大丈夫や。一人で行けるで」

そう言うと、大して力も入れていないように見えるのに、レイよりも軽やかに壁を上っていった。

改めて、出口の下に立ち出口を見上げる。

推定４、５０メートルぐらいか。

「ちょっと、触るぞ」

残ったフェンとユキネを抱き寄せる。

「なッ！？」
「ッ……！」

二人して息を呑み、同時に左右から殴られた。

いや、殴られている。何度も。現在進行形で。

「止めろこら。殴るなつねるな引っ掻くな。お前らじゃ登れねぇだろうからやってんだろうが」

ピタッと攻撃が止まって、その後にもう一発殴られた。

「もっとちゃんと言え！」

めんどくせぇなぁ…。

……まあ、俺も悪いか。

「よし、しっかり掴まれよ。じゃないと落ちるからな」

一瞬だけ間が空いた。

（自分で上れないことも…）

（ない……けど…）

ギュッと首にしっかり二人の腕が回ったことを確認して、一息に出口を跳び越した。

弱々しい桜の光が俺達を出迎えた。

◆

◆

◆

――――ドクン

汚らしい苔以外光るものがない薄暗い空間で。
生き物らしい生き物がいない空間で。
音が消えてしまった空間で。
もはや死んでしまった空間で。

脈動する。

それは血か。
それは心臓か。
それは生命か。

それともただの残響か。

——ドクン、ドクン

鼓動する。

それは人間か。

それは神か。

それは獣か。

それともただの肉塊だろうか。

——■■■■■■■■■■■■■■!!!!!!!!!!!!

!!!

狂気の咆哮が。

死んだ空間に木霊する。

染まる（後書き）

感想をお待ちしております

宴も闌（前書き）

次話は水曜になると思います。

宴も闌

「ふぅ……」

井戸から出て、二人を地面に下ろすとハルユキは思わずその場で溜め息をついた。

夜空はハルユキ達人間の都合なんて知ったこっちゃないと主張するように変わらず輝いている。

桜もいくらか輝きが衰えたとはいえまだ健在だ。

しかし、流石に今から酒盛りをする体力はない。

というより疲れから立っていたくもないというのがハルユキの思いだった。

怪我はそれほど深くはなかったため、既に傷跡すらない。

だが、精神的疲労は残る。

「寝む……」

その場に倒れこみたくなるのを我慢して、ハルユキは酔いどれたような足取りで家に向かう。

「なんじゃ。もう寝るのか」

レイがコップを片手に首を傾げていた。

「お前、あんなんの後にまだ飲むのか」

「儂は一口も飲んどらんしの。それに……」

ぐいっと酒を一気にあおると深々と息をついて続けた。

「これで、桜も見納めじゃからの」

そう言いながら、空になったコップに酒を注ぐ。

（見納め？

……ああ、そうか）

これまでは、幸か不幸か村が軽い鎖国状態にあったからこそ吸血鬼がここにいるなんて情報は広がらなかった。

しかし、今は桜と一緒に地面も生気を取り戻している。

いずれ交流が再発し、村々と交易し、情報を交換するようになるだ

ろう。

……そうすれば、また狙われる。イサンが、危険になる。

「もう、ここにはいられないか」

本当にこいつは。

何処までアホなんだろう。

「……イサンはどうする？」

流石にあのままにしておいてはまずいだろう。

「二人で、どこか人里離れた場所に行くしかないだろうの。そういうのもいいかも知れぬ」

少し寂しそうにレイはそう言った。それを見て自然に。

「…なら、一緒に行くか？」

そう、ハルユキの口から言葉が出た。

少しだけレイは驚いた後、笑った。

「それも、いいかもしれんの……」

結局、ハルユキも対面に座り酒に手を伸ばした。

「飲みなおしやなー」

ジェミニがハルユキの斜め前、つまりレイの横に座る。

「私は、ジュースか…」

ちょぼちょぼとジュースをコップに注ぎながら、ユキネがハルユキに席をつめさせながら横に。

「……私も」

ユキネとは逆側の隣に人知れず座り、ジュースをコップに注ぐ。

それを見て呆れたように笑った後、レイは席を立った。

「食い物でも持ってくるかの」

息苦しくなったのか、結んだ髪を解き艶やかな黒髪を靡かせながら家へと向かう。

ハルユキはレイが家に歩いていく途中で、視界の中にもう一人誰かいる事に気付いた。

（……イサン？）

扉の所にイサンが立っていた。

その顔は驚きに染まっているように見える。

レイもそれを見つけたのか少しだけ歩を止めてまた歩き出した。

「――――――……？」

イサンの口が小さく動いた。

声は流石に聞こえない。

だが確かに。

レイ、と。

瞬間、レイの近くの地面が爆ぜた。

音が爆発する。

空気が震え、世界が怯える。

それはゆっくりと月を見つめ、少しだけ動きを止めた後もう一度、月に向かって吼えた。

連続する轟音に3人とも遅れながらも振り向く。

しかし、ほとんど足元での地面の炸裂に、レイは地面に叩きつけられ動かない。

そしてその近くに、いる。

何か？

何か、としか言いようがない。

何しろ、人ではない、神ではない、恐らく生き物ですらない。

そんなものをどう形容しろというのか。

ただ異形。

肌は黒く変色し、髪は白く色が落ち、腰の辺りまで伸びている。

上半身は筋肉が盛り上がり、服の切れ端が腰にまとわりついている。

”それ”が、もう瞳も何もかも赤く染まってしまった目を動かした。

足元で動かないレイに向かって。

右腕を振り上げる。

そこで漸くハルユキが反応した。

しかし、間に合わない。もうあれは腕を振り下ろすだけだ。

それでも、空気を跳ね除けて走る。

桜の丘に、鮮血が舞った。

◆

◆

◆

頭が痛い。

ベッドに前のめりに倒れて寝ていて、起きた瞬間に感じたのは頭の痛みだった。

ベッドと頬が水気を帯びている。

ひょっとして私は泣いていたのだろうか。

そもそも、私はここで何をしていたのだったか。

いつ自分のベッドに寝ていたのかも思い出せない。

ずきずきと痛みを訴えてくる頭を押さえながら、水の一杯でも飲もうと思い起こす。

半開きになった寝室の扉をくぐり、廊下へと出る。

年季の入った木の廊下。

染みの一つ、穴の一つに思い出がある。

はず、なのに。

なんだろう。いつ出来たのか。いつから有ったのか分からない染みや傷がたくさんあった。

これは、母と背比べをした落書き。これは料理をひっくり返したときの染み。

これは……。それも、あれも。

やっぱり、分からない。

かわりに、頭が痛んだ。脳裏に見覚えがないシルエットが浮かび上がっては消える。

染みをたどっていると、いつの間にかキッチンに着いていた。

コップを手に桶から水を汲もうとすると、ふと机に置いてある鍋が目に入った。

なんとなく、近づいて蓋を開けてみる。

中に入っているのは見覚えがあるスープ。

腐ってはいないみたいだ。

無性に気になり、スプーンを持ってきてスープを掬い口に運んだ。

ああ、これは、やっぱりそうだ。

私が母から教わった、我が家直伝のスープ。

……でも、誰が作ったんだろう？

私ではない。

父と母はずっと前に死んでしまった。

兄は出て行ってしまってここにはいない。

このスープを作れるのは私の家族だけのはずだから、それ以外の選択肢はない。

ズキッと頭が痛んだ。

なんだろう、さっきよりずっと頭が痛い。

中で何かが暴れているようだ。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

堪らなく、痛い。

痛みに顔を歪めながら、外の風に当たろうと扉に手を掛ける。

はて？

どうして私の手はこんなにしわがれているのだろう。

そんな疑問を頭にひっかけながら扉を押し開いた。

目に入ってきたのは、花びらを散らす桜と……。

人形のような。

艶やかな黒髪を風に躍らせる少女。

――――フラッシュバックする。

脳の中が瞬時に沸騰したかのように頭が覚醒した。

ごちゃごちゃだ。

生まれてきてから、今までの記憶がめちゃくちゃに混在している様な感覚。

まだ記憶の整理がつかない。

意識すら保てそうにない。

「――――レイ……？」

だから、自分が発した言葉の意味も分からなかった。

ただ、いつの間にか頭の痛みはなりを潜めていた。

記憶がどんどん整っていく。

が、時間はそれを待ってはくれなかった。

ゴッと目の前の少女がこちらに向かって吹き飛んだ。

そして、地面から出てきた何かが殺意を宿した右腕を振り上げている。

脳ではなく、脊髄でもなく、おそらくどんな細胞でもなく。

心が、誰よりも早く私の身体を動かした。

◆

◆

◆

「うっ……」

何か温かい物が頬に当たる感触で意識が戻った。

ぼやけた視界がだんだんとクリアになっていく。

頭に一瞬痛みが走る。

どうやら眠っていたのではなく、気絶していたらしい。

ポタ、と

また今度は首の辺りに雫が落ちる。

そしてやっと、自分が誰かに覆いかぶさられていることに気付いた。

「……イサン？」

やっと目が合ったのが嬉しいのか、イサンはイサンらしい明るい笑顔を見せた。

「……え？」

その笑顔に驚いた。それも確かにあるが、もっと驚いたのはイサンの唇の端から顎に向かって伸びる血の一筋。

意味が分からない。

「…レイ、ごめんね」

何を言いたいのか理解できずに、反応もまたできない。

それを見てイサンは少しだけ声を出して笑った。

「レ、イ……」

精一杯色んな物を込めて誰かの名前を呟き、イサンの体から力が抜けた。

ズボッと、イサンの胸から”腕”が引き抜かれた。

意味ガ、分カラナイ。

力なく胸の上にイサンが崩れ落ちる。

顔は優しく笑ったまま、冷たくなっていく。

「ごめんね……」

息も絶え絶えに、何かを伝えたいのかまた同じ言葉を続ける。

上に乗った体から絶えず生暖かいものが流れてくる。

その感触は、きっと何より怖いもの。

命が、死んでいく感触。

「……何で、」

思わず呟いた。

また、助けるために。

こんな吸血鬼を。

どうして。

何で。

イサンが。

イサンが。

「どうし、て……！」

隣で喚く殺意も気に留めずに、視線は遠く。

何も、捉えてはいない。

宴も闌（後書き）

感想すごくお待ちしてます

有難いモノ（前書き）

ＰＶが１０００００を超えていたので感謝の気合投稿です。
睡眠時間削れましたが…

有難いモノ

そいつの脇腹を狙って右足を振り抜いた。
鉄でも蹴ったんじゃないかというほどの硬い感覚の後、蹴りの勢いは若干死にながらも、丘を猛スピードで転がっていく。

「フェン！！」
「もう、やってる……！」

俺に遅れながらも素早くレイとイサンに近寄り、風の魔法を発動する。
レイはイサンから離されると、血に染まった手を、前に中途半端にぶら下げたまま放心してしまっている。
その目に光が感じられない。

「…フェン。大変だろうが、レイも一緒に見ててくれ。目を放すと危険だ」

小さく頷いた後、目線を上げずに普段より数段速く口を動かす。

「ユキネも、手伝って。魔力が、足りない」

「私で大丈夫か？」

そう言いながらも、イサンの傍にしゃがみ込む。

「細かい作業は無理。傷口の周りに風の魔法を集中させて。私がそれを拾う。イメージは濃く、ゆっくりと」

「…やってみる」

手を翳すと、フェンの物とは違い色の付いた風がゆっくりと傷口の周りで回り出した。

「ジェミニは、急いで家の中から、止血できそうなもの」

「分かった」

いつもの軽いノリはなりを潜め、緊張した面持ちで家へ向かう。

――――[redacted]！！！！！！

もはや我慢ならぬと、それが咆哮を上げる。
空気を震わせ、丘を、森を、世界全てを拒絶するような孤独で悲痛な叫び声。

「……そう喚くなよ。俺が相手してやる」

俺が今出来るのはこいつを倒すことだ。
治療は任せればいい。
ギリッと歯軋りが鳴った。

……ああ、俺が鳴らしてるのか。
どうもかなり俺も怒っているらしい。
しかし、何に怒っているのだろう。
目の前のそれだろうか。
確かにそれもある。だがそれだけじゃない。
だって、目の前のそれは、今のイサンと同じぐらい傷ついて見える

のだ。

「ぁあッ！！」

怒りに任せて世界を壊そうとするそいつ。

――――殺してやる。

その決意には、怒りからだけではなく、情けも確かに入っていた気がする。

決意を、怒りを、情けを。

全て殺気に込めてそれに叩き付けた。

それが右腕から血を滴らせながら、こちらを向く。

その面前には既に俺の拳。

撃ち方も何もあったもんじゃない。

ただ力任せに、その鼻っ面目掛けて全力をぶち込んだ。何か爆発したんじゃないか、というほどの音が響く。

森の中を地面を削り、木を薙ぎ倒しながら吹き飛んでいった。その

辺りはヘリでも不時着したんじゃないかというほどに荒れている。

しかし、激しい土煙の中、それが立ち上がるのを確かに俺の目が捉える。

土煙が晴れるのも待たずに、突進する。

今度はそいつも反応した。

手を交差させて拳を防ごうとする。その動きはとても人間臭く不快だった。しかし俺の拳は二本の腕など物ともせず、腕をへし折る。

「なッ！？」

しかし、〝三本目〟を破壊した所で、残る〝５本程の腕〟に受け止められた。

その内二本が俺に牙を剥く。その分空いた隙間から覗く顔を蹴りつけ、距離をとる。

「……おいおい」

折れた二本が枝分かれし、更に腕が増えていく。長さも人のそれの五倍はある。

合わせて１３本。

右と左で数が違うのは生理的嫌悪を誘発する。増えた腕を左右の目でそれぞれ同時に確認すると、ほんの少し、しかし確実に口の端をゆがめて嗤った。

その不快な笑顔。

ついさっき見た面影が残っていた。

「……やっぱり、さっきの奴か…！」

もう男の、というより人間の面影は数えるほどしか残っていない。

それも刻一刻と無くなって行く。

１０秒前より確実に今のほうが人間じゃない。

十三本の腕がその辺りに転がっている木や、地面に半分埋まった岩を無造作に掴む。

投げつける気かと警戒するがそれは裏切られる。

ただそのまま突っ込んできた。

意表を付かれ反応が一瞬遅れる。

木と岩のせいで、体の何倍も大きく見えるそいつが突っ込んでくる。

銃で迎撃しても、あの遮蔽物が邪魔だし、当たっても致命打にはならない。

対応策を頭の中で早急に完成させた。

簡単だ。

――突っ込め。

決断した次の瞬間にはトップスピードに乗っている。

両者とも勢いを止めぬまま一気に接近した。

近づきざまに怪物が器用にそれぞれが当たらないように、左腕等のうちの二本を使って俺に攻撃を仕掛ける。

最初に来たのは俺の等身大くらいの岩。

唸りを上げてとんでくる岩を進行方向垂直の位置に軽く掌で衝撃を与え、軌道をずらす。

ずれた軌道の隙間に入り込むと、既に今度は中程からへし折れた木が振るわれるスピードに悲鳴を上げながら懐に飛び込んでくる。

それを肘で叩き落す。

至近距離で嵐のような攻防が続く。

しかし、現状は変わっていく。

じりっとまた一歩ハルユキが前進して、化け物が無意識に一歩下がる。

――――■■■■■■■■■■■■！！！！！！！

押されていると感じたのか、奮起しようと声を荒げる。

それが、まずかった。

不注意に振り上げた木が一瞬だけ木に引っかかった。

一瞬で木のほうが破壊され動きは戻る。

しかし、その時には既に右肩から腕7本が叩き落されていた。

赤か黒かと聞けば恐らく黒と呼ぶであろう血が肩から吹き出る。

そしてまた一瞬の隙。

左肩を落とされる。

続いて隙。

「詰みだ」

ハルユキの手により、首が捻り切られた。

ハルユキは、さっさと背を向ける。

――――ドクン。

静かに、しかし確かに鼓動のような音がハルユキの背中に届く。

「マジかよ……」

膨れ上がる殺気を背中に感じ、悪態をつきながら振り返った。

◆
◆
◆

「もっと…！　もっと何でもいいから血を止めるものを…！！」

両の手を心臓のある位置に必死に何度も押し付けながら、フェンが

叫ぶ。

ユキネも追い詰められたかのような顔で、それでも治療を止めない。

「もう、いい。…いいんや」

一人だけ現実を見ていたジェミニが血に塗れたフェンの腕を取る。

「…もう、死んだんや」

脈はない。

心臓はとっくに止まっている。

そもそも心臓は化け物の手によって半分以上がズタズタだ。

即死しなかったのが奇跡だった。

死んだのだ。

もう、動くことはない。

それでも、ジェミニの手を振り払い、フェンはマッサージを再開する。

しかし、長くは続かなかった。

イサンの体がフワッと浮かび上がる。

別に誰かが魔法を使ったというわけではない。

いつの間にかレイが近付いて、イサンの体を抱き上げた。ただそれだけ。

「…もう、いい。ありがとうの」

そう言って、少しだけ血に染まった髪を靡かせて背を向けた。

そして、自分より少し大きいイサンの体を抱き上げているとは思えない足取りで、歩いていった。

フェンは少しだけ肩を上下させながら、へたり込んだ。

それを近くにいたユキネが支える。

レイは桜が咲いているところまで歩いていくと、イサンの身体をそっと桜の木の根元に寄り添わせた。

そこで、改めてレイはイサンを見た。

大分、年老いてしまった身体。

何処も見ていない眼。

痛々しい胸の傷。

何か言おうと口を開いて、閉じる。何も、何も思いつかなかった。

そして背を向ける。

人知れず、スッと桜の花びらがイサンの頭に落ちた。

ピクッとイサンの体が動いた。

「レ、イ…？　何処…？」

踏み出したレイの足が止まり、体が一瞬硬直する。

息を呑みながらバッと振り返る。

”イサン”がいた。

目の前にいるレイを探している。

目が、見えていない。

何故息を吹き返したかは、わからない。心臓が動いているはずもない。

しかし、そんなことは思慮の外。

イサンがまだ生きているという事実に囚われていた。

「イサン…！　ここじゃ！　儂はここにいるぞ…！！」

手をとって胸に持っていく。

イサンの手もレイの胸も血塗れだ。

「レイ…良かった。まだ、いてくれた…」

「いるぞ…！　ずっとここにいる！」

フッと力なく、光がない目で笑った。

「ずっとは、駄目だよ。…私はもう、死んじゃうから…」

思わずイサンの顔から目を逸らしてしまう。

分かっている。なぜ息を吹き返したかは相変わらず分からないが、もう長くはない。

しかし、この時間を用意してくれた世界に感謝したい。

「ね、レイ…？」
「なんじゃ？」

儂はイサンに何を言えばいいだろう？

すまない、か？

ありがとう、か？

さようなら、か？

それとも死ぬな、だろうか。

そんな事を必死に考えていると、スッと首に手を回され、力なく抱き寄せられた。

「泣かないで……」

驚いた。

自分でも気付いていなかった。それなのに。

目も見えない。触ってもいないイサンに、そう、言われた。

触れてみれば確かに、涙で頬が濡れている。

すっとイサンの手が涙を掬う。

そこで思わず、非難の声が出てしまう。

「何で、儂を庇ったりなんかしたんだ……！」

一瞬だけキョトンとした後、イサンはクスクスと笑った。

「逆の……立場なら、レイ、も、……そうするだろう、と思ったからだ、よ」

そんな事をあの咄嗟の場面で考えられるはずもない。なら、なぜ？

それは、家族だから？

血も繋がってはいない。大した事もやっていない。

――――でも、家族だから。

「でも、じゃあ……これで、おあいこ、だね」

「え……？」

「３０年も我慢、させ…ッ…ちゃったから、勝手、かも、しれないけど…」

再び首に回った腕が少しだけ強くなる。

「そんなもの、儂が勝手にやってただけじゃ…！」

ただの、独り善がりな我侭だったのに。

「もし、少しでもお釣が来るんだったら…」

黙って、次の言葉を待つ。

「あの人を、楽にしてあげて…」

あの人が誰なのかなんて分からない。

動揺まみれの自分の頭では、何を言いたいのかも分からない。

分かることは。

最後まで本当にこいつは、変わらなかった。

記憶がなくなっても、３０年間歳を重ねても、それが死ぬ直前であっても。

自分のことを一番に考えても、誰も、何も言わないのに。言わせやしないのに。

「アホ、め……！！」

首に回された腕から力がどんどん抜けていく。

「レイ……？」

イサンの右手が、ゆっくりとレイの頬に移動する。
目に見えるように、加速度的にイサンの命が零れ落ちていく。

「レイのお陰で、私は……、幸せだったよ」

最後にギュッとレイの頬を軽くつねって。

「レイのほっぺた、温かい…」

そう言って、イサンの手が力なく地面に落ちた。

ザァ、と風が通り抜ける。

その手に桜の花びらが散った所でもう何も起きない。

また涙が零れ落ちた。

地に落ちた手はもう涙を掬ってくれない。

震える喉で一度だけ深呼吸する。

その後、イサンの手を胸の前で組ませて、乱れた髪を整えてやった。

グッと思いっ切り目尻を擦る。

涙なんて自分で拭えばいい。

自分には二本も立派な腕が付いている。

託されたこともある。

立て。動け。走れ。足掻け。立ち向かえ。

自分の全てを使って、遂行しろ。

見っとも無い姿を晒すな。

全部受け止めて。

少しでも、強くあれ――――。

有難いモノ（後書き）

神喰らいも、黒い螺旋も、ワールドカスタマイズも何か一気に終わっちゃった…

一丸で

――――ドクン。

脈動しているのは心臓ではない。

では何か。

神の残滓、文字が普通の光ではなくどす黒く染まり、所々伸縮しながら男の身体を動き回りながら鼓動を繰り返している。

その動きはまるで生きているようで、嗤っている様で嫌悪感が込み上げる。

何かに支えられるように男の体が、うつ伏せからスッと立ち上がった。

そこに転がっていた頭が灰となって消え、首の肉が蠢いたかと思うと、一瞬で骨が出来、神経と筋肉がまとわりついて一秒足らずで頭が頭として復活した。

同時進行で腕も元の１３本に戻っている。

――■■■■■■■■■■■！！！！！！

先程の何倍も巨大な咆哮を放つ。

それだけで近くの岩が罅割れ、木が軋む。

「元通りって訳か…」

呆れたようにハルユキが言う。

しかし、それも正しくは正しくはない。

何を思ったのか、男だったそれは左腕のうちの一本を掴んで引き千切った。

痛みはまだあるのか、またもや金切り声を上げる。

グジュッと、肉が擦れた音が聞こえてきた。

先程の１３本ではハルユキには通用しない。

だから、異形は数に頼るのを止めた。

異形が千切ったことで左右対称になった合計１２本の腕が再び２本

に戻っていく。

しかし結果としては、人間からは更に離れることになっていた。

12本の腕はその体積自体は変わってはいない。

つまりは、体よりも大きく太い二本の腕が完成した。

――■■■■■■■■■■■!!!!!

また咆哮。

更に変化を望むのか、力の限り叫び尽くす。

ズン、と前に踏み出した足が肥大化し、次の瞬間には腕と同じほどの長さに。

先程生えたばかりの首が、大木のように。

ドン、と音がして胴体が爆発したかのように縦横共に増大する。

骨が折れ、より強固により巨大に結合していく音が、呻き声と共に

森に木霊する。

そして。

僅か数秒で先程までとは全く違う生き物が生誕した。

「おいおい……」

あまりに異様な光景に固まっていた身体を呼び起こす。

結果として、戦闘態勢が整うまで待ってしまったことになる。

やっと症状が安定したそいつは大きく息をついた。

背の丈目測5～6メートル程。

腕も肘から拳までが特に太く変化し拳の先は立ったまま地面に付きそうな長さ。

足もその辺の木の幹よりも二回りは太い。

白く枯れたような髪の中から厳つい角。

口元には発達しすぎた犬歯が覗く。

人を辞め、神を求め、今は獣というのが一番近いのだろうか。

ここで漸く仕掛けた。

牽制代わりにアサルトライフルを両手に投影し、その巨大な体躯めがけて撃ち放った。

音に反応して異形が此方を向く。

剥き出しの殺気に、背筋に何かが走る。

異形がとった行動は単純明快。

避けた訳ではない。受けた訳でもない。

ただ、その異形の腕を、思い切り振りかぶり、目の前の地面に叩き付けた。

天を割るような轟音の後。

地が割れ、衝撃が周りを襲った。

銃弾など一瞬も持たずに、吹き飛ばされる。

世界を破壊する様な衝撃に紛れて、近くに異形の気配。

直ぐ後ろ。

既に拳が空気を切り裂き、接近している気配が背中に触れてくる。

咄嗟に斜め前に飛ぶ。

その直ぐ後、その巨躯からは想像できない速度で物凄い風圧を伴いながら、岩のような拳が通り過ぎた。

跳びざまに体勢を変え、異形に向き直る。

「……は？」

異形は既に攻撃態勢。

牙だらけの口から、何か黒い光が漏れてきている。

察するに高エネルギー体。

ピュンと身をかわしたハルユキの顔の横を黒い光が通り抜けた。

１０メートルほど先の地面に着弾する。

轟音。閃光。

遅れて背中に吹き飛ばされそうなほどの爆風がぶつかって来た。

好奇心に負け、振り返る。

更地だった。

何もない。強いて言うなら荒れた地面しかない。

着弾地点のその先５０メートルの全てを破壊していた。

「ビームって…嘘だろ、おい…！」

再び口に魔力が集まっていく。

「さッせるか……！　コラァ！！」

一気に足元まで接近して、全力で跳ぶ。俺に向けて今にも発射しそうなそれを蓄えた顎を勢いもそのまま殴り付ける。

そのまま空中で一回転し、後回し蹴りを側頭部に叩きつける。

異形が吹き飛ぶが、その巨体のせいかその距離は５メートル程。

丁度その瞬間、行き場を失った黒い魔力が異形の体内で爆発した。
異形の上半身が吹き飛ぶ。

「うおッ！！」

そして、そこを中心に爆風が吹きぬけた。

いまだ空中にいた俺も、踏ん張れずに吹き飛ばされる。
木の枝に服を引っ掻かれながらも、何とか足から着地する。

周りに木はない。丘に戻ってきたようだ。

「ハルユキ…」

直ぐ傍にフェンが居た。

その身体は血で真っ赤に染まり、どこか何時にも増して語調が弱い。
それでも、ここに居るということは俺へ加勢に来てくれたのだろう。

「……イサンは？」

どうなったか、など聞かずとも察することが出来たが、聞かないわけにもいかない。

「……死んだ。まぁお主等が気にしなくとも良い。儂の責任じゃ」

音も無く、レイが暗闇から姿を現した。

「……」

フェンが言葉に詰まり俯いてしまう。

その姿は弱々しく折れてしまいそうで、まるで最初に会った時の様だった。

思わず、頭を抱き寄せた。

「…悪い。嫌な役押し付けちまったな」

抱き寄せた瞬間、フェンの体がビクッと胸の中で動いたのが分かった

ふるふると胸の中で首を横に振る。

あまり、自分を責めるなと言ってやりたいが、聞く耳持たないだろう。

「……まだ、頑張れるか？」

口に出たのは優しさとは程遠いそんな言葉だった。

多分、今優しさを見せるのは残酷だと思ったのかもしれない。

少しだけ間が空いて、一度だけ確かに頷いたのを確認すると、体を離した。

「儂はあやつを殺さねばならん。手伝え」

レイの目にも光が戻っている。

その顔に怒りが満ち満ちているのは直ぐにわかった。

怒りに任せて復讐を行うのは褒められた行為とはいえないかもしれないが、それはひどく人間じみていて、俺は何か言おうとは思えなかった。

続いて、暗闇の奥からジェミニとユキネも出てくる。

ここで、視線を外した事を後悔することになった。

「ハル！！」

ユキネの叫びにハッと異形に向き直る。

その顔の前には黒い光。

あの大地を破壊した一撃が、虎視眈々と此方を狙っていた。

まずい。

発射まで恐らくもう一秒もない。

全力で思考を加速させながら、そう状況を分析した。

避けることはさほど難しくない。

が、あの光の攻撃範囲を考えれば、後ろの４人は防ぎきれない可能性が高い。

そして、咄嗟に判断を下す。

受け止めるしかない。

あれは魔力による高エネルギー体。

ならば、同じ規模のエネルギーをぶつければ相殺できるはずだ。

問題はそれを何処から準備するか。

――――そこら中にある。

「壁を！！」

その声に、後ろの四人は滞ることなく自分の前に壁を作る。

その上に覆いかぶせるように、俺も自分の”後ろ”にドーム状になるように壁を作る。

次の瞬間、ピュン、となんとも軽い音と共に、破滅の光が此方に突進してきた。

純粋な光線ではないのか、光の速度には遠く及ばないものの、拳銃並みのスピードはある。

その光と着弾地点の間に立ち左手を翳す。

ナノマシンを周りに散りばめ、世界を動かす。

自分の周りのありったけの空気を全て目の前一気に圧縮していった。

「がっ……あァッ…！」

全ての空気が俺の前１メートルほどの位置に１０センチほどになるまで押しつぶす。

やがてプラズマとなったそれは、四千度を超える高熱を生み出す。

それをナノマシンで出来るだけ調節して、断熱状態を作っていく。

最初は左手が焼き爛れて尋常じゃない痛みがあった、直ぐに完全に断熱が成功する。

そして、それがエネルギー体として完成した瞬間。

黒い破壊の光が、俺の作ったそれと衝突した。

◆

◆

◆

ピシ、ピシ…と、壁が軋む音がする。
先ほどの耳を劈くような音。
恐らくあの化け物の攻撃なのだろう。
壁はかなり丈夫に作ったはずだったが、それでも悲鳴を上げている。
ユキネの他の三人も、レイは血で、フェンは鉄で、ジェミニもどうやってか土で壁を作っていた。
一際大きな音がして、どこかの壁が崩れた。どうやら先程までの音はユキネの壁の物ではなかったらしい。
しかし、続いてユキネの壁にも罅が入る。持たないか、と少しだけ焦った所で、外が嘘のように静まり返った。
丁度限界だったのか、ユキネの壁が崩れ、状況が露になる。
「……ハル？」
最初に目に入ったのは見慣れたハルユキの姿。
「…ああ、大丈夫、だったか？」

それに、大丈夫だとユキネは答えようとしたが、改めてハルユキの状態が目に入り、息と一緒に呑み込んでしまった。

「その、腕……！？」

「……ああ、まあ大したことはないよ。直に治る」

大したことがない？　ユキネにはそうは思えない。

何しろ、”左腕の肩から先がない”のだ。

幸か不幸か、傷口は焼け焦げているので、出血は無い。

よく見ると、目の前にはハルユキを境に巨大なクレーターが広がっていて先程の攻撃の凄まじさを物語っている。

「ハル、お前、まさか…！」

「お前ら」

ユキネが、何故ハルが怪我したか悟るが、それに気付いてかハルが逸早く声を被せる。

どうやってか攻撃を跳ね返したのか、異形の敵も手傷を負っていて、回復作業に移っている。

後に続いて、出てきた3人もハルユキの怪我を見て息を呑んだが、何も言わずにただハルユキの言葉を聞く。

「俺があいつの動きを止めるから、お前らはその間に……」

振り向くだけでハルユキの全身が痛む。

思わず言葉を詰まらせた時、ユキネの手がハルユキのボロボロになった服の裾を掴んでいた。

ただ、無理をさせたくなんか無いという思いから。

見ていた訳ではないが、私達のためにまたこの馬鹿は無理をしたのだと。

「お前ばかりが無茶をするのはもうナシだ。絶対に許さん」

強い口調ながらも、それはハルユキへの心配から来るものなのだろう。

それを理解しているハルユキは、苦笑してユキネの頭を軽く撫でた。

「……ああ、そうだな。だから……今日はみんなで一緒に無理しよう」

そして、ハルユキは山の様に巨大になった化け物を睨み上げた。

「みんなで…？」

「ああ、俺はこんな腕だし、一人でやるのはちと厳しいんだ。最初から、手伝ってもらうつもりだったさ」

ユキネは思わずキョトンとしてしまう。

しかし、やっと自分が望んでいたことだということに気付いた。

「あ、ああ！　一緒に、一緒にやるぞ！！」

思わず声がどもってしまった。

それを見てまたハルユキから苦笑されてしまう。

「あいつは回復する度に強くなってる。だから、チャンスは一回。失敗は許されない。だから…」

「儂の足を引っ張るなよ、小僧」

「お前は俺にだけ風当たり強いな…」

まあ、何はともあれ。

「さっさと終わらせようぜ」

そろそろ幕を下ろす頃合だ。

一丸で（後書き）

感想お待ちしてます。
あと面白い小説あったら教えてください

貫け、突き進め（前書き）

何でこんなに長くなったんだろう？

貫け、突き進め

改めて共に戦いに赴く仲間達を見渡し、簡単に頭の中で作戦を組み立てた。

「あいつに普通の攻撃は効かない。いや、効かないというよりたちどころに回復するから意味がない。それも、回復するたびに強くなるみたいだ。今は大きめのダメージを与えたから回復している最中だろうな」

「なるほど。一気に粉微塵にするというわけじゃな」

レイが多少頭に血が上っているのか俺の言葉を待たずにそう言った。

確かに一気に全部吹き飛ばすというのも一つの手ではある。

「…いや、それより急所を叩こうと思う」

「心臓とかか？」

「それより首を刎ねた方が早いんちゃう？」

なんとも物騒な会話が続くが、それでも意味がない。

「いや、首刎ねてもすぐ回復したし、さっきも上半身が吹き飛んだが、まだ生きてると思う。…正直言って、化け物だ」

それを聞いて、一同が目を見張った。

こんな魔法が使えるような世界になっても常識は存在する。

首がなくなっても動くというのはどう考えても異常なのだ。

「ならば、どうする？」

「…大幅な回復するときにだけ、あの神って文字がまた現れる。そこを破壊するのがいいと思う」

一応の作戦を発表する。

こんなものが作戦といえるのかどうかも怪しいが指し当たっての対応策も見当たらない。

「だがそんな不確かなもの破壊できるとも限らんじゃろうし、やっぱり吹き飛ばしたほうが良いんじゃないか？」

これもまた、至極もっともな意見だ。

このやり方に不安な要素が入っているのは否定できない。

レイが言っているやり方のほうが、確実だろう。ただし。

「いや、それが出来るならそれでもいいんだけどな…」

ズン、と地面が揺れた。

俺を除く４人の表情が固まる。

俺も嫌な予感に顔を引き攣らせながら振り向く。

「あれを一気には骨が折れすぎるだろ…」

振り向いた先には、予想通り復活して更に変形した異形の姿。

推定１５メートル以上。

先程よりも更に巨大化している。

最早、人間の枠など完全に消し飛んでしまっていた。

「最初の作戦しかないようじゃの…」

「分かってもらえて何よりだ」

異形を見上げる。

最早、異形には口や鼻さえも存在していなかった。

のっぺりとした顔を縦断するように大きな目がギョロギョロと周りを見渡している。

ふと、その目と視線が合う。

不吉な気配を振りまくその姿に、嫌な予感を感じずにはいられなかった。

◆
◆
◆

その後、どこか嫌な予感を感じながらも少しだけ作戦を練り直し、ハルユキ達は一斉に動いた。

丁度、小丘に踏み入ろうとした足元にジェミニが滑り込む。

振り下ろされる巨大な足をかわした後、地面に手を翳す。

「まずは、ワイやな」

ジェミニの手が触れたところを起点に地が割れた。

巨大な地割れとなったそれは、異形の大きくなりすぎたそれをいとも容易く飲み込んでいく。

「閉じろ」

そのクレパスが今度は顎のように勢いよく割れ目を閉じ、異形の足を噛み砕き、粉砕した。

「次、頼むでー」

巨体の動きが止まったのを確認すると合図を出す。

「任せろ！！」

「任された…」

ユキネとフェンが同時に異形の前に飛び出した。

「ハァアア！！！」

気合と共に、ユキネの剣に魔力が集まっていく。

その属性は恐らく水。

流動的に身をくねらせながら、ユキネの剣を包んでいく。

やがてそれは巨大な白い水の剣としてこの世に生誕する。

「おお…」

自分でユキネが驚いているので多少格好は付かないが。

直ぐに我に帰ると、助走をつけて思い切り異形の胸めがけて、槍の様に投げはなった。

「――――”水星”」

ほぼ同時といえるタイミングで、剣を追うようにフェンが作り出した直径３メートル程の水の砲弾が突進していく。

足を地に飲み込まれ、身動きが取れない異形は成す術もなくそれを受け入れることになった。

巨大な白い剣が巨体を貫き、それとほぼ同時、同じ位置に水の砲弾

が着弾した。

ただし、普通にではない。

剣に水弾が追いついた瞬間、水弾が白く染まり爆発的に増大し、おおよそ、3倍ほどのサイズになった水弾が直撃し、爆発したような音がそこら中に響いた。

「おお…、予想しとったとは言え、これは…」

ジェミニが、思わず感嘆の声を上げた。

確かに、効果を期待しての作戦だったが、予想以上の結果だった。

あの巨体がまた悲鳴を上げている。

「――――”氷戒”」

間髪入れずにフェンの魔法が続く。

水びだしの巨体の周りに、冷気が立ち込めていく。

――■■■■■■■■■■■！！！！！！

堪らず異形が叫び声を喚き散らす。

無理の動こうとしたせいか、完全に固まっていた異形の左足が力に耐え切れず、砕けた。

いきなりバランスを失った巨体が傾ぐ。

ズン、と重々しい音を響かせ、地面に手を付く。

そしてその横に、ハルユキの姿。

右手を引き絞る体勢で、その前には先程思いついたばかりのプラズマ球が浮かんでいる。

「お前ら、引けェ！！」

合図と共に三人が一気に攻撃圏外まで退避する。

それを気配でなんとなくだが察知すると、力を貯めに貯めた右手を解放した。

右手が音の速度を超え、突き進む。

――――”空当て・凝”

以前とは違い、プラズマが芯となり空気を更に巻き込んでいく。

その攻撃もまた、加速し音を置き去りにしながら巨体へと突き刺さった。

一瞬の間をおいて、ハルユキの制御を離れたプラズマが一気に熱を周りに放出し、さながらの爆発が巻き起こった。

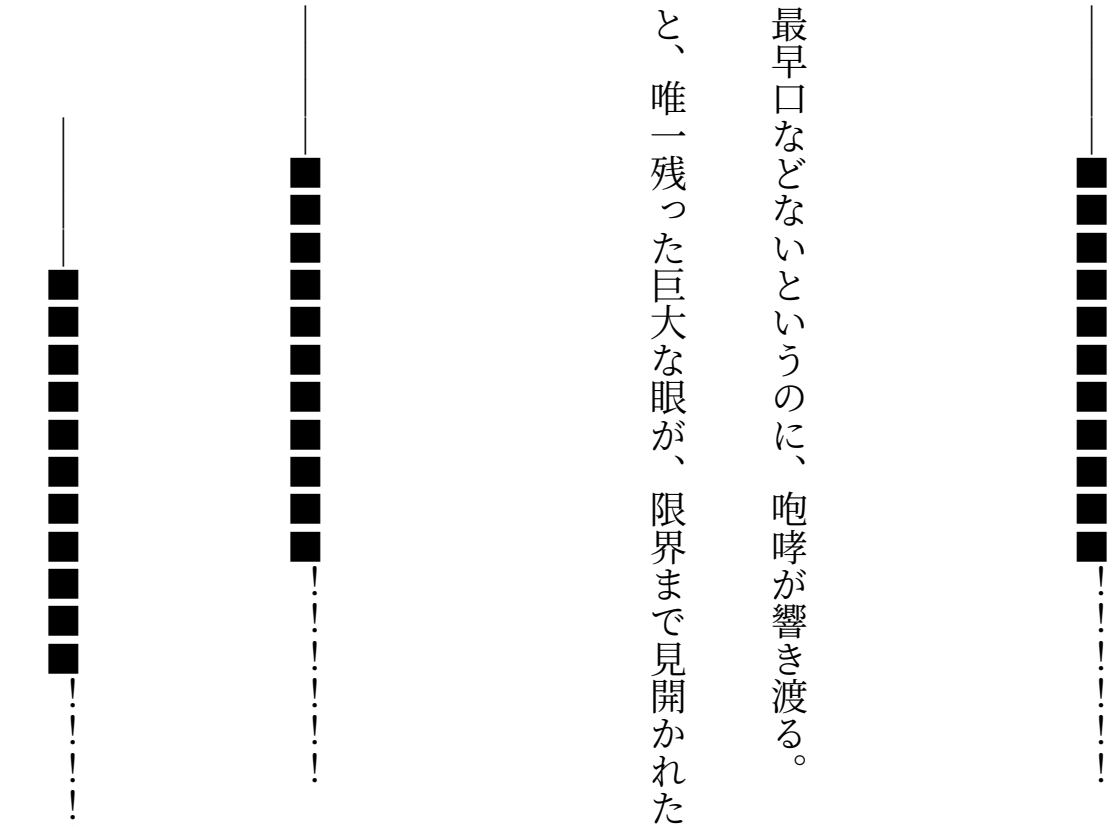
地面がめくれ吹き飛んでいく。

巨体にまとわり付いていた氷は一瞬で蒸発し、それどころか異形の身体自体を炭化させ、吹き飛ばしていく。

「ぬぉあッ……！！？」

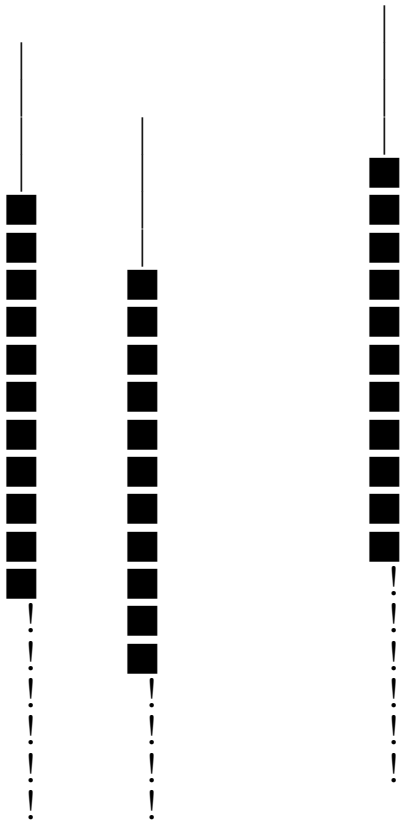
かなり離れた位置からの狙撃だったのだが、予想以上の爆風がハルユキの位置まで届く。

ズズンと音がして、唯一原形を保てた頭が落下した。



最早口などないというのに、咆哮が響き渡る。

と、唯一残った巨大な眼が、限界まで見開かれた。



耳を劈くような音を撒き散らせながら、眼の中からあの村長だった男が上半身だけ姿を現した。

下半身はまだ異形と同化している。

そしてその体にこれでもかというほどに肥大化した『神』の文字。

その姿にはもう理性も命も残っていない。

「締めだ！　とちるなよ！！」

文字をしっかりと目で確認してからハルユキが叫ぶ。

「誰にモノを言っているのじゃ、小僧！」

上空に紅い翼。

血で出来た巨大なそれを羽ばたかせながら、レイが急降下する。

降下しながら、幾つかの剣を投擲し、男の体を固定する。

次の瞬間には、ユキネのそれを超えるほどの巨大な剣。それを両手に握り締めた。

それが『神』を切り裂けば戦いは終わる、はずだった。

再び、異形と目が合った。

不吉な予感が一気に膨れ上がっていく。

――ッッ■■■■■ッ■■ッ■■■■ッッ■ッ■■■■■■■ッ！！！！！！！！！！！！！！

今までのそれとは一線を帰すような、凶声が響き渡った。

全身が総毛だつ。

その音は遂に衝撃となり、周りの木々を吹き飛ばしていった。

『神』の文字が頭中に広がっていく。

その巨大な頭を覆い尽くすほどに黒い何かが広がる。

先程、俺の左腕を持って入ったアレと同じ吸い込まれるかのような黒。

全てを呑み込み尽くす暗い暗い黒い闇。

恐らく、その身をも削るような捨て身の攻撃だろう。

そしてそれ相応の破壊をこの森中に撒き散らすのは間違いない。

桜も、家も、地面も、人間も、吸血鬼も。

全て、壊されて、死んでしまう。

ハルユキの脳裏に、焼け爛れた地の中心、死んだ仲間たちの中にただ独り、自分だけが立っている光景が映し出された。

どこか、過去と重なるその風景。

既視感、そして既死感。

心が、記憶が、何か大事なものが掻き毟られる。

「ふッ…ざけんなぁあああ！！！！」

走り出す。

もしかすると、人間の限界を超えて。

左腕が無くなった肩が痛む。

火傷を負った全身が悲鳴を上げる。

でも、でも今ならまだ発射される前にあそこに辿り着ける。

しかし、間に合って、どうする？

決まってる。守れ。

しかし、どうやって？

身を盾にしてもほとんど防ぎきれない。

必死に足を加速させながら、思考もそれ以上に加速させる。

どうする。

どうする。

どうするドウスル、如何する！！

加速加速、加速。

思考も動きも人を超えた何かに行き着く直前まで加速していく。そんな中。

ふと、その目に映った。

進行方向にハルユキの攻撃で弾き飛ばされた一振りの剣。

――――例えただの我侭って言われても、貫き通せばそれは信念だ、って言えるんじゃねぇかな。なぁ、春雪――――

何故か何時か何処かで誰かが言った言葉が、思い起こされる。

誰かに背中を押されるかのように、更に、加速する。

何かを考える前に。

右手が、通り過ぎざまに剣の柄を、きつく握り締め、そして。

闇を、異形を、絶望を、死を。

切り裂いた。

貫け、突き進め（後書き）

感想を随時お待ちしてます

幻想の桜色（前書き）

ちょっと寝坊…

男の胸の中心に、赤い血の剣が突き立てられた。

「あ……」

何とも人間らしい声を上げてその場に崩れ落ちた。

「今度こそ、終わり、じゃの……」

剣が男に突き刺さったまま、突き刺さったまま霧散していった。

レイは、ポツリとそう呟くと男から背を向けた。

それをユキネは、離れた所から見ていた。

おかしい、とこの結果に疑問を感じながら。

何故こんな結果になっている？

瞬きするほどの時間で、レイは気づかなかったが、あの異形は最後、攻撃しようとしたはずだ。

それこそ、全てを道連れにするかのような。

死を確かに予感した。だから間違いないだろう。

しかし、何かが起こった。

死の予感も、黒い闇も、異形の頭も、『神』すらも。

バラバラに、いや、粉々になるまで、〝切り裂かれた〟。

何も見えてはいない。

しかし、それを見つけたとき直ぐに察しがついた。

ハルユキが、削れた地面の先に、剣を持って佇んでいるからだ。

フッと、苦笑いが漏れた。

私が目指す位置が、背中が余りに大きすぎて、遠すぎて。

「ハ……」

声をかけようとして、引っ込んでしまった。

また、何かに不自然を感じた。

声に気づいて此方に歩いてくるハルユキの雰囲気に違いは見られず、視線もはっきりしている。

しかし、何時もよりなんと言えばいいのか。

……そう、遠い。

剣を持ったその姿が、不自然なほどに自然なのだ。

何処か遠くに行ってしまったかのように感じてしまう。

先程言っていたのとは全く違う意味で。

先程言ったものが距離的な意味だと仮定するならば、今のこれはまるで存在する次元からして違うような。そんな、感覚。

「大丈夫、か？」

思わず、そう声をかけた。

かけられたハルユキは無言でユキネに手を伸ばした。

「うぁ……」

自分の無事を示し、同時にユキネの無事を確かめるために頭を撫でられた。

「よく頑張ったな。ほらお前の剣だ」

直ぐに頭から手は離れ、ハルユキはユキネの目の前の地面に手に持った剣を突き刺した。

「むー…」

「何て声出してんだよ。さっさと行こうぜ」

そう言ってユキネの横を通り、他の3人がいる所に向かっていった。

ユキネもその後を追うために、突き刺さった剣を引き抜く。

ハルユキが余程強く握っていたのか、そこにはまだハルユキの体温が残っていた。

◆

◆

◆

フェン、ジェミニ、レイの三人とユキネとハルユキが一緒に合流した。

「これから、どうする？」
「とりあえずは、イサンをな」
「……手伝うか？」

少しだけ考えた後、レイは応える。

「いや、儂が一人でやる」

今までやはり無理に気を張っていたのか、ことが終わった今は、急に寂しさを思い出したかのように声は心なしか勢いがない。

「…そうか」

やがて家の前にまで歩きついた。

「お主らは休んでくれていい。特にお前は重症じゃろ。手当てをして寝ろ」

まだ夜は更けたばかりだ。星も桜もいっそう煌いている。

レイの言葉に甘えるかと思い、その旨を伝えようと口を開いた。

その瞬間、大地が震撼した。

「な……ッ！！」

中途半端に開きかけた口から驚愕が音となって飛び出た。

連続的に地面が揺れる。

「またか…！」

「今度は、何だ！？」

立て続けに起こる異常事態に流石に苛立ちが募る。

直に、地面が揺れる音に合わせて何かがひび割れていく音が聞こえてきた。

「おい、やばいんじゃないか、これ…？」

振動の規模が尋常じゃない。

ハルユキ以外は立ってもいられない。

「な、なぁ、もしかしたらなんやけど…」

地面に必死に自分の身体を固定しながら、ジェミニが口を開いた。

「レイちゃんは、漏れてくる魔力を封印したんやろ？」

「そうじゃ、な…！」

まさか、とハルユキも頭に浮かんだ考えに声を上げる。

「もし、蓄えきれない分を外に出してたんなら……塞いじゃあかんちゃうの？」

そうだ。

何故今まで気付かなかった。

どんな容器にでも注ぎ続ければ溢れてしまう。
それを塞いでしまえば、暴発してしまうのは当たり前だ。
ビシッと、大きい亀裂が入った音がした。

「くッ……！」

レイがしゃがんだ姿勢から、翼を作り飛び立とうとするが足場が安定していないため再び地面に崩れ落ちた。
遂に、地面さえも悲鳴をあげ亀裂が入り始める。

「イサン……！！」

飛ぶことは諦めたのか、地面を這いずりながら、イサンの元に向かっていった。

「あの、馬鹿…！」

それを見つけたハルユキは、バランスを保ちながら、ゆっくりレイへと近寄る。
そして着物の襟を引っ掴んだ。

「な、何を…！」
「黙ってろ。舌噛むぞ」

何とか振動のタイミングに合わせてレイを真上に放り投げた。
さすがにバランスを保ち切れず、その場に尻餅をつく。
レイは、いきなりの事で慌てながらも空中で翼を使い、何とか姿勢を正した。

「すまん。恩に着る」
「いいから、さっさと行け」

一度頷いてから、レイは身を翻した。

しかし。

そこで、バキン、と一際大きな亀裂が何処かに走った。

「ハル！！」

座ったままユキネが何かを指差したまま叫んだ。

指の先には枯れ木の大木。

その真ん中に縦に二等分するように亀裂が入っていた。

そしてその中から、絶大な気配。

ハルユキがそれを確認した瞬間、亀裂の中から風を纏いながら何かが飛び出した。

「……うわッ！！」

その風が瞬く間に森中に広がった。

強風にあおられ、上空にいるレイもバランスをとることに必死で身動きが取れていない。

風に伴い、桜の花びらが大量に夜空に舞い上がった。

そして、それが風に逆らいながら先程枯れ木から飛び出した何かに集結していく。

尋常じゃない風で、尋常じゃない広さの森から桜の花びらが集まってくる。

それが巨大な球状となった時、その大きさは直径３０メートルは軽く超えていた。

まるで、空にもう一つ月が出たんじゃないかというほどの大きさ。

「!?　イサン!!」

いつの間にか、イサンがその球体の前まで桜と一緒に引き込まれていた。

レイも何とか近寄ろうとするが、豪風が吹き荒れる中辿り着くのは不可能だ。

ハルユキも飛ぼうとしてみるが、揺れている地面からこの豪風の中に突っ込んでも辿り着けはしないだろう。

さながら、天災。

嵐のような風が吹き荒れ、大地が揺れているこの状況は他に例えようがない。

そんな風を物ともしないように、球体がゆっくりを形を変えていく。

細長く形を変えていき、続いて爪、頭が出来、その上に荘厳な雰囲気の巨大な角が出来上がる。

桜の花びらがだんだんと鱗のように配列し始め、一つの形を創り出していく。

「……桜の龍…？」

この雰囲気。

この圧力。

つい最近も感じたものと同種の物。

最期に顔に開いた穴に金色の瞳が浮かび上がり。

桜色の巨龍が誕生した。

先程まで荒狂っていた風も、怒涛のように暴れていた大地も嘘のように沈黙した。

誰も話さない。物音も立てない。

風も木も鳥も虫も。

何かに怯えるように黙り込んでいる。

「…お」

そんな中。

”ただの”吸血鬼だけが。

「ぉおおおおおおおお！！！！！！！！」

唸り声を上げながら、上空で地上の全てを睥睨していた龍に手に巨大な剣を持って突進した。

龍は其方を見もせずに、桜色の魔力を向かってくるレイに向かって撃ち出した。

物凄いスピードで迫り来るそれをぎりぎりで避ける。

3つほど避けた所に追撃。

避けれるタイミングではない。

「はぁあッ！！」

剣でそれを受け止めた。

渾身の力で振り下ろした剣と、龍の魔力が拮抗する。

数秒間拮抗した後、僅差でレイの剣が魔力の塊を叩き斬った。

しかし。

眼前には先程の魔力の弾幕。

避けきれずに直撃した。

「レイ！！」

ハルユキも姿勢を立て直して、足に力を入れる。

――安心しろ。敵意はない――

飛び出そうとしたその瞬間、頭の中に声が響いた。

何かに急かされる様に上を見た。

桜色の巨龍が此方を見下ろしている。その先にはレイが何か魔力で出来た檻に閉じ込められ、中で暴れていた。

――暴れるので、閉じ込めさせてもらった。事が終われば直ぐに放す――

そう言うと、龍は正面に向き直った。

――よし、何とか間に合うか……――

小さく呟くなり、空を見上げ、思い切り口を開いた。

次の瞬間、龍の大きく開かれた口から、桜色の魔力の奔流が上空へ光の柱となって立ち上った。

「うおッ…！」

遠く離れたここにも発生した風圧が届き、思わず腕で顔を庇う。

次に目を戻したときには、龍の目の前に、球状で先程の魔力が集結していた。

――さて、後は待つだけだ、が――

そこで改めて龍がその金色の眼の焦点を此方に合わせた。

――暇だな。何か話でもするか？――

こちらに向けたその顔は、何処か不敵に笑ったような気がした。

幻想の桜色（後書き）

日本サッカー決勝トーナメント進出おめでとう
大して詳しくないけど、嬉しいもんですねぇ

その腕で、その心で

「目的は何だ？　お前は…」

相手は敵意がないと言い切り、此方もそんなものは感じないので、とりあえず言葉を交わしてみることにした。

――ああ、待て待て。この姿じゃちょっと厳つ過ぎて話し辛いだろ――

なんでもないように言いながら、またもや風を吹き荒らしながら自らの姿形を変形させていく。

ぼこぼこと不器用に体を圧縮しながら、形を整えていく。

やがて、爪が腕になり角が引っ込み人の形に収まった。

「おお、できたできた。久しぶりだったから、ちょっと不安だったんだ」

細身だが割とガッチリとした身体。

茶色がかった髪に所々桜色の髪が混じっている。

年齢は３０歳ほどに見え、見た目だけで言えばただのおっさんにしか見えず、とても龍が姿を変えているとは思えないだろう。

「あぁ、風が気持ちいいよなぁ……本当に」

風をより多くその肌で感じようと、両手を広げ目を瞑った。

「お前らみたいな生き物が羨ましいよ。お前らと同じ目線で見てみると世界はこんなに広くて、充実してる」

本当に羨ましそうに、目を細めて何処か遠くを眺めながらそう言った。

「俺はもう五万年以上生きてるけど、いや、生きているからかな。お前らよりも、時間の価値を理解し切れてない自信がある」

「……霊、龍？」

その時の姿は長い時間を感じさせる物だったからか、フェンがポツリ、と呟いた。

「せ～いか～い。霊龍の一柱の桜龍だ。ロウって呼んでくれ」

えらく人間臭いそいつに多少面食らい、黙っていたがそろそろ話を進めることにした。

「おい、質問してんだよ。…目的は何だ？　糞”ガキ”」

そう、ロウの背中に言葉をぶつけると、ピクッと肩を揺らして此方を睨み付けた。

「……お前は、人間か？」

龍のときから変わらないその金色の眼は先程までの軽い雰囲気と違い、刺す様な鋭いものだった。

「神にでも見えるか？」
「人間よりゃあな」

ピシッと何処か音がしたかのように両者の間に緊張が走った。

お互いに殺気をぶつけ合い、空気の温度が下がっていく。

「……と、まあ、こんな意地の張り合いは置いといて、だ。俺の目的だったな」

肩透かしを食らったように、相手の殺気が立ち消える。

俺もほぼ同時に敵意を引っ込めさせる。背中には冷や汗が伝っていた。

「ったく、冷や汗かいちまったぜ。冗談抜きで人間離れしたやつだな、お前」

相手もそれは同じだったらしく、肩をゴキゴキやらせながらその場に座り込んだ。

「まあ、俺が出てきた目的は”アレ”だ。もう終わったし特にやることもない」

斜め後ろ後方で渦巻く魔力の塊を親指で後手に指差しながら言った。

桜色の魔力の玉。心なしかどんどんと小さくなってきている。

「俺が聞きたいのは、アレを作ることでお前が何をしたいのかってことだ」

破壊活動やらの物騒な目的がないとは言えない。

男はそれを聞くと、ニッと悪戯を考えているような子供のような表情で笑った。

「……まあ、あれだ。恩返しってやつだよ」

「恩返し？」

ああ、と小さく応えてその場に寝っ転がった。

腕を頭に持っていき、枕にすると嬉しそうに話し出した。

「五百年前だ。よく覚えてるよ。ちょっと色んな事があって怪我しちまってなあ。まあ死ぬのを覚悟したりしたんだよ。それでも十分生きたかなって思ってたもんだから、そんなに悲しくもなかった。でもそこで馬鹿な奴がやってきてな」

話すうちに上半身を起き上がらせ、身を乗り出してくる。

嬉しそうに、本当に嬉しそうに身振り手振りを交えながら熱心に話を続ける。

その時人間の姿をしていたからか、助けられたロウは数ヶ月だけ人間と一緒に暮らしたらしい。

「そん時に食べたスープがまた温かくて美味いんだよ。凄いぜアレは…」

ただその後、どうしても簡単に治らない傷があったこと。

それを治す為にまだ小さかったこの森に眠ることになったこと。

森に桜を咲かせて、魔力を吸収する仕組みを作ったこと。

それを見た人間が花見を強行させたこと。

いざ、森に眠ろうとしたら、人間が俺が守ってやると言い出したこと。

何でそんな事をお前がしなきゃならないのか問いただしたこと。

「そしたら、そいつがなぁ。当たり前のような顔して言うんだよ。…俺達もう家族だろって」

ありえねぇよなぁ、と苦笑しながら呟いた。

「たった数ヶ月だ。俺みたいな生き物にはハナクソ程の時間だ。それだけで家族だとよ。思っちまった、人間ってスゲェなって」

そんな、つい最近もどこかで聞いたものと同じような、馬鹿な話。

「人間だって皆が皆そうじゃない。そいつが珍しいくらいアホなんだ」

ああ、そうだろうな。と、ロウはそう言って、また笑った。

「だからこそ、似た様な奴等はほっとけねぇんだよ」

「……どういうことだ？」

俺が解かっていないのが予想外だったのか、キョトンとした後、また悪戯好きの子供のような顔になった。

「まぁ、見てろ。そろそろだ」

ロウが目線を上げたのに倣う様に、俺も夜空を見上げた。

◆

◆

◆

「くッ……！」

また振り下ろした剣が砕け散った。

外と完全に遮断されているのか、少なくとも此方側からでは何も状況がわからない。

合計8本、全て全力で練成し、全力で切りかかっても傷一つ付かなかった。

力押しでは無理だ。

考えろ。

しばし、焦る気持ちを抑えながら必死に考えをめぐらせる。

考え付いた結果は何とも無茶なものだった。

眼を瞑り、魔力の檻に手を付ける。

（これが唯の魔力ならば…！）

幸い、ここ数日で封印してきた物と同じものだ。

自分の魔力ほど自在ではないとはいえ、多少は融通も利く。

全神経を魔力を伝う右手に集中させる。

イメージは侵入、侵食、支配。

少しずつ、桜色の檻が血の様な赤に染まっていく。

それが人一人ほどの大きさまで広がった、その瞬間。

「…はッ！！」

檻に触れていた右手をそのまま握り締め、振り抜いた。

大した抵抗もなく右手が檻を貫通し、それに伴って檻中に罅が広がり、砕け散った。

目の前には、桜の龍は存在しない。

代わりに桜の花びらが密集している直径2メートルほどの玉。

「おいおい、あれをよく自分一人で突破できたな」

見知らぬ声に下を見ると、姿もまた知らない男の姿。

「その中だ。後はお前がやれ」

何がとは言わなかったが、大体の察しがついて、桜の玉の中に飛び込んだ。

思ったよりも硬い。

相当な量の魔力が圧縮されているのか、突っ込んだ右手がビリビリと圧迫される。

「ぐッ…おぉッ……！！」

構わずに肘も入り、続いて顔も身体も魔力の中に侵入する。

遠い。

たった数センチ進むのに気が遠くなるほどの労力がいる。

軋む体、折れそうな心をそっちのけで突き進む。

そしてやがて、右手の指の先に何かが触れた。

直ぐに今度は掌で触れる。確信し、そのまま掴んだ。

「ぉおおおおッ！！」

気合と共に一気にイサンを夜空の元へと引っ張り上げた。

イサンと一緒に自分も落ちそうになるのを翼を生成し、バランスをとる。

イサンは力なく腕の中だ。それもそう。もうイサンは死んでいる。

では何故こんな無理をしてまで取り戻したのか。…決まっている。

知るか。そんなこと。

考えてやった行動ではない。やりたいことをやっただけだ。

そこで、異変に気付いた。

イサンの腕に、顔に、身体に。

３０年の年月の老いがない。つるやかな腕と足。そこから伝わる、温かくて心地いい体温。

思わず、イサンの顔を覗き込む。

人の気も知らずに寝息を掻いている。

「……イ、サン…？」

しばらく時間がたった後で漸く出た声は擦れていて、ほとんど言葉にもなっていなかった。

それでも、その声に反応したかのように。

ピクッとイサンの目蓋が反応した。

緩々と目蓋が開いていく。

「あれ…？　レイ…？　どうし、て……？」

目の前の光景が頭にうまく事実として入ってこず、開いた口からは何も出てこない。

「…夢、かな。……わからないけど」

両腕を首に回され、引き寄せられた。

密着したせいで頬と頬がくっついた。

「まあ、いいや」

やっぱりレイは温かいね、と続いてイサンが小さく呟いた。

温かいから夢じゃないのかな、と続けてイサンだけが話し続ける。

伝わってくる体温が嘘にはとても思えず、いや思えないからか、レ

イの体は反応できず固まったままだ。

「……レイ」

問いかけるように、レイにまた声がかかる。

しかし、現実についていけないレイは頑なに沈黙している。

しかし、そこで頬に何か伝うものを感じ、それで現実に引き戻された。

「死ぬのは、……怖いよ」

「……イサン？」

それは人間として、命ある者として当たり前のことだが、何時も自分の身を省みないイサンがそれを言うとは思えず、レイは思わず、そう聞き返した。

「死ぬのは、痛くて、…怖い」

「……ああ」

「死ぬのは、冷たくて、…怖い」

「……そうじゃな」

「死ぬのは、暗くて、…怖い」

「ああ」

そこで、首に回った腕が痛いほど絡まってきた。でもそれは決して嫌なものじゃない。

「死ぬのは、独りで、寂しくて、……怖いよ…！」

「ああ……」

気の利いた慰めの言葉なんて、何も思いつかない。

だから役に立たない頭なんて使わずに、怯えるように凍えているように震えるイサンの身体を思い切り締め付けるように抱きしめた。

桜の森の上。

肌寒い星夜の下。

イサンの体は、確かに温かかった。

その腕で、その心で（後書き）

感想すごくお待ちしています、ホントに。

桜の下（前書き）

少しだけ書き直しました。

「生き、返った…！？」
「嘘……」
「ホンマかい……！」

三者三様に驚きの言葉を上げる。
確かに、遥か上空ではイサンが息をしていて、レイに支えられているのがわかる。

「……お前が、生き返らせたのか？」

イサンがまた息をしているのは、悪いことではない
しかし、人が生き返るというのは、必ずしも喜ばしいことではない。

「そんな訳ないだろ。生き返らせるなんて俺や神にだって不可能だよ」

腰に手をあて、満足そうに夜空の二人を見上げながら、ロウがそう言った。

「だいたい、そんな事出来たら人間の良さが死んじまうだろうが。

偉そうかも知れねぇけどな。人間は短い時間を精一杯に生きるから凄いんだよ」

「じゃあ、あれは……？」

レイを除いて一番イサンの死を引きずっていたフェンが多少声を荒げながらロウに質問をぶつける。

「ギリギリだったんだぜ？　あの吸血鬼が桜の傍まで運んできたから、俺の魔力が届いたんだ。

脳以外は復元も可能だからな。何とか脳だけでも保ってたって訳だ」

確かに、俺がいた世界の医学でさえも脳を復元する技術は存在しなかった。

生々しい話だが、人である限り脳は命の要なのだ。

「俺の魔力が回復してたのもついさっきだったし、本当に偶然に偶然が重なった結果だ。奇跡なんて言葉を使ってもいいくらいなんだぜ？」

空に散らばった桜色の魔力がロウの元にゆっくりと戻っていく。

「それじゃ、俺はやることもやったし、そろそろ行くわ。あの嬢ち

ゃんに礼を言っといてくれ。あいつには、結局、言えなかったからな」

笑顔の中に少しだけ寂しさを覗かせてそう言った。

「…ああ」

「頼むぜ？　俺とお前ならまた会うこともあるだろうしよ。その時にはお前にも礼でも言ってやるよ」

今言えよ、と突っ込みそうになったが、その前にロウは空に飛び上がった。

今度は一瞬で、龍の姿に変わる。

その姿はやはり神々しさを、感じてしまう。

きらきらと光の粒を零しながら、ロウは夜空に消えていった。

その一瞬の出来事に、思わず目を奪われたのか、レイがイサンを抱えて下に降りてきた。

「あいつは…何だったんだ？」

「ロウっていってな。まあ、…ただのアホだ」

大して興味もなくなったのか、そうか、と言ったきり何も聞いてこ

なかった。

「イサンは大丈夫なのか？」
「あ、大丈夫です。ん……っと」

イサンの体から離れ、一人で立とうとするが足元が安定せず、ふらついた所をまたレイに支えられる。

「まだ、無理をせんでも良い」

二人の様子に不安はもう感じなかったので、背を向ける。

「……俺はちょっと野暮用に行って来る」
「野暮用？」
「ああ。すぐに終わるよ」
「怪我は？　大丈夫なのか？」
「ああ。この通りだ」

まだ完全に戻ってはいないが、肘までは再生が進んでいる左腕を見せる。

それを見て、イサンは軽く息を呑み、レイは目を見開いた。

「お主も、大概な生き物じゃな…」

ハッハッと笑って返すと、一飛びで森の中に飛び込んだ。

大分前からチラチラと感じる、先日感じた視線と似たような気配を追って。

◆
◆
◆

ハルユキが去って行った後、フェン、ジェミニ、ユキネの三人は先に休むと家の中に入って行った。

レイもイサンを担いで、それに付いて行こうとした所で横から止められた。

「どうした？」

イサンは、申し訳なさそうに、後ろを指差しながら言った。

「……あそこに連れて行って欲しいんです。いい？」

「それは構わんが、あそこは……」

「……お願い…」

「……わかった」

ゆっくりとイサンが指を指した所に向かって歩いて行く。

一歩一歩、進んで行くとやがて木も折れ、地面もぐちゃぐちゃに荒れ果てた森の入り口に出た。

その中央には黒い血溜りの中に仰向けに転がっている男がいた。

その胸には剣の形に広がった穴。

「……兄さん」

「……！」

途中からイサンに頼まれたのがこの男の事だろうとは察しがついたものの、肉親だったとは想定外でレイは驚きに息を呑んだ。

「……消えなさい。貴女とは会いたくもありません」
「ッ…イサン！」

レイはイサンの腕を引いて距離をとろうとする。

しかし、その前に腕を優しく押さえられた。

「大丈夫。近くまで、連れて行って」
「やめておきなさい。私はまだ動けるかもしれませんよ？」

確かに男の声は不思議なほどにしっかりしている。

ひょっとしたら、本当にまだ力が残っている可能性がある。

「レイ」

しかし、切実なイサンの声が耳に入り、意を決して前に歩を進めた。

数秒後、男の真上へと辿り着く。男は視線を動かしただけで、ピクリとも動かない。いや、やはり動けないのだろう。

無感情な瞳でどこかを見つめている。

「兄さん……だよね」
「貴女を拷問し、３０年を奪い、そこの吸血鬼に殺された男でもそう呼べるならそうでしょうね」

男の声に再会の情など感じ取れず、何処までも冷たいままだ。

「なら…」
「違いますよ」

イサンの言葉を許さないとばかりに遮り、男が続ける。

「私はもう人間じゃない。人間らしい死に方も出来ない。だから間違っても貴女の兄なんかではないんです。……ああ、ほら見てみなさい」

男の視線を追うように男の腕の先に目を向けた。

「…ッ！」
「……」

男の腕は指の先のほうから小さい粒のように分解され始めていてどんどん霧散して行っている。

「こうやって跡形もなく私は消えるでしょう。
でも、むしろこれは喜ばしいことだ。こんな腐った世界に従って死ぬなんて真っ平だ。人間として生まれて化け物として死ぬ。これは世界に喧嘩を売っているとは思いませんか？」

本当に嬉しそうに必死に残った力を振り絞って顔を歪に歪ませる。

男はもう、自分のことを神だなどと騙ってはいなかった。

「このまま死ねば、私は……」
「兄さん」

今度はイサンが男の言葉を踏み倒した。

「……ごめんね」

ピクッと男の体が僅かに震えた。

「……なぜ、謝る…？」
「……」
「なぜ謝るのかと聞いているんだ…！」

男が途端に激昂する。

イサンは男を顔を悲しみで歪ませながら見つめるだけで、もう何も言わない。

「……！　だから…、だから嫌いなんだ！！　この世界も！　この森も！　勝手に死んだあの女も！！」

息を荒げながら男は喚き散らす。

イサンはその場に倒れるように座り込み、男の近くによる。

「神になれなかった以上！　私はただの悪党だ！　目的の為に肉親をも利用したただの屑だ！　お前に謝ってもらう理由も道理もない！」

男は苦しそうに肩で息をしながら、イサンを睨み付ける。

加速度的に男の体が世界に溶けていく。

この男が許せないのが何か、何に激昂しているのかは傍から見ているレイにはわからなかった。

「……違うよ。兄さんは違う」

「……やめろ。やっぱりもう喋らないで下さい。もう…嫌なんです」

違う？　何が違うというのだろうか。

何も間違ってはいない。

男は思い起こす。

小さい頃、森ばかりにいるのが耐えられずに夜中にこっそり抜け出したことを。

そして、魔物に襲われ、何処からか母が現れ私を庇ったことを。

母を殺したことを。

母を殺したその世界（すべて）を憎んだことを。

自分を閉じ込めていた森を嫌っていたことを。

母を殺した自分を呪った事を。

そうだ。何も間違えていない。

神となり、世界となり、自分も一緒に全て殺してしまいたかった。

ただそれだけ。

だが、だが何で自分はこうも世界が憎いのか？

憎くて憎くて時間もそれを癒してくれなくて、気が付いたら妹にまで手をかけて。

母が死んだから？　自分を憎んだのはその時だ。その時から母も世界も恨んでいたのか？　いや、そもそも…

駄目だ…分からない。もう、思考がほとんど働かなくなっている。

「私は、…もう死ぬ。死ねばそれまでだ。私が何だったかなんて私には、関係、…なくなります」

「兄さん……ごめんね…」

イサンは思い起こす。

母が死んでしまってから、兄の人が変わってしまった事。

元々強い人間ではなかった兄が母の死を受け止め切れなかった事。

その兄が何処か恐ろしくて、近づけなかった事。

やがて、何も言わずに出て行ってしまった事。

帰って来た兄が、思いつめた顔で私に心当たりがないことを聞いてきた事。

何も知らないと首を横に振り、母の味を思い出しながら作ったスープを一緒に食べようと言おうとした事。

兄が、いきなり血相を変えて何かに怯えるように、襲って来た事。

自分よりもよっぽど痛そうに辛そうに、私を痛めつけた事。

だから、兄を許す事で、兄の力になれなかった、兄をこんな風にしてしまった自分を許したい。

ただ、それだけの身勝手で自分勝手な我侭。ただそれだけ。

またそれですか、と男は溜め息をついた。

「私はね、あなた、も嫌い、…ですよ。世界の次くらいにね……」

世界（すべて）が一番嫌いな男がそう言った。

「……うん」

「……知って、いますか？　全てが嫌いなら、死ぬのは全く苦痛じゃないんです。心残りなんてものも、もう…欠片もない」

でも、と男は言葉を続ける。

消える範囲が胴に移ってからは全体がどんどん薄くなってきている。
足はなくなり、手も残っていない。
今なら、謝れそうな気がした、が、そんな事は許されない。謝って死ぬのは、余りに卑怯に過ぎる。
そんな男が思い起こすのは、我が家の恒例だった突発的な花見。
聞けば、これも先祖代々な物らしい。
なんのこっちゃ、と首を捻っていたことを覚えている。
「…この景色は」
男の今にも消えそうな視界には、端から端まで埋め尽くされた光の粒。
星の間に桜が。桜の間に星が。と、余すことなく煌いている。
「少しだけ、懐かしい……」
桜の花びらがひらひらと。
男が”いた”場所に舞い落ちた。

◆
◆
◆

「実はまた実験したんだけど、やっぱり定着まではいかなかったよ。オフィウクス」

子供の姿の何かが、木々を飛び渡りながら移動して行く。

『媒体はどう準備したのか聞いても構わないか？』

手に持った魔球から重々しい声が聞こえてくる。

「どうやってって、僕が写本を回したんだよ。遠まわしにね。僕が関わってないって思わせるのは大変だったよ」

そこで、一つトーンを、と言うよりテンションごと下がったようでやれやれと首を横に振りながら続けた。

「ただねぇ、今回の『嘘』は結構深刻でね。精神汚染に加えて自己陶酔、自意識の崩壊に記憶の混濁とかかなぁ。僕がちょっと頭弄ったとしても、あれだけ精神面で壊れちゃうのも珍しいんだよね。まあ、どこかかなり根っこの部分が『嘘』だったんだろうね。あ～あ、かわいそ」

ある程度監視していた丘から離れた所で地面に下り、軽く息をついた。

そこで少しだけ辺りを見回すと、再び手の中の交信魔球を見つめる。

その顔に先程の感情など微塵も残っておらず、嬉々として口を開く。

「いやまあそれでも、今回は本当に面白かったよ。珍しいものが、そりゃもう見れた見れた。低能な男だったけど、マクスにもそこだけは感謝してもいいかな」

楽しそうに恍惚とした表情で、そう言った。

この子供が見ていたのは、事が地上に移ってからだ。

その中でお気に召した物が多かったらしい。

「まずは、霊龍だ。凄いのがいたよ。マクスはあの魔力を使ったからだろうね。他の失敗作とは、同じ失敗でも規模も質も違ったよ。

でもやっぱり”神”と”人間”じゃあ適合するのは無理みたいだね」

『ほう、霊龍が……、しかし定着できないことはもう分かっていたはずだ。…他にも、まだ何かあるんだろう？』

クックッと口の中で笑いながら、少年が続ける。

「そうだね。あったよ。というか、居た。何人か傍に人が居たんだけど。……その中に双子（ジェミニ）がね」

「ジェミニ…？　サジタリウスもか？」

「ああ、違う違う。”そっち”じゃないよ」

一瞬だけ間が空いて、まさか、と声が聞こえた。

魔球の奥で確かに男が息を呑む。

珍しい。

この男が息を呑んで驚くのがどれだけ珍しいのかわかる少年は、思わず笑ってしまう。

『やはり生きていたか、ジェミニ。……ああ、何か久しぶりにはいに空気を送り込んだ気分だよ。礼を言おう』

ありがたき幸せ、とその場でおどけた様に少年が一礼する。

「……もう一つ懐かしい顔があったけど、まあこれはいいや。僕のモノだしね」

『……まあ、無理に話せとは言わんさ。好きにすると良い』

大丈夫、大丈夫。と言いながら、ケラケラと少年は嗤う。

「最後にね。後二人ぐらい居たんだけど、どっちも凄いよ。特にその男の方が……」

「それは、俺のことか？」

後ろからいきなり聞こえた男の声に、少年は口を閉ざし、体を固まらせた。

そして、頬に伝う冷や汗を感じながら、最後に交信魔球に呟き、振り返った。

「…化け物なんだ」

◆
◆
◆

森の上から、森を見下ろす。

幸い、ロウが去っても桜自体はもう独立したのか、光るその花は健在だ。

そのお陰で、この高さから見下ろせば、かなりの広範囲を捕捉することが出来る。

そして。

「…見つけたぁ…！」

空を蹴りつけ、その人影に一気に接近した。

さすがに反応も満足に出来なかったのか、目的の子供は固まったま

まだ。

その子供から１０メートル付近の地面に着地して、声をかけた。

その声に身体を硬直させ、すぐに此方に振り向いた。

体は確かに子供だが、それが普通の無邪気な子供ではないということだけはわかった。

銃を向けてもいいが、銃が何かわからないこの世界では脅しにはならないだろう。

仕方なく出来るだけ殺気をぶつけるようにして、再び口を開いた。

「……お前、さっきの男の仲間か？」

「まあ、そうなるだろうね」

そう言いながら、その子供はこちらを振り返った。

その顔は普通の子供といっても差し支えないあどけない物だったが、纏う雰囲気はとても子供のものじゃない。

老獪な雰囲気が漂っている。

今やここは、魔法が溢れた世界だ。俺の常識が通じない可能性は高い。

「３０年前にあの男の手助けをしたのも、…お前か？」

ピクッと道化のような気色悪い笑みがほんの少しだけ揺れた。

「……どうして、そう思うの？」

一瞬でその乱れはなりを潜め、道化のような能面のような顔に戻る。

「……ちょっと考えれば、協力者がいることは分かったよ」

イサンを拷問した後、井戸を見つけたのならば、別の所でレイが魔力を取られているのを発見した時そこに男が居た可能性は低い。

なら、別の誰かがそこにいた可能性が高い。

そして、男が最終的に暴走してああなった以上、黒幕が別に居ると考えた方が無難だった。

子供の姿から考えると、３０年前というのはあり得ないかも知れないが、何故がその姿が疑いに拍車をかけていた。

「ああそう言えば、ついでに魔力の採集を別の人に頼んだような気もするな」

俺の簡単な仮説を聞いた子供はそう言った。
その顔は今話した内容に欠片の関心も寄せていないことが丸分かりで、少しイラついた。

「まあ、どっちにしろ、お前はここでお縄だ。抵抗すんなよ」
「へぇ、僕を捕まえるの？　その腕で？」

ジリッと右足で後ずさりながら、逃げるタイミングを計っている。

「出来ないと思うか？」

俺もそれを追うようにジリッと足を前に出した瞬間。

「ソドム！」

夜空の間を縫って何処からかドラゴンが突っ込んできた。

「時間を稼げ！」

そう言うなり、子供は背中を向けた。

「はッ！！」

突っ込んできたドラゴンを横から殴りつけた。

急に力の方向を変えられたにもかかわらず、ドラゴンは木々を圧し折って、地面に叩きつけられ一発で動かなくなった。

「…冗談でしょ…！」

それを肩越しに見ていた子供の歩みが止まる。

先程は驚いて逃がしてしまったが、今度はドラゴンを殴った勢いのまま、子供に迫り、その首根っこを掴み取った。

しかし、手応えはなく、伸ばした右手は空を切った。

確かに今そこにいたはずだ。

しかし、今は影も形もない。

「何ッ…！！」

「ふー、危ない危ない」

近くから木霊するように声が聞こえてきた。

気配はまだしっかり感じる。しかし、動けない。

気配が軽く”３００はある”からだ。

「…まぁた、妙な魔法使いやがって」

前の時代では触れなかった魔法という戦闘技術は厄介極まりない。

「流石に捕まりたくはないから。じゃあね、また会うこともあると思うよ。その時までさよならだ」

そう言って何百もの気配は夜の闇に消え去った。

桜の下（後書き）

感想随時お待ちしてます

見送られて（前書き）

桜の森編は予想よりも3倍くらい長さに…。
それも含めて色々失敗したな、と思う桜の森編でした。

見送られて

色々あったあの夜から三日が経った。

森はロウと言う龍が去った後も、魔力を吸収して栄養に変えるという性質は無くならないらしく、変わらず咲き誇っている。

その生命力も目覚しく、もう戦いの爪痕もほとんど残ってはいなかった。

「何でこいつ俺についてくんだよ…！　ほらあっち行け、あっち！」

迷惑そうな声の方向では、ハルユキが何処からか連れて来た飛竜が、ハルユキに頬ずりしようとしていた。

「だから言うたやろ？　その竜は従竜ゆうてな。自分に勝った一番強い生き物に従う習性があるんやーて」

逃げ回るハルユキを口で大げさに息をしながらドラゴンが追いかけて回っている。

ハルユキがあの夜に森で倒した竜で、朝になったら家の近くに蹲って寝ていたのだ。

古龍でも、もちろん霊龍でもないただの飛竜だが、一匹で村一つを

潰せる程の力は持っている。

その竜が人懐っこい仕草で走り回っているのは、不自然ながらもどこか微笑ましかった。

「行け！　かじれ！　そして踏め！　踏みにじれ！　顔やら尊厳やら！」

「お前は何物騒なこと言ってんだ！　小娘、コラァ！」

いつの間にかレイがその背中に乗り込み、大声で笑いながら竜に指示を飛ばしている。

「お主の傷ついた心を癒してやろうと言っておるのじゃ！　黙って踏まれろ！」

ハルユキに従うはずの竜も何故か楽しそうに地面を踏み踏みしている。

「別に踏まれたい願望はねぇよ！」

逃げるのをやめ、踏み下ろされるその足を受け止めて、ドラゴンを投げ飛ばした。

しかし、その背中にレイの姿はない。

「隙だらけじゃ、アホめぇ！」

動きが止まったハルユキにレイのドロップキックが直撃した。

「手応え、ありじゃ…！」

かに、見えた。

「おいおい。誰を狙ってるんだ？」

「何……！？」

レイがバッと振り向くと、そこには何もなかったようにハルユキが腕を組んで立っていた。

「馬鹿な確かに手応え、もとい足応えが…」

レイが足元に目をやると、親指を立てて気絶しているジェミニの姿。

立ち上がった竜がレイと無言でアイコンタクトすると、のしのしと

近寄ってジェミニを咥えて、ペッと森の方に捨てて戻ってきた。

閑話休題。

「あのまま踏まれていれば幸せだったものを…」
「お前に踏まれたからって幸せになれるとは考えられないんだが」
「考えるな。感じろ」
「それは少し用法が違うぞ」

何事もなかったかのように再開するレイとハルユキ。

「そもそも、お前に攻撃される理由がないだろ。いきなり何やってんだお前は」
「……お主、儂が作った昼飯が忽然と消えた事に心当たりはないか？」

沈黙。

「……味付けはもうちょっと濃いほうが好みでした」
「…極刑じゃな」

言うが早いか跳び蹴りを繰り出した。

「はッ、残像だ」
「こんな所でそんな大技使うか！？」

とてもじゃれ付くというレベルじゃない動きのレイにハルユキは涼しい顔で動き回る。

と。

「おーい。ハル、いつまでも遊んでないで……え？」
「え？……あ」

運悪くユキネが姿を現したのは、ハルユキの進行方向の上だった。

当然衝突し、地面にもつれ合って倒れこんだ。

幸い、柔らかい草の上で寸前で気付いたハルユキもブレーキをかけたので大した衝撃ではなかった。

「ぁっててて…、あーすまん、大丈夫か？」

ユキネの上に覆いかぶさるように転んだハルユキは完全に治癒した左手をついて身を起こした。

「あ、ああ。だいじょ……、ッ！！！」

頭を軽く振りながら、ハルユキに目を向けたユキネが息を呑んで固まった。

口をパクパクさせながら顔を赤くしていくユキネの視線の先にはハルユキの手。

それが、ユキネの胸の上にあったことが不幸だった。

「うぁっ……んッ…！」

慌てて立ち上がったときに力が入ってしまったのか、ユキネが敏感に反応した。

しかし、そんな事はこの状況をどう切り抜けるかに全力を注いでいるハルユキには分からない。

どうにかしないと、血の雨が降る。

「お、お、お、お前……！　私の…」

顔をこれ以上ないくらい真っ赤にさせながら、ユキネが立ち上がって飛びずさった。

ハルユキは背中にコッソリと汗をかきながら、出来るだけ落ち着いて口を開いた。

「なぁ、ユキネ」

「……」

「……俺はさ、別に触りたかった訳じゃないんだ。お前も触られたかったわけじゃない。俺も初めてだったし、お前も初めてだった。ほらな、おあいこじゃないかだからそれ以上無言で剣の切っ先を額に押し付けるのはやめて下さい勘弁して下さいお願いしますホントすいませんでした反省してます」

「死ねッ！！！」

「残像だっ」

そこは殴られるべきなのだろうが、残像を残して逃げ回る。

「このッ、死ねッ！　死んでしまえッ！」

「待て待て！　別に減るもんでもないだろうが！　いいじゃねぇか、別に！」

ハルユキはユキネの予想以上の剣幕に少し面食らって、。剣を避けながら説得しようとする。

がしっ

そんなハルユキの首根っこを後ろから伸びてきた手がしっかりと掴んだ。

「……辞世の句は？」
「話し合えるってのは、人間の美徳だと思わないか？」
「そういうことは、人間に言え」

言いながら首を掴んだレイの手にますます力が入っていく。
しかも、ハルユキの目の前には怒気を纏ったユキネもいる。

「……まあ、何だ。あれだ。一旦深呼吸しよ違うぞユキネなんで剣を振りかぶるんだやめろやめてお前は人の痛みが分かる人ｇ…ごふぉあッ！」
「天誅だ」
「天誅じゃな」

「仲がいいですねぇ、あ、冷たいお茶も美味しい…」

体は若くなったもののどこか年寄りじみた口調で未だ暴れまわっている3人を見てそうこぼした。

花見のときの椅子に座り、手にはフェンの魔法で冷やしたお茶を手に持っている。

「……ケンカ、してるけど」
「ああいうのはですね、ケンカするほど仲がいいって言うんですよ、フェンちゃん」
「……そう」

そう言って、フェンも杖を手にとって立ち上がった。

「あれ？　フェンちゃんも行くの？」
「私も、破廉恥なのは、いけないと、…思う。おしおき…」
「そう。行ってらっしゃいな」

そう言ってフェンを送り出すと、すぐに一層大きくなったハルユキの悲鳴が聞こえてきた。

「モテモテですねぇ。ハルユキさんは」

そう言って、イサンはコップのお茶を更に一口啜った。

なんとなく、こんな日常で意味を感じるようになった。

一度死ぬような体験をしたからか、肉親を一人なくしたからか。

それは分からないが。

「…ああ、いい天気」

今は、今日の事だけ考えていこうとイサンは思った。

◆
◆
◆

「こりゃ、便利だなあ」

竜に荷物を、一番近くの道まで移動させた馬車に運ばせながら、ハルユキはそう言いながら竜の頭を撫でた。

くすぐったそうな声を鳴らして、ハルユキを咥え上げて自分の背中に乗せた。

首に掛けた荷物がずり落ちそうになるのをハルユキが咄嗟に押さえる。

「でも、この子を、連れて行くのは……無理、だと思う」

楽しそうに歩く竜を撫でながらフェンがそう言った。

「まあ確かに、怖がられてどこの村にも入れなくなるだろうな。……っと」

「わっ……」

余程ご機嫌なのか、フェンも咥え上げ自分の背中に、つまりハルユキの前に乗せた。

いきなりの事で落ちそうになるフェンを、ハルユキは両手で抱き留めた。

「……ッ」

ハルユキと密着してしまい、思わずフェンは固まった。

短い青い髪から覗く小さな耳は真っ赤に染まっている。

「大丈夫だって、ちゃんと支えてるから」

それを驚いて慌てたせいだと思ったのか、ハルユキはより強めにフェンの身体を抱きしめた。

「……まだ、危ない、かも、…しれない」
「んぁ？　ああ、これで良いか？」

更にハルユキは強くフェンの身体を抱きしめた。

「……んっ」
「痛いか？」
「ううん。これで、いい…」

そっとハルユキの手に自分の手を重ねてそう言った。

二人を背中に乗せて、竜はのしのしとご機嫌に森を歩いていった。

「ほら、これで最後だろ？」

森を出て、運んだ荷物を馬車に積み込んでいたユキネとジェミニに声をかける。

「おわッ！　ってそうやった、従竜やったな。この竜めちゃくちゃでかいから、思わずビビッてしまうわ。それでどうすんの、結局？　連れて行くわけにもいかへんやろ？」
「ああ、イサンとレイに預かってもらおうと思う。俺が言えばこの竜も従うだろうしな」
「少し寂しい気もするが、しょうがないか」

ユキネも馬車から顔を覗かせながら、そう言った。

「二人は？」
「ああ、なんか準備があるって言って……ああ、来た来た」

竜が通って出来た獣道から、イサンとレイが姿を現した。

「イサン。すまないが、こいつを預かってもらえないか？　まあ、迷惑はかけんと思うが…」
「え～！　良いんですか？　大歓迎ですよ！」

イサンに抱きつかれながら、竜は悲しそうな顔で此方を見つめてくる。

「ほら！　お菓子を上げます」
「ガウッ♪」

「おいコラ」

一瞬で買収された爬虫類は放っといて、最後の荷物を積み込んだ。

と、そこですれ違いざまに、レイが荷物を馬車に積み込んで言った。

「丁度いいではないか。いい護衛になるだろうしの」

「……お前、何してんの？」

「ん？　あれは儂の分の荷物じゃが何か変か？」

当たり前のように言うレイにハルユキは首を捻る。

「え？　お前来んの？　残んねぇのか？」

「言ったじゃろう。吸血鬼が此処にいてはいずれ狙われるだろうからの」

「……マジ？」

「お主が一緒に来いと言ったのじゃろうが」

確かにハルユキは花見の晩にそういうことを言っていたが、完全に忘れていたようで、ああ、と手を付いた。

「ま、別にいいけどな」

「よし」

そこで周りでこちらをぽかんと見つめている3人の方向を向いた。

「吸血鬼じゃが、まぁよろしくの。レイと呼び捨ててもらって構わん。ただし茶髪、貴様は駄目だ」

「何で！？」

「…生理的に？」

そう言って、レイはさっさと馬車に乗り込んだ。

続いて、ジェミニも御者台に乗り、ユキネも入り、フェンも竜をもう一度だけ撫でてから馬車に上がった。

最後にハルユキも乗り込み、なんとなく定番となった一番奥の板に背を預け、後ろを向いた格好で座る。

「全員乗ったな？　ほんじゃ行くでー」

鞭を打ち、それに応えるように馬達が嘶き走り出す。

どんどんとスピードが上がっていき、残ったイサンの姿が小さくなっていく。

「……なんも言わないのか？」

「別に今生の別れというわけでもないしの」

どこかボーっと桜を見ながらレイが言った。

ハルユキの向いている方からはまだイサンが見える。

「…ほら」

後方を指差し、レイに声をかける。

指の先ではイサンがぶんぶんと千切れそうなくらい細い腕を振り回していた。

口をパクパクとさせて何か言っているが、馬車の音がうるさくて流石に聞こえない。

「……言われんでも、帰ってくるわ」

しかし、レイにはなんと言っていたのか分かった様で苦笑すると、右手を軽く上げてそれに応えた。

それを確認してイサンも手を振るのをやめてじっと此方を見つめるようになった。

もうイサンの姿は米粒ほど。

ハルユキの目には、唇をかみ締めて、それでも笑っている顔が見えていた。

周りでは謡う様に風が吹き、踊る様に桜が舞う。

その光景は、何となく誰かを見送っているように見えた。

◆
◆
◆

――桜の森から遠く離れた周りに文明の気配などない秘境。

桜の花が舞い散り、次の瞬間にはその中心にロウと呼ばれる人の形をした男が現れた。

少し歩くと、洞窟があり迷わずその中に歩を進めていく。

緩やかな下り坂となっており、数分歩くとやがて開けた場所に出た。

「よう。久しぶりだな」

抑揚のない声でそう告げた。
その声は大きくはなくても洞窟内によく響いた。

「桜の、か。これはいよいよじゃのう」
「何だ爺さん。もう気付いてたのか」
「かッ、若造が。知らんと思うてか」

大きく地面から盛り上がった先が椅子のように切り出されていて、一人の老人が座っている。
その周りにも同じように6本の椅子があるが、その中で椅子としての役割を果しているのは一つもない。
スッと消えるようにそのうちの一つにロウが移動する。

「俺以外はまだ、か」
「いや、星のが目覚めておった、と言うよりずっと起きておったんじゃが、…逝ったよ」
「死んだのか?!　あの鬼ババァが!?　……殺されたのか?」

はぁ、と首を振りながら老人は溜め息をついた。

「人間との約束を果たす為に、命を投げ出しおった。馬鹿な奴め…」
「…何だ」

やけに納得したようにロウが背凭れに凭れ掛かった。
その顔はどうにも驚きと、納得が入り混じっているように見える。

「あの頑固ババァがね。…ま、そんな理由じゃない限りアレは死なないか」

じゃあ、あと3柱か、と呟いてずり下がるように椅子に更に凭れ掛かった。

「ロウ。あの寝坊助共を全員起こして来い」
「嫌に決まってんだろ。面倒くせぇ。それにな…」

一拍間をおいてロウが続ける。

「起きなきゃならない時には起きて来るさ。まぁ何はともあれ、先ずは様子見だろ」
「……お主がそう言うのならば、それでもいいかの」

思ったよりもロウは信頼があるのか、老人もそれ以上何か言おうと

はしなかった。

「それにな」

小さい声で続ける。

老人に届いているかどうかは定かではない。

「多分、必要もないと思うぜ？」

ロウの脳裏に浮かんだのは、ついこの間出会った幾人かの人間の姿だった。

◆

◆

◆

最後に単独行動から戻ってきた子供が円卓の一席に腰を下ろした。

全部で１３席ある円卓のうち半分以上が埋まってはいるが、まだちらほら空席がある。

「レよ。直ちに報告してもらうつもりだが、問題はないかな？　何しろ随分とお楽しみの所でお預けを喰らったのでな」

その席に人が来る予定はないのか、一際大きい椅子に座り、肘掛に頬杖を付いていた男が口を開いた。

その声はパイプオルガンのような重く響く声で、小さいながらも円卓中に響いた。

「うん。先ずは、新しい霊龍を確認した。魔力は先の星屑龍と大差無い程の」
「へぇ…。まだ俺は会ったことねェな」

円卓の一席から声が上がり、一人の若い男が勢いよく立ち上がった。あまりの勢いに、椅子が倒れて床を転がった。

「俺が…」
「今は、私が話しているぞ？　タウロス」

叫ぼうとしたタウロスと呼ばれた男は先程の重低音の声で出鼻を挫かれ、椅子に座りなおした。

「貴殿には、ジェミニの対応に当ってもらおう」

「……ジェミニ？　何であいつを？　と言うか生きてたのか？」
「ああ、タウロスは、と言うより皆知らないんだったね。此処で言っているジェミニって言うのは初代のジェミニ。今知っているのは、同じく初代のオフィウクスとアクエリアス。それと次に古株の僕ぐらいか。サジタリウスも死んじゃったみたいだし」
「初代ジェミニ？　強いのかァ、そいつは？」
「うん、今の君とどっちが強いだろうね。ひょっとすると…」

小馬鹿にしたような口調の後、少年は微笑んだ。
ピクッと男のこめかみが揺れる。

「そりゃァ、楽しみだ。心躍るねェ…！」

男は椅子を今度こそ蹴り飛ばし、入り口に向かう。

「私も行くわ。あの単細胞だけじゃ余計な仕事増やすだけでしょ」

小さく溜め息をつき、円卓の椅子に座っていた一人が立ち上がった。
話し方とその凹凸がはっきりした体つきから間違いなく女性だということが図り取れる。

「ああ、助かるよヴァーゴ。それとタウロスにも言っといて。一緒

にいる僕の人形には手を出すなって。触りでもしたら八つ裂きねー」

スッと、少年の笑みが不気味なものに変化し、その仮面のような表情から漏れてくる殺気が円卓を包んでいく。

「……分かったから、そんな気味の悪い殺気をこっちに向けないで」

「ああ、悪いね。それじゃ後で一緒にいた全員の特徴を教えるよ。君はタウロスが暴走しないように見張っておいて」

それに頷いて、ヴァーゴと呼ばれた女も部屋を出て行った。

「――セシの次と言う事は、次はオウズガルか？」

「ああ、彼らの次の行き先？　まあ、可能性は高いかもね。その他の町村はあまり発展もしてないから」

「――丁度良い」

「丁度良いねぇ。そっちに先回りするように伝える？」

「いや、巡り会わせに任せよう。私は親愛なる部下を信頼しているよ」

「じゃ、もしオウズガルに行く事になれば連絡でも入れようか」

「頼むよ、盟友殿」

それにしても、と今にも席を立とうとする面々をみて仮面が苦笑する。

「相変わらず、うちは統率と言うものがまったく取れてないね」

溜め息混じりにレオと呼ばれる子供がそう言った。

「構わんさ。我々はそれぞれ死ぬまで、勝つまで、此の身が果てるまでそれぞれの敵と戦い抜けばそれでいい。仮に誰が裏で何を企んでいようが存じる所ではないよ」

男の言葉に、レオが表情の仮面の下で僅かに動揺する。

そんなものは気にも留めず、男も立ち上がって、円卓を見下ろした。その身体は仰々しい軍服に包まれ、長い金髪が腰の辺りまで伸びていて、その異様なほどに整った顔から覗く二つの眼光は、血に濡れたかのように光っている。

「だが結局。理由も経緯も違えど、目的も末路も同じ所だ。壊したければ壊せ。奪いたければ奪え。我々は正義に囚われている訳でもなく、悪に縋っているわけでもない」

誰もが聞き入ってしまうような響くような声が続く。

「我々は正義の敵となり、悪の仇となり、世界を、神を。…喰らってやろう」

その言葉で会合の幕引きだとでも言うように、男の姿が薄れていく。

消失しかけているにもにも拘(かかわ)らず、未だはっきりと存在を示す恍惚とした男の瞳には、何が映っているのか、誰にも分からない。

チーム

――気配を殺して、周りを伺う。

俺の手元には最後の切り札。これが成功すれば奴等の息の根を止められる。

そっと敵方の様子を伺う。

散々俺を嵌め、苦しめてきた3人は仲良く談笑中。

此処しかない。

大丈夫だ。完全に俺の行動に気付いてはいない。

このまま、静かに目標を達成するだけだ。

雪辱を晴らせ。

行け。

行け…！

――行け！

「へぇ～、あ、次俺か。はいじゃあ、３」
「「ダウト」」…ダウト」
「……はっはっは」

俺の静かな戦いは無残に散った。

「…３」
「４だな」
「そして、５、じゃな」

俺が溜りに溜まったカードを集めようとしている時に俺の他のフェン、レイ、ユキネが立て続けに上がった。

しかも、どれも見せ付けるように表にしてある。

「…やってられっかあああ！！」

手元に山のように積まれたトランプを怒りに任せて思いっきり引っくり返した。

ナノマシンコレクション（さっき命名）の中にトランプがある事に気付いてから、トランプが何かも分からない３人に簡単にルールを教えながら勝負を吹っかけて、これで２７戦目。

そして、２７敗目。

ババ抜きに始まり、神経衰弱、ポーカー、お金、七並べ、ブラックジャックそしてダウト。

３戦目ぐらいまでは負けていても笑っていられた。

しかし、流石にその倍も負けが込むと俺も焦りを感じ、流れを変えようと賭けを持ち出したのが、１２戦目。

昼飯を取られ、晩飯を取られ、夜寝る時の毛布も取られ、見張りも俺が担当になり、ｅｔｃｅｔｃ．．．

「これで、今日の夕飯の準備はハルだな」

そしてこれで今度は夕食を作る当番まで請け負うことになった。

自分で夕食作ってそれを一切口にせず傍でただ見守るだけ、という貧民層のお母さんみたいな図が完成してしまうだろう。

「というか、次の町はまだなのか？　もう国境越えて、１週間も経っとるぞ？」

もう二度とこいつ等とトランプなんぞやらない、と心に決めて入念にトランプを消していると、レイが疲れたように言った。

「うーん、近いほうの村はギルド施設がないって聞いて、少し遠くてもでかい町のほうがええて決まったんやから、しゃーないわ」

俺達は、結構イサンから食料を分けてもらったこともあって、ダイノジから教えてもらった町に行かずに、とにかくデカイ町に行くことにしたのだ。

そんなこんなで、ここ何日か変わり映えしない草原の道を、カラカラと暢気に音を立てる馬車で進んでいるというわけだ。

「明日、か。…はぁ、面倒くせぇなぁ」

丁度昨日までの食事で持っていた食料は底を付き、今日の食事からは食材から調達しなければならない。

まだ、準備をする気に離れなかったので、何か暇を潰せるものは無いかと周りを見てみると、雑貨の中に何か丸められた紙が目に入った。

「すまんフェン、それ取ってくれ」

「……はい」

そのすぐ横にいたフェンに声をかけると、それを確認して手に取り、

此方まで持ってきた。

「ほい、サンキュ」

それを受け取ると、巻き付いていた紐を取り、床に広げた。

「ああ地図か」

ある程度まとまった茶色と大きく青が広がっている。間違いなく地図で言う所の海と大地だろう。

「今、どこら辺なんだ？」

俺がそう言うと、フェンも地図を覗き込んできた。

しかし、フェンもそういうことはよく分からないらしく、地図を覗き込んだまま微動だにしない。

「…わからない」

十数秒後、やっとそう声を出した。

フェンは大人しいわりに割と負けず嫌いな所がある。
よく見なければ分からないが、今も少しだけ悔しそうに脹れてしまっている。

「レイ、お前分かるだろ？」

ジェミニは運転中なので見るわけには行かないだろうから、旅を経験したこともあるだろうレイに声をかけた。

「ん？　ああ地図か。懐かしいのう。どれ、えー…ここが国境じゃから、この辺じゃの」

レイはそう言って、何もない内陸の茶色部分を指差した。

「へぇ、私たちも結構来たんだな。…えーと、ここがセシ村だろう？」

ユキネも暇だったのか、地図を覗き込みながらそう言った。
指した所には何か文字が書いてあるが、俺にはただの線がのたくっている様にしか見えない。

「これは、なんて書いてあるんだ？」

俺たちがいるらしい場所の近くに大きく記してある文字を指差して質問した。

「それは、オウズガルと書いてあって、この国の名前じゃな。そして、儂等が向かっているのがここ、王都のアリベス。世界有数の大国じゃ」

レイが得意そうに、というか、なんか腹立つ顔で俺を見下しながら続けた。

「この程度も読めんとは、育ちが知れるのう」

「は、さすがだよ、伊達に歳だけ食ってな「せりゃ」」

ガスッと俺の頭頂部に踵が落ちた。

「……お前はもっと忍耐を覚えろ！」

「女子に年齢のことをとやかく言う方が悪い」

飄々とした態度で言ってのけた。

ニヤニヤ笑っているし、どう考えてもこいつが楽しんでいるだけにしか見えない。

「とりあえず人が住める大陸はここ一つ。あと海を越えると”最氷死地”が広がっとる」
「さいひょうしち？　何だそれ？」
「極寒の土地じゃ。地面も空気も全て凍りついておる。とても人が入れる所ではないからだからこんな所は気にせずとも良い」
「ふーん……」

位置的に南極と北極。というより名前が変わっただけで意味合いも北極と南極で違いないだろう。

こうしてみるとそこだけ地図は一際曖昧で、不明解の色を濃く表している。どうやら地球の公転軌道は狂っていないらしい。一億年も経てば気候も環境もまるで変わるという学説も聞いたことはあるが、その仮説もどうやら杞憂に終わってしまったらしい。

「そもそもお主等はいつから旅をしてる？　まだ馬車は新しいようだが」
「ん？　まだ三ヶ月ぐらいじゃないか？」
「三ヶ月と言うと、……分からんな。どの地から旅を始めたんじゃ？」
「ああ、お前以外は全員同じ国からだ。ユキネの故郷だよ」

ユキネの事情を詳しく話そうかとも思ったが、わざわざ深刻な空気を持ち込む理由もないし、何より面倒なので場当たりな返事を返した。

「ほうユキネの故郷か。どの国だ。国名は？」

ジッと地図を見つめていたユキネがハッとした様に顔を上げた。ユキネを見つめている視線が三つあることに気付くと慌てて口を開く。

「あ、ああ、えっと国名は……」

「…ん？　アレ何や？」

しかしその言葉に割り込むように、関西弁を無理矢理真似たような口調の声が馬車の乗員の意識を引いた。

ジェミニの声に、首だけ後ろを向いて何事か確かめる。

「…何じゃありゃ」

「……岩？」

夕暮れに染まった草原の道に、何かがそそり立つ様に存在していた。まだ遠目からだが、かなり大きいもののようだ。

不意に、その小山のような何かが”動いた”。

ズリズリとこちらに”顔”を向ける。

「あれは、……猪？」

大きさは大体１５メートルぐらいだろうか。

大きさだけで言えば、これまで出会ったドラゴンとも引けを取らない。

額に生えた大きい角も印象的で、その角だけで３メートルはあるんじゃないだろうか。

まあ、簡単に説明しなおすと、とっても大きい猪がこちらを見ていた。

「あれは、まずいんちゃうか…？」

やがて猪の動きに注意するかのように、馬車はゆっくりと停止した。

猪は基本に忠実に後ろ足で地面を擦り始めた。この後とるであろう行動は目に見えるより明らかだ。

次の瞬間には、予想通りその巨体に似合わない速度で、巨大な弾丸となりこちらに突っ込んできた。

「おい、おいおいおい！　洒落になっとらんだろ、これは！」

レイが珍しく慌てた声を上げる。

それを意識の端で捕らえながら、俺は外に飛び出た。

飛び出た瞬間、もう猪は目の前。衝突し、轟音が響いた。

「まぁ、もう驚かへんけどな…」

ジェミニが呆れたように呟く声が聞こえた。

俺に渾身の突進を受け止められた猪はまだ足を動かして前に進もうとしている。

それを見て、ニッと唇の端を吊り上げた。

「活きのいい食材だ。夕飯は期待しててていいぞー」

そう言いながら、猪を持ち上げ地面に叩き付けた。

「ご愁傷じゃな…」

「なんか、可哀相なやつだったな」

気絶した猪を見て、ユキネ達が溜息交じりにそう言っていた。

◆
◆
◆

「ご馳走様でした」

しっかりと手を合わせて、ハルユキは感謝の言葉を述べた。

目の前には、机中に広がった皿。

全てナノマシンで作った物だったので、皿はさっさと消した。

流石にこの量を食べきるのは無理だということで、罰ゲームを免除してもらったハルユキもこうして食卓に座っていた。

「お主、よく食うよく食うとは思っておったが、いくらなんでも食いすぎじゃろ…。今食った分は何処に行ったのじゃ…？」

ポンポンと満足そうに腹を叩くハルユキに呆れながらレイが言葉を漏らした。

「…ん？　腹ん中だろ？」
「…お前に聞いた儂がアホだったよ…。それで？　何じゃ話というのは」

溜め息混じりに机に頬杖を付いてレイが夕飯前にハルユキが仄めかしておいた事について聞いてきた。

「ああ、そういえばそんな事言ってたな。何かまずいことでも起きたのか？」

まずいかと聞かれれば、確かにまずい。

間違いなく死活問題だった。

「えー、全面的に管理してもらっているフェンから今日話があって、だな」

ハルユキが珍しく口篭りながら、周りを見渡した。

「俺たちは、それはもう劇的に金がない」

ピシッと場の空気にひびが入った。

お金の問題とは、この時代でも実に繊細で切実な問題だ。固まってしまっしまうのも無理はない。

「待って待って。ドンバの村で結構貯めへんかったっけ？　って言うかどれくらい無いん？」

「それは、あくまで、次の町までの資金。……セシ村で収入が無かった分、厳しい」

フェンが淡々と事実を告げる。

「そこで、レイは知らないだろうが、ギルドでチームっていうのが作れるのは覚えてるか？」

これも、フェンが言っていたことだが、チームを作り、チーム専用の依頼を受ければ普通よりも多目の報酬をもらえるらしい。ギルドの人間が言うにはその利益で国を作れるまで成功した人間もいるらしい。

そこで、それに肖(あやか)ろうとハルユキ達もチームを作ろうということになったのだ。

「ふむ。……良いんではないか？　損もないようじゃし」

レイに続き、他の面子も首を縦に振って肯定した。
それを確認すると、ハルユキが続けて口を開いた。

「必要なのは、まず多少の金と3人以上の人数だが、これは問題ない。金は依頼を受けた後で良いらしいし、ここには既に5人いる」

うんうんと先程と同じように首肯する3人に今日のメインとなる話を発表した。

「そして、最後に必要なのが、”名前”だ」
「……名前、か。それを今から決めるんだな」

珍しく一度で俺の言いたいことが伝わったらしく、全員が頭をひねり出した。

「そういうことだ。はい誰か意見ある人ー」
「はい！　『ジェミニと女だらけのちょっぴりスケベでちょっぴり切ない女だらけのポロリもある女だらけのどこまでも女だらけチー…どはァ！！」

最後まで言い切る前に、氷塊が飛んだ。

「……はいおやすみ、しっかり疲れとれよー。次ー」
「……『極血組』でどうじゃろうか？」
「恥ずかしい感性をお持ちですね。はい次」

割と真面目に考えていたらしく、顔を真っ赤にしながら飛ばしてきた血の剣を首を傾げてかわす。

それから、数十分。

幾つか意見は出たものの、どれもふざけたような名前ばかりでこれといったものは出なかった。

「あー、んじゃもういいや。明日までにこれだってやつを考えといてくれ」
「見ておれよ！　聞いただけで恐れ戦く様な名前考えてやるわ！！」

大分ずれた捨て台詞を残してレイが真っ先に馬車の中に入った。

「あ、いけね。おーい、今日は夜も進むからなぁ。って行っちまったよ」
「夜に進むのは暗いし、危ないんちゃう？」

唯一残っていたジェミニが不思議そうな顔で言ってきた。

「町に着いたの遅いと仕事できないかもしれないしな。まぁ夜は俺が御者やるから大丈夫だ。お前も疲れてるだろうしな。…ああでも、馬の御し方に慣れるまでは教えてくれな」
「それは、かめへんけど…」

御者台に乗り込む前に2頭の馬の所に足を向けた。

「すまんが、今日はもうちょっとだけ頑張ってくれ」

眠っていた二頭の馬の鬣を撫でて静かに起こす。
すると瞑っていた目を開き、鼻を鳴らして蹄を鳴らす。
任せてくれ、と意気込むように力強く嘶(いなな)いた。

貧乏暇無し

ガタゴト、ガタゴトと漫画のような音を立てながら馬車は進む。

目の前は程好い光で照らされている。ナノマシンでライトを作りそれを少し改造した物を取り付けただけだが、見たところ質、量共に問題はない。

馬達も俺たち5人の他に、でかい荷物があるのに力強く進んでくれている。

思ったよりも御し方は簡単で、早々にジェミニには休んでもらった。

そんなところは見せないが、あいつが一番疲れているはずだ。

横に風で飛ばないように、重石を載せた地図に目をやる。

大陸があって、海がある。

そこは、俺がいた時代と変わりは無い。

ただ、余程大きい地殻変動でも起きたのか、それとも一億年経てば自然とそうなるのか。

もう俺がいた時代の面影は消え去っていた。

俺たちがいるという一際大きい大陸。レイが言ったように他に大陸らしき物は無く、後は小さい島や、中位の島々が点在しているだけだ。

何かが込み上げる様に俺の中を上っていき、溜め息として口から出た。

一目見た時から気づいてはいた。

しかし、別に取り乱すことでもないし、想定はしていたことだ。

ただ独りになると、少しだけ胸に風が吹きぬけたように寒々しい気持ちになっていた。

悲しいのだろうか、辛いのだろうか、だとしたら涙ぐらい出るんじゃないんだろうか。

しかし、ライトで照らされた道を見つめる目は乾ききっている。

それとは全身が重くなったように感じる。気が付けば疲れたように猫背になっていた。

もうこれ以上、どうしようもない終わった事など考えたくもなかった。

逃げるように、少しだけ目線を上げ星空に目を移す。

「……はっ」

思わず苦笑が漏れた。

何時もは清清しい気持ちで見ている星だが、今はタイミングが悪かった。

なにも、変わったのは地上だけではない。

一億年という月日は、星空まで崩してしまっていた。

もちろんそれは崩れても尚、変わらず美しいものだったが。

まず、一番有名な北斗七星が崩れてしまってどれがどの星で今何処にあるのかも分からない。

しし座も、おとめ座も、みずがめ座も、ふたご座も。

一つとして見つけられない。

大地も空も、俺が知っているものとは別物。

本当にここは俺が生きていた星なのだろうか、とさえ思えてくる。

（あれ、そういえばジェミニって…）

ちょっとした事に気付いたが偶然だろうと勝手をつけ、もう一度だ

け重い息を吐いて思考を消した。

それから、無言で道なりを進んでどれくらいか、後でごそごそ気配がしたのに気付いた。

「お主まだ寝ておらんのか…？」
「あと二時間位すれば停める気だよ」

そう言って、姿を現したのはレイ。

壁を乗り越えて御者台まで乗り込んできた。

しばしの無言の後、ゆっくりとレイが口を開いた。

「のう、……『鬼獄会』はどうじゃろうか？」
「お前はチームをどんな方向に持っていく気だ！？」

ぬぅ、悔しそうに声を零して膝に肘を付いて前を向いてしまった。

「ああ、そう言えばアレはどうしたのじゃ？」
「ん？　アレなら大きすぎるから後にも一つ台車作ってそれに乗っけてるよ。何に使うんだよ、あんな物」

ふーん、と俺の質問には答えずに、自分で言ったくせに興味なさげ

な声を出してまた黙った。

それからしばらく無言の時間が続き、レイが思い出したように口を開いた。

「そういえば、この、何じゃ？　松明（たいまつ）か？　なんにしてもすごいのぅ。どうなっとるんじゃこれは…」

興味深そうに光に目を入れないようにしながら、しげしげと眺めている。

それを少しだけ微笑ましく思いながら、俺も口を開いた。

「吸血鬼はやっぱり夜の方が活発になるのか？」

「ん？　どうじゃろうな。儂はそうだが儂以外に吸血鬼なんぞ見たことないしの。吸血鬼がそうなのか、儂がそうなのかは分からん」

少しだけ沈黙が落ちて、レイがまた口を開いた。

今度のそれは先程までとは違い、真剣みを帯びていた。

「……儂を、吸血鬼なんぞを連れておったら不幸になる、とは言わんが面倒事が起こることもあるじゃろう」

「お前が勝手に乗り込んできたんだろうが」

俺が呆れながらそう言うと、キョトンとした顔でこちらを見た後クックッと口の中で笑い出した。

「そうじゃったなぁ。儂が勝手について来たんじゃった。……忘れておったわ」

「…訳わかんねぇぞ、お前」

俺がそう言っても、まだレイは話を続ける。

「しかし、断ることも出来たじゃろ？　自分で言うのもなんじゃが儂は百害あって一利なし、じゃぞ？」

嫌に悲観的（ヒロイック）な事を言うレイにそろそろイライラきていた俺は一際強い口調で言った。

「おい、ちょっとこっち向け」

「んあ？　ってあたッ」

間抜けな声でこちらを向いたレイに事故らないように前を見たまま親指で軽くデコを弾いた。

俺のデコピンをいきなり喰らったレイは目を白黒させている。

「お前が俺に何を言わせたいかは知らんけどな、……大人はガキの面倒を見るのが当たり前なんだよ」

額を押さえたレイは怒るかと思っていたが、それを裏切ってまた笑った。

「今の儂をガキと呼べるのはお主位じゃのう、小僧」
「小僧じゃねぇって」

ガタンガタンと車輪の音が響く中でレイがまた口を開いた。

「……『極血組』はそんなに駄目かのう…？」
「お前それ本気で気に入ってんのかよ……」
「……そ、そんな訳無いじゃろ。冗談じゃ、冗談」
「はい、ダウト」

軽口ばかりだが、まあこいつとの関係というか距離感というか。

何となく言葉で表し難い類の物は、こんな感じの方がどこか心地よかった。

その証拠に、うじうじした気持ちはいつの間にか消えていた。

◆
◆
◆

日が昇る前に一旦3時間ほど休んでから、今度はジェミニが御者台に乗って出発した。

レイと話してからも眠たい目を擦りながら進んだおかげか、予定よりもかなり早く進んでいた。

「「「ダウト」」」…ダウト」
「おらあああああああ！！！」

また戻ってきたクソ愛しい大量のカードを、纏めて激情に任せ馬車の外に投げ捨てた。

投げ捨てたカードは地面に着く前に分解されて消えていく。

「また、ハルユキの、負け」
「試合放棄じゃな」
「異議なし」
「ほらもう町が見えたでー。準備しときー」

「……準備のための行動だったため、先程のは無効試合になりました」

思わぬチャンスを拾い、ブーイングを始めたトリオを無視して馬車の進行方向を向いた。

まだ町までは遠い。到着するのは３０分程後だろう。が、もうその巨大な町形（まちなり）は目の前に広がり始めていた。

「うおっ！　城あるぞ、城！　見ろユキネ！　っは～、でっけ…！」

山のように段々と盛り上がるような形の町の一番上に、ふてぶてしく巨大な城が鎮座している。

「おぉ、凄いな、私の家より大きい建物は初めて見た。って何だあれ？　噴水あるぞ、でっかいヤツ！」

「え？　あれ噴水？　おかしいだろ、何だあのサイズ？　成金趣味だなおい」

身を乗り出して子供のような声を上げる俺とユキネ、ウトウトしているフェン、相変わらずニコニコ笑っているジェミニ、腕組をして偉そうに町を見下そうとしているレイを乗せてどんどん馬車は進んで行った。

「これ、馬車何処に止めればいいんやろ？」

あまりに広大な町は入り口がどこかさえも分かりづらいのか、ジェミニが困ったように額を掻いた。

「あそこに、小屋、がある…」

「あれ、小屋か…？」

ずらっと平屋の長屋のように並んだ建物がある。

目を凝らせば確かに中に馬が確認できた。

「色々とまあ、スケールがでかい町だな」

段々と近付いていく度に町の様子が分かってきた。

どうやら、噴水を起点に町中に水を引いているらしく、街道もしっかり石で舗装されている。

人はかなり多い。

今いるこの馬小屋にも疎らだが人はいる。

しかし、町まで入ると人の密集は驚くほど少なくなった。

人自体の数は変わっていない。ただ道が恐ろしく広いのだ。縦にも横にも。

縦の道は貫くように町の中心を通り、城まで届いていて、横の道の広さも３０メートル程はある。

町の規模、水道の確保、道路の舗装。

それをとってみても、今まで見てきて町や村とは一線を帰す文明レベルの高さだ。

店や市場も見られ、活気も溢れている。

屋台だけではなく、当然武器屋なども人の出入りが絶える事は無さそうなほど忙しそうだ。

道行く人々も、普通の服を着た一般人や、鎧を着込んだやつ、盗賊のような格好をしたチンピラ、中には貴族のような格好をした奴らもいる。

見ているだけで退屈し無さそうな町だ。

ふと道端にポツンと置かれている町の看板に目が入る。

『眠らない街　アリベス』

わくわくする様な名前だ。心が浮き立つのを感じる、が。

「……じゃぁ、仕事行きますか…」

屋台や、果物屋、出店、工芸品、細工店など様々な店が乱立し、俺を誘惑するのを無視して、歩き出した。

貧乏暇無し。

貧乏暇無し（後書き）

感想お待ちしてます

ギルド、再会、煙草（前書き）

話が進みません…。

ギルド、再会、煙草

歩くこと数十分。

やがて、見覚えがある看板の前に到着した。

誰に聞いたわけでもないが、道は間違えようもなかった。

「…だから、でけぇよ。いちいち」

ギルドは町の外からでも分かるほどの巨体で、町のど真ん中に居座っている。

それも大街道を真っ直ぐ進んだ先に。

このギルドがこの町でどういうポジションにあるのかもわかると言う物だ。

入り口もそれ相応に馬鹿でかい。

恐らく一日開けっ放しなのだろう。

優に3メートルを超えるそれはとても一人で開け閉めできるものではない。

「フェン、チームってどこで申請すればいいんだ?」

中に入れば、雰囲気はドンバ村のギルドとなんら変わりはなかった。
そこら中で色んな格好のやつらが駄弁ったり、昼間から飲み潰れたり、依頼のボードを眺めたりしている。
慣れた雰囲気にハルユキが妙に和んでいると、後から誰かが裾を引っ張っていた。

「ハルユキ……、多分、あそこ」

フェンの小さい声では喧騒を潜り抜けられないのか、耳元で内緒話をするように受付を指してそう言ってきた。

「おお、あれか。……って待てコラ、どこに行く気だ。穀潰し共」

フラフラと何処かに歩いていこうとするスットコドッコイ共を呼び止めた。

「ちょっとやりたい事があるのでな。安心しろ損はさせん」
「ワイは遊びたい、女の子と」
「んじゃレイは行ってくれ。だが、正直すぎるお前はこっちだ」
「わいの、わいのアバンチュールがあぁ！」

そう言って、レイを追って逃げようとするジェミニの首根っこを引っ掴み、受付まで引っ張って行った。

「えーと、チームの組成をしたいんだけど…」
「あ、はい。では此方の紙に…って、え？」
「え？」
「あああああああああああッ！！」
「うおッ！？」

突然俺を指差して奇声を上げてきた女性に思わず俺も驚いて声が出てしまった。

「ハルユキさんじゃないですか！」

いきなり俺の手を握って激しくぶんぶんと手を振ってくる。

「私ですよ。わ、た、し」
「……おお、ドガリアシスじゃないかぁ」
「誰ですかその悪の黒幕みたいな人！？　私ですよ、ほらドンバ村でギルドの登録やったじゃないですか！」

……ああ、そういえばいたね、そんな人。

「あー、そう言えば名前言ってませんでしたねー、ウェスリアって言います」
「どうして、この町にいるんだ？」
「それはこっちの台詞ですよー、まあ私はね、あれですよ、いわゆる出世です。あの祭りの前から決まってて、祭りの終わった後にこっちに栄転したんです」
「へぇー、おめでとさん」

そういえばこの顔見覚えがあるな。
うん、確かあの色々失礼だった人だ。

「ちなみに、あの魔力測定器代は私の給料からしょっ引かれました」
「ごめんなさい」
「いえいえ、冗談ですよ。いやでもこんな所で会えるとは思わなかったです。実は私ファンなんですよー」

……ファン？

「光栄やなー、こんな美人さんに思われてるなんてー。あ、自分は多少歳食っる方でも大丈夫ですよ」
まともに顔面にグーが入って錐揉みしながらジェミニが視界の外に消えていった。
「……」
「……私はまだ２３ですよ？」
「あー…お若いですねー」

目の前で青筋浮かべている女性を考えれば、そう言うしかない。

「大抵こういう仕事の人はファンになったりするんですよ？　でもねー、こっちの人に言っても信じてくれないんですよ！　古龍を一人で倒せる訳ないって！
まぁ、私もたまたまダイノジさんに聞いただけで、村の中でも広まってなかった話ですからしょうがないんですけど…」
「いや、まあ、うん、それでチームなんだけどな？」

俺が困ったようにそう言うといきなりウェスリアの目付きが変わった。
凛とした空気が生まれ、背筋を伸ばして営業スマイルを顔に浮かべる。

「はい。チームでしたね。長々と失礼致しました。それで後ろの方々と合わせて5名での結成でお間違いはありませんでしょうか？」
「え、ああ、うん」
「畏まりました。それでは必要な書類を用意させていただきますので、しばらくそちらに座ってお待ちください」

そう言って、受付の奥に消えていった。
半分くだけた様な話し方からいきなり仕事モードに入ったから少々驚かされてしまった。
いきなり仕事が出来る女に早変わりだ。

伊達に栄転されてきたわけではないということか。
受付のすぐ横にひっそりと隠れるように用意されていた、切り株をかたどった椅子に腰掛ける。

「あー、腹減った…」
「なあ、あれ何だ？」

椅子で一息ついていると、ユキネが入り口を指して話しかけてきた。
ユキネが指差した方向に目をやると、人だかりが出来ている。
そしてその中ですぐに動きがあった。
大きな男達に引き上げられ、何かでかい看板が持ち上がった。
当然、何が書いてあるかなんか俺には分からない。

「観……迎…、ノイン様？」

ユキネが目を細めながらその文字を読み上げるがそれでも何のことだか分からない。

「なぁ、あんた。あれ何なんだ？」

丁度通りかかったひょろい男を呼び止め声をかけた。

「ん？　ああ、あんた最近町にきたのか。いいタイミングだぜ？

珍しいもんが見られる」
「いいもの？」

ゴトン、と入り口の辺りに重々しい音が響いた。
再びそちらに目をやると、何か大きいものが入り口の辺りに設置されたみたいだが、逆光でよくは見えない。

「おっ、あっちも何とか間に合ったみたいだな」
「何だあれ？」
「ありゃあな、この辺りに生息してるモノガスって奴の角だ。でけぇだろ。ここのトップチームが狩って来たんだ。あの角の大きさから見て前全長８ｍはあっただろうな」

何故か自慢げに男が話し続ける。
しかし、何故か嫌な予感がするのは何でだろうか。

「あそこに言わせたら楽勝なんだろうが普通サイズのあれ狩るのにも骨が折れる。Ｂクラス以上のチームじゃなきゃ狩れもしないだろうな。運ぶのにも苦労したぜ」
「……その狩ったチームってのは何クラスなんだ？」
「Ａだよ。近々Ｓクラスに上がるんじゃないかって噂されてる。実際に見るとなオーラが違うぜ、オーラが」
「俺はどうだ？　オーラ出てるか？」

男はチラッと俺の顔を見て、それから指に嵌めたオレンジ色の指輪

に目を落として溜め息をついた。

「お前、オレンジはギルド側から諦めろって言われてるのと同じことだぞ？　この仕事から足洗ったほうがいいと思うぜ？　嫌味じゃなく」

男の表情からも、実際嫌味ではないことはわかった。
ここは兎にも角にも実力が全てなのだろう。
きっと、足を洗った奴もいたことだろう。

「ま、俺は俺で何とかやるさ」
「……止めやしないけどな」

そう言いつつ男は胸ポケットから巻きタバコを一本取り出した。
パチッと指を鳴らして指先に火を点らせる。
指先には細かい傷がついていて、年季を感じさせられた。

「お、煙草か。一本くれよ」
「ほらよ」

煙草を一本貰い、ついでに火も着けて貰った。

「……うっは！　きっついなこれ」

「俺の愛用品よ」

自慢げに言いながら軽く咳き込んでいる俺を笑ってきた。

「久しぶりだな、煙草は…」
「ん？　お前まだそんなに歳食ってないだろ？　何年ぶりなんだ？」
「一億年ぶり、だな」
「何だそりゃ？　つまんねぇぞ」

何となく気があってその後も少し話していると、入り口の方に好奇心に負けて近付きつつあったユキネがこちらを向き、何かを見つけてズカズカとこちらまで歩いてきた。

「ハル！」
「うおッ！　な、なんだよ…？」

俺が驚きながらもそう返答すると、ビシッと俺を指差して声高らかに語り始めた。

「煙草はな、百害あって一利なしと言ってだな、体に悪いし、病気になるんだぞ。それで寿命が縮む人もいるんだ。だ、大体お前が私より早く死んでしまったら私は…」

俺を指差していた指を自分の目の前に立てて、語り続ける。
かなり真剣なのか、目の前で手を振っても気付かないので、面白くなり中途半端に開いた口に咥えていた煙草を差し込んでみた。

「……え？」

我に帰って俺を見て、自分の口に咥えている煙草を見て、もう一度俺を見て、それから、顔が爆発した。
一気に中程まで煙草が燃え尽きた。

「お前そんな一気に吸い込んだら……」

真っ赤になった顔のまま体が傾ぐ。

「おいおい…！」

片手でユキネを、もう一つの腕で絨毯に落ちそうだった煙草を手に取る。
もう一度口に咥えて、どうも気絶したらしいユキネを椅子に横たわらせる。
そして今度は横から男に煙草をとられた。

「お前は駄目だ。心配してくれる奴がいるなら身体を大切にしな」

そう言いながら同時に親指で俺の後ろを指差した。
その指の先では、フェンがさっきのユキネと同じ目をして俺を見ていた。

「……わかったよ」

そう言いながらユキネが寝ている横に腰掛けた。
その俺の横にフェンがちょこんと座った。
少しこちらも怒っているようなので何となく話しかけづらい。
男もまだやることがあるらしく何処かに行ってしまい、ジェミニも目を離した隙に何処かに行ってしまったので、気まずい沈黙が続く。

「……ハルユキは」

珍しくフェンからその沈黙を破ってきた。

「デリカシー、が、足りないと…思う」
「す、すいません…？」

俺はそんなに怒られるようなことをしただろうか？
い、いや、きっとそうなんだろう。
無性に申し訳なくなってくる。

「ん……」

不意に後ろから呻く様な声が聞こえた。
見ればユキネが目を擦りながら身を起こしていた。

「お、起きたな。大丈夫か？」

内心少しホッとしながら、ユキネに何気なく話しかけた。

「あ、ああ、だいじょ…」

大丈夫、と言おうとしたのだろうが、俺の顔を見て赤面し俯いて黙ってしまった。

「そ、外、歩いてくる……！」

そう言って、俺の顔を見ないまま早足で入り口に向かって行った。
そんなに、……煙草が嫌いだったのだろうか。
ユキネが入り口の向こうに行ってしまったすぐ後に何かその付近が騒がしくなった。

「フェン、ちょっと見に行ってみないか？」

まあ、正直ちょっと不機嫌だったみたいだからご機嫌とりだというのが大きいが、少し興味もあったのでフェンにそう声をかけた。

フェンは少しだけ考えたようなそぶりを見せた後、立ち上がって俺の服の裾を引っ張って歩き出した。

ギルド、再会、煙草（後書き）

感想お待ちしてます

三本の角（前書き）

初心を忘れている気がします

三本の角

「来たぞ！　王女と”雷帝”だ！」

ある程度近付くと、一際大きくなった声、最早歓声だと言っていい程の音量がギルド中に響いた。

入り口から出ようとしたところで、人だかりが此方に移動してきたので、フェンを引き寄せ入り口の横の壁で人の波をやり過ごした。

「スゲェ人だな」

チラッと見えた大通りはあの大きな道が塞がってしまうかのように人で溢れていた。

「ハルユキ、誰か、来た」

フェンの声に入り口付近に向き直ると、人が円を描くように途切れていて、その中心に3人の人間の姿があった。

一人はいかにもキザったらしい格好と振る舞いで歩いているそこそこ引き締まった体の男。腰には仰々しい剣を携え、長い金色の髪を

靡かせている。

もう一人も腰に剣を差していることから剣士なのだろうが、華奢な体つきと雰囲気から女だと推測できた。薄いブロンドの髪を短く肩で切りそろえて凛とした空気を纏っていた。

そして、最後の一人は派手なドレスを身に纏い、どこかダルそうな足取りで引かれた絨毯の上を歩いている。

燃えるような赤い髪を腰まで伸ばしている。雰囲気から察するにあれが…。

「ノイン王女様、だ。まぁ今日の主役だァな」

後から先程聞いたばかりの声が聞こえてきた。

振り向いてみると、案の定先程の煙草の男がいた。

「後にいるのが近衛兵長のミスラ、でその横が我らが雷帝様のサルドってわけだ」

チームの話をするときは誇らしげだった口調が、雷帝とやらの話をするときは何故か皮肉っぽかった。

「すみませんね。ここはむさ苦しい者共ばかりが屯っていまして。皆私の様に清潔な者ばかりではないので少々匂うでしょう？」

男が鼻で笑いながらそう周りに聞こえるように言った。

そこら中で舌打ちや小さい罵声が聞こえるが、とても男に届くものではない。

王女の手前、と言うこともちろんあるだろうが、男はここでのトップらしいから誰も逆らえないのかもしれない。

王女はそれには何も応えずに角に近付いて行く。

やがて、その３人は俺達の５ｍ前方ほどの、でかでかとそそり立つ牙の前で立ち止まった。

「……じゃあ、これが今回の”憑物”ね。……本当に大きいわね。流石は我が町、いえ、わが国のトップチームって所かしら？」

「ええ。間違いなくこの辺りで一番大きい獲物でしょうね。まぁこれ以上大きい物がいてもそこらのボンクラでは近付けもできますまい。それで、騎士の件ですが…」

その歯に衣着せぬ物言いに、周りのギルドの登録者が殺気立つがそんな物はどこ吹く風と言った様子で、サルドは気にも留めない。

「……ああ、そう言えばそんな約束をしていたわね」
「はい……！」

男が一瞬で顔を輝かせ、感極まったようにその場に跪き、更に続けて口を開いた。

「この身が平民としてこの国に生を受けてから、騎士になるのをどれほど待ちわびたことか…」

何となくつまらなそうな顔の王女に、気障っぽい男、サルドが大げさに身振り手振りを加えて鬱陶しく話し出した。

王女の方は、適当な話し方からでもどこか凛とした空気が漂ってきて王族としての気品が伝わってくる。

腰には装飾が施された剣を帯びていて、より一層雰囲気を醸し出している。

自然とユキネの顔が浮かんで、王女にも色々いると苦笑してしまった。

ところで。

「〝憑物〟って何だ？」

先程の会話で出てきた中で不可解だった単語について後ろの男に尋ねた。

「あー、あれだ。あの牙は毎年ちょっとしたことに使うんだがな。それをチームに狩らせて一番立派な物を用意したチームに褒美を、って言う仕来りなんだ。

んで、その狩った奴にちょっとした役柄が必要になるんだが…。まぁ、サルドはずっと近衛の騎士になりたかったらしいから約束を取り付けてたらしいぜ。ま、どうせ成り上がりたいとかそんなとこだろうけどな」

確かに男の顔には忠誠というよりは、野心に塗れている様にしか見えない。

「また今年もこのような大役を請け負えたことを大変……」

「あー、もういいわ。ここでは貴方がトップなんだから頭なんか下げないで、それ聞くのも3年連続だし。でも、やっぱりまた代わり映えしない結果だったわね…」

ふぅ、と溜め息をついてそう言った。

どうやら、王女の憂鬱は退屈な結果にあったらしい。

3年連続で聞いた、と言うことはつまりこれと同じようなことが続

いていると言うことなのだろう。

退屈具合も知れるというもの。

しかし、状況は一変する。

「……何だ、あれ？」

落ち着き始めた喧騒の中、大して大きくもない声がざわめきを抜けて俺の耳に届いた。

それは外から聞こえたもののようで、外から違う空気が伝わってくる。

主役の３人もそれに気付いたらしく、合わせたかのようなタイミングで振り返った。

ギルドの中から見えるのは驚いた顔で横を見上げる町人の姿だけで、そこには畏怖は存在するものの、恐怖は存在せず警戒は必要ないことは教えてくれる。

やがて、あの３人が来たときのように人の海が割れていく。

その人がいなくなった空間に独りの黒い外套を身に纏った男が現れた。

重い足取りでゆっくりと歩いてくる。肩にはでかいロープを担いでいて、その先に何かがついているようだ。

「すげぇ…、あいつ”地災”だぜ…。Ｓクラスだ…！」

そういった類の話があちこちで上がりだす。

そんな物は気にも留めず、男が担いだ綱を引っ張った。

一瞬送れて、その綱の先についていたものが明らかになる。

飛んで来たその巨大な”角”をその男は受け止め、地面に叩きつけるように置いた。

角は先の男が手に入れたという物よりも一回りは大きく２ｍ程はある。

ズズン、と軽く地面が揺れる。

「な、なんだあれは…！」

サルドは目を見開い、驚愕に後退りする。

しかし逆にそれを見た王女の顔は明るく輝きだし、もう一人の女騎士は相変わらず不機嫌そうにそれを見つめていた。

「オウズガルの誕国祭を祝う為に馳せ参じた。……手土産だ。不足

がなければ受け取ってくれ」

男はフードを取りその顔を露にすると軽く頭を下げた。

その顔は、幾度もの戦いにその身を置いてきたのか傷だらけだが、まだ若さが残っている。眼光もそれ相応に鋭く、恐らく３０歳程だろうがその歳を感じさせない。

王女が少しだけ目を見開くと、ニッと口の端を吊り上げた。もうその顔に退屈は感じられない。

「戻ったのね、ガララド」

王女が大きな入り口をくぐってその男に近付き、その巨大な体躯を見上げながら言った。その目には少なからない親愛が込められている。

その様子に苦笑すると、男も口を開いた。

「ああ、久しぶりだなノイン。まだこんなむさ苦しい男を覚えていてくれたとは驚きだ」

旧知の仲なのか、その口調も先程の畏まったものではなく、友達と話すかのようにくだけていた。

その様子に、近衛騎士は少しだけ頬を緩め、傍の男は顔を驚愕に引き攣らせている。

ガララドと呼ばれた男と王女は、仲良く談笑を続けている。

「しかし、余計だったか？　もう”憑物”の先約があったみたいだが」

ガララドが入り口の中に見えているもう一つの巨大な牙を顎で示しながらそう問いを投げた。

ん？　と声を上げて、王女が顎で刺した方向に目をやって、興味なさそうに視線を戻した。

「いいのよ、あなたの角の方が一回り大きいし。それに私アレ嫌いなのよね」

最後にサルドの方を軽く顎で指して小さく零した声もガララドには聞こえていたらしく、ガララドは変わっていないなと軽く苦笑した。

俺はというと、何故か嫌な予感を…。

「貴様！　今私を笑っただろう！！」

ガララドが笑ったのを、自分が笑われたのだと勘違いしたのか、最初の気障男が大声で怒鳴った。

怒りに任せた足取りで入り口を飛び出て、男の目の前で立ち止まった。

「Sクラスだがなんだか知らんがなぁ……、この私を差し置いて出すぎた真似をするなよ…！」

それを聞いた男は何故か王女の方に向き直った。

「こいつは……誰だ？　知り合いか？」
「なッ……！？」

ガララドの惚けっぷりにか、男の空回りっぷりにか、周りで笑いが起こる。

周りは気付いていないが、男は歯軋りをして相当殺気立ち始めている。

「……王女、まさかこんな沸いて出たような男に”憑物”を任せるつもりですか？」
「口が過ぎるわよ、サルド。それは全て私に任されていること。貴方が口を出すことじゃないわ」

何か言おうとサルドが前に身を乗り出すものの流石に自重して悔しそうに口を噤んだ。

男は吐き出せなかった分を怒りと苛立ちに変えて、体の中に溜め込んでいく。握った拳が微かに震えているのがその証拠だ。

これからの展開如何では面倒が起こる可能性もありそうだ。

しかし、今は、この嫌な予感の方が深刻だった。

そして、引っ掛かっていたその理由が不意に分かった。

「フェン…！　逃げるぞ！」

小さい声で、それでも語調は強めにフェンに指示を出した。

俺の勘が先程から激しく警報を鳴らしている

「……逃げる？」

「戦略的撤退だ。どこかで見たことあると思ってたんだよ、あれ…！」

「……？」

「とにかく急ぐぞ。俺の予想だと…」

しかし時既に遅し。

「退(の)け」

険悪な雰囲気に気付き始めて、低落していた場の空気を打ち壊すように聞きなれた声が響いた。

その声に嫌々ながらも振り向いて姿を確認する。

そこでは、大きさ3mを超えようかと言うほどの巨大な牙を肩に担ぎ、”空から降ってきた”吸血鬼が真昼間に仁王立ちしいて。

状況がもう一度引っくり返った。

三本の角（後書き）

はっは、中二中二ｗ

街中の戦場

「な、何だよ、アレ…！」

いきなり現れた闖入者にさすがに対応できないのか、王女をはじめとして女騎士、男2人も呆気に取られてしまっていた。

そんな場の空気をいっぺんに攫って奪ったそいつは、その華奢な身体で抱えているとは思えない巨大な角を投げ捨てるように地面に下ろした。

ズズン――…！

と半径数十メートル位には響き渡るような重々しい音を立てて角は地面に無事着地する。

それを確認して満足げに一つ息をつくと、レイは適当に結い上げた髪を靡かせて無造作に王女の前まで歩いていった。

「お前が、王女か？」

目の前で仁王立ちしたまま、唇の端を吊り上げてそう言った。

その顔に不吉な何かでも感じ取ったのか、女騎士とガララドが立ち塞がった。

それを見たレイは後の角を指差し、笑ったまま言った。

周りはまだ呆気にとられていて、音を発しているのはレイの口のみだ。

「買え」

「……へ？」

意表を疲れたのか、王女が素っ頓狂な声を上げた。

「いやの、最初はその辺の行商でも連れて来て買わせようと思ったんじゃがのぅ。これは随分たいそうなものらしくて、さすがに手が出ないと申してな。そこで、今町に下りてきている王女ならば買えるだろうと聞いての。わざわざ運んで来なければならなかった訳じゃな。忌々しいことに」

長台詞に喋り疲れたとでも言うようにそこで一つ息をついた。

「……運んできたってこれ、を？　何処から？　というか何故降ってきたの？」

「馬車小屋からじゃよ。まだ戻ればさっき言った商人がいると思うが。あと、上から来たのは人だかりが出来とるから屋根からしか来れんかったんじゃ」

肩を回してコキコキ鳴らしながら、レイはそう答えた。

「…んで、何のつもりじゃ？」

その首にいつの間にか両刃の剣が添えられていた。

刃をたどればその先では、王女の近衛であるミスラの殺気が篭った眼がレイを捕らえていた。

「……貴様、先程から誰に向かって口を開いている。お前の様な何処の馬の骨とも分からん奴が王女にこれ以上近付くんじゃない」

静かな口調ながらも、その声には有無を言わせない気配があった。

それを見たレイは……、口の端を曲げ、不適に笑い下した。

「……」

それをどう受け取ったのか、ミスラはいつでも戦闘に入れるように殺気の密度を向上させる。

「引きなさいミスラ。貴女の”負け”。それに私なら構わないわ」

「負け？　王女、私は負けてなど…！」

ミスラは言葉の意味が分からず、多少声を荒げながら振り向いた。
振り向いた先には負けと言われた敗因、数本の剣群がミスラの眼前に浮いていた。

「あははっ、それにしても面白いわね…！　てっきり私はサルドが手に入れたものを使うと思っていたのだけれど、本当に次から次へと。ああ、本当に面白いわ…！」
「ならその分多目に代金を頂こうかの」
「あはははははっ！　もちろん、こんなに驚かされた分の御礼はしなくてはね。その前に名前を聞いていいかしら？」
「レイじゃ。そのまま呼んでくれて構わん」
「私はノイン、一応この国の王女なんかやってるわ。よろしく」

そう言って差し出された王女の手をレイが軽く握りなおした。

そして、一瞬の間の後。

漸く現実を飲み込んだ群集の歓声が巻き起こった。

険悪な雰囲気からの反動からか、それとも単にガララドや雷帝の角と比べても一回り以上大きい角を手に入れた畏怖の念からか、それとも単純に興奮からか。

そんな歓声に驚いているレイを尻目に、俺は群集に背を向ける。

「……見つかんなよ。絶っ対メンド臭い事になるから」

小声でフェンに言うと、フェンもコクッと頷いて付いて来る。

「……これは本当に、お前がモノガスから手に入れたものなのか？」

歓声の合間を縫って、雷帝ことサルドが怒りと驚きを出来るだけ隠しながら必死に見下したような声色でレイに話しかけてきた。

「いや、これは違う」

「そうなの？」

そこまでレイが言った所で、男が醜い笑みを顔に貼りつけた。

「はっ、そうだろうな。どうせたまたま死んでいた所から取ってきたのだろう？　それと、そこのガラフド、だったか？」

我が意を得たり、とでも言いたそうに男がせせら笑いながら黒衣の男に向き直った。

何の根拠もないくせに、そう高らかに話す声が俺の背中にも伝わってくる。

「そう。そうだ。私の”憑物”以上の獲物など早々現れるものではない。お前のその角も出自が怪しい物だ。その点私の”憑物”は証人もいる。ここはやはり…」

サルドの声にたちまち自信と大きさが戻って行き、周りの群衆も静まり始める。

しかし最後の言葉に繋ぐ前に、レイがそれを遮った。

「これは儂の連れがきっちり倒して剥ぎ取ったものじゃ。…全く、人の話は最後まで聞けと教わらなかったのか？　そこらの餓鬼にも出来ることも出来んとは高が知れるぞ？　坊や」

「なッ……！？」

男の言葉に割り込んで出たその言葉に、今度は周りで失笑が起こる。

所々ではいい気味だ、と手に持った物を男に向かって投げつけた者もいる。

「なら、その連れをここに連れてきてみろ……ッ！」

足元の辺りで、誰かが投げた物を横目に見て歯軋りしながら、男が憎々しげに声を絞り出した。

男もかなり殺気立っているのか、口調も刺刺しい物になっている。

「そうね。私も見てみたいわ。紹介してもらえるかしら？」

ノイン王女もその意見には賛成し、レイに訴えかけた。

「むぅ、まだその辺にいると思うのじゃが、おーい、小僧！」

「小僧？　名前は何ていうの？」

「ハルユキ、じゃったかな。たしか」

周りに伝わりだし、あちこちで”ハルユキ”を探す声が広がりだす声が聞こえてくるが、もう俺は群集を抜ける直前だ。

「そんな空気で出て行けるかよ…」

そして今まさに群集を抜けようとしたとき。

「あ、いました！　ハルユキさーん！　チームの書類の用意が出来ましたよー！」

横からかけられた声に硬直する。

すぐ隣にいた奴が、俺を見て、こいつだ、と横の奴に話しかける。
それがどんどんと伝わって行き、どんどん此方に視線が集まってくる。

「……あれ？」

周りが此方を見てざわめき出した事に状況を把握できていないウェスリアが困惑している。

発見したとの声が広がっていき、モーゼの十戒のように人の波が分かれていった。

「おお、いたいた。あいつじゃ」

レイが俺を指差して言った。

「……」

逃げ出そうかとも考えたが、もうこの場のほぼ全員が俺を注視している。

渋々ながら、ウェスリアに書類は後でと身振り手振りで伝え、王女の所まで向かうことにした。

視線を全身に感じながら巨大な門をくぐる。
周りからの好奇の目線に晒されるのは、どうにも気持ちのいい物ではない。

「っていうか、お前俺の名前うろ覚えかよ…」

通り過ぎざまにレイに苦情を零す。

「お主は、小僧で十分じゃ」

偉そうに腕を組んで、何度か聞いたような言葉で返された。

「あなたが、これを？」

横に鎮座している角を、王女らしからぬ顎で指す仕草で問いを投げてきた。

「……まあ、そうだな」

それを聞いて、王女が顎に手を当て考え出した。

その間、およそ十数秒。
その間は、誰も話さず王女を見守っていた。

「……ノイン王女」

しかし、王女の沈黙が我慢できなかったのか、サルドが怒りを押し殺して口を開いた。

「…何？」
「流石にこのまま、得体も知らない者に任せるのはどうかと思いますが、どうでしょうか？」
「……」
「もしもお許しを頂けるのならばこの男を、…いえ、この男の実力を私に確かめさせて頂きたい」

男がそう言って最後に此方を睨み付けた。

その目にはもう怒りというより、殺意と言っても言い過ぎではないほどの物が宿っていた。

けど正直、俺が恨まれるというのは流石に理不尽を感じざるを得ない。

しかし、この場で男の望みを実質的に邪魔しているのは俺、なのだ

ろう。

王女はまた少しだけ俯いて考えるそぶりを見せた後、すっと顔を上げて口を開いた。

「いいわ、やりなさい。でも……」

「待て待て。少しは俺の意見も……」

俺が抗議をしようと王女のほうを振り向いた。

そこで、背中に殺意が魔力となって突き刺さった。

「喰らえ…！」

自分の要求に対する是非しか聞いていなかったのだろう。

頂点に達した苛立ちと怒りを抑え切れなかったのか、それともそれがこの男の戦い方なのか、後ろでは俺が振り向く前から既に男が雷を纏わせた右手を振りかぶっていた。

王女が二の句を継ぐ前に、この街道は小さい戦場と化す。

「馬鹿かお前は……！」

流石に雷の速度には付いていけないが、人間が操るのならば避けれない事はない。

虚は付かれたものの、まだ身を捻るだけで避けれる。

「…ちッ！」

しかし、流石にここで始める気はなかったのか、同じように虚を付かれ固まってしまっている王女がいた。

避けかけた体を無理やり元の位置に引き戻す。

次の瞬間、手の形を象った雷が俺に直撃した。

◆

◆

◆

「そら見ろこんなものだ。大体この男オレンジのFクラスじゃないか。こんな男が”憑物”など愚かしいわ！」

プスプスと黒く焦げて煙を吐き出しているハルユキを見下しながら、男が叫んだ。

「ハルユキ！」

群集を押しのけて、フェンがハルユキに駆け寄る。

しかし、ハルユキはピクリともしない。

「……ミスラ、この男を城まで運んで急いで治療しなさい」

王女は冷静に横に控えている女騎士に命令した。

女騎士はそれに短く答えて頷くと、ハルユキを担いで馬車に向かう。

「王女！　そんな男より、この私に騎士の襲名を……！」

「黙りなさい」

男が勝ち誇ったように叫ぶ様を、一声で黙らせた。

「し、しかし…」

その目には国を背負う人間が持つ特有の何かが確かに宿っていて、男はおろか、周りの群集まで萎縮する。

「……貴方は、私が城に招待した者を攻撃した。つまりこの”私”の客に危害を加えたの。…でも、今回は私にも非があった。よって私から処分はしないわ」

既に半身を馬車の方に向けながら、続けた。

「しかし個人的な意見を言わせて貰えば、如何なる理由があろうと決闘の際背を向けたままの者を襲うなど。騎士？　笑わせないでもらえる？　この愚図が」

先程までの声とはまるで違う氷の様な冷たい声が響き渡った。

その声は大きくは無いものの、鋭く冷たく。周りの空気を凍らせる。

「…失礼。取り乱したわ。先程も言ったように処分はしませんが、しばらく活動は自粛しなさい」

それだけ言うと、ハルユキとフェン、レイ、更に女騎士とガララドまで乗った大きな馬車に乗り込んだ。

「出しなさい。急がないと危ないかもしれないわ」

王女の声に応え、２人の御者が４頭の馬を操り綺麗に舗装された街道を走りだした。

街中の戦場（後書き）

感想、意見、一言…ｅｔｃ．ｅｔｃ
展開の予想以外は何でも何時でもお待ちしてます。
ちなみにオレンジは指輪の色です

城へ

「おい、小僧。そろそろ起きろ」
「……え？」

発車して直ぐにレイがハルユキの腹を蹴り付けて乱暴に言った。その怪我人に対しあまりの対応に王女が間抜けな声を上げる。

「いってぇな！　あー…、服ボロボロじゃねぇか…」

そして黒焦げだったハルユキが何事もなかったように、起き上がって体中についた煤をはたき始めた。

「下手糞な死んだ振りなんぞしおって」
「……見たら、すぐ分かった、よ」
「いやいや、迫真だっただろ、お前ら以外は騙せてた自信が…」
「……ちょっと」

当たり前のように談笑し出した3人にやっと我に帰った王女がストップをかけた。その声に気付き、ハルユキ達3人はキョトンとして王女を見た。王女側の3人も別の理由でキョトン顔だ。

「……っく」

そしてその生まれた沈黙を破ったのは外套の男ガララドだった。

「だっはっはっはっはっ！！！　いや、久しぶりに面白いものを見た…！　いやさっきの男の自慢げな姿を思い出すと…、っくく…！」

堪えきれないというように、笑い出した。

拳を口に当てて笑いを堪えようとしているが、思いっきり漏れてしまっている。

「くっ…！」

つられたかのように女騎士も吹き出した。

「し、失礼…」

まるで失態でもおかしたかのように頬を紅潮させ、黙り込む。

「あーあ、もういいわよどうでも。あ、もうそんな急がなくていいわよ。ゆっくり向かって」

王女も呆れたように苦笑すると、御者に先程までとは打って変わった静かな声で指示を出した。

先程までガタガタと大げさに揺れていた馬車が、穏やかなスピードに変わっていく。

「いや、だってアイツ絶対粘着質なタイプだって。付きまとわれたらたまんねぇよ」

「確かにね、あいつは絶対そういうタイプだわ。私にもネチネチと鬱陶しいのよ。ま、これで縁が切れてせいせいするけどね」

「ええ。あのような害虫は姫様に近づけてはならないと常日頃思っておりました。長年の悲願が達成されたような気分です」

女騎士が胸の前に両の拳を作って力みながらそう言った。そしてまたハッとなり、すみませんと小さく呟きながら赤くなって小さくなってしまった。この王女がいかに大事に思われているのが見て取れる光景だった。

「でもいくら平気だったからってアレを受け止めるって……」

「いえ、ノイン様。私も今気付いたのですが、ハルユキ殿は恐らく受け止めようとしたわけではありませんよ」

「まぁ、そうじゃろうな」

「……どういうこと？」

そう聞き返しながらハルユキに顔を向けるが、ハルユキはいつの間にかフェンと話を始めていて、此方の話を聞いてもいなかった。

「まぁ順当に考えたら、後ろにいたお前を庇ったんだろうな」

それを聞いて王女が固まった。その考えには至れなかったようだ。驚いた顔が直ぐに別の表情に変わって行く。

少しも納得はしていない顔で窓際に頬杖を付いた。

「ふーん…、庇った。へぇ、”私”を？」

何の感情をこめて言ったのか、それとも何の感情もなかったのか、王女が零した適当な言葉は誰に拾われることもなく。

「……ふーん」

しかし最後に呟いた時には、口調にも表情にも好奇心が満ち溢れていた。

◆◆◆

ガラガラと音を立てて大きくて豪奢な馬車が道の中央を突っ走っていった。

その馬車とすれ違い、私はギルドへと戻る道を歩いていた。

「……は…」

知らず溜め息が一つ口から零れた。

咽には一気に吸い込みすぎたせいかまだ煙草の煙の不快な感触が残っている。

お金もないし、泊まる所も食料もないということで、目的もなく練り歩いていたのを中止してギルドへと戻っている訳だが、戻ってどうするか決めていない。

別に何も問題ない気もする。

でも、きっと私は平常心でいられない。というか、アイツの顔を見れる気すらしない。

「……」

人差し指でそっと唇に触れる。

一瞬のことであまり覚えていないが、確かに少しだけ湿った煙草の感触が残っている気がする。

ほんの少しだけ、アイツの、その、アレで…。

（……ッ！　こ、これじゃ変態じゃないか…！）

ハッと我に帰りゴシゴシと必死で唇を袖で拭った。

でも、その感触はまるでこびり付いた様に取れない、取れてくれない。それどころか深く大きく染みこんでいく様だ。

ふと、他の町ではあまり見られないようなショーウィンドウの大きいガラスが目に入った。

いや正確には、そのガラスに映った馬鹿みたいな顔が。

見たことがある。

確かにこんな表情を昔に見たことがある。

あれは何時頃だったか。

まだ私がハルユキと出会う前、周りの給仕の娘や、魔導師の女の人などが本当に時々こんな顔をしていた。

父上に聞いたのだ。

どうしてあんな顔をしているのか、と。

困ったような、嬉しいような、でも何だかんだで幸せだ、という顔。

私は鏡の前でそんな顔を見たことがなかった。

だから父上に聞いた。

お前も大きくなったら分かるよ、と少し寂しそうな表情で頭を撫で出くれただけだったが。

今なら、分かるかもしれないと、ふと思った。

だって目の前に同じような顔をしている私がいる。

気付きそうになる。

いやこんな考えに至るということは、見ようとしなかっただけでずっと前からやっぱり、私は……。

「……い、いや、ないな。ないない。ありえない」

鏡に映る仄かに頬を朱に染めた顔から目を背けて歩き出す。

大体、アイツを好きになる理由が無い。

精神的に子供だし。

馬鹿だし。

顔は……まぁ、普通だな。

あと、強い、けど。

それと、時々優しいし。

頭を撫でられると、ごつごつした手のひらが髪越しに伝わってきて。

抱きしめられると、温か……。

……。

「あああああ……！」

何か急に恥ずかしくなってきて、頭を振って妙な考えを振り落とす。

そして、もう考えるのをやめようと、歩くことに集中する。

ズンズンと音を立てながら、ひたすらに邁進する。

でも、一度考えてしまったものをそう簡単に忘れられるわけもないらしく、次々とあいつの顔ばかりが頭に浮かんでくる。

――――そして、あの剣を握った姿に行き着いた。

少しだけ、体温が下がる。

怖かった。

アイツ自体が怖いという訳ではない。

ただ、剣を持っただけで、別の生き物になった様な、どこか私の知るアイツじゃなくなりそうと言うか、そんな背筋が凍るような感覚。

「……んッ」

パン、と頬を叩いて今度こそ余計な思考を追い出した。

帰ったら何か喋る前にあいつの背中でも思い切り叩いてやろう。

それで心の広い私はチャラにしてやろう。

あいつといると楽しい。

一緒に居られるなら、今はそれで良い。

そう割り切ると、少しだけ軽くなった足でギルドへと歩き出す。

いつの間にかもうギルドも見えてきている。と、そこで人だかりが目に入った。

（何だ……？）

これではギルドに戻るどころか、これ以上進むことも出来ない。

それに、やけに気になる。

一番手近にいた男の肩を叩き、話を聞いてみることにした。

「あ？　っとえらいベッピンなお嬢ちゃんだな」

「何があったんだ？」

男の軽口など無視して問いかけた。

「ああ、雷帝が…ってギルドの人間なんだがな。そいつが決闘で誰か殺しかけたらしいぜ？」

ドクン、と心臓が不可解な動きをした。

雷帝？　決闘？　色々理解できないものがあるが今聞きたいのはそれではないと、どこかで理解する。

「誰が…。殺されかけたのは、誰なんだ…？」

乾いていく口で声を絞り出した。

何故か焦りが後ろから追って来る。

心臓が何時もと違う様に鼓動を刻んでいるようで、嫌に耳に付く。

男は頭を掻きながら、額にしわを寄せる。

「あー、なんだったかな。えー、ハ、ハリ、いやハル…？」

「ハルユキ……」

「あー、それだそれだ。そいつが今黒焦げんなって城に運ばれ…っておい！　どこ行くんだ!?」

男の声を聞き終わる前に走り出した。

◆

◆

◆

豪華な廊下を進んでいくと、階段があり、その先にこれまた豪奢な扉が現れた。

そこに控えていた執事であろう人間が代わりに扉を開け、その中に王女ノイン、ガララド、女騎士のミスラ、レイ、フェン、最後にハルユキの順で部屋に入る。

中は豪華ではあるものの、廊下や入り口などと比べて絵画や、価値など欠片もわからない壷等は飾っておらず質素な感じになっている。

「さて、と」

ただ広さだけは無駄にあり、長い机の一番上座にノインが座り、ミスラはその傍に控えレイとガララドはその辺に勝手に座り始めたため、ハルユキも近くの椅子に適当に座り、フェンもその横の椅子に腰掛けた。

「ここは…食堂、じゃ、ないよな？」

「私の部屋よ。正しくは私の部屋の食堂だけど。何か食べる？」

「いや、いい…」

ハルユキは確かに空腹を感じてはいたが、今はそれ所ではなかった。

「何か、欲しいものがあればある程度は聞くわよ？　大事なお客様

だし」
「なら…！」

自然とハルユキの口調が強くなる。

それもそうだ。

早くしないと人間としての尊厳さえも消えてしまう。

「頼む…」

縋るような、聞いてるだけで泣きそうになるような声を上げている。

椅子から立ち上がり、勢いよくばん、手を机に叩き付けた。

「服貸してください…！」

黒く焦げたパンツ一枚のハルユキがに机から乗り出してそう言った。

城へ（後書き）

ユキネの所少しやりすぎたかな…

王女の横暴（前書き）

予約投稿するつもりが、失敗した…。
次は多分火曜日です

「いや、羞恥心の向こう側が見えたぜ……」

着替えを終え適当な席に着く。

椅子に座るといつの間にか、目の前の机には高そうなティーカップにこれまた高そうな紅茶が注がれている。

「あら？　そんな服あったかしら？」

「……。いえ、生地も織り方も我らが知っている物とは異なっています」

「ああ、貰った服をちょっと弄らせて貰ったんだ。どうも肌に合わないんでな」

結局ハルユキの服装はあの部屋にいた頃の物と同じ物になっている。

ふーん、と好奇心を覗かせながらも、王女が本題を切り出した。

「貴方が服を着ている間に粗方の話は聞いたんだけど、……本当に一人で倒したのね…」

俺に確認する、というより自分に言い聞かせるように王女が呟いた。

そのまましばらく紅茶をちびちび飲みながら少しだけ考えると、静かにカップを置いた。

「駄目ね」
「……は？」
「そんなの信用できるわけないでしょ。て言うか、想像しづらい」

そうキッパリと言い放った。

頬杖をついて、俺を不貞腐れたように眺め直して再び口を開いた。

「確かに、貴方が倒したって言うのは嘘じゃないと思うわ。でも、如何やって？　何の魔法で？　モノガスは大きくなる毎に対魔の毛皮も厚くなるし生半可な魔法じゃ効かないわ。あの角のサイズから見ても全長は１５ｍは下らない筈。違う？」

今まで言いたかったことを全て最小限に詰め込んだのか、一気にそこまで言い切った。

「…違わんな。確か１５ｍ位はあったじゃろ」

逸早くその言葉に答えたレイは可笑しそうに楽しそうに笑っている。
それを見て王女も愉快げに笑う。

「そのサイズの化物を、一人で？　”オレンジ”のFクラスが？
想像も出来ないわね。でもだからと言ってあなた達が嘘を言っているとも、やっぱり思えない」
「あ、ああ…。まあ、そりゃ、な」

言葉の勢いに付いていけないハルユキを置いて、二人はますます笑みを深くしていき、まるで示し合わせた結果に合わせるかのように滑らかに会話が進んでいく。

「それにね、私大事なことは出来るだけ自分の目で見たもので決めたいの」
「詰まる所は？」

レイが素早く二の句を促す。

「証明して」
「どうやって？」
「おーい」

「無論、剣で杖で力で」
「承知した。この小僧が」
「楽しそうだなお前らこの野郎」

あっと言う間に、それも本人の納得無しに会話が始まって終わった。

そして2人の目線が繋がって、ハルユキに移った。

「何でそんな息ぴったりなんだよ……。仲良しさんめ…」
「うるさいわね。さっさと準備しなさい。どうせそれしか選択肢は用意してないわ」
「はっはっは、まあこれであの角が買い取られれば金が入るからの。精々稼いで来い。大黒柱なんじゃからの」
「都合良い時だけ調子いい事言ってんなぁ、お前…」

王女は椅子を自分で引いて立ち上がった。

そのまま真っ直ぐに扉に向かう。待ち構えていた執事が扉を開けた。

「ついて来て。着替えた直ぐで悪いけどこういうのはさっさとやった方がいいでしょ」

当然の様に近衛のミスラ、続いてレイ、肩を鳴らしながらガラドが続く。

仕方無しに俺も立ち上がり、変わらず執事が片手で開けている扉へ向かい、フェンもそれについてくる。

此方は、先程入ってきたものとは反対側に位置する別の扉。

先の物と比べれば此方の廊下に趣向はあまり見つけられず、ただ大理石の無機質な色が続いている。

普通の廊下よりは薄暗い廊下を、薄い緊張感に言葉少なになりながら進んでいく。

どれくらい歩いたか、沈黙が苦痛ではなくなった頃。

これから一戦交える事になるであろう事を思って、何となく自らの拳を握り締めた。

ダメージは残っていない。

そう、欠片も残っていなかった。

あの時ハルユキは間違いなく雷の直撃を受けた。

雷は世界におけるエネルギーとしては最上の物だと言っていい。

それを受けてほぼ無傷なのは少し驚く、が。

恐らく、純然足る物でなかったためであろうと、頭の中で一番考えられる理由を呟いて納得し、握った拳から力を抜いた。

「しかし、何だここ？　窓一つないぞ？」

しょうもない思考はさっさと忘れ、辺りを見渡し、ついでに先程から続く嫌な沈黙を破った。

口にした疑問も適当な事ではない。先程も言ったように装飾などがないどころか、窓の一つさえも見当たらないのだ。疑問も抱くというものだ。

「ここは、脱出用の特殊通路よ。普通は使わない様になってたけどもうそんなの守ってはいないわね」

確かにここへの入り口も隠されていた訳ではなかった。

「おいおい、それでいいのか？　戦争ん時とかの非常用だろ？」

「構いやしないわよ。この通路魔法のお陰で新しく見えるかもしれないけど、実際千年以上は使われていなかったみたいだし」

それは、この城まで敵が及んだことがないという意味だろうか。いや、それとも……。

ハルユキがその先の思考に至るに、続けて王女が口を開いた。

「って言っても、知ってるのはここ居る面子とあとは使用人が何人か知ってるぐらいだから、普通に脱出用に使えるとは思うけどね。……と、着いたわ」

そこには何もない、今までと変わらない普通の壁だ。

その証拠にまだ先に廊下が続いている。

「ああ、あっちはフェイクよ。最後まで進んだら罠でぷちっとやられるわ。……あ～もう、何処だったかな。無駄に凝ってるのよね」

「ここです、ノイン様」

ミスラが本当に薄く切れ込みが入った壁を押した。

そこの部分が凹み、不思議なほど音もなく扉が開いた。

人一人がやっと入れるぐらいの幅と高さで、俺とガラフドは背を丸めないと入れない程の大きさ。

それをまた先程部屋を出た順に潜っていく。

そこは小さい部屋のようになっていて、恐らく魔力が動力源となっている明かりが弱々しく部屋を照らしている。

直ぐに後の扉が閉まり、前面の壁が下にスライドしていく。

ぞろぞろと小さい扉をくぐり、外に出る。

まず目に入ったのは椅子。

そして客席。

その先にしてへと続く階段。

最後に、石のタイルが敷き詰められた床が眼下に。

「闘技場……？」

ハルユキを始めとする初めて組の中でフェンが逸早く周りを見渡し呟いた。

「そうよ。この辺は歴史深い建造物ってやつでさっきの通路も合わせて相当古いものだけどね。それでも強力な魔法で少しも古びていないけど」

そう言いながら階段を下り始めた。

例によってまた一列で下りていく。

確かに荘厳で歴史を持った雰囲気が漂っているのに古臭い感じは欠片も感じられず、何とも不思議な空気が漂っている。

天井は無く、広々と夕焼けに染まった空が見えている。

そう言えば、もうここで金を貰わないと宿もとれないと言うことを思い出し、気持ちがげんなりと沈みこんだ。

が、そんな現実的な問題はさっさと忘れ周りに目を凝らす。

ざっと見渡した所どうやら先程の席は、王族が闘技場での試合を観戦するための席だったようだ。

高さでいうと、１０ｍ程の階段を下り切り、円形の直径５０ｍほどの闘技場の中心で歩を止めた。

「さ、やるなら早くしようぜ。宿が取れなくなっちまうよ」

前を行く王女にそう声をかけた。

「ガララド、だったか？　さっさとやろう、腹も減ってきた」

続けて横にいた黒衣の男にそう言うと、待っていたとばかりに口元を歪めてガララドが振り返った。

マントの中から篭手に包まれた右手で威嚇交じりにゴキリ、と音を鳴らした。

互いの視線と一緒に戦意が擦れ合う。

「待って」

今にも戦闘が始まりそうな空気を退けてノインの声が割り込んできた。

「何を先走ってるのよあなた達」

「何だ、どうしたノイン」

ガララドも当然この流れを予想していたらしく、戸惑ったような声を上げた。

「私がやるわ」

「……いや、ノイン、しかしな…？」

「何？　力不足だとは言わせないわよ。何なら貴方から相手をしましょうか、ガララド」

腰に下げていた剣を抜き放ってガララドに切っ先を向けた。

先程までの和気藹々とした雰囲気が取り掃われ、王女の目が戦意を持って薄くガララドを定める。

掲げられた剣は夕日を受けて時折赤に、そして時折金色に光を反射

させている。

一見して普通ではありえない在り方に、何らかの魔力的な装威が凝らされているのが見て取れる。

「……分かったよ、好きにしてくれ。…全く本当に変わってないな」

降参だ、とばかりに両手を挙げガララドが客席の方へと足を向けた。既に他の三人も客席へと向かっており、ここには俺と王女しかいなくなった。

「何？」

ガララドが行ってしまい、少し肩透かしを食らっていると、王女がこれまた不機嫌そうな声を出した。

「いやだって、なあ…」

「言っておくけど別に手を抜かなくても結構よ。私はガララドより強いし、それに……」

そこで一旦言葉を切り、此方を薄く笑って見定めるように視線をよこした。

「貴方、私を庇ったそうね」
「……あ？」
「いえ、貴方がどんな心算（つもり）だったかは知らないけどとにかく私は怪我を免れたそうなの」
「ああ……どう、も？」

よく分からないが、ひょっとしてあれだろうか。感謝してるから、怪我しない様に自分が相手をして手を抜いてあげるとか、金を多めに用意してやるとか…。

「だから貴方を全力でボコボコにしようと思うの」
「もの申おおおおおすッ！！！」

訳の分からない言い分に考える前に全力で声が出た。

「何よ、うるさいわね」

ふてぶてしく剣を持ってない方の腕を腰に当ててめんどくさそうに此方を見た。

「私はね、自慢じゃないけど小さい頃から何でも一番だったし、誰かに助けられたことも当然無かった。さっきの攻撃も貴方が居なく

ても何とか凌いだわ。でもその前に庇われちゃったらただ口だけみたいじゃない？　だから貴方をボコボコにしたら無かったことになる、とは思わないけど私の気ぐらいは晴れるわ。て言うか思い出したらイライラして来たから黙ってボコらせろこのスットコドッコイ」

「本音駄々漏れですよー…」

めっちゃくちゃである、この女。

「別に逃げてもいいわよ。私は追わないし力を見たいなんて口実だったからお金もあげる」

「あ、じゃ、お先に失礼しますね」

ここぞとばかりに逃げ出した。

しかし、その背中に面白がるような王女の声がかかった。

「ただ、いきなり城に下着一枚で押しかけて、城中を練り歩いた後、王女にその姿を晒すだけ晒して満足して帰って行った男の名前が町中に広がるでしょうね、そっくりな似顔絵付で」

「よっしゃああ！　さあ、バッチ来い！」

「ふふ、素直な人は好きよ」

「……泣かす、おまえは絶対泣かす…！」

既に泣きそうな声で俺は苦し紛れにそう言った。

王女の横暴（後書き）

感想お待ちしております

黄昏色

「ミスラ、一人で大丈夫か我らが王女様は。あいつが強いのは知ってるが、……あの男も相当やるぞ」
「……」
「ミスラ？」
「……」
「ミスラさん？」
「……」
「おーい」
「……ノイン様は貴方がいなかった2年で更に強くなりました。もう貴方でも手も足も出ませんよ」

しつこく聞いてくるガララドに無視を続けていたミスラも折れてジト目でガララドを睨みながら呟くように言った。

「へぇ、もともと馬鹿みたいに強かったけど。あれ以上ってもう完全に置いてかれちまったなぁ」

それでもどこか嬉しそうに話すガララドを置いて、ミスラはレイの隣に人一人分だけ開けて座り込んだ。

「言ったようにノイン様はとても御強いです。ある程度手は抜かれるでしょうが、危ないと思ったらいつでも止めに入ってください。

私共も…」

そこまで言った所で、レイが大きく溜め息をつきミスラの言葉を自然と遮ってしまった。
組んだ足に肘を突きその上に顎を乗せ、憮然とした顔をしている。

「いや、それならそれでいいんじゃがの。無理じゃよ、癪な話じゃが」
「……無理、とは？」
「まあ見ておれ」

いまいち納得は出来なかったが、ミスラは言われた通りに二人がいる闘技場の中心に目を向けた。
そこでは既に文字通り火花を散らす様な戦闘が始まっていた。

◆
◆
◆

「はぁッ…！」

短い掛け声と共に王女が一息で俺に接近した。

そのスピードに多少驚くが、それに合わせて後に下がり振りぬかれた剣をかわす。
剣が走り抜けた跡には、金色の軌跡が残り唯の斬撃ではない事を悟らせる。
二の剣、三の剣と振るわれるのを、かわしながらバック転で距離をとった。

「やっぱりやるわね。普通の人は今ので大体終わるんだけど…」

確かに文句無しの攻撃だった。
このレベルなら周りに敵が居なかった事だろう。

「ああ、やっぱり手加減してたのか」
「……本気でいくわ」

ハルユキの言葉をどう受け取ったのか、王女の眼にいっそう激しく戦意が宿る。
同時に剣を金色の炎が包んでいく。
そして、右手の甲に鋭く光る文字。

――――『煌』

燃えるような、いや文字通り燃え盛りながら黄昏色のそれはうねうねと生きているように形を変え、その名の通りの煌く炎が剣から抜け出し、辺りを蹂躙していく。
煌き輝く炎と遊ぶように中心で黄昏を操る王女の姿は、”綺麗”と

いう言葉が辞書から飛び出てきたかのような印象を覚える。

「――はッ！！」

先程よりも力の入った声と共に王女の姿が掻き消えた。
王女がいた場所には、金色の炎の残滓。
――アフターバーナー。
戦闘機の加速時に使われる加速法だが今の王女はそれと同じ程の速さと強さを持っているのだろう。
フェイント代わりにハルユキの周りをぐるっと一周半ほど回った後、ハルユキに斬りかかった。

「なッ…！！」

しかし勢いと力の十分乗った一撃を、ハルユキは身体を横にするだけでかわした。
ポケットに手を突っ込んだまま棒立ちしている姿に、それでも隙は見られない。

「くッ！」

多少体勢を崩しながらもハルユキから離れた所で剣を振る。
剣を纏う炎が幾つか飛び出し、鳥のような形に変わりハルユキに殺到する。

しかし狙いが定まっていなかったのか、ハルユキの周りに着弾し爆炎をあげた。

「これは…」

ハルユキが初めてと言っていい驚きの声を上げた。
炎は石の床に着弾し、”未だ燃え続けている”。

「消えないのか…！」

ハルユキが一瞬で効果を理解し、ハルユキの周りを包囲しようとしている炎を飛び越して着弾地点から離れた。
そして着地した瞬間。
王女が先程と同じように炎を体に纏って凄まじいスピードで接近して剣を振り上げていた。

「はあああああッ！！」

ここに勝機があると見抜いたのか王女が咆哮の様に声を上げながら剣を振り下ろした。

――――パンッ…

「え――――？」

しかし。

気の抜けた音と共に王女の剣は振り下ろしている途中で横から叩かれ、弾き飛ばされた。

何とか剣は握ってはいるものの、弾かれた際に振動を与えられ右手にうまく力が入らず、もう防御にも攻撃にも使えない。

そして、王女の腹部に不敵に笑うハルユキの掌底が宛(あて)がわれた。

◆

◆

◆

「ッ！　ノイン様！！」

渾身の一撃をかわされ、吹き飛ばされた王女を受け止めるために、今だ状況を信じられない思いを抱いてミスラが走る。

しかし、そこから王女までは既に２０ｍ以上離れていてとてもじゃないが間に合うものじゃない。

そして、王女が成す術無く壁に叩きつけられようとした所で。

「悪い悪い。やりすぎた」

ハルユキが回り込んでその身体を受け止めた。

「ノイン様！！」

すぐにミスラが到着し、ハルユキの腕の中のノインを覗き込んだ。
意外にもノインの意識ははっきりしていて、どこかボーっと中空を見つめていた。

「……負けちゃった、か。と言うか、瞬殺じゃない」
「ノイン様？」
「大丈夫よ、この男手加減してたから。しかも最後はただ押されただけよ。痛みも無かったわ」

そう言いながら、ノインはハルユキの胸からゆっくりと離れて地面に下りた。

そして下り様、ハルユキの脛を蹴りつけた。

「っ……ッ……ってめぇ…！」
「何手加減なんかしてるのよ。誰か頼んだの？」

その声には怒気がこもっているが、眼に宿る悔しさの方が明らかに大きい。

「手加減した俺に勝ってから言えよそんなことは。小娘」
「貴様…！」

流石にハルユキの暴言に耐えかねたのか、ミスラが剣に手をかける。
その手を王女が遮った。

「……いいわ、ミスラ。ごめんなさいね、確かに貴方の言う通りだわ。ちょっと気が動転してたかな、負けるのは初めてだったから」

そう言ってその場で思い切り背伸びをした。
溜め息をついて肩から力を抜いたその顔は、悔しさも何も取り敢えずはしまい込まれている。

「それにしても、あんなにあっさりやられるとはね。悔しくも無くなるわよ」

しかし、滲み出てくる気持ちは完全には隠しきれず、強く剣を握るその手が微かに震えていた。

「本当に私より強い奴がいるとはね……」

その気持ちを隠していく度に、先程と比べるべくもない程に声が沈

んでいく。

見てられず、聞いてられず。

「いや、強かったと思うぞ。……それに、あれだ。綺麗だった」

思わず声が出た。

「綺麗…？」

不思議そうな王女の声。

「ああ、あの金色の炎な。ほら、……夕焼け…みたい、で」

途中で何を言っているのかと恥ずかしく思いながらも、目を逸らして言い切った。

王女がキョトンとした顔でハルユキを見る。

「？　…言われたこと、ないか？」

「ええ…。凄い、とか、お強い、とかならあるけど…」

「出してみ」

ボッと、王女が誘われるように手の平の上に炎を出現させた。
既に見慣れたであろうそれを、目を細めて眩しそうに見つめる。
フッと零すように小さく溜め息をついた。

「そうね…。とっても綺麗。…って、自分で言うことじゃないけどね」

今までハルユキが見た中で一番自然な笑顔でそう言った。
その笑顔にミスラが驚きの表情を見せる。
いつも傍に居た近衛のミスラでさえこんな表情は滅多に、いや、ひょっとすると初めて見たのではないか。
確かに王女の炎は見目麗しい程の美しさだ。
夕日の中でそれを手に佇んでいるだけでどこの絵画だと言うほどの美しさ。
しかし、一度としてそれを口にしたことはない。
それどころか気付きもしなかった。
だって、その炎は力で。羨望の対象で。畏怖の具現で。嫉妬の源で。
美しさなどよりも目がいく物が多すぎたのだ。目にいく前に圧倒されるのだ。

でも、ハルユキはそんな物に目が行かず、羨望も畏怖も嫉妬にも見向きもせずに。

単純に見たままを言い切った。

だから、そんな言葉が出たのだろう。

「ねぇっ、ミスラも綺麗だと思わない？」

弾んだ声で王女がミスラに向き直った。

「……ええ。とてもお綺麗ですよ」

今まで見たことの無い子供のような無邪気な顔を見ると、ミスラも自然と頬を綻ばせていた。

思いついた様に王女が後ろで手を組み、髪を靡かせて俺を振り返った。

「貴方…、名前はハルユキ、だったかしら？」

「ん？　ああ」

「ねぇハルユキ、貴方良かったら……」

戦闘も終わり、険悪な雰囲気は薄くなった穏やかな空間。

「王女！　隊長！　侵入者です！！」

それを、普通の入り口から飛び込んできた兵士の切羽詰った声が打ち砕いた。

血に濡れて

「それで、侵入者は何人いるの？　貴方達が手に負えないってなると…」

王女が兵士が入ってきた入り口から城の入り口に向かいながら言った。
闘技場を出ると城の裏側に出て、入り口には馬車が止まっていた。

「いえ、それが…」
「何？　はっきり言いなさい。緊急事態なのよ」
「はッ！　…一人の侵入者を未だ止める事が出来ておりません！！」
「一人だと…！？」
「はい…！　しかし中に侵入を許してはいません。何とかお二方に事態を収めてもらうべく、恥ずかしながら参上しました！」

本当に悔しく、相当な苦渋の決断だったのだろう。
兵士は唇をかみ締めながら己の恥を高らかに報告した。

「……いいわ。報告ご苦労様。私がやる」
「ノイン様、しかし…」
「大丈夫よミスラ。一日に二回も負けないわ」

馬車は俺達が城に来たときとは比べ物にならないスピードで疾走する。
暫くもしない内に城の入り口となる橋が見えてきた。

「……着きます！！」

その声と同時に橋を少し越えた所で爆発が起こった。

「行くわ……！」

それと同時に王女が炎をその身に纏、馬車から飛び出して彗星のような勢いで橋に広がる煙の中に突貫した。

「それで、侵入者の特徴は？」

王女に対する心配を少しだけ隠しきれていない口調でミスラが馬車を御していた兵士に聞いた。
馬車の音がうるさく、それなりの声量だったため、難無く俺の耳にもその声は届いた。

「十代半ばほどの女です。金の長髪で赤い目。あとは大剣（クレイモア）らしきも

のを……」

驚愕が頭の中を走りぬけた。
その特徴はあまりに仲間に当て嵌まり過ぎている。
また、今度は金色の炎の柱が空高く立ち上る。
そして、煙の晴れてきた橋に転がり出てきたのは、確かに…！

「……ッの…！！」

あの馬鹿が、と言った声が擦れて出てこなかった。
ただ言おうとした時には既に馬車の壁を突き破って、未だ起き上がって剣を構え続けているユキネに向かって疾走していた。

◆
◆
◆

再び四方八方から魔法が展開され、ユキネに向かっていく。
それを目の端で確認すると、剣を交えていた剣士を力尽くで出突き飛ばし、目の前に出来るだけの魔法を展開し打ち出す。
幾つかは、敵の魔法を取り込み増幅させて打ち返し、同時に幾つか

の魔法も弾き飛ばした。

「ぐッ…ぁあ！！」

しかし流石に全てを完全に逸らすことはできずに、至る所にありとあらゆる魔法が牙を剥く。

増大した白の魔法が橋を越えたところに着弾し爆発したかのような煙と音を撒き散らした。

「やっぱり、…ハルのようには、いかない、な」

そう言いながらも、また足が自然と前を向いて一歩踏み出していた。

足には、ちょっとやばいんじゃないのかと言う位の血が流れて赤く染まっている。

倒れそうになる。

でも、何時か見た血まみれのハルの姿が浮かんできて、また勝手に足が進む。

更にもう一歩踏み出した。

――その時。

「…ッ！！」

考える前に前に飛んだ。

そしてその上を殺気が篭った剣が突き抜ける。

「へぇ、その怪我でよく避けたわね」

燃え盛る金色の炎。

その中心で涼しい顔の見たことも無い女が此方に殺気の乗った剣先を向けていた。

……只者ではない。しかし、足は止まらない。

「……そこを、退け…！」

剣を正眼に構え、一歩踏み出した。

そこで、女の気配が少しだけ揺れた。

「……そこ」

女が私の足元を指差して、呟いた。

足元には、橋と城の敷地の境目を跨いでいた。

「……今までそこを敵として越えた者はいなかったそうよ。いくら基本自由な私でもそこをこれ以上進ませる訳にはいかな…」

「退け……！」

女の言葉遮るようにもう一歩踏み出し、完全に城の敷地の中に身体を入れた。

「……死になさい」

溜め息を一つついて、女の魔力が剣を媒介にして跳ね上がった。

同時に膨れ上がる脅威にユキネも自然と力を集中する。

それに合わせる様に、私も渾身の魔力を剣に流し込んでいく。

何時かの森でそうなったように、魔力は薄く白くなり剣を包み込み刃となって行く。

「隙だらけ」

一瞬早く魔力の装填が終わった女が、たったその一瞬に懐に潜り込んでいた。

赤く、そして同時に金色に煌く刃先が迫る。

本能的に首を捻る。

「いあ〝ッ……！」

首の皮を薄く裂き、更にその傷跡を燃焼しながら凶刃が遠ざかっていく。

痛みを歯を食いしばって耐え、剣を振り下ろす。

「くッ……！」

しかし瞬時に体勢を立て直していた女は辛くも剣で弾いて事無きを得、距離をとる。

此方も距離を詰めようとするが、疲労も困憊で、満身創痍。

一気に距離を詰めるは至難の業だ。

しかも相手はまだ無傷な上、体力も有り余っている。

此方の体力の回復を待っていてくれるはずもない。

先程までのそれより一回り以上巨大な炎が剣の周りで形を成していく。

何の合図も無く、巨大な鷹のように形を変えた金色の炎が此方に突進してきた。

最後の力を振り絞り、こちらも魔力が凝縮された剣を振り上げる。

こちらに飛来してくる火の鳥目掛けて力一杯剣を振り下ろした。

剣と炎の化身がぶつかる。

均衡は一瞬。

互いの魔力が弾け爆発が巻き起こる。必然的に爆発地点からユキネが爆風に晒され、吹き飛ばされた。

「ぐ……ぁッ！」

一気に橋のほうまで吹き飛ばされ、地面を転がる。

強かに地面に身体を打ちつけ、呼吸が一瞬止まる。

しかしまだ剣だけは手放していなかった。

「……よく、防いだわね」

立ち上る金の炎の中から女が感心しながら姿を現した。

その体には、余裕、というより風格すらも感じ取れる。

しかし、同時に殺気も放っている。

ユキネにもう力はないと判断したのか確実に止めを刺そうとゆっくり近付いてくる。

実際もうユキネに体力なんて残ってはいない。

負傷も多く、魔力と血を失いすぎたため足に力も入らない。

剣を握るだけで苦痛を感じるほどだ。

もう体がほとんど動かない。

「……まだ、立つの？」

女のその声に最初戸惑いを感じた。

立つ？　誰が？

「はっ……」

何のことは無い。

いつの間にか立ち上がって剣を構えていた。

「……」

もう女も何も言わない。

ただ剣身に魔力を凝縮させていく。

こちらにもう魔力は残っていない。

短い掛け声と共に女が突進してきた。

――速い。

が、合わせられる。

極限だからだろうか。世界が遅い。

決して速くはないが、赤い剣までの最短の距離をユキネの剣が辿る。

「やめろ、馬鹿が」

その間にいきなり誰かが割り込んできた。

◆
◆
◆

「……何やってんだ」

鷲掴みにした二人の剣を奪い、投げ捨てた。

同時に掌に付いた切創から血が滴る。

「……ハル」

間の抜けた声が聞こえた。

血塗れの手を握り締めて、睨み付けるように振り向いた。

「……何やってんのかって聞いてんだよ、バカ野郎が！！」

自然と声を荒げてしまい、周りの空気ががビリビリと震える。

そこで睨み付ける様に、馬鹿のほうに向き直った。

金色の髪にも、白い服にも赤い血が所々飛び散り、目を覆いたくなる。

血なんて腐るほど見てきたが、大事な人の血なんて慣れるもんじゃない、慣れたい物じゃない。

見えるユキネの顔は声に驚き、戦いに疲れ切っている。

「……だって」

その顔のまま、頼りなく口を開いた。

そして何を言うかと思ったら。

「だって！　ハルが死にそうだって、聞いた、から…！」

そんな馬鹿な事を口にした。

それはもう本当に実に、真実驚かされた言葉だった。

いつまで経っても俺は自分の身を案じる人がいる事を自覚できないのだろうか。

いや、それは目の前のこいつもか。

それだけ言って、ユキネの眼から力が抜けていき、その場で体が傾いでいく。

思わず、その身体を抱き留めて抱き寄せて抱き締めた。

「あ……」

強く抱き締めすぎたのか、ユキネの口から声が漏れた。

「だからって、無理やり入ろうとすることは無いだろ……」

「……こっそり入ろうとしたら、見つかって侵入者扱いに……なっちゃった」

言い難そうに口篭るユキネがやっぱりどうしても愛おしくて、回した腕に力が入る。

「ハル、……ごめんなさい」

「……いい、俺も悪い」

後からコツコツと近付いてくる音が聞こえた。
ユキネから身体を離して振り向くと、腕組みをした仏頂面でこちらを睨んでいる王女がいた。

「……何、人をダシにしてお熱くやってんのよ、燃やすわよ？」
「悪い、部屋貸してくれ。治療がしたい」
「うっさい、死ね」

跳び蹴り。びっくり。直撃。吹っ飛び、落下。
橋から落ち、ドボンと音を立てて下の堀に突っ込んだ。

「てめぇ……」
「厚かましいのよボケナス。でもまぁ、それで勘弁してあげる」

見上げると結構な高さがあり、その上から王女が見下ろしている。
同時にユキネに駆け寄るフェンと、何だかんだで動いてくれているらしい王女が目に入り、安心して堀を上っていった。

◆
◆
◆

「やっぱり、あの男欲しいわね」

誰に聞かせるでもなく、ユキネをおぶって運んでいるハルユキを見ながらそう零した。

「ほう、あの小僧をか」

「…立ち聞きは趣味悪いんじゃない？」

「趣味如何こう言うなら、こんな妙な格好はしとらんさ」

そう言って着物の袖を広げて見せる。

確かに珍しい出で立ちだとは思うが、変というわけではない。口には出さないが、藍色の布が一本に結い上げた黒髪によく馴染んでいる。

町を歩けば、さぞ男達の目を奪うことだろう。

「それで、一応あれはうちの大黒柱なんじゃが、何か惹かれるものでも見つけたか？」

惹かれるもの…。

強さ。

確かにそれもあるがどうにもそれではしっくり来ない。

「……何でだろう」

こんな曖昧な事を思うのも口に出すのも珍しいことだが、そう言うしかなかった。
それを聞いたレイはポカン、と口をあけた後大口を開けて笑い出した。

「いや、すまんの。お主はそういう事を口に出すタイプとは思わなかったのでの。それに…」
「それに？」
「いやいや、あの小僧も中々やり手じゃの、と思うての。いやあれは天然じゃな。余計に性質が悪い」

まだ少し笑いながら、ハルユキが入って行った扉の方を向いて、王女に背を向けた。

「一応儂もあやつらの連れじゃから行くとする。じゃあの、王女様」

憎々しげに妙な所に力を入れて話しきった後、後ろ手に手を振りながら城の中に消えていった。

◆
◆
◆

「後はアリベスに戻るだけか……」

私が地図を広げ感慨深げにそう呟くと、向かいで即席のシチューを口に運ぶ男が苦笑を零した。

「別にそう感動する事でも無いだろ？　いつもの事だ」
「いやしかし、一仕事終えて家に帰る感覚はこう、あるだろ？　何か来るものが」
「まあ今回は長い道のりだったし、分かる気もするけどな。どれ、護衛の４人も呼んで仕事の成功を祝って一杯やるか」
「お、いいな」
「ええと、馬車の所かな。ちょっと呼んでくる」

そう言って残ったスープをかっ込むと、椅子にしていた平べったい石から腰を上げた。
三ヶ月ほどの行商だったわけだが、こうして無事積荷を全て金に変え生まれた町へと帰る所まで行き着いた。
三ヶ月前はこの目の前の相棒と愚痴りながら次の町に行くための獣道を進んでいた事も酒の肴になりより酒を美味しくしてくれるだろう。。

そして馬車の方を向いた相棒のその首が暗闇に齧られたかのように消失した。

「……は……？」

何だ。
なぜ目の前の男は顔が見えない？
その上には見知った顔が乗っている筈ではないのか？
そして、降り注ぐこの気味の悪い感触と匂いと温かさの液体は？

「嗚呼、駄目だな糞不味い。腹の足しのもなりゃしねぇ」

いきなりの事で未だ倒れこむ事すら出来ていない同僚の、いや”同僚だった”物の後ろに何時の間にか何かの気配と声。
目の前で起こった凶事を頭で理解し、しかし心が何時まで経っても追いついてこない。
しかしパタパタと頬に頭に体中に赤い液体が降り注ぎ、心がじりじりと現実に追いついて来る。
いやだ。
追いつくな。
こんな現実なんて認めない認めたくない。
いやだいやだいやだいやだ――……
しかし。
相棒だった男の体が力なく地面に倒れこんだ音で、無情にも完全に現実に引き戻された。

「う……あ……？」

逃げろ。
相棒は死んだ。
死体を慮る必要はない。
仕事の達成も諦めよう。
見っとも無く大声を上げながら脇目もふらずに走り去ればいい。
しかし、そこで疑問が一つ首を擡げる。

「た……す……っ…げ…！」

体が意思を裏切ってその場に私を縫い付けている。
ピクリとも、本当一寸たりとも不自然なほどに動けない。
まるで何かに縛られているかのように

「ああもう、野蛮ね相変わらず。もうちょっとスマートに出来ないの？」
「スマートだぁ？　これ以上ないぐらいスマートだろが」
「…脳筋との価値観の相違か」

後ろから声。
一体何処から何が姿を現したのか、妖艶な雰囲気を漂ってくる。
その声は私の事を話しているが、私の事など見ていない。

私の言葉も、意思も何一つ考えようともしていない。
こいつ等にとって、私はただの餌。
女が暗闇の向こうを見ていやらしくその整った形の唇を妖艶に歪める。

「結構金目の物があったわ。やっぱりお金よね、男も世の中もっ。あなたは駄目ね。駄目駄目。死んだらいいと思うわ」
「……キメェんだよ。売女が」
「あら、ありがとう。貴方から褒めて貰えるとは思ってなかったわ」
「チッ、キ○ガイが…」
「まあ、何にしろやっと馬が手に入ったからアリベスまで行けるわよ」
「歩いていけばいいだろうが」
「……だから貴方みたいな脳筋は嫌なのよ。どれぐらいあると思ってるの？　ドラゴンには私乗りたくないし」
「だから馬とったんだろうが。さっさと行くぞ」
「ああ、待って」

そう言って女から強い瘴気な様なものが吹き出す。
それは馬車を飲み込み、星の光を飲み込み、私の視界を塗り潰していく。
その中の一部が私の中に届くのを見てしまった。

「ああ、あなたももう死んでいいわよ」

やっと今思い出したかのような声と共に”私”はこの世を去った。

血に濡れて（後書き）

期末、追試、補講までやっと終了しました……。

タダ酒

「ん……」

目を開けた。

目覚めてすぐだというのも相まって視界は暗い。

視線を横に向けてみると、天蓋の向こうからぼんやりと光が浮かび上がっていたので、体を起こしベッドに腰掛ける体勢になって天蓋を捲って外側を見た。

「……懐かしいな」

いつか見たものと似た様な光景。

寝ているのが部屋の入り口ではなくて、部屋の中心に置かれた机の横のソファでだがそこは大して重要な所ではない。

よく見ると、ハルの横でフェンが小さい体を更に丸めてハルユキの隣に寝ていた。

なんとも微笑ましい光景に苦笑しながら立ち上がった。

全身の傷はもう跡形も無く消えていて、立つことにも歩くことにも支障はきたさないが魔法で治療した後は熱を持ったように体が火照っている。

起こすのも何だったので、ゆっくり目を覚まさないように2人にシーツを掛けた。

フェンの顔が埋もれるのでハルユキの腰の辺りまでだが。

たまたまハルの顔が目に入った。

「ぐっすりだな……」

もう普通の声量で話しているが、眉一つ動かさずに寝入っている。

（どこまで起きないんだろう…）

そう思ってしまうのは私の責任ではないはずだ。

頬をつねってみようと恐る恐る手を伸ばす。試しに指先で触れてみるが、微動だにしない。

摘んでみる。更に引っ張る。

さすがにフガフガ言い出したが、起きる様子は無い。

「…ふふふ」

何だろうこれは。すごく楽しいんだが。

征服感がたまらない。

しかし、さすがにそろそろ起きそうだったので手を離して部屋を見渡した。

ここから５ｍぐらいの位置にある扉の所と机の上以外には明かりが無く、薄ぼんやりとした雰囲気になっている。

窓を見つけたので近寄って外を眺めてみた。

はるか下に、町の光があちこちで動いたり騒いだりしている。

大体予想していたがここはあの馬鹿でかい城の中らしい。

その後、さすがに手持ち無沙汰になり仕方ないからハルを起こすかと思い、ハルの方に向き直った。

ハルが目を覚まし、すごい勢いで扉の方を向いた。

しかし、すぐに視線を逸らすとそこで扉がノックされた。

「夕食の準備が出来ました。ノイン様の部屋までお越しください」

◆
◆
◆

廊下からの聞きなれない足音で目を覚ました。

反射的に扉を見るが、まあ当然敵意も殺気も感じないので、視線を部屋の中に戻した。

「夕食の準備が出来ました。ノイン様の部屋までお越しください」

規則正しい声が扉を叩く音の後で聞こえてきた。

メイド姿である。

そんなに男として素直に欲望を晒すほうではないが、メイド姿というのはこう少し気になるものがある。

物珍しさが一番の理由だが、何にせよ目線は行ってしまう。

ここからその部屋まではそう遠くは無いのでメイドは用件だけ言うと一礼して出て行った。

「フェン起きろー、飯だ」

「ん……」

俺の言葉に反応してゆっくりと身を起こすが、まだ目がまどろんでいる。

フェンの治療の腕はかなり優れているらしく、ユキネを傷を一人で完全に治して城の医者達から感嘆の声を上げられていた。その後、大した怪我人も居なかったがとりあえずと言うことでフェンも兵士の治療にまわったので疲れてしまったのだろう。

「……あれ？　ああ、ユキネ起きてたのか」

掛けられていたシーツを発見し、続いて窓の傍で此方を見ていたユキネを発見した。

「…メイドさんには反応するんだな」
「ん？　なんか言ったか？」
「……何でもない。行こう、夕飯を作ってもらったんだろう？」
「ああ。俺もいい加減腹減ったわ」

なんか不機嫌そうにも見えるが、腹でも減ってるんだろう。

入り口までズンズンといきりながら歩いていって、そこで足を止めた。

「…ハル、あの、な」

そう言って俺に背を向けたままユキネが声をかけてきた、がその声はどこか暗い。

こいつはやっぱり気にするだろうと確信があって、予想できないことではなかった。

だから先に言ってやるのは、まあ特に意味のあることではないが。少しでも早く和らげてやりたいとか、そういうことではない。決してないぞ。

「……王女さんが、ってお前が最後に戦ってた奴だけど、自分の半分ぐらいの歳の女にやられる兵士の方が悪いってよ。だから気にすんな」

「そう、か」

「それに大した怪我人もいないってよ。辛いならお前はフェン起こしてからゆっくり来い」

少しだけ表情の硬さが和らいだのを確認しユキネを追い越して扉の外に出た。

外に出て廊下を進むと中庭に出て、さらにこの先を進んで行けば部屋まで辿りつく筈だ。

しかし廊下の先の角に何か妙なものが目に入って足を止めて溜め息を一つ。

「何やってんだ？」
「……！」
「なに…、おわッ！」

そいつは無言で俺を引き寄せると、口を塞いで頭だけ角の向こうに突き出した。そこには人影が2人分。

…どうやらミスラとガララドのようだ。ていうか、それより。

「王女が覗きってお前……」
「王女なんてただの暇人の記号よ。面白いことには目が無いの」
「ふーん、で？　何を覗いてんだ？」

二人の様子を伺うが、何をやってるのか見当がつけられない。

「あの2人ね、恋人同士なのよ」
「……マジで？」

マジ？　と王女が首を傾げるが、その表情から嘘ではないことは分かった。
しばらくそこで動きを見せない二人を伺っていると、後ろで足音と先程俺が出したようなため息が聞こえてきた。

「ハル、何をやって…」

後ろからやってきた二人が、さっきの俺と同じように口を塞がれて押さえ込まれた。

「恋人同士……、なのか」
「そう、そして今修羅場」

確かに今は向こうで言い合っていて口をパクパクさせているので先程よりも修羅場っぽい。

「よく聞こえないわね。でもこれ以上近付いたらばれるし……」

これ以上近付けば、戦士である2人はごまかしきれないんだろう。

「俺は聞こえるがな」

修羅場と言っていたが、なるほど確かに喧嘩中のようだ。
今はたまたま黙ってしまっているが、またすぐ言い合いになるだろう。

「……やっぱりよく聞こえないわね」

「ほい、集音器」

コレクションの中から集音器を作り出した。
兄貴特製の聴覚情報を直接頭にぶち込むという安全面に不安の残る一品だが性能は確かだ。
手の平の上に乗るぐらいのそれを静かに設置すると、ぼそぼそと何処からか音が聞こえてきた。

「うわ何これ、あなた何てナイスな物持ってるのよ…」

ユキネ達も興味深々なのか、何も言わずに耳を傾けている。

「それはいいんだが、何で皆して俺の上に乗る」
「見えないのよ」
「重いん……げふッ！」

殴られた勢いあまって床に顔面を強打し、反論するのは諦めた。

◆
◆
◆

「……そんなに怒るなって。悪かったよ」

「別。怒ってなどいません」
「怒ってるだろ…」

同じベンチに座っているものの二人の距離は遠く、互いに端のほうに座っている。

ミスラの方は顔を見ようともしていない。

「４年も放蕩して、さぞ楽しかったんでしょうね」
「ああ、やっぱり東は凄かったぞ！　なんて言うかこう文化がまだ未発達な分な、人が人らしいと言うか、それにな！　魔法体系も独特で中には自分の体を……！　……じゃなくて」
「……もういいです」

嫌味も通じず、嫌になったのかミスラが席を立つ。

「待て！　待ってくれミスラ。…あの、その、だな」
「何ですか。ああそう言えば話があると言ってましたね。どうしました？　旅先でかわいい女の子でも見つけましたか？　だったらその子達と話していればいいでしょう？」
「……ミスラ」

ガララドが繋ぎとめるようにミスラの名を呼ぶが、そこには昼間の時の様な自信も勢いもなくなっている。

「何ですか？」

対応する声も明らかに冷たい。ガララドもその声に途方に暮れるばかりで状況が進展しそうな気配が無い。

「いや、あの～…、だな」
「はっきりしなさい」
「はい……」

返事はしたもののやはりガララドも中々切っ掛けが掴めないらしく、何か言おうとしてまた黙る。

そしてそこからまた沈黙が続いた。

どれくらい時間が経ったのか。

ぼそり、とミスラが小さく声を零した。

「私が待ってばっかりで」
「……」
「貴方は誰にでも優しいし」
「……ミスラ」
「そんなことはないって信じていても、魔が差す事もあるんじゃないかって…」

「……」

「……不安、なんです」

その声は切実で、これが本音だということを如実に語っていた。

ミスラも分かっている。

こんな事を言ってもこの男の放浪癖は治らない。この前もこういった喧嘩になったことを覚えている。でもこう言えば少しはこの町に留まってくれるから。

我ながらズルイと思いながらも、私がこう言っていつもの様にもう一度だけガララドが謝れば仲直りになる。

仲直りできれば少ない時間ながらも一緒にいれる。

だからその言葉を待っていた、

――――でも。

「…ああ、だからもう、終わりにしよう。…それを言いに来たんだ」

「……え…？」

耳に、何か嫌な物が入ってきた気がした。

「お前を待たせてばかりと言うのは俺も辛いし、当然お前も辛いだ

ろ？　だからもうこんな関係は終わりにしたい」
「……ぁ……え…？」

耳から入ってくる何かが体中でめちゃくちゃに暴れまわっているかの様で。

「前から、思ってた。こんな中途半端なら別れてしまったほうがどちらの身の為にもなる」

それでも要領が良いと自他共に認める自分は、今話している内容を飲み込んでしまう。

全身が凍りついたように冷たく硬直し、崩れ落ちそうになった。

更に目には涙が浮かんできそうで見えないように歯を食いしばる。

さっきまで笑顔を浮かべる準備をしていたのに。

ガララドが綺麗だと言ってくれた顔を浮かべようとしていたのに。

もうそれがどんな顔だったかも、思い出せない。

世界が回っているかのように足元が危うい。

しかし。

でも。

この人に弱いところなんて見せたくない。
崩れ落ちそうな膝に力を入れる。

「…そう、ですね。それじゃ、これで、終わりです……！」

えづかないように全身に力を入れ、途切れ途切れにそれだけ言うと、早足に歩き出そうとした。
まだ世界が回っている。
真っ直ぐ歩けるかあやしい。
……もし、今振り向いて、泣いて縋りつけばやり直せるだろうか。
一瞬浮かんだ馬鹿な考えを打ち消し、一歩進んだ。

「だから結婚するぞミスラ」

今度耳の中に入り込んだのは一体何か。
意味を理解する前に、言うが早いか、腕をとられ、振り向かされ、握った手に指輪をはめられ、更に唇を奪われた。
自分で言ったくせに目の前の男の顔は真っ赤だった。
思えば最初に恋人になった日からの2回目の口付けだった。……奥手だったのだ、二人して。
一瞬だったが唇も心も残りの人生も奪われてしまった。

◆
◆
◆

「おめでとーー！！！」

一斉にそこら中で声が響いた。
ハルユキ達は誰一人声を出してはいない。しかし、何処に隠れていたのかそこら中から声がして、人が飛び出てきた。
どうやらガララドがプロポーズするというのは、どこかの筋からかは知らないが筒抜けだったらしい。
壁の向こう、屋根の上、草むらの中、木の茂み。
執事やメイド。兵士も居るし、何か大臣らしい出で立ちの人もいる。

「どんだけ仲いいんだ、お前ら…」
「あら、良い国はいい人から、いい人は良い関係から。当然でしょ？」

そう言って、それぞれガララドは男達に揉みくちゃにされ、ミスラは給仕のメイド達に興奮顔で問い詰められながらおたおたしているのを見て、ノイルは眩しいものを見るように目を細めた。

「さて、私も冷かしに行ってきましょうかね」

そう言って楽しそうに、まずガララドに後ろから思い切り蹴りをかました。
苦笑して横を見ると、いきなりのキスシーンに残る二人は硬直していた。

「あのおっちゃんも、やるときゃやるよなあ…」

ハルユキは、やっと下敷きから開放され座り込んだまま、謎の感動を覚えながらぼそりと呟いた。

「すごいシーンじゃったのう…」
「……うまくいってホンマに良かったわー…！」
「言葉だけ聞けばいいがその憎々しげに固められた拳はなんだ？ジェミニ」
「…あ、あれ？　レイ、ジェミニも。何時の間に」
「ああ、俺がレイに連れて来るように頼んだんだよ」

ハルユキがそう言うと、フェンとユキネがえ？　と聞き返してきた。

「レイが、ハルユキの、言うことを……？」
「こやつが眠り込んだお主等二人の傍を離れたくない、と目で語っておったんでの」
「ばッ…！！」

フェンもレイも例によってキョトンとした顔をハルユキのほうに向けてくる。

その視線に耐えられず、座ったままハルユキは一歩後ずさった。

それを見かねた様にユキネがにまっと笑う。

「……ふふふ、かわいい奴め。初い奴初い奴」

「てめぇ…！」

「……よし、よし」

「撫でんなあぁあ！！！」

ハルユキはフェンの手を軽く押しのけ、立ち上がった。

「ここにも、何か桃色の空気が漂ってる気がするなぁ。もう慣れてしもたからいいんやけど…」

「はっはっは、それに加えてお主最近影薄いしのう」

「言わんといて…」

一際大きい歓声が中庭から上がった。

ガラドは照れくさそうに頬を掻き、ミスラは顔を真っ赤にして俯いている。

どうやらミスラがプロポーズに改めて返事をしたようだ。

その返答の如何など、周りの人間の表情を見れば聞かなくても分かる。

誰かが、宴だ！　と声を張った。

許す！　と群衆の中では聞き覚えがある女の声がした。

タダ酒だあ！　と群集が一気に賑わいだした。

楽しい楽しい夜が始まる。

タダ酒（後書き）

誤字を修正しました。御指摘どうもです。

朝焼け空（前書き）

情景描写の練習をしてみたり。
でもやっぱり中々うまくいきませんね。

朝焼け空

「ぬ……」

目を覚まして、ゆっくり瞼を三分の二ほど開けた。

ぼりぼりと頭を掻きながら上体を起こして、ベッドの傍らに置いてある水差しの瓶に手を伸ばす。

コップは使わずに、と言っても瓶からは少し口を離して水を喉の中に流し込んで眠気を飛ばし、やっと完全に開いた瞼を窓の外に向けた。

「……朝か」

日もまだ昇ってはいないが、山の向こうを見る限りあと十数分で太陽が頭の先を見せるだろう。

窓をほんの少しだけ押し開けると冷えた空気が顔に当たった。

気温的には夏間近なのだろうだが、ここの土地質なのかそれとも早朝だからか、適度に乾いた涼しい風は心地良いものだった。

少し離れたベッドに意外と大人しい格好で寝ているジェミニを横目に、窓から離れ扉に向かった。

昨日は結構飲んで騒いだつもりだったが、当然のように酔いも疲れも残ってはいない。

扉を開けると先程の風は無い。

当たり前だ、ここはまだ室内。昨日の部屋のように中庭に続いているというわけでもない。

先程の風が恋しくなり、外に出てみようと少し歩いてまわることにした。

途中で何人かの使用人たちとすれ違った。

何れも昨日の酒の席で見た顔ばかり。

お疲れ様です、と慰労の念をこめてすれ違う度に会釈を交わした。

こうして何気なく歩くだけでも楽しいものだな、一人で感じ入りながら歩き続ける。

どれ位歩いただろうか。

もう目的は外に出たいではなく、完全に散歩を楽しむことにすり替わっていて、まだ通っていない通路を片っ端から練り歩いていた。

それでもまだこの巨大な城の十分の一も踏破できてはいないだろうが。

新たに見つけた階段を上り更に廊下を進んでいく。

結構な歩数に至っているとは思うが、同じ所をグルグルと回っていた訳ではないので、大して疲れもしないし退屈でもない。

そんなことを考えていると、右手に続く通路の奥に比較的大きな片開きの扉を見つけた。

位置的に誰かの部屋と言うのは考えにくいし、ほんの僅かに空気の揺れを感じる。進行方向を折り曲げ扉に続く通路に入り、はやる足をそのままに扉に近づく。

辿り着きざま、その扉を押し開いた。

瞬間扉の隙間から、朝特有の涼やかな風が全身を通り抜けた。

目に入ってきた陽光に目を細める。

しかしその夜明けのほんの少しだけ茜色が混じったその光は強い、というより美しいと形容する方が正しくて、決して嫌なものではなかった。

いつの間にか城の一番上にまで着てしまっていたらしい。

前には壁がなく、上には天井がなく、暫く歩けば床もなくなった。

どうやら眠らない町も仮眠は取るらしく、今は町中に沈黙がどっしり腰を据えている。

足を中空に投げ出す格好で　地面が終わるその縁に座り込んだ。

別に何をするでもなく、太陽がその想い身体を起き上がらせて行くのを眺める。

……ほんの少しだけ、懐かしさを覚えた。

星も大地も大海も変わっていく中で、太陽だけは毅然と欠片も変わることなく今日も何回目とも知れぬ起床を繰り返していたことに。

どれくらいそうやっていただろうか。

大体太陽が全て出終えるくらいなので、まあおおよそ三十分ほどだろう。

相も変わらず朝焼け色の空と町を見比べていると、不意に後ろからガチャっと扉が開く音が聞こえた。

「……ハルユキ」

とてとてと短い間隔の足音と、自分の名前を呼ぶ消えてしまいそうな小声には覚えがあり、振り向かなくても誰がそこにいるかは分かった。

「早いな、フェン」

そう挨拶すると、ゆっくりと近付いてきて拳三つ分ほど間を開けて俺の横に座り込んだ。

「……っと」

ぐらっと前につんのめりそうになるフェンの首根っこを捕まえて身体を支える。

「…デリカシー…」
「はいはい」

心なしか半眼で恨めしそうに俺を睨むフェンから手を離した。

再び目の前に広がる絶景に視線を戻す。

フェンとの間に基本会話は少ない。

2人だけのときは2人してボーっとしていることがほとんどだ。

別に苦しい沈黙ではない。むしろこれはとてもお穏やかな空間で、この状態が一番自然なのだと思う。

フェンは性格上話が得意なほうではないし、俺もボケッとする事に関しては一億年の時間の中で死ぬほど経験した。

だから何時も通り2人とも何をするでもなく、宙に投げ出した足をプラプラさせながら景色を楽しんでいた。

「……ん？　何でこんなことに来たんだ？」
「…外の風に当たろうとして、迷った」

だから、こういった会話が発生するのはどちらかが何気なく発した言葉が何気なく続くだけ。

「お前酔ってすぐ寝てたしな」

そう言えば。
前の晩、城中に広がった大規模な宴でレイや王女達にユキネもろとも酒を飲まされ、たちどころに潰れてしまっていた。

「まだ、頭痛い…」

大方風に当たろうと思って俺と同じように城の中を彷徨った挙句、ここに行き着いたのだろう。

「でも、楽しかっただろ？」
「…うん」

そう言ったフェンは未だ楽しそうに足をぷらぷらと揺らしている。

フェンは口調にも、表情にも感情が少なく、初めて見ただけでは感じ取れない程だ。

しかし、感情がないわけではない。

その分、確かに感情が何処かに現れるのだ。

それを見つけると少しだけ得意な気分になってしまう。

「……イサンと、レイとか、イシルとダイノジみたい、だった。…家族、かな」

「ああ、ああ言うのも家族って言うんだろうな」

部下、隊長、従者、上司、使用人。

色々な立場こそあれど、あれ程幸せを分かち合える奴等を家族以外のなんと言うのか。

そこでフェンのせわしなく上下していた足の勢いが、心なしか弱くなっていることに気付いた。

「……」

「…お前、親は？」

「……いない。と言うより、十歳までの記憶がなくて、倒れてた

所をモガルに助けられたらしいから、分からない、と言ったほうが正しい」

いつもの様に話し終わった後、フェンはふうと息をついた。吐いた息にはどこか不安な色が混じっていたかもしれない。

対して俺は、少しだけ驚いた。

沈黙は苦痛ではない。だから会話は少なかった。でもそれはつまり、言葉が足らないということ。

つまり、お互いのことを知らないということ。

互いに距離が開きすぎている、ということかもしれない。

考えてみると、俺は目の前の女の子の事を驚くほど何も知らなかった。

「……嫌いに、なった？」

何でだよ、と心の中で突っ込みながら苦笑をこぼした。

それでもフェンは俺が黙っていたのを曲解したのか、不安そうに揺れる瞳で俺を見上げていることに気付いた。訳のわからない質問に思わず笑ってしまったが、不安そうな色がそこかしこに浮かんでいたのでしっかりと返答したほうがいいか。

「ならねぇよ。俺はお前を嫌いになんか絶対ならない」
「……うん…」

もぞもぞとくすぐったそうにフェンが少しだけ体を揺らした。

「…ただ俺と一緒だと思ってな。俺も親はいなかったんだ。俺の場合は俺を産んですぐ死んじまっただけだけどな」

親父は誰かも分からないし。まぁ、母親のほうは確実に俺が殺したって言った方がいいんだろうが。

「……嫌いになって、ない？」
「だから、なってねぇって」
「……好き？」
「それは、まぁ……そこそこだ」
「私は、好き、だよ……？」
「そりゃ光栄だ」

ぐりぐりとこれでもかと言うほどに頭を撫でる。

顔は少し不満そうだが、楽しそうにフェンの足が再び揺れだした。

いつの間にか俺とフェンの間はちょうど拳二つ分に。ほんの少し。

たった拳一つ分。

でも確実に近付いていた。

◆

◆

◆

此方で御座います、と恭しく頭を下げ先を促す老年の執事の前を通り過ぎた。

そこから数歩、歩みを進めれば眼前に室内にも拘らず巨大な扉、と言うより門が大きな顔して鎮座していた。

その下には更に兵士が数人配置されていて、客として呼び出された俺にも警戒心を滲み出させている。

その中の2人が厳つい顔のまま、門の内側にある別の小さな門に手を掛けゆっくりと開いた。

「此方です。お入りください」

流石に何でもない時にこの巨大な扉を開け閉めはしないのだろう。

小さく見えがちで近付いてみると普通の大きさだった扉をくぐり、続く空間へと身を晒した。

門の前から続く赤い絨毯。

部屋の奥には天井まで背凭れが続いた巨大な椅子。

つまりは、玉座。

「ようこそ。歓迎するわ」

しかし玉座に人影はなく、その一段低い両脇に設置されたそれでも豪奢な椅子にそれぞれやんごとない格好の人間が座っていた。

片方はもう見慣れた王女様。

そしてもう一人は不機嫌そうに此方を見下ろす年の頃６０程の男。

見定めるかのように此方を見下ろしている

それだけでも居辛いのだが、さらに荘厳な装飾が施された部屋に、こんなラフな格好でいつまでも居座るのは気まずい事この上ない。

ポケットに手を突っ込み重い空気に虚勢を張りながら、早口に言葉を発した。

「…んで、話ってなんだよ。俺も忙しいんだぞ」

「そんなもの私のほうが忙しいに決まってるでしょ。王女なのよ私」

「仕事熱心には見えないぞ」
「色々あるわよ。最近は危ない薬とか回ってるし、その他にも無法者が後から後から湧いてくるし、どう？　代わってみる？」
「…遠慮しとく」
「賢明ね。なら本題にうつるけどいいわね？　というかうつるから黙って聞いてなさい」

片方に座っている男とは逆に王女はいい暇潰しでも見つけたかのようにいい笑顔で話を続ける。

「そこにいるのは、チェルストエって言ってこの国の大老っていうか摂政みたいなものなんだけど…」
「王女。そこから先は私が…」

王女の言葉を切って男が口を開いた。

余程上機嫌なのかその事に怒りもせず椅子の背にもたれ掛かると、どうぞと手を振って先を促した。

男は小さく返事をすると、俺を軽く睨みつけた。

「ハルユキ殿。お主はあの”憑物”を担当してもらう事になった人間で間違いないな？」
「ああ、そうみたい、だな」

見ればいつの間にか、部屋の隅に用意された台座の上に例の角が居座っていた。

視線を戻すと、更にイライラした顔で男が俺を睨んでいた、が、俺と目が合うと少しだけその表情を緩和すると咳払いを一つして続けた。

「お主の実力は王女より聞いた。……しかし”憑物”に関わる行事は誕国祭でも重要な位置を占めている。もちろんお主の実力が足らないと言っているわけではない。ただ…」

「知名度がね、足らないの」

先程のお返しとでも言うように王女が大老の言葉を追い越して、事実を述べた。

「左様。私どもが認知する分には構いませんが、何しろ重要な役柄である分、国民にもそれなりに盛り上がってもらわねばならないのだ」

「そして、この誕国祭のイベントの一つとして来月武道大会があるんだけど。……後は言わなくても大丈夫よね？」

そう言って、愉快ここに極まれりとばかりに王女がせせら笑う。

俺の唇もそれに対抗するようにひくっと独りでにその形を歪ませた。

朝焼け空（後書き）

感想お待ちしています。

オヤジ

「はーん、で、来月出ることになったのか」
「いや、今すぐ決めろとは言われてないんだけどな」

そこまで言って何やらウイスキーのような味と香りの酒を口に含むほどだけ飲んだ。

あの妙な通告を受けて三日。

今は前金としてもらった多少の金を使って宿を取り、金に困ってはいないもののとりあえず少しずつ仕事をこなして金を貯めている。

しかし、中々クラスは上がらず貰える金も微々たる物だ。

最初のチームを作ろうという提案もいつの間にか自然消滅してしまっていた。

そこで何となく暇を持て余していた時に再会したのが横に座る男。
ここに初めて来た日に、初めて話しかけたあの細身のオヤジだ。

名前はキィラルと言って、この3日間ギルドの中に作られた酒場で一緒に飲むことが増えた。

「どう考えてもそりゃ”舞武”のことだよなぁ…」
「”舞武”？」
「お前が出ることになりそうなその武道大会の事だよ。あー…っと、

ありゃ確か個人戦とチーム戦があって…、いや男と女だったかな？
とにかく凄い規模だぞ。国の外からも色々出てくるし生半可な実力じゃ予選も突破できないぞ」
「…まぁ、何でもいいけどな」

そう言って溜め息をこれでもかと言う程に吐き出した。

とりあえず出るつもりではいる。

優勝すれば金はもっと入ってくるし、断る理由もない。半ば気持ちが決まると結構頭がすっきりしたので残った酒を一気に流し込んだ。

「…あれ、おっちゃん。煙草は？」

ふと横のキィラルの様子が違う事に気づいた。

何時も、と言うよりこの二日はいつでも煙草を咥えていた印象があったが思い返してみたら今日は煙草を吸う事もなく、いつもの様にくたびれたシャツの胸ポケットに入ってもいない。

その事を指摘するとキィラルは苦笑いしながら飲もうとしていた酒の瓶を静かに机の上に置いた。

「……息子になぁ、会うんだよ。煙草臭いって言われたくねぇんだ…」
「……結婚してたの？」

「してるよ、もう３８だぞ？　息子ももう１２歳だ。……前に会ったのは８年前だけどな」

そう言ってジョッキになみなみと酒を注ぎ込んで一気に喉に流し込み、ドン、と勢い良くジョッキを机に叩きつけ大きく息を吐いた。

「…おっちゃん…」

非難がましい目を向けると、眉間にしわを寄せてキィラルが下を向いて机に顔だけ上げて覆いかぶさった。

「……分かってるよ。一緒にいてやるべきなんだよなぁ。でも仕事を変えてから収入も減っちまって、一緒にいれるようにって思ったから転職したんだけどなぁ」

「……大変だな」

余程大変だったのだろう。何か話す度に凄い量の酒を呑みこんで行く。

「大変だよ。大人は何時だって大変だ。……でもなぁ、でもやっと今の仕事にも慣れてきてなあ、お得意さんも増えてきて、収入も何とか三人養えるぐらいは増えて。俺の実家に預けてた二人を迎えられるんだ…。胸張ってなあ…」

「…んじゃ。しょうがねぇから奢ってやるか。ほら飲め飲め。祝い

酒だ」

「ああ……。ありがたく、もら、う……」

囁く様な小さい声を絞り出した後、ゴトッとカウンターに突っ伏してキィラルは動かなくなった。

「……寝た…」

直ぐに喧しい鼾が聞こえてきた。

よれよれのシャツはずぼらで情けない印象しか伝わってこない。

でも何となく、酒に潰れて、疲れて、痩せてしまった目の前の男の背中は決して小さくは見えなかった。

何となく苦笑いを浮かべながら立ち上がる。

おっちゃんの知り合いにも多少顔は見せているので、探せば見つけられるだろう、とカウンターを立つと。

「おや、見知った顔だ」

後ろで嫌な声が聞こえた。

「焦げた身体は何とか無事でしたか。いや心配していましたよ」

嫌々ながらも振り向くと、芝居がかった手振りでこちらを見下す男の姿があった。

暑苦しい青いマントを羽織り、後ろにぞろぞろと部下らしき人間を数人連れている。

「サルドさん。ここでは……」

部下の一人がサルドに近寄り、耳元に呟いた。

ちらちらと部下が視線を後ろに送っているのに気付いた俺は後ろを振り返った。

飲み潰れているキィラルの他には無言で酒を注ぐマスターぐらいしかいない。

直ぐに視線を戻すと、サルドでさえも苦い顔をしていた。

しかし、俺が見ている事に気づくと直ぐに偉そうな笑顔を顔に貼り付けた。

「私も”舞武”に参加する事にしましてね。あなたも出るらしいですね、ならばまた会う事もあるでしょう。もし貴方に本当に実力があれば、ですが。ふふふ、また黒焦げにならないように祈っていま

すよ」

清清しいほどに嫌味をたっぷり残して高笑いしながら、俺に背を向け酒場の二階へと上がっていった
追いかけて後頭部思い切り殴りつけてやろうかと思っていると。

「おぉい、俺だけ飲んでもしょうがねぇだろぉがよぉ！」

いつの間にか目を覚ましていたおっさんが後ろからしなだれかかって来た。

「のわッ、酒臭っ！　うわ、クソ…！　離れろオヤジコラぁ！！」
「…うっ」
「……おい」
「……ォロロロロロロ！！」
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁあ！！！」

◆
◆
◆

「ノイン様。…例の物が」

「へぇ、早かったわね」
「はい、とある商人が所持しておりまして。譲って頂きました」

特に何をするでもなく、従者に煎れてもらった紅茶を啜りながら上下を見下ろしていた王女にの部屋に先日婚約したミスラが入ってきてそう報告した。

左手の薬指にはシンプルな白金の指輪が大事そうに嵌められている。その手で此方に差し出してきたのは、幾重もの布で包まれた棒状の物体。

先端の布だけ引き剥がし、中身を確認する。

「これが…。流石に年月を感じさせるわね」
「しかし魔力はほとんど検知されませんでした。本当にそのようなものを…？」
「問題なのは歴史的価値よ。それに舞武で得られるのは名誉であって利益ではないわ。さる英雄が使っていた物らしいし、副賞としては丁度いいでしょ？」
「……そう、ですね」
「でも流石にボロボロね。ある程度綺麗にしてから町の方に何日か展示するわ。用意を」

横に控えていた老獪な従者にそれを渡すと、従者は一礼して部屋を出て行った。

「それとノイン様。例の薬ですが…」
「ああ、何だったかしら。…ああ、確かメフィスト」
「はい。メフィストの流通が尋常じゃないほどの速度で上がっています。以前検挙した商人も詳しいことは知らなかったようです。恐らく何人も経由させて出所を誤魔化しているのでしょう」
「…厄介ね。今メフィストについて導入している人員数は？」
「大よそ３０人ほどです」
「１２０に増やしなさい」
「１２０……ですか？」

一介の事件に使うにはかなり多い人数だ。それでも全兵士の１％にも満たないがそこまで大仰にすることだろうかとミスラは考えた。
それを表情から察したのかノインが珍しく真剣な顔で口を開いた。

「確か、メフィストの効果は過度の快感作用と魔力の増幅に、意識の錯乱、だったわよね」
「はい」
「恐らく直に一般市民にも被害が出始めるわ。錯乱した服用者に襲われることも増えるでしょうね。そうなったら被害は更に爆発的に増える。そんな事を私の国で起こさせる訳には行かないわ。だから１２０人よ、全力で探し出して私の前に引きずり出してきなさい」
「……はッ！」

力強く返事をすると、騎士の外套を翻しミスラは部屋を出て行った。

◆
◆
◆

「で？　何で俺までここにいるんだ？」

キィラルにおぞましい物をかけられたその数日後、とある食事店の一席で疲れたように呟いた。

食事店少しだけ寂れた感じがいい雰囲気を生み出していて、上を向くとあの扇風機みたいなあれがくるくると回っている。

そこのカウンター側の席にに俺とキィラルは陣取っていた。

「良いだろうが、別に。他の奴はお前みたいに暇じゃないんだよ」

何か物申そうとした口を開きかけて、閉じた。

確かに暇と言えば暇なのだ。

何か良い仕事が入っているわけでもなく王女に呼び出されていくわけでもない。

おそらく今日は他の四人もゆっくり町見物でもしている筈だ。

「かみさんが引越しの準備とかで来れなくなったから二人きりで会えって言うんだよ…」
「会えばいいだろ」
「会えるかボケェ！　お前っ、ホントに！　俺が今どれだけいっぱいいっぱいか知らねぇのか！？」
「知らんわ」
「なら帰れ！」
「帰る」
「まぁ待て。落ち着け」

帰ろうとした俺の肩を帰らせようとしたキィラルの手ががっしりと捕まえた。

振り返ると、キィラルが俺を睨みつけるように下から目で頼み込んでいた。

しかし一人で自分の息子に会うのが心細いって……。父親としてどうなんだろうか。

「……俺にどうしろってんだよ」
「そこだ。そこで見ててくれてたらそれで良いから！　もう大丈夫だって思ったら帰ってくれてもいいから…！」

キィラルが指したのは俺たちがいるその後ろの席。

何となく勢いに押し切られ、そこに座ってしまった。

座ったのを確認するとキィラルは元の席に戻ってしまったので、反論する事もできずに結局親と子の再会を見守る事になってしまった。

と言っても暇なので何か頼もうと、机の隅に置いてあったメニューを手にとってみる。

「……読めない」

英語でもない日本語でもないそれは俺には難解すぎた。

メニューを放り出し、この時代にしては珍しい近代的で大きく透明な窓の向こうの街道に目を移した。

大街道の一つ外側に面するこの道も、他の街の物と比べれば十分に広く人通りも多い。

狭い分此方の方が密度的には高いぐらいだ。

「おっ……」

そこで通行人の一人と目が合った。

そいつは横にいたもう一人の裾を引っ張り此方を指差すと、人混み

を避けながら此方まで近づいてくる。目の前にガラスがあるのを確認すると、回り込んで入り口から入ってきた。

ガランガラン、と来客を知らせる小さい鐘の音が響く。

入ってきたそいつ等はキョロキョロと部屋を見渡して俺を見つけると小走りで駆け寄ってきた。

「何してるの？　ハルユキ」

そう言いながらフェンは向かいの席に座った。

隣にいたユキネももその隣に。

「あのおっちゃんのお守りだ」

「お守り？」

顎で軽くキィラルがいる方向を指した。そこではキィラルが落ち着かなそうに身体をひたすらに揺らしている。

「ああ、そうだフェン。これなんて読むんだ？」

先程放り出したメニューを手元に引っ張り出し、適当な所を開いて一番長いミミズののったくりを指差した。

それは名前に比例してその横の文字、おそらく値段だと思われるそれが他の料理より桁が1つ多い。これは食べてみるしかないだろう。

「これは…」

「あ、待て。すいません、注文を…」

結局、長すぎて覚えづらかったので店員を呼ぼうと手をあげた。

ガランガラン――…

そこで再び来客を告げる小鐘が体を揺らして、涼しい音を発した。

上げていた手を下ろし、フェンの肩越しに入り口を覗き込むと、そこにはフェンほどの背丈の子供が憮然とした顔で店内を見渡していた。

父子再会（前書き）

短い話の練習なんですが…うーん…もうちょっとこう……うーん…

父子再会

キィラルが大げさに手を振り、それを見て顔色一つ変えずに子供は目だけでそれを確認すると、黙々とキィラルの前まで歩き止まった。

感動的な再会にはならないだろうとは思ってはいたが、それを少なからず願ってはいただけにガッカリ感は拭えなかった。

明らかに幸せなオーラを出しているのはキィラルだけなのだ。

「――――久しぶりだなルウト」

「うん」

短くそれだけ返すと、ルウトと呼ばれた少年はキィラルの向かいの席に座り込んだ。

キィラルも一緒に座ったは良いものの、言葉が続いていない。

「…そ、そうだルウト！　ジュース飲むか？　金はあるから…」

「いらない」

「そ、そうか…」

立ち上がりそうになるほど力んだキィラルの体が萎む様に椅子に崩れ落ちた。

そしてまた沈黙。

そして何を思ったか此方にチラッと目線を送ってきた。それを全力で顔ごと逸らすことで避けて事なきを得た。

「無理無理無理無理何あの空気耐えられないって何で俺こんなとこにいるんだよもう帰りてぇよ馬鹿野郎…！」

大体家族間の問題なんて俺が最も苦手とする分野の一つだ。

そもそも助けになんてなれるわけもないし、ここにいる意味がそもそも無いと思うのだ。

今窓の前を通り過ぎたうすらハゲより役に立たない自信がある。

キィラルは何をしていたか、とか迷わなかったか、とか当たり障りの無い質問をしてはいるものの一向に会話にまで発展はしていない。

そして考えていた話題が早くも底をついたのか、沈痛な沈黙がしばらく続いた。

「ねぇ」

初めてルウトのほうからキィラルに声をかけた。

「ど、どうした!?　何だやっぱりジュースか!?」
「違う。それと声大き過ぎ。うるさい」
「す、すまん…」

またしおしおと縮んで行く。

それにしてもかっこ悪い…。

十二歳にマナーを注意される親ってどうなんだ。

「……俺、これからこの町にずっと住むんだよね」
「…そうだ、すまないな俺の都合で振り回しちまって」
「じゃあ、この町のギルドに連れて行って」

キィラルの話を聞いちゃいねぇ…。

そしてキィラルそれに気付いてねぇ…。

その証拠に一生懸命今の言葉の意味を噛み砕こうとしてるし。

「出来れば一番強いチームの所に連れて行って欲しいんだけど」
「強いチームって…。それはいいが、一体何するんだ?」

「別に…」

いまいち的を得ないルウトの答えにキィラルは眉をひそめる。

が、その後何を思ったのかよし、と頷いた。

「父さんに任せろ。仕事柄免疫、と言うか、コネがあるからな。そうだな、今からでも大丈夫だぞ」

「じゃあ行こう」

言うが早いか、ルウトは席を立ち出口へと早足に向かっていった。

慌ててキィラルも自分の分だけ勘定を済ませ、入り口で不機嫌そうにキィラルを待っているルウトに小走りで近寄っていった。

親子並んで扉をくぐった。

そこでキィラルがふと何かに気付いた。

視線の先には自分の鳩尾辺りにあるルウトの頭の先。

前に見たときからどれくらい成長したのかは俺には分からないが、キィラルは嬉しそうに苦笑いするという矛盾するようなしないような。

そんな父親臭い顔をしていた。

◆
◆
◆

「何だかんだで結局付いて行くんだな。まあハルらしいと言えばらしいけど」

ふふふ、と意味ありげに笑うユキネが憎たらしい。

まあでも実際最後まで付いて行くことにしたんだけど。

乗りかかった船だし、帰り道もほとんど一緒だし。

それに喧騒の中では比較的話しやすいのか、前の二人は先程よりも重い空気ではないのも大きい。

と言っても、キィラルが一方的に話しかけ、ルウトがそれに適当に一言二言返しているだけだが。

俺も先程頼めなかった分を、祭り間近だからか増えた露店で色んなものをつまみながら、中々有意義に歩いている。

「む……」

今たまたま口に入れた、たれでこんがり焼いた鶏肉が俺の好みにベストヒットした。

今非常に酒が呑みたい。

「…おいしい…？」

そんな表情を目ざとく見抜いたのか、フェンが横から物欲しそうな顔で俺を見上げていた。

「食うか？」

そう聞くと、こくんと無言で頷いた。手串に刺さっている鶏肉を一本渡そうと抱えていた袋の中に手を入れようとするが中々うまいこと取れない。

「……一口で、いい」

両手に色々持ちすぎて四苦八苦していた俺から幾つか荷物を受け取ると、控えめにあーっと口を開いた。どうやら入れてくれと言いたいらしい。

素直にその口の中に先程まで食べていた鳥串を運ぶ。

一瞬迷ったような素振りを見せたあと、一息に、と言っても一番先端の一欠けらだけをパクッと口の中に入れた。

もぐもぐと咀嚼を始めるが、どうやらまだ熱かったらしく顔を真っ赤にしている。

「……私も」

いつの間にか横で睨んでいたユキネも焼き鳥を要求してきた。

これ以上自分の取り分が減るのも嫌だったが、まだたくさんあったので丁度食い終わった串を空の袋に入れ焼き鳥を袋ごと差し出した。

「……一口でいい」

「いや、お前はそんなに慎ましくないだろ」

「……もういい！　バカ！　バーカ！」

そう言って袋を俺に押し付けると、ずんずんと先に歩いていった。

何で怒っているのかとか、食べないのかとか言いたいことは山ほどあったが触らぬ神に祟りなしと言うことでここはひとつ。

やがてどんどんと人が、特に腰や背中に武器を背負っていたり鎧を着込んだ人間が増えてきた。

この辺りの町並みも比較的見た覚えがある。

もうギルドのすぐ近く、というより見上げてみれば既にあの巨大な風貌が立ち誇っていた。

見ると丁度ルウトとキィラルがギルドの中に入っていくところで、ルウトはずっと待ち望んでいたのか先導していたキィラルを追い越してギルドの中に入っていき、それをキィラルも慌てて追っていく。

さて、これからどうするか。

もう問題ないといってもいいが、一番強いチームって言うと……多分あの馬鹿がいるあのチームだろう。

少し先行き不安な要素があるし、ここまで見てきたのだから最後まで見守ってやるかと溜め息をつきながら決心すると3人でギルドの中に入った。

何時ものようにもう飲んだくれている奴もいるし、依頼が張ってある掲示板の前でうろうろしている奴もいる。

店内を軽く見回すと、キィラルがルウトを連れて見覚えのある鬱陶しい金髪と暑苦しいマントが特徴の男の一段が陣取っているテーブルへと近寄ろうとしている。

慌てて、離れすぎずかつ近過ぎて見つかりもしないような所を探して、そこに急いで座り込んだ。

「……すまん。ちょっといいか」

キィラルは意外と平気な顔で、飲みながら自分の武勇伝を聞かせていたらしいサルドの背中に声をかけた。

「ん…？　ああこれはこれはキィラルさん。何か御用ですか？」

何時ものように高飛車な話し方で鬱陶しそうな声を出した。偉そうに足を組み、顎の先が上げ何が何でも人を見下さないと仕方が無いという風は相変わらずだ。

「ちょっと息子がな。一番強いチームに会いたいって言うんでな。そうなったらこの”ブレイズ・ロア”しかないだろ？」

長年の客仕事の経験からだろうがキィラルにしてはうまく相手をおだてた言い方だったと思う。

その証拠に心なしかサルドの機嫌が良くなり、改めてルウトとキィラルを見渡した。

「そこの子供が…」

「子供じゃない」

上機嫌に語りだそうとしたサルドの言葉をルウトが断ち切った。
もちろんわざとやった訳ではないだろうが、サルドにとっては不愉快なことだったようでサルドの顔はまた不機嫌を呈しだした。

「子供ですよ。弱くて、幼い。そんな生き物を子供と言うんです」

組んだ顎に手を載せ、説き伏せるように言葉を発したサルド。
それを聞いてルウトは何を思ったか、サルドの部下であろう何人かを見渡し始めた。

「幼いかどうかは分からないけど、俺はそこの男よりは強いよ」

そう言って指差したのはサルドの横に立っていたいかにもなゴツイ男。

しん、とそのテーブルの周りが静まり返った後、どッと笑いが起こった。ただキィラルだけは横でおろおろしだしたが。

「おいおい、パージ。お前こんなガキにも負けんのかよ!!」
「……ッく!」
「確かにこいつは入ったばかりでそこらの連中に比べたら弱いかも知れないが、子供に勝てるような実力ではないですよ?」

今度はあやす様に穏やかなそれでいて癇に障る声で表情を変えないルウトに囁いた。

「じゃあ」

その言葉を待っていたかのようにルウトが口を開き、

「じゃあそのおっさんに俺が勝てたらこの”ブレイズ・ロア”に入れて」

そんな事を口にした。

父子再会（後書き）

感想、意見、アドバイスなどお待ちしております

男子三日会わざれば刮目してみよ（前書き）

結石が出ない…。
お腹痛い…！

男子三日会わざれば刮目してみよ

「はい、じゃあワルピラットの角5本。確かに受け取りました」

依頼で頼まれた巨大な兎に生えた角を受付に渡した。

肘から指先ぐらいまでの長さの曲がりくねった角で、すり潰して他の色んな薬草と混ぜると良い薬になるらしい。

「そして、この依頼をもってハルユキ様をDランクに認定させてもらいます」

報酬もやや高めだったが、一番の目的はこれだ。

ランクを上げる方法には地道に依頼をこなして行く方法と、誰かこのギルドと懇意なチームか登録者に紹介してもらい試験を受ける、という方法があるらしい。

しかし根無し草の俺達にそんな人脈がある訳も無く地道に上げてここまで来たと言うわけだ。

「はい、お疲れ。フェンこれ報酬な」

うちの財務大臣であるフェンに布袋に入れられた銀貨を渡す。

「はい、…お小遣い」

その中から今日の分のお小遣いを頂戴しそれをユキネにも分ける。

今日の依頼も三人で行った。

何時もはジェミニも一緒なのだが、今日は、というより昨日から姿が見えずレイはいつも何時の間にか帰って来て、昼まで寝ているのでもうどうしようもない。

と言ってもレイは魔力を血として変換しているためか、魔力がほとんど感知されずGクラスからだったので仕事に参加も出来ないのでしょうがないということもある。

チームを作ればその限りでもないのだろうが、別にこのままでも不便はなくなったので今のところそのままにしているのだ。

「……そういえば飯まだ食ってないな」

「どこかに食べに行くか？」

「いや、もうギルドで何か頼もう。疲れたからあまり動きたくないし」

2人とも何か食べたいものがあったわけでもないらしく、俺の提案に首肯したのを確認して手近の空いてる席に座り込んだ。

そして、たまたま通りがかった店員を呼び止めようとした時。

ギルドの何処からかざわめきが広がってきた。

ざわめきの色は不快と畏敬。

まだ見えないが、恐らくサルドたち”ブレイズ・ロア”が帰って来たのだろう。

ぞろぞろとサルドが先頭になって我が物顔でギルドの中を闊歩していき、おそらく自然に指定席となっているのであろう、混雑の中でも不自然なほどに人気が無い奥のほうの机に向かっていく。

先程言ったように先頭はサルド。周りに特にサルドと仲の良さそうな何人か、そしてサルドの横にはルウトが大人の歩幅に合わせるためか黙々と歩いていた。

◆
◆
◆

「…チームに、入る？」

擦れた声では分かりづらいがそれは間違いなくキィラルの声だったろう。驚きと心配が混じったような声色だったので間違いない。

しかし、周りもすぐに似たような声を上げだしてキィラルの声は埋もれていく。

冷静なのは張本人のルウト、そしてそれを観察するように見つめているサルド。

他の人間には、キィラルも合わせて驚いている人間か呆気に取られている人間しかいない。

「……気に入りました。私は気に入りましたよ」

ぼそっと呟くように言った声でも統率の声は絶対なのか、周りのざわめきは収まっていく。

「本気か、サルド…！」

「キィラルさん。ルウト君はお幾つですか？　見たところ十二、三歳といった所でしょう？」

「……十二だ」

「十二歳。この世の中その歳で働いている子供なんて珍しくありませんよね？　もう子供の意見を尊重させる時期かと。それに危険性があるかどうかはこれから確かめられる。この新入りのパージさえに勝てなければとてもギルドで仕事など出来ませんし、逆に倒せるのならそれはもう子供ではないということでしょう？」

そこで一息ついて、キィラルが言葉に詰まっていることを確認すると楽しげに言葉を続けた。

「それに今なら私も貴方もいるのだから危なくなったら止められます。今無理やり止めさせて後で無茶させる可能性を作るよりとりあえず納得できるまでやらせてみては…」

言いたい事は全て言ったのか、サルドは笑顔のまま体の力を抜いて背凭れに背を預けた。

一方キィラルは追い詰められたかのように切迫した顔つきでピクリとも動かない。

そのまま時間だけが過ぎていくかと思われた時、キィラルがゆっくりと口を開いた。

「……ルウト。本気で、入りたいんだな？」

「本気だよ」

「……分かった。なら勉強させてもらって来い」

それだけ言うと、再びサルドの方に向き直りよろしく頼む、と切実な声で頭を下げた。

頭を下げている父親を横目で一瞥してから、ルウトは一歩前に足を

踏み出し、それを見て満足げにサルドも立ち上がった。

「それではこの地下の試験闘技場を使わせてもらいましょうか。決闘にも使わせてもらえるはずです」

勢いよく立ち上がり、受付へと足を向ける。肩で風を切って歩くサルドに取り巻きの何人かもぞろぞろと後に続く。

パージと呼ばれていた男も憎々しげにルウトを一瞥すると、不機嫌そうな足音を響かせて受付に向かった。

ルウトも続き、キィラルもそれに無言で付いていく。

かく言う俺も少しだけ驚いて少しだけ固まっていたので出遅れている。

既にサルドは受付に二言、三言話して、奥の階段に消えていった。

「……俺は行くけど、お前ら帰っててていいぞ」

それだけ短く言うと受付に急いだ。

ガチャン、と俺が受け付け内に入ろうとした所で腰ほどまでの扉が閉められた。ニコッとスマイルでやんわり立ち入り禁止を伝えられる。

結果、俺は締め出されるように受付で立ち往生状態。

やばい、どうする。

そこで、ひたすらに傍の机で事務作業に励んでいたウェスリアが目に入った。

目線と思いっきり手を振って自分の存在をアピールしてみると、意外とすぐに気付いてパタパタと慌しく近寄ってきた。

挨拶やら何やらをすっ飛ばし、用件だけを告げる。

「すまん、ここ通してくれ」

「はい、どうぞ」

一応立ち入り禁止となっている扉を簡単に開けて俺を中に招き入れた。

「……理由ぐらい聞かないの？」

「ファンですから」

「…あんた最高」

「知ってます」

早口で会話を終えると、早足に先程一行が入っていった階段に飛び込んだ。

入って十秒もしないうちに開けた空間に出た。

俺とキィラル達がこの地下に入ったタイムラグはおよそ三分ほどだろう。

しかし、入った瞬間目に飛び込んできたのは決着の瞬間だった。

具体的に言えば見えたのは勢いよく地面に迫る円錐状の炎の柱。その頂点にはどうやってそこまで移動したのか、とても子供の跳躍力では届かない中空でルウトが炎を”吐き出していた”。

それはどれ程の熱量なのか、離れたここまで熱が伝わってきて、円錐の底辺にいた男が抵抗しようとして出した水球をいとも簡単に蒸発させ唸りを上げて男に迫っていた。

「うあぁぁぁあッ！！」

成すすべなく両手を顔の前に庇うように掲げ、迫り来る炎の形をした恐怖に目を硬く瞑った男に接触しようとした瞬間、あれ程の炎が一瞬で立ち消えた。

地面の近くで減速しながらほぼ音も無くルウトが地面に着地した。その口元にはまだ微かに残り火が踊っている。着地には炎による気流でも使ったのだろうが、ただそれだけの動作でも実力は伺える

時が止まったように静まり返る空間。

サルドもキィラルも、他の誰もが目を見張って固まっている。

勝敗は、誰の目にも明らかだった。

◆

◆

◆

「いやルウト。お前ホントにスゲェな」

「そりゃあお前、俺を負かした男だからな」

だっはっはっは、と大声の話し声や喧しい笑い声がハルユキの耳まで届いてくる。どうやら今日も何か討伐系の依頼でルウトがそれなりに活躍したらしい。

サルドも上機嫌で何処からか連れて来た女をはべらせて酒をかっくらっている。

「一番大きいのはルウトが倒したものだったらしいですね」

ただでさえ日ごろから騒がしかったサルドの周辺がルウトというスパイスが加わったためにさらに騒がしくなってる。

と言ってもルウトはちょびちょびとコップに注がれたジュースを飲むだけで、ほとんど一言も話していない。

まだまだ続きそうなギルド全体で渦巻く喧騒の中。

その騒音に隠れるように、キィラルが何やら２ｍほどのかばの様な生き物を台車に乗せてギルドに運び込んでいた。

運搬業と言っても、町から町に運ぶ仕事もちょっとした届けごとも請け負っているらしい。

サルドのグループの一人がキィラルに近寄って何か渡している所を見ると恐らくあれがルウトが仕留めたと言う獲物なのだろう。

かばもどきが所々焼け焦げていることからも明らかだ。

恐らく報酬を支払ってもらったのだろう。キィラルは目の前に男と握手を軽く取り交わして、他の何人かの仲間と共に受付まで運んでいった。

懸命に周りに指示を出し、率先して荷車を引っ張る。

その額には少なくない汗が浮かび、それが染みこんでいるであろうタオルを首にかけている。

今のその心情は一体如何なるものだろう。

息子の事を心配しているのか、それとも誇りに思っているのか。

懸命に仕事に打ち込むその表情からは何も伺い知ることは出来なそうだ。

男子三日会わざれば刮目してみよ（後書き）

サブタイトル意味わかんねぇｗ

感想、意見、誤字脱字報告等いつでもお待ちしてます。

薄く、淡い（前書き）

2話ぐらい前からストック切れて急いで書いているので完成度に今まで以上に不安が…

薄く、淡い

”ブレイズ・ロア”というトップチームに入ってから数日が経った。
流石にトップチームと言うべきか首領のサルドを中心として総じて人材のレベルが高かった。
しかし人数も多く、中にはほとんど仕事をしている所を見たことない人間もいる。それは大体サルドとは懇意にしていない人間でそういうグループが何人かルウト達とは離れて飲んでいるところはよく見かけていた。

「ルウト。今日はサルドさんと仕事に行け」

ルウトが仕事の掲示板の前で依頼の品定めをしていると、後ろで何時もサルドの傍に側近のように控えている巨漢がルウトの二倍はある身長から威圧的に見下ろしていた。

「……仕事？　何かあるの？」
「楽しいことだよ」

それだけ言って男はその巨躯を揺らして去っていった。

もう夕暮れで、掲示板を見ていたといってもどんな仕事があまっているのか暇潰しがてらに見ていただけだったので今からの仕事ということに少し違和感を覚えた。

しかし。

――楽しいこと。

たったそれだけで心が動いた。

ここ何日かはもうほとんど一人で依頼をこなしていた。といっても気が向いたときに一つか二つだけだったが。

そもそも生活の為にやっている訳でもない。

ルウトはただ知りたかっただけ、自分は一体どれほどのものなのか。

ルウトは物心ついた時から魔法の才が突き抜けていた。

5歳に満たない年齢で村の大人が誰にもできないことが出来た。そのときはそれが凄い事だとは分からなかったが母親や近隣の住人が褒めてくれるのが嬉しくて毎日の様に魔法を使っていた。

でも褒められることに飽きた時、世界が急につまらなくなった。

どんな名誉な事でも楽しい事でも日常に溶けてしまえば、それはもう色も形も失ってしまっている。

そんな淡い日常を楽しめるほどルウトは大人ではなかったのだ。

だから外にいけると聞いたときは久しぶりに心臓が動いた様な気持ちになった。

実際、ここはやっぱり違った。

首領のサルドは特に凄かった。

ルウトが数分かけて倒した標的を、同じ時間で十数匹仕留めて見せるのだ。

嫉妬はなかった。

ただ羨望があった。

自分より魔法を巧みに使う人間は初めて見た。父親が何時もいなかったルウトには、大人より力を持っていた子供には。

初めて感じる強い憧憬だった。

簡単に言ってしまえば、目の前の敵を全て薙ぎ払い、チームのトップとして自分では手の届かない場所にいる大人が、子供心にかっこ良くて仕方がなかったのだ。

ふと。

何時もの様に汗水をたらして客に頭を下げながら営業用の笑顔を浮かべてお金を受け取るキィラルが目に入った。

「かっこ悪……」

父親になど会いたくなかった。父親が運び屋として働いているのは母から聞いて知っていた。そのときは別にかっこ悪いとも思わなかった。

でもこの華やかな町で、賑やかな住人たちの中で汗水や泥にまみれて仕事する姿に惹かれることはありえない。

「かっこ悪いか？　お前の父ちゃん」

いきなり頭上からそんな声が降ってきた。

見上げてみると、黒い髪にどこを見ているか分からない様なくすんだ灰色の瞳の男がこちらを見下ろしていた。

「……誰？」
「お前の父ちゃんの友達だよ」
「運び屋？」
「いや、一応ギルドに所属してる。この前やっとDに上がったとこだけどな」
「普通だね」
「普通だよ」

普通、とは言ったものの佇まいはどこか掴み所がない。なんというか余裕がありすぎる男だ。

何も映さない灰色の眼からは何も読み取れず、黒い髪が夜の闇を連想させるのか、ルウトは自然と男の目線から目を逸らした。しかし男の目はルウトを越えて仲間達と成功を称え合っているキィラルに向けられていた。

「かっこ悪いか？　お前の父ちゃん」

男はその場にしゃがみ込んでルウト同じ目線になるまで頭を下げると、もう一度同じ質問を口にした。

かっこ悪いか？

悪いに決まってる。でもそんな事言っちゃいけない事ぐらいも知ってる。

でも自分の気持ちを隠す方法もまだ知らない。

「……悪い。かっこ悪い」

一度目の”かっこ悪い”が上手く言えていなかった様な気がして意地になって二回言った。

すると、男は音が鳴るほど勢いよくルウトの頭に手を載せるとぐりぐりと撫で回し始めた。

「そうかそうか。父ちゃんはかっこ悪いか」

そこまで言うとすっと頭の上で動き回っていた手の力が小さくなった。

「でもな、覚えとけ。大人はかっこ良いだけじゃあ、かっこ悪いんだ。…ま、受け売りだけどな」

「…意味わからない」

「分からないだろうから、覚えとけっていってんだよ」

最後にポンと手の平で軽くルウトの頭を小突くと男は酒場の方に消えていった。

ルウトは言葉の意味を少しだけ考えて、すぐに止めた。今はとりあえずサルドの所に行って仕事をやろうと気持ちを切り替える。

確かこの時間はギルドに貸し与えられた2階の部屋にいるはずだ。

階段を上っていく途中でキィラルが恐らく顧客の一人なのだろうが、その人と握手を交わしながら畏まった態度で頭を下げていた。

その姿はやっぱりただかっこ悪いだけだった。

「ふう……」

柄にもない事をしたな、と我ながら呆れながら先程の掲示板から歩いてすぐのカウンター席に座り込んだ。

もう夕暮れで仕事が出来る時間帯でもなかったので、マスターに軽めの酒を注文した。

「……キィラルの、息子か？」

目の前に置かれた小さな控えめなコップを持ち上げて口に運ぼうとした時、どこからか声が聞こえた。

その声が目の前のマスターが発した物だと気付くのに数秒が必要になったのは俺の責任ではないだろう。なにしろ今までマスターの声すら聞いたことがなかったのだ。

どうでもいい事だが、寡黙なマスターの声は落ち着いたいぶし銀だった。

「…ああ、ちょっとお節介しちまったかな」

「いいさ。キィラルとあの子供は良く似ている。ならやはりお節介も必要だろう」

「そう言ってもらえると…」

本当に対して考えての行動ではなく、衝動的なものだった。これでさらに親子の溝が深くなるのならさすがに寝覚めが悪い。

「どうなんだ？　あいつの息子は？」
「天才、なんだとよ。もう問題なく一人で依頼をこなせるレベルらしい」
「そうか」

それだけ言うと、ズラッと流しに並べられた水洗いされたコップを手にとり一つずつ磨き始めた。
丹念に丹念に、傷つけないように。

「あいつは不器用な奴だから、またおせっかいを焼いてやってくれ」

コップを磨く手と同じように穏やかな、それでもやっぱりいぶし銀な声でそう言った。

「俺はああいう問題にはあんまり精通してないんだけど……」
「そうは見えなかったがな。何、自分なりにやってくれればいいさ」
「……考えとくよ」

正直お節介なんてこれっきりにしたい気持ちが大きかったが、何となくそう答えていた。

「…しかし天才、か。――――…」

「……は？」

上手く聞き取れなかったのか、それとも上手く意味を把握できなかったのか。いまいちマスターが何と言ったのか理解できず思わず聞き返した。

「何だ、知らなかったのか」

その後、マスターの口から驚くような事実が告げられた。

「……マジで？」

そう言いながら、その姿を確かめる為に入り口の方に目を向けた。

そこでは顧客相手にキィラルがかっこ悪く頭を下げていた。

「来ましたねルウト」

ルウトは軽く扉をノックした後、返事を待たずに扉を開けた。中は特に装飾がされているわけでもないが高そうなソファが部屋の中心においてあり、そこにサルドが座っていた。

「仕事って？」

後ろ手に扉を閉めてから、サルドの前まで移動した。

「……まずこれから話すことは、他言無用とするように。それとこの話を新入りでしかない貴方に話すのは貴方に期待してそして同時に信頼しているからです。良いですね？」

少し不審さを顔に出したものの、ルウトは話を進めるべく黙って頷いた。

それをしっかりと確認すると、いつもの組んだ手の上に顎を乗せる格好を取ってサルドが続きを話し出した。

「…これを、とある所に届けてもらいたいのです。今からね」

そう言ってポンと目の前の机の上に十五ｃｍ四方ほどの袋を投げ出した。

茶色い封筒のようだが、中に入っているのは便箋の類ではないらしく、真ん中から盛り上がって丸々としている。

「説明は帰って来てから。その方が都合が良いでしょう」
「……どこに届けるの？」
「何。すぐそこです。そこにいる人間にそれを渡して報酬を貰ってきてください」

拍子抜けする。
簡単な、簡単すぎる依頼。文字通りただのお使いだ。どうせやることも大してなかったので目の前の封筒を乱暴に掴み取った。

「…お願いしますよ」

そんな声を背中で聞きながら、ルウトは部屋を出た。一緒に渡されたメモによると何と歩いて5分もかからない位置だ。

当然何の問題も起こることなく、その場所まで到着した。

何のことはない普通の民家。教えられた特徴からその傍らでほっそりと露店を行っている男が依頼人だと察して近付き声をかけた。

「ブレイズ・ロアです。約束の物を」

そう言って目の前に袋を差し出した。すると男は深くかぶった麦藁帽子のつばから此方を慎重に覗き、眼を見開いた。

「驚いたな。こんな子供に…。いや、なるほど誰もこんな子供が…」

何事かぶつぶつと呟いて納得したような声を上げた後、男は懐からまた茶色の封筒を取り出し目の前にゆっくりと置いた。

「報酬だ。持って行け」

それだけ短く言うとまた俯いた。

その気配は完全に町の中に溶け込んでいる。

渡された茶色の布袋を見つめ、何のことはなく終わった依頼に呆気なさを感じながらここからでも見ることができそうなほど近いサルドの部屋へと向かった。

「おお、帰りましたか。ご苦労様です、では報酬を」

先程受け取ったばかりの布袋をさし伸ばされた手の平の上に置いた。

サルドはその重さを確かめるように、顔の高さまでそれを持ち上げた後、ゆっくりとその中身を取り出して確認した。

「えっ……」

驚愕した。

何しろ出てきたのはおびただしい量の金貨。Ａクラスの依頼をこなしたとしてもこれの十分の一の報酬も得ることは出来ないだろう。

ほんの十分。しかもただ往復しただけのような依頼なのに、その金貨はあまりに不釣合いだった。

「何で……」

「ああそう言えば説明でしたね」

惚れ惚れするように金貨を机に並べていたサルドがルウトのかすれた声に反応して顔を上げた。

「何しろ”憑物”の役を降ろされてしまいましたからね。役人に流す金も何も足らなくなりまして。そこで”アレ”です」

「”アレ”…？」

くっくっくと何かを馬鹿にするような笑いを堪えきれずに零した後、もったいぶった話し方で続ける。

「メフィスト。聞いたことはありませんか？」

そう言って笑った顔は汚い大人の顔だった。

薄く、淡い（後書き）

感想、アドバイス等お待ちしております

金貨と銀貨とその重さと

あの仕事を手伝ってから二日。

未だに自分はその仕事を続けていた。

メフィストがなんであるかはすでに聞いた。中毒性が強い麻薬。ブレイズ・ロアはそれの生産・仲介を請け負っているらしい。

これ以上はやれないと言おうとはした。しかし、それを遮るようにサルドが言った言葉が耳から離れない。

――――これでもう共犯ですね、と。

子供を使うというのは、いい隠れ蓑になるらしくあの後も日に何度も町のいろんな所を往復して薬を配った。

そのたびにズシンと感触が手に残る重い金貨の袋がどこか恐ろしく、流される様に怯える様にその仕事を続けていた。

今も幾つかのメフィストを運び、帰路についている途中だ。

どうして、こうなったんだろう。

どうすればいいんだろう。

今日もなし崩しに受け取ってしまった金貨を握りしめる。

それを持っている右手が自分の物ではないようで、どこか定まらない意識で、どこを見ているかわからないような眼で。

ただ無為に足だけを動かしていた。

それが起こったのはその帰り道だった。

ギルドと家との丁度中間の辺り。

そこで町の中の異変に気が付いた。

考え事をしていたせいか、気づいた時には異変は直ぐ目の前。

まず最初に見たのは人だかり。何時もはがやがやと楽しげな喧噪が、ざわざわと不安げな動揺に変わっている。

瞬間。

ボッと乾いた音がして、炎が立ち上がった。

熱風が頬を撫でて広がっていき近くにいた人が吹き飛ばされた。その中心には何かがポツンと立っていて魔法の仕業であることを悟らせる。尋常な魔力ではない、例えるなら魔装具を使わずに魔法を使ったときのようだ。

たちまち人だかりが逃げ惑う人々の壁へと変化しこちらに押し寄せてきた。

その後ろから何かこちらに近づいてくる。

それが何か確認する前に、取り残されたルウトの横を後ろからを何かが複数走り抜けていった。

「一斉にかかれ！　取り押さえろ！」

先頭の厳つい鎧を着込んだ誰かがそう叫び、周りの何人かがその声に応えるように炎を放ち続けるそいつに飛び付きそれぞれ一人ずつ四肢を押さえた後、口に何かを押し当てた。

直ぐにそれの動きは止まり、死んだように体から力が抜けた。

「君、大丈夫か？」

さらに一人同じように兵士の格好をした男が後ろから現れ、ルウトの肩をつかんでそう問いかけてきた。

そこでやっとルウトは自分の体が驚きと恐怖で固まっていたことに気づいた。戦おうとも止めようとも考えてもいない自分に気がついた。

……ああ、かっこ悪い。

「だいじょ……」

それでも返事くらいは、と口を開いた。

「くそッ！　またメフィストだ…！」

しかし、心臓が妙な動きをしてそれを遮った。

苦しそうに話す兵士の下から、再び暴れ出したそいつが胸を掴んで苦しそうに喘いでいる音が聞こえてくる。

吸い寄せられるように視線がそこに移動していた。

赤く血走った眼球は半分飛びだし。

口からは風切り音のようなか細い音が響き、唇の端から泡だった唾液がこぼれ落ち。

暴れるもう片方の腕は憎んでいるかのように敷き詰められた石の地面に爪を立てている。

「どうせもう魔力切れで満足には動けん！　近くの医者のところへ連れて行け！　薬の配備は完了しているはずだ！」

次々と早鐘のように鼓動を繰り返す心臓と同調するようにルウトの

呼吸が速くなっていく。

苦しい。

今まさに運ばれようとしている男と同じように胸を掴む。

が、それに逆らって心臓はさらに加速していく。

直ぐに息苦しさが体を包んで縛っていく。

「……ん？　…おい！　君！　どうした！　返事を……！」

握っていた金貨がこぼれ落ち、地面に当たって高い音を響かせる。

どこか遠くに聞こえる声を聞きながらルウトの体は傾いでいった。

◆

◆

◆

「起きたかルウト…！　無事でよかった…」

ルウト自身が目を覚ましたことに気づく前に、直ぐ隣から声が聞こ

えて自分が今まで眠っていたことを教えてくれた。
まだふらつく頭で横に目線をずらすと、キィラルの顔がルウトをのぞき込んでいた。

「ああまだ起きるな。精神的なものらしいがまだ安静にしとけ」

そう言って起き上がろうとしたルウトの肩を押さえてベッドに寝かしつける。

「……どうしてここに？」
「こいつが運ばれてるお前を見かけてな。教えてくれたんだ」
「よう、久しぶり」

声に導かれるように視線を移動させると、壁により掛かるようにこの前の黒髪の男が立ってこちらを見ていた。

「……」
「……」

それから沈黙が続いた。

考えてみれば、あの日ギルドに入ってからはまともに話していなかったことに気づいた。

といっても何か話すことができることもなく。

ルウトはボーッと天井を見たままだし、キィラルは何か話そうと口を開いてはやめるを繰り返している。

そのまま沈黙が続くかと思っていた時、そんな空気を遮って口を開いた男がいた。

「なぁルウト。お前ギルドの仕事しばらく休め」

つらつらとに脈絡も何もない事を口にした。

ルウトの体が怯えるようにビクッと小さくはねる。

この男は知っているのか？　そもそもルウトがここで寝ている発端がルウト自身にあるということを。

しかし何故。まさか心配してその言葉を？

では何故。この男がそこまでお節介好きなのか？　誰かに頼まれたのか？

動揺を必死に隠しながら、男を観察するが灰色の瞳に阻まれて真意は読み取れない。

自分が罪悪感に縛られていることにさえ、ルウトは気づかない。

「んで、そこの親父の仕事を手伝え」
「……はぁ！？」

驚きの声を出したのはキィラル。

言いながらも横の男の目線を追い、どうするかルウトに目で問いかけてきた。

「…やる」

嫌だった。だから声が出た。いや、出した。

考えたくなかった、触れたくなかった、楽になりたかった、目を背けて別の物を見ていたかった。

それがただ逃げているだけだとしても。

その姿はかっこ悪いと知りながらも。

◆
◆
◆

「ルウトー。ちょっとこっち持ってくれ」

何でそんなに嬉しそうなんだ馬鹿。

心中でそう鬱陶しそうに愚痴りながらも、目の前の家に搬入するために空いているタンスの角を下から支えた。

最初は戸惑っていたキィラルも今は完全に仕事用の顔に引き締まり、黙々と、とは言わないがひたすらに作業に徹している。

そして思っていた通りなのだが、改めて今日一日手伝ってみて思った。

この仕事は結構きつい。

ぷるぷると震える腕をはじめとして、疲れから来る気怠さが全身に満ちている。

当然汗もかくので、かっこ悪いと感じていた手拭いを首にかけていた。

「よし、と。次で最後だな、…ああギアラんとこか」

ポケットから取り出したくしゃくしゃの紙を見て次の仕事先を確認すると、馬車の後ろに移動して何かごそごそやり始めた。

そして現れたキィラルの姿に目を剥いた。

「……何、それ」
「……勇者様、だそうだ」

マントを摘みながら、キィラルが苦笑いを見せる。

それから説明を受けたところ、この格好はとある絵本に出てくる勇者の格好で、その格好のまま子供にオモチャの剣を届けてほしいということだ。

届けてほしいと頼まれた剣は手に持つと、所々に魔石の欠片でも埋め込んであるのかピカピカと点滅している。

「…それ、着いてから着替えていいんじゃないの？」

その格好のまま馬車に乗り込もうとしたキィラルは自分の格好を一度見下ろしてから、いそいそと馬車の中に潜り込んでいった。

柔らかい素材で出来ているのか、手に持った剣は力を入れるとぐにゃりと弾力を伴って曲がった。

「さあ、ここだな」
「…何で俺まで」

適当に余っていた布を体にローブの様に巻き付けてその辺にあった

棒を持った魔法使いもどきが、勇者もどきの横に立って溜息をついた。

目の前にたつ家は、他の町々では豪邸と言われるかもしれないがこの町ではさして珍しくない、そんな普通の家。

「よおし、行くぞ。お前は適当に話し合わせてくれればいいからな」
「……はぁ…」

どうして流されたかはよく覚えてないがまぁここまで来たら腹を括ろうとする決心とは裏腹にまたルウトの口から溜息が出た。

そしてそんなルウトを横目にキィラルは扉の前にぶら下がったドアノッカーを手に取ると控えめにノックした。

「ここがルーアント家か？」

出て来た子供にキィラルが、全く似合わない真面目な顔と口調で話しかけた。

子供の方はキョトンとした顔のまま硬直している。

……。

……。

……。

じわじわとキィラルの額に汗が浮かんで、真面目な顔が崩れそうに

なった時。
同じようにじわじわと子供の顔に笑顔が広がっていった。

「ぱぱーーーっ！　ホントに勇者様がきたーーー！！」
「ははは、どうだパパが言った通りだっただろう？
「ほら勇者様がお前に話があるそうよ、行ってきなさい」
「うんっ！」

ばたばたと両親の元に走っていった子供がばたばたとこちらに戻ってきた。

目がこれ以上ないくらい期待に輝いている。眩しすぎてちょっと直視できそうにない。

さっと目を逸らしたルウトとは対照的にキィラルは腰に差した剣を抜き放ち、ピカピカと不自然に光る剣を両手で差し出した。

「私は年を取ってしまった。次の勇者にこの剣が君を選んだんだ。受け取ってくれるかい？」

驚くほど優しい声だった。

でも決して聞いたことがない声ではない。語調こそ違うが聞いた覚えがある。

「うん！」

元気に返事をして剣を受け取り、ピカピカと点滅するそれを眺めた後、ルウトの方に視線をよこした。

「お兄ちゃんは、誰？」

「え……あー…」

「このお兄ちゃんは魔法使いでな」

驚いて対応できなかったルウトをキィラルがフォローした。

「…火の魔法が得意なんだ」

遅ればせながらもルウトも調子を合わせる。

言った直後、手の平の上に炎の小さい竜を踊らせてやると、また男の子が爛々と光る目でルウトを凝視し始めた。

「すげー……」

「ほら、パパは勇者様達とお話があるからお前はママに剣を見せてやってきなさい」

コクン、と火の竜に目を奪われたまま頷くと名残惜しそうにバタバ

タと去っていった。

火の竜を黙って消し去る。

その横で大人達は苦笑いを交換していた。

「いや、ご苦労様でした。すみませんわがままを聞いていただいて…」

「いやいや、楽しかったよ。なあルウト」

「ああお子さんですか？　立派に育たれたようで羨ましい」

答えるキィラルの顔はにこやかで。

笑う男の顔は晴れやかだった。

廊下の向こうに笑顔で笑顔の母親に剣を見せびらかす子供が見えた。

「ではこちらを…」

男が小さな布袋を差し出した。

じゃらっと金属音が鳴ったところを見るとおそらく報酬、いや料金だろう。

それから一言二言話すと、廊下の奥から男を呼ぶ子供の声が聞こえてきて、もう一度苦笑いを交わしてから扉を閉めた。

「よし、帰るか」

一仕事終えた開放感からかキィラルが先程同様晴れやかな声を出した。

歩き出すキィラルの後にルウトが無言で続く。

馬車の御者台に二人で乗り込むと、キィラルがルウトに先程の革袋を渡して手綱を握った。

「疲れただろ？」

馬車が走り出した後しばらくしてキィラルが顔は前に向けたままルウトに問いかけた。

「疲れた、汗臭い、腕痛い」

怒られるかと、いやひょっとしたら怒られたかったのかもしれない。

そんな反骨じみたことをぶっきらぼうに言い放った。

すると、何故かキィラルの方から笑い声が聞こえてきた。最初は含むような笑いだったがどんどん大きくなりやがてもう普通に大声で

笑い出した。

「…何だよ」

「いやもうお前もガキじゃなくなったんだなとな。ガキの頃を見てなかったからな、知らず知らずガキ扱いしてたかもしれん」

「……今更気づいたのかよ」

最初会った時からあやすような態度は気に触っていた。父親が一番自分を子供扱いしていたのは無性に腹立たしかったのだ。

「ほれ、さっき貰った金見てみろ」

言われた通りに横に置いていた布袋を手に取った。

軽い。

中身は銀貨と銅貨だし、枚数もそんなに多くない。

いつも運んでいる金貨に比べたら本当に微々たる物だ。

「――重いだろ？　つっても中身は一日分の飯代ぐらいだけどな」

しかし、確かに違うもっと温かい重さも加わっているような気も、したかもしれない。

「ギルドの仕事はギルドが仲介に入るからほとんど客と会うことは

ねぇけど、……直接会ってやる仕事も悪くないだろ？」
「……何で？」
「何でっつわれてもなぁ。まぁ月並みな台詞だけどよ、やっぱり感謝されていい笑顔見せてもらえたらこっちも嬉しいもんだぜ？」
「…ふぅん」
「まだわかんねぇってことはまだ子供なんだよ。ま、俺みたいにあと八年もやってれば嫌でも分かる」
「八年……」

腕はまだ重い、汗もやっと引いてきたところだ。

これを毎日、八年――。

何を思ったか、キィラルが馬車を止めてぐりぐりとルウトの頭を撫で回した。

「ちょ、痛いって、ていうかいきなり父親面すんなよ、さっきから…」
「俺はお前が生まれてこの方父親だったんだ、よっ」

最後にポンとルウトの頭を叩いて馬車を降りた。そこでルウトはいつの間にか家まで帰り着いていたことに気づいた。

「かっこつけんなよ……」

つい零してしまった言葉が何だが負け犬の遠吠えみたいで口を閉ざした。

――やっぱり感謝されていい笑顔見せてもらえたらこっちも嬉しいもんだぜ？

分かってる。

ほんの少しだけ汚い世界も見たんだから。

遠ざかるキィラルの背中は土埃に汚れていても汗にまみれていても、とてつもなく大きくてまっすぐ筋が通っていた。

……でもきっと僕は違う意味で汚く染まっている。黒く、薄汚れている。

そう思いながらルウトは悔しそうに唇をかみしめた。

金貨と銀貨とその重さと（後書き）

2回全没して、これが限界。ちゃんと出来てるかな？　急いだのでちょっと不安です。難産だった…。

感想、アドバイス等お待ちしてます。

違い

「よう、お節介野郎」
「おわっ！！」

一人で酒を飲んでたところに後ろから現れたキィラルに思いっきり背中を叩かれた。

飛び出した酒を机や床になる前に慌ててコップに納める。

中で荒々しく削られた氷が涼しい音を立てて耳に優しい。

「……今どうやった？」
「いや零れそうになったから…」
「…まぁいいや。それよりよくもやってくれたなこの野郎っ！」
「もうぐでぐでだな…」

横にどかっと座り込んだキィラルからは強い酒のにおいが漂ってくる。

まぁ、アホみたいに笑っていることから悪酔いしているわけではないことは見て取れた。

「んで、今度はどうした。新しい子供でも出来たか」
「そんなんじゃねぇよ。ルウトが明日も仕事を手伝いたいってよ、お前のお陰だ飲めさあ飲め死んでも飲め」
「……キィラルその辺にしておけ」

そろそろ鬱陶しいので殴っておくかとしたところで前からいぶし銀ボイス。
そちらに目をやるとマスターが苦笑いで溜息をつきながら相変わらずコップを磨いていた。

「んだよ、いたのかラスク…」
「いたんだよ」

ラスク、というのはマスターの名前なのだろう。

キィラルはその名前を何度かつぶやきながら、夢の世界へと旅立つべくこっくりこっくりやり始めた。

「……ＺＺＺ」
「はいおやすみになりましたー…」

笑いながら酒を口に運ぼうとすると、前のマスターからやけに深刻な雰囲気が伝わってきて手を止めてそちらに目をやった。

「……バカが眠ったところで、もう一つお節介を頼みたい」
「…いきなりだな」
「事が事だからな」

目線は商売道具のコップに向いているものの、その目つきは真剣そのものだ。

コップの底に残った酒を飲み尽くすと俺も真剣に応えることにした。

「……”ブレイズ・ロア”がメフィストに関わっているらしい」
「……メフィスト…？」

聞き慣れない。
しかしどこか耳障りな響きだった。

――――メフィスト。

一言で言えば常習性の高い麻薬。

全くそんな物がなぜ残っているのか、いやそれともまた一から人類が考えついたのか。

どちらにしても馬鹿なことをする。まあ、こんな事でも頭ごなしには言えないが。

「それで？　俺にどうしろって？」
「好きにやってくれればいいさ」
「……ま、そりゃそうだな」

説明を受けたはいいものの別に俺に直接関係があるわけでもなし。
……いや

「…ルウトか」
「ああ、妙なことに巻き込まれてるかもしれないからな」
「ま、少し調べてみるか」
「…お前何だかんだでいい奴だな」
「……いやいや」

的外れなことを
ルウトの名前を出した時、キィラルの肩がほんの少し動いていたことに俺は気づかなかった。

◆
◆
◆

「お、ルウト。やっと戻ってきたか。戻ってきたら直ぐに来いって

サルドさんが言ってたぞ」
「……分かってる」

ルウトがキィラルの仕事を手伝ったのは結局二日だけだった。
曲がりなりにもギルドに所属している以上、顔すら出さないのはまずい。逃げ続けられるものでもない。

階段を上り、今までと同じように部屋へと向かう。
一歩階段を上る度に賑やかな酒場から遠ざかり明かりは薄暗くなっていく。

さすがにぽつぽつと小さな明かりはあるものの、決して明るすぎるというものでもない。

視界と一緒に気分が暗くなっていくのが感じられる。
行きたくなければ行かなければいいのだ。ただそれだけの事。

しかし踵を返すかどうか迷う間に足は進み、いつの間にか目的の部屋の、扉のノブに手をかけていた。

「いらっしゃい。早速で悪いですがこんな時間なのでいつもの仕事はありませんよ」

内心、安堵した自分に舌打ちする。思えばこんな時間に訪れたのも

無意識に仕事を避けるためだったのかもしれない。

「しかし、まあ、巡り合わせですかね」

「…え？」

「別の仕事があります。…そうですね、あなたも顔を見せておいて損はないでしょう。これからこの部屋にいる人員で出かけます。もちろん、…あなたも来るでしょう？」

仲間なのだから、と忌々しい言葉を最後にくっつけた。

共犯なのだから、と。

「……」

「何、ほんの顔見せのようなものです。危険なんてありませんよ」

ぞろぞろと金魚の糞のようにサルドの後ろの人が続く。

その中に拳を握りしめるルウトも当然いた。

この町はよほどの深夜にならない限り、街道に人は絶えない。

今はまだ日が落ちてから三時間ほどなので、日中の人の流れとさほど変わらない。それ故、その中に紛れるように進む一団は上手く喧騒に溶け込めていた。

しかし、進む度に人の波の密度が低くなっていき、灯りも喧騒も遠ざかっていく。

――人の波が完全に途切れて十分くらい経っただろうか。

闇夜の中にひっそりと、古びた倉庫のような建物が佇んでいるのを見つけた。

大きい建物なのに入り口は小さく、それを一人ずつくぐっていく。

入る直前で少しでも抵抗しようとして立ち止まったが、背中を小突かれよろけるように中に入ってしまった。

中は薄暗く、漂う空気もどこか淀んでいる。

見渡してみても窓はなく、入り口も見える範囲では後ろの小さな扉しか見当たらない。

淀んだ空気の中心に何人かの殺伐とした雰囲気の人間が数人座っている。

座っているのは周りにも無造作に置いてある木箱や樽の上。

こちらを観察するようにじっと見つめてきていた。

「いやいや、ようこそおいで下さいました！　汚いところですみませんがね」

その人の群れに出迎えるように両手を横に広げながらサルドが近寄っていった。

当然金魚の糞達もぞろぞろとそれに続く。

どちらも近づきながら威嚇するようにそれぞれを品定めしている。

「こらこら、そんなに睨みなさんな」

ピリピリと音がしそうな雰囲気の中、周りとはだいぶ様子の違う身なりのいい男が男達の間から姿を現した。

「ゲマンス殿、ですね。一応”ブレイズ・ロア”の首領をやっていますサルドです」

「ゲマンスです」

そう言って双方が握手を交わすと雰囲気が嘘のように緩和した。

「それで…例の…」

ゲマンスという男が心なしか顔をサルドの方に寄せ、つぶやくように話を切り出した。

それを待っていたかというようにサルドは軽く鼻で笑うと、おいと短く側の数人の男に指示を出した。
男達は手近の樽や木箱の蓋に手をかけると一気に開け放った。

「これは…！」

どよっとあちらの連中からざわめきが上がる。
蓋の奥には、なにやら乾燥された草や、樽の中にはすでに粉状に加工された何かが大量に入っていた。
何なのか、など、語る必要すらないだろう。
同時に近くから息をのむ音がした。
何のことはなくルウトが漏らした音だったが本人すらそれには気づかない。
ルウトの脳裏にあの時の服用者の末路が浮かんできていて、あの時と同じような何かがルウトの思考も体も固めようとしている。

「まさか、これが全て……」
「そう、メフィストです」

この倉庫の中にはそこかしこに樽や木箱が積まれている。あるとこ

ろでは天井に届くんじゃないかと言うほどの量だ。
当然それは男達が腰掛けている箱の中も同様のようで、中を確かめてまた驚愕している。

「これからはもっと大々的に事業を行おうと思いましてね、そこであなた方の力をお借りしたいわけです」
「俺たちがもっとばらまく、と？」
「もちろん分け前はかなり譲歩します。間違いなく成功させたい場合にも協力はしましょう」
「……協力？」
「はい。ルウト、こちらに」

自分の名前が呼ばれたことに驚いて身が固まった。
しかし周りの目線に押されるように足が進み、いつの間にか男の前まで移動してしまっていた。

「子供じゃねぇですかい…！」
「そう、子供なんですよ」
「いや、そうか。こんな子供なら疑われなどしない、と…！」
「そうです。その証拠にこのルウトは今まで完璧に仕事をこなしてくれています」
「へ～…」

男は感心したような声を上げながら、下から舐め回すように視線を

送ってきた。

最後に目があった瞬間、逃げるように目を逸らしていた。

逸らしたことに気づいたのは逸らした後。

かっこ悪い自分を心の中で罵倒するぐらいしかできなかった。

「……分かりやした。これからよろしくお願いします」

「こちらこそ。色よい返事を聞けて何よりです」

もう一度二人が握手を交わすと完全に雰囲気が弛緩した。

「どうです？　親睦を深める意味でも一杯？」

サルドがコップを口に運ぶ仕草を見せると、男もにっと唇の端を釣り上げた。

「いいね～、ここのところ暑くなってきましたから冷たいものでも」

「確かに今日は、というよりここは異常に暑いですしね。どこか涼しい所にでも移動しましょうか」

笑ってサルドの言葉に頷きながら男がこちらに振り向いた。

そして醜く膨れあがった揺らしながらこちらに歩み寄ってくる。

「ほれ、駄賃だ。おっちゃん達はこれから飲みに行くからよ。これで好きなものでも買え」

「…いいのですか、そのような大金」

「ええんですよ、これからも頑張って貰わなきゃいけないですからねぇ」

そしてルウトの右手を掴み取り、手の平の上に数枚の金貨を握り込ませた。

ズシッと金貨特有の重みが腕にのしかかる。

――――汚い。

そう感じた。同時に思い出す。

ついこの間握った同じように汚い金貨と。

軽いようで重かった、ほんの少しの銀貨と銅貨。

あと。

あと――――。

笑いながら仕事をこなすキィラルと同じように笑っていたこの二日で関わった色んな人の笑顔が脳裏に浮かんだ。

皆が皆笑っていたわけではないけれど。こんな時に浮かぶのは、…

都合がいいことに笑顔だけだった。

そして気づいた時には。

握った金貨を地面に叩き付けていた。

跳ね上がった金貨同士がぶつかる音が静まりかえった倉庫内に不思議なほど反響する。

「……降ります」

「……何ですって？」

サルドの口から出たのは先程とは比べものにならない程邪険な声。

しかし、譲らない。

俺は滅茶苦茶かっこ悪いけど。

あの親父よりかっこ悪いのは耐えられない。

「この仕事、降りさせてもらい、ます…」

震える手を拳を作ることでごまかす。

逃げ出そうとする足を踏ん張ってとどまる。

戦慄（わなな）きそうな唇をかみしめて堪えた。

「ルウト、いきなり何を…」
「だって」

最後に俯きそうになるその眼を目の前に持ち上げた。

「こんなの、かっこ悪いじゃないですか…！」

負けるな。
挫けるな。
たとえかっこ悪い奴でも。
かっこ付けるぐらいは、出来るんだ。

違い（後書き）

ワンパターン…だなぁ…。
……次から気をつけるか。

感想アドバイス等お待ちしております。

紅蓮に燃ゆる

走る走る走る。

一瞬も止まることなく動き続ける。

目の前に迫る刃を避けざまに、炎圧を加えた拳をたたき込み転がりながらも前に進む。

一瞬だけ減速した所に轟音と共に雷が鳴り響く。

必然的にそこにいた先程の男が黒こげになり動かなくなった。

つんのめりそうになり、そのまま転がりながらも移動する。

一瞬でも動きを止めてしまえば、雨のように後ろで降り注ぐ雷の餌食だ。

出来るだけ人間が密集しているところに突っ込めば、ある程度雷撃の数は減る。

だからある程度人間が密集したところに闇雲に突進する。

一人倒すごとに体に傷が増えていく。

また一人。傷もまた一つ。

倒したのはいったい何人だろうか。

残った体力から考えれば、あと十人ぐらい、であってほしい。そうでありますように。

「くそッ…！」

目の前を見てみればそこだけでも七人ぐらいはルウトを待ち構えている。

ゴゥッと唸りを上げながら、様々な魔法がルウトに向けて殺到する。

出来るだけ引きつけて、足下で一気に魔力を火に変えて爆発させた。

走る勢いを保ったまま放射線状に空を跨ぐ。

飛びながら思い切り息を吸い込む。

自分で考えた、最高の技。

肺にため込んだ空気を吐き出し、それに魔力を乗せる。

猛火となったそれは、以前パージという男がしたように苦し紛れに放たれた魔法を押し潰し、その暴虐の限りを男達にお見舞いした。

同時にくらっとめまいがルウトを襲う。

ぐらっと空中で体勢を崩し、不自然な体勢のまま地面が近づいてくる。

最後の力を振り絞り、火で浮力を作り勢いを殺す。

ぷつん、と頭の中で音が響いた。

地面から一メートルほどで浮力が消え、地面に叩き付けられた。

「ごッ……、はッ…！？」

信じられないほどの衝撃が背中にぶち込まれた。

地面を派手にバウンドし、完全に動きが止まった。

「魔力切れ、ですか」

ざくざくと土を踏む音と一緒にサルドのどこか感心したような声が近づいてきた。

「ひーふーみー…、十六人ですか。ほとんどうちのギルドの人間ではないですが、たいしたものです」

十六人…。

逆算であと二十人以上いる。…ふざけんなくそったれ。

「実にもったいない」

ふぅといつものように溜息をつくと、近づきすぎないところでかがみ込んだ。

「どうです？　ここで一つ大人になってみませんか？」

「……は？」

「まだ、取り返しはありますよ、と言っているんです」

大人になって、また仕事をしろ、と？

大人になって金を稼げと？

汚い大人に染まってしまえと？

……笑わせんな

――――ペッ

返答代わりに唾を吐きかけた。

サルドの靴にも届きはしなかったが、表情は不快に歪んでいた。

ザマァみろ、と小さく呟く。

「……最後に何か言うことは？」

低い声とともに、サルドの右手にバチバチと音を立てながら雷の魔力が集まっていく。

最後？

ああ、なるほど確かに死ぬ。

あんなもんが直撃したらそれは死ぬだろう。

「…前から言おうと思ってたけど、そのマント似合ってないからやめたほうがいいよ」

最期の言葉これかよ…。我ながらどうかと思う。

でも、まぁ、一矢報いたと思えるぐらいはサルドがショックを受けているからいいとしよう。

ザリ、と首をサルドの腕が見えるように回しただけでどこからか砂が擦れる音がした。

全身血と砂と埃まみれだ。

あーあ、最期なのに。

かっこ悪…。

すっと一瞬だけ視界が暗くなる。

怖くて目をつぶったわけではない。

ただ目の乾きを感じ少しだけ長めの瞬きをした、その一瞬でサルドが視界から消えていた。

視界の端から先程言ったマントの端が消えていったのに気づいた。

砂をこすらせながら首を回すと無様に地面に突っ伏したサルドが見えた。

視線を戻すと、握り拳を作った右腕が浮いていた。

その先に肩が続くはずの腕は途中で陽炎のように歪んで消えている。

ブワッとそこを中心に熱風が倉庫内に広がった。

そこから現れたのは嫌に見覚えのあるお世辞にも整ったとはいえない顔。

「なかなか格好良かったじゃねぇか、ルウト」

何時ものようにしわしわのシャツ、だぶだぶのズボン。

ぱっとしないその姿はルウトの父親に違いはなかった。
ただ何時もと違うのは、強い臭いの煙草を美味しそうにふかしていた。

◆◆◆

キィラルが横に腕を振るとルウトの周りに火が走り完全に囲った後、膜のようにルウトを包み込んだ。

「父、さ……ん…？」
「そこにいろ」

ルウトの方を見ずにそういうと、サルドの方に向き直った

「…くっ、はッ、なるほど、消えていた、わけですか。通りで暑いわけです。全く、……子供の窮地に黙って見てるとは大した父親ですね」
「息子が男上げようとしてる時に出て行けるかよ。……出て来たのは」

そこで一旦言葉を切り、ゆっくりと空中に煙草の煙を広げた。

「決着が着いたからだ、当然うちの息子の勝ちで」
「…風穴ですかその目は。何を持ってそこの坊やの勝ちだというのです」

口からあごに走る血を拭いながらサルドが立ち上がる。

「何で？」

ハッと馬鹿にするように笑うキィラルにサルドが不快気にこめかみをピクリと震わせる。

「そんなもん、お前ら全員合わせてもうちの息子の方が格好いいからに気まってんだろ」

対抗するようにサルドも笑う。

「格好いい？　……そんなくだらないものでは金も名誉も手に入りませんよ」
「自分を嫌いにならないで済めば、それでいいんだよ」

キィラルとサルドの視線が重なり、両者の魔力がじわじわと密度を上げていく。

「……！」

しかし戦いの火蓋を切ったのは、キィラルへのその他大勢の攻撃だった。

それをしっかりと目でとらえたキィラルは、それでも動きを見せない。

必然的に土の槍が水の剣が風の刃が火の弾が、キィラルへと直撃した。

「よくやりました、しかし油断は駄目ですよ。何せあれは元〝首領〟です」

「首領…？」

「ええ。〝炎鬼〟と呼ばれていた上位文字持ちです」

「上位文字って、あのガラドが持ってるっていう…？」

「私も当時は若かったからよくは知りませんがね。何、この人数で一斉にかかれば恐れることもありませんよ」

ニッと慢心だらけの顔で汚く笑う。

「それともう倒してしまいまし…」

そこまで口にしたところで、音もなく視界を遮っていた土煙が吹き飛んで霧散した。

その中心には何事もなかったような顔で煙をふかすキィラルの姿。

先程と違うのはキィラルを中心に炎が球状に燃え上がっている。

「……そう簡単にはいきませんか。しかしもう時間の問題ですよ。邪魔はすべて潰して、私はもっと上に行く…！」

その言葉を聞いて反応したのかそれともただの偶然かキィラルは無造作に右腕を横に広げた。

「息子が怪我してるんでな。――全力だ」

空気を根刮ぎ食らうかのような炎の中心で佇むキィラルの腕には、普通の”火”の文字とは全く異質とも言える光を放つ”炎”の文字。

「――――加護付加、”重塊”」

その声に応えるかのようにゴボッと音を立てながら更に発生した炎

がキィラルの右腕に纏わり付いていく。

「何だよ、あれ……！？」

一秒経たずに体とは不釣り合いな巨大な炎の腕が形成される。

「俺は引退したから口も手も出したくなかったけど、…少し寂しいが潰させてもらう」

ぐぐっとゆっくりその巨大な拳が振り上げられる。

異様な光景に固まっていた男達が振り上げられた腕を見てやっと反応した。

膨れ上がり続ける魔力に見違えるように一瞬でサルドの顔色が変わっていく。

――重力を思い出したかのように炎の巨腕が振り下ろされた。

「ッ！　跳べ！」

幾人かはサルドのその声に反応して横に空いた空間へと身を投げるが、数人はその場に留まったまま。

その全員が水の魔法の使い手。相性上の関係がそうさせたのか、驚きはしているもののさして取り乱した風でもなく目の前に厚い水の壁を展開させている。

そしてその障壁と炎の腕が接触する。

それはまるで巨大な鉄の塊と衝突したように。

質量を持たないはずの炎が水を片っ端から吹き飛ばしながらその下の男達を、その巨大さに見合う質量を持って押し潰した。

重々しい音と共に倉庫内が比喩ではなく揺れる。

「炎で、押し潰した…！？」

「〝雷鳥〟！」

サルドの声と共にその手から巨大な鳥を象った雷が宙を不規則に移動しながらキィラルへと突撃する。

光速にはほど遠いと言えども十分な速さを誇るそれを、事もなさげに炎の腕が掴みそのまま握りつぶした。

「馬鹿、な…！」

続けざまに今度は倉庫内に強風が吹き荒れる。

その全ては激しく燃焼する炎、つまりはキィラルへと集約していく。

「ふ、ふざけるなよ…！　いきなり来て何だお前はッ！　親子共々邪魔ばかりしやがって！　何で、何で…！！」

「うちの息子が言っただろうが」

激昂するサルドに眉一つ動かさないままつらつらとキィラルが言葉をつなぐ。

「お前ら、かっこ悪いんだよ」

「ふッ…ざけるなあぁぁぁあ！！！」

サルドの振りあげた右手のそれぞれの指にはめた魔装具が鈍く光りだし、同時に胸の辺りで”雷”の文字が光を放つ。

同時にキィラルも吹き荒れる風に合わせるように思い切り息を吸い込んだ。口に咥えていた煙草が一気に燃え尽きる。

「――”千光招雷（ブレイズ・ロア）”！！」

「――”猛火の咆哮”」

一瞬の静寂のあと、視界を覆い尽くすほどの炎と雷が倉庫内を蹂躙した。

拮抗するかと思われた勝負はあっけなく、その二つがぶつかった瞬間、金色の閃光は紅蓮の炎に押しつぶされて霧散した。

キィラルが使ったその技は奇しくもルウトが切り札として使用している技に酷似している。

しかし、規模が違う。威力が違う。圧力が違う。格が違う。

ルウトのそれが火の柱とするならば、キィラルのそれは炎の壁。

防ぐことも避けることもかわすことも許さずに超重量を持って焼き潰す。

吐き出した炎は放射状に広がり、薬が入った木樽も木箱もその先の壁でさえも轟音と共に粉々に吹き飛ばした。

ぱらぱらと木屑と土煙が舞う。

炎の壁が通った道は黒く焼け焦げていて、所々に男達が倒れている。

その中にただ一人、蹲りながらも気を失っていない男がいた。

「……ぐッ……あ〝ァ…！」

「炎獅子の外套か」

全身の火傷と打撲、更に過度の酸素不足でもう呂律が回っていない。

それでもなお立ち上がるのは、このどうしようもない男にも何か譲

れないものがあるのかもしれない。

キィラルは新たに一本煙草を口に咥えて指の先に火を灯して、煙草に火を移しながらサルドが蹲っているところまで移動する。

「くッ…！」
「やめとけ、魔装具ももう壊れてる」
「！――舐めるなぁッ！！」

全ての魔力を解放しようとしたところで、上から巨大な炎の腕に押し潰された。

完全に気を失ったサルドと、次々と燃え広がり倉庫中のメフィストが燃えていくのを確認する。

「おい」
「ひッ…！」

戦いが始まってからずっと隠れていた腹が出た成金のような格好の男を初めとする恐らく戦闘員ではない人間に声をかける。するとそいつらは恥も外聞もなく弱々しい声を発した。

「やめ…、俺は、まだ何も…！」
「こいつら、運び出しとけ」

顎でサルド達を指しながらそれだけ言う。

最期に炎の膜の中で気を失ってしまっていたルウトを見据えて、煙草を無造作に放り捨てた。

紅蓮に燃ゆる（後書き）

えーと、いつの間にか残りの夏休み課題がすごいことになってました。
次の話はもう出来てるので問題ありませんが、その次の話が遅れるかもしれません。

大人（前書き）

5話で終わらせたかったけど無理でしたね。

大人

「はい、撤収撤収」

焼け落ちそうな倉庫の中でルウトをおぶりだしたキィラルを見届けてハルユキはそう呟いた。
幸い周りに燃え移る恐れのある倉庫は見当たらない。

「…すごい……」

たまたま途中で合流したフェンが中をのぞき込んでいた。

「確かに、意外すぎだなこりゃ…」
「そうじゃなくて…」
「上位文字ってやつか…？」

こくん、とこっちを振り向いたフェンが頷いた。

「極希に、普通の四つの文字が、…進化、することがある」
「それがあれ、か」
「土が地に、火が炎に、水が雲に、風が嵐に、それぞれ〝進化〟して、加護が付く」

「加護？」
「……それ以上は、知らない」
「ふーん…」

それがどれだけすごいか知らないが。
それがどれほど強いかも知らないが。

父親として息子を守れるのがどれだけ有り難いものなのかは、ほんの少しだけ分かる気がした。

視線をフェンに戻してみればフェンも先程のハルユキと同じように、ルウトを大事そうに背負ってこちらに歩いてくるキィラルを見つめていた。

「……行こ」
「そうだな…」

引かれた袖に従って見つかる前にその場を離れた。

親がいない。

それはハルユキもフェンも同じだが、だからこそあの二人の間に入って行こうとは思えなかったのかもしれない。

「先帰ってていいぞ。俺やる事あるから、ごめんな連れまわして」
「いい、けど、…やる事？」
「金儲け」

大通りでフェンと別れた後、裏通りから手近な家の屋根に飛び乗った。

◆
◆
◆

「起きたか」

目を覚ました瞬間、重力にひっぱられる感覚とともに前から声が聞こえた。
ぼやける視界の中は薄暗く、目の前の頭しか見えない。

「ここは…、あぐッ…！？」
「あんま動くな。足折れてるぞ」

穏やかな声に言われて自分の足を確認すると、確かに左足が応答しない。

動かすと激痛だが、動かさなければ鈍痛はあるものの大したことはないようだ。

横に目を向ければ普通に人が歩いている。さらに視界を広げるとここが家へと続く街道の真ん中だと分かった。

頭も少し打ったのかズキズキと自己主張してくる痛みが視界をぼやけさせる。足と頭のほかに背中も少し痛いが、何となく大したことはないことは分かった。

状況の確認も終わり体の無事も確認して、いよいよする事がなくなった。

「……」
「……」

いつも以上に沈黙が痛い。

何処から気を失っていたのかが定かじゃないが、キィラルがサルド達を圧倒していたのは覚えている。

「……強かったんだね、父さん」
「あいつらがたるんでたんだよ。温い仕事ばっかりやってるからあなるんだ」
「……」
「……」

ああ、そう言えば。

父さんのことを父さんって呼んだのはこれが初めてだ。目の前の父親はそんな事にも気づいていないけど。

「ねぇ、何でギルド辞めたの？」

「俺も家庭を持ったから危険なこともできなくなったし、ガララドもラスクも……って言ってもわかんねぇか。まあ要するに世代が変わった、それだけだ」

「……ふぅん」

何であそこにいたのか。

自分に何か言いたいことはないのか。

聞きたいこともあったし、話したくないこともあった、けど逆にあっちがルウトに聞きたいこともあるだろう。

話したくないことは須らく話さなければいけない事だから。

「父さん……」

子供が悪事を親に告白するときの様な妙に独特な怖さと緊張感が胸に込み上げてくる。

この気持ちは誰しも一度は経験すると思うが、ちょっと慣れるものではない。

「あの、さ…」
「ああ」

意を決して話し始めるものの、キィラルからの返答はどこか素っ気ない。

「悪い事、してたんだ」
「…そうみたいだな」
「薬、運んだりしてさ。分かってたけど、やめられなくて、さ」
「そうか」

さらに帰ってくる返事には淀みも驚きもない。

いつからかは知らないが、知っていたか、もしくは察していたのだろう。

「お前は大人の勝手な都合に巻き込まれて、脅されて。仕方なかった。実際に被害にあったのもそんなもんに手ぇ出した馬鹿な大人だ。だから気にしなくてもいい。……って言ってやりたいがな。俺はお前がもうガキじゃないって言っちまった」

怒鳴るような声ではない。
でも喧噪にまぎれることなくその声はしっかりとルウトの耳まで届く。

「もちろんお前が何もしなくていいってんならそれでもいい。責める奴もいない。俺も別に何も言いや……」
「それは、……嫌だ」

キィラルの声を遮ってルウトが言葉を割り込ませた。キィラルもそうなる事がわかってたように口をしばらく閉ざして、苦笑した。

「…やっぱり、嫌だよなあ。逃げてるみたいだもんなあ…」
「……」
「でもな、……今回は自分の中だけで決着付けろ」
「え……」

それはつまり黙ってろって事だろうか、忘れてしまえと、そういう風に聞こえなくもない。
キィラルの意図がいまいち読み取れず、ルウトは二の句を継げない。

「でも絶対忘れるな。自分の事かっこ悪いと思ったならその悔しさも、怖かったならその怖さも。絶対忘れるな」
「……」

聞きながらまた目の前が霞みだした。

「……お前は大人になったけど、お前はずっと俺の息子なんだから」

グラッと視界が傾くのを自覚する。もう外の情報もほとんど入ってこない。

「後は父ちゃんに任せとけ」

そこで意識は完全に暗転した。

◆◆◆

「すみませんでした！」

「……」

いわゆる謁見室という見た目も何もかも豪奢な部屋で、一人の玉座の横に座る王女に向けて土下座している男がいた。

「貴方のことはガラドから聞いてるわ。キィラルだったかしら」
「あ、あいつとは時々依頼を手伝ってもらってたりしてましたから…」
「まあそんな事は今はどうでもいいわ」
「すみませんでした！！」

構わず謝りまくるキィラルに多少辟易しながら王女がため息をついた。
装飾が施された椅子に肘を立て顎を載せた、その様子は明らかに面倒くさそうだ。

「そういう事ね…」
「え？」
「気にしないでこっちの話。……それで、私はどうすればいいのかしら？」
「……息子の代わりに私が、罰を…！」

一瞬だけ視線をそらしてもう一つため息をつくと、顎でキィラルの後ろを指した。

キィラルが後ろを向く前に、横に誰かが座り込んで横からキィラルの腹を殴りつけた。

「かっこつけんなクソ親父！」
「ル、ルウト…」

「俺は頼まれたから運んだだけだぞ、ちなみに」

その後ろには更にハルユキ。軽く手だけで挨拶をしている。

「……悪いのは俺です。父さんは関係ありません」

言いながらルウトが赤絨毯が引かれた大理石の床に額をすごい勢いで叩きつけた。

ゴン、と洒落にならないほどの音が部屋の中で反響する。

「自分のけじめくらい自分でつけます。俺の失敗は俺のものです…！」

「あー…、あのね」

「親に肩代わりしてもらうものじゃないんです…！」

「だから…」

「俺にも責任はあります！　こいつが罰を受けるならおれも一緒に！」

「話を聞いていただけるかしら？　愚民親子」

ニコッと王女が毒づいた。

見て分かるが機嫌が良いわけではもちろんない。

「私はね、昨日の夜報告を受けたの」

「？　それは…？」
「自分の指示通り部下の潜入捜査の末、メフィストを製造販売していた主要グループを一網打尽にしたって。その後ろの馬鹿に。ちなみに報奨も与えたわ」

王女がジト目でハルユキを睨みつける。

キィラルも額に血管浮かびあがらせて睨みつける。

ルウトも汚いものを見るような目で憐れむような目をハルユキに向ける。

それらの目線を交わしながらルウトとキィラルの間に座り込んで耳元に口を寄せた。

「そういう事だ。もう金受け取ったからお前らの謝罪とかは俺が迷惑だ。よって帰れ」
「この野郎…」

凄むキィラルを笑ってかわしながら、手刀の形を作った左手を振りあげて。

「……せいッ」

音が出ないように怪我したルウトの足に振り下ろした。

「あ……ぐぁッ…！」
「やばい！　激闘の末に仕方なく負った傷が誘発したとんでもない病気が発症しちまった！　こんな事もあろうかと俺が無理言ってあらかじめ用意しておいた救護班！　さっき言った特効薬が唯一用意してあるとある町医者と所へ連れてけ！」
「は、はい！」
「ま、待って……。俺は…ふがッ！！」
「舌を噛む恐れがあるから布噛ませて、暴れるといけないから簀巻きにするか」
「ちょっと待て何で俺ま……ンごッ！」
「はい搬送」

うねうねとくねりながら蓑虫みたいな親子が巨大な扉をくぐって外に運ばれていった。

恨めしい何かを背中に感じたが、知らね。

「……見事な悪役だったわね」
「あ、分かるか？」
「分かってない人間なんて一人もいないわ」
「まあでも、こうするのが一番良かっただろ」
「別に私としてもどうこうするつもりはなかったけどね。馬鹿な大人が馬鹿な大人から薬を買ってもっと馬鹿になっただけの事件だったし。そんなのに巻き込まれて将来有望な若者を失うのは馬鹿らしいわ」

そんなに年も変わらないと思うのだけど。マスターには話をしていたから何とか誤魔化してくれるだろ。

マスター、で、ふと思いついた。

「お前意外といい奴だな」

「知ってるわ」

「……」

「……何よ」

もう駄目だこいつ。

◆

◆

◆

「あの野郎、今度見つけたらぶん殴ってやる！」

病院を出てから怒りっぱなしの父さんと並んで町を歩いている。

俺も最初は怒っていたが、冷静になってみると何がどうなって今ここを歩いてられるかなんて明らかだった。

うちの親父は気づいていないみたいだが。

……自分は母親似でありたい、と切に願ってしまった。

「スゴイ奴だよね、あいつ」
「ああとんでもない奴だ！」

この後、さすがに今日は無理だろうが日を改めればまた城に行くこともできるだろう。

でも行って、仮に罰を受けようとしても父さんが邪魔するだろうし、ハルユキとかいうあいつもそうかもしれない。

やっぱり自分はまだ大人とは言えない気がする。かと言って子供とも言えない気もする。

だってあんなに大人たちはずるい。

平気でウソをつく。

納得もできてないし随分勝手だとも思うけど。

大人が誰かのために嘘をつくなら騙されてやるのが義務なのかもしれない。

「……ルウト、今度何かあったらちゃんと俺に言えよ」
「気が向いたらね」
「……お前あの馬鹿に感化されてきてないだろうな」

「まさか」

誰に謝るかも、借りを返すかもわからない分もある。

だからこつこつこの町に返していくことにしよう。

顔を上げると何となく前より視界が広がっていた。どこがとは分からないが確実に。

俺が住む町は今日も騒がしい。

大人（後書き）

上位文字を出現させるための話でしたが何とも微妙な出来に……。

感想、アドバイス等お待ちしてます。

蒼い髪（前書き）

あー、ホントに時間ない…。

この町は非常に賑やかで実によろしいと思う。

「……すいません仕事があるんで」

……これでもうちょっと町人にゆとりがあったらな、とも思う。具体的にいえばもっと開放的な。アバンチュールな。

せかせかと去っていく名前も知らない女の子の背中を見つめてため息をつく。

別に落胆しているわけではない。元々成功するとも思っていないし成功したとしても困るのは自分だとも自覚している。

ならなんで近づいてわざわざ拒絶されに行くのか。

知らない。考えた事もない。

このやり方で人と繋がれない事も知っている。

だからもしかしたら。本当にもしかしたら。

自分は拒絶されたくてピエロを演じているのかもしれない、と。ふとそう思った。

軽く苦笑いして、ヒロイックな考えを振り払った。

「お、かわいいお姉ちゃん発見」

そしてまた適当な人間に声をかける。

何時ものように人の良さそうな笑顔を顔に張り付け、軽い風体を装いながら近寄って行った。

ふと。

目の端に何かが映って消えた。

考える前に振り向く。

消えたといってもすれ違った事で視界から出ただけで振り向いただけで当然それは見つかった。

後ろ姿は、ぼろきれの様な服を頭から被っていて何の特徴も読み取ることはできない。

しかし、視界の端に移ったものが瞼の裏に貼りついて離れない。

渇いた喉を生唾を嚥下してやっとある程度落ち着きを取り戻すと、一息にゆっくりと遠ざかろうとするその背中に追いついた。

一呼吸おいて、無言のまま肩に手を置いた。

少し力を入れただけで、その人間の顔がこちらに向き、振り向いた勢いで頭からフードが外れる。

血が逆流したかのような錯覚を覚えた。

目の前に広がった光景の中で一番に目を引くのは先程眼の端に移った青い髪と眼。

フェンの空の様な淡い青ではなく、深海の様な深い蒼。

そして何かに脅えるようなその眼は昔を思い起こさせられて、頭の中をガリガリと引っ掻かれるような感覚に陥る。

――しかし、違う。

整った顔立ちだが、自分が知っている顔とはほんの僅かに違っている。

だから。

「……一緒にお茶せぇへん？」

何時ものようにその台詞を口にした。

残念なことだがこんな台詞で誰かと繋がれた事はない。

だからこれは逃げ口上。

見ているだけで脳の裏側が引っ掻かれ続けている。正直逃げ出したかったのだ。

「――――ッ！」

バシッと息を呑む声と共に肩に置いた手を払われた。

これでいい。

後は勝手に離れていくのを待つだけ。

しかし状況は思いもしない方向に転んだ。

まず最初に不自然さを感じさせられたのはその表情。

ジェミニの顔を確認した瞬間に表情が和らいだ。恐怖の色から明らかな安堵の色に。

加えて言うが目の前の顔に見覚えはない。

だとするならば、恐らく”特定の誰か”ではなかったための安堵感、というのが妥当だろうと目星を付ける。

そこまで思考を巡らせたところで、目の前の少女の目に力がない事に気付いた。

そして気づいた次の瞬間には少女の体が傾きだした。

「は？　ちょ…！」

つい。

本当につい。

こちらに向かって倒れこんできたその少女を受け止めてしまった。

胸の中に少女が収まる。

その体は驚くほど細く、残酷なほどに軽かった。

◆

◆

◆

「過度の栄養失調、所々に打撲と擦り傷。全くどうしてこんなになるまで放っておいたんだか」

横で静かに寝息を立てる少女を呆れたように見つめながら医者が溜息をついた。

「それで、料金もろともはあんたに請求していいんだな？」

「…それでええです」

それを聞いて満足そうに医者は頷くと部屋を出て行った。

「……」

黙って少女の顔を見つめる。

よく見れば確かにカサカサの肌に所々傷や土がついている。

何となく傍に用意してあった洗面器と布を使って顔を拭いてやることにした。

起こさないようにゆっくりと顔を拭くが、ぐっすりと眠っているようでその心配はないようだった。

綺麗になった顔を改めてよく見ると、やはりよく似ている。

本当に似ているのは青い髪だけなのだが、なまじ顔の造形が整っている分他の部分も知っているそれと遠くはない。

ガリガリガリ利ガリ我利我利ガリ画リ――…

頭蓋骨の裏側にある脳のさらに裏側のどこか形容しづらいところから引っ掻くような不快な音が続いている。

離れよう。

元々知り合いでもなし、ここまで運んで治療代を工面しただけでも感謝されるほどのものだ。

しかし、気持ちと裏腹に重い腰はどっかりと座りこんだ椅子から離れようとしない。

何とはなしに顔に視線を戻した。

そこで薄らと少女が目を開けている事に気付いた。

「……起きた？」

ゆっくりと開いていく瞼の奥で眼が辺りを見渡している。

どうやらまだ状況を理解していないらしく、警戒しながらこちらを睨みながら上半身を持ち上げた。

ガクン、とその体を支えていた腕が重さに負け倒れこみそうになる体を反射的に支えた。

「状況を簡単に説明するとやな？　町で倒れた君をこの病院、って言うにはシミッタレとるけどまあここまで運んで来たわけや」

ベッドにゆっくり寝かせつけながら自分の声じゃないほど穏やかな声を出していた。

「……君、お金は？」

質問から数秒経って、相変わらずこちらを怯えるように睨んだまま弱々しく首を横に振った。

「食べ物があるから、食べてな。わいはもう行くから」

ガリガリとガリガリと。騒音が止まらない。

横の台に置かれていたスープとパンを指差した。

それを見て少女は力一杯首を横に振る。食べたくないと、そういう事らしい。

「じゃあわいが食べるわ。ちょうど昼飯時やし」

台を引きよせパンを鷲掴む。そのままためらいなく口に運ぼうとしたところで虫が鳴くような侘びしい音がした。

ふい、と真っ赤な顔でお腹を押さえている少女に目を向ける。

視線があった少女は真っ赤な顔のままで気丈にまた首を横に振った。

「いただきます」

少女が無意識になのだろうが口を開けて今にもよだれでもたらしそうな様相を横目にゆっくりとパンを口に運ぶ。

口まで後１０?位というところで同時にゆっくりと近づいてきていた少女の口の中に素早くちぎったパンを放り込んだ。

「――――!?」

びっくりしている間に手にスプーンと残ったパンを握らせると早足で扉に向かった。

「お金はもうええから、良くなったら帰るんやで」

それだけ言って顔を見ないように早足で病院を出て行った。

◆◆◆

「…うーん……」

どうしてまたここにいるんだろうか。

気づいたのがここに着いてからだったからどうしようもなかったのだが。

溜息をつきながら古びた病院を見上げた。

思えば何もない時はギルドの仕事を手伝うか何かしていたはずだ。

こんなに早くから町をうろつくのもいつも通りではない。

ペースが乱されている。

はっきり言えば気になってしまっているらしい。

思い出すだけでカリカリと脳髄に何かが爪を立てる。

「…ええい！」

それ以上に頭をバリバリと掻き毟ると病院に向き直った。

昨日の様子からするともしかしたら、いやほぼ間違いなく少女は病院を出て行ってしまっているだろう。

それだけ確認して帰ればいい。

「…元気みたいで何よりやけどね」

扉をあけると控えめにパンを口に運んでいる少女と目が合った。

目があった事に気付いた少女はこちらを怯えた目で見つめながらジェミニから離れるようにベッドの端に移動していく。

「何もせぇへんて…」

そんな事を言っても聞き入れるわけもなく相変わらず怯えっぱなしなので少女とは逆のベッドの端に座り込んだ。

少女はとりあえず安全だと認識したのか相変わらずこちらを警戒したままパンをかじり始めた。

少女の方にそっと目をやるだけで少女を肩を跳ねあがらせる。

細い腕。余分な肉どころかほとんど肉付いているところなどなく、思い切り握れば折れてしまいそうだ。

その細い腕で少女が最後のパンのひとかけらをゆっくりと咀嚼して飲み込んだ。

ああ、そう言えば。

少女がいたときに何をするのか考えていなかった。

「んーと…」

何か言おうとしたところで少女がこちらをちらちらと見ている事に気付いた。

いや、よく見ると視線は少し右にずれている。

「ああこれ。はいどーぞ」

傍の机に置いてあったほとんど具も入っていないスープを少女に手渡した。

少女は差し出されたそれをきょとんとした顔で見つめると、こちらを全力で警戒しながらゆっくりと手を伸ばした。

最後までゆっくりと器を受け取ると、少しだけこちらに会釈をしてスープに手をつけ始めた。

きちんと集中してスプーンを救っているところをみると警戒が先程より減っているようだ。

「わいはジェミニ。君の名前を教えてもらっていいやろか？」

声を出すとまたビクッと肩を震わせた。

ジェミニ。”俺”の大切な大切な名前。返してくれると嬉しいけれど。

少女は飲みかけのスープを膝の上に置くと、困ったように顔をしかめた。

少しの間を挟んで少女が躊躇いがちに口を開いた。

ゆっくりと唇が形を変える。

しかし、それに伴うはずの何かが足りなかった。

「君、声、……出ないんか？」

ジェミニの思い出にわずかに面影を残す蒼い髪をほんの少し揺らし

て俯くように少女は頷いた。

蒼い髪（後書き）

急ピッチだったので明らかにおかしい所があった指摘ください。

飲めや、騒げや

何でもない一日の昼下がり。

コンコン、と控えめにノックをして数秒待った後扉を開ける。事この扉に置いてノックの返事を待つことに意味はない。

扉の向こうではいつもの様にシアが小さい口でちょこちょことパンをついばんでいた。

シア。

声が出ない事を知った後、小さい紙に小さい文字で名前を教えてもらった。

小さい小さいと言うが15歳という年相応の体つきだ。ユキネよりほんの少し小さくフェンよりは確実に背が高い。それでも一向に肉がつかない体はどこか弱々しく感じられた。

「シアちゃん。具合は…良いみたいやな。よかったよかった」

いつもの様に笑顔を張り付けてそう言うと、申し訳なさそうにぺこりと頭を下げてベッドの座っている位置から少しだけずれた。そしてまたこちらもいつもの様にそのあいた所に座り込んだ。

お互いの名前を交換してから、数日。

「へえ、じゃあ今日で退院できるんやねー」

コクン、と頷く少女からはジェミニに対する警戒はあまり感じられなかった。しかし例によって少女の表情は暗い。

事情なんて結局一言も聞いていないが、何か訳ありだという事ぐらいは察することはできる。声も出ない少女が一人で倒れるまで出歩くなんて状況は明らかに日常的ではない。

（どうしよ…）

選択肢は幾つか。

ある程度路銀を与えて、後は放っておくか。

このまま出て行って関わりを断つか。

それとも。

チラッと横の少女に目をやるとボーっと虚ろな目で斜め下の虚空を見つめている。

力がない。この少女には力がない。単純な腕力ももちろんだが、魔力も気力も。

警戒が抜け落ちた目の中には何も残ってはいなかった。ガリッと一際強く頭のどこかが引っ掻かれる。

「行くで」

シアの腕を掴んで引っ張り上げた。

一瞬ビクリと体が震えるのが伝わってきたが、すぐにそれはなくなって抵抗なくシアを立ち上がらせる。

ガリガリと絶えず不快音が続く。

引き上げてから手を放し、不思議そうな顔でこちらを見つめるシアの頭に手を置いた。

ここ数日で湯にでも浸かったのか、ほんの少し艶やかさを取り戻した髪の感触が伝わる。

「子供の面倒を見るのは大人の義務やからな」

どこかのお人好し馬鹿が言いそうな言い訳臭い事を口にしてみる。

もちろんそんな理由で彼女に触れているわけでもないし、どんな理由かも分からないが。

もう少しだけ頭の中で鳴り続ける不快音を聞いていたかった。

◆◆◆

「……田舎のおっかさんが泣いとるぞ」
「どういう意味！？」

宿のロビーで、どこから買ってきたのか歯応えのありそうな干し肉を貪っていたレイが、シアと一緒のジェミニを見て言った第一声だった。

「なるほど。つまりお前が出頭すればいいんじゃな」
「なるほど。何も聞いてなかったんやね」

場所を変えたジェミニとハルユキの部屋でザッと説明をしてもレイはそんな事を言っていた。
冗談じゃ、と笑ってシアに目を移す。それだけでシアは肩を竦めジェミニの後ろの隠れてしまった。

「……悪い事は言わん。その男に触れるぐらいなら舌を噛み切れ」
「ワイはどんだけ凶悪な存在なんやろか…？」

ケタケタと笑いながらレイがシアに手を伸ばすが、シアはそれを怯えた動作で避ける。

「む……」

しばらくその動作を繰り返した後、禍々しい雰囲気でレイが唇の端を吊り上げた。

「なるほどつまり挑戦されとるわけか。その喧嘩買った」

一際ビクッと体を震わせ、ぶんぶんととれるんじゃないかという程にシアは勢いよく首を横に振る。

「まぁこれも冗談として。つまりこやつは何者なんじゃ」
「シアちゃん」
「……それだけか？」
「残念ながら」
「…また厄介事の匂いがするのう」

レイが何か行動するたびにびくびくとジェミニの後ろで身じろぎするシアを見ながら、レイは干し肉を口に運ぶ。

そこで後ろから扉が開く音がした。

「……ん？」

入ってきたのはユキネ。最初に干し肉を食べているレイを見て、ジェミニを見て見知らぬ少女を見て最後にその少女が怯えながらジェミニと密着”させられている”のを見て。

数秒考えた後、剣を抜き放った。

「ついに非行に走ったか…！」
「一旦落ち着こう！？　ね！？」

再び扉が開く音。その向こうにはいつもの無表情をぶら下げたフェン。

「――”霰”」
「問答無用！？」

理不尽の末の断末魔が響いた。

「野郎どもー。臨時収入と飯だぞ…ってなんだこの惨状は」
「正義故、だ」
「……なんじゃそら」

◆
◆
◆

「いやてっきり拉致して悪行の限りを尽くすのかと。…すまなかった」
「…ごめん」
「もう慣れてきた自分が少し怖いわ…」
「それにしてもシア、だったか？」

部屋の人間のほとんどの視線がジェミニの後ろに隠れているシアに移る。ますます縮こまるシア。

「シアちゃん。基本的に気の良い人ばっかやから大丈夫。……でもそこの男には気をつけてな。趣味が女を泣かせる事やから」
「なんで何の根拠もない嘘をつく!?」
「この前、受付のお姉ちゃんとよろしくやいよったやんけ！　ワイはしっかり見た」
「……失望したぞ、ハル」
「…最低」
「待てお前ら。さっきの失敗から何か学ばなかったのか早とちり…俺の背中は剣が収納できるようには出来てないぞユキネー」
「いい気味や。爽快そうか、ぎゃあぁぁあああ!!」
「アイアン・クローって知ってるか？」
「割れる割れる！　何か出るぅぅぉおお!!」
「……ちゅー…ッ」
「……どさくさに紛れて何吸ってんだコラ」
「やはり儂には酒と血じゃのう。どれ酒の方は。お、中々年季が入ってそうな……」

口に付いた血を拭いながら、持ってきた酒を眺め始め、その中の一つを手に取った。

それを横から奪い去る。

「ニートにそんな高いもん飲む資格はない」

「ニート？」

「Ｎ（ネーミングセンスが）Ｅ（エグイ）Ｅ（偉ぶった）Ｔ（使えない奴）って意味だ」

「せい！」

「ガード！」

「ゴフッ！？」

ジェミニの頬にレイの踵が突き刺さる。

「……ストップ」

いつものけんかになりそうな所でいち早く冷静に戻ったフェンが割って入った。

「…怯えてる」

そして部屋の隅でぶるぶると体を縮こまらせているシアを指差した。

それを見かねたジェミニがちょっと落ち着いて自己紹介でもしようかと提案して、他の４人もとりあえずそれに従った。

「俺はハルユキ」
「ユキネだ」
「…フェン」
「レイじゃ」
「こっちはシアちゃん」

改めて紹介されて、おずおずとシアが頭を下げた。ジェミニの説明ではあと声が出ない事しか分からないだろう。

「声が出ないって、そりゃまた大変ね」

そして自己紹介の途中で窓からいきなり乱入してきたノインが呑気に感想を述べた。

「……何で当然の様にまたここにいるんだお前は」
「用があるのはあっち」

ベッドに座ったまま興味なさげに半開きになっているなっている扉を指差した。

一瞬の間の後、どかどかと階段を荒々しく上る音が連続して聞こえた後、扉が勢いよく開け放たれた。

「ここか、クソガキィ！！」
「げッ、キィラル…！」
「あの後、また城に来ちゃってね。私はもう知らないから直接本人に話付けてって言ったら飛び出して行っちゃってね面白そうだから私も付いて来たの」
「……今お前がつまみ気分で口にしたのは俺の今日のメインディッシュな事について何かあるか？」
「もっといいもの食べれないの？」
「帰れ！」
「そんな事より無視されて怒ってるわよ、あちら」

ハルユキがノインから視線を戻すと鼻息荒くキィラルがゆっくり迫ってきていた。

「説明すればいいんじゃない？」
「…俺がするのは何か違わないか？」
「私がするのも違うでしょ」

「はっはっはっはっ！　お前はいい奴だなぁ！」

グビグビグビといつもの様にペース配分も何もなしにハルユキに

肩に手を回すキィラルは相変わらず暑苦しかった。

結局嫌々ながらもハルユキが説明すると見る見る間に態度を豹変させ、酒の蓋を開け始めた。

だかだかとまた階段を連続でたたく音がして扉が開いた。

「ノイン様！　やはりここでしたか…！」
「どうしたのミスラ。そんなに慌てて」
「許可なくうろつくのはやめてくださいと言っていたでしょう…！　この頃は減っていたのに…」
「おお、ノイン居たか…って、うげッキィラルさん！」

ミスラの肩越しからひょいと部屋の中に顔を覗かせたガララドの表情が固まった。

「ガララド！　お前結婚すんだってなぁ！！　よし祝い酒だ飲むぞぉ！」
「えぇ…。この前散々飲まされたからもういいですよ」
「馬鹿野郎！　俺の時なんざ三日ぐらい飲み明かしたもんだって言うかてめぇ帰って来た時、目合わせないようにしてただろ！」
「だってキィラルさん。雰囲気とか読めないから…」
「読まん！」
「あ、でもマスターにはしましたよ、報告」
「なら許す！！　いいから飲め！」
「分かりましたよ。いただきます…」

キィラルの横にガラフドが座った途端、体ごとからみに行ったのでその隙にハルユキはベッドに避難した。

ベッドに座り、一息つこうとしたところで第二の刺客。

「ハルぅ！！」

「クロスチョップ！？」

顔を真っ赤にしたユキネが胸に顔を押し付けてくる。その顔からはほんの少し酒の香り。

「……誰だ。また未成年に酒を…」

顔をあげた瞬間に目に飛び込んできた光景に言葉を失った。

逆さになった一升瓶並の大きさの酒の瓶。その首の先には小さい口。

言ってしまえばフェンが酒を豪快に直飲みしていた。直ぐにゴトン、と重い音を立てて空になった瓶が床に転がる。

ユラリ、とフェンが立ち上がってハルユキに向かって歩いてくる。ビシ、と乾いた音がして同時にユキネが目を回して動かなくなる。

その小さい腕からは考えられない膂力でユキネを隣のベッドに投げ捨てた。

あっという間にハルユキの上に四つん這いになると、酔いのせいで若干潤んだ目でジッとハルユキの目を覗きこんできた。

「あのー…、フェンさん？」

パタン、と腕から力が抜けハルユキの胸の上に倒れこんだ。どこかホッとして天井を仰ぐと、一升瓶を片手にワクワク顔で二人を覗きこんでいるレイと目があった。その手には先程の一升瓶。

「…いやまさかこんなに面白い事になるとはの」
「やっぱりお前かくそニート…！」
「無防備な寝顔……。行ってきまっす！」
「逝ってらっしゃい！」

エセ関西弁撃破。

「この部屋狭っ苦しいわね。ミスラ、そこの壁斬り払って」
「御意に」

ズバンと壁が斬れ、バタンと壁が丸ごと倒れ、プツンと頭のどこかで音がした。

「……お前ら纏めて再教育してやろう」

物凄い擬音を噴出しながらハルユキを中心に怒気が巻きあがった。

「ヤバいわね…。総員戦闘態勢！　迎撃するわよ！」

王女がさすがの統率を見せ、復活した三人と他の全員もハルユキの乱心ぶりを見て戦闘態勢に入る。

はた迷惑な騒音と共に馬鹿な夜が始まった。

◆
◆
◆

「あたたたた…」

しこたまぶつけた後頭部を押さえながら、ジェミニはシアの横に座り込んだ。

おろおろとこちらを心配するシアに軽く笑って無事を知らせる。

とっくに男陣は壊滅し、キィラルもガララドもそこらへんでノビている。ミスラは気絶したガララドの傍で具合を見ていて、他の逞しい４人の女性陣は壁とついでに天井も無くなって随分と広くなった部屋でまだ暴れている。

下の街道では酒が回った野次馬たちが大声で笑い叫びながら一緒に夜を楽しんでいた。

「今日の宿に部屋を貸す気やったけど、無くなってしもたなぁ」

怯えを通り過ぎ、どこかボーっとしていたシアがその言葉でやっとジェミニに気づいたようにハッと肩を揺らして首を横にぶんぶんと振った。

「うーん、でも女の子を屋根のないところで眠らすわけにもいかんしなぁ」

正直首を振った意味は何通りもありすぎて分からなかったがどうせ考えても分からないので勝手に解釈することにした。

「まぁこんな部屋でもいいッちゅうんなら…ハルユキー！　シアちゃんしばらく泊めてもええ？」
「許す」
「お前が許すな駄王女！」

案の定まともな返答は返ってこなかった、が。

「ま、別にええやろ。風通しはいいし星が見れるし」

呆れて笑いながらジェミニが顔を横に向けると、シアが控えめに口に手を当ててくすくすと笑っていた。

「笑った顔は初めて見たで？」

そう言うと、シアは自分でもびっくりして、その後また優しく微笑んだ。何かを思いついたのか、奇跡的に無事だった机の上で何かを書くと書いた紙をジェミニに手渡した。

『ジェミニさんが笑った顔も初めてみましたよ？』

一言だけ、ただそう書かれていた。

「……どうやろなぁ」

いつも自分は仮面を替えているつもりだ。表情の作り方はまだ自然にはできないから。

でもこういう時。

ああいう馬鹿でお人好しな奴らと、気ままに行動していると分からなくなる。ちょっと自分への扱いが酷い気もするが。

果たして仮面を替えているのか、ただ自然に表情を変えているのか。

ただその感覚は決して嫌なものではない。ガリガリと脳髄を引っ掻き続けるこの音と同じで。

飲めや、騒げや（後書き）

感想アドバイス意見等いつでもお待ちしてます。

×印

強い日光を感じて、目を開けると青空が広がっていた。

「ん……」

「……何でやねん」

ああ、そう言えば昨日酔った勢いで大暴れしていた奴らがいたな、とぼんやり思いだした。その若い奴らは揃ってもう復活して部屋にはいなかったが。

名前も知らないオヤジはその息子が引き取りに来て残ったレイだけが日陰のベッドでうんうん唸っている。

ジェミニもレイも確か昨日は床で寝ていたはずなので、たぶんハルユキ辺りがベッドに運んでくれたのだろう。ふと、レイの横から此方に小走りで駆けてくる少女を見つけた。

『大丈夫ですか？』

聞こえた声に耳を疑った。思わず目を見開くと、驚いた顔を期待していたようにシアが優しく微笑んでいるのを見つけた。

『ハルユキさんがこれ、くれたんです』

そう言ってのど元を指差した。その指の先に目を凝らすと小さい小さい鉄のかけらの様なものが付いている。

『これを喉につけると話せるようになりました。びっくりです』

「ホントに何もんやあいつは……」

そんな魔法も技術も聞いた事がない。一体どういう仕組みになっているのか皆目見当もつかない。

『この服もノインさんって人が用意してくれました。ちょっと大きいんですけど』

そう言えば、間に合わせで買った安っぽい服ではなく、今時の若者が着ている様な半袖のワンピースを着ている。確かにちょっと大きすぎて二の腕の半分以上隠してしまっているがあんな粗末な服よりはこちらの方が断然いいだろう。

『昨日はどうかと思いましたが、皆いい人たちですね』

「ワイ以外には基本的には親切な奴らやからね」

『皆さん口ではいろいろ言ってましたけど、ジェミニさんのこともちゃんと大事に思ってくれてると思いますよ?』

「そやろか？」
『そですよ』

どこか無機質な声はやはり不自然さが残るものの、それでもこの機械が喉から手が出るほどほしい人もいるだろう。

『半日で消えてしまうそうですけどね。それでも話が出来るのは嬉しいです』
「何か話してると雰囲気変わってへん？」
『あ、すみません…』

ビクッと肩を揺らしてシアがほんの少し青褪めた。やっぱりあまり変わってはいないようだ。

「いやいや、悪い意味やなくて。そっちの方がええよって言おうとしたんや」
『……声が出ないと、その、色々塞ぎ込みがちになってしまって、自分だけ世界と繋がってないって言うか、分かりにくいでしょうけど…』
「んーん、何となく分かるで」
『そうですか？』
「そうや」

声が出ないから不安。寂しい。

それは確かにあるだろう、しかし最初の怯え様は明らかに度を超えたものだった気がするのはただの気のせいだろうか。…いやおそらく違わない。

「水くれー…」
『あ、今持っていきますね』

ほんの少しの葛藤は酔いどれ具合が残った声に遮られて、霧散した。

「…近年稀にみるお利口さんやわ」

か細いレイの声にパタパタと音を立てながら水差しを持ってシアが駆け寄った。ジェミニもそれに着いていきレイの顔を見ると見るからに眉間にしわを寄せうっすらとくまが出来ている。明らかに二日酔いだ。

「ハルユキと飲み比べたらあかんで？　最近アルコールを体内で分解する方法を覚えたらしいから」
「……どういう生き物だあやつは…」
『冷やしたタオル持ってきました』
「すまんの」
「貸してみ」

シアが水につけたタオルを絞ろうとした所を横からジェミニがそれをさらった。ギュッと一絞りでタオルの水滴を落としきる。

それをシアに渡すと細い腕でパンとタオルを伸ばすとゆっくりレイの額に乗せた。

「…あーー……」

レイの額の皺が緩み、同じく弛緩した声が零れ出た。

「ところでこの宿どうすんの？　昨日止めに来た宿主さんも誰かやっつけてたけど」

「ノインがアホ程金出してからはホクホク顔だったから大丈夫じゃろ…」

金に物を言わせたらしい。昨日はいきなり壁なくすわで色々ぶっ飛んだ人だ。

「それよりほれ、お前らも酔っ払いの世話なんぞしとらんで町にでも出てこい。臨時で収入があったから今日は自由日だそうだ。小僧は暇だから仕事をするそうじゃが」

「んじゃお言葉に甘えて、シアちゃんデートでもしよか」

『…え？　あ、いや、でも……！』

案の定ビクッと肩を揺らして目を泳がせる。いつものように笑っておどける様に肩をすくませる。

「冗談や～、そんなビビらんといてぇな」

スッとシアの顔から表情が消えた。続いてグッと唇が噛みしめられる。

『……行きます』
「え？」
『デート行きましょう？』

ニコッと微笑んでそう言った。

「…いや別に無理せんでも」
『無理してません』
「いや……まあ、うん。それなら行こか…？」

扉の近くで振り返ると、レイが仰向けに目ごと額をタオルで被せたままひらひらと手を振っていた。

「さて、何しよか」

自慢じゃないが数限りなくナンパしてきてここまで至ったのは初めてなので右も左もわからない。

『歩きましょう？』

宿の入り口を出た所でぶらぶらしていた手を横からシアに握り取られた。

「そうやね」

やはり少し雰囲気は変わったようだ。こっちの方がいいと言ったのは紛れもない本当の事だが、さすがに少し戸惑ってしまう。

少し前までは自分の方がリードする側だった気がするが。

『ほら、確か今お祭りなんですよね。色々お店に寄ってみませんか？』

「いいともさー」

細い腕を両側とも使ってぐいぐいと引っ張って連れて行かれる。

伝わる感覚は忙しなく、少しだけくすぐったい。ハルユキがあの二人にひっぱりまわされる時もこんな感じなのだろう。

『次あれ食べてみませんか？』
「…シアちゃん結構食べはるね」
『え？　あ、や…や、やっぱりやめま、す』
「駄目やで。一度言った事は貫かんと」

今度は攻守逆転してジェミニが嫌がるシアをからかいながら引っ張っていく。嫌がりながらも笑ってくれているのでまあ失敗はしていないようだ。

それに合わせて笑顔を作ってあげる。

シアと目があって、少しだけシアの笑顔が陰った。抵抗していた力がふっと抜けて目当ての店までたどり着く。

たどり着き次第、繋がれていた手が解けた。

『じ、じゃあ少しだけもらいますね』
「ふっふっ、体は正直みたいやなぁ」
『……』
「ビビらんといて…冗談やから」

全く変わったのか変わってないのか。

その次に行ったのは暗幕でできたテントの中での劇。その中はどうやってか涼しく空気調整がされていて若干歩き疲れていた足腰と体には優しい環境だった。

劇の内容は王女が身分違いの騎士と恋に落ちるというありきたりの筋書き。しかし別名王道と呼ばれるそれはそこそこの余韻を残していった。

ぞろぞろと劇の感想を口にしながら出てくる人に混じって暗幕の途切れをくぐった。

『こういうのは初めて見たんですけど、すごく面白いですね』
「ワイは恋愛ベタベタはちょっとあれやけど、さっきのは割とあっさりしてたから面白かったわ」
『男の人はそうかもしれませんね。でも女の子は少しは憧れますよ？　白馬の騎士様とか。素敵じゃないですか』
「シアちゃんも？」
『柄じゃないのは分かってますけどね』

周りの人間と同じように劇の感想を交換しながら、すっかりオレンジ色に染まった空の下で家路につく。

『あれ…』

ふとシアが足を止めた。視線の先には出店ではなくきちんとした建物の店。

「ん…？　ああ花屋やね。うわ、見たことないんがいっぱいや」

「おや、買ってくかい？」

「お勧めは？」

「これはどうだい？　向日葵っていってね、この季節に綺麗に咲くんだ」

「でかいな…」

丈も花も花弁も全てでかい。こういうのは自然に咲いていてこそ美しいんだろう。活けては駄目だ。

『これは…？』

シアが指差したのは花屋の物ではなく道端に咲く黄色い花。

「ん？　ああそれはタンポポだよ」

『タンポポ…』

「根無し草な花でね。これから更に暑くなると種を飛ばすんだ。それはもう遠っくまでね。何ににも縛られない、自由な花さ」

そこで、まるで表情を見せないように俯きながら、ぐっとシアが袖を掴んでいる事に気づいた。

「ワイに花は似合わんわ、んじゃね」

「はいよ」

それからしばらく沈黙が続いた後、またシアから劇の話が始まった。劇のネタはそう簡単に尽きる事無く、帰路の半分程まで続いた。

ほんの少しだけ、会話が途切れた所でほんの少しシアの歩が遅れている事に気付いた。

「少し休もか？」
『あ、すみません…』
「ええてええて」

幸い祭りのせいかあちこちに休憩所やベンチが設置されている。軽く見渡すと手近に開いている所を見つけたので、そこに座り込んだ。

『あー…風が気持ちいですねー…』
「そやね」
『あ、喉渇きません？』
「そやねー」
『飲み物買ってきますね。ちょっと待っててください』
「いやええよ、ワイが買ってくるから。お金も持ってへんやろ？」
『さっき食べ物買った時のお釣りがあるんで大丈夫です』
「シアちゃん無理してへん…？」
『……大丈夫ですよ？　こうして休ませてもらったし』

そういう事を聞きたかったわけではなかったのだが、どうにも話

すタイミングが分からない。悩んでいる間にシアは走って小さい屋台まで走って行ってしまった。

正直何を聞きたいかも何で聞きたいかもはっきりしていないが。考えている間にパタパタと両手に器をもってシアが走り寄って来た。

『はいどうぞ。ジュースですけど』
「ありがと」

受け取ろうと何気なく手を伸ばした。

視線はガラス製の器に。恐らく飲んだ後は返さなければならないだろう。

そしてそれを持つ手。相変わらず小さい。

手首。肘。そして二の腕。ちょうど裾で隠れていたところにそれを見つけた。

「それ……」
「え……？　――ッ！？」

シアが思い切り跳ね上がりながら腕を引いたことで、手からこぼれ落ちたガラスのコップが地面に落ちて派手に破砕音を響かせる。

『あ、あの…えと……！』
「…まだやっぱ腕細いなぁ」
『え……？　あ、はい、すみま、せん…』
「謝ることやないよー。それよりしょうもないこと言うてグラス割ってもうたなぁ。謝りに行かんと」
『は、はい。そうですね』

出来るだけ割れたコップを集めて持って行った。

何とか気づいてない振りは出来てはいたが、二の腕に刻まれていた印象的なそれは脳裏に残っている。

うっすらと黒ずんだ×印。

何かを否定する不吉な印。

再び帰路に付くものの、ジトッとした沈黙が重い。チラッと隣に目をやると同じようにこちらを見ていたシアと目があった。

笑う。それを見てシアも慌てて笑う。ガリッと脳髄で音がする。

唐突に、気づいた。

この子はあいつに似ている。しかしこのガリガリとした引っ掻くような痛みは、郷愁や後悔とはまるで別物だった。

つまりあいつより、あいつよりもっと。

――この子は、俺に似ている。

×印（後書き）

笑顔

「おお、もう直っとるやん」

扉を開けると、そこに空は広がっておらずちゃんと宿の部屋らしい風景が広がっていた。

実際魔法で行う工事は個々の能力が重要なファクターになるため、遅ければ何日もかかるだろうが優秀な大工がいれば一時間もかからずに家を建ててしまうことも出来るだろう。

「そしてそれとなく豪華になっとるな…」

直ってはいるものの結局ハルユキ・ジェミニ部屋とレイ・ユキネ・フェン部屋の敷居は無くなったままだった。

「何かもう大部屋として使用するらしいぞ」

ひょいと扉の陰からハルユキが顔を出した。両手には何やら湯気が立ち上る豪華な食事がのった皿を持っている。

「それ、どうしたん？」

「何か宿屋の親父がくれたんだよ、上機嫌で。…たぶんノインが尋

常じゃない金を掴ませたんだろうな」
「……生々しいなぁ」

言いながら新しく設置された大きめな机の上に料理をのせた。机の上にはすでにいくつか料理がおかれている。うっすらと湯気が立ち上りそれに乗って臭いがこちらまで漂ってくる。

その臭いにつられながら扉を閉め、机に着こうとすると後ろで扉が開いた。

「む、帰ってきたか。やっと飯じゃな」
「先に食べててもよかったのに」
「いや、こういうご馳走の時はみんなで一緒に食べようって、ユキネが」
「み、みんなで食べた方が美味しいじゃないか…！」
「……そやねぇ」
「笑うなぁッ！！」
「痛いッ！？」

蹴られた。横では言った通りだろうと少しだけ自慢げにシアが笑っていた。

「うぇっぷ……」

今日は昨日よりはましな食事だった。少々食べ過ぎたきらいはあるかもしれないが。

「シアちゃんは……、と」

一旦自分のベッドに座り込み手に持ったコップを置いて姿を探す。部屋の中をたった一回視線を横断させただけで直ぐに見つかった。

何やら、女性陣に捕まって尋問を受けている。

レイは酒を片手にからかい半分。ユキネは興味半分なのにそうじゃない振りをしている。フェンは、無表情でよく分からん。

「飲もうぜ飲もうぜ」
「アルコールモンスターと飲み比べなんかしたないわ」
「馬鹿野郎。何事も挑戦だよ」
「…なあ、ハルユキ」
「ん？」

向かいのベッドに座り込んだハルユキに向かい合うように座り直し腰を曲げて出来るだけ顔を近づけた。

目線は俯きながら話すシアに向けたままだ

「ちょっと頼まれて欲しいんやけど、腕にこう…×印が刻んである人、誰か知らへんか？」
「×印？」

×印。恐らくシアはジェミニがそれに気づいたことすら知らないはずだが、見つかったと思った時のシアの反応はさすがに気に留まるものだった。

「……いや、知らないが。それがどうかしたか？」

こちらの真剣な雰囲気が伝わったのかハルユキの顔も真剣味が混じる。

「シアちゃんの腕に印があった。正直詮索はしたくないけど…調べてもらえへんやろか」
「……」
「……？」

不自然な沈黙。ジェミニが顔を上げてみるとハルユキが驚いたような顔をしている。

「珍しいな。お前が人に何か頼むのは、あと誰かを気に懸けるのもか」
「そうやろか…？」

「ああ、いやそうでもないのか？　よく分からん」
「何やねん」
「いいや、忘れてくれ。適当に調べとくよ」

そう言って自嘲しながら、くいとコップに注がれた薄く茶色に濁った酒を呑み込んだ。三分の一程減ったところで何かを思い出したかのようにコップを置き、ベッドに倒れ込んでいたジェミニに向かって身を乗り出した。

「なぁ話は変わるんだが、ジェミニって名前何か意味とかあんのか？」

名前の話？

いきなりの話の変わり方だが、確かにジェミニという名前は珍しい響きだ。酒の肴の話題にでもするつもりだろうと深く考えなかった。

「あー…っとな、説明すると長くなるんやけど、めちゃくちゃ昔にはな？　星の並びに名前を付けたり…」

いけないな。我ながら少し語り口に熱が入っているのが自覚できる。しかしこればっかりは。

「ああやっぱり双子座って意味でジェミニなのか」

二度見した。これほど綺麗に二度見することはないだろうというほど華麗に二度見した。

「し、知ってるんか！？」

思わず上擦った声が出た。声を出した後で失態に気づいたが、ああもう手遅れだ。目の前の男が性悪そうな笑顔でこちらをじっと見つめている。

「今日は何か意外な物ばかり見られるなあ」
「…それより、知っとるんか？　星座のこと」
「黄道十二門だろ？　双子座とか獅子座とか水瓶座とか、ああ後蛇遣い座ってのもあったか？」
「それは十三門目やけどな。でもこんなんもうほとんど考古学の世界やで？　何で……？」

再び酒に口を付けているハルユキに尋ねると、あー…、と何やら緊張感のない顔と声で悩んだ後、どうでも良さそうな口調でとんでもないことを口にした。

「俺な、実はレイよりも年上なんだよ」
「……ホンマ？」

「嘘言ってどうするよ」
「レイちゃんは…」
「７００、いや８００歳だったかな？」

事も無げに言うが８００歳より上など想像もつかない領域であって、とても目の前の男がそれを超えてきているとは思えない。

しかし思い当たる、と言うよりどこか納得している部分もある。ハルユキが使う全く未知の魔法、いやひょっとしたら魔法でもないかもしれないそれは恐らく時代に呑み込まれて寂れてしまった物なのだろう。

それにこの男は色々と尋常じゃなさ過ぎる。

「……人間？」

さすがにどうかとは思ったが、今更遠慮し合うような間柄でもないだろう。ハルユキも想定していたのかそれとも気にしないほど図太いのか、半笑いのまま、

「さあな、わかんね」

そう口にした。笑う顔はどこか物寂しく、人間らしさが逆に薄くなって見えた。

やっぱり少し酒を入れるかと思い、水差し用のコップにハルユキが持ってきた酒を注いで少しだけ口に運んだ。

「じゃあ、双子座の由来とかは知っとるんか？」
「いや名前知ってるだけだ」
「何や知らへんのか？　ええか？　双子座ってのはやな…」

話している時、ふとまた表情が露出しているのを感じた。

◆
◆
◆

目を覚ましてゆっくりと目を開けた。ベッドの柔らかさにほんの少しだけ慣れなさを感じながら上体を持ち上げる。

ゆっくりとまだ薄暗い部屋を見渡すと何故かお世話になってしまっている人達がゆっくりと眠っている。

喉に違和感を感じて手を当てると昨日寝る前はあったはずの鉄の欠片が無くなっていた。無くしてしまったかと焦りながら探そうとしたけどそう言えば直に消えてしまうといっていたことを思い出し

て息をつく。

それにしても違和感、か。声が出ない方が本当の私なのに何を言ってるんだか…と短く笑って立ち上がった。

声を出せない。朝方だからなのか他に音もない。

染み入るような静寂がシアの周りに部屋中に鎮座している。

静寂、不思議と今は何も思いださない。

錆びた鉄が擦れてじゃらつく音も、何かを叩くような乾いた音も。歯と歯がぶつかり合うけたたましい音も。

目を瞑ると静寂が耳から入り込んでくる。しん・・と薄く響いているようだ。

静寂の音。何だかすごい物を見つけてしまった気がする。だってこの音はすごく優しい。

それがどこからか繋がったのか何の前触れもなく昨日のことを思い出した。

思ったよりよく笑うんだな

デートで何もされなかったか?

楽しかったか?

そんなことを根掘り葉掘り聞き出された。全て笑顔でそつなく答

えられたと思う。

楽しかったか？　と昨日聞かれた質問を頭の中で反芻して、その時答えた通りの言葉を口にした。

声は当たり前のように出ずに静寂の音も途切れなかった。

でも多分、あの人は。ジェミニさんは楽しくなかったと思う。

あの人は多分私のことが嫌いだから。

昨日もいつも通り固まったような冷たい笑顔しか見せてくれたかったから。

初めて見たあの日から笑顔を見せてもらえないから。

今日の私は気に入ってもらえるだろうか？

嫌われないだろうか？

分からない。でも笑っていよう。あの人には最初弱いところも見せてしまった。自分の素を見せてしまったから、だから駄目なんだ。

笑っていよう。

嫌われないように。怒りを買わないように。飽きられないように。

そうすれば。

きっと。

◆
◆
◆

「さてと、ワイは街にでも…」
『あ、私も行っていいですか？』
「ええけど、退屈やで？」

我が一団はもう完全に不真面目モードに入ってしまったのか今日も仕事はなし。と言ってもハルユキは多分例の印の調査。フェンはユキネに魔法を教えているらしい。レイに関しては詳細不明だが。

今更鍛錬もどうかと思うし、調査できるほどジェミニはこの街に人脈はない。

そこで何時ものナンパに勤しもうと思ったところでこれ。別に問題はこれといって見当たらないが何とも落ち着かない。

『またデートですね』
「そやね」

そうだ。これもデートと言える。ナンパを成功させた後と考えれ

ばいいわけだ。

よしよし。簡単や。

「じゃあ……」

簡単じゃない。そもそも経験値が全く足りていないのだ。昨日のだけで十分に許容量を超えてしまっている。

とりあえず。

笑っとくか。

成功か失敗で言ったら問答無用で失敗だった。

結局昨日と同じように店を回って疲れたら休憩をしてを繰り返しただけだ。これを成功という口があったら舌をかみ切ってやる。

夕焼けに染まった空に今日を無駄に過ごしたことを心の中で愚痴りながら、手の中にあるコップに入ったジュースを一気に喉に流し込んだ。

夕焼けを見るのにも飽き、隣を盗み見る。

にこにこにこにこにこにこ。

今日は朝からほとんどずっとこの顔である。何か楽しいことでもあったのだろうか、と思えたらいいけれど。

昨日よりも数倍酷い。

最初の怯えた様子など完全に引っ込んでいる。もしここで誰かが惨殺されても笑っていそうだ。

人間味が無く、現実味がない。

何故そんな醜い物を顔に貼り付けているのか。

それはきっとジェミニが嫌いだからだろう、と目星を付けた。同族嫌悪とまで言うつもりはないがそれに近い物を感じ取っているのだろうか。

しかし実際どこが似ているかなんてはっきりとは言えない。

自分がシアに対して嫌悪を抱いてない事を考えると本当は似ているなんて事も間違いなのかもしれない。

そんな微妙な感覚と格闘しながら中空を眺めていると、シアが口を開いた。

さすがにそれが最後に繋がるとは想像できなかった。

それほどいきなり何の前触れもなくこの妙な関係は終わりを告げる。

「あ、器返してきますね」

シアはそう言って立ち上がろうと足に力を入れる。

立ち上がるほんの数瞬前、ベンチからほんの少しだけ飛び出た釘に今にも立ち上がろうとするシアの服の袖に引っかかっているのに気づいた。。

「あ……」

声をかける間もなくシアが完全に立ち上がった。

ピッと短い音がして唐突にそれが明らかになった

黒く焦げたかのような×印。

今度は目を逸らすことも話を逸らすことも出来そうにない。

さっと取り落としたかのようにシアの表情が抜け落ちた。

「シアちゃん、それ…」

ここまで正面から見てしまえばもうごまかせない。ならば少し立ち入ってみるかとぶるぶると震える体のせいで一緒に小刻みに震えている×印に手を伸ばした。

『触らないでッ！！』

ピタッと接近していた手が止まった。

『さ、触らないで…下、さい…』

怯えて震える声を辿って顔を正面から向き合う。

それでも笑っている顔がどうしても滑稽だった。

「シアちゃん。そんな気持ちの悪い顔せんといてや」

切って捨てるような声が自分の口から飛び出る。自分でも驚くほど冷たい声だった。

『す、すいま、せ……』

後ずさりしながら、シアが震え出した。尋常じゃない怯え方で見ている間にシアの歯がガチガチと音をたて始める。

こちらがジッと見ているのに耐えきれなくなりそうになった時、シアがこちらに背を向けた。

声をかける間もなくその背中が遠ざかっていく。

背中を黙って見つめていると、胸にこみ上げる何か不快な感触が鬱陶しい。

その時のジェミニの顔が気色悪い笑顔で固まっている事にジェミニは気づいていない。

雨の音

「お姉ちゃん綺麗やねー」

声をかけたはずの女性は、チラッとこちらを一瞥しただけでジェミニの前を横切って人混みの中に消えていった。

スーッと体を通り抜ける風がどこか冷たい。

上げかけた手を頭に持って行き少しだけ天然の癖が入った茶髪を掻き毟る。ばりばりと頭に響く音が思い出させるので直ぐにやめた。

今日は多分宿にいるはずだ。いや昨日はフェンやユキネ達と話していたから一緒に遊んでいるかもしれない。相変わらず何事もなかったかのように表情を隠して。

――どうして、あんな事を言ったのか。

気持ち悪い、などと。自分の感情を表に出して相手に害を与える言葉を。

苛ついた。

理由としてはただそれだけ。

理由の理由としては不自然な笑顔が不快だっただけ。

理由の理由の理由はもっと簡単で。ただあの目であの風貌で無理しているのを見るのは耐えられない。それは女の子の役目じゃない。

ぽつ、と冷たい水の粒が頬に当たって思考が止まった。下がっていた視線を上げれば周りにもぱらぱらと雨粒が降ってきている。

だんだんと雨足は勢いを増し、人々が逃げ惑うように手近の屋根に走っていく。

ジェミニもその他大勢の多分に漏れず近くの屋根に入り込んだ。

うっすらと見える山の向こうに目を凝らしても晴れ間など垣間もみえず曇天がずっと続いている。

めんどくさそうに溜息をつく。

雨は直ぐに視界を埋めるほどに激しさを増していった。

雨は全く止みそうな気配を見せない。

しばらくここから出られそうにない。所謂、手持ち無沙汰だ。

話し相手でもいればいいのだが。

◆◆◆

ふらふらと何の目的もなく人の波に揺られている。

目的としては一応ジェミニを探している、という事になっている。

「…ジェミニとケンカしただろ」

『え…？』

話しながらジッとシアの顔をのぞき込んでいたと思ったら、今まで話していた内容など押しのけてユキネがそう言ったのがきっかけだった。

『け、けんか？　し、してませんよ、そんな』

本当にケンカなどしていない。顔は笑っていて分からなかったけど多分怒らせてしまっただけ。いやひょっとしたらそんな軽い事ではないかもしれない

『ただ、ちょっと、怒らせてしまっただけで…』

声が少し沈んでしまった事を自覚して、大丈夫だと笑顔を作ってみせる。

それを見てピクッと眉を動かしてユキネが不器用に腕を組んで唸り始めた。

「ジェミニが、怒った？　あのいつもへらへらしてる奴が？」
『……珍しいんですか？』
「珍しいって言うよりも初めてだな」

うーん、と唸りながら首を捻る。しばらく考えた後パッと顔を上げてシアの顔を見ながら口を開いた。

「アイツはいつもへらへらしてるから何考えてるか分からないんだ」
「…そう、ですかね」
「ナンパ男だし、時々変態だし結構ろくでもないんだ」

そう、いったところはまだ見た事がないがそう、なのだろうか。

「それに責任感もないし、えーと、ほらすぐどこかに消えるし」

所々つっかえながらジェミニの悪いところを羅列していく。えー、とか、あー、とかが増え始め、変態という単語の3回目が出て来た時。

『ジ、ジェミニさんは…そんなにヒドい人じゃ……』

消え入るような声でシアが異を唱えた。
それを聞いたユキネは疲れたように苦笑して溜息をついた。

「そうだな」
『え…？』
「……変態だけど、いい奴だとは思うんだ。だから嫌わないでいてやってくれ」

思いがけない言葉が自分の口から出て来たときから頭が少し動作不良を起こしている。
どうしよう。
とりあえず、とりあえず。

「よし、じゃあ仲直りだ」

何かする前にユキネが考えなしに口を開いた。

『……はい？』
「ケンカしたんなら仲直りだ」
『いやでも…』

「話せば分かるよ、ちゃんと」

にかっと綺麗な顔を歪めてヤンチャに笑った。眩しい笑顔だった。

かくしてシアは今ここを歩いているわけだ。

手分けをして探すという事で現在一人で探している。

街を一人で歩くのは久しぶりだ。外を歩くときはいつもあの人がいてくれたから。

でも今日は一人。

いつかのように頭からすっぽりと布をかぶり、顔を隠して街を歩いて行く。

視界の上半分を占める空が雲により灰色に染まっている。天気を考えるともう帰った方がいいだろう。でも、

怖い。

あの人が怖い。顔を見るのが怖い。声を聞くのが怖い。笑いかけられるのが怖い。

どうしてあんな顔が出来るのだろう。いやどうしてあんな顔をするようになってしまったのだろう。

あれは、あの顔は、種類こそ違えど表情がない能面のような喜色も悲色も無いアイツと同じ顔。かちかちと歯が鳴り出し、寒くもないのに体が震え出す。

落ち着け。いない。アイツはここにはいない。頭からフードをかぶってさえいれば見つかりようがない。

震える体を無理矢理両手で押さえつけて、ぶつぶつと自分に言い聞かせると乱れた呼吸が少しずつ整ってきて、激しくなってきた雨の音だけが聞こえるようになってきた。

大丈夫。辛くても笑っていれば怖くない。

”笑え”

雨宿りしないとせっかく与えてもらった服が汚れてしまう。周りを見渡して近くにあった店へ避難した。

大きいショーウィンドウがあって中にはアンティークな家具が並んでいる。

中の様子に気を取られていた間に、どんどん人が屋根の下に入ってきて密集してきた。

幸い最初の方に入ってきたせいで雨に当たることはなさそうだ。

聞こえてくるのは激しい雨音といきなりの雨を呪う声。

――ザワザワ

――バシャバシャ

その音だけに神経を集中すると何だか恐怖が洗い流されていくようで気持ちいい。いつの間にか震えも止まっている。

止むことなく心地いい音が情報となって一方的に耳の中に入り込んでくる。しかしその中にシアの音はない。

せっかく今は話せるのに。首筋に腫れ物にでも触るようにそっと手を触れる。首と手から伝わる堅い金属の感触。でもそれが今は嬉しい。

誰かと話したいな、と思った。

示し合わせたかのように、視界の中に見つけた。

後に来たせいか少しだけ癖が入った茶色の前髪を濡らしながら雨宿りしている顔見知りを。

慌ててショーウィンドウの方に顔を向けて顔を俯かせる。しかし逃げるような行動とは真逆に妙な気持ちがわき上がってきていた。

話したいな。

昨日のような表情はまだ怖い。

だけどあの人はやっぱりいい人だから。私は嫌な物を重ねて逃げ出してしまったけど。

今は話せるじゃないか。逃げなくても。

聞きたいことは聞いて。相談して、そして話も聞ける。

あの人のことを聞いて、そしてやっぱり少し怖いけど自分のことも話してみよう。

そして、私の笑顔に本当に笑ってもらって言葉を交わせるようになったら。最終的に私のことを嫌いじゃなくなってくれたら。

――話せば分かるよ、ちゃんと。

先程言ってもらった言葉も背中を優しく押してくれる。

話してみよう。

そう決心してグッと唇を結び、ぐっと顔を上げた。

そしてショーウィンドウに映る自分の首に、黒い革の手袋を付け

た手が副えてあることに気づいた。

「見ィつけた――」

嫌でも死んでも忘れられはしない擦れた声が耳に届いて。
副えられた手が首を包むようにゆっくり閉じられてシアの首を圧迫していく。

「ヒハッ、お痛するようなタイプじゃないと思って油断したよ――」

けたたましく鳴る歯の音が雨の音も人々が話す声も覆い隠して塗りつぶしていく。

「何を怯えているんだシア、教えただろ――？」

グッと手に更に力が入り呼吸を邪魔する。

「――――笑えよ」

容赦なく叩き付けられる恐怖に表情が歪む。

歪んで歪んで、気味が悪いほど自然に笑顔に行き着いた。

悟る。

こんな顔をしていたのか、と。
こんな顔で笑っていたのか、と。

気持ち悪い。

恐怖が握られた首元と擦れた声を受け取る耳からじくじくと浸食するように体に広がる。

体の奥から同時に諦観も浸透していくそんな時。

再び見つけた。

ショーウィンドウに映っている。背中が映っている。見慣れた茶髪が映っている。

助けを求めたい。

助けて欲しい。

手は届かないし、汚い私に触って欲しくもないけど、今なら声だ

けは届くから。

ガラスに映った顔が泣きそうに整う。

震える喉で思い切り息を吸い込んむ。どこから伸びてきているか分からない手の先で少しだけ驚く気配がする。

――助けて…！

しかし、出たのは空気だけ。

気付けば喉にあの金属の感触がない。

「――もしかして助けでも呼ぼうと？　バぁカな子だなぁ。声はもう出ないだろうが」

擦れた声が耳元で聞こえるが、頭の仲間では入ってこなかった。

何で、声が…、とその事で頭が一杯で、考える間に世界が狭くなっていくような感覚に襲われる。

ああ、何だ。

簡単なことだった。

私は助けてもらえる資格がないんだ。

「何とか間に合いそうだ」

世界から切り離される。

唐突に、意識が途切れた。

雨の音（後書き）

感想アドバイス等お待ちしてます

長幼の礼

「あれ？　シアは一緒じゃないのか？」

受付で貸してもらった毛布で濡れた体を拭きながら部屋に入ると、そんな声が聞こえた。

「違うけど…？」

見ればユキネがジェミニと同じように濡れた髪を拭いていた。拭きながら難しい顔をして考え込んでいる。

「さすがにこの土砂降りなら帰ってくると思ったんだが…」
「他の三人は？」
「ハルユキとレイは知らないがフェンなら多分宿の中にいると思うぞ」
「まぁ、あの二人は放っといても、風邪なんてひかへんやろうけど」

シアの方は恐らくそうはいかないだろう。
しかし、現実的に考えてこのバカ広い街で探すというのも無謀だ。

「…濡れて帰ってくるやろうから、毛布と何か温かい物でも用意しとった方がええか」

そう判断を下してユキネに聞こえるように呟いた。

「……どうしたん？」

それを聞いたユキネが何とも形容しがたい顔で固まっていた。

「ケンカしたんじゃなかったの、か…？」
「ケンカなんてしてへんよ？」
「…いや、まあ、そう…。うん、え…？」
「とりあえずなんかスープでも作ってもらうように頼んでくるから、ユキネちゃんは毛布とか用意してやって」
「あ、ああ、分かった」

◆
◆
◆

「……いくら何でも遅すぎないか？」

フェンが部屋に戻ってきて、ハルユキも帰ってきてそれから一時間程経ってからユキネが堪えきれずに言った。

いつもシアが使っているベッドには山のように積まれた毛布の上にユキネが座り、横の机では何回も温め直したスープが細々と湯気を立ち上らせている。

ふわふわと立ち上っては消える湯気を見て思っていた事が意識する前に口に出た。

「もう、帰ってこないかもしれへんよ」

「え…？」

ここに来てからシアは笑うようになった。無理して無理して笑うように。それに加えて昨日のあれだ。もしあの×印にのっぴきならない事情があるとしたら帰ってこないのも頷ける。

いやむしろここまで帰ってこないという事はもう確定的だと考えてもいいだろう。

「ほら、シアちゃんも無理してたんやない？　もうどこか行ったんやと思うよ、教会とか」

「何、だと……？」

「いや、だからもうここには……」

「本気で、言ってるのか……！」

「ワイが嫌われてるせいかもしれへんけどね」

それを聞いてユキネは目をほんの少し見開いてぐっと唇をかむ。
どこか泣くのを我慢している子供の様な顔だった。

「あいつは、シアは…楽しかったと、言っていたぞ」

ユキネのきつく食いしばった歯の間からそんな言葉が漏れてきた。

「楽しかった…？」
「一緒に街を歩いた、一緒に美味しいものを食べた、劇を見て、少しだけヒロインに憧れた、最後に少し失敗したけど楽しかったって！」

何時もの口調より明らかに声が怒気を纏って厳つくなっていく。
仮にも元王女。その眼には覇気すらも感じ取れそうだ。何を言いたいかもどうして言いたいかも嫌でも分かる

それでも。

「また行きたいって、言ってたんだぞ…！」

それでもやっぱりこれ以上無理をさせるわけにもいかない。

「それが嘘やないって証拠はあるんか？」

無理をして無理をして無理して笑って。それが嫌で出て行ったのならもう待っている方が酷なんだ。

「お前……ッ！」

目にも止まらぬ速さでベッドから跳ね上がるように立ち上がり、ジェミニの胸ぐらを掴み込んだ。身長のせいかあまり力は伝わらない、が目に宿る覇気がそれを補ってあまりある程の重圧を与えてきた。

「何？」

平坦なのっぺらとした声が口から飛び出た。笑うときの独特の頬の感触が脳髄まで伝わってくる。

ぐっとユキネの目が限界まで見開き右腕を振り上げたところで、横から来たフェンが杖で思い切りジェミニを殴りつけた。

「もう、いい」

「……そうか」

短くお互い一言だけ言葉を交わすと、フェンはユキネの腕をとっ

て部屋から出て行った。

フェンの力だ。痛くはない。しかしずくずくとした感触がいつまでも残りそうだった。

「おーおー若いのう、お主等」

フェンに殴られて床に転んで、まだ立ち上がる前に扉の方から声が偉そうな聞こえた。

◆
◆
◆

「立ち聞きは趣味悪いで、レイちゃん」
「儂が途中で入ってきたら御主らの青春っ振りが台無しじゃろうが。と言うよりあの青春空間に儂は入り込みとうない」

人がたまに真面目にすれば、ここぞとばかりに台無しにしてくれた。

苦笑しながら見上げてみれば、相変わらず性の悪そうな顔で笑っている。

「この年で青春なんて言われるとは思ってなかったわ」
「儂から見れば御主ら皆ガキじゃ」
「ハルユキから見れば生まれてもいないやろね」
「あれは精神的には稚児も同然」
「時々妙に達観したようなこと言うけどな、基本的に謎やし」

まるで誘導したかのように、その言葉を聞いた途端ニッと意地の悪い笑顔を深くした。

「そりゃお主もじゃろうが」
「…いやいや」
「儂は”吸血鬼”じゃぞ？　その臭いには敏感じゃ、誤魔化そうなどと思うなよ」

言葉と口調に険が混じる。恐らくわざとだろうが。

「……何が言いたいん？」
「鬱陶しい」
「要領を得られへんね」
「お前の気持ちを代弁すると、そちらが本当の自分だから、嘘をついているから、だから好かれるはずがないし、自分は本当に仲間である訳じゃない…と言ったところか？　カッ、女々しいわ」
「…それはレイちゃんもやろ」
「なんじゃ。認めるのか」

「……」
「因みに言っておくと儂がそんなめんどくさい事を思うか。去る者追わず、来る者はそいつ次第と言ったところじゃの」
「……そうやろね」

この老獪な生き物に舌戦で勝つのは少し分が悪いようだ。こちらが何を言っても優位も表情も一ミリたりとも崩さない。

「何じゃ。本当にそれが理由なのか？」
「……間違ってはおらへんよ」
「つまらんの。ま、得てして本当の事なんぞつまらん物じゃがの」
「そうやね」

ハッとまた愉快げに笑った後、また口を開いた。

「お主がぐちぐちと拘ってる本当の自分とやらも同様につまらん」
「……中々、きつい事を言うんやね」
「ならば考えてみろ。何じゃ本当の自分とは」

そんなことを考えるのか？　この年で？

「そうさな…例えば高尚な僧でも劣情を持たす事もあるじゃろう。一国の王が膝を抱えたい時もあるじゃろう。化物が泣きたい時もあるじゃろう。変わらずにはいられん。特に貴様ら若人は一つの季節

が変わる内に何度も変わる事もあるやもしれぬ」
「……」
「お主がフェミニストを気取っているのも、時折の血生臭い雰囲気も、気色悪い笑顔も何一つとして矛盾なんぞしておらん」
「…全部お前自身？」
「そこまでくさい事を言う気はないがの。ただ、そんなあやふやな物に振り回されて周りが見えん一生なんぞ屎（くそ）じゃ」

とても女子が言う言葉とは思えない。しかしそんな事を気にする様子など微塵も見せず言葉を続けていく。

「実際の所、お前は何も見えておらんよ。まだ頼る事も覚えとらんようやしの」
「…レイちゃんも人を頼るようには見えへんけど」
「年寄りは人を扱き使って利用する事はできるんじゃよ」
「……人から年寄り言われたら怒るくせに」

挑むような目線でこちらを見下ろしてくる。いつの間にかこちらも立ち上がってその目線に目線を合わせていた。

「珍しいのぅ、殺気が漏れてるんじゃないか？」
「……少しだけ、いらいらしてるかもしれへんね」
「はッ、よく言う。笑ってるぞ？お主」

ああそう言えば、とレイが愉快げに告げる。

「あのシアとか言う小娘もそんな剽軽な顔しとったの、伝染ったか？　いや伝染したか？」
「……レイちゃん」
「怒ったか？　案外安いのぅ」

ふぅと神経を逆なでするように溜息をつく。

「……いかんいかん、苛めるのが楽しすぎて本題を忘れておったわ」
「本題？」
「このままじゃ後悔するぞ、お主」

散々もったい付けて出て来たのは随分と……。

「何か意外やね。ワイは別にシアちゃんの事で……」
「何を勘違いしているか知らんが、儂はあの小娘の事なぞよう知らんからそこまで口を出す気はない」

先程とは打って変わって呆れたような表情で腕を組んだ。

「儂が言いたいのはの。お主はあやつ等3人にも距離をとっとるみたいじゃろ？　それがどういう理由かは知らんが程々にしないとまずいということじゃ」

「まずい…？」
「お主あの稚児どもが距離を感じて万一にでもそれを縮めようとした時、上手く避けられるか？」
「……は？」
「あちらから距離を詰められる前に自分から近づいておけ」

正直、拍子抜けした。

何を言うかと思ったらそんな事を本気で切羽詰まった顔で。

「アホやね…」
「いやいやお主様よ。侮る事なかれ、そんな事を言っていてはアホな目に合うのは…」
「お前だ、小娘」

後ろに立っていたハルユキが、いかにハルユキがアホかと言う事を高説しているレイの後頭部を思い切り鷲掴んだ。

途中から分かってはいたが、何となく言わなかったのは多少気を晴らしたかったからだろうか。レイの額に珍しく冷や汗が流れる。

「……よし、今から説教するからな。しかと聞けよ」
「そ、その状況で？」

年長者組恐るべし。疲れたように笑いながら、ジェミニには出来

ないやり方で笑いながら。
言葉を繋げた。

「お主の周りはアホばかりじゃから、困ったら自分から言え。あちらから気付いて来ようもんなら勢いが強すぎてとてもじゃないが避けきれんぞ。だからまだ歳食って距離感が分かるお前から歩み寄ってみろ。

それと、結局本当の自分なんて死ぬ時にしか分からんから、やりたい事をやれ。それで浮き出てくるのを拾い集めて自分を作れ。お前はまだ一欠片も集まってはおらん。

自分を作って何が悪い。好きな自分をつくってみろ、若人なんぞ悩んでなんぼ。走り回って苦労してなんぼじゃ。

――それに、今なら何とお主と一緒に頭を抱えてくれる仲間がいるぞ」

長々と本当に長々と説教を承った。頭を掴まれて宙に浮いてなければ格好もついたのだろうが。全く、笑ってしまう。正直言ってることも要領得ないし。言った本人が少し照れてるし。

「それはちょっと我侭過ぎへん…？」

吹き出しそうになるのを我慢しながら、いやもう半分爆笑しながら相槌を打った。本当はもう何も言う必要もなかったのだが。

「馬鹿もん。大人が我が儘じゃないと子供が大人になりたいと思わんじゃろうが」

本気の目である。それを貫き通すとこういう風になるのだろうか。でもまあいつの間にか話半分でも聞き入っていた自分がいたのは否めなかった。

「…今日は随分としゃべってくれるんやね」
「年寄りのご高説じゃ。ありがたく受け取れ」
「ホントに、みんな規格外過ぎて馬鹿らしくなってくるわ」

レイがニッと悪戯大好きと言ったように歯を見せた。それを見て、また笑った。全く大したツンデレさんだ。

「…お話は終わりましたか？」

そこで、血管を二、三本浮き上がらせながらハルユキがやっと二言目を口にした。

「…ところでハルユキはどうしたん？」

あの手に捕まれることの恐怖は知っていたので助け船を出すと、ハ

ルユキは血管は浮き上がらせたまま口を開いた。

「いやあの×印の事なんだが聞いて回っても分からなくてな。まぁまだノインとかマスターには聞いてないから何とも言えんが…」

「待て、×印…？　何の話じゃ」

「話を逸らそうとしてんのか？　ん？」

大して力を加えた風でもないのに、簡単にぶらんと更にレイが持ち上がった。

「ええいッ、放せ！」

ハルユキも流石に本気ではなかったのか顎に迫るレイの踵を避けながら手を放した。

「言え、×印とは何の話じゃ…？」

「いやシアちゃんの腕についとった印なんやけど…」

それを聞いたレイが珍しく驚いた表情を見せた。チッと小さく舌打ちする様もまた珍しい。

「あの娘の体にその印があったのか？　間違いないな…？」

「そう、やけど…？」

「……その印はの、人ではないと印されたものでの」

レイがもう一度息をついて、続ける。

「――つまりは、奴隷の証の烙印なんじゃ」

長幼の礼（後書き）

感想アドバイス等お待ちしてます

騎士物語（前書き）

少々胸糞悪すぎる表現と、くさすぎる表現があるかもしれません。
後者は今に始まったことじゃありませんが…。

「奴隷…か」

予想していなかったと言えば嘘になる。初めにあった時の衰弱した様子と服とも言えない布きれを纏いながら誰かから逃げている様を鑑みれば不思議な事ではない。

「ごめん、行くわ」

話が変わった。先のレイの話に感動してやりたい気分だったがそうも言ってられない。

危険が迫っている。ならこの身を呈してでも守らなければ。

無表情にこちらを見つめているレイの横を通り抜けて階段へと向かう。

そこに金色の髪の少女が不機嫌そうに腕を組んでこちらを睨んでいた。

「レイの話を聞いてなかったのか？」

「…え」

シュッと軽く空気を切る音がしてジェミニの腹に拳が突き込まれた。ボスン、と気の抜けた音がした。

「行くぞ」

え、と間抜けな声を出した瞬間、後頭部にゴツンと堅いものが当たる。

何事かと振り返る前に直ぐに横からフェンがジェミニを一瞥して追い抜いていった。

「フェンちゃん…」

続けてバチンッ!!　と聞くだけで痛い音がした。

「いったいわ…」

じんじんと叩かれた背中が痛みを訴える。

「……あいつ等は友達とか仲間とかにちょっと敏感だからさ。察してやってくれ」

「…わかっとるよ」
「因みに儂はそんな青くさい事はせんぞ？」

ひょこっとレイが顔を出してそんなことを言った。それでもまあ、何だかんだで手伝ってくれるのだろう。

「……ありがとね」
「ぬ…ぅ」
「一丁前に照れてんじゃねぇ」
「て、照れとらんわ！！」

常人が食らえば恐らく三日は意識が戻らないであろうという拳を軽く流して、ハルユキが鼻で笑いながら階段を一気に飛び降りて逃げていった。

「あの、クソ餓鬼が…！」

それを額に血管を浮かび上がらせたレイが追う。全く本当に緊張感がない。

苦笑しながらその背中を追った。

◆
◆
◆

「おーい、そろそろ起きろよ～」

限界まで擦れた剽軽な声と共に目を覚まして顔を上げた。首に付けられた鎖が同調して重々しい金属音を発する。

目の前であの男が座り込んでいた。

中背の背丈に、上から下まで黒い革の服に身を包み黒い革靴に黒い革手袋。黒いつばが広い帽子。そして狂ったように笑った道化の仮面。何一つ変わってはいない。

「ほらお前の檻だ。自分で歩け。僕は非力なんだ」

そして目の前には小さな檻。人がようやく3人入る程の小さな小さな檻。実感が津波のように意識の中に流れ込んでくる。

ああ、戻ってきてしまった、と。

せっかく、逃げ出したのに。大変だったのになあ、とどこか頭の中の遠いところで何かが呟いた。

でも、どうせたまたまだったのだ。たまたまはぐれてたまたま逃げ果せただけ。

鎖をじゃらつかせながら立ち上がろうとした。それを上から押さえつけられて地面に勢いよく押さえつけられた。むしろ叩き付けられたといった方がいいんだろうか。

「だぁれが、立っていいって言ったよ？　――這いつくばれ」

ああ、そうだったなと、また遠くで何かが呟いた。この住処の中では確か二足歩行を禁じられていた。

申し訳ありません、と言えない代わりにペコリと頭を下げる。

次の瞬間、風を切る音が聞こえたかと思うとガツッと顔面の左半分に衝撃が走った。

為す術なく地面を転がって二回程回転したところで勢いが止まった。

定まらない視界に、先端がほんの少し赤く染まった爪先が見える。

ああ、蹴られたのか。

「――笑えよ」

半分感覚がなくなった顔で表情をつくって額を地面に擦り付けなおした。よし、と男が許しを与えてくれたのを確認して檻に向かう。

檻の堺を超えようとしたところで。

「ああ、待って」

何かおもしろいことを思いついた、とでも言うような声色でシアを制した。

「そこでこっち向いて、”ただいま”だ。口パクでいいよ」

なんてことはない命令だ。

振り向いて、もちろん、笑顔で、”ただいま帰りました”と確かに言った。何所かで何かに罅が入った音がした。

しかし今となってはそんな物は雑音でしかなく、男が愉快そうに檻の方を顎でしゃくったのを確認して、もう一度一礼した後、檻に入った。

「ああ、いいぞ。出てこい」

全身が檻に入ると直ぐにぐいっと鎖を引っ張られ、檻を出ろとの命令が下った。何をしたかったのかとも思うが、おそらく知らしめたかったのだろう。今更そんなことする必要などないのに。

何しろたまたまの偶然の出来事だったのだ。外に少し出られただけでも運がいい。だから後悔はない、未練もない。

嘘だ。

自分一人でさえも一瞬たりとも騙せない。

ビシッと更に音がする。

「おい？　ボケッとしてるんじゃないよ？」

男が鎖を引っ張ると歩きたくもないのに引き摺られるように足が前に進む。

男が笑えといったら笑う。

男が跪けと言ったら膝も手も額も土に擦りつける。

男が舐めろと命じれば地面にさえ舌を這わせる。

奴隷だから。

私は所有物にしかなれない人の形をした道具だから。主人が求めているのは笑顔。

なら、笑え。それがお前でお前の使命でお前の生き甲斐で運命で罪で罰で、全てだ。

「よしよし、いい感じで元に戻ってきたじゃないかあ。流石だ。躾し直そうと思ってたけど必要ないみたいだ」

ほら、幸運だ。笑っていれば幸せだ。

笑っていればあまり撲たれない。笑っていれば優しく犯される。笑っていれば誰に恨まれることも嫌われることもない。

…いや、そうでもなかったか。

確かこの顔を、私の顔を本気で嫌った人がつい最近いた。

連鎖的に、笑い返してくれた人達を思い出した。

誰かは無邪気に。誰かは無表情に。誰かは性悪そうに。誰かは大らかに。そして誰かは、優しく。

外に出たい。

ユキネさんやフェンさんとまた夜遅くまで話したい。

これは少し不謹慎かもしれないけど、レイさんとハルユキさんが仲良くケンカしているのを見たい。

ジェミニさんに、謝りたい。

ごめんなさい。

汚れた手で触れてしまってごめんなさい。

一緒に街を歩いたりしてごめんなさい。

隠し事をしててごめんなさい。

楽しかったなんて言ってごめんなさい。

酷い顔を見せてしまってごめんなさい。

ずっと何処かで、助けを期待してごめんなさい。

だってあれが最後なんて思いたくない。思われたくない。嫌われたまま別れたくない。好きな人に嫌われたままなんて嫌だ。

笑って笑って、笑顔で塗りつぶした感情がじわじわと浸食する。

――ほら、やっぱり。自分でさえも騙せない。

「何だ？　シア、お前…？」

振り返った男の顔が不機嫌そうに歪む。おいおいおいおいと声を荒げながらシアの首元の鎖を引っ張り上げるとその文字通り笑顔に塗り固めた仮面を近づけた。

「なぁに、泣いてんだ――…？」

もう、笑えない。

自分を騙せない。

騙すのが下手になったのか、騙されるのが下手になったのか。

たった数日の出来事に、何年も何年もかけて作った仮面は跡形もなく壊れてしまっていた。

「そんな顔、初めて見たで？」

最初は幻聴かな、と自分の耳を疑った。

暗がりから出てくる姿を見て、目を疑った。

何処か信じていた自分を見つけて、それも疑った。

でも、いつも通りの笑顔の仮面で確信した。

あの妙な訛り方をした言葉も、癖がかった茶色の髪も。全て現実だと。

当然、あの表情も。

そして事ここに至って、ようやく気付いた。

あの笑顔。

恐ろしく、不自然なあの笑顔はきっと私のものとは違うのだ、と。

ある時は私を刺激しないために、ある時は誰かを励ますために。

そして今は私を安心させるために。

自分のためなんかじゃなくて、たぶんずっと。

とんでもなく不器用だから誤解ばっかり生むだろうけど。

きっとあの人は誰かのために笑ってる、誰かの代わりに古い傷だらけの仮面を、ずっと――…。

理由なんて一欠片も知らないけど。それが大変かは少しは分かる。

知りたい――。

――ジェミニさん。

今すごく、貴方とお話がしたいです。

◆
◆
◆

「見つかったか!?」
「…いや、どこにも見あたらへん」

これでユキネとすれ違うのは2回目。フェンは1回。レイは5回。ハルユキに至っては28回。どれほどのスピードで走り回っているのかと言いたいところだが生憎今はそれどころではない。

これだけ探していなかったのならば、もう何処か室内にいると考えた方がいいだろう。

もう止んでしまっているが雨のせいで人通りはだいぶ減っている。これで探し出せないというのは少し不自然だ。

教会や何処か親切な人に助けてもらっていると信じたいが、それは楽観的すぎるだろう。

「……嫌な予感がするな」

本能的なものなのだろう。しかし恐らくその勘はいいところをついている。

「もう、一周だな」

「ハルユキがいれば大丈夫な気もするけどな」

「馬鹿。お前が、見つけるんだ。それがきっと、一番良い」

言ってそのままジェミニが来た方向へと小走りで走っていた。

その背中を横目で見てから走り出そうとした瞬間、目の端にチカッと何かが映った。

「ユキネちゃん！！」

果たして声が届いたかは不明だが、届いていると信じて先程の方向に駆け寄る。何があるかは分からない。ただ、そう勘だ。

綺麗に整った石畳の上に目を凝らす。

この時代に似つかわしくないそれは直ぐに見つかった。ハルユキが作った発声機。この世に二つはあり得ない。

手に持った瞬間、役目を終えたかのようにサッと静かな音を立てて空気に溶けた。

「どうした、居たのか！？」

先程の声が幸いにも届いていたらしい。すごい勢いで走ってきて。

…滑って転んだ。

「…見てへんで」

「…助かる」

気を取り直して目の前の店を見上げた。大きなガラスを張ったアンティーク家具店。見た限りでは特に変わった様子はない。

「これが、何か…？」

「…ユキネちゃん、皆に知らせてきて」

同じようにガラスを覗き込みながら困惑した様子のユキネに静かに告げた。

「ここ、魔力の流れを感じる」

「魔力…？」

「流れが分かるんや。ユキネちゃんには分からんと思う」

「……知らせるだけで良いのか？」

「…呼んで、きてくれたら助かりますわ」
「よし…！」

バシン、とジェミニの肩を叩くと女の子らしくない逞しい笑顔で笑ってみせると殺気の倍ぐらいの勢いで走っていた。

叩かれた肩をさすりながら苦笑すると、そのままガラスに向き直った。

触れないようにガラスに手を翳して、意識を集中する。

（儀式魔法…。術式を壊すのは複雑すぎて無理。魔力は…基は土か）

原始と魔力の質を辿って大体の流れを把握すれば…。

後は始点にほんの少し力を加えて、その流れを変えるだけ。

グイッと持ち上がるようにガラスが捲れ、その先に空間が広がった。ほんの少しこちらから届く光が照らしている手前の部分の他は闇が広がっている。

ジェミニは一瞬も躊躇わずにその中に飛び込んだ。

踏み込んだ瞬間、両側の壁に炎が走る。一瞬身を強ばらせるがどうやらただの灯りのようだ。

一歩踏み出し、三歩目で加速し、十歩目に入る時には全力で足を

動かしていた。

真っ直ぐと松明だけが続く岩壁の横を疾走する。

直ぐに行く先に灯りが見えて、そこに辿り着くのに時間はかからなかった。

そう言えばこの間見た劇にこんな場面があったなと道でも良いことが頭をよぎる。確か、悪い竜から単身で囚われた姫を助けるという、在り来たりな騎士物語――…。

薄暗い廊下から比較的広い開けた場所に出た。

直ぐに目があって、一言苦し紛れに言葉を絞り出して、笑う。

握った拳を隠す。怒りに濁った目を目を細めて潜める。焦りを訴える心臓を押さえつける。

大丈夫。この仮面は無敵だ。

怒るのも戦うのも、俺の役目。

「助けに参りました、姫様」

ただ、今は仲間がいるから。少しだけ演じてみよう、姫を救う騎士様を。

……少しだけ恥ずかしいが。

それでも、姫君が可笑しそうに、はにかむように笑ってくれたから。

まあ、よしとしよう。

騎士物語（後書き）

深夜に書いている時はおもしろいと思っても次の日起きて軽く見直してみると全く面白くないことってありますよね…。小説あるあるでした。

強さ

「…それは何？　いきなり現れて体張ったボケなら本当に恐れいるけさァ…？」
「……」
「無視かい？　コメディアンさ…」

いきなり目の前の男の左頬、といっても仮面の上からだが、そこに体の周りを一回転した踵が突き刺さった。

男はまるで中身の入っていないマネキンのように空中でくるくると馬鹿みたいに体を回転させながら壁に叩き付けられる。

「立てる？　シアちゃん」

座り込んだままのシアの首の鎖に手をかけ、引き千切った。

シアの顔を覗き込むと、先程の笑顔はなりを潜め不安そうに眉にしわを寄せていた。

「ほらほら、なんて顔してんの」

気に入らなかったので、ホッペタを掴んで横に引っ張ってやった。フガフガと慌てる様を見て少しだけ安心すると、頭に手を乗せて頭

を撫でた。

「ワイから離れちゃ駄目やで。絶対や」

キョトンとした後、引っ張ったせいかほんのりと赤い頬のままながら、力強く頷いたのを見て、よし、とジェミニも満足そうな声を出した。

改めて部屋の中を見渡す。廊下からは想像し辛い無理矢理掘り広げたようなあなぐらに、いくつかの檻が積み重なっていて、所々に人間や、人間だった物が入っている。といっても狭いわけではなく、広さは大体２０メートル四方はある。

「…その鎖は少し魔術的な仕掛けをしてたはずなんだけど？　そんな簡単に千切ってくれちゃってまあ…」

ぎりぎり視界の中に入る位置にケタケタと笑いながら先程吹き飛んだはずの道化が片膝を立てて座り込んでいた。

「それとも仕掛けがあったから千切れたのかな？　あひゃはッ！わっかんね！！」

けたたましく笑いながらその頭がぐるんぐるんと縦横に回る。その音に連動するようにゴクッと喉を鳴らす音が傍らから聞こえた。

「大丈夫」

またボロ切れのような格好に戻っていたシアにシャツを被せる。
その間男から目を離していたつもりはなかった。

――が。いつの間にか忽然とその姿をジェミニの視界の中から消していた。

《惑え惑えて、捕まえて。クライクライ森の底。クライクライ泣き喚け》

瞬きすらしていない。瞳をほんの少し動かした瞬間に世界が切り替わった。

「…ゴッツイのが出て来よったなぁ」

目の前に広がるのは漆黒の森。ジトッとした湿気が肌に纏わり付く感触が妙に現実的で気持ちが悪い。

カタン、と機械仕掛けの絡繰りのような音がして、森の木々の間の闇にスッと道化の仮面が浮かび上がった。

「さてさて、少しお話ししましょーか。貴方は戦る気満満みたいですが、僕ちんからしたら戦うメリットも見当たらないわけでして」

カタン、カタンと連続して音が鳴る度に新たな仮面が闇の中空に浮かび、リレーのように言葉を繋げていく。

「前のお客さんだったかな？　それが目的なのならお金で片が付くかもしれないしィ？」
「……”それ”？」
「ん？　知らないの？　そこのそれだよ。…ほら自己紹介しなさい。――早く」

ビクッとシアが隣で肩を震わせたのが嫌でも伝わってきた。グッとシアの手を握る。

「…大丈夫やから」
「生憎と”それ”は販売対象じゃなくってね。うちの看板なんだよ。だから貸し出しは出来るよ？」

こちらを挑発しているのかそれとも本気で言っているのか、何処か中身がない空っぽな印象を受ける口調からは伺うことは出来ない。

「もうだいぶ前から使い回してるからどっか壊れてるかもしれないけどさ、評判は良いんだよ？　幸いそれが逃げたせいで少しだけ予

約に空きが出来たからさ。金額次第で…」

顔の真横にケタケタと左右に揺れながら仮面が不快な声を発する。

人知れず自分から離れようとしていたシアの手を更に強く握りしめて捕まえた。

「…おい」
「ん？」
「お前は、弱いわ」
「……何、いきなり」
「ワイには分かるんや。弱い奴、強い奴ってのが一目でな」

自分は、と続けようとして口を噤んだ。別に愚痴りたいわけではないんだと自分を戒める。

こんな事をこんな男に聞いて欲しいわけではない。自分を卑下しすぎている、誤解しすぎている後ろの小さな少女に聞いて欲しい。

「でな、シアちゃんもあんまり強い子やないわ」
「…それが何？　弱いのは弱く産まれて弱く育ったそいつのせいだ。強者に搾取されて使い回されて然るべきなんだよ」

にへら、と仮面が愉快気に歪んだ。

その口元は笑っているように、傲慢に歪んでいるように見える。

「――弱さを実感したこともない奴がそんな事を口にするなや」

「…何だと？」
「それを知らんまま強くなった奴は、優しくはなられへん」

さっきのレイの言葉にあてられたのか、途中から明らかにただの独白になってしまっている。しかし止まらない。止められない。

「シアちゃんは優しい娘や。助けて欲しくてもそれが言えずに笑って笑って我慢してそんな間違った強さまで持った娘ォや」
「おいおいおいおい…、さっきからなぁに調子にのってんだクソ虫い？」
「でもな、やっぱり違ったわ。一人で頑張るのが強さやないって言われた。一人で強がっても自分しか守れるようにしかならん」
「……ッ」

息をのむ声が横から聞こえる。

「だから、強さは優しさと一緒に、優しさは強さの隣になければならんのや。そういうやつらに心当たりがある。そいつらは笑ってしまうほど楽しそうに生きてたわ」

ちぐはぐで自分でも何を言いたいのかほとんど解ってなくて、でも新しく生まれたのかそれとも気付いただけなのか分からないこの何かを。

自分に似た少女に伝えたかった。

俺は揺るぎない物になりたい。人を強く、人を支えられるものになりたい。

自分にこの名前をくれた、名前も知らないあの人みたいに。それは決して変わらない。ただもう少し誰かに背中を預けて楽をしようとただそれだけ。

まだまだぶれまくりで、荒れまくりで脆い人間だけど。まあそこは未来に期待して長い目で見て欲しい。

「強くなるでシアちゃん」

一緒に、とは流石に恥ずかしくて言えなかったが。

途中から震えながらも握り替えしてきてくれていたシアの手を更に強く握りしめる。

すると、がりがりと脳髄を削っていた音がほんの少しだけ収まった気がした。

「だからお前みたいな邪魔なゴミは、ワイが掃除したるわ」

◆
◆
◆

シアの手を握っていない方の手で仮面を握りつぶした。恐ろしい程に感触がない。今更そうは驚かないが。

きつく握っていたシアの手を静かに離す。

ここからは騎士の見せ場だ。ヒロインには下がって貰う必要がある。

「…はいじゃあ交渉決裂？　営業妨害で、…えーと、よしうん。――〝磔〟」

グルンとまた世界が変わる。荒れ地の中に超然とそそり立つ寂れた古城。そこかしこに髑髏を携えた巨大な杭が地面から突き出ている。

「また、趣味悪いな…」

《王様だ～れだ？》

斜め後ろから空気が切れて流れる気配。掌の形に手を固め、迫り来る杭の力の流れに横からほんの少し力を加える。

二本三本四本と加速度的に数と速さを増しながら杭が飛来する。

「――”より流麗に”」

小さく口ずさみ、全身に魔力を満たす。空気の流れ、自分の中の魔力の流れ、相手の魔法の魔力の流れ、自分の中の膂力の流れ脚の動き手の動き等々等々等々等々。

全てを把握して支配下に。

「こぉりゃあ、驚いた…」

ケタケタと忙しなく揺れていた仮面が今や針の筵と成り果てた荒野の中心を見てわざとらしく口を開ける。

無数の杭の中心には台風の目のように杭の暴虐を逃れている場所があり、そこには当然仮面をにらみつけるジェミニがいる。

一番近くの杭を無造作に掴み取り、投擲の姿勢に入る。

「……当たるわけないでしょ？」

呆れたような仮面の声を無視してジェミニの手から巨大な杭が投

擲される。

唸りを上げながら槍は明後日の方向に進んでいく。

「何処を狙って……？」

そろそろ重力に負けて下降を始めるかと思われたところでバキンと杭が破砕音を響かせて”中空”に突き刺さった。続いてバキバキと景色が崩れ始めその向こうにあった薄汚れた部屋が露わになっていく。

最初のように片膝を立てた姿勢のままで男が今度こそ驚愕の意を示している。

「――遅いわ」

一体どうやったのか、ジェミニが音をも置き去りに男に一気に近づいてまたもや仮面の上から殴り飛ばした。

吹き飛んで壁にぶつかる、と思った瞬間トンと軽快な音がして、後ろの檻の上に道化が着地する。

「幻影、か。めんどい奴やな…」

「なぁに言ってんのさ。相性は僕っちの方がゲロ悪だぁろ？」

スッと男が手を翳すと、壁から地面からあるいは中空から、無数の竜の頭が歯を鳴らしながらジェミニに突進する。

速さ、量共に先程の杭のそれを数段上回っている。

「また…？」

しかし所詮は幻影。

それを避けようともせずに道化に突進する。先程の消えたような速さ程ではないものの、滑るように地面を移動していく。

道化に向かい拳を振り上げたところで。ニッと道化の仮面が歪むように更に笑みを深くした。

次の瞬間。

「チィ…ッ！？」

そこから反応できたのはジェミニの経験かはたまた偶然か。半ば脊髄反射とも言える速さで迫る竜を受け流した。

先程の杭と同様に次々と受け流していくが、所々に傷を負っていく。多少血が流れてはいるものの、思いの外深い傷ではないのが幸いか。

「成る程、これ以上のスピードと量になると捌ききれないんだね、まあ後ろのそれが居なけりゃまだ動けるんだろうけど」

奔流のような攻撃が終わり、道化の仮面がケラケラとさぞ愉快そうに笑い転げる。

「それとその幻影だけど、食らったと認識すれば程度は落ちるけど多少は傷つくよ？　脳みそが体の中では王様だからねぇ」

くっくっくと笑みを深くした仮面がまたくるくると回る。

「更に面白いことに、死んだと頭が認識するとホントに死んじゃうから。気をつけて」
「なる、ほどね……勉強になったわ」
「そう、それじゃ、――これでお終い」

音もなく道化が宙に浮き、スッと温度が下がる。

《迷い迷えて行き着いて。一人ぼっちの王様の、独り善がりの律令を》

再び広がる荒れ地の古城。
先程の数倍程の広さに先程の数倍程の密度で拡がる杭の庭。

「――”串刺しの刑”」

呪詩を皮切りに無数の杭が持ち上がり切っ先を全て同じ位置に向ける。

「ぐッ…ぉおおおッ！！」

ジェミニが患部を庇いながらも構えようとして立ち上がる、が。
完全に立ち上がるのを待たないまま、荒れ地を粉々にするような勢いで杭の嵐が殺到した。

◆
◆
◆

杭による砂塵が収まるのを待たずに、荒れ地の世界が崩壊した。

「おしまいっと」

黒ずくめのピエロが何の色もない声で終幕を告げながら檻から飛び降りる。

目の前には血だらけで醜態を晒すジェミニと、その横で声にならない声でジェミニの体を揺さぶるシアの姿。

死んでいないのか、と仮面の下で笑みを深くしながら、懐からナイフを取り出して男の目の前に突き立てた。

「――殺せ、シア」

ヒューヒュー、と肺に穴が空いたような音を漏らすジェミニが男の方を見上げる。その目には怯え、屈服し、助けを懇願する色がまざまざと浮かんでいる。

シアも同様にナイフとジェミニを震える瞳で見比べて、ナイフに手を伸ばす。

――嗚呼、堪らない。

人間が人間じゃなくなる。

それは死が切っ掛けだったり、裏切りが切っ掛けであったりするが、どちらにしても人が墜ちる様は垂涎ものだ。

至高だ。最上だ。

人間が強くなる？　そんな馬鹿な事はあり得ない。

人間はただ堕落するだけ。

その時の表情が、痴態が、壊れ方が。

嗚呼、堪らない――…

――瞬間。

直ぐ後ろでバキン、と何かが割れる音が聞こえた。ぬっと目の前に伸びてきた血が滴る右腕に今度こそ道化の仮面が鷲掴みにされた。

もう片方の手には先程自分が投擲したはずのナイフが握られ、ピタリと首筋に当てられている。

目の前には既に我が嗜好の光景は消え失せている。

「――捕まえた」

妙な訛り方をした言葉が妙な迫力を見せ、道化の冷や汗を誘発する。

「……何で君が幻影なんて使えるのかな？」
「使えるかそんなもん。お前が使った魔術の流れに紛れて乗っかっただけや。幸い干渉しやすい種類の魔法やったからな」
「…まぁ、確かに魔法の中に閉じ込めるようなもんだけどさ。そんな事普通出来ひんよ。って、あ、感染った」
「身代わり残して隠れるのが精一杯やったけど…これで終いや」

さて、どうするか。流石に今の道化は幻ではない。

更に信じられないことにこの男は数段自分より強い上に場数を踏んでいる。そこで男の影に隠れるように何かが潜んでいることに気付いた。

ああそうだ。適わないのなら、自分の土俵に行ってみるか。

◆
◆
◆

「――随分と余裕やな」

鷲掴みにした道化も今度は消える気配を見せない。間違いなく本物だ。

しかしこの道化もこの状況で決して余裕の態度を崩さない。綽々

と未だ笑顔を振りまいている。

――殺すか。

いや、まだ直ぐ後ろにシアが居る。ここで殺すのは避けたい。

チラッと横目でシアの様子を探る。

そこで初めてシアの様子がおかしいことに気付いた。青ざめた顔で二の腕を押さえて…。いや二の腕ではない、恐らくそこに刻まれた…。

「隙有りィッァ！！」

一瞬気を取られた隙に右の太股に激痛が走った。

見れば先程と同じナイフが根本まで突き込まれている。道化は馬鹿みたいに踊りながら悠々とジェミニから距離を取った。

「あっハッ八！！　最後まですばらしい働きだったぞ、シアァ！！」

「お前……。何を…！！」

ジェミニと一緒にシアも倒れ込みシアの方は息を荒げ起き上がろうともしない。

「別に特別なことをした訳じゃあないさ。奴隷には備え付きの機能を使っただけぇ。心身共に苦痛と負荷を与えて躾するっていうね。誰が考えたんだろうね尊敬しちゃう」

「シアちゃん…！　シアちゃん！」

「あー…。もう流石にこの街からは撤退するからさ。別に死んでも良い、って言いたいことだけど、それじゃ死なないようになってんの」

男の言葉が切っ掛けだったかどうかは知らないが、小さく痙攣していたシアの体から完全に力が抜けた。息はまだ荒いが命は残っている。

人一人を簡単に見限る。道具のように使い捨てた。

ああ吐き気がする。沸騰したかのように熱い血が随分と馴染みがあるどす黒い何かを胸に込み上げさせる。

「お兄さんすっごく強いからさ。切り札使っちゃう」

そう言いながら道化が懐から取り出したのは、血の色に染まった紅い珠。

信じられないことにそれには見覚えがあった。

しかし小指の爪程であった筈のそれは今や拳大にまで大きさを増している。

《我が正義故に真実。我は天秤（ライブラ）。正義の傾きは我が立つその場所に》

届いた声に耳が凍りついた気がした。

ライブラ。またの名を天秤座。

――黄道十二門の一つ。

考える前に体が自然に動いていた。

動かしたのは間違いなく、紛れもなく、純然たる殺意だった。

ただその殺意が、シアの事での怒りからの方が大きかったのが少しだけ驚きだった。

「――――”Αστραα（アストライ）…ッ！」

「お姫様は、攫っていくで」

消えた。

道化からしてみればそうとしか思えなかっただろう。

思えば疑問があった。

ジェミニの腕には竜の牙による傷がある。とすれば幻術に紛れたのは何時だろうか。考えられるのは杭を打ち放った後の砂塵の中。

しかしそれではジェミニは怒濤の杭の嵐を捌ききったことになる。竜の牙の時は全力ではなかったのか？　…いや、確かにそれも考えられるが、それより有力な説が消えるように道化の目の前に移動したジェミニの様子から伺えた。

恐らく、全力の上があるのだ。

それを誇示するかのように首筋で煌々と光る”流”の文字。

自身の身体能力を強化したわけではない。これは恐らく――。

「…時間の、流れを…！」

「――”流々舞”」

攻撃を行った時間はちょうど2秒。

その間に数えるのも馬鹿らしい程の数の拳撃が道化の体中にたたき込まれた。

強さ（後書き）

感想アドバイス等お待ちしてます。

影の夜

ズン、と重々しい音を最後に嵐のような拳の乱打が収まった。

辺りの地面は引責でも降り注いだのではないかという程に荒れ狂って陥没している。

「ごッ……ギッ…ぁ」

「…よう生きとるな」

何か言おうと男が肩を震わせるが、出てくるのは単語にすらなれていないただの擦れた音だけ。仮面は粉々に砕け素顔が明らかになっていた。

「またごっつい顔しとるのお……」

一言で表すのならばまさに奇怪の一言。

鼻は削ぎ落とされ鼻孔が顔の中心に空いているだけ、唇は焼き潰された後切り取られたのか歯を覆っているものはない。耳も当然穴があるだけで目だけがギョロギョロと動き回っている。

しかし、関係はない。この男の過去に何があったのかなど知る由もない。

「…その服、竜の鱗（ドラゴンスケイル）か？　またゴッツイな。そんなもん何処で手に入れられるんや？　ああ…」

そこで一端言葉を切り、冷たく男を見据えた。

「ゾディアックなら手に入れるんも簡単か」

唯一人間らしい部分を残している目が驚愕に見開かれた。その驚きは一体どれほどのものだったのか、その間は体中の痛みを忘れているようにさえ見えた。

「…殺すつもりまではなかったけど、ワレを殺す理由が増えた。幸いシアちゃんも気絶しとるから、――往生せぇ」

生理的に嫌悪感を感じざるを得ない程の男の顔面を、何の躊躇いもなく鷲掴みにした。

「……待、…て」

少しは回復したのか、それでもまだボコボコに腫れ上がった口元で勝ち誇ったようにそう言った。

止めるつもりは更々無かった、が、それでも手を止めてしまったのは不吉なものを感じたからかもしれない。

「…そこ、の…ッぁ…奴隷の、烙印ッ、は、…僕っちしか、消せない、…ぞ」

――烙印。

奴隷の烙印。それ程有名ではないのかもしれないが恐らく土地の有力者や貴族、それに情報に通じている人物は知っているはずだ。

そうすると、普通に生活をするにおいて重大な障害になる事は間違いない。

「そうか。でも死ね」

「ッな、げァッ！？」

グッと首を握り締めながら男を睨み付ける。

殺せ殺せ殺せ殺せ、と例の引っ掻き音が形を変えて脳髄へと訴えてくる。

その主張に今や本能も理性も反対はしない。

殺す。

コイツラは一厘も残さずに殺し尽くす。

「確かに烙印は消した方がええやろうけど、どう考えてもお前を生かしとく方が危険で不快や」

「待……、や、め…」

「考えの浅い脅し、終いには懇願か？　最期やぞ。ほら――笑え」

握り締められている手から、冷たく見据えている眼から、ジェミニの殺意が男に流れ込む。

嗤う。

しかし、男の仮面は既にたかが暴力で粉々になり地面に散らばっていて、笑う事など出来るはずもなかった。

「――結局お前は、強がってただけの弱者だよ」

「ヒッ…ぁ…！」

男の小さな黒目がぐるんと裏返って口元から泡が吹き出した。

あとほんの少しだけ力を強めれば、終わる。

しかし、そこで静かに手を離した。

男からはまだ微かに息をする音が聞こえてくる。

「…これで良いんか？　シアちゃん」

いつの間にか意識を取り戻し、いつの間にかこちらに這ってきて、そして泣きそうな顔でジェミニの裾をしっかりと掴んでいたシアにそう声をかけた。

◆
◆
◆

目を覚まして初めに感じたのは、部屋中に充満している殺意だった。

濃厚すぎて常人なら吐き気を催す程の毒性。

しかしシアは、それが知っている人の雰囲気に似過ぎていて、そして余りに危うすぎて、吐きそうどころか泣きそうになった。

ぐらつく視界で前を見ればあの人が人の命に手をかけている。

――やめて。

必死に喉を震わせるが、声は出ない。

――やめて！！

いくら口を開こうが、奇跡は起きない。

どうしてあの人が手を汚さないといけないのか。あの人はあんなに頑張っていたのに。前がどっちかも分からないのに必死に進もうとしていたのに。

こんな汚れた私の為なんかに、手を汚す必要なんかない。

だから手を伸ばす。でも届かない。

なら近づけ。しかし立てない。

それなら這ってでも近づいて、手を伸ばして捕まえろ。

いつの間にか俯せになっていた体がゆっくりと前進する。地面がボコボコで進みづらい。腕にも満足に力が入らない。

それでも地面を掴んで体を前に引っ張る。

それをどれくらい繰り返したのか、不意に指先が確かに何かに引っかかった。確信してそれを渾身の力で握る。

力を入れれば入れるほど充満していた殺意が薄らいでいく。

「…これで良いんか、シアちゃん」

その手を反射的に離してしまったのは、多分腕が限界だったわけではなく、聞こえた声があまりに優しかったから。離れてしまった手をあの人の手がそっと捕まえた。

その手を振り払ってしまったのも多分反射的。

助けて貰っておいてなんだけど、望んでおいてなんだけど。

本当に助けてくれなくても良かったのに。

――嘘だ。

また嘘。本用は死ぬほど来て欲しかった。助けに来てくれて死んでもいいほど嬉しかった。

でも自分が汚れているのを思い出して。それを知られて、そういう風に見られるのが耐えられないということに気づいてしまった。

折角、優しい人たちが今はいてくれるのに。

もしも自分が汚れていなかったらと考えずにいられなかった。

そうすれば目の前に差し伸べられた手を握ることができただろうか。

そうすればまた言葉を交わす事が出来ただろうか。

わからない。けれど今話す事が出来たのなら、多分、いやきっと

間違いなく終わりを欲してしまう。

奴隷の娘として生まれてから何年も何年も繰り返し繰り返し欲望と暴力に汚されてきた過去が事実として体と心にこびり付いているのだ。

手も髪も口も体も、余すことなく穢れている。

多分、深い所まで染み付いてしまったその穢れは消えるどころか薄まることすらないだろう。

殺してくれるならそれがいい。放ってくれるならそれでもいい。

少しだけ、少しだけ悲しんでくれて、少しだけ惜しんでくれたなら、もう死んでも良かった。

しかし意に反して焦れた様に差し伸べられた手がこちらに伸びた。

「ワイの手は血で汚れてるかもしれへんけど、ごめんね、我侭さしてもらうわ」

ひょいと事も無げに私の体が持ち上がった。

「お姫様抱っこ～、…ってあたたたたッ…！」

軽くはない怪我をした足が力を失い、私を抱いたまま尻餅を付いて、突き窪んで角度のついた地面にもたれ掛かった。

そこで思い出したようにじたばた…しようとはした。しかしもうそんな力は残ってなく、腕の横にあった胸を押しのけようとするのが精一杯だった。

「汚くなんかないよ」

分かっていたのだ。おこがましいとは思うけど、この人はきっとそう言ってくれる。優しいこの人は自分は我慢してそう言ってくれる。

自分が汚くない、などということがありえないことも知っていた。

その言葉を期待していた自分に吐き気がした。どこまで浅ましいのだと辟易した。

でも、耐え切れないとばかりに涙が出た。

最初は、多分悔しくて。

次は辛くて。苦しくて。怖くて。嬉しくて。温かくて。

「……っ…ぅ……っひ…」

寂しくて。もどかしくて。思い起こして。満たされなくて。寒くて。――切なくて。

「…ぁ…あぁ……！」

「我慢せんでええ」

いつの間にか声も出ていた。

「っぁ、あああああっぁあぁぁあああああああああああ！！」

「…ごめんな」

混ざり合った感情が、巨大な渦のように勢いを増し濁流となってせき止めることも出来ずに外に零れていく。

「うぁあああああッ！！　あああああん！　ひッ、っく、ぁああッ、あああああぁぁあああああ！！」

差し伸べられた手を両手で握り締めて。傍にあった胸に顔を埋めて。

心の底から、泣いた。

「な〝んでッ！　わだじ、がッ…ぁ！　なにも〝…っ、わ〝るいごどしでないのに〝！！」
「…そうやな」
「辛(つら)かった！　苦(ぐる)しかったッ！　死(じ)にたかった、よぉ…！！　でも……ッ！　怖くて…！！」
「大丈夫。もう、大丈夫」
「ごめんなさい…ッ、ごめ〝んなざい…！！」
「シアちゃんはなんも悪くない。謝らんでええんや」

何故泣いているのか、何故謝っているのか。よくはわからない、が、まるで今までの１５年間が蘇ってくるようで。抱きしめられている胸まで汚してしまっているようで。たまらなかった、のかもしれない。

それから長い間。

謝り続ける声と、それを許し続ける声が部屋の中で木霊し続けた。

◆
◆
◆

謝り続ける寝言も止んで、安らかそうに寝息だけをたてるようになったシアの頭の下にシャツで枕を作ってから、ゆっくりと離れた。

そして、これまたゆっくりとラィブラの近くに歩み寄った。

かなりの重症だったうえ、追い討ちまでかけたので死んでいてもおかしくはなかったが、近付くと剣呑な雰囲気と短く擦れた呼気音が息があることを知らせてくれた。

「こ、…ろす…ぅ…！」
「…意識まであるんか」

ゾディアックである以上多少の肉体強化はされているはずだ。

それを鑑みれば、こうして話が出来るまでに回復したのも頷ける。

「……忘れ、るな…！　ま、た…」
「おい」

しかし会話するつもりなどなく、もっと言えば発言を許す気すらなかった。

「お礼参りするんは勝手やがな。お前、それが出来るほど五体満足で帰れると思うてんのか」

「……あ…？」
「そうやな。今日は右足や。次に来た時は左足と右腕。その次は左腕と両目。その次は…」
「……お、い。何を…？」

言葉を遮ったライブラの言葉に耳を貸さず、右足を太股から思い切り鷲掴んだ。

「ヒッ…！？　ぁああッ…、や、めッ…！」

先程とは打って変わった怯えた様子を見せるライブラを見て止めの一言。

「まずは右足」

異変に気づいたのはその時。

正直ただ恐怖を刻むための脅しのつもりだったので、それほど神経を集中していなかったのが功を奏した。

ライブラの下に当然存在する影がほんの少しざわめいて。

次の瞬間、ズブン、と体重を乗せていたライブラの下半身が沈んだ。

床に、ではない。そもそも地面すらそこには存在しない。

暗い暗い闇。深い深い影。

「……な、にッ！？」

自分の腕がそこに？み込まれる前に身をかわせたのは僥倖だった。当然手遅れだったライブラは恐怖に歪んだ顔のまま影に？み込まれていく。

しかし最後の最後。納得したように勝ち誇ったように、ぼこぼこの顔のせいで笑顔ともいえない表情を見せたのが印象に残った。

◆◆◆

そこから数百メートル離れたなんでもない普通の民家の屋根の上。

月の光に濡れ、漆黒の外套を着た二人組みが、睦め合う訳でもなくただ憮然とそこに立っていた。

「おいおい、聞きしに勝る不細工っぷりだな、ライブラ」

「何時もはここまで酷くはないわよ流石に。ボコボコだったものね、

同情するわ」
「う……あ……」

そしてその二人の間から三人目が”生えてきた”。
正確には屋根からではなく、夜の闇より一層深い影の中からゆっくりと浮き上がってくる。

「あれ？　喋れないの？　さっきまで普通に話してたのに、もう。タウロス何とかして」
「ァあ？」
「しょうがないでしょ。やらないと仕事楽にならないわよ」
「大体何で今更別の仕事が入るんだよ。俺は今すぐあの茶髪を……」
「首領命令。従いたくないなら直接言いなさいよ」

チッ、と小さく舌打ちするとライブラに向けて手を翳した。

「雑魚一人分だ。後は自分で何とかしろや」

ボウッとライブラの体が光ったかと思うと、その光が体の中に吸収されるように光を失っていき、同時に傷も塞がっていく。
光が完全に消えた時、ある程度の傷は跡形もなく消えていた。

「……助かったよ。借り、が出来、た」
「まあそれは仕事を手伝ってもらうから別にいいわ」
「……殺す」

脈絡も何もなかった。ただ思い出したかのように小さく震える口でそう呟いた。

ただそうしないと駄目だ、と頑として譲らない目だった。やる場のない殺気と屈辱が充満していく。

「あ、あ、あああの野郎…！　僕を、僕っちを、弱い…！　殺す！！」
「おい」

そしてそれを押し戻すかのような無骨な殺気がもう一つ。

低く重く響くような声はその重厚な殺気をうまく体現しているかのようだ。

「それは何か？　俺に喧嘩売ってんのかァおい」

この場では明確な方向性を持っていなかった殺気が意思を持ったかのように無骨な殺気とぶつかる。

なんでもない屋根の上が戦場にでも変わるのかと思った矢先。

「面倒かけないでくれるかしら？　イライラするわ」

濃度でいえば比較にならないほどの殺気。しかし妙に落ち着きを持ったそれが声に乗って他の二つを相殺した。

「タウロスは戦えればいいんでしょ？」
「一番歯応えのいい奴がいいんだよ…！喰い応えのない奴等はもういらねぇんだよ！！」

その言葉を待ち構えていたかのようにヴァーゴが苦笑いしながら言葉を続けた。

「だったら彼の仲間に黒髪の男がいるわ。――そいつからレオは逃げ帰ったそうよ」

しん、とその場が凍った。

殺気も時間も恨みも忘れて、ただ時間だけが流れた。

「……本当か」

その静寂を破ってタウロスが真偽を問う。

「何時もの”嘘”じゃなければね」

「――っは！」

面白い、とさぞ嬉しそうな声で腹を抱える。

体が震えているのは驚喜からか恐怖からか、それとも武者震いと呼ばれるものなのか。

打ち震える体、三日月型に歪んだ口蓋。それが示すのは限りない不吉だった。

「決行は本祭が始まってから。それまでは目立つ行動はとらないでよ」

「分かってる…！　こういうのは待つ事もしっかり楽しまねぇとなァ…！」

「…バラバラにして…裂いて、潰す…！　ひ、ひはッ…！」

夜の闇に飽和するほどの不吉を孕んだまま、夜が更けていく。

影の夜（後書き）

感想、アドバイス等いつでもお待ちしております

たんぽぽ

ラィブラが影に呑まれた後、遅れて到着したハルユキ達４人に肩を貸されながら宿に戻った。

時間を急流にして動くと、馬鹿みたいに筋肉痛に襲われ丸一日まともに動けないので今日は宿に篭りきりだ。

シアも疲れがドッと襲ってきたのかまだ寝たきりだった。フェンとレイが言うには、今日一日横になっていればすぐ元気になるらしい。

結局、あの後シアは再び話せなくなっていた。

本当の意味でしっかりと眠れていなかったのだろう。しかし今は、同じ部屋でゆっくり休んでくれていると考えれば、少しは体が張った甲斐があるというものだ。

――さて、現実逃避はこれ位にして現状を確認してみようか。

突然だが、ジェミニはいつも仰向けに寝るか、体の左側を下に眠る。

どうしてこんな事を暴露したのかというと、今現在ベッドの上で最も苦手とするうつ伏せになっているからだ。

先に言っておくと、下に美少女がいたりするラッキースケベな展開では決してない。寧ろ危機的な状況と言えるだろう。

何しろ両手両足をやたらと丈夫な鋼鉄の綱で縛られている。

そしてぎりぎりまで曲げた首で見える範囲に、不気味に笑いながら手をワキワキさせながら何かが迫ってきている。

両手両足、拘束筋肉痛により可動不可。

よし、再び現実逃避がてら、どうしてこうなったのか記憶を辿ってみるとしよう。

◆
◆
◆

確か何やら作戦会議をするとやらでユキネがジェミニとシアを除いた４人でごそごそやり始めたのが始まりだった。

ジェミニも一応会議に参加する必要があったようだが筋肉痛により首を上げるのも億劫だった為、断りざるを得なかった。

そこまではいい。

それから用を足しに廊下の奥の便所まで鈍痛を訴える体を引きずりながら１０分ほどかけて、用を足し部屋の前まで戻ってきて、扉

を開けて、目の前が真っ暗になって気付けば縛られてましたとさ。

回想終了。

収穫無し。

見ればシアも二人掛かりで押さえつけられ……てはいないものの、上着を脱ぐように催促されて困っている。

「まぁ、また恒例のお節介だ。付き合ってやろうぜ」

「ワイの目にはハルユキも同じぐらい楽しんでるように見えるんやけど」

「人を見る目を鍛える必要があるな」

この男を相手にしても無為な事この上ないのでシアと若娘2人がくんずほぐれつしているのを眺めることにした。

眼福眼福。

「変態根性は相変わらずだな。あいつ等まだ18にもなってないぞ」

「その事実がワイのこの愛を燃えさせることにまだ気付いてへんのかっ」

「……一億年使ってもその境地には辿りつけなかったよ」

それは残念。

ふと、苦笑いしながらどうしても上着を脱ぎたがらないシアを見つけた。

「あ……」
「大丈夫だ」

ギリッと鉄の綱が悲鳴を上げた瞬間、ハルユキが釘を刺すようにそう言った。

レイは何かに黙々と取り組んでいて、フェンとユキネもふざけている感じで迫ってはいるが、瞳の奥では真剣さが宿っている。

「大丈夫だよ」
「……ああ」

見守ることにした。

その覚悟も視線に気付いたフェンが男二人に一つずつ氷の塊を飛ばすまでの二秒だけだったが。

その上、その直後になんと木の壁が一瞬で空間を分かつというスゴ技で隔離されてしまった。

◆
◆
◆

同年代の女の子たちと遊ぶ。

それは檻の中で確かに夢想し、憧れ、出来ればいつの日かと望んでいたことではある。

でもあくまでもそれは想像で。

想像の中の私は今の私ではなかった。

現に私は今それを拒絶してしまっている。

苦笑いしながら手で二人の前進をやんわりと制する。

大丈夫。私はもう大丈夫。昨日我侭を聞いてもらったから。受け止めてもらったから。

でも、もう少しだけ。もう少しだけ夢を見させて欲しい。

我侭ばかりでごめんなさい。

「……あああーーー！　もう！！」

びくん、と肩が揺れたのが自分でも分かった。いつの間にか俯いていた顔を上げると、先程までとは全く様子が違う表情のユキネが手を組んで仁王（膝）立ちしていた。

「変態が覗いてるぞ！！」

こんな単純な罠に一瞬でも引っかかったのは多分驚きからで間違いない。

バッと後ろを向くけどそこには当然誰もいない。

そこからは一瞬で、ズボッと上着を脱がされた。

――すっぽんぽん。

「……っ……！」

最初は胸を隠した。まだ自分に女らしさが残っていたことに驚いて、次にユキネとフェンが自分の二の腕に視線を向けていることに気付いた。

――ああ…

もう隠す気にもなれなくて、でも直接目を見る事もできなくて俯いた。

――ギリッ…！

何かを擦り合わせたかのような音がした。

この音は何の音だろう。そう思った瞬間視界の中に金色の髪が飛び込んできた。

なされるがままにベッドにうつ伏せに押さえつけられた。

「レイ！　プランAだ！！」

「…はいはい…年長者をこき使いおって…全く」

上半身の和服を脱いで下に卸し、三つ編みに結った髪を後頭部にまとめたレイが、フェンが作った壁の影から出て来た。

押さえ付けられたシアの傍まで寄ると、ジッと×の烙印を観察し始めた。

僅か一秒足らずで観察を終えると、噛んでいろと分厚い布を口に挟まれる。元々話せるわけではないがここまで行動を縛られるのは、やっぱり、少し怖い。

「……少し痛むぞ」

心なしか素っ気無く告げられた言葉。

それを聞いた次の瞬間にはそれの意味するところが分かった。

――激痛。

歯が布に思い切り喰いこみ、口の中に唾液に濡れた布の味が染み渡っていく。

痛みに目を見開いて、気を失いそうになって、痛みが気付けになってまた意識が覚醒する。

弄(もてあそ)ぶ様に痛みの波が的確に襲い掛かってくる。

まるでこれまでの時間がぶり返してくる様に、痛くて、辛くて、寂しくて、切ない。…でも。

――舐めるな。

こんなもの慣れている。痛みになど慣れている。辛さなど知っている。寂しさなどこびり付いている。切なさなど染み付いている。

そして、つい最近のことだけど、温かさも足りている。

スッと痛みが引いた。

布が口から零れ落ち、汗が額を走り落ちる。

「…焼印じゃな。やはりちと痕が残るぞ」

「よし、それじゃそのままプランBに移行だ」

「…了解」

心底めんどくさそうに呟くと、手に何か書いたかと思うとシアの二の腕に翳した。

反射的に肩が跳ねる。

でも伝わってきたのは焼けるような熱さでもなく、張り裂けるような痛みでもなく。ただ、温かい――。

「んじゃ、結成だ。チーム名――…」

木の壁を紙屑の様にぐしゃぐしゃにしながらハルユキが姿を現す。

その手には見覚えのない一枚の紙。よく見ればそこにはここにいる皆の名前が書いてある。

「ダンデライオン」

◆◆◆

「で？　何だ作戦会議って」
「…シアの腕の印の事」
「……あれは消せない、そうだ」

ジェミニが言うには特殊なやり方で刻まれているらしく、方法を知る人間には逃げられてしまったらしい。

「そう、なのか…」

落胆して早々に作戦会議を終えようとした時、どこから持ってきたのか血の様な赤ワインを片手に、レイが事も無げに口を開いた。

「消せるぞ？」
「…は？」

「あのような稚拙な術式なんぞ3分じゃの」

フフン、と自慢げにグラスの中でワインを回す。

「…すごい」

とフェン。

「…マジか」

とハルユキ。

「マジじゃ」

と偉そうにレイ。

ガタン、と音がしたのを横目で追うと、ユキネが身を乗り出していた。

「…ホントか」

「嘘ついてどうする」

「そ…うか、そっかぁ…！」

「…アホな奴」

ぐりぐりと頭を撫でながら、席にねじ戻した。取り乱したことに

少し赤面しながら大人しく席について大人しくなった。

「…で、どうしたいんだ？」

「どう…？」

知ることを知って、どうすべきかも知って、何が出来るかも知って、そしてやっぱり一番。どうしたいかを知ることが重要だ。

「――友達に」

グッと前を向いてしっかりと足を前に進める。

「シアと、友達になりたい、ホントの意味で」

「……っぷ」

「…若いのう」

「…可愛い」

「笑うなぁッ！！」

蹴りを避けながらまだ笑っていると、向かいのベッドの下に見覚えのある紙が目に入った。

「よし、なら演出がいるな」
「演出？」
「よし、もっと本格的に作戦たてるぞ。最終的にはだな…」

全く何時もながら自分勝手だとは自覚しているが。悪だくみと言うのは、いくつになっても面白いものだ。

◆
◆
◆

したり顔をしていたハルユキさんの顔に目掛けて枕が飛んだ。

「何じゃその名前は！　儂の考えたものとそう変わらんだろうが！　大体意味が判らんわ！！」

ダンデ、ライオン…？　だったか。

確かに私も聞いたことがない。どこか遠い国の言葉だろうか。

「バカヤロウ、ちゃんと意味はある。
別名、獣王の牙。別名タンポポ。俺の国に咲いていた根無し草だ。ああいやタンポポは今もあるんだったか？　ま、何にしてもフラフラと旅してる俺達には丁度良いだろ？」

タンポポ、それなら聞いたことがある。

「待てハル。さっきはチームタンポポだったじゃないか。そっちがいい」

「いやお前それじゃ締まらないだろ、なんか」

「言っとくけど、ハルユキが考えた名前もダッサイで？　まだタンポポの方がいいわ」

「何ィ！？」

「極血…」

「レイ、お前この期に及んで空気読めないギャグはやめとけよ…？」

「儂に対して絶対服従の刻印を捺してやろう」

「残像！！」

「それはもう見切ったわ、アホめ！！」

ハルユキさんは左の手のひら、ユキネさんは右の手のひら、レイさんは素っ気無く左の腰の辺りに。

直径三センチ位の黒い丸。いや多分あれは…。

「タンポポ…」

そう横から声がして、グイっと目の前にタンポポの入れ墨が立ちはだかった。視界を広げてみるとそれが描かれているのは、フェンさんの小さな右の手のひらだった。

そのままフラフラと目の前を揺れた後、スッと私の右腕を掴んだ。
それを目で追って、気付いた。

消えている。

あの忌々しい×印が消えている。

でもその驚きは一瞬で、瞬く間に別の驚きが舞い込んできた。

他の皆のそれとは少しだけ大ぶりな花の入れ墨。

ボスン、となんだか気の抜けた音がした。

見れば、ハルユキさんとレイさんが人外魔境な取っ組み合いをしている中、私を挟むようにフェンさんの反対側の隣にユキネさんが笑顔で座り込んでいた。

そのままバッと右手を開いて見せてくれた。

「友達の証で、仲間の絆だ。な？」
「青臭いの」
「ああ、全く」
「…あんたら喧嘩してたんちゃうの…？　っていうかさぁ！　なんでワイのだけこんな際どい所に捺してあるの？！」

いつの間にか事が終わって、またはしゃぎだして。

自分勝手、と言うより、本当に変わった人達だ。それでも全然嫌にならないのが少し嬉しい。

二の腕が温かくて無意識に手を遣った。

忌々しくて忌々しくて、この箇所をズタズタになるまで掻き毟った事もあったのに。今は心臓と同じくらい温かくて有り難い。

たんぽぽから、人の体温のような心地よさが深く深く浸透していく。それはちょっと変わった種の形をしていて、何年も何年もかけて穢れて汚された場所を、一秒にも満たない時間でどんどんと追い越していく。

そして多分一番深い、今までそんな所があったのかという所まで深く深く飛んでいって、底の底に、根付いた。

ぽかぽかと。体温が、熱いほどに上昇していく。

「…シアがいるのにお前はまたナンパしようとするだろ」

熱はどんどん胸と、あとは目頭に集中していって。

「……いやね？　ワイとシアちゃんは別にそんな感じでは」

泣くな、というのが無理な話だった。

「え？　あれ？」

ジェミニさんの戸惑う声が聞こえてくる。

申し訳なかったから、必死に涙を止めようと目蓋と体と膝に作った拳に力を入れる。でもただ震えが増すだけで、止まるわけもなく。

昨日の滝のように流した涙とは違い、ぽろぽろとゆっくり体温を移し取りながら頬を伝っていく。

「……っ…っぅ…」
「シ、シア、泣かない、で…？」
「お前ぇ…！」
「え？　ワイのせい？！」
「当たり前だ！」

ぶんぶんと首を横に振って否定するが、もはや誰も見てはいない。フェンさんは実は年上と言うこともあってか小さい手で背中をさすってくれる。

笑っていたい。嬉しいのに、身が裂けるほどに嬉しいのに。泣いているのは勿体ないから。

「……シア」

ジェミニさんの胸倉を掴んで拳を振り上げた格好でユキネさんがこちらを見て拳を止めた。

ポン、と軽くジェミニさんが優しく私の頭に手を置いた。

「泣くのはこれが最後やな、シアちゃん」

気付いてくれたかは分からないけど、涙を隠すために俯いた頭を少しだけ下に動かした。

「ああ、小僧。そう言えばお前のだけ儂に血が送られる様になっとるからの。魔力変換効率は落ちるが」
「……それはいい。いや良くはないがそれにしても何でお前こんなタイミングで言うんだよ…」
「儂とお前だけ蚊帳の外じゃないか」
「一緒にすんな」
「ああもうほら、喧嘩したらあかんで」
「全く、子供だな」
「……幼い」
「お前が言うなロリっ娘」

眩しいものを見るかのように目を細める。

まだ涙は止まらないけど、もう、力を入れすぎるのは止めてみよう。

何かを見るのに、無理して目を見開く必要はない。

ただ一つだけ、一番大切なものを一つだけ。凝らす目を細めて。

――同時に少しだけ唇から余計な力を抜くだけ。

嬉しい時の、笑顔の、コツ。

王女の憂鬱・上（前書き）

間章です。クオリティ度外視になってるかもしれません。

王女の憂鬱・上

この城には執務室と言うものがある。

この城の中で自分の部屋の次に長い時間いる部屋であり、私が最も嫌いな部屋だ。

持っていた王印を机に置き、ペン立てに先だけ収納されている格式張った羽ペンをくるくると回しながら、目の前に積まれた書類の山を忌々しげに睨み付ける。

「…ノイン様。睨んでいても書類は片付きませんよ」

「そんな事はないわ。現に私の魔力にあてられて今にも火がつきそうだもの」

「城ごと片付けてしまうつもりですか？　それにどうせ書類は替えがききますからなくなることは…」

「分かってるわよ、冗談じゃない」

そう言いながらも、再び判を握りなおす気にはまだなれない。外は丁度太陽が昇りきった所だが、少し前に息抜きだと早めの昼食を摂ったので一番の息抜きの理由は失ってしまっている。

退屈だ。心なしか視界が色を失って灰色に見える。以前は無心で仕事をやれているつもりだったのだが。

「そう言えば」

作業に集中できていない事を憂いたのか、それとも少し休ませてくれるのか、部屋の隅で兵の調練経過を一つ一つ確認していたミスラが此方に向き直った。

「ハルユキ殿ですが…」

「…ふうん」

出て来た名前に少し胸が躍る。何しろ退屈と言う言葉に一番遠い男の名だ。厄介事だろうと、今の退屈と気だるさに比べれば上等の美酒のようなものだ。

「今度は、奴隷商人を潰したそうです」

「……奴隷？　今の時代にまだそんな事をやっている奴がいたの？」

「いえ。確かに各国で倫理問題が提唱され始めてから戦争も奴隷も無くなりましたが、奴隷商人の方は隠れて諸侯たちも利用している様なので…」

「貴重な奴隷商人は黙認、という訳…？」

「…残念ながら」

「それじゃここ最近頻発していた行方不明者も？」

「確かにリストにあった数名は保護することが出来ましたが、とても足りていません。そもそもその商人は主に、諸侯の持ち物である奴隷が孕んでしまった子供を受け取って奴隷に仕立てていたようですから…」

「どちらにしても不快ね。私の国でそんな事をやるなんて。…それ

で？　犯人は確保できたの？」
「いえ、恐らく逃げられたのだろう、と」

恐らく？　と聞き返そうとしたが、ミスラもそこで疑問符を頭の上に浮かべていたので開きかけた口を閉じた。

奴隷、か。そもそも何で国で検知も出来なかったものを潰せるのだ。それも例のメフィストの件のほんの数日後に。

厄介事に巻き込まれやすい、と言えばそれまでなのだろうが、解決に導いたのは人材に恵まれているからに他ならないだろう。

「…欲しいわね、やっぱり」
「は？」
「ミスラ？　そう言えばガラフドが式場を下見に行きたいって言ってたわよ」
「……え？」
「もう仕事は良いから。一緒に行って来なさい」
「い、いえ。しかし…」
「そもそも、貴女はさっさと子供でも孕んで産休取りなさいとまで言ってるんだから。今やってる仕事も貴女の物じゃないでしょう？」
「……は、孕めって…」

照れさせてしまえばこっちのものだ。

最後に人の上に立つ者として必要な畏敬と寛大さをのせた笑顔を貼り付けて、一言。

「行ってらっしゃい」
「あ、ありがとうございます…！」

バタバタと慌しく書類を片付け、顔を期待に赤らめながら扉から出て行った。

普段は冷静なのに、こうすれば簡単に手玉に取れるのは少しまずいんじゃないだろうか。

「…さてと。じゃあ事情聴取にでも行きましょうか」

「――騙されてやったのか？」
「…いえ、そういう訳では。気づいたのは部屋に出てからでしたから」

堂々と執務室のテラスから王女が外へ飛び出した後、ギィと静かに音を立てて向かいに扉が開いた。

その先には大分身長差がある2人が、なんとも言えない表情で開

けっ放しにした窓のせいで揺れるカーテンを見つめていた。

「何だかんだで、負けて結構キてたみたいだからな、姫さまは。……俺達には気ィ使って強がるんだよな、昔から」

「ノイン様にも色々、ありましたから…」

「…あいつより強い奴なんていなかったから、だよな」

甘えられるような親もおらず、自分より頼りになる大人にも会えずに、よくぞこんなに立派に育ってくれた。

傾いた国を立て直し、下を向いていた人間に叱咤を入れて。

強く強く強く強く。より強く。

誰にも負けずに。

十年長く生きた人間でも憧れてしまうほどに、誰にも寄りかからず一人で立てれてしまうほどに。

「あの男は、うちの姫さん支えられる位強い奴だと思うか？」

静かに、それでいてどこか悔しそうにガララドの野太い声が消え入るように部屋の中に静かに響いた。

「さぁ、私にはわかりません。……でもノイン様が足繁く通ってら

っしゃるのは、少しは力を抜ける場所があるからじゃないでしょうか…？」
「それなら、いいな」
「…ええ」

主がいなくなった机の上で、ペン立てに立てられた羽ペンが風を受けて元気にくるくると回っていた。

「相変わらずいい町ね。流石は私の町」

午後の日差しが燦々と降り注ぐ中で、額に汗を浮かばせながら活気強く動き回っている民衆は見ていて気持ちがいい。

皆何かしら目的を持って作業をしているし、観光客は店を見て回るのに夢中なのでノインが歩いて回ってもそう気付かれるものでは…。

「あっれー！　王女様じゃないか！！」

それでもどうやら紅い髪と格式張った服装は目立ちすぎるらしく、続々と人が集まってきた。

まぁしかし、これを期待していたわけでもあったのだ。

「ほら、これ持っていって！　好きだっただろ？」

ここ最近。と、言ってもちらほらと仕事の合間に町に下りてくることは前からあったが、この頃は回数が増えてこうして顔見知りも出来てきたのだ。

「あ」

そうして大体。何となくあいつを見つける。

町に出て直ぐだから、今日は割と早いほう。というよりどんどん見つけるのが早くなってきている気がする。

「ごめんおばさん、用事出来たわ」
「あら、デートかい？」
「そうそう、デートデート」

病み付きになる味の焼き串を持ったまま走る。やはり外は足が軽い。今日のような雲一つない晴れの日は最高だ。まるで足に重さを

感じない。

そのまま、フワッと飛び上がる。ああ今日絶好調だな、と一人でちょっとした事に気付きながら、一直線に突き進んでいく。

そのまま空中で二回半体を捻る。

そして見慣れた黒髪の頭目掛けて、何時も通り飛び後回し蹴りをかましてやった。

まぁ、憎い事に完璧に防ぎやがったけど。

◆

◆

◆

ああまた来やがったか、というのは割と直ぐにわかった。

ヒュッと風を切るような、緩んだ日常の中では中々聞けない音が聞こえたので、それはもう完全に確信の域。

飛んで来た右足を屈んで避け、その足を持って思い切り、暑くなってきた象徴といえる入道雲に向かって適当に投げつけた。当然入道雲まで届くことはなく、空中で体勢を立て直したそいつは、どうやってか進行方向を此方に変えて再び突っ込んできた。

飛んで来た右拳を脇に挟んで軽く関節を極め、怯んだ隙に自称バルカン砲を右手に装填し、奴の額に添える。

「15戦中15勝目だ」

バチン、と痛々しい音を立てて中指がノインの額に直撃した。

「ッ…痛いわね。何するのよ」
「自分の胸に手を置いてもう一度同じ台詞吐けたら尊敬してやるよ…」
「こんな真昼間から働きもしない社会のゴミがこの私に向かって何をするの？」
「……まさか凶悪になって戻ってくるとはな」
「あんたこんなとこで何してんのよ」
「ん？　いや他の奴等が皆それぞれ用事があるってんで、暇を持て余してブラブラしてる」
「ホントに社会のゴミなのね」
「いや待てあのな…」
「黙れゴミ」
「いやだから…」
「口を開くな、ゴミ」
「お…」
「ゴミ」
「…よし、歯ァ食い縛ってそこに直れ。俺の熱い魂を叩き込んでやる」

我慢ならぬ。

とりあえずコイツを躾けて、教育怠慢の罪でガララド辺りも殴りに行こう。そうしよう。

「冗談よ」

フイッと肩を透かされるように言い放たれ、怒りが萎んでしまった。

ジッとこちらを観察するように見上げてくる王女様に、何とはなしに適当な言葉を放る。

「…大体、お前が何してんだよ。仕事しろよ」
「これも仕事の一環。…貴方今度は奴隷商人潰したでしょう？」
「不可抗力だ」

ああ、やっぱ流石にあれはまずかったか、とさりげなく目を逸らしながら、何とかどもらずに返答する。

そう答えたハルユキを、呆れたように見詰めたまま、ノインがこれ見よがしに溜め息をついた。

「その事で貴方に話があってね。そうね、どこか落ち着けるところ

…」
「…確かこっちに喫茶店があった、けどお前その前に着替えろ」
「どうして？」
「…周り見てみろ」
「……あらあら」

派手な格好した、それもこの国の王女がアクロバットな立ち回りをして目立たないはずがなく。

何時の間にやら人が壁のようにきっちり十メートル、二人から間を空けて人垣を形成していた。

「どうしましょうか、これ」
「あー…、よし、跳ぶ」
「と…？　って、きゃあ！！」

ノインの了解を得る前に首根っこ、は流石に危険なので小脇に抱えて屋根の上まで跳んだ。何人かは気付いているようだが、ほとんどの人間は見失っているようだ。

「よし、じゃあ…」
「この…、離しなさ、い…！」

引っ切り無しに向こう脛を的確に蹴り続けるノインを無視して、顔見知りの服屋に向かった。

「まさか、金持ってないとはな…」
「顔パスできそうだったのを、貴方が勝手に払ったんでしょ？」
「顔見知りだから遠慮するようになったら嫌だろうがよ」

現にあそこのおばさんのアドバイスに従って、目立たなくそれでいて当時の製法を利用した夏服を作ってもらったのだ。因みに今着ている簡単なTシャツがそれ。

その製法を伝えたお陰でものすごい売り上げを上げたそうだが、だからと言って甘えるのは申し訳ない。

「ま、流石に悪いからお茶代くらい出してあげるわ」
「…おい、金持ってんのか」
「顔パスできそうだったのを、貴方が勝手に払ったんでしょ？」

コノヤロウ…。

「…それで？　何を奢ってくれるんだ？」
「コーヒー」

「……。どうもありがとう」
「いいえ」

こいつが買ったのは確か一番高い服だったのだが、それを自分から指摘したら負けな気がする。多分こいつは分かってて言っていると思うが。

「まぁ、私のこの見目麗しい姿を見られただけでお金を出した甲斐があるでしょう？」

くるり、と裾を浮かばせながら一回転するノインに一笑する。この年齢差で欲情するようになったらおしまいだろ。

まぁ、まともな感覚な人間が見たら思わず振り返ってしまうような色香はあった。

半袖で、膝下5センチぐらいの少し金持ちのいい家の娘が着るような服に、いつもはそのまま下ろしている赤い髪を一つに結んでいる。

フードが付いているのは、いざと言う時に顔と髪を隠せるためだ。

「はっはっは、笑わせんなマセガキが」

しかし、それはそれ。おおよそ一億年の禁欲生活をなめてもらっ

ては困る。と言っても元々遊びまわるような生活を送ってもいなかったから我慢していたわけでもないが。

「……いい度胸してるじゃない」

「え……？」

怒るとは思っていたが、思ったより3倍ほど低く重い声が背中に返って来た。

「デートでもしましょうか？」

いつの間にか腕を組まれてしまったのは油断していたとしか言いようがない。

サクッサクッ、と背中に頬に時には正面から顔に鋭い視線が突き刺さる。好意的な視線ではないことは察してもらえるだろう。

「放せ、馬鹿野郎」

「何？　空気が読めない男ね」

これ見よがしに溜め息をついて、ノインは腕を放した。鋭かった視線が途端に緩和する。全く現金な奴らだ。

「暑い……」
「お前実は馬鹿だろ」
「役に立たない男ね。冷却機能でも搭載してなさいよ」
「……ああ、お前は実に馬鹿だな」
「どうもありがとう」

言葉と同時に当たり前のように蹴りが飛んできた。おい、嫉妬の視線が復活したのはどういう理屈だ。変態ぞろいか。

「あ」
「？　どうしたの？」

ふと思いついて、頭の中を検索する。

実は最近になって作り出す前にどういう物があるか検索できるようになっていた。

ピン、と検索がヒットしてそれを手の中に2つ精製した。

「ほれ、これ首の周りに塗ってみろ」

ナノマシンで精製したのは兄貴印の特製クリーム。いや、これは一般に販売もされていたか。

二つ作って片方をノインに渡したが、なにやら訝しげに手の中の

それを見つめるだけで、一向に塗ろうとしない。

「別に警戒せんでも毒とかじゃない。ほらな？」

言いながら、そのクリームを自分の首に塗りつけた。

「……あー…」

思わず弛緩した声が漏れた。頚動脈の辺りで適度に冷やされた血液が全身に回って体を冷やしていく。後三分もすれば今の唸るような気温も感じなくなるだろう。

それもこれは適温を保つ道具なので人体に害はない上に、冬の寒さ対策にも役立つのだ、その場合に塗るのは足や手などの末端部分だが。

余程気の抜けた顔をしていたのか、ノインは未だ訝しげな顔をしながら、それでも恐る恐るクリームを首に塗った。

「あ…」

眉根に寄せられた皺が解けて、同じように弛緩した声が今度はノインの口から漏れた。

何しろこれは、冷房機器を廃絶に追い込んだ対夏超兵器だ。どういう理屈かは全く知らないが、今の文明の人間から見たらそれこそ魔法のようなものだ。

「卑怯ね。これは…」
「全く」

しばし近くのベンチで互いに涼をとった。

ほんの少しだけ温かさが残った気温が実に気持ちよかった。

「そろそろ行くかあ」

そうしていても良かったのだが、どうも今日は用があって来ているようなので3分ほどでベンチから立ち上がった。

振り向くと、そこで楽しそうな笑顔のノインと目が合った。嫌な予感が再び体温を下げる。

「ねぇ、折角暑さも無くなったんだから、やりたい事があるわ」

そう言いながら、またしてもノインは腕に組み付いた。

◆
◆
◆

「ふぅん、こんな派手なのねこの時期って」
「んー」
「…何食べてるの。頂戴」
「無理」
「よこせ」
「うおッ！？」

横から口に咥えていた餅の様な物を奪い取って、そのまま口に運んだ。

「あ、美味しい」
「…俺の一押しだ。伊達に毎日ブラブラしてない」
「働け」

馬鹿みたいなことを誇らしげに言い放つ、言い放つ…って。

「私、アンタの事なんて呼んでたかしら？」
「お前俺の名前知ってたのか？」
「憶えてないわ」
嘘だが。
「…ハルユキだよ。志貴野春雪」
「ハルユキ……呼びにくいわね」
「ほっとけ」
「じゃあ、そうね。ハルでいいかしら？　いいわね」
「思いっきり事後承諾だが…。まぁいいよそれで」
「で？　今何処に行っているのかしら、ハル？」

再びわざとらしく、腕に組み付くが正直自分でもアホらしくなったので直ぐにやめ、相変わらず何か食べながら歩くハルに問いかけた。

「お前が言ったんだろうが。ギルドの仕事に行きたいって。って言うか事情聴取したいんじゃなかったのか」
「この期に及んでそんな退屈な事やってられないわ。それに、最低限の信頼はしているつもりよ。私は」
「……おお。サンキュ」
「何？　照れてるの？」
「…照れてねぇよ」
「よくそれで私に子供とか言えたわよね」

私がそこまで言うと、悔しそうに唸りながら少し歩くスピードが上がった。

してやったり。

早足になったからか、気付けばギルドの大きな建物が目の前に立ち塞がっていた。

引っ切り無しに馬車や人が出入りしていて、賑やかな町の中でも段違いで人が密集しているようだ。

「フード被っとけよ。髪も隠せ」

命令口調にイラついたので一発蹴りを入れて後に続いた。

「へぇ…」

入るのはこれで確か十回目ぐらいだが、何時もとは少し、いや完全に印象が違った。

人の意識が一つの物に、正確に言えば私に集中していない。違いといえばそれだけだ。でもその分ギルド全体に意識が集中している。

それだけで、ギルドが何と言うか機能しているというか、活きているというか。そんな感じがする。ここには結構来たつもりだったのだが初めて来たような感覚に襲われて仕方がない。

「げっ…」

嫌なものを見つけたような声が横から聞こえた。その目線を追ってみると、受付で何やら柔和そうな表情を浮かべた女性が全力で手招きしている。

「あっ、おいハルユキ！　お前またルウト依頼に連れてったろ！！」
「働き手が足りねぇんだよ。しょうがないだろ」
「大体父さんに一々確認取ることでもないしね」
「悪い。ウェスリアが怒るから行くわ」
「まぁた仕事か。飽きんなぁお前も」
「割と楽しいけどな」

苦笑いで後手に手を振りながら、受付へと向かう背中を追う。

「あんた、えらく馴染んでるわね」
「そうか？」
「まぁ、親しみやすい人間が多いっていうのもあるでしょうけど。流石は私の町」
「はいはい」

先程の柔和な女性がいた受付に着くと、女性が即行で口を開いた。

「…来ましたね。今日はこれです！」

自慢げに取り出した依頼書は、Dランク。

「なに貴方、Dランクなんか受けてるの？」
「まだDランクだからな」

小さくDと刻まれた指輪をこちらに見せ付けてくる。そんなに誇らしいものでもないと思うが。

「どうして？　憎たらしいけど、貴方なら…」
「そうなんですよ…」

声を潜めて会話していたはずだが、どうやら耳が良いのか、受付の女性が会話にするり、と割り込んできた。

「ああすいません。このギルドで看板娘をやらせて貰ってます、ウエスリアです。よろしくお願いします」
「どうも、ノイです」
「……安易だな、おい」

見えない所で膝を蹴り上げてから、会話に戻る。

「何でこの男がDランクなの？　コイツならAの依頼でもお茶の子でしょ？」
「ああ、知っている方ですね。そうなんですよ、だからさっさとランク上げの試験でも受けて欲しいんですが…」
「こういうのはコツコツ上げていった方が良いだろうが」
「……仕事を楽しんでいらっしゃるから、簡単に上がりたく無いそうなんです」
「変人ね」
「全く」
「……悪口は本人のいない所で言ってくれるか」

横から聞こえてくる不満を無視して、改めて依頼書を見つめる。

「あら…？　ここは…」

簡単な討伐依頼。うちの兵士なら一人でも解決できるであろうものだが、この場所は。

「ここは、飛竜の生息報告があったような…」
「……おい、またか」
「……あー…」
「また？」

気まずく目を逸らすウェスリアを、呆れたように一瞥しながらハ

ルが続けた。

「結構前からコイツが斡旋する仕事は、大抵高ランクの仕事と同じ場所でな。事故に見せかけて一緒にやらせようとしてんだよ」

「なるほどね」

「だってー、勿体ないじゃないですか。この人一人で古龍倒せるんですよ？　さっさと株上げて私の事嘘つき扱いした人を見返してやらないと」

「……ハル、貴方出鱈目にもほどがあるでしょ」

一人で古龍討伐。流石に驚きだが、まぁ不思議ではないかもしれない。何しろこの私を倒したのだ。それぐらい倒してもらわないと困る。

「大体何なんだ古龍って。そんなにすごいのか？」

煙たそうに依頼書をウェスリアのほうに押し返しながら、ハルが訝しげな声を出した。

「古龍というのは飛竜が千年生きた時につける冠名よ。飛竜も年を重ねるごとに力を増すけど、千年を超えると姿も魔力も全く別種のものになると言われてるわ。それに人に近い知能と文化があるって主張していた奴もいたわね」

「霊龍ってのは？」

「…何でそんな事は知ってるのよ？」

「会った。二体」

……これ以上は驚かないと密かに決めていて、驚いても顔には出すまいと思っていたが、その時は多分驚きで口が開いていたと思う。ウェスリアも笑った顔のまま固まっている。

「…あんた一体何処でそんな大冒険してきたのよ」

「別に普通だよ。で？　何が違うんだ？」

「…霊龍って言うのは、古龍になってから更に九千年。つまりは一万年生きて成る神龍っていう伝説よ」

「伝説？」

「この国中探したって霊龍見たことがるって人間すら多分１人もいないわ。だから伝説」

今度はハルが少し驚いたようで、顎に手を当てて考え始めて、直ぐにウェスリアに向き直った。考えるのをやめたな、あれは。

「んで。話は戻るが普通の依頼にしてくれ。依頼じゃないモンスター倒してもしょうがないだろ。金も貰えないし」

「大丈夫よ」

は？　と眉間に皺を寄せた顔でハルが振り返った。その顔に見せ付けるように左手を近づける。正確にはその中指に嵌められている金色の指輪を。

「ＶＩＰリングですか…！？」
「そうよ」
「ＶＩＰリング？」
「これを持っている人間はどのランクの依頼でも受けることが出来るわ。貰ったは良いけど仕事が忙しくて使う機会がなかったのよ。まぁそれを見越してくれたんでしょうけど」
「……何か都合いいな」
「あまり恐ろしい事を言わないの。という事で、一番難しい依頼を一つ」
「は？」
「飛竜４体討伐ですね。うわっ、これ５チーム編成以下は極力参加しないようにって書いてありますよ。しかも国にも委託されたもので２５０年前の依頼です。この頃また町の近くにも出没するようになったので撃退、出来れば討伐して欲しいそうです」
「おいおいおい…！　待てって…！」
「もう判子押しちゃいました、仕方ないですね♪」
「その台詞は最大限努力した奴だけが言える台詞だ！」

半分冗談のつもりだったのだが、国に委託されていたと聞いては流石に黙っているわけにもいかない。

「いいじゃない。男のくせにグチグチと…。それに国にも委託されてたんならいずれ行かないといけないんだから」
「俺関係ないよねー…」
「あ、でもこの場所馬で行っても一日かかりますよ？」
「全力なら三時間でいけるでしょ」
「あれ？　よく考えたらお前が受注したんであって俺は別に行かな

くても…」
「…サイテーですね」
「……しかもあの男この前パンツ一丁で…」
「行かせていただきますっ」

よろしい。

「それにこの依頼済ませれば、多分十年は遊んで暮らせるぐらいの報酬もらえますよ？」
「……マジで？」

この男日に日に貧乏人根性が強くなってきているな、と何となくそう思った。

◆
◆
◆

「…あれ頂戴」
「いいけど三日で消える上に、ナノマシンがないと俺も操縦できんぞ」

一時間足らず。ノインたちが以来場所まで来るのにかかった時間だ。要求を無視するかのように、指差した先に鎮座するノイン達を此処まで運んだコンコルドなる物が、音も無く姿を消した。

欲しい。滅茶苦茶欲しい。

収集癖はそう強いほうではないつもりだが、流石にあれは欲しい。あとあの声が出るようになるからくりと妙な軟膏も欲しい。

「おい、行くぞ」

…まあ、今は依頼に取り組むことにしよう。

放っておけば、街に被害が出ることも十分に考えられるのだ。

前方には、まだ遠いにもかかわらず巨大な岩窟が姿を見せている。背が高い草原の先に一箇所だけ岩山が盛り上がっていて、その側面に幾つもの巣穴があいているようだ。

ハルユキががさがさと草を掻き分けながら前へと進むその後に続く。

「ねぇ、あの鉄の鳥とか妙なカラクリとかアナタが作ってるの？」

「作ってるっちゃ作ってるが、何て言うか組み立て直してるようなもんだ」

「へぇ…」

そうだ。この男がいればそれで片が付く。

どうにかして、この男を部下にしてしまえば全ての技術も、そして多分こいつの仲間も付いてくるだろう。

この男が前が言うには、非戦闘員の一人を除いてノインが戦った金髪の少女が一番戦闘力としては弱いそうだ。

あれでだ。我が兵の2小隊を一人で無力化するような女が最弱。そして恐らく目の前で草を掻き分けるこの男が最強。イラつく。しかし同時に胸も高鳴る。

あの変な発明品にしても、作ってすぐ消えるとして技術を盗むことぐらいはできるはずだ。

志貴野春雪がいるだけで、間違いなく国力は跳ね上がる。

「…おい、頭下げろ」

広がる可能性を思索していると、前方から刺し詰まった声が聞こえた。

「見てみろ。中々笑えるぞ」

草の間から相変わらず岩窟が見えてはいるが、詳細までは流石に

見て取れる距離ではない。

どこから取り出したのか、小さい双眼鏡を取り出して肩越しに渡してきた。断る理由も無くそれを手にとり、目に当てた。

ピントを合わせるつまみが無かったのだが、自動でピントが合っていく。これも欲しいなと心中で呟くが、映し出された光景を見てそんな事は頭から消え去り、同時に言葉を失った。

「……あれ、全部？」

「十…二十…いやもっといるな。まぁ元々群れる種族が２５０年で増えたんだろ」

竜竜竜

様な似非チーム以外のＡチームに勝つのはそう容易ではない。目の前に広がる集団は間違いなくそれを数倍上回っているだろう。

「行くしかないだろ。折角ここまできたし、それにフェンに今日は凄い収入があるってメモも残してきたし」

「…ま、そうでしょうね」

それにノインにしても国の使いとして、処理する必要があるので帰るわけにもいかないし、ハルユキが戦力として加わる今倒す方がはるかに楽なので正直助かるのだ。

ふと、思いついたことを言ってみる事にした。

「勝負するわよ」

「……は？」

「勝負。１６戦目。負けた方が勝った方の言うことを聞く。いいわね」

群れているという事は、多少他の飛竜に能力は劣っているはずだ。ならば先に２０体。それだけ倒せば勝てるはずだ。

流石にそう簡単ではないが、負けられない。１６個目の黒星はいらない。

それに、欲しいものは自分の手で掴み取りたい。

ハルユキの言葉を待たずに剣を抜き放ち、魔力を全開。

辺りの草を燃え散らかしながら突っ込んだ。

王女の憂鬱・上（後書き）

息抜きで書いた物なので、次は出来上がり次第投稿します。
感想アドバイス等いつでもお待ちしてます。

王女の憂鬱・中（前書き）

思いっきり後付設定ですがご勘弁を。

王女の憂鬱・中

「ん……」

目を開けると、視界の中全てが夕焼けに染まっていた。

「起きたか」

パチパチと乾いた木が火で爆ぜる音が耳に届く。視線の端に一人男が座っているのが見える。

「体、動かないんだけど…」
「別に攻撃は受けてなかったから、魔力が切れたとかじゃねぇの？」
「…そう、みたいね」

腕と足と首は辛うじて動く。立てないこともなさそうだがかなりの重労働になりそうなので、体を起こすのを諦めて大人しく地球に背中を預けた。

少し首を動かすと、そこら中で竜が転がっている。が、鼻先の土が静かに舞っているところを見ると命はあるようだ。何体かは起き上がろうとしているが、どれも遠ざかろうとするばかりでこちらに向かってくる気はないようだ。

「俺が３４体。お前が１９体。思ったよりは頑張ったが、１６戦目…」

そこで見せ付けるように唇の端を愉快そうに吊り上げて笑った。

「また、俺の勝ちか？」

３４＋１９。

合計５３体。いくらなんでも増えすぎだろう。

２０体倒した所で到底勝てなかった。目の前のムカつく顔を殴ろうとしていた拳が解ける。

「１９体…」

結果、２０体すら倒せていなかった。想像の自分にも負けたと言われても仕方が無い。

紅葉のように真っ赤な空を溜め息混じりに眺めて、そしてもう一度改めて深く、溜め息をついた。

――最近は、負けっぱなしだ。

勝つ事に喜びなんて覚えなかった、それなのに負けるのというのはどうしてこんなに歯痒いんだろう。納得がいかない。

「まぁでも判定待ちって所かもな」

焚き火に薪を足しながらもう片方の手で、ノインの頭の向こうを確かに少し悔しそうに指差した。

そちらを見ようとするが、どうにも上手く首が回らない。ノインが不機嫌そうな目線を向けると、溜め息をついてハルユキが近付いてノインを担いだ。

「……これは？」

「覚えてないのか？　お前が仕留めた、多分こいつらのボスだろうな」

他の竜達の三倍はあろうかと言うほどの竜が、焼け焦げた体で地面に横たわっていた。大きさから言うと恐らくもう１０００年近く生きていてもう少しで古龍になるという所なのだろう。

それほどの威厳と年月は気を失っていても見て取れる、が。流石に古龍に勝てるとは思えないので、古龍になる直前だった飛竜、で間違いないだろう。

しかし、これがどうした。たとえこれがここのボスだとして、結

果的に引き分けだとお茶を濁らせられた所で、そんなことで何も変わりはしない。

「まぁこいつ等もこれだけ力の差見せ付ければ町に近寄ることも無いだろう、が、ここで問題が一つ」
「問題…？」

ノインを突然出現した椅子に一旦座らせると、改めて口を開いた。

「多分俺達が相手にしたのは、依頼とは別の竜だ。一体も岩窟の中に逃げ込もうともしなかったし、中から出てきもしなかったからな。多分別の竜の匂いが邪魔したんだろ」
「じゃあ、依頼の竜は…？」
「多分、中だろうな」

後手に岩窟を指差しながら急かすようにそう言うと、どうする？と言わんばかりにこちらに目線をよこした。

「…行きたいんでしょう？」
「折角来たからな。空振りで終わるのは嫌だし、何か洞窟って好奇心くすぐられないか？」
「くすぐられないわ」
「…ロマンが解らんとは。嘆かわしいな」
「でも勝負に勝ったのは貴方。好きにしていいわ」
「よしよし。そう来ないとな」

そう言いながら、ノインを今度は背中におぶさらせた。

「……何してるのよ」

「あいつらに襲われても知らんぞ？」

未だ辺りをうろうろしている飛竜達を顎で指しながら、岩窟に歩を進めていく。

確かに身動きが出来ない状態であそこに一人残っていたら、間違いなく八つ裂きにされそうだ。それならば、と大人しく背中に乗っていくことにした。

岩窟の目の前に着くと、ハルユキはその全貌を軽く眺めた後、中頃にある穴を選んでそこまで跳んだ。

跳ぶときにも着地のときにも、まったくと言っていいほど衝撃がない。どんな足腰をしているんだと疑いたくなるが、まあもう慣れたので何も言わずに背中を叩いて先を促す。

実は自分も少し胸が躍っていることに気付いた。

何しろ、まるで冒険だ。憧れがなかったと言えば嘘になる。

それから快適な乗り心地を楽しんでいると、直に崖のように切り立った場所に行きついた。

「下りるぞ。しっかり捕まってろ」
「…ここ下りるの？」

ハルユキの肩越しにノインが下を覗き込むが、暗闇が一直線に続いているだけで底など見えもしない。

「……本当にここ？」
「多分な」

他の所は全て回ったのだろうか？　いや、入るのは初めてだと先程言っていたはずだ。

「空気の流れで何となく分かるだろ？」

困惑しているのが背中越しに伝わったのか、補足するようにハルユキが言った。

成程。常人には到底無理だろうが、出来る、と言うのならば出来るのだろう。

「……まだ、何かあんのか？」

疑問がもう一つ。あると言えばある。

どうして、あんなに入りたそうにしていたのにあんなに先に入らなかったのか。

ノインが気を失っていたことと、起きたときに直ぐ傍にいたことを考えれば答えはわかる。

質問すれば、多分困ったように不貞腐れながらも理由を言ってくれるだろう。その顔を見たい気もしたが流石に無粋だったので、想像だけにして別の言葉を口にした。

「……いいわ。行って」

言われたように、回した腕に強めに力を入れて目の前の首を抱きしめる。意外と綺麗な黒髪が頬に当たって少しくすぐったかった。

直ぐに体が浮遊感に囚われ、暗闇の中に落ちていく。

急降下していても、目の前の背中の体温のおかげか寒さは感じなかった。

◆
◆
◆

所々で発光する苔が猛スピードで下から上へと突き抜けていく。この場合壁が動いているか、若しくは観測者が落下しているかが考えられるが、今の状況は後者。

間違いなく致死のスピードで、死の底まで接近している。

しかし死に捕まるわけも無く、ストンと間の抜けた音を立ててハルユキが落下を止めた。

体感で恐らく５０メートル程は高さがあったと思うのだが、それはこの男にしてみれば階段を二つ飛ばしで下りるほどの事でしかないのだろう。

ノインもそれはここ何日かで嫌というほど知っていたので、着地してからは驚く事などせずまずは周りに目を配った。

「…暗いわね」

苔が少し発光しているといっても、所詮はドラゴンの棲家。夜目に慣れていない人間には見通しづらい事この上ない。

周りはほとんど見えないが、閉塞感の無さから恐らく相当広い空洞だろうということが推測できる。変に空気が淀んでいる訳でもなく、耳を澄ませば水が流れる音も聞こえる。

成程確かに竜が棲むには中々快適かもしれない。

「明かりを…」
「待って…！」

声をかけたのは、視界の端に何かが映ったからだ。光があると邪魔になるものが。

不意に。

ボッ、と暗闇の中に橙色の光が広がった。

二人が同時にその光に振り返り、どちらとも無く頷いた。

その光はとても弱いもので点滅するように光っただけで、既にそのなりを潜めている。

光が熾った場所に近付いていくと、もう一度オレンジ色の炎が空洞内を橙色に照らす。それはとても弱々しく一秒と持たずに消えてしまう。

その、時折浮き上がる光を目指してゆっくりと歩を進める。そこに到着するのに時間はかからなかった。

「……何だこりゃ…」

未だほぼ闇に包まれている空間を睨みながら、ハルユキが驚きが

混じった声を出した。

ノインには状況は分からず、魔法で明かりを用意しようとして直ぐに止めた。ある程度は回復してきたが、また倒れるわけにはいかない。

どうするか、と悩む前に、ハルユキの手の中から天井に向かって光源が飛び出した。

これもまたびっくり道具。ある程度まで浮かび上がったその光の玉は、太陽のように穴倉の底を照らし始めた。

そして浮かび上がってきた光景に、少しばかり驚かされた。

端から数えて……、6体。

先程ノインが倒したボス竜と同じぐらいのサイズの竜がただ静に横たわっていた。

「…死んでるな」

「結構時間も、経ってるみたいね」

竜の死体は今立っている場所から、数メートルというところだがほんの少しだけ腐臭が漂ってくる。

あらゆる武具に流用される竜の体といえど、所詮は生体だ。普通の生き物より腐敗が遅れるとしても、加工もしなければ魔力は空気中に溶け、ただの肉塊となるのは避けられない。

竜であることを計算に入れて、恐らく死んで1，2週間というところだろう。

（さっきの炎は何だったのかしら…？）

辺りを見渡すがそれらしいものは見えないし、間違いなく全ての竜が絶命している。

しかも、普通に死んでいる訳ではない。

――殺されている。

横から強烈な衝撃を受け、あるいは上から押しつぶされ、あるいは首を螺子折られて。

六体それぞれがあらゆる方法で惨殺されている。

恐らく、上の竜達に数で圧倒されたのだろう。まだ魔力の残滓が残っているが、この荒々しい魔力は人間の物とは考えられない。

そしてまた不意に視界の端で小さい炎が、十分に明るさを獲得した洞窟内を違う種類の光で照らした。

今度こそ一直線に炎の源まで、ノインを乗せたハルユキが移動す

る。

二人の目に飛び込んできた光景は、ハルユキの常識でもノインの常識にしても考えられないものだった。

「……これは…？」

そこにあったのは、他の五体より更に一回り大きい”龍”の死骸。他の五体と同じような特徴を残しつつ、各所がほんの少しだけしかし確実に変化、いや進化している。

「古龍、…ね」

間違いない。

この龍は千年という時を超えて、ここに存在している。

ほんの少しだが飛竜とは明らかに違い、高い理性と凶悪な本能が同居しているのが見て取れた。

――しかし、死んでいる。

炎の出所は古龍とは関係の無い所からのものだった。

「子供…？」

龍の死骸の影に隠れるように、小さな子供の龍が震える体で龍の死骸を睨みつけていた。

こちらにも気付いているだろうが、そんなものは気にも留めず死骸に向かって口を開く。ボッと例の炎が死骸を撫でた。

「何してるんだ…？」

ハルユキの疑問は最も。

子龍はどちらかと言えば、龍の方の特徴を持っていることからこの死骸の子供だったと推測できる。

しかし、死骸を更に痛めつけている理由が分からない。

考えている間にも、また弱々しい炎が死骸に接触する。

古龍の子供は、普通の竜の子供とは違って知性や能力が秀でているのか、その顔に表情を見て取ることが出来た。

表情は歪んでいる。当然悲しみで、そして悔しさで。しかしそれ以上に目を惹いたのは目に宿った、誇り。

そして何となく気が付いた。

「火葬、ね…」
「火葬？」

古龍は知性が高い生物。

ならば当然尊厳も存在し、ただ打ち斃されて腐っていくのは余りにも未練で不憫だろう。

だからこの子供は、悲しみも苦しみも悔恨も全て自分のうちに押し込めて、親の誇りを遵守しようとしているのだ。

弱いくせに。本当は泣き叫びたいくせに。

強がりは、嫌いだ。この頃は特に。

それはひょっとしたら同属嫌悪だったかもしれないが。

「…後、よろしく」

耳元で小さく呟いてから、ゆっくりとハルユキの背中から下りる。

震える体を引きずるように、未だ時折死骸に炎をぶつける子龍の

横に座り込んだ。

一呼吸付いて、何でこんな事をしているのか、自分はこんな事をするような人間ではないはずだという思いを封じ込める。

そこで初めて子龍がこちらに反応し牙を剥いた。

「大丈夫」

言葉が通じたのか、それとも敵意がないことを悟ったのか、ノインの腕に喰らい付こうとする顎が停止した。

それを横目で確認して、死骸に向かって手を翳す。ほんの少しだけ回復していた魔力を金色の炎に変え、ゆっくりと六体の死骸を包み込んだ。

「――”幻想郷”」

煌く炎の波が唸りを上げる。

横からは、すすり泣く様なか細い声が聞こえてきていた。

◆
◆
◆

「キィラル。ハルを知らないか？」

カウンターでマスターと笑い合いながら、酒を飲んでいたキィラルにユキネが話しかけた。

キィラルは結構な頻度で部屋に遊びに来るため既にユキネ達とも顔馴染みとなっていて、ユキネの顔を見ると上機嫌に口を開いた。

「おお、ハルユキの愛人1号じゃねぶあッ！！」

「……あいつなら来ていないぞ」

真っ赤になってキィラルに拳をねじ込むユキネに、マスターがキィラルの代わりにコップを磨きながらユキネの質問に答えた。

「そ、そうか。何時もは夕飯の時には帰って来るんだが……」

「ユキネ…、これ」

何時の間に近くまで来ていたのかフェンが紙切れを一枚片手にユキネの後ろに立っていた。

ユキネは驚きもせずにその紙を受け取ると、さっと目を通して深々と溜め息をついた。要約すると、出稼ぎに行くから遅くなるようだったら先に食べていてくれということだった。

「……レイとジェミニとシアはもう食べたって」
「じゃあ、私たちもここで何か食べるか」
「おッ、いいね飲め飲め」
「未成年に酒飲ませちゃ駄目でしょ、キィラルさん」

野太くそれでいて精悍な声が後ろから聞こえた。キィラルが酔いで赤らんだ顔を向けると、そこには顔馴染みの男が立っていた。

「ガララド。どうしたこんな時間に」
「いや、うちの姫さんの帰りが遅いからね。どこに行ったのかと。あの黒髪は？」
「ハルは仕事だ。……って、あれ？」
「ん？」

手に持ったメモを再び覗き込んでユキネが困惑した声を出した。どうした、とその場の人間がメモを覗きこむ。

「ハルは確か文字は書けない筈なんだが…」
「ああ、成程。こりゃノインの字だ。って事は2人とも外に出てるのか。全く、早く帰ってこないと、ミスラが心配してるのに…」

呆れたようにそれだけ言うと、ガラドはキィラルの横の席に座り込んだ。その顔はノインのことに腹を立てている様子では決してない。

「俺も久しぶりにここで飯食べようかな。マスター、適当に頂戴」
「あ、私達にも何かお願いします」
「はいよ」

磨いていたコップを置いてフライパンに手を伸ばした。しばらくしていい匂いがカウンターまで漂ってくる。

「ほら」

あっという間に出てきたのは、何やら具がたくさん入った炒飯とこれまた具が多いスープ。何の変哲もない料理だが立ち上る湯気と立ち篭る匂いが食欲を掻き立てる。

後の酒場では相変わらず、いや日に日に増えていく人間達がそれぞれ騒ぎながら酒を飲み交わしている。

「祭りだというのは知ってるけど、どんどん人が増えるな」
「そりゃなぁ、毎年に一回だけのドンちゃん騒ぎだ。海の向こうからも人間が来るようになったんだぜ？」

感慨深そうにキィラルが息をつく。

「しかしまあ、この国もやばい時期もあってな。6年前、だったかな？　その年だけ祭りが出来なかったんだ。この祭りは国の収入源の一つだから、その年はの歳入は本当に厳しかったらしい」

「飢饉でもおきたのか？」

「いやいや、その前の年に王が変わってな。これがまたなぁ…」

おっと、と口を噤んでキィラルがばつの悪そうな顔をガララドに向けた。

しかしそれを見たガララドは、気まずくなるどころか軽く笑っている。

「いや、俺は城の人間じゃないですから別に何も言いませんよ。その王には大して面識もなかったし」

「しかしそれに比べて今の姫さんはすごいぜ。いやたった一年で国を転覆させかけたそいつも凄かったけどな。あの状況を一年足らずで快方に持っていくなんざ誰も予想できなかった」

それでも一応大人として空気を読んだのか、それとなくフォローの言葉を入れる。

しかし今度ガララドの顔に浮かんだのは予想していたものとはまた逆の、どこか寂しそうな、やりきれないような表情。

「ノインは誰よりもするべき事と自分に出来る事が分かってましたからね。それもなまじ能力が高いものだから十歳なのに周りに頼られてね」
「…妙に大人びてるもんな、あの王女」
「要するに、強過ぎて優しすぎたんですよ、あいつは」

カラン、と食べ終わった皿にさじを置いた。ガラドはそのまま外套の懐に手を入れながら席を立つ。

「おい、なんだもう行くのか」
「ミスラが一人で仕事頑張っているでしょうしね、俺も手伝わないと」
「そうだな、かみさんに無理さすもんじゃないな」
「それにもしノインが帰ってきたら、説教の一つでもしてやろうかと思いまして」

カウンターの上に置いた小銭がジャラジャラと音を立てる。

「ああ、2人の分も勘定に入れて」
「あ、いやいや。お金は…」
「いいんだ。お前らの頭領にはノインが世話になってるしな」
「…ごちそう、さま、でした」

少なめに盛られた夕飯をフェンも食べ終えて手を合わせる。

「それと、あの跳ねっ返りには友達いないから、良かったら仲良くしてやってくれ」

「ああ、そう言えばウェスリアって奴が斡旋してたからそいつに聞けばどんな仕事かわかるぞ」

「ありがとうございます、行ってみます」

お釣りでついでに注文した小さな酒を右手にぶら下げて、ガララドは酒場から出て行った。

王女の憂鬱・中（後書き）

感想、アドバイス、誤字脱字報告等いつでもお待ちしてます。

次の話までは不定期です。

王女の憂鬱・下（前書き）

纏めきれんかった…。長い。

王女の憂鬱・下

岩窟から外に出ると、もう完全に日が落ちて夜の帳が下りていた。

「…じゃあ結局今日はこのままこの辺に泊まるのか？」

「ここじゃあの飛竜達がいつ襲ってくるか分からないから移動するわ」

「……背中に乗ってる奴に言われてもな。移動するのは俺だろ」

結局、また動けなくはなったものの、気を失うことは無かった。と言っても動けないのでは対して状況は変わらないので、六体を完全に燃やし尽くした後、またハルユキの背中に頼ることになった。

これから帰ってもいいのだが、いまさらあれに乗って音速を超える体力が無いのと、後もう一つの問題として、後からひょこひょこと付いて来る生き物の存在があった。

「そいつ本当に連れて帰るのか…？」

「駄目なの？」

「駄目じゃないが、パニックにならないか？」

小さい子供の龍。小さいと言っても細長い頭と尻尾までを測れば３メートルはあるだろう。

街中に連れて行けば確かに一悶着あるかもしれないが、あの町なら面白がる人間のほうが多い気がする。

考えている間に、ハルユキが駆け足で岩窟とその周りで屯(たむろ)していた竜たちから離れていた。

この男の駆け足はそもそも馬より大分速いようで、後ろで四苦八苦しながら翼をバタつかせて必死に付いて来る子龍が見える。

それから三十分ほど移動した辺りで、ハルユキが足を止めた。

背の高い草は無くなり、芝生のような短い草の草原の真ん中、ポツンと大きい木が立っている自然の広場みたいな所。

ここなら雨が降ってきてもそう濡れる事は無いだろう。

少しだけ動くようになってきた手足で木まで移動し、寄りかかった。

「飯だな。探してくるからここで待ってろ」

それだけ言うと、ハルユキは音も無く姿を消す。

ふぅ、と短く息をついて全身の力を抜き、更に木に体重を寄せた。

――疲れた…。

声が出るか出ないかというほどの大きさでそう呟いた。

ちょっとした暇つぶしでギルドに行こうと言ったのだが、ここまで大仕事になるとは思わなかった。

あの男が厄介ごとを引き寄せる才能があるせいだ、間違いない。大体そんな才能でもなければ古龍や、まして霊龍になど遭遇するはずも無い。

あの男と一緒に行動するあの五人はさぞ大変だろう。もう慣れているのかもしれないが。

力を抜いてゴツ、と後頭部を木の幹に預けると、視界が広がった。

今もたれ掛かっている木は枝がかなり高い所からしか生えていないので、それはとても広く見えた。

星。

ノインの町は、眠らない町と言われるのに相応しく、明け方になるまで町の何処かは明かりが付いていてほとんど光が耐えることは無い。

町の光は城から見ていて、それこそ星の光のようで綺麗だ。賑やかで騒がしい光はとても温かい。

しかし温かすぎては、明るすぎては見えないものもある。

例えば、この星。

上だけではなく、視線の先にある遠い山の頂上から背中側に遠い山の頂上まで。

星たちが踊っているようで、騒いでいるようで、睦ぎ合っているようだ。

夜の闇が肌に冷たく、遠くはなれた光はささやかな物だが、どこか城から見下ろす町の光と似ている気もする。

「…どこの詩人よ」

勢い余って一句詠みそうになっていた自分を諫める。更に体から力を抜けていき、今度は眠気が襲ってきた。こんな所で寝るのは危険すぎると頭を振って眠気を追い出そうとして、止めた。

直ぐ傍にあいつがいる。気を抜いても大丈夫だろう。

ふとグルル、と聞こえた音の方向に顔を向けると、既に子龍が直ぐ横でウトウトと寝息を立て始めていた。

「こら、なに主より先に寝てるのよ」

ビシっ、と鱗だらけの頭に手刀を振り下ろすと、くぐもった声を出し寝ぼけ眼で顔を上げた。

「そういえば、貴方雄なの？」

言葉は流石に分からないのか、首を傾げて、何を思ったのかこちらに擦り寄ってきた。

「ち、ちょっと……」

別に鱗が硬くて痛いわけでもなく、意外とすべすべしていて、頭の上から体のほうに流れるように生えた毛もふさふさで気持ちいいが、どうにもこう…、くすぐったい。

そしてノインの顔に顔を埋めたまま、再び今度は完全に寝息を立て始めた。

「この私を、振り回すとはいい度胸ね…」

遠くから草を踏む音が聞こえてくる。どうやらあいつが帰ってきたらしい。

苦笑をこぼす、同時にまたしても体から力が抜ける。底抜けに体から力が抜けていく。全くどれだけ強がって。どれだけ力が入っているんだ、私は。

本当は逃げ出したいくらいに一杯一杯なのに。と言うか、このごろは逃げ出しっぱなしだ。

初めて見えた弱さに。弱い自分を見つめる不安に。

「疲れた…」

眠気が首をもたげている事を自覚して目を瞑る。

近付いてくる足音を聞きながら完全に意識を手放した。

◆

◆

◆

「……美味しいじゃない」

「当然」

ノインが目を覚ますと既に食事の用意が出来ていた。

月の傾き具合からいって二時間ぐらい寝ていたようだ。

用意された食事は、適当にその辺で捕まえてきた角ウサギを捕ま

えたもの。

ナノマシン調味料とやらで適当に味付けしただけらしいが、ハルユキはこのウサギを一度調理したことがあったので、美味しい食べ方はある程度わかっているそうだ。

「ていうか、お前一日以上城空けて大丈夫なのか？」
「別にいいでしょ。多分貴方と一緒だって事は分かってると思うし」
「……帰ったら俺が酷い目に遭いそうに思えるのは気のせいだろうか…？」
「まぁ、私が口添えしなければ拉致容疑で牢獄行きかもね」
「…お願いします」
「いいでしょう」

はぁ、溜め息をつきながらハルユキが苦笑する。

当然半分冗談だし、それはあっちも分かっている。そんな下らない気持ちの一致が少しだけ心地いい。

それを境にお互い手元の肉を口に運ぶのに集中し始めた。何しろハルユキは馬鹿みたいに食べる。出遅れればかなり多めに配分した自分の分を食べ尽くしてこちらの食べ物にまで手を伸ばしてくるかもしれない。

およそ王女とは思えないほどの速さでノインは自分の分を食べ終えた。

さて、手持ち無沙汰だ。

寝てもいいし、滅多に見られないほどの星空を眺めてみるのもいい。何かハルユキをからかって遊ぶのもまた良し。

さて、何しようか。

何をするかも決めないまま、何も考えずに口を開いた。

「そういえば、貴方どんな字(あざな)なの？」

「字(あざな)？」

「字(あざな)、スタンプ、スペル、刻印。色々言い方はあるけど何が言いたいかは分かるでしょう？」

生まれたときに必ずと言っていいほど刻まれている一文字。それは本当に様々な能力があるが、この男の力は身体能力がずば抜けていたり変な道具を使用したりと全く統一性と言うものが見られない。

「て言うか、そもそも魔法なんて俺は使えねぇよ」

「……ま、そんなところだと思ってたけど」

そもそも消えるように移動する時も、何か巨大なものを作り出すときも、魔力の一欠片すらノインは感じなかったのだ。

ノインも、本気でこんな規格外を見定めようとはしていない。

「……――貴方、自分のことが強いって思う？」

途切れた会話を縫って、思ってもいない事が口から飛び出した。
訳が分からない事を言ったと取り消そうとして口を開くが、先にハルユキが淀みなく答えを返してきた。

「思うよ」

返ってきた答えは、予想していたような、期待していたような、
それでも聞きたくなかったような答えだった。

「……そこは”俺は弱い”って言う所じゃないの？」

歯に衣着せぬ物言いに、溜め息混じりでそう言った。

果たしてそれを聞いていたどうかは定かではないが、肉を口に運ぶ動作を止めないままただ淡々と。

「俺は最強だよ」

そう、言った。

冗談で言っている訳ではないのは、分かる。

先程まで緩やかだった空間が、ほんの少しだけ緊迫感を帯びている。

加えて、先程まで何気ない会話をしていた男が、今は妙な迫力を帯びて見えた。

巷にも自分は強いと豪語する輩は吐いて捨てるほどいる。しかしそれの殆どは驕りか、もしくは自己顕示だ。

しかし、この男はただ自分より強い奴がいないことを淡々と語っているだけ。間違いなく自分が一番だ、と。

――違う。

この男は知らないだけだ。自分より強い人間がいる事を知らないだけ。

ノイン自身がこの男に負かされた様に、自分の中での一番が崩れ去ったように、そういう時をまだ味わっていないだけ。

「……くそ」

分かっている。

この男は恐らく自分とは違う。そんな事は分かっているのに。

最強を自負する人間たちと決闘をしたことがある。それも何度も何度も。当然その度に打ち負かしてきて最強を実感してきた。

お前らもその他大勢でしかないと力で示してきた。

そうだ。

この頃この男に絡んで行ったのも、それに仕事にも身が入らなくなったのも。

強さを無くして、いや強いと思っていたのを覆されて、私の中心から私がいなくなったからだ。

この男には。

私がきっと今まで負かしてきた”その他大勢”としか映っていない。

それが、堪らなく嫌だった。

「……で？　俺は強いが、お前は？　弱いのか？」

「…皮肉を言っているの？」

私を負かしたのは、他ならぬ貴様じゃないか。

ギッと、満足に動けないながらに静かに殺気を向ける。

自分から言い出したことだから文句は言わない。しかし、あの一戦が私にどれだけ影響を与えたと思っているのだ。

――どれだけ私の世界が壊れたと思っているのだ。

「…俺にケンカで負けたから自信なくして自分を卑下してんのか？…はッ、面倒なガキ」

「……殺すぞ」

「無理だよ」

頭が命じるまでもなく横に置いてあった剣を握って抜き放ち、剣先を呑気に肉を食べている馬鹿の喉元に向ける。

「……決闘よ。立ちなさい」

しかし目の前の男は、相変わらず緊張感も持たずこちらに目も向けない。

――私に何の興味もないかのように。

「…っ立ちなさい！！」

「いいぜ、斬れよ」

スッと、そこで初めて視線がノインの方を向いた。しかし視線が合ったのは一瞬。片方が逸らしてしまっているからそれは必然だ。

歯を食いしばり、剣を振り上げる。

ここで、この男を倒してしまえば、殺してしまえば。私はまた強かった自分に、それどころか最強に――……！

腹を決めて歯を食いしばり、こちらを冷淡に見上げるハルユキの目を睨みつける。

しかし。

「……なれる訳、ない、か…」

手から剣が滑り落ちカラン、と乾いた音を立てて地面に転がった。響いた音に、子龍が目を覚まして心配そうにノインの方を見つめている。

魔力がまだ回復しきってないのか、かくんと膝が折れ、そのまま元いた木の根元に座り込む。

「…もう、いいわ」

剣を振り下ろしていたとしても、強くなれるわけでもなく、それ

どころか強さの証明すら出来ない。

この男をどうにかして、この国に呼び込んで、そして国を支えていけばいい。それこそ結婚でも何でもして。

自分で自分も支えきれない弱い人間が、国を支えるなどとおこがましい。もう強がる必要も頑張る必要もない。

楽でいい。

未練なんてものもない。笑顔が出ないのだから嬉しくはないのだろう。涙が出ないのだから哀しくもないのだろう。

なら、もういい。――疲れた。

「お前、今幾つだ？」

唐突に。

空っぽの頭に空気を読もうともしない声が響いた。

「…16」

「何だ。思ったより子供（ガキ）だな」

「……」

こんな奴にいまさら皮肉を返す余裕もなく、唇を結んだまま、どことなく星空を眺める。

広い。

他の物なんて何もかもがちっぽけだ。

それから多分結構な時間が経って、そして何の前触れもなしに、ドサッと草をの上に座る音が聞こえた。

「……まだ、ガキだもんなぁ」
「…貴方もそんなに変わらないじゃない」
「馬鹿野郎。俺は一億歳だ」
「…面白くないわよ」

子ども扱いされたのは何年振りだろうか。

母上は口癖のように子供だねと言ってくれていたが、あれはどうにも悔しかった事を覚えている。その気持ちがじわじわと数年振りに顔を出してきた。

悔しいものはやっぱり悔しい、でも少しだけ感じた懐かしさは嫌なものじゃない。

とん、とノインはハルユキの肩に頭を預けた。

「私は、強い」

消え入るような声ではあるが、はっきりと声に出した。我ながら嘘くさくて吐き気がする。

何を期待して口走ったのかは自分でも定かではないが、その言葉は心の何処にも触れずに通り過ぎて、薄く薄く消え去った。

頭上で葉と葉が擦れる音がうるさい。

しかし実は心臓の音も負けずにうるさかったりもする。先ほど結婚がどうのこうの思っていたせいでやけに頬が熱い。

「話ぐらい聞いてやるぞ？」

遠慮も工夫も欠片も見えないことを言ってくるハルユキを一旦無視する。

妙な火照りを抜く為にも、思考を元の筋道に引き戻した。

弱いとは何かなんて知らないし、強いという事もわからない。更に言えば強い者こそそうは知らない。

だけど、弱い人間なら私は確かに知っている事を思い出した。

幸い聞いてくれる人間も横にいるらしい。

ぽつりぽつり、と勝手に口が動いて語りだした。

少しだけ昔話でもするとしよう。

†

「どうしてお父さんは王様なの？」

それは誰よりも強いからだ。

「どうしてお父さんはそんなに強いの？」

それは強くなければならなかったからだ。

「どうして強くならなければいけなかったの？」

敵がいるからだ。

「どうして敵がいるの？」

戦うためだ。

「どうして戦うの？」

誰よりも強くあるためだ。

「どうして」

「どうしてお父さんはそんなに弱いの？」

†

荒れ果てた街道を痩せ細った馬が荷台を引いていく。

その荷台には大量の荷が載っているにもかかわらず、進行方向は城が鎮座する町の中心部とは逆。

それどころか今は丑三つ時。

人っ子一人見当たらない。

「また亡命者か…」

「増えたな、これで何人目だ?」

「いやまだそんなに多くは無いさ。先代の王にまだ期待している奴らがまだ大勢いる。居心地が良すぎたこの町を忘れられないのさ」

「……それは希望か」

「さぁな、呪縛かもしれん」

その時何処からかザン、ザン、と土を踏む音が近付いてきた。

「飽きもせずに行軍か、しかもこんな夜中まで。攻める国も無いのにな」

言いながら男は傍にあった荷物を抱えあげる。

「俺もしばらくはこの町、いやこの国に行商には来ないつもりだ」

「仕方ないさ。……またな」

「ああ」

行軍する兵士が巻き起こす土煙に隠れるように、また一人この町から人が消えた。

†

父上、国民が高くなった税に笑顔を見せてくれなくなりました。

父上、町に下りた時見える明かりが随分と減りました。

父上、先日父上が反逆の疑いで殺した兵の家族が母上を犯して殺しました。

父上、また徴兵を敷いたのですか。

父上、国庫が無くなり、代々続いてきた誕国祭が中止になりました。

父上、爺(じい)が牢から逃げ出しました。

父上、私も十(とお)になりました。

父上、貴方が爺(じい)から王権を奪って一年経ちました。

父上、国が、人が、死んでいきます。

父上。

貴方は。

――どうやら要らない人間のようだ。

†

「ノイン様ッ！！　……ッ！」

滴る。

真っ赤な血が頬から腕から剣の切っ先から。

「…王は正体不明の暗殺者に殺された。大臣たちを集めて」

「ノイン様ッ！」
「こうなった以上私が国を動かすわ。異論は許さない」
「ノイ、ンッ…！」
「ガララドまだ傷が治っていないでしょう？　寝ていなさい」
「お前が、付けたんだろうが…ッ！」
「悪かったわ」
「そういう事を言ってるんじゃない！！」
「しょうがないじゃない。私が一番強いんだから」

紅い剣が横に振られ、玉座に血が降りかかる。

「大臣たちを。この国を立て直す」

ただの肉の塊となった男に炎と化した魔力を叩きつけて、葬った。

†

「軍資金を縮小。これまでの三割でいい」
「そ、それは…！　余りにも…！」
「先ずは国力の底上げが先。どうせ戦争なんて起こらないわ」
「そのような物言いは平和に慣れた者の…！」

「”平和に慣れた”？　今の町を見下ろしてもそう言えるの？　平和だったのは我々だけ。一年戦争だけは起こさぬように他国に諂(へつら)えばいいだけよ」

僅か十の少女が軍議に集まった文官、武官を見渡す。

「一年で逃げた農民を取り戻し、絶ってしまった商交を取り戻し、国民に生気を取り戻す」
「そんな、無茶苦茶な…」
「元々無理を強いたのは我々だ。相応の無理を今度は我々が行う番だ」
「御恐れながら」

壁に寄りかかるように、佇んでいた兵士隊長が静かに口を開いた。

「王女はまだ国政というものを理解していただけていないのではないかと。そのような事は不可能。絵空事というのです。ここは子供が夢を語る場ではないのですよ」

ざわついていた大人たちの群れの中から、兵士隊長の言葉に賛同する声が瞬く間に大きくなっていく。

勝ち誇ったように兵士長が笑みを浮かべ、同時に声が響いた。

「成程。では貴様等の中で誰でもいい。この私より優れている事を示して見せよ。己の一番得意とする事で構わん」

その言葉に篭っていたのは自信と威厳だけではなく、確かな実績もその重みとして乗っかっていた。

すでに幾度と無く闘技大会で覇を示し、政に口を出してそれがそのまま法になった事も一つや二つではない。

騒がしかった室内の中に大して大きくもない声が不思議な迫力を帯びて轟いていく。

一瞬遅れて波紋のように静寂が広がった。

その不思議な威圧からか、それとも予(かね)てから有名だった神童と云われる少女に恐れをなしているのか。

たかだか十の娘の言葉に、我こそがと手を挙げる者はいなかった。

一度、ぐるっと場を見渡して王女は静かに腰を下ろす。

「なに。何も責任を負わないつもりはない。もし一年で良い様に結果が出来なければ、

――この首を刎ねて畜生に喰わせればいい」

誰かが、息を呑んだ。

「一旦議を終える、が最後に」

誰かが口を開くのを待つこともなくただ一方的に王女が言葉を叩きつける。

「絵空事といったな。しかし実際のところ、今まで出来た者がいないという事を言いたいだけだろう？」

どのような事にも反論はある、不満も不安もある。

しかしただ純粋な威厳がそれらを押し流す。

「――貴様等は前例があることにしか可能性を、夢を感じないのか？」

年の頃十の女の子供。

およそ社会において最も弱者と労わられるはずの少女は、場を圧倒して、その小さい肩には大きすぎる豪奢な外套を纏って。

烏合の衆に背を向けた。

一年が経って、王女は王足るべく者としてこの国に変わらず顕在していた。

†

「それから、次の年には浮いた金で誕国祭の復活させて更に国を潤して。国にも人にも力が戻って。私の力について来てくれる人も増えたわ」

そこまで話し終えて、静かにノインは息をついた。

未だに体重はハルユキに預けたまま、ただパチパチと木を爆ぜている炎を見つめてハルユキの言葉を待つ。

火の音以外には風が木を撫でて葉が揺れる音しか聞こえない。改めて二人きりだという事を意識しそうになる。話して少しだけ軽くなった心に、また妙な重圧が圧し掛かっていた。

そんな心情を他所に、ゆっくりとハルユキが口を開いた。

「……説教なんて柄じゃないから思ったことを言っていいか？」

無言でその問いに答える。

よし、とハルユキは小さく呟くと再び口を噤んで、しかし今度は間もなく口を開いた。

「お前、馬ッ鹿だなあ…」

ビシッと額の血管が浮き上がるのが自分でも分かった。衝動に逆らうことなく目の前にあった脇腹を殴り付ける。

くぐもった声を上げるハルユキを憎々しげに睨み上げた。

衝動的に罵倒を繰り出そうとする野蛮な口が、見上げた先にあったハルユキの顔を見て、動きを止めた。

「――俺はな、力っていうのは必ずしも強さに繋がるもんじゃないんだと思う」

静かに、噛みしめるようにハルユキが続ける。

見上げた顔は何処かここからでは望めないほどの遠くの地を見ているかのようだ。

「誰よりも戦う力が強いとしても、それは敵が居ないと発揮できない。所詮敵に依存した力でしかない」

ゆっくりと、言葉を紡ぐ。

「曖昧なんだ力なんて。そんな物に支えられるほど人間は軽くないよ」

そこまで言うと、ハルユキはガシガシと乱暴にノインの頭を撫でた。

「今お前は、力に溺れてる様に見える」

「……溺、れてる？」

「力がないと不安なんだろ？　お前が誅した親父と同じだ」

「…ッ」

あの男は溺れていた。力を求めて力に溺れて、敵を欲していた。目の前の事に目も向けられないほど。自分の力、地位、そんなものにしか自分の価値を見出せていなかったから。

見て、いられなかったのだ。

民の為でももちろんあった。でもそれと同じくらいにもう見ていたくなかったのだ。父の愚かな姿を。だから、殺した。

自分も今、そう映っているのか。

どうも間違いなく血は繋がってしまっているらしい。

「お前が弱さを見つけたんなら、それは悪い事じゃないと思う」

言いたい事を言って、聞いてもらって、大分余裕が出来た頭の中にハルの言葉が染み渡っていく。

「強がって撥ね付けなくていい。幸い、お前は一人じゃないだろ」

一人じゃない…？

確かに一緒にいてくれる人間はいる。しかしそれは私の力に惹かれて、憧れてくれた人達だ。

弱い自分など価値がない。

「人間はどうしても常に強くはいられない。お前も俺も皆が皆だ。だから、弱くなってもいい所を見つけるべきだ」

「…そんな場所なんて…」

「……でもまぁ、まだまだガキだからなぁ」

グッと強く頭を抱き寄せられた。

特別な感情がないことは伝わってくる。と言うよりこいつは私が女だと思っていないんじゃないかと思う。

「仕方ないから、お前が弱い時にはお前の分まで俺が強くいてやるよ。お前がそういう場所を見つけるまでな」

少し離れた所から炎の熱がほんの少し伝わってきて、顔を埋めている胸が温かくて、そして何より一番自分の体が熱かった。

一番近い所にあった服を掴んで更に体を寄せる。

そして何となく思う。

こんな話を聞いた所で強さなんて分からないけど、この男は私の知らない強さを持っているようだと。だからこんなに安心するんだと。

だから。

「――うん」

だから少しだけ、この温もりに甘えてしまおう。

それから再び眠りにつくまでどれぐらいの時間が経ったかは覚えていないが、朝起きても距離はこのままで、寒さも不安も感じなかった事は覚えている。

◆◆◆

「あ〜〜、着いたぁあ！！」

地平線の先にようやくその姿を見せた町を見てハルユキが歓喜の声を出す。

背中に乗ったノインも肩越しにそれを確認して地面に下りた。

「……張り裂けるような足の痛みは何処に？」

「故郷（ふるさと）を見れば痛くなくなるなんて不思議。偉大ね故郷って」

「……いいんだけどね、別に」

棒読みのノインに、ぶつくさ言いながらハルユキは町の方に歩き出した。ノインも離れないようにその後に続き、その後にはギィも翼を畳んで大人しく四足でついて来る。

検証の結果、子龍は雄だったようで、名前をつけることにしたのだ。

「ギィ、町の中ではとりあえずは飛んでは駄目よ。パニックになっちゃうから」

果たして理解したのかしてないのか、嬉しそうに喉を鳴らしながらノインに体を擦り付ける姿からは全く察することは出来ない。

しかし、今のところは大人しいしなるようになるだろうと適当に当てをつけた。

それに今のギィを見ても恐ろしいというよりも、美しいという感覚に陥るだろう。

強くなってきた日差しを受けて光沢を示す銀色の鱗に白い羽毛のように柔らかい毛。古龍の子だからか何となく知性を感じさせる視線は間違いなく普通の飛竜の子とは一線を画している。

そんな事を考えていると、ギィがノインの前に立ち塞がって鼻先で自分の背中を指した。

「……乗れって言ってるの？」

ギィは喉を鳴らしてそれに答える。肯定ととっても構わないだろうとノインは恐る恐るながらもギィの背中にまたがった。

ノインが乗ったのを確認した瞬間、一瞬で空に舞い上がった。

ギィは竜と言ってもまだ小さく、大男になら抱えられそうな程の大きさだ。それでも人一人を乗せて軽々と空を昇っていく。

暑くなってきた気温に例の軟膏を使用しようとしていた所だったが、頬を撫で髪を靡かせる風が涼を贈ってくれた。

「おお、すげぇ力だな」

十メートル程下の地面では、こちらに気付いたハルユキが何か話している。

「もう一人、乗せれるかしら？」

自然と試すような口調になってしまったが、ギィは上等だと言わんばかりに雄雄しく号を発する。

空中で流れるように旋回した後、ハルユキに接近し。

そのまま口に咥えた。

「……こいつ、躾けていいか？」

「どうして？　褒める所でしょ？」

「…おい、トカゲ、悪い事は言わんからこの女色には染まるな」
「ギィ、落としていいわよ」
「ちょ、おい…！　……あーあ」

やれやれと意外に余裕たっぷりの声でハルユキが落下して行った。

気付けばもう直ぐそこまで町が迫ってきている。このまま飛んで行ったら大騒ぎになるかもしれない。ノインも打ち落とされるのは遠慮したい所なのでギィに地面に下りる様に指示を出した。

「よいしょ…っと」

降りやすく下げられた体から一息に飛び降りた。

周りは馬小屋。そこにいた少数の人間が下りてきた竜の姿を見て、息を呑んだり、尻餅をついたり様々な反応で驚いている。

「おいおい、大丈夫か…」
「大丈夫でしょ、多分」

その証拠に一旦驚きはしたものの、町人達はギィに害はないと判断したのか、近付こうとはしないながらも自分の仕事に戻り始めている。

さて、それではギルドに向かおうかとしたところで。

甲高い笛の音が響いた。

「王女を発見！　シキノ・ハルユキも一緒です」

その笛の音を追うと一人の男が壁に隠れるように立っていて、手に握り締めた交信魔球にありったけの声をぶつけている。

その姿はここからでも十分に確認でき、間違いなくこの国の兵士だ。

こちらを警戒したまま小さく魔球に言葉を送っている。更に笛の音を聞きつけたのか、辺りに他の兵士たちも集まり始めた。

「……口添え頼むぞ」
「ふふふふふ」
「…え？　ぇえ!?　しろよ?!　口添え!」

言っている間に続々と兵士が周りを取り囲み始め、やがて知っている顔が兵の垣根をかき分け、前に進み出た。

そいつは、何時もの倍くらいの真剣みが混じる近衛兵長のミスラ。
一直線にこちらに歩いてくる。

「あ、そう言えば仕事の途中で抜け出したんだった」
「……おい」

それなら益々ハルユキ王女誘拐説が濃くなっていることだろう。

それを色濃く表すかのように、ミスラの顔は感情が篭り過ぎて無表情になってしまっている。

ミスラは、つかつかと無言で二人に歩み寄り。

近付きざまノインの頬を強かに張った。

パァン、と乾いた音が街の入り口に響いた。

「え……」

ノインが突然のことに呆然としている所にドズン、と重々しい音。

「ガララ、ド…」

何処からか跳んできたのはガララド。

ミスラと同じような表情で近付きながら篭手を外し、ゴツンとノインの頭に拳骨を落とした。

「ッ…！」

「飛竜の討伐に行っていたらしいですね」

本当に滅多に見ることの出来ない、目を白黒させたノインを構いもせず、冷淡にそう言った。

普段は騒がしいはずの街がこれ以上ない程静まりかえっていく様に感じる。

「飛竜討伐。ランクはＯＶＥＲ．Ｓ。国が軍を動かしてもおかしくないものです、それはお分かりでしたね」

「……実際に私とその男で力不足ではなかった。むしろ十分すぎたわ。間違った判断ではないはずよ」

頭を押さえていた手を離して、挑戦的に少しだけ背が高いミスラを挑戦的に睨み上げた。

「それに国にも委託されていた依頼だったから、私が請け負ったのもあながち的外れじゃないわ。あの内容じゃ私か、近衛隊編成の３個中隊ぐらいじゃないと…」

どのような反論にも答えてやろうと、強情な表情をノインは顔に浮かべる。

確かに正しい行動だったし、ちゃんとそのつもりで行動した。王家として正しい対応をしただけの事だと。

そして。

数秒間無表情でノインの眼を見つめていたミスラの表情が、ほんの少しだけ崩れた。

「――どうして」

それはほんの少しだけ泣きそうに眉を寄せたけ。

しかしノインの理屈に適っていて力が篭っている声に対して、搾り出したかのような掠れた声がその表情と相乗するかのように重みを増す。

「どうして、貴女はいつもそうなんですか…！！」

悔しそうに呟く声は、ギリギリでノインの耳に届くような声だったが、それでもノインが言葉を失うには十分だった。

「存じております…！　誰かが犠牲になるかもしれない大多数の部隊よりも、ハルユキ殿がこの街にいる内にけしかけて極少数精鋭で討伐を行った方が確実だから無理をしてでも行ったのでしょう？分かりますよそれぐらい！」

ノインに発言することを許さないとでも言うかのように、徐々に強くなっていく言葉をたたみ掛ける。

「私は貴女の近衛隊長ですよ…？　どうして頼ってくれないんですか！　貴女が一人で辛いことをする度に！　私がどれだけ心配なのか、貴女なら分かるでしょう！？」

「心配…？」

「貴女が私たちのことを心配してくれるぐらいには、私たちも貴女が心配なんですよ！」

「でも…」

「そんなに私共は頼りないですか…？　今回のことだって一言言ってくれれば私とガララドぐらいはお供することが出来ました！　…それなのに」

益々勢いを増していくミスラに、ノインは完全に沈黙してしまった。沈痛で必死な面持ちのミスラに比べて、ノインの顔は完全に困惑一色に染まってしまっている。

「どうして、全部一人で背負おうとするのですか…！！」

「…違う、それは…」

「違いません！　先代の王の事も今回の事も！　何時も、そうでは

ありませんか！」
「ミスラ」

天井知らずに勘定を昂ぶらせていくミスラを、ガララドがやんわりと制止した。

「――ノイン、お前はまだ子供なんだよ」

ミスラが落ち着いたのを確認すると、ノインに振り返って穏やかに言葉を受け継いだ。

「…でも、私はッ！」
「少しは俺等を頼ってくれよ。国を支えていきたい思いがあるなら、お前を支えてやりたい奴の気持ちも解ってやってくれ。後の奴らも城の奴らも。みんなそうなんだ」
「――ッ」

な？　とそこでようやく、くしゃッとした笑顔を見せると、まるで父親か何かのように優しくノインの頭に手を乗せた。

ノインの肩が少しだけ震えて、そのまま俯いた。

そして何を思ったのか、ハルユキの後ろに回り込むと、顔を背中に押し付けた。

「……じっとしてなさい。振り向いたら殺すわよ」
「…鼻水つけんなよ」

ごすっとハルユキの背中に拳が突き刺さる。

「皆待ってるぞ」
「……ちょっと、待って」

そう言いはするものの、背中の服を握り締めた手から力は抜けていかない。いつまで経っても動かないノインにハルユキが溜め息と共に口を開いた。

「なあ、もう強がんなよ」

ビクンと背中でノインの体が震えて、万力ばりにきつく握り締められた服に更に力が加わっていく。

十歳からの六年間。強くなろう強くなろう、誰よりも強く在ろうとした意気はそう簡単に抜けはしない。

「弱いお前を見たところでこいつ等はお前と一緒にいていくれる」
「……うるさい」

後ろから聞こえた声は湿って震えている。

先程まで高慢だった態度も声もそこにはなく、後ろにいるのは別人ではないかと思うほど。

「最初は似てないって思ったんだけどな…」

小さく、どこか面白そうにそう零した。

「ッ……？」

先ほどの言葉は独り言だったらしく、直ぐにその表情の余韻を消して口を開いた。

「悪い事したらごめんなさい、嬉しかったらありがとう。人生の基本だ」

「…うるさい、偉そうに語るな」

顔が熱い。瞼も頬も頭の中も。この状況でそんな事いわれても分かるわけがない。

「……しょうがねぇなぁ」

溜め息混じりにそんな声が聞こえた。

ノインがえ、と声を漏らしたのはその声が余りに殺気に濡れていたから。強く握り締めていたはずの両手はいつのまにか離れ、凄い力で体をハルユキの前に持っていかれた。

「はい、全員動くな」

同時に首筋に当てられたのは冷たい刃の感触。ハルユキの手には何処からか精製した一振りのナイフが握られていた。

「……何をしているのですか、ハルユキ殿」
「いや、慌てさせようかと思って」
「…何をしようとしているのかは知りませんが、悪ふざけは止めて下さい」

確かにある程度離れた兵士達はざわつき始めていて、殺気立つ者も見られるが、ミスラとガララドを始め何人かの兵士は呆れながら溜め息をついている。

「そんな冗談をやっても我々は慌てませんよ…？」
「いやいや、慌てるさ」

極めてにこやかにそう言うと、手に持ったナイフをノインの胸に振り下ろした。

ドス、と鈍い音がしてナイフの刀身が胸の真ん中に埋まる。次の瞬間ナイフはノインの胸を離れ、夥しい量の鮮血が街の床石に飛び散った。

「――え？」

気の抜けたような声は、誰の声だったか。それは恐らく何人もの声が重なり合ったものだと思う。

カクン、と糸が切れた人形のようにノインの体がハルユキの腕の中で崩れ落ちた。

一瞬の、嫌になるほどの沈黙。

「え、あ……」

膝から崩れ落ちそうになっているミスラの口から、感情だけで意味を持たない言葉が零れる。

「やり過ぎたな。こりゃ死んだか」
「――き、貴様…、貴様ァッ！！！」

なんでもない風に言うハルユキの手に握られたナイフにはべっとりと赤い液体がこびり付いていて、ノインはピクリとも動かない。

ぶらん、と力がない手が空に揺れる。

「よ、くも…！　よくもよくもよくもぉッ！！」

怒号と共に迫ってくる刃を避け、バックステップ。

歯を怒りで噛み締めながら怖いほどの沈黙で、怒号の変わりに鬼のような表情で振り下ろされた篭手の一撃を百メートルほど一気に跳び下がって避ける。

篭手の着弾地点は、粉々に粉砕していた。

「ギィ、乗せろ」

暴れていない事で現状を察していると判断して、いつの間にかそこに居たギィに意思を伝える。ギィは低く唸って、素直に背中を差し出した。

百メートルの距離を数秒で接近してくる二人とその後ろから同じ

ように怒りに染まって迫ってくる兵士達を嘲笑うかのように空中に躍り出る。

王女を人質に取っているこの状態で空中というのはもう殆ど絶対安全地帯となっていた。

それを確認して、ハルユキはぐったりしているノインに向き直った。

◆
◆
◆

「おい、起きろ」

肩を揺らされ、聞き覚えのある声に誘われて目を開ける。

そこが空中だったことには驚いたが、後からハルユキが支えてくれていたのでバランスを崩すことはなかった。

「……あれ、私、刺されて…」

腹に手を当てると、確かに赤い血がべっとりとこびり付いているが、傷らしい傷は何処にも見当たらない。

不思議そうな顔をハルユキに向けると、ハルユキは小さく笑いながら手に持ったナイフを自分の手に垂直に押し付けた。

小さく、へこっと馬鹿にしたような音がして刃が柄に沈み、刃からほんの僅かに残った血糊のような物がピュッと飛び出した。

馬鹿じゃないのかこの男は。

「まぁこんな玩具はどうでもいいとしてだ。見てみろ」

嫌に面白そうな目につられて、視界を下に落とす。そこでは集まりに集まった兵士達が右往左往していた。

「…あらあら」

思わず呆れたような声が出たのは仕方がない。

下では何とかこちらの高さに対抗しようと様々なやり方で兵士達が自滅していた。慣れない飛行法を編み出して、明後日の方向に飛んで行った者もいる。

「まぁ、今お前はほぼ瀕死だと思われてるからな。ああなるだろうな」

少し心配になってきたところに、ハルユキが後で口を開いた。

「今お前は超弱者、何しろ瀕死だからな。でも躍起になって助けようとしてくれてる。お前の力が好きな様な奴等はあんな馬鹿なことしない」

むしろあの中の誰よりもぴんぴんしているのだが、それはあちらには分かりようもない。

皆馬鹿みたいに必死な顔をして、恐ろしい声を上げて。

「なぁ、そろそろ気付けよ。お前を見てくれる奴なんて探すまでも無いんだよ」

「……生意気よ。馬鹿のくせに」

この期に及んでそんなことを言って貰わなくても、あれだけお膳立てされていれば、馬鹿じゃないんだから。

ああ分かっているとも。

私はどうやら、幸せ者だったらしい。

「弱いなら弱くていいんだ。でもそれを受け止めるのは、力は伴わないがやっぱり強さだと思うぜ？」

軽くなった心の中に偉そうな言葉が染み渡っていく。

「……そう、かな」
「そうだよ」

何の疑いもなく確信に満ちたその声はやっぱり力強かった。

「ま、結論は、だ」

グリッと力強く後から頭を撫でられた。

「お前頑張りすぎ。もっと力抜け」
「…適当ね」
「いいんだよ、それぐらいで」

ポン、と軽く頭を叩いて体を離すと、ギィから身を乗り出して殺気だった兵士達が蠢く地上を見下ろした。

「さて、こっからどうすればいいかな…？」
「お縄につきなさい」
「これ下りたら斬り殺されないか？　俺」
「悪いことしたらごめんなさい、でしょ？」

そんな玩具まで使って、悪ふざけをするからだ。

まぁでもそれは私のためにやってくれた事だけど。

困りきっている顔を楽しみながら、頑張ってくれているギィの鬣を優しく撫でた。

「ギィ…！？」

その表情を見てやばいと思ったときにはもう遅かった。

どうやら長時間二人を乗せているのは流石にまだ厳しかったらしく、ギィが小さく呻き声を上げバランスを崩した。

「あ…」

グルン、と世界が回って体が無重力の中に放り出される。

落ちていると気付いた時には地面まであと十五メートル。拙い、と炎を展開させるが、体が安定しないため、上手く停止が出来ない。

ぶれる視界にこちらに手を伸ばすミスラとガララドが見える。しかし変に炎を展開したためか、落下地点がずれ、とてもじゃないが追いつけないだろう。

あっという間に、あと地面まで2メートル。

「ノイン！！」

聞こえたのは、言い慣れていない名前を呼ぶ声。

ああ、そう言えば。

あいつが私の名前を呼ぶのはこれが初めてだなあ、などと気の抜けた事が頭に過ぎった。続いて何かが爆発したような音が聞こえた。

地面が迫って迫って迫って、地面からほんの一メートルないというほどの所で、体が何かに捕らえられた。視界が何かに覆われ、次の瞬間にはどんと強い衝撃。

その後も何度か衝撃が続いた後に動きが止まり。

そこでようやく自分がハルユキの腕の中にいることに気付いた。

「ハル…？」

地面を何度もバウンドしながらようやく勢いが死んだ所で、体の下のハルユキにノインが話しかけた。

しかし、目を瞑ったままピクリとも動かない。

「お、起きなさい…！」

あの爆発した音は何だったのか分からないが、恐らく加速をした時の音。先に落ちた自分を追い抜くほどのスピードで地面に激突したのだ。

見れば、初めに衝突した所の石畳が粉々に粉砕されていた。

普通の人間ならぐしゃぐしゃになっている。

それを証明するかのように、ドロッと、ハルユキの頭の下から赤い液体が流れてきた。

「あ、貴方が死ぬわけないでしょう…？　ねぇ早く、起きなさいよ…！」

助かる訳がない。ほんの僅かに残った冷静な部分が助かる訳がないと心に囁いてくる。

「起きなさいよ…っ！」

「……頭痛いんだから、耳元で喚くな…」

うっすらと目を開けたハルユキが、安心させるように私の頭を撫でる。

ノインは安心しすぎたのか体の力までもが抜けてしまって、意図せずハルユキの体の上に崩れ落ちた。

「痛いんだが…」

「うるさい。こっちは寿命が縮んだわ」

そう言いながらもノインは体を起こさない。心臓が間違いなく動いているのが頬から伝わってくる。温かい体温が生きていることを教えてくれる。

「ねぇ」

別にこのタイミングに意味があるわけじゃなく、ただ、今言いたかった。

ん？　と怖々とした表情の間々こちらに向き直ったのを確認して、

「ありがと」

色々と自分なりに気持ちを込めてその言葉を送った。

「…ん、お、おお」

言われ慣れていないのか、いやと言うより私が言った事が予想に反したのか、照れ臭そうに頬をかきながら私から目を逸らした。

全く子供なのか大人なのか分からない人だ。

「あっちの奴らに言ってやれよ。喜ぶぞ」

「言うわよ。でも今は貴方に言うべきでしょう？」

「……あっそ」

素っ気無く答えて逸らす顔が、たかがこんな事にこそばゆそうな

顔で、その顔をもっと、私の事でもっと照れさせてやろう、と。

そう思ってしまったのがきっと駄目だったのだ。

「――ねぇ、…私が、あなたのことを好きだって言ったら、どうする？」

口走ってしまってから正気に戻り、慌てて口を噤むが当然間に合うわけもなく。

大人しく腹を決めて返ってくる言葉を待った、…それなのに。

「この状況でそんなことを言う裏を考えざるを得ない。そしてとりあえず印鑑隠す」

冗談だと受け取られたらしく、苦笑しながらそう言い返してきた。これまでの関係を考えれば何も間違ってはいない。

しかし今はそれが、心をささくれ立たせる。非常に我侭なことだと思うが。

ささくれの影響を受けて、多分生来のものだと思われる負けず嫌いと悪戯心が、むくむくと膨らんでいくのが自分でわかった。

ハルユキの頬に手を添えて、やんわりと此方を向かせた。

頬についた血が手を濡らす。

近付くハルユキの目の中に私の目が映っていて、ハルユキがしっかりと私を見ていてくれている事を確認して。

そのまま唇を重ねた。

「……っん…」

数秒唇を合わせた後、ゆっくりと離して、

「――貴方のことを、お慕いしております」

しっかりと、目を逸らさずにそう言った。

ここまで懇切丁寧に言って伝わらなければ殺してやろうとも思ったが、どうやら流石に伝わったらしい。ハルユキの顔が馬鹿みたいに驚いていたのが面白かった。

「これで、どうかしら…？」
「お、おま、え？　あ、…え？」

「…そ、そんなに照れないでよ」
「あ、ああ、すまん」

自分でやった事だが、ハルユキが固まって何だか気恥ずかしさを見せ始めたのがどうにも拙かった。

この男が慌てふためいているのは、自分のした事がとんでもなく恥ずかしい事のような気にさせる。しょうがないので、以前のように思い切りハルユキを睨み付けてお茶を濁した。

「…じゃあね、あれよ。結局依頼の飛竜じゃなかったから十六戦目は実質引き分けよね？」
「あ、ああ」
「でも私は貴方の言うことを聞いて、洞窟に入ったわよね？」
「そうだ、な…？」

ハルユキが戸惑っている間にどんどんと話を進めていった。そうしないと恥ずかしくて死にそうだった。

「だから私の言うことも一つだけ聞くべきだと思わない？」

最早ハルユキの返事を待たずに言葉を繋げていく。

「だからね」

だから…？　だから、だから？　だから。

別に好きだからといってこれまでと何も変わらないし、私は王女としてこの町にいなければならないし。

これ以上、何も言うことはない。見切り発車で口を開いていたことをいまさら自覚する。

しかし、結果として私は、一瞬間を空けただけでとんでもない事を口走っていた。

「だから貴方、私の夫になりなさい」

ハルユキの顔も戸惑いで一色だったが、私の顔も多分真っ赤に染まっていた。

「ノ、ノイン様……？」

そして一部始終を見ていたミスラを始めとした城の人間達の存在に気が付いた。

それから三日ほど、王女の私を遠まわしにからかい続けたのはまた別の話。

周りには兵士達。下にはハルユキがいて、割と正気に戻った私の精神ではその辺りに視線を送ることは出来なくて、そうしたらもう目を瞑るか、空を見上げるしかなかった。

見上げた空では楽しい夏が始まるとでも言いたいのか、入道雲がむくむくとふくらんでいた。

因みにハルユキはその後流石にお咎め無しにはならず、反省を促すために丸一日牢に入れられていたそうだ。

王女の憂鬱・下（後書き）

感想アドバイス等、いつでもお待ちしております。

本編は１１月から開始します。

不和（前書き）

再開します。
少し少ないかも

不和

燦々と降り注ぐ日光の中を、夏用に新調した簡素な服の裾を揺らしながら町の中心へと向かっていた。

町は相変わらず騒がしさを加速度的に増していて、来たる祭日への期待を増幅させる。進行方向上に人が途切れているところが殆ど確認出来ないほどだ。

その人の波を超えた町の中心には当然のように城が鎮座していて、今となってはユキネが好きに出入りできる類の場所ではない。が。

今はその城だけを目指して足を動かし続けていた。

「何でいきなり捕まってるんだ、あの馬鹿は…！」

昨日の夕方頃、いきなり宿に城の近衛隊長の女性が現れ、困ったような顔でハルユキを王女誘拐の現行犯で拘束したと通達してきた。

最初は戸惑ったものの、王女の希望もあって一日だけ牢で反省しただけで解放されるそうなので心配が抜け落ちれば残っていたのは、ただ呆れだけだった。

「あれ程心配させるなと言ってるのにあの馬鹿は…！」

一日経ってみると、今度はそれが憤りに変わっていた。

とりあえず一発引っ叩いてやろうと思う度に、地面を踏む力がどんどん力が強くなっていく。

フェンは唯一のCランクだから仕事は外せないし、ジェミニはその手伝いだから無理。

シアと、それになんとレイも酒場でバイトを始めたらしい。昨日から働いているそうで、シアが面倒くさがるレイを引きずるように酒場に引っ張って行ったので間違いないだろう。

どことなく、シアは雰囲気がイサンに似ていると思った事がある。

レイがシアに逆らいにくいのもそのあたりが起因しているのかもしれない。

家に帰るまでが反省だとも思い、放っとくかとも思ったが、レイに上手く乗せられてしまい結局ユキネが一人で迎えに行っているという訳だ。

「…こうなったら何か昼食でも奢らせよう、うんと高いやつを」

そしてついでに少し買い物にでも付き合ってもらう。

せっかくの祭りなのに、まだまともに町を回ってもいない。聞けばハルユキは闘技大会に出場するらしいし、何時また一緒に回れる

機会がくるか分からない。

…いや別に一人で回っても構わないのだがレイも一緒に回ってやれとか言ってたしやっぱり乗せられただけかもしれないけど。

まあ、あまり考えすぎるのもよくない。

「しょうがないな。全くしょうがない」

多分面白半分でレイに焚き付けられことは何となく分かっていた。

相変わらず日差しが熱いし。心配ばかりかける馬鹿に、いらついていた。

でも心なしか足取りは軽かった。

少し矛盾しているかもしれないが。

別にそんな事、たった十六年の人生の中でも山のようにありふれた事だ。

そう感じるのだからしょうがない。ただそれだけ。

「む…？」

そんな事を考えながら歩いていると、いつの間にか進行方向に団

子のように固まった人込みが立ち塞がった。

周りも、それはすごい人だが目の前のこれはすこし毛色が違う。と言うより何か催しでもあっているのだろう。

仕方がないので、迂回して回り道をしようと足を横に向ける。

「うわッ…！？」

横から気配を感じそちらに顔を向けた瞬間、後ろから何人かの人間がユキネごと人垣の中に割り込んでいった。

「ちょ、あの…！」

一旦入り込んでしまうと、前に前に行こうとする群衆に押し流されてさらに奥へと進んでしまう。

やっと落ち着いたかと思った時にはもう群集のど真ん中で、もう遭難したと言っても過言ではない状況だった。

しかしこの辺りからは町の中心の方向にゆっくりとした人の流れが出来ているようで、自然に足を進めればいずれ脱する事が出来そうだった。

あらかじめ早めに出てきてしまったし、そんなに急がなくてもすれ違うこともないので、ゆっくりと流れに身を任せることにした。

そうやって落ち着いて、初めて周りの人達が歩くには不自然な方向を一点を見ていることに気付いた。

それにならうようにその方向に顔を向けると、まず見えたのは何やらいかにも急造したような質素な壇と、その上に兵士が二人。

その間で守られるように展示されていたのは古びた洋剣。

鞘に入っていて刀身は見えていないが、相当歴史のある剣だと伺うことはできた。

周りのざわめきを聞いて、まとめるとつまり今度の闘技大会の優勝者に贈られる粗品だそうだ。

「……？」

それを見たのは五分にも満たない時間だったが、それからしばらくの間何かが噛み合ってない様な不自然な感じがこびり付いて離れなかった。

◆
◆
◆

「シャバの空気は美味い…」

ハルが、迎えに来たユキネの顔を見て初めに言ったの言葉がそれだった。

「何だそれは」

「お約束ってやつだ気にするな。それよりわざわざごめんなユキネ」

それはいいけど、と言おうとして、そういえば一発殴ると決めていたのを思い出し、しかしもうどうでも良かったので結局そのまま口に出した。

その後一言二言言葉を交わしながら城門をくぐった瞬間、ハルユキ溜め息をついて肩を落とした。

「ハル？　どうかしたか？」

「……何でもないよ。ああ何ともないとも」

何処か困ったように城を見上げると、直ぐに前に向き直った。

もう日は完全に昇りきっていて、時間でいえば1時ごろだろうか。
往く先には、嫌になるくらい降り注ぐ日光の中で忙しなく町人が蠢いている。

この暑い中を歩いて戻るのは考えるだけで少し億劫だ。

「…なあ、ユキネ」

城に架かる橋を渡り終え、騒がしい町並みをぼーっと眺めながらハルユキがおもむろに口を開いた。

「お前ってさ、好きな人っているか…？」
「…は！？」
「いや、好きな男。人間としてとか友達としてではなく」
「い、いない！　いるわけないだろそんなの！」
「…別にそんな必死にならなくてもいいよ」

ハルユキはそれを聞いた後、前に向き直って一瞬難しい顔になり、そしてすぐ困ったような顔になって、溜め息をつき肩を落とした。

先程の言葉がどういう意味なのか把握しかねるが、まさか、いやでも。

知らず知らずにユキネがうんうん唸っていると、ハルユキはそれを見て苦笑し額から皺を取り去った。

「……よし。飯食いに行こうぜユキネ」

そして何を思ったのか、突然そんな事を言い出した。

「…お金はあるのか？」
「一食分ぐらいはあるよ」
「皆は？　どうやって呼ぶんだ？」
「二人でだよ。金は二人分がせいぜいだ。それにこれは迎えに来てくれたお礼だからな」
「ふ、二人か。そうか…、うん」

至って予定通りなのだが、どうしてこんなに緊張するのかと自問してみると、そう言えば二人きりでまともに食事をするのが初めてだという事に気付く。

自覚すると緊張ともなんとも言えない妙な胸の高まりが大きくなってきた。

「ど、どこに行くんだ？」
「高い所行くぞー。期待しとけー」
「あっ待てハル。お前すぐ迷子になるだろっ」

早足で行ってしまいそうになるハルユキの手を捕まえようと手を伸ばす。

そして追いついた瞬間ハルユキが歩を止めた。

「……よしユキネ。お前店に着くまで自分の耳塞いでてくれ」

「え…？」

いきなり何を言うのかと顔を向けてみれば、ハルユキが額に汗してぎこちない表情をしている。

そしてその顔の理由は耳を塞ぐのを待たずに、すぐに聞こえてきた。

「なあ、知ってるか？　王女の話」

「ああ何か街のど真ん中で愛の告白して求婚してって話だろ？」

群集の喧騒を抜けて、本来なら聞こえる筈もないようなほど離れた場所から話し声が聞こえてくる。

「確か相手はあの黒髪で、今年の”憑物”の奴だろ？」

「んぁ？　俺はその男のほうから抱き付いて唇奪ったって聞いてたけど？」

その内容は余りに真っ直ぐにそして余りに不自然にユキネの耳まで届いて、思わず真偽を疑わせた。

そう言えばそれを思わせるような事を先程ハルユキも言っていたな、と、心のどこかのほんの一欠片だけが納得する。

それでも、信じたくないと思う大半の部分が、ハルユキの方に向き直らせた。

「…ハ、ハル？　あれはお前の事、じゃないよな…？」

ひょっとしたら顔が引き攣っていたかもしれない。青くなっていたかもしれない。本当にもしかしたら泣きそうだったかもしれない。

何しろ視線の先でハルユキが少しだけ何かを思い出したかのように頬を赤く染めながら、照れ臭そうに頬をかいていた。

「だから耳塞いでろって言っただろ…」

ユキネにできるだけ目を合わせないように視線を適当に巡らせている。その様子がどうにも歯痒い。

「……け、結婚するのか！？　ま、待て、そういうのは簡単に決めちゃ駄目なんだぞ！　ハル！　聞いてるのか？！」

自分でも訳の分からないことを口走っているのは分かっていたが、何か話してないと、目線を外したままハルユキが何処かに行ってしまいそうな気がして、言葉を止めるどころか無意識のうちにハルユキの方に手を伸ばしていた。

「いやだから…。結婚なんてそん……な…」

何の前触れも無しに、ハルユキの目線がある所で不自然に停止して目が見開かれた。

「…ハル？」

そこで漸くハルユキの表情が余りにもおかしい事に気付いた。別に噂に頬を赤らめさせているわけではない。そんなことは眼中にも無いといった感じで、ただ人垣を超えた遠くを凝視して、耳を澄ましていた。

その表情はまるで迷子の子供が親を見つけた時のように、今までの不安と溢れてくる安心がごちゃ混ぜになっているような表情。

足は完全に止まり、馬鹿みたいに顎が落ち口が半開きになり、雰囲気はあの桜の森で剣を手にした時と同じ雰囲気。

そして限界まで見開かれたその目は、今にも涙が零れそうにさえ見えた――。

「ハ……！」

「――悪いユキネ。昼飯はまた今度だ」

早口に事務的にそう言うと、人垣を目にも留まらない速さで跳躍し、何処かに消えた。咄嗟に伸ばした手も空を切った。

意識を乗っ取られたかのように、ハルユキが向いていた方向に首を向ける。

そこには先程も見かけた骨董品ともいえる剣が静かに鎮座していた。

古びた鞘に、それに納めてある同じように古びた剣。〝舞武〟の覇者に贈られる聖剣。

周りの噂に心を掻き回されたまま、ハルユキが初めて見せた余りにも〝らしくない〟表情に頭が迷走したまま。

独り、広大な町の中に取り残された。

不和（後書き）

感想アドバイス等お待ちしてます。

寂寥（前書き）

推敲できなかったので、誤字が多いかも…

「じゃあ、メニューのここからここまで」
「え…？」
「を二つずつ」
「ええ！？」

素っ頓狂な声で仰天する店員が恐る恐る注文を持って行き、その十分後には全てではないが料理が運ばれてきた。

それだけでテーブルは埋まってしまった。

「…多い」
「馬鹿、お前そんな事言ってるから大きくなれないんだよ」
「……なってる」

言いながらフェンはさりげなく目を逸らす。

「いやそれにしても多いやろ、これ」
「今日でCクラスに上がったからな。景気付けだ」
「シア、塩をくれるかの」

シアは手元の塩をレイに渡すと、自分も料理を眺め始めた。

「はよ食べんとなくなるで？」

あっという間に机の上の食べ物が無くなっていく。量も早さもダントツでハルユキが食べまくるので、周りのテーブルで呆気に取られている人間もいる。

その食べっぷりをじっと見ている人間が同じ机の中にもいた。

コトン、と箸を持ってもいないユキネの前に、シアが適当に取り分けた料理を置いた。

「あ、ああごめん、シア」

言葉の変わりに小さく笑うと、シアも自分の皿の前に座りなおした。

ユキネは皿の上の料理をゆっくりと口に運びながら、何時も通り凄いスピードで食べ物を口に運ぶハルユキをそっと盗む見る。

美味しそうに大量の料理を頬張り、レイと喧嘩し、フェンに呆れられ、ジェミニとシアに笑われながら。

いつも通り。

そう。

いつも通りだった。

「ご馳走様。」

気付けば、机の上に料理は無くなり、残るのは各自が皿に避難させた料理だけになっていた。

味はあまりしなかったが、何となく残った料理を口に運ぶ。

「さて、と」

「……どうしたの？」

「さすがに食べ過ぎた。腹ごなしに散歩してくる」

あれだけの量の料理を含んでいるとは思えない、ほんの少しだけ膨れた腹をさすりながらハルユキが立ち上がった。

思うようには食べれなかったのかレイに何かつまみになる物と、ジェミニに酒をお使いされ、渋々ながらそれを受け、店を出て行った。

「――さて」

先程まで緩かった雰囲気がレイの声で一変した。

「…何か、あったの？」

フェンも何か思う所があったらしくレイの言葉に割り込んで口を開いた。

「…別に、何もないよ」

「どうせまたハルユキの事なんやろ？　さっさと行ってき」

「…うん、ありがとう。でも本当に、私は何でもないんだ」

そう言って席を立ちぎこちなく笑うと席を立つ。

「私も腹ごなしに行って来る」

そのまま、ユキネはその場を後にした。

「”私は”、ね…」

ユキネが姿を消した後、溜め息混じりにレイが呟いた。

「やはりおかしいのは、もう一方か…」

意味がよく分からなかったのかシアが首を傾げた。
それは多分意味が分からないという事を示していたが、レイがほぼ同時に自分の疑問を口に出していた。

「そう言えば、シアはもうあの鉄片はつけんのか？」
「道具に頼っとたら何時までも声は出らんから、やて」
「案外根性据わっとるのー…」

そう言って、レイが食後に運ばれてきたお茶を一口啜っている間に、ジェミニが軽い口調でシアの無言の問いに答えた。

「別に理由がある訳じゃあらへんよ。ワイやフェンちゃんはもう結構一緒におるから、何か変やなって分かるだけや」
「…何となく」
「そうそう」
「儂は勘じゃがな。と言うかそんなにお主等は長い旅をしておったのか？」
「いや、時間はそれ程やけどね、密度が半端無かったわ…」
「……厄介事、ばっかり」
「あー…、心中お察しする」

レイが珍しく同情の意を表し、シアも苦笑いしている。

ユキネの町から始まり、ドンバ村、セシ村の桜の森、この町に着いてからは麻薬騒ぎや奴隷問題。

「ま、あれは放っておいても自分で解決するじゃろ」

ずず、と音を立ててレイはお茶をもう一口、口に含む。

「私は、様子見てくる」

自分が食べた分の皿を重ねて一つに纏めてから、フェンも席を立つ。

一度外に出てから少し周りを見渡して、ユキネの後を追っていった。

「若い奴らは勢いがあっていいのぅ…」

「いや、全く」

和み始めた二人にどう対応していいか分からなかったのか、空になっていたレイの湯呑みにお茶のおかわりを注ぐ。

「……この気遣い上手を嫁にしたいんだがどうじゃろうか？」
「お父さんは許しませんよー」

◆
◆
◆

気が付くとまたここに来ていた。

目の前には舞武の優勝者に贈られる副賞が展示された壇。

最初の2、3日こそ、人の海が出来るほど人間で溢れていたが、今となっては立ち止まってまで眺めている人間は数えるほどしかいない。

ハルユキも同じように壇の目の前で足を止めて壇上に視線を送った。

そしてそれが視界に入ると、それ以外の全てが視界から薄らいで消えた。

展示している壇も、その上に乗って警護していたはずの兵士も壇の周りの道行く人間も、全て意識の外。

このまま、走ってあれを奪ってどこか遠くまで逃げてしまえない

だろうか。

そんな考えが幾度と無く頭に浮かび、次の瞬間には宿に居るだろう5人の顔とここで知り合った奴らの顔が浮かんできて、少しだけ壇上から視線を逸らしてその考えを振り払う。

そんな事を延々と繰り返している。

何をする訳でもなく、何か違う事を考えるわけでもなく、ただ目の届く所に居続ける。

そうしていると、嫌でも思い出すものがあった。

それを腰に携えていた時の事と共に、芋蔓式に埃を被っていた記憶がその薄いベールを脱いでいく。

正直辛いことばかりだったし、戦場を駆けた事も一度や二度ではない。

でも大切だった筈のものも確かにあった。

記憶が埃を脱ぐ度に、ほんの少しだけ香ってくる昔の空気が懐かしすぎて、少しだけ恋しくて。

気が狂いそうだった。

（…懐かしいか）
「……九十九か。そういえばいたんだったなお前。幾らなんでも寝過ぎだろ」
（殆んど起きてたさ。ただ俺は寡黙なんでね）
「そうかよ」

こいつからも昔の匂いはする。

しかしどちらかと言えば硝煙や爆薬の匂いで不快感しか得られない。

春雪自身、と自分で言うだけの事はあるだろう。

（まぁどっちにしろあと数日で手に入るんだろ？）
「明日、武道会に参加登録して、その数日後に優勝出来ればな」
（……ほぼ確定じゃねぇか）
「もしそうじゃなかったら、手に入れるために動いてるさ」

それきり会話は無くなった。

今度は本当に寝てしまったのか、それとも本当に寡黙なのか九十九の方から言葉は返ってこなかった。

ふと、コツコツンと左右の足音が微妙に違う奇妙な足音が近付いて来ていることに気づいた。

「何じゃ坊主。お主も舞武に出るのかいな？」

その足音はハルユキの真横で止まると、年老いた口調でそう声をかけてきた。

その風体は声の通りかなりの老いを感じさせる。杖を突いていて、片足を半ば引き摺るように歩いてきたのが見て取れた。

「どうしてそう思うんだ？」

「あれは確か舞武の粗品じゃろう？　そのように穴が開くほどに見つめていればそう思いもする」

「ま、当たりだけどな」

「優勝する気かの？」

「そりゃなあ」

「ふむ、気概は買うが今回はタイミングが悪かったな」

ぶつぶつと一人で喋り始めた爺から、壇上に視線を戻した。

するとどうも、今日は展示を止めるらしい。もうあまり見ている人間もいないのでひょっとするともう展示されない可能性もある。

次に見るときは手にする時だと、しっかりと見ておこうとして目を凝らす。

「ハル？」

その時また背中から、今度は声が聞こえた。

◆　◆　◆

「おお、ノインじゃないか。久方振りじゃのぅ」

「……爺？　…やっと帰ったのね」

「そんな事よりほれ。良さ気な若者がいるぞ。兵士にすれば中々のものになるぞぃ」

ノインはその言葉を聞いて、キョトンとした顔を見せた後どういう事？　と目線だけで聞いてきた。

そんな事を聞かれてもハルユキにも分かるわけはなく、肩をすくめて意思を示した。

「時にノインよ。お主そろそろ身を固めよ」

「またその話…」

「馬鹿者。王家たる者子孫を残さずしてどうする。いい男を選んできたからの。明日にでも顔を合わせたらいい」

それもまたいつもの事なのか、溜め息混じりに頷くと不意にこちらを見て、ニッと嫌な笑顔を見せた。

「会うのはいいけれど。そこの男より弱かったら話にならないわよ。爺」

「…何じゃと？」

訝しげにこちらを睨みつけると、何を思ったのか笑い出した。

「ふざけておるのか？　確かに雰囲気だけは一流だが魔力の欠片も感じんぞこやつ。とてもじゃないがこのままじゃあ…」

「その男に勝った人間となら結婚するって言ってるの」

「……何と？」

「その男は、今の所私の夫第一候補って事」

基本的に無視して、壇が城の中に消えていくのを見守っていたのだが、ここまで話が進めば流石に黙っていることも出来なくなった。

「おいその話は断っただろ。俺は王になんかなりたくねぇよ」

「…旅を続けたいからでしょう？　満足したら帰って来て」

「……のう、お主」

おもむろに爺がハルユキの右腕を取った。

視線が交錯し、しばしそのまま硬直する。

不意に右手を伝わるように波紋のようにハルユキの体に何かが伝わった。

「合気、いや柔（やわら）、か」

「ほっ、成程。こりゃとんでもないのがいたの」

騒ぐ騒ぐ、と笑いながらハルユキを見上げる。

「ノイン、今年もお前参加するのかの？」

「そのつもりよ。借りを返さないといけない人間が居るし」

成程成程、と小さく笑いながら爺は二人に背を向けた。

「爺。また城には泊まらないの？」

「連れを待たせておるし、――儂はあそこに足を踏み入れる資格が無いよ」

少しだけ曲がった腰で、まだまだ賑やかな人ごみの中に消えていった。

「…お前何でこんなとこに居るんだよ。また俺が牢に入れられるだろうが」
「今日であの剣の展示は終わりだから様子を見に来たのよ。貴方がいるとは思わなかったけど」
「まぁ、いいや。あいつら待たせてるから俺はもう行くぞ」
「ええ。私も仕事が溜まってるわ」
「程々にな」
「……”舞武”では覚悟してなさい。油断してるとぶっ飛ばすから」
「はいはい」

相変わらず勝負は続くらしい。何かよく分からない視線を背中に感じながら、ハルユキも元来た道を戻っていった。

◆
◆
◆

「ユキネ、知ってたの？」
「…結婚の事か？　知っていたがそれはいいんだ。い、いや良くは無いけど、気になってたのは……って、フェン。何時から居たんだ」

決してハルユキを追って来た訳ではない。

しかしたまたまハルユキの跡を辿る形になってしまったのか、ハルユキとノインが談笑している場面にたどり着いてしまっていた。

我慢できずに立ち聞きしていたユキネの背後にいつの間にかフェンが立っていた。

「結婚のことは、私も前から知ってた。ここに来たのはさっき」

簡潔に短く答えると、視線は去っていくハルユキとノインに向けたままユキネの横まで移動した。

「……この前ガラドって人が言ってた奴もあの娘だよな」

「そう、だね」

視線の先ではノインが兵士に一言声をかけてからさらにフードを深く被って人ごみに紛れていく。

その後先に口を開いたのは、普段無口なフェンの方だった。

「…私も闘技大会、出ようと思う」

「え…？」

そのままフェンはまた黙り込んでしまった。

闘技大会。

フェンは元々どうしてこんな所で燻っているのかと言うほどの逸

材だ。

自分の力を試したいと言うのは決しておかしい事ではない。

しかし多分そんな好奇心から来る言葉ではないことが何となくユキネには分かっていた。

そもそもこうやって自分の意思を分かりやすく言葉にすることだって昔のフェンから考えれば珍しいなんてものではない。

フェンとは長い。仕草も声も表情も、全て見慣れたもの。

「……変わったな、フェン。いや、悪い意味じゃなくて」

「そう、かな…」

それは多分、どちらかといえば成長したと言うのだろう。

昔は今より更に無口で、最初の頃はそれこそ人形のように静かで、いつもユキネの後を何も考えずに付いて来るような時間を送っていたのに。

いつの間にか、ユキネの前を歩くほど大きくなった。

「私は…」

それが何処か寂しくて、それでも嬉しくて、そして。

不思議ととても悔しかった。

「私”も”闘技大会、出てみようかな…」

体の中に自分を動かすものが見当たらなくて。

何かに引きずられる様に、そう零していた。

寂寥（後書き）

感想アドバイス誤字脱字報告等、ありましたらよろしくお願いします

一目惚れ

「志貴野春雪。舞武にエントリーしたい」
「了解致しました。ではこちらを。登録番号になります。試合の時に受付にお渡し下さい」

闘技場の前で受付に名前を言って、一枚だけ渡された書類に自分の名前をたどたどしくだが書き込んだ紙を渡し、受付から番号が刻まれた木札を受け取った。

刻まれた番号は６６６。

受付開始の一日目にしてこの番号という事は出場人数は１０００人などと言わない数になるだろう。

現にハルユキの後にも結構な人数が長蛇の列を成している。

「おい、ガキ。終わったんならさっさと退け」
「…ああ、悪いな」

ハルユキは、後ろから聞こえた罵声に体を退けた。

体を割り込ませるように入ってきたのは、身の丈３メートルはあるかと言うほどの大男。

割と前から思っていたことだが、この時代の人間は一億年前の人

間とかなり違う部分がある。

基本的に身体能力は一億年前の人間と比べたら高すぎるのだ。その辺に居る一般兵士がトップアスリート以上の身体能力を持っていると言ったらわかりやすいだろう。

他にも、この男の様に背が2メートルを有に超える者や、腕が異常に長い人間などもギルドでちらほら見かける程だ。

恐らく魔力による影響だと考えられるが、そもそも魔法が使えるようになるまで生態が変化しているのだ。そう考えれば不思議な事でもないのかもしれない。

「ちょっと待てよ。割り込んでんじゃねぇぞ、ウド野郎」

問題を起こすのももう飽き飽きなので、黙って帰ろうとしたところで、違う所から声が上がった。

「俺が並んでただろうが。順番くらい守らんかい」

しかし、声の主が見当たらない。

「ああ？　誰か何か言ったか？」

大男がそこら中にガンを飛ばして威圧的に辺りを見渡すが、先程の声の主は見つけられないのかきょろきょろと辺りを見渡している。

「ここじゃボケェッ！！」
「ぬぉッ！」

大男がしゃがみこんだのを目で追って、漸くその存在を確認できた。

「このッ！　って、はァ…？」

一言で言えばそいつは。

小さかった。

「……お前、何歳だ？」
「十五じゃ！　文句あんのか！」

ぼさぼさとした短い金髪にだぶだぶの服。幼い割に整った顔立ちの中、切れ長の眼が男の顔面を臆せずに睨み上げる。

「帰れ！　ガキが来る所じゃねぇんだよ！」
「んだとォ…！？」

「はい、そこまでですよ、アキラ君」

とん、と両者の肩にゆっくりと手が置かれた。

「離せ、ガネット！　こういう奴には一発どついたらんといかんわ！」

今度出てきたのは肩に手を置く子供とは対極のような男。身長１８０ｃｍほどの体格に真っ直ぐ伸びた茶髪が肩まで届いている。

さりげなくかけた眼鏡はどこと無く胡散臭さを漂わせていた。

「またあの翁に怒鳴られますよ。それと、我々の登録はもう済ませてあるそうです。帰りますよ」

「離せやぁ！！」

「しょうがないですね。では私が先程見つけたとっておきの幼女を紹介しましょう。それでいいですね」

「いい訳あるか変態がァ！！」

結局、アキラとか言う子供はガネットとか言う男に小脇に抱えられ、歩き去っていった。

何やら印象的な二人だったが、まぁ関わり合いには絶対にならない方がいい、と本能が訴える声に従って宿に続く道の方に足を向ける。

そして。

「お、おぉ、おおおおおぉ…！　嗚呼、天にまします主よ！　此処に最大の感謝と感激を！　ああぁあぁああ、素晴らしい…！　正に穢れを知らぬ天使そのもの！　これほど麗しい存在に今まで出逢った事があっただろうか?!　いや、ありはしない!!　見ているだけで心が洗われるような美しさ！　あどけなさ！　凛々しさ！　そして幼さ!!　――お嬢さん、お名前を伺っても構いませんか？」

「……気持ち悪い」

三十m進んだところで、見知った面子と関わりたくないと宣言したばかりの面子が何やら見過ごせない事態に陥っていた。

「……何やってんだ、お前ら」

「…ハル」

「闘技大会の、登録」

「二人とも、出るのか…？」

「力試し」

「……まぁ、気ィ抜かずに無理せずにな。…んで、どうしたユキネ。何か大人しいな今日は」

「…いや、別に」

「……まぁ俺が聞きたいのはこいつらが何なのかって事だが」

フェンの前で跪き、愛を語っている男は1分前に会った眼鏡で間

違いないだろうが、どうも先程とテンションが違い過ぎる。

「帰ろうとしたら、いきなり、絡んできた…」

再び眼鏡の男に目を向ける。

「見たところアキラ君と同じか少し下ほどでよろしいでしょうか、いやしかしこの落ち着きは十五歳ほどか？　しかしそうだとすると十五にして十二の神聖を保っているというのか！？」

「…ちょっと本気で気持ち悪いなこいつ」

「…おや？　ああ、失礼。少し目の前の奇跡に我を忘れていたようです。して？　貴方は？」

「まあ…こいつらの保護者みたいなもんだ」

フェンとユキネから保護者という言葉に対する苛立ちが篭った目線が送られるが、それを無視したのかそれとも気付かなかったのか、ハルユキの視線は前を向いたまま。

「そうでしたか。――ご安心を。娘さん達は私が幸せにします故」

「私も入ってる！？」

「大丈夫ですよ。このままにしておけば至る所が育ってしまう恐れがありますが、しかしッ！　私が毎日毎日穢れを洗い流して差し上げましょう、無論この両腕で！」

「…き、気持ち悪い…！」

…なんて純度の高い変態だ。

しかも、大声でとてつもない事を喋り続けているものだから、周りから視線が集まってきている。

それも当然のことだが、何か汚いものを見るような目が。

こいつの知り合いと思われるのもかなり嫌なので、二人を連れてこの場所を離れようとした時、コツコツン、と左右でバランスが取れていない不自然な足音が耳に届いた。

そして次の瞬間。

「――たわけえぇッ！！！！」

ビリビリと空気が震えるほどの声が響き渡った。

それは騒がしいこの辺り一体を一瞬黙らせるほど弩声で、流石の変態も何事かその流暢な口を閉じた。

「ガネットォ…！　貴様にはアキラを連れて帰るように言っておいたはずだが…？」

「御恐れながらムイリオ翁。私めには時間と世の中と脂肪の塊に穢されていく天使たちを救う使命があるのです」

どこかで見たと思えば、昨日の会ったノインの祖父。聞き覚えが無い名前だと思ったがそう言えば名前を聞いていなかった事を思い出す。同時に昨日ムイリオ爺が言っていたことも。

頭が勝手に、現状を軽い推測と共に組み立てた。

「こいつ等が、ノインの婿候補？」

ピクッと声に反応して、ムイリオがこちらを向いた。

「おお！　また会ったの、えー…」

「ハルユキだ」

「まぁこの際名前なんぞどうでもええわい。ガネット、アキラ。こやつが昨晩言っていた男じゃ」

「へぇ…」

一転して眼鏡のガネットがハルユキに落ち着いたそれでい興味深そうな目を向けてくる。

しかしむしろ最初路印象としては好戦的だった十二歳のアキラとやらの視線がこないことに気付いた。

それどころか、ここに来てから一度も口を開いていない。

「アキラ君？」

その事に他の面々も気付いたのか、アキラという子供に視線が集中する。

しかしそれでもアキラは動こうとせず、微動だにせずに、ポカンと口を開けたまま、ユキネを凝視していた。

「…な、何だ。お前もまさかその年で変態なのか…！？」

そこで漸く我に返ったのか、アキラと呼ばれる少年が顔を真っ赤にして声を荒げた。

「ち、違うわ！　そこの馬鹿眼鏡と一緒にすんなや！」

そこで漸く視線が自分に集まっていることに気付き、一度舌打ちをして背を向ける。

「……お、お前、名前は？」

そして背中越しにユキネに質問を投げかけた。

「…は？」
「名前！」
「ユキネ…だけど」
「俺は、アキラ。アキラ・コノエだ」
「…そうか、よろしく」
「あ、ああ。……ま、また」

耐え切れなくなったように、そう言うと、猛ダッシュで人ごみの向こうに消えた。

「あの糞餓鬼、惚れよったな…！」
「あの糞ガキ、惚れやがったな…！」

頬を染めて走り去ったアキラに爺とハルユキが舌打ちしながら声を重ねた。

キョトンとした爺の視線に、ハルユキは目を逸らし、軽く咳をしてお茶を濁す。

アキラの様子の真意にユキネはいきなり過ぎて気付いていないようだが、まぁ落ち着けば気付くかもしれない。

「…て言うかいいのか、あれ婿候補だろ？」
「構わんさ。あれは王になるのをやめようとはせんよ」

その言葉にあらぬ疑いが頭に浮かんだが、爺の顔を見て勘違いだと気付かされた。

脅しているとかではなく、恐らくアキラ側に理由があるのだろう。

「ああフェンさんというのですか！　いい御名前だ！　もふもふしてよろしいでしょうか！？」

まだ続くのかと、今度は眼鏡の方に顔を向ける。

ユキネがフェンの名前を言っていたのを聞いていたのか、眼鏡男が恭しく声を上げた。

「違う、私の名前は…、カルネラ・モルデリヒト・ガウチラル・テクナ・マタンノリ・レ・モハニマトラ・シノガリ・イマド・ノゲイラ」

「ああ、更に麗しい名前だ！カルネラ・モルデリヒト・ガウチラル・テクナ・マタンノリ・レ・モハニマトラ・シノガリ・イマド・ノゲイラ！　天使の御名でさえも霞んでしまう！」

お前に名前なんて教えないという意思表示だったのだろうが、予想外の高性能に変態指数と馬鹿に押し返された。

うわッ…、と無表情のままながら余りの気持ち悪さにフェンが後ずさりした。

「喧しいわお前は。全く腕は確かなんだが…。人選を間違えたか？」

そろそろ殴り飛ばしてやろうかと思ったところでムイリオ爺が声をかけた。

まぁそれでも小さい子供が関わっていなければ冷静な性格だったことは、爺も分かっているのだろう。

眼鏡に一声かけると、やれやれと首を振りながら去って行く。深々と礼をして眼鏡もその後に続き、帰った振りしてこちらを覗いていたアキラを抱えて帰っていった。

「……一目惚れ、されたね、ユキネ」

「わ、私か…！？」

そう驚いた後、何となく自分の中でも察しがついたらしい。

「か、変わった奴だな…」

ポリポリと照れたようにほんの少しだけ赤くなった頬をかきながら、チラッとハルユキの方を見た。

慌ててハルユキは表情を取り繕う。

「……まぁ何だ。この前行けなかったから飯でも食いに行くか、三人で」

誤魔化す様にそう言い繕うと、さり気なく視線を逸らした。

「悪い。私達はここに来る前にもう食べたんだ」

申し訳無さそうに視線を落としながら、ユキネが言った。

「ああいや、なら良いんだけどな」

言いながら挨拶代わりに片手を挙げて、この前見つけた魚が美味しい店に一人足を向けた。

一目惚れ（後書き）

感想・アドバイス・誤字脱字報告等よろしければお願いします

予選

『さて、やって参りました”舞武”当日！　実況は嵐の実況者ドモンがお送りする！　昨日決めた自称だがな』

喧しい解説がどこからか響いてくる。騒音ともいえる実況を聞きながら周りを見渡すと、所狭しと集まった人間が闘技場の中に物凄い密度で詰め込まれている。

客席にも闘技場ほどではないが、人間が密集していた。それにしても狭くて仕方が無い。この闘技場は直径５０メートルほどの造りになっているがそれでも一杯一杯だ。

近年稀に見る参加人数の多さだとか、優勝候補だとか、賭けのレートだとかを、休む間もなく解説するマシンガントークも相まって暑苦しいことこの上ない。

解説によると何と参加人数は去年のおよそ倍の２０００人を超えたということらしい。

『おっと開催の儀が始まるみたいだから、ここらで一旦口を噤ませてもらおうか』

闘技場の端から続く長い階段の先に、王女が姿を見せ、嵐の解説者ことドモンが黙る。

それにつられる様に、自然と会場が静まり返っていった。

階段の先のノインは手に妙な剣を持っていた。何かから切り出したかのような角ばった白い剣。何かから削り出したかのように柄と刃が一続きとなっており、更に柄と刃が交差する部分に穴が開いていて、そこに薄い桜色の宝玉が嵌っている。

それを一旦仰々しく掲げると、その場に突き刺しその柄に両手を預けた。

『集まりに集まったわね。２２３８人ですって？　まぁ結構賞金と粗品にお金かけたからだろうけど？　烏合の衆じゃないことを祈るばかりだわ』

棘がある言い方だが、それはどの人間も承知の上なのか起こったの笑い声だけだ。

『しかし、当然得られるものはそれだけじゃないわ。ここから見てもさぞ名のある人間の顔が見え隠れしている。――それでもこの中から栄光を掴めるのはただ一人』

スッと１８０度声の方向性が変わり、口調が真剣そのものに変化してそれに伴い闘技場の面々も顔が緊張と興奮でこわばっていく

『堅苦しいことは何も言わない。ただ王を前に剣を持ち、己を示し

て見せろ。栄光も金も名誉も夢も。勝った者の総取りだ』

静かに力の入った声が、町中に届くような音量で反響する。

ハルユキはノインの普段を知っているので何か可笑しい気分になるが、他の誰かが聞く分には興奮を促す、のかもしれない。

『戦神オベリスクにその血を、その力を、その意気を捧げよ。ここに開幕を宣言する！』

その言葉に闘技場が爆発したような歓声が巻き起こった。ノインはそれを満足そうに見下ろすと、傍に用意されていた王の座に腰を下ろした。

突き立てられた剣は、取り上げられ恭しい造りの掲台に飾られる。その直ぐ下に同じように飾られた例の粗品を発見した。

今更取り乱したりはしない。ただ自分の底の方で湧き上がってくる何かを感じて、拳を握り締める。

ノインが奥の玉座に引っ込むと同時に再び実況が復活し、興奮の坩堝となった会場が一旦落ち着きを見せ始めた。

『それじゃ今からルール説明、それとその後番号呼ばれた奴は二時間後に予選開始だ。とっとと準備しろよ紳士淑女共！』

それから声が穏やかな女性に変わり、ゆっくりと闘技内容を説明し始めた。

『では予選のルール説明をさせていただきます。これから読み上げます番号の方は一時間後この闘技場で予選を行っていただきます。二日後の本戦に進めるのは昨年の優勝者、準優勝者を加えての３２人。何分人数が多いので結構な人数が一度に戦うことになりますが、怖い人は帰って結構、と王女よりお言葉を承っておりますので悪しからず』

では、と一呼吸置いてから、侍女のような格好をした女が手に持った羊皮紙を広げてそこに書かれているのであろう内容を読み始めた。

６８、１１６４、３、４３、２８８。

闘技場の外まで響くような澄んだ音声で次々と番号が読み上げられる。

不意に向かいの男の顔つきが引き締まった。自分の番号を呼ばれたのだろう。番号が呼ばれた数人が準備のためか一様に闘技場を後にしていく。

２０１５、４５１、８７９、１４５２。

覚えのある番号を聞く事無く、番号の羅列を読み上げる声が止ま

った。

『それでは、続く予選の組み合わせは闘技場前に３０分後には張り出しますので其方をご覧ください。一戦目が終わった２０分後には次の予選を始めるので準備はお早めにお願いします。続いて本戦及び、基本的なルールですが…』

ひたすらに聞きやすさを追求したような、澄んだ、それでいてよく通る声で説明が続けられていく。

基本的に武器、魔法についての制限はなし。勝敗は審判が止めに入るか、気絶するか、若しくは片方が負けを宣言した場合に決定する。

そして殺しは負けでその時点で失格。しかし、罪には問われない。その為の書類も選手たちは全員書いているはずだ。

と言ってもまあ、危なかったら兵士達が全力で止めに入るし、治療班もこれでもかと言うほどに準備されるから死ぬ人間は知る限り出ていないそうだが。

気付けば、もうかなり闘技場内に人が減っている事に気付いてハルユキも出口へと足を向ける。

出口をくぐろうとした所で何かに呼ばれた気がして、もう一度振り返り玉座に飾られているそれをもう一度目に焼き付けた。

ついでに目にはいった参加者たちの顔が戦意に満ちているのが分

かる。

戦いが、始まった。

◆◆◆

「…最後から二番目かよ」

一時間後、闘技場を出て直ぐの所に設置されていた掲示板に、デカデカと張り出されている紙を見て溜め息をついた。

今が朝の十時程だから自分の予選開始は夕方頃になるだろうか、そもそも予選一戦でどれくらい時間がかかるか分からないので予想もし辛い。

初戦でも全く問題は無かったのだが、まぁ昔からそうついていた方でもなかったから、こういう運が悪くても不思議ではないが。

時間の目星をつけるために一試合目だけでも見ておくかと、足を客席に続く階段へと向けた。ユキネとフェンも探そうとしたが、何しろ人が多過ぎて見つかりもしない。

それにしても今日も馬鹿みたいに晴れている。まだそれ程日も高

くも無いのに、道行く人々も手拭いで滲む汗を拭きながら店を覗いたり、食べ物を購入したりしている。

しかし、まだそこら中に森が繁殖している上に空気を汚染する恐れも無いエネルギーで生活しているためか、自分が知っている夏と比べると随分爽やかで好感の持てる暑さだった。

「あ、居たわね。あの軟膏寄越しなさい。暑くて堪らないわ」

そんな小さな感動をぶち壊しにして、ここ最近疫病神となっている女の声が後ろから聞こえた。

「…ほらよ。それより王女がこんな所で何してんだ。帰れ」
「いやよ。あそこは高いだけでほとんど何も見えないんだもの。それに舞武の時期は私は仕事がないから暇なのよ」
「お前がわざわざ出場するからだろうが」

コツコツと音を鳴らしながら、ノインと並んで階段を進む。

服装は先程のやんごとない服装ではなく、この前ハルユキが買わされた普通の服だ。流石と言うべきか、スカートの先から首元まで皺一つも見当たらない。

「暑い…」
「そうかしら？　堪え性がないわね」

「…お前は本当に性格が悪いな…」

いつの間にか階段を抜け、出入り口特有の強めの風が顔に当たった。

客席の方はどういう構造になっているのか外や闘技場ほど高い気温は感じないが、動けば汗をかくほどには暑い。

そう言えばここは昔に作られたもので色々な仕掛けがあるとか横の王女が言っていた気がする。この気温調節もその一つなのだろう。

闘技場にはまだ選手の姿は見えず、その代わり老若問わず大勢の兵士やいかにもなローブを着込んだ魔導師らしい人間が、五箇所ほどにそれぞれ集まって何かを行っていた。

「ああ、あれは結界張ってるのよ。あの人数の儀式魔法だからそう簡単には崩れないわ。客席まで被害が及んだら事だし」

そう言ったノインの方を見れば、たまたま傍を通った売り子から購入した飲み物をチビチビと口に運んでいる。

ハルユキも買おうとしたが、既に売り子は遠ざかってしまっていた。

「…言ってくれよ」

「あら、ここにもう一つ誰かが飲む予定も無い冷たい飲み物がある

わね」
「お心遣い痛み入ります」
「ふふ、よろしい」

楽しそうに笑うノインから飲み物を受け取ると、開いている席に移動して座り込んだ。

「なあ、予選ってどれくらい時間かかるんだ？」
「そうね。今回は人数が多いから多分夜までかかるわ。一試合は大体３０分ぐらいが平均かしら」

横に座り込んだノインが視線は闘技場に向けたままそう答えた。同じように闘技場に目を向けると、もう先程の兵士達が撤収を始めている。どうやら結界を張る作業も終了し、そろそろ予選が始まるらしい。

客席は闘技場から2メートルほど高い所に作られているわけだが、闘技場と客席の境にぐるっと薄い壁のようなものが見える。ハルユキの視力でよく目を凝らせば見える程度だから観戦には支障は無いだろう。

暇を持て余してぼーっと闘技場を眺めていると、いきなりトランペットの様な高く澄んだ音が闘技場内に響いた。

『さてさて予選開始だ！　と言ってももうお客さんは９５％がお帰りだがまあ気にするな。それと俺様も今から彼女待たせてからばっ

くれるがそれも気にするな。見て欲しかったら本戦まであがって来い！　さぁ入場しろ戦士達！　そしてさらばだ戦士達！」

気の抜けるような実況を残して本当にそれきり嵐のような声がやんでしまった。

しかし実際に客は殆ど開催の儀を見て帰ってしまったらしく、残っているのはほぼ偵察に来た参加者達だろう。

そんな事を考察していると、二つの入り口から闘技場に大勢の選手達が姿を現し始めた。

1、2、3、4、5，6，7、……75人。

「……多すぎないか、これ」

「だから多いのよ参加人数が。時間もおしてるから例年通り行くしかなかったの」

実際問題として上がったのだろう。疲れたような顔で珍しくノインが愚痴った。

しかしまあ、幸い闘技場が広いお陰で、開催の儀の様に溢れ返る様な事態でもなく、普通に各選手同士がそこそこ離れる事ができている。

時間が掛かる以外には大した問題も起こらないのかもしれない。

「この試合で目ぼしい奴はいるのか？」
「そうね…。そんなに騒ぐほどでもないけど、確かAランクの奴が一人ぐらい居た気がするわ。順当に行けばそいつが勝ち残るでしょうね」
「どんな奴だ」
「仏の…何たらって男。柔和な顔が印象的ってことらしい……、って、あら」

その男を捜そうと視線を巡らせていたノインが、妙な声を出した。

「…あれ、貴方の知り合いが出てるわよ」
「え？」

何となく眺めていた右側の選手達から一旦目を離して、ノインの見ている方向に目をやると岩のような男達に紛れて小さい青い髪の少女が背丈より大きい杖を持って配置につこうとしていた。

「フェンだな。第一予選だったのか」
「……大丈夫なの、あれ」

見れば他の参加者にも、変な目で見られたり微笑まれたり呆れられたりしていた。横のノインも呆れている顔に分類されるだろう。

「前にも言ったろ。あいつはちゃんと戦える」
「その貧乏揺すりを止めてから言いなさい」
「…親心ってやつだよ」

正直エントリーの時に止めたかったが、多分言う事聞かないのは目に見えていたし、心配だから止めるなんて言えるわけも無かった。

唐突に今度は銅鑼が重々しい音を撒き散らして、同時に魔法によって拡大された声が響く。

『予選開始！！』

開始と同時に青い髪の少女が誰より早くその杖を振り上げた――。

◆
◆
◆

「お、おい、嬢ちゃん。こんなモノに出ちゃ駄目じゃないか…！」

闘技場に進む通路を歩いて、いざ闘技場に出ようとした所で後か

ら気の良さそうな声がフェンの耳に届いた。

歩きながら、そちらに首を向けてみると声の通りに気の良さそうな顔がこちらを覗いていた。そんな表情に反して、男の立ち振る舞いには歴戦の雰囲気が漂っており、腰にも大層な剣を携えている。

「おいおい、誰だよこんな所に迷子連れてきたのは！」

気の良さそうな声でフェンの存在が知れたのか、他の柄の悪そうな男がフェンに思い切り指を指して腹を抱えた。その声が伝染していき、フェンを追い越しながら闘技場に進む人間達が、奇異の目だったり、心配そうな目だったり、馬鹿にしたような目だったりでフェンを一瞥していく。

「おいおい、そんな事言い方はないだろ。この嬢ちゃんは私が相手をするから、手を出すなよ？」
「おーおー、優しい事で」
「知ってるか？　優しくなければ生きていく資格が無いんだ」
「聞いてねぇよ」

もう笑い飽きたとでも言いたいのか、シッシッとこちらに手を振ると欠伸をしながらある程度はなれた所まで歩いていった。

男はそれを溜め息をついて見送ると、気の良さそうな顔でフェンに向き直り、溜め息をついた。

「そういう事だ。私が居たから良いようなものの、もうこんな無謀な事するんじゃないよ」

そういい宥める様に、こちらに柔和な笑顔を向けてくる。ハルユキやジェミニとかレイとかに子ども扱いされればむっと来るが、本気の心配からこんな顔を見せられれば、何となく怒る気にもなれない。

それも自分が不利になるのを承知で気を揉んでいるのだ。なかなか無下にはしにくいものだ。

――まあ、それと勝負はまた別の話だが。

闘技場内と、それに客席にも視線をめぐらせた。

心配そうに膝を揺らしながら、こちらを凝視している黒髪の男は直ぐに見つかった。

大丈夫、と小さくハルユキに向かって呟いてみるが、伝わってはいないだろう。

それで良い。

行動で示すことが出来るのだから。

唐突に開戦を告げる銅鑼の音が響き渡る。

そしてそれとほぼ同時に、フェンは手に持っていた杖を高々と垂直に振り上げると。

地面に杖の柄を強かに叩き付けた。

「――”一樹当千”」

その呪に応える様にフェンの周りの空気が一変した。

小さい体の中で、水と土の魔力が混じりあう。杖の先から迸る魔力に、周りの数人が血相を変えてこちらを振り向いた。

しかし既に手遅れ。

地面の下から何かが蠢くような音と共に地震のような激震が闘技場を広がって行く。

そしてその音が一瞬だけ沈黙したかと思うと、一辺1メートルほどある床石を弾き飛ばして闘技場の中心から何かが姿を現した。

その床石に立っていた参加者は当然空中に投げ出され、その何かに捕まえられる。

「……何だよ、これ…」

いきなり現れたその物体に誰かが呆然と呟く声が聞こえた。

蠢くようにその体を震わせながら急激に成長を続けるそれは、見上げるほどの大木。

その無数の枝を手足のように動かし、参加者達を捕縛していく。

何人かは撃退しようとするが、その全てが数に圧倒され、手足を封じられ締め上げられる。

木の枝と奮戦する声が、徐々に数を減らしていく。

その光景から連想するのは、ただ圧倒的な力。

銅鑼が鳴ってから僅か数分後。

闘技場の上に残っているのは小さい少女とそそり立つ大木だけになっていた。

静まり返った闘技場内に、思い出したかのように終戦を告げる銅鑼の音が響く。

只管一方的に予選第一試合は終わりを迎えた。

銅鑼の音を確認して小さく息をつくと、気絶した人達が落ちてし

まわない程度に木の拘束を緩めた。

「情けないな、こうも一方的にやれらるとは…。参ったよお嬢ちゃん、いや、名前を聞いてもいいか？」

「……？」

「戦う時にはな、こうやって名前を交換するんだ。まあもうやってる奴もあまり居ないがな」

締め上げられて指一本動かないながらも他の人間と違い意識は失わなかったのか、先程の柔和な男が息を切らしながらも言葉を続ける。男の中では大事なものなのだろう。

「…フェン・ラーヴェル」

「フェン・ラーヴェル。俺はアシュル・マリサ。…子ども扱いして悪かった」

「もう、慣れてる…」

木にぶら下がっている人間を救出しようと駆けつける城の人間とすれ違うように、フェンは闘技場を後にした。

予選（後書き）

感想アドバイス誤字脱字報告等よろしければお願いします。

好敵手

「……何よあれ」
「いや、俺も驚いてる」

魔力で構成したためか、みるみるその姿を消していく大木を呆然と眺めながら二人が口を揃えるように呟いた。

周りでも試合を観戦していたほかの参加者達もざわざわと騒ぎ始めている。

「一瞬とはな…。…しかし結局一体誰が勝ったんだ？」
「誰って、あの木を出した奴だろうが」
「……だからそれが誰なんだよ？」
「…知らん」

後ろから聞こえたそんな会話に思わず苦笑が零れた。

確かにあんな化け物みたいな木が蠢いている中で、あんな小さい少女を見つけるのは至難の業だ。見つけたとしてもそれがあの木の親だとは想像もつかないだろう。

「嬉しそうね…」

「ん？　まぁそりゃあな。仲間が勝って悲しむ方が意味分からんだろ」

言いながら放送に耳を傾けると、いなくなった実況者の代わりに義務的なアナウンスが、勝者の名前と次の試合は予定通り２０分後に行う事を告げていた。

闘技場のあの状況でどうやって次の試合を行うのかとも思ったが、フェンが出した木はもうほとんど大気中の魔力に溶けていて、後はもう木が出てきて砕け散った床石を直すだけになっていたので問題はなさそうだ。

改めてフェンの魔法の力に驚かされる。

しかし考えてみればフェンもただでここまで旅をしてきたわけではない。化け物のような、いや時には本物の化け物とも戦ってきたのだ。それを考えれば、この結果も予想できないものではない。

「んじゃ、フェンの様子でも見てくるかな」
「ええ、私も行くわ」

言うが早いか席を立ち、呆然としている参加者達の間を縫って階段へ向かった。

結局、試合時間の目星はつけられなかったが、それぞれの試合毎に時間も変わるからこそ、前の試合の二十分後などという割といい加減な時間運びになっているのだろう。

ならこれ以上見ていてもしょうがないので、フェンと一緒にいるであろうユキネの予選試合の時期を聞いて、それからどうするか決めたほうがいいはずだ。

試合間隔は二十分ほどしかないので、気持ち早足で階段を下りて参加者控え室へと向かった。

階段を下りきり、直ぐ横にある闘技場側の大きな入り口を抜ける。

「ねぇ、さっきの娘は貴方の次くらいに強いの？」

隣の王女が嫌に静かだなと思っていると、あまり聞き覚えがない質の声で問いかけてきた。

目線だけ横にやると、なにやら難しい顔をしている。

「さぁな。実際に戦った事なんてないし相性とかもあるからなんとも言えんが、……フェンにジェミニやレイが負けるのは想像しづらいな」

「……あの老け組二人か。そうね、とっても強そう」

「興奮してるところ悪いが、あの二人は出ないと思うぞ」

難しい顔が少しずつ高揚していくのを短い言葉で阻んだ。割と好戦的な性格なのは知っている。こう言っておかないと喧嘩を売りに

行きそうだ。

「別に喧嘩売りに行ったりはしないわよ」
「心読むな」
「その目付き悪い顔に書いてあるのよ」

灰色の大理石で出来た壁を伝って歩いていくと、やがて武装した人間達が集まっている場所に出た。ここもまた押し込められるように人間が密集していて暑苦しいことこの上ない。

恐らく次の試合の参加者達だろう。興奮している者や精神統一している者、殺気だった奴や、更には平然と本を読んでいる者もいる。

そんな中、部屋の端に設置された机で、フェンがそこに座ったスタッフと一言二言言葉を交わしているのを見つけた。

「本戦の組み合わせは改めてくじを引くことになっておりますので、二日後の朝十時には闘技場にお越しください。では御武運を」

そう言って会釈するスタッフに、一瞬遅れて頭を小さく下げた後こちらに振り向いた。

軽く手をあげると、直ぐにハルユキに気付き、器用に人垣の隙間を縫うようにフェンが近付いてきて、近付きざまに心なしか弾んだ声で口を開いた

「予選、勝ったよ」

小動物的な可愛らしさにあてられて反射的に頭を撫でてやろうとフェンに手を伸ばして、それを止めた。

子ども扱いしてはまた怒られてしまう。

そんな考えを巡らせているせいか、その手を見て何か言いたそうになっているフェンにはハルユキは気付けなかった。

「見てたよフェン。予選通過おめでとう」

「……ありがと。ハルユキ、…と？」

フェンの視線がハルユキから隣のフードを被ったノインへと移動する。それに気付いたノインは少しだけフードを上げてフェンに顔を見せた。

「よろしく。何回か顔は合わせたと思うけどノインよ。突然だけど貴女私の部下になりなさい」

「え…？」

「待て。うちの稼ぎ頭を引き抜くんじゃねぇ」

フェンの肩に手を置きそのまま連れて帰ろうとするノインの頭を引っ叩く。

まだ貯蓄は結構あるものの、チームランクがEという現状では二人だけのCランクを失うのは経済的にかなりきつい。

「…この男が貴方が居なきゃ寂しいって言うから諦めるわ」
「……そんな事言ってねぇよ」
「じゃあ、貰っていくわよ？」

ノインの言葉にほんの一瞬だけ言葉に詰まると、顔の左に何かやんわりとした視線が突き刺さってきた。

「……それよりユキネは？　一緒じゃないのか？」
「む…」

恨みがましい声を漏らすフェンに目を合わせないように他の参加者を見渡す。

そこで、既に二回目の予選が始まったのか先程の十分の一程まで人が減っている事に気づいた。耳に少し集中すると、闘技場の方から騒がしい声や剣戟の音が微かに此方まで聞こえてきている。

「ユキネは、だいぶ、後」
「ああ、そうなのか」

もしかすると同じ予選試合かとも考えたが、確立は二十八分の一だ。そうそう鉢合わせにはならないだろう。

「……ノイン王女」

「ノインでいいわよ、同い年だし。私もフェンって呼んでいいから？」

一度頷いた後、じゃあノイン、と名前を言い直してノインに向き直った。

「本当に、ハルユキと結婚したいの？」

闘技場の方を向いていたハルユキの顔が人知れず強張った。

「そうよ。私がこの男に勝ったら貰ってくわ」

それに対してノインは全く気にした様子もなくフェンの問いに答えた。

フェンは少しだけ目を見開くと、一度自分の足元に視線を落とした後、改めてノインに向き直った。

「……じゃあ、二人が当たる前に、私が倒すことにする、…から」

相変わらず呟くようにフェンは言葉を繋げていった。

繋がって出来あがった台詞はフェンのような外見からは想像し辛い好戦的なもの。驚いた顔で一度その言葉を頭の中で反芻してから、ノインは唇の端を吊り上げた。

「…そういうのは嫌いじゃないわ。貴女みたいな人からそんな事を言われるとは思わなかったけど」

フェンの肩の上に乗せていた右手をゆっくりと離すと、自然と笑みの形になる口元を隠すように、顔に手を持っていった。

「すると好敵手、って事かしら。ああ、何だかすごく良い響きだわ…」

酔い痴れるようにそう呟くと、はっきりとした対抗心を持ってフェンの眼を見つめ返している。

「私より…」

「なに…？」

ジッとノインの顔を、それこそ穴が開くほど見つめるフェンからは、驚くほど感情を読み取ることが出来ない。

あまりに透明度が高い空色の瞳は、曇ることも逸らすことも知らないようにノインをただ見つめ続ける。

「…なんでもない」

好戦的にその瞳を見つめ返していたノインから、漸くフェンが視線を外した。

「それはつまり俺と当たったら俺も倒すって事か？」
「そう」
「楽しみにしてるよ」
「してて」

短く簡単にハルユキにも宣戦布告する。

それはかなり淡々としたものだったが、戦意だけはひしひしと伝わるものだった。

「あれ。やっぱりフェンちゃん達もいたんやな」

不意に聞き覚えのある訛った言葉遣いがフェンとハルユキの耳に届いた。その声の元は、予想を裏切ることもなく茶髪で薄目のおちゃらけた男。

その様子は全くいつもと変わりないもので何も気にかけることなどなかったが、出てきた場所が意外な方向だった事に驚きを覚えた。

「何だ。お前も出るのか」

「そうやよー。しっかり予選も通過してきたで」

出てきたのは予選の真っ最中の筈の闘技場。

予選が始まってまだ五分ほどだ。このタイミングで出てくるということは勝利、それも圧勝を成してきたからに他ならない。

「…本当に飽きないわね、貴方達は」

曲がりなりにも各地から集まってきた腕自慢共を一蹴。それも息一つ乱さずに。そしてその事を大して驚きもしないフェンとハルユキからも、恐るべき力量の高さを感じさせられる。

思わず零したノインの呟きは好奇心に濡れていた。

「ユキネちゃんは？」
「出るよ。でも予選はまだ後のほうだとさ」

手に持った温くなったお茶を一気に喉の奥に流し込みながらハルユキが答える

「どこに居てはるの？」
「知らん。けどそうだな。見つけて昼飯でも食いに行くか。俺も予選は最後だからレイとシアを冷やかしにでも行こうぜ」
「……ユキネなら、この前のアキラって子に連れて行かれた…」

ぐしゃん、とハルユキの手の中で紙のコップが音を立てて拉げた。

「んだとォ…？」

好敵手（後書き）

感想アドバイス誤字報告等はいつでもお待ちしております

仲違い

「……凄い冒険してるな、ユキネは」
「冒険ってほどでもないだろうけど、まあそこそこ色々あったよこの半年ぐらいで」

その辺の木陰に手当たり次第に設置されたベンチで、無理矢理買ってもらわされたお茶を飲みながらとりあえず話を終えた。

当然王女だった事や、その他話しづらいことは話さずにだ。

アキラも、最初はしどろもどろだったが段々自分らしさを取り戻したらしい。今では自然に自分の話を織り交ぜながら会話を続けている。

最初は下手くそな敬語で話しかけてくるのが面倒臭かったが、それを指摘すると途端に自然になった。そちらのほうが素に近かったのか、滑らかに話も進んだ。

落ち着きがあるなどと、妙なことも言われた。いつもは喧しいだとか子供だとばかり言われている反動か、その言葉はどうにもくすぐったかった。

「……ユキネ？」
「あ、ああ、すまない。何だ？」

アキラに話しかけられて、またボーっとしていた事に気付いた。
この頃はどうにもこうなる時が多い気がしてならない。理由に、心当たりが無いわけではないが。

「ユキネも予選あるんだろ？　準備とかしなくていいのか？」
「…準備って？」
「遠距離か魔法重視で戦うならいいけど、剣を使うんだろ？　なら少なくとも防具とか」
「…そんなの持ってないぞ」
「はぁ！？」

いきなり大きい声を上げてぐいっとユキネの顔を覗き込んだ。

「持ってない…！？　大怪我しても知らんぞ！？」
「と言われても。…今まで大丈夫だったし」
「駄目だろ！　知っといて怪我させるわけにゃいかん…！」

つい五秒前まで知らないといっていたのに、と何かちぐはぐなものを感じざるを得ないが、心配してもらっているので気持ちを無碍するわけにもいかない。

「そうね。私でも軽鎧ぐらい付けるわよ」

「おわッ！？」

いきなりベンチの後ろから現れたノインにアキラが飛び上がった。

「ああいやこれは…」

婿候補の男と一緒に居るのを見られるのは拙いと思ったのかユキネが弁解しようとすると、ノインがそれを見て言葉を挟んだ。

「いや、別に良いわよコノエが誰と何してようと。恋愛結婚じゃないんだから側室なんて当たり前よ」

「…そうか」

ユキネも元王族。その辺りの教育もされているので冷静に考えればそれぐらいは理解できる。それでもどこか冷たいものを感じざるを得なかったが。

「ああ、ユキネちゃん居ったかー」

バラバラに探していたのか今度は前からジェミニとフェンとハルユキが現れた。

「…ユキネ、お昼ご飯食べに行こう」
「そ、そんな事より、こいつ防具も持ってないってホントか？」

こいつ、と言う言葉に、腕組みをして不機嫌そうに突っ立っていたハルユキの眉毛が、ピクンと人知れず反応する。

もちろん、それにアキラを始め他の人間が気付くはずもなく、話は続く。

「…そう、言えば」
「そうやねぇ」

フェンは元々遠距離重視で、ジェミニも防御より回避を優先しているので、防具を使う習慣がない。

今更気が付いたのか、顔を見合わせた。

そののんきな態度を見てアキラは呆気にとられるが、直ぐに表情に力を取り戻すとユキネに向き直った。

「行くぞユキネ、防具買いに」
「あ」
「――！」

アキラが自然にユキネの手を取る。

そしてほぼ同時に。ハルユキの手がアキラの頭を鷲掴みにした。

場の空気が、一瞬で凍結する。

「ハルユキー。ステイステイ」

「庇護欲かしら？」

「……」

ジェミニが可笑しそうに笑いを堪えながら、ノインは顎に手を添えなにやら考察しながら、フェンに至っては呆れて溜め息をつきながらハルユキの奇行に反応した。

「な、何や！？　は、離せ！」

相当な力で押さえつけられ振り向く事もできないのか、全く現状を把握できず、アキラが出した声の勢いはこの前のように強くはない。

一方のユキネも事態を飲み込めないのか、呆然としていて微動だにしない。

「……馬の骨」

「…は？」

ゆっくりとアキラを片手で持ち上げながら、ハルユキのボルテージが上がっていって。

「どこの馬の骨がうちのユキネ誑かせてんだ、ぁア！？」

妙に殺意の篭った声がハルユキの口から搾り出された。

「は、ハル…！？」

やっと我に帰ったユキネがアキラを威嚇するハルユキの背中に声をかける。

「害虫がな。わらわらとな。駆除しないと」

「い、意味が分からんぞ…？」

「はっなっせぇえ！！　コラァああ！！」

「はいはーい、とりあえずそろそろ放しなさい。また牢に行く事になっても知らないわよ」

ノインがハルユキに蹴りを入れてアキラを放させると、離れざまにアキラはハルユキに向き直って身構えた。

「何じゃお前…！　どっかで…？」

「おおそういうお前は名も無き馬の骨じゃないかこんな所で会うなんて奇遇だな帰れ」
「おいハゲ、コラ…！」
「馬の骨は馬の骨で馬の骨以下でも馬の骨以上でもましてや馬の骨以外でもないんだから帰れていうか還れ土に」
「お前会話する気ないやろッ！？」

言い争いながら、ジリッとアキラがハルユキに警戒を表す。対してハルユキは腕を組んで仁王立ちのまま、どこぞの極道顔負けの眼力を披露している。

しかしここまでやって、さすがに大人気ない事に気づいたのかもう手を出す気はないようだ。

すっと、何を思ったかアキラがユキネの手をとって抱き寄せた。

「ユキネ何かコイツ危ない、隠れてろ」
「よし埋メル」

何かのメーターが振り切れたらしく、大人の対応など彼方に消えた。

そして、場はますます混沌と化していく。

その光景に、深々と溜め息をついたノインが、二人の間に割って入った。

「もう直ぐ、貴方予選でしょ？　この娘の装備は私が面倒見るから貴方は行きなさい」
「そうださっさと行けマセガキ。一丁前に色気づいてんじゃねぇ」
「……このハゲ。ユキネの知り合いみたいやから、下手に出とれば調子乗り腐りおって…！」

やれやれと面倒臭くなったのか匙を投げたノインの代わりに、今度はユキネが二人の間に入った。

「……アキラ行ってくれ。こんな事で予選落ちしたら申し訳が立たない」
「…まぁ。ユキネがそう言うんやったら」
「さっさと…うおッ！」
「これ以上面倒をかけないでくれるかしら？」
「…おいハゲ。この借りは試合で絶対返すからな、覚えとけ」

ノインがハルユキを抑えている間にアキラはそう言い残して闘技場の方に消えていった。

それをきっちり確認して、後ろでアキラに中指を立てているハルユキに向き直った。

しかしハルユキと目が合うと、頬を少しだけ朱に染め、目を逸らした。

「そ、そのー…、あれか？　し、嫉妬したのか？　…ハル」
「は？　意味わかんね」

何かが脆く崩れ去った音がして、代わりにもう一人ボルテージがメーター振り切った

「…ならば、馬鹿なりに説明してくれるんだろうな。この馬鹿！」
「……保護者としての義務を果したまでだ！」
「お前は私の父親か！？」
「……そうだっ」
「違うわッ！！」
「お前はもうちょっと警戒心持てって言ってんだよ！　見た目かわいいんだから妙な男が寄ってくるだろ！」
「か、かわっ…！？」
「お前はまだ子供なんだから…」
「こ、子ども扱いするな！　それにお前だってあの王女とイチャついてるじゃないか！」
「してねぇよ！」
「してる！」

そして今度はハルユキとユキネの言い争いが始まった。

しかしもう疲れたのか飽きたのか、もう止めようとする人間はいなかった。

◆
◆
◆

「…何じゃお主ら。皆して空気の悪い」

結局ユキネハルユキの両名ともまだまだ予選の時間は後だということなので、いつもの酒場まで戻ることになった。

人数分の水を手に注文をとりに来たレイが、暑さに額に汗を浮かべながら近付き様にそう漏らした。

襷（たすき）を使って肩まで袖を捲し上げ、絶え間なく動き回っていたせいで汗で髪が頬に張り付いている。しかしそれとほんの少し上気した頬とが相まって艶かしい雰囲気も確かに溢れていた。

「いや、実はね……」

「ああもういい。どうせ馬鹿二人が喧嘩でもしたんじゃろ。ほれ、忙しいからこれ持って適当な所に座れ」

とにかく忙しいのか、水を各自に持たせるととても客商売とは思えない横暴な態度のまま別のテーブルへと注文をとりに行ってしまった。

何しろいつもの二倍ほどの客足だ。

遠くにはきっちりと礼儀正しく接客するシアの姿も見える。間違いなく二人目当ての客だろう事は、男性客が八割を占めていることからも明らかだ。

シアは基本的に要領が良いので客受けは悪くあるはずがないし、レイに至っては時々ちょっかいを出してくる客を張り倒す場面も見られたが、基本的にそういう団体は気の良い人間の集まりだったので、冗談としてすんでいる。

「思ったよりちゃんとしてるんやねー」

「……うん」

ジェミニとしてはハルユキに話しかけたつもりだったのだが、ハルユキは返事をせず、というより恐らく気付きもしていなかったので遅れてフェンが返事を返した。

「…何を見てるんだ」

「別に」

空気が悪い理由は後ろで睨みあっている二人に起因しているのは言うまでもない。

喧嘩をすること自体はそう珍しいことではないが、今回は少しだ

け毛色が違うようだ。

目が合うたびに睨みあって、獣の子供のようにお互いを威嚇している。

「あいつ等は放って置いて、私達は食べましょうか」

雰囲気を変えようと、珍しく気でも使ったのかノインがフードを浅く被ったまま手ごろな席を探し出した。

「まあ、放っといたら勝手に仲直りするやろ」

一同が、丁度食べ終わって片付け途中の机を見つけてその傍まで移動すると、誰かの腹から虫が鳴くような可愛い音がした。

「あらあら」

「……ジェミニ、うるさい」

「ワイやないでー？」

一瞬で予選を終わらせたとは言え、体力は結構使ったらしく腹は減ってしまうらしい。

フイッと素早く顔を逸らすと、心なしか早足でフェンは椅子に座り込んだ。

「前から思ってたけど、ここの料理は嫌に美味しいわね、ガララドが知り合いだって言ってたけど」

口を拭きながらノインは食べ終えたスプーンを皿の上に置いた。何気無いそんな動作にもきちんと作法が行き届いているのは流石というべきだろうか。

ただ食べる速度は少し遅いのか、他の人間は全て平らげた後だった。

こんな店でそんな事を気にするものでもないかもしれないが。

「水取れ、非乳」
「自分で取れ、ウド」

そしてまた、ふとしたやり取りで、食事が始まって数回目の火花がハルユキとユキネの間で散った。

「手前ぇ！」
「何だ！」
「いつまで、怒ってんだよ鬱陶しい！」
「鬱陶しいのはお前だ！！　私が何しようと私の勝手だろ！」

ガタンと椅子を弾き飛ばして、お互いに鼻と鼻がくっ付くんじゃないかというほどに至近距離で相手を睨みつける。

「ああもう鬱陶しいわよ貴方達。少し黙りなさい」

今にも掴みかかろうとする両者を間に入っていたノインが押し止めた。このやり取りも既に数回目。出てくるのは溜め息ばかりだった。

「ユキネ。防具買いに行かないと」
「……防具か。別に要らないんだが」
「剣で戦うなら、あった方がいい…」

ユキネの背中を押しながら店の外へとフェンが誘導していく。

一瞬だけノインの方を向き、フェンは無表情でノインは苦笑しながら互いに頷き合うと先に店の外に出て行った。

「仲良しになったんやねー」

ハルユキに会計に行かせたのか、ひょこっとノインの横に顔が出てきてノインの視線をなぞる様にフェンの背中を見送った。

「フェンから頼まれたのよ。実はあの子が一番しっかりしてるんじゃないの？」

「フェンちゃんが居なくなったら間違いなくうちの一団は破滅するのは確かやねー」

お金の管理にギルドの仕事。最近はハルユキも同じクラスに上がってきたので負担こそ半分になったものの、それでもチームの中では一番高いクラスなので依頼は頻繁に請けている。

縁の下の何とやらは、間違いなくフェンに当てはまるはずだ。

「あれ、フェンとユ…、…フェンはどこ行った？」

後ろから聞こえてきた子供じみた物言いに二人して溜め息をついた。

「貴方いい加減にその大人気ない態度止めなさいよ。びっくりするぐらい貴方が悪いわよ」

「ハルユキは自分の事になると途端にこうなるな。前もそうやった

けど…」
「……うるせぇな。謝るタイミングを見計らってたんだ」
「で。見極められなくてフェンにまで迷惑をかけている、と」

考えることを見通されているのか、ハルユキは思わず言葉に詰まる。

「ほら行くわよ。あの娘の防具買いに行くんでしょ？　隙を見て謝っちゃいなさい」

返す言葉もなく、黙ってノインの後を追う。

「行くでー、問題児ー」

ジェミニが後ろポケットに手を突っ込み、いつもの半笑いでハルユキを追い越し出口へと向かう。

「…お前に言われたくないんだよ」

早く来なさい、とよく通る声を出しながらノインも出口の所でハルユキを待っている。

「だせぇなあ…」

何ともむず痒いような生温かいようなものを感じながら、店の外に急いだ。

仲違い（後書き）

感想アドバイス等よろしければお願いします

遠い二人

「ユキネ」

先に酒場から出たユキネの背中にフェンが声をかけた。

「…ごめんな。うん、分かってるんだけど…」

フェンの言いたいであろう事を先回りして、ユキネが唇を尖らせながら言い訳をしようとすると、フェンが不思議そうに首を傾げた。

「……ユキネは悪くないと思う…けど」

その言葉に、ピタッとユキネの言い分の羅列が止まる。

「…そ、そうだよな！　ほらみろあの馬鹿め！」

ユキネは予想外の反応に少し慌てながらも、我が意を得たりと胸

の前で握り拳を作って憤りを示した。

「…でも、ハルユキは子供だから、許してあげないと」

「む…そ、そうかな？」

「うん」

フェンが頷くと同時に酒場から三人の人影が出て来た。

内の一人のノインが隣のハルユキに何かを言っており、ハルユキは反論の余地がないのか苦い顔で頭をかいてごまかしている。

ジェミニはそれを見てニヤニヤとしていたが、フェンとユキネに気付くといつもの表情で二人に向けて手を上げた。

「じゃあ、行こか。武具屋なら確かこっちやったやろ」

この町を一番ぶらぶらしているのは恐らくジェミニだ。

もうこの町に来て一月は経っているので、恐らくかなりの地理が頭にはいっているのだろう。

迷う事無く、町の東の方に足を向けた。

ハルユキがユキネに話しかけようとする仕草を見せはしたものの、結局何もせずにジェミニの横に並んだ。

ジェミニと並ぶハルユキを見てユキネもその肩を叩こうとするが、結局その手は何にも触れる事無くユキネの体の横に戻る。

それを見ていたノインが無表情でユキネの隣に並んだ。

「ねぇ、あなた達って恋人なの？」

その声で初めてノインに気付いたのか、ユキネは少しだけ肩を跳ねさせてゆっくりと隣のノインに目をやった。

驚きで見開いた目を元に戻して、そこで初めてじわじわと質問が頭の中に染み込んできて、心臓が一際大きく跳ねた。

「ちがッ――！！」

声が取り乱していることに気付いて一旦言葉を切ると、呼吸を整えた。

「…違う。只の…、友人だ」

「へえ、そうなんだ」

それきりノインから話しかけてくる事はなくなり、ひたすらに足を動かす作業になった。

どれぐらいその気まずい時間が流れただろうか。

肩越しに振り返ってみればまだ酒場が見えるので実際には3分も経っていなかったが、妙に嫌な時間だった。

耐え切れなくなりほんの少しだけ視線を向けると、ノインは穏やかにハルユキの方を見ていた。ユキネの視線に気付いたのかノインがまた口を開く。

「ハルが私の知っている雰囲気と余りに違ったから。てっきり何か特別な関係なのかと、ね」

ハル、と。

言葉の内容は、耳には入りはしたものの頭までは到達せず、ただその妙な単語だけが記憶に残った。

別に呼び方に思い入れがあったわけではない。たまたまそう呼ぶことになっただけだ。今までそう意識すらしていなかった。

ただ少しだけ、喪失感が胸に残った。

「あいつが、…どうかしたのか」

「…別に。ただ弱く見えてしょうがないのよ。貴女と一緒にいると」

その言葉は先程と違いユキネの深い所まで突き刺さった。先程の

数倍の喪失感が背中に圧し掛かる。

そしてそれは、確かに嫌な痛みが伴っていた。

表情を変えなかった事だけは自分を褒めてやりたい。

私が居るとハルユキが弱くなる。

分からない。自己弁護する気は毛頭ないが今まで見ている分にはハルユキは強すぎるほど強かった。

今は喧嘩しているにしろ、弱いと感じたことはない。

だけど。

実際に自分が居る時と居ないときの人間の違いを見比べるのは不可能に近い。

それはつまりユキネがいて初めてあの程度なのかもしれない。

だからそれは本来のハルユキより弱く見えているのかもしれない。

つまりそれはユキネがいる事でハルユキを殺してしまっているという事かもしれない。

ノインが見ているハルユキはどのように映っているのだろうか。

自分と言う足枷が付いていないハルユキが何処かに居るのだろうか。

違う、と自分の中でさえ否定する事が出来なかった。

例の古剣の存在が頭の中に浮かび上がる。

否定できるほど、悲しいほど。

ハルユキの事を始め、レイの事もジェミニの事もシアの事もフェンの事でさえも。

何も知らないのだから。

また会話が途切れ、沈黙が訪れた。いつの間にか、視界かまたは世界が少しだけ不安げに揺れていた。

ほんの少しだけ前を歩くノインの顔から、何かを読み取れないかと試みるが人生経験が足りないらしい。

何を考えているかも分からなかった。

思えば最初剣を交えたときから、いや多分もっと、…そう。

顔を合わせたときからユキネはノインの事が苦手だった。

いや、苦手という言い方は少し違うかも知れない。

この女はユキネをただ無言で圧倒する

「羨ましいわ」

一瞬自分の口から気付かないうちに漏らしてしまったのかと思った。

「え…？」
「まぁ、分からないでしょうけど」
「うら、やましい…？」

歯の間から零れた声は恐らく隣を歩く人物にも届いていない。

意味こそ全く分からないが、恐らく皮肉でも嫌味でもないことは、分かった。

しかし何が羨ましいか全く見当がつかず、ただ気休めを言われているようでただ苛立ちだけが募っていく。

自然とほんの少しだけ強くなった視線をノインにぶつける。

そして横目でこちらを見ているノインと目が合った。

「……ぁ…」

目が合った瞬間、嫌な感覚がユキネを襲った。

――聞けばたかが十の頃に国を立て直したらしい。

聞けば並ぶものが居ないほど腕が立つらしい。

聞けば国中から慕われているらしい。

どれもこれも、何処かの無能が欲してやまなかったものだった。

そいつは十二の頃、望んではないにしても人質として国盗りに加担し。

魔法の一つも使えず。誰からも必要とされず。

引きずっている訳ではなかった。恨んでいる訳でもなかった。

でも、忘れられるはずもなかった。

王女としての違い。その手で支えているものの重さの違い。そして格の違い。

その違いが、その差が、やはりユキネをただ無言で圧倒するのだ。

視界が、世界が回る。

「…仲を取り持つつもりだったけど、やめたわ。私は貴方達から奪う側だもの。貴女はそんなに要らない様だから貰っていく。だから」

似たような生まれで似たような境遇で育って、そして自分とノインの価値を見比べて、自己嫌悪に陥る。

挑んだつもりだった。

睨み付けて戦意を示すつもりだった。

「――邪魔はしないで」

しかし溢れるほどの劣等感と、にじみ出る絶望感で。

怯えるように目を逸らしていた。

ノインは数秒間だけ、俯くユキネを観察した後、視線を前に戻した。

ユキネの歩長は自然と遅くなり、対してノインは歩く速度を上げ前を歩くハルユキの背中に近付いていった。

開き続ける距離に、ユキネは顔を上げられない。

◆
◆
◆

『それでは、これより第２８回の予選を始めます』

外の景色が茜色に染まる頃、ユキネは闘技場に足を踏み入れた。闘技場の周りにはいくつもの巨大な松明が置かれ、明る過ぎるほどには光量が存在している。

アキラの予選の合否はハルユキの事を改めて謝りに行った時に聞いた。

詳細こそ聞いていないが、ものの数分ほどで決着が付いたそうだ。腕を買われて婿候補として来ているだけはある。

一度息をついてから周りを見渡す。

七割は成年か熟年の男性。所々に女性が混じっているがそのうちの九割はある程度名が知れた傑物であるようで向けられているのは警戒の念。

残りの一割がつまりユキネな訳だが、予想通り奇異の眼差しを一身に受けていた。

しかしフェンのときほどそれは酷くはなく、誰か自粛するように諭される事もなかった。

フェンとは違いユキネは十六歳相当の背格好をしているのが、そうならない理由として一つ。

そしてもう一つの理由としては、手に持った巨大なクレイモアと少女が身に纏うものとは思えない程の鎧があるだろう。

最初に行った武具屋の中で三番目に根が張る代物だそうだ。

少し重すぎる気がするがそのお陰で防御力の方は問題ないはずだ。確かダマスカス鋼に何かの牙を混ぜ込んだのだとかなんとかかんとか。

既に出現させている剣も、周りの威嚇を買って出てくれている。

ユキネに適応しているのかユキネが持つ場合には筆でも持っているかのようにほとんど重さを感じないが、本来ならしっかりと体が出来た男が使うような剣であり、それを少女が片手で担いでいるのが不気味さを醸しているらしい。

鎧の着心地がぎこちなくて、慣れた剣の腹を額に当てる。

冷たくて硬い鉄の感触が今は落ち着きを与えてくれた。

落ち着いて初めて、自分の意識がどこか上の空に浮かんでいた事

を自覚する。

視線を上げると、もうほとんどの人間が周りの人間と、ある程度離れて臨戦態勢に入っているのが見えた。

ある者は拳を固め、ある者は杖を掲げ、ある者は剣を構える。

ユキネもその場で剣を構え、いつでも剣が振れるように集中する。

そして間も無く開戦を告げる銅鑼が鳴った。

比喩などではなく、一瞬で闘技場内の気温が上がった気がした。

どの人間も近くの人間に襲い掛かる。ある者は剣の一振りで数人を吹き飛ばし、ある者はそこら中で火を爆ぜさせる。

上手く働かない頭にとって、それは実に好都合なものだった。

ただ無心に、剣を振るだけでいいのだから。

剣を構える。

「……ぁ」

何の前触れもなしに、ユキネの中から戦意が抜け落ちた。

呆然とする。

頭の中でいろんな思考が混同する。

集中しろ。

銅鑼が鳴った。

剣と魔法が飛び交っているぞ。

しかし鎧が重い。

いや体が重い。

何で。

何で？　当たり前だ。

そもそも自分を奮い立たせるものが何もない。

惰性でこんな所に立つのがおかしい。

ユキネに迫るのは工夫も見えない刃と土色の魔法。

下げてしまった剣を上げることもできず、ユキネは迫る暴虐をその身に受けた。

遠い二人（後書き）

感想アドバイス等いつでもお待ちしております。

常闇と顎（前書き）

グロ注意。

常闇と顎

目を覚まして、最初に天井が見えて、そして自分が負けてしまったのを悟った。

身を起こすと、胸から胴体にかけて鈍い痛みが走った。その部分に目をやればきっちりと包帯が巻かれている。

しかし外傷があるわけではなく、ただの打ち身で済んでいるようだ。魔法で治療されたのかほとんど痛みも無い。

視界を広げると直ぐ傍に歪に凹んでしまった鎧が置かれていた。もう使えないだろうが、ユキネの体を守ってくれたらしい。

さらに視界を広げると、ユキネと同じようにベッドに横たわり治療を受けている人が見受けられた。

それに向こうの入り口の方からとてとてとフェンが近付いてきているのを見つけた。

フェンが近付いてくる間に、もう一度辺りを見渡す。

「…飲む？」

「ありがとう」

フェンから差し出された飲み物をありがたく受け取った。

ベッドから足を下ろし、コップを受け取った。自分でも気付かないうちにのどがかなり渇いていたのか、一度コップを傾ける間に中身は空になった。

フェンも自分の分のお茶をゆっくりと口に含むように飲んでいる。

それを見て少しだけ和んだ後、もう一度部屋を見渡した。

視線に気付いたフェンが口を開く。

「…ハルユキは、予選が終わって、用事があるからって、帰った」

「……え…？」

ぐわん、と一瞬世界が屈曲した気がして、思わず下を向く。

ひょっとしたら予選のダメージが残っているせいかもしれない。

しかし、恐らく本当の理由はもっと、我侭で独り善がりなものだと何となく分かっていた。

またしてもハルユキの事。

私を置いて、いなく、なった。ただそれだけの事に、世界は揺れ

る。

それなのに、乾いていく口が震えながらも笑顔の形を作っている。そんな自分が更に歪だった。

「…そうか。……帰った、か」

周りばかり見渡していたのは、知れずハルユキの姿を探してしまっていたらしい。その証拠に、もう周りを見渡す気は失せていた。

我侭な話だけどそれでも。それでも――。

「……帰る？」

「…そうだな」

もう完全に陽が落ちてしまっているのが、窓から入ってくる外気から察することが出来た。

待っていてくれたフェンにも申し訳ない。少し何か言いたそうなフェンの背中を押しながら、治療してくれていた兵士と一分程話して外に出た。

昼間とは違い上手い具合に冷えた空気が頬に当たる。これなら宿まで歩くのも苦痛ではないだろう。

「…あ、ごめんな。折角応援してもらったのに何も出来なくて」

その後ろ向きな言葉に、フェンはやっぱり首を横に振ってくれた。

弱くてごめんなさい。

本当はただそれだけ言いたかったのだが、そのまま口にすると嫌味臭く聞こえるのを嫌って、遠まわしに当たり障り無い言い方に変える。

少しの沈黙を挟んで、当たり障りの無い会話に移った。

ハルユキの話題に触れたくなくて、名前さえも出せないのが悔しかった。

「フェンは、その…、頑張れよ」

フェンの予選の話をするのも何か気まずいものを感じたが、それを意図的に避けるのも何か不自然な気がして、結局そのまま口にした。

比べるのも全く意味の無いことだが、それでもそう言ったのは。

今は自分の矮小さを浮き彫りにして、自分を納得させたかったのかもしれない。

◆
◆
◆

――ハッ…、ハッ…ッ！

夜の冷えた空気に荒い呼吸が溶けていく。

それだけの事が、どうしようもなく恋しくて出鱈目に走り回っていた。

肺に入ってくる空気が新鮮で必要以上に湿気を帯びていないのが嬉しくて堪らない。

しかし、どうしても体の方に限界が近付いてしまい、腰を折り曲げ膝に手を置き呼吸を整えることになった。

ある程度息が整うと今度は逆に腰に手をあてて、思い切り腰を伸展した。狭苦しかった牢とは違い、どこまでも続いている夜空が爽快だ。

「…さて、どうしてくれようか」

見渡す限りここはまた別の倉庫街。

この辺りに潜伏するのが妥当だと言えるだろう。

とりあえずはしっかりした服の調達。食料の確保。住居の獲得が必要な訳だが、住居の方は適当で問題ないだろう。

さっさとある程度の金を作ってこの町を出て行く必要があるのだ。

しばらく歩くと川が流れる音が聞こえてきた。そこから川を見つけるのは大して難しいものではなかった。

ある程度川が綺麗な事を軽く目と感触で確認すると、首から水の中に突っ込んで喉に水を流し込んだ。

「……っはぁッ！」

長い金髪の髪から水が滴る。

やっと満足いくまで潤すことが出来た渇きに笑みを深くしていると、黒い鏡のような川に月明かりで己の顔が映っているのに気付いた。

ボサボサの髪で傷と泥だらけの肌。口の端から水を垂れ流し頭を振るだけでふけが散っている。

途端に、顔から笑みが消えうせた。

代わりに奥歯が割れそうなほど歯が擦れる音が空しく響く。

「く…っそォオオ！！」

逃げるときに兵士から奪った指輪の魔装具が光を放ち、手に集約した魔力が”雷”に変換され、傍にあった木箱を吹き飛ばした。

殺してやる。

驚くほど滑らかにその結論まで行き着いた。

あの親子も、黒髪の男も、王女も、この町に惰性で生き続けている馬鹿な住民共も全て悉く殺害する。

溢れるほどの殺意に息をさらに荒くしながらも、空腹はやって来る。

そして、ふと顔を上げた先の倉庫の一つから、言われなければ気づかないほど微細の光が漏れていることに気づいた。

人がいる。

そこから、その人間を殺して金銭や食料を奪うと言う結論に至るのに、長い時間も、躊躇いも、良心の呵責も、必要なかった。

歪に唇を吊り上げた表情のまま、その倉庫の周りをゆっくりと回る。

すると上手い具合に半開きになっている扉を見つけた。

益々その笑みを深くしながらその扉から体を倉庫内に滑り込ませる。

入って直ぐに積み上げられた木箱が幸いにもサルドの体を隠してくれている。

そして馬鹿のように光を発し続ける標的はその向こうだ。

これなら気付かれる前に奇襲することも出来るだろう。どうやら今夜は神が背中を押してくれているらしい。

口から笑い声が漏れてしまいそうになるのを堪えながら、木箱の壁が切れているところから顔を半分だけ出し、向こう側の様子を伺って。

先ず、笑顔が凍った。

次に滝のように背中に汗が流れ、眼がまばたきを忘れて乾ききっていく。

そして頭がその光景に追い付いた時、大量の疑問が津波のように押し寄せてきた。

しかし明確な回答など得られるわけも無い。未だかつてこのような光景に出会ったことは無いのだ。

およそ、百数十人。

これでもかと言うほどに密集した人間達が。

地面に、いや、そこで口を開けている常闇に。

飲み込まれていた。

異様なのはその非現実的な現象だけではない。

まるでそれを至上の喜びだとでも言うほどに誰一人悲鳴を上げず、それどころか恍惚とした表情を浮かべている。

中には、取り憑かれたかのように周りの人間の服を剥ぎ取っていたり、手当たり次第に歯を立てる者、酷い者には大声で笑いながら自分の喉を中の肉が見えるまで掻き毟っている人間まで存在してい

る。そんな事をしている間に自分の体は闇に飲まれているというのに、だ。

「ぅッ…あ」

その余りに歪な光景に先程飲んだ水が込み上げてきていた。数秒も我慢できずにその場にぶちまけた。

ビシャビシャと品の無い音が倉庫の中に木霊した。

「あら、いらっしゃい」

地獄をそのまま絵図にしたような光景の中で、一人黒尽くめの女が木箱の一つに腰掛けていた。

その姿はまるで影絵のようで、人間味を感じさせてくれない。

繰り広げられる地獄より、深く暗い印象が脳髄に刻み込まれ目を離す事すらできない。

「あ……ぁ…」

そこで一つ異な事に気づいた。

その女の目がこちらを見ていない。いやそもそも先程の言葉が自分に向けられたものではない。

「どうだった？　予選は」

漸く、自分の後ろの存在に気付いた。

「……歯応えが無さ過ぎる。食えねェし殺れねぇェし？　心労が溜まる一方だ」

「まぁ決行まで我慢しなさいな。そこまでいったら好きなだけどうぞ」

「…手前に指図されるまでもねェよ」

「ふん、どうせここに来るまでに腹は満たしてきたのでしょう？」

黒尽くめの女の言葉に、後の男もつまらなそうに倉庫内を見渡しながら、同じように鼻を鳴らした

「一寸、物足りないがな。…ここで調達してるって事はまた計画に変更か？」

「最初は元同士の様子見だったんだけどねぇ。まぁうちの組織は首領の気分次第だから」

「……気にいらねェな。今度は何だ」

「また今度も無理な注文よ。現場は大変だわ」

触れそうな位置関係から聞こえて来る、擦れきった男の声がサルドの精神をひどく磨耗させていく。

先程の全力疾走の後よりも呼吸は荒げてしまっている筈なのに、まるで自分が存在していないような錯覚を起こさせていた。

その方が良い。

今、自分はここに存在していない方が間違いなく幸せだ、と倉庫内に充満した不吉の気配が、サルドの思考をそう強制させる。

「――ところでェ？」

ひょっとしたら、このまま生きてここを出れるのではないかと頭のホンの片隅で思い始めた頃、何か重々しいものがサルドの肩に圧し掛かった。

「〝これ〟はお前からの御夜食（こころづかい）か？」

その重みが、ただ後ろの男が自分に意識を移しただけだと気付いた時には、もう後に全力で飛び右手に大量の魔力を集めていた。

「あぁぁあ、あぁぁあぁぁあぁ！！！！」

言葉にならぬ声を喚き散らし、不気味に破顔する男に全力で右手を振り下ろした。

技でもなんでもない。

ただ雷の魔力をぶつけるだけ。しかしそれでも人一人を殺しきるには十分すぎる手段だ。

その手から放たれた魔力は雷音を轟かせながら、男を黒焦げにする。

はずだった。

――ブン。

聞こえたのは轟音などではなく、ただ自分の腕が空気を切った音だけ。

「”それ”はただの迷い込んだ鴨よ。流石に葱は背負っていないようだけど」

「ああ。――だが中々に良い味してるぜェ？」

何だ？

何を言ってる…？

しかし、それ以前に。

この俺を前に、談笑だと？

笑わせるな。殺してやる。

冷えたサルドの思考がそこまで一気に込み上がり、戦闘意思を沸きあがらせる。

再び、右手に魔力を集中させる。

「え…ぁ？」

そこで初めて、妙に頭が冷えていた原因。頭から血が抜けた原因に気が付いた。

”喰い千切られている”。

自分の、右腕の肘から先が。

「ギッ、！　――ッがァァアああァ亜ァアああ！！！」

掠れて傷ついて裏返って、ごちゃごちゃに感情が混ざり合った絶叫が、サルドの口から暴れながら飛び出した。

「何？　雷魔法？　良いわね、私も半分貰うわ」

痛みに意識を奪われている隙に、蠢く影が逃げ場を潰しながら接近してきている。

「い、あ…ッ、やめ…」
「上半分は俺が貰うぞ」
「嫌よ。下なんて汚いだけじゃない。左右に分けましょ。当然腕なしの右が貴方よ」

蠢く影と、虚空の顎がサルドに迫る。

サルドが最期に聞いたのは何かが縦に引き裂かれる悍(おぞ)ましい音。

そして余りに凄惨に、余りに残酷に。

サルドは、胃袋と常闇にばらばらになって収まった。

常闇と顎（後書き）

感想アドバイス等いつでもお待ちしてます

夜の中から

「――っふ！」

意気に乗せた剣が一呼吸のうちに三回空を切る。

敵はその二つを綺麗に避け、最後の一閃を弾き飛ばすと体制が崩れたユキネを肩から袈裟切りにした。

バタン、と地面に受身もとらずに仰向けに倒れる。

同時に空想していた敵の姿は途端に頭の中から霧散した。

「”母様”は強すぎるな…」

宿から少し裏路に入って少し歩いた所にある広場にユキネはいた。

この町に来たその日に見つけた場所で、この辺りは商業区なので子供が遊んでいることもほとんど無い。

夜になると腹ごなしに剣を振るのが習慣になっていた。時々はフェンに魔法を教えてもらうこともあるがもう今日は一人だ。

それもそのはず、今はもう普通の町なら町後と寝静まっているような時間帯だ。

しかしこの町の、加えてこの時期なら酒場はもちろん町中で夜更けまで騒ぎまくる。

この辺りはまだ住宅街だから物静かだが、大通りに行けばまだどの店も店を閉めてもいないだろう。

今の時間は丁度日付が変わったぐらいだろうか。

普段ならもう寝ている時間帯だし、夜になってからここに来ることもない。

しかし、今日はどうしても眠れなかった。

ベッドに入り、目を閉じて他の仲間達の寝息が聞こえ始めても眠気が一向にやって来そうになかった。

予選で負けてしまった今、別に明日何かある訳でもないし無理に眠る必要はないか、と起きて酒場にでも行こうかと思った。

しかし、そこでハルユキがまだ帰って来ていないのに気付いた。

今顔を合わせるのだけは嫌で。

だから適当に町を歩いていたらこの広場に行き着いたわけだ。

「…馬鹿らしい」

また立ち上がって、剣を握って次の敵を空想する。

”母様”は空想１００％なので適わない。それどころか参考にもならない。

もっと現実的で、戦い方が分かっている人間が良い。

最初に浮かんだのは燃えるように紅い髪で年のころが同じくらいの少女。反射的に頭を振って追い出した。

次に出てきたのは黒髪で見慣れた顔の男。今度は目を瞑って打ち消した。

何度も何度もその二人が、しかも時々は並んで出現した。

どうしても、心から追い出すことが出来なくて構えた剣を地面に下ろす。

そして結局一度も剣を振る事無く、その場にまた倒れこんだ。

勝てるはずも無い勝負なんてしたくない。予選で負けるような人間が、何を夢見ているのだ。

剣を握った指から力を抜き、意識を紛らわせたくて逃げるように夜空を見上げた。

所々厚い雲が出来ているようだが、ユキネの視線の先に雲は無く、運良くも星空を眺めることが出来る。

星空を見て、どうしても思い出しまうものがあった。

半年ほど前に、涙が枯れ果てるほどに泣いた事を。一晩中感じていた温もりを。

思い出すだけで温かくなれるとっておきの思い出だった。しかし、今は夜の肌寒さを際立たせるものでしかない。

瞼が熱い、と感じたときには星空が水をぶちまけたかのように滲んでいた。

両腕を目の上で交差させて、瞼を押さえる。

その代わりに口から、嫌な物が零れた。

「どうして…？」

――どうして、居てくれなかったのだろう。

我侭だと言うことは分かっている。喧嘩もしていたし、この頃はずっと気まずい雰囲気だった。

それでも、目を覚ましてまずその姿を探したのに。

手を握っていて欲しかったのに。

泣きたい時は胸ぐらい貸してやると言ったくせに。

傍に居て欲しいのに。

――勝手だ。自分に吐き気がするほどに。

どこにいるのもそれこそハルユキの自由だ。

今まで居て欲しいときにたまたま居てくれていただけだ。

ハルユキより強くなるなどと宣(のたま)ったのはどの口だ。

子ども扱いするなと言っておきながら、甘えたいなどとふざけるな。

一緒に居る事に、後ろめたささえ感じていたのも。

たかが予選で敗退したのも。

ハルユキとノインが一緒にいるのを見れないのも。

ここで一人で泣いている事でさえ。

全て全て何もかも。

私が、弱いからなのに。

今、ノインと一緒に居るのだろうか。ノインが居れば自分は要らないのだろうか、と。

そんな非力な考えが頭の中を占めていることが許せない。

考えていく内に顔がぐしゃぐしゃに歪んでいくのが分かった。

込み上げる怒りに任せて剣を握った。立ち上がると既に空想の敵などいない。

好都合だ。

何もない夜の闇に向かって出鱈目に剣を振り下ろした。

何度も、

何度も。

そして不意に。

ボロッと、抑えるモノが無くなった目から熱いものが零れて、頬を伝った。

構わず思い切り剣を振るとそれは空気中に弾き飛ばされる。

零れて。また振り切る。

でも、一度零れてしまったら剣のほうが追いつかなかった。

腕が震え、結局またすぐに剣が地面に落ちた。

「…っぅ…ぁ」

嗚咽を漏らしながらその場にへたりこんだ。

今更声を我慢した所で何が変わるわけも無い。意味もない。

しかし一体自分の中の何が許さないのか、ただ必死に唇をかみ締めて声を押し殺しながら、只管溢れてくる涙を拭いていた。

自分のえづく音が広場に消えて行く中で。

不意に。

ヒュン、と風を切る音が聞こえた。

そしてその一瞬後、十メートルほど向こうの地面に何かが衝突して砂塵を巻き上げた。

「え……？　うわッ…！？」

ドドドドド度ドドドドドドド度ドドドドドド呶呶ドド弩ドドドドドドドドドド奴どドドドドドドドドドドドドドドドド弩――――…！

息つく間も無く、そして当然事態を把握していないユキネに構うことも無く、最初の何かを追うように、砂塵を切り裂きながら剣弾の雨が降り注いだ。

剣は最初から血に染まっている。いや、むしろ”血で構成されている”ように真紅に光っていた。

「レイ…！？」

屋根の上で今までに見たことが無いほど無表情で剣の雨を眺めている女は間違いなく。月明かりの下で艶やか振袖をはためかせている血の鬼は間違いなく――。

その間も剣の行進が止む事はない。毎秒数十本という規模で打ち出される剣群はその先の尽くを塵殺する。

地面ごと削りとって葬り去っていく光景に一種の憧れさえも抱きそうになっていた頃、ようやく地面を掘削する音が止んだ。

剣の雨が上がり風が砂塵を吹き飛ばしその跡が露になる。

壮絶だった。

平地だった地面は大きく放射状に抉り取られ、その中心には紅い剣が塔のように突き刺さりながら積み上がっている。

全く状況を把握できない、がどうやら何か一つの出来事が終わったらしい事は理解できた。変わらず屋根の上で剣の塔を睨みつけるレイに声をかけようと口を開けた。

その瞬間。

「ッ―gt――ァ――…、―spl――ッ!!!!」

鼓膜に。

直接刃を入れたかのような痛みが走った。

「何、だ…!?」

押さえた手を苦ともせずに耳を襲うその痛みの正体は、音。しかも恐らくは叫び声。

今まで聞いた事が無いような高すぎる音に、言葉として意味なんてあるはずもない。

しかし何故かそれは人間の断末魔のように聞こえて、一瞬で全身の肌を粟だたせていく。

直後、剣の塔の間、まさに針の間ほどの隙間から何かが這い出してくるのが見えた。

それは蟲のようで、蛇のようで、針のようで、呪のようで、血のようで。

そんな生理的に受け付けないものを全て足して割った様な印象を脳髄に刻み付けられる。

「――”終盤”」

そんな凶声を押し退け得るとは思えない声が、事実呪詛のような声を打ち払って、広場に凛と響いた。

一瞬で真紅の魔法陣が広がる。

更に僅か一秒程の時間でそれが大小問わずに数十個複製されていく。

地面が突き刺さった剣さえも紅く赤く染まっていく。――いや、そもそも魔法陣の基盤が剣の配置になっているようだ。

それを看破した事に頭が追いついた瞬間。

合計数十個は在ろうかという程の魔方陣から。

天に向かって赤い魔力の奔流が立ち昇った。

同時に、紅剣群の行進の時よりも黒い叫び声などよりも、比べ物にならないほど巨大な轟音が最早衝撃となり広場に拡がっていく。

吹き飛ばされそうになるのを剣を地面に突き立て何とか堪える。

吹き荒ぶ砂塵の中で何とか目を開け顔を上げる。

すると、何とも形容しがたい姿をしていた黒い不吉が、幻想的ともいえる風景の中に飲み込まれて無念そうに消え去るのが見えた。

やがて魔力の紅い柱はだんだんと痩せ細って光を失っていく。

最後は糸のようにまで柱は細くなり、それが途切れた瞬間、街灯がほっそり照らすだけの夜の闇が戻った。

あっという間にやって来て怒涛のように去って行った出来事に息

を荒げながら夜の闇を見上げていると、強く土を踏む音が聞こえた。

「応、ユキネか。また妙な所で会うのう」

そんな、まるで昼間に喫茶店でたまたま顔を合わせたかのような声と表情でとある吸血鬼が話しかけてきた。

◆◆◆

レイが右手を翳すとあの衝撃でも傷一つ付かなかった紅い剣が液状に形を変え、レイの右手から体内に潜り込んでいった。

「何しとるんじゃ？　こんな時間にこんな所で」

十メートル先で地面を調べながら、声だけでレイが話し掛けてきた。

「…レイこそ、一体何を…？」

声に泣いていた形跡が残っていないかと一瞬警戒したが、多分問

題はなかったと思う。

「儂は吸血鬼じゃからな。言ったじゃろう？　よく命を狙われると」

その言葉は余りに淡々とし過ぎていて、言葉を上手く聞き取れなかった錯覚に陥った。

聞いてはいた。そもそも吸血鬼は命を狙われる立場にあると。

だから、本来なら言葉の意味を考える必要すらない。

しかしあんなものを見て今ようやく、その事が飲み込めた気がした。

「人、なのか…？」

「まあ、人の時もある。ただ大体はああいった人の形をした妖の類じゃの。いやまあ実質は何も分からんのじゃがな」

ふうと溜め息をつきながら、顔を上げた。

「さて今度はお主が答える番じゃ」

「…剣を、振っていたんだ。鍛錬だ」

こちらに歩み寄ってくるレイに向かって笑いながらそう答えた。

鍛錬などとそんな偉いものではなかった。一番近いもので言えばただの八つ当たりだ。それを口にするのがあまりに悔しくて。

自分でも驚くほど滑らかに。

嘘をついた。

随分と、簡単に嘘をつくようになったものだ。

「そんな、泣き腫らした目でか？」

しかし、数百年の生を歩んできた吸血鬼には稚拙なものだったらしい。

慌てて腕で目を覆うが、それはレイの言葉を肯定することでしかなかった。

「ふむ」

レイの視線が一瞬だけ剣に移り、そして直ぐに戻ってきた。

その顔は悪戯を思いついた子供のように。

「鍛錬か。よし、なら少しだけ稽古を付けてやろう」
「え…？」

気付けばレイが懐の中に居た。

速い――。

ユキネは初動に気付くこともできない。

そしてそのまま、拳が作られた右腕がユキネに躊躇無く接近する。

「がッ…！！」
「ほう…！」

無意識の内に剣が手の内にあり、引き寄せられるように拳と体の間に滑り込ませていた。

しかし、人外の筋力を殺しきる事は到底適わず、体ごと数メートル吹き飛ばされる。

地面からも二ｍほどの高さまで押し上げられた。

何て、馬鹿げた身体能力。

「…こ、のッ！」

空中で無理矢理体勢を変え、地面に着地して顔を上げる。

そして目の前に、蹴りの途中で止められた白く艶やかな足。

「……参った」

強制されるでもなく、寸止めされた足に向かって投了した。

「よし立て。もう一手。今度は不意打ち無しじゃ」

「…分かった」

一呼吸置いて、距離をとった。

レイも両手に紅の剣を精製する。

そして、５分後には夜空を見上げていた。

「ふむ、本当は2分の予定だったのじゃが」
「息、一つ、ッ…乱さずに、何を…言うっ」
「別に手加減したわけじゃない。ただお主より儂の方が強かっただけじゃ」

そう言ってカラカラと笑いながら、大の字で転がっているユキネの横に腰掛けた。

「鍛錬という事は何じゃ。来る本戦に向けて特訓か？」
「あ……」

レイは、知らない。

愉快そうに笑うレイの言葉に、何とも言えない気持ち悪さが胸の中に広がる。

「そうじゃの。思っていたよりもお主出来るようじゃからの。ひょっとすればあの馬鹿にも一太刀位いれられるかもしれんぞ」
「いや、そうじゃなくて…」

少しは期待をかけて貰っているのに、それを既に裏切っている。

その事実がユキネの中の罪悪感が肥大させていく。

「何じゃ。優勝でも狙っているのか。そうじゃな、組み合わせ次第では如何にかならん事も…」
「…レイ」

罪悪感が体から形を変えて溢れてきそうで、堪らず上体を起こし、レイの声を阻んだ。

「負けた…。私は今日。予選で、負けたんだ」
「……」

顔を見ることなど到底出来ず、足元の芝生を見ながら呟いた。
ほんの少しだけ気まずい沈黙が続いて、ゆっくりとレイの口が開く気配が伝わってきた。

そして――。

「知っとるわ、バーカ」

そんな事を言い腐りやがった。

え？　と我ながらアホ丸出しの声を出しながらレイに顔を向ける。視線の先には、こちらを指差し馬鹿にしているかのように頬を膨らませて、腹を抱える姿。

胸に抱えていた罪悪感が霧散した、と同時に、こめかみの血管が浮かび上がった。

「……帰れ、性悪にーと」

ビクン、と一際大きくレイの体が震えて、その後ゆっくりこちらを向いた。

表情としては笑顔に分類されるであろうその顔には、私と同じように血管がしっかりと浮き出ている。

「…よーしもう一遍鍛錬といこうか泣き虫娘」

「臨む所だ穀潰し婆…！」

一瞬空いて、お互いに斥力でも働いているのかというほどの勢いで距離をとり、再び先程の斥力を超える速さで接近した。

ほんの一握りの憤りが、涙を止めてくれているのは、何となく自覚していた。

夜の中から（後書き）

感想アドバイス誤字脱字報告等いつでもお待ちしております。

万売り

チチチチ…。と。

中々に優雅な小鳥の囀りで、目を覚ました。

まるで小説の一節のようだと自分で思って、自分で嫌になり顔をしかめる。

頭を振って眠気を追い払いながら体を起こす。すぐ傍の窓の外では既に喧騒が復活していた。

まどろむ目でしばらく誰もいない部屋を眺めていると、昨日の記憶が途中で無くなっている事に気付いた。

眠気を噛み殺しながら記憶をほじくり返すが、レイと喧嘩になって二回目の鍛錬の後の事がどうしても思い出せない。

代わりに胃が空腹を思い出したようなので、諦めて顔を上げる。

するとそれを待っていたかのように扉が開いて誰かが入ってきた。

「……起きておったか、ユキネ」

「…何だその間は？」

ユキネの言葉に全く耳を貸さない唯我独尊ぶりでずかずかとユキネに歩み寄ると、捲くし立てるように言葉を発した。

「行くぞ。準備しろ」
「え？」

どこに？　何をしに？　と聞き返す前にレイの体がユキネを引っ張り上げた。

「何を不思議そうな顔をしておる」

不思議そうな顔でレイがユキネの様子に疑問を呈した。

「まさか、知らんのか？」
「何を？」
「兵士に説明された、と聞いておったが？」

兵士に説明。

そう言えば、昨日闘技場に出る前に何か言われたような気がするが、あの時は上の空だったので、会話の内容が欠片も頭に残っていない。

頭を抱えるユキネの様子に一つ溜め息をつくとレイが呆れたよう

に半開きの目でユキネを見据えた。

「敗者復活戦じゃ」

「――え？」

「予選方法のせいで、毎年必ずと言っていいほど発生する事態らしいの。だから明日からが本戦なんじゃろ」

敗者、復活。

「運良く、お前の試合の勝者が、今朝方怪我が酷くての。棄権したそうじゃ」

それは当然、もう一度剣を持って戦うという事。

少しだけ体が竦んだのが分かった。

「…でも、私は」

「うるさい」

ユキネの言葉をレイがもの凄く不機嫌な声で遮った。

「レイ…？」
「ここを見ろ」

困惑するユキネに見せ付けるように、レイは右手で自分の首筋を指差した。

何事かと、その場所に目を凝らすと、顎に隠れて何か白いものが見え隠れしていた。

「絆創膏…？」
「昨日の鍛錬の十二本目でお主の剣の腹が思い切り打ち付けた跡じゃ」
「…すまん。覚えてない」

どうやら怪我をさせてしまっていたらしい。

しかし、それはつまり一本取れたという事だと気付き、申し訳無さと更に驚きも大きくなっていく。

しかしやはり申し訳無さが先行していた。

何しろそのこと自体覚えていないのだ。謝るにしても誠実さに欠ける…。

「まあ、その後思いっきりジャーマン極めたがの」
「お前のせいかッ！！」

道理で後頭部が痛むはず。

ジャーマンを極めた時の事を思い出したのか少しだけ気が晴れた顔を見せたが、直ぐにその顔が不機嫌になっていく。

「つまり、儂から一本取ったお主が予選落ちなぞ許されんわけじゃ、分かるな」
「いや、微妙だろ、それは…」

理不尽に抵抗するユキネを無視して、レイは懐から何かを取り出した。

「ほれ、持って行け。失くすなよ」

失くすなと言った割には、ぞんざいにユキネにそれを放った。

放物線を描きながら、ユキネの元に付くまでに、陽を浴びてきらきらと光を反射させていた。

「指輪…？」

ユキネの手の中に吸い込まれるように収まったのは、一つの小さな指輪。

白金色のリングに、米粒ほどの小さな青い宝石が慎ましく煌めいている。

「こんな物、どうやって手に入れたんだか…」

「え…？」

「いいから、それに意識を集中しながら何でもいいから念じろ。装着とか変身とか。何だったらポーズでも決めてみるか？」

「…？」

疑問が大量に残ったままだが、とりあえず言われた通りに、右手に意識を集中した。当然ポーズなど決めない。

そして。

「――――…」

ほんの一瞬だけ視界が白く染まり、直ぐに世界が戻った。

いきなりの光の明滅だったが、不思議と目に閃光の残滓は残っていない。

何だったのかと、辺りを見渡して、にやけるレイの視線に気付い

て、それを目で追って。

そして、気付いた。

「…！　うわぁ…」

最初に見えたのは白金色の胴当て。この間の無骨な鎧とは違い、流麗で落ち着いた雰囲気が滲み出ている。

恐らく同じ素材で両手に篭手も付いている。

その下は白と青を基調とした戦衣になっていて、ふちは金色に刺繍されていてどこか誇り高さを醸し出しているようだ。

そして何と言っても、特筆すべきはその軽さ。

今ユキネは、”鎧を着ている”のだ。それに直ぐには気付けないほどの、一体感と質量は最早異常だといってもいい。

羽のようだ。

この鎧よりこの言葉が似合うものもそうないだろう。

「…やはりこれは、現存の物ではないのか？」

レイが真剣な視線と声を感じる。ユキネも普通の素材でないことぐらいはレイの様子からも察することが出来た。

「こ、これ…？」
「…お前の物じゃよ。貰っておけ」

レイの言葉にほとんど呆気にとられながら、おろおろと部屋を見渡した後、部屋の隅に設置されている鏡の元に走った。

「……似合っとるの、お主」
「そ、そうか？」

満更でもない表情で、ユキネは体を半回転させると、戦意の裾が規則正しくひらめきまた慎ましく元の形に戻る。

少しだけ、顔が綻んだ。

「満足したならさっさと行け」

レイの声で思い出し、ほんの少しだけ鎧が重くなる。

いかに煌びやかだろうが、いくら冷淡な美しさを誇ろうが、これは鎧。戦うための、道具。

先程まであれ程輝いて見えた鏡の向こうが、たちどころに曇っていく。

負ける事ももちろん怖い。怪我をすることだって怖い。

しかしそれ以上に。

全力で頑張ってみて、自分の可能性を全て使って、それで欲しいものまで届かなかったら。

自分がハルユキに、そして、ノインに。

決して届かないという事を確認してしまうのが怖い。

その怖さを覆して体を動かすものが、何もないのだ。

「何も無いのが、何も見えないのがそんなに怖いか」

滲み出して、吹き溜まって、腐りそうだったそれを、レイが掬(すく)った。

簡単じゃ、と見下すように笑いながら言葉を繋げて、レイが更に言葉を続ける。

「今いる場所から何も見つからないなら、移動すれば良い」

下を向くユキネの体が震えようが、例え膝から崩れ落ちようが、若しくは例え泣き叫んだとしても、レイは言葉を止めない。

「何も考えずに動けばいいじゃろうか。そんな事出来るのは若いうちだけじゃぞ」

ごん、と不器用な手つきでユキネの額を小突いた。

「――行け」

強い、押し流すような口調。

心は決まらない。

でも体の方がもう動きそうだった。

強い、押し流すような口調に背中を押されたせいで。

どこまで子供なんだ、私は。とまた自分が嫌になる。

顔は上がらない。

それなら、俯いたままでいい。

ただ少しだけ足を進めればいい。

優しさの使い方がへたくそな仲間に、ここまでさせて動かないわけにはいかない。

今は、その作ってもらった理由で、前に進める。

「ごめん。行ってくる」

「ダッシュで行け」

部屋から出て行くユキネを最後まで見送る事無く、レイはベッドに座り込んだ。

「全く世話の焼ける…」

そして盛大に溜め息をついて、何となく退屈を感じた。自分も参加すれば良かったと、ほんの少し後悔する。

「あの指輪…」

間違いなく、今手に入るようなものではない。

使われている素材に見覚えすらないのだ。いや更に言えば８００年の生の中でさえ見たことがない。

しかし、あまり不思議だと思ってはいない自分が居た。何しろ。

入手元が入手元だ。

「運が良い奴じゃの…」

あの黒髪の馬鹿は全く。

◆

◆

◆

「駄目だな…。これじゃ」

五軒目の防具屋の鎧を一通り見終えて、ハルユキは焦ったように舌打ちをした。

これでは重過ぎる。最初の鎧と何も代わりはしない。

予選を自動小銃（サブマシンガン）を８丁使って二十秒で終わらせたのは良いとして、それでも時間が足りなかった。

祭りの途中で店の閉店が遅れていなかったら、この店にも間に合わなかっただろう。

この店に来る前の二つの店はもう店じまいを終えていた。

ならばもう町中回っても、開いている店など皆無に近いだろう。

この店が見つかった事でさえ僥倖だったのだ。

しかし、結果としてここに望みの物はなかった。

外に出てすぐ月の高さを確認する。

もう一度舌打ちをして、走り出した。

「……ここも駄目か」

完全に閉まっている雨戸の前で溜め息をついた。

看板にはいかにもそれらしい模様が描かれているものの、開いていないのではどうしようもない。

さて、どうするか。

もうこれ以上走り回っても開いている店は無いだろう。

何しろもう日付が変わった後だ。しかしそれでも何とかしなければならない。

夜にもかかわらずほとんど減らない人通りをみて、屋根の上から行くかと、一旦道の端に避けてから足に力をこめた。

「…もし、そこのお方」

もはや壁と言っても過言ではない程の雑踏の中から、声が聞こえた。

声には殺気も敵意も無い。ゆっくりとそちらを向くと、そこに居たのは小さい籠を背負った行商人。

その男大通りから外れるための裏通りに紛れ込むように、こちらをじっと見つめていた。

「もしや、武具でもお探しでしょうか？」

薄い。薄すぎる。

その男を見て、ただそう感じた。

背丈はおよそ１６０ｃｍほど。頭には大きな編み笠を被っていて、良く顔は見えない。

声はなんとか男だと分かるほど程の特徴しかなく、大人なのか老人なのかさえ見当が付かない。

ここから見た限りでは、営業用の笑みを施した唇の端しか見ることはできない。

それ以外に、印象というものが何一つとして見受けられない。

「もし、お客人」

「…ああ、悪い」

しかし、先程言ったように敵意は一切感じられない。

男の声で我に帰ると、短く答えてこちらから男に歩み寄った。

「それで、防具はあるか？」
「はい、一品だけでございますが」

そう言うと、男は”懐”から何かを取り出した。もったいぶる様にそれを拳で隠したままハルユキの前に差し出す。

「…いや、俺は防具を」

そう伝え直しても、男は固めたかのように腕を動かさない。
防具が、もしくは防具に匹敵するものがこの中にあるんだろうか。
その疑問を感じ取ったのか、解答代わりに右手が開いた。

「……指輪、か？」

行商人の割に綺麗な手の中に納まっていたのは、小さな指輪。
銀色のリングに深い光を放つ青い宝石が嵌っている。

「魔装具の一つでございます」

防具ではない。その小さな身では指一本守ることは出来ないだろう。

しかし、どこか威厳のようなものがハルユキの周りの空気にまで漂ってきている気がした。

「ここで指輪の真意をお見せしたい所ですが、これは女性の方がいなければ使えません」

大した値段で無いならここで購入しても問題はない。しかし恐らくそう安い物ではない事ぐらいは察していた。

どうするかと、周りを見渡すと見知った顔が二つ。

屋根の上を滑る様に移動していた。

「…ちょっと待っててくれ」

その影は物凄い速さで屋根を伝い、町の入り組んだ方向へと向かっていく。

しかし、ハルユキが思い切り地面を蹴り全力でそれを追いかけると、数秒後にはその影に追いついていた。

「のわッ！？」

説明するのも面倒で、目の前のレイを腰から担ぎ上げるとそのまま一跳びで商人の元まで戻った。

「……お主いい加減にせんと、しばき倒すぞ…」
「悪い。急ぎだ」

謝罪の念をこめて、気持ちゆっくりとレイを地面に下ろす。

そこで初めて後ろのユキネが気絶している事に気付いた。

「…おい」
「怒るな。尋常なる勝負の上じゃ」
「明日試合があるかもしれないんだぞ、こいつ」
「何？　負けたと聞いたが？」
「誰に」
「ジェミニと、その小娘自身に」
「敗者復活があるかもしれないってのは？」
「…聞いてないな」

…この馬鹿。

どうやら、いやどう考えても、兵士の説明を聞いていなかったのか。

そうでなければ、わざわざ前日の夜中に”尋常なる”仕合いなどするはずがない。

「怪我は？」
「あー…、たんこぶ一つ」
「…まぁ、大丈夫か」

暢気に小さく寝息を立てているユキネの頭を、そっと撫でる。文字通り腫れ物に触れるように。

確かに少しだけ腫れてはいるが、その他に変わったところもないし、寝顔も安らかで幸せそうだ。

少しだけ乱れた金糸の髪を撫で付ける。柔らかくて温かい。まるで髪の先まで血が通っているようだった。

「おや、これは血の姫君。お久しぶりです」

その声で、目的を思い出し、ユキネの髪から手を離した。

「…万売（よろずう）りぃ？　何じゃこんな所で」
「この城に届け物が。それに私も商人の端くれですので。商人は人の多いところに寄って行くものです」
「あんな森中に来ていた奴がよく言うわ」

「あの家は昔からの御得意様ですから」

改めて笠を手で引き下げ、レイに向かって一礼した。

「知り合いなのか…？」
「前に言わんかったか？　イサンの家まで食料やら何やらを運んでくる業者が居ると。それがこやつじゃ」
「以後お見知りおきを。万売りなどをやらせて頂いております」

先程と同じように笠を下げて、ハルユキにも一礼する。

「それで買うのはこの指輪かの？」
「はい、こちら”防具”となっております。しかしこのまま指に嵌めて楽しむだけの物ではありません。使い方があります」
「使い方？」
「はい、此方は女性の方しか使えない仕様になっておりまして…」
「それで、品質確認のために儂を攫った訳か…」
「はい、それではすみませんがこちらを」

献上するように両手の上にのせた指輪をレイの方に差し出した。

それを数秒見つめた後、フンと鼻を鳴らして指輪を手に取り、一言二言万売りと言葉を交わす。

「小僧、金を払え。帰るぞ」

受けとった指輪を無造作に懐に入れると、ハルユキに声をかけた。

「いやお前つけろよ」

「大丈夫じゃ。こやつは変な物を掴ませようとする似非商人とは違う。それにこの時間では他に当ても無いのじゃろう？」

「まあ、そうだけどよ…」

レイの言う事が最もなので黙って黙って財布を出す。しかし、その手を万売りの男がそっと押し止めた。

「それの値は御客様に決めて頂けますか？」

「相変わらずそれをやってるのか…」

「最初の顔合わせのときだけでございますよ。商人として良い印象を売っておきたいのです」

「嘘くさいわ」

値段を決める。

少しだけ考えた後、ハルユキは財布をそのまま男に差し出した。

「……助かった。ありがとう」

「…よろしいのですか？　これだけあれば鎧なぞいくらでも…」

「俺は金の価値もよくわからない。だからいいよ」
「…分かりました。それではありがたく頂きます。代わりと言っては不躾ですがその指輪なら後ろのお嬢さんに相応しいことを保障しましょう」

心なしか、少しだけ微笑を深くすると。

ゆっくり。そして闇に紛れるように。

通路の奥に去って行った。

先程まで男がいた筈の、場所には何の痕跡も余韻も残ってはいない。夢じゃないかと言われればそうかもしれないと答えてしまいそうなほど。

「…いやいや、怪しさ満点だったなあいつ」

あの男の口振りは、まるで買った指輪をユキネが使うことが分かっていた様な口振りだった。しかも恐らくだが、そう気づかせるように話していた。

「得体が知れんのは前からじゃ。忘れろ、どうせ考えても答えは出ん」
「そうだな…」

一切の感情も薄らいでしまったかのような男だったが、ユキネを見た時に少しだけ見せた微笑みが何となくこれ以上男を疑わせなかった。

「それで？　これはお前から渡してやるのか？」

懐から改めて指輪を取り出すと、見せ付けるようにレイがその小さな輪を弄び始めた。

「……いや、お前から渡してやってくれ」
「へたれ」

待ち構えていたかのように言い切るレイの声にハルユキは声を詰まらせた。

「まさかタダでとは言うまいの？」
「…何が望みだ」
「そうじゃのぅ…」

レイは面白そうににやけながら、思索し始めた。

一体どんな無理難題が来るのかと身構えていると、レイが何か思

いついたのかこちらに顔を向けた。

「酒にでも付き合ってもらおうかの」

正直に言って、意表をつかれた。いや度肝を抜かれたといっても過言ではない。

「…それで良いのか？」
「当然おぬしの奢りじゃぞ？」
「まあ、それでいいなら」
「ああ、あとこの馬鹿もお前が運べ。重い」

疲れたように肩を鳴らしながら、レイが爆睡しているユキネをこちらに追いやった。

ゆっくりとそれを背中におぶる。

背中に移ったユキネは、触れたくなくなる程に繊細で柔らかく。

隣から聞こえる寝息が懐かしかった。

万売り（後書き）

感想アドバイス誤字脱字報告等いつでもお待ちしてます。

来週の月曜から金曜までテストが…。

さすがに今度の土日は勉強するので更新不定期になるかも。

蹴り

『それでは、ここにいる３２名で決勝トーナメントを戦っていただきます』

今日も抜ける様に頭上に青空が広がり、太陽が照り付けているわりには涼しげな微風（そよかぜ）が闘技場内を回り道をしながら通過していく。

そんな中、勝ち残った３２名を再び闘技場に集わせて、厳正たる抽選が行われていた。

この間の開催の儀とは違い、闘技場に人の数は少ない。が反比例でもしているのかと言いたくなるほど客席には人間が詰まっている。

闘技場には、昨年優勝者のノインが参加者側に立っているのを始め、アキラやガネット。フェン、ジェミニ、ハルユキ。そして先日何とか敗者復活を果したユキネの姿もあった。既に全員がくじを引き終わり、後は組み合わせの発表を待つだけだ。

『それでは一回戦の発表です』

その声が発端となり、浮ついていた空気が一気に張り詰める。戦いの前の独特の緊張感がそこにあった。

『第一開幕試合。シキノ・ハルユキ　対　ギドド・バーサク』

ハルユキな一回戦の相手は全く聞き覚えの無い名前。

さすがに一回戦からは知り合いには当たらなかったようだ。

続いて、選手の名前が更に読み上げられていく。

そして。

『第三試合。ジェミニ』

聞き覚えのある名前が漸く聞こえた。

『対　ガネット・シュプリーゲ』

続いて、もう一つ。

一回戦から顔見知りの食い合いが決定した。

ここから見える二人は別に慌てる風でもなく、ジェミニは笑みを保ち、ガネットも微笑みながら余裕気に眼鏡の位置を直している。

その後も滞りなく抽選の発表は続いたが、結局知り合いがぶつかったのはその一試合だけ。

しかし、これはトーナメント。お互いが勝ち上がれば必ず当たるのだ。一々気を揉むものでもない。

「…さて、と」

誰もが控え室を通って、一旦外に出て行く中で、ハルユキだけが控え室に残った。

闘技場を挟んで向かいにあるもう一つの控え室では、ハルユキの対戦選手が同じように控えているだろう。

試合開始は抽選終了の十分後。

誰もが一回戦に当たる事を警戒して準備は万端だったはずだ。

ハルユキは一切準備などしておらず、と言うより必要が無かっただけだが、ともあれその栄誉ある一回戦に選ばれてしまった訳だ。

別に何か理由があるわけではないが、一番最初というのは何か落ち着かないという気持ちは分かって貰えないだろうか。

同じ栄誉に預かった、その対戦相手の名前は、確かギドド・バーサク。

まぁ、聞いたことも無い名前だから、一回戦の相手には丁度いいぐらいだろう。

「それでは入場してください」

あっという間に十分が経ったのか赤と白で塗られた正装を身に纏った女性が、静かに一礼してそう告げてきた。

腰を上げて闘技場に向かう。闘技場に続く通路を歩くたびに、空気に何か熱いものが増えていくのがわかった。多分それは気温などではない。

闘技場に足を踏み入れた瞬間、強い日光が上から差し込んできた。視線を上げると太陽の位置はほとんど真上。恐らく時刻は１１時ほど。暑さは更に勢いを増していくことだろう。

空から視線を下げると、熱せられた床石の上に立ち上る陽炎の向こうに対戦相手の姿が映った。

「何だ、あいつか…」

視線の先には3メートルを超える大男。アキラと一悶着あったあの男だ。どうやら結構実力はある男だったらしい。

「おい、お前」

この大会では、お互いに三メートルほど離れた位置が試合開始直前の所定位置になっている。

そこに付いた途端、男が無遠慮な声でハルユキに向かって無骨な声を向けた。

「これはこの頃かなり言ってるんだがなぁ、ここはガキの遊び場じゃない。”本当の戦士”だけが集う誇り高い場所なんだよ、俺みたいにな。分かってんのかテメェ等はそこの所」

「へー…」

観客席の方に耳を少し傾けるだけで、引っ切り無しに歓声が聞こえてくる。

結構な数の対戦相手の名が聞こえてきていて、ハルユキを応援する声は流石に聞こえてこない。

「だから、俺が負けさせてやるよ。万が一手加減し損ねてお前を殺しちまったら、俺も失格だし双方に旨味が無い。分かるな？」

これだけ声援があるという事はこの男も中々有名な男なのだろうか。しかしまあ、確かに２０００名以上の中の３２名だ。雑魚のはずもない。

「……おい、テメェ聞いてんのか…！」

「ああ、悪い。えー…と、何？　昏倒の戦士？　だっけ？」
「……テメェは殺すって言ったんだよ！」

怒らせつもりなどそもそも無かったのだが、意識を戻してみれば既に男は激昂していた。アキラの時もそうだったが、もうちょっと辛抱というものを覚えたらどうだろうか。

『さぁて、例年通り開始の合図は俺様が仕切る事になっている。が、その前に優勝レートでも確認しとくかなっと…。おいおい！　…こりゃもう勝負見えてねぇ？』

直ぐにハルユキとギドドのレートが発表される。

それを聞いて、思わずハルユキは顔をしかめた。

それもそのはず、ギドドのレートは約１２倍程だが、ハルユキに至っては、５９６倍。

またこの試合だけの賭けもあったようだが、それも圧倒的大差でハルユキが劣勢だった。

『しかもこの男、ギドドとは違って、銅鑼が鳴るか鳴らないかという程のタイミングで道具を使って不意打ちしたそうだ！　恥を知れこのダーティー野郎！！』

その実況に続いて、観客席からブーイングが立ち昇る。

実際には確かに開始後だったし、急いでいたからしょうがないと言い訳もしたかったが、悪役（ヒール）も悪くないか、とブーイングに向けて薄く笑ってみせる。

「それにしても…」

超大穴だな、と一人呟く。単勝で５９６倍とは中々えげつない。

溜め息をつきながら、顔を前に向けると、レートの圧倒的大差に機嫌を直したでかい顔面が目にチラついた。

「５９６倍か。なんとも浪漫が詰まった数字じゃねぇか、卑怯者（ダーティー）」

「……俺は夢を追い続ける大人なんでな」

王座に続く階段の途中の横に設置されている銅鑼の隣に、一人の兵士が立った。

そろそろ始まるらしい。

『――さあ諸君！　今日はわざわざこのクソ暑い中、よくもやって来やがってありがとう！！

馬鹿みたいに汗水垂らしながら、あの銅鑼が鳴る時を待っている事だろう！』

その声に野次好きな群集たちが笑いながら、罵倒を返す。

『敢えて言う！　安心しろ！！』

今度はその声を発端に罵声も歓声も収まっていく。

『こんな馬鹿な所に集結した大馬鹿共に！
あんな遠くの光の玉なんざより、もっとクソ熱いモノを保障しよう！
枯れ果てるまで一緒に熱くなるのがテメェラの今日の役目だ！！』

声の大きさこそ小さくなっていくものの、熱気はそれに反比例して上昇していく。

『存分に！』
『騒ぎ散らせ！！』

一瞬だけ、何かを貯めるように完全な静寂が訪れ。

『試合、開始ィ――――！！』

響き渡る銅鑼の音の一瞬後。

足踏みと歓声と罵声と嬌声と手拍子と楽音と。様々な音が一つの生き物のように混ざり合いながら、闘技場上に注ぎ込まれた。

耳を塞ぎたくなるような暴音が、鼓膜を叩いて全身を振るわせた。

それは興奮した時の感覚によく似ている。

そして銅鑼が鳴ると同時に岩の弾丸がハルユキに向かってきていた。

その岩は威嚇だったようで、ハルユキの服を掠めて、数メートル先の地面に激突した。それだけで会場のボルテージは際限無しに上がっていく。

「――”塗壁（ぬりかべ）”」

そして、絶え間ない歓声の中、興奮と暴音に身を震わせながら、ギドドがさらに呪を口にした。

ゴドン、と重々しい音がして床石が外れて宙に浮く。

「おお…！」

どうも普通の魔法ではないらしい。正直まだ珍しい魔法を見ると心は躍るのだ。

魔力の方も秀逸らしく、浮いた床石は一つだけでは収まらない。巨大で分厚い床石が幾つも宙に浮く。

そして、それが。

ギドドに向かって突進した。

ギドドの体に床石が当たるその瞬間に床石は形を変え、ギドドの体を覆っていく。

幾つも幾つも塗り固められ、更に純粋に魔力から精製した岩もギドドの体にへばり付いていった。

そして。

五秒後には、５メートルを超える岩の巨人が目の前でこちらを見下ろしていた。

「ごついな…」

ハルユキは半分呆れたようにその傑作を見上げながら、小指から順々に骨を鳴らしていき、首を左右に二回捻ってこれも骨を鳴らして、準備を終える。

ここはうるさい。

早く帰るに限る。

「…さぁて？　そろそろ死ぬか？　それとも謝って命拾うか？　今ならまだ選択肢が――」

「お前が吹っ飛んで気絶して恥晒すでファイナルアンサー」

ギドドの妄言を押しやって、言葉を投げつける。

同時に。

しっ、と短く息を吐き出して、ギドドの横に跳躍した。

ギドドの目はまだにやけた顔のままハルユキが居た所を見つめている。

人間とは最早造りから異なった、硬質でいて柔軟な筋肉がハルユキの意思に従い、撓(しな)り、軋み、膨れ上がる。

ギドドの目はまだこちらに向かない。

その目が今のハルユキに気付くのを待たずに、ハルユキの右足が岩の皮膚に減り込んでいく。

そして。

一万を超える程の観客の視界から、岩の巨人の姿が消えた。

直後。

歓声の波を全て弾き飛ばすかのような、いや文字通り全て弾き飛ばし消滅させて。

轟音が二万の耳を劈(つんざ)いた。

観客の目線が一斉に、轟音の元に移動する。

二万の目に見つめられるのは、

吹っ飛んで気絶して恥を晒す男の姿。

衝撃の余韻で壁にめり込んでいた男が、重力を思い出し地面に落下する。

ザシャッと男が着地する厳つい音を最後に、闘技場内から音が消えた。

その静寂は恐らく、この町の、何時、どの場所より静かだっただろう。

完全に静寂だけが跋扈する空間。

一人残らず身動きすらしない。

話すのはもちろん、手に持った飲み物を口に運ぶことも、立ち上

がることも、そして息をする事さえも、完全に忘却していた。

その静寂を破ったのは、きっかり三秒後。

『……こりゃ驚いた』

嵐の実況者の、乾いたそよ風のような声だった。

そしてそれに続いて、我先にとばかりに。

興奮の坩堝が。

闘技場内を震撼させた。

『勝者ァアあ!!　シキノ・ハルユキ!!!!　金返せバカヤロォオオ!!!!!!』

その実況で思い出したかのように、そこら中でこの試合での賭けに負けた大過半数の人間の悲鳴あがり始める。

しかしそれ以上の巨大さで。

天を衝くような歓声が、しばらくハルユキの脳髄を揺らしていた。

◆

闘技場を出てすぐの階段を下りる。

後ではまだ歓声が鳴り止んでいない。それどころか多分この熱気のまま一日中騒ぎ立てるのだろう。

太陽も激しく照りつける中、実際大したものだ。

通路の陽が当たっていた場所を抜け、日陰の位置に入ると途端に涼しくなり、静かに通り抜ける空気が汗に湿った肌にとても心地良い。

「おめでとさん、ハルユキ。中々派手やったなぁ」

「初っ端だからな。盛り上げ役ぐらいやるさ」

その涼しさを堪能しながら控え室に戻ってくると、二つ先の試合に備えてジェミニが控え室にやって来ていた。

ハルユキはジェミニが座っている横に座り込むと、小さく息をついた。

幸い壁の接するように置かれているので、壁に背中と後頭部をつけて寄りかかる。

「皆は客席にいるで」
「ああ、知ってる。さっき見つけた。それより、お前次大丈夫か」
「次？」
「ガネットってのは、俺とユキネとフェンは顔見知りでな。多分結構強いぞ」

実際に見た事はないし、同じ立場のアキラの戦いさえ見た事は無いが、あのムイリオとかいう爺は結構なものだった。

あれに連れて来られたという事は、少なくとも先ほどにギドドよりも弱いとは考えられない。

「ワイの心配か。余裕やな」
「余裕でな」

一際大きくなった歓声が、闘技場側から聞こえてきた。どうやら、ハルユキの対戦相手が決定したらしい。

試合が終わったことを確認して、ジェミニが席を立った。

「ワイがこれに出たんは、別に優勝したいからやないで」
「…何？」

「ワイは、”三回”勝つつもりや」
「…ふん」

三回。

ガネットに勝って、もう一回勝って、その次まで。

だから、それはつまりハルユキにも負けるつもりは無いと。

「お前じゃ、二回までが限度だな」
「ま、とりあえずはこの試合やな。少し体でも温めてくるわ」

ひらひらと手を振りながら、外に出て行った。次の試合までの二十分は重要なのだろう。

三回戦。

そこでジェミニと当たる。当然ハルユキとジェミニが勝ち進めれば、の話だが。

少しだけそれを想像して、少しだけ期待に胸が膨らんだのは否定できない。

「…隣を失礼する」

不意に、ドサッと音を立ててジェミニが先程まで座っていた所に男が座り込んだ。

訝しげに目を向けると、黒い覆面に黒い外套を体中に纏った男が息をつきながらこちらを見ていた。

覆面と外套が完全に体を覆っていて、唯一露出している両目だけでは圧倒的に得られる情報が少ない。

「何、少し挨拶しておこうと思ったのでな。シキノ・ハルユキ殿」
「お前は…？」
「失礼。某（それがし）は…。否、これまた失礼。本の名は名乗れぬのだった。偽名だがこの催しではコジロウと名乗っている」

小さく会釈して、男は堂々と偽名を騙った。

それにしても、体を隠し、顔を隠し、更に名前まで偽名とは。

怪しさ全開である。

「……怪しい者ではないぞ？」
「嘘付け」

反射的にそう言っていた。流石にこれを見て怪しくないと言えるほど世の中を甘く見ていない。

ハルユキのその反応を見て諦めたのか、自称コジロウが話題を変えるべく、口を開く。

「当たるのは準決勝。貴殿を倒せば、あの王女を貰って行ける様なのでな。倒させて貰うよ」

「…それは婿の候補だけだ。ガネットとアキラ以外には無効だろ」

「それでも口説く事ぐらいは出来るだろうさ」

「――へぇ、誰を口説くの？」

後ろから奔放を形にした様な、しかしそれでいて凛々しい声が聞こえた。

「こ、これは王女殿。お耳汚しを」

「いいわよ、別に」

「は、不遜でした」

「そうじゃなくて。この男を倒せるって言うんなら、例え攫って貰っても」

コジロウが言葉を失って、ノインから視線を外せなくなった。

対して、ノインは薄く微笑んでその目を見つめ返している。

不意に、コジロウは目を細めて笑いながら立ち上がった。

「……成程。大した信頼がお有りのようだ」

そう言ってノインに一礼すると、コジロウは外套をひらめかせながら控え室の外に向かった。

ふと、コジロウは控え室の出入り口で足を止め、こちらを振り向いた。

「最初に言っておきますが、某に愛はありません。しかし我が国の為に貴女を力尽くで奪い取ります。どうか平にご容赦を」

そう言うと、靴を鳴らして姿を消した。

それを確認して、今度はノインが隣に座り込んだ。

「…で、どうした？　何かあったか？」

「何も無いわ。何となく貴方の顔が見たかっただけ」

不意打ちに、思わず固まった。

「…さっきの男、強そうだったけど大丈夫？」

「負けねぇよ」

「お礼を言うところかしら？」

「別にお前の為だとは…」

「少しも無いの？」
「……少しもって事は無いが」
「いいのよ。少しでも」

ノインの態度がどうも違うという事に何となく気が付いた。

えらく萎らしい態度にどうにも調子が狂う。

ここ最近忘れかけていたが。

目の前の少女は自分のことが好き、らしい。俄かに信じがたいが、騙されていなければどうもそういうことなのだ。

その事を意識してしまうと、言葉が喉から素直に出てこない。

不意に、ハルユキの手に何か温かいものが重なった。

慣れない感触に、肩が少しだけ跳ねる。

何事かと手をみると、

ノインの手が控えめに重なっていた。

「嬉しいものよ。少しでも自分の為に戦ってくれてるっていうのは」
「…そ、そうなのか？」
「当たり前じゃない」

そして、多分何時ものように笑っていたはずだ。

しかし、気恥ずかしくて顔を向けようと思わない。情けない事に。

少しだけ手を握る力が強くなって。

そして、目の端に赤い髪がチラついたかと思った時には既に。

柔らかい感触が頬に当たっていた。

ほんの一瞬触れさせただけでノインは唇を離す。

「…言っとくけどね」

一変して、何時もの堂々とした態度で口を開く。ただし顔は髪に負けないくらい真っ赤だったが。

「…私も死ぬほど恥ずかしいわ」

「じゃあ、するなよ…」

間違いなく自分の方が恥ずかしいと断言できる。

「それでも、それ以上にしたかったんだから。…しょうがないじゃ

ない」
「……いや、俺は、別に…」

違う。

この反応は正解ではないぞと自分で分かってはいたが、それ以外の言葉が浮かんでこない。

ハルユキが口篭ると、ノインは悪戯好きの子供のような笑顔を披露してみせた。

計算だったのか、それとも計算していると見せたかったのか、そんな物はわからない。

「じゃ、また勝ってくれたらご褒美をあげるわ」
「…慎んでお断りします」
「駄目よ」

会話は終わった。

手はまだ重なったまま。

それからしばらくして。

そっと、名残惜しそうにノインの方から手が離れた。

「さ、私も一回戦の準備してこようかしら」
「…頑張れよ」
「ええ。ありがとう」

さっと立ち上がると、一度ハルユキの方を見てもう少し何か話したそうに顔を向けるが、結局何も言わずに立ち去っていった。

蹴り（後書き）

感想アドバイス等お待ちしています。

誰がために己がために（前書き）

消し方分からないのでこっそり更新。
ｐｓｙｒｅｎ終わっちまった…。岩代先生の次回作にすごく期待してます。

誰がために己がために

階段を上がりきって、目の前に青空が広がった瞬間、第三試合の選手が揃った事を告げてきた。

闘技場の上に視線を落とすと、確かに見覚えがある二人が向かい合って、何か言葉を交換していた。

この歓声の中さすがに聞こえてはこないが、何やら仲良さげな雰囲気だ。何か通じ合うものでもあるのだろうか。まあ想像に難くはないが。

「シア？　来てたのか」

周りを見渡すと、闘技場を挟んだ向こう側にシアが歩いているのを見つけた。

歩く先にもう一人。決して派手ではないが、相変わらず目立つ和服を着たレイが、こちらに向かって手招きしている。

どうやらこちらに気付いているらしい。

周りに他の知り合いもいなかったので、のんびりと歩いて行った。

歩く間に実況が聞こえてくる。レートとしては大凡（おおよそ）五分五分。

ジェミニもガネットも背格好は同じほどである上に、余り名が知られてもいないから妥当といったところだろう。

それでも、ハルユキの倍率よりは良い事に変わりはなかった。調べて見ればフェンやユキネよりも倍率が高いのだ。あの二人は容姿が目立つからしょうがないかもしれないが。

「おう小僧、出せ」
「…どこのチンピラだお前は」
「何でも手軽に涼をとる便利道具があるらしいじゃないか、それくれ」
「…ほらよ」

適当に練成して、レイに放りながらその隣に腰掛けた。

何か頬に視線を感じて、レイの向こうを覗いてみると、シアが申し訳なさそうにうな垂れていた。

何事かと思ったが、レイとシアの手元に置かれている飲み物を見比べている所を見ると、成程、ハルユキの飲み物がない事を気にしているらしい。

たまたま、ここに来る途中で買ったお茶を見せてやると、一瞬キョトンとした後、やわらかく微笑んだ。

ハッとして、シアは直ぐに闘技場のジェミニに視線を戻してしま

ったが。

その仕草を微笑ましく思いながら、ハルユキも視線を闘技場に落とす。

先程までとは明らかに空気が変わっていた。戦いの前の雰囲気に。

「ん…？」

いや、少し違う。

戦いと言うよりは、何か確執があるような。

不意に実況の声が終わった。

もう直ぐ、銅鑼が鳴る。

◆

『ではこれより！　一回戦第三試合を開始する！』

試合開始を宣言する実況の声に、ただでさえ騒がしい喧騒がさらにその大きさを増した。

実際に試合が始まるのはまだ一分ほど先だが、入場してきた戦士達を見た観客達のボルテージはそんな事を毛ほども気にしない。

東方（ひがしがた）は、いつもの剽軽な表情を顔に貼り付けたかのような顔でジェミニが相手の到着を待っている。

対する西方（にしかた）から闘技場の中心まで歩み寄ってくるのは、長い金髪を腰の辺りで軽く纏めた長身の男。

この太陽が照りつける中、長袖の神父の様な黒尽くめの服装に身を包んでいるが何処と無く得体の知れない物を感じさせられる。

「よろしくお願いします」
「あ、こりゃどうも」

恭しく一礼するガネットに、ジェミニも無難に言葉を返した。

「そう言えば身内がお世話になっているようで…」

先ほどハルユキが口にしていたことを思い出して、今度はジェミニから話題を振った。

「はて？　身内と言うと？」
「あれ？　ハルユキとかフェンちゃ…」
「把握しました。今後ともよろしくお願いします」

フェンの名前を出した途端に、これでもかと言うほどきっちりと、９０度深々と御辞儀をかました。

「フェンちゃんかー。可愛いやろー。ワイの努力の結晶言うても過言じゃないな」

これ見よがしにジェミニが胸を張ると、ガネットが明らかに目の色を変えた。

「なるほど。どうやってあれ程の純度を保ったのかと思っていましたが…、貴方でしたか」
「そうやでー？　手ぇ付けようとする危ない奴がそばにおってな。ホントに苦労したわ」
「いやいや、お察ししますよ。貴方のような人が傍居てくださった事を神に感謝したい」
「わかってくれるかー」
「ええ、それはもう。もし穢れでもしたら、目も当てられませんからね」

「穢れ？」
「ええ、金の味を覚え嘘の使い方に依存し他人に縋り付く。そんな奴隷のような汚らしい存在になってはいけないでしょう？」

ピクッと、ジェミニの笑顔が一瞬だけ強張った。

「それは、どうやろなぁ」
「いえ、世間には余り知られてはいませんが、この世には奴隷や娼婦などとそんな汚れきった者が存在してしまうのです」
「……」
「そんな汚らわしい者のようにならないように守る義務があるのですよ。私には」
「……そうか」
「それにしても貴方とは話し甲斐がありそうだ。私は酒が飲めませんが…」

にこやかに言葉を繋ぐガネットの言葉を何かが叩き割れるような音が遮った。

「はっはっは。――一緒にすんなよタコスケ」

ガネットがその音の先に視線を落とすと、ジェミニの足元の床石が砕け散っている。

「…成程」

お互い笑いながら、振り返って所定の位置まで移動する。

そして再び振り返り。

「相容れんな」

声が重なって、同時に開始を告げる銅鑼が鳴った。

「死ねやロリコン！！」
「消えろ真性が！！」

いきなり殴り掛かるジェミニの拳にこれまた全力でガネットも拳を振り上げる。ただ合わせたわけではない。相手の小指側を拳で打ち抜く。

所謂（いわゆる）、拳破壊。そのままガネットの拳がジェミニの拳を粉々にしようと接近していく。

しかし。

ジェミニの中指から外を狙って突き出された拳に、今度はジェミ

ニが更に内側に拳をずらした。

一瞬後。何かを削るような音と共に、腕が交錯する。

「チィッ…！」

「このガキッ…！」

ガネットの拳は薄らとジェミニの腕を切り裂き、ジェミニの拳はガネットの首筋を擦っていた。

間近で目が合い、悟る。両者共に再び拳を握りはするものの、受けるダメージを恐れて同時に後方に跳んだ。

一瞬の攻防の中で負った傷をお互いが確認する。大した傷ではない。動いていても直ぐに血が止まるレベルだ。

一瞬の攻防でこの試合のレベルの高さを思い知らされたのか、既に観客の割れんばかりの歓声が闘技場内に立ち込めている。

しかし、そんなものには耳も貸さずに闘技場の二人は探るように視線を交錯させていた。

不意にガネットが構えを解いた。

ギリギリまで緊迫していた空気がほんの少しだけ緩む。

「…全くあの輝きが理解できないとは。全く理解できない」
「違うで？　ワイはちっこいのもおっきいのも酸いモノも甘いモノも愛しとるんや」
「それは、何も愛していない、というのと同義ですよ」
「よう言われるわ」
「矯正が必要なようだ。来なさい」
「はいよっ！」

ガネットが言い終わる前に、不愉快な表情の残像を残してジェミニが消えた。

残像の続く先はガネットの背後。地脈の流れを利用した歩方は常人にはその初動すら確認できない。

ガネットでさえも咄嗟の事に動きに反応できず、目で追うことすらできない。

せいぜい、唇の端を吊り上げるほどしか。

「ッ…ぬぅあッ…！？」

ガネットは身動き一つしない。

しかし、代わりにガネットの周りの空気が放射状に壁のように広がった。

その壁に、僅か1メートル程まで近付いていたジェミニの体は簡単に弾き飛ばされる。

「風、いや嵐か…？」

数メートル程飛ばされながらも、ジェミニは冷静に着地した。

空気を動かすのは、基本的に風の魔法。しかし、断定することは危険だ。

異文字を数に入れれば魔法の数などそれこそ星の数ほど存在する。手段は違うが同じ効果を持つ魔法など幾らでもあるのだ。

今のところ見当も付かない。

そのことを考えると、出来れば先程の一撃で仕留めたかった。こちらの能力は既にばれているのだ。煌々と首筋に光る”流”の文字を見られていないと思うのは虫が良すぎる。

「それにしても…」

先程の探りあいを終えて、見当も付かないのはまずい。一対一での戦いの場合、一方的に情報を知られると言うのは致命的だ。

そもそも、隠していると言うのが驚きだった。

この世界に、この時代に戦争は有り得ない。小さな国の内乱や紛争ですら殆ど起こらないのだ。だからこそ、人と人が戦う事は表の世界ではあまりない。

あるとしても尋常な決闘か、喧嘩ぐらいだ。それでも純粋な力を競うもの。そもそも隠したりはしない。

目の前の男は全身黒尽くめ。

鎧等ならまだしも、普通は服などだったら浸透して光が浮かび上がる。しかし何かが発光した形跡など見られなかった。

大体、普通は隠せないのだ。服越しなどではどういう文字かを読み取れるほどではないが、そもそもイメージを伝えるもの。見ていれば何を意味しているかぐらいは頭に浮かんでくる。恐らく特殊で珍しい生地でできているはずだ。

つまり、そういうこと。

明らかに意図的に隠している。

つまり、そういう戦いに慣れている。

”暗殺”や”駆除”や”後始末”。そう言った余り目立つことを許されない汚れた仕事に。

「徹底しとるなぁ…」

並ではない。

ハルユキが言っていた事は、どうやら言い過ぎではなかったようだ。

「”流”ですか。中々手強そうな能力だ」

何の躊躇いも警戒も無くガネットがジェミニに向かって歩を進める。当然のように隙は無い。

「さて、じゃあ、攻守逆転ですね」

依然、構えは無い。ジリッと再び突撃する機会を探る。吹き飛ばされはしたものの殺傷能力があるわけではない。ゆっくりとガネットを観察する。

視線の先で、再びガネットが嬉々として破顔していた。

突然。ジェミニの足元が爆ぜた。

「なッ…！？」

床石が高く舞い上がり、土の塊が氾濫し、爆発の余波に乗った石の破片がジェミニに殺到する。

咄嗟に反応して空気の流れを弄って破片を逸らすが、衝撃の余波がまたしてもジェミニを吹き飛ばし、同時に脇腹に小さくない痛みが走る。

だからと言って、痛がっているわけにもいかない。

出来るだけ、ガネットを観察しながら着地した。脇腹に手を当てると、当てた手の半分程に血が付着している。

「いっ…つ…！」

「まだ私の攻撃ですよ？」

ガネットの笑みに連動するように、またしてもジェミニの足元が爆ぜる。

先程のよりも規模が大きい。しかし攻撃が続くことを予期していたのか、ジェミニはその場から滑らかに離脱した。

止まる事は、…出来ないようだ。ジェミニのスピードに慣れたのか、移動した跡、時には移動する先で地面が爆ぜる。

「お、い、そろそろ交代やろ！」
「いえいえ、まだまだ」

余裕綽々でジェミニを追い立てるガネットに、ジェミニは憎々しげに舌打ちすると、突如一層強く地面を踏み抜いた。

続いて、二回三回と足で地面を叩いて行く。

ガネットが怪訝な顔を浮かべたと同時に、ジェミニが踏み抜いた場所が”捲れた”。

「攻守交替、やな…！」
「…ふむ、地殻変動の力を流用したわけですか、なるほど」

一旦地面が爆ぜる音が止んで、スッとガネットが飛来する土の塊に手を翳した。そして岩の表面にガネットの指の先が触れた瞬間。

パァンっ、と乾いた音がして。

土の塊が一瞬で粉々になった。

「……最初のパンチ避けといてよかった」

既に闘技場の上は土やら岩やら床石やらで散乱している。避けていなければ自分の腕もそうなっていたかもしれない。

「…隠れましたか」

そして、その散らばった石床の一つにジェミニは身を隠した。

「随分、鈍った…」

鈍い痛みを訴えかけてくる脇腹を押さえながら一旦思考を冷ます。

全く厄介だ。

鈍った体も、相手が予想以上に強いと言うのもあるが、まずこの殺してはならないと言うのが難しい。

今までそういった事ばかりやって来たせいか、戦いの幅が狭まってしまってしょうがない。

予想以上に失血もある。体の下には少しだけ血溜りが出来ている

ほどだ。

早めに倒すことに越した事は無いのだが、あれ程の手練に能力も分からずに正面から行くのは流石に無謀。

前途多難だ。溜め息をつきながら下を向いた。

――そして偶然、それを見つけた。

◆

「おや、もう隠れんぼは終わりですか」

岩の陰から姿を現したジェミニを見つけて、ガネットが言った。

その言葉は変わらず軽い口調ではあったが、目は一層細まってジェミニを見据え、体には何時でも攻撃できるように魔力が充実している。

ひょっとしたらもう隠れている場所もすでに分かっていたのかもしれない。

「行くでロリコン。そろそろ終いや」
「ええ、終わってますとも」

表情を変えないガネットの口から言葉が出た瞬間、ジェミニに向かって土が盛り上がりながら突進した。

しかも四方八方から。先程の攻撃と方法は一緒だろうが、規模がまるで桁違いな事は見て取れる。

「――”共に振るえよ”」

ガネットの口元が再びつり上がり、勝利を確信してジェミニの顔を見据える。

そして見た。

ガネットの笑う顔を見て、同じように唇の端を吊り上げるジェミニを。

直後、異変が襲う。

ジェミニの元で集約するはずだった地面のうねりが、唐突に萎んで消えた。

「なにッ…！？」

初めて、ガネットの顔から余裕の色が消える。

ほぼ同時に、ダンッ！　と力強く地面を蹴る音が耳に届いた。

危機感からか今度は体ごと、後ろを振り向く。視線の先には案の定ジェミニの姿。

「っ…同じ事！」

最初と同じように空気を震わせ、波動を打ち出す。

が、しかしそこで気付く。

空気の流れがおかしい。

反射的に顔の前で両腕を交差させる。

両腕が顔を隠した次の瞬間。

勢いを乗せたジェミニの蹴りが、ガネットを吹き飛ばした。

「…ッぁ！」

言葉にならない声を漏らしながら、顔を苦痛に歪ませ一度地面に強くバウンドしながらも、ガネットは座ったままながらも体勢を立て直す。

顔をあげたガネットの顔には、冷たい汗が浮かび、左手は途中から力を失って不自然に折れ曲がっていた。

「普通は分散する力を一箇所に集めたわけですか…。成程すごい威力だ…」

「降参するか？　ワイはそれでも構わんぞ？」

痛みのせいで荒くなっていく呼吸を唾液ごと飲み込んで頭の中を冷した。

ゴクリ、と喉が鳴る。

歩み寄ってくるジェミニの周りには、まるで身を挺して護っているかのように空気が渦巻いている。

膝を地面に突いたまま、ガネットは空を仰いだ。

◆

所々でもうもうと砂塵を上げる闘技場を眺めながら、ハルユキが呟いた。

「”波”だな」

「波…？」

それを聞いたレイが少し考えた後、不思議そうに首を傾げる。

二人で今まで考えを巡らせていたが、ハルユキの方が早く結論を出した事に少し不満なのか質問を返してきた。

「最初の防御は？」

「空気の波で押し流したんじゃねぇの？」

「…爆発は？」

「”共振”って現象があってな。多分爆心地に何重にも波を集中させたんだろ。色んな方向からな」

「色んな方向？」

「波ってのは反射するんだよ」

闘技場は見ての通り壁に囲まれている。

壁に反射させて共振を起こす。不可能ではない、しかし無論簡単ではない。それ程戦い慣れているのだろう、でなければそんな芸当はとても出来ない。

「強いな…」

アキラの戦いは見たことすらないが、直感で分かる。多分、アキラよりも数段強い。さすがにあの年でこのレベルまで熟練させることは困難だ。

手札の豊富さも、徹底ぶりも、そして何においても、それらに因を成す勝利への執着も。

「あやつは気付いておるのか？」
「多分な。じゃなきゃあんな事はしないだろ」

それを聞いてまた、レイは悔しそうにうなり声を出した。

それを傍目に闘技場の上に視線を戻す。先程の攻撃が致命的だったのかほとんど勝負は決している。

ジェミニはあれで攻撃力が格段に強い。一撃受けただけであああなるのも不思議ではない。能力がばれているなら逆転の可能性も薄い。

そもそも波というのは、外部からの影響を受けやすい。

地面を伝導させようとしても、材質や密度が変われば振動数が乱れるだろうし、それが空気だったとしても風一つで乱されてしまう。

元々正面から敵と戦うのに向いた能力ではないだろうし、こういった一対一の戦いに慣れている動きでもなかった。

「訳ありか…？」

そんな男が何故こんな所にいるのか。いくら考えようがハルユキにも、そしてジェミニにも、そんな事は分かるはずがない。

チラッと、レイの向こう側に座っているシアに目をやった。微動だにせずにジェミニの方を見つめている。その目から何かを読み取ることは出来ない。

しかし、それでもほんの少しだけ、固く握った両手が不安そうに揺れていた。

◆

ガネットは確かに以前”そういう人間”だった。その世界の中では名もある程度は知られていたらしい。

何の疑問も抱かずに命を摘み取り自分の命を繋ぐ。

そして、何でも無い様なシトシトと雨の降った、とある一日。

何時もの様に事務的に有力者がたびたび足を運ぶという孤児院を襲撃した。

打ち合わせ通り、直ぐに応援が来た。

しかし、その応援の刃が自分の脇腹を貫いたのには驚いた。言われた通りに目に見える命は悉く殺害したというのに。

考えられる理由はただ単に用済みになったから、そんな事しか思いつかなかった。

直ぐに逃げた。脇目もふらずに。

ここで死んだら、今まで殺した人間に申し訳無いと、極めて利己的な言い訳を振り翳していた事を、よく覚えている。

逃げて逃げて逃げて、そしてやがて。糸が切れたように力尽きた。

汚らしい泥の中に体ごと倒れこみ、雨で冷えていく体を自覚しながら、

曇天の空を只管に、仰いでいた。震える体で祈っていた。他の誰かはどうでもいいから自分を助けてくれと。怖かったのだ。仕方なかったのだ。

そしてそんな、どうしようもない人間にさえ、手は差し伸べられた。

小さい小さい、脆過ぎるほど柔らかい手が。

そこで一旦気絶して気が付いたら、ベッドに寝ていた。

そこは、小さな孤児院だった。

少しだけ意識が混濁していたことを自覚して、笑った。

「やっぱり、諦める訳にも、いきませんねぇ…」

言葉を発して、意識を取り戻した。

途端に、背中と左腕から絶え間なく痛みが襲ってくる。

自分の能力が敵にばれてしまったのはガネットにも察しがついていた。

それでも並みの戦士如きに負けるはずもないし、そこまで攻略が簡単な能力でもない。

しかし、この場面でも不気味に笑顔で歩み寄ってくる男には、ガネットを倒すに足る実力と経験と能力が備わっている。

膝に力を入れる。全快とはいかないまでもまだ力は十分に入る。

「なら、ブッ飛ばすわ」

それに対して、ギッと骨が軋む音が鳴るまでジェミニは拳を握り締めた。

「一つ、いいですか？」

「なんや」

理由としては、一つが時間稼ぎ。大して回復しないだろうが、もう少し震える足を黙らせる必要があった。

そしてもう一つは単純に、疑問。

笑うジェミニに向かって言葉を投げかけた。

「何故、そのように怒っているのですか？」

ジェミニの前進が止まる。

そして少しも考えずに、答えを返した。

「ワイは今ここで、怒らなければならんからや」

「怒らなければならない…、ですか」

ああ、やはり。

ストン、と胸に落ちるように納得した。

「自分の事穢れてる言うて、泣くような娘（コ）がおるんや。
その娘には穢れてるモンなんか一つも無いて言うてあげたいから。
ワイは、お前を許さへんのや。人間を穢れてるなんて言ったお前を」

そんな事、微塵も思っていないくせに。

自分が何処までも穢れている事を知っているくせに。

馬鹿みたいに、自分を削って、怒っているのだ。

感情的に怒る方法が分からないから、理性的に論理的に静かに怒る。

全ては、ここで怒る自分でありたいから。

「…分かりませんね。どうしてそんな事をするのか」

先程胸に落ちた物とは別の疑問。

穢れているモノなど嫌いだ。

それは恐らく、己(ガネット)を始めとするただの自己嫌悪であったかもしれないが。

いやきっとそうなのだ。

だからこそ、見ていたくないのだ。穢れるモノを。

だから、許せないのだ。得難い純粋を、失っていく様が。

穢れてしまっているモノに目をかけている暇なんて、無い。

自分と同じ程に穢れているくせに、それがどうしようもなく苦痛なはずなのに。

どうしてそんなに自分を殺そうとするのか。

「理解できない」
「なら、教えちゃるわぃ」

一瞬で殺気が相対し。

瞬間。

ジェミニが突っ込んだ。風を切り、床石を踏み砕いて。

ガネットは極限状態。ある程度回復はしたものの、それ程の動きは期待できない。

しかし、それ故に尖り切った感覚で、ジェミニを捉え、その豪速に完璧に合わせて波動の壁を形成する。

またしかし、ジェミニを中心に吹き荒ぶ風に周波数を乱されてたちまちに霧散してしまう。

「愚策ッ！」

しかしもう一枚。今度は風も計算に入れた上で改めて壁が形成される。

振動数が乱れると言っても、分かっているならば計算できる。

既に衝突地点の地面は、波と空気の乱れによって床石は砕けて吹

き飛び、その下のむき出しの地面も風化されていっている。

同時にガネットがジェミニに接近した。

「とったッ！」

少ない時間で形成した波は極めて小さいもので、ジェミニにダメージを与える所か、大して吹き飛ばせもしないだろう。せいぜい一瞬動きを止めれるぐらい。

だから一撃。

先程飛来した岩のように、直接体内に波動を打ち込む。

「――大声は苦手なんやけど、なァッ！！！」

しかし。

ほぼ完成していた勝利が、巨大な雄叫びに破壊された。

あまりに大きな声の奔流。ただ自分を鼓舞する物ではない。それにしては余りに不自然すぎる程の大きさだった。

音。

確かにこの地上で波として認識されるものの一つ。

普段ならそんなものに影響は与えられない。

しかし、ジェミニに今迫っているのはあまりに弱々しい波動が一つだけ。

ほんの少しだけ乱れた波が全体に広がり、雄叫びと混ざり合って、虚しく霧散した。

しかし、既に右腕は攻撃態勢に入っている。あちらもまた右拳を握っている。

覚悟を決めて、奥歯に力を入れる。

今度の狙いは拳ではない。時間が経てば経つほどあちらが有利。ならば早々に決着を――。

瞬間。

明らかに不自然にジェミニの姿が消えた。

自分の右腕が力無く空を切ってから、懐（ふところ）に茶髪の男がもぐりこん

でいることに気付いた。

まるで時がずれた様に、いつの間にか。

「簡単や」

全力で右腕を振りぬいた反動で発生した背中と左手の痛みが、体の動きを縛る。

「お前は、全く持って」

十分に力を貯めたジェミニの右拳がガネットの腹部を直撃する。

下から振り上げられた拳の方向性に従い、ガネットの体が真上に持ち上げられていく。

この辺りで既にガネットの意識は薄らいでいた。

しかし。

「愛が足らんわい」

そんな馬鹿げた博愛主義（フェミニズム）気取りの言葉は耳に残っていた。

◆

『……失礼。しばし言葉を失っていた』

決着を告げる銅鑼の音で思い出したかのように、拡大された声が響いた。

『レベルの高い攻防だった！　それこそ言葉を忘れるほどに！　ほら拍手でも送ってやれ野郎共！！』

その声に賛同するように、賞賛の声と火花が爆ぜるような激しい拍手の雨がジェミニに降り注いだ。

『ぶっちゃけ、俺消化試合だなとか思ってたわ！　だけど恐れ入った！　全く今年の参加者達はどうなってんだ！』

最後の攻防を黙って見ていた事を取り戻そうとでも言うのか、その激しい口振りはやむ素振りが見られない。

「…負けましたか」

ジェミニが黙って闘技場を去ろうとした時、後ろでガネットが目を覚ました。

「ワイの勝ちやな」
「…ええ、参りました」

ケホケホと喉を押さえるジェミニを目だけを動かして見上げる。

体中が痛みを上げ、あまり体を動かすことも出来ない。結構なダメージがあるようだ。視界の端に担架を担いで兵士達が走ってきているのがガネットの視界に入った。

「どうやって気付いたんですか？　上手く隠していたつもりだったのですが」

それは当然己の能力のこと。ガネットの能力は知られるだけで大幅に戦力がダウンする。

それ故にばれない様に最大限に気を使っているのだ。どうして感づかれたのか不思議でしょうがなかった。

「長年の経験、とかやったらええんやけどな。ま、ただの偶然や」

ドン、とジェミニがその場の地面を踏み抜いた。

ジェミニの傍に溜まっていた血溜りが、静かに波立つ。

「ああ、成程」

波を使って場所を特定しようとしたのが裏目に出ていたらしい。

しかしまあ、上手く行き過ぎていた部分の方が多かった。神を恨むのは筋違いというものだろう。

疑問が晴れて。

頭に浮かんだのは馬鹿丸出しの。

「愛、ですか」

その言葉を自分で言って、軽く噴出しそうになった。

陳腐な言葉。

自分には言い訳ぐらいにしか使えない、黴(かび)が生えた二文字(ふたもじ)。

「そうや。愛があれば大抵の事は許される」

「何ですって…？」

なんとも信じてはいけない雰囲気が漂っているが。

目の前の男は本気のようだ。

「変態なんですねぇ、貴方」

「おや？　凄い勢いで棚に上げた音が聞こえたぞ？」

まぁそれが本当でも嘘でも。

私には、関係が無い事だ。

「好きや好きや言うてたら案外好きになれるものはあるで。お前も自分の人生楽しく使えや」

「元から、好きでやっている事です」

「そうかぃ」

最後にそう言い残してジェミニは控え室に消えた。

ガネットは、空を仰いだまま大人しく担架の到着を待つ。あの時とはまるで違う空の色に吸い込まれそうになる。

そしてほんの少しだけ後悔が滲み出てきた。

本当は、数年前に見かけた、小さい頃から国の下敷きになっていた小さな女の子を助けたかった。

そして、孤児院でも作って贖罪でもしてみようと。ただそれだけの事だった。そうすれば少しは自分も救われるだろうから。

ただの自己嫌悪の延長線上。そんなものに愛はいらない。

しかし、愛が何かを許してくれるというのなら、それも良いかもしれない、と珍しく影響されていた思いを、笑って忘れて打ち消した。

助けなど必要ないのかもしれないとは思ってはいたのだ。

数年振りに見たその顔が幸せで染まっていて。更にそれを自覚してまでいたから。

あの青い髪の少女もそう。

押し殺された様な表情の中に、少しだけ人間臭さが混じっていた。

共通点になっている男がいた。

その男が来ただけで人間臭さを取り戻し、その男の話になると顔を綻ばせていたから一目瞭然だ。

「妬ましいですねぇ…」

名前は出てこないが、確かその男と当たるのは三回戦だったはず。ぜひ、先程のフェミニストに頑張って欲しいものだ。

ズキズキと訴えかけてくる痛みが億劫だった。

だから笑ったまま瞼を閉じて、気絶に繋がると知っていても、のんびり眠気に身を任せる事にした。

誰がために己がために（後書き）

感想アドバイス等ありましたらいつでもお待ちしております。

すいません…、これ以上クオリティを落としたくないので、受験終わるまで更新頻度を週一にしたいと思います。

闘技は進む

陽はもう大分傾いていた。

闘技場も、これまで最高の戦士達の名に恥じぬ激闘を繰り返してきたせいか、所々に小さな傷や凹凸が目立ち始めている。

もしも、一回戦ごとに会場の整備を行わなければ、もう地面の床石など跡形さえ残っていなかっただろう。

ある者は敗者として労(ねぎら)いが贈られ、ある者は勝者として喝采を浴びる。

それを繰り返しに繰り返して、幾１５回。

その煌びやかであり、また華やかであった”舞武”の一回戦の最後の試合が始まろうとしていた。

「…あれ？　レイ？」

「ん？　ああ、ユキネか。この頃よく顔を合わせるの」

ユキネが、何とか一回戦を勝利で終えて一息ついて、一回戦の最後の試合が始まると聞いたので客席に入ると、丁度出入り口の所にレイが壁に凭(もた)れ掛るように立っていた。

「暇じゃったからの。お主の試合も見とったぞ」
「……お粗末でした…」
「いや、全くのぅ」

カラカラとレイが笑う。

その笑顔を、不貞腐れたような恨みがましいような顔でユキネが睨みつけるが柳に風だった。

傍から見ていた分には接戦で面白かったかもしれないが、戦っている側からすれば冷や汗もの。あの鎧が無ければ負けていたかもしれない程に接戦だった。

「あれは泥仕合と言うんじゃよ」
「……むー…」
「はっは、むくれるな。お主の相手も中々の傑物であったし、まだ本調子でもないみたいだしの」

本調子ではない。

手前味噌だが確かにそれは自覚していた。レイと鍛錬している時より明らかに動きも反応も悪い。

「原因は何だ。…と言うより、そうか。まだ喧嘩しっぱなしだった

か」
「別に…」
喧嘩しているわけではない。ただこの頃一言も言葉を交わしていないだけ。
「勝利に労いにでも行ってやれば、それで解決するだろうに」
「……」
行った。
行ったけど、先客がいて、入って行けなかった。
嫌に、距離が近く見えて、気が付いたら背中を向けていた。
今の心情を表すように、小さく風がユキネの横を通り抜けていった。冷たい感触に少しだけ身震いする。
風は粗方冷えてしまい、陽も斜方から弱々しくあたっているだけ。
しかし、それでも会場の熱気は冷めるどころか、興奮と闘いの残滓だけで一度も下がる事無く上がり続けていて、今まさに間違いなく最高潮に達そうとしていた。
『――さぁ』

やけに勿体付けたような声が闘技場に響いた。

同時に、会場の中で静けさが広がる。決して冷めたわけではない。どちらかといえば溜めたといった方が正しい。

空気が期待と羨望で膨らんでいく。

『さァさァさァ！！　やって来ました一回戦最終戦！　混戦を極めた試合の数々だったが実質的にこれが主役（メインイベント）だ！　実際この試合だけを見に来た野郎も少なくないだろ？』

会場の客席のある所から走る様に次々と何かが打ちあがり、祝砲のように激音を撒き散らす。

それに文句を言う人間もいなければ、気にしている人間すら居はしない。

会場の人間が見つめているのは東方の入り口のみ。

それ以外は、たとえ実況でも雑音であり、夕暮れ時の黄昏であってもただの風景に過ぎないと言うかのように。

『それでは、御出で下さい！！　我等が女帝！！　名実共に”舞武”の覇者！！　――ノイン・イクリテッサ・アリベス・ウシュケシュンク・マド・トエルウル・オウズガルドッ！！！！』

爆発だった。

声が火種になり、熱狂が燃料になり、興奮が起爆剤となっていた。爆発は爆発を呼び、声が反響する。反響してそれに声が乗っかって更に爆発していく。

そのはず、その名前はこの町この国に於いて、救世主とも言える名前なのだ。

強く、聡明で、美しい。

一つで人を魅了する物を三つ、ひょっとすれば更に幾つか兼ね備えているのだ。国民が陶酔しきるのも無理は無い。

しかし。

どこまでも続きそうだった歓声が、少しだけ遅れを覚えた。

理由としては、いつまでも役者が登場しない東方の入り口。次第に興奮が疑問に変わり、歓声がざわめきに変わっていく。

『……ここで残念なお知らせだ。どうやら我らが姫様が控え室に居ないらしい。このまま太陽が沈むまでに何の音沙汰も無かったら……待て待て待て待てぇ！？』

太陽の位置を確認しようとした男が、それを見つけて、興奮気味に声を荒げた。

ざわめきの中からその声を聞き取った人間がつられて空を見上げる。隣の人間が目を細めて空を見つめている事に気付いた人間もそれに習う。

そして大半の人間がそれに気付いた時にはそれが何か視認できる位置まで近付いて来ていた。

それは一匹の飛竜。

白銀の鱗の鎧に、たなびく艶やかな純白の糸のような毛並み。翼を広げれば四メートルはあるだろうと言う飛竜が静かに闘技場に降り立った。

その様相に獣染みたものは無く、むしろ気品さえ感じる様で頭を垂れた。

観客席からは一切音がしない。

それもそのはず、竜とはそもそも人間にとって脅威の存在であり、恐怖の象徴ですらある。

しかしそれにしても、悲鳴ぐらいはあるはずなのだ。

竜の背中に、待ち望んだ人物が乗ってさえいなければ。

「――ごめんなさい。寝過ごしてしまったわ」

静かな世界に、その声は不思議なほどに隅々までよく響いた。

そして、その静けさは、打ち壊される。

先程最高潮を迎えたと思われた歓声を確実に上回る程の、噴火のような大音量で。

比喩等ではなく、本当に闘技場が震えていた。

◆◆◆

「昼寝とはずいぶん余裕なことだ」

待たされた挙句、完全に忘れられていた事に苛立ちを覚えていた男の戦士が、大歓声の中、吐き捨てるように言った。

「それは本当にごめんなさい。この時期しかゆっくりできないからつい、ね」

そう言って、ノインは目を伏せるように謝罪した。

男は、笑う。

最早我慢ならんと言わんばかりに。

この会場の熱気に中(あ)てられているのは、決して観客だけではない。

止め処無く溢れ出る興奮を消費するにはもう、目の前の相手を屈服させるしか有り得ない。

『王女サマぁ！　もう始めちまってもよろしいですかい？！』

声を出しても届かないので、ノインは笑って手を上げてその言葉

を肯定した。

『――では、非常に恐縮だが、この私めが音頭を取らせて頂こう。どうかこの試合が尋常なるものでありますように。――では銅鑼を』

静かに告げられたのは開戦の予兆。

『――試合、開始ィ！！』

結論。

事は一瞬だった。

その姿はあまりの速さの中に隠れ、挙動の音は銅鑼と歓声の音に隠れていたのかもしれない。

結果として。

銅鑼がその体を震わせるのを止めた時には、既に闘技場には一人しか立っていなかった。

男がゆっくりと地面に倒れ込むの光景に観客は息を呑み、そのまま言葉を失う。

思い出したかのようにノインの居た場所に、炎の残滓が煌いた。

「確か、今大会で一番早く試合を終えた、最初のシキノ・ハルユキ選手」

またしても静寂が支配する空間に声が響く。

「宣戦布告。覚悟していなさい」

そう言って笑いながら、ノインは剣を鞘に納める。

観客が声を思い出したのは、それから数秒後。ノインが控え室に姿を消してからだった。

◆
◆
◆

地面を震わせるような歓声が連続していた。

それは余りに巨大すぎて、あれ程の大音量で発している実況の声さえも完全に隠れてしまっている。

もう最後の試合も終わり、この次に試合を控えても居ないにもかかわらず、だ。

「ほお、あちらは随分華やかに終わらせたのう」
「…悪かったな、粗末な試合で」
「いやいや、見応えではそう負けておらんかったぞ」
「……褒めてるのか、それ？」
「はっはっは、馬鹿にしておるに決まってるじゃろ」
「性悪め…」

思い切り非難がましい目をぶつけてみるが、暖簾に腕押し。まともに取り合おうともしない。

カラカラと笑いながら、レイが闘技所に背を向けてこちらを向いた。

「帰ってからまた鍛錬するぞ。それだけ元気なら大丈夫じゃろ」
「い、今から…？」

「お主から言い出した事じゃろうが。それとも教えてもらう側の都合で行うものなのか？」
「うー…」
「それにしても、……仕事ってのはどうしてああもストレスが溜まるんじゃろうな」
「ひ、ひとでなし…！」
「ひとではないしの」

悪戯の玩具を見つけたかのように笑いながら、レイがユキネの服の襟を掴んでズルズルと引きずって行った。

◆

「あいたたた……」

レイのしごきのせいで僅かに痛む腰を押さえながら、立ち上がった。

「それだけ若い時から、腰痛とは難儀じゃの」
「誰のせいだ」
「お前のせいじゃ」

思い切り腰を伸ばして、声と痛みのしこりを搾り出す。

「よし！　帰る！」
「元気じゃな。もう一回やっておくか？　ん？」
「無理。明日も試合」

フン、と意地悪そうに笑うレイの背中に続いて、広場の出口に向かった。

「明日は、誰と戦うんじゃ？」
「んー…、どこかで聞いたような名前だったけど…、どこだったかな」

不意に、ピタッとレイの体が止まった。そのままレイにぶつかりそうになって慌ててユキネも歩を止める。

「レイどうかし…」
「止まれ」

言われなくても既に止まっている。しかし、レイの言葉が自分に向いていない事に直ぐに気づいた。

ユキネより頭半個分ほど高い場所に位置する黒目が、闇の先を見

据えて静かに威嚇している。

「待て待て、怪しい者ではない」
「ならその下手糞な気配の消し方は態(わざ)とだと言う事か？」
「下手糞…。これでも本気で隠れておったんじゃが…」
「稚拙に過ぎんわ」

その言葉に返事は返ってこず、代わりに右と左で聞こえが違う足音が近づいてきた。

レイも、相手に害意はないと判断したのか、その事に何か言う様子もない。

「…おお、漸く見つけたわぃ」

広場の入り口の方からしわがれた声が聞こえた。

殺気も敵意も無い、至って穏やかな声。

「こうして、改めて見るとやはり間違いないのぅ」

腰が途中まで折れ、近付いてくる足音は左右の音が違う。

薄い闇の中から、足から順に現れたのは、柔和でどこか疲れたよ

うな老人だった。

互いの顔が確認できる位置まで近付いて、その老人はユキネが困惑していることに薄く笑う。

「よし、ならば改めて自己紹介でもしようか」

その言葉が鍵にでもなったかのように、少しだけ老いが減った目の前の男の姿が、頭の中に蘇る。

「以前は仰々しい名が付いておったが、今はただのムイリオ・ランングリオと名乗っておる」

本当に優しく、申し訳無さそうに、そしてまた疲れたように笑った。

「本当に久方ぶりじゃ。生きておったようで何よりじゃよ。――スノウ王女」

ムイリオ。

思い出した。

確かあの王女の祖父で。

昨年の”舞武”の準優勝者で、そして。

次の対戦者の名前。

◆

「――いや、お主が王女だったとはな。流石に驚かされたわ」

ムイリオが広場を去った後、すぐ後に広場を出て宿へ帰るまでの道すがら、レイが溜息交じりに口を開いた。

「あ、別に隠してた訳じゃなくて…」

「そんな事を言いたい訳ではない。そんな事よりお主は明日の試合のことを考えなければならんのじゃないか？」

「…準、優勝者」

フン、と詰まらなそうにレイは鼻を鳴らすと、足を酒場のほうに向けた。

「まぁ、あの爺に勝てなければ少なくとも小僧と去年の優勝者には勝てんだろうの。せいぜいしっかりやれ」
「…言われなくても、やるさ」

何を思ったのか、愉快そうに笑うと、ヒラヒラと馬鹿にしたように手を振りながら酒場に入っていった。

宿と酒場はほぼ向かいの場所に位置している。少し小腹がすいた気もするので、酒場で何か腹に入れるのも良いし、もう少し魔法の練習もしたいところだ。

でも、責めている訳では決して無いが、少し昔を思い出して体が冷たい。風が寒い。布団に包まってしまいたい気持ちも捨てがたいのだ。

それに、明日も試合。それも相手は優勝候補筆頭の一人。間違いなく力も経験もこちらが下だ。

これ以上やると明日の試合に影響が出るだろうから、今日出来ることはあと頭の中で実践を繰り返すことがぐらいだが、そんな事でも今は没頭していたい。

「あ…」

何となく酒場に向けた視界の端に、すいすいと人混みをすり抜けながら酒場に入っていくハルユキを見つけた。

話しかけようかと思った。肩でも叩いて、笑って見せて一緒にご飯でも食べる。

簡単な事だった。

もう喧嘩している訳でもないし、挨拶ぐらいはする。

でも仲直りをしたわけではなかった。だから溝だけが残って、距離を感じるようになって、それで。

でも、後ろから赤毛の女の子が付いて来ているのを見つけて、結局足は動かなかった。

なぜか飛竜も一緒に付いて来ているので、人々が騒然としているが、今日の最後の試合で王女に懐いているのが広まっているのか、パニックにはならなそうだった。

やがて、翼を畳みながら来店した飛竜に酒場内が騒然となる気配が聞こえてきたが、すぐに笑い声に変わった。

「――――邪魔な奴」

そして喧騒のどこからか、声が聞こえた。

ハッとして、直ぐに愕然とした。

その声が聞こえたことにではない。

その、嫌にジメジメした陰気な声が漏れたのが自分の口からだということにだ。

「……最低だ」

嫌悪感。

自分で気後れしているだけのくせに、人のせいにした。

無意識的に、自分の都合だけで邪魔な奴だと。

「……本当に最低だ、私は…！」

衝動的だったわけではない。

”現に今でもそう思ってしまっている”。

今悔いているのだってそうだ。申し訳ないなどではなく、ただそんな自分に嫌気が差しているだけ。

唇をきつく結んだまま、宿のほうに体ごと顔を向けた。

今日はもう寝よう。

真っ暗な毛布の中が今は一番恋しい。

◆

「マスター…。酒くれ」

余りに周りに迷惑だったのでマスター命令でレイがノインを連れ去った後、ハルユキは再びバーテーブルに腰を下ろしていた。

「まだ九時だぞ。また飲むのか。それにしても珍しく酔えてるな今日は」

「今日はもうあと寝るだけだからいいよ…」

いくら酒を飲んでも、普段は全く酔いなど回ってこないが、今日は散々飲みまくったせいか少しだけ頭の中が酩酊している。

俗に言うほろ酔いぐらいだが、ハルユキには新鮮な感覚だった。

「うーっす…。って何だこいつ何でこんな荒れてんだ？」
「キィラル。今日は遅かったな」
「ああ、ちょっとルウトのところに顔出してたからな」

マスターのラスクと言葉を交わしながら、キィラルがハルユキの横の席に腰を下ろした。

「あれか？　またユキネちゃんか？」
「ああ、夕方頃に一回戦が終わったらしくてな。さり気無く祝ってさり気無く仲を修復する予定だったんだろ」
「それでまだ帰って来ないと」
「ああ」

ぶすっとした顔でまた酒を煽るハルユキを見て、キィラルは、体を震わせて、直ぐに吹き出した。

「だっはっはっは！！　まぁだ喧嘩してんのかおい！」

喧嘩などしていない。

ただ仲直りとかそういった感じの事もやっていない。

だから、何か溝としこりだけ残ってしまったような中途半端な現状。

「父さん。明日の事なんだけど……ってどうしたのハルさん」
「女に振られて傷心中だってよ。ブフッ！」
「……おい、さっきから黙って聞いてりゃだいぶ好き勝手言ってんなぁ！！」
「お、っ！　ま、待て…ギャアああ！！」
「一人で息子に会えなかったような親父が随分偉そうな事言うようになったじゃねぇかコラァア！！！」
「荒れてるね…」
「ああ、今日は酔い入ってるからな」
「オラァアア！！」
「ぎゃあああ！！」
「歩いて帰れるぐらいにしといてね。持って帰るの面倒だから」
「ルウトあとで家族会議な！　そしてハルユキ！　分かったから！俺が仲でも取り持ってやるから！」
「父さんじゃ無理でしょ。威厳ないし」
「ああ、そうだよな…」
「俺の威厳の無さで落ち着き取り戻してんじゃねぇ！！」

飽きたのかハルユキはポイっとキィラルを地面に投げ捨てた。

「おいこら待て、誑し野郎！！」
「うるせえ。帰る」

キィラルの罵声を無視しながら、ポケットから多目に硬貨を取り出して机の上に置いた。

お釣りがあるかも知れないが、それは今度来た時に飲んだ分にすればいい。

毎度あり、と常套句を述べるマスターの声を聞いて、出口へと向かった。

少し深刻二酔ってしまったようで少し足元がおぼつかない。しかし、出口から出て外気に当たると簡単に酔いは冷めていった。

今日は早めに毛布にもぐり込むとしよう。

◆

「おや、お帰りなさいムイリオ翁。ずいぶん楽しそうな顔をして、何か良い事でも？」

「おお、良い事と楽しみな事が一遍にやってきおった。長生きしてみるもんじゃのう」

「それはそれは」

ベッドに仰向けになったまま本を読んでいたガネットが、丁度読み終わったのか本に閉じて脇に置くと、ベッドに腰掛けた。

中々にひどい怪我だったため今日一日寝て過ごしていたせいか、ベッドの横には本の山が出来ている。

「恐らく明日帰ることになると思います。御計らいを無にしてしまい申し訳無かった」
「よいよい。まだアキラの奴がおるし、それも駄目だったら来年また試みるまでじゃ」
「来年…？」

本の山の中からまだ読んでいない本を探していたガネットの手が止まった。

「あの王女の想い人はどうするのです？」
「あれは駄目じゃ」
「……理由を聞いても？」
「あんな馬の骨にノインをやれるか、という所でどうじゃ？」

人を食ったような態度に、ガネットは溜息をついて再び本の探索に戻った。

歳の差か、この老獪から本当の話を聞きだすのは困難という推測からの判断だろう。

「全く、あの”仙人”ともあろう御方がそのような事を」
「……良くそんな事知っとるの、お主」

「多少調べればすぐに分かりますよ。不敗神話などというものも耳にしましたよ」
「残念ながらそれは実の息子に打ち破られたよ。老いじゃ、老い」

カラカラと皺くちゃな顔で笑いながら、ゆっくりとベッドに腰を下ろした。

「そう言えば、楽しみな事とは何だったのですか？」
「うむ、まぁ、もうもう一人の孫に再会した、という所かの」
「孫？　隠し子でも作っていたのですか？」
「阿呆。例えじゃ例え。知り合いの子じゃよ。今はまだ十五ぐらいか」
「紹介して下さい」
「絶対に教えない、絶対にじゃ」

言いながら片足を外して脇に置き、ベッドに寝転んだ。

実に健やかに、実に美しく成長してくれていた。

それだけでムイリオ自身の心が、ほんの僅かだが救われた。何もしてやれなかった罪悪感が少しだけ。

恐らくとしか言いようが無いが、あの若造のお陰だろう。

あれだけ小さな頃に、無力のまま放り出され、頼りになる大人達を全て殺されて。

絶望の淵に立たされたはずだ。命の危機にもあったはずだ。

それなのに、よくも、よくぞ、本当に。

年甲斐も無く瞼が熱くなってきて、薄く笑って誤魔化す。

似たような境遇でもノインには、ガラドがいたミスラがいた。遅ればせながらもムイリオ自身もいてやったつもりだ。

そして何より力があった。それはあれの中で確固たる自分として支えてくれていた事だろう。

この頃はノインもまた変わっていたようだが、それもまたあの若造だろう。

助けて、支えになって、護ってきた。

あの子の傍に、あのような人物が居てくれた事を。これだけは本当に感謝したい。

魔法もいつの間にか使えるようになって、美しく健やかにそして強く。

そして何より、あの奔放な母親によく似ていた。

あれを初めて見た時には、魂を抜かれたかと錯覚した。何処か禁忌を感じるほどに神聖な美しさ。思い浮かべるだけで脳裏に蘇える。

中身とのギャップに大笑いした事もしっかりと覚えているが。

「まぁ、うちの婆さんには負けるがの」

「……ボケましたか？」

義足を投げつけて黙らせると、明日の試合を夢想する。

楽しみで仕方が無い。

昔、初めてノインと決勝で当たった時とよく似た心境だった。

◆

◆

◆

『二回戦　第一試合　ムイリオ・ラングリオ選手　ＶＳ　ユキネ選手』

先に鎧と剣を装備して、闘技場内に足を踏み入れた。

一回戦がハルユキ達側からだったので、今度は逆ブロックから二回戦は始まる。

『さぁ、前評判ナンバー2！　妖怪爺こと、ムイリオ・ラングリオ！　しかし昨年は孫にこっ酷くやられ、弱冠涙を誘う７８歳！　言わずともがな大会最年長！』

反響する声に、会場が笑いを伴いながら沸いていく。しかし、目の前のムイリオは当然しかめっ面だった。

「好き勝手言いおって。…まぁ、あの爺不孝者にやられたのは確かじゃが」

「…いや、なんと言っていいか…」

「…何を哀れんでおる。お主もこれ位の時には髪の毛を一方的に毟る仲だったんじゃぞ」

「いや、それは知りませんけど…」

さわさわと頭頂部を気にしている所をみると、毟っていたのはユキネの方だということらしい。

何度かユキネの国にも訪問していたらしいが、この国が傾くよりずっと前の話なので、おそらくユキネが５，６歳頃の話だろう。

ユキネの父親と個人的に付き合いが合って、助けが送れなかった

事を聞かされた。

しかし、反乱と言ってもほぼ数日での国盗り劇だったので実際は余り関係が無い。同盟関係でもなかった。それに気持ちだけでも嬉しい、と。

そこまで言って、漸く顔を上げてくれたのが昨日の話。

「少しよろしいか？」
「え？」

楽しそうに破顔していた顔に、少しだけ影が差した気がした。

「あのハルユキとかいう奴はどのような人間なのかの？」
「ハルユキ…？」
「孫の想い人じゃ。気にもする」
「…それ、は」

どんな人間か。以前の自分なら多分淀みも無く答えていた。強くて、時々は優しい人間だと。

しかし、今はよく分からなくなった。強いのも優しいのも多分変わらない。でも、知らない部分が余りに多過ぎて、それぐらい知らないのかも分からない。

まだ自分が見ていない部分が本質かもしれないのだ。

「…そんなの、自分の孫に聞けば良い、じゃないですか」
「ふむ、第三者の意見を聞きたかったのだが。まぁ確かにスノウ姫には関係の無い話題だったか」
「今は、ユキネ、だから」
「失礼ユキネ殿。――顔見知りの子を打ちのめすのは気が引けておったが、すまんの。やはり負けるわけにはいかないようじゃ」

余計な御喋りはここまでだ、と殆ど塞がってしまってほんの僅かしか見る事ができない瞳が語っていた。

後は銅鑼が鳴れば、試合が始まる。

「何の関係が…？」

問い返すユキネの言葉は小さかったがそれでも決して聞こえないようなものではなかった。

それでも既に、闘いに身を投じ始めたムイリオには届いていないのか。

ユキネももうこれ以上口を開かずに、剣を体の前に差し出した。

グッと剣に力を入れる。

剣先の、更に先でこちらを見据えるムイリオと目が合った。

「――親側としてはやはり、娘や孫の想い人は大嫌いなものじゃろ？」

どうやら聞こえていなかった訳ではなかったらしい。それを機に、柔和な部分が顔から消え失せる。

「では、尋常に」

顔見知りを打ちのめすのは気が引ける。確かにそう言っていたが、絶対に嘘だと確信した。

嬉々として、口を三日月形に歪ませたその顔に好戦色以外の感情が見られない。

この爺（ムイリオ）にして、あの孫有（ノイン）りだ。

「――推して参る」

一瞬で空気の種類が変わる。同時に頬を冷たい汗が流れ落ちた。

それに合わせたかのように、荒々しく銅鑼が重低音を響かせる。

一瞬でピン、と空気が張り詰めた。

この気温ごと体温を引き下げられたかのような感覚。

叩き付けるように、打ちのめすように、相手の意思と殺気がぶつかってくる。

相手は自分の何を感じているのだろうか、と一回戦の時はそう感じた。

だが今そんな事を考える余裕は、とてもじゃないが存在しなかった。

「準、優勝者…！」

始まって数秒で、今までの認識が甘かったことを自覚させられた。

逃げ出しそうになる体を落ち着かせる。

ぎりぎりと張り詰めた糸が悲鳴を上げるかのように、更に更に更に空気が引き絞られていく。

もし殺気という物が目に映るというのならば今は闘技場中に迸（ほとばし）っている事だろう。

恐怖が体中を走り回る。

目を逸らしたいが、間違いなく逸らした瞬間に致命的な負傷をお見舞いされる。

不意に。

ズッと、足を引き摺る様にしてムイリオが前に出た。まるで、周りの空気さえも一緒に引き摺るかのように印象強く。

気付けば同じ分だけ、足を下がらせていた。

その事に驚いて反射的にほんの僅かだけ視線を下げた。

それは。

致命的な隙だったはずだ。

「――あまり」

細く弱い乾いた声にユキネは肩を全力で跳ねさせた。

「小細工というのは好きではない。まあ、血筋かの」

隙を突いてユキネに飛来したのは攻撃でも殺気でもなく、この空気の中には余りにも似つかわしくない何処か困ったような声。

いきなり、すとん、とムイリオがその場に”腰掛けた”。

「やはり、立って戦うのはちと辛いな。何時も通り行くとしよう」

フッとそのままムイリオが宙に浮く。

「”雲”。儂の能力じゃよ。昨日少し鍛錬を覗いてしまったのでな。これでお相子じゃ」

「…上位文字」

「知っておるか。手前味噌で申し訳ないが、これは中々厄介な能力じゃぞ？」

突然、宙に水が凝縮された。もっと言えば空気中の水蒸気が水に”凝縮”された。

手を動かしてもいない。目線を動かしたわけでもない。何の前触れも無しに水が突然ムイリオの両隣に生成された。

ただ爆発的に規模と温度を広げる”炎”とは違い、”雲”は空気中のありとあらゆる水分まで操る。それが”雲”の基本的な力。

何故腰掛けていられるのかは分からないが、そこは何かからくりがあるのだろう。

しかし形成速度と水球の大きさが尋常ではない。直径５ｍはあるだろうが、恐らくこの大きさを成したのは並外れた集中力の賜物だろう。

それこそ、生成されたというよりは忽然と現れたといった方が近い程だ。

「ノインの時は根こそぎ蒸発させられたが、――さてどう防いでくれる？」

やっと体が動く事を忘れていた事を、頭が思い出した。

その隙を今度は見逃してくれず、またしても予備動作無しでムイリオが動いた。

ぐん、とその形を楕円形に変えながら水球がユキネに迫る。

「くっ…！」

数は二つ。ユキネに当たらない様に両脇に打ち出されたのは優しさからではない。

そのままここに居た所で余波で体が押し潰される。当然左右にも避けられない。

一瞬で思考が駆け巡り、足が前に進んだ。

所詮はただの水の塊。直接的な殺傷能力はさほど高くない。

しかしこの量、更に速さまで加われば、破壊力は普通など容易に外れていく。

間一髪で、水球の隙間に頭から飛び込んだ。

一瞬後、後ろで爆発音が響いて、余波がユキネの体を襲う。

床石が砕け散り、その破片と振動が地面を伝ってユキネまで届く。

。

幸運にも鎧のお陰でダメージは無い。

しかし。

目の前で愉快そうに笑うムイリオを見れば気など抜ける暇も無かった。

「それ、もう一つ」

罠。

簡単な誘い出しだ。だが、考える時間など無かった。

軽い口調に誘われるように先程の水球を一つにしたような巨大な水球が現れ、今度は一瞬も間を空けずに、一直線にユキネに叩きつけられた。

闘技は進む（後書き）

感想・アドバイス等いつでもお待ちしております。

水面の上、青空の下、雲の横。（前書き）

早足過ぎるのかなぁ…。
いや逆に引っ張りすぎたか…？

水面の上、青空の下、雲の横。

「ふむ、やはり珍しい能力じゃの」

放たれた水砲の軌跡を寸分違わずなぞって、更に大きさを増した白い水砲が、結界に激突し派手に闘技場中を揺らした。

「…間に合った」

上位文字に効果があるのかどうかは疑問だったが、何とかその効果を発揮できた。ほんの一握りの魔法だったが、あの魔法を跳ね返すには何とか事足りていたようだ。

「よし…」

最初の結びを何とか凌いで、体もようやく落ち着きを取り戻してきた。

ふよふよと緊張感無く浮かんでいるムイリオに向けて再び剣を構える。

慣れたのかそれとも緩んだのか、何にしろじっとこちらを無表情

で見つめるムイリオに先程までの威圧感は感じない。

瞬きする間に、またしても水弾が練成される。馬鹿の一つ覚えだが、当たればひとたまりもないだろう。

「…取り合えず、続きじゃな」

返事の代わりに、浮いている水弾に向けて白い水弾を撃ち放った。

ほんの一握りほどの水だが、一つの例外も無く巨大な水弾を撃ち落していく。その全てを確認する直前にムイリオに向かって突進した。

幸いムイリオはまだ地上から手の届く所に、ふわふわと浮いている。あの歳で撃たれ強い事は無いだろうから一撃で決めることも出来るはずだ。

足元で水を跳ねさせながら、ムイリオへと直走（ひたはし）る。

そして、ある程度近づいて、剣を振りかぶろうと柄に力を込めた、

瞬間。横からの衝撃に吹き飛ばされた。

「がっ…！」

ユキネを襲ったのは地面から、いや水面からと言ったほうが正しいほど水浸しになった足元から触手のように生えた水の鞭。

死角からの衝撃に一瞬視界が白く染まり、とっさに肩で防いだものの、体はそのまま宙に浮く。

下は水浸しだが流石に衝撃を吸収してくれるほどではない。何とか意識を引き戻し、しっかりと地面を見据えて着地すると、上半身を揺らしながらも再び中段に剣を構えた。

「ま、だ、まだ！」

「……」

流石に考えが甘過ぎた自分に喝を入れる。そう簡単に勝負を決められるはずも無い。こちらは格下。調子に乗ってしまっては一瞬で勝負を決められてしまう。

しかし通用しない事は無い。

このまま相手の魔法は無効化していき、隙を見て攻撃すれば。

と。そこまで思考が行き着いたところで、剣先のずっと先に浮いているムイリオが、額に皺を寄せている事に気付いた。

「…え？」

押しているのはこちらだと言ってもいい筈だ。しかし。この嫌に付き纏う不快感は一体何なのか。

威圧感ではない。ただ、まるでもうこちらの負けが宣告されているような。

堪えきれずに、先程反省したことも忘れて飛び出した。

「――面白いのはその能だけか」

足が止まったのは、その声が原因ではない。と言っても何か特別なことがあった訳でもない。

ただ、ムイリオの右の掌がこちらに向けられていただけ。ただそれだけの事が、意気って突き進んでいたユキネの前進を止めてしまった。

その老いて骨ばった左手が、途轍もない壁に見えた。越える事も、

触れることすら出来ない、高すぎる壁。

「あ……」

悟った。

手加減されていた事に。手加減されて出来た虚像に手が届きそうだと勘違いしていた事に。

考えているよりもずっと、その壁は高くて遠い。

「――上がれ」

ここに来て初めて、ムイリオが動いた。

と言っても、ただ片手を少しだけ持ち上げて、ほんの一言詠唱を唱えただけ。

しかし生み出された結果の違いは劇的だった。

ぐん、と地面が持ち上がった。

いや、そうではない。

「こ、れ…」

持ち上がったのは嫌というほど撒き散らかせられた大量の水。今まで放たれた全ての水が、だ。

更に先程のように一纏まりではない。細かく大小様々に散りばめられた水が、そこら中で光を反射させている。

「そら」

人差し指がほんの少し折り曲がる。ほぼ同時に正面から水弾の嵐がユキネに殺到した。

続いて中指薬指と、順番にほんの僅かだけ時間差を付けて周りの水弾も後に続く。

とっさに水で壁を作る。しかし案の定、流石に背中を守れる時間も技量も足りていなかった。

無視できるレベルではない衝撃が、ユキネの背中に連続した。

「か…っは…！」

声にならない声と共に無理やり呼吸が口から絞り出された。水球の勢いは殺しきれず、地面に叩きつけられる。

しかしまだまだ周りに凶器は大量に浮かんでいる。季節は夏。更に闘技場内は既に水浸し。ほんの片手の一振りで、主導権ごと攻守を引っくり返された。

「…まぁ、正直失望した事は否めんが」

降り注ぎ続ける雨の弾を何とか凌ぎながら、その声を聞いた。

期待外れを予感している声に唇を噛み締めるが、完全に防ぐ事も出来ていない今、反撃など出来はしない。

防ぐと言っても、小さい上に数が多過ぎるため、ただ鎧が付いていない部分を剣で庇っているだけ。

体力疲労もダメージも着実に溜まっていく。

こんなに差があったのか、と心のどこかで小さく笑えた。

「そのまま、亀のように守っていれば状況が変わらんよ」

耳を貸す暇すらない。雨の弾の勢いは更に強くなっていっているようにも思える。

「儂は、空気中の水分すらも操れるのだぞ？」

退屈に業を煮やしたかのようにムイリオが呟いた。

弾が尽きることはない。そこら中から弾が生産され次第こちらに突貫してきているのだ。

そんな事は気付いているが、しかし、動くことが出来るわけでもない。動いた瞬間に水弾に蜂の巣にされて終わりだ。

「くぁッ…！」

成されるがままに雨足は最高潮を迎え、堪らずユキネは膝を突いた。

混乱する頭の中で、何とかこの状況から逃れる方法を模索して、思考が回る。

「う……ぁっ…」

先に体のほうが限界を迎えようとしていた頃、体中に逼迫していた衝撃が嘘のように止んだ。

完全に攻撃が止んだことを確認して、ユキネは困惑した顔を上げる。

既に闘技場は水で溢れていて、その中心で空中に居座っているはずのムイリオが、いつの間にか地面に降り立って冷めた目でこちらを見つめていた。

何のつもりかは分からないが、手の届く範囲まで降りてきたのはチャンス以外の何物でもない。

痛む体を立ち上げるが、それでもまだ足が言う事を聞かない。

「……期待しすぎていた面もあった。まだ戦えるようになって一年と言うところじゃないか？」

見下げられている。

力が劣っている事は認める。弱いと言われるのも慣れている。しかし期待を裏切ってしまったあの顔は慣れる事が出来ない。

口惜しさが更に足を震わせるが、結局睨み付ける事も出来なかった。

「それはいい。それはいいが、――その軽い面持ちはどういう事だ？」

優しい声は立ち消え、発する言葉の端々に険が混じり始める。

「これは闘いぞ。たとえ力があったとしても、いやある人間こそ徒（いたずら）に剣を取ってはならぬ」

手が振るわれ、今度は更に回転を加えられた巨大な水弾が空気を掘削しながらユキネに猛進した。

咄嗟に対抗して魔法を放つ。空気抵抗を弾き飛ばす水弾は、ユキネの体のすぐ近くで相殺された。

「お主は一回戦を勝って来たのじゃろう？　お主は一つ以上の願いを摘み取ってここに居る。お主は、そやつ等が聞いて納得するような何かを持ってここに居るのか？」

言葉の端々に仄かな怒りを灯しながら、それに呼応するように水弾がその速さとを上げていく。

一つ、捌き切れずにユキネの髪を掠めて闘技場の壁に激突する。

すでに試合の最初の辺りに感じた殺気が、更に強く進化して復活

していた。

「闘いを楽しみにきたのならまだいい。欲する物が戦いの中にあるのか戦いを越えた先にあるかだけの違いじゃ。…しかしお主にはそれも無い」

違う。そうじゃないと叫びたかった。しかし自分の中にそれを見つけられないのもまた事実。

「――ああ、成程。あの化生が惑わしたか。邪な類だとは思わんかったが、化生は化生か」

「レイを、そんな風に呼ぶな…！」

「そう呼ばせているのはお主じゃ。何も賭けていないからといってリスクが無いとは考えない方がいい」

「っ…うるさい！」

怒りに任せて、一気にムイリオへ接近する。未だ周りに浮かぶ細かな水球は反応しない。

結果、驚くほど容易く剣が届く範囲にまで入り込んだ。

そのまま勢いに任せて剣を振り下ろす。剣は水を纏っていて斬れはしないが、老体には痛恨の一撃に違いはない。

しかし、そう簡単に事が進むわけも無く。

その剣が届くことは無かった。

全力で振り下ろしたはずの剣は、無造作に上げられたムイリオの左腕に事も無く止められていた。

剣と手が接触したには余りに不自然な金属音を伴って。

「…何じゃ、それは」

服の切れ間から覗くのは鋼色の義手。振り下ろした剣はほんの数ミリ食い込んだ所で勢いを失っていた。

「近付きさえすれば、老体なんぞ如何にでもなると思うたか？」

フッとユキネの体が無重力に放り出される。

魔法ではない。ただ剣を支点に体の重心を崩され、投げられただけ。その速さからか熟練からか、ユキネからは一瞬で天地が入れ替わったようにしか思えなかった。

「――呵(カ)ァッ！！！」

ユキネの体が地面に着地する前に、覇気と共に打ち出された掌底が、鎧越しにユキネの体を打ちのめした。

再び義手と鎧が擦り合い、金属音が響き渡る。

続いて鎧を抜けて、ユキネの体にバラバラになりそうなほどの衝撃が浸透していく。

老人のものとは思えない怪力が、浮いたユキネの体の芯を叩いて、――吹き飛ばした。

ユキネの意識は未だ、剣を受け止められたところで止まっていた。

「…ぁ」

次に意識が現実に追いついたのは、地面を転がり、闘技場の硬い

壁に、力無く背中を打ち付けてからだった。

「ぁ…っは…ぁ…！」

痛恨、いや致命的な一撃だった。鎧の防御力を貫通できる類の攻撃だったのか、ダメージは測るまでも無いほどに甚大。

息を全て吐き出してしまったせいか、喉からは妙な音だけが聞こえてくる。

呼吸を再開したいが、ユキネ自身には息を吸えばいいのか吐けばいいのかさえも分からない。錯乱する頭の中には苦悶と苦痛だけが渦巻いていて思考も上手く巡らない。

「お…ぇッ…！」

体中から酸素を求める危険信号が送られてくるが、目の前が暗くなっていくばかりで一向に苦しみが引くことは無い。

「終わったかの」

淡々とした遠い声を耳が捉える。

しかし、脳内には破裂しそうなほどの情報が充満していて、その声は脳に辿り着く前に無意識内に霧散した。

痛い。

痛い痛い。

痛い苦しい冷たい硬い辛い寂しい苦い暗い悔しい。

それは現実逃避なのか。この初めての感覚ではない。はて、どこでこんな感情を体験したかなどと、そんな思考が巡っている。

「――良い鎧じゃ。普通なら陥没ぐらいはしとるはずじゃが傷一つ付いておらんか。儂の義手(これ)も特製なんじゃがの」

パチャ、と水溜りを踏み抜く音が聞こえて来た。耳にではない。体中でその音が感じ取ることが出来る。

「まだ意識があるのなら、試合を降りなさい。まだお主には心も経験も足りていない」

虚ろな目に映るぼやけた視界に敵の姿が映る。

怖い。

脅すかのように振り上げられた右手が。

余りに無感動にこちらに殺気を向ける存在が、まるで違う生き物を見ているようで。

これも、この恐怖もまた、既知の物。

――ああ、思い出した。ただあの時は鎖に繋がれていたが。あの時も痛くて苦しくて寒くて寂しかった。

あの時はどうやって助かったのだったっけ。

もはや、戦意も、あるかどうか疑問だった自信も、粉々に砕かれている事を意識も遠く自覚する。

あの時どうしたかは思い出せないが問題は無い。

今はただ頭を垂れたまま、勝負を投げ出してしまえば良いだけだ。

「どうする？　まだ意識があるようじゃから選択肢はそのまま目を瞑って力を抜くか、負けを宣告するか、剣を握り直すか。当然最後の選択なら儂もやるべき事が出来てしまうが」

考えようとせずとも、尚も頭が勝手に記憶をほじくり返す。

そうだ。

あれは、確か星も出ていない雲で覆われた底冷えする夜。

あの愚かな親子にボロボロにされて、慰み者にされる為に部屋に連れて行かれようとして、そして。

「――それとも、助けでも期待して泣き叫んでみるか？」

助けて、と呟いた。

自分の耳にも届かないような声だったのに、確かに届いたのだと思う。

「――――、ぁあ」

また、助けを呼んでみようか。

辛いのは嫌だ。苦しいのは嫌いだ。痛いのは大嫌いだ。

だから、もしかしたらそれは間違った事なのかもしれないけれど。

もう一回、自分のためにあの人が怒ってくれるのなら、それも多分嬉しいと、感じてしまうから。

ああ、我ながら。

何て厭らしい。

だから、

だからハル。

どうか――。

◆◆◆

「落ち着けよ。これは試合じゃ」
「……分かってるよ」
「なら、取り合えずその拳は解いておけ」

大粒の雨に打ちのめされ続けているユキネをハルユキは最前列から見守っていた。

止めてくれ。と叫びたい衝動を抑えるのに理性の半分を使っていたと思う。何故こんな所で見ていなければいけないのかと腰を浮かしそうにもなった。

雨の弾が炸裂する度に喝采を上げる観客共の口を二度と開けないようにしてやろうかとも思った。

殺意も不安も、血が滴るほど拳を握り締めて、何とか抑え込んでいた。

もし。

万が一。

もしもの事があったなら。

あの老いぼれを、血祭りに上げてやると心に決めながら。

「…お主、本当に落ち着けよ…？」

「落ち着いてるさ」

漸く、雨の連撃が止み、闘技場に静けさが戻った。相変わらず鬱陶しい完成は耳に煩いままだが。

人知れず息をつく。

「歴然じゃな」

一人呟くレイの言葉に無言で肯定を示す。

無理だ。あれじゃ、１０回やっても１回も勝てはしない。

だからどうか。

もし自分が親だったなら失格かも知れないが、どうか。

どうかこのままユキネが負けを認めるようにと。

そう願わずにいられなかった。

「――あ」

しかし、その願いは叶えられる事はなかった。無謀にユキネが突進して、力を受け流されて宙を舞う。

華奢な手足が力なくぶらんと宙に揺れる。

まるで玩具の様に。

「やめ…！」

吹き飛ばされた。

くるくると回転しながら。

まるでオモチャの様に。

その光景も音も遠い。

他人事のようにしか感じられない。

何よりもその事に耐えられ無かった。

既に、腰を上げていた。

「馬鹿が…！」

詰まらなそうに吐き捨てるレイを無視して歩を進める。

前にフェンが立ち塞がった。無言で見つめ合う。いや観察しているのだろうか。そしてハルユキが口を開こうとする前に、表情を変えないままフェンはハルユキの横に並んだ。

間を空けずに、闘技場との狭間の手摺に手を掛ける。

「駄目よ」

その腕を横から掴んで来た手があった。その手を負って顔に視線

を向ければその先には、赤い髪に赤い瞳。

その瞳が少しだけ震えていた。

掴まれた腕を抑える力など苦にもせず、ノインの頭に手を運んで軽く力を入れると、ビクッと細い体が震えるのが伝わってくる。

「ハル…！！」

縋るような声と瞳。困らせたい訳ではない。泣かせたい訳でも、この萎らしい姿を見ていたいわけでもない。

だから、それをあやす様にクシャクシャと頭を軽く撫でた。

「勘違いすんな。別に暴れたりしねぇよ」

そんなつもりは毛頭無い。

あいつは俺の子供では決して無いし、あいつが戦うと決めたなら。

俺に出来る事なんて一つか二つ。

その中にお節介なんてものは決して含まれていない。

だから、常識を遥かに超える肺活量に任せて、全力で息を吸い込んだ。

◆◆◆

「ん…？」

ほんの少し顔を上げると、水面のせいか空が地面の下にもあるようで、真っ青な敷物など趣味が悪いかもしれないが、実際それはどこまでも幻想的だった。

少しだけ自分のどこかが落ち着いた気がした。。

右手を思い切り握り締めると、その中には無骨な鉄の感触。意地でも剣は離していない。

ならば。

助けなんて呼ばない。

そう、きっと。助けてと叫べばあの人は必ず助けに来てくれる。

でも戦う意思がないのならば、それはただ甘えているだけ。そんな事だから。

あの人は私を子供としてしか見てくれないんじゃないか――！

体を半分上げると同時に、鋼鉄の義手が躊躇無く襲ってきた。

「ぐッ…！」

思い切り手足に力を入れる。

酸素不足のせいか四肢は痺れていて、上手く力が伝わったかどうかは分からないが、取り合えず体は横に転がり、義手は地面と激突して轟音を立てる。

床石を粉々に粉砕した一撃は相変わらず老人のものとは思えない。

直ぐに立とうとすると、床石と共感でもしたのか鎧の中の腹部が先程の痛みを思い出して疼く。恐らく幾本かの肋骨に亀裂が走っているだろう。

結果、呼吸もまだ荒く、膝を上げることもまだできなかった。

苛立ち半分、困惑半分でムイリオが静かに此方を見据えている。

数秒そのまま膠着する。

もう体が動かないのだろう。それともそこまでする必要があるのか、とムイリオは今にも口に出しそうだ。

実際、どうなのだろう。

分からないけど、でも。

「――ユキネぇ！！！」

でも。

「――――根性！！　見せろォオ！！！！！」

この距離からも、思わず耳を塞いでしまいそうな大音量で届いた愛しい声が、今度は励ましてくれているのなら。

「ぐぉ…ッ！　あ、の小僧、何という声を…！！」

耳を塞ぐムイリオに対して、ユキネは剣を構える。

正直に言えば、かなり耳が痛いが、この声は聞いていたかったし、聞いていてやりたかった。

しっかりと息を吐いて同じ分だけ空気を肺に取り入れる。

更に少しだけ自由を取り戻した体を引き起こし、思い切り剣先をムイリオに突き付けた。

「……流石に、立ち上がれる程度の傷ではなかった筈だが…？」

理由。そんな物はただ単に。

「根性を、見せなきゃならなくなった…！」

片目はもう開かないのか、残る片目が大きく見開かれる。

「――ふははっ！」

しかし、次の瞬間には狂気を感じる程の笑みを取り戻していた。

いつの間にか両足の震えは収まっていて、肋骨の痛みも剣を振れる程度には回復していた。

見れば薄く、ほんの僅かに鎧が光の粒子を飛ばしている。

直感。

まだ戦える。剣を握れる。強くなれる。

前に、進める。

「ほんの少し、誤解しておった。――中々気持ちの良い連中じゃな」

観客席を見てカラカラと笑うムイリオの目線を追うと、周りの連中に物をぶつけられて、それを全て片手だけで弾き飛ばして喝采を浴びているハルユキが居た。

誰かやけに速く椅子を投げ付けていると思えば、その先にレイとジェミニがいて。

手摺から頭だけ出してこちらに小さく手を振っているフェンと、笑顔で大きく手を振っているシアがいる。

「――うん、皆良い奴だ」
「…成程。やはり感謝であっていたようじゃな」
「え…？」
「こちらの話じゃ、気にするな。そんな事より――」

スッとムイリオが宙に浮く。

「今度は退屈はさせてくれんのじゃろう？」
「…知らないね、そんな事」
「ふん、それで良い」

一度肩越しにハルユキのほうを見た。多分ハルユキもこちらを見ていたのだと思う。

負けるな、とハルユキの口が小さく動いた。負けないと前を向きながら声を出さずに口を動かした。

ハルは知っているのだろうか。

そんな声が、その声だけで。

私にどれだけ力を与えてくれるのか。

絶対に知らないな。言っていないのだから、知っているはずも無い。

だから、勝って、示して、会いに行って、お礼を言って、少し怒り直して、しっかり仲直りをしよう。

最初の一つ目。

こんな所で失敗できない。

「――では、心行くまで」

ムイリオが我慢できないと言わんばかりに言葉を漏らした。

同時に両手を天に向かって伸ばす。

――それは、指揮者を思わせた。

大きな入道雲を背に、優雅に手を振る。

呼応するように、再び地面が持ち上がり、闘技場内で精霊でも宿ったかのように霊水が踊る。

空中で跳ね回り、離合を繰り返し、くるくると形を変えながら闘技場の周りを加速しながら廻っている。

「――〝賑やかにいこうじゃないか〟」

まるで親しげに話しかけるように、祝詞を口にした。

是。

是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是。

無数の魔水共が、肯定するように笑った気がした。

更に怒涛の如く回転数を増して行き、空気中の水分を絡め取って

いるのか、瞬く間にその総量を増していく。

それはまるで巨大な入道雲のように。揺蕩(たゆた)いながら、水の粒子が乱舞する。

不意に、指揮者が両手を掲げ局長を変えるかのように、その腕を振り下ろした。

直感に任せ剣を構える。考えるのは今ではない。今は今の最善を尽くすときだ。

飛来してきたのは、変わらず水弾。

しかしその数凡そ二百超。

四方八方から、勢いは殺さずに、その速さは弾の形を細長く楕円に変えてしまっている。

この数を裁くのは今の自分には不可能。ならば。

思考は一瞬。決断は刹那に。

相殺では敵わない。

詰められる限りの魔力を剣に集中。目の前まで迫った水弾に向かって、撃ち放った。

白い水弾が、只管に進行方向の水達を食らって肥大化していく。

一瞬後、ユキネが立っていた場所に、様々な角度から水の凶弾が炸裂し、地面を粉々に砕き割った。

「――見事！」
「…っく！」

白色の水弾の後を疾走し、その陰から飛び出したユキネの姿を、ムイリオは目聡く捉えていた。

その速さは驚嘆に値するもの。まるで重力を感じていないかのようだった。しかし、ムイリオは既に空中。必然的に地上に居る場合よりその姿が敵の目に晒される時間は長くなる。

ほんの一瞬だが、違いの程は途方も無い。

余裕を持って、振り下ろされた剣を義手で受け止めた。

先程よりもはるかに軽い一撃。それもそうだ、ユキネの足は空中に浮いている。

左腕を圧縮した水で包み込み標的を視認する。相手は空中。抵抗の仕様も無い。

しかし、容赦はしない。前足の親指の付け根の拇指に重心を乗せて、腕を引き絞った。

「――ぁあああああッ！！」

打ち出そうとした腕が無意識に止まる。

空中でいきなり、ユキネの体重が剣に乗った。

結果。

目の前で己の右腕が寸断された。

「ぬぅおッ…！？」

義手だ。痛みなどありはしない。しかし喪失感が一瞬体を強張らせた。

シッと空気を切り裂いて、鋼の具足で覆われた右足がムイリオの脳天を狙う。相手にも容赦は無い。

当然、これは只管に尋常なのだ。

ムイリオは興奮からか期待からか、自然と唇を吊り上げながら、”右腕”でそれを防いだ。

「な…ッ！？」

ユキネの口から驚きの声が飛び出た。先程切り捨てた筈の義手が当たり前のように存在していれば、それも当然だ。

鋼と鋼が一瞬だけ鍔迫り合い、両者共に同じ分だけ弾き飛ばした。

ユキネは空中に投げ出され、ムイリオも雲の上から弾き出される。

ほぼ同時に、地面に着地した。

「言ったじゃろ？　特製じゃと」

「特製…？」

半分破れた袖が引き千切られ、その腕が露になった。

余りに精巧な造りに息を呑みそうになる。恐らく上腕の中頃から義手になっているのだろう。僅かに覗く肘の関節部も、指の一つ一つさえ動きに本物と遜色は無い。寧ろ生々しささえ感じるほどだ。

その芸術的ともいえる義手と、更に対を成すような老いた手を、振り上げた。

「加護付加――」

当然、説明など何も口にしない。

刹那に交し合う理解と突破こそが戦いの醍醐味だろう、と。その

三日月形の口端が語っている。

「――”投影”」

両手を掲げて指揮を振る。先程よりも荒々しく研ぎ澄ましながら。

ある一握りの水が薄く、また一つは厳つく形を変え、そして、次の瞬間にはそれが鈍色（にびいろ）に色相を変えていく。

一つは短刀、或いは大剣。はたまた剛槌。苦無（くない）。矛。鎌。巨槍。棍棒（メイス）。方天戟。

大小属地様々な武器が廻って踊る。

ただでさえ視界を覆うほどの武具は、青い水面にも浮かび上がり無言でユキネを威圧していた。

偶々近くに来ていた武器の一つを、警戒心から弾き飛ばすと、生じたのは確かな金属音。

無遠慮に空中を闊歩する武器達。その切っ先が全て自分に向いた事を想像して、いや、向いてしまう事を予感して、戦慄が走った。

「はッ――――！！」

瞬時に水の魔力を放出して、ムイリオを急襲する。ほぼ同時に、スッと滑らかにムイリオの腕が振られた。

その行為で武具共が意思を手に入れたかのように。

ただ忠実に、ムイリオと魔法の間に割り込んだ。刹那、耳を劈くほどの金属音が響き渡る。

何の根拠があったわけではないが、やはり。白の魔法は、武具の壁に阻まれた。当然ムイリオの身には届いてはいないだろう。

「これだから、ボケておられぬのだよ！」

一瞬、鉄の壁にムイリオの姿を見失ったその瞬間に、ムイリオはユキネの背後にまで迫っていた。

しわがれていた筈の左手は厳つい篭手。

鋼の右腕には斬馬刀のような巨大な鉄剣。

何故これ程の速さと力を発揮できるのかは分からないが、とにかく現実はそこにある。

頭を働かせるのはそれを認識するまで。相手と交錯する際において思考は足枷。

後は今まで振ってきた剣と体が応えるだけだ。

薙ぎ払われる大剣に対し剣を斜めに構えて受け止める。

「ぬぉ…！」

巨大な刀身を、こちらの刀身で滑らせ足元に誘導し、鋼の具足でそれを受ける。ただで受ければ足が粉々だろう。

しかし鎧の強度に加えて、ほんの少しだけ体を浮かせれば、剣を支点、足を作用点に体は回転し、力は逃げる。

先程と変わらない速度で、天地が入れ替わる。しかしお互いの表情は真逆。ユキネは驚きに呆けるムイリオの顔をしっかりと目に捉えて。

剣を振り放った。

水で刃を保護した剣が脇陰（きょういん）に吸い込まれる。

しかし一瞬後、響いたのはまたしても金属音。左の篭手が身を呈してムイリオを守っていた。

弾かれる様に、ムイリオは地面に転がり、ユキネは剣を地面に突きたてて勢いを止めようとするが止めきれずに膝を突く。

まるで曲芸のようなやり取りに、背中で観客が沸いた。

「――ッ！」

顔を上げた瞬間、無骨な剣が数本ユキネに飛来していた。数は十三本。研ぎ澄まされていく感覚故かその全てを剣を振るうだけで事も無く防ぎきった。

「まさか接近戦で押し負けるとはの…！」

返答をしなかったのは、気まぐれではない。

「くそ…！」

返す余裕も無いほどに思考が巡っていた。

恐れていた事が現実になって目の前に。

全ての武具共がこちらに切っ先を向けて殺気を荒々しい向けていた。

「――さあ、そろそろ終演（クライマックス）じゃ」

考えろ。

今まで使っていなかった分を全て使え。

模索しろ。

経験を能力を過去を手段を選択肢を。可能性を。

巡らせろ。

想像を自分の中にどこまでも――。

グッと楽曲の最後を締める様に、ムイリオがその手を硬く握り締めた。

水面に映ったせいで、その数何千にも見える血に飢えた凶器共が、標的に向かって、嬉々として殺到する。

水面の上、青空の下、雲の横。（後書き）

感想アドバイス等ございましたら、いつでもお待ちしております。

泣かぬなら、泣かせてしまえ

「足元が御留守じゃ、なッと」
「くッ…！」

何気無く出された足をギリギリで跳んでかわす。

しかし、空中に浮いたユキネに向かって狙い済ましていたのかのように、いや実際に狙い済ましていたのだろう。ギュッと独楽のように回転したレイから伸びる左足が、遠心力を伴ってユキネを打ちのめした。

ギリギリで剣を体の間に捻じ込んだものの、空中では踏ん張りようも無く、蹴りの方向に従ってユキネの身体が吹き飛ぶ。

悲鳴を上げながら地面をごろごろと転がって、やがてうつ伏せに停止した。

「ふむ、悪くは無い」
「…どこがだ」

不貞腐れながらユキネが体を持ち上げた。勢いよく吹き飛びはしたものの、すでに鎧を纏っている。埃っぽい以外に実害は無い。

もう攻撃は終わったのか、弛緩した声を出しながら首を鳴らすレイに近寄った。

結局今日は一本も取れていない。

そもそもレイは魔法さえ使っていないのだ。力量の差を改めて実感させられる。

「……レイは何でそんなに強いんだ。ハルとも互角に戦えてるし」

いつものあの喧嘩。始まってしまえば誰も止められない。最も止めようとも思わないが。

「あんな化け物予備軍と一緒にするな。あやつは常に手を抜いておる」

レイが不愉快そうに額に皺を寄せた。

珍しくハルユキに負けを認めたことに気付いて、少しだけ驚く。

否定するにしても、逆だと思っていた。あんな小僧如きと一緒にするなとか、そういった言葉を想像していたのだ。

「…なんじゃその顔は」
「いや、少し意外で」
「……あれはもう別物じゃからな。そもそもジャンル違いじゃ。言ってみれば、皆は剣で戦っているのに一人だけ神罰で戦っているようなものじゃよ」
「そ、そんなにか…」

確かに今日の一回戦も一瞬で終わらせていた。ユキネに至ってはまた何とか勝ち抜けたといった具合なのに。

そのハルユキより強くなるとか言ってしまった自分に頭を抱えたくなってきた。

「そもそも何で御主はそんなに下手糞な魔法を使う。ぎこちないにも程があるじゃろ」
「…しょうがないだろ。使えるようになったのは最近なんだから」
「その程度の錬度では余り役にもたたんだろうしの」
「いや、結構重宝しているんだが」

実際魔法を跳ね返すと言うのは強力な魔法だと思う。しかしまだまだ錬度が足りない。だから問題があるとすれば。

「それも攻撃には不向きな能力じゃろう」

そもそも発展の仕様も無い能力だ。

今の所分かっているのは『破』の方は剣を生成する能力で、『白』の方は魔法を跳ね返すということだけ。

「二文字あるのじゃろう。そっちはどうなっとるんじゃ」

「よく分からないんだよ、こっちは」

左手に刻まれた『破』の文字をしげしげと眺めて見る。しかし当然、何か答えやヒントが返ってくる訳もない。

「そもそもその『白』というのも抽象的で解り辛いの」

そこでいきなりレイが言葉を切った。見れば額に手を当て言葉を捜しているようだ。

「…それに？」

待ちきれずにユキネがそう助け舟を出すと、レイはじれったそうに頭を掻きだした。

「そもそも、魔法を跳ね返す事が『白』の能力なのか？」

「どういう…？」

「考えても見ろ。跳ね返すのは良いとして、四つの属性まで使えるのも普通ではないのだぞ？」
「じゃあ、そっちが…？」
「…いや、そちらはおそらく『破』の方の能力じゃろう」
「…な、なら、おかしくないだろ？」

レイの言いいたい事がいまいち理解できずに首を捻ると、レイがジトッとした目でこちらを見つめた。

「な、何だよ…？」
「じゃあ、聞くが…。もし『白』だけだったらどのような魔法になっていたのだ？」
「あ……」

言われて気付く。

跳ね返すのに必要なのは属性を合わせる事。

火なら火を。水には水を。風なら風を巻き込み。土は土を飲み込む。中々強力な効果だと自負しているが、そのせいか使い勝手はあまり良くない。

というのも、異文字には効かないし、更に複数の属性が一度に襲い掛かって来た時は対応が追いつかないのだ。

もし４つの属性が『破』の能力だとしたならばだが、そうした場

合魔法を跳ね返すと言うのは『白』の断片的な効果でしかなかったという事にならないだろうか。

「と、いう事は…！」

思わず上ずった声が出た。

正直、今までの努力が無駄になりそうで悔しかったが、自分の可能性が広がったのは決して悪い事ではない。

「まあ、詳細は全く解からんがの」

そう言ってレイは忌々しげに腕を組みなおした。

そこで、ユキネが全く話を聞いていない事に気づいたのか、思い切り中指に力を溜めてから、パチンと額を弾いた。

あいたっとあどけない声と共に涙目でレイを睨み付けるユキネに、レイが言葉を続ける。

「……”魔法に於いて一番重要なのは努力でも魔力でもなく”？」

それはとある昔の魔法使いが遺したと言われる言葉。

恐らく魔法を学ぶ上で誰しもが教えられる事だろう。当然ユキネも知っている。

額を押さえながらその下の句を繋げた。

「……”己への探究心であると飽くなき想像力”」

「そうだ、出来るだけ有効に使え。剣等とは違って魔法は発想だけで上達する」

「…うん」

レイの言う通り魔法は瞬く間に上達する。

言ってみれば拳銃の引き金の引き方を教えるようなものだ。慣れさえすれば大した時間も掛からずに、それなりの攻撃力を得る事ができる。

ただ、あくまでである程度。戦い方の幅が広がるだけだ。魔法の上達と強さと言うのはそこまで綿密に結びついてはいない。

最終的に勝負を、そして強さを分かつのは、それまでに込められた意思と凝縮された時間なのだ。

「先ずは己を知れと、実に的確な言葉じゃの」

嫌味を零すレイを無視して、剣の柄を握りなおす。

集中する。

イメージは空。世界の中心に自分を。

音が鳴るほど剣を強く握り締めると、魔力を魔力のまま剣の中に流れ込んでいくのが分かった。

ズッと何かを軽く引きずったような音が頭の中に響き、魔力が剣から漏れ出していき、同時に魔力に中てられた空気が風となって踊りだす。

ここから火、水、風、土の中の一つ選択し、イメージを練りこむ。

「――待て」

色々言われたので、何か新しいやり方を模索しているとレイから静止の声が掛かった。

「そのまま動くな…」

「う、うん」

準備が出来た途端、レイがユキネに血の塊のような紅色の魔力を投げつけてきた。

驚いて声を上げそうになりながらも、反射的にその魔法に剣を向ける。

「え…」
「ほう」

パンと何かかが弾けた様な音がして、剣に纏わり付いていた魔力が空気に溶けた。

しかし二人の目にそんな物は映っておらず、レイは面白そうに、ユキネは困惑半分で、紅の魔力と白の魔力が触れ合った中空を彷徨っていた。

「成程。一端ぐらいは見えたんじゃないか？　前の技の”劣化版”と言ったところか」
「で、でも、これ…！」
「騒ぐな。大体5秒も維持出来とらんじゃろうが。明日に使うのは無理だ。一端忘れろ」
「そう、だな…」

試合はもう明日。レイの言った通りさすがに間に合いはしない。

今日はハルユキもジェミニもフェンもユキネも勝ち残った。

ハルユキは派手に、フェンも簡潔に、ジェミニは意外と苦戦しながらも華々しく。

それに比べるとユキネは何とかといった感じだ。

改めてうちのチームのメンバー達の力量の高さを実感する。レイだってもし出場していれば他の三人に違わないほどの結果を残すだろう。

少しだけ悔しくなって、でも今は体の芯が熱くなるだけに留まった。

「……もう一回、付き合ってくれ」

「良い心掛けじゃ。後悔するなよ」

そして、もう一度だけ感触を確かめたくなって剣を握った。

◆

目を開けると、抜けるような青空が眼前に広がっていた。

その蒼さに心奪われたのも一瞬。直ぐに試合の途中だということを思い出した。

もしかしたら負けてしまったのか、と顔を上げるが、ほんの少し顔を上げた所で相変わらず宙に居座る剣軍共が目に入り試合がまだ終わっていない事を教えてくれている。

皮肉な事に、その切っ先から漏れる敵意と戦意が、安心を与えてくれていた。

「ま、だ、まだ…！」

歓声も途切れておらず、どうやら気絶していたのは一瞬の事だったようだ。

しかし、その一瞬でさえ、勝負を決するには十分過ぎる時間だったはずだ。

この期に及んでまだ舐められている事実に歯噛みしながらも、その悔恨も一緒くたに思い切り剣を握り締めた。

「ああ、勘違いせんでくれよ？　別に侮りから止めを刺さなかったわけではない。安心してくれ、貴女は儂の明確な敵役じゃ」

「なら、どうして…？」

「少しそなたと話がしたくての。言葉を探していたら忘れてしまっていた。歳じゃの、歳」

忘れていた。それも何だか舐められている気がしないでもないが、先ずは勝つ事だ。

たとえ舐められていたとしても、今は勝てれば他はどうでも良い。

「ところで、これはまた別の技なのかの？」

そう言って首を傾げるムイリオの手には、一本の何の特徴も無い剣が握られている。

ただし、その刀身の半ばから叩き折れてしまっているが。

ポタポタと、その境界から水が滴っている。そんなになってもまだ剣の外見を保っている事に改めて相手の技量の高さに喉を鳴らす。

「そうか。また別の技か…！」

一瞬で手に持った剣が気化したかと思うと、またムイリオから戦意と敵意が迸り、嬉々として唇が吊り上がる。

と。

「…いかんの。この歳になってもこの癖は抜けん」

その口元を隠すように、ムイリオが鉄の義手を顔に押し付けた。

まるで痛みが引くまで手当てするようにそのまま動きは無く、やっと手を離した時には、狂気すら滲ませていた表情はどこかに消えていた。

「好戦的なのは血筋での。孫（ノイン）もそうじゃし、――あれの父親もそうじゃった」

代わりに顔に浮かんだのは、自嘲するような老いた笑み。余りの落胆に剣を握る力が緩みそうになるのを何とか堪える。

「と言っても、あれにそれほどの才は無くての。それでも努力だけは怠らん男だった。

何度も何度も魔法も剣も学も付きっ切りで教え込んだ。時には詰め込みすぎかと思いはしたが、あれも自分から望んでいた。

国を背負う責任を感じていたのかも知れん」

疲れたように笑いながらも、その中には僅かだが息子を自慢する父親の表情（かお）が見え隠れしている。

「運の良いことに努力が実を結んでの。王位を明け渡した時には誇らしささえ感じたよ。
順風満帆だったのだ。この大会で去年ノインに負けたように、息子に打ち負かされたときも、もちろん悔しかったが、それ以上に――」

それ以上の言葉は言わなかったのかそれとも聞こえなかっただけなのか。

しかし、その先を想像するのは難くない。

余りに寂しげな口調が、今にも泣き出しそうな表情が、心情を読み取るのに言葉を必要としなかった。

「結婚してノインが生まれて、あやつがおかしくなったのはそれから数年後じゃ」

そこから先の話は知っている。

堕ちた王は果たして、娘の才能に嫉妬したのか、王としての責務に加えての親としての責任に耐えられなかったのか、それとも自分の力しか信じられなくなったのか。

それが分かる日は、きっともう来ない。

「流石に苦言を申そうとして、有無を言わさずに手足を千切られた時は流石に泣き叫んだ」

どのような気持ちだったのだろう。

大事に育んできた息子が、誇らしささえ感じていた息子の力が、自分に襲い掛かって来た時。

その絶望の深さだけは、想像に難い。

◆

「殺そうと思った。それが責務じゃった。間違いだとも思っておらん。しかし、儂に出来たのは助けに来た者と共に城を逃げ出す事だけだった」

あの悔恨はこの鋼の義手がよく覚えている。

期を見たのだ。決して間違いではない。

国を持つ人間と戦争して勝てるわけもなく、個の力も手足がない今では戦いようさえなかったのだ。

賢明な判断だった。迷いもせずに背を向けた事を覚えている。

「しかし、それが考えうる限り最悪の結果を招いた」

身内殺し。

ムイリオがやろうとした事と変わらない。ただ血に汚れる手がすり替わっただけ。

小さくて、愛も満足に知らない子供の手に。

「儂が実際に城に戻ったのは二週間も経っていない時期じゃった。しかし、その時には既に国ごと再生が始まっていたよ」

無力感に襲われた。罪悪感に苛まれた。

あの苦痛はまだこの鋼の義手がよく覚えている。

「だから儂はの、誰よりも何よりも。意地でもあの娘(ノイン)を幸せに導かねばならぬ」

他の誰でもなく私が、他の誰でもなくノインを。

「だから、あの男を婿になどしたくはなかった」

最初に会ったときに感じたのは、強さではなく深さ。底知れなさと言い換えてもいい。例の剣を見据えている様は、雑踏の中に深淵でも紛れているのではないかとさえ思った。

声を掛けて剣から目を離せばその気配は消えてしまい、魔力のかけらさえ感じなかった故か見逃してしまったが、あの一回戦の試合。

激しく後悔した。

計りきれなかっただけなのだ。矮小な定規で大海の広さを測ることが敵わぬように。

「――あの男は、”怪物”だ」

力が怖いわけでない。あれ程の狂気と城一つ滅ぼせるほどの力が共存している事が信じられない。

そんな存在を一体怪物以外の何だと言うのか。

「ノインは強い。力に振り回されてもいない。しかしあの怪物のような力を求めてしまったら、またあやつの二の舞になってしまうかも知れぬ」

あの喪失感もこの鋼の義手がよく覚えている。

それだけは、二度と繰り返す事は許されない。

最初は知り合いの娘かもしれない女子の様子を見るためだけの出場だった。しかしそれを見て完全に目的はすり替わった。

昨日の夜ユキネを訪ねたのも、正直に言えば八割は男の事を探るためだった。

「ハルは」

しかし。

家に帰る頃にはそんな思いは限り無く薄らいでしまっていたが。

余りに。

余りに、目の前の子供が理想通りに育っていてくれたから。

感謝の念を感じるのが筋だとも思った。

「ハルはそんな人じゃないよ」

そして目の前で怪物と言い切った男を信じている人間もいて確信に至る。

何の事はない。

計りきれないなどと、それさえも歪んだ定規で計った結果でしかない。

「まあ、そう思っていたのは昨日までじゃがの」

「へ…？」

そんな物差しも色眼鏡も放り出してみればただの不器用な好漢にしか見えないのだ。

感謝が本懐だ。誤解を誤るのが筋だ。

しかし。

「儂は年寄りじゃからの」

気に入ってしまった。

目を皿にしてユキネを心配している姿と、あの馬鹿のような声援には笑ってしまいそうになる。

その人間臭さが嫌に気に入ってしまった。

加えて孫が惚れているのなら、もう反対もしようが無い。

「筋よりも意地を通す。それだけ言いたかった」

多分、それが一番あの娘が幸せになれるだろうから、意地でも何が何でも。

欲しいモノは自分の力で。

これもまた、血筋なのだ。

◆

「筋よりも意地を通す。それだけ言いたかった」

そう言ったムイリオは楽しそうで、やっと贖罪を終えられると安堵しているように見えた。

きっと、泣いてさえいないのだ。王は悪役として葬られたから。

だれも悲しまない結末が必要だったのだから。

それはきっと、あの王女も。

あの夜。

ハルユキと再開した夜。そして旅に出た初めの夜。

二つの夜を泣き明かしても、ユキネの心に悲哀と悔恨はこびり付いている。

それでも、救われたのだ。

逆にあれだけ泣き明かしても足りないほどの、重さなのだ。

救われないまま、背負い続けて生き続けてきた二人の辛さの片鱗

ぐらいは理解できる。

泣けなかったのだろう。泣く事など許さなかったし、許されなかったのだろう。

父を、息子を亡くしてしまったのに、その位牌を持つ事さえ許されなかったのだろう。

もしかすると、いやきっと間違いなくただのお節介だろうけど。

「――泣かす」

爺（ムイリオノイン）も孫も。

私はハルユキから貰った分を返していかなければならないから。

「二人まとめて、」

やっぱりあの王女は嫌いで仕方ないけど。

「泣かしてやる――」

でないと、またハルユキが救ってしまうから。

そうやって、持って行かれたら堪ったものじゃないじゃないか。

「泣かす…？」

言葉だけ取れば、いや内容を取ってみても唯の独り善がりの我侭だ。

しかし、ムイリオは怒りもせずに面白そうに笑い出した。

「本当に、ウィーネそっくりに育ったのぅ」

「母様、知ってるのか…？」

「ああ、この試合が終わったら話でもしてやろう」

柔らかく笑いながら、ムイリオがゆっくりと手を挙げた。

待ってましたとばかりに、武具共がムイリオの周りに殺到する。

「先程の力を使われると、この剣群も無力だからの」

蠢くそれらに優雅に指揮を振っていく。

指揮を受けた武具達は形を溶かしながら結合していく。

「質より量ではない。量より質ではない。儂は年寄りじゃからの。我侭に総取りじゃ」

積み重なって、折り重なって、剣で車輪が出来て、槌で盾が出来て、刃で壁が作られ、鋼で玉座が彩られていく。

その間僅か5秒足らず。

ズン、と重々しい音を立てて着地しながら、見上げるような移動要塞が生誕した。

「――さて、そろそろ本当に最後じゃの」

ゆっくりとムイリオが玉座に腰掛け、優雅に肘を立てる。

その姿には、まさに。万軍を従える王を彷彿させた。

しかし、今更怯える事はしない。

呆然とした声が漏れそうになるのを歯を噛み締めて贅力に変える。

あれは上位文字。

『白』で跳ね返せないのは実証済み。

なら、挑戦するしかない。

逃げる事はしない。避ける事はできない。諦める事ももちろんしない。

ただ。

「受けて、立つ――！」

「上等――！！」

全力で、魔力を剣に流し込む。

白いまま。純然たる白のまま魔力を増幅させる。

しかし。

空気の動きが、土埃が、太陽の日差しが、そこら中から立ち上っている水蒸気が。

白に混ざって変質させようと紛れ込む。

「くッ…ぁッ…！」

ある程度まで増幅した白い魔力がそこから魔力を受け付けない。
いや正しくは練りこんだ端から自然の四色に溶けていく。

まだ、足らない。あの城壁を打ち砕くにはまだ足らない。

しかし、いくら集中しようと、いくら魔力を練り込もうと、これ以上が、無い。

「くそ……ぉッ！！」

やはり見えてしまった自分の限界。

でも、望んだ場所にはまだ届いていない。

「あ…」

直感で分かる。

直ぐに、剣の魔力が霧散する。

限界を超えたのだ。

あとはただ堕ちていくだけ。

――違う。

まだ私は出来る。

後一歩ぐらい、踏み出せるはずだ。

「――ぁ、ぁあああああッ！！」

ふと。

――四枝（これ）は余計なようですね――

スッと体の横に手が添えられた気がした。

驚いて剣を見れば、そこに手などもちろん存在しておらず、ただ、純白の魔力が巨大な剣の形を模してそこに在った。

安定している。目を瞑っても手を離しても魔力は霧散しない事が何処かで静かに確信する。

「全軍、――突撃」

明確な戦意を持って、ムイリオが手を振った。

集中するのにどれ位の時間を要したのか定かではないが、まだ十分に間に合う。

突撃兵代わりの剣に向かって、純白を振るう。

所詮は以前の複合技の劣化版。跳ね返す事は出来はしない。

しかし十メートルはあろうかという剣を振り払えば、その軌道にあった魔力は跡形も残らない。

質は下がった。しかし有効範囲が〝魔法〟から〝魔力〟に変わっ

た。ただそれだけの事。

されど、意味はある。

突撃兵を突破したのも束の間、剣雨が降り注ぐ。根こそぎ切り払う。

進む。

城砦の半ばから、巨大弓（バリスタ）が二メートルはあるかという程の矢を弾き飛ばす。受け止めて消し去る。

また一歩。

剣の雨は止む事は無い。それなのに、次々と兵器は増大していく。

大砲、投石器、更に今度は左右から破城槌が接近する。

「――ッ！！！」

声にならない咆哮と共に、白い剣が脈動し、更に大きさを増した。

それこそ、城壁すらも切り崩せるほどに。

纏わり付く兇器共を一掃して、剣を振りかぶる。

既に、城壁は目の前。

「あああああああああああッ！！！」

頭の上に振りかぶった剣が、何の抵抗もなく地面まで一直線に振り下ろされた。

もしやこの距離で外したのかと思うほどの抵抗の無さに顔を上げれば、しかしそこに要塞は影すらも存在していなかった。

止めていた呼吸を吐き出した。

その一瞬、殺気が首筋に掠る。

反射的に、要塞があった方向に飛び込んだ。

一瞬後、ユキネの胴体があった場所に、思い出すだけで吐き気を

催すような鋼鉄の掌底が、その空間の空気を吹き飛ばした。

倒れこんだユキネにムイリオが接近する。

起き上がる時間は無い。苦し紛れにムイリオに剣先を向けると、怒涛のようなスピードで近付いて来ていたムイリオが、ピタッと静止した。

数瞬の膠着の後。

「――詰みじゃ」

ムイリオが子供のように破顔した。

瞬間、地面が三度（みたび）持ち上がる。

いや今度は水面が、ではない。間違いなく床石が空中に向かって持ち上がった。

まるで絨毯を真ん中から持ち上げたかのように、奇々的に。

目の前のムイリオが、床石に波紋を立てて沈んだのを見なければ、それが投影で作った物だとは気付かなかっただろう。

「なッ…！」

その床石が、数メートルほど持ち上がったところで、一瞬で跡形も無く気化した。

グン、と重力に引っ張られてユキネの体が落下を始める。

下に落ちたところで大したダメージは無い。しかし本当の床石の上にムイリオがまたしてもあの掌底を作って待ち構えている。

絶体絶命。しかし。

諦めは微塵すらも。

無意識的に、空中で体勢を整え”空を蹴った”。

加速する。

驚きの声と共に、ムイリオの右手が空を切る音が聞こえる。

着地して地面を転がる。

「――あァッ！！」
「――ぬゥッ！！」

決死。

故に回る思考はもう存在しない。

お互いに接近して、すれ違い様に剣を叩き込み、同時にムイリオの鉄拳も迫る。

結果。

決着は必然だった。

◆

ドサッと、後ろで相手が倒れる音が聞こえた。

カランと音を立てて剣が転がる。

その音を、ムイリオは背中で受け止めた。

強かった。

あれ程小さい子供がよくもここまで強くなった。

ほんの少し運の天秤の傾きが違っていたら、勝敗も変わっていただろう。

「――私の、勝ちだ」

冷たい地面の感触を頬で感じながら、ムイリオはその声を聞いた。

立ち上がったユキネの顔を見るために起き上がろうとするが、魔力も贄力も使い果たしてすっからかんだ。

何とか力を振り絞り、寝返りを打つと、太陽の光が目に入って眩しかった。

『勝者、ユキネ選手…』

呆然とした実況者の声に勢いが無い。

まさかムイリオが負けるとは想像していなかったのだろう。正直ムイリオ自身も負けるとは思っていなかった。

「全く、爺扱いが酷過ぎやせんかの」

「お互い様だ…」

ペタンと、ユキネもその場に座り込んだ。

鎧もいつの間にか何処かに消え、アバラが相当痛むのか顔を顰めたまま、動かない。

小さく息をつく。ここまで精根尽き果てたのは久しぶりだった。

「だ、大丈夫か…？」

「…大丈夫じゃよ。あと５０年は生きて見せる」

何も言わない自分が今度は心配になったらしい。

そういう所は父親似か。

「ムイリオ公。お待たせ致しました」

いつの間にか担架が到着していた。先にユキネを乗せようかとも思ったが、こういうのは年寄りの特権だ。

「先に失礼する。楽しい戦いをありがとう、ユキネ殿」

「あ、いや、こちらこそ。ありがとうございました」

起き上がってお辞儀をしようとするユキネを手で制した。そして

ふと思い出す。

「――まだまだ、お主如きに泣かされはせんよ」

「む……」

若い者をからかうのも、年寄りの特権で、義務だ

笑って、柔らかい布の上に体重を預けた。

一杯一杯だったのは自覚していたが、気を抜いた瞬間抗いがたい程の眠気に襲われた。

闘技場を出るまで何とか堪えていたが、抵抗するものも抵抗する理由も無いのに気付いて、目を瞑った。

◆

◆

◆

「む…」

目を覚ますと、柔らかいベッドの感触が体を包んでいた。

「おはよう、爺」

「ノイン…？　ここは……？」

医務室ではない。それにもう窓から見える空も暗い。

見覚えがある眺め。ノインの言葉を聞く前に答えは分かってしまった。

「城よ」

「……馬鹿モンが…」

体を起こそうとするが、義手も義足も消えていて、新しく構成するにも魔力はまだ回復しきっていない。

仕方なく羽毛の枕に頭を預けた。

「負けちゃったわねー…。死んだかと思ったわ」

「ふん、ちっとは悲しがれ、爺不幸者が」

「じゃあ、死なないと信じていたってところでどうかしら。結構美談になりそうだけど」

「糞食らえじゃな」

「同感だわ」

フッと、ムイリオが笑ったのを見て視界の端から同じように笑う気配が伝わってきた。

笑い方まで似ておるの、と一人ごちる。

しかし、まあ今となってはその血筋もここにいる二人だけ。そう思えば、割と愛しい物だ。

「爺…？」
「ほれ、お前はもう戻れ。試合もあるのだろう？」
「もう終わったわ。軽く勝ったけど」
「憎たらしく育ちおって…」

それから会話が切れてしまったからか、ノインが椅子を引く音が嫌に大きく部屋に響いた。

その音が名残惜しく感じたのは歳のせいだと信じたい。

「じゃ、ギィのご飯用意しなくちゃならないから、もう行くわ」
「あの竜か。お前からしか餌を食わんのか？」
「私と、あとハルからも食べてたわね」
「ハル…。あやつか」
「そう。そいつ」

じゃ、と短く言葉を切ってノインが扉に手を掛けた。

「ノイン」

気が付けば。

孫の背に声を掛けていた。

「すまなかった」

相変わらず視線は天井を向いたままだったが、ノインがほんの少し驚いた気配は何となく伝わってきた。

「……一体何に謝っているのかは分からないけれど、それなら私も一言良いかしら？」

返事はしない。どっちにしろこの娘は言うなといっても言ってしまう。

「爺様」

懐かしい、呼び方だった。

本当に懐かしい。

爺と呼びたがるノインを、あやつが爺様と呼ぶように叱っていた事を思い出させる。

「ありがとう」

視線は天井に向いていたので見ては居ないが、そう言って、ノインはきっと笑っていたと思う。

「訳が、分からんわ」

パタン、と力無く扉が閉じて、部屋の中から今度こそ音が消えた。

それがきっかけだった訳ではない。先程の試合が原因だった訳でもない。

それは恐らく、少しずつ注がれる水がいつかは器から溢れてしまうように。ただ、今ここがその淵だっただけだと思う。

「――あの、馬鹿息子が…ぁっ」

零れた。乾いた眼から、皺だらけの頬を伝って。

ガタ、と静かに椅子を引く音が、一人きりだと思っていた室内に響いた。

「もう少し、ここに居るわ」

眼を覆っていた左手を退けると、その先に孫娘が座っていた。

「すまないノイン、じゃあ、すまないよなぁ…」

「辛いのは、爺の方」

それ以上、ノインは何も答えない。

しかし、ただ赦して貰いたいが為の欺瞞かもしれない。無様に泣き漏らす行為だ。

それでも確かに。

ほんの一握りでも確かに。

救われた気がした。

泣かぬなら、泣かせてしまえ（後書き）

感想アドバイス等、よろしければお願いします。

宵の果物酒

「んぁ…」

我ながら目覚め一番に妙な声が出てしまった。婦女子としてどうなのだろうと首を捻りながら目を擦る。

天井はなにやら薄く線が入っているだけの白い石造り。傍らの机に置いてある花瓶にも見覚えがある。ずばり、ここは医務室だ。

しかし、この前予選に負けて床に伏していた時には無かったものが、確かにある。

「勝っ、た…」

医務室のベッドに寝転んだまま、勝利の実感を噛み締めるようにそう口にした。

「ギリギリだっただろうが」

真っ白なシーツと境が見付からない程の白いカーテンが揺れる。

その真ん中で揺ら揺らと灰色の影も一緒に揺れていた。

「ハル…？」
「他に誰が居るんだ？」
「…ハル」
「俺はここに居るだろう」
「…うん」

続いて言葉を口にしようとするが、あー、とか、うー、とかしか出て来そうにない。

真っ白なカーテンの向こうの影は、ユキネの言葉を待つでもなくただゆっくりと揺れている。それを見ていると自然と頬が緩んで、言葉が喉の奥に引っ込んだ。

数秒か、数分か、ただそのまま時間が過ぎていく。

「――勝ったぞ、ハル」
「ああ」

何を考えるまでもなく、自然に言葉が出ていた。

その言葉に焦るでもなく遅れるでもなく返事が返ってくる。それだけの事が例えようもなく心が落ち着かせる。

「入って、来ないのか…？」

いつまで経っても、カーテンの向こうに居座り続けるハルユキに少しだけ不安を感じて声をかけると、思ったよりもずっとか細い声が出た。

「入って良いのか？」

良いも何も、と言おうとして、自分の体にはまだ頼りない包帯しか身に付けていない事に気付いた。

「ま、待って…！」
「はいよ」

急いで周りを見渡せば、近くの籠に服と下着が畳んで置いてあって、急いでそれに手を伸ばす。

「い〝ッ…つ…！」

手を伸ばした拍子に、アバラが痛みを思い出して乾いた音が頭の中に響いた。

思わず声が出てしまったが、すぐに痛みは姿を暗ました。手を伸ばすとまた痛みそうなのでベッドの中で着替えるのは諦めて立ち上がる。

下着を一つ手に取ったところで、カーテンから上半身を覗かせていたハルユキと目が合った。

「え……？」

「ああいや、あれだ。何かあったのかな、と」

スッと頭が白一色に染まり、手に持っている下穿きをに目が行き、もう一度ハルユキと目を合わせてから、その一瞬後に。

体中ごと真っ赤に染まり直した。

「大丈夫だ安心しろ。包帯で大事な所は全然見えてな痛いッ！！」

「かッか、かかかかか……ばッ！！！」

「…カバ？」

「出て行け！！」

一瞬の内に引き寄せた服で前を隠したユキネに、散々蹴られながらハルユキは頭を引っ込めた。

「あーいてぇ…。手加減無しか」

「ハルが悪い」
「そりゃそうだけどな…」
「ハルが悪い」
「はいはい」

意固地になって同じ言葉を繰り返すユキネにハルユキは苦笑する。

「……いいぞ」

カーテンの向こうからほんの少しだけ不機嫌な声が聞こえて来た。

しかし、ハルユキにもそう時間が無かった。そろそろ、次の試合が始まる時間帯だ。

「次の試合だ。負担になると拙いからもう行くな」
「あ、私も…」
「無理すんな、しっかり寝とけ。どうせ明日の試合も出るんだろ？」

噛み潰した筈の、少しだけ走った痛みに思わず漏れた声が聞こえていたのか、ハルユキがそう言った。

「……うん」

ユキネがギシッと再びベッドに腰掛けた事を耳だけで確認して、ハルユキは出口に向かった。

「――、ああ」

言い忘れていた事があったのか、扉の所で振り向く。

「頑張ったな、ユキネ」

少しだけ間が空いて、珍しく躊躇いがちに。

「――ありがと…」

「終わったらまた来るからな」

「…うん」

続いて勢い良く布団を被る音を聞いてハルユキは苦笑しながら、部屋を出た。

◆

◆

◆

「はい、お互いおめでとう」

早々に試合を決めて控え室に戻って、待っていたフェンに賛辞の言葉を送った。

「……心がこもってない」
「だってお前、もうちょっと苦戦でもすればドラマも生まれただろうけどな」
「…私のせいじゃない」

声に不機嫌なものが混ざる前に、機嫌を取る事にした。

「晩飯奢りで勘弁してくれ」
「なら、いい」

一回戦は見逃したので、フェンの試合を見るのは予選以来だったが、やはり格段に強くなっていた。

齢十六でこれ程の人材もおそらく居ないだろう。今も時々ノインがフェンを持って帰ろうとしているのを見かけるので、相当の物だと思う。

「ハルユキ…」

くいくいと服の裾を引っ張るフェンに目を向けると、フェンはじっと控え室の片隅を見つめていた。

「お…」
「ぬ…」

その場所にハルユキを目を向けた瞬間、そいつと目が合った。

「……お前、強かったんだな」

一言だけ何か言ってその前を通り過ぎようとした所で、アキラの方が先に口を開いた。

「そりゃ、ある程度はな。
ああ、ユキネなら医務室に居るぞ」

そう言うと、少しだけ驚いてハルユキの顔を見ると、少しだけ笑って手にテーピングを巻く作業に戻った。

「もうお前の娘さんには会わん」
「何…？」

「けどそんかし、俺が王様んなったら自由にやらせて貰うけど」

一瞬堅実な奴だと思ってしまった過去の自分を殴りたい。何しろ王様になると来たのだ。イコール。優勝すると言う事。更にイコール

「……つまり、俺もノインも倒すと」
「当たり前じゃ」
「俺は予約だから他を当たってくれないか？」
「無理」

ノインに始まり、ジェミニになんか良く分からないコジロウとかいう黒装束に、フェンで合計四人。これだけでも結構大変な事になるのは目に見えている。

手にテーピングを巻き終えると、アキラはフンと楽しげに鼻を鳴らして跳ね上がるように立ち上がった。

「あと一人予約入れとけ。お前は俺の夢と愛の障害やからな。絶対ブッ飛ばす」
「若いなぁ…、お前」

ドスッとハルユキの腹にアキラの拳が当たった。子供の割に、中々重い拳。

確か歳は十四歳。

こんな幼い頃から戦いに身を置かなければならない理由だってあるのだろう。その小さい背中に背負っているものが少なからず。

「まだ今の実力じゃあ勝てんかもしれんが、成長期の男を舐めんとけよ」

パンパン、とテーピングの巻きを確かめるように拳と掌を打ち合わせると、挑戦的に笑いあげた。

ハルユキが最後の試合だったので、今テーピングを巻いていると言う事は恐らく今から鍛錬でもするのだろう。

「お前俺を倒すならユキネも倒す必要があるだろ。どうすんだ」
「――倒す。一切傷付けないで勝つ。それで万事解決」
「馬鹿かお前」

笑ってしまうほど単純明快。

まあ、それでも最高を諦めないと言うのは嫌いじゃない。

「予約は入れといてやるよ」
「あと、……ユ、ユキネによろしく」
「どうでもいいけど、背ぇ小さいなぁお前。それで十五てお前…」
「何じゃコラァ！！　今成長期じゃ言うてるやろが！！」

「はいはい、ユキネに伝えとけば良いんだな」
「…もういい面倒くさい…！　俺の周りはこんなんばっかか…」

アキラは頭を抱えるようにして溜息を付くと、出口に向かってさっさと消えて行った。

あいつの周りの人間と言うと数人しか居ないが、もうご愁傷様としか言いようがない。

「いつの間に…？」
「ん？」

ぐいっと先程よりも強めにフェンが裾を引っ張った。

「仲良い…」
「…いや、良くは無いけどな。俺も反省ぐらいするぞ？」
「え…？」
「何驚いてんだこの野郎…」

身を引きながら驚くフェンに溜息を付く。と言うかこれはたぶん素だ。冗談を言う性格でも無いだろう。

「ユキネんとこ行って飯食いに行こうぜ。酒場の所で良いだろ？多分レイ達も居るし」

首肯したのを確認して財布の中身も確認する。払い過ぎている分を除いてもまだ余裕はありそうだった。

「魔法っていつも練習してたのか？」
「時々、夜にユキネと」
「成程ね」

魔法がどういった鍛錬でどれほどの時間を必要とするかは知らないが、ユキネもフェンも確りとした基盤があっての勝利だと言う事らしい。

ぽん、とフェンの頭の上に何となく手を置いた。

「おめでとさん」
「…？　さっき聞いた」
「気持ちこもってたろ？」

ポンポンと笑いながら頭を数回叩くと、フェンは首を傾げた。

「…ハルユキは、変」

予想外の返答にハルユキも首を傾げるが、そこまで自分は変だと

は思えない。

「俺、変か？」

「……個性的でたいへんよろしいと思う」

「褒めてないだろそれ…？」

ぐりぐりと頭を撫で回して、ポンと頭を小突くように手を離した。

なにやら不満そうな声を上げるフェンに歩幅を合わせて医務室に移動する。

医務室は控え室を出て出口に向かってしばらく歩いた所に設置してあり、先程フェンにこっ酷くやられた選手はもう一つの控え室側の医務室に居るので中は多分ユキネだけだろう。

「おー、ハルユキ。飯食いに行くでー」

「死ね犯罪者！！」

にこやかな顔のジェミニが医務室に入った二人を出迎えた。

顔の前の剣を震える腕から目を逸らしたかっただけにも見えたが。

「何やってんだお前ら…」

「いや、着替えを手伝ってやろうと思って。ほら、下着だけでええ

から」
「……あれよりは変じゃないよな、俺」
「あれは、…よろしくない」

あれよりはマシな位置に居るらしい。内心安心しながらも、溜息は止まらなかった。

「何やハルユキ！　ユキネちゃんの包帯巻いたのお前やろが。どうしても巻きたい言うから譲ってやったのに、このむっつりめ！」
「……え？」

ぐりん、と二組の目がこちらに向いた。

「…いやな？　フェンもまだ居なかったし、男の兵士しか居なかったし、早くやらないとこの馬鹿がやろうとするからしょうがなく」
「み、見たのか…？」
「あー……」
「は、はっきり言え！」

顔を真っ赤にして叫ぶユキネの目に多分もうジェミニは入っていないだろう。

わざわざ嘘をつくのも嫌だったし、仕方なかった事なのでそのまま言う事にした。

「…まあ、余す所なく」
「っ――い、いやぁあああッ！！」

本気で殺す気かと聞きたくなるほどの剣の一振りから身をかわしながら、とりあえず残る二人を説得して仲間に引き入れようとして後ろを向く。

しかし、直ぐに視線を戻した。

この状況で、床で沈黙するジェミニとその横に転がっている氷の塊というのは余りにショッキングな光景だった。

あれ、フェン何処行った？　と気配を探ろうとした時に、丁度服の裾を引っ張る感触が体を襲った。

”襲った”だ。間違いない。先程の様に可愛らしいものではなく、決して逃がさないと言う意志が篭っていたから間違い無い。

「ああ、あ、余す所無く…？　上も下も、な、中も？」
「…いや、中ってどこだよ」
「そ、そうだ！　おおお、お前も見せろ！　それで解決だっ」
「落ち着け。それは傷口を広げているだけだ」
「……」
「無言でベルト外すな！」

いつの間にか、ベルトをかちゃかちゃやり始めたフェンを振り切って出口へとにじり寄る。

「……そういうのは部屋に帰ってからやってくれるかしら？」

久しぶりに聞くような常識染みた声に振り向くと、呆れた様に医務室の壁によりかかるノインを見つけた。

「……私は別に側室付きでも構わないけど？」
「……何言ってんだお前」
「それを脱がせばいいのね、分かったわ」
「何しに来たんだお前は！」
「ああ、いけない。やる事があるんだったわ」

それからノインは部屋を見渡すと、ある所で視線を止めて、目を細めた。

そこに向かって歩を進める。

「知ってるかもしれないけれど、二回戦。私は勝ったわ」

その声はハルユキの耳にももちろん届いたが、多分今日に限り声の行く先はハルユキではない。

「聞きたいのは一つだけだけど、ちゃんと答えて」

声の先にいるのは、今日も激闘を潜り抜けてきた一人。準々決勝。ノインが勝ち抜いた時点でこの二人の戦いは決定している。

「――それで結局、貴女は私の邪魔をするの？」

ノインが最後にそうユキネに問い掛けた。凄む訳でもなく、楽しんでいる訳でもない。ただ確認しているだけ。

「――する」

その声に挑むようにユキネが返答した。

その応答にどのような意味があったかは定かではないが、決して何でもない答えではなかったのは察する事ができる。

「じゃあ、好敵手（ライバル）ね」

少しだけ間を空けて、ユキネが頷いた。

「おー、カッコええなあ」

いつの間にか復活して後ろに立っていたジェミニがハルユキにだけ聞こえるような声で呟いた。

「――次、手ェ抜くんやないで、ライバル？」

「抜く必要が無かったらな。あとライバルは止めろ。寒過ぎるわ」

「余裕やなぁ。腹立たしい」

ニコニコと肩を叩く顔と荒々しい言葉が不似合いだが、それはそれでこの男らしい。変人に変わりは無いが。

アキラの奴も大概だが、自分のところも大変だと言ってやりたかった。

「じゃあ、爺が泣いてるといけないから城に戻るわ」

「ああ、じゃあな」

良い具合に張り詰めていた空気がほんの少し弛緩した。

ジェミニは変わらず笑っていたし、ユキネは緊張で少し顔を強張らせている。

ふと目の端に写ったフェンの顔が今にも微笑みそうで見入ってしまったが、結局笑顔を見れる事はなかった。

まあ、それでもこれでいつも通りだし、気にするほどでもない。

それに、退屈しないのは、やはり嫌いじゃない。

◆
◆
◆

ぎっとベッドを軋ませながらフェンは座り込んだ。

まだ誰も部屋にはおらず、もう後は寝るだけ。

ベッドに入ってシーツを被り目を瞑ってしまえば、自動的に今日が終わって明日が来る。

一生の上で三万回以上繰り返すこの日常が、怖くて仕方が無かった。

悪夢を見る事が怖い訳ではない。今日を惜しんでいる訳でもない。

ただ、次に目を覚ませば自分が自分で無くなっている。

いや正しく言えばそうではない。

そう、まるで夢から醒めるように何かが暴かれてしまうんじゃないかと、そう思う。

夢現。

普段感じる訳ではない。ただ寝る前に今日を思い出して、それがとてもあやふやなものに感じてしまうのだ。

朝見上げた太陽も、それに寄り添うように漂う大きな雲も、踏みしめた足元も、仲間の顔も、自分の力も、全て嘘だったかのように。

馬鹿な事を言っている。

こんな事を話したらあの人は笑ってしまうだろう。

きっと笑う。

笑った後に思い切り頭を撫でて来るだろう。

力が強いから首が痛いし、髪を直すのが大変だけど。どれも嫌いじゃない。

いや、他の人にやられると嫌だから、嫌いなのかもしれない。

だからきっと。

多分、皮が分厚くてごつごつしてて、体温高めの、あの手が好きなのだ、と気付いたのは最近の事。

これも多分笑われてしまうかもしれないけど。

それでも。

いつか一緒に笑える日が来るなら、明日を迎え続けるのもそう嫌うものではないかもしれない。

最近はそう思うようにもなっていた。

ガチャっと階段に近い方の入り口から音がした。被りかけたシーツをどかして顔を向けると、丁度こちらを見ていたハルユキと目が合った。

「ユキネ達は？」
「さあ、お前と一緒じゃなかったのか？」
「そういえば、レイと何か言ってたかも…」

ゴトン、とハルユキが机の上に酒瓶を置いて椅子を引いたところでフェンがベッドに入っているのを見てバツが悪そうな顔で苦笑した。

「ああ、悪い。もう寝るところだったか？」
「眠りたい訳じゃない、から」

それを聞いてからよしと頷くと、コトンともう一つ、今度は小さめの瓶を取り出してまた机の上に置いた。

「アシュル…何たらとかいう奴から餞別だ。地元で秘蔵の果物酒だとさ。知り合いか？」

眠気もまだその影すら見せていなかったので、名前を頭の中で検索しながらベッドを抜け出て、ハルユキが座っている机の、一番ベッドから近い椅子に座った。

「アシュル・マリサ。……予選で当たった人」
「あと、他にもお前の対戦相手の奴等も何人か絡んできたけど、毎

回話でもしてんのか？」
「…試合の前に名前を教えてもらった、だけ」

何となくだが、予選の時に名前を教えあってから、未だ試合前に名乗りを行っていた。フェンの外見が外見だけに苦笑しながらだったが、それでも試合が終わった後光栄だったといわれるのが嬉しかった。

今思えば、ただ自分の存在を誇示したかっただけかも知れないけど。

「……美味しい…」
「……美味い」

でも。

これ程美味しいものが飲めるならやはりやって良かったと思う。

「本当に美味いなこれ。……って飲みすぎんなよ」

二杯目を注いでいると、若干体を引かせながらハルユキが釘を刺してきた。

確かにあまり飲んだ事はないが、それでも酔った記憶は無い。飲

んだ記憶も無い。一度も無い。だから大丈夫。

「待て待て待て待て！！　そこまでだ止めとけ、明日も試合だろ！」
「むー……」

三杯目を注ごうとしたところで横から酒瓶を引っ手繰られた。

「ハルユキは、明日……？」
「ん？　あ、ああジェミニと試合だ」
「…嫌？」
「嫌じゃないよ。多分あいつも嫌じゃないだろな」
「……そう」

コップの底に残ったお酒を喉に運ぶと、ゆっくりとコップを置いた。

「お前は嫌か？」
「……少し」

酔いが回ってきたのか、急に瞼が重くなる。

「でも、それ、以上、に……」

戦ってみたかった。

ジェミニと、ユキネと、ハルユキと。

きちんと名乗って戦って、最後に光栄だと言われて終わる事ができたら多分。

今までよりもずっと強く自分を感じる事ができるだろうから。

机の上に寝てしまう前に立ち上がろうとするが、足元が覚束無い。ふらっとよろめいた所をハルユキに捕まえられた。

「なら、準決で会おうな」

どこまで口に出来たかは定かではないが、不思議と欲しい返事が返ってきた。安心して瞼が閉じていく。

抱き抱えられているので、近くにハルユキの顔があるのは分かるが、もうかろうじて意識があるだけで瞼は閉じてしまって確認は出来ない。

代わりにハルユキの服を強く掴んで肯定を示した。

もうお酒は飲み過ぎないようにしようと、こっそり誓いながら、

その誓いと共に意識が塗りつぶされていった。

◆

晴れ。

疎(まば)らに分厚い雲が浮いてはいるが、日当たり良好。

湿度温度共に以上は無い。

そして視線を下ろすと、少し大き過ぎる位の闘技場が広がっていた。

黒いローブは暑すぎたので敬遠していたが、これはハルユキ特製の素材使用で驚くほど軽くて風通しが良いので、このままでも夏を満喫できそうだった。

それでも茹だる様な暑さは消える訳ではなく、闘技場の床石からも揺ら揺らと陽炎が踊っている。

そして。

その陽炎に紛れるように黒衣の男がこちらに接近していた。

フェンと変わらぬ、いやほぼ間違いなくフェンより暑苦しい黒衣を纏った長身の男。

「暫し遅れた。勘弁なされよ」

「やはり、噂に違わず女子の相手か。手加減は出来ぬが宜しいのだな？」

「大丈夫」

静かに一言で返事を送る。

それにしても二人揃って暑苦しい格好だった。

あまり日が当たらない客席でも手で団扇で各々が風を送っているというのに、鉄板のような床石の上でのこの格好は見ている方も辟易するかもしれない。

「私は、フェン・ラーヴェル。貴方は？」

銅鑼が鳴るまでの時間にそう口にした。

呆気に取られる気配が伝わってくるが、直ぐにきっと引き締まった。

「これは失礼した。偽名で済まないが某はコジロウと名乗っている」
「…偽名？」
「不満だろうか？」
「……本名は？」
「悪いが、言わない」

実際大した事ではないのだ。この男もフェンの人生にそう深く関わっていく人間ではない。

でも、だからこそ聞きたいのだ。

人の人生に関わって、自分の人生に色を付けて欲しいのだ。二度と嘘だなどと思えないように。

『――試合、開始だ！』

しかし銅鑼が鳴る。

男も口を閉ざし、もう言葉を交わす余裕は無くなる。

男が一歩踏み出した。

問答は諦めて、向かい撃つ様に地面に氷を走らせる。

棘のように地面から突き出す氷の槍は並みの敵なら十人いても薙ぎ倒すだろう。

しかし、男もここまで勝ち残ってきた実力者。

躊躇いも一瞬。

大きな体を限界まで小さくして、氷の槍の間を潜り抜けてくる。

速い。

目で追える速さだがそれが逆に魔法を使用していない事を悟らせてくれ、身体能力の高さを際立たせる。

「――”火砕竜（アグナコトル）”」

氷から入るのはそれが一番得意な魔法だからだが、それは相手の誤解を誘う。

範囲の狭い物理攻撃から、範囲が広い特殊攻撃に。

氷を待っている相手にその真逆の魔法を使えば、多少なりとも意表はつける。

卑怯だとは思わない。

何しろフェンは身体能力が低すぎるのだ。普通の町娘と変わらないほどではあるが、それでも戦いにおいては最低ともいえるレベルだ。

攻撃を喰らったら終わり。捕まったら終わり。躓いたら終わり。

獣に勝てないから人間が武器を使うように。

工夫を凝らすのは劣っている者にとって義務なのだ。

羨ましい程の身体能力を持った男に、火と土が混ざり合った魔法が竜の形、と言うにはあまりに大雑把な外見のそれが顎を開く。

しかし意外にも男は驚愕の気配を見せず、その事に逆にこちらが驚かされる事になった。

避けれない所を見ると溶岩は予想していなかったようだが、恐ら

く氷以外の魔法を使う事はばれているのだろう。

一回戦は多すぎるから見ていないとして、二回戦は確りと見られていたようだ。

ユキネの医務室に行ってこの男の試合を見れなかった事が悔やまれるが、多分もう一度やり直したとしても行ってしまうだろうし、それは言っても仕方が無い。

焦りながらも、とりあえず竜と男の接触地点から距離をとる。

一、二メートルほど下がった所で、丁度竜が崩れながら男に覆いかぶさった。

しかし、それで終わる訳も無く。

一瞬後に竜の喉だった場所が盛り上がるように隆起しだして、男が飛び出してきた。

ほとんど燃え果てた黒衣の中で覆面だけがその端に炎をチラつかせるだけで済んでいる。

残りの黒衣は恐らく溶岩の下で形を無くしているだろう。あの高温の中で動けたと言う事はあの黒衣も普通の物ではないのは間違い無い。

黒衣の下にはきっちりと黒い甲冑と手甲を着込んでいて、その腰には直刀がぶら下がっている。

その上であの動きを出来るのだから、不公平にも程がある。

「あれはお気に入りだったのだがな」

普通の女子供並の後進に、超人の前進が追いつくのにそう時間がかかるわけも無く、始まって十数秒で男はフェンに手が届く位置まで接近してしまっていた。

「悪いが、容赦はしないと言った」

手甲が拳の形に変わり思い切り後ろに引き絞られる。

この距離ならば、避ける事も防ぐ事もできない。

そして、当然のように。

身じろぎすら出来ないフェンの小さい体に拳が吸い込まれた。

観客は呆気に取られている。

一瞬の決着に。

否。

男がまるで見当違いの方向に拳を突き出した事に、だ。

「何……！？」

すっと男の体が前に流れそうになって何とか踏みとどまる。

そして、目の前から陽炎のように揺らいで消えたフェンを探そうとする前に、男の目の前を氷の刃が掠めた。

「蜃気、楼…！？」

そして直ぐ横には、今までは視界になかった小さな姿。

ひらりと、男の黒頭巾が形を崩し地面に落ちる。

その下には歴戦の戦士の顔。目の下の頬から唇を横切って大仰な獣傷が走っている。

「容赦はしてないけど、油断は、してた」

「痛いところを付くな…」

一拍置いて、フェンは氷の刃を首から離した。

「…意趣返しのつもりか？　しかしそれは油断どころか慢心だぞ」

男の言葉に剣が混ざる。

しかし、もちろんそんなつもりは無い。返答にはならないかもしれないが、自分なりの言葉を口にする。

「――私は、フェン・ラーヴェル。貴方は？」

その言葉を再び聞いて男はピクッと肩を揺らした。

そして、呆れたように口を開けた後、直ぐに傷が走る唇を捻じ曲げるように愉快げな笑みを見せた。

「参ったな。悪かった小さな兵様（つわもの）よ。……しかし私にもまだ滾る物があるらしい」

愉快そうに今度は大口を開けて笑うと、引っかかっていた覆面の一部を、完全に剥ぎ取って顔の全容を明らかにした。

そして胸に拳を置き、高らかに声を上げた。

「――某の名はムサシ。ムサシ・グラルド。ビッグフットに所属している」

ムサシ・グラルド。

その名を胸に刻み付ける。しかし、良く分からない単語が一つ。

「巨大な足（ビッグフット）…？」

「知らないか？　割と自分では有名なつもりだったのだが…」

聞いたことが無い訳ではない。この世界では有名な名前だったはずだがどうにも出てこないだけだ。

『ビッグフットォ！！？』

闘技場の声が拾えるようになっているのか、代わりに実況席から驚きの声が上がった。

『黒い鎧に直刀…！　そうだ、あの男、ビッグフットの”二人目（ツヴァイ）”だ…！！』

闘技場が驚愕の声で震撼した。

そう、たしかかなり昔、町に住んでいた頃に聞き及んだ事がある。

僅か数名のチームから徐々に人数を増やして行き、最終的に商業、貿易にも手を出して、最終的に軍事国として独立した異例の集団（チーム）。

「偉大な一歩（ビックフット）。――某の誇りだ」

世界一有名で世界一巨大なチームの名前。

宵の果物酒（後書き）

感想アドバイス誤字脱字報告等ありましたらお待ちしております。

刃と杖を交えて（前書き）

明けましておめでとうございます。

刃と杖を交えて

完全に覆面を脱ぎ去った男の顔は、よくよく見てみると意外と肉が付いておらず、頬は弱冠痩けていて、無造作に一つに纏めて後ろに垂らした黒髪は疲れたように縮れている。

しかし壮漢。されど歴戦の匂い。

眼光光る目がこちらを向いている分、覆面の時より殺気は濃く感じたほどだ。

「我らが国は確かに誇り。あの少女とこの国との繋がりを持って帰れば更に国は潤う。それも我が国のためだ」

ざわめく民衆を視線で一撫でして、男が視線をフェンに戻した。

「しかし、その事はお主に一欠片も関わりのある事ではない。まさか、勝ちを譲ってくれはしないんだろう？」

それに対して、フェンは静かに沈黙を持って肯定を示す。

「当然ここで正体を現すつもりも無かった。もし負けてしまえば我

が国の名に傷が付く。それは己個人の事で左右されていいものではない」

ああ本当にその通りだ、と笑いながら、その時確かに一人の戦士の顔に成り代わった。

「――だが、ばれてしまっては仕方が無いだろう？」

もう一度、闘技場を見渡す。

その表情には好戦的なものが満ち溢れていて、会話の途中に攻撃しないように目を逸らしたのかと言われれば納得しそうだ。

男の血潮が。男の心臓が。

躍るように脈動したのが聞こえた気すらした。

「もちろん目的は揺らいではいない。我が身一つでそれが達成されるならば捧げよう。しかしまあそんな状況でもない」

静かに白鞘を揺らしながら、直刀の柄に右手を添わせる。

「この滾る血をどう抑えようか苦悩していた。…だから、此処だけの話」

スッと男の切れ長の目が再びフェンを捉え、同時にチン、と軽快な音と共に腰にぶら下がっていた刀が引き抜かれた。

鞘から刃と一緒に冷たい空気が流れ出たかと錯覚する程に、刃の雰囲気で空気の温度が下がった。

「――名を聞いてくれた貴殿に深く感謝している」

そして、そのまま切っ先をフェンに向けた。

感謝など口先とほんの少しだけ。どうして感謝している相手に剣を向けられようか。

それどころか、これ見よがしに当てられる剣気が体を震わせる。

刀に反りは無い。主に暗殺などに用いられる直刀の刀身は本来一尺ほどであるはずだ。

しかし、目の前の業物は少なく見積もってもその三倍はあり、大太刀並みの長さを誇っている。

「自分は偉そうな異名で呼ばれていたりもするが、出来るのは太刀(これ)だけだ。魔力もそう高くは無い」

凛々しい音を立てながら露になった刀身は、ほんのりと朱色に染まっている。

「そもそも戦いに向いた能力ではなかった。某の能のほとんどは日常の傍に寄り添うものだ。

しかし、必要に駆られてな。無理矢理に抉じ開けた。当然多くの物を得る事は出来なかったがな」

確かに男の方からそう魔力を感じる事はできない。しかし、刀の方からは長年に渡って練り込まれた濃厚な魔力が垂れ流されている。

その切っ先を横一文字に振り抜いた。

「しかし、ただ実直に、一つを極める事は可能だった」

戦いを、剣戟を。切に求めるように。

「もう油断は挟まぬ。お主も情は捨てるよう――」

だらっとその刀を持った腕から力が抜け、切っ先が地面に触れる。

一見隙だらけに見えるが、漏れる殺気が先程よりも格段に増している。あれは”構え”だ。

他でもない、戦意の顕れ。

「――最早問答は埒も無し」

戦意の切れ端が口から零れた。

もうこの体は、どちらかが地に伏せるまで止まらないとばかりに。

声と共に男の顔から笑みは消え、大きな体がギリギリと引き絞られて筋肉が悲鳴を上げる。

同時に男の上腕の辺りから光が漏れた。

そこに刻まれているのは”直”の文字。

意味は察する事はできないが、異文字とはそもそもそういうものだ。考えている暇は無い。

今出来る事は、こちらも戦意を顕すだけ。肺から空気を吐き出し、周りに魔力を満たす。

「力比べは好きだが、出来る事ならお主が屈強な男子だったらと思

う」
「勝ってから言った方がいい」
「何、――直ぐだ」

瞬間、男の足元の地面が爆ぜた。

「――バッ！！！」

咆哮のような意気は、男の肺から大量の空気が吐き出されただけの音。

男の走る軌跡は、元いた位置からフェンの懐まで一直線に迷いが無い。フェンは尻餅を付きそうになるのを何とか堪えて、杖を前に掲げる。

呼気とも尾を引く空気の渦とも知れない風が、男の後ろから追随してまるで糸を引いているようだ。

フェンが一を進む間に十進んでしまう、それ程に身体的な差が決然として存在している。

しかし、この男より段違いに強くて速い人を身近に一人知っている。

その人はきっと一の間に千は進んでしまう。だから、尻餅など付いていられない。私はあの横に立ちたいのだから。

脅威を振り払い、静かに闘志を剥く。

魔法の杖は手の内に。

「――”蜃気楼群（ファントムミラージュ）”」

視界の端から端まで残らず景色が揺らめき揺れて。世界がまた異色に塗りつぶされる。

その中の幾つかがが周りの空気の層ごと、音も無く寸断された。

「外れか」

殺しては負けになってしまうので刃は返しているが、それでもその姿は真っ二つになった。

その剣筋が己の体を叩く光景が、フェンの脳裏に浮かぶ。普段は

貧弱なだけの想像力が、忌々しいほど活発に活動を始めている。

嫌になりながら頭を振ると、自分の目からも映ってしまっている分の蜃気楼が、一緒に首を振ってくれていた。

「持久戦。まあ、それもまた兵法だろう」

ならばまた次に行くだけだと、一瞬で二度剣を振り、その三倍の数の幻影を断ち切った。

こうやって一つずつ潰して行けばいつか辿り着くのは自明の理。

「…しかし、あまり悠長なのは得意ではないのだ」

男が小さく溜息を付いた。

「自分は不器用でな、異文字と言えど使える魔の技は二つか三つ。出し惜しみも出来んのだ、許せ」

わざわざそんな事を教えてくれる男に裏が無いとは言い切れないが、ただただ愚直なこの男に裏があるとは考えにくい。

そんな事を疑うより相手の次の手を考える方が有意義だ。

「十二直。建（たつ）、平（たいら）、執（とる）、開（ひらく）」

相変わらず構えは無い。肩に力も入っておらず限り無く自然体に近い体勢から口だけが動き、爆発的に殺気が増した。

「――”巨直（こすぐ）”」

呪は一言簡で潔に。到来する脅威に寒気が背中を通り抜けていく。

「――ッ！？」

闘技場の中を、一直線に風が横断した。

僅か一秒の間に三突き。結果、幻影の半分が突き殺された。

目に見えたわけではない。ただ険を握った男の右手から一直線に空気の層ごと貫かれている。

男の居場所は闘技場の中央のまま。ならば恐らく刀が伸びたのだ。大して驚く能力でもない。――ただ、音も無く、刀身の根本すら視認できな程の速さを除けば。

再び、風が吹く。刃もそれを追い越しながら空気に紛れている。

首筋に風を感じた。次の瞬間には、何かに追われるように目の前に壁を展開していた。

氷の壁を三層。

投石機の一撃すらも防ぐ代物だという自負がある。

それでも。

気付けば、目の前の壁を突き抜けて刃（やいば）が鼻先に止まっていた。

「そこか」

静かに告げる声に肩が揺れる。

攻撃か防御か。迫り来る刃の脅威に頭を絞る。既に男が体を小さくして接近してくる姿が目に映っている。

ならば、歯を噛み締めろ。魔力を内で燃やせ。

刃には、刃を。

幸い男の動き自体は目で追える。言い換えれば引きつけられる。未だ先程の技を使わないのは恐らく刀の強度に問題があるからだろう。

直刀だったのも、突きのみだったのも、恐らくそれ故だ。振れば空気抵抗に耐えられずに折れてしまうし、反りがあれば突きですら折れてしまう。

余り多用できる技ではない、と信じたい。

深く呼吸をして脳を酸素で満たし、前を向く。

目の前には確実に攻撃を叩き付けようと、鬼気迫る空気を纏わせた一人の侍。

「――”氷戒”」

男が刀を振りかぶると同時に呪を口にした。

男の土俵では勝てはしない。ならば、今だけここを最北の氷地に変えて見せよう。

呪文と共に冷気が闘技場内を支配する。

一瞬で鎧を凍てつかせ、刀を凍らせ、全身の筋肉を凍えさせていく。

男の歩みが刀が届く直前の位置で鈍った。

自分の刀が、フェンの身に届く前に凍てつかせられる事を悟った男の額に皺が寄る。

目は逸らしてはならない。のろまな自分に逸らす暇などありはしない。先に逸らしたのは男の方。それどころか、一瞬の内に男が視界から消えた。

ふと、小さな影がフェンの足下を通過した。

顔を上げると、男が懸命にはがしている腕に纏わり付く氷が、顔にぱらぱらと降り注ぐ。

「――”より鋭く”」

宙を跨ぐ男の着地先、そこに剣が刃が一瞬で生い茂る。感覚は子供が一人は入れる程の隙間さえ無い。

「器用な真似を…！」

鬱蒼と生い茂る氷の刃に、顔に嫌悪感、口に悪態が出るものの男の余裕は崩れない。一旦鞘に戻した刀を抜き様に着地地点に振り払った。

男の周りの刃は刈り取られ、その刃を踏み砕きながら男は着地する。

体にも鎧にも傷一つ無く、刀の一振りでは疲れすらないだろう。

それも当然、攻撃はこれからなのだ。

「――”千刃の谷”」

ミシッと、地面が悲鳴を上げた。

男の背中にも先程の自分のように嫌な汗が走っているのが、表情から伝わってくる。

何が起こるか分からない。理解できない。それが一番純粋な恐怖の形なのだから。

もう呪は口にした。

同時に。硬く鋭く、鋼鉄のように。

そこら中に刃を生やした氷の大地が、本来の地面から引きはがれ、男を噛み砕かんとばかりにその顎を閉じ挟んだ。

攻撃終わり。

ふぅ、と一連の動作を追えて、ようやく疲れたようにフェンは一息付いた。

◆

◆

◆

『む、惨い…！　余りに惨いぞ、フェン・ラーヴェル！　誰だ試合前にあの子を心配してたのは！　俺じゃねぇか馬鹿野郎！』

大衆の予想を裏切る展開に闘技場が沸いていた。

訳の分からない事を口走る実況の声に賛同するわけではないが、心配していた人間はかなりの数がいたと思う。

特別相性が良いとも思えない。

思っていたよりもずっと、フェンは早足で進んでいたのだ。

嬉しいのか寂しいのか分からない感情に、鼻の頭をかいて誤魔化した。

「……驚いたな。あやつ、思っていたよりも相当強いぞ」

「そうか？　俺は別に驚かないけどな」

あいつがこっそりと強いのは自分だけが知っていた事だったが、これで周知のものになっただろう。

これも、やはり少し寂しい。

汚い独占欲の形だが、それでも、いやだからこそ喪失感は胸に残る。

「しかしな、これじゃ終わらんだろうのぅ」

横で腕組みをしながら、レイが闘技場を覗き込む。

未だその視線の先では動きはないが、まだあの氷の壁の間で、何かが時機を伺っているのが分かった。

ここからでもその殺気の濃度は伝わってくる。それは、まるで息づいているようにさえ思えた。

当然、一番近くにいるフェンも分かっているだろう。

男に賭けていたのか、周りで数人がため息をつきながら頭を抱え込む中、敏感な人間は穴が開くほどに闘技場を注視している。

「知ってるのか？　ビッグフット」

「聞いたことはあるが、訪ねたことはない。彼処はひどく腕が立つ者が多くての。余り羽も伸ばせんだろうと寄りもせなんだわ」

「……お前盗みとかやってたんじゃないだろうな」

「馬鹿を言え。悪漢を打ち倒して、日々の衣食住を賄っていただけじゃ」

「成る程な。兵士が優秀で治安が良いと食いっぱぐれると。…どこに行っても穀潰しだなお前」

後頭部に走る衝撃。

振り返ると、二メートル程ある椅子を持ったレイが青筋を浮かべている。

「……お前、これ普通は死ぬからな？　あと言葉のないツッコミはただの暴力だ」

奇妙なほどにこやかなレイの右腕が再び持ち上がる。もちろん椅子ごと。

「…すいません」

ふん、と小さく鼻を鳴らすとそこらに椅子を放った。周りの奇異の目が面倒だが直ぐに闘技場に戻っていった。

転がった椅子は後で戻しておくことにしよう。

「……微動だにせんとは。お前本当にどんな生き物じゃ」

殴られた後頭部を軽く触ってなでるが、こぶさえ出来ていない。

一億年の間に自分の体がどう変わってしまったのか、それとも九十九とのあの会話で何かが変わってしまったのか。

それさえも分からない。

しかし結果的に、この世界では重宝している。この平和な時代に俺の剣は災禍の起源にしかならない。

元々使わないで良いように体を極限まで鍛えていたがそれでも人を外れるまではいかなかっただろう。

外れたい訳では、なかったが。

未だ動きがない闘技場からほんの少しだけ視線を上げて、闘技場から階段で続く上座に視線を移す。

そこには初日から変わらず、古びた剣と憑物の牙から削り出された宝剣が飾られている。

災禍の根源なのだ。

それでも尚、あれを求めてしまうのは自分もまた災禍の種だからなのか、いや俺が持つからこそ災禍になり得るのか。

それでも欲してしまうだろう。

あれが自分以外の誰かの傍に在ることは許せない。

誰かに譲ってもらうのでは納得できない。

代わりに勝って貰うのでは承知できない。

自分の力で、自分の勝利の果てにある物しか信用できない。欲しくない。

そして、その障害になる物は打ち倒さなければならない。

近しい者であるにしても、だ。

だからこそ、強く成長しているのを確認するたびに、嬉しくそしてやはり寂しくなる。

勝つことは難しくない。そして傷一つ付けずに勝つことも難しいことでは、なかった。

しかし、これほど成長を遂げた人間を傷付けずに退ける事が出来るだろうか。

手加減をして心を傷付けずに。暴虐を叩き付けてその命を削り取らぬように。

「……ま、何とかなるか」

必要なのは力。自制心とあと一つ。

「それにしても、今回はそれ程騒がんかったのう。お主も成長したか」

最後の一つも大丈夫。それは持っているつもりだ。例え一方通行であったとしても片方あれば十分。

「――信頼だよ」

「ふん、臭い事ばかりじゃなお前は、相変わらず」

失笑するレイを傍目に闘技場に視線を戻す。

とうとう飽和しそうな戦意に、観客達も当てられて闘技場に視線を縫い付けられている。

そして、平穏を守っていた氷の壁に罅が入った。

◆◆◆

「――十二直、除（のぞく）・密（みつ）・平（たいら）・定（さだん）」

聞き覚えのある、しかしほんの少しだけ異なる単語の羅列。

先程の意趣返しというわけではないだろう。しかし、未知という恐怖が否応なしにフェンを襲う。

「――”硬直”」

硬く魔力を練り込んだ。密度の高い氷は時に鉄より硬くなる。鉄よりもとは言わないが、匹敵する程には作り出した。

それでも、その壁を貫いて見覚えのある直刀が顔を出した。

”硬直”。

聞いただけで分かる。ただひたすらに強固さを追求した形の末。

ガリガリと不快な音を立てながら、刀が氷の中を進んでいく。

円を描くように一回りした刀はそこで一端形を潜めた。

ゴトン、と力無く地面に倒れ込んだ氷の切れ端に嫌な想像が重なる。ゴリッと自分の姿を重ねていた氷が踏みつけられた。

「……やって、くれたな」

流石に無傷ではないようで、後ろで一つに纏めた長髪の間から一筋の血が走っている。

鎧にも所々に傷と凹みが見られ、決して無傷ではない。

しかし、致命傷や厄介な傷は一つもない。頭の傷も目には入らない場所だし、四肢の付け根はしっかりと鋼が守っている。

躱したのでも、防いだわけでもない。

凌いだのだ。

体に更に傷を増やしながらも。増やす事を厭いもせずに。

「不器用だろう？　しかしこれでこれまでやってきたのでな」

まるで己の恥をさらすように笑いながら、男が体の傷を見せびらかした。

「……出来ない事はやろうとしないで補うべき。恥だとは思わない」

「…成る程。お互い悩みは尽きぬようだ」

衝突を控えた闘技場内で場違いな程に穏やかな会話が終わる。

言葉を切ったのはフェンの方だったが、切らせたのは男の方。思わず笑ってしまいそうな程、分かり易く”切り替わった”。

意志が殺気に。刀が兇器に。

私は、それでも笑ってくれないだろうけれど。

ならば杖を構えよう。

元より、私に出来るのはこれだけだ。

「……受けてもいい。躱してもいい。しかし、死ぬのは勘弁してくれ」

「お互い様」

深く息を吐き、軽く吸ったところで呼吸を止めた。

「――十二直。〝除（のぞく）・密（みつ）・平（たいら）・定（さだん）〟――〝硬直〟」

口から出たのは先程耳にした硬化の呪文。

一度しか見てはいないが真っ直ぐな呪文だ。効果の程も、言っては何だが知れている。

「建（たつ）・平（たいら）・執（とる）・開（ひらく）――〝巨直（こすぐ）〟」

しかし、もう一つ。既知が重なり未知となる。

そして、今度はそれが変化となって形になっていく。

目に追えない速さではない。ずるずると這うような速さで刀身が伸びていく。

対照的に、男は黙祷するように沈黙を守っている。

今攻撃すれば、しかし瞬時に迎撃されて喉元に刃が迫る絵が頭に浮かび、躊躇を繰り返す。

「鍛直（うちなおし）・大刀〟緋々色金〟」

そして、変化が終わる。

躊躇の後に選択したのは、とにかく距離をとる事。

しかし、その大刀は際限なく成長を続け、最早近距離では視界に納める事さえ適わない。

闘技場の中心に陣取る男が手を横に広げると、闘技場の壁に刃がガリガリと擦れて音を立てた。

それ相応の重さは男の様子からは感じられないが、いとも簡単に削れる壁を見ると大きさに見合った重さを感じることも出来る。

最悪は、重さはあるが男の負担にはならない場合。

その場合、想像するまでも無くあの大刀は脅威だ。

「逃げる事はもう龍ですら適わぬ。屈強な男子ならもしくは受け止める事も可能やも知れん。――はてさて」

その刃が届かない場所は既に闘技場内に存在しない。実質的に広い闘技場が僅かな間に刃の牢獄と化したのだ。

「か弱き御主はどう凌ぐ？」

刃が振られた。

折れる事も、曲がる事も、しなる事さえも知らない硬く直された刀身の先端は、音速を超え爆風と衝撃を生む。

闘技場の外縁部を悉く灰燼と化しながら、小さな体に接近した――。

◆

◆

◆

ユキネ。

彼女は宝石だと思う。あの赤毛の王女もそうだ。

磨けば光る。いや、磨くだけで光る物。

このムサシという男は石。そして多分ハルユキも。

しかし、ムサシもハルユキも、叩いて叩いて研ぎ澄まされて、今は宝石にも劣らない芸術性を伴った刃として完成している。

では、自分はなんだろう。

まず宝石ではない。そのような輝きは自分の何処にも存在しない。

石でも岩でもありはしない。そのような強固さは自分の中に見た例(ためし)が無い。

ならば何なのか。

答えはそう難しいものではない。

苦悩に俯き、落ちた視線の先。

粘土だ。土で、砂で、泥だ。

塗り固めて醜く形を変えていくしか能が無い。

磨いても己の身を削るだけ。研ぎ澄ませても先端から力無くへたるだけ。

ならどうすればこの身は輝くのか。

どうすればこの身に価値が宿るのか。

何かを形作ることは出来るかも知れない。

しかし、贋作だ。

嫌な匂いがいつまでも付き纏う。もしかすれば、塗り固めて塗り固めて出来たこの身もまた――。

瞼の裏に映る。

牙に貫かれて絶命する姿。地べたで人知れず命を散らす最後。ゴミのように折り重なったその上に捨てられる光景。

この追想は。

ふとした時に脳裏に浮かぶ時もあるし、悪夢のように眠りの中を支配する事もあった。

自分で作り出した妄想猛々しいものなのか、それとも、未来の行く末を描き出しているのか。

分からない。故に恐ろしい。

でも、背ける事はしたくない。

やる事はそうは変わらない。死ぬ気は無いのだ。

いつか、自分の形を見出すまでは。

諦めない。

諦める事はできない。

誓ったつもりだ。命を拾い上げられたその時に信頼に変えて誓ったのだ。

諦めた振りはするなと。それが人生の秘訣だ、と。

諦めたい時、いつもこの言葉が向けた背を縛り付けて逃がしてはくれない。

きつくきつく縛られたこんな鎖でも、暖かい絆だと感じてしまう自分は、恐らく変なのだろう。

そしてまた、底に沈んだ意識を人間臭い鎖が引っ張り上げていく。

◆
◆
◆

重々しい音で体が揺れた。

ほんの少し意識が遠のいていたようで、立ったままその音に身を竦ませる。

厳つい鉄の二重壁。

即興で作ったにしてはそれなりの強度を持った鉄の壁。その体を

寄り掛からせていない方が地面に倒れこんだ音だった。

あまりに急いだので、先端が縦横出鱈目に伸びていて、端の方は花弁が散るようにギザギザだ。

中々趣きがあるなと偶然の産物に感心しながら、寄りかかっていた体を離す。

「……っ…」

左肩に激痛が走った。

目をやれば、左腕が力なくぶら下がって少しでも腕を上げようとするとまた激痛が走る。

どうやら、脱臼しているようだ。

何しろ、体から遠い方の鉄壁が地面ごと持ち上げられ、もう一枚の壁に激突するほどの一撃だった。

恐らく接触していた鉄の壁からの衝撃が、一瞬の記憶の空白とこの左肩の惨状を生み出したのだろう。

「不公平…」

あれだけこちらは攻撃したと言うのに、相手は元気溌剌。直撃もしていない攻撃一回で、こちらは満身創痍。

「まだ、立っていたか」

土煙の向こうに人影が見えたかと思った途端に、野太い声が聞こえてきた。

その影は右手の先が不自然に伸びて視界の端に続いている。

間を置かず、その不自然な影が再び持ち上がった。

「大したものだ。益々お主が男子だったらと思わずにいられない」
「…まだ、終わってない」
「……か弱き者よ。汝の名前は女なり、だ」

残念そうに呟きながら持ち上がっていた刀が止まる。

呟かれたのは、有名な戯曲の一台詞。

間違いだとは思わない。腕力が平均的に男に劣っているのは事実だ。自分が例外的に剛力な訳でもない。

それは確かに自分には無い物で、真似しようとしても偽物にしかならない。

「…でも、貴方に無いものを、私も持ってる」
「ならば、見せてくれ」

それは別にはっきりと言えるものじゃないけれど。

記憶だったり思い出だったり、嫌な思いだったり温かい手の平だったりで、ただ人それぞれで形が違うだけだけど。

確かに、私だけの物だ。

得てして、そういうものは力になってくれる。

客席の入り口でじっとこちらを見守ってくれているハルユキに、微笑みかけようとして、やめた。今は何となく、笑えてしまいそうだったから。

「――”緋々色金”」
「――”氷晶結界”」

限界まで圧縮した氷の壁を左側から１８０度。前方を通って重ね

て展開。

一撃では壊されないように幾重にも折り重ねた。何しろ弱い自分には工夫が要る。

早速、目にも留まらぬ速さと衝撃波を伴って、兇刃が氷の壁を打ち付ける。数瞬で一枚目の氷の壁は形を崩し始め、欠片を空気に撒き散らす。

間違いなく窮地である。勝利に導くのにそう選択肢があるわけでもない。

だから。

考え得る最高を選び得る最強を、選択し続けなければならない。

「――”氷岳”」

男の足元に影が差す。

視線を上げる男を見て覚悟を決めた。ここから先は止まることも許されない。

――《廻り廻る。季節は廻り世界は廻る》

静かに、自分の中にだけ詠唱を響かせる。

外界への準備も忘れない。

程なく巨大な氷の巨槌が男の頭上に到来する。ともすれば氷山の一角だと言われても何ら可笑しくは無い。

「――”二連（ツイン）”」

そして、その氷山の巨大な影の中にもう一つ。

氷の鉄槌が姿を現す。

「……これは、また」

驚きは一瞬。

刀の動きも同時に止まった。

瞬時に思考が廻ったのかそれとも本能が告げたのか。

男は氷山に目もくれず、フェンに突進する。

同時に刀が振りぬかれ、二枚目の壁が破砕する。残る氷は後一枚。

――《輪に加わりたいなら個を捨てよ。輪から外れたいなら理を捨てよ》

しかし、もう流れは渡さない。フェンの頭の中にも勝利の絵は浮かんでいる。

「……っく…っぁ」

左手に痛みが走り、杖を持つ右手が震えながら下がりだす。今までに無いほど一度に魔力を放出しているせいだ。

しかし、杖を下げれば氷の壁も消え、勝利の芽は完全に摘まれてしまう。

これを摘まれれば、負けは確定。

指一本触れられずに、完勝する。その形しかフェンには描けない。

――《さすれば与えよう。元より全も一も渦の内》

歯を食い縛って、詠唱を繋げる。

瞬間。

隕石でも飛来したかと言うほどの轟音が闘技場内に響いた。

同時に壁を壊そうと荒れ狂っていた刃が動きを止める。

しかし、もちろん隕石など存在していない。答えを導くかのように頬に当たるのは小さな氷の粒。

今度は間違いなく本能が、男の身を前に投げ出させる。

刹那、二つの氷山が男が居た空間を噛み砕いた。

――《廻り廻る。季節の中で世界の中で。それを感じたならば目を凝らせ》

男にもう刀は振らせない。もうあと一撃で最後の壁は間違いなく崩れ去るだろうから。

「……怖いな、久しぶりに」

最早災害ともいえる光景に、苦笑交じりに男が呟いた。知れず、男の頬に冷たいものが走る。

何回目とも知れない氷の捨身の特攻が、男を両側から襲う。

先程見た氷山だが二周りほど小さい。そこから導かれる答えを想像して、また身をかわす。

最初の轟音でそれぞれ二つに分かれた氷が、二度に分けて男を襲った。

そしてまた、氷が割れてその数を増やしていく。

破砕音が三回なら氷の塊は全部で八つ。

しかし、既に闘技場内に満ちて溢れるほど衝突音が満ちていた。

――《見つけたのならば、持って行け》

氷は既に粉々。幾数百以上の氷が男の身を叩くがダメージは既に

無い。

しかし、脅威が無くなった攻撃も、何かの予兆として男に警戒を強制させる。

霰（あられ）よりも更に小さい氷の粒は最早指先で抓む事すら難しい。

既に轟音の嵐も影を潜めて、木々のざわめきのような静かな音に成り代わっている。

「――”氷晶霧（ダイヤモンドダスト）”」

視界が無い。聴覚もほとんど封じられている。

この中で目覚める事があったなら、誰もここが町の中心だとは思えないだろう。

「これ、は…？」

思わず頬を抓ってしまいそうな光景に、男は代わりに剣を強く握る。

――《その代償に示して顕せ。汝の僅かな一端を凝らせば良い》

――パチッ…

そんな中、木々のざわめきとは程遠い音がした。

最初は一度、次は続けて二度。

加速度的にその間隔は狭まっていき、時折、閃きが二人の目を射す。

黄色か紫か、神秘が宿るその色はまるで何か神聖な物を感じさせる。

二度、三度。まるでどちらから喰らうか舌なめずりをしながら品定めをしているかのようだ。

「ぬ、ぁあああッ！」

男の擦れた慟哭にもそれは耳を貸さない。

しかし、その身を恐怖で縛られながらも男は刀を振った。柄を握った右手に今までとは違う感触が伝わる。

「させるか…！」

辺りで爆ぜる何かを見ないようにフェンに接近した。

氷の壁は砕けて結晶の群れに加わり、少女を守っているものは何も無い。

迷わず、刀を振った。

しかし。その剣が勝利に届く事は無く。

小さな姿は、剣が触れた瞬間に揺ら揺らと空気に溶けた。

「蜃気、楼…！？」

当然、守られた場所の中にいると思っていた。外は刃と氷の嵐なのだ。見つからないとしても、下手をすれば、気づかぬ間に勝負は終わる。

か弱い少女は、ただの一瞬相手を欺くためだけに安全地帯を捨てていた。

「――狡賢いのも、諦めが悪いのも、女の方」

トン、と呆けていた男の背中に、杖のような硬い感触。

男が首だけで振り向けば、ローブの前面を泥で汚した少女が一人。

氷の粒と粒が擦れ合い、その摩擦から更にその災害の起源が生まれては重なっていく。

魔力から精製した不純な物ではない。その轟きも閃光も、純然たる自然の結晶。

それが身動ぎする度に、床石が舞い上がり、粉砕され焼け焦がされ、塵芥になって消えていく。

――《この矮小な掌に、偉大な円環の一端を》

詠唱はここまで。後はもう一言祝詞を紡ぐのみ。

「――”招致万雷”」

その祝詞を待つそれは、魔力を贄にして神を召還したかのように。

「神鳴の鉄槌（エル・トール）」

壁から壁に、地から天空に、天から大地に。何処までも縦横無尽に。

紫電が暴虐の限りを尽くした。

「あ」

自分の中の何かが尽きて、急速に瞼が重くなるのを感じる。

閃光の暴虐が終わる前に、相手の剣士がどうなったか確認する前に、フェンは目の前の地面に倒れこんだ。

気持ち良いほどに空っぽな中身。

意識の終わりに、杖が地面にぶつかる音が、すぐ傍で聞こえた。

刃と杖を交えて（後書き）

感想アドバイス誤字脱字等報告、ありましたらいつでもお待ちしております。

お菓子（前書き）

来週はセンターなのでお休みします

お菓子

「あいつはもう…！　どこに行ったんだか！」

どかどかと地面を踏みつけながら、小さい影が町中を巡っていた。

どうやら目的の誰かを探しているようで、辺りの店を覗き込んでは溜息を付くのを繰り返している。

これと言って特徴のない子供だが、唯一この暑い中にきっちりと目の辺りまでフードを被っているのが印象深い。

そして服の間から時折姿をチラつかせる黒光りする何かも、見る人間が見れば目を見張るものだろう。

しかし、それが何か分かる人間は、この馬鹿でかい町でもいる筈がない。

結局、そのまま少女は町の中心部まで足を運んだが、目的の姿を見つける事はできなかった。

溜息交じりに額の汗を拭い取る。

わぁあぁぁあああ――…

肩をビクつかせるほどの歓声が先程から続いている。

目の前の闘技場では今まさに闘技大会が行われているらしいので、この喧騒も人口密度も頷ける。

頷けは、するのだが。

「…こいつら全員撃ち殺してやろうかしら」

物騒な発言が周りの人間にも届くが、その外見を確認すると苦笑して通り過ぎていく。無論少女も本気ではないので、気には留めない。そもそも人を殺した事などないのだ。

何にしても人の数が多過ぎる。

少女は、手近の椅子に座り込んで周りをもう一度見渡した。

「暑苦しい…」

これでは、探している人間がすぐ傍に居たとしても見逃してしまう事もあるだろう。

がっくりと少女は肩を落とすと、周りを見渡して、何かを見つけて視線を止めた。

その先にあるのは小さな屋台。

クン、と僅かに鼻を鳴らすだけで、お菓子を焼く時特有の香ばしくて甘い匂いが鼻の奥を痺れさせた。

途端に少女は目を輝かせる。

脇目も振らずに目にも留まらぬ速さで移動して、屋台に激突しそうになりながら口を開いた。

「ごめんおじちゃん！　このパウンドケーキとアップルパイちょうだい！　３個ずつね！　あと冷たい紅茶も！　砂糖は三杯！！」
「あいよー…、この暑い中元気だねぇ」
「何言ってんの！　お菓子があるからに決まってるでしょ！」
「そりゃあ、光栄だ」

この店の売りは作り立てだと、そこの看板に書いてある。

期待して焼き上がりを待っていると、一体どうやったのか、一分も経たない内に注文された品が完成していた。

「速っ。どうやったの？」
「そりゃ企業秘密だ」

それはそうだ、と一人納得しながらお菓子の入った紙袋と、紅茶の入った紙コップを受け取る。

左手のほの温かさと左手の冷たさの不協が、期待を膨らませる。

これは一刻も早く味わわなければ。

「これで美味しかったら完璧だけどね」
「美味かったら友達にでも紹介してくれよ。じゃあ、銅貨１０枚だ」

一旦、お菓子達を屋台に置いてから財布が入っているはずの懐に手を伸ばして……。

サー…ッと顔から血の気が引いていった。

念のために懐を探るが、当たり前のように手には何も引っかからない。

そうだ。

そもそも、あの馬鹿男に資金を奪われたから探していたのだ。

お金があればわざわざこんな人が多い所まで来てはいない。と言うかなぜあいつは今日に限って出かけているんだ。いつも日中は寝てるくせに。

現実逃避する少女の汗ばんだ頬に、温度の違う汗が走りぬけた。

盗み見るようにこっそり視線を上げれば、柔和そうな初老の男が笑顔でお代を待っていてくれている。

ど、どうする…?!

優しそうなおじさんだ。お金が無いと言えば、怒りはしない、と思う。

もしかしたら、つけてくれるかもしれない。

でも、それではお菓子の美味しさは半減してしまうではないか…!

お金を持ってもう一度来るとしても、出来立ての美味しさは失われてしまう。

「ああっ、ジレンマ…!」

良く意味も分からない言葉を使って状況の変化を誘うが、そんなに現実は甘くなく、だんだんおじさんの顔に怪訝さが増していくだ

け。

「……紅茶とスコーンを二つ」

そんな時、すっと人影が隣に滑り込んできてぼそぼそと注文を口にする声が聞こえた。

はいよ、と一旦おじさんが屋台の奥に消える。

それを確認して一息ついてから、暫しの猶予をくれた救世主に視線を移した。

そこに居たのは、小さくてどこか希薄な雰囲気を漂わせた女の子。

怪我をしているのか左手を白布で吊っていて、小さい体に少し痛々しい。

でも一瞬後にはそれを忘れる程に可愛らしい顔を持っていて、綺麗で細い、青みがかった髪が風に揺れていた。

いけない。と、我に帰ってどこかに小銭でも入っていないかと体中の探索を再開する。あまり望みはなかったが。

何しろここは一分で品物が出来上がってしまうのだ。

早くもおじさんがお茶とスコーンを仕上げて、女の子の前にゆっくりと置いた。

ますます焦りを大きくしながら、体をまさぐりまくるが最早埃一つも出てこない。

そして、諦めかけようとした時、隣から自分と似たような焦燥の気配を感じた。

まさか、間抜けにも財布を忘れでもしたんだろうか、と軽く自虐しながら視線をやると、当然だが体をまさぐってはいなかった。

どうも、左手を怪我しているせいか上手く台の上に腕を持っていけないのか、少し手こずっているらしい。

もうお金は9割諦めていたので、そのお茶を取って、お茶を持つ分ぐらいは大丈夫そうな左手に握らせてやった。

きょとん、とした顔の後に少女はおずおずと頭を下げて、ありがとう、とこれまた可愛らしい声で呟いた。

何となく良い人認定。そして多分自分の同士(ハラショー)だ。…スタイル的な意味で。

ピコン、と我ながら見っとも無い思い付きが頭に浮かんだ。

しかし背に腹は変えられないので、苦笑しながら口を…。

「お金、無い…？」

開こうとしたところであちらが察してくれた。

やっぱり良い人だ。

申し訳ないが、その良心にあやからせて貰おう。

ついでにそのスコーンも一口貰えれば、もっと幸せだ。

◆

◆

◆

「いやあ、ホントに助かったわ。こんな美味しい物を食べれないところだった…！」

サクサクとアップルパイと交換したスコーンを口に運びながら、感謝の言葉を口にした。

本当に美味しい。もう一度今座っているベンチから先程の屋台に視線を移せば、短くない列が出来ている。

考えてみればこんな人通りの多いところに店を出しているのだ。美味しくない訳がない。

それを聞いて青い髪の女の子はじっと考えた後、こくんと小さく頷いて、椅子の脇に置いてあったパイに手を伸ばした。

「ごめんね、後でお金は絶対返すから。その宿まで行けば居るんでしょ？」
「大体、は」

そこから会話は少なくなり、サクサクと乾いた音だけが喧騒に反抗していた。

しかし沈黙さえもこのお菓子の魅力の前には、幸せの時間を彩る香辛料でしかないのだ。

ああ、お菓子とはかくも偉大である。

「あ、名前聞いても良い？　私はエゼ。貴女は？」
「フェン。フェン・ラーヴェル」
「よろしくね、フェン」

サクン、と残ったスコーンを口に運んで、冷たい紅茶に手を伸ばした。一口だけ口に含んで少しだけ香りを鼻に通して嚥下する。

飲みすぎてはいけない。お菓子はまだあるのだ。

「こんな美味しい物があったとはねー。もったいない事しちゃったわ。まぁまだ町に来て二週間ぐらいなんだけど」

「私も、今日は、…ご褒美」

「ご褒美？」

何となく吊られている左腕に視線を移した。

怪我の仕方なんて無数にあるが、多分この女の子は、目の前の闘技場に選手として立っていた事を推察する事ができた。　ローブで隠れてはいるが、腕にも小さい擦り傷があったし、ローブも裾のところがほつれてしまっている。

「闘技大会に出てたんだよね」

「そう」

「ご褒美って事は勝ったんだ。凄いわねー」

性格上あまり真面目な口調が得意ではないが、感心しているのは嘘ではない。

この小さい体で、屈強な男達と戦って勝ったというのは信じられない事でさえあるのだ。

しかし、良い人は信じるのが信条だ。それに嘘を付けるような性格にも見えない。

パウンドケーキが根こそぎ口の中の水分を持って行ってしまったので、右手に持ちっぱなしだった紅茶をもう一度口に運ぶ。

「あ、ぬる…」

ずっと手に持っていたのがいけなかったのか、すっかり外気の温度に屈してしまっていた。

あまり、温い紅茶は好きではないので、今飲むかどうか迷ったが熱くも冷たくもしようがないので、とりあえず口に運ぼうとコップを持ち上げる。

すると、ふいに横でフェンが軽く指を振った。

杖は見かけられないが、その指の根元に付いた指輪が光っているのでそれが魔装具なのだろう。

何をするつもりかと思い、手を止めてその指の動きを目で追っていると、ポチャポチャッと手の中で音が連続した。

「わっ、スゴ…！」

音の正体は、紅茶の中に氷が落ちた音。

しかも紅茶を凍らせて氷を作っているようなので、味にもむらは出ない。

さてはいつもやっているな。と内心で羨みながらそれを口に運んだ。

流石に最初の頃より冷たくはないが、熱せられた体を冷やしてくれるぐらいには冷たい。

「ありがと。…成程ね。こんな事ができるなら確かにこの馬鹿でかい大会でもそりゃ勝てるわ」

肯定を待ったが、今度はあの可愛らしい首肯は見られなかった。

「どしたの…？」

コロコロと音を鳴らしながらフェンはコップを回している。

その音で、フェンのコップの中も同じように氷が良い仕事をしている事が分かった。

「――今日は、勝てなかった」

え、と思わず聞き返していた。

「今日は、負けた」

聞こえなかった訳ではないのだが、フェンは律儀にもう一度教えてくれた。

その声の中に悔しさがあるかどうかは、――よく分からない。

「でも、頑張ったから、ご褒美」

「……よし、なら私からもご褒美を上げよう」

静かにパウンドケーキをフェンのほうに押しやる。すると、フェンは不思議そうに首を傾げた。

「でも、それはまだ、私が貴女に奢った物じゃ…？」

「……い、痛いところを的確に攻めるわね」

差し出したケーキがいきなり己の恥に成り代わったが今更引く訳にもいかず、誤魔化すように残ったお菓子に手を伸ばした。

一緒にフェンもパウンドケーキを口に運んでいる。

ぱくぱくとお互いに無言で食を進める。

ちらりと隣を盗み見ると、フェンは特にこれといった感情も見せず往来の人々をボーっと観察している。

「フェン」

短く少女を呼ぶ声が聞こえた。

フェンに吊られるように視線を上げると、無愛想な男が突っ立っていた。

「ハルユキ。試合は？」

「お前らが派手に闘技場ぶっ壊したから2時間遅れ。闘技場の自己修復が追いつかんらしい。更に昼休憩だから4時間ぐらいあるらしい」

「…そう」

そのまま表情を崩さないフェンをしばらく観察するように見た後、口を開いた。

「怪我は？　大丈夫か？」

「…大、丈夫」

今、多分嘘を付いた。

嘘を付くような性格ではないと思っていたが、嘘というのは限り無く人間臭いものだ。

この二人の関係が見て取れるようで、逆に何となく微笑ましい。

「――んん？」

フェンと男の顔を見渡していると、ガリッと何かが記憶に引っかかった。

「んんんん…？」

引っかかっているのは男の方。

まじまじと顔を見ていると、視線に気付いたのか男もこちらに顔を向ける。

カチン、と音を立てて記憶が検索結果をはじき出した。

「あああーっ！！　怪盗詐欺エテ公！！」

「……開口一番ですまんが殴って良いか？」

「駄目。我慢」

しらばっくれる男に対して、流れるような動作で両手を腰に運ぶ。

「え…？」
「なに…！？」

そして、黒光りする銃口を男の額に向けて突きつけた。

パンッと乾いた音が闘技場前に響く。

◆

驚いた。

このハルユキとかいう男、弾丸を避けるどころか掴み取った。

しかも一旦避けた後、後ろに人が居る事に気付いてから後ろ手に掴み取った。

「お前、何でそんな物を持ってる」

冷えた声だ。しかしそれに怯えるつもりはない。寧ろ怒りが膨れ上がるばかりだ。

「あんたがくれたんでしょうが！！」

「俺が…？」

ピクリ、と眉を揺らして額に皺を寄せた。記憶を探っているのだろう、そのまま視線が斜め下に落ちていく。

「お前、ユキネの城に居た泥棒女か…！」

はっと顔を上げると、同時に痛い所を突いて来やがった。

「うっ…、それは確かに否定できないけど、私は豊かな人間から少しだけ頂くだけで…」

「お前その銃消えなかったのか？」

「聞けよぉ！！」

まぁまぁ、と言わんばかりにフェンが間に入った。

とにかく一旦落ち着こうと深く息を吐いて、吸う。

「……かたっぽは消えたけど。もうかたっぽは消える前に保存したの」
「保存？　魔法か？」
「企業秘密」
「泥棒家業は経営とは言わんぞ」

殴って良いかしら、とフェンに首を向けると首を小さく横に振った。

鼻骨を粉砕してやりたいところだが、恩人の言葉に背く訳にも行くまい。

しかし、この男には魔道具（銃）一つ分の詐欺の分もまとめてやり返さないといけない。

そして、良い事を思いついた。

「あなた、いえ、あなた達、ね。私の仲間になりなさ…」
「すまん。余りに話が突拍子過ぎてホームシックだ。じゃあな」
「待てやぁ！！」

もう殴る。というか殴っている、現在進行形で。一発も当たらないけど。

「やるわね！　でもだからこそ頂くわ。――世界征服の駒として！」

暑い中動いたせいか汗だくになりながら、銃口を向けた。

自分の中では殺し文句に決めポーズのたたみかけだったのだが、二人とも目線があらぬ所に向いていた。

「聞かなかったことにすんな！！」
「…あ、ああすまん。ツッコミが遅れた。テイク2を頼む。その壮大なボケに宇宙的なツッコミを返してやる」
「ボケたんじゃない！！　本気だこのエテ公！！」

まあまあとまたフェンが間に入って、場が収まった。

「ほら、拳銃ならやるよ、弾はまたゴム弾だけどな」
「……え？　いいの？　返さないわよ？」
「また消えるからな。保存ってのをやっとけ」

中々に話だけは分かる男のようだ。しかもこの生産力。ますます

配下に欲しいところだが、強そうな奴を連れ帰ったらあいつが襲い掛かりそうだ。

どうせ言う事なんか聞かないし、それは本気で洒落にならない。

「ま、この拳銃…？　で良いのよね？　これで我慢してあげるわ」

ごそごそとそれを手早く懐にしまうと、さっさと背を向けた。

返せと言われないうちに、宿に帰って名前を書かなければ。

「じゃ、デート頑張ってねフェン。また会いに行くわ」

それに、さっさと邪魔者は消えるべきだろう。

馬に蹴られて死にたくはないのだ。

それにしても全く、元々言う事なんか聞く奴ではないけれど。

そもそも利害関係が一致したから一緒にいるだけだからしょうがないともいえるが、それでも資金の独り占めは許さない。

全く、あの馬鹿はどこをふら付いているのやら。

◆
◆
◆

「デート…？」
「いや、飯食いに行くだけだけどな。ああ、でもジェミニは敵と飯は食わんもんや、だとさ。シアも連れてっちまった」
「…ユキネはレイと特訓だって、町の方に…」

ふぅ、と長台詞の後お決まりの溜息をついた。

「……デート？」
「…ただの昼飯だけどな」

トトッとハルユキの斜め前に足取り軽めに出てきた。何となく目をやった小さな背中が、以前より少しだけ大きく見える。

いつも無表情のせいか、小さな背中の方が感情が豊かに表れているような気がした。

「全く、負けちまいやがって。あと十秒倒れるのを我慢してりゃ勝

ちだったのに」
「む……」
「根性が足りないんだ、根性が」

何となく頭に手を置いて、軽く撫でる。

惜しい勝負だった。

あとたった一欠けら。体力か魔力が残っていれば気を失う事などなかったのだ。

規格外の刀が暴れまわった部分は、衝撃波で粉々。

雷がそれを更に焼き尽くして塵芥。

闘技場内に二人も人間が存在しているのが信じられないほどの状況だった。

それでも、片方は立っていたのだ。身を焦がしながら刀を杖にしながらも。

地力で負けた。

体力で負けた。

生れながらの差で負けた。

この敗北は、フェンに影を落とすのだろうか。

「まぁでも、どっちにしても次が俺なら意味無いけどなー」
「…仇討ち、頼んだ」
「はいよ」

納得したのか他に意味があったのかは分からないがコクン、と小さく頷いてフェンは歩幅を縮めた。

同時にハルユキも歩幅を広くしていたので、追い越してしまいそうになる。

と。

抱き止める様に、おずおずと腕にフェンの腕が回された。

驚いて目をやれば、耳をほんのり赤く染めている。

「い、いやな？　だから恥ずかしいならするなって…」
「で、…デート、だから」
「昼飯食うだけだって…」

身長差がありすぎてよたよたと危なっかしかったからか、フェンが自然に腕を離した。

「……変態」
「何で！？」
「いやらしい顔、してた。…体目当て」
「…今は荒唐無稽なボケが流行ってんのか？」

その小さな体に、それもこんな時間帯に性欲を催しては駄目だろう。大人として。

その後、嫌がらせか靴の踵を続けて踏まれる事４回。

こちらと同じように、身長差がある二人がこちらに小走りで近寄ってくるのが見えた。

「おお、おったおった。ハルユキー、お金あんま無いからやっぱり昼一緒させてくれー」
「敵に塩は送らん。飢えてろ。シアは許す」
「次、手ぇ抜いちゃるから」
「荒唐無稽だよ」

よし、飯の前に残る二人も拉致って行くとしよう。

特訓なんてどうせレイが何か企んでいるだけだ。一分で捕まえて見せよう。

そして、この妙に絡んでくる関西弁をどう料理するか話し合おう。

「ハルユキ、ユキネ達も…」

「捕まえに行くか」

思わぬ一時の休憩だ。

ゆっくりしなければ罰が当たってしまう。

◆

◆

◆

「ぐ…ぉッ…！」

傷と火傷だらけの体に、きつく包帯を巻いていく。

尋常ではない痛みが脳髄を伝っていくが、正体がばれてしまった以上、些事とはいえ他国の力を借りすぎるはよろしくない。

何とか薬草と自己治癒で傷を回復させた方が良い。

幸いと言うか何と言うか、戦いよりもそっちの方が得意なのだ。

「十二直、”満（みつ）”」

細かに魔法を重ねがけしながら、腰の辺りで最後の包帯を結び終えた。

ふう、と心からの一息を付き、服も着ないまま宿のベッドに上半身を倒れこませた。

思い出したかのように体中の乳酸が、血液に乗って全身に巡っていく。

どくんどくん、とまるで手先にも心臓があるかのように血管の太い部分が脈動した。

久しぶりに、充実した一時だった。

最初に相手を確認した時には溜息でも付きそうになる心持ちだったが、今は心地良い疲労感が気分を高揚させてくれる。

余り褒められた内容ではなかった。

こちらは力任せにひたすら攻撃しただけであったし、最後の勝ち名乗りの瞬間には自分も満身創痍だった。実際には一度完全に意識も飛ばされた。

あの閃光と轟音。あの中で気を失わないわけがないのだ。ただ無意識的に、その場で最も信頼できる物に身を預けていただけ。

未だにこちらを品定めするかのようなあの雷を思い出すと未だに身震いが起こる。

もし、避雷針代わりに刀を突き立てなければ、いや、もう一握りの体力さえあの小さな体に存在していたなら結果は逆だった。

名前は…。

フェン・ラーヴェル。

間違い無い。二度も聞かせてもらったのだ。間違いようが無い。

そして、次は”いよいよ”だ。

一瞬で結界を飛び越えて、ラーヴェルの様子を伺いに来た所を見ると、どうも親密な関係であるらしい。

無事を確認した次の瞬間に、こちらに向けられた冷たい視線を思

い出す。

ブルッと、体が冷え込んだ。

雷の時の数倍の悪寒が体を走り抜けていく。

まさか、災害よりも危険度が上なはずはない。しかし、人災と言うのならば考えられない事は無いやもしれない。

先の戦いによる可能性や成長からの未知ではない。

仄暗い谷の底を覗き込んだかのような、得体の知れない怪異。

同じ未知でもこれ程に恐怖の密度が違う。

明日だ。

まだ次の試合が始まってすらいないが、必ずあの男は上がってくる。

その時まで高揚も恐怖も戦意もしまっておこう。

全ては明日。どうか明日までは――。

しかし、願ってしまったのがいけなかったのか。それとも最初から定められていた事なのか。

一つに纏めた荷の中から、細々と光が漏れ出した。

明日に期待を寄せる一人の戦士はまだそれに気付いてはいない。

◆
◆
◆

「ユキネ！　気を付けろ上からじゃ！」
「分かってる！」

肩を並べて警戒していた二人が、同時にそれぞれ左右に跳んだ。

一瞬後に、先程まで立っていた場所が砂塵と共に抉られる。

敵の姿も砂塵に紛れ、先程までは息を呑むほどの存在感が土ぼこりに隠れていく。

「化け物め…！　二人がかりでこれか！」

砂塵の向こうからレイの悪態をつく声が聞こえる。

姿こそ見えないが相手が相手だ。全力で警戒しているだろう。

「小僧がそちらに行っ……」

それからレイの声は聞こえない。

不穏な臭い。

余りに不自然に声が途切れ、レイがどんな目にあっているのか想像が巡っていく。

ぐるぐると思考が廻る。

だから言ったのに。決闘なんて吹っ掛けるからこうなるんだ。

多分、レイはもう駄目だ。

捕まって敵の手の内。これは動かないだろう。

二人係でも防戦一方だったのだ、一対一では敵いようもない。ならば無謀でも砂塵の中に足を踏み入れる他無い。

まさに足を踏み出そうとしたところで、砂塵の中から何かを担いだ人影が見えた。

勢いは、…止める必要がない。そもそもこれ以降に好機など来ない。

覚悟を決めて、剣に力をこめる。この場合に関してだけ剣に必殺は必要としない。

ただ脇を絞めて、真直ぐに、速く、相手に傷一つ付けさえすれば良い。

しかし、砂塵に食い込んだ剣が、その瞬間に手の中で暴れだした。

まるで生きて、もがいているかのように剣が暴れる。一秒と持たずに剣が上空に弾け飛んだ。

呆気に取られて、空に上っていく剣を目で追ってハッとする。

視線を前に戻した時には、ほとんど晴れた砂塵の中から、ロープで拘束されたレイを担いだハルユキがこちらを見ていた。しかも御

丁寧にロープと体の間に布まで咬ませてある。

次の瞬間に、剣がザクッと申し訳無さそうな音を立てて、明後日な場所に着地した。

ああ、巻き技か、と一人暢気に納得し。いや待て、何で腕で剣に巻き技を仕掛けられるのだと吃驚し。

そしてまた次の瞬間には、剣を追うように空中に放り投げられていた。

自分の悲鳴が、嫌味なほどによく聞こえた。

◆

◆

◆

「両者確保ー」

5分もしないうちにハルユキはフェン達三人がいる食事処に戻っ

ていた。

両肩にそれぞれまだ目を回したままのユキネと、羞恥で顔を真っ赤にしたレイをロープでぐるぐる巻きにして。

これで街中を歩いてきたのなら、さぞ好奇の目に晒された事だろう。

「…むごい」

「いやいや、俺も普通に連れて来ようとしたんだけどな。この負け犬Aが喧嘩ふっかけて来て、勝ったら罰ゲームって事になったから、これで」

「……ユキネは？」

「寝てるだけだ。試合前だしなこっちは」

「……でもその絵は下手したら捕まるで？」

「まあ、この町は良い意味で馬鹿なやつばっかだから大丈夫だろ」

レイの恨み言がハルユキの耳元に小さく呟かれ続けているが、気にもせずに隣の席にレイを置くと改めて食卓についた。

すると、その隣に居たシアが苦笑いしながらロープを解こうと近寄った。

「ああシア。それ中々解けないし、どうせすぐ消えるからほっといていいぞ」

レイも恨み言を重ねながらハルユキを睨み付けていたので、不吉な物を感じたのか二三度振り返りながらも席に戻った。

「大丈夫やて。何か御丁寧に布まで咬ませてあるし」

不安そうにこちらを見上げたシアにジェミニが苦笑しながら返した。

机を挟んだ向こうでは、目を回したユキネをフェンとハルユキが起こそうと試行錯誤している。

瞼が揺れているのですぐに起きるだろう。試合を控えているのになんとも暢気なものだ。

そこで、シアがまだ瞳の中に不安を残していることに気付いた。

ああ、と何となくその理由に察しがつく。優しいこの子の事だ。次の試合の事を心配してくれているのだろう。

二回戦は楽に勝ったものの、一回戦では大丈夫だと念を押した割に結構傷を負った。

次の相手のハルユキが強いと言う事ぐらいはシアも知っている。それに今はそれに加えてフェンが痛々しく左腕を吊っている。

嫌な考えを連想してしまう事もあるだろう。

「大丈夫やて。たかが試合や」

そう言ってはみるが、中々表情は変わらない。

「そう大丈夫だ。何なら儂が乱入して後ろからザックリ行く」
「また、恥かかされるで？　レイちゃん」

いつの間にかロープから抜け出して、顔一杯に逆襲の念を広げているレイがヒソヒソと顔を寄せて来ていた。

「いいか。殺す気で行け。いや殺せ。ぶつ切りにしてしまえ」
「そりゃそうや。そうせんと瞬殺やろ」

え、とシアの口の形がそう言いたげに形を変えた。

殺すと言う単語が仲間内で使われる事に疑問を覚えたのだろう。
まあ言いたい事は分かるが事と場合による。

「そう動揺するな。言葉の綾じゃ」

毒を抜かれたかのようにレイがそう言って、苦笑した。

一旦きょとんとして、何だ、とばかりにシアもくすくすと笑い出す。

白けるのを感じた。

ああ、駄目だ。このタイミングでこの熱を失いたくは無い。

ハルユキでしか、あの規格外でしかこの熱は感じ得ないのに。

「俺は――」

言葉を切ってそこでシアに視線を移す。目を見開いて顔には僅かに驚愕を浮かべている。

笑顔を壊すのは本望ではないけれど、ここを譲ればあの時無理矢理に馬車に乗り込んだ意味が無いのだ。

「シアちゃんは来ん方が良いかもな」

やんわりとした拒絶。粗暴に追い払ったのではなく、柔らかい掌でゆっくり押し退けただけ。

それでもほんの少しだけ、距離の広がりを感じる。

ほんの少し寂しいのかもしれない。

重なる。重なる。重なる。揺れる瞳が。綺麗な髪が。

久しぶりに、頭の裏をガリガリと何かが引っ掻いていく。

しかし、さあ。

さあ、もう直ぐ。

もう、直ぐで。待ちに待った至福の時。

目の前に喉笛があれば噛み切り、手の中に心臓があれば握り潰してみせよう。

◆

◆

◆

『えー、なんか諸事情によりビッグフッドのコジロウ選手が棄権す

るらしい。よってこの試合に勝った方はもう決勝進出だ』

は？　と闘技場の上でジェミニと声を揃えた。

『えーと…？　何でも、とにかくただならぬ事態らしい。まあ、ビッグフットの重鎮だから色々あるんだろう。賭けてた奴は諦めろ』

闘技場のあちこちから絶望に満ちた悲鳴が上がっている。

先程何とか賭けてた選手が勝ちあがって、今日酒を飲む算段でもつけていたはずだ。

それは確かに悲嘆ものだろう。

「ああ…仇討ちは無理になったな」

全く、流れを読まないにも程がある。

もしこんな筋書きを書いた奴がいるなら、そいつは絶望的に根性が捻くれているのだろう。

「何とも馬鹿な展開やなぁ」

「残念だったか？」

そう聞くとジェミニは、糸目の真ん中に皺を寄せて考える体(てい)を作った。

相変わらず素振りが演技臭い。

「ワイの最終目的が三回戦(ココ)やから、別にどうでもええのが実際の所」

「あっそ」

「興味無いんかい…」

ぶつくさ言い出したジェミニを置いといて、伸脚して関節を解していく。

「でもまあ正直、お前がこんな試合に出るとは思ってなかった」

「…そうか？」

「あんまりこんな大会に意地を張る性格にも見えないしなぁ」

最後に首を鳴らして、準備運動を終える。

先程まで一緒に食卓を囲っていたぐらいだし、不自然なほどに緊張感は無い。

「――それは勘違いや。ハルユキ」

しかし、そう思っていたのもまた、俺だけだけだったのかもしれない。

「ワイは最初、お前らに無理矢理付いて来たやろ？」

周りの空気が静けさを含んで重くなっていく。

未だに喧しい外の世界が、どこか遠くに去っていく。

「それは別に、フェンちゃんやユキネちゃんにつられた訳でも、もちろんただの暇つぶしでもないで？　ワイが付いてきたのはただ」

そこで一旦言葉を切って、こちらを向いた。ほんの少しだけ見える赤色の瞳が、これ以上無いくらいに冷たかった。

「――お前に、興味あったからや」

ニッと、これ見よがしに笑って見せた。

「思い切りいけるのは久しぶりやから、――死んでも文句言いなや」

低い声の割に顔は笑ったまま。

まるで、喜怒哀楽の仮面を付け違った道化のように思えた。

以前から思っていたが、こいつは俺に対しての態度に、何か他と違うものを感じていた。

別に差別ともいえないもので、区別と言った方がしっくり来るものだ。

今まで何となく考えてきたが、これといった答えは未だ無い。

「それは、殺す気で来るってことか――？」

言葉にこめられた意味は分かる。

この何でもない試合に何を賭けているのかは知らないが、向けられている殺気はまぎれもない。

「もう一つ。勘違いしてそうやから言っとくで？」

俺の問いにジェミニは答えない。それどころか、代わりに意味ありげな言葉を返してくる。

「さっき最終目的や言うたけど、それはこの大会の事やないで？」

じわじわと、その空気を気配を雰囲気を変えていたジェミニが、その変化の加速度を増した。

這うような速さから、人を抜き車を抜き銃弾に匹敵するような速さまで。

空気が殺気に、気配が威圧に、雰囲気が狂気にそれだけで傷を与えうるものに成り果てていく。

「今まで、一緒に旅してきた。その目的が、この状況」

悟る。いや、悟らされる。

いや、実感させられると言った方が正しいのだろう。

ジェミニが今、何を考えているかを。

目的は無い。積み重なった怨嗟の念がある訳でもない。

有り得ないほど、伺える表情が希薄で虚ろ。

ただ、そうしないと引き出せないものがあるから。

こいつは。

俺を殺す気だ。

お菓子（後書き）

感想、アドバイス、誤字脱字報告等、いつでもお待ちしております

天才と化物と（前書き）

訳分からなかったらごめんなさい…。

天才と化物と

ざわざわと客席がざわめいている。

試合が始まる前のざわめきとしておかしな所は無いが、無意識的に不安を感じているのか誰も彼もが忙しなく膝を揺らしたり、闘技場から目を逸らして視線を一箇所に留めないように努めている。

ユキネとフェンも一番前の席に陣取り、その不安を身に感じていた。

「ユキネ…」

「…真剣なだけだ。大丈夫」

まだ闘技は始まってもいない。それに会話こそ無いものの、ジェミニもハルユキもただ突っ立っているだけだ。

それでもこの薄い結界の向こう。

その中の空気がざわめいている。そのさまはまるで入り込んでいた異物に怯えるかのよう。

二人が遠くにいるように見えて仕方が無いのは、そんなものを挟んでいるせいなのだろうか。

シアとユキネの間に座っているレイは、足を組んでその上に肘を

立てて顎を乗せている。

どこかつまらなそうな格好を作ってはいるが、その目はただただ真直ぐに闘技場上を見つめている。

「ジェミニ、は、…」

出した声が震えていることに気付いたのか、ユキネの声がそのまま尻すぼんで消えた。

小声で耳元に囁いたのは、シアに聞こえないようにという心遣いからのものだった。

しかし、レイはそんなユキネを目だけで一瞥すると、そのまま抑揚すらもつけずに淡々と口を開いた。

「殺す、……だとか言っておったのう」

レイの向こうで小さい肩が揺れるのがユキネの目に映った。

非難がましい視線をレイに向けるが、レイは気にも留めずに、それどころかもう一度口を開く。

「小僧を殺す気らしい」

ゆっくりともう一度、わざわざ分かりやすいように言い直した。

実際、ジェミニが戦うところもハルユキが戦うところも二人は見たことがある。

そこから答えを導き出せば、ハルユキに勝てるわけは無い。

しかし、もう一度闘技場を見て断言できるかといえば、否だ。

ハルユキは割といつもと変わりは無い。しかし、ジェミニは違いすぎるほどに違っていた。

いつものどこか抜けたような陽気な男ではない。

冷たくて深い。

そんな印象しか沸いてこない。

その癖に顔だけはいつものように、壊れたように笑顔を保っている。

殺伐とした空気とあまりにも馴れ馴れしく触れ合っていて、もしかすると今まで見てきた姿の方が違うのかもしれない。

そう、思ってしまうほどに。

「でも、さっきまで普通に…！」
「腹の中で何を考えているかなど自分以外には分からんさ。ひょっとすれば、小僧が逃げられないこの状況を虎視眈々と探っていたのかも知れんだろう？」
「ッそんな事は、…！」

有り得ないと言おうとして、しかしまたしても言葉の先は尻すぼんで消えていく。

それでも何か言おうとしたのか数回空中で口を開け閉めしてから、ぐっと唇を噛んでユキネは荒々しく視線を闘技場の中心に戻した。

ジェミニを擁護する言葉は、あまりの嘘臭さに喉を通って戻っていった。

そんな奴じゃないなどと。そんな事を言えるはずがない。自分が今まで目にしていた陽気な人間以外に、何も知らないのだから。

「ないさ。そんな事は無い。だからこそ餓鬼は手に負えんのだ」

それは、誰に対しての言葉だったのか。

レイの視線は固定されたように、闘技場から動かないので定かではない。

しかし、その声を届かせようとした訳ではない事は分かった。だから返す言葉なんて誰も持っていない。

スッと驚くほどあっさりレイの視線がフェンとユキネの方に流れた。

「フェン、ユキネ。この試合どちらが勝つと思う？」

一瞬だけ順番に二人と目を合わせたあと、レイは前に向きなおった。

「それは…」

それは最初の結論に帰結する。そもそもあの二人は今の自分よりは高い位置にいる人間で、その事実も自覚している。

ならば答えは出ない。当てずっぽうになるだけだ。

「さしずめ、化け物と優秀なだけの人間との戦いじゃ。そう考えれば結果はそう予想できんものではない」

それでも、断言しないレイに不安を覚えた。視線は闘技場に投げ出したまま、淡々とレイは一人言葉をつなげていく。

「お前らは良い才能を持っている。種類も成り立ちも違うが大事に育てればそれは高次元で完成するじゃろう」
「……？」
「だからよく見ておけ。天賦の才を持つ者が必死になれば、どうなるのか。
身を削り時間を積めば、何処まで行けるのか」

意味を問おうとする前に、波のように広がる歓声を先導して、開戦の音が鼓膜を襲撃した。

半自動的に、視線も意識も一箇所に縫い付けられる。

◆
◆
◆

「――本気でやってくれよ、頼むから」
「…本気？　そんなもんお前が俺に出させるもんだろうが。人任せにすんじゃねぇよ」
「……」
「だからこその”殺す気”なんだろ？」

かちりかちりかちりと。

ジェミニを、いやジェミニが刻一刻と何かを変えていく。いやずれていくと言った方が正しいのだろうか。

今度はより具体的に。一秒前までのジェミニにより、現在目の前にいる男の方が明らかに危険度が上。

いまだ、銅鑼は鳴らない。故にジェミニを止める事はできない。

それでもようやく、御者が銅鑼の前で撥をゆっくりと振り上げた。

最後に、小さく速くジェミニの口が回る。

声はもう音としてしか聞き取れない。ただ、唇の動きを追う事でそれが言葉だと理解する事ができた。

『行くぞ』、と。

事ここに至り、ようやく何が違うのか気付いた。殺気がどうの、空気がどうのと言ったものではなく、もっと決定的なもの。

明らかに、時間の軸がずれている。

目の前に居るジェミニがまるで遠くに感じるのも、それが最たる理由だろう。

観客が期待に拳を作っているのが見えた。残念ながら、ハルユキが期待していた展開になりそうには無かったが。

撥と銅鑼が触れ合うその直前。

堪え切れなかったのか、誰よりもその粗暴な開戦の合図を待ち望んでいた男が、――跳ねた。

視界から目標物を失ったのは一億と何年ぶりだろうか。

銅鑼が鳴ってからという油断があったとしても、驚かされた。

その姿を探して、視線を散らす。

先程までジェミニが立っていた場所から床石が粉々になって砂利道が続いている。

耳には喧しい破砕音が鳴り続け、未だ両眼は敵影を捕らえてはいない。

ハルユキが動いたのは。

頬に、切り裂かれた空気の欠片が触れた、その時。

空気ごと首を刈り取ろうと、鎌のような鋭い右足が頭上を通過した。

屈んだ勢いのまま体を捻り、相手の姿を確認。そのまま浴びせ蹴りを叩き込む。

しかし、踵から振り下ろした右足は空を切って、呆けたように地面へ着地しただけ。

「速ぇ…」

思わず零れた声は本音で間違いは無い。

右足が地に着いた時には相手は闘技場の壁に張り付くように着地していた。災難にも着地された壁は、大きく罅割れて破片を散らす。

そして、壁の破片が地に着く前にまたしても敵影は消える。

しかし床が砕ける音を辿って今度はその姿を視界に入れる。

またしかし、それも直ぐ目の前。

反射的に拳を握る。

それに対して、相手はさらに時間をずらし、想定していたよりもほんの一瞬速く懐に飛び込んできた。

結果、腰の横に引き絞っていた拳を発射前に押さえつけられた。

間を置かずに右腕に異変。

青く血管が浮かび上がり、不自然に脈動し始めた。

「がッ…！？」

ボコボコと拳から腕へと以上が上ってきて、それより少し早く激痛が神経を通って脳髄に伝わった。

激痛が頭の中で危機感と焦りに変換されていく。

「ちッ…！！」

舌打ちと共に止められていた腕に力を込める。激痛と共に少なくない血が飛び散った。

しかし、構わない。

更に筋肉を凝縮し、踏み足を思い切り床石に叩きつける。

床石を踏み抜き破片が宙に浮く。ほぼ同時に、腕の近くで驚きに息を呑んだ気配が伝わってきた。

絡め取られていた感触が消えた。恐らく察知して手を離したのだろう。

しかし、構わない。

歯を強く擦り合わせ、体を引き絞る。

拳が振られるのは、ほんの一瞬。

音は無い。壁となるはずの空気も断ち切られ道を譲る。

そして、一瞬後にその代償とでもばかりに、轟音と空気の渦が拳の先に巻き起こった。

「――――ッ！？」

再び伝わる驚愕の気配は、その持ち主と共に吹き飛ばされる。

しかし、敵も然る者。体が宙に浮いたほんの一瞬。

――ただ、時間を引き延ばしているジェミニにとって、体を自由

に出来ないこの一瞬は果てしなく長く感じたことだろう。

しかし、こちらも拳を振り切ったせいで体が硬直している。

それでも、ジェミニの体が地面に突く一瞬前にこちらの体に自由が戻る。

拳は駄目だ、まだ強く握れない。

蹴りは駄目だ、その前に着地してしまうだろう。

結果、残ったのは自分の胴体（からだ）。工夫も何も無く、自分の体をただ思い切り叩きつけた。

またしても音は置き去りに、風を巻き込み地面をバウンドしながら滑るようにジェミニは吹き飛んでいく。

しかし、壁に叩きつけられる事は無く、まるで巨大な生き物が地面に爪を立てるように床石を捲りながら手足で勢いを殺していき、壁の間際で完全に停止した。

当然土煙の向こうで何かが動く気配があり、ガラガラと床石の破片を退ける音がする。

「ただの当身だ。大して効かないか？」

あの当身。渾身の力を込めたつもりだったが、まるで等身大の紙に体当たりしたかのような感触だった。

どうやって衝撃を逃がしたか知らないが、手応えからすると、派手に吹き飛ばされた割にダメージは少ないはずだ。

勢いよく右手を振り払う。腕にこびり付いていた血が地面に振り落ち、生々しい音を立てる。

肘までの血管が捲り上がり、所々が爆ぜるように千切れている。恐らく血を逆流させたのだろう。独活を掴まれたままだったならば、いずれ心臓に達していたはずだ。

しかし、腕から零れ落ちる血は既に無く、すでに拳を握れるほどには回復している。

「なあお前、俺を殺す気なんだろ？」

土煙の向こうに最大限早口に問いを投げかけてみる。時間がずれているのなら恐らく届かないだろうが、それでも言葉を続けた。

「俺を殺したいならこれじゃあ温い。
——首を刎ねろ。心臓を握り潰して、脳髄を引き摺り出せ。それ

でも死ぬかどうかは保障できないけどな」

安い挑発。こんなものじゃ誰かの敵意を燃やす事なんて出来はしない。

しかし、既に燃えているものを煽る事位はできる。

「じゃあ本気でやろうか。実は俺も、お前の本音が知りたくて仕方が無かった」

「――――」

何を言ったかは分からない。口元もよくは見えないから唇の動きも分からない。

しかし、殺意が衰えていないのは僥倖だ。

さて、どこまで着いて来てくれるのか。

「全力には全力で、だ」

煙の切れ間から歪んだ口元が覗いている。

ドッと地面を踏み抜く音と共に、砂塵の中から人影が飛び出した。

ほぼ同時にこちらも思い切り地を蹴る。

並居る観客の目から、二人の姿が消えた。

◆
◆
◆

『な、何なんだよ、こいつらッ…！？』

引き攣ったかのような声が魔力で拡声させられて、闘技場に広がった。

それを間違いなく聞いているはずの観客達も、声を失い、口を呆けたように開け放ち、ほとんどが立ち上がったままで固まっていた。

「お主ら、まだ見えとるか？」

所々で空気が振るえ、轟音が連続している。

恐らくそれは、二人の攻撃が交差しているだけの音。

しかしそれによって作られた光景は、もはや人間が作り出しているものとは思えなかった。

地面の床石は捲れて端に強制的に寄せられ、もう荒野だといっても過言ではない。

頑丈で分厚く高い石壁も、二人が勢いも構わず着地するものだから所々がクレーターの様に抉れて凹んでいる。

結界内には緊張が満ちて、二人がぶつかる度に決壊しそうな嫌な音を立て続けていた。

「快々、結界を垂直に走り回りよって馬鹿共が」

「大丈夫なのか、これ…？」

もう二人の影も追えはしない。それは即ち両者共に加速を繰り返しているという事。

まるで、どちらが背が高いか背伸びしあう子供のように。

とはいえ巨人同士の背比べだ。結界が崩壊してしまえば、観客達は一たまりも無い。

――しかしそれでも、観客達はきつく縛られたかのように誰一人動かなかった。

それは恐怖に縛られているのか。

それは何かに魅入っているのか。

それは何かに魅入られているのか。

果てさて、この場を立ち去るものは一人もいない。

「なに、短期決戦のつもりだろう。直に終わる」

レイのその言葉を肯定するかのように、二人のうちの一人が、”確認できる”世界にまで戻ってきた。

狂ったように笑いながら。口の端から血を滴らせながら。癖のかかった茶髪を、夥しい量の汗で頬に張り付かせながら。

そして――。

怪物も顔を出す。

同じように笑いながら、ジェミニの交差された腕の上から腕力に任せて拳が振り下ろされた。

人と人が接触しただけとは思えない音が響く。

聞くに堪えない、嫌悪感に満ちた、吐き気を催すような音。

「ジェミニ！」

勢いを殺しきれず、踏ん張れる地面も無く、なされるがままにジェミニは荒地と化した地面に叩きつけられた。

「……終わりじゃな」

またしても、常識外の音が響く。

◆
◆
◆

最初の最初は、本当にただお前に興味があっただけだった。

百の戦力を一人でねじ伏せる力に。
城を拳一つで吹き飛ばす脅威に。
それは多分怖い物見たさと言い換えてもよかったと思う。

久しい感情に飛びついただけかも知れない。
いつの間にやら紛れ込んでいた国で出会ったことに、何かを感じたの知れない。
もしかしたら、他にも何か知らないものを感じられると思ったのかも知れない。

今まであまり自分を普通の人間だと思った事はなかったからだろうか。もちろん生物学的には人間だが、生まれも育ちも普通ではないのだ。
今でもふとした拍子に、薬と黴の臭いを纏った白衣の男達や、妙なパイプやでかいビーカーが乱立している部屋が目に浮かぶ。

それとそれに紛れるように。
生真面目で無愛想な顔で作られたかのような金髪の髪の少年や、心配性な同い年で麗らかな表情が得意の蒼い髪の少女もまた脳裏に蘇える。

そして。研究者の一人で変に訛った言葉を使う、自分達三人に名前をくれた陽気な男の姿も。

脳裏に何かが爪を立て追想を邪魔するが、思い返せばあの時の暮らしだけは嫌いではなかったのだろう。

戻ってくる訳でもなく、時間が戻ったとしても結果を変える事も出来ないが。

それでも。

実験に乗じて、無愛想な同類と腕比べをするのも。

大抵がボロ負けして、肩を預けながら部屋に帰った事も。

その後に、無理しすぎた事に同年齢の女の子に後頭部を叩かれるのも。

その癖、心配そうな目でこちらを見上げてくるのも。

あの小さな部屋で、夜遅くにこっそりと食べ物を持って忍び込んでくる男を待っているのも。

ほんの少しだけ、外の話や自分の名前の由来を聞く時間も。

例えようも無いほど、喜びを共有できていたと思う。

それは多分、かなり美化した上に、良い部分だけを残した好都合な記憶。

実際にそんな時間はほんの一握りだった。

他の汚い記憶で汚れないようにしまい込んだ記憶。

大事に大事に。深くに深く。

でも、この頃は毎日があまりに騒々しくて賑やかで、楽しすぎるから。

笑い方を思い出しくて、喜び方を思い出したくて。自分の名前の由来を自慢げに話したくて。

深くに埋めた記憶を掘り返せば、確かにあるのに。

しかし、掘り返せども掘り返せども、思い出など押し退けて出て来るのは嫌悪感と脳裏を引っ掻く音。

笑い方など。喜び方など。時間の楽しみ方など。薄らいで消えてしまったのか。

確かに、あったはずなのに。

それでも諦めたくない。この頃は毎日があまりに騒々しくて賑やかで、楽しすぎるから。

だから、ハルユキ。

殺し合おう。

全力で戦う事も、動けなくなるまで競い合うのも自分には懐かしいものだから。

意味なんて分からなくて良い。俺の事を思いやることもしなくて良い。

我侭かも知れないが、自分をぶつけさせてくれ。

でも汚いものが体にこびり付いてしまっているから

全力で戦うには殺意を持ってしまう自分を許してくれ。

まっさらにしてくれ。

圧倒的な力で。

化け物のような力で。

あの時一番楽しかった時間を俺に思い出させてくれ。

そうすれば。

あっさりと見つかりそうな気がするんだ。

天才と化物と（後書き）

感想アドバイス等、ありましたらいつでもお待ちしております。

1976

太陽３つ

背中から思い切り闘技場に叩きつけられて、肺の中から空気が飛び出した。

一瞬体の中から酸素が無くなったんじゃないかと言うほどの息苦しさが襲ってきて、体中の細胞が空気を求めて喘ぎだす。

「ぐ……っぉ…ぇあッ…！！」

たった一撃。

拳一つだけ攻撃を捌き切れず、力を流しきれなかった一撃を貰っただけ。

しかし受け止めた両手のうち直接接触した右腕は折れ、左手は震えて薄い痺れを訴えてくる。

もし、空中でなかったなら両腕とも使い物にならなくなっていたかも知れない。

人目など憚らす余裕など無く、地面に爪を立て体を無様に震わせながら、襲い来る苦悶に耐える。

しかし、元の速さに戻った時間は回復の猶予など与えてはくれない。

ザッと土を踏む音が、すぐそばで聞こえた。

どうやらあちらは全くもって健在らしい。

「――終わりか、この野郎」

終わりだよ、この野郎。

右腕折れとるんやぞこっちは。

腕を庇いながら身を起こすと、ガラガラとデカイ破片になってしまった闘技場の床が横に退かされる。

「俺を殺そうとまでしてこの程度か」

そうですその通り。

付き合せてもうたんは申し訳ないけど、これで終わり。

膝を払うと、そこから尋常じゃない土埃が吐き出された。それに情けないほどに膝が笑っている。

明日の筋肉痛は決定的だろう。

「…まだ知恵があるなら知恵を出せ。まだ力があるなら力を出せ」

無いよ、もう。超必殺技を隠してたりもしてへんよ。

頭を振って、髪にもへばり付いた埃と疲れを振り払う。

「何も無いなら、今成長しろ。汗かいて。自分変えてでも拳握れ。中途半端なんて許すかよ」

…ああ、もう。

無茶ばっかり言わんといてや。

お前のなんでもない拳一つ流すのにとんでもない魔力を消費するんやぞ。

「――立て」

バン、ともう一度笑う膝を強く、今度はグーで殴りつけた。

先程吐き出しつくしたと思われた土埃が、性懲りも無く舞い上が

る。

顔を上げる。

よく通る声のせいか、すぐ近くだと感じていた距離が、意外と離れていた事に気付いた。

「うっさいわ…。馬鹿の癖に」

うるさい、死んでしまえ。

不完全燃焼はこちらも同じなのにピーピーと。

思っていたよりすっきりもしないし、苛々も募る一方で体も痛くて、頭も魔力不足でガンガンしているのに。

――はて。

なら、なんでさっきから立ち上がろうとしているのか。

「…しょうがない」

ああ、結局立ち上がってしまった。

一億年の月日に追いつくには、いくら時間を速めても背中すら見えなかったというのに。

もう大して出来る事もないというのに。

しかも、今から何かを搾り出す余裕も無いのに。

参ったという体を作って、少しだけ視線を上げて空を見上げてみる。

日の傾き具合から見ても今はおそらく昼の三時ぐらいだろう。日差しも弱くなってきて涼しい風が分かりやすい。

ふと、思い付く。足掻きには派手で、いい演出になりそうだ。

手を掲げる。

出番を待っていたかのように、風が頬を撫でた。

「――超必殺技、思いついたわ」

パクリやけどな。

空気を只管に圧縮。

視認出来ないほどの弛緩した空間を、風に乗せて圧縮していく。

より小さく、より硬く、より熱く。

闘技場上空の空気を全て一箇所に。

全てを手の平の上に。

形容しづらい奇天烈な音を奏でながら、手の中に完成したのは小さな太陽。

じりじりと、地面が悲鳴を上げながら干乾びていく。一瞬でも集中を緩めれば体ごと焼き尽くされてしまうだろう。

しかし、威力の程は以前の桜の森で確認済み。

「…俺、それ最初作った時左腕無くなったんだけどなぁ」

「ワイは天才やからなぁ。凡人と一緒にされても困るわ」

くだけた様に笑いながらも、ハルユキの手の上にも小さな太陽が一つ。

これで太陽３つ。早くしないと日照ってしまう。

「改めて、殺す気でいくで」
「どうせ手前じゃ殺せねぇから、気にすんな」
「上等――！」

口元は歪めたまま、右の手の平に乗っかった太陽を撃ち放った。

視界の中で、同じようにこちらに向かって腕を突き出した姿があった。

ああ、端から見たら相手に向かって手を伸ばしているように見えるかもしれないな、と思い、次の瞬間に。

（…気持ち悪っ）

と苦笑して。

世界が、真っ白に染まった。

◆

罅が入ってから、決壊するまでは早かった。

闘技場の上で爆発が起きて、結界が崩壊する音のほかにはほぼ無音。唯一記憶に残っているのは実況者の『嘘だろ…』という拡大された呟きだけだ。

それを聞いてかそれとも本能的にか、誰もが腕で光から目を庇い、背中を丸めて屈んでいた。

「ふー…」

次に聞こえたのは、全速力で走りきった後のような疲れた溜息。

何がどうなったのかと、自然と目を庇っていた腕を退け、薄らと目を開けてみる。

目に飛び込んできたのは、闘技場中に立ち込める砂塵の塊。しかし、それは客席の方に雪崩れ込んできてはいなかった。

依然として結界は存在しており、こちらにはほんの一瞬だけ空気が震えたほどしか被害は無い。

「本当に使うことのなるとはの…」

レイが、ドサッと背もたれに寄りかかって目を瞑った。額には薄らと汗が浮いている

結界が崩壊するのは確かに目にした。しかし、それにも関わらず結界は存在している。

答えに辿り付くのに、そう時間はかからない。

その推測を肯定するように、今の結界は薄らと赤みがかっている。

「あの一瞬で張り直したの、か…？」

「見直したじゃろ？」

ふー…ともう一度深く息をついて、更に背もたれに寄りかかる。

「儂の仕事は終わりかの。ついでに、貸しも出来た」

見れば新たに張った結界にも薄く罅が入っている。どれだけ拮抗

したものだったかがよく分かった。

「それに、ちっちゃいのも自分の仕事をしに行ったしの」
「……私達、は？」
「なに、何もしない役も必要じゃろうて」
「…なら、いい」

しかし、まだ役を終えようとしない男が二人。

煙の中で足掻いていた。

◆
◆
◆

まっさらだった。

抉れたクレーターの上を足を引きずりながらゆっくりと歩いていく。

辺りは大量の土埃と蒸気に包まれて何も見えはしない。

まさか今夢の中にいるんじゃないかと思うほどに、いつまでも景色が変わらない。

しかし夢にしては、余りに淀み無くザッザッと一定のリズムで土を踏む音が聞こえてきて、現実逃避を中止する。

煙越しに影が少しずつその濃度を増していき、何も言わないまま拳が握られる。

ギッと指同士が擦れる音が聞こえた。

まだやる気かこの野郎、とごちってみるが口に出たかどうかはよく分からない。

負けは決まったつもりだったのだが、まだ気に食わないらしい。

一応地面ごとまっさらになるまで、やられはしたが収穫はゼロ。というか、何故自分は殴られながら笑い方をどうのこうの言っていたのか。

さすがに男にまでそんな欲情の仕方はしない。

更に影が濃度を増していき、形になって出てくるかという所で影が止まった。

何となく、口を開いてみる。

「その拳、まさか仲間に向ける訳や無いやろうな。お前知らんやろうけどメチャクチャ痛いで、それ」

出てきたのはしょうもない軽口。

やはり、感動的にはいかないようだ。

「そりゃこっちの台詞だ」

「あん…？」

目を落とせば、自分の腕が、震えるほどに硬く拳を作っていた。

ああ、さっきの音は自分の拳が出した音だったのか、と納得する。

それはそうだ。さすがにあんなか細い音があんな所から届く訳もない。

「ええやんか。ライバルやろ？」

「じゃあ、大人しく殴られろ」

「そりゃあ、…無理」

無理に決まっている。

「…なあ、ちょっと思い出したんやけど」
「何を」
「あのなぁ」

拳にもう一度力を込め、こちらの方から一歩踏み出すと自分と同じぐらいの高さに顔があった。

若干怖い造りだが、子供の顔だ。

これで遥かに年上だというのだから笑えてしまう。

「――ワイもな、死ぬほど負けず嫌いやったわ」
「知ってるよ」

せーの、とお互いに示し合わせたかのように拳を振るった。

自分の拳の方には驚くほど力が無く、馬鹿みたいに勝ち誇る子供のような顔に自分の拳が届く前に、左の横っ面に拳がめり込んだ。

吹き飛ばされる事は無く、ずると地面に膝から崩れ落ちた。

多少、力は逃がしたものの、やはり手加減されていたらしい。そうでなければ、顔面が破裂しているはずだ。

落ちた視界に、ハルユキの足が映る。

「分かって、へんわい――」

反射的に、その足を掴んでいた。

口の中がボロボロに切れて、口の端から血が滴る。

「――この星って、回転しとるんやろ？」

これも確か、ハルユキから教わった事だったか。

聞いた時は意味が分からなかったが、こうして力を巡らせてみれば、大き過ぎて視界に入らなかった大らかな力を感じ取れる。

「これで、最後や」

この化け物が何かしでかす前に、この星から放り捨てた。

◆
◆
◆

転がるように階段を下る。

一段飛ばしで降りていた階段だが、最後の一歩だけ階段が余るために一気に飛び越える。

勢い余って地面に手を付くが、直ぐに地面から引き剥がし、横の通路に滑り込む。

「待て。ここから先は選手と城の関係者以外立ち入り禁止だ」

「……っ…」

入る事は問題ない。

しかし自分の口から、関係者だという事を説明する事は難しい。

反射的に声を出そうと喉を震わせてはみるが、途中で拗ねてしまった様に言葉は喉を戻っていく。

「何とか言ったらどうだ。何も言わないのなら、黙ったまま去れ」

何とも、残酷な事を言う。知らないのだから仕方の無い事だが。

半分躍起になって声を出そうとするが、咳き込みそうになるだけで一向に言葉は出てこない。

兵士の顔がますます怪訝な表情に変わっていき、ついに兵士が声を荒げようとした時。

「入れてあげて。私の客人よ」

「は……？　こ、これはノイン様！　御客人とはいざ知らずとんだ失礼を…！」

「それが貴方の仕事でしょう？　ただ、誰彼構わず声を荒げるのは止めなさいね？」

「はッ！」

「さ、もう勝負決まっちゃうわよ。行かないの？」

こちらに王女の凛とした顔が向けられて、ようやく状況に頭が追いついた。

思わず背筋を伸ばしながら、小走りで横に並ぶ。

「大丈夫よ。誰も死んだりはしてないから」

気付かないうちに、更に早足になっていて、しかも王女を追い越そうとしていた事に気付いて歩を止めた。

王女が追いつくのを待って、一歩後ろに付こうとすると、王女がどこか驚いた表情でこちらを見つめていた。

「…いえごめんなさい。貴方達みんなあまりそういう事を気にしないから、ちょっと意外だっただけ。ああ、別にそうしてほしいって訳じゃないのよ？」

口に手を当てくすくすと笑いながら、少しだけ早足で歩いてくれていた。

「シア、だったかしら？　私もノインって呼んでいいからシアって呼ぶわね」

え、と口の形を変えているうちに、ノインがスカートを持ち上げた。

艶かしい足が露出してしまい思わず息を呑んで視線をガードしようと手を伸ばすが。

「じゃあシア、急ぎましょうか」

それに対して王女は子供のように笑っていて、あろう事かそのまま全力で走り出した。

あっという間にその背中が小さくなっていく。

慌ててそれを追う。

どこをどう行けば辿り付くのかは分からないが、曲がり角で立ち止まってこちらを待っていてくれているという事は恐れ多くも案内してくれるようだ。

全力で足を回すが、運動神経が無い私では風のように動くことは出来ない。

パタパタと気合が抜けるような足音が嫌だった。

それから、王女に追いつきまた先回りしてもらう、を繰り返す事2回。

いつの間にか、後一歩で闘技場に踏み入れるところまで行き着いていた。

「凄い煙…。闘技場直るかしら？」

立ち込めた煙によって闘技場の様子は、…いや、二人の様子は何も分からない。

かと言って、闘技場に踏み出す一歩は躊躇われた。

これと言った理由があったわけじゃなく、何となく足が止まっていた。

それを見て、同じように闘技場の一歩手前で壁に寄りかかっていた王女が優しく笑っていた。

「格好良い女性になりそうね、貴女」

王女の方にもう一度顔を向ける前に、ゆらゆらと揺蕩うだけだった土煙が一箇所だけ薄く色を変えた。

人一人には大き過ぎる人影で、何かガミガミと言い合う声が不思議と胸に温かい。

◆

「いってぇなあ…。これ、お前。死ぬぞ、本当に」

ぐしゃぐしゃになった左腕を抱えながら、ジェミニの所まで歩いて行った。

まだ立っているなら、更に拳をねじ込んでやろうとも思ったが、魔力も体力も底を付いたのか、前のめりに倒れこんでいた。

「……何で生きてんねん、お前は」
「何とかへばり付いたよ、ほら」

もはや原形をとどめていない左腕を見せ付ける。

「へばりついたって、お前…。……ようやるわ、ほんまに」

後ろを振り向けば、音速超えた衝撃波と、地面に突きたてた左腕が地面を削った跡が壁際まで続いているはずだ。

それを見るまでも無く、ジェミニは事の顛末を察したようだが。

「…不公平やなぁ、なんやかんや」

ジェミニは震える口でそう言いながら、震える腕で仰向けに転がった。

「お互い様だ。俺も左手ボロボロだぞ」

骨も筋肉もズタズタ。全く、とんだスプラッタ映像だ。

一度首だけ上げて、左手を確認するとゴトン、と勢い良く音を鳴らして仰向きに戻った。

どうやら納得して反省している、

「ハルユキー、肩貸せー、一ミリも動けん」

訳では当然無く、厚かましくも先程まで戦っていた相手に情けを要求してきた。

置いていく訳にも行かないので襟首を掴んで、肩に引っ掛けるように持ち上げた。

「…扱い方に愛が無いなぁ」

無視してさっさと煙の壁を抜けていく。どうせ直ぐに手渡すことは目に見えている。

言葉の通り。煙の向こうの小さい影を。

疲れからか早くも眠気を訴えだした俺の目が、しっかりと。

太陽３つ（後書き）

感想アドバイス等ありましたらお待ちしてます。

束の間の（前書き）

受験生だったｍｉｌｄよさらば…！
二度と帰ってくるなよ…。

束の間の

「おっ…つぅ…！」

ことさら厳しく包帯を巻き付けられて、ジェミニの口から悲鳴に似た声が漏れた。

「……」

終わりました、と言葉の代わりに思い切り背中を叩くとシアはベッドを離れた。

横から作業を横取りされた兵士も、正確な包帯の巻き方に余念も淀みもない事を認めると、感心した様に顎を撫でてベッドから離れていった。

「へぇ、上手いもんだな」

シアの頭越しに包帯の巻き方を覗いてみるが、俺の目から見ても丁寧で完成度の高い仕事だった。

どこで習ったのか気になるが、過去を詮索し辛いのもあって、何となくそれも聞き辛い。

「お前、そんな物どこで覚えたんじゃ？」

そんな葛藤などどこ吹く風で、前に鎮座する黒髪の後頭部の方から声がした。

よほど、後頭部をはたいてやろうかと思ったがシアも別に気にしていなかったようなので自重しておく。

身振り手振りによる説明によると、どうやら何処かで習った訳でもなく、ただ最近練習して覚えたものらしい。

魔法もほとんど使えないので、役に立てる部分を探してくれたのだろう。

「相変わらず、健気な子じゃの」

頭を撫で回してやろうか、と意気込んでみるが、既にレイにこねくり回されているのでこれも遠慮しておく。

着地点を失った右手が落ち着き所を探していると、バタンと扉が開いた。

「待たせたわね。二人ともいるかしら？」

入ってきたノインの二人、という言葉に反応したのは俺とユキネ。
共通点は一つだけ。

「今日の試合は中止。結界の張り直しに一日。それに闘技場と客席の大幅な修理にも一日。損害賠償は請求しないから安心して良いわ」

チームたんぽぽ一同が内心で安堵の息をつく。

いつだって金欠が一番の大敵なのは変わらない。

「だから試合の日程は二日後の日没からに変更。本当はこのタイミングに決勝戦を合わせなければならないのだけれど、もうしょうがないわ」
「合わせる？　何かあるのか？」
「知らないの？　結構有名よ」

続いて口を開けたノインが、ふと思いついたようにその口を閉じた。

「ま、当日のお楽しみね。これが毎年の目玉だから期待していていいわよ」

楽しげに笑うと、仕事が増えたから、と部屋を出て行った。

◆

「おう、一足飛びに決勝進出だってな。せっかちが過ぎると長生きできねぇぞ？」

早くも筋肉痛の症状が出ていたジェミニを宿の部屋まで運び、酒場で一杯引っ掛けようと酒場に向かい、丁度酒場の入り口のところで後ろからキィラルに肩を叩かれた。

「そうでもないんだよな、これが」

何しろ齢一億歳越えだ。

「今から飯か？」

「ああ。馬鹿の面倒で置いてきぼりだよ」

部屋に着いてからはシアが付いてくれているので、今夜は本格的に一人。

マスターと静かに飲むつもりだったのだが、騒がしいのが増えて

しまった。

「ルウトは？」
「…最近連れまわしてたからかみさんが怒ってよ。しばらく家にいるだろうよ」
「妻帯者は大変だな」
「馬鹿野郎。あれでなかなか悪くないんだぜ？」

がっと首に手を回される。同時に据えた酒の臭いが鼻につく。

「もう飲んでのかよ…」

まだ陽は沈んだばかり。夏場だから沈むのは遅いがまだ七時ちょっとという所だ。絡み酒になるまで飲むのはまだ早い。

「明日仕事が集中するからよ。早めにご就寝だ」
「仕事？　運び屋が祭りの真っ最中にか？」
「舞武の以外にも色々催しがあってな。そっちの方面だ。街の奴らにとっては稼ぎ時だからよ」
「どうでもいいけど、酒くせぇんだよ。離れろ」

ジョリジョリの無精髭をこすり付けんばかりに絡んでくるキィラルを引き剥がして酒場の扉をくぐる。

いつも通り賑やかな酒場に足を踏み入れる。

「ん……？」

そのままカウンター席まで行こうとして違和感が耳を突いた。

一瞬、騒々しい喧騒から、ざわめきに変わったようなそんな感覚。

首の後ろに視線を感じて振り向くと、数人と視線が合って、すぐに逸らされた。

「…飯か？　酒か？」

「ん？　ああ先に何か食べさせて」

「了解」

いつの間にかカウンターに到着していたので、マスターに飯だけ注文していつもの席に腰を下ろした。

「決勝だってな。鬼の仔さん」

「……鬼の仔？」

「知らないか？　お前の事だよ」

ふん、とハードボイルドに笑いながら、フライパンの底に敷いたブランデーに炎が移される。ぼっとフライパンで火が上がり、中に

あった肉が炎に包まれた。

「闘技場から帰ってきた奴が悉く口にするらしい。鬼が出たってな」
「鬼、ねえ…」

なるほど、背中に当たるこの視線にはそういう意味があったらしい。恐怖だとか、警戒だとか。そういった類の懐かしい種類の視線だ。

「別に取って食やしねぇけどな…」
「ほら、とりあえずこれ食っとけ」

ゴトン、とフライパンごと肉がカウンターに置かれる。

あまりの肉の質量に、後ろからの視線に奇異のそれが新たに加わった。

最後にマスターがタレを振り掛けて、香ばしい匂いと肉汁が踊る音と共に、ただの肉が料理として完成した。

置かれてあるパンを一つ左手に取り、右手でナイフを持って肉を切り分けていく。

「そういう所見ても、考えてみれば普通じゃないなお前は。奇跡のナイフかそれは」

「キィラル。何か飲むか」
「あー…、いや、今はいいや」
「ハルユキ、野菜も取れよ」

どん、とこれまたボール一杯に盛られた野菜を手元に取り寄せた。

「お前、闘技場吹き飛ばしたってホントか？」
「吹き飛ばしてはない。ただ結界壊してクレーターだらけにしただけだ」
「…道理でお前、この辺りだけ人が少ない訳だ。お前知ってる奴もあんまりいないしなあ」
「お前はびびらねぇのか？」
「何で俺がガキに怯えなきゃなんねぇんだよ。酔っ払いなめんなよ」
「…ふぅん」
「お？　感動したか？　泣くか？　泣くのか？　よしいいだろ、俺がこの胸で父性の何たるかを見せてやろう」
「……胸にクレーターできたらごめんねお父さん」
「やめて！？　まだ実の息子も迎え入れてないんだぞ！？」
「……ああ、そう言えば」

ドン、と更に大盛りの炒飯をカウンターに置きながら、マスターが馬鹿な会話を終わらせた。

「何だったかな。口調と目付きが悪い子供が来てたぞ。お前に用があるって」
「目つきと、口調が悪いガキ…？」

更にもう一つ、至近距離から頬に当たる視線が増えた。

「キィラル、あと顔面に二個クレーター増やそうぜ。眼球取ってさ」
「やめて!?　まだ息子の成人も見てないんだぞ?!」
「キンキン叫ぶな、鬱陶しい」
「味方がいねぇ…」
「それで?　マスター、そいつが何だって?」
「いや、いないならいいって帰ってたぞ。名前は…」

口が悪い上に目付きが悪い子供。そんな可哀相な見られ方に該当する奴が一人いる。

そいつが俺に用があるとも思えないが、恐らく間違っていないだろう。

「…アキラか」
「そう、そいつだ。ユキネも探してたが、えらく慌ててたぞ」
「……ふーん」

確かもう会わないといっていたはずだが。

最後の肉の一切れを放り込んで、皿の上にフォークを置き、ポケットから小銭を探る。

ポケットの中には銀貨が数枚。

その中の半分ほどをカウンターの上に置いた。

「ご馳走様」

「えらく少なめだな」

「流石に疲れたよ。もう今日は帰って寝る」

「アキラってのはどうする」

「もしきたら明日宿に来いって言っといてくれ」

「向かいの所だな」

ほとんど完治した左手を一、二度握って感触を確かめる。まだ甘い痺れが残っていて、戦いの余韻も体に残っている。

「どうせ明日から休みだしな」

その余韻を逃さないように握り締めた。

◆

◆

◆

2010

ああ、またここか。

夢にしてはあまりに覚醒した意識で、辺りを見渡した。

この前の試合のように、静かな水面と、どこまでも青い夏の空。

ただ、試合の時と比べて、圧倒的に現実感は存在していなかった。

視界の中には壁も境界線もなく、足元ではどこまでも伸びやかに水面が広がっている。

上を仰いでみれば、白と群青がまばらに折り重なっていて、水面にもそれが映って綺麗な上下対称（シンメトリー）を描いている。

まるで、天と地が混ざり合って境目を無くしている様だった。

しかし、少しだけ目を凝らせば、水平線の果てで空と水面が互いの青さを競い合っている。

――ようこそ主。時間通りで何よりです。

瞬きをしたわけでも、景色に見惚れていた訳でもないが、いつの間にか目の前に椅子と机が出現していた。

その事に何の驚きも無い事に驚きながら、二つ用意された椅子の向かい側に座っている人物に視線を移した。

何の装飾も施されていない淡白な造りの椅子に腰掛けるのは、平和的な風景には似つかわしくない鎧を着込んだ女。

それでも優雅にお茶を口に運ぶ姿は、違和感を感じさせなかった。

誘われるように椅子につく。

当然のように目の前には紅茶が用意されていて、机の真ん中にはティースタンドといくつかの菓子が用意されていた。

口に運ぶかどうか迷うが、結局香ばしい匂いに負け紅茶から手に取った。

しかし、夢の中で何かを食べれるものなのだろうか。

――それはやはり無理です。ここにあるのは主の記憶から抽出した紛い物ですので。

ジッと紅茶を覗き込んでみるが、とても幻とは思えない。

――幻とは少し違います。夢の世界で夢を楽しむ訳ですから味も食感も本物です。ただあちらの世界に持ち越せないだけ。

2012

持ち越せない？

――はい。味の余韻も、紅茶の温かさも。そして歓談の記憶も。

そうか。そういえばそうだった気がする。

ここに来るのは、やはり初めてではなかったか。

――はい。と言ってもここに来られたのは二回目です。主がここに来られるようになってまだ日が浅いですので。

それは、つまり半年近く待たせたことになるのか、そうだとしたら本当に申し訳無い。

――いえ、私としましては主がここに来られるのは後3年は先だと思っておりました故。

それでも、このような所に一人は辛かっただろうに。

――いえ。私はずっと外を覗けましたから。知っていますよ？　主が何が好きなのかも。何を見ているのかも。

そう言えば、ティースタンドに並んでいるのは自分が好んで口にしていたものばかり。

待て。と言う事はあの時返してもらったものの中にいた訳ではないのか？

――ええ。魔力が無かったお陰で声を出す事すら出来ませんでしたが。証拠に覚えていますよ。主があの小さな部屋で最後におとした可愛らしい口付けも。

「なッ…！？」

声に反響するように、水面に波紋が広がった。

物理法則など無視して、どこまでも衰える事無く漣（さざなみ）は広がっていく。

――嘘は駄目ですよ。主が誰を見ているかも知っているのですから。

「ち、違う…！　別にハルばっかり見ている訳じゃ…！」

慌てて、訂正を入れるが、くすくすと口に手を当てて牧歌的に笑う鎧の女は聞く耳を持たなかった。

――そうですね…。若い殿方なら、手料理は必ずと言っていいほど喜んでくれますよ？

「だ、だから…！」

――おや、もう時間がありませんね。

待て。何か用があってここに呼んだんじゃないのか？

――いえ。ここには主が気まぐれに立ち寄ってくれただけです。楽しい時間をありがとうございました。

そうか。記憶も残らないのなら、大事な話をする意味も無いか。

――そう、あくまで貴女が主で私が従者なのです。私と主が逢うにはあちらの世界で、それも従者を呼びつけて貰わなくてはなりません。

なら、もう少し待っていてくれ。

直ぐに、いつでも呼び出せるようになってやる。

——勿体無いお言葉。厚かましくも、お待ちさせて頂きます。

また来るよ、メサイア。

——それでは、また会う日まで。

そう遠くはないさ。

2016

味噌汁

「んぅ…」

朝の日差しが瞼越しにユキネの目に直撃していた。

腕で庇ったり、顔を背けたりと抵抗してみたが結局完全には逃れえず、薄らと目を開けた。

慣れてしまえば、朝の日差しはそれほど苦痛でもなく、数秒間そのまま固まって眠気が去っていく手伝いをさせる。

昨日の事を思い出しながら、今日の事を考える。

昨日は何となくハルユキを探してフェンと酒場にいって、それが運の付きだった。

もう本格的に祭りが始まって一週間も経つというのに、まだ全力で宴をやるのだ。

それも、闘技大会で勝ち残っていると知られてからは、もてはやされて大変だった。

明日が休みだからと、酒を勧められて、一口だけ飲んでそこから記憶が溶けたように無くなっている。

「……？」

それともう一つ、何か頭に引っかかる。

まるで、ジグゾーパズルは確かに完成したのに、一つだけピースが余ったような、そんな不自然な感覚。

しかし、寝惚け頭にそんな小さな疑問は長生きしてはいられなかったらしく、眠気と共に消えていった。

「……んん」

眠気がほんの少しだけ残っていつまでも消えようとしない。

構造上、窓から入ってくる朝日は今のユキネの鼻の位置が限界なので少し下に体をずらせば、まだ快適に眠ることが出来る。

今日は、降って湧いたような二日間の休日の最初の一日。

それならば、もう少し惰眠を貪っても、バチはあたらないはずだ。

枕と薄手の腰掛けをずりずりと朝日の当たらない場所までずらし、

枕の上に頭を投げる。

ボスン、と気の抜けるような音が耳に心地良い。

更に念には念を押して、朝日に背を向けるように壁側に寝返りを打つ。

壁があるはずの場所に顔があった。

「…え？」

ほんの少し吊り上った目は閉じられていて、血の通った唇はほんの少しだけ隙間を作り、小さく寝息が漏れている。

「え、え…？」

身動ぎした拍子に、眉ほどまで伸びた黒髪が揺れた。

詰まる所、ハルユキが目の前のそこに寝ていた。

残った眠気が吹き飛び、心臓が他の臓器を置いてきぼりにして暴

れだす。

（な、何で…！？）

体は動かず、声も出せない。

顔と顔の間が近すぎて小声の呼気でも相手の髪が揺れる。

近い。

距離で言ったら１０センチも無いんじゃないかと言うほど隙間が無い。

近い、と自覚した事で、更に心臓が加速する。それを追うように血液がめぐり、顔が火照って真っ赤に染まっていく。

かろうじて思い出す。ハルユキは寝ている時は中々起きない筈。前に城ででは、頬をつねっても起きなかったはずだ。

今すぐ蹴り出してもいいが、近すぎて体がいまいち言う事を聞いてくれない。

ならば、この事は後で怒鳴り付けてやるとして、今は脱出を最優先にしなければいけない。

ゆっくりと体を起こし、頭を持ち上げ、そこまでは良かった。

しかし、まとめていなかった髪が零れ落ち、ハルユキの鼻を刺激した。

それに気付いて、体が固まる。敏感な部分を刺激されたからか、ハルユキも起きないまでももぞもぞと体を動かし始める。

「ぁあ…？」

ほんの少しだけ目が開いた。

開いたか開いてないか分からないほどのもので、まだ多分意識もはっきりしていないのだろう。

じっとユキネを見つめた後。

何を思ったのか、ユキネの腕を掴んだ。

「は、ハル…？」
「んんん…？」

そのまま再びハルユキの目は閉じられて、次の一瞬で事態が急変する事になる。凄い力でぐっと引き寄せられて。

結果、ハルユキの胸の中に体がすっぽりと入り込んだ。

枕か布団かと勘違いしているのか腕が回され、きつく抱きしめてくる。

それと比例するように体温が上がっていくのを、頭に一握りだけ残った冷静な部分が感じていた。

「――――ッ！」

結局、悲鳴と共にハルユキを蹴り出した。

ベッドと壁の間に転がり落ちながら、ハルユキも妙な声をあげていた。

◆　◆　◆

「……正座だ」

「……は？　いや状況が掴めてないんだが…」

「正座だ！」

鬼気迫る顔、と言うより鬼のように真っ赤な顔でユキネがベッド

の上で正座しながら、目の前のシーツをバンバンと叩きながらそう要求してきた。

衝撃と共に目が覚めて、なぜかベッドと壁の間に挟まりながら朝を迎えた俺には、何が起きたかも分からない。

まだいつも起きる時間にはもう少しあるので、他の面々は我関せずと言うように、背中を向けて無視を決め込んでいるか、完全に眠ったままだ。

「正座！」
「…はいはい」

とりあえず要求通りに、ユキネの前に向かい合うように正座すると、背筋を伸ばしてみる。

しかし、なぜかたじろいだのはユキネのほうで、更に顔を赤くしながら視線を斜め下に泳がせた。

「…えっちなのはだめだ」
「は？」
「そ、そういうのはな、夫婦間でやるものであって……」
「そういうの…？」

何が何だか分からずに、首を傾げていると、ユキネの視線が一瞬だけこちらを向き、直ぐにまた斜め下に逃げ出した。

「その、……同衾、とか」
「同衾？」
通路を挟んで向かい側にあった空のベッドを覗き込む。
腰掛けが捲りあがっているだけで、そこには誰も寝てはいない。
なるほど、大体の状況は飲み込めた。
「何で怒ってるかは分からんが、お前、別に初めてでもないだろ」
「は、初めてに決まっているだろう！　私には今までそんな人もいなかったし…！」
「…昔、部屋で何回も一緒に寝てただろ。ベッド一つしかなかったし」
キョトン、と顔を硬直させた後、引き始めていた顔の赤みがまた最大まで赤くなる。
「……そ、そうだな。は、初めてではなかったな」
何を勘違いしていたかは知らないが、寝起きに面倒くさい奴だ。
再び、ベッドに潜り込もうとした所でばしんと背中を叩かれる。

「…今度は何だよ」
「そ、それとこれとは話が別だろう！　と言うか寝ようとするな！」

ユキネの言う事だけがいまいち要領を得ない。

それとも、俺が眠すぎて状況が把握しきれていないのか。

「……分かった。寝るのは諦めた。その代わりお互い情報を確認しあおう」
「よ、よし」
「まず、お前は俺が一緒に寝ていることを怒ってるんだな？」
「そ、そうだ」
「別に初めてではないから気にする事でもない、というのは関係が無いと？」
「べ、ベッドはたくさんあるんだから一緒に寝る必要は…」

ああ、なるほどそういう事か。頭が覚醒してきて、ようやく理解した。

「じゃあ、お前が自分のベッドに戻るべきだろ」
「え……？」
「ここは、俺のベッドだ」

斜め下を泳いでいた視線が一瞬止まり、首ごとユキネのベッドに向けられて、ゆっくり俺の顔まで戻ってきた。

それからまたスッと斜め下に視線が逃げる。

今度の顔は赤くはないが、代わりに頬に汗が浮かんでいた。

「――ごめんっ！」
「逃すかっ！」

ベッドから跳ねるように逃げ出したユキネの首根っこを難なく捕まえる。

さて、どうしてやろうか。

「まあ、とりあえず正座だよな」

バツが悪そうな顔のまま、ユキネは先程の位置に座った。

位置こそ一緒だが、状況は真逆だ。その証拠に、ユキネの額には目に見えるほどの冷たい汗が流れている

「朝食の用意できましたよ」

とりあえずからかってデコピンかますか、と口を開きかけた時、扉を小さく開けて初老の優しそうな女性が顔を出した。

「ああ、すぐ行く」

それに小さく手を挙げて応えて前を向く。

振り向く前と同じように、うー、と寝起きの牛のような声を出しながら、ユキネが頭を垂れていた。

「何だ夜這い犯。申し開きでもあるのか」
「よ、夜這いじゃないっ。ただ寝惚けてて…」
「俺をベッドから蹴り落とした、と」
「わ、悪かった…」
「まあ、別に大して怒ってもいないんだがな」

正座で向かい合っているのは変わらないが、完全に立場が逆転した状況を存分に楽しんだところで、ベッドから降りた。

「さて、朝飯だぞ野郎共。女将さん困らせるもんじゃない」

受付の横の食堂で朝食が付いてくるのが、この宿を選んだ理由な

のだ。

魚のスープとパン、しかも薄めの味付けだが、朝に食べるならこれがまた旨い。

統率など欠片もない我らが一同も、時折の夕食と、この朝食の時だけは行動を共にしていた。

「…むぁ、ああ、朝か。……ええい、鬱陶しい日光め」
「吸血鬼らしい台詞吐くじゃねぇか」
「睡眠を邪魔するものを嫌うのは、どの生き物も共通じゃろうが」

ふるふると頭を振りながら、上半身だけ起こした。

襦袢だけの姿は妙に扇情的だが、それからは目を逸らし、とりあえず問題のジェミニの方に視線を移す。

「無理。動けへん」

何かを言う前にベッドから声がした。

「…じゃあシア。朝飯持ってくるからあと頼んでいいか」

素早く着替えを終わらせて、ジェミニの様子を伺っていたシアに

声をかけると、聞かれるのが分かっていたのか淀み無く頷いた。

「フェ～ン。起きろー」

「……ん」

シーツを頭から被ったまま、こくっとミリ単位で頷いた後、なぜかそのままベッドに潜り込んだ。

「……ふん」

シーツを引っぺがすと、一瞬こちらに視線を移してもう一度頷いた後、そのまま体を丸めた。

溜息を一つ付いてフェンを小脇に抱えあげると、そのまま扉をくぐる。

「…フェ～ン」

階段を下りながら声をかけるが、まどろみながら頷くだけだ。

意外にも一番目覚めが悪いのがこのフェンだ。小さい体なら血の巡りは速さそうなものだが、朝食の席にしばらく置いておかないと目が覚めない。

首をこくこくしながら座っている姿は危なげないが、そうでもしないとこいつは起きない。

失礼をして足で食堂の扉を開けると、一番近い席にフェンを座らせる。

予想通りこくこくしだすが、まあ料理は揃ってから運ばれる筈なので、顔面から突っ込むことは無いだろう。

「すまんおじさん。部屋に動けない奴いるから、先に二人分飯頼む」
「何だ。風邪ひいたのか」

前掛けで濡れた手を拭きながら、初老の男が暖簾をくぐって顔を出した。

「いや、一人昨日の試合で疲れてるだけだ。普通の朝飯で良いよ」
「そう言うな。長客のよしみだ。精の付く物を作ってやる」

ちょっと待ってろ、と言い終わる前に暖簾を戻って、厨房で何か作り出した。

覗いてみれば、まだ朝食の準備中だ。

「手伝うよ」

適当にエプロンを練成してから腰に巻きつけた。

「大豆があるな…」

味噌と、あとは醤油が作れるかもしれない。

味噌なら自分で作れない事は無いが、普通に作っては時間がかかる。どうにかナノマシンで味噌に出来ないだろうか。

米は炒めるためのものがあるので、成功すれば久しぶりに和食を食べられるかも知れない。

「おお、気が利くじゃねぇか。うちの婿に欲しいくらいだ」

「子供いんの？」

「たくましい雄が一匹な」

小さく笑いあって、そこからはまな板を叩く包丁の音と鍋がコトコト鳴る音だけが続いた。

◆

◆

◆

「あとはこれ、かな？」
「…野菜、は？」
「宿の物を使っていいらしい。お金は払うけどな」
「そう…」

ユキネは、とりあえず買い込んだ目ぼしい材料を籠に入れた。

「多過ぎない…？」
「う～ん、でもあいつは大飯喰らいだからなぁ…」
「…そっか」

次々と平らげていくハルユキを想像したのか、フェンはもう一つ肉の切り身を籠に入れた。

「でも、何でいきなり料理…？」
「……何でだろう？」

フェンの質問にユキネ自身も頭を捻りながら、財布を取り出した。

余っていたピースの嵌め所が見つかったような感覚がユキネの頭によぎるが、気付く前に消えていった。

「まあでも、料理できないのは私達ぐらいだし、今後の為に覚えておいても損は無いだろ？」
「…驚く、かな」
「それもいいな」

フェンも納得したのか、我等がチームの全財産が入った財布を取り出した。

「銀貨１５枚分。銅貨分はいらないよ。サービスだ」
「あ、ありがとうございます」

呆気に取られていた市の店主が、苦笑いしながらやっとそう言った。

「大丈夫かい？　男手は無いのかい？」
「大丈夫。それに、これは秘密なんだ」

ぐっと力を入れて、一気に籠を持ち上げる。

「…ユキネ、力持ち」
「何でかな。最近妙に力付いてきたんだ」

フェンの腕にも紙袋が一つ。パンやら何やらが入っているのだが、

それでもそれ以上持つのは無理だろう。

「少し持つ？」

「いいさ、適材適所だ。料理をその分頑張ってくれ」

「…頑張る」

手を離してみるが、肩に痛みも感じない。

一歩そのまま踏み出すと、思ったよりも足取りは軽い。というより後ろの荷物が軽く感じるのだ。

レイと鍔迫り合いなんかをやっているうちに、思ったよりも力が付いたんだろうか。

「よし、じゃあ帰ろうか」

多少揺らしても中身が落ちないことを確認して、宿の方向に体を向けた。

「あれ？」

そこで見知った顔を見かけた。

見つけたのはこちらが先だったが、声をかける前にこちらを見つ

けて、小走りで近寄ってきた。

「ユキネ、やっと見つけた…！」
「アキラ、どうしたんだ、そんなに慌てて」
「すまんが、ここじゃちょっと…」

いてもたってもいられない様子で辺りを見渡しだした。

「ガネット！　丁度良かった！」
「おや、偶然ですね」
「これ頼むな！」
「お、おい、アキラ…」

ユキネが背中にしょっていた荷物をガネットに押し付けると、腕をとられる。

「今から書店に行くつもりな…」

迷惑そうに押し付けられた籠をどかした瞬間、ガネットが硬直する。

同時にガネットと視線が合ったフェンが、身の危険を感じて身構えた。

「頼んだ」
「――Ｓｉｒ．この命に代えても」
それを聞くが早いか、ユキネは腕を引っ張られる。
フェンにしてはかなり感情が顕れた表情見たのを最後に、ユキネは凄い勢いで連れ去られた。

味噌汁（後書き）

何かあったら感想欄にどうぞ。

王族

「何ィ？　連れ去られたぁ？」
「うん」
「大丈夫ですよ。ああ見えてアキラはしっかりしていますから」
「……何でお前がここにいるんだよ」
「――そう、あれは確か３０分前。何気無く辺りを見渡したそんな折。街中に宝石が輝いていましたとさ」
「……シア、窓開けてくれ」

無言でシアが開けた窓から、馬鹿を放り投げた。

「それで、その荷物は何だ？」
「……秘密」
「秘密ってお前…」
「ユキネが連れ去られた」
「それはもう聞いたよ」

何とも緊張感が無い。

まあ、何となく分かる。おそらくからかわれているのだろう。

「言っとくが、別に連れ戻しになんか行かないぞ」
「まあ同じ王族同士、積もる話でもあるのでしょう」
「お前いつの間に上がって…」

再び窓から投げ捨てようとしたが、ガネットの言葉のどこかに違和感を感じて手が止まった。

「――待て。王族？　何の事だ」

「おや、ムイリオ翁からあの少女が没落した王族の嫡子だと伺いましたが。まあ、あの爺が口を滑らせただけですが」

それは分かっている。

そしてそれは出来る限り表沙汰にしないように取り決めた事だ。

何しろ、ユキネの国では王族は全て死んで、変わりに国を民営しているはず。邪魔するのは良くないと全員一致で取り決めた事だ。

「貴方達は全員、復国の為の関係者、侍女、護衛、と。そのように考えているのですが」

「……さあな。あいつはそういうつもりは無いらしいぞ。俺達もその関係者じゃない。偶々一緒に旅してるだけだ」

「そうですか。…ふむ」

それだけ言うと考え込むように、顎に手を当てながら部屋の中を歩き回り始めた。

「ふむ、という事はつまり、ここが…」

ぴた、とある所で立ち止まると、意味有りげにそう呟いた。

「…どうした」

緊張というには緩い、しかし日常というにはあまりに居心地が悪い空気が周りに充満している。

スッと、ベッドの上から何かを取り上げた。

同時に、ニッと生理的な嫌悪を思わせる笑みが浮かび上がった。

「ん……？」

その手に摘まれているのは、３０センチほどの青い髪。

その髪の持ち主は間違いなく、フェンの物だ。

「間違い無い…！」

もうこちらの事は目に入ってさえいない。

そしてその目は、どこまでも性犯罪者の目だった。

「わぁいっ」
「せぇいッ！！」

満面の笑みでベッドに頭からダイブした性犯罪者の顔面を蹴り付けた。

頭蓋が歪む感触が気持ち悪さを感じながら、ガネットがベッドに触れる事無く壁まで吹っ飛んだ事を確認する。

それにしても何て清々しく気持ち悪い奴だ。

「甘いわッ！！　わいでさえまだ一回も成功してへんのやぞ！！」
「今回初めて喋る言葉がそれか、性犯罪者Ｂ」
「……シア」

フェンの言葉を聞く前に、シアがジェミニの腕を掴んで両腕で引き絞り始めた。

シアの力では雑巾ほどしか絞れないだろうが、全身が酷い筋肉痛のジェミニには効果覿面だったらしく、断末魔が鼓膜に響いた。

「――”氷戒”」

「あっはっは、ごめんなさい」

咄嗟に謝辞を示したガネットの体も既に、氷付けだ。

「違うんです。これは後学の為にですね。決して邪な感情など…」

キュン、と鋭い音と共に頭大の氷の塊が壁に激突して砕け散った。

「…頑丈な壁ですねぇ」

あくまでポーカーフェイスの仮面をへばり付かせてはいるものの、僅かに声が震えているのを隠しきれていない。

「暴れる奴が多いんでな。硬化加工、防音加工、通気加工どれも完璧だよ」

「それはそれは。……つまりは誰にも助けは届かないと」

ジェミニの断末魔の中、笑ってみせたガネットの笑顔に、何物も許容する仏じみた物すら感じた。

◆

「話が逸れたな」
「ええ。私は人間の道からも逸れそうになりましたよ。かけがえがない意味で」
「右に同じ」
「地面に這い蹲りながらそれだけ言えりゃ上等だよ」

女性陣はとりあえず溜飲は下りたのか、一番遠いベッドで二人並んで座っている。

「…まあ確かにたかが二三国を渡った先だ。誰か知り合いがいてもおかしくはないが、言い触らしちゃいないだろうな」
「ええ、ムイリオ翁にも貴方達以外には黙っているように言われていますので」
「…ユキネか、そう言えば王女だったんだよな、あいつ」

女性陣の方に目をやると、シアが困惑した顔でフェンから話を聞いている。　意外と聡い奴だ。納得に時間はかからないだろう。

「ユキネさんの国は大きい国だったのですか？」

ガネットが嫌に丁寧な口調で問いかけてきた。妙な性癖を除けば面倒見がよく、物腰丁寧な男だ。それ柄だけに非常に残念だと言わ

ざるをえない。

「いや？　首都以外にこれといった町も見つけられなかったし、かなりの小国だろ多分」
「この辺りは小さな国が集まってますからね。国名を聞いても？」
「……あれ、そういや知らないな。確か王家の名前がメ、メ……」
「おや、流石に機密ということですか」

降参ですよ、と意味でも込めたのか笑いながら両手を上げた。ただ本当に忘れていただけだが、そう言い触らして良い事でもないだろし、それにこちらもまだ聞きたいことが残っているので、開きかけた記憶の蓋を元に戻す。

「ならこれが本題だが…」
「ええ、アキラも元王族です。まあ、ここからずっと離れた土地の、ですが」
「そうか…」

前にムイリオが言っていたのがこの事なのだろう。

没落した王家が辿る道などそう多くは無く、その中の一つは割と近しい人間として体験もしている。

「行かないのですか？」
「何しに？」

連れ戻す意味もないし、必要もない。

あの二人でしか話せないことも山ほどあるだろう。

「俺は反省できる男なんだよ」

まあ、それでもユキネに手を出すような事があれば殴り飛ばす事に違いは無いのだが。

◆

◆

◆

――俺と一緒に国を復興しよう。

人の少ない裏通りに面した喫茶店の、そのさらに端の席。

机を挟んだ向こう側で、アキラが半分身を乗り出しながら、そう言った。

いきなり持ち出されたものだから、全く意味は分からなかった。

しかし、一度聞いただけの言葉が、まだ耳に張り付いて離れない。

耳元で言われ続けているのではないかと言うほどに近く、小さくなることもない。

そして、アキラが私と同じ没落した王族である事と闘技大会に参加した経緯を説明される中でやっと形になった。

「――流石にびっくりした。昨日ムイリオがその事を言った時には、全く信じられなかった」

アキラは、いつもの適当な髪ではなく服装もラフな物ではなかった。

よく聞いてみれば、話し方もほんの少し雰囲気から変わっている気がする。

どことなく格式高いものを感じさせる雰囲気が、皮肉にもアキラが言っている事は真実だと肯定していた。

「言っちゃ何だけどさ、あの、あれだよ。…う、う運命的なものを感じた、り、…感じなかったり…」

「――アキラ」

興奮気味に話すアキラを呼び止めた。

多分、自分とアキラの待遇は似ているようで、まるで違うから。

「…私は、そんな事はしないよ、アキラ」

返答は、しっかり口に出来ていたと思う。

「え…？」

唖然としたアキラの声もよく耳に届いた。

「そんな、こと…！　お前の知人も親も殺されたんだろ！」

「いや、私の両親はどちらも床で最期を迎えたよ。それでも犠牲になった人は大勢いたが」

「なら…！」

「違うんだ、アキラ」

え、とまたしても唖然とした顔。

「ムイリオさんから聞いてないか？　もう、必要がなくなったんだ。誰も不当に苦しんでいる世界ではなくなった。また引っ掻き回しても誰も得はしない」

「そんな、事は…！」

俯くアキラにかける言葉が無い。

状況が違うのだ。恐らく、引っ掻き回さなければならない。例えそれが復讐から根付いたものだとしても。

「…いや、そうか。ならしょうがないかもな」

「怒らないのか？」

「…俺が復讐でこんな事言ってると思ってたか？」

違うとはいえない。

はっきり表面化してはいなかったが、内心そう思っていたのかも知れない。

「復讐が少しも無いとは言わない。でも、そうだな、夢だよ。どちらかと言うと」

「夢…」

「そうさ。復讐なんていったら、親父に拳骨貰っちまう」

そう言って、アキラが見上げた窓の先。父親をその遠い所に見ているのが分かってしまう。

もう手が届く場所には居ないのだと。

「ごめんな。話はそんだけだ。ユキネの保護者に見つかったらまた面倒になるから、もう行く」
「…気にするな、私はこれを飲んだら帰るよ」

アキラが出て行って、五分ほど経って自分も店を出た。

ここから宿まではそう遠くは無い。寄り道する心算も沸かずに真直ぐに宿の方に足を向けた。

この街に入ってきた方向へ視線を向ける。

自分の国どころか、地平線も、街の終わりさえも見えない。

国を放り出して、ずいぶん遠くに来たものだ。

言われれば確かにある。

父と母が守って、先祖が作ってきた国を無くす訳にはいかないという気持ちが。

国を盗られる十二歳までは、その為だけに剣の腕を磨き、街の様子を気に掛け、政治の為の勉強をしてきた。

国を守る事の意味も、辛い事も、遣り甲斐も、父上がしっかりと優しく教えてくれた。

その事が嘘だった事はなかったし、今に至ってもその中に間違いがあるとは思っていない。

国とは人だ。人とは国だ。王とは従える者でも束ねる者でもなく、ただ支える物だ。

国とは王ありきではなく。

王とは国ありきではない。

国があって、人がいて、その間に王が立ってただ支える物になる。

アキラの国は違う。

大臣達が揃って寝首をかかれ、王族は処刑され、残った摂政とその一味共が国と人を手玉にとって蜜を啜っているらしい。

正義感を振りかざす訳ではないが、それは正さなければならない。

国と人が苦しんでいる。だからこそ王がいる。そう言い換えても良い。

考えながら歩いているうちに既に扉の前。

「――おう、お帰りユキネ」

もう、救われてしまったのだ。

国も、人も、ついでに。

自意識過剰かも知れないが、私を助けるためだけに。

国が、若しくは人が救われなかったら、私が笑えないと思ってくれたから。

自分の我が侭で、国と人と、そして私とフェンを救ってくれた。

あのまま必要でもないのに王として居座るのも、旅に出て世界を回るのも、どちらもただの我が侭。

どちらか選ばなければならないのなら、今でも私は同じ選択肢を選ぶ。

皆が笑えている事の方が、歴史などより大切だ。

半年前に出した結論を、もう一度頭の中でなぞると、不思議と気持ちが軽くなった。

もし、自分の故郷が窮地に陥ったら、もし自分の同郷の人間が辛くなったら。

その時はこの身を捧げて建て直す。

それだけは心に誓って。

こういう自己満足も、悪くは無い。

「ただいま、ハル」

不意に。

ちくりと針の様な痛みが胸を刺した。

初めてのような、慣れているような矛盾した感覚だった。

原因は何となく、心で分かって重く圧し掛かっている。

私は幸せを世界に返すと誓ったはずなのに、そのために強くなると心に決めたのに、その為に旅をしているはずなのに。

私は多分、もっと自分勝手な理由でここにいるから。

それが何かなんて今は知りたくない。

◆
◆
◆

「うん、まぁまぁだね」
「そ、そうか。よかった…」

都合三回目になるスープとソテーがようやく及第点を貰えた事に、ホッと胸を撫で下ろした。

「ちょっと味が濃いが、好みの範囲だろうて」
「…ユキネ、手」
「ああ、ありがとう」

細心の注意を払ったつもりだったが、結局人差し指をはじめとした手の端々に傷をこさえてしまっていた。

それはフェンも同じで、傷だらけの手を私の方にさし伸ばしている。一緒に治療してくれるつもりなのだろう。

明らかにフェンより傷が多いのが少し悔しかったが、大人しく手を差し出した。

「お、待て待て。それは残しておいた方が良い」
「え…？」
「男心ってやつだよ。私も婆さんのそれにやられたもんだ」
「…？」
「まあ、分からんでも良いさ。いやむしろ分からんほうが良い」

よく分からないが、このままでも別に支障は無いのでそのままにしておく事にした。

少しだけ手を庇いながらエプロンを脱ぐと、それを椅子にかけて、その隣に腰を下ろした。

いつもの走り回った時とは違う疲れが体を襲う。これがいわゆる家事疲れなのだろうか。

「さて、残り食べて晩飯の仕込みしたら一旦休憩だ」
「はい。ありがとうございました」
「そんなに畏まった話し方はよしておくれや。息子に教えてるみたいでこっちも楽しかったんだ」

ソテーを三等分に切り分けながら、おじさんが照れたように笑った。

どこか懐かしげに厨房を眺める姿はどこか遠い。

「息子さんはどこに？」

「ん？　ああ、普通に働いてるさ。この街の料理店でな」
「この店は継がない？」
「そりゃあなぁ」
「じゃあ、この宿は…」

答えの代わりに、おじさんは肩を竦めてみせた。

「夢があるって子供が言うんだ。黙って見ててやるのが親の本望ってやつだろ」
「…それじゃあ、おじさんが」
「いやいや、俺もこんな店なんて継がしたくはないんだ。今時こんな店を続けた所できついだけだ。
何しろ立地が悪いんでな。大通りに面してちゃうるさくて寝れんだろう。　祭りの時期以外は、客なんて二人分の食い扶持を稼ぐ位しか来ないんだ」
「でも……」
「おいおい、何でお前さんが俺より真剣に悩んでんだよ」
「あ、いや…」

踏み込みすぎていることに気付いて、咄嗟に体ごと一歩下がる。

その行為の裏に、先程の出来事が関係しているのが自分でも分かった。

手の傷の多さも、それが原因の一つになっているのかもしれない。

「ごめんなさい。私が言う事じゃなかった…」
「…優しい子だねぇ、うちの嫁に欲しいくらいだ」

その言葉にまた、言いようのないもどかしさを覚えた。

優しさなんて欠片もないのだ。

ただ、ぶら下げられた免罪符に手が伸びてしまっただけ。

いくら理屈を捏ねても、気持ちを納得させても、罪悪感は消えてなりはしない。

「…ユキネ？」
「あ、いや、なんでもない」

見えないように、傷だらけの両手を強く握って胸に押し付けた。

包帯を少し巻いただけの傷が痛んだが、すぐへこたれそうになる気持ちに喝を入れる事は出来た。

「…じゃあ、洗い物はしておきます」
「ちゃんと食べるんだぞ。残しちゃあ食材が可哀相だ」

無論そのつもりだ。

夢中で作っているうちにもう時間は正午を回っている。食べるなといわれても手が伸びるかもしれない。

表情を見て安心したのか、喉の奥で笑いながらおじさんは食堂から出て行った。

「じゃあ、食べるか」、とフェンに持ちかけようとしたところで、ひょいっと本当に横から手が伸びてきて、鶏肉を一切れかっさらっていった。

「食べないなら貰って良いか？」
「…食べながら言うな、レイ」

もしゃもしゃとこれ見よがしに、鶏肉を咀嚼するレイは留まる事を知らずに二切れ目に手を伸ばす。

さすがに咎めたい所だったが、それよりも感想の方が気になってレイの表情を伺う事を優先した。

「お主らが作ったにしては中々じゃの」
「お、美味しいか…？」
「ふむ、儂としては口に入れた瞬間爆発するほどの失敗作か、見た目炭屑の癖に味だけは美味しいだとか、そういうのを期待しておったんじゃが…」

若干つまらなそうな表情が気になるが、それでもフォークを持っ

たレイの手は止まっていない。

自信過剰ではなく、ちゃんと料理になっていると考えても良いだろう。

「…何で、私達が作った事を知ってるの」

「あ、そういえば…」

今は丁度昼飯時だし、食堂に入って来た時にはおじさんとすれ違ったはずだ。

それなら普通は昼飯を都合してもらったと考えるのが妥当だろう。

「そんなもの、そこのエプロンと、指輪を外した傷だらけの手。それを足掛かりに考えればすぐに分かる」

「…よく見てるな」

ソテーを半分ほど食べ終えたところで、レイの手が止まった。

「で？　何でいきなり料理なんぞ始めたんじゃ？　特にユキネはまだ試合があるじゃろう」

「…頼んだのに今日は休めって言ったのはレイじゃないか」

「んあ？　そうだったか？」

「歳か？」

「よし、じゃあ明日はきっちり死ぼってやろう」

「字が違う！」
「馬鹿者。それぐらいやらんと、〝アレ〟には勝てんぞ。まあ一日二日でどうにかなるとも思えんが」

最後に一切れ口に放り込んだところで、ご馳走様、と意外と礼儀正しく手を合わせた。

「…まあ、料理の理由なんてたかが知れてるがの」
「え？　何か言ったか？」
「そうじゃ。あの指輪、失くしたりなぞするなよ。かなり高価な物じゃったからな」
「そ、そうなのか？」

それだけ言ってさっさとレイは食堂から出て行った。

反射的にポケットに手を入れて、中を探ってみる。

感触は二つ。取り出して、ギルドの認証指輪と青い宝石が嵌った白金の指輪が手の中にある事を確認して安堵の息をついた。

宝石の輝きは相変わらず厳かで慎ましく、指に嵌めようとしただけで気後れしてしまいそうだ。

…防具として使用する時以外本当に嵌めていないのは情けないから秘密だが。

「それは…？」
「ん？　ああ、予選前にレイが用意してくれたんだ。凄いぞ、鎧になるんだ」

頭の端で意思を伝えるだけで現れた鎧が、シャンっと風鈴のような涼しい音を立てた。

「…驚いた」
「……ホントか？」

無表情のまま数秒固まっただけで、とても驚いているようには見えない。

「ほんと」

数ミリ単位で頷いただけだが、数ミリというのはフェンにしてはかなりのものだ。

「食べないと、冷める」
「じゃ、今度こそ食べるか」

だいぶ食い荒らされた料理の前に腰を下ろした。

自分で作り出したとは思えない豊潤な香りが鼻をくすぐった。

おもてなし

「…リオル、何を言ってるんだ、お前は」
「だから！　明日から俺もここで働くって言ってるんだろうが！」
「馬鹿モンが！　貴様料理人になると意気込んで出て行って何がここで働くだ！　どうせ中途半端に逃げ帰って来ただけだろう！」
「…何だと？　知った風な口きいてんじゃねぇぞクソ親父！」

皿を洗い食堂を出て、夜のメニューを話し合いながら階段を上がると、廊下の奥で言い争いをしている人間を見つけた。

一人は先程まで一緒に居た宿屋の店主。もう一人の男には面識はない。

「…どうしたんだ？」
「止めた方が、良い」
「そうだな…」

そこから一歩進んだところで、ギシッと床が軋んだ。

全く同じタイミングで、こちらに二つの顔がこちらを向き、また、一緒に苦い表情になる。

微笑ましいほどの一致に、話に出た息子だ、と直感的に推測でき

た。

違いといえば親の方が更に苦い顔になって、そのまま角を曲がって姿を消した事ぐらいだ。

対して、息子の方は苦笑いしながらこちらに歩み寄ってきた。

「すいません。お見苦しい所をお見せしてしまいまして。どうか気になさらずにゆっくりと休んでいって下さい」

「どうかしたんですか？」

「いや、ちょっとこの店の事でね。大丈夫、大した事ではありません」

話の内容は何となく推し量る事ができる。

しかし、流石にここでは聞き難いし、あまり首を突っ込みすぎるのもどうかと思える。

「息子さんはここは継がないって…」

「息子は、宿を継ぐ気は無いって…」

横から同じ内容の言葉が重なった。

思わず、フェンと顔を見合わせる。どうやら同じ事を考えていたらしい。

「ああ、親父から聞いたのか…。いや、違うんですよ、それは」
「…？」
「僕としては、この店を継ぐ為に料理の修行をしたつもりだったんだけど…。家を出たから勘違いされたらしい」
「…成程」
「…その事は？」
「言うつもりだったんだけどね…。聞く耳持たないみたいだし、もう言わないよ。勝手にやるさ」

やらやれ、と肩を竦めて自虐的に笑う息子が何故か、取り返しの付かない物に見えた。

誰かと、重なるように。

「だ、駄目だ、そんなの…！」

驚いた二人がこちらを見つめている事で、やっと自分が大声を出した事に気づいた。

「あ、いや、こんな事私が言う事じゃないけど、それは分かってるけど、でも……」
「……ありがとう。そりゃ言いたいとは思うんだけどね。親父はあんなだし、…って何でお客さんにこんな相談してるんだか」

そう言って笑ってみせた。

ぎこちない苦笑になってしまっていたが、普段はよほど快活に笑うのだろうと思えるほど、大きな笑窪が出来ている。

「……ユキネ、耳を」
「え？　うん」

言われるがままに耳を寄せると、フェンが背伸びをして更に口を寄せた。

「…大変だぞ？」
「お礼もしてない、…から」
「…そうだな。ならそうするか」

意外な所から出た意見に、私としても異論は無かった。

「あの、今日の夜なんですが…」

その事を話すと、男は怪訝な顔から挑戦的な笑顔に変わった。

「いいね。親父の鼻を明かしてやる」

酷いお節介だったが、いい方向に転んでくれた。

やたらとお節介好きになってしまったのは、あいつのせいで多分間違い無い。

◆◆◆

「……レイ、金貸してくれ」
「ふざけるな、クソ餓鬼」
「手前、俺が死んでもいいのか」
「死ぬのか！」
「何ウキウキしてんの！？」

足を引き摺りながら、帰路に着く。まさかこんな目にあうとは誰が予想できただろうか。

「本当に弱いの、お主」
「うるせぇ、馬鹿野郎」

愉快そうに食べ終わった鳥串の串を歯に咥えたまま、レイがトランプを手の中で弄んだ。

ムカつくほどに快活に笑っている。

「全身全霊の想いを込めて言ってやろう。――ざまあ見ろ」

殴っていいですかね。

「いきなり勝負吹っ掛けてきやがって…。お陰で朝から何も食ってねぇんだぞ…！」

「なに、少し花を添えてやろうと思っての？」

「…何？　どういう意味だ？」

「それに、別に逃げてもよかったじゃろうが」

俺の質問は無事に無視されたらしい。

大体、逃げる？

そんなことする訳が無い。いや、する訳にはいかない。

この国に来る前に味あわされた屈辱はまだ俺の中で燻っていると言うのに。

「あほじゃのう、愉快愉快」

「頼む、一生に一度の頼みだ。鳥串分けてくれ」

「先程のトランプの時にそれは使ったぞ？」

「あれはジェミニの分だ。そして今から使うのは、いずれ生まれてくるであろう俺の息子の分だ」
「不誠実すぎて引くわ！」

くそ、遠い。

酒場から宿までほんの数百メートル。それがこんなに遠く感じる日が来ようとは。

腹からはまだかまだかと腹の虫が騒ぎ立ててくる。

「ほれ、宿までもう少しじゃ。頑張れ頑張れ」
「馬鹿野郎…、フェンに金をせびるのは死ぬ程苦労するんだぞ…」
「安心しろ。今日に限りその必要は無い」
「はあ？　どういう事だ？」
「行ってみれば分かる。多分の」

相変わらず意味の分からない女の相変わらず意味の分からない妄言を聞き流しながら、宿の扉に手をかける。

「お、おかえり」
「…何してんだ、お前」

扉を開けると、受付にあるこじんまりとした木製の椅子に座っていたユキネが飛び上がるように立ち上がった。

その影に、こちらは座ったままだが、こちらを見ているフェンもいる。

「あー…、その、何だ。今、その、暇か？」
「…ユキネ、違う」
「わ、分かってる…」
「あー…、暇か暇じゃないかと言われたら、暇じゃないぞ」

むしろ危機と言い換えてもいいほどに、空腹具合が凄い事になっている。

「ああ、何しろ朝から何も食っていないそうだから、急いで何か食べたいらしいの」
「…誰のせいだと思ってんだ？」
「儂のお陰じゃな」
「…はあ？」

意味が分からずに背後に立っているレイに振り返る。その一瞬、何か目配せのようなものを見た気がして、また前を向く。

しかし、おそらく目配せの相手だっただろうユキネは、既に何か次の行動の予備動作に入っていた。

「は、ハル。お腹、空いてる、のですか？」

「…何で敬語？」

て言うかこいつ敬語使えたのか。

「ハルユキ。ご飯、ある」

スッとユキネの後ろから、なんとも魅力的な言葉を発しながらフェンが食堂の方を指差した。

「……本当に？」
「う、嘘ついてどうする」
「食べる。今食べる」

食い付き気味にユキネに迫っている事に気付いて、咳払いを一つして一歩下がった。

それは、余りに紳士ではない。

「…し、しょうがないな。そこまで言うなら…」
「食べる。今食べる」

抉じ開けんばかりの勢いで、体当たりで食堂の扉を押し開けた。

「――いい匂いだ」

日本の食堂の生姜と醤油の庶民的な匂いとはまた違うが、オリーブオイルとバジルの混じりあったこれもまた家庭的な匂い。

「いい匂いだ」

思わずもう一回。

深く息を吸い込んでいると、パタパタと影が二つ、厨房の暖簾を潜って行った。

と思った矢先に、暖簾から端正な造りの顔だけがヒョコッと出てきた。

「ハル。ジェミニとシアと、あと、宿のおじさんと奥さんも連れてきてくれないか？」
「それは、別にいいが…。お前らが作るのか？」
「……嫌なら食べなくてもいいぞ」
「…いや、楽しみにしてる」
「そ、そうか。なら、楽しみにしててくれ」

言葉の途中で、暖簾の向こうに慌てふためいたユキネの顔が引っ込んだ。

◆

「いやあ、まさか手料理が食べられようとは。感激感涙の極みです」
「お前まだいたのかよ…」
「帰れや変態が。ワイの聖域（ハーレム）に土足で踏み入るんやない」

ハルユキは溜息を付きながら、椅子を引いて腰を下ろした。

幸い大きい長机があるので、十人は座る事はできる。材料が足りないと言う事もないだろう。

「ごーはーん！　ごーはーん！」
「てーづくり！　てーづくり！」
「…うるさいよ」

拳骨を二つ。

静けさを取り戻した食卓には、まな板に包丁が当たる音と鍋の蓋がコトコトと体を揺らす音だけが続いている。

下拵えは終えていたそうだから、もう直ぐ出来上がるだろう。

「あれ？　シアどこ行った？」
「食堂。手伝うんやて」

頭を抑えながら、突っ伏していた机からジェミニが体を起こした。

「それにしても聞いたな。あの…、何やったっけ？」
「湿布だよ。まさか効くとは思わなかったけどな」
「あれ？　実験台？」

兄貴印の、超湿布。

筋肉痛に効くマグネシウムやら何やらが、ふんだんに盛り込まれた逸品だ。

「おやおや、こりゃ良い匂いだね」

俺の時とはまるで違う勢いで、ゆっくりと扉が開いて初老の男性が入ってきた。

言うまでも無く、先程声をかけた宿屋の店主だ。

一度厨房の方に顔を向けた後、不器用そうな歩き方で、ゆっくりと席に着いた。

「オヤジさん、奥さんは？」
「あいつは、ちょっと今出ててな。先に食っておいていいさ」

そう言いながら、視線を厨房の方に向けた。

生憎、ここからは厨房の中を伺う事はできないが、成程。この人が裏で手を貸していたんだろう。

フェンとユキネと、それにレイが加わったとしても、おそらくそれだけではまともな物は出来なかったはずだ。

「大変だったろ？　あの二人じゃ」
「いやいや、中々物覚えは良かったよ。しっかりした子達だと思うが」
「…しっかりしている？」

そんな印象は新鮮だった。

新鮮と言うよりは、半信半疑と言ったところか。俺の目から見れば、どちらも普通、ではないが、まだ地に足着いていない子供にしか見えない。

しっかり見えていないのだろうか。

自省のつもりで後頭部を掻く。

人を見る目にはそれなりに自信があるつもりだったが、距離が近すぎるとそういう目も曇ってしまうのだろうか。自分の身長の伸び具合が分かりにくいように、毎日顔を合わせる親子が互いの変化に気付き難いように。

近すぎて見えないところが、どんどん成長して大きくなっているのかもしれない。

それは、まあ少し寂しくもある。

「やばいよオヤジさん。親心出てきた」
「…親心か。子供達は分かってくれんぞ。そんな物は実際酷い我侭でしかない」
「…マジかよ」

気付けば、まな板の音が消え、鍋の音も少なくなっていた。

それに気付いたすぐ後に、暖簾からたどたどしい足取りで二人が姿を現した。

「へぇ…。大したもんだ」

山のように並べられた料理に思わず感嘆の声が漏れた。

もしかすると、口に入れた瞬間爆発したり、見た目炭屑の癖に味だけは美味しいとか、そんなバラエティ魂の塊のような物が出てくるのではないかと戦々恐々としていたが、そどうやらんな事はないらしい。

「これで、最後だ」

どん、とおかわり用の大皿が机の中心に置かれた。

それぞれの分は取り分けてから運んであって、既に各々の目の前に並べられている。

先に食べた者から、おかわりを自分でよそるというシステム。

つまりは――。

「――戦争か」
「違うわ、間抜け」
「ほら、ケンカするな」

トン、と間に入るようにレイの目の前の机にユキネが皿を置いた。

そしてそのままエプロンを脱いだ。続いて、シアだけが二人に一礼して席に着く。

「あれ？　お前らは食べないの？」
「ああ、私達は味見でお腹一杯だ」
「ふーん…なら。食べるか」

そう言って手を合わせると、周りもそれにならって手を合わせる。

「いただきます」

瞬間、左右両後方から視線が後頭部に直撃した。

妙な重圧にとりあえず手を止める。すると、他の奴等もまだ手を付けていない。

時折、こちらに目を向けているが、恐らく理由は俺とは違う。

『お前が先に食べろ』。暗にこういう事だろう。

料理の感想を俺に押し付けようとする魂胆らしい。

「お……」

声を出そうと口を開けると、今度は後ろからの視線に更に力が入った。

上手く感想を言えるかはわからないが、もう合唱をしてから5秒は経っている。

後ろの二人が、顔中に不安を満たしているのがありありと頭に浮かんだ。

「…いただきます」

なら食べるしかないだろう。例え口の中が焼き爛れる様な事態になったとしても。

一瞬だけ躊躇って、そのリスクに覚悟を決めた後、ひょいっと鶏肉を二三切れ口に放り込んだ。

「……うまい」

それこそ意表を付かれたと言ってもいいほど、完成された味だった。

「本気で美味いぞ、これ」
「ほ、本当か…？」
「いや、うん本当に」

続いて、もう一切れ、スープも一口口に運ぶ。

「ほォ、こりゃ確かに。昼に食べた時より格段に良くなってる。それにこれは…」

「…これは、味噌入ってんのか？」

「あ、ああ、余りがあったから…」

いつの間にか、物を言わずに他の連中も食事を始めている。

一発ずつ拳骨で粛清してやりたい気分だったが、とりあえず食事が先だろう。

「……おいしいか？」

ひょこっと、俺の横からユキネが顔を出した。一度言ったのに、まだ顔に不安が残っている。

「本当だって。ほら、食ってみ」

「……え？」

肉をもう一切れフォークで突き刺し、口元へ持っていく。

一瞬、戸惑いを見せるものの、小さい口を小さく開けた。その口の中にフォークを運んでいくと、ぱくと口が閉じる。

「な？」

安心させるように頭をポンポンと撫でながら、ユキネの反応を待つ。

しかしユキネは硬直したまま、いつまでも動かない。ぎこちない動きで数回咀嚼してから、そのまま嚥下した。

「…う、うん、美味しい」

そこで、やっと聴覚情報が頭に届いたのか、捲くし立てるようにそれだけ言った。

見れば、喉を詰まらせたのか耳まで真っ赤にしている。

「大丈夫か。ほら水だ」

ユキネの目の前までコップを持っていく。

まじまじとそれを見つめた後、両手でコップを受け取って少しずつ水を流し込んでいった。

「大丈夫か？」
「あ、ああ、だ、大丈夫、大丈夫だ」

まだ顔は赤いまま、そそくさと先程の位置にまで去って行った。

瞬間、視界の中に銀色の光が走る。

「一億年早いわ」

飛んできたナイフ二本を指でつまみ、元の持ち主の変態たちに投げ返した。

小気味良い音を立てて、変態二人が沈んだ。柄を先にしたから死んではいないだろう。

「いや、本当に格段に美味くなっとるの」

ご機嫌に肉をつまみに酒をあおる奴もいれば、シアのように一口毎に笑顔を零しながら食べていく奴もいた。

「本当に。出来ればうちで雇いたいぐらいだよ」

何気ない一言だった。言われなければ三秒後には記憶の隅に追い

やられる様な、小さな言葉に過ぎない物。

しかし、本当に何気ないその言葉が、和気藹々とした空気を一変させた。

急変した空気に何か粗相でもやらかしたとでも思ったのだろう。

「……？」

オヤジさんは多少うろたえながら周りを見渡し始める。

しかし、もちろん何かやった訳ではない。

そもそもこの食卓に品位や礼節などあるわけもない。

食卓についている人間も何か妙な緊張感を感じているの事は何となく察する事ができた。

つまり、実際に緊張しているのは食卓についていない二人。

その二人を見ると、どちらも目だけで厨房の入り口の暖簾を見つめている。

その暖簾が一人でに揺れた。

「そうかい。なら雇ってもらおうか、親父」

そして、その暖簾の向こうから見覚えのない若い男が、得意顔で姿を現した。

おもてなし（後書き）

感想・アドバイス等いつでもお待ちしております

取引（前書き）

ちょっと短め

取引

カチャン、と皿にフォークを投げ出した後、オヤジさんは背凭れに体重を預けた。

言うまでも無く、その顔は不機嫌に歪んでいる。

「…成程な。一杯食わされた訳だ」

「食っちまったな。文字通り。ああ安心してくださいね？　そっちのは俺は口出しただけで、作ったのは彼女らです」

してやったりと口の端を上げる息子に、鋭い目線が向けられた。

「確かに料理は美味い。俺が作ったよりも数段な。しかし、ここをお前に継がせるかどうかとはまた別の問題だろう？」

「……分からず屋が」

ふん、と鼻で息をつく。

据えた目で息子を見る目には、先程までの穏やかな空気を感じさせない。

「分からず屋？　勘違いするな、俺はお前にここを継がせる為に今まで育ててきたんじゃない。寧ろ継がせない為に育ててきたんだ。それすら分かってないのはお前だろう」
「分かってるさ。だから俺は家を出たんだ」
「嘘を付くな。お前は夢があるからとそれだけ言って…」

はあ、と溜息交じりに、肩を竦めて頭（かぶり）を振る。

どこと無く、何かを必至で取り繕うような必死さが感じられた。

「そうだよ。で、今もまだ夢に向かってる最中だ」

その言葉には一層の力が込められていた。多分他にも気持ちとか色々と。

その証拠に、今まで据えただけだったオヤジさんの目に真剣な雰囲気が光った。

「自分で切り盛りできるようになって、美味い飯が食べられる宿屋を継ぐ事が俺の――」
「駄目だと言っているだろう。リオル」

ズシン、と息子の言葉を鉈の様な重々しい言葉で断ち切った。

理由も無い。

義理も無い。

ただ駄目だ、と。あまりな理不尽な言葉だったが、先程の息子の言葉と同等の力や重さがあった。

いや、多分歳の分と親心の分だけ、親父が勝ったのだろう。

息子が気後れするのが分かった。

（こりゃ決まったか…？）

いきなりの修羅場に付いていけなかったが、どうやら収束しつつあるらしい。

視線が落ちた息子に父親の方も目を逸らして、料理に目を戻した。

それでも、食事はするらしい。

まあつまり、もう話すことは無いという事だろう。

「ま、待って下さい…！」

しかし最後の最後、意外な所から声が上がった。

えらく丁寧な言葉遣いに、目をやれば見慣れたはずの金髪の少女

が、必死に食い下がろうとしていた。

「…なんだい、お嬢さん。早くしないと飯が冷めちまうよ」

「少しだけ、いいですか？」

そう言った後、ユキネの喉が唾を飲み込んでコクッと動いた。

嫌な緊張感はまだ続いている。その中心に踏み込んだことでユキネにもその緊張感がより重く圧し掛かったのだろう。

殺陣とかの緊張感には慣れたものだがハルユキ自身もこんな緊張感は苦手だ。

「息子さんが、いえ、息子さんに。この宿を継いで欲しくないんですか…？」

この質問に、また場の空気が重くなる。それは既に終わった問答だ。

「……さっきからそう言っているだろう？　私はこんな宿で息子の将来を潰したくは無いんだ」

「そう、ですか…」

ぐっと、唇を噛み締めて俯いた。考えて言った発言ではなく、思

いのままの言葉だったのだろう。成す術も無く視線が下がる。

「――じゃあ」

しかし、もう一度。

下がっていく視線を無理矢理押し上げ、今度は力強くオヤジさんを見据えた。

「嬉しくは、なかったのですか…？」

その言葉に、父親の目が見開かれるのと、息子が弾かれたように顔を上げたのが、丁度同時だった。

自分の顔が息子に見られている事に、遅れながらも気付いた父親は、苦い表情で顔を背ける。

「…嬉しくなど、ない」

しかし、既に息子の目に何かが宿っている。

「親父、聞いてくれ…！」
「……黙れ、俺が駄目だと…！」

父親がついに感情をむき出しにしようとして大口を開いた。

「いい加減にしなさい」

その前に、凛とした声が自然と父親の声を遮った。

「お、お前…、外に行ってたんじゃ…」
「お父さん」

父親の言葉を横切って、母親が続ける。

遮られた方の父親は、それを怒るどころか、逆に自然と背筋を伸ばした。

「あなた、リオルが出て行った晩に言ったでしょう？　二人で身を費やそうって。
息子の夢があなたが思っていたよりも大きかった。それだけの事でしょう」
「し、しかしな…」
「くどい」

父親の言葉を有無も言わさずに再び叩き落した。

「――『夢があるって子供が言うんだ。黙って見ててやるのが親の本望ってやつだ』そう言っていたのはお父さんですよ。

リオルが出て行ってからは聞きもしないのにそればっかり言って。本当はどう思っていたか、伊達に長年連れ添ってはいませんよ？」

「お、お前…！　こんな所で…！」

「嘘を付いてまで張る意地は、誰も望んでいません」

ね、と最後に繋げて、それが止めだった。

一度息子に視線を移して、麗かに微笑む夫人をもう一度見て、観念したように椅子に倒れこむように座り込んだ。

「…ふざけた仕事したらすぐに追い出すぞ」

「――ああ、それでいい」

「ここはもう建物も古いし、大通りに面しているせいで客足もほとんど無い。それでも、いいんだな」

「なんとかするさ」

淀み無く返ってきた息子の言葉を深く噛み締めるように、目を瞑って天井を仰ぐと、そのまま本当に小さく口を開いた。

「…なら、やってみろ」

「――ああ」

ようやく一件落着したのか、部屋の中の空気がだいぶ弛緩した。

皆の表情も同じように緩む中。ただ一人緋色の瞳をした少女だけが、寂しげな表情を見せていた。

◆

「全く状況に付いていけんのだが…」

「何かがうまくいったのは何となく分かるんやけどな…」

「て言うか、私は完全に部外者なんですが…」

父親と息子が途切れ途切れに言葉を交わしている中とりあえず一件落着した事を察したのか、成年組3人がこそこそと情報を共有し始めた。

「すみませんねぇ…。見っとも無いケンカでお食事の邪魔をしてしまって」

先程より20年ほど歳を取ったかのように、ゆったりとした声を出しながら女将さんが後ろにたたずんでいた。

「それはいいんだけどな。お陰で退屈もしなかったし」
「……って、料理全部なくなっとるぞ」
「あの雰囲気の中で手を止めなかったのか、お前は…」
「私の天使が作った手料理、が…ぁ！　貴ッ様ァ…！！　よくもよくもよくもォ…ッ！！！」

殺気をダダ漏れにして幽鬼のように立ち上がったガネットに、とりあえずもう一度ナイフを投げ付けて沈黙させる。

「戦争時にちんたらしてたお前らが悪い。て言うか金があるなら買いに行け。と言うかそこの馬鹿はさっさと帰れ」

さっさと手を合わせてお礼の言葉を述べる。

その腕を、ちょいちょいと何かが引っ張った。

無言でこんな可愛げのある動作をする人間は、俺の知っている限りではそんなに多くは無い。

「防音を、壁…」

言葉足らずに何かを訴えかけるフェンの頭を、分かっているという意思表示で軽く撫でる。

「でも、タダじゃあなぁ…」
「最低だなお前は。ああ最低だ」

話を聞いていたのか、横からユキネが中傷してきた。フェンからも非難の視線が送られてくる。どうやら成長したと思ったが、やはりまだまだ子供らしい。

「バカ野郎。大人ってのはな、タダのものは中々受け取ってもらえないんだよ」
「…？」
「信頼関係が無いから利害関係で関係を作る、って言って分かるか？」
「…何となく」
「だからこっちも替わりに何かを要求しなきゃならない」
「…うん」

よし、とフェンの頭を軽く叩いて手を離す。

要求は何にするかは実はもう決まっている。

「なあ、息子さん」

未だ父親と討論を続けている、息子の背中に声をかける。

パッと呼んでない親父も一緒に、似た様な顔でこちらを向いた。

それに少し笑いそうになりながら、取引を持ちかけた。

「味噌汁って知ってるか？」

日本人なら、朝には和食が恋しくなるのはしょうがないだろう。

指輪（前書き）

あー…何だかなあ…

「はいはい、ごめんよー」
「あっ…と」

ユキネが後片付けを終え、ついでに湯を浴びて二階に戻ってくると、扉を開けた所で、ハルユキとすれ違った。

お互い半歩ずつ体をずらして、ユキネは部屋の中に、ハルユキは外へ出て階段を下りていく。

ユキネは、何となくそれを目で追ってから、部屋の中に入った。

「ハルはどこに行ったんだ?」
「さあの。さぞ楽しそうに部屋を改造して味噌汁の作り方を教えておったから、気晴らしにどこぞに散歩にでも行ったんじゃろ」

ぐるっと部屋を見渡すと、部屋にはレイしかいなかった。

部屋の中は驚くほど静かで、窓を開けているにもかかわらず外の喧騒は遠くにしか聞こえない。

レイの言った通り、ハルユキがさぞ気を入れて改造した事がよく分かった。

「眠いのぅ…」

窓の位置まで変わっていて、部屋の中によく風が通るようになっている。

夜の風でよく冷えたベッドのシーツが眠気を誘発しながら、人間を誘っている。

誘惑にも欲望に逆らう事無く、ぼふっと勢いよくベッドにダイブした。

レイとユキネ、二人して弛緩した声を出しながら、とりあえず体温で温くなるまでそのまま力を抜く。

今日はもうこのまま寝てしまってもいいか、と考えていると、向かいのベッドでレイが起き上がる気配に気付いた。

「――ふっふ、ほとんど一人で食べてもらえて良かったのう」

レイが意地悪く笑うのを見て、ユキネは壁側に顔を背けた。

初めて作った料理は、自分でも良くできていたと思う。

でも、喜んで食べてもらえたからか、美味しいというよりは嬉しい気持ちが大きかった。

口元がにやけてしまいそうで、より強くベッドに顔を押し付ける。

「それに、朝は仲良く一緒に寝ておったしのぅ」

「なっ…！」

思わず、勢いよく顔を上げてレイの方に身を乗り出していた。

「全く、朝から何をやっていたんだかの」

にやつくレイの顔ですぐに我に帰り、再びベッドに顔をうずめる。

温くなったはずのベッドが最初よりも冷たく感じたのは、おそらくシーツが冷たくなった訳じゃない。

「指輪の礼に託(かこつ)けて。若いくせに抜け目が無い事じゃ」

「そんなんじゃ…！」

顔だけレイに向けて、否定しようとして違和感が言葉を止めた。

「…指輪？」

「ん？　その鎧の指輪じゃよ。…知らなかったのか？」

「知らなかったって、何を…？」

小さく息をついて、頭の後ろを申し訳なさそうにかきながら、レイは溜息交じりのままこちらを向いた。

「小僧からは、何も聞いておらんのか？」

「これ、ハルが…？」

ポケットから指輪を取り出して、手の平ごとそれをレイに向けた。

それを一瞥した後、またレイが溜息を付いた。

「でも、これ凄く高い物だって…」

「全財産投げ出しとったからのぅ。…ああ、だから言わんかったのか」

馬鹿め、と一言悪態をついて、レイはまたベットに倒れこんだ。

「そうか、礼も言っとらんのか。可哀想にのう…」

わざとらしいほどにレイの声色と、雰囲気が変わった。

ユキネの場所からレイの顔は見えてはいないが、あの頭の裏側で

間違いなく笑いを堪えている。

「…からかうな、明日礼は言う」
「おろ。何じゃ、からかい甲斐の無い奴め」
「わ、私だって学習はする」

言いながら、ユキネはレイに見えないように窓の外を覗いた。

会話は無い。

ユキネは座ったままそわそわと体を揺らし、レイは横たわったまま微動だにしない。

「…レイ？」

無言のまま数分ほど時間が経った後、ぼそっとユキネがレイを呼んだ。

「レイ？」

動かないレイに、もう一度今度は少し強めに名前を呼ぶ。

しかし、レイに反応は無い。

それを確認して、ユキネはもう一度窓の外を覗いた。

「ちょっと、剣を、振ってこようかな」

ベッドを軋ませて立ち上がった。そのままゆっくりと扉へと向かう。

「明日から試合だしな。うん剣を振ってこよう」

部屋の外に出た後、もう一度はっきりとそう言って、ゆっくりと扉を閉めた。

バタン、と扉が音を立てた後、パタパタと歩いていると言うには忙しない足音が防音壁を通して、ほんの少しだけ部屋に届いた。

「風呂に入った後に体を動かしに行く馬鹿が何処にいる…」

のそっと体を起こしたレイが、窓まで移動して縁に寄りかかった。

外では人の波に紛れるようにユキネが小走りで誰かの背中を追っていた。

「……よし、追うか」

ひっそりと、暇人もとい暇吸血鬼が好奇心を剥き出しにして屋根に飛び乗った。

◆

地面に足の裏を押し付けて、体を引き絞る。

今此処に速さはいらない。腕が伸びきる刹那にだけ最高速を込めて撃つ。

急加速と急停止についていけない空気が衝撃となって目の前の空気を破裂させる。

ゆっくりゆっくり、万感を込めて拳を振るう。蹴りを放つ。

最後、急加速と急停止を限り無く同時に。

――裏当て。

散々苛め抜いた空気が震えだし、一層激しく爆散した。

「……ふぅ」

体から力を抜き、適当な石の上に腰を下ろした。

凝った肩と首を解す為に、コキコキと首を鳴らす。

壁を防音にするのは、思ったよりも神経を使う作業だった。

一時的に精製する訳ではないので、一から作り直さなければならない。

ナノマシンの記憶域から良い物を抜粋して、それを真似た訳だが、流石に兄貴の造った代物だ。完全に再現できたかどうかは怪しい。

まあそれでもこの時代にはあり得ないほどの物になったとは自負している。

今日は風も程好く吹いていて過ごしやすい夜だが、動いたせいでほんの少し滲む汗が鬱陶しい。

ナノマシンで分解できるんじゃないかと、ふと思いつき早速実行してみる。

「…うーん」

確かに分解は出来たが、気分的にはすっきりしない。
あとで風呂に入り直した方が良さそうだ。

「ん…？」

視界の端にちらちらとこちらを覗く存在に気が付いた。

「何だユキネ。どうしたこんな所で」
「あ、いや…。…なんで、分かった？」

壁の影から、ひょこっとユキネがその姿を現した。

金色の髪も緋色の目も、夜の闇にはよく映える。目の端にチラつけば、何となく目で追ってしまうほどには。

「お前の事なら大抵分かるよ」

こちらに近付いてくるユキネに声をかける。

「そ、そうか…」
「で？　どうした？」
「あ、あれだ。ちょっと鍛錬に…」

「ああ、明日だもんな、試合。相手はノインか。あいつは強いぞ？」
「…うん、分かってる」

しゅん、と短い音がして、ユキネの手の中に剣が現れた。

「――一手、構わないか？」
「いいぜ。俺ももう少し体を動かしたかった所だ」

◆

「いやあ、つくづく魔法ってのは反則だよな、ホントに」
「そ、それをハルが言うのか…」

息を荒げながら、何とかユキネが反論した。

そのまま、ずるずると先程までハルユキが座っていた石に移動すると、倒れ込むようにそこに腰を下ろした。

「おいこら、俺の椅子とんな」
「ここは、前から私の特等席だ」
「…何じゃそりゃ」

梃子でも動かないように石をつかむユキネをどかすのも、また一手間掛かりそうだったので、しょうがなくその横に腰を下ろした。

深く息をつくと、ほんの少しだけ自分も息が荒れていることが分かった。

理由としては、先程まで一人で体を動かしていた事が殆どだが、無論それだけではない。

「ああ、そう言えば飯美味かったよ。ありがとうな」
「あ、ああ、うん、ありがとう」
「また作ってくれな」
「し、しょうがないな。ハルがそこまで言うなら作ってやる」
「はいはい」
「フェンにも、ちゃんと言うんだぞ」
「分かってるよ」

明日の試合。

ユキネの成長にも目を見張るものがあるが、やはり勝つのは難しいだろう。

ここ数日の異様な成長は、今まで積み重ねた分が表に出てきただけだ。これ以上の成長は難しい。

正直あのムイリオに勝てるとは思っていなかった。

まあ、既に予想を外されているので、この予想にも全く意味はないのだが。

「は、ハル…」
「うん…？」
「こ、これ、ハルが買ってくれたって本当か…？」

申し訳無さそうに差し出された手の中には、蒼い宝石がはまった指輪が光っていた。

見覚えは、ある。

と言うか、確かに自分が買ったものだ。

「何だ、持ってたのか。いつも付けてなかったから失くしたのかと思ってたよ」
「いや、嵌めてなかったのは、何か恥ずかしくて…」
「恥ずかしいって…。贈った人間の前で酷い事言うなあ、お前…」
「あ、ち、違うぞ？　付けるのが恥ずかしいって訳じゃなくて…。ほら、凄く綺麗だから釣り合ってないし…。もっと強くて綺麗な人が付けた方が…」

表情に影を落として、ユキネは自分の手に視線を落とした。

その顔にはほんの少し劣等感が滲んでいて、強くて綺麗な人と言うのが誰を指して言っているのかも何となく分かった。

ハルユキもユキネの手に目を落とす。

ここ数日の、いやそれだけではない恐らく何年も剣を振ってきたせいで手の平はこの年頃の女にしては硬く、今日の料理のせいで切り傷も残っている。

美しいかと言われれば、普通はそう言わないだろう。

しかし、自分が普通じゃないのは自他共に認めている。

指輪を手に取り、そのままユキネの手を引き寄せた。

「は、ハル…？」

うろたえるユキネを傍目に、先に取っておいた指輪をユキネの人差し指に嵌める。

「大丈夫だろ。指輪も綺麗だけどな、お前も負けてねぇよ」

「なっ…！　ななな、え、あ…うぁ…」

褒められ慣れていないのか、ユキネの顔が一瞬で真っ赤に染まる。

下手をすれば頭から煙が出るんじゃないかと言うほどに、耳から

首の根元まで真っ赤っかだ。

「ば、馬鹿者め…」

石ごとずりずりと距離をとって、その顔のまま小さくそれだけ搾り出した。

「…私は、お前が思っているような人間じゃない」

「別に買い被っちゃいないさ。その指輪が似合っているのは本当だし、お前がそんなに器用じゃないのもよく知ってる」

ユキネの視線がまたハルユキに戻ってくる。

顔からはもう赤みは引いていた。

「別に特別強い奴だとも思ってないし、今またクヨクヨしているのも知ってる」

ユキネは喜びも落胆したりもせずに、ただほんの少し悔しげに唇を噛んでいる。

「アキラに何か言われたのか？」

「…別にな、悩んでるとかそんな大層なものではないんだ」

ユキネはあの日に選択した事を、後悔などしていない。

もう一度同じ状況になったのなら、同じ選択肢を選ぶのは間違い無い。

「ただ、今日あの二人を見て、少し、な」

「…ああ、あの頑固親子か」

改めてハルユキから見れば、確かに悩んでいる訳ではないのは分かった。

少し嫌なものに引き摺られていて、陰が落ちているだけ。

「――ハルは、夢があるか？」

唐突にユキネが顔を上げた。

ユキネが石に座っているせいか視線の高さはほぼ同じ。

ハルユキは、その言葉の裏側の感情さえ読み取れるほどによく見えていた。

「世界を見て回る、ってこれはもう言ったけどな…」

「そ、そうか。一度聞いていたな。すまない忘れてくれ」

言葉とは裏腹に、ユキネの顔に納得した様子は微塵も感じられない。

もう吐き出すものなど無かったが、何とか搾り出して、溜息混じりに言葉にする。

「まあ、もっと漠然に言うなら、そうだな…」

珍しく言いよどむハルユキに、よく声を聞き取ろうとユキネが顔を寄せる。

「……幸せになる事」

「え…？」

数秒、二人の間に気まずい沈黙が訪れた。

「……ぷっ」

「…だから言いたくなかったんだよ。人間３０越えたら大抵なあ…」

「あ、ああ、違うんだ。ただちょっと意外だったから…」

「……人間なら大抵そうだろ。野心を持つのも、美味い物を食べたいのも、誰かと結婚して子供作るのも」

「ああ。良い夢だと思うよ。私は」

想像してみる。

肖像画でしか見たことが無い母上や、霞がかってきた父上、それに城の人達が、皆して笑っている顔が驚くほど容易く浮かんできた。

ユキネが知っている大人は、皆笑っている。それは幸せを、知っていたからなのだろうか。

「…今のまま、旅をしてて本当に良いのかな？」
「いいんだよ」
「……他人事だと思って…」
「じゃあ、ここで立ち止まるのか？　それとも戻るのか？」
「そ、それは…」

ここに一人で留まる。それは在り得ない。ここは良い町だが私の居場所はない。

仮に戻ったとしても、そこにも居場所があるわけでもない。

居場所があるのは、もう多分、皆の傍だけ。

でも、それはユキネの居心地の問題でしかなく、ユキネの目的とは全く関係が無い。

彼女が、隣に居たいだけなのだから。

「大丈夫だよ、お前なら大丈夫だ」
「……だから。お前は私の事を勘違いしてるんだ」

むっとしてユキネがハルユキを軽く睨んだ。

その視線もあざ笑うかのように、ハッとハルユキは鼻で笑う。

「ちゃんと知ってるさ。お前はクヨクヨする事もあるし、思い詰めもするし、時には弱かったりする」
「……それはさっき聞いた」

ますます不機嫌に額に皺を寄せるユキネの頭を、宥める様に軽く撫でる。

「――でもそれ以上に、お前が頑張る事を止めない奴だってのもよく知ってる」

例えばがむしゃらに剣を振っていたり。

例えば故郷を追われても笑っていたり。

例えば肋骨が折れても勝利を諦めなかったり。

例えば慣れない料理で手を傷だらけにしたり。

「頑張れ。お前が頑張ってるのは知ってる。けどそれでも言う。もっと頑張れ。まだまだ頑張れ」
「凄い事言うな、ハルは…」
「もし、たまに疲れたら俺に言え。その時は俺が代わりに頑張ってやる」
「…うん。頼りにしてる」

そう言って微笑むユキネに、ハルユキも柔らかく笑っていた。

◆

「…この儂が出て行けんとは」

何とも壊しがたい雰囲気に、屋根の上から二人を見下ろしていたレイが溜息を付いた。

「なんちゅう桃色空間…。……帰ろ帰ろ」

確りと風下逆光を意識しているので、流石に感知はできないだろ

うと、レイはそのまま立ち上がってさっさと去ろうと体の向きを変えた。

「ん…？」

視界の端、二人がいる空き地の入り口にある壁の影で、何かが翻った。

闇に溶けるような淡い青の髪。

そうどこにでもありふれた髪色ではない。少なくともレイが知っている限りは持ち主は一人だけだ。

「ふむ……」

別に慌てる風でもなく、むしろ何処か確信したかのような確りとした足取りで、その小さな影はそのまま消えていった。

指輪（後書き）

やべ、最後忘れてた

「フェン、今日の昼食代を貰えるか？」
「…今は手持ちが無い、から。後で届ける」
「いいのか？　じゃあ、多分いつもの広場にいると思うから」
「…持って行く」

ありがとう、と屈託の無い笑顔で謝意を示すユキネをフェンは無言で見送った。

無言も無表情もフェンにとっては日常的なものでしかない。

しかし、今の表情は無感情というよりは、冷静と言った方が近かったかもしれない。

「…ハルユキ」

どこぞの王女が暴れたせいで壁が取り払われ、無駄に大きくなった部屋。

前なら入り口から見れば全容が見渡せたはずだが、今は少し視線を巡らせる必要がある。

視界の端で珍しく本など読んでいるハルユキに視線を止めると、一直線に部屋を横切ってその前まで移動した。

歩みに一切淀みなど存在せず、その小さい足から力強ささえ感じるほどだった。

「ハルユキ」
「ん？　何だ、どうしたフェン」
「…何してるの？」
「いや、少しは文字を覚えようと思ってな。暇だか…」
「そう。なら働いて」

ハルユキが言い終わる前に、スパッとフェンが言葉を遮った。

苦笑しながら本を掲げていたハルユキの表情が固まり、逃げるように視線を他の3人の元に泳がせた。

しかし、フェンの小さな声に加えて、広くなった部屋だ。各々自分なりのやり方で時間を潰している。

「あ、あれ…？　フェン、ほら俺勉強してるし…」
「暇だと言った」
「い、いや、暇だけどさ」
「じゃあ、これをユキネに届けて」

スッと、小さな布袋をハルユキの目の前に差し出した。

その際に金属同士が擦れ合う高い音がした。その中身がお金であり、差し出されている物が財布だと明らかになる。

「お昼代…。ハルユキの分もある」
「でも、勉強……」

まだ食い下がろうとするハルユキに、フェンの無表情が向けられた。

一秒、二秒。いつまで腹の探りあいが続くかと思われた所で、ぼそぼそと小さくフェンの口が動いた。

それこそ、ハルユキにしか聞こえないほどの音量で。

「……行く？」
「行ってきます」

間に何が交わされたかは二人の間でしか分からない。

しかし、ハルユキの額に汗が走っている事から、行われたのが交渉ではなく脅迫だった事は明白だった。

◆◆◆

フェンは窓の傍の陰に隠れているベッドに座って、ハルユキが残していった本を読んでいた。

内容は子供向けのもので、物語自体にも目新しさは感じられない。多分、明日になれば忘れているようなどこにでもある小説。

それでも暇に追われて、ただ無感動に文字を目で追っていた。

「フェ～ン。来たわよ～！」

バン、と蹴り破らんばかりの勢いでいきなり扉が開かれ、この部屋には初めて現れる人間が闖入してきた。

現れたのはフードを目深に被った、フェンと同じ位の身長の少女。

フェンは、本に栞を挟み傍らに置くと、それからゆっくりと闖入者に視線を合わせた。

「……うん」

「思い出して！　名前憶えてないのは何となく分かってたけど、思い出すのを諦めないで！」

「……ハゼ」

「エゼ！　ハゼって何！？　…小魚じゃない！」

「エゼ。…賑やかな人」

「…うん。何か一緒に若干不名誉な印象もついたけど、今はそれでいいわ…」

全力疾走の後のように息を荒げながら、懐から布袋を取り出した。

「…ありがとう」

「まあ、私が借りた訳だから、ありがとうって言われるのも変な話だけどね。何にしてもこちらこそありがとうございました」

お互いにお礼を交わして、布袋を受け取った

先程フェンがハルユキに渡したものとよく似た小さな布袋。中身も同じくお金のはずだ。

フェンは何となしに、半分だけ開いた窓から外に目をやった。

空の割合は雲の白と空の青で2：8。雲は大体が一塊に纏まっていて、いかにもな夏空が広がっている。

もう太陽も頂点を過ぎた。あの二人も今頃は一緒に昼食を摂り終えているはずだ。

「ね、フェンは今日これから暇？」

そう言われて、予定を探る。

もう昼食も済ませたし、今日はもうユキネの試合ぐらいしか予定は無いはずだ。

「……日が沈むまでなら」
「よし！　じゃあ、遊びに行きましょう！」
「…え？」

ベッドに座りなおして、再び本に手を伸ばそうとしたフェンが、予想外の言葉に顔を上げた。

「…何よ。私はもう友達だって思ってたんだけど…」

ミクロン単位でフェンの瞼が見開かれた。

余りにも小さな変化過ぎて、エゼには無表情を向けられているだけに見えただろう。

それでも確かな変化だった。

「…行く」
「うん、行きましょ」
「何処に行くの？」
「知らないの？　今日は朝から一層騒がしいじゃない」

半分だけ開いていた窓をエゼがこれもまた勢い良く開いた。

抑制されていた分の風が、雪崩れ込むように部屋の中に広がった。

「うん、良い天気！」

それは既に見ているので、エゼの横から顔を出して空を見上げるエゼとは反対に視線を落としてみる。

「……すごい」

見下ろしているのは大通り。向こう側の家まで何十メートルはあると言う巨大な道。

それが人の海に飲み込まれていた。

「まあ、これだけ多いのは今日だけらしいけどね」

エゼもフェンに合わせるように人の海に視線を落とした。

広すぎると言っても過言ではないほどの大通りのお陰で、詰まっている訳ではないが、それでもここから見た限りでは人の切れ目は見つけられない。

余りの人の多さに、魔法を使って屋根の上を移動している人間も少なくは無い。

大通りの異様すぎる光景は、大きな生き物が艶かしくうねっているかのようにも感じられた。

「今日…？」

「そ。今までのは”前夜祭”。今日から始まるのが…」

自慢げに指を立てて説明しようとしたエゼが、ふと思いついたようにその口を閉じた。

「ま、それはお楽しみよね」

悪戯っぽく笑うと、フェンの腕を取って外へ引っ張っていった。

◆

「うん、空いてる空いてる」

二人は屋根の隙間を飛び越えながら、町の中心へと向かっていた。

街の中心にあるのは巨大な城。その傍らにはまだ熱気が残っているかのように存在感を示す闘技場が鎮座している。

改めて、こうやって全容が見渡せる所まで来れば、いかに力を持った国なのかがよく分かる。

王女があまりに親密的なので実感は無かったが、ここは紛れも無く大国なのだ。

見上げていた視線を下ろすと、先に行っていたエゼが、何か口をぱくぱくさせながら上を指差しているのに気付いた。

もう一度城を見上げてみる。

しかし何も変わった所が無いので再び視線を下ろすと、エゼが両腕で×を作って次にバッサッバッサと全力で手招きを始めた。

「よし、ここで大佐以下は待機！！」
「……大佐？」
「何言ってるの！　フェン・ラーヴェル大佐！」
「…えー…」
「えー言わない！」

小さな胸を精一杯張り切って、フェンの後ろをビシッと指差した。

屋根に天窓が開いていて、そこの縁に腰掛けられるようになっている。

ここに座って待っていろということらしい。

自分も一緒に行くと、視線を戻すが、既に姿は無い。

どうしようかと数秒考え込んだ後、結局そのままその縁に座り込んだ。

ふぅ、と小さく息をつく。

ボーっと、辺りに視線を巡らせて見るが、特に面白いものがある訳でもなく、ゆっくりと流れていく人の波を眺めている事にした。

一分、二分とただ惰性にまみれた時間が過ぎていく。

笑っている人間、疲れからか溜息を付いている人間、酒を掲げて陽気に歌っている人間もいれば、街の巨大さに落ち着きを失っている人間もいる。

あちらは自分が見ている事を知らないのだろうな、と思うと何故か妙な気分になる。

不意に、吸い寄せられるように二人を見つけた。

綺麗な金髪の少女に、塗り潰されたかのような黒髪の青年。

なにやらケンカしているようだ。少女が躍起になって繰り出す拳を笑いながら避け続けている。

周りから囃されている事に気付いているのかいないのか、それは少女のスタミナが無くなるまで続いた。

そうなって初めて周りの視線に気付いたのか、顔を赤くしたのが遠目でも分かった。

大慌てで男の腕を取って、雑踏の中に紛れていく。

不意に。

いや、不自然にと言ってもいい程に。

苦笑いしながら引っ張られていく男の視線が、真直ぐこちらに傾いた。

「……ッ」

慌てて、屋根の影に体を押し込んだ。

「……フェン？」

後ろから聞こえた声に、思わずビクッと体を揺らした。

恐る恐る振り返るが、居たのは想像に反して小さな体の少女。

視線を戻すと、ハルユキの姿は雑踏の中に消えていた。

「……何でもない」

「そ。じゃあ、行くわよ」

「行く…？」

「場所取りはしたし、思ったよりもまだ時間もあるしね」

エゼは、バンバンと窓の縁に敷かれた犬か何かの柄が入った布の下敷きを確認するように叩くと、立ち上がった。

「準備良し！　じゃあ…」

がしっ、と何かを言う前にフェンの腕をつかんだ。

「フェンは風の魔法使えるわよね？」

ここに来るまでにも風の魔法を使っているのを見ていたのだろう。
質問と言うよりは確認に近い。

勢いに押されながらも、フェンが首肯すると、エゼはそうと呟いて更に笑みを深くすると、屋根の緩い勾配を走って下り始めた。

当然、腕をつかまれたフェンも一緒に。

「――ジャ～ンプ！！」

大通りに向かって、思い切り宙に飛び込んだ。

「えー…」

「えー言わない！」

小さな影が二つ。

祭りに向かって飛び込んだ。

◆

「……うーん、７８点！」
「嬢ちゃん。それは高得点なのかい？」
「平均点ね。もっと励むように！」
「こりゃ手厳しいね」

笑いながら料金を受け取る店員に、もう一度激を飛ばしてから二人は店を離れた。

「エゼ。買い過ぎ…」
「大丈夫大丈夫。お菓子なら幾らでも食べれるから」

両手に持った八十点以上のお菓子達は既にフェンとエゼの片腕ずつを占拠している。

もう日も落ち始め、西の空が茜色に染まってきている。陽が落ちればユキネの試合が始まるはずだ。

「あ、そろそろね。じゃあさっきの所に戻りましょうか」

落ちていく陽にエゼも目をやると、元の視線の先の屋台を諦めて

裏路地に向かった。

「あ……」

いざ屋根に登ろうとしたところで、エゼが固まった。

「……どうやって屋根に登ればいいと思う？」

先程は宿の屋根から伝っていったからいいものの、こんな裏路地からでは普通は屋根には登れない。

いくらなんでも、知らない家にいきなり屋根に登らせてくださいとは言えないだろう。

「…任せて」

流石に風だけでは不安定すぎて屋根には登れない。と言っても攀じ登れる何かも無いし、体力も無い。

上に上がる手段など、階段か若しくは梯子くらいしか使えない。

要は、階段が在ればいいのだ。

「――――」

フェンの言の葉に反応して、辺りの空気が一瞬で凍えていく。

パキパキと不安げな音を出しながら、蛇のように氷の塊が屋根へと伸びていく。

「さ、流石ね。世界征服も近いわ…」

所要１０秒ほどで、裏路地に、何処の物語から出てきたのかと言うほどの幻想的な透明の階段が出来上がった。

足を乗せると、カツンと凛々しい音が鳴った。中に空洞がある音ではない。強度も問題ないようだ。

「…い、いい？」

「……？　何が？」

「いや、何か勝手に上がっちゃいけないような…」

訳の分からない事を口にするエゼを今度はフェンが手を引っ張って引き上げた。

トトッと前に躓きそうになりながら、エゼが階段を上がる。

「…大丈夫？」
「大丈夫大丈夫」

エゼは、先程の躊躇が嘘のように感嘆の声を上げながら階段を上がっていく。

「さ、急いで急いで。始まっちゃうわ」
「でも、もう試合が……」

横目に太陽の位置を確認すれば、もう太陽の体の半分は地平線の向こうに隠れている。

「大丈夫よ。試合は多分終わってからだから。それにどっちにしろ闘技場の近くだしね」

エゼが階段から屋根に飛び移り、それにフェンも続く。

フェンもそれに続いて、屋根に飛び移る。

自然と眼下の大通りに目が行き、その様相が先程屋根から見た景色とはまた違っていることに気付いた。

あの巨大な生き物が身動ぎをやめている。

皆が皆、誰も誰もが、足を止めて空を見上げている。

「――さあ、お祭りよ」

飛び跳ねるように屋根を走りながら、眼前のエゼが嬉しそうに告げた。

◆
◆
◆

最初に訪れたのは、静寂。

日が沈みきったその瞬間、異質ともいえる沈黙が町中を覆っていた。

殆どの視線が一箇所に集中している。その先で。

ぽつ、と光が生まれた。

光が生まれた事でその源が明らかになる。

巨大な牙から切り出されたとは思えない流麗な剣。そこに嵌められた血の様に紅い玉石から。

光は増大していく。

急速に甚大に煌びやかに、成長を遂げていく。

球状に成長した光の外周から、光が迸った。

それはまるで太陽を泳ぐ紅炎のように。

いや、それはまさに太陽そのものだった。

――”眠らない街”。

この街に入った時に目にしたその異名を、街が体現した時。

祭りが、始まった。

敵として

歓声が上がった。

街が震え、屋根の上のここまで振動が伝わってくる。

しかし、そんなものはまだフェンの意識の中に入り込めてさえいない。

花火では雄大さが足りない。

星では存在感が足らない。

それを形容するのに、太陽以外の言葉は浮かんでこなかった。

ただ本物と違うのは光の量の割に熱がほとんど無い事ぐらいだ。

あくまで魔力の塊なのだろう。

「うわぁ…、いつもよりでっかいわね…」

「いつも…？」

「私は毎年来るんだけどね。いつもはこれの半分くらいよ」

確かに余りに巨大すぎて、遠近感も狂ってしまっている。実際には百メートル近くあるのだろうが、手を伸ばせば触れてしまえそうなほどに。

それはフェンだけではないようで、大通りの中にも手を伸ばしている姿が見受けられた。

しかしそれより多く、大勢の人間が一つの同じ行動に没頭していた。

「あれは…？」
「ん？　ああ、あれね」

エゼもフェンの視線を追って、太陽に向かって手を合わせている人々を見た。

特別驚いた様子も無い。あれもこの祭りの一部なのだろう。

「ああやってね、普段から身に着けている物だとか、宝物をあの光に当てて願えば願いが成就する、っていうまあよくある迷信ね」
「…そう」
「……やってみる？」

フェンは黙って頷いて、懐を探った。

それほど、物を持っている方ではない。今持っているのは大分軽くなった財布と、結局一度しか付けていない銀色の髪飾り。

「綺麗ね、それ」
「…ありがとう」

太陽に掲げてみると、その光を反射してキラキラと光っている。

フェンが横を見ると、エゼも手を組み合わせて目を瞑っていた。それに倣うように髪飾りを握った手をもう片方の手で包み込んで目を瞑る。

世界を我が手中に、と物騒な呟きは置いておくとして、フェンも折角なので願い事を探す事にした。

探すまでも無く、願い事はすぐに見つかった。

見つかったそれを、手の中の髪飾りと太陽に捧げた。

「それ、あの男から貰ったの？」
「…そう」
「それじゃ、願いは縁結びだ」
「縁、結び……」

「違うの？」

違う。

とは一概に言い切れないが、恐らくエゼの思っているのとは違う。

「違う、けど、合ってる……気も、する」
「ふーん…、叶うといいね」
「あと、エゼの願いが叶いませんように、と」
「何で！？」

世界征服されたら困るから、とはわざわざ言う必要も無いだろう。

心なしか輝きを増したかに思える髪飾りを、懐にしまって立ち上がった。

「試合、始まる…」
「……あ、うん、そっか」

陽は沈んで、新たな陽が生まれて、その下でまた戦いが始まる。

「じゃあね、フェン。また遊びに行くわ」
「……？」

同時に立ち上がったエゼにフェンは首を傾げた。

硬い笑顔を浮かべていたエゼもフェンとは逆方向に首を傾げる。

「一緒に行かないの？」

「……いいの？」

「無理に、とは…」

「行く！　行くに決まってるじゃない！　私の暇人指数は並じゃないのよ！」

「じゃあ、行く」

今度はフェンが手を引っ張って、屋根から飛び降りた。

◆◆◆

照らされる。

乾涸びてしまいそうな女の体を更に陽光が焼いて行く。

その中で、願う。

乞う。

渇望して、手を伸ばす。

その中に無いのは分かっている。

在るのは迷信と力の塊だけ。

それでも、希う（こいねが）。

どうか、どうか――。

しかし、断罪の刃のようにすら思える光は、女の罪と体を焼き払っていくのみ。

「何だヴァーゴ。死にたいなら言ってくれよ、水臭いだろ？」

「…私を餌としてみるのは止めてくれるかしら？」

唐突に聞こえた声に反応したのか、スッと女の足元から影が伸びて、体に降り注ぐ光を容易く遮断した。

塒にしている倉庫の上。出口の階段まで歩を進める。

別に階段を使いたいわけではない。

癇に障る男が居るからだ。

「外見は良い女。余計な肉も付いていないし、魔力も十分…」

「――止めろ、と言ったわよ？」

影が伸びる。影は陰を作り出し、男の立っている場所を黒く染める。

それは、首元にナイフを突きつけてるに等しい。

「冗談じゃねェか。今日はもう満腹。それに腐ったモンを食べる趣味はねェ。そんな事より、手前は手前でやるこたやったんだろうなァ？」

「滞りは無かったわ。若干死にそうだっただけで」

肩が触れ合う程の距離に居るにも関わらず、その視線は交錯する事はない。

そしてまた、唐突に。

間違いなく”誰か”を”摂取”した時に付いた、その誰かの返り血が飛び散った男の腹。

躊躇いも無く、その腹に刃と成った影が突き刺さった。

「おお、痛ェ…」

ボドッと男の口から赤黒い液体が零れ落ちる。

しかし男は、膝を突く素振りすら見せずに、唇の端を吊り上げる。

「何だァ？　火照ってんなら静めてやろうか？　ちゃんとイクまで付き合ってやるぜェ？」

「…倉庫一杯の金貨を持ってくるか、死体になって来たら中まで入れさせてあげるわ」

真っ赤に染まった舌を突き出して、壊れた様に嗤う男から、またも躊躇無しに刃を引き抜いた。

また重々しい音と共に血が飛び散るが、両者とも目にも留めない。

「あー…良い具合に血が抜けたァ…。よく眠れそうだ…」

バタッと男はそこに倒れて、瞬く間に意識を飛ばした。

隙だらけにも程がある。しかし、誰かがこれを見ても何かをしようとは思わないだろう。

君子危うきに近寄らず。触らぬ神に祟り無し。

殺される為だけに虎穴に入るのは、馬鹿な子供だけだ。

女はそれを見た後、もう一度太陽に物憂げに視線を戻して、足元の闇に潜った。

◆◆◆

「うわ…」

ユキネは自分の他には誰もいない控え室の、闘技場への入り口で、一人感嘆の声を上げた。

巨大に成長した太陽を見つめて、自然と驚きが声になる。

ここからなら独りでに剣が浮かび上がって、光を灯し、それが太陽になるまでの経緯が見れたわけだが、何一つをとっても普通ではない。

既に満席なった客席を見ても、誰もが空を見上げて、手を伸ばし

ていたり、手を組んで祈っている人間すら見られる。

太陽をよく見ようとして、目に手を翳すと、指に嵌めてある指輪が光を反射させた。

昨日から散々見た指輪だが、気付けば眺めている事が、今日だけでもう何度目か分からない。

（……綺麗だ）

指輪の事をそう思う度に、同じように綺麗だと言ってくれたハルユキの顔が浮かぶ。

一人でに頬が緩んでいく。

嬉しい。すごく嬉しい。きっと励まし半分の言葉だったのは分かっているが、それでも緩む頬が止められなくなるくらい。

身悶えしたくなるほど、嬉しい。

見てくれている。それも、どんな形でも良かったのに、綺麗だとか頑張っているだとか身に余りそうな形で。

指輪を嵌めた右手を左手で包み込み、目を瞑ってそれを胸に当てると、温かささえ感じられた。

「――あれは精霊獣。願いが叶うってお呪いもあるそうだけど多分迷信よ」

後ろから聞こえた声に、ビクッと肩を揺らしてユキネは振り返った。

太陽の光で影になっていて、顔は分からないが、艶やかな紅い髪で誰なのかはすぐに分かった。

その紅い髪を自慢げに揺らしながら、ノインがユキネに近付いてくる。いや正しく言えばノインもあの太陽を眺めに来ただけなのだろうが。

「あの剣に嵌った宝石が召喚石。と言っても本当に呼び出せるかどうかは知らないけれど」

つまり、そう伝えられていると言う事だろう。

実際には言い伝えの域を出てはいない。そもそも精霊獣の存在からして世間一般的には眉唾物だ。

「あれは…、誰がを操ってるんだ？」

「あの魔力はこの闘技場で散った魔力なの。だから、宿り主はこの土地よ。

例年通りなら決勝の日にこうなるんだけど、今年はかなり激しかったから、日程がずれてこうなったみたいね」

ユキネは改めて太陽を見上げた。ここからはかなり近いので目を焼かれないように手を翳す。

それにしても圧倒的な存在感だ。いきなりこれが生まれたのならば、終末の日を想像してしまっても不思議ではない。

「いつもはこんなに大きくないわ。この大きさも今大会のレベルの高さ故ね」

そもそも出場者が例年の倍。

そこから厳選された人間も、ほぼ必然的に力量の高い者になる。

「…それで？　何か用か？」

ここはユキネの控え室。

居ても不思議ではないのは、次の試合の選手であって、ユキネの対戦相手であるノインではない。

「そうね、どうしてかと言われると、暇だったと言うのが一番。あと、貴女とだけはあまり話した事が無いなと思って」

軽く首を傾げて笑いかける仕草からは、一グラムも敵対心も対抗心も覗かせない。

改めて、躍起になっているのは自分一人だと思い知らされる。

それが思ったよりも悔しかったのかも知れない。何か考える前に口が動いた。

「…丁度良い、とは言わないけど、私も王女に話がある」

ユキネが淡々とそう言うと、それがかなり予想の裏を付いていたらしく、ノインが驚いた表情を見せた。

他の表情を見慣れている訳ではなかったが、ユキネにもその顔は新鮮に感じられた。

「…いいわよ。何？」

「ノイン王女は…」

「ああ、ノインでいいわ。同年代に畏まられるのは気持ち悪いの」

それならばとノイン、と名前を呼び直す。

それだけの事で、少しだけ、ノインに対する劣等感が小さくなった気がして、そして、そんな事を意識している自分にやっぱり辟易もした。

「――ノインは、何で王女なんてやってるんだ？」

毅然とした態度を保ちたかったが、それはやっぱり虚勢だったようで、ほんの少し吃(ども)りそうになる。

「やりたいからよ」

そんな事には気にも留めず、ノインは挑戦的に笑ったままそう言った。

「王女をやっていれば自分の居場所が出来る。己を確立できる。もちろん領民を守りたい気持ちも大きいし、この国が好きだからって言うのもあるけれどね。
それも自己満足なんだから勝手なものよ」

驚きは、あまり無かった。それよりは、やっぱりか、という思いの方が遥かに大きい。

その笑顔も、我が儘っぷりも似ていると思った。

やっぱり、ハルユキにどこか似ていると。

違いがあるなら、ハルユキの笑顔の方が少し性格が悪くて、ハル

ユキの方が遥かに我が儘なくらい。

そしてもう一つやっぱり。

実感すると同時に、声になった。

脈絡も何も無く、零れ出た。

「…私は、お前にだけは負けたくないんだ」

言ってしまってから、自己嫌悪で顔をしかめた。

少し気持ちが先行してしまった。そもそも本当にまともに話した事すらほとんど無いのだ。

しかし、気持ちに嘘は一片も無い。

悔しいのだ。

同じ立場からの出生で、同じような事態に見舞われて、それでも尚開いている差が。

似ているようで、対局の在り方が。

しかしそれは、事情を知らないノインには関係すらない事だ。その証拠に、ノインの紅い瞳は僅かに見開かれ、驚きに固まっている。

それでも構わない。

ただ自分勝手に、自分の気持ちに決着を付けるだけだ。

「気が合うわね」

「え……？」

顔を上げた先で。

先程よりもより挑戦的に。

先程よりもより子供のように。

ノインは唇の端を吊り上げた。

「私も貴女にだけは負けたくないわ」

シャン、と凛々しい音を立ててノインが剣を引き抜いた。ここで事を構えようという事ではない。

戦意を示しているのだ。

そのまま、ゆっくりとユキネに近付いて来る。

そして、ユキネの前を通り過ぎて、闘技場に乗り込んだ。煌びやかな紅い髪が、気流の狭間で華麗に揺れていた。

同時に、歓声が上がる。

あの雄大な太陽から、観客の視線をもぎ取った。

「先に行ってるわ」

白銀の鎧の下に身に着けた真紅の戦衣の裾を揺らしながら、歓声の中に堂々と歩いていく。

その余りに物怖じしない背中が、やっぱり悔しかった。

歓声の中で胸を張る姿が、どうしても羨ましかった。

そしてその女が舞台の真ん中で、敵として自分を待っている事に、悔しくも震えた。

武者震い、という物なのだろう。

震えが止まらない。でも、ここでジッとしてはいられない。

突き動かされる。何か熱ったものに。

その震えを抑えるように拳を握ると、同時に全身に程好い緊張が満ちた。

闘技場の中心で振り返ったノインと目が合う。

――来い。

挑戦的な笑みにのせて、薄い桃色の唇が動いた。

もう一度だけ、ハルユキに貰った指輪を手で撫でるように触れる。

その温かみを噛み締めてから、鎧を顕現させた。

明確にぶつけられた戦意を押し返すように一歩進んだ。同時に、手の中に剣が顕れる。

――――アッ！！！

その瞬間に、広大な石畳の闘技場が目の前に広がり、歓声が降り注いだ。

一瞬だけ、太陽の光に視界を奪われた後、観客の存在など意識の片隅に消える。

蠢く観客も、響く嬌声も、見下ろす太陽すらも押し退けて重く圧し掛かるのは、舞台の中心に佇む女の存在。

押し潰され、磨り潰されそうな程の威圧感。

闘技場内に存在している空気は、日常の物とは明らかに一線を画す。

呼吸するたびに、空気に溶け込んだ彼女の戦意が肺を苛める。

敵も味方も全て魅了して屈服させてしまいそうな妖艶な笑み。

それを、今は笑い返す。

対等でなければならない。

友達と言えるほどに言葉を交わしてはいない。

仲間と言えるほどお互いを知らない。

ならば。

信頼関係で繋がれておらず、それでも尚対等でありたいのならば。

――敵として迎えよう。

膨大な魔力が、歩を進める毎に濃度を増していく。

渦巻く。

彼女を中心に、僅かに赤みを残した魔力が渦巻いて荒れ狂う。

小さく連続する音は、その質と量に当てられた舞台に罅が入る音。

耳の奥に荒ぶ音は、その熱さと色に変えられていく空気の音。

まだ、遠い。

彼女が立つ舞台に手の先をかけただけ。

這い上がるのは、これからだ。

開幕の音

「出て来たか…」

夜に不自然に輝く太陽に照らされながら、我等が元・お姫様が姿を現した。

目は一直線に闘技場の中心を見据えている。

「……珍しい表情しとるの」

ユキネは闘技場の中心で、ノインと相対した。

確かに珍しい表情だ。いつもなら戦う時の表情はあれじゃない。

困っていたり戸惑っていたり、はたまた憤っていたり。地に足着いていない顔で剣を握っていたユキネが、今は一つの事しか見ていない事が分かる。

何を見ているかは、言うまでもない。

「若い奴らはいいのう…」

「俺から見ればお前も随分若ぇよ…」

年寄り二人で揃って溜息を付いた。

恐らくもう、理由も無しにあれ程燃えられる機会はそうない。

「何か対極的だな…」

ユキネの蒼い戦衣に対してノインは真紅の衣。

白銀の西洋鎧はどちらも変わらないが、剣も綺麗に銀と赤で、髪は同じ長さであるものの金色と紅色とで遠目から見ても違いが目立つ。

それでもお互いに戦意を交換している姿が、どこか似ている。

それはまるで、鏡合わせの様にも感じられた。

「どちらが勝つと思う？」

「ま、ノインだろうな」

「ほぉ、身内贔屓はせんのか？」

「去年の段階で、ムイリオ、この前のユキネの相手だった爺な。そいつに圧勝したらしい。まあ相性もあったそうだが、それでも完成度が違うだろう」

「…まあ、そうだろうの」

街の象徴としての太陽が打ち上がり、自国の花形が試合をするからか、会場のボルテージは先程から上がりっぱなしだ。実況の声も、興奮で上擦ってしまっている。

『やばいぜ、皆ぁ…。主に男性諸君…！　俺は今日は王女の応援が出来ないかも知れねェ…。正直ユキネちゃん超好みだ…！』

実況の声にブーイングが上がる。それはほとんどが女性の声で、男性陣からは賛同の声も上がっている。

『いやしょうがない。ホントこれだけはしょうがない。だって可愛いんだもん』

ユキネはノインと違って形式的にはもう王女ではない。そうなれば、王女と違って仲良くなれば普通に話も出来るし、良くすれば交際すらも望める。

「……まあ、多分そちらの方が難しいだろうがの」

実況の声と、ユキネへの視線にイライラと膝を揺らすハルユキに向かって、わざとらしくレイは溜息を付いた。

「何じゃ、何もせんのか」

「…今日俺はここで大人しくしてないといけないんだよ」

既にメコメコと悲鳴を上げ始めていたコップを、ハルユキは脇に置いた。

「今日は応援もいらないし、贔屓も要らない、ここで大人しくしていてくれ」と、本人に言われてしまえば、それはもうどうしようもない。

昨日の夜あんな事を言ってしまった手前、頑張っている邪魔をするわけにもいかない。結果、出来るのは眺めている事だけだ。

『出来ればどちらも怪我をしない事を祈りたい。が、剣も意思も止まらない。互いが邪魔なら打ち倒すしかない』

もう戦いを引き延ばすのは不可能だ、と解説の声が真剣に切り替わった。

『命だけ大切な人に預けて、他の全てを今に懸けろ』

銅鑼が鳴る。――同時に。

剣戟の音が銅鑼の音を上塗りした。

◆◆◆

鉄が擦れる音が、目の前から聞こえる。

鍔迫り合った剣から火花が漏れ、魔力により一瞬で弾けて消えた。

一瞬だけ交差した視線をきっかけに、お互いが腕に力を込める。

一際大きく錆びれた音がして、距離をとった。

「そう言えば――…」

爆発しそうな緊張感の中で、厭に閑静な声はすり抜けるようにユキネの鼓膜を揺らした。

「こうして剣を交えるのは二度目よね」

「…ああ」

あの時の事はよく覚えていない。ただ、止めたのがハルユキだという事と、止められなければ殺されていたという事だけ。

「…あの時とは、違うでしょうね？」

「確かめて見れば、いい！」

声に乗せるように、地を蹴って接近する。

そうね、とノインが簡素に自答した後、彼女の剣の周りの空気が揺らいだ。切っ先に近い地面がじりじりと焼け焦げていく。

構わず、横から剣を降り抜く。

しかし、手応えはなく、ノインの陽炎とも残像ともいえない物を切り裂いただけに終わった。

目の前には、煌びやかな金炎の残滓。

その煌びやかさに目を奪われたのは一瞬。

その残滓を追って、ユキネの視線が右へと移動する。

一瞬後、〝左〟から莫大な魔力と気配。

視線で追っていた気配を諦め、襲ってくる危機感に身を任せる。

「――――……！」

再び、剣戟の音。

再び、鍔迫り合い。

叩き付けられるように浴びせられる魔力に、剣が鎧が悲鳴を上げる。

「――っくぁっ！」

舞台の中で存分に加速して叩きつけられた一撃。膂力は同程度の為、今度は拮抗すらも許されない。

無様に吹き飛ばされるより、自分から跳ぶ事を選択した。

足に力を込めて、地を蹴ったその瞬間。

見透かしたかのように自分を押す力が掻き消えた。

想像の斜め”下”を潜られた事で、ほんの少し体勢が崩れ、視界がぶれた。

その一瞬を経て、空中に居るまま視線を戻す。

そこで、剣に黄金を纏わせた女が笑っていた。

「――”黄昏時・鳳凰”」

柔らかく、巨大な金色の鳥がノインの剣に降り立った。

音も無く、幻想色の羽を散らして。

意識の合間を縫って何処からか姿を現したそれは、劇的で、幻想的。

いつか橋の上でユキネを撃退してのけた炎の鳥。

世界は遅い。

まだユキネの足が地面に着くまでは、気が遠くなるほどの時間が

ある。

なればこそ、あちらは目にも止まらぬ速さで動いているはず。

しかし、それを欠片も感じさせない優雅さを誇ったまま、それは再び飛翔した。

まるで、幽界から抜け出したかのような、浮世離れした姿。

忘れそうになるが、それは、攻撃だ。ノインがユキネを害そうと生み出した無機の刃だ。

しかしそれは、まるで生命が芽吹いているように躍動しながら、ユキネに向かって加速する。

羽を散らしながら、己の体を燃やしながら、王の為に殉じる騎士の様に。

「――…っ！」

剣に魔力を。

あれは、刃。加えて魔法。

刃なら圧し折ればいい。

魔法ならば打ち消せばいい。

足が想像していたよりも速く、地に着く感触が伝わる。

踏み出す。踏み込む。踏ん張る。

白く光る剣を、上段に構えて、火の鳥の進行方向をなぞる様に狙いを定めて、切り裂いた。

嘴と刃がぶつかり、真っ二つにそれを断ち切った。炎の欠片と変わったそれは細々と周りに飛散した。

「ん…？」

足元に違和感。まるで、もう一度着地したような感触が伝わってきた。

「――へぇ、やっぱり消されるのね」

そんな疑問も、彼女の一言による警戒と危機感で押し流される。

「でも、私の炎は消えないのが長所だから、全ては消せないみたいでよかったわ」

言葉に教えられ、視線だけで周りを見渡す。

確かに、魔力の絶対量こそ減っているものの、周りの石畳の上で未だ黄金の炎が燃え盛っている。

「なら、幾らでもやりようはあるわよね」

言って剣を持っていない方の左手を翳す。

「――転生”不如帰（ホトトギス）”」

祝詞に身構え、ノインに警戒心を集中させたその次の瞬間。

いやに長閑な鳥の囀りが聞こえた。

「……やっぱり、血縁者だな…」

その姿を変えた景色に、思った事がそのまま漏れた。

左にも右にも前にも、そして恐らく後ろにも。

視界を埋め尽くすほどの、黄昏鳥（ホトトギス）が舞っている。

王に尽くして死んだ火の鳥が、命の形を変えて敵を見据えていた。

それは兵隊だった。

攻撃の合図を待っている、忠実で愚直な兵士。先に戦ったムイリオと同じような圧力を感じる。

小鳥の形を為しているだけで、あれは炎の魔力の欠片。しかも数や圧力もムイリオの水弾雨に引けを取っていない。

しかし、ならば。やる事は同じだ。

あれを弾くのに力は要らない。ただ最短の軌跡を辿れば良い。

足幅を広げ、剣を水平に構える。

それを待っていたかのように、それは一斉にユキネに殺到した。

己の手には剣が一本だけ。

圧倒的な数の差に眩暈がおきそうになるが、歯を食い縛って自分を保つ。

一閃。

――足りない。

後ろからの突進に身をかわしながら二閃、三閃。

まだ足りない。

その思考の隙を狙ったかのように、剣の届かない内側。台風で言うなら中心の目に存在する凪のようなその場所に、小鳥が一羽紛れ込んだ。

しかし当然、肩にとまる事を期待して戯れる余裕など無い。

今日は確りと嵌めている、いや嵌めてもらった人差し指の指輪。

そのせいか、何時もより鎧が身近に感じる。

無意識的にか本能的にか偶発的にか、ほんの少しだけ鎧に魔力が流れた。

まるで自分の体に力を入れる程容易に力が伝わっていくのがよく分かる。

パン、と響く乾いた音は、近付いていた炎の化身が弾けて消えた音。

一瞬だけ、鳥を象った炎の群れが怯んだのが分かった。

「――ッ！！」

呼気一閃。

剣を持ち上げて振り下ろすまでの間に、剣に魔力を流し込み、一瞬で形成された白い巨剣が、動きを固めた炎の化身を薙ぎ払う。

剣が通過した後には、パラパラと金色の火の粉が散らばったのみで他には何も残らない。

「…成程。爺が泣かされただけの事はあるわね」

「……泣かしてないぞ」

「部屋で泣いてたのよ。私が宥めたのよ間違い無いわ」

その炎の欠片が一つに集まって形となった小鳥が一羽、逃げるようにノインの手に止まった。

ノインが愛おしげにその羽を撫でてやると、目を細めて小さく一鳴きした後、ゆっくりと消えていく。

「――でもね、足りないわ」

ブン、と横薙ぎに剣を振った。

それだけの行為で、熱せられた剣に絆（ほだ）されて歪んだ空気が渦を巻き、熱風が吹き荒れる。

「もっと、楽しませてくれるんでしょう？」

「――ああ、まだまだ挑ませてもらう」

「挑戦を許しましょう。全力できなさいな」

まだ二十に満たない少女が作り出す、世界を根こそぎ魅了する様な絢爛な舞台。

足を動かせ。声を張り上げろ。この舞台に必要なのは気取った演技でも、壮絶な物語でもない。

ただ役者が二人と、剣が在ればいい。

その幕はまだ上がったばかり――

開幕の音（後書き）

不如帰、黄昏鳥。
どちらもホトトギスの別名ですね

剣の大きさ（前書き）

お陰さまでＰＶ数が１００万を越えてしまいました。
この場を借りて感謝を。

剣の大きさ

紅い剣が夜空には不似合いな太陽の光を受けながら最短距離を走り抜ければ、それを白い鉄剣が弾き飛ばしてそのまま牙を剥く。

十など疾うの昔に過ぎ去り、二十を越え、三十、四十を超えて、剣戟の数は今、五十に手が届いた。

その大台も通過点でしかなく、剣戟の嵐はその勢いを増していく。

剣が衝突する度に火花が翔け抜け、その度に会場のボルテージが天井知らずに上がっていった。

「――はッ！」
「――フッ！」

ユキネが、剣を振るえば力で勝るノインがそれを跳ね返し、体勢が崩れたユキネに剣を振り下ろす。

その斬撃を柔軟性に長けたユキネが受け流し、変則的に刃を返す。

反応は互角。

手数は互角。
技術は互角。

止まらない。

止まらずに加速していく。

ノインがユキネを上回ろうとすれば、その場でユキネが加速して斬撃に追い付く。

ユキネがノインを追い越そうとすれば、ノインがそれに追随して加速していく。

息を呑む、とはよく言うが、二人のそれは余りに激しく、まるで観客達の呼吸を奪っているかのようだった。

突如、均衡が崩れた。

きっかけは、ユキネの剣の変調。

崩れたのではなく、崩したと言える。今まで切り上げ、切り払い、横薙ぎのいずれかで対応し、攻撃していた手段に突きを織り交ぜた。

それを、見透かされていた事がきっかけ。

いや、見透かされていたどころか、それを狙っていたのは明らかだろう。

ユキネの剣先を自分の剣の腹で受け止め、ふわりとノインは宙に浮いた。

普通の人間なら空中とは一切の抵抗の手段を失う所だが、一部の人間、つまり空中での自由を手に入れている人間にそれは当て嵌まらない。

ノインの剣が瞬間的に発火する。

濃縮された炎は爆発的な推進力を生み、空中で力のベクトルを発生させる。

その推進力に身を任せ、綺麗に回転して放った一撃が、ユキネを打ち据えた。

ユキネの表情が苦悶に歪む。

しかし、ユキネの手に残った甘い痺れは、剣と剣がぶつかった感触に他ならない。いつの間に動かしたのか、ユキネは体との間に剣を滑り込ませていた。

「…剣の腕はユキネのほうが上だと思ったのじゃがの」

予想していた展開とは違う方向に進んだのか、レイはつまらなそうに声を出した。

レイと言葉を交わしている間にも、二人は再び切り結んでいく。

しかし、今度は十にも満たないうちに拮抗は終わる。

今度の最後は、お互いに放った渾身の一撃。

その場で爆発が起こったかのような轟音が響き渡り、余波で床に罅が入り、欠片が飛び散った。

ユキネは弾かれたかのようにバックステップで距離を取り、ノインはその場で僅かにたたらを踏んだだけに終わる。

それが、そのまま二人の差だった。

力が、技術がと言った事ではない。

ここでもやはり浮き彫りになるのは、ただ一つの事。

「――経験か」

「そうだな…」

それを客席で見ていたハルユキとレイは、ほぼ同じ答えに行き着いた。

ノインはここ数年この大会で対人戦を行い、腕試しで城に来た人間を自ら相手取っていたらしい。

命がかかってないと言えど、それは確かな経験値になる。

ユキネもこの大会を勝ち進み、毎日毎夜レイと手を合わせてきたのだろうが、圧倒的に時間が足りていない。

一人で剣を振っていたか、相手がいたかの違い。

言葉にすれば、一行で事足りるこの差は、実際には途方も無い差として立ちはだかる。

そして、この時代でもう一つ勝敗に絡むのは魔法の差。

しかしこれは、剣よりもより明らかにノインの方が上手だろう。

何しろ、魔法に関しては積み重ねたものすらないのだ。経験も熟練もノインの足元にも及ばないだろう。

「いや、実際はそうではない」

「…何？」

「おぬしには分からんだろうがの。魔法に関しては年月より、その場の運と調子、それに機転による物が大きい場合もある」

「ユキネの方が有利だってのか？」

「……いや、あのノインの魔法。思っていたよりも複雑で厄介での。よく分からん」

珍しく試合に興味を持ったのか、僅かに前のめりで、レイは闘技場を覗き込んでいる。

経験。

魔法に関して言えばそうではないとレイは言うが、この場合は余り当て嵌まらないだろう。

数を潜り抜け過ぎて麻痺している人間には分からないかもしれな

いが、これは魔法の比べ合いである前に、戦闘なのだ。

当然、恐怖も窮地も勝利の感触も敗北の味も、状況の数だけ存在する。

ならば、魔法で戦った経験も確かに必要となる

しかし、ムイリオの時然り。

若い奴等は、舞台に花を添える成長を遂げる可能性も十分にあるのも確かだ。

「とは言ったものの、やはり地力が違いすぎるかのぅ…」

何だかんだ言っても指導をした手前、教え子の勝利を願ってしまうらしい。

伝えに行ける訳でもないのに、無意識に何とか勝てる要素を見つけようと頭を捻っているのが丸分かりだった。

「お前、殆ど魔法ばかり教えてただろ？」

「…まあ、あやつは剣の基礎だけは確かだったからの。しかし、手合わせはしていたぞ？」

手合わせは、まあそうだろう。

しかし、あいつは手合わせならばやっているのだ。自分で考えながらありとあらゆる相手と。

「お前、この状況が経験だって言ったよな？」

「…ああ、お主も賛同したじゃろう」

「いや、少し意味が違う」

レイが言ったのは、経験が壁として存在していると言う事。

つまりは、経験の差があるからこの状況になったと言うのは少し語弊があるという事。

「経験があるから押されてるんじゃない。経験があるからノインが押してられるんだよ」

ここで言う経験とは、緊張感を持った鍛錬以外の何かでどれ程戦っているかどうかだ。

そして、その経験は少しでも増える度に、空想の経験と結びついて肥大していく。

今、この瞬間にも。

「俺から見ても、あいつの剣は天才的だ」

◆

弾く。

弾く弾く弾く。

怒涛のように降り注ぐ剣戟を受け流しながら弾いて行く。

しかし、その中に自らの攻撃の一手は一つも混じっていなかった。

「くっ…！」

先程と変わったのは一つ。

足を止めての殺陣から、移動を織り交ぜた立ち回りに変わったこと。

恐らく導かれたのだろう。

待ち構えていた状況は、ユキネに絶望的な不利を突きつけた。

圧倒的な機動力の差。

回り込もうと移動したとしても、魔法を移動手段に使うノインはそれ以上の速度で回り込む。

「――隙一つ」

まるで思考の隙間を縫うように、狙い済ました渾身の一撃がユキネを打ち据えた。

辛うじて剣で弾くものの、衝撃で大きく後退させられる。

確認しなくとも、壁際まで追い詰められた事を悟った。

「とりあえずチェック、と言った所かしら？」

剣を誇るように一振りすると、そのまま肩に担いで緊張感も緩く開いた距離を詰める。

お互いが剣を持った腕を伸ばして切っ先が漸く触れ合うかどうかという位置で、ノインは足を止めた。

恐らく、そこならばどんな攻撃が来ても跳ね返せる距離なのだろう。

対してユキネは剣を下げるどころか、対眼に構えたまま警戒の糸を張り詰めていく。

ノインの何気ない余裕が、ただでさえ不明瞭なノインの力の底を隠し、反対にユキネの余裕を削っていた。

「ねえ、私からも一つ質問したいんだけど、構わないかしら？」

口を開けば、緊張が漏れるとでも思ったのか、ユキネは無言を通す。

それを肯定だと理解したノインは、滑らかに口を開いた。

「貴女は凄く成長してるわ。それこそ不可思議な程に。どうしてかしら？」

壁までその本人を追い詰めておいてふざけているのかと睨みを利かせてみるが、表情は真剣そのもの。挑発の類ではないようだ。

「…お前は？　どうやってこんなに強くなったんだ？」

「質問を質問で返すのはルール違反じゃない？」

「答えたくないならいいよ」

そんな事は無いけれど、と笑って考える仕草を取りながら、あろう事かユキネから視線を外した。

しかし踏み込めない。養殖臭いその隙が、どうしても誘いにしか思えなかった。

僅かな逡巡を繰り返した末に、結局状況は何も変わらないまま、ノインが此方に顔を戻した。

「そうね、必要があったのよ。誰よりも強くなる必要が」

軽い調子で軽く笑いながら、淡々とそう言った。

意外性も無いたった一言。

でもそのたった一言に、ノインの力の源が全て映っている気がした。

「多分、私もそうだよ。強くならなきゃならない」

私も別に特別な理由があるわけじゃない。

強くならなければならない理由なんてそれこそ山のようにあるけれど、一番は弱い自分が許せないからだ。

多分、それも弱いからこそ何だろうけれど。

でも私には結局、出来る事を頑張るしか出来ない。

「いくぞ。挑むのはこれからだ」

たった一つの武器を硬く握り締める。

返ってくる鉄の感触は、やはり私を安心させてくれた。

剣(これ)はもう体の一部。

ペンよりも、フォークよりもナイフよりも長い時間を共に費やした。

呼気は短く一瞬。

余計な空気は動きを重くする。

姿勢は低く地を這うが如く。

重力を殺しきれ。

脇を絞めろ。左手で柄を引っ張れ。狙うのは相手の柄の位置。踏み込みは強く大きくそれでいて軽やかに。

腰と肩を連動させて体ごと叩きつけろ。

先程の反省点を、糧にしろ。

思考はここまで。

後は体が動いてくれる。

決死で振り抜いた剣。響いたのは剣戟の音。

難なく剣で防がれる。

ならば、速く、もっと強く。さらに巧みに。

返す刀で紅色の剣が頭上から飛来する。かわす余裕は無いく、それを剣で受け止める。

地面に埋まりそうな衝撃に、しかし先程と同じではつまらない。

刀は使っている。手も同上。ならば、足を出せ。

小さく相手から息を呑む音。

相手の懐の下に潜り込ませた軸足に、剣を受けたと同時に体を引き寄せる。

そのまま、体を攻撃手段として叩きつけた。

しかし、捕らえたのは残像か陽炎か。

金色の残滓を残して、相手は掻き消えた。

――右。

この刹那に戸惑いは許されない。先程までのように引き摺られて移動する必要も無い。ただ地に根付くようにどっしりと迎撃すればいい。

強く踏み込み、体を捻る。

一瞬遅れて、肩と腰を連動し全身を乗せて一閃した。

剣戟。

堪えたはずの軸足が1メートルほど押し切られる、が。弾き飛ばされはしない。

そして、今日何度目かの鍔迫り合い。

「――ああ、ほら、また強くなった」

弾むようなノインの声を傍らに、更に剣に力を込める。

剣と剣が触れ合った部分を軸に、小さく剣身を一回転。

ギィン、と甲高い音を立てて、ノインの剣が跳ね上がった。

彼女の表情が驚きに固まる。流石に剣が手から離れることは無かったが、それでも質の良い天然物の隙が生じた。

そして。

がら空きの胴に、剣を振りぬいた。

「くッ…！」

が、またしても剣が捉えたのは金色の残滓。またしても聞こえたのは自分の悔恨の声。

しかし今回は、後ろにそのまま飛んだのか、陽炎の向こうに歪んだノインの姿があった。

状況はあまり変わってはいない。

だがほんの少し。言われて、更に目を凝らさねば分からない程度。

それでも確かに、彼女の顔に焦りが浮かんでいた。

「…巻き技とはね」

ゆっくりと歩を進める。

今度は自分の足で、ノインとの間合いを詰めた。

ノインがいるのはまたしても舞台の中央。背負った壁は自然と遠くなる。

「――駄目ね」

そして、呆れたようにノインは溜息を付いた。

「ああ、勘違いしないで。貴女は申し分無いわ。駄目なのは私、癖なのよね。思わず慢心してしまうの」

額に皺を寄せて、本当に呆れているように見える。

それは恐らく本当だろう。しかし、多分それを自省している風には見えなかった。

そして、それが癇に障ることも無い。

むしろそれは、同情してしまいそうな寂しげな表情だった。

「――だって、死んでしまうんだもの」

ふわり、と羽を散らせて黄金色の不死鳥が再び姿を現した。

警戒が本能的に限界まで引き上がる。あれは危険。常人が掠りでもすれば、消えない炎で身を燃やし尽くされる。

「――え…？」

何の前振りも無く、警戒度の針が許容量を振り切った。

プツン、と音がしたかのように緊張の糸が張り詰めすぎて容易く切れる。

「でも、最初に言った通り、貴女には負けたくないから」

呆けた声を出しているうちに、更にそれは数を増す。

５羽。８羽。そして今１０羽を超えた。

「――”貴方はどうか死なないで”」

その会話とも祝詞ともつかない一節が、更に世界が様相を変えていく。

鳥とも、蛇ともつかない生き物が首を擡げ、馬に似た生き物が蹄を鳴らした。

「――”幻想郷”」

一瞬で、黄昏色が視界一杯に広がった。

広がった世界に自分の現実が取り残される。そんな中で感じたの

は絶望の一端。

一瞬で塗り替えられた世界に、自分が。

そして手に持っている剣が。

酷く、小さく見えた。

幻想郷

――それは、幻想郷だった。

舞台の中心にいる女を中心に、世界の色が塗り変わっていく。

目にも留まらぬ速さで疾るのは金色の炎。飛び散るのは金箔のような煌びやかな炎の欠片。

しかしそれはまるで稲穂のように。風に揺れる芒（すすき）のように。

その優雅さは、思わず手を伸ばしたくなる甘い誘惑を放ちながら、ただその身を光らせる。

しかし、それは炎。それは魔の結晶。

それに触れると言う事は、たちまち炎に撒かれて形を失ってこの黄金の野と同化する事に他ならない。

火に自ら飛び込むのは、光に眩んだ虫だけだ。

それでも、その景色に手を伸ばさずにはいられない。

それはさながら楽園（ヴァルハラ）のように。
それはまるで理想郷（アヴァロン）のように。

戦士がそれを夢見るように。
王がそれを欲するように。

この金色の野は、甘く甘く人を誘惑して、魂を骨抜きにする。
目を瞑って、身を委ねて、魂ごと焼かれる事が幸せなのではないかと。狂った思考が頭のどこかに生まれる。

全ては灰燼を帰し、残るのは炎に還った魂と、消える事を知らない命の、輪廻の炎。

そして。

野に君臨するは、孤独な王が唯一人。

◆

カラン、と力無い音が耳に届き、薄く開いた両眼には、自分の大剣（クレイモア）が横たわっているのが映っていた。

ユキネの意識には、そこだけが白く塗れているだけで、他はぼやけた金色で埋め尽くされている光景にしか映っていない。

遂にまともに食らった鎧越しに受けた一撃と、この炎。

そして、余りに浮世離れした光景に、脳が別の誰かに奪われたかのように思考が働かない。

その金色の中の一部が、脈動した。

「――ッ！！」

酩酊していた意識が覚醒する。ほぼ同時に、傍に落ちていた剣を拾い上げ、瞬時に魔力を通す。

そして、ろくに確認もしないまま、飛来してきた火の鳥を座ったまま断ち切った。

綺麗に真ん中から分かれた火の鳥は、その接触面だけを消失させ

て、残りは元の黄金の野原に飛び込んで形を無くしていく。

顔を上げると、その光景は依然として存在していた。

まるで実った稲穂の野の様な黄金色の世界。

胸ほどまであるそれは、全て彼女の炎で編まれていた。

それはあるだけで闘技場内の空気を燃やし続け、敵の動きを封じている。ユキネも常に鎧から魔力を放出させていなければ既に火達磨になっているだろう。

広がっている光景に、改めて息を呑んだ。

戦いの最中だと言う事は承知している。しかしそれでも、更に恍惚に濡れた溜息が漏れる。

――黄金郷。理想郷。楽園。

それを目指した戦士や王達も、この光景を一生を使って探し求めていたのだろうか。

もう一度溜息が出て、納得する。

これはそう、まるで毒のようだ。

玉露のような神酒のような、甘い誘惑と匂いを放つ毒。

そしてきっと、毒だと分かっていても人は喜んで呷るだろう。

抗い難い。

それ程に、この光景は魂を一色に染めていく。もしかすると、喜んで飛び込んでいく人間もいるのではないかと思うほどに。

魂の終着点に似ているここは、酷く神々しい風景だった。

「――黄昏時”炎尾”」

呆けた耳が捉えたのは、短い祝詞。

そして、それに応える様に唸る獣の声。姿を確認する前に迷わず

その方向に剣を向ける。

その剣に弾き飛ばされて、金色の野にそれが降り立った。

一匹の狐。

しかしその体躯はユキネより大きく、尾は九本。その全ては他に漏れなく金色の炎で構成されている。

ユキネの剣に尾を切り落された九尾の狐は、威嚇した表情のまま炎の塊に戻り、主の元に戻って行った。

「今度は狐か…」

「お気に召さなかったかしら？」

声に反応して弾かれたように体ごとそちらを向く。

金色の草が平伏す様に身を避けていて、そこに、この幻想郷の王が立っていた。

髪を揺らすたびに金色の粒子が飛び、足を離した所から金色の草が茂っていく。

頭上には不死鳥が旋回し、紅く光っていた剣が黄昏色に染まって

いた。

金色の世界の中に、際立つように紅い瞳がこちらを捉えた。

まるで、龍に睨まれたかのような畏怖の念が体を襲う。

こつん、と踵が壁に当たる。

知らず、後ずさりしている事に気付いた。

「――チェック」

再び、王手の声。

ノインはこちらを見据えたまま動かない。こちらの動きを見ているのか、それとも窮鼠を警戒しているのか。

確かに急ぐ必要は無い。

こちらは、四方八方が炎の野に囲まれている。このままでは干乾びるか酸欠で気を失うかだ。

一旦、呼吸を整えようと、周りに注意を配って、同時に思考も整える。

その余りの高温に、目が乾きを覚え、軽く一度瞬きをした。

「隙一つ」

それは、今のノインにはワザとらしい程の隙だった。

ユキネが目を開けた時、目の前にはまたも金色の残滓だけが燻っている。

殺気に当てられ、右を向けば、肩同士が触れるような距離に侵略を許していた。

そして、金色の閃光が疾る。

それは完全に偶然だった。必死に頭を庇おうとして、たまたま剣で防ぐ形になっただけ。

攻城槍のような一撃が、ユキネの体を問答無用で持ち上げていく。

片手で振っただけの一撃。それでも炎により加速された一振りは、ユキネを十メートル以上離れた結界に叩きつけるぐらいの力を持っていた。

「――”王鳥（ガルーダ）”」

金色の野から更に生み出されたのは、神話にしか存在しないはずの鳥の王。

それも、この野の上では兵の一つでしかなく、その体を燃やしながら吹き飛ばされたユキネを追随する。

ノインの剣に宿る異様な衝撃は殺しきれるものではなく、成す術も無くユキネは結界に叩きつけられた。

少なくない量の空気が肺から搾り出され、貴重な酸素が更に燃やされていく。

「え…？」

痛みに歯を食い縛り、懸命に前を向けば、王鳥の剥き出しになった大顎が視界一杯に広がっていた。

王朝は一切の速度を緩めないまま、その身をユキネごと結界に叩き付ける。

一瞬で全身が炎に包まれる。そして、直ぐに肌が髪が焼かれていく感触が脳髄を襲う。

しかし。

「――ぁあッ！」

炎が体を包んだ瞬間、鎧と剣を媒介にしてありったけの魔力を放射したのは、即席にしてはいい考えだった。

燃え盛る王鳥は結界に置き去りに、ユキネは地面に墜落する。

しかし、何とか生還した地上もまた炎獄。

「…ゲホッ、ゴホッ…！」

そして、あの膂力。

恐らく、剣に纏わせた炎を付加し、それをブースターのように使って剣速と剣圧を上げているのだろう。

振り下ろされれば足が地面を割るまで押し込められ、切り上げられれば体が容易く宙に浮き、切り払われれば地面と平行に吹き飛ば

される。

この幻想郷を関係があるかは知らないが、もう剣だけで戦う士俵では無くなった。

ただ、戦いに。全てを出し合う純然たる勝負に至った。

それが、これ程の差を開くとは思っていなかった。

ただ魔法を付加しただけの剣に、もうこのままでは成す術が無い。

「――チェック」

三度、王手の声。

孤独な王が、先程と同じ表情でそこに立っていた。

◆

◆

◆

「ち、ちょっと、死んじゃうわよ…！」

未だ一方的な戦いが繰り広げられ続けている闘技場を見れば、誰だってそう言うだろう。

それほど、舞台の上では悲惨な展開が続いていた。

ユキネが先程から出来ていることと言えば、剣を盾にして闘技場の端から端まで吹き飛ばされ続けているだけ。

いつか、防御が間に合わなくなったら。

目を覆うような事態にならないとも言えない。

「ねえ、フェン！　止めなくて良いの！？」

会場は熱気に撒かれて誰もが興奮の声を上げるだけ。

何かに取り付かれたように歓声を上げる観客が、フェンには人間以外の別の生き物にしか見えていた。

「…駄目」

「っ何で！　死んじゃうのよ！？」

エゼは優しくて強い子だ。

この状況でも、周りがいかに高ぶっていても、自分を保って更にフェンを心配さえしてくれる。

「でも、ユキネも、…ハルユキも我慢してるから」

自分の我侭を通せるほど私は強くないから、とフェンは続ける。

エゼは、心配半分、戸惑い半分の視線をフェンに送るが、それとフェンの視線が交わることは無い。目を離さない事が自分の使命だといわんばかりにフェンは闘技場を凝視している。

「我慢って…」

どうして、あんな所にいられようか。

もしかすると、聞こえていないだけで助けを求めて駆けずり回っている可能性もあるのだ。

鈍い音が、観客席にまで響いた。

一斉にその音の源に視線が集中する。

結界が軋む音が嫌に通って響く。それを見つけて、焦点を合わせた時、結界の上で何かが炎上していた。

何か、などと言いはぐらかしたが、実際には分かっている。この状況では、当て嵌まるのは一つしかない。

”それ”が炎に巻かれ、金切り声を上げる。しかしその声は、興奮の坩堝に飲み込まれ掻き消されて素通りされる。

「ふ、フェン…！」

振り返った先で、フェンは依然として毅然とそこに座っている。

そう、想像していた。

日の光に照らされて、より鮮明に眺められるその姿は、毅然とはとても言えなかった。

唇は固く結ばれ、杖を持った手の先が白く変色している。今にも腰を上げて、舞台に向けて杖を向けてもおかしくはない。

「大丈夫」

それでも、目だけは。ただ無感情に、いや押し殺して、只管に闘

技場を見据えている。

「ハルユキが、居るから」

ハルユキは試合に釘付けで気付いてはいないだろうが、フェンは既に見つけている。

闘技場を挟んだ対岸の客席から、十数メートル移動した列の下から3段目。レイと並んで座っている。

フェンの目ではその様子の機微まで測る事は出来ないが、少なくとも闘技場に押し入ろうとする気配は無い。

我慢を続けている。

自分が入り込む余地が無いのを弁えている。

もし状況が変わるとすれば、それはユキネが助けを求めた時か、ユキネの命が危険に晒された時。

なら、フェンが事を起こす必要は無い。いや、起こすと言う事は出来ない。

ユキネが助けを求めた時。

たとえユキネが、フェンの手を伸ばせば届きそうな距離にいたとしても。

ハルユキはフェンより早くユキネを助けてしまうだろうから。

それ程に、あの二人は強く結ばれている。

そして。

何より、二人は似ている。

ノインとハルユキよりも、ノインとユキネよりも。

あの二人は似通った所が大きい。だからこそ、分かり合うものがあるのだろう。

「似ている、…かしら？」

それを聞いたエゼの声と表情が疑問符で満ちる。

それはまあ、外見的な事ではもちろん無いのでよく知らなければ分からないだろうし、当の二人は自分にそんな所は無いと言い張るだろう。

だから多分、分かっているのは自分とレイとジェミニとシアと、あと多分、ノインもそうだと思う。

「……あの二人の、どこが似てるの？」

エゼが、痺れを切らしたように眉根に皺を寄せた。

多くは無い。しかし、個性ともいえる強い特徴が余りに似ていると思うのだ。

あくまで何となく。言葉にしても合ってるかどうかはしっくりは来ない。強いて言うなら、とフェンは念を押して

「――負けず嫌いな所と、子供みたいな所」

それだけ言って、ふぅ、といつもの様に息をついた。

◆
◆
◆

苦痛と苦悶に、景色が揺れる。

舞台は幻想で編まれた穂波の世界。

一色に染まったその世界は、遠目から見れば楽園のような光景。
実際、戦いよりもこの幻想的な風景に目を奪われている人間も少なくは無いだろう。

しかし。

見るは易し。在るは難し。

ここに立ち入った者にとっては、これは炎獄だ。まるで人間が存在していられる場所ではない

酸素は奪われ、足場も視界も全てが炎で埋まっていた。

景色が揺れる。

世界が湾曲し、明滅する。

それが闘技場中の熱によるものなのか、それとも脳に酸素が足りてないのか、それともう意識が薄いのかそれすらも分からない。

「――投了には、頃合かしらね」

「……ぁ」

その声は、揺れる頭には酷く甘美なものだった。

降参して、担架で運ばれて、柔らかいベッドで寝る。

回復力には自信がある。一日泥のように眠り、少しだけ胃の中を膨らませてから、午後からは残る二試合を観戦に行けばいい。

レイは多分試合内容のことで小言を言ってくるだろう。フェンとシアは心配してくれるはずだ。ジェミニはセクハラしてくるかもしれない。

そしてハルユキは多分『疲れたか』と聞いてくる。

なら投了などと、迷う必要すら無い。

空を見上げる。

太陽の横から覗く夜空が涼しそうだ。

そこから冷えた酸素を吸い込みたくて、深く深く呼吸をする。

生憎、火傷しそうな空気しか入っては来なかった。
それでも、少しだけ頭は澄んで、腹は決まった。

「…今、実は少し楽しいんだ」

吐きそうになる苦しさと、溶けそうになる熱さに比べればほんの一握りだが、確かにそれは、試合が始まってから付きまとっていた。
初めて剣を振って、父上に褒められた時。あの小さな宿の中庭で、初めて自分の魔法を見つけた時。
あの時の、まるで雲の上にいるかのような高揚感と、一握りの幸福感が。

「今多分、成長できてるから。…楽しいんだ。それでな…」

自分の視界が広がって、世界までが広がったような感覚。

「…楽しい事を自分で止められるほど、私は大人じゃないみたいだ」

そして、今もそれは続いている。

前を向く。

馬鹿のような口上にノインも呆れているだろう。

自嘲するように笑いながら、焦げ始めて今にも火がつきそうな髪を首の辺りから掴み取り、刃を当てる。

「何を…！」

そして、逡巡する前にそのまま腕に力を入れた。パラパラと、決して短くはない金色の髪が炎に食われてその形を無くした。

「貴女……」

頭を振って残った髪も振り落とす。余裕を忘れているノインの表情が痛快だった。

丁度良いのだ。すぐへこたれそうになる自分にはいい覚悟の形になる。

「――安心しろ。お前もしっかり泣かしてやる」

私はまだ、疲れてなんかいない――。

「……泣かす、か。でも遠慮しておくわ。何しろもう泣かされてしまったもの。
誰に、かは言わなくても分かるでしょ？」
「む……」

先程の表情から一転して柔らかく微笑むノインに、思わず強い目線を向けてしまった。

「羨ましい？」
「……私には関係ない」
「嘘つき」

トントンと剣の腹で自分の肩を叩きながら、また楽しそうに笑う。
楽しげに楽しげに。何か見落としていたものを見つけたかのように。

「駄目じゃない。女の子が髪を粗末に扱ったら」
「…いや、燃やしたのはお前だろう」
「まあでも、貴女は短い髪も似合うかもね。ああでも友達に整えてもらわないと駄目よ」
「…分かっている」

楽しげな顔に、少しだけ真剣さが戻った。

しかし、今すぐ剣を交えようという雰囲気ではない。少し長話になるらしい。

こちらとしては回復したいので願っても無い事だが、ノインもそれが分かっていない訳はない。何か策か、メリットがあるのだろう。

「ねぇ、貴女達は旅を続けるの？」

「…そう、だな。少なくとも私はそうだ」

ふーん、と興味なさげな声を出して、また笑った。

主の意向に従っているのか、どの命も稲穂も微動だにせず心なしかその輝きも控えめだ。

いや、むしろ主の心情に従っている様に見えた。

その表情がどこか儚げで、何となくその根元の方に察しがつく。

「お前、友達いないだろう？」

「……いきなり酷い事聞くわね貴女。まあでも確かに、友達より部下と協力者の方が優先だったから。居ると言ったら嘘になるわね」

「そうか。私もあまりいないんだ」

その言葉で、ますますノインの表情の困惑の色が濃くなった。

困惑しているノインの表情は、中々珍しいものを見ている気分になって少し得した気分になる。

意外と子供っぽい顔に笑いそうになりながら、話を切り出した。

「――賭けをしないか？」

「賭け？」

「ハルとしているような事をだ。この試合、勝った方が一つだけ言うことを聞かせる」

「…別にいいけれど、条件は？」

問いかけながら、ノインは訝しげに眉を寄せた。

別に何の事はない。ただ目標があれば頑張る気力も湧いてくるというものだ。

「私が勝ったら、髪の毛整えろ。これはお前のせいだ」

ほんの数ミリの範囲で瞼が驚きに開かれた。

まるでフェンのような反応だが、フェンほど無表情になれはしないようで、逆に無表情にしようとしている事が分かってしまう。

「…私が勝ったら？」
「任せる」

そして、分かってしまった事も、気付いたようで、苦笑しながら肩を竦めた。

「…ふふ、青臭いってよく言われない？」
「……言われた事無い」
「嘘つき」

しゃん、とよく通る音が鼓膜を揺らした。

彼女の鎧と剣、それに戦意が醸し出したその音は、周りを炎に囲まれているこの状況でも、高貴な響きを保っている。

「じゃあ、もう少しだけ。楽しみましょう」

ゆっくりと剣が持ち上がる。

談話の間、仄かに光るだけに甘んじていた剣。

在れば太陽、振れば閃光と化すその両刃の剣が、圧倒的な存在感を振り撒きながら再び金色の命を得る。

散々痛め付けられた記憶はまだ新しい。

ユキネの手には、相変わらず、武器は右手に剣が一本だけ。

立ち向かうのも変わらず、幻想を統べる王様。いくら啖呵をきった所で状況は変わっていない。

しかし、見える世界はほんの少しだけ広がっている。

剣の柄の下で、心臓のようにそれが脈動する。

――”それは何時からだっただろうか”

声がする。

待ち侘びたと。待ち焦がれていたと。

掌に刻まれた魔法の文字が、加速しながら鼓動を繰り返していく。

――”人は当たり前の様に地面に這い蹲り、目の前の空にさえ触れられない”

既に世界は遅い。

体は動きもしないのに、口だけが突き上げられる様に、ただ頭に浮かんでくる言葉を並べていく。

――”その運命は、呪いに似ている”

怨嗟の念さえも感じられるその言葉。

――”気付けば、地に縛られ、天に囲われていた”

全てが遅い世界の中でその祝詞だけが、変わらず綴られる。

誰も聞き取れないだろう。私だけの、孤独な呪文。

「――”ならば、抵抗を”」

「――”ならば、進化を”」

「――”ならば、革命を”」

打ち破れ、と最後に耳打ちされた気がした。

――”響天動地”

世界がまた、姿を変える。

元に戻ったのか、いや、少しだけ確かに違っている。

「貴女…？」

いや、それも違う。周りは変わらず金色の野。

ならば変わった可能性があるのはあと一つだけ。どこがとは言い難いが、それはノインの表情も物語っている。

一歩踏み出すと、また世界が変わる。

しかし、その移り変わりを楽しむのは後。今は腰を据えて、剣を構える。

薄く発光するその大剣は、相変わらず無骨で硬い慣れた鉄の感触。

先程までは小枝のように心細なかったその剣が、今はこの金色の野にさえ見劣りしなくなったように感じる。

「…楽しそうね」

笑みを交わしたのも一瞬。

閃光のような速さで金炎が走る。

何の混じり気も無い正面突破。

気持ちが良い程のその実直さに、こちらも迎え撃つために力の限り地を蹴り飛ばす。

そして。

「……あれ？」

目の前からノインが消えた。

黄金の野も消え、闘技場も消え、地面さえも消えていた。

周りにあるのは真っ暗な夜気だけ。

凄い速さで進んでいるせいか、冷たい夜の空気が頬となって風に当たる。

ここぞとばかりに夜風を思い切り肺に押し込んでいく。瞬く間に火照った体が冷えていき、先程までの体がどれ程危険だったのか実感する。

しかし、今は本当は夜だった事を思い出した事の方が心情的には印象深かった。

「……ああ」

視線の先で通せん坊するかのように鎮座するそれを見て、間の抜けた声が漏れた。

そして、その存在でここがどこなのか確信に至る。

夜空に太陽はそぐわない物のはずだが、当たり前のように居座っていて、その巨大さは、こうして近くで見ると壁のようにしか見えない。

視界の端には、覗く町並みからちらほらと光が踊っていて、その更に向こうの地平線にはぽっかりと穴が開いたように闇が広がっている。

今夜は雲が無い。この太陽の光が逆行になっていなければさぞ綺麗な星が見えた事だろう。

しかし今は、金色の眩さに目が疲れていて、冷たい闇に浸かっているほうが心地良い。

「――いい天気だ」

地面から多分数十メートルの位置。思わず訪れてしまった夜の上空。

地面を背中に置き去りに、天に迫りながらそうぼやいた。

一瞬、体が無重力に陥り、直ぐに重力を思い出して落下を始める。

本能的に具足をはめた足を伸ばすと、夜の闇の中に何かを捉えて緩やかに落下が止まった。

薄く水を張ったガラスの板に下りたような感覚。そのイメージが再現されたかのように、空気とも魔力ともつかない何かが波紋となって広がった。

不思議とその事に疑問は湧かない。確たるものが無い透明な足場にそのまま体重を預けた。

眼下には金色の野が未だに栄えている。

しかし、戻る必要がある。

観客はあれ程の興奮の声を戸惑いの表情に変えて、ざわめきながらユキネの姿を探している。

しかし、いくつかの視線は変わらず感じている。

心配そうな視線や、信頼が感じられるものや、鷹揚なもの、驚きの混じったものなど、その他諸々。

問題はそれらを押し退けるように叩きつけられる、触れれば切れる様な鋭く高揚した清々しいほどの敵意の目線。

――来い。

ここからでも確かにそう言ったのが分かる。

身の毛が、恐怖やら興奮やらで総毛立つ。

視線はそのままに、意識を切り替えろ。

体を前のめりに、足場があった筈の位置には既に空気しか存在せず、そのまま頭から落下を始める。

そして、今度は加速する為に、”地上に向かって”足場を蹴りつけた。

そこから地上までは、上がってきた時の半分も掛かっていなかった。

そのくせに、地面に下りた時には柔らかく着地する。

むせ返るような激しい炎獄の中、顔を上げる。

金色の野の中心で。

再び女が笑っていた。

瞬間、金色が疾る。合わせる様に剣を振った。

両腕に衝撃。地面へ埋まりそうになるその勢いを押し返して拮抗する。最高の一撃であろう剣を相手に、鍔競り合う。

口元は自然に上がり、交差する剣を挟んだ彼女も楽しげに笑っていた。

◆
◆
◆

どれ程に時間が経ったのか、どれ程の衝突を繰り返したのか。

周りが静まり返っているのは、誰も声を発していないのか、それとも所謂無我の境地まで達してしまったのか。

聞こえるのは、自分が肩で息をする音と、同じように苦しそうに相手も喘いでいる音。

膝が笑う。腕が震えて、手が剣を取り落としそうになる。

笑って、膝に拳をいれろ。
笑って、腕を引き絞れ。
笑って、握り締めろ。

逃さぬように、離さぬ様に。

笑って、限界を超えていけ。

◆

笑う。

自分の全力が出せている事が信じられなくて、片や渇望していた舞台で踊れる事が嬉しくて。

今にも暴れだしそうな歓喜の声を噛み殺して、その代わりにその激情を剣に乗せて打ち払う。

所構わず剣が交差していく。

薄く白銀に光る無骨な大剣と、黄金で強く虚勢を張る紅金の両手剣。

先程とはまるで違う。

水を得た魚のように。鳥が初めて空を知ったかのように。二次元の生き物が三次元に気付いたように。

舞台の中心で。次は壁際で。

また次の瞬間には浮かぶ太陽のすぐ傍で。

狂おしいほど拮抗した邂逅が続いている。

片方が見上げる程巨大な白い大剣を振りあがれば、片方は大地ごとひっくり返したような炎の大海でそれを押し潰す。

拮抗する。

暑さから、緊張からかそれとも打ち震えるようなこの愉悦からか。

脳が沸騰したかのように全身が火照り、思考も自分も世界を置いて加速する。

いつ、決着が付くかも分からない。

それでも。いや、それでこそ、沸き立つ興奮を忘れられない。

もう一度、もう一度と。

極限まで研ぎ澄まされた感覚が、走馬灯のように流れていく風景の一つ一つを捉えていき、それを脳が完璧に簡略化したやり方で処理していく。

記憶の断片に残して、中身は排除。

今考えるべきは、あの美しくも強く、そしてやはり何より可憐で美しい少女。

それを、叩きのめす事にのみ自分を特化させる。

呼吸を奪われて、戸惑いに変えられた観客達は、今度は溜息を漏らしている。

恐らく観客席から見れば、金色の世界の中で白い閃光が火花を散らして瞬きあっている風にしか見えていないだろう。

しかしそれはきっと、溜息が漏れるほど現実離れした景色なのだろう。

◆
◆
◆

最近はよく夢に見る。

気が付けば、気ままに揺れる馬車の上で笑っている。

きつい礼装など身に着けておらず、動きやすい街娘の格好をしている自分がいるのだ。

退屈に欠伸をかみ殺したり、誰かが気紛れに提案したゲームに興じたり、ケンカを始めた誰かをなだめてみたり、風が心地良くてまどろんでしまったり。

そこでは私は驚くほど安眠できる。

悔しいが、それはきっといつも隣に座っている男のせいだと思う。

ゆっくりと、傍らで、ぽつぽつと言葉を交換しながら、私は無抵抗を晒す。

警戒をすべて放り出して、頬で夕刻の太陽を感じながら自分以外の何かに身を委ねる。

その不確かな安らぎも、私にはとても居心地が良いものだった。

そこで、眠ってしまうと、大抵が現実に引き戻される。

確か、夢は願望を表していると城に自分を売り込みに来た占い屋が、そう言っていた。

どうやら望んでいるらしい。

何処か遠くに行きたいと。

まあ、泣いて頼まれても行く事は有り得ないけれど。

あの男が自分の強さで私の弱さを補ってくれたように、私はここで強さを誇らなければならない。

この国はまだ私を必要としてくれているから。

もちろんこの国は国民ごと好きだが、私がこの国に居ること自体にそれらは関係していない。

これは、けじめだ。

うちの馬鹿親父が犯した失敗を、取り戻さなければならない。

面倒な上に、正直自分には関係ないけれど。

ここが私の故郷で、あれでも自分の家族だったんだから。

そこで、あの発言だ。

友達が居ないだろう等と。まあ、全く持ってそれはその通りなのだが。

家族は居る。

城の者は皆そうだし、多義的に見れば国の人間皆がそうだとも言える。居るからこそ自分はここで王をやるのだ。

しかし。

なれば、欲してみよう。

幸い、手に入れ方も教えてくれた。力尽く、といういかにも私のために用意されたかのような方法を。

ならば、手に入れよう。

なにせ今まで欲して手に入っていないのは一人だけだ。

それもいずれは奪い取ろう。周りのおまけもまとめて全部。

――傲慢だと？

何を言っている、私は王様だぞ。

少しぐらい強欲で何が悪い――。

立ち止まる。奇しくもそこは舞台の中央。

続いて金色の野が消える。

いや、消えたのではない。還ったのだ。王の御許に。

天を地を燃やし尽くした黄金の世界が、またしても形を変えていく。

「――”炎は、命に帰結する”」

ぼんやりと炎で薄化粧を施された、それが次第に形を成していく。

「――”逢魔ヶ時・黄泉比良坂”」

そして、理が裏返る。

◆
◆
◆

足元が軽く、ぐんぐんと音をたてながら景色が後ろへと吹き飛んでいく。

体が軽く、そのまま自分も上空に飛んで行きそうになるを必死で堪えて進行方向を引き絞る。

荒削りな魔法を抑え込み、場合において全力で開放する。、

それでもまだ無駄が目立つ、しかし不慣れだからと文句を垂れる暇は無い。

この段階で、ここまで自分を引き出して、やっと肩を並ばせたのだ。

油断をすれば背中をとられ、慢心が出れば地面に叩き落される。

剣戟。剣戟。また剣戟。

この身を削り合うような切り結びはもう何度目になるのだろうか。

百を越え、二百を越え、それでも時間にしたら、おそらく3分も経ってはいない。

恐ろしいほどの濃縮された時間の中。

それでも、剣を離す事はしない。

今度は爛々と輝く空の太陽の下。彼女の金色と私の白銀が交錯する。

さあ、どうだ、孤独な王様よ。

私はここまで来た。

肩を並べて、剣を競い合える。

金色の野で膝を抱えている暇はもう無いぞ。

私はもう、そこを畏れる事はない。金色の穂波を踏み越えて、お前の所まで歩み寄れる。

戦ってやる。勝ってやる。必要があれば連れ去ってやる。

でも今はまず。

――今度こそ、お前を泣かしてやる。

――身勝手だと？

何を言っている。私は人間だぞ。

少しぐらい強欲で何が悪い――。

不意に、彼女が足を止める。

黄金の野が消え、残ったのはより輝きを増した炎が幾つか。

話はしない。生きてはいない。しかし、それは獣などでは有り得ない。

数えて十人ほどの小人数。

しかしそれは、語られてきた生粋の戦士達。

まるで蘇って来たように、金色に薄化粧を施されてそこに存在していた。

一騎当千。古今無双。

名だたる英雄達が、魔力の塊となってそこに存在していた。

「……？」

しかし、襲ってくる気配が無い。

あれに襲われれば、たちまち塵芥に帰する自信さえある。

しかし、王は笑って佇んだまま。その周りの戦士たちも、王の気性に笑っているように見えた。

ああ、そうか、と納得する。

これは、戦い等では無くなっている。もう、相手の全力を叩き潰さねば気が済まない。

そう。

ただのケンカだ。

ならば、全力には全力で。

「――”来い”」

何処からか、手にした剣と良く似た剣が飛来する。

「――”救世主（メサイア）”」

此処に――。

と、短く、主に傅く騎士の声がした。

◆◆◆

炎の刃が身に逼迫する。

しかし、その剣は白銀の大剣に弾かれ形を失い、直ぐにその形を思い出して再び刃を返していく。

どちらも、生身の人間の所業ではない。

片や精霊。

片や英霊。

どちらも別の誰かとの戦いだったならば必倒の切り札だった。

しかし、この場において、この二人に置いてその発現は何の意味も持たない。

金色の英霊が少女に矛を向ければ、白銀の女騎士がそれを悉く打ち落とす。

そして当然、その加護の下の二人もまた剣は止められない。

上で横で周りでそこら中で人外が戦いを繰り広げる中、変わらず全力を交換し合っていた。

しかし、舞台はもう終幕。

決着は避けられない。

◆

相手が膝を付いたのを確認して、糸が切れたかのように足から力が抜けて自分も地面に跪いた。

◆

自分につられるように膝を付いた相手を見て、体を無理矢理引き起こした。

◆

ふらふらと起き上がった相手を見て、自分の体に鞭をいれて奮い立たせた。

◆

再び、戦場は舞台の中心へ。

◆

間合いは十五メートルほど。今の二人ならば一瞬で詰められる距離。

しかし、二人は動かない。

お互いの騎士も、己らの決着より主が限界だと悟り、動きを止める。

相手の考えている事が手に取るように分かった。互いにもう舞台中を駆けずり回る気力は無い。

勝つ方法は二つ。

相手の攻撃を待って、後の先を決めるか。

若しくは――。

互いの思考が同じ速度で、同じ結論へと結びつく。

渾身で。一撃で。防御など不可能な全力で。

打ち破れ、と。

英霊が、精霊が、同時に空に溶け主の元に還って行く。

正しくは未だにきつく握られた剣の傍に。握った腕に絡みつくように充満する。

それは、上空に浮く太陽のように、その身を輝かせる。

片や金色に。

片や白銀に。

そして、金色の王は剣を翳す。

――”炎は命に帰結する”

それは詠唱。

自身を、剣を強化する為に言葉を紡ぐ。

――”その身を燃やし、その魂を貢ぎ込め”

燃える、燃える、ただ只管にそのすべてが尽きるまで。

――”果て無き輪廻の果て”

自分の限界を越えながら、その事に驚く事も無く少女は剣を振る。

――”其は主を身を守る盾となれ、其は主の敵を穿つ矛であれ”

振られた軌跡が、赤く発熱し、その後に金色の光が追随する。

――”黄金の魂（エインヘリャル）をこの手の内に。集うは王の膝元に”

対岸では、朝を告げる星が輝いている。

「――”宵の明星”」

そして、白銀の騎士は剣を振る。

――”ならば応えよう”

それは詠唱。

自身を、剣を強化する為に言葉を紡ぐ。

――”天も地も、光も闇も、世界も時も、神も、愛も、夢でさえも、縛る事は許さない”

白い騎士の手から剣が離れ、背中に廻っていた剣もまた、それに

続く。

――〝呼べ。願え。揺り起こせ〟

すべては、その少女の手の内に。

幾重にも折り重なった剣が、瞬きをする間に一つに還る。

――〝其方に部下は居ない。王は居ない。在るのはただ、剣が一振り〟

集約したのは、白い魔法。

塗り潰して、塗り替える。ただそれだけの、されど一つの道の行き着く果て。

――〝忘れるな。冷たい鉄の感触を。さすれば力を。理を。そしてこの世界すらも〟

対岸では、夜を告げる星が瞬いている。

「――〝明けの明星〟」

◆

互いに全力なのは、お互いが分かっていた。

というより、手元と頭上と三メートル先から尋常じゃない光が視界を覆っていて、それぐらいしか分からなかったとも言えるだろう。

そんな中。

「――ねえ、貴女って――――――――？」

ノインの気の抜けた質問が、風に吹き消されながらも、確かにユキネの鼓膜を揺らした。

「……教えない」

「そう。なら、勝ってからもう一回聞くわ」

ユキネは不機嫌そうに眉根を寄せ、ノインは呆れたように一瞬だけ笑った。

そして。

ほぼ同時に地を蹴り、一瞬後には舞台の中心。

――激突は一瞬だった。

一層甲高い剣戟の音を響かせて、それだけだった。

打ち消しあったかのように、光は消え、衝撃と言えば両者の髪をほんの少し風が通り抜けただけ。

しかし、それは紛れも無く全力で、あっけなく敗者と勝者の線引きが終わる。剣は合わせたまま、片方が力尽きて地面に沈んだ。

それを、もう片方が抱き止めて、そのまま一緒に地べたにへたり込む。

周りは静かで、頭上の太陽だけが変わらず光を降らせていた。観客たちも決着を悟ったのか、静けさを破って行動を示した。

誰が最初だったのか、小さく拍手が聞こえて、それが伝染して広がっていく。

歓声も紛れ始め、最終的に大きな唸りとなって舞台に降り注いだ。

その歓声の中、小さく溜息を付いたその勝者は、太陽に向かって小さく手を挙げて、そのまま控えめに拳を作る。

その小さな握り拳は、きっと何かを掴んだのだろう。

決着

――それにしても、物凄いものと剣を合わせていましたね。

相変わらず気品を失わせない仕草で紅茶を口に運びながら、メサイアは呆れたように笑った。

物凄いもの、とはまず間違い無くノインの事だろう。

しかし、それがメサイアの口からも出てくる事は少し意外だった。

――まさか英霊と刃を交え得る機会を賜るとは。あの小さな王にも感謝せねばなりません。

英霊。

それはメサイアとはまた違うのか？

――ええ。私も私で中々特異ですが、それでも括りは精霊獣です。

精霊獣。

どうにも信じ難いが、本当に私の中には魔術の最高到達点が宿っ

てしまっているらしい。

だからこそ特異だと言う事だろうが、少しずるをしている気がしないでもない。

――そこはお気になさらずに。所詮は私も主の力の一部です。自分の剣を振るうのに何の迷いが要りましょう。

感謝してるよ、メサイア。

お陰であの王女とも互角に戦う事ができた。

本当に、強かったんだ。

――鬼才。稀有。そんな言葉では片付けられない存在でしょうからね。人間からあんなものが生まれるなど、例えるなら小鳥が古龍を産んだようなものです。

人ならざる精霊にここまで言わせるノインが異質なのは分かった。

そして同時に、それ程の力を持ちながら、狂気にも力にも囚われる事無く生きてきた彼女の人生を思った。

――悪い癖ですよ主。いえ、そこが主の良い所でもあるのですが。あまり他人の事情に首を突っ込むものではありません。

そうだな。

そろそろ嫌になるほど自覚してきたよ。

まあでも、友達になるって言ってしまったから。

しかし、別に同情する訳でも、何か行動を起こす訳でもない。助けられるなどと、これ程あの王女に似合わない言葉は他に無い。

――おや、もう行ってしまわれるのですか？

無言で席を立つと、メサイアが少し物足りなさそうな声で紅茶のカップを置いた。

すまない、と笑って、ついでにもう一度礼を言う。

――いえ、まだ主と共に駆けた戦場の余韻が残っています。私にはこれで十分ですよ。

いつの間にか椅子も机も紅茶の残り香すらも消え失せて、メサイアがゆっくりと跪いた。

――ああ、最後に。うかうかしてるとあの御仁を寝取られてしまいますよ。

「…う、うるさい！　お前には関係ないだろう！」

顔を上げたメサイアの口元はまた楽しげに綻んでいた。

――それでは、また。

掌を返したかのようにまた恭しく頭を垂れた。

幾度と無くそういうのは止めてくれと頼んではみたが、これだけは従ってくれない。これも騎士として譲れない矜持なのかも知れない。

ああ、また。と、若干不満を残しながらも、再開の約束を交わして目を瞑った。

◆
◆
◆

チョキン、チョキン、と迷いの無い音がする度に、金色の髪が一房地面に落ちていく。

「うーん、やっぱりこれが限界かしら」

出来るだけ長く切り揃えても、肩甲骨にかかる程度。

それを、目を細めて見比べながら、ノインは改めて呆れたように溜息を付いた。

「大体あんな厳つい剣で一気にやるからこうなるのよ。私が炎を使うのは分かってるんだから、あらかじめ纏めとけば良かったでしょう？」

「全くじゃの。そもそも焼かれるような温い動きをしておるからそうなるのじゃが」

「……もうそれは死ぬほど聞いたよ」

三つ隣のベッドを覗けば、フェンが小さな体を更に小さく丸めて、僅かに寝息をたてている。

気絶したユキネの火傷や、両者の細かい傷を治療していてくれたらしく、ユキネが起きた時には待ち疲れたのか既に隣で寝ていたのだ。

「最後の方は悪くなかったのに、最後の最後でへこたれおって…」

「それも聞いた…」
「うるさい。負け犬は黙って主の言う事を聞け」
「……人でなしめ」

レイとユキネが言い争っている間に、ノインはユキネの髪に軽く櫛をいれて髪を落とした後、そのままベッドにへたり込んだ。

「まだふらふらするわ…」
「だから髪なんていいって言ったのに…」
「…あなたはよく平気ね」
「……いや、もう眩暈でほとんど前見えない」
「寝とれ、アホめ」

ぽーん、と軽快にユキネが寝ているノインを越えてベッドに不時着した。

「容赦ないわね…」
「ふん、どうせ敗者は明日から暇じゃろうて」
「……もう一回やれば勝てる」
「――へぇ？　聞き捨てならないわね」

ベッドの上で視線が交差し部屋に魔力が満ちる――、傾向も無いうちに二人は呻き声と共にベッドに沈んだ。

一人レイが鼻で笑っていると、ガチャっと扉が開いた。

「何やってんだお前らは…。ほら起きろ、ご希望の品だ」
「……お主、その頭の洒落た生き物はどうした」
「…気にするな。通りがかったドラゴンがじゃれ付いているだけだ」
「そいつ、城では誰にも噛み付かないんだけどなぁ…」
「あらギィ。ガラフドも。いらっしゃい」

頭をガジガジと齧っていた龍がその声を聞いて弾かれたように顔を上げた。

そのまま、どうやったのかと言うほど椅子やら机やらを上手に避けながら、主に擦り寄って頬を寄せ、愛しげに声を出す。

「ほら、飲みもんだ。零すなよ」
「ああ、ありがとう…」
「助かるわ」

それを憎々しげに見ながら、ハルユキはハルユキユでキネのベッドに近寄ってコップを手渡した。

「ミスラはちゃんと城に行ってくれた?」
「ああ。しぶしぶだけどな」
「まあ、明日からは私も政務に戻るから、今日までは頑張ってもらわないとね」

ちびちびとコップを口に運んで飲んでいたユキネが、困惑したような顔を上げた。

「明日…？　まだ試合があるだろう？」

ああ、と思い出したかのようにノインが声を出して、コップを置き、ゆっくりとベッドに背中を預ける。

「私はここで、準々決勝をもって棄権するわ。だからまあ、事実上今年は準決勝が無くなったわけね」

え、とユキネの顔が固まった。

もしコップを持っていれば、多分落としていただろう程にはその顔には動揺が見えた。

「ど、どうして…？」

「ちょっと魔力を使いすぎてね。それどころか最後の辺りの魔法は魔力を借りてたから。その反動で当分は魔力が回復しないの」

「…そう、なのか」

どうしようもない事を悟ったのか、ユキネも食い下がる事はせず視線を手元に戻した。

「馬鹿ね。何で貴女が落ち込むのよ」
「…べ、別に落ち込んでるわけじゃない」
「いいわよ別にそれは。私がこの大会に出た理由なんて…。…えーと、ハル。ちょっとこっち来て」
「ん？　ここにいるだろ？」
「ほら、これ見てこれ」

ちょいちょいとハルユキからは影になっている所を指して、ノインが手招きする。

不思議に思ったハルユキが上からそれを覗こうとして、その顔をノインに挟み込むように両手で掴まれた。

「好きよ。ハル」

あ、とユキネが悟って声を出した時には既に遅く、ノインは本当に軽く、一瞬触れ合う程度に唇を合わせた。

「お、お前は…また…！」
「いいじゃない。私もご褒美あげたでしょ」

ひらひらと、ハルユキを追い返すノインの顔は顔色一つ変わってはいなかったが、ハルユキは面白いほどにうろたえていた。

「まあ、これで私はまたハルを逃した訳だけど…」

口元を押さえてなんやかんやと説教するハルユキを傍目に、ノインはゆっくりとユキネの方を向く。

固まるユキネを見つけて小さく笑うと、そっと耳を寄せた。

「男の子だからね。少なくとも今夜は私の事で頭が一杯よ」

ビクッとユキネが肩を揺らして、ハルユキを見て、続いてノインを見て、もう一度ハルユキを見た。

その顔は少しだけ紅く染まっていて、緊張した時のように喉を鳴らす。

「あら？」

くい、と控えめにユキネがハルユキの服の裾を引いた。

「ん…？」

顔を向けたハルユキの顔がまた挟み込まれる。

「ゆ、ユキネ…？」

もう一度喉を鳴らしたユキネの顔は、ノインとは対照的に耳までまっ赤に染まり、目は泣きそうなほど潤んでいる。

それから数秒の時間が流れ、すっとおもむろに顔が寄せられて――。

スッと同じ分だけハルユキの顔が引かれた。

「…な、何で避けるんだ！」

「……いや、そりゃ避けるだろ」

「の、ノインは良くて私じゃ駄目、なのか…？」

「どっちも良くないわ！　っていうかなあ、俺を使ってまで張り合うな！　そんな事ばっかやってるとなぁ…！」

ガジ、と普段では聞かないような鈍い音が聞こえた。

その方向に目をやれば、ハルユキの頭に再び齧りついているのも普段見れるような生き物ではない。

自分も遊んでもらえると思ったのか、尻尾をぶんぶんと振りながら、嬉しそうにギィはハルユキの頭を齧っていた。

「…こうなるだろ」
「お、儂も儂も」

続いて、ドサクサに紛れるようにレイも長い犬歯をハルユキの首に躊躇いも無く突き刺した。

独特の酩酊感と共に、脳に入っていく血液が毟り取られる。

「……おい、何やってんだ？」
「んあ？　お主が儂の分の飲み物と菓子を忘れたからじゃろうが」
「……それはな、このギィが食べちまったんだよ。俺のせいじゃない」

ギィ！？　とその名前の通りギィは驚いた声を上げると、そのままブンブンと首を横に振る。

「…口元に残りが付いてるぞ」
「っは。馬鹿め。ちゃんと拭いたわ」
「馬鹿は貴様じゃ、鳥頭が！」
「大体なんでお前の分まで俺が奢らにゃならんのだ！　お前は何もして無いだろうが！」
「……」

「無視！？」
「羨ましいのか可哀想なのかよく分からん奴だな…」

ガジガジ、チューチューと妙な音が続く中、不意にハルユキの額に青筋が浮かび上がった。

「……よぉし分かった。そんなに遊んで欲しいなら、この志貴野春雪、全身全霊で遊んでやろう！」

病室ではお静かに、と半分諦めたような淡白な声は誰の耳にも届いていなかった。

◆

「ああ、もう次の試合始まってるな。って事で行くわ」

ガララドがミスラの手伝いに消え、ジェミニとシアも寝惚け眼のフェンを連れて一足先に帰ったので、続いてハルユキもつられるように席を立った。

「じゃあお前ら寝とけよ。レイ、寝かせとけよ」
「さっさと行け。過保護馬鹿」
「そうね、決勝の相手になるんだから見ておいて損は無いでしょ」
「ま、別に誰でも一緒だけどな」
「感じ悪いな、それ…」

疲れたように背中を丸めて、ハルユキは扉へ向かう。

扉に手をかける前に、もう一度ちゃんと寝ておくように念を押すと、手を伸ばして、しかし、その手が扉に触れる事は無かった。

「――退いて下さい！！」

荒々しく扉を跳ね飛ばして、医務室に飛び込んできたのは担架と兵が二人。

ここは医務室だ。それ自体は別に珍しいことではない。

だから、一人の死者も出した事がないほど優秀な衛生兵の、極限まで緊迫した表情と。廊下の奥から続く、少なくない量の血の道だけが、日常を逸脱して異彩を放っていた。

「おいおい…」

医務室の真ん中に設置してある、手術台のような場所に流れるような作業で移されたその体は子供のように小さい。

運んできた片方の兵士が急いで治療を始め、もう一人はその人間に何かを言われて部屋を飛び出した。

「何だ…？」

疲れのせいか早くも寝ようとしていたユキネが寝惚け眼を擦りながら、顔を出す。

「え…？」

その表情が驚愕に固まった。

それもその筈、何しろ目の前の台の上で血溜まりに浸っているのは、知っている顔。

こんな大会に出るには余りに小さすぎる体にも、見覚えがありすぎる。

「――アキラッ！」

ボサボサの金髪にこびり付いた血が乾き切る前に、止め処なく溢れる血がそれを潤して血の堰を壊していく。

千切れかかった足に力は無く、半開きの目は虚ろに中空を見つめている。

そして一番残虐に印象にこびり付いたのは、右腕の肘の先に血溜まりしか存在しない事。

右手が、噛み千切られたかのように無くなっていた。

それでも、ユキネの声に反応してアキラは目をそちらに向ける。

「…ぅ……っあ」
「喋らないで！」

衛生兵が叫ぶと同時に、アキラの口からコプッと音を立てて血が吹き出た。

スッと、何かが抜け落ちたかのように目から力が抜ける。

「アキラッ！」

アキラの血を見てを見て小さく舌打ちした衛生兵が、更に声を荒げる。

先程部屋を出て行った兵士が更に二人連れて来た衛生兵達も加わり、総がかりで回復の風魔法を当て続けるが、塞いだ端からまた血が吹き出ている。

「回復魔法が効かないのか？」

「傷口が多すぎて手が足りないんです！」

「……おい、そこの。その辺にまだフェンという少女がいるから急いで連れてきてくれ。治療が出来る」

出来る事が無くなった兵士にそう言うと、少し迷った素振りを見せてから、頷いて部屋を出て行った。

それを見届けると、ハルユキもアキラに近寄った。

四人の治療員達が取り掛かっていない箇所にナノマシンを潜り込ませる。神経に抗えないナノマシンで何処まで出来るかは分からないが、止血ぐらいならどうにかなるかもしれない。

「ちッ…！」

やはり、体に入って数秒でナノマシンが溶け出した。しかしほんの少し傷口は塞がっている。止血ぐらいなら出来ない事もないよう

だ。

「…く…」

ナノマシンを流し込んで今度は一瞬で止血を済ませる。物凄い負荷が脳に襲い掛かったが、軽い眩暈以外に異変は無い。

目覚しいほどの成果は無いが、やらないよりはマシだろう。

頭痛を堪えながら、次の傷口に取り掛かろうとした所で、反射的に入り口に目が向かった。

ゴンゴンと、緊迫した空気の中には余りに暢気なノックの音が響いた。

何か特別な事も無かった筈なのに、部屋の空気が下がったような感覚に襲われる。

「お取り込み中で済まねェが……」

その先に目を向ければ、開いた医務室の扉をに寄りかかる男が一人。

口に三日月形の笑みを携え、右手には”右腕”を持っていた。

「――残りモンだ」

もうその食い散らかされたようにぼろぼろの右手はもう何も掴む事はできないのは一目で明らかだった。

だから、衛生兵たちは息を呑みながらも、治療に専念することを選択する。

もう助からない右腕よりも、千切れかかっている他の四肢を優先するのは当然の事とも言えた。

故に。

その男に向いているのは、静かなハルユキとノインの視線と、思考が真っ白に染まっているユキネの目の三組だけ。

「――ァあ？」

衛生兵が無視したのが気に入らなかったのか、それともいくつかの視線のどれかが気に触ったのか、男の口から不機嫌な声が漏れ出た。

途端、医務室中に殺気が満ちる。

嫌な匂いがハルユキの鼻を擽った。

大分嗅ぎ慣れた腐臭。いや、人の死臭と言った方が正しいだろうか。

戦場か、殺人現場ぐらいしかありようがない臭いが、部屋に充満していっている。

その発生源は、確認するまでもなく、目の前の一人の闖入者。

三日月が、更に深みを増す。

そして、徐(おもむろ)に、その大顎が、思い切り開かれた。

上顎と下顎の間に汚らしい糸が引く。

その先の臓腑に繋がる真っ暗な入り口に、何かが蠢いているように見えた。

そして大顎の目前に、今にも噛み砕かれそうなそこに。

アキラの、右腕があった。

「――お前ぇえええ！！！」

速い。

ハルユキの目にはそれでも止まって見える程ではあったが、それでも大口を開けている男が、その勢いに乗った拳を避け切れないほどには。

ユキネの拳がその男を跳ね飛ばし、地面に倒れこんだ男の胸倉を掴み上げる。

ユキネが怒る事は理解できる。しかし、恐らくそれは見当違いだ。

恐らく、あんな状態のアキラへの侮辱が許せなかったのだろう。

だが、恐らくそれは違う。

侮辱したかった訳ではない。もちろん侮辱したくなかった訳でもなかっただろうが、理由はもっと単純。

ただ、”小腹が空いただけ”。

「あー…、あれだ、どけ」

匂いと気配、雰囲気、表情。

そのどれと比べても歪なほど不自然な優しい言葉が、途切れ途切れに男の口から並べられた。

その言葉を男の体が拒絶しているように、ぴくぴくとその頬が痙攣する。

それは、決して俺から退くなと。そのままここにいろと言っているようにも見えた。

それに対して、ユキネが退く気配は無い。それどころか激情に任せ再び拳が振りあがるばかり。

そして、三日月形の口から、またそれが漏れ出した。

食欲。

分かり易いほど、また滲み出るほどの欲望の塊がそこにあった。

本当にただ腕を届けに来たのだろう。理由は分からない。ただ、やり過ぎた事を自省しての行為ではない事は明らかだ。

そうでなければ、必要でなかったからと言ってその腕に食欲を催す訳がない。

「――ア、もう無理」

そして、目の前のユキネに向かって再び顎が開かれる。

「イたダキまぁス」

不吉な物を感じて身を引こうとするユキネの体が、掴まれた男の手によって引き止められる。

ユキネに牙を剥くその顔は、例えようも無いほど醜く愉悦に染まっていた。

――しかし。ハルユキが居る傍でユキネに牙が届く事などある訳も無く。

「ァあッ！？」

額を押さえつけられて、後頭部を地面に叩きつけられた男の顎は虚しく一度空を噛み砕いただけだった。

「死ぬか離すか選べ。三秒以内だ」

冷淡に告げる声に色は無い表情は無い慈悲は無い。

寧ろさっさと殺してしまおうと早めに数えられた三秒間の間に、男は本能的に手を離していた。

「黒髪、黒目……？」

ピクッと男の細い眉毛が揺れた。

そこで、押さえ付けている男の横に小さい魔法使いが現れる。

「ハルユキ」

「いきなりだが頼めるか」

フェンは医務室を見渡して直ぐアキラに目を止めると状況を把握したのか、こくんと相変わらず無言で頷くとアキラに近寄り、やはり無言で杖を翳した。

フッと、空気の繭のようなものがアキラを包んで、それだけでア

キラの苦悶の表情が緩む。

「え……？」

「すげぇ、空間ごと…！」

一緒に包み込まれた兵達が呆然と周りを見上げる。

見る間に傷が塞がっていく。これ程酷い怪我の治療を見たのはユキネ以来だが、その時よりも別人の様に腕が上がっていた。

しかし、それを褒めるのも親心を出すのも今は後。

「……右手は？」

「ま、間に合いますか…？」

「急いで」

近寄って来た衛生兵にアキラの右腕を渡す。

右手は男の額を締め付けたまま、衛生兵は右腕をアキラの右肘に宛がった。

「黒髪、黒目――！」

男の死臭が爆発的に濃さを増して、魔力が迸った。

「ハル！」

ハルユキの背後の空間が稲妻状に裂ける。

鋭利に尖った切れ目は牙のように、その奥は赤い舌が物干しそうに糸を引き、その更に奥には漆黒が広がっている。

牛でさえも丸呑みにしそうなその顎が、ハルユキに深々と牙を突き立てた。

起

ああ、退屈だ。

欠伸を噛み殺したのはこれで何度目になるだろうか。

祭りを眺めているのも、いい加減に飽きてしまった。

もっと刺激と感動を。衝突を。支配を。興奮を。

今日の闘技は悪くなかった。

頼り無ささえ感じられた女子二人が魅せてくれた舞台に心が躍った。

金の王と、白い騎士。

彼女らは歴史にも残る傑物となるだろう。

しかしそれだけに。

どうして私だけが、こんな所で指を咥えていなければならないの

かと言う思いが暴れ出して体が壊れてしまいそうになる。

この身が生きる場所を奪われて、幾数百年。

戦争を。

戦争を。

告白しよう。

将来を期待される若芽のぶつかり合いより、その次の血が零れ狂気に触れられた舞台に心が躍ったことを。

だから、誰か私に闘争を。

早く。早く。

この身が狂気に染まってしまう、その前に。

◆
◆
◆

「ハ……ル…？」

忽然と、ハルユキの姿が消えた。

ハルユキに突き飛ばされた後、一瞬だけ現れた黒い口腔が視界を塞いで、それが消えた時、ハルユキの姿も消えていた。

ユキネは視線を巡らせる。

きっと、目に見えない速さで身をかわしたのだろうと。

視線を巡らせただけではその姿は見つからず、首を、いや体ごと向きを変えて、医務室を見渡す。

しかし、見つかったのは同じように目を丸くしたノインと主を守るように唸る古龍の子供、あとは表情を変えないレイの顔だけ。

今一番見たかった顔は何処にもなかった。

すっと、男は無言で立ち上がる。

何の感情も見られない仕草に、既に喉元まで何か熱いものがせり上がって来ていた。

「…貴、様……」

口から零れ出た。

それは、確かに目の前であの人が、喰われたと言う事を認めた事に違いなかった。

「貴様ァ…ッ！！」

しかし、まだ死んだとは決まっていない。

腹を切り開いてでも助け出す、と腹を括ったユキネが視線を上げる。

しかし、視線の先にあったのは想像していたものとは少しだけ違う光景。

「え……？」

違うのは二つ。

男が立ち上がっているわけではないという事と。

「ぎ、がぁあぁあああぁ！？」

男の額に、変わらず右手があり、更に激しく締め付けていたこと。

右手は二の腕の途中で消えているが、確かに動いている。

ボン、と爆発したような音と共に、今度は中空から左拳が突き出てきた。

筆舌し難い男の絶叫が響き渡り、空気に擬態していた口腔が本当に空気に溶けていく。

そこには、ほんの少し右腕から血を流しているだけで、表情一つ変えていないハルユキが憮然として立っていた。

男の手足が唸りをあげながらハルユキの体を叩くが、気にも留めずに数歩進んで、ハルユキはそのまま廊下に出る。

それは本当に、大人と子供のように圧倒的な隔たりを思わせた。

「じゃれ付くのはいいが、相手は選べ」

それだけ言って、振りかぶる。

男の悲鳴は変わらない所か、額が軋む音と比例するように激しさを増していっている。

しかし、それはハルユキの耳にも届いてないだろう。

そのまま廊下の奥に向かって思い切り、腕が振られた。

腕の先に付いていた男は、なす術もなくオモチャのように錐揉みしながら飛んでいく。

一瞬後に、轟音。

完全に壁にめり込んだ男は地面に落ちる事も許されず、出来た事といえば、白目を剥いた首を力無く項垂れた事だけだった。

「…ま、妙に丈夫みたいだったから死んではないだろ」

医務室に戻ってきたハルユキは首を鳴らして、ノインに顔を向け

る。

「…少しあの男に同情したくなってきたわね」
「後であいつ捕まえといてくれ。まあ数日は動けんだろ」

腰を抜かしたのか、地面にへたり込んだままユキネが心配そうな顔を見せた。

「し、死んだんじゃないか…？」
「大丈夫だって、手加減したから。ちょっとお灸据えただけだ」

不安げに訴えてくるユキネの頭を安心させるように撫でる。

首が折れないように治療をすれば後遺症も残らないはずだ。

「な、ならいいけど…」

そう言って、ユキネはアキラの方に顔を向ける。

アキラももう既に峠は越えたのか、小さく寝息をたてている。

「と言うか、明日の決勝戦も出来なくなったんだど…。どうしてくれるのかしら？」

「は？　あいつだったの、俺の相手」
「それはそうでしょ。ビッグフットの”二人目（ツヴァイ）”もいないし、私も戦えないし、決勝の相手はアキラかあの男しか居なかったのに…」
「わ、私か…！？」
「お主はもう負けたじゃろ」
「もう俺の優勝でいいだろ」
「……それしか無いわよね、今更外部者をいれる訳にもいかないし…。あーもう、前代未聞だわ…」

明日の事で平和的に頭を抱える一同は、壁で気絶していたはずの男の体が既に消えている事には、まだ気付かない。

◆
◆
◆

「……ここ、は…？」
「お主の部屋の他に無いだろう」
「ムイリオ…」

パタン、と分厚い表紙の本を閉じる音が聞こえた。

どうせまた、前時代の骨董品みたいな聖書だろう。この部屋で本を読むのはガネットとムイリオだけで、二人とも聖書ばかり読んでいるので間違いは無い。

何をそんなに許して貰いたいかは知らないが、読まないよりはましなのだろうか。

人が本を読んでいるのを見るのも嫌なくらい本は嫌いだ。しかし今は、その音が慣れ親しんだ音として、意識の奥まで届いた気がした。

「派手に負けたらしいのう」
「…負け、た…？」

その言葉を耳で受け取って、その意味をゆっくりと頭が理解していく。

眠気でぼやけた頭から霞が晴れていくのも途轍もなくゆっくりで、そしていきなり、今日の記憶だけが走馬灯のように一瞬で走り抜けていった。

「あの野郎ォ…！！」
「寝とれ、馬鹿者が」

跳ね起きようとしたアキラの肩をムイリオが押さえつけて一喝した。

その拍子に何処かの痛みがぶり返したのか、小さく呻き声を上げてアキラはベッドに沈み込んだ。

ムイリオもそれを見て暴れだす心配は無いと判断したのか、ゆっくりと手を離して、聖書に手を伸ばす。

「感謝するんじゃの。例の三人に助けてもらわなかったら少なくともその右腕は無くなっていた」

「三人…？」

「ユキネ嬢とフェン嬢。それにあのハルユキとか言う奴じゃの。治療して心配してもらって、あまつさえここに運んでくれたそうじゃ」

言われて、三角巾で固定されたままの右腕を少し動かしてみる。

多少ぎこちなさを残すものの、恐らく明日になればもうほとんど完治してしまっているだろう。寒気がするような完璧な施術だった。

しかし、その寒気など気付かせないほどに、はらわたは敗北感で煮えくり返っている。

「あいつ、俺の対戦相手は…？」

「ああ、あのハルユキとやらに瞬殺されて、逃げ帰ったそうな」

「は……？」

瞬殺。

その言葉は、意味不明な言葉としてしかアキラには聞き取れなかった。

「聞こえなかったか？　お前が負けた相手は、更に強い人間によって虫の息じゃ」
「……なん、だよ…。何なんだよ、それはぁッ！」
「熱くなるな。傷口が開く」

淡々と語るムイリオは、ゆっくりとページを捲るばかりで、アキラには顔を向けない。

怒りの矛先はもう潰された。

自分勝手の子供のような厚かましい目線がムイリオを睨み付ける。
怒りの矛先を、晴れない鬱憤をムイリオに押し付けようとアキラは痛む体をおして体を起こす。

「認めたくないか？　ならば言ってやろう。お前が一番弱かった、それだけじゃ」

トン、とゆっくり胸を押された。

まだ回復しきっていない体はそれだけでベッドに転がる。

悪態をついて体をまた起こそうとするが、体は意思について来てはくれず、ただ力なく悲鳴を上げるだけ。

「婦女子に助けられ、好いた女子に庇われ、憎き敵は好いた女子が思いを寄せる男に成敗された。格好悪いにも程がある」
「……うるせぇ…」

絞り出された声はか細く頼りない。

激しく躾け直された子犬の泣き声のようだった。

「分かってるよ。…くそが……！」

唯一固定されていない右手の指がぶるぶると震え、左腕は眩しさから目を庇うように少年の目を覆っている。

壁に掛けられた燭台と寝台の傍に置かれた台だけが細々と部屋を照らしていた。

ムイリオの傍にある置き型の燭台の元、ムイリオは変わらず聖書にゆっくりと視線を走らせている。

他に見えてしまうものを見てしまわないように。

「この歳になって初めて知ったんじゃがの。思い切り泣くのも悪くは無いぞ」
「うるせぇ…！　こんな事で、誰がっ…！」
「ああ、それもいい」

ぺら、と短く頁をめくる音以外には、遠くの喧騒しか聞こえない。

◆
◆
◆

「じゃあ結局、お前の優勝で決まりか」
「ああ、何か不完全燃焼だけどな」

人の金で飲む酒は美味いというが、確かに奢ってもらったこの一杯は格別だった。

大きな木製のジョッキに注がれた洋酒を、半分ほどまで飲んで台に置く。折角頂いた一杯だ。どうせなら味わって飲みたかった。

「そういえば、お前は何で大会に出てたんだ？　不完全燃焼ってことは戦闘マニアか？」

酒の肴として頼んだ、炒った豆をポリポリと齧っていたハルユキの手が止まる。

驚いたように話を振ったマスターを見て、そのまま固まった。

「？　…どうした」
「あ、ああいや。忘れてたよ、……目的。あれだあれ。あの副賞が欲しかったんだ」
「…やっぱりどうかしただろ。何だその間は」

適当に話を逸らそうと頭を捻っていたハルユキをマスターがゆっくりと先回りをして逃げ道を潰した。豆鉄砲をしこたま叩きつけられたような顔で数秒固まった後、ハルユキは自嘲するように小さく笑う。

「いや、忘れてたなと思ってさ」
「忘れてた？」
「目的を、だよ」
「…ああ、そうか」
「忘れられるもんなんだよな…。まあ別に忘れても誰も困らないんだけど」

ジョッキを手に持って軽く回すと、水面が音を立てて、アルコールの臭いが立ち上ってきた。

一気に、残りを流し込む。

それなりに強い酒なので、目の前がパチパチと眩むほどアルコールが一気に体を廻るが、人ならざる体はそれを一瞬で分解した。

「でも、思い出したんだろ？」

忙しすぎて、面倒で、そして多分楽しすぎて、忘れていた。

「ま、もう忘れる事もないだろうしな」

まだ昔のままであろうと無かろうと、あの形があの感触が傍にあれば、忘れる事などありえない。

日常の中に組み込ませてしまえば、過去ではなくなる。

まだ底に残っていた洋酒を、ジョッキを逆さにして口の中に振り落とした。

「それにしても、この街には相変わらずわびさびってもんがないな…」

もう夜もかなり更けているが、それでも振り返れば、視界の中から人が消えるという事はない。

「まあ、闘技大会が終われば祭りも終わるからな。その後は静けさが寂しいもんだ」

「へぇ…」
「決勝戦が延びて、祭りが長くなったって喜んでた奴もいたけどな。結局終わるのはいつも通りだ」
「…何か悪い事したな」

ふッとマスターはハードボイルドに笑って見せると、謝る事じゃないと短く告げて何時ものコップを磨く作業に入った。

その動作がいつも通りと思えるほどには、この町に居続けている。祭りが終わり次第ハルユキ達も町を出るだろう。

それを思えば、確かにこの喧騒も耳障りではなくなった。

「それで結局、その決勝の相手だったはずの男は捕まえられなかったのか？」
「ああ。あの怪我で素早く移動するのは無理だと思ってたんだけどな。思ったよりも体が丈夫だったらしい。気付いてた時には消えちまってたよ」
「消えてた、か。気味悪いな…」
「ま、何かあったらその時対応するさ」

この後遭遇することになる事態を知っていたら、きっとそんな返事は出来なかっただろう。

しかし当然、そんな事は知る術さえも在り得ないのだ。

◆◆◆

「あれあれ、意外と落ち着いているんだね？」

薄暗い倉庫の中、中背で痩せ細った格好の道化がどこからともなく姿を現した。

倉庫に詰まれた木箱に片膝を立てている男に道化の仮面を近づける。いや、おどけた様に男の顔を覗き込んだ。

「……話しかけてんじゃねぇ」

「おやおや、穏やかじゃないね」

やれやれとまた馬鹿にするように目の前で肩を竦ませる道化。

その場所を、顎が左右から挟みこんだ。

しかし、そこには既に道化の姿は無く、虚しく顎と顎がぶつかっただけで何も捉えられてはいない。

「カッカしないでくれよ。ただ借りを返しに来ただけさ。まあその分だと栄養なんて要らなかったみたいだけど」

道化は再び、今度は男の横に浮かび上がると、ドサ、と男の横に何かが投げ出した。

「ほら、この前治療した時の分だよ。それなりに厳選したんだぜぃ？」

「……ふん」

また、顎が開いて、閉じる。

先程とは違い、骨が砕ける音と、短い断末魔までもが纏めて飲み込まれていく。

「それでも大分減ったんじゃないかい？　明日は大丈夫なのかぁしら？」

「問題ねェ。減った分は溜め直した。この町は良いぜぇ？　何より質が良い。今日なんかは硬くて噛み切れない野郎もいやがった」

「へえ、ま、楽しそうで何よりだよ」

いきなり興味を無くした様にそれだけ言うと、音も泣く道化は空中に浮かび上がった。

先程までは存在していた胴体の部分は消え、道化の仮面だけが浮いている。

「じゃあ、ヴァーゴが帰って来たらまた会おう。彼女も可哀想だね。君の尻拭いなんてぇ」

カタカタと小刻みに仮面が揺れる。それはまるで、可笑しくて腹を抱えている表情を連想させた。

「ま、せいぜい楽しみましょう」

そのまま、溶ける様に道化は消えていった。

◆

「さて、どうしたものか」

机のすぐ傍の明かりだけが細々と部屋を照らし、その横でノインは頭を捻っていた。

悩んでいるのはもちろん、決勝戦まで不戦勝になってしまいそうな明日の闘技大会について。

やはり、そのまま表彰してしまうというのが今のところ最有力候補。

次善策として適当に御前試合を組むというものだが、これも相手がいなければ話にならない。

今から声をかけて何とかなるのは、ガララドかミスラ、交渉次第ではレイも可能かも知れないが、何しろ時間が無い。

結局頭を悩ませても、それ以上大した案は出てこず、背凭れに体重を預けた。

溜息を付いて目を瞑ると、直ぐに眠気がやってきた。

大窓から外を覗けば、まだ町の明かりは減ってもいないが、町並みが心なしか静けさを含んでいるようにも見える。

「それで？　何の用かしら」

バルコニーへと続く大窓、そこから見えるはずの町並みが黒く遮られている。

まるで影絵のようにくっきりと人の形に。その顔の部分、そこにまるで微笑んだかのように赤い三日月が広がった。

スゥッと一瞬でその影が薄らいで消える。

立てかけてあった剣を手に取り、つかつかと窓に近寄り押し開けた。

右、左と順番に辺りを見渡すがネズミ一匹見当たらない。

「――良い夜ね」

後ろから聞こえた声にゆっくりと振り返った。

何時の間にか、見覚えが無い女が机に浅く腰掛けるように立っていた。

まるでそこだけ燭台の明かりが届いていないような、漆黒の出で立ち。

喪服のような黒いロングスカートに、つば広の帽子からはやはり黒いベールが女の口元以外を隠している。

「さすがはオウズガルね。宝物庫は見ただけで垂涎ものだったわ」

そう言って広げた掌の中には、金貨と宝石が光っていた。

それが何処から拝借されたものかは、会話を聞いていれば確認するまでも無い。

「…それを持って逃げてれば良かったのに。欲を出して私を誘拐しようって所かしら？」

腕に多少自信があるのだろう。

その佇まいには焦り所か余裕さえ見て取れる。今ノインは魔法が使えないが、それでも剣さえあればそう負けるつもりは無い。

「ああ、勘違いしないで。私は戦いに来た訳ではないの。今の貴女でも負けそうなんだもの。宝石も違うわよ？　これは手癖の悪さが出ちゃっただけ」

おどけた様に両手を翳して見せると、小さく溜息を付いた。

嘘か真か、文字通りベールに包まれたその表情からは殆ど何も読み取る事はできない。

「ちょっと、聞いて下さる？　私がここに居るのは身内の単細胞の尻拭いでね。貴女もそういう経験はあるでしょう？」

まるで旧知の友のように、朗らかに語りかけてくる女には不自然なほど戦意は感じない。

「用件は手短にお願いできるかしら？　私は明日からまた忙しいの」
「ああ、ごめんなさいね。……じゃあ」

後ろ手に女が手に持った金貨と宝石を投げ捨てた。小さく放物線を描いて、それらは机の向こうに消えていく。

最初に異変に気付いたのは、音。

静かな夜にはうるさい程響くはずの金貨が跳ねる音が、いつまで経ってもやってこない。

机の向こうに消えた金貨の行方を思わず目で追って、そして気付く。

部屋の中に広がっている黒が、夜の闇ではないことに。

蠢いている。

何かが暴れている。

何かがもがいている。

そして、何かが息絶えていた。

耳と目が異界を捉え、次は鼻が異様を察知する。

それは、甘い甘い脳髄が痺れるような甘い腐臭。

「……戦いに来た訳ではないって言うのは嘘だったのかしら？」

あまりの女の緊張感の無さと、戦意の薄さにすっかりと信じ込まされた。

疲れが体に圧し掛かったままだが、剣を対眼に構えて女を見据える。

切っ先の延長線上。もう暗い影しか存在していない部屋に、再び血のように赤い三日月が浮いていた。

「嘘じゃないわ。私は戦いに来た訳じゃないの」

それが女の笑みだと気が付いて、同時にその笑みでも影でもない何かが、女を守る盾の様に浮かび上がってきた。

「私はただ――」

見覚えのある、顔が二つ。

部屋の前にいつも待機していたはずの、衛兵の顔だった。

「――貴女を一方的に嬲りに来たのよ」

楽しげに、赤い三日月が更に深みを増した。

招待状（前書き）

グロ注意。

招待状

バタバタと落ち着き無く階段を上ってくる音で、ハルユキはその日の朝を迎えた。

間髪いれずに、けたたましく扉を叩く音が部屋中に響く。

「なんだ…？」

見れば、その音で漏れなく部屋の住人全員が身を起こして、何事かと扉を見つめている。

既に立ち上がっていたハルユキが扉を開けると、ハルユキの脇を通り抜けて何かが部屋に飛び込んできた。

軽量を重視したハープレートを胸に宛がえた姿は、見覚えがある近衛騎士に間違いは無い。

しかし、部屋を見渡すその表情は今までに見たことが無く、緊迫した空気が眠気を覚ましていくのを実感していた。

「ノイン様は!?　ノイン様はどこだ！」

一転して掴みかかって来たミスラの必死な顔。発している言葉。

当然返す言葉は無い。それどころか、何も状況が分かっていないのだ。

しかし、与えられた少ない情報から頭が勝手に導き出した答えが、思考を凍らせる。

同時に、表情が強張っていくのが自分でも良く分かった。

そこで助け舟を出すように、篭手をはめた手が後ろから伸びてきて、ミスラの腕をゆっくりと押さえて、その手の男は一歩前に出る。

「ミスラ、やはりここにはいない。他に行け。俺は事情を説明する」

ミスラとは対比的に落ち着き払った声に、ミスラは泣きそうな顔のまま頷くと、物凄い勢いで部屋を飛び出して行く。

「悪いな、あいつは…」

「弁解はいい」

声が僅かに逸っているのに気が付いて、そこで一旦言葉を切った。

「状況を、聞かせてくれ」

言葉を無理矢理遮って割り込んだハルユキに、しかしガララドは何も言わずに事の核心だけを短く口にする。

「――ノインが、消えた」

半ば予想していたガララドの言葉は、驚くほど深くハルユキの心を揺らした。

◆

大通りから大きく外れて、どこかジメジメした雰囲気がある裏通りをユキネとフェンは早足で進んでいた。

ユキネはまだ全快ではないので、飛び出して行こうとするのを何とか留めて一緒に行く事を約束させて今に至っている。

「…大丈夫？」

「だ、大丈夫。それより急がないと…」

もう息が上がっているが、それでも足を止める気配は見られなかった。

それはフェンも同じ。二人が抱えている気持ち、と言うより懸案は足をどうしても急かさずにいられない。

ノインの事はもちろんだが、ハルユキの事も。

「ここ、じゃないか…？」

「多分、…そう」

緑色の剥げかけた塗装が特徴の二階建ての空き家。

この辺りは祭りで格差になっている事もあってかかなり人通りは少ない。３時間に一人通れば多い方だと言う事らしく、現にこの通りに入ってからは一人の人間とも擦れ違っていない。

それ程過疎化が進んでいるこの辺りに、見慣れない人間がよく出入りしていると言う噂がある。

しかし噂は噂。

実際これも酒場で仕入れた適当な情報の一つで、今も同じような

情報源を幾つか回って時間を無駄にした後だ。

それでも必死に希望をかけて、扉に手を伸ばした。

鍵は掛かっていないらしく、軽く押すと音も無くゆっくりと扉が開いていく。

体を半分だけ入れて中を覗くが、人の気配は無い。

薄暗いが、窓から僅かに差し込む光で、部屋全体を見渡すには問題は無かった。

「…まるっきり外れ、と言う訳じゃないみたいだな」

人はいない、更に家具という家具も見当たらない。しかし、ほんの少しだが生活感が残っている。

埃が溜まっていなかったり、流しに料理した跡が見られた。

「フェン」

小声でフェンを呼ぶユキネの前には、階段が続いていて、ユキネが様子を見てくるとゆっくりと階段を上がっていく。

そこでそれを見つけた。

「…ユキネ」

階段を上っていたユキネを呼び止める。

机の上にあったのは、紙の束。

「…ここは、多分違う」

『世界征服のすすめ』と、見るからに個性溢れる小説の束だった。

階段を下りてきたユキネに事情を説明しようと顔を上げると、物音に気付いたのか、丁度階段の上からこちらに向けられた銃口が目に入った。

そして、その銃口の向こうには、小さい影が一つ。

「あれ？　フェン何でここに居るの？」

そこには、フェンにはこの数日ですっかり見知った顔があった。

「…エゼ」
「……知り合いなのか？」
「友達」
「あ、昨日の試合の人よね！　突然だけど世界征服に興味無いかしら！」
「え？　いや、それは無いが…」

それは残念、と溜息を付くと改めてまじまじと二人を眺めだした。

「で？　どうしたのこんな所まで。ああ、私の事はエゼって呼んで」
「……エゼ。確かここは空き家のはずだったと思うんだが…」

にこやかだったエゼの顔が固まった。

「えー、あー、うん。それはね、あれなのよ…」
「いや、別に責めたい訳じゃないんだ。この辺りで赤い髪の少女とか、怪しい奴は見なかったか？」

ホッとしたのか、顔の緊張を解いて、それから腕を組んでゆっくりとユキネの言葉を反芻している様子が良く分かる。

それでも心当たりは無かったのか険しい顔のままエゼは顔を上げた。

「……怪しい奴って言うのは知らないわね。それとその赤い髪の少

女って王女様のことでしょ？」
「…そう」
「なら昨日の試合がかなり印象的だったから見れば忘れないわ。――ひょっとしたら誘拐でもされたの？」

探るような視線がエゼが二人に向けた。二人は少しだけ逡巡した後、顔を見合わせる。

エゼを信用していないという訳ではないが、国を丸ごとひっくり返す可能性もある問題だ。そう簡単に話してもいいものだろうか。

「ああいいわよ、ただの好奇心だったから無理に言わなくて。私の連れも昨日からいないから一緒に探しましょ」
「…いいの？」
「丁度これから出るところだったのよ。それにこの辺りにはそれなりに顔もきくし」
「ああ、助かるよ」
「それより急ぎましょ。良くない状況だってのは間違い無いんでしょ？」

それを聞いて、深刻な顔で深々とユキネは首を縦に振った。

「ああ、速くノインを助けないと」

そうしないと、とユキネは続ける。

あの場にいた人間なら、数日はあの瞬間を忘れないだろう。それ程見る機会が無いものだった。

フェンだけは、恐らく二回目。

数年振りにユキネと再会した、あの城の廊下で。

殺す為だけに、自分を変えていくような、あの表情。

ユキネはそれ以上言うつもりは無いらしく、そのまま玄関へと向かった。

その代わりに、フェンは呟く。自分に、言い聞かせるように。

ハルユキが、誰かを殺してしまう前に、と。

◆

◆

◆

今日の催しはすべて中止。兵士の半分をノインの捜索にあてると言う事だ。

ノインがいない事自体はそう珍しい事ではないらしい。確かに夜この部屋に遊びに来ることはそう珍しい事ではなかった。

いつもと違う点は三点。

彼女がいつも帯剣しているはずの剣が無造作に床に放ってあった事と見張っていた筈の衛兵の行方が知れない事。それと、床に飛び散った少なく無い血痕。

その三つは明らかに一つの答えを導いていた。

ここに来たのは、一縷の望みに賭けた事と協力を仰ぎに来たと言う事だろう。

「どこに居るんだあの馬鹿は…」

そこらのチンピラに話を聞いてみてはいるが、全くと言っていいほど情報が無い。

一旦裏路地から屋根に飛び上がり空を見上げると、もう太陽は頂点を通り過ぎて西の空に傾き始めている。

視線を巡らせれば大通りの彼方此方に兵士の姿が見える。

恐らく、まだ状況は変わってはいないのだろう。

そうすると、想定していたよりは状況が悪いという線がますます濃厚になる。

身代金狙いではない。要求すらないという事は、政治が絡んだ問題でも無いと言う事だろう。

とすれば、私怨か、愉快犯か。

せめて誘拐までの手口。もしくは脱出の方法だけでも分かればそこから推理を組み立てることも出来る。

そこで厄介なのが魔法だ。

不確定なその要素が加わる事で、方法も動機も目的さえもほぼ無限と言ってもいい程に可能性が増える。

結果虱潰しに探すしか方法は無い。

やはり魔法による探知も進んでいるようだが、それはハルユキに関係がある訳でもない。

地道に、足を動かすしかないのだ。

「この熱い時に…」

滲んできた汗を拭って悪態をつく。

誘拐などと何を似合わない事をやられているんだあの王女は、と。

「心配かけやがって…」

少なくはない血痕。

告げられたその言葉に、ギシッと脳が軋み、一色の感情に染まっていく。

それを留めているのは、まだ彼女が大事には至っていない確率が高い事。

連れ去ったという事は大きく分けて、何かに利用するか、王女自身に目的があり時間を掛けなければならない可能性の二つに分けられるはずだ。

ノインは頭は良い。ならば自分から死を早めることはしないだろう。

しかしこれもまた、不確定要素が加わっていない限られた推測にしか過ぎない。

もしかすれば、得体の知れないタイムリミットが近付いているかもしれないのだ。

今この瞬間にも。

刻一刻と。

何かを磨り潰すような音がした。

それが自分が歯軋りをした音だと遅れて気付く。

その焦りを振り切るように屋根の上から町中を見渡す。もう何度目かも分からないこの行為。今更何が見つかる訳でもない。

「――――っ！」

しかし、何も捉える筈が無かったその目が、視界の端に何かを見つけた。

通り過ぎてからそれに気付き、もう一度視線を戻す。

確かあの辺り。

あの角の辺りで、”赤い何か”が翻らなかったかと。

距離にして４００m強。

見間違いと言えなくもない、しかし、考えた時には既にそこに向かって飛んでいた。

文字通り一跳びでそこに着く。

そしてまた、横を向いた瞬間それが翻る。

今度は近い。見間違いようも無い。

赤い髪だった。

長髪の赤毛が、間違い無く右の角に消えて行った。

再び一跳び。

今度は左の角にそれが消える。

遊ばれているのか、それとも幻でも見ているのか一向に届く予感

がしない。

それでもその予感さえも嘲笑うように、左に角を曲がった先。

その先の袋小路で、”それ”は小首を傾げて壁を見上げていた。

後ろ姿ながら分かる地位が高そうな厳かな衣装。そして赤い髪。
背格好。どれも、嫌な位に記憶の中に覚えがあった。

しかし、名前を呼ぼうとして気付く。

その、臭いに。

思考を邪魔するように、”それ”が言葉を発した。

『親愛なる鬼の仔様へ』

吐き気がするような濃い血の臭いが、更に濃度を増す。その元が、あの髪から来ている事に気付くのにそう時間は掛からなかった。

『今夜、日が沈んだ頃。決勝の舞台を演じましょう』

そして、振り向いた。

笑っている。

顔に縫い付けられたかのように付けられた道化の仮面が、血に濡れながら笑っている。

『我等だけの舞台を――』

帽子を取るように仮面を取り外してそれ”は演説を続ける。サーカスの演目を自慢げに発表するように、弾んだ声で言葉を繋げてい

く。

仮面の下のその顔は、やはりハルユキが知っている顔ではない。

見たことも無い顔。しかし、それに安堵する事はありえなかった。

その道化は、確かに見たことが無い顔。

しかし、それ以上に。

見たことの無い貌をしていた。

最初に感じたのは、仮面。地面に落ちたそれとは別。

もっと醜悪に、もっと狂気に満ちた歪な仮面。意匠

瞼は放物線を描いたまま縫い付けられ、唇はその逆に。鼻と耳は綺麗に削ぎ取られて存在しない。

そして、その顔中が髪から滴る血で染められている。

これ以上無いほどの笑顔で固められ、血化粧を施されたその顔は。

やはり、仮面に見えた。

『乞う、ご期待――』

見れば、顔は女の物ですらない。

子供。男の十歳ほどの小さい頭蓋。首の根元にわざとらしい程の切れ目がある。

『――くふっ』

噴き出したような音。

口が裂けるまで吊り上げられていると思っていた唇が、更に深みを増す。

仮面を持っていない方の手が優しく唇に触れ、次の瞬間には一転して同じ場所に同じ物を、しかし叩き付けるように押し付けた。

ガリガリガがリガりがリと、掻き毟る音が続き、開くことを封じられた瞼からは涙が零れ落ちる。

不意に。

指が、縫い付けられた糸をかいくぐって、口の中に進入した。

引っ掻き音が止み、ブチブチと糸を無理矢理引き千切られる音に変わり、ベチャッと、投げ捨てられた糸に付いた腐った肉片が生々しい音が立てる。

唇が半分千切り取られたその口が、頬の半ばまで裂けたその口が限界まで大きく開け広げられる。

「あッキャはああひゃひゃあひゃっひヒひヒヒひヒヒヒひゃひゃひゃあひゃはァッ――！」

そして、笑う。

笑う。

目の端から大粒の涙を零しながら。

笑い続ける。

そしてそれは、笑いながら、ゆっくりと地面に沈んだ。

体を痙攣させながら、体の下に血溜まりが広がっていく。それでも腹を捩りながら笑うことは止めない。

手にしていた仮面がカラカラと軽い音を立てながら、ハルユキの爪先に当たる。

どれくらい時間が経ったのか、ハルユキが静かに見下ろす下で、萎んでいく笑い声が最後は泣き声のようにか細く消えたいった後。

『――それでは』

手を体の前に添えて深々とお辞儀をしようとしたのか、肩と腰だけがぎこちなく動く。

唇は動いていないのに聞こえるその澄ました声が、どうしようもなく不快でたまらない。

『貴方様が知っている顔が”私”のように為りませぬよう』

最後にこれ以上無いほど愉快気に唇を吊り上げて。”それ”はそのまま動かなくなった。

同時に。

仮面を踏み砕く音が、そこら中に響いた。

開戦

さて、とヴァーゴは一寸先も見えない暗闇の、それでいて何処までも続いてそうな此の世ならざる空間に腰掛けて一つ溜息を付いた。

この一月をかけて計画した作戦。紆余曲折があって様々な変更が重なったものの、とりあえずは一番良い形で落ち着いたようだ。

ここまでお膳立てをしてしまえば、これ以上の苦労は無いはずだ。と言ってもこれと言った苦労があった訳でもないのだが。

一番手がかかったのが王女の捕獲だったが、魔法が使えない状況を狙い人質まで取ったのでそれでも大した手間ではない。まあ、散々痛め付けた後に、油断を疲れて手傷を負わされはしたのだが。

体が二つになりそうだったが、”大した事は無い”のだ。冷たい体を掻き抱きながら、快感を思い出して自然と唇が吊り上がる。

拷問が趣味だった覚えは無いのだが、それでもあの王女は――あの王女を痛め付けるのは、途轍もない快感が付き纏った。

相応に弱って貰わないと意味がない為少しやりすぎてしまっただろうか。ライブラの協力を得て■■を■■■■られる幻覚を見せた時には流石に気を失っていたが、それでも起きた時にまた軽口を叩いた時には素直に感心した。

あれから、ライブラに預けてそのままだが、まあ殺すような事は

無いだろう。ライブラにはすぐにやってもらう事があるので、趣味に走りすぎる事もないだろう。

す、と”視線の中の一つ”から町の様子を眺めてまた、背徳的な快感が背中を撫で回し体中を愛撫していった。

いけないわ、と声に出して自省しつつも唇は更に吊り上がる。

全く、私は乙女（ヴァーゴ）なのに。

夕日に染まる町は、まるで膨れ上がった血管が脈動しているように見えて、それを引き裂く事を夢想した。

◆◆◆

街が黄金色に染まっていた。

窓から見える分だけでも数え切れない人間が笑って、話して、手を繋いでいる。

小さな女の子同士や、兄妹らしき二人や、親子や、中には老夫婦もいた。

夕焼けの太陽が、あちこちに反射してきらきらと輝き、より華やかに町を装飾している。

そして何よりこの色がよく似合う少女を、シアは思い出していた。

いや、この町の人間なら誰もが知っているだろう。金色の炎の中で、火花と一緒に楽しげに踊る赤毛の王女を。

この町並みも、平穏も、笑顔も、ひょっとしたらこの茜色の景色すらも、彼女の力の賜物だ。

面識はほんの少し。

初めて見た時は綺麗な人だと思った。少しだけ一緒に居て優しい人だと思った。そしてこの街を見て、大きな人だと思った。

昨日の試合を見て、この人は強過ぎるんだと思った。それこそ危さを感じてしまうほどに。

だから、その彼女が誰かに屈服されて弱い立場に追い遣られている事が、いまいち実感できていないと言うのが本音だった。

もう一度街に目を落とす。

この時間のこの景色は、気付けば眺めるようになっていて、今ではもう習慣になっている。

いつもは隣に同じくらいの女の子が居たり、格好良い女性が居たりするが、今は一人。皆は町の中を今も駆け回っているだろう。

「――――」

小さく口を開けて、小さく発音してみる。

でも、僅かに息が出てきただけで、目の前の空気さえも震えなかった。

声が出ない。体力も無い。いざと言う時に戦える力も無い。

実に理想的な足手纏い。

ここで、連絡係をやっていた方が間違い無く役に立つ。悔しいが、それは多分、間違い無かった。

そう思って溜息を付いていた矢先、不意にばたん、と扉が開いた。

「シア、何か手掛かりは見つかったかの？」

入って来たのは、艶やかな黒髪をひとつに結い上げた和服美人。

この緊急事態にも凛とした姿勢は崩れておらず、足取りに疲れも見られない。

『いいえ、レイさんの他にはハルユキさん以外皆一度帰ってこられましたが、特には何も見つからなかったようです』

紙に書いた文字を眺めて、少し辟易する。

出来るだけ簡潔に書こうとして、それには成功したが何とも事務的に見える。

知人が窮地だというのに、その文字に映る自分があまりに無感情で少しだけ嫌になるのだ。

それを今は億尾にも出さず書いた紙を、水差しから水注いだコップと一緒に手渡した。

「……ふむ」

水を飲みながら机の上に広げられた地図に、彼女は小さく丸をつけた。

既にその地図は小さな丸で埋まっていて、いかに総力を使って探しているのかが分かる。

「妙じゃの…」

しかし、見つからない。

足取りも見えなければ、尻尾も捕まえられず、それどころか影を捉える事すら出来ていない。

「こうなると、やはりあちら側からの接触を待っていた方が良いのだろうが……、シアよ」

一気に水を飲み干し、名前を呼び、こちらに視線を向けた。

「儂は少し戻らぬ。少々妙な物を見つけたのでな。まあそれが今回の件に関係があるかは分からんが、それどころか思い過ごしである可能性もあるのじゃがな。

それでも出来れば今夜は外には出るな。良いな?」

いきなりの事で理解は追いついていなかったが、勢いに押されて思わず頷いていた。

よし、と納得したように頷くと、彼女はそのままこちらに歩み寄り、窓際の縁に足を掛けて屋根に飛び乗った。

「帰って来たら小娘二人にもそう言っておいてくれ。男子共は、…まあ大丈夫かの」

屋根の上から最後にそう声がした後、一際大きく屋根を蹴った音が部屋の中にまで響いた。

半分呆気にとられながら窓の外を確認するが、既に視界の中に入れることすら出来ない。

「……？」

はずみで視界に入った街並みに、何か違和感を感じた。

改めて見れば大して変わってはいない。しかし、違和感は変わらず感じている。

先程言われた意味深な言葉に自分が引き摺られているのか、それとも少しだけ街の夕闇が濃さを増したからなのか。

空気が、妖しさを孕んでいると言えばいいのだろうか。

城の方を見上げてみる。

昨日は燦々と街を照らしてくれていた太陽は、もうどこにも無い。

◆　◆　◆

「だ、だから何も知らないって！　俺等も王女には世話になってんだからさぁ！」
「…あ、そう」

掴んでいた胸倉を離すと、チンピラの様な男は咳き込みながら地面に倒れこんだ。

同じような背格好の男達が周りにも数人転がっている。

しばらく裏路地を歩いていると屯していたこの男達に絡まれて、ついでに何か知っている事は無いかと聞く事にして、今に至っている訳だ。

男から数歩離れて、今来た道と更に裏通りの奥の方を見比べてみる。

どう考えても更に裏通りの奥の方に調べた方がいいだろう。が、もうあと３０分もすれば日が暮れるはず。

ならば、一旦様子を見に宿に帰るのも一つの手だ。

「…この先は？」

「そ、倉庫街だよ。やたらと兵士が居たから、あそこには誰もいないと思うけど…」

「ふぅん…」

確かにあからさまに怪しい場所だ。

だがもう城の人間の調べは入っているだろう。ならば、今となっては最も犯人と遠い場所だと考えてもいいのかも知れない。

「いつまでも、チンピラなんかやってるんやないで？」

一言残して、壁を蹴って屋根に飛び乗る。

予想通り太陽は半分以上沈んでいて、夜を迎えるのにそう時間はかからなそうだ。

「少し、見てくか」

あの大きい屋根が連なっている場所が倉庫街なら、そう遠くは無い。

トントントン、と三回跳ねる内に、倉庫の全容が視界に入る位置まで移動する。

倉庫までは小さい水路を挟んでいるので、流石に一飛びでは向こう側には行けないようだ。

迷うまでも無く飛び降りて、倉庫街に足を向ける。

橋を越え川の淵を歩きながらザッと倉庫を見渡してみるが、怪しいところは見当たらないし、遠くには確かに兵士の姿も見える。

やはり無駄足だったかと、身を翻して。

「――見ぃ～つけたぁ」

首筋のすぐ傍。耳元で囁くような声が、鼓膜を揺らした。

寒気が背中からうなじまでを走り抜け、半強制的に緊張感が張り詰める。前に跳んで距離をとりながら、体を捻って背後に目を向けた。

「取りあえず諦めていた所にそっちから来てくれるんだから、灯台下暗しって奴かな」

道化が踊っている。

ナイフを何本も弄びながら、楽しそうに。

「さあ、殺しに来たよ?」

そして、挨拶を交わすように死を告げた。

「――気が合うなぁ。丁度俺もそう思ったところや」

ピタッと、ピエロが舞踏を止めてこちらに視線を定めた。

その仮面の向こうにはさぞ殺意に濡れた表情が隠されていることが透けて見えるようだった

この前よりも濃厚に、おそらく自分だけを狙って練り上げて、研

ぎ澄ました殺意がひしひしとここにまで伝わってくる。

「しかし、お前もアホな事したなぁ」

殺意を堪えきれずに踏み出した道化の足と、ジェミニの口が図った様に同時に動いた。

どちらもそれに気付いて動きを止め、沈黙が流れる。

「殺されてしまうぞ？　王女誘拐なんかしたら」
「へぇ、僕等が誘拐した事は知ってるんだ？」
「まあ、このタイミングで出て来られたらなぁ」
「それで？　あの黒髪が僕らの脅威になると？」

僕ら、と黒髪、という言葉が引っ掛かって眉を潜めた。

同時に不可解な言葉が出てきた事に戸惑っていたのが相手にも伝わったのか、仮面の向こうで愉快気に笑ったのが伝わる。

「そうだよ？　僕”ら”だ。ちなみにあの黒髪が人外だってのも知ってるよ？　――そして、そいつはもう今頃終わってる」
「……はっ、お前等じゃ到底無理や」
「まあ、そんな事は今はどうでもいいんだ。水掛け論をするつもりも無い」

やれやれとおどけた様に肩を竦めて見せると、また表情を変える。
仮面は笑ったまま、覗く目は真剣にこちらを観察していた。

「――君。元々僕達側だったんだってね」

こいつには仲間がいた。それにそれらしい事も自分で仄めかした。
ならば知っていたとしてもなんら不思議ではない。

しかし、その言葉で血が沸騰するような熱い何かが体中に廻っていった。

「なら、分かるだろう？　僕たちの目的が何か？」
「…知らんわ。ワイが居たのは随分前やぞ」
「そう？　なら、教えてあげるよ」

大仰に、暗く沈んだ夜空を捕まえようとでも言うように空を仰ぐ。

仮面の下では、何かに見せられたような狂気に濁った目で、恍惚とした表情を浮かべていた。

「何…？！」

気が付けば、足元に紫色の儀式魔法に用いられる魔方陣が広がっ

ていた。

尋常なサイズではない。

目の前のライブラを中心に、消え入りながら何処までも広がっている。

そして、ライブラの両手にも、同じような魔方陣が一つずつ浮かんでいた。

「――さあ、戦争だ」

大げさではなく。

広げられたその手はそのまま空を掴み、カーテンを巻き取るように町中の夜空を剥ぎ取った。

◆◆◆

日が沈んでいくのを、観客席でコップを片手に眺めていた。

ハルユキ以外には闘技場にも客席にも人影は無い。

東の空は既に夜が侵食していて、西の空は相対的に茜色と金色に染まっている。

しかし、太陽はもう完全に沈んでいて、今の時間は俗に言う逢魔ヶ時、あるいはマジックアワーと呼ばれる時分になる。

茜色の世界は以って数十分。

じりじりと、夕闇から夜の空気に変わりつつある。

軽く足に力を入れると、驚くほど簡単に体が浮いた。

もう舞台の周りを覆っていた結界はもう存在せず、一跳びで闘技場の中心まで到達する。

スッと、何の前触れも無く夜がやって来る。

西の空には宵の明星が輝いて、夜の到来を知らせていた。

「――ようこそォ、我等が舞台へ」

最初に聞こえたのは、声と、何かを引き摺るような音だった。

ズルズルと引き摺るような音が後ろから聞こえてくる。

後ろを向くと、汚らしい顎が糸を引いていた。ガチンガチャンとけたたましく歯を鳴らしながら、こちらを威嚇する。

しかし、その顎はただ視界の端に映っていただけ。

焦点を合わせたのは、無造作に何かを持っていた男の右手にのみ。

夜の闇を抉る様にじわじわと輪郭を現したのは、小さい頭に華奢な体。

赤い髪が指に絡ませる様に持たれ、男が身動ぎする度にカクカクと首が揺れ、力無く項垂れた腕も足も地面に擦られて傷を増やし、服は殆どが引き裂かれ、辛うじて体に引っ掛かっている。

上腕と首には自らで引っ掻いたかのような傷、それは自信に満ち溢れた表情が特異だった顔にも及んでいて、あの誇り高そうだった様子は彼女からは微塵も感じられない。

どこか、どこかで信じていたのだと思う。

あの女の事だから、どうせ心配掛けるだけ掛けて実は後で飄々とした顔で登場するに違いない、と。

しかし、そう思っている間にも、きっとノインは助けを求めてい

たのだ。

だから、とりあえず、顔面を潰そう。

男のあの高慢に吊り上った唇を剥いで舌は引き抜き目はくり貫くのが良い。髪が食い込んだあの指の部分は先から跡を辿って順々に切り落とそう。二度と表情を浮かべられない顔になった男が苦痛に顔の筋肉を痙攣させているところを想像すると思わずにやけてしまいそうだ。

男は先程から何か口上を述べているが、記憶に残る前に取るに足らない事だと勝手に意識が排除していく。

――気付いた時には、男は壁まで吹き飛び、左手は血で濡れていた。

左手には、血の他にも澱粉質の粥状の液体や、白い脳漿がこびり付いている。腕を振りそれを地面に弾き飛ばし、それでも取れない分はナノマシンで完全に消失させた。

それでも手に残って消えない感触に少しだけ嫌悪感を覚える。

男を蹴り飛ばす時に千切っておいた男の左腕から、ノインの髪をほどく。持ちっぱなしだったコップを置き、倒れ込んで来たその体を抱きとめると、まだ体温が感じられた。

きちんと息もしている。

しかし、寒さからか、それとも余程酷い目にあったのか小刻みに体が震えている。

作ろう、と意識する前に、手の中に毛布が現れた。

「……ん」

毛布を体に巻いてやると、勝手に手が動いて毛布を抱き寄せた。

ふてぶてしい態度に、苦笑する。

「――ひはッ」

聞こえるはずの無い声が聞こえた。

殺した訳ではない。だが、喉を潰して舌を捻りきられ眼球が無くなった人間が、直ぐに声を出せる訳が無い。

しかし、この世界は魔法という神秘の上に存在している。失念していたつもりは無いが、それでも思慮が足らなかったのかも知れない。

忘れていた警戒と怒りを思い出し声とほぼ同時に顔を上げれば、しかし既にそれは完成していた。

薄く光る、金色の壁。いや、囲いだ。上下と四方に薄く脆そうな壁だ。その向こうでは男が勝ち誇った顔を浮かべている。

「ひでェなあ、オイ。今ので三十人分ぐらい逝っちまったよ」

拉げたはずの顔面が白煙を上げながら見る見ると元の形に戻っている。

ゴキゴキと”左手”で支えながら首を鳴らしながら、その隣にある口元は勝ち誇ったように吊り上っていた。

「…ああ、やっぱ手前ェは駄目だ。肉は硬ェし魔力もからっきし。ッたくよォどんな構造してんだ、化け物が」

吐き捨てるように言いながら、近づいて来る男に再び拳を握る。

それを待っていたように、男が愉快気に口を開く。

「その結界、手前ェなら殴っただけで壊れるから気を付けろよ？」

不可解な言葉に、拳を固めたまま眉根を寄せる。

その言葉の意味を考える前に、男はさっさと答えを言い放った。

「それが壊れたら、〝それ〟も壊れるぜ？」

一度目のそれは、薄く金色に光る結界を。

「――――……！」

そして、二回目の〝それ〟は、俺の腕の中で小さく息を荒げる少女を指していた。

「ああ、始まったか」

空を見上げて呟いた男に、釣られるようにその視線を追う。

「何だ、これは…？」

黒、白、灰色。

彩度とは懸け離れた無機質な色が墨流しの様に斑に混ざり合っている。

いつの間にか星空は消え、絵具を溶いた水をばら撒いたかのように穢されていた。

その空に向かって吼える様に、男は声を張り上げる。

「――さァ、戦争を始めようかァ」

◆
◆
◆

自分の中から沸き立つ物を感じる。

黒く濁った海のようなモノから這い出てくるそれは、人の形をしていた。

突き上げるように私を強く揺すってくる。早く出せ早く出せと子宮を蹴り付ける赤子のように。

自分の口から漏れ出る荒い息が、欲情に濡れている。

それ以外には何も存在しない。

汚らしい屍の海と、海岸でのた打ち回る自分が居るだけ。

そして、遠くに浮かぶ空の様相が変わった。

黒と白と灰色が混じりあったマーブルゾーン。囲いは出来た。

今より、この町は戦場だ。

ならば、それ相応に相応しい役者を用意しよう。

さあ、出番だ。

――”親愛なる屍共（ディア・リビングデッド）”

「戦争を、始めましょう――」

◆

忽然と。

町の雑踏に紛れて、それが立っていた。

いやそれは果たして立っていると言っていいのか、もしかすると、ただあったと言った方がいいのかも知れない。

息が止まる。喉が枯れる。あまりに歪な在り方に吐き気を催す。

それの横を誰かが追い抜いていった。まっすぐにすれ違う人間もいた。

傍らの不吉に一瞥も寄越さないまま。

まるで、それが愛おしい日常の一部だとでも言うように。

空気を穢しながら、今立っている所まで何かが伝わる。頬に当たるその腐った空気は、まるで獣の舌に毒見でもされたかのような錯覚を起こす。

むき出しの筋繊維に白骨。

漏れでる腐臭が肺腑を侵していく。

脈動。いや、それは恐らく蠢いていると言った方が良いのだろう。

所々で痙攣を繰り返すその限り無く人間に近い存在は、その視線だけはピクリともせずに此方を見据えている。

声は出ない。ただ目を見張る。

何故あのような怪奇が我が物顔で日常を謳歌している。

その疑問は一瞬。

答えを得る間も無く、状況は移り変わる。

瞬きをした訳ですらないのに、空が様子を変えていた。

ボタン、と。

”それ”の口の端から、涎とも、血とも、腑汁とも付かない物が滴り落ちる。

その音は、まるで平穏という壁に罅を入れたように深く、深刻に響いていった。

そして。

――日常の隙間から、怪異が、狂乱が、顔を出す。

悲鳴が響き渡った。

水を得た魚のように、仄暗い怪物の眼球だけがグルグルと廻る。

ピタ、と静かにその動きが止まり、その先には呆気に取られて氷菓子を地面に落としてしまった小さな子供が呆然と突っ立ている。

再び悲鳴。絶叫。

血が舞う。

間を空けずに、今度の異変は更に身近。

私の体を貫通して、腕のような何かが胸から突き出た。

呆気にとられて後ろを向けば、もう一人、いや、その後ろには更に怪異が群れを成している。

ああ、今日はお母さんとお祭りを回るはずだったのに、と未練を残して。

私は死んだ。

侵攻

「何だ…？」

ここから見た限りでは、あの夜の闇すら遮断するような空以外に変化はない。

しかし、風に乗って鼻に纏わり付く臭いと、遠くに聞こえる絶叫が何か途轍もない変化を想像させる。

「だァから、戦争だよ」
「戦争だと…？」

この世界、いや、この時代においてはほとんど聞く機会が無かったその単語は、新鮮に感じられた。

今の自分の顔はさぞ訝しげな顔をしているのか、男は機嫌良さそうに顎を浮かせて見下すようにハルユキを観察しながら笑みを深くする。

「…そんな事をして何になる？」

この国の資源を求めるなら完全に裏から気付かれない様に搾り取るか、堂々と大儀をもって攻めなければ獲得する事は難しい。

たとえ奇襲でこの国を占有した所で、周りの国に攻め込む理由を与えるだけだ。

とすれば、また別の所に目的があるのだろう。例によって全く予想は付かない。

「これは上からの命令でな。そっちが何を考えてるなんてのは知らねェさ。大体元々の任務なんざ面影も残ってねぇしなぁ」

どうでも良さそうに、首を鳴らしながら濁った目をハルユキから外して、恍惚に蕩けた目線を空中に泳がせる。

漏れ出る溜息は、そのまま舌舐めずりしそうなほど食欲が充満していた。

「けど少なくとも俺は、効率良く腹を膨らませられるだろ――？」

漏れ出る狂気が夜陰を濡らす。

これから男が出る行動は想像するまでも無く、火を見るよりも明らかだった。

「――手前ェの御仲間は目ェ付けてたんでな。中々贅沢なフルコー

スになりそうだ…！」
「……あ？」

どうやってこの檻を抜け出そうか考えていた思考が根こそぎ吹き飛び、代わりにドス黒い塊か何かに頭蓋骨の中身を占拠されたかのような感覚が襲った。

「いいぜありゃあよォ！　特にあの金髪と黒髪の雌なんざァ上等だ！　肉質も魔力も申し分ねェ！　ありゃア処女だろォ？！　犯しながら喰えんじゃねェかァ！」
「…五体満足で葬式出せると思うなよ、手前は……！」

怖い怖いと目の前で嘲る様に舌を出す男に、知れず拳がギシリと音を出した。

しかし届かない。硬くも厚くもない壁が、今は果てしなく難攻の壁として立ち塞がっている。

「最初はなァ、俺がお前と試合するタイミングで事を起こす予定だったんだが、ちょっと前の試合でやりすぎた上に、捕まっちまいそうだったからな。
うちの参謀が、ここまでプランを練りやがった訳だ」
「……お前は足手纏いって訳だ」
「そうでもねェさ。こうならなかったらお前を閉じ込める事もしなかったし、結果として王女も閉じ込められて其方側の戦力は実質激減した」

確かに実際にハルユキとこの男が戦って、引き付ける、または倒してしまうという元の作戦だったならこれ程絶望的な状況にはならなかっただろう。

「因みにこの建物の外壁と入り口にも結界が張ってあるから、助けは期待しない方がいいぜ？」

男の言葉に僅かに残った冷静な部分が舌を打つ。

「何だか知らんが、入り口を通るとここには何も無かったって認識でそのまま出て行っちまうそうだ。良く出来てるだろ？」

「…ああ、頭撫でてやるからこれ解けや。脳味噌までかき混ぜてやるからよ」

「っは、間に合ってるよ。手前ェはそこで、俺がお仲間さんを食い散らかすとこでも妄想してマス掻いてろや」

そのままゆっくりと背中を向けると、ふざけた様に後ろ手に手を振りながら悠々とその姿を夜の闇に隠していく。

「じゃあなァ、良い夜を――…」

やがて、外の騒ぎも遠く、完全に孤立した静寂な空間に閉じ込め

られた。

◆

「くそッ！　何だこいつらは！」

次から次へと押し寄せる死霊のような化物を切り伏せる。

背後には民間人が数人。そして目の前には、未だ折り重なりながら津波のように押し寄せる死屍の群れ。

防御力も機動力も人並み以下で、大した事はない。

しかし、馬鹿みたいな力とその数は決して侮れる物ではない。組み付かれればユキネでも振り解くのには時間が掛かるだろう。

「――させるかっ！」

次々と人としての可動限界を超えて伸ばされる手を次々と打ち落とす。その度に嫌な感触が手に伝って不快に顔を顰めながらも剣を持つ手は止めない。

この化物の元が何かは一目見た時に気付きざるを得なかったが、もう人間ではなく、戻る事は絶対に敵わない。

嫌でもそう思わされる外見の歪さが、幸か不幸か剣から迷いを取り払う役目を果たしていた。

「…ユキネ」

聞こえた声に、一際大きく剣を振りぬきその勢いを殺さないまま、後ろに跳び距離を取る。

「――――」

小さく紡がれた祝詞に応えて、神秘の一端がその姿を現す。

火と土が混ぜ込まれて、煮えたぎる溶岩となった魔力が、濁流のように死体の波にぶつかった。

唸りをあげながら大通りの中心を飲み込んでいく溶岩は、石のレンガで出来た地面も同じように溶解させ、一時的に焼けた浅い堀を完成させる。

「逃げるぞ！」

痛覚が無いのか死屍共は構わず足を進めるが、足が地面に張り付いたり足の筋肉が削ぎ落ちたりして、少ないながらも足止めとして機能していた。

「…何なのこいつら」

両手に銃を握ったエゼが、フェンとユキネに並走し、気味悪そうに視線を泳がせた。

前を行く民間人は兵士達と合流して既に安全圏に逃げ込んでいる。

「分かれよう」

フェンも丁度そう思っていたのか、ユキネの提案に即座に首を縦に振った。

「エゼは？」

「黙ってる訳ないでしょ。いずれ私の物になるものを踏み躙られちゃ敵わないし。連れを探しながら適当に遊撃するわ」

「私は、シアの所に行こうと思う。ジェミニが行ってるかもしれないが安心は出来ない」

「私、は…」

フェンも何か言おうとした所で、がくんとフェンの膝が落ちた。

「フェン！？」

崩れ落ちたその体を地面に叩きつけられる前に抱えあげた。

直ぐに死屍共との距離を確認するが、走ってきたせいかまだ大分距離はある。少しなら話す余裕もあった。

「…大、丈夫」

そう言って直ぐにフェンは体を起こす。

しかし夜の闇に紛れて良く分からなかったが、言葉とは裏腹にフェンの顔は青く血の気が失せていて、杖を持つ手が小さく震えている。

貧血がちでも、そう疲れてもいなかったフェンの急変にユキネは内心慌てふためくが、今はそんな事をしている余裕も無い事が無理矢理ユキネに決断を迫った。

「……エゼ。フェンを城まで連れて行ってくれるか？」

「…ええ、任せて」

「私は…」

「黙りな。そんなフラフラで死なれちゃ私が後味悪いでしょうが。

悪いと思うならさっさと体調戻して私がピンチの時に颯爽と登場しなさい」

まだ何か言いたそうだったフェンを無視して、エゼはユキネに目配せすると、そのまま方を担いで半ば無理矢理城の方に走って行った。

どん、と一際大きな音がして、地面が揺れる。

音は遠く、ぱらぱらと埃が舞うだけで、こちらまではさして影響は無い。

それに、そんな音もこれで何度目かになるためか驚きは余り無かった。

まるで深い曇天のように太陽も月も星も、その全ての光を遮断した空と、何かが焼ける臭いに、高く立ち上る黒煙、遠くに聞こえる断末魔。

それを見ていると、怖いというより、絶望して膝を付いてしまいそうになる。

”それ”を知る人間、それこそ体験した人間などもう居ない。

しかし、ここ数百年以上あり得なかったそれが、今のこの状況を

最も的確に指している事を、言葉とその意味しか知らないユキネですらも理解できた。

今、この町は戦争に飲み込まれていると。

◆
◆
◆

渾身の蹴りが空を切る。

いや、空を切るというのはあまり正しくは無い。

相手の体を蹴ったはずだったが、その感触だけがどこかに忘れてきたかのように存在しないだけだ。

ジェミニの足を横断させたその道化の体は直ぐに揺らいで消えた。

同時にその影から数本のナイフが飛来する。

「…埒があかへんなぁ」

このパターンももう何度目か、飛んで来たナイフを掴み取り後ろに放り投げる。帰って来る筈の音が無いという事はあのナイフも幻術だったのだろう。

飽き半分、挑発半分で零した文句にも相手は何も言わない。

上体をぶらぶらさせてどこか落ち着かない様子だが、仮面の奥からの視線だけは一瞬もぶれる事は無くこちらを見据えている。

殺す殺す殺す…と耳元で囁かれ続けていると錯覚するほどの濃厚な殺意は保ったまま。

しかし、その割には静かな攻防が続いている。

この前はほぼ一方的に勝負を決められたが、今度はそうはいかないらしい。

ジェミニは小さく舌打ちをして、思考を切り替える。

前回は相手が油断していた上に、大雑把な攻撃をしてきたためそれに乗じるなり利用するなりして攻撃できたが、今回は嫌に慎重だ。

加えて、相手の能力の厄介な部分が、ジェミニの攻撃の手も鈍らせている。

相手の字こそ知らないが、おそらく幻覚を見せる能力で間違い無いだろう。

幻でも認識すればある程度は傷つくとは言っても攻撃力は高が知れている。

故に、厄介なのは、回避能力の高さだ。

ここに置ける回避とはもちろん攻撃を避ける能力、という事でももちろんあるが、それ以上に、いつでもこの場から逃走できるという点の方が大きい。

何しろ幻との見分けは全く付かない。

一撃で完全に気絶させるか息の根を止めなければ、ギリギリまで追い詰めても苦もせずに逃げられてしまう。

今見ている姿も幻で、既に逃走している事さえもありえなくは無いのだ。

「ああ、確かに。ここじゃあお互いただ時間を潰すだけだね」

「…？」

肩透かしを食らうほどにいきなり殺意が消え、ライブラも体の緊張を解いた。

「実を言うとさ、君を倒しても精根尽き果ててちゃあんまり意味が無いんだよ。僕にもまだやる事があるんでね」

す、と音も無くピエロの仮面だけを残して、ライブラの体が空中に溶けた。

「――だから、先ずは他の事から済ませる事にした」

ギギ、と不自然に仮面の笑みが深みを増した。

現実ではありえないその現象に、目の前には幻しかない事を悟る。

気の緩みからか、一度だけ瞬きをすると、既に幻の仮面も飽和しそうな殺気も消えていた。

完全に敵がいなくなったと判断して辺りの様子を探る。

「何や、これは…」

一言で言うなら、酷い。

空の異変は目の前で見ていたから、まあそれは良い。

しかし、そこかしこから立ち上る黒煙や悲鳴。それに肉が焦げるこの臭い。

「ホンマに大国相手に戦争する気か…？」

正気の沙汰ではない。

その辺りにある小さな国ならば出来ない事も無いだろう。

しかし、この国は違う。この国は、土地こそそう多くは無いが、この大陸でも三本の指に入るほどの経済大国だ。

その分軍事にも金はあり、ザッと見た上での感想だが錬度はかなり高いはず。

高々数人で陥落出来るのかは疑わしい。

「まだ、何かあるんか…？」

切り札。増援。考えるだけならきりが無い。

先程ライブラが言っていた何か。それが関係があるのか。それとも他の人間が裏で動いているのか。

確かにあの男はまず私利私欲で動くような人間だ。ジェミニへの私怨を放り出して組織に献身する等考え難い。

調査した方がいい。

だが、一旦宿に戻って――。

「――ッ！！」

宿で待っている筈の少女の顔を頭に浮かべて、思考が凍りついた。

「あの野郎…っ！」

捻じ切れんばかりに宿の方を向く。

ライブラの私怨なら、この町にもう一人分だけ存在している。

その事にどうしてすぐ頭が回らなかったのか、自分を叱咤しながら倉庫街を走り抜けた――。

燻し銀

「……成程成程」

祭りの盛り上がり時を狙ったせいか、思ったよりも民間人の移動はスムーズに終わっているらしい。

大通りの様子からどうもこの町に人間が詰まっているようにも見えるが、実際には人口の過疎化が行われていただけで、住民自体が増えた訳ではない。

もちろん旅人や商人を合わせれば、いつもの倍に近いほどの人間がいるが、それでも百万に届くかどうかと言ったところ。

そのうち戦える人間は、百分の一以下。つまりは一万人。

そして、目的はその更に約千分の一。

「喰い応えがあるのは、それぐらいだな…」

この町の所々に建てられた物見櫓のような場所。既に下は動く死兵の海。

だが、被害はそれ程でもない。

最初のパニックからの兵士の個々人の対応が良かった。

驚く事に、まだ被害人数は百人かそこらと言う所だろう。

「大したモンだ…」

いやはや。

全く。

「――うちの参謀は」

王女と黒髪の隔離から、空から広がるこの結界の発動。そして死兵の行軍。

被害数。経過時間における進行状況。

ほとんど漏れる事無く、手の平の上。

繰り広げられている戦場が、あの女にはチェスの盤にしか見えていないのだろう。

自分ともう一人に、幾つかの絶対事項の他は好きに動いて良いと

言ったのも、恐らくある程度予想して、どうにでも対応できるから。

実際に自分の行動を予測するのは難しくない。

やりたい事をやる為に、あの組織に名を連ねて、今まで我慢を続けていたのだから。

「さァて…？」

その参謀から譲り受けた”御品書”に眼を落とす。

既に一番厄介だった二人の名前には大きく×が付けられていて、残るのは先程にも言った十数名。

闘技大会で土俵狭しと奮闘した名前から、軍人、ギルドの人間に、何故こんな男がと言うような人間まで事細かに記されている。

もう一度言うが、実際に自分の行動を予測するのは難しくない。

だからこそ、自分が何を期待されているかも、如何にして利用されるかも分かっている。

別段、知能比べをしようという気は無いのだ。

結局自分と言う駒には、自分以外を喰い尽くす以外に能は無い。

「全く、大したフルコースじゃねェか…！！」

ゆっくりとその時間から味わうように”御品書”に目を通して、眼を止めたのは、先程黒髪に言った女の名前。

運良く既にその姿は、ここから捉えている。

馬鹿にしたように、男は手を合わせて、小さく感謝の念を口にして、空中に躍り出る。

さてさて、詰みまではあと何手なのかと半ば呆れながら。

◆
◆
◆

それは本当に劇的で一瞬の出来事だったのだと思う。

水差しの水が暑さで傷むのを防ぐ為に、定期的に食堂の桶まで水を汲みに行った、恐らくあの時。

外で一際大きな声がしたのには流石に気付いた。しかし、外で騒いで大声で歌いだす事もそう珍しくは無い事だったので、今のもそれに似たものだろうと高を括っていた。

そして、容器とコップを洗って新たに水を容器に注ぎ部屋に戻って、窓際にそれを持って行った時、初めてその異変に気付いたのだ。

「――――っ！」

皮肉にも、その時は思わず声が出たんじゃないかと言う程に驚愕していた。

血が、舞っている。

それも、生きた人間のそれではない。

生きている人間は、もう既に少し待ちの中心へ行った所のギルドに逃げ込んでいるか、または――。

命を失っても尚、獣のような何かに蹂躙され続ける肉塊となってしまっている。

舞っている血は、獣が只管に砕く肉から飛び散っているだけだ。
まるで、生きている者が憎くて堪らないとでも言うように。

獣、ではない。無意識に目を背けたかったのかどうかは分からないが、それは明らかに獣と言うよりも適した言葉がある。

人間。それも、その腐った死体だ。

だからこそ、生きとし生けるものを妬み、憎み、羨んでいるかのように感じるのだから。

鼓動と呼吸が加速度的に乱れていく。

がしゃん、と思い出したように、シアの手から滑り落ちた水差しの瓶が破砕音を響かせた。

その音で我に帰るが、それでもうろたえながら一歩後ずさるのが精一杯で、膝を付かないように足に力を入れるのが精一杯。

「っ……？」

しかし、そこでおかしな所に気が付いた。

おかしいのはこの惨状になるまで、シアが無事でいられた事。

辺りの建物は壁を壊されたり、何かを叩き付けられたり、しまいには柱を壊されて半壊しているところさえある。

それなのに、この建物には被害どころか一切の干渉が無い。

だから、普通なら目を凝らさなければ分からない”それ”に気付けたのは、一度見た事があったからと、その疑問が根底として存在したからだ。

薄くフィルターのようにこの宿を囲っている壁は、入り口の方だけは一mほど間隔が余るように存在していて、化物はその境界で堰き止められている。

ほんのりと赤いその結界は、以前闘技場中を一瞬で覆ったある女性の結界と全く同じものだった。

あの人の勘の良さと能力の高さには本当に舌を巻いてしまう。

「――――…ぇっ」

しかし、胸を撫で降ろす暇を、戦争と言う状況は与えてはくれなかった。

（今……！）

聞こえたのは小さな泣き声。聞き間違いでなければ、恐らく子供。

方向は、左。町の中心に向かう方角。

距離までは分からないが、押し殺した声が聞こえてきた程だ。決してそう遠くは無い。

ならば、逡巡も許さない。

一心不乱に扉を押し開き、階段を駆け下りていった。

――どこか、役に立てる事に浮かれていたのだと思う。

だからだろう。

扉を開けた瞬間に、決意に満ちた足が一瞬で止められる事になったのは。

「ｋ．ｊｐリｋ：ｏ．ｊオｇじゃｐえｗｋｑｌれｍ．ｊｇｋｉ．ｊｋｆｒｍｊｋｌ、うｌ，ｗｋａれ；ｌめｗｋ――…」

外に出た瞬間、いや、やはり扉を開けた瞬間だと言った方がいいだろう。

視界一杯に広がっていた非日常に、一歩も足を進める事はできなかった。

口の端からは、血の泡（あぶく）が絶え間なく漏れ出し、それに構う事も無く、意味の分からない声を上げながら結界に爪を立てている。

意味も分からない言葉から伝わるのは怨嗟。

血液で破裂しそうな目が訴えかけるのは狂気。

苦しみもがく様に引っ掻き続ける腕は、救いを求めているようにも感じられる。

脳漿を垂れ流し、臓器を引き摺りてそこら中に血にまみれた道を

作り出し、それを間近で確認した途端、反射的に胃から逆流する物を抑えるように手で口を押さえていた。

死体は見慣れている。

あまり健康的な人生を歩んできた訳ではない。子供の死体と寄り添う様に眠った事もある。

この非日常は、嫌でもその”日常”を記憶から掘り出してしまう。

だから、そこから再び足を踏み出せたのは殆ど無意識のなせる物だった。

見ていると確かに嫌な記憶を思い出させられるというのに。しかし不思議と、昔を思い出してもそう怯えていない自分にも気付いていた。

足を止めたのは、驚きと戸惑いと、そして多分、安っぽい同情だった。

戸惑い半分の中で歯を食い縛り、今度は自分の意思で足を進める。

結界のお陰でこちら側の様子は感知できないらしく、動いても死屍の意識はこちらに向かない。

最初は足を引き摺るように、直ぐに早歩きに移り、最終的には家の淵を走って先程の泣き声の元に走りだしていた。

――見つけた。

視線を散らして直ぐに見つけられたのは本当に運が良かった。

今いる結界の端から数えて十数メートル。

隣の家の中、その崩れ掛けた入り口に挟まって身を縮めるように、5，6歳ぐらいの男の子が肩を震わせている。

声は届かない。それどころか出すらしない。ならば、この腕を届かせるしかない。

結界の終端で目を瞑って息を整える。

最後に一度深く深呼吸をして、眼を開け辺りに死屍がいない事を確認して。

戦場に、足を踏み入れた。

瞬間。

黒煙と、肉の腐った臭いが鼻をついた。

脳を侵食しているんじゃないかと言う程の濃厚な悪臭と、体を縛り上げたかのような緊張感が、神経を研ぎ澄まし、同時に膝を震えさせる。

一瞬で世界が変わった事を痛感させられ、恐怖を身を以って実感した。

あの死体が感知しているのは、姿なのか臭いなのか音なのか体温かはたまた魔力を感知しているのか。

分からない、が自然と影に隠れるように忍び足で進んでいた。

一歩一歩、最低限の空気だけをかき分けながら進んでいく。

走れば、往復で十秒もかからない距離。しかし、足はそれ以上速くは進んでくれない。

走ろうとした瞬間、周りを徘徊している化物の目が一斉に集中する光景を想像してしまい、それが重りとしてシアの足を縛っている。

堪えきれずに深く大きく荒れていく呼吸だけが鼓膜を揺らして、辺りは不自然なほどに静かだ。

何かが怨嗟を呟く音と、くちゃぐちゃと何かをすり潰す音は変わらず聞こえていたが、それを意識すると足が止まると無意識が命令して意識から飛ばしたのかもしれない。

そして、気が付けば、目的の家の入り口の脇まで到達していた。

男の子まではあと数m。未だ、俯いて肩を震わせている。

そう、顔を上げるまでは思っていた。

（……え？）

顔を上げた先では、男の子が必死な顔でこちらに何かを伝えていた。

次の瞬間、その身振り手振りの意味を理解するのを待ってはくれず、目の前に”それ”が現れる。

所々頭皮が捲れ剥き出しになった頭蓋。何処を見ているのかも分からない、血に濡れた眼球。

一番会いたくなかったその存在が、当たり前のように入り口を潜って目の前に現れたのだ。

「――ッ！？」

声が出なかった事をこれ程喜ばしく思ったのは初めてだったかも知れない。

声を我慢したと言うよりは、いきなり目の前に現れた化物に反応すら出来なかったといった感じで、シアはただその巨体を見上げていた。

のそり、とゆっくり体を引き摺るようにそれは一歩踏み出す。

体は一切動いてはくれなかったが、視線だけはその化物の動向を追う。

結局、死角に入っていたのかそれとも夜の闇に上手く紛れられていたのか、死屍はそのままシアの目の前を横切って、大通りの群れの方に消えていった。

堰を切ったように、荒い呼吸が、心臓も慌しく鼓動を始める。

しかし、一息付いている場合ではない。

同じく呆然とこちらを見ていた少年に一気に近付き、その手を握った。

もうゆっくりと亀のように進んでいる余裕は無い。その前にストレスで頭を遣られてしまう。

走る。

それを決断した瞬間に、どういう訳か本当に辺りの視線が集中する。

しかし、もうやる事は変わらない。宿までこの手を離さずに直走るのみ。

縺れそうになる足を必死に動かす。横に並んだ男の子も必死の形相で子供とは思えない程の速さで付いてきてくれている。

恐らく結界まではあと数歩。

間に合った、と安堵しながら男の子に笑顔を見せようとした瞬間。

それに気付いた。

家と家の狭間、そこから身を乗り出すように腐った腕が男の子に向かって伸びてきている事に。

咄嗟だった。

咄嗟に、男の子を思い切り宿の方に投げた。

投げたと言っても、そんなに大袈裟なものではなく、少しだけ前を走っていたことと遠心力を利用して前に押し出しただけ。

瞬間的に加速した男の子は地面を転がりながらも、何とか狂気の腕から逃れる事に成功していた。

だから、誤算はその化物の目の前に自分が尻餅を付いてしまっていた事。

異臭を放つ腕が、間をいれずに今度はこちらに伸ばされる。

あ、と驚くほど簡単に終わりを悟り、しかし――。

横からの白い斬撃にその死屍は腕ごと吹き飛ばされた。

「シア、無事か！」

短く切ってしまった金糸の髪が、突っ込んできた慣性に揺れる。

尻餅を付いてしまった自分に向けて、手が差し伸べられた。驚くほど安心してしまい、何も考えずにその手に向かって手を伸ばす。

余りに心臓に悪い事が連続していて。

――だから。

既に自分がいる場所が結界の中で。

差し伸べられたその手を握るには、結界の外に手を出さなければいけないことに気付かなかったのだ。

「――お帰り、シア」

現実に置いてけぼりにされた感覚の中で。

ドクン、と。

心臓だけが目の前の道化の仮面に反応していた。

握ったのは少女の手ではなく、見ていたのは金糸の髪では無かったのだ。

「いや、危なかったよ。タッチの差でシアが逃げちゃう所だった。全く誰だい、こんな厄介な物を作ったのは？」

コンコンと、結界をノックしている所を見ると、どうやらこの男でさえもこの結界を破るには骨がいるらしい。

この男が誰かを認めたくないように、思考が妙な所を行ったり来たりを繰り返している。

しかし。

その笑顔しか知らないような仮面。

年齢を特定できない声色。

黒く塗り潰したかのような装束。

もう、思考の九分九厘は断定している。最後の一片だけが目の前の存在を必死に否定していた。

「――…なぁ、御主人様には笑顔だろ？」

ストン、と。

その言葉と、仮面の向こうの眼に、その最後の自分も呆気なく屈服させられた。

周りの景色が急に色褪せて、意識が明滅し始める。

恐らく、抵抗する気を奪うために掛けられた魔法の一部。

男が何も言わないと言わずに機嫌を直しているところを見ると、恐らく自分は笑っているのだろう。

「言っとくけど、ジェミニは来ないよ。相当足止めに使ったからね。同じ失敗はしないさ」

グイッと間近に引っ張られて、無理矢理顔を上げさせられる。

それが本当だ、と自信有りげに広げられた腕が語っていた。

「全く、手間を掛けさせないでよ？　ほら、手を引かれなくてもちゃんと分かるだろ？」

犬を呼ぶように、鳴らされる手に向かって歩を進める。

周りの死屍共は、何事も無いように横を素通りして行って邪魔する気配は無い。

だから。

「い…や……」

今足を止められたのも何でかは、全く分からなかったのだ。それこそ、先程足を進められた時と同様に。

は？　と不機嫌に聞き返された声が鼓膜を揺らして、何となく気付く。

少しぐらい恐いからと言って、少しぐらい辛いからと言って、こんな所で尻込みしていては、笑われてしまう。

もう私は、この恐怖に打ち克てるものを知っている。

「いや、です…！」
「っ…、もういいよ。躾け直しだ」

こちらに黒い腕が伸ばされるのが分かった。しかし、視界はグルグルと回っていて動く事は出来ない。

しかし、何時まで経ってもその闇へと引きずり込む腕はやって来なかった。

ふと、何かが困惑したシアの頬を撫でる。

異臭、ではない。腐臭に慣れ過ぎていて、清潔な空気に嗅覚が過敏に反応しただけ。

「何だい、あんた――？」

気付けば、道化は遠く飛びずさっていて、肩にはごつごつした手

が乗っていた。

「――知り合いの連れが、如何にもと言った風体の輩にちょっかいを出されていたんでな。見て見ぬ振りは出来んさ」

「僕は誰だって言ってるんだよ！」

トントン、と肩を指で叩かれると、あっさりと掛けられていた魔法が解け、酩酊した意識が覚醒した。

その肩に回された腕を辿ると、何ともいぶし銀な男の人がゆっくりとタバコを燻らせている。

見覚えはもちろんある。

子供から金は取らん、といつも美味しいご飯を振舞ってくれていた、妙に似合う質素な黒のエプロン姿。

「なに、只のしがない酒場の店主だ」

承

上がる悲鳴が乾いた体に潤いを与えていく。

もっとだ。もっと殺して奪って犯せばいい。

お互いを削り合え。

戦え。

殴れ、突け、斬れ、殺せ、削れ、抗え、惑え、狂え、咽び泣いて。

――そして死ね。

今この場において、殺意は肥料で命は糧である。

さあ、余興はそこそこに。

狂乱も悲鳴も犠牲も足りないぞ。

努々忘れるな。

この場において倫理は鎖だ。

如何な殺意も狂気も、私が許容して血肉としよう。

見ろ。焼き付けろ。生涯その瞼の裏から剥がれぬほどに。

これ程嬉しい事は無いだろう？

嗚呼、血と腐肉が舞っている――。

◆◆◆

『こちら民街西第三区！　例の化け物の発生を確認！　数が多い！　至急増援を！』

机の上に並べられた交信用の魔石が次々と点滅して、芳しくない

情報ばかりを次々に喚いていく。

「か、確認されただけでも、その数二万超！　既に我らの戦力を大きく超え、それも未だ増え続けています！」

切迫した顔で通信を主な職務としている兵士が、悲鳴のような声で状況を報告する。

悲痛な顔でその報告を受け取ったのは、ミスラの一つ下の役職で二人いる副長の一人としてその腕を振るう、壮齢を少し過ぎた程の男。

先頭における腕よりも、傭兵だった頃の数多の経験を買われて副長の座についていたが、その彼にとってもこの事態は見識の埒外だった。

それでも、呆然と開きかけていた顎を閉じ、唇を引き絞る。

「隊長殿が戻られるまで私がここで陣頭指揮を取る！　各員、第一種戦闘態勢！　民間人を保護する事を最優先に行動しろ！」

今は気ままな傭兵ではない。

隊長は王女の探索で留守にしている。ならば、今この城の軍事におけるトップは自分だ。

頭がぶれた集団は容易く瓦解する。それだけは防がなければならない。

「繰り返す！　各員第一種戦闘体勢！　その能力の全てを持ってこの国を守るぞ！」

戦争は無かったとしても、この国の兵士は惰弱ではない。

演習を繰り返し、進んで討伐依頼にも参加していた。時には死者が出るほどに苛烈だった任務もあった。

なればこそ、この国は強い。

痛みも、死も、知人友人との死別も知った兵士の集団。

自分の経験は教えた。仲間の死で教訓と恐怖を手に入れた。

その錬度の程は、例え軍事のトップだと謂われる大国（ビッグフッド）にさえ負けるとは思っていない。

「町外（そと）と連絡を取れ。一応隣国に応援要請を取っておいた方が良いだろう」

「だ、駄目です。副長…」

「駄目だと？　何があった？」
「そ、外との通信は完全に遮断され、そ、それどころか、町の外に出る事が出来ません！」
「何だと…！？」

自然と窓の外に見える、町の端に目を向ける。

「あの空か…！」

生理的な嫌悪を与える汚らしい空の色。

あれは、空ではない。

街の終わりで完全に遮断され、地平線どころか山々さえも見えはしない。

「こ、これじゃ監獄じゃないか…」
「さ、更に報告…。町の外延部からこれまでとは比較にならない数の死兵の大群を確認…！　数え、切れません…！！」
「馬鹿な…！」

通信を受け取った兵士がまたしても悲痛な声を上げた。

男は声を荒げようとして、口を噤んだ。退路が塞がっていると言

うのはそれだけで危機的な状況だ。その事に少なからず自分も不安を感じている。

声を荒げると、それだけでその不安が伝染してしまいそうな気がしたのだ。

しかし、その逡巡は一瞬。

檄を飛ばそうと口を開く、が。

ポンと肩に乗せられた手に驚いて、思わず言葉が引っ込んだ。

驚いているうちに、その手の主が彼を追い抜いて一歩前に出る。

「――既に交戦した人間は判ると思うが奴等は魔術行使の産物だ。頭を潰しても止まらない。手足を潰せ」

歩み出たのは、男の肩ほどの身長しかない女にしては大きいブロンドの髪の女。

「民間人の数は多い。城の中に全て収容出来ない事もないが、魔術位階がＢ以上の者は東西南北四方の大通りにバリケードを作れ！兵士は住民の避難が終わるまで意地でもそこを防護しろ！死なせる

な！　そして決して死ぬな！」

目指すのは常に理想。日常においても、戦場においても、諦める事勿れと。

「耐えろ。倒せとは言わない。二十分だ、それだけ私に時間をくれ。そうすれば貴殿等の努力に報いる事ができる」

語調も荒く、彼女は、叱咤を叩きつけ勝利を謳う。

しかしそこで、小さくほんの少しだけ女は表情を歪ませた。

それも一瞬、小さく息をついた後にはその表情の名残さえも残っていない。

気付いたのはそれを後ろから見ていた男だけ。続けざまに出された声にも、そんなものは億尾にも出ていなかった。

「……最後に、ノイン様の探索を今を以って打ち切り、以後いない人間として扱う。探索に当たっていた兵士も民間人の保護に急げ！」

先程の表情の理由は、見るも明らかだった。実の子の様に溺愛し、同時に尊敬を捧げている王女を見限った。

この女が、国に身を捧げている王女に身を捧げているが故に。

「勘違いするなよ、見捨てる訳ではない。あの方は必ず戻ってくる。その時に、国が無くなっていて、笑われたくはないだろう？」

あの王女なら、確かに笑うだろう。

全くしょうがないなと、呆れた様に笑いながら、我らの失敗を取り戻してくれるはずだ。

たかが小娘に。

二十にも満たない女の身に。

頼りきりで我慢できていられるほど、彼らは出来た人間ではない。

笑いもそこそこに、隊長殿は高々と意思と誇りを持って反撃の烽火を上げる。

「――この国が、彼女におんぶに抱っこではない所を見せ付けるぞ……！！」

この国の兵士なら、彼女がどれだけ王女に心血を注いで生きているかは知っている。

それ故に、その言葉の重みを理解しない人間は居ない。

交信魔石を通じて、応、と彼女の言葉に応える声が部屋に響き渡った。

「…アデノフ殿。至急ギルドに助力の要請をお願いできますか？連絡を取る手段は無いので、直接出向く事になりますが」
「やはり、そう来るか…」

無理な注文に、それでも男は軽く笑ってみせる。この程度は、信頼の証でしかない。

「結構な金がかかると思うが。やれやれ、またお互いに給金が減りそうだ」
「それについては、本当に…」
「はっ。何、こちとらもういい歳で老後の準備まで終わっている。それに、まだ結婚祝いを渡していなかっただろう？」
「…アデノフ殿は確か御結婚は…？」
「ふん、生憎最近完全に失恋したばかりでしてな」

言って笑いながら男は腰に帯びた剣に手を添えた。

言葉の意味は分からずとも、その行為の意図は隊長殿も理解したのか、微笑みながら頷く。

「それに、俺はこんな黴臭い本部室よりも、血腥い所のほうが性に合っている」

しゃらん、とその場で剣を引き抜くと、そのまま扉を開け放ち、外に控えていた配下の人間に向かって邪悪に笑い上げた。

「ギリオ！　ミクラン！　ギルドまでの心躍る死屍狩り行脚だ！付いて来い！」

悲鳴のような声と、めんどくさそうな溜息が部屋の中まで聞こえてくる。

しかし、そんな頼り無さそうな仕草とは裏腹に、その二人が副長の腹心とも言える存在で、戦闘になれば三十の兵と並ぶほどの腕を持っているのは周知の事実。

階段を飛び降りるように下りていく足音に信頼を寄せながら、ミスラは表情を引き締めた。

「――何処の誰だかは知らんが、この国を嘗めるなよ」

ぼそりと呟いた兵の長は、またどこかに連絡すべく、王女探索の際、交信用に使っていた魔石を手に取った。

◆
◆
◆

屋根を飛び移りながら、最短距離で大通りにまで到達した。

宿から見るよりも、見上げる城が明らかに大きい。

ならば宿はもう少し外に向かった場所にあるはずだ。

屋根から飛び降りて、嘘のように”人通り”が無い大通りにゆっくりと降り立つ。

「……っ」

突如として現れた化物の群れに、必死で抵抗したのか、道には死体が転がっている。

転がっているのはその殆どが敵の死骸だが、動かなくなってしまえば、それはただの死体にしか見えない。

所々には敵が折り重なるように未だ蠢いていて、その周りにはまだ腐っていない人間の破片が散らばっている。

死んでしまって初めて、それを人間に近付く事ができる。

それは余りに、惨い事実だった。

「……急ごう」

まだ、じくじくと夜の闇から湧き出るように敵は数を増やしている。

それに、外に向かう道にも黒く蠢いている何かが見える。あれが宿に接触する前にシアの所に行かなければならない。

それに気付いたのは、何とか宿まで行こうと屋根に飛び乗ろうとした時だった。

幾つか隣の屋根の上に、何か小さい黒い影。

夜の闇のせいで動くたびに見失うが、それが近付いてきている事は分かった。

バン、と一際大きく何かを蹴る音がして、姿を完全に見失う。その一瞬後。

「――よう」

背後からの声と同時に、何かが着地する音、更に何かが涎を啜る音までもが、一同に鼓膜を揺らす。

一瞬後に首筋に寒気が走り、本能的に前に身を投げ出した。

続けざまにまた一瞬後、今度はガチン、と何かを打ち合わせた様な音が響き渡る。

「また会えて、思わず神様に感謝しちまいそうだ――」

生理的な嫌悪が背中を走り抜けた。

知り合いという訳ではないが、顔は忘れられない。アキラの腕を噛み千切ったあの男に間違い無い。

しかし、明らかにあの時とは様子が違う。明らかに以前より気分が高揚していて、漏れ出る殺意を戦場の空気と混ざり合う様が余りに馴染み過ぎていた。

「余計な問答は面倒だ。俺達が王女攫って痛ぶった。まだ何か必要か？」

「お前が…！」

得体が知れないとは思っていた。

誘拐と関係があるのではないかとも考えていた。

それは、どうやら的外れではなかったらしい。それを肯定するように男は黙って唇を歪ませる。

「ノインは何処だ！！」

「さァなァ、場所は教えねェけど心配すんな。お前等が信頼する黒髪と一緒だからよ」

「何…！？」

「もういいじゃねェか、あんな奴等はよォ、なァ。今お前は俺としけこむ事だけしけ込むだけ考えてりゃ良ィ。そうだろ？」

言葉を返す代わりに、困惑で頭が真っ白になる。

何だこの男は。

矜持も誇りも執着も何も無い。

ただ事務的に。

言い方を変えれば、ただ一途に直向きに、自分の欲しか見ていない。

「じゃあ殴るぜ、避けんなよ――？」

迫ってきたのは、拳とも掌底ともいえない中途半端な形で固められたただの手の平。

鎧で受けようとして、その手に体の一部が噛み千切られる光景が脳裏に浮かんだ。

咄嗟に剣で体をかばう。

「知ってるか――？」

防御した剣ごと体が持ち上がる。

普通の力ではない。
普通の速さではない。
加えて、普通の戦い方ではない。

続けざまに、何処までも変則的に、斜め下から伸びてきた右足がユキネの体を強かに打ち付けた。

「肉ってのは、叩けば叩くほど柔らかくなるんだぜ？」

更に上空に押し出され、肺の中の空気が一瞬で押し出される。

しかし、男の攻撃の手は止まない。どういう跳躍力を持っているのか既に地を蹴り、空中にその身を移している。

「嘗めるなぁっ！」

空中に投げ出されている足が、”足場”を見つけて、そのまま地面に向かって突進した。

男の目が驚愕に押し広がり、しかし刹那、男の口元に笑みが広がり、嬉しそうに右手を引き絞って振り下ろされた剣に叩き付けた。

響いたのは、以外にも金属音に近い音。

感触から考えても何かを斬った感触ではない。

こちらは重力に引っ張られながら、体重も全て乗せ切っていると言うのに、空中で一旦お互いの動きが止まる。

それは間違い無く、力が拮抗した事を意味していた。

更に振り上げられた左手に、飛び退いたのはユキネの方。

力比べで戦うには分が悪い。

「そう、そうなんだよ。このぐらいが食べ頃だ…！」
「…なるほど。ハルからノインを奪われて逃げてきた訳か」
「ああ？」

恍惚とした表情を露にしていた男が、露骨に嫌そうな顔をして顔を上げる。

しかし直ぐに、自分が言う事を想像でもしたのか、愉しげな笑みを浮かべた。

「――あの黒髪なら、当分は動けねェぞ」
「何だと…？」

まただ。

また懲りずに、動揺から隙が出来ていた。

気付けば、地面を擦るように体勢を低く男が接近している。

しかし間に合わない事はない。先程の二の舞になろうとその腕の延長線上に剣を構えた。

「――ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

しかし、その剣に何かが触れることは無く。

地を這う脅威は、頭上から飛来した闖入者に顔面を蹴り飛ばされて、すぐ傍の家屋に突っ込んだ。

ギッと、飛び込んできた勢いを殺した拍子に靴が摩擦を殺した音が鳴る。

何時にも増して、ボサボサした金髪が僅かに揺れた。

「何さらしとんじゃ、ボケがぁあッ！！！」

荒々しい語調の闖入者は、知っている顔。

◆

「あ、アキラ…？」
「ユキネ、こいつは俺にやらせてくれ」

ユキネが戸惑った声を出しても、アキラは反応こそするものの、男が突っ込んだ家から目を離さない。

「いやでも、こいつはこの状況を作った人間で…」
「はっ。また口実が増えたわい」

口調もやや粗暴に、さらに、目尻が吊り上り、額には青筋も浮かべている。いつもの様子ではない、が、冷静さを欠いている訳ではない。

アキラから目を離して、宿の方を見やる。他の通りよりは進行は遅いようだが、危機的状況は変わっていない。

「…知り合いが危ない。ここを任せていいか？」
「ああ、ぶっ潰してやる」

短く返って来た返事を最後に、アキラが一点に集中を傾けた事が分かった。

「…直ぐ戻るからな！」

地を蹴って、屋根に飛び乗る。走り出して直ぐに後ろから、怒声と轟音が背中を叩く。

しかし、振り向く事はどうしても躊躇われた。

走って走って、ただの黒い蠢く塊だった死体の山が、ちゃんと死体の山だと認識出来るような所まで行き着いて、やっと振り返る。

しかし、もう姿も音も確認する事が出来なかった。

「あ……」

宿はまだ見えない。

しかし、随分と西へ行ったところに、同じように屋根を飛び移りながら険しい雰囲気で疾走している人影を見つけた。

「ジェミニっ！」

声に反応して、顔がこちらに向く。

いつもはあまり見ない真剣な顔に見間違いそうになるが、確かに信頼している顔の一つ。

「――シアをっ！！」

宿の方向を指差して、それだけで事足りた。

ジェミニが黙って頷いたのを確認すると、今来た道を全力で駆け戻る。

先程自覚したが、やはり昨日の疲れからかほんの少し体が重い。ほんの少し、背中に赤ん坊を背負っている程度だが、拮抗した勝負では命取りになる。

集中力を高めながら、ノインの時のように体を軽くしようと念じてみるが、どうにも上手くいかない。

結局、体に疲れという重りを残したまま、先程アキラに託した場

所まで到達した。

「くそ…！」

この場所を空けたのは、おそらく5分程度。

しかし案の定。

辺り一帯の家屋を尽く破壊した跡だけが残っていて、当人達は消えている。

戦いの気配を追おうにも、そんな物はそこら中に転がっていて、どれかを特定するのはほぼ不可能。

強く舌打ちをして、がむしゃらに走り出した。

◆
◆
◆

「も、もう持ちません！　兵を引かせて城門を閉めましょう！」

「駄目だ！　まだ外に何人の民間人が居ると思っている！　ここは

最後まで閉じはしない！」
「し、しかし…！」

西の城門の両脇に付属している円筒形の塔から悲鳴に似た声が響く。

窓からも既に報告にあった敵影が蠢いているのが見えていた。

この城は、町の中心に位置しているが為に、四方に伸びた大通りに対応するように四つの門が建築されている。

一番大きいのが南にある正門で、他の三つの門はそれに比べると裏門といった程度の大きさだが、それでも人間十人が横一列で入れるぐらいの大きさはある。

敵が侵入したら十分致命的になる大きさだ。

「も、もうバリケードが…！」
「ほ、本部に連絡を…！」

重々しい音と共にバリケードが崩れたのを見て、流石に狼狽し始めた兵士が、交信手段である魔石を握り締める。

「……え？」

そして連絡前に一方的に聞こえてきた本部の声に、思わず呆けた声を出した。

「し、少尉！　あれを！」

部下が出した声に振り向けば、その部下が崩れたバリケードを指差してまた悲鳴を上げている。

いや、バリケードを指しているのではない。

指しているのは、退避する兵士達の流れに逆らうように死屍の群れに歩を進める一人の男。

軍服は身に着けておらず、そこ等の酒場に居そうな格好で、明らかに我々が守るべき民間人の一人だ。

「何故まだあんな所に一般人が…！」

「…いや、待て」

粗方の一般人の避難は既に完了している。

完全とは言い切れないが、あの辺りはもう家屋の中まで探索は済ませているはずだ。

「まさか、…あれが？」

魔石の向こうから、ミスラ隊長自ら告げられた言葉。

ただ一言。

『二十分ご苦労だった』と。

時計を見た。

余りに心血を注ぎすぎて忘れていたが、確かにもう時計の針は大分進んでいる。

刹那、肌に痛いほどに濃密な魔力が迸った。

その源は言うまでも無く、先程の一般人。

燦然と煌く『炎』の文字。

それ以上何かを言う前に、尋常ならざる大きさの炎の波が、死兵の波を飲み込んだ。

◆

――東門

カシャン、カシャン、と不自然な足音に振り向いた。

「さて、こちらはまだ余裕があるかの」

「は？　爺さんどこから来たんだ。早く城に避難してくれ」

「…お、おい、馬鹿野郎…！」

突然現れた老体に顔を顰めて詰め寄ろうとした兵士を、隣に居た兵士が顔を青くして引き戻した。

腕を引かれた兵士は困惑した顔を、その兵士に向けるが、再び老体に視線を戻した時、自らも顔から血の気を引かせる事になる。

「これは、ムイリオ殿！　どう言った御用件でしょうか！」

「何、少し手を貸してくれと頼まれての。爺のしわがれた手じゃが、使わせて貰えるかの」

恐縮したように、この部隊で一番偉い筈の大尉が平伏したように敬礼した。

ムイリオ。

最近配属されたばかりで実戦が初めてである彼でも、その名前は知っていた。

「まあ、こんな老い耄れに出来る事なんて高が知れとるが…」

そう言いながら、後ろに組んでいた手の内の片方を掲げた。

粛然と仄めく『雲』の文字。

瞼を瞬き、目を再び開けた時には、静かに要塞が居座っていた。

◆

――南門。

バリケード越しに、死屍に向けて兵士が次々と槍を放っていた。

腐っているせいか、その体を脆く、足に突き刺されば根元から崩れ去り、それだけでその一体は無効化する事が出来る。

「また入り込んだぞ！」

５メートル離れていない場所から聞こえる声に反応する暇さえない。

目の前にも、倒れた死屍を足場にして新たな死兵がバリケードを越えて来ている。

掛けられた足を槍で突き砕く。

「くそ…！」

その死屍は打ち倒したものの、力を入れすぎたのか槍が中頃から圧し折れた。

間合いは短くなるが、腰の剣に手を伸ばそうとして、

「――――ッ！！」

呼ばれた自分の名前に振り向く。

そこでは、一際グロテスクな死体が、肉が半分溶けた様な腕を振り上げていた。

あ、と自分でも情けない程、惚けた声が口から出た。

パンと響いたのは、自分の命が弾けた音だろうか。

その説に賛同するかのように視界は黒に染まっている。

「――ご苦労さん」

しかし、それはただ恐怖に目を瞑っていただけで、肩に置かれた手の感触に目を開けると、そこに見上げるような巨漢が佇んでいた。

「ギリギリだな」

この町の人間なら誰もが名前を知っている。

王女と並ぶほどの知名度で、この町から出た最強の戦士と謳われる、無手の傭兵。

その巨躯からは考えられない程の軽やかさで、バリケードを飛び越える。

既に目前に死兵の波は押し寄せていた。

が、気後れもせずに篭手を嵌められた腕が振り上げられる。

悠然と輝く『地』の一文字。

全力で地面に叩き付けられた拳は、その先何十メートルもの地面を裏返し、散る破片で死屍共をバラバラに解体した。

◆

◆

◆

道行く人々を眺めながら、暇を持て余し欠伸を噛み殺していた。

町の外縁部から第二陣を放って、進行状況は予定の９０パーセント程。

予定していたよりも遅れているのは、王女という頭を失った割に機能を発揮している国兵の働きによる物が大きい。

しかし、それでも想定の範囲の外ではない。

時間が経つにつれ、その違いは揉み消されていくだろう。

次々と生み落とされ、町の中心に進軍する屍兵の数はおよそ五万。
全体数の十分の一にも達していない。

しかしやはり、大国（オウズガル）だ。

国民の中にもそれなりに戦える人間は多く、闘技大会に出ていた人間がネックとなっている部分も多い。

つまりは、程好い感じに盤上は荒れている。

「さて、そろそろもう一手間加えようかしら」

やれやれと女は腰を上げる。

「――ほら、行ってらっしゃいな」

ズル、と足を引き摺りながら進む様はその他大勢の死屍と変わりは無い。

しかし、その右半身は人体でもなく、腐肉でもなく、ただ空虚に影が蠢いている。

ただ、その右目。

その右目にだけ拳大の赤い宝石が嵌っている。

「――”略奪者（サクリファイス）”」

ズル、と現れたときと寸分変わらない音を立てて影に沈んだ。

極地にあるチェスでは、歩兵が敵陣の最奥に到達する前に値千金の練兵に変わると言う。

チェスの盤に、いきなりそれを投入してもまた、面白い事になるだろう。

さあ、もう少し、盤の上を荒らしておくれ。

◆
◆
◆

座り込んだまま、目の前の壁に軽く手を触れてみる。

思ったよりも柔らかくは無く、強化ガラスのようなしなやかな手触り。

寄りかかるぐらいでは決して壊れはしないが、確かにハルユキが殴ればたちまち壊れる程度の強度だ。

壊せる、しかし壊す訳にはいかない。その板挟みがどうしようもなくハルユキを苛立たせる。

小さく舌打ちをすると、驚くほどのその音が反響して自分の鼓膜を揺らす。それを聞いているしかない自分がもどかしくて仕方がない。

固めてしまった拳がやり場を失って、自分の膝でも殴り飛ばそうかという思いが過ぎる。

それを思い留まったのは、腕の中で小さく動く気配を感じたからだ。

「ノイン…？」

顔を向けた時には、気のせいとも思ったが小さく名前を呼んでみると閉じられていた瞼が僅かに震えた。

そのまま薄く瞼が開いていく。

ある程度瞼が開いていって、両目の焦点がゆっくりとハルユキに合わせられると、笑いたかったのか泣きたかったのか、その目が細められた。

「…馬鹿ね、何でいるのよ…」

「……おいおい、命の恩人に御大層だな」

薄く目を開けたノインの第一声がいつも通り過ぎて安心してしまい、つい軽口で返してしまう。

しかし、目は虚ろで呼吸は荒いままだ。目を覚ましたからといって放り出すわけにもいかない。

「貴方がここにいるって事は、まんまと術中の中って訳ね…。私を

心配するなんて何様なの？」

「悪いな。罠の雰囲気全開だったんだが、油断した」

余りにいつも通り過ぎる彼女に苦笑しながら、そう言えば地面に置きっぱなしだったお茶を飲ませてやろうと一旦ノインを地面に降ろそうとして。

袖に小さく掛けられた力に気付いた。

その方向に目を向けると、少しだけ目を伏せて唇を震わせる。いやその体も腕も震えていて、その震える腕で毛布越しに弱々しくハルユキの腕を掴んでいた。

その様子に、ハルユキは逆に目を見開かされる。

他の人間なら、簡単に見分けは付いた筈だ。

だから、目の前の彼女がそうなっている事を理解するのに時間が掛かったのは、普段の彼女からは余りに想像し難いものだったからだと思う。

「……ごめんなさい、嘘を付いたわ」

絞り出された声ですら震えを帯びていた事で、彼女が何を思っているのかようやく確信に至る。

「本当の事を言うとね。目を開けた時目の前に貴方が居てくれて、凄く安心したわ」
「…そうか」

膝の上に乗せて少しだけ強く体を抱き寄せると、もう片方の手が背中に回り、ゆっくりとその手がハルユキの背中に押し付けられた。

「――結構痛くて辛くて、今は少しだけ、寒いわ」
「ああ」

ほとんど締め付けるように抱きしめると、小さく苦しそうな吐息を漏らして、それでも文句は言わずに背中に回された手に力が篭る。

しばらくそのままじっとしていて、大分ノインの体温が戻り震えが収まってきたあたりで、肩に置かれた彼女の頭から口を開く気配がした。

「……ね」
「ん？」

ハルユキも短く聞き返すと、もぞもぞと体を動かして肩に置いていた頭を少しだけ離してハルユキの顔を覗き込んだ。

「……エッチな事したいの？」
「…放り出すぞ？」

愉快気に笑う仕草は、いつもの物とそう変わりは無い。若干疲れは見えるものの、もうあの珍しい表情を見れはしないようだ。

いつものように放った軽口に、ノインは待っていたように顔を綻ばせる。

「何よ、つまらない男」
「…随分余裕だな。外の状況分かってないのか？」
「分かってるわ。でも、頼み込んでも貴方がこの結界を壊してくれないのは分かっているつもりだし、…それに」

一旦言葉を切り、特有の挑戦的な目で再度言葉を繋いだ。

「私が手塩に掛けて育てた国を、嘗めてもらっては困るわね」

あまりに自信満々にそう言い放った。

全くもってその自信には脱帽するばかりだが、もちろん間違っている訳ではない。

「……成程。確かに外の奴等を信頼するしかないな」

「そ。だからこそ今は休むから、エッチな事は出来ないわ。ごめんなさいね」
「それは…」

改めて軽口を放ってやろうとして、途中で言葉を止める。

「どうし…」

直ぐハルユキの異変に気付いて、声をかけてきたノインにも人差し指を唇の前に立てて沈黙を促す。

そして、それは間も無く再びやって来た。

『ギィ』と、余りにわかり易い鳴き声だった。

再起

「東と西、更に南城門前に再びバリケードを設置しました」
「よし、そのまま怪我人を下げたら、被害を避けるのを最優先に行動しろ」

通信兵が小気味良い返事を返したあと、先程のミスラの指示を伝えていく。

とりあえず敵の侵攻を止められたと思っていいだろう。

敵が現れてから三時間ほど。

窓からは怪我をした兵士や、民間人達がそこら中に確認できる。

いかにこの城が広いといっても、流石に前庭や練兵場だけでは収容できないため城の一階を完全に開放している。

が、それでも足りていない。

未だに外で孤立してしまっている人間を収容すれば必ず足りなくなる。

無断で場内を開放した事についても、文官共が口やかましく言ってくるだろう。

まだまだ問題は山積みだ。

「――ミスラ様」

とん、と短い音と共にミスラの背後に男が現れた。

目以外を全て隠した丈長の黒装束。ここが蝋燭で照らされていなければ、さぞ夜の闇に紛れている事だろう。

「結果が出ました」

俗に言う隠密といった存在で、それ以外にも手広く仕事をやって貰っているが、基本的には汚れ仕事。

残念な事だが、組織が機能するためにはこういう存在も必要だ。

「それで？」

「は、やはり回収した死体の幾つかが、ここ最近の捜索願者と一致しました」

「…戻るか？」
「いえ、殺害された後で操られている様なので…」
「……そうか、苦労をかけた。引き続き魔術の解析を進めてくれ」

小さく頷いて、意識の隙間を縫うように黒装束は立ち消える。

現れてから消えて、その後にも、気配の残滓さえ残っていない。
その仕組みも機構もよくは知らないが、信頼は限りない。

王女が主催して隠密を引っ張り出し、無理矢理酒を飲み交わしたのはこの国ぐらいだろう。

王女が誘拐された事で、怒りに目を凍らせた事もまだ記憶に新しい。

その努力の為にも一刻も早く、敵の正体をあげる。

このタイミングだ。誘拐とこの攻撃が無関係だと言う事は無いだろう。

敵はとりあえずは封じた。

ならば、今の所残る懸案はそう多くは無い。

「…正門側の通りはどうなってる？」

「はい、相変わらずまばらに死者が発生するだけで、他の三通りのように大規模な侵攻も確認されていません」
「…そうか。しかし万が一もある。最低限の人数を配置して待機させておいてくれ」

これは懸案だ。あくまで問題ではない。

しかし、この異例中の異例といえる状況の中で更に不自然な状況は残しておきたくは無い。それが無理なら他の三箇所と同じように、誰か一人手練を配備しておきたい。

「ガララド。そちらは大丈夫ですか？
『ああ、こっちは粗方終わったぞ。キィラルさんとムイリオさんも問題無いだろう』

しかし、他の門から動いてもらう訳にもいかず、他に任せられるような人間も心当たりが無いし、ハルユキの一行も直ぐに連絡は取れない。

「正門を任せられる人を探しています。誰か…」
『――ああそれなら、二人に頼んだ時に一緒に頼んでおいた。まあ、頼む必要も無かったと思うがな』
「正門にですか？　しかし誰も…」

改めて正門の方を見ても何も無いし、誰もいない。

『ああ、丁度店に居たからだろうな』
「…ああ、と言うと、ラスク殿ですか」
『そう言う事だ。俺はあの人より頼もしい男を他に知らんよ』

◆
◆
◆

「あ〝ー…もう、鬱陶しいなぁッ！」

不愉快を隠しもしない叫び声を上げながら、ラィブラの背後から無骨な銀の杭が突進する。

「…ふむ」

それを見比べるように一つ一つ観察しながら、避け切れない物にのみ左手を翳して軌道をずらす。

結果、そこから一歩も動かないまま、ラスクはラィブラの攻撃を無に帰した。

それも小脇にシアを抱えたまま。

下ろしてくれとシア自身も何度か目で頼んでみたが全て黙殺されてしまっていた。

「…ああ、思い出した。君はあれだ。あの食道楽の”メニュー”に書かれてた奴だ、ラスクだったっけ？」

憎々しげに、顔を上げるライブラの視線の先には相変わら涼しい顔を保ったまま。

ライブラの言葉に何か返すわけでもなく、杭が突き刺さったはずの地面を見て、眉根を寄せている。

「…先程からのこれは、つまり幻か？」
「そうさ。でもそれで死んだら脳が勝手に死ぬから気を付けてね」
「それは大したものだ」

そこで、フッと咥えていた煙草をシアを抱えている方向とは逆に吐き出した。

「やぁっと、本気を出していただけるのかな？　ん？」
「先程から言っている。俺はもう全身全霊だ。故にお前に攻撃して

いる暇は無い」

そう、それは見れば明らかだった。

シアはもちろん、張本人のラスクも当然知っている。しかし、それを背にしていたラィブラだけが未だにそれに気付いていなかった。

ラスクの言葉に困惑していたラィブラが、更にシアの視線にも気が付き、凄い勢いで振り向く。

シアは、後ろを向きそれも仮面で隠れているラィブラの顔が、驚愕で固まるのが手に取るように分かった。

肉の壁。

うねうねと蠢くそれは、下から上まできっちりと地面と垂直に伸びている。

今見たところで十メートルはあるだろうか。前へと進めない分、積み重なっているのだ。

何十メートルもあるこの大通りを、その場所から一ミリたりも進入を許さんとばかりに風が静かに通せん坊をしていた。

それを見たラィブラが、堪らないとばかりに仮面に右手を押し付

け、悲壮ぶって空仰ぐ。

「…ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、はいはいはいはいはいはいはいはいはいはい。なるほど、アハハハハそういう事ね中々愉快な事じゃないかふふふふふふっふ」

仮面の表情がグルグルと変わり、その代わりに隙間から一貫して笑い声が漏れ続けて。

それが唐突に止む。

「――嘗めるのも、大概ニね」

雰囲気が変わった。

冷気のような空気が足元から這い上がってくる。

それが、殺意を飽和せんほどに孕んだ魔力だと言う事に遅れてシアは気付いた。

足から伝って心臓に這い上がるように、体温を下げていく。

不意に、ラスクがシアを放り投げた。

放り出されたシアは重力を思い出す前に結界の中まで運ばれて、結界に入った瞬間体を支えていた風が消えて地面に落ちて音を立て

る。

その余裕の無さラスクが感じている危機感の大きさを感じさせた。

「…大した物だよ。お世辞抜きにな」

「なら、それ相応の力を見せろよ。別にあんなトロいのお前には関係ないだろ？」

その言葉に、今度は驚いた顔でワザとらしく目を丸くすると、芝居がかった調子でフッと鼻で笑って見せた。

「――馬鹿な事を言う。何故自分の住んでいる町より、貴様や俺なんぞを優先せねばならんのだ」

「なら――」

何の予備動作も無しに道中から剣が突き出す。

何本、何十と言う数ではない。大通りの地面が見えないほどに埋め尽くされた剣の数は万にも手が届くだろう。

そして今度はその剣が一斉に震えだす。

ゴボッと音を立ててラスクが立っている場所を中心に地面が折れ曲がる。

幻。

それは知っているならば、理解する事は誰でも出来る。

現にシアもラスクもその事は嫌と言うほど知っていた。

ただ、これは本当に幻なのか、と。

剣同士が擦れる音も、小さな砂塵が頬を叩く感触も、剣に染み付いた臭いまでもが、その思いを増幅させる。

もしかしたらと言う思いは、頭の片隅に存在して小さくなる事はあっても絶対に消えはしない。

そして、ライブラの幻惑は、それを掬い上げて増幅させる。

「死ネ」

有り得ない幻惑が、顎のようにラスクを飲み込んだ。

「――言っただろう」

ライブラがその生死を確認する前に、平然としたラスクの声が響

いた。会話の間に何事も無かったかのような声色にライブラの目が見開かれる。

その姿は、剣の顎を一歩だけ超えた所。つまりは、ライブラの目前。

「俺は既に本気だ」

言いながら、肘の先まで捲くられていた服の袖を上腕まで更に捲り上げる。

そこには、凛然と輝く『嵐』の文字。

「――加護付加”芳……」

フッと、ほんの僅かに鼻を擽るのは、温かい煙草の臭い、珈琲の香りに花の華やかさ。

ラスクの能力の一部。鼻から空気を思い切り取り込みたいと思えるほどの誘惑。実際に自分がそれをしようとしている事に背筋が凍る。

しかし、身構えるライブラに対して、ラスクは唐突に動きを止めていた。

「…ああ、止めだ」

捲り上げた袖を、疲れたように戻すと懐の煙草に手を伸ばした。

それ所か、煙草に火を付けながら背中を向ける。

「……その背中にナイフを突き立てても良いってことかい？」

「その時は避けるさ。逃げるのは得意だ」

「へぇ、相手を捩じ伏せるほうが得意に見えたけど？」

「……正直、俺が本気で戦ってもお前に勝てるかは分からん。間違い無く無傷では無理だろう？　俺は傷を負う訳にはいかんのさ」

「……はァ？」

吐いた煙が、戯れに起こされた風で渦を巻く。

それが、もう既にラスクから戦意が無い事を悟らせた。

意味は分からないが、そんな事を考えるのも面倒になり、途端に白けてしまったライブラは手にナイフを滑り込まる。

しかし、振りかぶった手は耳に届いた異音に自然と止まる事になった。

だん、だん、だん、と。

その音は次第に大きく間隔は短くなっていく。

「――俺はこれでも料理人でな。この腕は、戦争よりも、戦争の後に馬鹿共の腹を満たしてやるのが仕事なのさ」

音の方向に顔を上げた時には、渦巻く紫煙を切り裂いて、何かが視界に割り込んできていた。

「渋いな、おっちゃん」

「ありがとよ」

その何かに顔面を蹴り飛ばされながら、憎くて堪らないあの声が鼓膜を揺らした。

音を立てて仮面が割れる。砕ける破片の向こうにその姿を確かに捉える。

ライブラの玩具を奪い、気取った表情で物を言い、自尊心を粉々に砕き切り、この俺を見下し、今また踏み躙るように足蹴にした男――！

「…おっちゃん、シアちゃん頼むで」

沸き上がる。

殺意が、魔力が、そして削られた唇から狂喜の笑い声が。

「――――ッジェミニィィいィィッぃイいイぃッ！！！！」

ライブラの怨嗟の声が激昂となって響き渡る。

ジェミニも全神経を集中させて、拳を握る。

――だから当然。

その直ぐ後ろで、異変が起こっている事など知る由も無い。

びくん、と密かに町中の腐肉が痙攣した。

◆

それは、他の大勢と変わらぬ場所に、変わらぬ大きさで進んでいた。

ズルズルズルズルズルズル。何を求めるでもなく彷徨い続ける。

そして変わらず進み続けて、”足を止める”。

それが、一番初めに他と違いを画したのだ。

――何だこれは、と。

何故このような所で、馬鹿のように折り重なって屯している。

腐りかけた目と赤い宝石の両眼で空を見上げると、何か視認し難い何かが同胞の行く道を塞いでいるらしい事が分かった。

同胞――？

自分で浮かべた思いに首を傾げる。どうにもその言葉はしっくり来ない。

もっと近い。もっと密接に繋がっている。

そうなる事が定められていた様に、そこで腐った頭が自分が出来る事を思い出す。

肉の壁に、慈しみを以ってゆっくりと手を添える。

慈しみは当然。これは俺の体の一部。その証拠に右手の先は既に一体化している。

添えた右手から腐り落ちかけた神経を通って雷が走り、接触が続いている分の肉体が痙攣する。

もう少し強めに雷を送ると、周囲の死体も同時に鼓動する。

――最後にもう一度雷を通すと、町中で自分の鼓動が聞こえた。

一手

ただ進むだけしか知らなかった死体達が、不可解な動きをした事に気付いたのは、自分以外に何人居たのだろう。

隣で双眼鏡を覗いていた奴等が、声を揃えてた所を思うと、少なくない人間がその変化に気付いたのかも知れない。

とにかく、予兆はあった。そこで気付くべきだったのだ。

十メートル前で一度痙攣したその死体が、唐突にその姿を消した。

見失ってしまったと、何気なく左右を見渡していた自分が、今になって恨めしい。

もっと危機感を持てと自分に強く言い聞かせるべきだったのだ。

命を落とすその前に。

しかし、想像しろというのも無理な話だったのかも知れない。

今までは半病人のようにうろつくしか能がなかったやつ等が、いきなり何メートルも跳躍して後ろに回り込むなどと想像できる訳が無い。

我らは歩兵（ポーン）で、戦うべきもやはり主に相手の歩兵（ポーン）だ。時に歩兵が勝負自体を決したり、重要な役割を果たしたりもするがそれは別の話。

そう我等は歩兵なのだ。

敵の歩兵と戦うのをその旨にする。

だからこの違和感は。

我等の心臓を事も無く握り潰すこいつ等は。

きっと歩兵の振りをした騎馬兵（ルーク）だったのだ。

歩兵は敵陣のバックランクに到達した時にだけ、進化を許される。

しかし、それとは明らかに一線を画している。

追い詰めたつもりもないし、敵が全身を止めたわけでもない。やはりこいつらは、歩兵の皮を被った騎馬兵だったのだ。

◆

そうとでも考えないとやっていられるか。

お互いが対峙して、十秒も経たない内に優勢側と劣勢側は定められた。

それこそ、ラスクがシアの元に着く前に決まってしまうほど迅速に。

「――ああ〝ッ！！」

既に仮面が剥がれ落ちて、醜い素顔を晒しているライブラの顔面に、躊躇無く拳が突き刺さる。

「硬いな。まあ、ゾディアックに居るならお前も普通やないのは不思議やないか…」

ライブラは一度地面に強くバウンドして、地面を転がって家屋に突っ込んだ。

死にはしないものの、起き上がったその口からは血が混じった涎が糸を引き、目を丸くして、驚愕を露にしている。

「ば、馬鹿か、お前はぁっ…！」

戦慄きながら、瞠目するラィブラに息一つ乱れずにジェミニがゆっくりと歩み寄る。その腕に刺さった短剣を引き抜きながら。

「幻はもう飽きたわ。使おうとした瞬間ぶん殴るで」

攻略。

などといえるほど大それたものではない。

ただ、相手の中で魔力の流れが変わった瞬間に全速で拳を叩き付けるだけ。

姿を消した直前なら、空気の粗を追う事も出来る。

全て、己の身を投げ出しその上、時間を早めた上での結果に過ぎないが、ラィブラは指して攻撃力が高い訳でもなく、またジェミニから言えば失血もそう怖くはない。

己の身さえ省みらなければ、有効な手段となる。

「もう、お前とは戦う気すら無いわ」

何かをする前に、視界に入る前に、気付かれる前に、更に言えば、

目を覚ます前に。

それが、最善。矜持も誇りも何も要らない。

「もう勝負は付いてる。あの部屋でも助けてもらい、さっきも要は逃げたんや、お前は」

図星を付かれたのか、ここからでも分かるほど顕著にライブラの表情が変わった。

唇があれば震え、瞼があれば目を見開いていただろう。しかし、顔のパーツがほとんど削ぎ落とされたライブラの顔からは、悲しいほどに異様さしか伝わらない。

ライブラが見ているのも既にジェミニではなく、

「……く……だすな…」

ぼそり、と唇が無い口が小さく動いた。

「――僕を、誰だと思ってるッ…！」

――タイミング的にはそれはただの偶然だった。ただ、ライブラの

声と、〝壁〟の限界が重なっただけ。

しかし結果として、その変化はライブラに味方する事になった。

みちり、と肉が軋むような音がジェミニの耳に異常の発端として届く。

「――ッ」

気を取られた一瞬に、前方からナイフが飛来する。ライブラの姿は既に揺らいでいる、が、狙いは眼と喉。流石にそれを受け止める訳にはいかない。

続けて左右の視界の端にも何かがチラついた。

「は…？」

命の亡者。

しかし、今までのそれとはまるで違う。

水を得た魚のように、民間人の限界を遥かに上回る速さで、横から臓物を抉り出そうと肉薄していた。

しかし戸惑っている暇は無い。

左右は駄目で前後もナイフの餌食。そして生憎手は二本しかなく、全てを受け止めるなどとは論外。

「く、おッ…！」

嫌な浮遊感で身を寒くしながら、後ろへと倒れこむ。

左右の脅威より一瞬早くナイフが前髪を切り裂いて通過していき、一瞬後にその場所を、骨が所々剥き出しになった手が左右から挟み込んだ。

拳さえ握られていない腐った手同士がぶつかり、腐肉が飛び散る。

「何やねん…」

寝転がったまま、左右の死体を蹴り飛ばし、その勢いのまま起き上がった。

そして、目の前にはまた別の拳。

「――っふ！」

カウンター気味に腕が交差し、死体の顎を打ち抜く。

相当脆くなっていたのか、軽い抵抗を残して首がもぎ取れ、バランスを失った死者はそのままよろよろと数歩進んで地面に倒れこんだ。

取りあえず目の前の脅威を取り払って、顔を上げる。

そのタイミングに合わせるかのように、ぱん、と短い音が鼓膜を揺らした。

それは、遂に風の壁が崩れて圧し掛かっていた死体が地面に崩れ落ちた音。その近くに既にライブラはいない。

「…お、いおい」

――そして、雪崩れ込む。

我慢に我慢を重ねた亡者共が、剥き出しの筋肉と骨で出来た腕を我先にとばかりに突き出してくる。

その量と力に、地面が揺れ地響きが空気も揺らす。

迷わず背中を向けて疾走した。既に周りの建物が倒壊していく音が重く連続している。捕まれば、飲み込まれて押し潰される事は容易に想像できた。

視線の方向を変えてすぐに、力なく転がった十数体の亡者の中心で、明後日の方向を見上げているラスクを見つける。

「おっちゃん！」

その声でこちらを見たラスクの顔色が、一瞬で変わった。

後ろでどのような光景が繰り広げられているかは、想像にし難い。

が、その異様さは、地震のように揺れる足元と、鼓膜を襲う幾重にも折り重なった怨嗟の声が物語っている。

自然と二人とも屋根の上に飛び乗った。

「怪我は…？」

「いや怪我は無いが、連れ出そうとした所を横からやられた」

辺りにシアの姿が無い。

そこで、漸くラスクが憎々しげに屋根の上を睨んでいた意味が分かった。

「――ジェミニ」

ジェミニが知っている、馬鹿にしたように浮ついた声ではない。

重く沈んだ、訃報を告げるような声だった。

「ここは騒がしい。さっきの倉庫だ」

既にその姿は消えている。

残っているのはどこから出したのかあの道化の仮面だけ。

またしても、幻惑に紛れて、ライブラは姿をくらませた。

◆

「おッ……あ…げぁ…」

木箱の上にゆっくりとシアを寝かせた後、ライブラはそのまま膝から崩れ落ちた。

閉じる事すら出来ない唇から、ボタボタと絶え間無く血が零れ、足元を汚していく。

内臓がやられている。

しかし、自分は普通の体ではなく、特に生命力に長けている。星座全員（ゾディアック）がそうだが、特に自分はそれが著しい。

その分、寿命は極端に短いそうだが。

それはまあ、今はどうでも良い。

胃からせり上がって来ていた血反吐を傍らに吐き出すと、膝を押さえながら立ち上がって、隣の少女に目を落とす。

「…っシアッ！」

怒鳴り付ける。

無理矢理気絶させたのは自分だ。起きるはずもないのはわかって

いる。当然、横たわる少女は反応すらしない。

「――主人の言う事を…！」

心中は荒れきって収まらない。

その勢いのまま拳を振り上げて、しかし、またしても膝から崩れ落ちた。

再び、今度は喀血する。どうやら、気管の方もかなり損傷しているらしい。

「……シ、アぁ…っ」

憎々しげに名前を呼ぶ。

どれだけ名前を呼んでも、少女は反応を見せない。

「…おい…！」

遠くに見えた。

以前は、言われなくても擦り寄ってくるほどだったのに。

酷くイラつく。

馬乗りになって、胸倉を掴む。引きつけも押し付けもしない。

ただ、少女の首に触れた人差し指の第二関節から、温かさが伝わってきて、自分の手の冷たさを改めて教えてくれた。

「笑えよ、シア…！」

絞り出したその声は、泣き声にすら聞こえた。

◆

◆

◆

「あらあら、あんな事が出来たのあの子は…」

人を亡くし、死体として徘徊し、遂には獣のように跳ね回る手駒達を見て、女は感心したような声を上げた。

”略奪者（サクリファイス）”とはまったく別の能力。

この精霊獣を使う際に少しだけ自我を残しておくのだが、それが

こういった方向に働くとは思わなかった。

元々雷を操っていた男だ。恐らく電気信号を使って操っているのだろう。

そのせいで頭をやられたら再び動かないようになっているようだが、既に兵士一人の戦闘力を優に上回ってしまっている。

それに、もう”略奪者”としての能力も、僅かずつだが発揮されている。ならば、破壊されてしまってもさして問題は無い。

「ライブラは思ったより持ちそうに無いわね…」

オフィウィクスの話だと、ライブラは居るだけで良いと言う事らしいが、本当に可能なのかは定かではない。

しかし、やれと言われたらやるしかない。

ライブラは生きてさえいれば良い。ならば、放っておいても問題は無いはずだ。

「後は、連絡待ちかしらね…」

目の前に置かれた、上等な連絡魔石を指で弄ぶ。

これが光り次第、この戦争は終結に向かうことになっている。

そして、まるで一連の流れを見ていたかのようなタイミングで、魔石が女の手の先で明滅した。

『――やあ、こっちはもう直ぐだけど、そっちはどうだい？』
「ええ、今からだというのなら、十五分で」
『頼もしいね。じゃあ、首領殿にもそう言っておこうかな』
「褒賞は弾んでよ？」

ｙｅｓもｎｏも無く、小さい笑い声を最後に連絡は途絶える。

気に入らない態度だが、心配する必要も無いだろう。

その辺りはしっかり守る組織だったはずだし、それにこの町は好きにして良い事になっている。

――町中から人間がいなくなった後のお楽しみだ。

蠢く程に人間が密集した城の方を覗く。

「さて、じゃあお掃除しましょうか」

薄ら寒い笑みを保ったまま、その場に黒い波紋を残して女は影に潜った。

◆◆◆

『て、敵が活性化！！　も、物凄い勢いでバリケードを破壊していきます！』
「何だと…！？」

民の避難の進行具合を目で追っていたミスラに、通信を受け取った兵士の悲痛な声が届いた。

弾かれたように顔を上げると、兵士から魔石を受け取りそのまま口を近付け話しかける。精一杯落ち着くように自分に言い聞かせていたのだろうが、焦りは隠しきれていなかった。

「どうした…！？」
『て、敵が…！　いきなり素早く、飛び跳ねて…ッ！』
「しっかりしろ！　報告は要点を捉えて短く…！」
『ぁ……』

ぶつん、と音がして魔石から光が消えた。

その事象が指し示す事実を誰もが悟り、本部室に重く沈黙が広がる。

知らず、ミスラは拳を握り締めた。指と指の間から、何かが滑り落ちた感触がしたのだ。

「……正門前から、連絡が途絶えました」

その沈黙をまず破ったのは、通信兵の義務だった。

言わない訳にはいかない事だとは皆分かっているが、最悪の想像を肯定されたようで、更に沈黙が重く深まる。

しかし一瞬後、そのような沈黙は許さないとばかりに、どん、と壁を強かに打ち付ける音が響いた。

「次から次へと…！」

ギリッと歯が軋む音すらも本部室に深く響いていく。

こちらの一手を嘲笑いながら覆す一手に、一度は獲得した安堵が底から覆された。

「…正門を閉じる。他の門とも連絡を取ってくれ。場合によっては戦力を集結させて、他は全て閉じる」

「では、孤立した集団への救助は…？」
「…後回しだ。集めていた人員は正門に向かわせて兵が避難する時間を稼いでくれ」

その言葉を想定していたのか、通信兵は素早く短い返事を返すと、脇にあった魔石を手にとった。

本部の士気が明らかに下がったのが分かる。現場ではないこの場所でこれなのだ。現場での絶望感は想像にし難い。

『――おい！　ガラドの嫁さんよぉ！！』

一列に並べられていた魔石の一つから、とても兵士の物とは思えない酒焼けしたような声が聞こえた。

「キィラル殿…？　どうやって…？」
『兵士から魔石借りてな。それよりこりゃどうすりゃ良いんだ！』
「…すみません。こちらも現状は把握し切れておらず、出来れば状況をお教えいただければ…」
『そっちじゃねぇよ！　このヤンチャな死体共はこっちで何とかする！　俺が言ってんのはさっき無理矢理渡された…』

それ以降のキィラルの言葉は、ミスラの耳に直接届いた言葉によって聞き取れなかった。

隊長！　と叫んだ兵士は窓の外のあらぬ方向を指している。

その先には、何かの黒い影。

人の形をした、何か。

「――――ッ伏せろォッ！！」

一瞬で背筋に冷たい物が走り抜け、直感が告げるままに声を張り上げた。

窓は遠い。しかしここには非戦闘員も多く、替えが効く人間でもない。

しかし、やはりそこは非戦闘員。反応できない人間がほとんどだった。仕方無しに一番近くに居た通信兵だけでも無理矢理地面に引き倒してその上に覆いかぶさった。

一瞬遅れて、正面のガラスを吹き飛ばし、それが部屋に着地する。

入り込んできた風に部屋中の明かりが吹き消された。

しかし、外からの明かりのお陰で、その姿は隠し切れる訳ではない。そして、姿さえ見えていれば切り伏せるのに不都合は無い。

反応は早かった。早過ぎだと言っても良い。

部屋に居合わせた戦士が、示し合わせたように一斉に剣を引き抜き、刃をその喉元に奔らせる。

「――やれ。手厚い歓迎じゃの」

しかし涼しい声と同時に、戦士達は、壁に、床に、果ては天井にまで叩き伏せられる。

「――っシ！」

一瞬遅れて、ミスラの剣もその喉元を狙う。速さでは他を寄せ付けない我が剣で、それも気を抜いた瞬間を狙ったつもりだった。

が、細身のレイピアは、敵の喉の横で難なく受け止められて軽い音を立てる。

己が剣と交わっているのは、血を塗り固めたような紅色の剣。

「――お主とは初対面の時もそうじゃったが、剣越しに顔を合わせる事が多いのは、どういう訳じゃ」

「貴様…！」

間近で確認してようやく気付く。

黒い長髪を後ろで一つに結い上げ、動き難そうな服を身に付けた、妙に年寄り染みた口調の女。

「剣を下げてもらえるかの――？」

ミスラの背後には馬鹿にしたように、紅色の剣が何本か浮いていた。

楔、鎖、檻、（前書き）

筆が進まないな…。

「さて、儂としては話し合いに来たつもりなのじゃが、そちらから何か言いたい事は？」
「…帰れ、構っている時間は無い」

憎々しげに一瞥した後、ミスラは剣を鞘に戻した。

「ほう、この状況で助けを必要としないと。――知っているだろうが、正門の人間は皆逝ったぞ」

紛れも無く殺気をもって、ミスラが肩越しにレイを見据えた。

当然ミスラだけでなく、レイは部屋中から敵意の的にされるが、それでも涼しい顔でせせら笑う。

「まあ、今はまた兵がいるようじゃがの。元の人間と比べて特に秀でた人間達と言う訳でもない」

レイは肩をすくめながら、部屋中に視線を巡らせる。

投げ飛ばされた兵士は再び剣を握り、通信兵はレイに注意を残しながらも続々と述べられる報告を歯を食い縛りながら受け答えをしている。

「――全員、作業に戻れ。この女は敵ではない」

決して味方でもないがな、と続けそうな表情に、レイもそれで正解だとばかりにその言葉を鼻で笑う。

「来い。ノイン様の好(よしみ)だ。話があるなら聞くだけ聞いてやる」

部屋を出て行くわけでもなく、ミスラは大き目の机が置かれた部屋の中心にレイを誘う。

「一応、大まかに情報を照らし合わせたい。貴様は何を知っている？」

「…そうじゃな。主犯は少なくとも二人。昨日の男もそうなら恐らく三人が関わっていると見ているがな」

「三人…？　どうして分かる？」

自然と机を挟んで向かい合わせるような格好になり、新しく立てた蝋燭に火を付けながらミスラが怪訝そうな声を上げる。

聞いているのか聞いていないのか、レイは近くにあった椅子を引

き寄せると、頬杖を付いて考え深げに目を伏せた。

「この亡者を延々と産み出す魔法と、町を外縁部伝いに半球状に覆っている魔法。他にも様々な小細工が仕込まれておるようじゃが、分けるとするならこの二つ。二つの違う種類の魔法が蔓延しておる。よって、これでまず二人」

「……もう一人。昨日の男が何故ここで出てくる？」

ミスラとて怪しいと思わなかった訳ではない。兵士には一応特徴は伝えていて、何人か間違えて連れて来られた人間もいたほどだ。

しかし、断言は出来ない。その男とは別に、疑いがある人物も少なくは無い。

「…あくまで推測の域は出ておらん。それに、確実と言えるのはもう一人は必ずいるという事だけじゃよ。まあ十中八九無関係ではないだろうがの」

そこまで言うと、伏せていた目をミスラに向けた。

「”小僧が消えた”。以前町の中を駆けずり回った時には嫌と言うほど擦れ違ったものじゃが、もう小一時間は見ておらん。

まあ、あやつの事だ。死んではおらんだろうが、何か小癪な策にやられた可能性が高い。それにしても片手間でやれる事ではない。

…そうすると、だ。一つの仮説が思い浮かんだ」

ピン、と人差し指を立てて見せる。

「あの男は賞金目的か何かだと思っておったが、もし誰かに接触する為の出場だったんじゃないかとな。
そうすると接触対象として考えられるのは、直前まで戦っていたアキラという小僧と、貴様らの王女。――そして、最後に小僧じゃな」

準々決勝のアキラ、準決勝で当たるはずだったノインに、決勝でのハルユキ。

接触目的が何かの話し合いか、合法的に排除するか、考えられるのは大体この二つに分類でき、ここから、推測を交えて更に絞り込める。

「アキラに勝った事、事も無げに非道を尽くした事を考えればアキラの線は薄い。王女の誘拐が可能だと考えればこれも薄い。まあ、反論材料だらけじゃから確信は無かったが、――ここで小僧が姿を消している」

トントンと、人差し指で机を叩きながら、レイは最後にミスラの目を覗き込んだ。

「小僧が並々ならぬ力を持っていて、更にここの王女と密接な関係がある事は少し町で聞いて試合を見ていれば嫌でも分かる。
そして、昨晩の接触で、計画していたこの騒動に邪魔だった小僧が、少々手こずる程度どころか、とんでもない鬼札だと分かった連中は王女を誘拐し、先手を打った」

とん、と心なしか強めに机を叩いて指が止まった。

的外れ、という訳ではない。事実としてここまでその通りに進んでいるとして、矛盾はそう見当たらない。

しかし。

「…それは、仮説というより妄想だな」
「まあ、前提が推測だからの」

ただ、言った通り的外れではない。

有力な説の一つであり、可能性も低くは無い。

そして、今までのこの展開が全て相手の手の平の上だとすれば、それは最悪の状況だといえる。

戦術的には、最善を狙うより、最悪を避ける事が先決。

ならば推測だと割り切って切り捨てるどころか、更に相手の考えを読む事が必要になる。

「違うわ、間抜け」

「……貴様は、人の神経を逆撫でするのが余程好きだと見える」

剣に手をかけたミスラに、レイはわざとらしいほど蔑み切った視線を変わらず向け続ける。

「あちらの一手に一手を返していても、ジリ貧じゃろうが。今は言うなれば、相手が好きに駒を並べたチェス盤を、いきなり目の前に出されて勝負を迫られているようなものだ。まともにやって勝てるものか」

ならばどうする、と聞きながら、あの意地が悪そうな口からどんな言葉が出てくるかは想像できる。

その質問を待っていたかのように、レイはニッと口の端を吊り上げた。

「――チェス盤ごと引っくり返すのも、もはや定石（セオリー）かもしれんがな？」

地図はあるか、と近くの兵士に声をかけると、１０秒もしないうちに机の上に地図が広がった。

「ここととここ、それに、ここととここ。この場所に楔(くさび)を打つ」

指されたのは、町の東西南北の中腹部。特別何がある場所ではない。

ミスラが眉を潜めているのに気付いたのか、レイが続けて補足を付け足した。

「先程も言ったがこの町に掛けられている魔法は主に二つ。相当な時間と手間をかけているようだが、儂なら解くのは難しくはなかった」

「”なかった”…？」

「ああ、一度は解いた。だが、この全く別の二つが互いを補修し合うように仕組まれていて、瞬きする間に復活した。恐らく能力だけ使わせて、術式を組んだのは一人なのじゃろうな」

「そんな事が、可能なのか…？」

「難しいな。しかし、不可能ではない」

そこまで言うと、地図を覗き込みながらレイは腰を上げた。

「術者を探すか、二重になった魔法を一度に破壊するか、この二つでないとこの魔法を解除するのは難しい」
「しかし、それは…」
「…あちらさんもかなり長い時間かけた魔法だ。一度に全て、と言うのはかなり厳しいの」

だから、と先程印をつけた四箇所を再び指で示した。

「――上から、相手の魔法を無効化する魔法を重ねる」
「無効化する…？」
「そう、駒を相手取るより、相手が幅を利かせている陣地の機構を破壊する。それに必要なのが先程言った”楔”じゃ」

一瞬で、レイの手の中に先程とは少し形を異ならせた真紅の剣が精製される。

「そして、先程東西と南の顔見知りに、それぞれ楔（これ）を渡してきた」

ミスラは先程のキィラルとの通信を思い出した。先程無理矢理渡されたと言っていたのは間違い無くあの剣の事だろう。

そして、他の二人も恐らく渡されているはずだ。

「後は、お前の一声だ」

カランと、机の上にペンを放り出して倒れ込むように椅子に座ると、肘を付いてこちらを見上げる。

「…隊長。まさか信じるおつもりですか？」
「――アギ副長。私は職務に戻れと言ったはずだが」
「は、しかし…この様な得体の知れない輩の妄言に…」

二人いる副長の一人。

ギルドに行ってもらったもう一人とはまるで違う種類の人間だが、主に情報処理を取り締まってもらうには保守的な人間の方が好ましく、そして信頼もしている。

その声も聞こえているだろうに、目の前の黒髪の女は、まるで子供をからかうようにこちらを薄ら笑ったまま見据えている。

「……一つ、聞きたい」
「言ってみろ」

「…貴様は人助けなどする人格には見えない。何を企んでいる？」
「は、酷い謂われ様じゃの。…まあ確かに、この国の為に動きたい

など言うつもりはないし、言いたいとも思っていない」
「なら何故…」

少し考えたような仕草を見せて。

「――気に食わんのさ」

しかし、数秒と掛からずにレイはそう言った。

「気に、食わない……？」
「小僧さえいなければ後はどうにでもなると、そういう風に、儂を軽く値踏みした輩がいる。高々数十年生きただけの小童が、だ。そうなれば、少々灸を据えてやらんといかんだろう？」

ハ、とレイは自嘲するように鼻で笑って、そう最後を締めた。それに返すように、ミスラも失笑していた。

「……他には何か用意するものはあるか？」
「隊長…！？」

大丈夫だとでも言いたげに驚愕する副長の肩に手を置くと、ほん

の少しだけ笑みを深くしたレイの顔に向き直る。

「この上は？」

「最上階だからな。謁見室になっている」

「広いか？」

「古龍も飼えるだろうさ」

「…よし、そこを借りる。儂にも準備があるのでな。あとはあの三人が留守の間それぞれの門を守る人間を。――そして、あと一人、楔係が要る」

その言葉を聞いて、アギと言う副長がミスラの後ろから机の横に周り込んで机を両手で叩き、威圧するようにレイを睨みつける。

「そんな人員が割けるものか！　今でさえ時間稼ぎしかできていないと言うのに…！」

「――心配すんなよ、アギ副長。人ならまだまだいる」

ガシッと、アギという副長の肩に、野太い古傷だらけの肩が回された。

レイの時とはまた違った意味が篭った視線が、部屋中からその男に集中する。

「アデノフ副長…！」

「連絡は取れなくなったが、何とか任務達成したよ。ほれ、隊長殿」

ぽんとミスラに投げ渡したのは城の物と比べるとやや質が落ちる小さめの魔石。

『はいどうも。責任者がさっさと避難してしまったので、偶々居合わせただけなのに責任者にされてしまった一受付嬢のウェスリアと申します』

「ギルドの…！」

『はい。城に避難していた人員と合わせて都合四千名。微力ながら助力させていただきたく馳せ参じました』

ぐっと、手の平全体で包み込むようにミスラは魔石を握り締めた。これで全ての戦力を集めきった。ここから先は何かを取り零すのは許されないと、自分に言い聞かせて。

「――助かった。命令系統はどうでも良い。千人ずつ四方向に散って、各個敵を遊撃してくれ」

続け様に、腰にぶら下げていた魔石を幾つか手に取り、全て一度に引っ掴んだ。

「キィラル殿。ムイリオ様。ガララド。聞こえるか。魔石を持っていない人がいたら、近くの人間が渡してやってくれ」

おう、と酒枯れした声が、ああ、と精悍な声が、少し遅れて、やっとか、と落ち着き払った声が手の中から耳に届く。

「三人とも、言いたい事は大体察しが付くと思います。黒髪の女性に渡された剣を、これから指示する場所に打ち込んで貰いたい」
『…しかし、俺達がここを離れて大丈夫か？』
「ああ、援軍は送った。到着次第出発してくれ」

それを最後に、通信を切る。しかし、まだやる事は残っている。

「アデノフ殿。ご苦労様でした」

疲れたように苦笑するアデノフは、体中が血に塗れていて、所々に浅くは無い傷が見られる。

「四人死んだ。称えられては笑ってしまう」
「……とにかく治療を。貴方にはまだ働いてもらいます」
「お優しい事で…。だが、もう一人楔役が要るんだろう？　休んでいる暇は無い」

外に向かって引き返そうとした所で、男の体が崩れ落ちる。何とか壁に腕を引っ掛けて、体を起こした。

「とにかく治療を。誰か彼を医務室まで」

黙って近くの兵士がアデノフの肩を担ぎ、そのまま扉の奥に消えて行った。

「どうするおつもりですか…？」

アデノフが消えて直ぐに、もう一人の副長が口を開いた。ミスラもその質問が来る事は分かっていたのか、表情一つ変えはせず、口を開く。

「私が行く。指揮系統は貴方に……」

「――いや、その必要は無い」

ミスラの声を遮ったのは、いつの間にか窓際まで移動して地上を見下ろしていたレイの声。

「丁度良いのを見つけた」

手に持っていた四本目の楔を消すと、割れた窓の縁でこちらを振り返った。

「儂は謁見室とやらに居るからの。用があれば来い。それとこれも貰っていく」

その手には、魔石が幾つか。

そして、それだけ言って窓の縁に足を掛けた。

「…待て、まだ聞きたいことがある」

「一つと言ったのは貴様だったはずじゃがの…」

それでも、レイは溜息交じりに足を下げてこちらを向く。

どうやら答える意思はあると判断して、ミスラも静かに問いかけた。

「あの男――、ハルユキ殿が、もし自由に動けたとして、そうしたらどうなっていた？」

疑問。

他全てより優先させてまで封じる必要があった人間などと本当にいるのか。

「…さあの。皆で夕餉(ゆうげ)でもつついていたんじゃないか？」
「ッ……！」

瞠目するミスラに向けてそれだけ言うと、レイは窓から中空に飛び込んだ。

◆
◆
◆

ビクン、と体が跳ねる。

それも体が、という訳ではなく、もっと不自然に、二の腕や、ふくらはぎ、時には爪の先まで。

その度に何かが激痛と共にフラッシュバックし、記憶に留める前に消えていく。

やめて、と呟いても止まらない。
ごめん、と謝っても許されない。
許して、と媚びても叶わない。

また、また、また。

その度に頭の奥と瞼の裏が、焼き付くかのように熱を持って脈動する。

ズグンズグン、とまるで別の生き物が蠢いているかのようだ。自分よりももっと心があって人間的な何かが。

原因は、探そうとするのも億劫になる程に明らかだった。

この町のが無理矢理表情を変えられた瞬間、もっと言えば”あれ”を見た瞬間。

――お前もか、とそう言われた気がした。

それから、それから体の中の何かが息を吹き返したかのように感じる。

刻一刻と早く、大きく、間隔もどんどん短くなる。

今では、心臓の鼓動をも追い越そうとしているかのように、次々と頭の中に何かが現れては消えていく。

そしてほんの少しずつだけ、何かが頭の端に残るようにもなって

きた。

何だろうか。

何かが横たわっているのを、自分も地面に転がって見つめている。

「――、あ」

フッと、何の前兆も無しに意識が浮かび上がった。

そこで初めて自分が意識を無くしていた事にも気付く。

そして、驚いた事に、自分は立っている。意識を失ったまま、むせ返るような人混みの中を歩いていた。

呆気に取られて周りを見渡す。

人。人。人。

知っている場所ではなく、周りに知っている人間もいない。

他人事のようにそれを何となく眺めていると、くしゃっと手の中で何かが音を立てた。

広げてみると、そこには皺くちゃに拉げたメモが一枚。

半分ぼやけた頭でそれを広げると、所々が丸まった女の子らしい文字で『お城でゆっくり休んでいる事。　エゼ』と小さく書かれている。

「っ……」

頭に鈍痛が走り、また何かが頭に蘇える。

それで思い出したかのように、また痛みが一定間隔で頭の中心を襲い始める。

忌々しげに額に手を押し付けると、氷のように冷たい手の感覚が、ほんの少しだけ痛みを和らげた。

しかし直ぐに手は温くなって心地良さを失い、再び痛みがぶり返す。

堪らず顔を上げれば、目の前の景色が、水彩画の上に水をぶちまけたかのように滲んで歪んでいた。

足はフラフラと前に進み続ける。

もしかすると、意識が無かった頃より足取りは危なかっただろう。

どこにも繋がっていない鎖が絡まっているような感覚が足から纏わり付いて離れない。

しかし、立ち止まってしまうともう進めなくなりそうで、それ所かその場に蹲ってしまいそうで、必死に足を進めていた。

（外、は、どうなって……？）

体力が無くなった訳ではない。

魔力が枯れている訳でもない。

むしろ、魔力は後から後から溢れてくるようだ。

先程から、二の腕に刻まれた魔法の文字が熱い。頭を襲ってくる

刺すような熱さではなく、そこだけ人肌に触れられているような穏やかな熱。

まるで、そこだけしか自分の体が残っていないような気がした。

偶然か、何かを感じ取っているのか、その足は正門へと向かっている。

そして、とん、と目の前に何かが降って来た。

「――フェン、少し頼みたい事がある」

闇夜を照らす光を反射させて、黒髪が光っている。

「レイ」

知っている顔だった。

◆

◆

◆

「ギィはあれで大丈夫だったのか？」

服を直し、毛布を与えて隣に座らせ直したノインに、１０分程前に飛び立った仔龍について聞いてみる。

「さぁ。どっちにしろ一回出たら入れないんでしょ？」
「ああ、何か幻覚の結界張ってあるらしいぜ。魔法ってのは何でもありだな」

ハルユキ達の言葉を聞いた後、不安げに飛び去って行ったギィを思い返す。

どうやら、ノインの臭いを辿ってこの場所まで来いたらしい。

入れていたという事はハルユキとそう変わらない時間に来ていた筈だが、それはつまりずっとノインはここに居たという事なのか。

それとも龍には効かないタイプの結界なのか。

「…と言っても、確かに変な所はあったわね」
「そうだな…。お前は気絶してたから覚えてないだろうし…」

そこで、ノインが不可解な表情を浮かべているのを見て言葉を止めた。

「…ああ、多分貴方が考えてる事じゃないわよ。それは仮説の中のどれかでしょうけど…」
「エスパーかお前は…」
「何よ、えすぱーって」
「……気にするな、それで？　変な事って何なんだ？」

面倒臭くなったのが口調で伝わったのか、目を細めてこちらを睨むノインから何となく視線をずらして、話し出すのを待つ。

ノインが呆れたように溜息を付いたのを追求を諦めたのだと判断して視線を戻すと、示し合わせたようにノインも口を開いた。

「――あの子、妙に怯えてなかった？」
「あー…、確かに不安げには見えたが、この雰囲気のせいじゃないか？」

図太い二人が話しているからか緊張感は伝わらないが、町中を覆った結界のせいか空気はひどく湿り、その割に底冷えしたそれが足元に溜まっていて、まるで深海の底に居るような気分にさせられる。

「…そうじゃないわ。ほら、最初会った時のような顔」
「そうだったか…？」

記憶力に自信は無いが、まあ主人であるノインがそう言うならそうなのだろう。

ハルユキの表情からこの問答に意味が無いと判断したのか、これ見よがしにノインは溜息を吐くと、話を切り替えた。

「と言うか、呼ぶのはレイで本当に良かったの？」

「…まあ、俺の中ではあいつしか居ないんだよ。この手の魔法は」

コンコン、と結界は叩いてみせる。

ユキネの妙な魔法に頼ってもいいかもしれないが、この結界ごとノインを殺してしまう可能性も無くは無い。

まあ、実際の所本当に壊してノインに影響があるのかは分かる事ではないが。

どちらにしろ、レイを呼べば全く進展無しと言う事は無いだろう。

「――死ぬ気で休めよ。もたもたしてると俺が全員殺すぞ」

「魔力は、命の危機だったお陰で多少はマシだけど…、全開時の一割も無いのよね」

何かに飢えているように拳が軋む。

少し口を噤んだだけで、溜まりに溜まった感情が溢れ出そうになる。

が、このような状況は、不本意ながら慣れてしまっている。こういった気持ちは一億年ほどの経験値がある。

こういう時は、ただ待てばいい。

不思議と、あの時天井から降って来た馬鹿の事を思い出していた。

獣の王

生まれは覚えていない。

場所も時間も親も。

ただ自分を支えていたのが何かは覚えている。

■だ。

■■。

■■が、自分という存在を下から内から支えてきた。

それはそうだ。

今まで、■■しか糧としていないのだから。

最初は料理を食べようとした。そのまま口から戻した。

次にその辺の草を食べようとした。当然吐き戻した。

鼠を食った。牛を食った。馬を食った。鳥を食った。羽を食った。角を食った。

しかし、どれも拒絶されて口から漏れ出た。

この辺りで、大体自分が何を口にすれば良いのかは大体察しが付いていたと思う。

それでも、次は皿を食った。瓶を食った。壁を食った。家を食った。火を食った。土を食った。刃さえも口に入れた。

しかし、どれも拒絶して口から漏れ出た。

それでも■■だけは食わなかった。

どれだけ吐いても戻しても、拒絶しても拒絶されても、無理矢理咀嚼して吐き出す。その吐瀉物をまた口の中にねじ込む。

それを一日中続けて、胃に僅かに残った食料の欠片を栄養に変えて生きていた。

自分がいたのは多分孤児院か何かだったのだろう。

一日中繰り返すこの行為に嫌悪と侮蔑の視線が向けられていたのを覚えている。

一日中の時間を食に費やしても、胃は膨れる事は無く、逆に栄養失調で下腹部は異様に膨れていた。

ある日、いつもの様に今日一日格闘する事になるスープとパンを貰いに行って、ふとそれに気付いた。

長テーブルに座っている面々が一様に幼いことに。つまり、いつの間にか小さくは無いこの孤児院の中で、自分が一番”長生き”している事に。

気付けば誰も彼もが突然いなくなったり、健康的だった子供が次の日には事故で急死したりして、余り長くここにいた人間が居なかったらしい。

不思議ではない。

里親など幼い方から決まっていくのが普通だし、事故など無くなりようも無い。

だから。

引き取り手が嫌に裕福な人間ばかりだと言う事にも、誰も気付いてはいなかった。

その孤児院で子供の面倒を見ている神父がいた。

中肉中背で丸眼鏡を掛けていていつも聖書を携えている、そんなどこにでも居そうな男だった。

「――くん。今日君の里親が決まったよ」

一日かけて皿の上を綺麗にした後、部屋の扉を開け放ちざまに、神父はそう言った。

その顔は本当に嬉しそうで、同時に胸糞悪かったのをよく覚えている。自分に親が出来る事ではなく、厄介な人間が居なくなる事を喜んでいる。

その感情を隠そうともしていなかった。

もう分かっているかも知れないが、この孤児院は子供を玩具とし

て、金持ちに娯楽を、神父に金を提供するため組織だった。

そして、自分が行った所は最悪で、共食いを好む嗜好家（バカ）だった。太った人間に飽きたのか、それとも拒食の子供の口に無理矢理ねじ込みたかったかは知らないが。

事の顛末は、もう誰にでも想像できる。が、俺は興奮の余りよくは覚えていない。

気付いて、いや無理矢理意識の底から食欲（それ）を引き摺り出されて、慟哭しながら意識がとぶほど狂喜して。

気付いたら、生まれてから一度も満ちた事がない腹が満ちていた。

人だ。

人間。

人間が、自分という存在を下から内から支えてきた。

それはそうだ。

今まで、人間しか糧としていないのだから。

ならば、俺は世界中の罪の上でしか生きられないのだろう。

地面に齧り付く奴がいないように。空気に欲情する奴がいないように。

俺には、人間以外がまるで無機物なのだから。

そして、だからこそ。

人間が嫌と言うほど蔓延るこの世界で、これ程潤沢な人生を送れる人間が居るだろうか。…いや、居る訳が無い。

声高に叫び上げよう。

――だからこそ。

俺は、世界中の人間を愛している。

◆

◆

◆

「ハッはァ！！」
「ぁあッ！！」

これで都合十数回目となる交錯も、両者には大して変化は及ぼさなかった。

ただ地面は割れ、壁が軋み、土埃が舞う。

それは、高い次元で実力が拮抗している事を示していた。

「さあて！　もう一つ上げるぞ小僧！！」

驚愕に目を見開くアキラの視界から、タウロスの姿が掻き消える。

後ろに回る。それは分かっているが、確定でない分反応は遅れた。

そしてその分、回避という選択肢が削られ、体の代わりに右腕を差し出した。

腕ごと体がくの字に曲がる。

「――ぁッ…！」

肝臓が、肺が、心臓が腕の上から押し潰されて正常の機能を失い、体から自由を奪う。

裂けるほどに唇を吊り上らせたタウロスに、それでもアキラはもう片方の腕で拳を握ろうとするが、完全に握りきる前に足が宙に浮いた。

途端に、慣性が振り払われて、横から加わる豪腕に体が更にねじ折れる。

ひゅん、とアキラの体に見合う小さく鋭い音で空気を切り裂き、大通りの真ん中から家屋まで十数メートルを吹き飛ばされた。

「ぐっ――お！」

すさまじい速さで家屋に向かう中で、アキラは痛む体を無理矢理捻って体勢を立て直す。

後ろは石の壁。背中から打ち付けられれば、十分に致命傷に成り得る。

何とか足から壁に接触し。

しかしその瞬間、足場に罅が入った。

がぼん、と情けない音を立てて一秒と持たずに壁が崩壊する。成す術も無く、アキラの小さな体躯は民家の中に吸い込まれた。

部屋の中の家具を幾つか吹き飛ばし、硬い木の床に叩きつけられ、そのまま地面を転がった。

体が痛み、頭は酩酊し、視界は明滅している。

しかし、ここでこうしている暇は無い。

歯を食い縛って、立ち上がろうと膝を立てた瞬間。

ゴキリ、と今一番聞きたくない音が耳に届いた。

「――、あ」

何かが千切れる音、そして何かが圧し折れる音が追って連続する。
紛れもない、咀嚼の音。

ぐしゃ、とアキラの顔が悲痛に歪んだ。

「……ッがァアああ！！！」

藻屑を踏み越え、壁の破片を踏み砕きながら外へと飛び出す。

「――六人目だ」

口の端に付いた血を指で拭って、手に持った紙に一直線に塗り付けた。

手に持った”御品書”に書かれた名前が裏からでも読めないほどに、その人間の血で塗り潰されている。

「そこそこやる奴は、孤立しがちだな…。俺からしちゃ幸運としか言いようが無いんだけどよ」
「…お前の、貴様の相手は俺だろうがぁッ！」
「ああ？　勘違いすんなよ。手前も間違い無く俺の備蓄（あいて）だ。けど中々手前ェは強いからよ。余った時間を他に当てるのはそんなに不自然な事か？」

その手には、既にもう一人。兵士でも傭兵でもなく、若い男の民間人。その体に既に力も生気も見られず、既に事切れていることは明らかだった。

そして追い討ちのように、ぎちり、と生々しい音を立てて何かが牙を剥く。

「――止めろぉッ！」

いつの間にか止まっていた足に力を込めると、一瞬で勢いを得たアキラの体がタウロスに逼迫した。

小さい体を精一杯大きく使い、近付き様に右足を振り切る。

常人では目で追えないほどの蹴りを、タウロスはしっかりと目で追って、しかし避けようともしなかった。

タウロスの左足の足元の地面に罅が入る。それはアキラの攻撃の凄まじさを物語っていたが、それでも、タウロスの体に傷さえ付ける事は無かった。

「止めろ？　…おいおい、おかしな事言ってくれるなよ」

ぱん、と軽く足を払われてそれだけで体が空中に投げ出される。

それでもその隙に、タウロスが手にぶら下げている民間人の体に手を伸ばす。

しかし。

その腕の服の袖に触れるより、一瞬早く、タウロスの拳がアキラの脇腹に深く突き刺さった。

下から突き上げるような拳に、浅く長い放物線を描きながら、縮尺された玩具のように飛んで行く。

地面をバウンドしながら、またも耳にゴキリ、と不快な咀嚼音が届いていた。

「…全くよォ、生きてんのを助けるってんなら、そういう奴も居るって理解してるが、何で明らかに死んでる奴に体張ってんだァ？」

ズカズカと無遠慮にアキラに近寄りながら、タウロスはせせら笑う。

大きくと首を回すと先程アキラの蹴りを受けた場所がゴキリと鈍い音を立てて、その根元から僅かに白煙が上がり、それで僅かにも

残っていた蹴りのダメージは無くなった。

「勝手に殺したり勝手に助けたり、挙句殺しっぱなしの助けっぱなし。俺にもそうしろってのか？　ふざけんな、食うと殺すは同義(イコール)だろうが」

ある程度、タウロスが近付いたところで、近付かれたアキラの体が、ピクンと反応を示す。

空気が歪み、そこに飲み込まれた何かが、アキラの耳に連続して届く。

「殺したならば食う。この世に一片も残さずに平らげる。それが絶対(ルール)だ。自然の摂理、道理だ。それを邪魔するなんざ――」

立ち上がろうとして体を持ち上げるが、支える腕が耐え切れずに、再び地面に崩れ落ちる。

再び腕に力を入れようとしたところで、前からゆっくりと近付いてきた腕が代わりにアキラの体を持ち上げた。

「――命を何だと思ってんだ、お前は？」

難なくタウロスの視線と合う場所まで、アキラの体が持ち上がる。

「俺は命を大切にしてるぜ。――それに比べてお前はどうだ？　魔法も使わないで、お前は全力を尽くしてるか？」

ぶん、と軽くアキラの体を放り捨てる。

一度地面をバウンドして、すぐに勢いは死んだ。

「…まあ、大体察しは付いてる。…一度、お前と似たような奴に会った事があるんでな」

タウロスの手にはべっとりと赤い血がこびり付いていて、タウロスはそれに顔を近づけて鼻で小さく空気を吸った。

「やっぱり獣臭ェ――。コノエ・アキラ。狐ノ衛、か。
…聞いた事あるぜ？　確かどっかの国の狐憑きの一族だったか？
記憶によれば滅んだはずだが、…なんで生き残ってる？」

ずり、と地面に顔を擦りつけながら、アキラは驚きを滲ませながらタウロスを睨み付けた。

「折角の珍味だ。出来れば最高の状態で頂きたい。さっさと全力をひり出せや。――お前の可能性ごと食らってやるからよ」

狂気にまみれて濁りきった目が、アキラの目を逆に覗き込んだ。

◆

現状は最悪だった。

頭からは止め処なく血が流れ落ち、少しずつ体の下に血溜まりを作っていく。

十二人。十二人目の前で殺された。その中には民間人も居たし、兵士も居たし、時にはかなりの実力者も居た。

しかし、その悉くが、大顎に砕かれて命を散らしてしまった。

もう、誰も残っていない。

体も動かず、飛び飛びだった意識が元に戻れば、血まみれで地をなめている。

「…お前が何もしねェなら、俺はこのまま行くぜ？」

化け物だ。

今まで戦ってきた人間の中で間違い無く一番強い。

――しかし、こいつを一撃で殺し得る人間が更に上にいる事が芋づる式で思い起こされる。

どんな化け物だと言いたい所だが、その人間の顔は知っていた。

目付きが悪く、口が悪く、子供か大人かよく分からない黒髪の男。

自慢じゃないが、自分も似たような事を良く言われる。そう違わない。なら、勝てない訳は無い。

一つある。

今まで数えるほどしか使った事がない自分の魔法を使えば良い。

「――あのユキネちゃんはどんな味だろうなァ…」

明らかな挑発だった。挑発だと分からせるように言ったような言葉だった。わざとらしく、分かりきった事をわざわざ言っただけの言葉だった。

――しかし、その言葉のお陰で、決断は一瞬で澄んだ。

ばん、と地面が揺れる。

それは、腕を支えに起き上がろうと、自分の手の平を地面に押し付けた音だったが、しかし、もう力が足りないということは無い。

「命がどうの、摂理がどうのなんて知るか…。お前は秩序を乱した国の敵。それだけだ」

右腕の指が、石の地面に食い込み、ガリガリと削っていく。

「……難しい事を言うつもりなんて無い。人を喰う。戦乱を撒き散らす。その行いたるや正に外道の極み。よって、――我が大義の下に、処断する」

骨が軋み、筋肉が悲鳴を上げる。

口から漏れるのは、明らかな苦痛の声。目は充血して瞳孔が押し開かれていく。

「加えて、お前は俺の将来の嫁さんにも手を出した。もう一片も許さん。――万死に値する」

一瞬で筋肉が膨れ上がり、巻いていた右腕の包帯がはち切れて地面に落ちる。昨日腕を繋げた跡は既に無い。

「――ああ、それで良ィ…！」

食物連鎖。

こいつが言う摂理は確かに、根強くこの世界に存在している。間違い無く何よりも古く、何よりも巨大な原書のの摂理だろう。

だから、間違いではないのだ。生きるために殺す事など、命あるものならば皆やっている。

だけど、俺はこいつを許せない。

自分のことを棚に上げていると言われれば、紛れも無くその通り。むしろ間違っているのはお前だと言われても否定はし難い。

だが、許すわけにはいかないのだ。

秩序を乱すならば、民を殺すのならば、国に害をなすのならば、善悪など度外視して排除しなければならない。

こいつが、人の世界の罪の上に存在しているのならば、俺はそれを殺さなければならない。

俺は、王だから。

俺は王でありたい。こいつを許してしまえば、俺は王(おれ)でいられない。

ならば、この世で一番卑怯な武器を振りかざそう。

こいつは、人に害をなすので、成敗する。

正論。人間だけに許された、姑息で身勝手な大儀の武器。

全く、我ながら、酷く我侭なクソッタレだ。

「……おッ…ぁ…！」

命令を下すと、それを待っていたかのように、骨から、血肉から、細胞の一つ一つから自分が塗り変わっていく。

体の悲鳴が筆舌し難い音となって、内側から鼓膜を揺らし続ける。

この魔法はまだ使うなとムイリオに念を押されていた。

普通の王族でも成人するまではこの魔法は禁じられている。”はぐれ”の自分は尚更危険だということは説明されずとも分かっていた。

自分で言うのもなんだが、腐っても、落ちぶれても、異端であっても、王族だ。

普通の魔法ではない。

この国の王女が幽界と世界を繋げるように、ユキネは、…まあ良くは分からないが。

それでも、普通の人間とはやはり一線を画している。

――そして、当然自分もそう。

「――《大神憑き》”魔狼（フェンリル）”」

開かれた瞳孔の中に初めて、僅かに崩れた”狛”の文字が光る。

おぼろけな視界の端に映った右腕には、皮膚の代わりに毛皮が、指の代わりに爪があった。

その毛は、金色、と言うには余りにくすみ過ぎた色。

黄土色というのが一番近いだろうか。体とはあまりにバランスが取れていない腕が、指の先から人間から離れていき、その侵食が肩口の辺りで止まった。

これが限界。

この状態でも、じくじくと化物の部分が肩口から侵食してきているのが分かる。

ポカン、と呆気に取られていたタウロスの顔が、ニマッと気持ち悪く形を変えた。

「――っギャははハッ、成程なァ！　異端過ぎて国でも追い出されてたか？　それとも生まれなかった事にされたのかァ！？」

起き上がる必要は、もう既に無い。

四つ足のほうが、今の自分には都合が良い。

「…まあいい。そんな事はどうでも良いんだ、俺ァよ…！　大事なのは中身だ、味だ…！　さァ、中々の珍味をありがとう！　食うのを我慢しただけの甲斐はあるんだろうなァ！！」

返答を返す余裕も既に無い。それ所か人の言葉を話せるかも分からない。

まだ人間の形を保っている左手の指も地面に埋まる。

筋力のそれはもう人間ではなくなっている。

自分で命令を下す前に、全身のバネのような筋肉が伸縮し、タウロス目掛けて飛び掛った。

「――”黒顎”ォ…！」

タウロスの言葉に反応して、罅が入ったような音と共に、空が割れる。

一瞬の間に、一層巨大な大顎が空中に出現した。

その先は名前の通り、漆黒が蠢いている。あの中に入ってしまえば精神ごとしゃぶり尽くされるだろう。

タウロスを阻むように、アキラの進行方向上に出現した大顎は、当然タウロスの姿を隠していて、このままでは自分から食べられに行く事になる。

しかし、もう空中。それに細かい事まで考えを回すほど、今のアキラに余裕は無い。

だから、ただ本能的に。

その不規則に割れた下顎の牙を、思い切り踏みつけた。

立ちはだかる何物も噛み砕いてきたその大顎。アキラの足も例外ではなくその牙に食い込んでいき、しかし、皮を切った所で牙は止まった。

そして、蹴り上げる。

既にアキラの全てが人の外。

足の傷も、大顎を飛び越えた時には既に血が止まっていた。

人外の最たる部分である、右腕を振り上げて、タウロスを見据える。

――しかし、視線の先にその姿は無く、代わりに自分のそれとは別に地面に黒い影。

「――おすわりだ、犬っコロ」

言葉と同時に、背中に尋常じゃない衝撃が走った。

そのまま体中の酸素を吐き出しながら、地面に墜落する。

しかし、四足で地面に激突したのは、四本の足だけ。

衝撃で地面に押し付けられた力をそのまま地面に跳ね返すように、

もう一度跳躍する。

その先では、相変わらず愉しげに破顔している男の姿。

針で氷を削るように、刻々と自分の中の何かが削られていく。

啖呵でも切ってやろうかと思って口を開けたが、言葉じゃないものが出てきそうで。

怖くて、止めた。

混沌渦中（前書き）

書く時に書体を明朝にすれば、文章が上手く見える…！　だから何だって話ですけどね。

混沌渦中

そこら中から聞こえる絶え間の無い戦火の音。

ユキネはそれを耳にしながら、そのうちの一つに向かって次々と屋根を飛び移っていた。

「くっ……！」

いきなり敵が活性化してから、比較的安全だった屋根の上にも死体の兵が現れるようになっていた。それでも、地面よりは幾分かマシだったが、それでも移動に掛かる時間が大幅に上がっている事には変わりは無い。

次の通りに出るまでに、敵はあと一体。もはや一切の躊躇も無しに後ろから切り裂いた。感触に顔をしかめている暇さえない。

屋根を越えて、目指していた喧騒の元が視界に収まる直前、頭の中で神頼みに近い思いが巡った。

「また……！」

しかし、願っていた光景とはまた違っていた。

視線の先には、気が狂ったように地面と家の壁を殴り続ける死体がただ数人居るだけ。

既にその家の中に人が居る気配は無い。しかし、そんな事も最早分からないのだろう。ただ自分の身を削りながら騒音と木屑を作り出している。

ユキネは地面に下りる事すらせず、そのまま走る方向を１８０度変えた。直ぐに今までとは違う殺伐とした喧騒が耳を叩く。一番被害が大きそうな場所を一瞬で判断して走り出した。

「くそ…！」

口から漏れたのは、自分への悪態の声。

婦女としてどうなのかとは分かってはいるが、それでもそうでもしないと自分を殴ってしまいそうだった。

次の場所へはそう遠くは無く、一分もしないうちに到着する。

その場所はまた外れではあったが、先程のようにすぐさま身を翻すという訳にはいかなかった。

一人の女性と、その腕の中にも小さい気配。そして、一度攻撃を

外したのか、砕けた地面から拉げた腕を持ち上げている死体が一つ。

呼気一閃。

文字通り、閃光のような速さで加速した少女の剣が、有無も言わさず腐った体を中頃から寸断した。

「――ぅあ…」

ユキネの耳に、とても今際の声とは思えない、まるで安堵の溜息のような死体の”声”が耳に届いた。

「あ…あ、ありがとうございます…っ！」

固く閉じられていた目を開けた女性が、本当に生き返ったような声を上げる。

一緒に喜んであげたかったが、ただ黙って頷いただけで返した。剣の柄を握りなおすと、まだ肉を切った感触が残っている。

視線を上げれば、こちらに向かってきている兵士の一団が見える。

倒れ込んでいる女性に手を差し出すと、自分の手が血に濡れているのと、それを見て女性が小さく悲鳴を上げて後ずさった事に気付いた。

「…あの兵士に城まで連れて行ってもらってください」
「あ……」

伸ばした手を握って、後ろの兵士を指差して笑って見せた。女性がどうしたか確認する前に、後ろから腐肉が地面を踏む音が耳を掠める。振り返れば案の定、死軍の小隊がこちらに殺意を向けていた。

大丈夫だ。この程度なら問題は無い。

剣を対眼に。

「大丈夫」

もう一度口にして、その言葉を刻みつける。

「問題無い」

だって、この手は人をもう殺せるのだから。

体にかかる血を少し増やして、屋根の上に戻った時には、既に女

性は通りの向こう。近くに敵の姿も無い。体にかかった血を見て、また小さく悪態を漏らしてから、当り散らすように屋根を蹴り付けて次の喧騒に向かった。

アキラの姿は未だ見つからない。

それに、その場所にアキラが居なかったとしても、そこに戦火が無い訳ではない。見逃す事も出来ずに、剣を振っていた。それを繰り返す内に、刻一刻と体が昨日の疲れを思い出し、今ではもう常に肩が上下に揺れている。

アキラを優先するべきか、それとも信頼して任せるべきか。

城に完全に人間が避難しきれている訳では無い。まだまだ、今この瞬間にも命を落としている人間もきっといる。しかし、アキラは怪我が直ったばかり。しかも相手はその怪我を貰った男で、しかも不気味で得体が知れない人間だ。

その男に腕を食い千切られ、血に沈む姿はまだ思い出すのに苦労はしない。

くそ、とまた本日何回目になるかも分からない悪態をついて、また八つ当たり気味に屋根を蹴った。

もっと早くもっと早く、と焦りが気持ちを急かし続ける。止まってしまえば、いや、止まらなくとも、少し気を緩めただけで、嫌な

イメージが脳裏に浮かんだ。

なにもアキラだけではない。ハルユキもそうだ。

先程の男の言葉が頭を過ぎる。そして、それを肯定するかのようにハルユキの姿を見る事が出来ていない。

以前見た、血まみれの姿が何度も何度も頭に蘇ってきて、また一つ悪態をついた。

屋根を蹴る強さは上がっていき、当然ユキネの体は加速していく。疲れのせいかほんの僅かに圧し掛かる重さが、加速する度に比例するように重くなって、ユキネの体力を奪っていった。

このまま、加速し続ければいずれ壁に手を付くことになる事は分かっている。先程それは一度経験していた。しかし、もう少しだけならば、と無理をする人間の常套句で自分を騙しているのならば、そんな物に意味は無い。

何の前触れも無く、カクン、とユキネの膝が痙攣して折れ曲がった。ぐるん、と世界が綺麗に回る。

しかも運が悪い事に、走っていたのは屋根の縁。体が嫌な浮遊感に包まれ、背中に寒気が走り抜ける。

「あ――」

情けない声を最後に、ユキネの華奢な体は家と家の間に落下した。

「…っは…。はっ……は…っ」

自分の口から漏れる一際荒れた呼吸と、両側を壁に侵食された、窮屈で不自然に薄暗い空を見て、ようやくユキネは自分が無様に落下した事を悟った。

体を起こそうとすると、軽い痛みが体に走る。

しかし、怪我と言うレベルではない。移動するのに少しでも軽くしようと外していた鎧が、いつの間にか体に纏われていて、更に、たまたまそこにあった空の木箱がクッションになってくれていた。

体を起こそうとすると、カクンと膝が折れて、体から木屑が零れ落ちる。

渇いた笑いで誤魔化そうとして、そこから膝が持ち上がらないことに気付いた。笑っていた口元を噛み締めて、その間からまた悪態が漏れる。

「くそ…ぉ…！」

纏わり付く無力感に膝に拳を叩き付けた。しかし、そんな根性論でどうにかなる訳も無く。

そのまま立とうとすると、拍子抜けするほどあっさりと、ユキネの体は崩れ落ちた。すとん、と尻餅を付いて図らずも壁に背を預けるような格好に。

観念したように目を瞑る。

無理をすればこうなる。だが、ただでさえ未熟な自分が無茶をしなかったら何も変えられない事も分かっている。

小さく一回、大きく一回。最後に小さくもう一回。深く呼吸を繰り返す。甘い腐臭と、湿った空気が鼻をつくが、その代わりに頭の中は冷えていく。

グッと力強く目を開けると、体が動かない分の体力を全て頭を回転させることに注ぎ込みだした。

今これ以上動くことは困難だ。足の痙攣もすぐには無くならない。

しかし、悔やんでいる時間は無い。無力感に苛められている時間も無い。

原因はまず、当然疲れ。

そして…、昨日の試合の内容を、ほとんど覚えていないことだ。

一言で言ってしまえば、全て昨日の試合が原因。昨日の試合の疲れは一日では抜けきれず、代わりに得たはずの物は完全に見失っていた。

ノインの炎による急激な酸欠。限界を考えない心身の酷使。初めての魔力切れ。原因は数え始めればきりが無いが、恐らく全てが原因の一端ではあるはずだ。

憶えているのは、圧倒的な全能感と、体ごと擦り切れてしまうような疾走感。そして何より、重力の鎖を取り払って、空中にさえ歩む道が見えたあの世界の風景が瞼にこびり付いて離れない。

自分の能力であろうと頼りきるのは良くない事だとは分かっている。

しかし、今。今だけはあの魔法が必要だった。

「……どうして覚えてないんだ私は…！」

こうして、じっと座っている時間がもどかしくて堪らない。しかし未だ大通りには数え切れないほどの死体共が湧き続けている。

路地から出て行けば死体の雑兵にも対抗しきれないだろう。

ふと、傍に無造作に放っていた剣が目に入った。

惹き付けられるようにその柄に向かって右手が伸びる。手にとって直ぐ、流れるように迷い無く、剣の柄を額に強く押し付けた。余りに勢いが強すぎて、ガツンと、額と柄が音を立てる。しかし、ユキネはとり憑かれた様に微動だにしない。

「――――…」

冷たい鉄の感触が、火照った体を冷まし、意識が深く深く何処かに沈んでいく。

埋没して、更に更に埋没していく。

意識が感覚に埋もれて薄れていき、戦火の音も腐った臭いも、自分の中から消えていくのを感じる。冷たく冷たく、それでもどこか深く深くから、生き物のような鼓動が額を伝ってユキネの中まで伝わった。

「……メサイア」

しゃらん、というあの涼しい鎧の音も聞こえず、凛然とした立ち姿も見えないが、

〈――お傍に〉

透き通るようなその声が、目の前に傅く剣の騎士の存在を教えてくれていた。

「お前が見えないのは、私がやっぱり未熟だからか？」
〈お畏れながら。残念ながら直接手をお貸しする事は出来ません〉
「……そうか」
〈しかし、声は届きます。私にとってはそれこそが至上の喜びと存じております〉
「……ああ、ありがとう」

姿は見えないが、強がり半分でメサイアに笑いかけながら、剣を地面に突き立てた。それを支えに、一気に体を持ち上げる。

ほんの僅かだが、確かに指の先まで力が行き渡る事を確認すると、強めに石畳を何度か踏みしめて感覚を取り戻す。

主、と聞こえた声に導かれるように屋根を見上げた。指差されているわけですらないのに、自然に顔が上を向いていて、その事に余り不思議すら感じない。

〈〝破(わたし)〟は、その全ての魔法が一度きりです。一度使えば使えません。――いえ、使う必要がありません。そもそも速く動く事が目的ではなく、一つ天井を破った結果、そうあるべきだっただけであり……〉

「？　…すまん。よく分からないんだが」

〈でしたら、もう長々と詠唱する必要はない事だけを、覚えておいて下さい。決して昨夜得た物を失ってなどいない事を〉

「しかし、現に…」

〈…私が、ここにいます。それでは証明に成り得ませんか？〉

いつものからかい半分の口調ではなく、メサイアの声は真剣そのもの。あのお茶会の時よりもずっと近く、その表情も心の機微でさえも伝わってくるようだった。

「じゃあ、信じる」

〈――ありがたき幸せ〉

芝居臭い言い様に苦笑しながら、改めて屋根までの道のりを確認する。

そこからは、特別な事は何も意識していなかったと思う。とん、と浮かび上がるように一歩目が地面を離れ、二歩目が僅かにせり出した窓の縁をとらえて、次の一歩で、屋根の縁に足が届いていた。

地面にいた時と比べて、明らかに勢いが強い風が頬に当たる。それもまた死臭にまみれていたが、意識を尖らせるには丁度良い。

〈お見事です〉

待ち構えていたかのようにメサイアの声。

不思議と、自分がここに到達できた事にさほどの困惑はなかった。むしろ、今まで何故出来なかったのだという気持ちの方が大きいかも知れない。

〈そうですか？　私は主がここまで到達した事に、相当驚いていますが〉

…先程の、心の機微の何やらをここに訂正したい。と、そう強く意味を込めてユキネは溜息をついた。

「…お前の性格に対する線引きが決まったよ、メサイア」

〈申し訳ありません。主はいつも私の予想を裏切って、信頼に応えてくれるものですから。年甲斐もなく浮かれてしまいました〉

メサイアの言葉に、不満を漏らそうとしたユキネの口が、ぐっと言葉に詰まって、代わりに恨めしげにメサイアに視線を向けた。

〈精神論が通用するのは、主の下積みと才能があってこそです。誇りに思っています〉

「や、やめてくれ、分かったから」

こうまで言われて、しかもにやけそうになる口元を隠しながらでは何も言えない。メサイアはその辺りも分かってやっているのだろうが、長々と口論する暇があるわけでもない。

かといって、今まで通りに出鱈目に走り回っても、解決などしない。ならばそれはもう止めだ。

考えろ。矮小な自分の力を目一杯に発揮するように。…何より今は、考える頭がもう一つ付いてくれている。

「…私は、このままアキラを捜そうと思う」

当然考え無しに、ではない。周りにまだ民間人がいる事も分かっている。

〈…そうですね、それがよろしいかと。幸いこの町の兵士達は優秀なようです。人手が足りているわけではありませんが、指示系統に関わっていない主ではあまり成果は望めないでしょう。それならばいっそアキラ殿と一緒にあの男を打ち倒して――…〉

「――ハルユキを」

同じ考えだったのか、小さくメサイアが頷く気配がした。

〈しかし、不安材料はあります。あの男は〝動けなくした〟と言いましたが、あまり正確な言葉ではないため、多義的に捉えられます〉

「身動きがとれない状況なのか、それとも、身動きが出来ない体なのか、か。しかしなあ……」

はい、とメサイアも呆れたような声を出した。

倒される。あの男が、誰にも気付かれないまま。

有り得ない。ない。それはない。身内贔屓でも何でもなく、倒されているなど考えるのは突拍子もない考えだ。

〈まあ、これは間違いなく前者でしょう。あの御仁を真っ向から倒せる人間などいないでしょう〉

「……メサイアから見ても、ハルユキは特別なのか？」

〈特別……。…いえ、あえて言い表すならば、ハルユキ殿は〟異常

”と言うのが一番でしょう。この世界の法則に全く当て嵌まっていない。まるで――…〉

メサイアの言葉が、途中で遮られる。どうかしたか、と口を開こうとして、――直後。それが来た。

「――っ！？」

薄暗い夜の闇を越えた向こうから、それは、声か怒号か、それとも咆哮か、もしくは遠吠えか。尋常ではないその大きさは、空気を震わせて、直接指で弾いたかのように鼓膜を揺らす。

〈…主、お急ぎを〉

焦燥感が一気に背中を上り詰めて、寒気が追って背中を這い上がる。

軽くなった足が地面を叩くと、驚く程大きく前に進んだ。

速い。抜群に、先程とは比べようもない程の速さで街を走り抜ける。その分何かが燃える匂いと死臭が勢いよく顔にぶつかる。

「嫌な空気だ…」

〈戦争とはこういうものです〉
「……嫌いだよ、私は。大嫌いだ」
〈私もです〉

未だ不吉を吐き出しきらない空気を切り裂きながら、ユキネは顔を顰めた。

こうして不吉な空気に逆らって進んでいると、信じられないほど大きな何かに刃向かっているような錯覚を覚えさせられる。

「――嫌な、空気だ…」

次々とすれ違う空気の匂いに、もう一度不安を口にした。しかし、一切速度を緩めることなくユキネは突き進んでいく。

だから、遠吠えによって途切れたメサイアの言葉は。

まるで我が主のように、と続くはずだった言葉は。当然ユキネには届く事はない。

◆
◆
◆

気付けば、フェンは城門をくぐって大通りに入り口に立っていた。

手の中にある血の楔を感触だけで確かめ直す。全長５０センチ程の血で出来た楔。何故か妙に装飾が凝っていて、そこらの片手剣などよりは価値も攻撃力もあるだろう。

小さく視線だけを動かして状況と、やるべき事を確認する。

気付けば、とは言ったが、その言い方はあまり正確ではなかったかも知れない。意識がなかったわけではないのだ。もちろん、レイにこれを手渡された時の記憶も残っている。

ただ、受け取った時のものと、今手に握っているものが、同じかどうかがよく分からない。

いや、フェンにも記憶はあるのだ。必死に足を引きずるのを隠したり、怪訝そうなレイの表情も覚えている。そして、受け取ってからここまでこの楔は一度も離していない。ならば、これはレイから預かった物で間違いない。

ただ、実感が抜けている。

まるで、前の夜に見た夢のように、必死に繋ぎ止めていなければ忘れてしまいそうだった。

今まではあれだけ激しく明滅していた意識も諦めたように静まり、引き摺っていた足も、今はふわふわと浮いていきそうなほど。

ピリピリと肌が痛いのは、体の端々から魔力が漏れ出ているからだろう。月並みな言い方だが、今にも爆発しそうだ、と言い表すのが非常にしっくりくる。

その体は、まるで自分の物ではないように。記憶は、まるで誰かから貰ったかのように。別人になったかのように。

周りでは、好戦的な男達が嬉々として亡者達を次々と破壊している。ただ驚く事に敵は大幅に活性化していて、人間側にも被害は多い。

身震いしそうなその激しい戦場に向かって、意識する前に足が進んでいた。

フェンの体が小さいからか、それとも敵に集中しているからか、横をすり抜けていく小さな影に気付く人間はいない。

ただ、気付く存在は他にあった。相変わらず口の端から腑汁を垂らしながら、生者の気配に襲いかかる亡者達は、どんな小さな命でも見逃さないのだろう。

しかし、体から飽和しかけていた魔力が形と成ってそれを迎撃する。

あ、と声を出しそうになったときには、既にその死兵は、地面から突き出た氷の槍に股下から頭上までを貫かれていた。

びくん、とその死体は最後に体を痙攣させる。

しかし、今はそれを見ても、もう何も感じていない事に気付いた。

初めて見たときには、視界に入っただけで喉まで胃液が這い上がってきそうな程だった嫌悪感が、もう一欠片も感じられない。

今になって思えば、何か大切な物だったかもしれないな、と思いながら、ほぼ無意識の内に足が前へと進む。

一歩歩くごとに、敵が三体は襲ってきた。

次々に殺到する死体達を、本能的に、反射的に、いや最早自動的に串刺しにする。そして、氷の槍は次々と数と勢いを増していく。

こちらに害意を向けようとした者はもちろん、こちらに気づいていない者、裏路地から顔を出したばかりの者、果てにはまだ他の人間と交戦中の死体にまで。

加速度的にその範囲を広げていく氷の針山の前に、一分と経たず、目に見える範囲の死体共は無力化された。

目の前の磔になった死体の、充血で破裂しそうな血色の目がこち

らを見つめる。どうしてお前だけが、と。

嫌だ、とその意志を拒絶する度に、氷の槍が、または氷の槌がその目を顔ごと破壊して、遠ざける。

しかし、そうやって力に任せて亡者達を遠ざける度に、今までの日常の方が背中に遠くなり、反対にこの死体達に近づいているような。

そんな、矛盾に満ちた思いが、どうしても頭から離れなかった。

「おい…。おい、おいおいおいおいおい！」

割と近くにいた、中背の男が信じられないとばかりに、大声をあげた。

フェンの元に集まりかけていた視線が、男の伸ばされた指の先に移り変わって、皆が面白いように揃って目を見張らせた。

そこには、死体の巨軍があった。

抑え付け続けていたというこの町の要人が倒れてしまったのか、それとも他に何か原因があるのかは分からない。しかしとりあえず、あの黒い津波のような特攻に巻き込まれれば、二度と人の形を保て

なる事は理解できた。

抑え付けられていた分が増大しているのか、はち切れんばかりに膨れあがった死体の津波。地面を豪快に揺らして、地響きと死体達の怨嗟の声が混じり合って深い重低音となり、刻々とその轟音は迫ってきている。

しかし、この傭兵達も修羅場は潜ってきているのか、剣を振りかざして飛び込みはしないものの、手を翳して各々が魔法をぶつける。

「――攻城氷槍（バリスタ）」

一瞬で構成された氷の巨槍。その大きさも、数も、以前のフェンの比ではない。そして氷の槍はその巨躯を眩ませて、一瞬後には傭兵達の魔法を追い越し死体の波の中心に突き刺さる。

が、流石に太刀打ちできず、一瞬動きを鈍らせただけでさして効果はない。

遅れて、傭兵達の魔法も次々と敵軍と衝突するが、一瞬の抵抗も出来ないままに吹き飛ばされて霧消する。圧倒的に質量が足りない。絶望的に勢いが足りないのだ。

フェンはそれを確認してゆっくりと杖を前方に翳した。

「――黒鉄槌（バウンドラッシュ）」

土色と緋色の魔力が、空中に浮かび上がり、結合し混ざり合う。そして、黒い太陽のような無骨で所々が角張った鉄の塊が出来るのに、一秒もかからない。

カランカラン、と剣を取り落とす音が連続する。三つ並べれば、この幅広い大通りも塞いでしまうのではないか、と言うほどの巨槌の出現に、周りの人間の方が萎縮してしまっていた。

もう誰も魔法を撃たない中、その漆黒の鉄球が図らずも独占した大通りの中空を我が物顔で突き進む。余り形はよくないからか、出っ張った角が風を切り、獣の唸りのような音を撒き散らしながら突き進んでいく。

死軍の津波。黒金の剛槌。

どちらも轟音を喚き散らしながら、一切の勢いを落とさずに、――そのまま、衝突した。

硬度はどう考えてもこちらが上。その為か、肉が磨り潰される音が、百メートル程離れたこの辺りにまで聞こえてくる。しかし、その音を追うように聞こえてきたのは、僅かに勢いを落としただけの地響きの音。

まだ、まだ足りない。あれは腐っても人間だ。直線的な魔法では対応しきれない。

しかし、それを想定していたのか、それともそんな物は最初から興味がないのか、フェンはその小さな体には大きすぎる程の杖を、体の一部かのように軽やかに振り回す。
そして最後に、とん、と杖の先を優しく地面に押し付けた。

「――火砕竜（アグナコトル）」

杖の勢いからは考えられないが、杖の先の地面が小さくひび割れて、隆起する。しかし、ほんの僅かに持ち上がっただけで、何ごとも起こらない。

――と、そう思われた瞬間、巨大な紅蓮の顎が、死体達の足下から石畳を突き破って、目の前の腐肉に食らい付いた。

死体の津波の中を泳ぐように、その紅蓮の竜はその巨躯をくねらせる。その度に、歓喜に満ちた断末魔が響き、一瞬で焦がされる肉の臭いが充満する。

先に放った鉄の塊をも飲み込みながら、竜は一心不乱に敵を飲み込んでいく。

そして、静寂。

目の前に出来上がったのは、固まった鉄と溶岩の壁。どこの城壁かと思えるほどのその壁は、厚く大きくて、暗く沈んだ色をしている。こちらに手を伸ばした亡者が鉄で塗り固められているのはまるで前衛的な芸術でも見ているかのようだった。

しかし決して余裕の出来事ではない。巨大な魔法に蹂躙されながらも、死兵達は行軍を続けていた。その結果、城門と民間人達の目と鼻の先に到達するほどに。

歓喜の声が、上げようと、ただ大口を開けて固まっていた傭兵達が、フェンに駆け寄る。

しかし、目の前の光景に一番驚いて腰砕けになりそうだったのは、その魔法を使った小さい魔法使い自身だった。

また、また実感だけが抜け落ちた。私だけではこんな事は出来ないはずなのに、知らない魔法だってあったのに、それなのに、この状況は何だ、と。

――そして、未だその小さな魔法使いが体内で魔力を練り込んでいる事に、その小さい魔法使い自身がやっと気付いた。

びしり、と束の間の平穏に罅が入る音。

■■■■■■■■■■■■■■■――――……！！

怒号にも似た、怨嗟の声。重なり合って、混じり合いながら鉄の壁と反響するその声は、どうにも哀れで耳障りに感じる。

ゴボん、と溶岩の塊が一部剥がれて地面に砕け、一瞬の静寂の後、――鉄の壁が一瞬で決壊して、いとも簡単に足蹴にされ飲み込まれた。

フェンの存命を責める、死体の血色の目が見分けられる程に死軍は近い。

死の気配がフェンの背中に走り抜ける。

しかし、それは慣れてしまえば、――いや、元々慣れてしまった物でしかなかったのだ。

あれほど恐かった死が、他人の死にさえ躍起になっていたのが、馬鹿らしくなる程に、滑稽で陳腐だった。

「――”原初を此処に”」

詠唱は一言。

知らないはずの言葉。覚えているはずのない一節。

芋の蔓を引っ張り上げるかのように、その一言に導かれて、様々な物が引き摺り出されていく。

頭に蘇る様々な記憶を、どこか人事のように感じながら、思考を逃がすように、別の事を考える。その間も変わらず、魔力は吹き出し、収束し、魔法と成っていく。

やめて、と呟いても止まらない。
ごめん、と謝っても許されない。
許して、と媚びても叶わない。

そう言えば、今日はハルユキとあまり話せなかったな、と子供のような事を最後に思って、少しだけ後悔した。

「――”混沌（カオス・オーダー）を希う”」

白より黒く、黒より白く、その色は何とも筆舌しがたい。ただ、見ていて気持ちの良い色ではない。音もなく、光もなく、容赦も、赦しもない。

その色に視界が、世界が染まる。

そして、その色が通り過ぎた後には何も残らず、あの灰色に道連れにされて消え去っていた。

あのしつこく鼻に絡みついた腐臭も、うなされそうな怨嗟の声も、当然、その源である腐肉の塊も。街の出口まで地続きだったはずの死霊達はおろか、それに面する地面も、家屋も、削り取られて消失している。

驚きを言葉にすら出来ず、既に剣も取り落としてしまった傭兵達はただ呆然と口を開けて、瞠目を続ける。そんな中、何事もなかったかのように、彼女は前に進んだ。

その顔は、今にも泣き崩れてしまいそうなほど頼りなく。

◆

ずん、と地面が揺れた。

〈主…！〉

その声に、返事を返すも間もなくユキネは屋根から大通りに飛び込んだ。

瞬間、屋根の上をもの凄い強風が吹き抜ける。その風の中には引き剥がされた屋根の一部や敵兵の姿も少なくなく、いかにその風が荒々しいかを物語っている。

「何だ、この風は…？」

その風を直接は受けていないはずの家が、ぎしぎしと軋む。家に近いここには被害はないが、大通りの向こう側には先ほど言った屋根の破片などが散らかっている。

ギッと、最後にもう一軋りして、風が止んだ事を知らせてくれた。

〈分かりません、が。――主。考えている暇はどうやらないようです〉

「え…？」

うずたかく積もったガラクタの中、その一部が、ゴトと音を鳴らした。

「――よう。まァた会ったな」

そして、その場所に注意を払っていたのを嘲笑うかのように、背後の屋根から声。濁った夜の空に割り込むように佇むその姿を見つけた。反射的に剣を握って、鉄の感触を確かめる。

「探したぞ…」

「おいおい、相思相愛かよ。参ったな、抵抗されんのが堪んねェんだぜ――？」

「残念だがお前には何もやれる物はない。…アキラは何処だ」

そう言うと、それを待ちかねていたように、愉快げにその男は唇を釣り上げた。

すっとその笑顔を保ったまま、視線をずらした。その視線はユキネの後ろ。恐らく、先程屋根が動いた辺り。振り向いた瞬間、その視線とすれ違うようにユキネの頭上を飛び越えた。

背後で、形容しがたい何かと何かが衝突した音がした。剣と剣ではない。拳同士でも、ましてや魔法などではない。無理に例えるなら、爪と牙がぶつかったような、そんな生々しい音。

再び振り向いて、しかし視線から逃げるようにその黒い影は残像だけを残して視界の外に消える。

そして、驚いた。

その姿が何かまでは分からなかったが、影の大きさが尋常ではない。この街に来る時に出会った巨大猪と同じぐらい、いや、それよりも大きいのではないかと言う程の巨躯を誇っている。

そしてズン、とそれが地面に降り立つ音がして、――直後。怒号に似た遠吠えが、再び夜の空気を震わせた。

「……！」

思わず耳で手をふさぐ。その中で確かに見た。その影の正体、琥珀色の、巨大な狼を。

〈獣憑きです！　しかし大神とは…！　信じられないかも知れないですが聞いて下さい。あれは…〉

「アキラ、か…？」

琥珀色の硬そうな毛並み。

その毛の色も、水ではとても梳かせそうにない硬そうな癖っ毛も、見覚えがありすぎる。

あまりの変わりように、言葉を失っている中、アキラは体を低く屈ませた。そして、四本の足でしっかりと地面を蹴り出し、その大きさからは想像できないほど軽やかに宙を跳ぶ。

その姿は、皮肉にもとても綺麗で、幻想的で、その殺意に濡れた牙でさえも神聖な物に映ってしまう。それこそ、先程とは違う意味で言葉を失ってしまう程に。

その牙の向かう先は、変わらず屋根の上で、不気味に笑う生身の男。その獣を迎え撃つように、空間に切れ目が入る。

再び、筆舌しがたい生々しい音が鳴り響く。

空間の切れ目が牙となり、アキラを噛み砕こうと大口を開ける。それを爪で受け止めながら、本物の牙をその顎の向こうにいる男に食い込ませる。

しかし、男は体に貫通する程、深く突き刺さった牙を見て、なおも笑顔を絶やさない。あろう事か、そのまま自分に刺さっている牙を思い切り握り締めた。

「はっはははははははははははははははァッ！！」

少なくない量の血を撒き散らしながら、男は更に腕に力を込める。ミシリ、と牙が音を立てて、砕けた。

大口を開けて笑いながら、男は器用に体を回転させ後ろ蹴りを、自分の顔程もあるアキラの鼻にたたき込んだ。

当たり所が当たり所だ。ダメージと言うより、怯みは必ず発生する。――よって、驚愕すべきは、その膂力。全長十五メートル以上はあるかというアキラの体が、”ずれる”ほどの。

そして、場所は屋根の端。バランスを崩したアキラは口の端から血を撒き散らしながら、屋根の高さから落下していく。

しかし、視線が未だ男から離れていない。

すっと、高笑いを続ける男の足下が――いや、その辺り一帯が陰る。

そこでようやく、アキラの視線と、更に上から振ってくるものに気が付くが、男は避ける事もせずただ両手を広げ、その唇を更に歪ませただけ。

そして、アキラの振り上げられた琥珀色の尾が、屋根ごと男を強かに打ち付けた。

その重量からか、男が立っていた屋根は一瞬も耐えることなく、

壁ごと一階まで一直線に叩き割られる。パラパラと、木屑が舞って、その一つがユキネの頬に当たった。

「あ、アキラ！」

驚きに身を固まらせていた事に気付き、ビクッと肩を揺らす。慌てて辺りを見渡すと、相変わらず、身を屈めて警戒を露わにしている琥珀色の獣を見つけた。

そう離れてはおらず、一気に足下まで近づくと、またも驚きに身を固まらせる事になった。

琥珀色の狼は思っていたよりもずっと大きく、屈んでいるにも関わらずここからでは手が届かない。

その緋色の瞳は、未だ男が眠っているはずの家に向けられていて、その細長く拡がった瞳孔には、草書のように崩れた”狛”の文字が細々と光っている。

そして、何より、口の端から流れる血。

てっきり男の血かと思っていたが、その割に牙はほとんどが朱に染まり、流れ出る量の血の量も明らかに多すぎる。

〈こう言った体を媒介にする魔術は当然体に負担をかけるため、成

人するまでは使ってはいけないと聞きます。止めるべきです〉

聞こうとした瞬間に、質問の答えが返ってきた。

頼もしさを感じながら、頷いて、直ぐ傍の琥珀色の毛並みに手を伸ばした。――そして、触れようとした、その瞬間。

殺意に濡れた視線が、ユキネに襲いかかった。同時に、耐え難い程の寒気が背中を走り抜ける。

〈主、下がって…！〉

「……駄目だ。アキラが」

目を逸らさない。それだけの事をするのにも、相当な覚悟と集中力が必要だった。

警戒を滲ませながら、こちらを見定めるように目を細めるアキラには、自分の事は分かっていないだろう、とユキネは察しをつける。

じわり、と手に汗が滲んだのが分かった。一度それを拭ってから、改めてアキラの前足に手を伸ばした。

「――大丈夫だ。もう、終わったから」

触ってみて初めて分かる。その巨大な足が小刻みに震えている事が。

恐怖だろうか。それとも無理矢理行使した魔法に、体が悲鳴を上げているのか。恐らくはそのどちらもだろう。低く唸りながら、視線はまだ壁が崩壊した先程の家に張り付いて離れない。

「――大丈夫だよ。まァだ終わってねェからよ…！」

低く嘲笑うかのように、声が聞こえた。

「……お前…！」

崩れた壁の破片を退ける音に振り返ってみれば、そこには先程の男がいて、目を疑った。生きている事ももちろんそうだが、そんな事より、その立ち姿に。

太い牙は未だ背中から貫通したまま下腹部から突き出て、体のあちこちには小さくない壁の破片が突き刺さっている。足下から、喉元にも腕と同じほどの物が突き刺さっているのに、男は一切動じないまま、愉しそうに口元を歪めている。

ぼたぼた、と血は零れ、しかし、数秒と経たない内に気化して消えていく。服を脱ぐような気楽さで、刺さった木々を抜いていき、その跡も瞬く間に消える。

腹部に刺さった牙に至っては、体の中に埋まっていき、まるで胃の中に消えたように消えて無くなった。

「何千人の命背負ってるからよ。俺は簡単には死ねねェさ。――ただ、それにしてもだ。今日は馬鹿みたいに、気分が良い」

ゴキン、ゴキンと首を鳴らして、全快を示す。

「さァて、そろそろ時間がねェ。俺にも多少は予定があるからよ。ここらで終わっとこうぜ？」

殺意が再び足下から這い上がってくる。その殺意の濃厚さに寒気すら感じるのに、背中にはじっとりと汗が滲み出る。

〈――何だあの男は…？〉

「メサイア…？」

メサイアからあまり聞き覚えがない口調の声が聞こえた。短い付き合いだが、メサイアがこんな口調で話す事があるのかと思って少し驚く。

しかし、ハルユキの事でさえ驚かずに話してのけるメサイアが、いくら不気味だからと言ってこんな男に慌てるだろうか、とそんな

思考も相まって、ますます場の状況が混迷を深めていく。

〈少し何かがおかしいです。出来れば様子を…〉

それに挑むように剣を構える。見える男は昨日ハルユキに撃退された男で間違いない。しかし、確かにその力は昨日とはまるで違う。

ドズン、と後ろで何かが地面を揺らした。何か、とはぐらかした所で一つしかない。

剣は構えたまま肩越しに見れば、狼が荒く息を吐きながら横たわっている。

〈主…〉

「分かってる…！」

気のせいか、既に先程よりも小さくなっている気がする。そもそも正気とは言い難い状態だったが、これで事実上一人で戦うしか無くなった。

〈い、いえ、そうではなく…〉

「え…？」

メサイアの声のする方に目を向けると、理解しがたい事が起きて

いた。

——男が、力無く地面に横たわっている。

「……え？」

意味が分からない、と驚きのあまり剣を取り落としそうになって、慌てて握り直す。ごそ、と男が身動ぎした。どうやら死んではいないようだ。

「を——…た…？」

男の腕が地面に押し付けられ、ぐっと体を持ち上げた。

「何をしたァ…？」

そう言っただけで、男は胸を押さえ、次の瞬間には致死量を超えているといってもいいほどの血を吐き出した。びちゃびちゃと、男を中心に血溜まりが広がっていく。

「あー…、こりゃ…ァ、ちと、拙い…」

一瞬で、膨大な魔力が男の体から迸った。力任せに地面を蹴りつける。が向かった先はユキネから離れた屋根の上。

こちらに憎々しげな視線を一瞥させると、そのまま背を向けて去っていった。

「ま、待て！」

〈主。あの男は逃がしたくはないですが、今はアキラ殿を〉

「っ…ああ。分かってる」

悔しげにもう一度だけ男が消えた方向を睨んで、アキラが横たわっている場所に踵を返した。

「死んでは、いないな…」

苦しげながらも、何とか呼吸を繰り返しているのを見て、ユキネは胸を撫で下ろした。

琥珀色の毛が風に乗って消えていき、あの見上げるほどだった巨躯は縮んでいて、アキラも人の形を忘れていなかったようだ。

怪我はなく、ただ魔力が切れてしまったのか、目を覚ましそうな気配はない。肩から持ち上げて背中に背負うと、何度か揺すって持ちやすい場所を探す。

〈今は一旦城に行きましょう。アキラ殿に治療が必要かもしれませんし、何か城の方で進展があったやもしれません〉

「そうだな…」

背中にアキラを乗せたまま、城の方を見上げて。――それがユキネが空を見上げるのを待ち構えていたかのように、夜の空に広がった。

「何なんだ、一体…！」

不可解に不可解を塗り重ねて、まるで人が混乱するのを楽しむように。ただ頭と状況を混乱させるために現れたようなそれは、昨日見た物とは違って、濁って見えて仕方がない。

あの男だけではあり得ない。一体今、この街には何人の人間が糸を引いているのか。

状況はただひたすらに混沌へと向かい、収束する気配さえも見せはしない。

それを笑顔で肯定するように。ぽっかりと灰色の空に穴が開いたように。

白い巨大な太陽が浮かんでいた。

◆
◆
◆

水で細部までが投影された剣軍が、正確に敵の頭を打ち抜いていった。

「終わったぞい」

何の変哲もない道の中心に、レイから渡された血のように赤い楔を打ち付けた後、ムイリオは手の中の魔石に向かってそう呟いた。その呟きは溜息混じりで、年相応の老いを感じさせる。

周りにはとりあえず敵の姿はなく、やれやれと零しながら腰を叩くと、剣を一本杖代わりにしてそのまま城へと踵を返した。

死体は未だに沸き続けてはいるものの、このままレイの策が上手く講じれば無力化できるだろう。

ならば、後はもうこの戦争の終着を待つだけのはず、だが。ムイリオはどこか雲行きの怪しさを感じていた。何か根拠があるわけではない。山の雨を読むような漠然としたものだが、こういう予感は当たってしまう事が少なくない。

やれやれと、再び溜息混じりに首を振りながら、帰路を急ぐ。――そしてしかし、ほんの数歩ほど進んだところで、ムイリオは何かに気づいて足を止めた。

「……どうした。何か用かガネット」
「ばれていましたか。気配を消すのは得意にしていたつもりだったのですが」

裏路地に入る家々の間で金色の長髪が揺れた。ユキネが短く切り揃えてしまったので、今ではムイリオの知人の中では一番長い金髪となっている。

ガネットは張り付いたような笑顔で、裏路地から姿を現すと、ムイリオから数歩離れたところで止まった。伊達に裏の世界で生きていたわけではないのか、その表情から何かうかがい知る事は出来ない。

「…少し、聞きたい事がありましてね」
「聞きたい事？」
「なに、このような状況です。聞きたいのは二つ。簡単な事です」

言ってみろ、と意味を込めて、ムイリオはうなずいた。それに対してガネットも何時ものように、どうも、と嫌に礼儀正しく一礼すると口を開いた。

「――あなたが嘘をついた理由と、それがこの騒動に関係があるかどうかを」

ぴくんと、ムイリオの眉毛が痙攣した。当然それを期待していたガネットはそれに気づくが、気付いた様子を微塵も見せずに表情筋を一ミリも動かさず笑顔のまま。

「……嘘？　身に覚えがないな」

「別に、それを聞いてどうこうするつもりはありませんよ。あなたには世話になっているし、私には善悪を問えるほど、強い人間ではありませんから」

わざわざ身振り手振りを交えて、大仰に話すガネットに、ムイリオは剣に体重を預けて、押し黙ったまま。

元から切れ長の目を更に細めてガネットはムイリオを観察するが、そこは歳の差。そうそうと墓穴を掘るつもりはないようだ。

「先日貴方には止められましたが、私はハルユキさんの一行に確認を取りに行きました。そこでは嘘をついている様子もなかったし、

そんな事もあるのかと納得しただけでしたよ」
「何じゃユキネの話か。それは嘘ではない。お前も分かっているじゃろう？」
「いえいえ、嘘ですよ」

確信に満ちた言葉に、僅かだがムイリオの呼吸が乱れた。いや、そのような気がしないでもないと言った程だが、間違いなくガネットの言葉は、ムイリオの中の何かの琴線に触れた。

「あの時ハルユキさんは二三国隣の国の事だと言っていました。私もこの辺りの事情には明るくはないので、そうなのだろうとしか思っていませんでしたが…」

再び、ムイリオが押し黙る。その目は先程とは違い剣呑としているが、ガネットは軽やかに笑顔でそれを受け流す。

「――没落した王家？　民に政権を譲った国家？　そんな物はここ５０年は存在しない。少なくともこの辺りの国ではね」
「……」
「否定するというのならば、教えて頂きたい。その国の名前を。その王家の名前を」

否定するでもなく、肯定するでもなく、ムイリオはただ黙ってガネットを見つめる。沈黙は肯定。〝何かある〟とは判断できる。しかしそこは八割方予想していた事。ならば今のムイリオの頭の中は、

――ガネットの始末をどうするか。

「その質問は、どういった意図から来ておる」

「…何だと思います？」

「すまんが、今の儂はおふざけに構っていられるほど寛容ではいられん」

ガネットの背中に冷たい汗が流れ落ちる。ムイリオが向けているのは紛れもなく殺気。伊達に”仙人”とまで呼ばれていない。静かな言葉だったが、ナイフを突き付けられたかのようにすら感じる。

「そうですね。好奇心ですかね」

嘘ではない。もしこの状況に荷担した人間だったとしても、殺す気はなかったし、おそらく自首するように説得するだけだっただろう。

小さく目を見開いたムイリオは、しばらく間を開けた後、観念したように溜息をついた。

「…その国の名を知っている人間はもういない。以前から一人しか居なかったがな。そして、――王家の名はメロディアじゃ」

静かに告げられたムイリオの言葉に、今度はガネットが目を見開

いた。

「メロディィア…！？　馬鹿な、メロディィアと言えば…！」
「――動くなよ」

驚きに初めて隙を見せたガネットの方向にムイリオが剣を向けた。
それを見て、ガネットは納得がいったかのように、冷たい笑顔を取り戻す。

「…残念です。貴方の事は結構慕っていましたよ」
「それは儂もだし、今でもそうじゃ。それに、先の言葉はお主に向けていった言葉ではない」
「なにを……？」

怪訝に笑顔を引っ込めたガネットが、その表情のまま地面に倒れ込んだ。

「――厚かましくも、手を出させて頂きました。どうかご容赦を」

その後ろに立ち、ムイリオと相対し直したのは、年端もいかないような若い娘。

「油断、しま…た、かね…」

「儂がお前に危害は加えさせん。今は眠れ」

その言葉に、皮肉気に笑ってみせると、それを最後にガネットの体から力が抜けた。ムイリオはそれを確認すると、僅かに険しくなった目線を、未だガネットの後ろで直立を続ける女に向けた。

「貴様ギルドで受付をやっていた小娘か。成程、貴様が使いというわけか？」
「はい。ウェスリアと申します。聖女の命によりお迎えに上がりました」
「すまぬがそれは延期だ。この街の復興は手伝いたい。少し長くなるやもしれんが必ず行くと伝えてくれ」
「この男はどう致しましょう？」
「なに、儂が事情は説明する。どうせこやつと、あと一人は連れて行く予定だったのでな」

その言葉に、ウェスリアはスカートの裾を満ち上げて、街の人間だとは思えないほどに高い気品と優雅さを持って一礼すると、溶けるように夜に消えていった。

混沌渦中（後書き）

ユキネの国の名前を出していない、という無茶な伏線でした。
やめて！　石は投げないで！
……はいすいません。何かあれば感想欄にどうぞ。

引越しやら何やらで更新遅れました。明日が入居なのでネット環境整うまでは更新できません。と言うより、ネットは繋げさせてもらえないようなので更新はまとめてG・W・にでもするつもりです。
思い出した時にでも来てやって下さい。

獅子の夢（前書き）

投下します

獅子の夢

する、と音も立てずに流れるような金髪が僅かに揺れた。

「ん？　どうかしたかい、オフィウクス」

それを目聡く見つけたのか、一人の子供が浮かび上がるように姿を現して、無邪気に声をかけた。姿は確認できるもののその印象は限り無く希薄で、ここに実体があるわけではない。

言葉が送られたのは、質素でありながら、どこと無く重量を感じさせる黒木の円卓。薄暗さが手伝ってより空気が重く居座っているが、その金髪はそんなものは気にも留めずに、ゆらゆらと暗闇にひらめいた。

「――少し、微睡んでしまったようだ」

「珍しいね。そんな無防備な君は。それにその体は殆ど睡眠を必要としないはずだけど」

「……それに、どうやら夢を見たらしいな」

やれやれと自嘲しながら、何時も通りの頬杖を付く体勢に戻った。男は未だやるべき事は無い。しかし、だからこそ体を置いて心が先走り必要以上に躍ってしまう。

「楽しみで眠れなかったのかい？」
「そうなのだろうな。中々考えさせられる体験だったよ」

頬骨を乗せた右拳に体重を預けて、金髪の男は恍惚とするように目を細めた。

「過去の夢だったか、未来を夢想したものだったか、話そうとすればその端から夢の記憶が零れ落ちていく感覚だ。この喜びを伝えきれない自分が恨めしいよ」

「良いんじゃない？　その夢が過去か未来かは知らないけれど、過去にしがみ付くのは老害だけで十分だし、未来を知って面白がるのは貴族のご婦人達ぐらいだ。僕はどちらも苦手だよ」

「そう言ってくれるなレオ。偶には少年のように夢に胸を膨らませても構わんだろう？」

嫌味を言ったつもりは無いよ、と肩を竦めて子供は笑う。

「いいなぁってね。僕は逆に億劫だから。見たくも無い顔も見なくてはいけないし。旧交を温めてる暇も無い」
「馬鹿な事を言う。天秤のの方はともかく、君が言うその”人形”には毎夜夢想しているのではないか？」

微笑を蓄えたまま言われた言葉に、やれやれとわざとらしく肩を竦めて頭を振りながら、その子供は金髪の男のすぐ傍に退屈そうに座り込んだ。

「計算高い我が腹心殿のことだ。良きも悪きも掌中の事だと見ているが、違ったかね？」

「……　おやおや、お見通しか。君に隠し事と言うのはどうも難しいね」

「確かに人心を読み解くのは経験上得意なはずだが、それでも貴兄の心を読み解けてはいないつもりだよ」

騙し、騙されている事をお互いに許容してそれでも二人の関係は敵対ではない。

優雅に笑みを携えているその光景は、もし画家達が居たならばたまらず画材を持ち出してしまうほど優雅で荘厳だ。

特に金髪の男の方。まるで浮世離れした風貌だ。

束から逸れた僅かな金髪が光を受け、まるで金色の火花を髪から散らしているようにも見え、視線一つで人を殺せてしまえそうな魔力をその身に秘めている。

「優雅だねぇ、絵画に引き篭もってた方が世の為になるんじゃない？」

「この容姿と声は数少ない好き嫌いの一つなんだがね。否応無しに威圧感を与えてしまうのは好ましいものではないだろう？」

「きっとカリスマ性ってのを付加しようとしたんだろうねぇ」

やれやれと小さく溜息を付く姿もまた、額縁をあてれば作品となるだろう。

それをレオは厄介事を抱え込んだ友人をからかうようにからからと笑うと、僅かに声色を変えて話を続ける。

「ヴァーゴから連絡があったよ。もう直ぐ事が終わるってさ。僕達も今帰ってきたところだ。もう直ぐアリエスが行くと思う」
「安心したよ。君達二人を使って国一つも相手に出来ないとなると、頭を抱えるところだ」

浮かべたままの微笑は、嬉しく輝いているわけでもなく、これ以上深まる事も無く。ただ静かに、ささやかな愉悦を示している。

「総統殿」

それは呻く様な声だった。

しかし低過ぎる訳ではなく女のものだということは辛うじて分かる程で、その声はただ中心に楕円の円卓が置かれただけの無駄に広い空間に深く響いて通り抜けた。

泣き叫び過ぎて潰れてしまったような、そんな声だった。

「やあアリエス。早かったね」
「黙れ愚族。貴様の様な化生の類に利かせる口は持ち合わせていない。総統殿への報告を邪魔するなら殺して晒すぞ」
「嫌われてるなあ、自分の人望の無さに驚きと動揺を隠せないよ」

ケタケタと笑う子供を敵意と警戒で見据えたまま、規則正しく歩を進めて円卓の中で一段だけ高く建造されている座の前に。

「分かっているさ。君と総統殿との睦み時を邪魔するつもりは無いよ。僕は彼女の方に挨拶してくるとしよう」
「下種な勘繰りをするな。私はそんな物を超越した所で総統殿を敬愛しているのだ」

そう言うとそこでようやく子供から視線を外し、その女にしては大きい体躯を極限まで縮めるように、その場に跪いく。

色をどこかに落としてきたような無理矢理押さえつけて所々がギザギザに跳ねた白い長髪が地面に付いて埃を付けるが構う事無く頭を更に下げて敬服を示していた。

白い髪によく映える黒い軍服。しかし仕える先は軍でも国でもなく、一人の男。

女としての感情があるかどうかは窺い知る事は出来ないが、よっぽど心酔してしまっていることは、向き合うその姿勢から言葉の端

々から滲み出ている。

「あー、いたいたぁ。居たわよレオぉ。この人が首領様ね。わぁ、聞いていた以上に見目麗しい」
「ちょっと、一応ここは関係者以外立ち入り禁止だよ」
「いけない？　どうせあたしも直ぐここの一員なのでしょう？」
「まあそうだけどさ」

聞こえた会話に、アリエスは僅かに頭を上げ、小さく一つ溜息を付く。

「済まないなアリエス。今はまだ彼女は客人だ。報告は跡で構わんかね？」
「御随意に」

そのまま一歩下がりながら顔を上げると、立ち上がって声のする方を向き、さらに忌々しげにもう一度溜息を付いた。

「”一人目（アイン）”はどうだったかな？　目的の人物だったと思うのだが」
「ああその節はどうも。八百年探しても見つからなかったのにいとも簡単に見つかっちゃったから凄く今ビックリしてるの」
「それは行幸」

踊るように小走りで近寄ってきたのは、子供の姿をしたレオより

更に頭一つ小さい背丈の少女。

純粋に驚いた顔、ただただ喜ぶ顔をむき出しの感情が顔の外まで出ているようだ。

腰まである長い髪を先だけ結んで適当に結んでいるだけで、格好も普通の街娘の格好と比べて何も変わらない。

「今は私の部屋で眠ってもらってるわ。それにしても国家を隠れ蓑にしてたとはねぇ」

「丁重に扱えよ、”スコーピオ”。あれはまだ我等にも利用価値がある」

そのまま、黒髪の女がアリエスの居る場所を踏み越えて、オフィウクスに更に近寄ろうとした所で、アリエスが釘を刺すように声をかけた。

レオの時のような険悪な声ではない。それは未だ彼女が同志というよりは客人の立場にあるというのも大きな要因となってはいるが、それよりは寧ろどこか透明な彼女の対応に警戒が薄いからかもしれない。

「えー、あれは私のよ。私がどうしようと勝手でしょう？」

「その貴様は半ば総統の所有物だ。白といえば白、黒といえば黒。股を開けといわれたら四の五の言わずに黙って開け」

「あら総統様ったら溜まっていたのね。私なんかの処女で良かったら幾らでも差し上げるのに」

その明け透けな態度は決して、彼女の知能の低さを示している訳ではない。

ただ、道具を使うのに人間が裏を読む事をしないように、彼女にとって人間同士の腹の探りあいに意味を見出せないだけだ。

「遠慮しておくよ。代わりといっては何だが、今度紅茶でもご馳走させて貰おうか」

「まあ嬉しい。珈琲でなくて良かったわ。苦いのは苦手なの」

くるくると人形のようにその場で回って見せると、それこそ何の企みも悪意も無い笑顔を浮かべてみせた。

透明感があって朗らかなその笑み。しかしその笑顔が誘発させるのは安らかさや和みといった物とは対極の、どこか薄ら寒いものだ。

「さて、ここからは殆ど私用だが、同じく私用のレオは当然として、アリエス。君はどうする」

その言葉を待っていたかのように、アリエスはただでさえ伸びていた背筋を一層屹立させると、加えて踵を打ち鳴らして気を付けの姿勢をとった。

上げられたその顔はきつく引き締まり、顔に走った細かな傷跡を

勲章だとでも言うように見せ付ける。

「約束の通り一晩で事を済ませてきました。どうかこのまま次の戦場で背中を守る事をお許し頂きたい」

「それは何より。元より君以外に背中を任せる役を任せてはいないのだ。

君が私の期待を裏切る訳がないと私は確信しているが、――これは過信に過ぎるかね？」

「――いえ。その代え難いものがある限り貴方に闘争と勝利を約束します」

「頼りにしているよ、アリエス」

「はっ――！」

その言葉を最後に女物ですらない無骨な黒い皮のコートを翻らせて、女は円卓に置かれた燭台の光が届かない暗がりの中に突き進んで消えていった。

アリエスが去った場所に代わりに少女が音も無く移動して、にこりと笑顔を咲かせる。

「当然、私もよね？」

「ああ、もう一人はそこにいる」

「なら待っていて。女の子はおめかしが必要なの」

「おや、そういった物は気にしないかと思ったが」

「イヤァね。女の子はいつでも身嗜み。親の躾が厳しくて、これでも苦労は多いのよ？」

ひらり、とそれでも凡雑なスカートを体と一緒に回転させると、アリエスの後を追う様に消えていく。

「また個性の強い子が入ったね……」

「歓迎すべき事で、危惧すべき事ではないだろう」

珍しく気疲れしているのか、子供の姿には似つかわしくない動作で肩のコリを気にして見せると、レオもその姿を眩ました。

「さて――」

一人残った男は、夢の余韻に浸り足りないのかまた椅子に体重を預けて目を瞑る。

◆

◆

◆

普通の人間と比べて、特に優れた五感を持つレイには、その変化は酷く顕著なものだった。

神経を集中せずとも、肌が痺れるほどの魔力の奔流。

そして町中で海鳴りのように続いていた怨嗟の声が、削り取られたように一瞬で消失するのを確かに捉えた。

「……フェン、返事をしろ」

そこで何が起こったかは定かではない。しかし、方向は正門の向こう。つい先程友人を送り出したばかりの場所。

幸いのっぴきならない事情により、謁見室での儀式魔法を中断して屋外――城の外の正門近くにまで来ている。

つまりは、フェンに一度会ってから、謁見室に行き、そしてまたここに戻ってきていて、それが幸いという訳ではないが、返答如何では駆けつける事も出来ないことは無い。

『…なに？　レイ』

しかし驚くほどあっさりと、レイの予想は覆された。

魔石の向こうから聞こえてきたのは、驚くほどいつも通りの平坦な声。異常も感情も感じられない驚くほどの日常（いつもどおり）。

「…そちらで何かあったか？」

『……少しだけ大きな魔法を使った、それだけ』
「そうか…、いやすまない。問題がなければそのまま指定の場所まで頼む」
『……了解』

その声を以って魔石から光が掻き消える。

フェンの言葉に嘘も感じられず、逼迫した様子も特には無かった。ならば予想以上に良い働きを期待できるというものだ。

しかし、それにしても、原因も分からない一抹の不安がシコリのようにレイの胸に残る。

「……」

一度顔を顰めてから、魔石を袖の中に仕舞った。

レイは顰め面のまま、いつからこんなに振り回されるような人懐こい性格になってしまったのか、と一人心中でごちる。それもこれも周りの人間共が青春よろしく面倒な悩みを持ってくるからだ、と。

加えて唯一手のかからない男は、これまたどこぞの馬鹿の手にかかって姿を眩ませている始末。

「全く、手をかけおって…！」

がりがりと普段やらないような仕草で思い切り後頭部を掻き毟ると、正門とは反対側に跳んだ。

信頼とかそういう事を考えていた訳ではない。不本意ながらも気にかかって仕方が無いが、それでも何か根拠があるわけではないのだ。それに今から謁見室に戻って途中だった式を組みなおした方が、事を片付けるにはよっぽど速いだろう。

それに、過保護を行うのは自分の役目ではない。

自覚が足りないのだ。あの男は。

得意の鈍感さゆえに、自分が軸として周りを支えている事に気付いていない。

そもそも今日は優勝賞金を使わせて、以前作った貸しを返してもらう予定だったのに、だ。

苛立ちを足取りに多大に表しながら、辿り着いたのはいつかガラドとミスラが婚姻を誓っていた中庭。

今はここまで、血生臭い匂いが立ち込めていて、あの時の幸福な時間は思い出すは一苦労だ。

用があるのは謁見室。

この道程から行くのは初めてだが、一度は行った場所だ。大体の場所の見当は付いている。

「おい！　黒髪の！　貴様正門にどんな人間を送った!?」

予想される場所まで飛ぼうと、背中の肩甲骨の辺りに魔力を集中させていた所で、中庭に乗り出すようにミスラが顔を出して、声を荒げた。

先程の魔力の奔流は恐らく作戦本部からはさぞ良く見えたのだろう。

背中に十分魔力が溜まったのを確認して、血で真紅の翼を精製する。

長時間飛行は無理だが、脚力も十分、ミスラが怒鳴っている四階のその場所まで一気に飛翔する。

大きく羽を羽ばたかせて隣に降り立ったレイを、ミスラは眉を潜めて頬を引き攣らせた。

「……化物と呼んだら傷付きますか？」

「人間じゃないという意味でなら事実だろうさ」

やれやれとでも言いた気にミスラは、頭を振るがそれでも様子が気になるらしく、レイを先導するように歩き出した。

「……急いでください。それと見張りを数人付ける事になりました。邪魔はしないので構わずに」

その言葉の通り、かなり急を要しているのか早口で言葉を続けながら、これまた速い足取り、と言うより、全力で廊下を走り始めた。

「懸命じゃの。それよりどうした。嫌に口調が丁寧だが」
「いえ、先程は余裕が無かった上に、味方だと思わなかったもので」
「味方……？」
「ええ、利害が一致しているだけで、仲間だとは言いません」
「成程、これまた懸命じゃ」

ハッと緊張感無く笑ってみせるレイの反応に、ミスラが言葉を返そうと口を開いた。憤っている訳では決してない。どちらかと言えばそれは、気丈に貼り付けた指揮官としての表情（かお）が半分ほど外れかけたような、そんな表情だった。

「――門を、閉めるつもりです」
「何……？」

驚きで足を止めたレイをミスラが追い越し、それを見てまたレイがその後を追う。

戦争中で、しかも敵が攻め入って来ていて門を閉めるのは当たり前だ。しかし今回は状況が状況。あまりに唐突に陥った戦争だった故に、避難が終わっていない民間人が多数居た。

だからつまり門を開け放しにしていたのは、全て見捨てないという気概と、自身が培った国の強さへの信用の表れだったはずだ。

避難もほとんど終わった今、戦術的にはむしろ最善の一手だがそれでも門のすぐ外で戦っている戦士達が大勢いる。

言い方は色々工夫できるかも知れないが、やる事はつまり見捨てるという事と変わらない。

今はレイの作戦のためにこの町の三強は門の前を離れていて、強化される前の死兵でさえ完全に抑えきる事が出来ていなかった一般兵しかいない。

今この瞬間に城が平穏を保っていることが、如何に奇跡に近いかは誰にでも分かる。――同時に今この瞬間がどれだけ危うい物の上に成り立っているのかも。

「……もう、十分も持ちません。だから……」

だから、に続く言葉は尻すぼみに消えていって良くは聞こえなかった。

前を行くミスラの顔は見えないが、レイにはまるで目の前で覗き

込んでいるかのように表情の機微まで想像が出来た。レイの洞察力もあるだろうが、それよりもミスラの言葉が感情に詰まっていた事がなにより大きい。

「もう、これしかないんです……！」

「……十分は無理じゃの」

このレイの言葉にも、僅かに下唇を噛んだだけでミスラの足は止まらない。想像が出来ていたのだ。この言葉も、そしてそのせいで死んでいく人間も。

「……無理を言っているの承知していました。十分とは言いません。どうか一刻も速く……！」

「儂は面倒臭がりでの。十分もかけてられんわ」

ミスラの足が一瞬止まりそうになったのは、その言葉が想像の外だったからに他ならなかった。

え、と聞き返すミスラにレイはまた先ほどと同じ表情で笑ってみせる。

「早過ぎる分には構わんだろう？」

その問いは問いではない。答えが分かりきっているのに、レイも

言葉を失っているミスラの返事を待ってはいなかった。

「貴様等の王女はもっと太々しいぞ。人間らしく最後まで都合の良い奇跡を願っていろ」

自分の台詞に嫌気が差したのか、ふんと不満気に鼻を鳴らすとレイはミスラを速度を上げてミスラを追い越した。

速さには自信がある自分を追い抜いていくその背中に、ミスラは謝礼の言葉は出て来辛く、ただ『頼みます』とありふれた言葉しか返すことは出来ない。

ただ、レイを追って速度を上げるミスラの顔にはいくらか不安が減っていて、どちらかと言えば険悪だった仲に何となく頼もしさを感じられていた。

「……あと九分か」

中庭に面した通路を通りすぎると、右手に大きな階段が姿を現した。二十段ほどのその幅広い階段の奥には、巨大な両開きの扉が待ち構えている。

その扉はさすがに簡単には開かないだろうが、少し視線を下げた所に切れ込みが小さな扉となっていて、人一人が潜るには問題は無さそうだ。

「――待て」

勢い良く階段を上がるミスラの背中にレイは声をかけた。

開け広げられた小さな扉の向こうからは、廊下より僅かに明るい光が漏れてきていて、その橙の光は温かささえ感じさせる。

「どうしました？」

「向こう――謁見室に誰かいるのか？」

「言ったでしょう。見張りには一人私の副官と護衛も兼ねて数人を付けます。アギと言って先程貴女も会ったでしょう」

「ああ、あやつか……」

「何か問題でもありましたか、隊長殿？」

そうしている内にひょこっと、扉の向こうから痩せ細った、いかにも事務仕事が本懐だというような顔が顔を出した。

見た限り不自然は無い。

訝しげに眉を潜めたまま、レイはミスラの後について階段を上っていった。

◆◆◆

「――ッ！」

体の一部がもぎ取られたような感覚と共に、口の中に血の味が広がった。

原因は分からない。何しろ今は外界とは近くのほとんどを切り離した場所に居る。しかし、明らかに外で何か自分の粗筋を乱す何かが動いた事だけは感じ取っていた。

死兵召喚の魔法。自分の能力を織り込んで使用する儀式魔法だが、恐らくこれに何らかの干渉がされたのだろう。

影が肉体に随従するように、肉体もまた影に引き摺られる。結果として影のほうを操っているという訳だ。

よって、死体の兵を殺した所でこちらには何の影響も無いはず。ならば、力技で術式の方に何か手を入れられた可能性が高い。そういった経験は無いが、無理やり破壊されるとこういった症状が出るらしい。

流石に気になって、外にいる死兵の視界を借りて外の様子を伺う。

瞬時に回復はしたものの、魔方陣が削り取られた場所は分かる。一番近い死兵を選んだつもりだったが、それでもそこから数十メートルは移動しなければならない。

幸い屋根の上だったため、飛び移って問題の大通りに顔を出して――。

その瞬間に”何か”が死兵の顔面を貫き、繋がりが途切れた。

「――っ！」

自分の目ごと貫かれたような感覚に陥り咄嗟に両手で顔面を覆う。が、そこまで同調している訳ではないので当然顔に傷は無い。

息を僅かに荒くしながら、顔から手を離してヴァーゴは溜息を付いた。

それは、自分の過剰な反応に嫌気が指した事ともう一つ。恐らくこの血の味の原因を作り出した人間に、一切干渉できないと言う事にだ。

人形、とあの男――レオは言っていたか。しかし人形、と言うには余りに情愛に溢れた口調だったことも覚えている。

触れば、八つ裂き。そう言ったあの男の言葉を、いつも通りの”嘘”だと断定するのは余りに危険だろう。

は、と先程より随分大き目の溜息を付いてヴァーゴは思考を打ち切った。そもそもあの男と、に付いてはあまり考えても良い事は無いからだ。

好戦的、と言うより”人間に目が無い”タウロスは初対面で戦闘を挑んだが、結果は惨憺たるもの。能力上の相性もあっただろうが、触れることも出来ずに地面に転がされた姿は思い出すのに苦労はしない。

首領のオフィウクスに至っては、肘を立てて優雅に円卓に座ったままタウロスを屈服していた。

実際戦っているのを見たのはあの一度きりだったが、それでも逆らおうと言う気を奪うには十分効果的だった。

あの二人がそんな目的を持っての行動ではなく、噛み付いてきた他者をあしらっていただけだという事はヴァーゴにも分かっている。しかし草食動物は、肉食動物の一挙手一投足にさえ怯えてしまうのだ。

ともあれ、あの嘘つきに言われた以上手を出す事は出来ない。ならばあれの動向には注意を向ける必要も無いだろう。幸い、通りの延長線上にいたはず『略奪者』は健在だ。

略奪者。

自分に与えられた養殖の精霊獣の名前を思い返して皮肉気にヴァーゴは笑う。

これは、今の自分にはさぞ似合っている記号だろう。他人からそう蔑称された所で笑って肯定してやれる。

しかし今、ヴァーゴが名乗っているのは乙女（ヴァーゴ）だ。名前の意味の程は名前を定めた本人であるレオから聞いていた。

何とも皮肉な名前を付けるものだと、ヴァーゴは憎々しげに一人言い捨てた。

自分が乙女。

更に言えば、あの人食家が牛、そしてあの道化は天秤だ。つまりは”純潔”に、”草食”に、”比較”、いや”平等”だろうか。

くっくっ、と乙女（ヴァーゴ）は喉を鳴らして笑う。

実は余りに皮肉なものだから、少し気に入っているのだ。一枚の銅貨の為に、股を濡らしながら死体を操り血の海に酔っている乙女も、喜劇ならば奇をてらっていて実に愉快だ。

まあ、自分の純潔など空腹を満たす為に大分前に散らしてしまったから、とても乙女だとは言えないが。

色恋の一つでもしていれば少しは乙女らしくもなっただろうか、などと何十年振りかになる思考を頭の隅で働かせながら再び傀儡の一人の視線に潜り込む。

ズルン、とその影に自分を滑り込ませながらもう一度鼻で笑う。

何しろ、視線の先にいる妙な格好の黒髪の女が、その可憐な人形のような外見とは裏腹に、これまた乙女とはかけ離れて見えたのだ。

獅子の夢（後書き）

話の緩急って難しいですね

「よろしいですか？」
「何じゃ、随分元気じゃの。先ほどの可愛らしい声はもう聞かせてくれんのか」
「……余裕ですね。あと七分しかない事をお忘れなく」
「ああ分かった分かった。もう直ぐ終わる。そこで黙って見ておれ」

溜息交じりにそう呟くと、レイは再び作業に戻った。それに習うようにミスラも足元に視線を落とす。

「何ですかこれは……？」

足元では魔方陣が幾重にも折り重なり、それぞれ違った速さでゆっくりと回っている。ミスラには描いてある記号の一つの意味さえ分からないが、それでもこの魔法が普通の儀式魔法とは似てはいても完全に異なった物である事は分かった。

「基本的に儂のは使っている燃料（もの）も、使用法（やりかた）も僅かに違う。年月と経験が無ければ理解は出来ん」

その言葉を最後に今度こそレイの意識が完全に魔方陣に集中した。

その集中力は遠目から見ても凄まじく、華奢な体がまるで岩のように不動な物にさえ見える。

「隊長、少しよろしいでしょうか？」

黙って策の決行を見守ろうかとした所で、後ろから袖を引っ張る感触。振り返れば、アギ副官が神妙な面持ちでレイを見つめている。

「どうしました？」
「私もこういった魔法には少しばかり明るい方です。肉体労働は知っての通り苦手なので」
「……どうでしょうか。彼女は」
「言い方は悪いでしょうが、――化物ですね」
「本人は気にしないそうですよ？」

ふっと笑ってみせると、それに合わせるようにアギも口元を上げた。しかし、とりあえず合わせたと言う風で、その表情に余裕は無い。

「どうしました？」
「……進言しても？」
「いくらでも」

ならば失礼をして、とアギは口を開く。

「――余りに出来過ぎていると思いませんか？」
「……どういう事ですか？」
「あの女です。兵士、いやこの町の人間なら納得も出来ますが、ただの旅人だと言うならば、義理だけでここまでの儀式魔法を披露してくれるのは余りに話が旨過ぎる」
「……」
「それに一国を争うこの時に、一度この場を離れたのも意味深でしょう。何をやっていたのかはお聞きになりましたか？」
「いや、聞いていないな」

ミスラにはアギの言う事には確かに筋が通っているようにも思えたが、レイが嘘を付いている様にも見えなかった。
まだ話したがっているアギの話を聞こうかと、口を開いた所で、別の声が背中から聞こえた。

「おい隊長様よ。すまんが伝え忘れていた事があった。急事じゃ」
「……分かりました。今行きます」

お気を付けて、と最後にそう忠告したアギに曖昧に頷くと、ミスラは部屋の中心に体を向ける。しかし、足元に視線を落として直ぐにミスラは困ったように顔を上げた。

謁見室の床中に広がっているのは、豪奢なそれでいて精巧な前衛芸術のような魔方陣。触れただけでそのバランスを壊してしまいそうで、安易に踏み入れる事は出来ない。

今陣を避けて部屋の端に立っているのも同じ理由だ。

しかし逡巡している内に、陣の中心から『踏んでも構わん』と心の内を察したかのように声がして、恐る恐る足を忍ばせる。

「ああ、ただその四隅の光には触れるなよ。そこが例の楔との接点になっておるからの」

目覚しいほどの変化は無かった。

しかし、ミスラ自身の魔力に反応するのか足を運ぶ度に薄く足元が発光して、下からミスラを照らし上げ、その凛々しい顔つきに影を作っていく。

下から浴びせる光は物を美しく見せると言うが、それはミスラの顔も例外ではなく、凛々しさにどこか妖しさを重ねさせていた。

その光は余りに妖しく部屋中を淡い赤色に装飾し、その空気の妖艶さにミスラの喉が改めて鳴らされる。同時に背徳的なまでの何かが甘美に背中をぞわぞわとせり上がって、気が済むまでこの紋様を見つめていたとさえ思ってしまう。

ミスラはしかし、それをしっかりと意識内で確認すると、その陣を踏み躙りながら魔方陣の中心で佇んでいるレイに声をかけた。

「……何ですか？」
「そうだな、とりあえず――……、」
レイの声と同時に、レイの視線が自分のそれと重なっていない事に気付く。
その視線はミスラの肩を通り越し、魔性の紋様を越えて、その更に向こう。
「――伏せておけ」
――瞬間、先程の甘美なものとはまるで違う、鋭利で冷たい悪寒が背中を走り抜けた。
「――――ッ！」
急激な下降について来れなかった後ろ髪の先が、銀色の剣閃に切り裂かれて飛散した。
膝を曲げたまま体を回旋させ、勢いそのままに鞘走りで加速したレイピアを振り抜くと、それを予期していたかのように飛びずさる人の影。
「貴様……ッ！」

アギの言葉も相まって、最初は目の前の女の仕業だと思った。しかしそれでは『伏せろ』の言葉に説明が付かない事に一瞬遅れて気付く。ならばまさか、と驚きに体が固まりそうになる

――その前に。

「四十秒、時間を稼げ」

ここが正念場だと言う事だけを伝えられた。緊張感が体に満ち、驚きを押し流す。応えてみせようと剣の柄に手を伸ばす。

意識を集中すると、それに応える様に太腿の辺りで”迅”の文字が光を帯びるのを感じられた。

ミスラの魔法はそう複雑なものではなく、捻りがあるものでもない。ただ思考速度と一動作だけの速さを追求したもの。

お陰で細身のレイピアでも骨ごと貫く事すら容易になったが、そこは女の身。制御ができないのはおろか、最初は剣が手から離れてしまう事もしばしば。

しかし、それを制御する技術と贅力を手にするだけの話だ。そう難しい事ではなかった。

女らしい白くて細く柔らかい二の腕と引き換えに、ミスラが抜刀した状態でのレイピアの長さと腕、更に踏み込みの分まで含めて半径二メートルは――、今や”剣の結界”と言えるまでの精度を誇っている。

「――ッし」

今では四方向から一度に突かれた槍も難なくいなしてのける。そして、何千何万と繰り返した動作に力みも無駄も失態もありはしない。

落ち着き払った呼気と同時に。

後ずさった敵の、上肢の肩関節に肘関節、更に下肢の股関節と膝関節を、一息に穿ってみせた。

地面に転がったのは、自分の部下だった男。その目に正気は無く、焦点も合っていない。

扉の所に立っていた副官の存在を確認するが、既に姿は無い。逃げたとは考え辛く、ならば敵に殺されたか、若しくは目の前の彼と同じように元から敵の手の内か。

見張りと護衛、更にミスラとレイを除いてこの部屋には八人居たはず。ならば――、

「――総員、動くなッ！」

これでまだ尚向かってくる者がいれば、敵の手に落ちたと考えて容赦なく斬り伏せるしかないだろう。

この魔方陣は、数百人の人間が身を削って時間を稼ぎ、その時間を使い単身で死地に向かった人間達が作り上げたものだ。何よりも優先しなければならない。

幸いミスラには殺さずに無力化する術には自信があった。

関節を破壊する事になるが、魔法での医療体系はその大雑把故に病には疎い代わりに、怪我に関しては後遺症が残ることは無いほどに長けている。

ミスラの背後では、それに興味すら示していないかのようにレイが部屋中の魔方陣を繰っている。

そして、更にその後ろに黒い人型の影。

気付いているだろうに、相変わらず和服の女は微動だにしない。

――四十秒。その間だけ自分を守れと言ったからだ。

少なくない信頼が背中を押す。一瞬で肺に空気を補充しながら、一歩でレイの傍を走りぬけ、黒い影に相対する。――しかし、予想とは違う事が一つ。

その影が自分の部下だった事にではない。無論操られて正気を失っている事にでもない。

数が合わない。

多い訳ではない。逆に、一人しかいないのだ。

いや確かに操られていない部下達が命令に従って、その場に待機している可能性も考えられはする。しかし、返事は一切返ってこなかったのだ。

断定する訳ではないが、最低でも既に意識は無い。意識がないだけならいい。しかし同じ状況下だった人間が操られている時点でそれは希望的な観測でしかない。

操る数に限界がある？　――いや、町中の死体を操っているのだ、それは考え辛い。

何か条件がある？　――いや、先と今の二人と比べて体格、性別、更に異文字もいない。

”迅”の効果で、刹那の間に思考が二転三転を繰り返す。

そして幾度と無く思考を巡らせた先で、まずい、とミスラはそう結論付けた。

飛び掛ってきた敵を一瞬で無力化して、振り向く。

視線の先には先程レイが言った四隅の光に、それぞれ操られた男達が殺到している。

思考をする前に、ミスラは飛び出した。向かう先は視線の先にあった四つのうちの一つ。余りに使いすぎると体が軋むがそうも言っていられない。

剣を手にその光ににじり寄る元部下二人を一瞬で無力化して、軋む腕と手に残る嫌な感触にに唇を噛む。

完全に機動力すら無くなったのを確認して――いや、察してと言った方が近いだろう。何しろ倒れる瞬間しか見ていない。

急げ、急げと速さで足りなかった事は余り無い自分が、珍しく気持ちを急かし続ける。

かかっているのだ。人任せな策とは言えど、少なくない兵の命と血が。

半ばそれを強要した自分が、最後に詰めを誤るなどあってはならない。

加速した思考と体を保ったまま、残った三つの隅の一つに振り向いて、

――深々とその場所に剣を突き立てる光景に全てが止まった。

ざく、ざく、と嫌に冷静な床を突き刺す音が連続して耳に届く。

「あ……」

余りのあっけなさに、視線が定まらず宙を泳ぐ。

そして、止まった先では女が愉快気に笑っている。仲間では決して無い。

――味方、ではあったが。

ゴッと、重苦しい音を立てて魔方陣が一気に光を部屋中に満たす。

そしてその光が収まった後、先程剣を付きたてた兵士が、地面に赤い何かで縛り付けられ、小刻みに震えていた。

「……おい」

思考を早めるまでも無く、簡単にこの展開が誰の絵によるものか分かった。

「若輩者をからかうのは、年長者の特権じゃろう？」

嘘。

飄々とこの女、嘘を言っていた。

敵を騙すからには味方から、とは古来から言い伝えられているので兵法――いや、これは兵法などという大した物ではないだろう。

戯れに撒かれた嘘に、ひょっとしたら引っ掛かってくれないかという程度の考えで振り撒かれた備えに、ものの見事に引っ掛かった

だけ。

しかし、敵はもしかしたらそれをも見越していたのかもしれない。

一瞬後、安堵の隙を付いたかのようにレイの足元が暗く陰る。下からの光のせいで限り無く薄く、しかし、確かに。

天井から落ちてくるのは正気を失った、アギの姿。

レイは相変わらずミスラの方を向いて、口元を歪めている。

息せき切ってミスラは走り出す。しかし当然間に合うはずも無く、レイの頭上に構えられた剣先が光る。

「上だっ！！」

苦し紛れに声を張る。しかし、レイの視線も表情も変化はない。

しかし。

――四十秒だ。

避けるかわりに、ミスラの声に返事をする代わりに、レイの口が小さくそう動いた。

「――”悲劇惨禍・串刺しの刑”」

以前レイが言っていた通り、呪文に応じて世界（チェス盤）が、引っくり返ったかのように妖艶な光で包まれた。

頭上まで一メートルを切ったと言うところで、剣先が停止する。

当然副官だった男の体は宙に浮いたまま。支えているのは足でも神でもなく、ただ削りだされたような無骨な杭。太い氷柱を更に削って研磨したかのような、殺して晒す事にのみ特化したとある伯爵の象徴。

そして、終わらない。

目にも留まらない速度で赤い魔方陣が広がった。この部屋に、ではない。視認こそ出来はしないが恐らく町中の隅から隅まで。

そして今見ている光景と同じようなものが町中で展開されているのだろう。

――先程縛り付けられた男達が体の真ん中を貫かれて痙攣して、動かなくなり空中に晒されていた。

その光景は言ってしまえば凄惨そのもので、人の死を何とも思っていない悪意のある光景だった。神の奇跡ではないのだ、そう綺麗ではない。ミスラは安心し、しかし気は緩まないように唇を噛み締める。

そして、まだ終わらない。

ずん、と床が揺れる。

驚きに音源に目をやれば、レイが立っている場所から、そしてその飛び出た杭の半ばからも、枝分かれするように次々と杭が飛び出してアギの体を天井まで押し上げていく。

――いや、違う。

押し上げられているのは、杭が狙っているのは、アギの体ではない。それは既に杭の中に完全に埋もれてしまっている。

押し上げられているのは、その影から引きずり出された、一回り

小さい人の影。

そこまでミスラが感知した所で、杭の動きが止まった。出来上がった光景はこれまた日常からかけ離れ、杭が歪なバランスの塔を作り上げているかのよう。

「――乱暴ね。女性は優しく扱うのがマナーではなくて？」

そして、疲れたように杭の一つに腰掛けてそう曰（のたま）う女が一人。

暗幕の向こう

〈――悲劇惨禍”串刺しの刑”〉

何の前兆も無しに、その呪詛は町中に重く響いた。

特別大きい声だったわけでもなく、鋭い声だったわけでもない。しかし綺麗なアルト音域でありながらどこか重々しく妖しさを感じさせるその声は、町中の人間の意識を引くには十分だった。

一瞬遅れて、町の中心に座する城が発光する。詳しく言うならば、その城の最上階。しかし、瞬く間に城中に光が浸透したのだから”城が”と言っても差し支えはないだろう。

そしてまた一瞬後には、光は広がる。避難していた人間達の足元を潜り、城壁を鮮やかに装飾し、堀を抜け、大通りに至る。

町を半ばほど染め上げた所でその光は増大し、細かな場所にまでその侵略を続けた。言わずもがなだが、その場所は楔が打ちつけられた場所である。

楔の数は合わせて十二。城の外縁部に沿うように等間隔で八。死屍が蔓延る中を突き進み、打ち立てて貰った四。その全てが、城からの光を受け継いだ途端に術式として産声を上げる。

驚く点は二つ。

先ずはその赤い光全てが魔方陣だと言う事。細かな文字と意味有りげな紋様が所狭しと刻まれていて、ただ事ではない事を悟らせる。

そしてもう一つ。

それは、光が町中に蔓延するのに一秒と掛からなかった事だ。

それこそ一瞬で町が染め上げられたようなものだ。住人は余りの唐突さに驚きを表す事もできず、ただ虫を踏んでしまったかのように慌てて片足を上げるだけ。

それは一見してみれば害にしかならなかった。

外で未だ奮闘している兵士達にとっては、皆一様に隙を作ってしまった事になる。もちろん敵に隙を付くなどという細かな作業は有り得なかったが、タイミングが重なってしまった人間も居た。

それで殺されてしまえば、兵士は死んでも死にきれないだろう。

しかし、当然ながらそれは杞憂に終わる。

『――上から、相手の魔法を無効化する魔法を重ねる』

レイのこの言葉は、魔方陣に対して効果を失くす魔方陣を重ねると言う意味ではない。

例えば自動的に火が熾る魔法に、火に反応して水を発生させると言った具合に例を挙げれば分かりやすいだろう。

つまりは、町中の敵を殲滅する魔法だった。

敵の魔法の最終目標は死兵の召喚だ。ならば、その死兵を処理してしまえば、敵の魔法の術式などは関係がない。相手の魔法を読み解く手間がない分、素早く敵を無効化できる。

そして、具体的にどうするのかと言われれば、――最初の呪詛の通りだ。

四つの門の前で体を張っていた戦士達の目の前から。

今にも襲われそうだった、民間人の視線の先から。

役目を終えて城へ戻ろうと周りの敵を駆逐していた三人の周りから。

気を失った男の子を背負って、身を隠しながら城へと向かう金髪の少女のすぐ側から。

無作為に、無感動にただ敵を叩き伏せて回っていた青髪の人形の

杖の先から。

敵はその姿を消してしまった。

屋根の上まで杭で刺し貫かれ、戦渦の風に晒されながら。

◆
◆
◆

「は、ぁ……」

細くて狭い道とも言えない様な路地に体を捻じ込ませるように潜ませてユキネは息を殺す。

置いてあった木箱の裏に姿を隠して、直ぐに、ずり、ずりと何かを引き摺るような音。見なくてもそれが何かは想像が付く。

腐った臭いと、今にも崩れ落ちそうな足音は他にない。しかもその歩みは遅く、中々遠ざからない。

しかし、誰かを見つけているならば高速で特攻するのだ。誰も口に出してそうは言わないだろうが、粘りつくような足音はむしろ福音。

――やがて、足音が遠ざかって消えた。

それを確認してユキネは肩を落として同時に息を付いた。

〈主、大丈夫ですか？〉

「大丈夫だ。少し休んだらすぐに行く」

震える膝を崩して床に座り込むと、ユキネは背負っていたものをゆっくりと横に下ろす。

折角自由に動ける足を手に入れたというのに、ユキネは未だ休み休み進んで行くという消極的な手段を使っていた。

ユキネの魔法は、自分に掛かる重力を極限まで軽くするもの、いや、落下の際に指して影響が無いのを考えると、無意識下で自由に調節しているのだろうが、どちらにしろ対象は自分だけ。

だからこの膝の震えは、余計な荷物を抱え込んだ事による当然の弊害。

最も、ユキネ自身は荷物とも害だとも思ってはいないが。

「アキラ、起きないと置いていくぞ」

ユキネが冗談交じりに言った声にも、何も言葉は返ってこない。

夜も大分更けているからか、冷えた石畳が体温を奪っていく。膝の震えはだんだんと納まる時間を多く求めるようになってきて、ついでにまだ少し血の跡が残る腕も震え始めていた。

いや、腕の震えに限って言えば、原因は疲れでも寒さでもないだろう。

渇いた赤黒い血は渇いて剥がれ、しかし代わりに人を斬った感触が浮き彫りになってきたかのよう。

〈主。アレは人ではありません。気になさらず〉

一切の淀みも無く言い切るメサイサの口調は、気遣いからきているのだろう。

人間の死には慣れている――とまではいかなくても知ってはいる。人ではない事も分かっている。しかし、獣を狩るのとは感触から何からまるで違っていた。

冷たく震える手が寂しい。嵌ったいや嵌めてもらった指輪を指でなぞって眺める。銀の感触が不思議と少し温かい。

「人だよ。あれは、やっぱり」
〈主……しかし…〉
「でも、斬るよ。私は」
〈……ならば、私の手も御一緒に汚していると思わせていただきます〉

献身を通り越して過保護だともいえるメサイアに苦笑しながら、ユキネは手を握っては開くを繰り返す。

感覚が戻ってくるのをじわじわと実感していると――。

――直後、それが来た。

赤く、妖艶な魔法の世界。

〈――〟悲劇惨禍・串刺しの刑〟〉

どん、と地面が大きく一度揺れた。

それこそ身体が浮きそうなほど大きく、町中に――いや町中から広く伝わる一揺れで、その規模の大きさは、街が持ち上がったと言われれば信じてしまいそうなほど。

そして、直ぐに音が消えている事に気付いた。先程の灰色の閃光の後よりも更に顕著に、いやそれどころか完全に”消えて、無くなっている”。

聞こえるのは怨嗟の声でも足を引き摺る音でもなく、ただ風が町を通りぬける音だけ。

〈……主。行きましょう〉

「いや、でも……」

〈大丈夫です。もう襲われる心配も、手を汚す必要も無いようです〉

メサイアの視線は何を見ているのだろうか、木箱を越えて大通りを見ているのだろうが、半ば呆れたような感心するような声だけでは状況を掴みきれない。

体を起こし、何とかアキラを背負うと、来た時と同じように体を挟み込むようにずりずりと外に出る。

「こ、れ……！」

そして、戦場だったはずの景色はまた別のものに姿を変えていた。

〈レイ殿ですね。血の臭いに覚えがあります〉

「……そう、だな。こんな事をできるのは……」

もしかすると、戦場よりも凄惨な光景だった。一言で言うなら、処刑場。いや死体の晒し場だろうか。

杭だった。ある程度近づいて敵を貫いているそれが何かようやく分かる。恐らく血でできているのであろう紅く普通の男の二の腕ほどの太さの杭。

それが、そこらじゅうに存在していた死体の群れを一つ残らず貫いて、戦場の湿った風に晒している。

どれも的確に脳髄を破壊しており、死体達は風に揺れるだけで身動きすらしない。

ズン、と目の前でまた杭が何かを穿って屋根の高さに晒した。貫かれた死体は一度だけ大きく痙攣した後、その他大勢と同じように

ただの肉塊に戻る。

速すぎて断言はできないが、恐らく影から湧き出た瞬間に半自動的に串刺しにしたのだ。

後ろを振り向くと、町の端までその杭が森のように乱立して重なっている光景がユキネの目に入った。通路がまっすぐ、更に外の方が敵が多いせいで、本当に杭の森と化していて、その向こうの景色を塞いでいる。

〈ほぼ決着ですね。主の周りには優秀な人間で溢れていますよ、本当に〉

「……やっぱりそうなのか」

〈喜ばしい事です〉

ユキネは改めて脅威が去った城への道に向き直った。

恐る恐る杭と杭の間を潜りながら、城へと歩を進めていく。

広域索敵殲滅魔法。それも持続的で新たな発生も許さない超高度、――いや最早別次元の魔法だ。

そもそも儀式魔法は、時間をかけ、時には他の人間の手を借りて、自分の”字”の力の発展と強化を狙ったものだ。”土”で固定化、

”風”や”水”で治療・封印などその程度の物。

この敵兵を生み出す魔法も高度ではあったものの、ただ魔法の影響範囲を広げただけに過ぎないはずだ。

血という特殊な媒体がそれを可能にしているのか。そもそも、そうだ原因があるとすれば、あれは”人間ではない”これに尽きる。

字を持たず、八百年の時を生きる。余りに人間と酷似しているので忘れそうになるが、そもそもレイは吸血鬼。童話の中にしかいないと思われていた、そんな存在らしいのだ。

ならば一方的なこの状況にも、納得”は”出来る。

――しかし、余りの呆気無さに終着に不安が残るのもまた事実。

何なのだろう。もうこれでほとんど戦況は決定したはずだ。しかし、心のどこかにシコリが残って不安を助長させるのだ。

不安げなユキネの視線はほぼ無意識に、打ち上げられた白い太陽

に向けられていた。

◆
◆
◆

「罠、と言う事は、私がいる事は分かっていたという事かしら？」

失敗したわ、とうっかり鞄を落としたような緊張とは縁の無い声でその女はそう言った。

爪先から頭の先まで黒尽くめで、ロングスカートと手袋、そしてヴェールのせいで一切肌は見えてはおらず、まるで喪に服しているかのように見える。

「そちらの隊長さんには上手く騙せていたと思ったんだけど、どうしてか聞いても？」

女はまるでチェスの感想戦でもするかのように、気さくに口を動かす。しかし、そこら中に血でできた杭が突き出し、壁にも血が散っている。

朗らかな空気にはなりえず、その女の雰囲気は強調されて浮き出て異様さを振り撒いていく。

「――何。くたびれた女は据えた異臭がするのでな。知らぬ振りは出来ん」

「……へえ、貴女も結構老いているようにお見受けするけど？」

「おお、それは失礼。言い方が拙かったか、ならば言い直そう。――お前は臭い。鼻が腐って落ちそうだ」

「……嫌な女」

女が出現してから更にその濃度を増した、その臭い。

甘く、気だるく、脳髄から痺れさせて腰砕けにしそうな淫靡な腐臭。もしも妖しいその臭いに付いていけば、冥府の入り口を知らぬ間に潜ってしまうだろう。

「……間に合わなかったわね、もう少しだったけれど」

相も変わらず血の杭に腰掛けたまま組んだ両足に肘を立てて緊張感など欠片も見せず、ただこんこんと憎々しげに血の杭を拳で叩きながら、女はレイから視線を横に外した。

「あの趣味の悪い魔方陣も貴様の仕業か？」

「御名答」

応答とも呼べない確認作業のような会話を二人はつらつらと続ける。

「……魔方陣だと？　この町に敷いていたのとは別にですか？」
「そうよ、隊長さん。それはそうとこの町の兵士は優秀ね。計画が想定よりもかなり遅れちゃったわ」

ぱちぱちと感心したように口の端を上げて手を叩きながら、女は腰掛けていた杭の塔から体重を後ろに移した。

当然背凭れなどという気のきいた物は無く、そのまま女の体は地面に向かう。

しかし、聞こえる筈の着地音はしない。

その姿は、いつの間にか杭の向こうの王座の影の中。浮かび上がるようにその姿を現すと、足を組んでそのまま豪奢な椅子に腰を下ろした。

反射的にミスラが、再び剣の柄を握る。

「……その雌臭い腰を上げろ。王座ごと斬ってしまうにはいかない」
「あら、怖い。やめて、もう争う気なんかないのよ」
「ならばもう終わりだ。歩兵（ポーン）はもう全て取った。残念ながらお前は

ここで首を跳ねて道に晒す。少しでも民の溜飲が下りるようにな」

物騒な物言いに中てられて、それでも、くすくすくすくすと女は笑う。

「面白い言い方ね。まあ私も思ったけれど確かにチェスで例えると分かりやすいわ。それに歩兵が全て動けないのにも反論は無いわ」

女は言われた通りに椅子から腰を上げると、ヒールを鳴らして部屋の中心に再び近づいて、帽子の唾を上げて血でできた杭の塔を見上げる。

「あれは数はあっても質に欠けるから、国を落とせるとは思っていないわ。大体それなら私一人で国を落とせることになるじゃない。無理よそんなの。買い被り過ぎ」

その余裕は何だ、と聞きたい気持ちを抑えて、ミスラは注意深く女を観察する。

はったりか、いや、それにしては逃げようとする意思さえ無い。この場で二人とも殺せるのならばはったりなど使う意味も無い。ならば、と密かに思考を加速させていく。

「余裕なんてあるわけ無いでしょうが」

女の声に、図らずもミスラは肩を揺らされた。理由としては、まるで心中を読まれたのではと言う事もあったが、それよりも女の声が一変していたからだ。

「貴方達のお仲間のあの”化物”を逃がしてしまえば、最初から私達はそれでゲームオーバー。余裕なんて最初から無いのよね」

「偉く高く買っておるの」

「人は見る目はあるのよ、私」

もっともあれが人間かかどうかは別にして、と苦笑しながら女は続ける。

「加えて手駒を一気に失った。いや、盤から弾き出された。そうね、折角優位に進めていたのにチェス盤を引っくり返された気分だわ」

ミスラは女の言葉に、少し気分を浮かばせてレイの方を見やった。事はレイの思った方に進んだ。レイも意地悪く笑っている。

――と、そう思っていた。

しかし、レイの顔は警戒を示していて、その目は薄く細められ女に向けられている。

不穏な物を感じ取ったミスラが、声をかけようとした、その瞬間。

でもね、と女が言葉を繋げた。

その声は既に余裕が戻っているかのようにも感じられる。

「――歩兵（ポーン）が行うのは、他の駒が戦い易いように戦場を整える事。まだ整い切っているとは言わないけれど、その分強い駒がまだ幾つかあるわ」

くすくすくすくすと、女の笑い声が耳に障って、自然と視線が集まった。

「……？」

とうとう声を漏らして笑い出した女が、じゃあヒントをあげると馬鹿にしたように女は暫し考えた後わざとらしく手を叩いた。

「暗幕（カーテン）のせいで黒髪さんの方は知らないでしょうけど、隊長さんは聞いいるんじゃなくて？　あ・れ」

すい、と女の細い指が振られた。

指し示した先は、暗幕で光を遮られた窓の更に先。

何があるのかミスラは一瞬思案顔を見せ、回っていた思考が記憶を掘り返し、先程連絡があった事項に止まる。

その瞬間、目に見えてミスラの表情が強張った。

「馬鹿な、あれは我等の吉兆のはずだ…！」

それに行き着いたとき、驚きは言葉になり口調と一緒に表情までもが一変した。

「そう、たくさんこの町で死んだから。ご立腹なのよ、〝彼〟」

何も無い空間で女は手を横に振った。暗闇の中で何かが蠢く気配がした後、切り裂かれたかのように上縁部だけを残して、一部の暗幕が床に落ちる。

地面の魔方陣の光を消し潰すように、強い光がレイの足元まで届

いた。

「……明るい？　例の太陽か？」

戦火の中、いつもより明るいのはそう不思議ではないが、それにしても明るすぎる。

謁見室から闘技場を覗き込めるように作られているので、ここではあまりに近過ぎて太陽自体を視認する事は出来ないが、これ程の明るさを用意できる光源は他に無い。

「あれは太陽じゃなく、精霊獣。この町のいや、……この国の、守護神だ」

「……おい、まさか」

「歩兵が活躍するのは、序盤だけ。もうこの戦争（ゲーム）は中盤に入るわ。それでも余裕は無いのだけれど」

そもそも章が変わるのなら役者も変わるのが必然でしょう？　と女は続ける。大仰に手振りを混ぜて話すその態度に、とても余裕がない様子は見受けられないが、演技だと信じたい。そう考えないとやっていられない。

何しろ女は、今まさに決定的な言葉をぶつけてやろうと、目の前で明らかに心を躍らせているのだ。

「――間に合わなかったのは、私じゃなくて、あなた達よ？」

そして、まだ女はその整った口から不吉を吐き出す。わざと、心を折るように言葉を選びながら。

「雑兵（わたしたち）が盤を荒らすのはここまで。後は後続に取り返してもらうしかないわね。あいつ等に貸しを作るのは嫌なのだけれど」

さぞ愉快そうに女は笑う。

「ゲームの幕を引くには、キングとクイーンが必要だわ」

それに合わせるように、女の影が不器用な動きで僅かに揺れた。

暗幕の向こう（後書き）

また展開がー…、早い、かな？

「キングと、クイーン……？」

訝しげに眉根を寄せながら、ミスラは律儀に女の言葉を復唱した。

「そ。ああ、ちなみにあの太陽とは別にね。というより、あれが貴方達のキングなんじゃない？」

場を混乱させて時間を稼ぐ気なのならそれは、今現在成功を続けていると言えるだろうが、残念ながらそうでない事は女の愉快気な表情が物語っている。

ならば、何なのか。

言葉の通り。

何かが、この戦場までやってくる。

「あいつ等の思い通りってのも癪だから。せめて抵抗してあげて」

女は堪らないかとでも言うように唇の端を更に更に吊り上げる。

「この地で戦争があって、命が散って血が流れて、人の不安を煽る

事が目的らしいわ。まあ、タウロスはタウロス。私は私で別に目的はあるんだけれど」

――タウロス。

それが誰かまでは見当は付かなかったが、口振りからしてこの女の仲間であることは間違い無い。ミスラは横目で窓の外の様子を伺った。

外では相変わらず陽光が上から差し込んでいて、町中をまるで昼間のように晒している。

これが出現した時、城中に広がったのは動揺ではなく、僅かな驚きを孕んだ安堵と喜びだった。

それはそうだ。

眉唾物の伝説だとは言え、あの太陽は毎年溢れ出すほどの願いを受け止める巨大な器。そして、その逸話は決して無名なものではない。

それがこの窮地に、毎年の慣例を破って出現したとあれば、誰もが吉兆だと受け取るだろう。それこそ、城内の庭に下りれば、怪我を庇いながら両手を組み合わせている町人を見る事が出来る。

「憐れね。私が全部飲み込んで上げていればよかったのだけれど」

ぽつり、と誰に聞かせる風でもなく女はそう言った。

言葉と口調だけ聞いていればそれは寧ろ慈愛さえ含まれているようで、ミスラは一瞬肩から力が抜けそうになる、――しかし。一瞬後に体を走り抜けたのは、まるで神経が逆立てられたような感覚だった。

「――っ貴様等が用意した死などで救える存在など有りはしない！」

「あら、なら貴女が救ってあげれるの？　まだ表面化していないだけで状況は絶望的よ。どちらにしろ死んでしまう。でも私なら優しく殺して包んであげられる」

冗談交じりで言っている事ではない。

加えて意を決しているといった風でもなく慣れ親しんだ、習慣のような同情だった。繰り返してきたのだろう。恐らくこういった事を幾度も幾度も。

女の背後に影が掛かっている。その影は濃く息を呑むほど暗く沈んでいて間違い無く光が届いて居ないだけの空間ではない。おびただしい量の血が重なって、命が燃え尽きて焼き付いて、そうやって出来た”黒”なのだ。

「――それとも王様が苦しんだんだから、国民も相応の痛みを知る

べきかしら？」

黙って眉根を寄せているだけだったミスラの表情が、今までの感情を毟り取られたかのように崩れた。

いや、発せられた言葉に一気に感情を塗り替えられた事に、頭の方が付いてきていないだけ。しかし、ゆっくりと言葉の意味を噛み締めて――。

「貴様かッ――！！！」

感情が一気に爆発した。

騎士としての顔も、兵の長としての顔もかなぐり捨て、握り締められた剣の柄がが持ち主の怒りを映し出したかのようにギリギリと音を立てる。

閃光のように一瞬で魔法の文字を煌かせ、〝迅〟の文字に恥じぬ速度をもって女のその細長い体に逼迫した。

しかし、女の口元には緩やかな微笑。

誰にでもわかる事だ。子供や、それに似た何かを横から掠め取られてぞんざいに扱われようものなら誰でも怒りに染められる。

よって、ミスラもそれが挑発による罠だとは分かっていた。

しかしその罠で自分の身がどうなるかより、自分の宝を傷つけた人間に一太刀浴びせられたならばそちらの方を優先してしまっただけ。

それに――、

「――そう、誰にでも分かる事じゃの」

ミスラもまた少しだけ、後ろの人間…もとい人外を思いの外信頼し始めていた。

高速で突進するミスラすらも追い抜いて数本の紅色の剣が空中にそれぞれ独創的な線を描く。向かう先は当然ミスラの背中でも、そして敵の女の体でもない。

その剣はミスラを追い抜き、身構える女の体をも横を素通りすると、意味ありげにさあ暗躍してやろうかという雰囲気を放っていた

影を、地面と高価そうな絨毯ごと貫いた。

ガクンと女の体がまるでクモの巣に絡め取られたかのように揺れて、初めてその顔が驚愕に染まり瞼が押し広げられる。

――そして、ミスラの体もその隙を見逃すほど鈍くは無い。

「――ッ！！」

呼気一閃。

放たれたのは激昂した心情とは対極のような、基本に忠実で何の工夫も無いただ速いだけの一振り。しかし、速さとその一途さ以外に一切の無駄の無いとも言える一振りは、銀色の閃光となって女の体を一文字に切り裂いた。

いや。

切り裂いたのは、その右腕だけ。影ごと縫い付けられたことを悟った女は瞬時に地面に倒れ込み、剣先から体を遠ざけていた。

しかし、切り落とされた右手の怪我は決して軽くは無い。ぱたぱたと、傷口から零れた地面に墨汁のような黒い地が滴り絨毯を汚していく。追撃を行うべきだろうが、ミスラの足はそこで止まる。

女の体は倒れこむと同時に、当然体の下に出来た影の中に飛び込むように沈んでいってしまった。

沈黙が続いた後、ずる、と這い上がるように女が二人から少し離れた場所に姿を現した。

腕の血は止まっているものの、その顔苦痛に染まっているのだろう。腕を押さえて前かがみに体を折る仕草は先程までと違い、苦痛に歪み余裕に欠ける。

「……その稚拙な演技は止めろ」
「あらそう？」

しかし、中々見難いであろうその表情は、ミスラの言葉で嘘のように消え去った。

「痛いわねぇ。ここまで痛いのは久しぶり。泣いてしまいそうよ」
「止めておけ。貴様の嘘泣きなど白けるだけじゃからの」

ふつふつと感情を燃やしていたミスラの一歩後ろで、黙っていたレイが溜息交じりに口を開いた。

「……おい。私情に走るのはいいが、少し視野が狭まっとりゃせんか？」

今にも剣を振りかざして襲い掛かりそうな怒気を纏ったミスラは、歯を食い縛りながらも剣を下げ一歩後ろに下がった。肩当てを嵌めた肩と、着物の静かな藍の肩が並ぶ。

「どうやら、お互い見積もりが甘かったの。これで決め手かと思ったが、相手は思ったよりも周到に計画を組み上げていたらしい」

銀色の肩の方は小刻みに震えはしていたが、声を聞きながら呼吸と共に一度だけ大きく上下すると、震えは収まっていた。

「……すみません。ここを任せていいでしょう？」
「よいのか？　悔しい気持ちもあるだろう」
「そんなものを優先して国民を疎かにしてしまえば、ノイン様に申し訳が立たない。情報は鮮度が命です」
「ふむ、ならば行け。ここはもういい」

逡巡は一瞬。ミスラは一度強く剣を握り締めた後、勢い良く剣を鞘に収めた。

「直ぐに応援を……！」
「いらん。逃げられんようにここに結界を張る。誰も入れんし誰も

出れぬ」

その言葉に応えるようにギシッと部屋全体が軋んだ。同時に、まるで粘度が上がったかのように空気が重くなる。

「行け。お前が出たら完全に密室じゃ」

ミスラは女を見据えたまま一度深く頷く。

「扉まで走れ。全速でな」

もう一度頷くと、ミスラは背中を向けた。その一歩目を踏み出す前にミスラの背中の先、つまりレイの対眼の前で魔力が膨れ上がった。

何かが絡み付いたのではないかと言うほどに、空気がまた粘つき重くなる。

もしや、敵の影に絡め取られているのではないかとさえ思える感覚を、凛とした剣戟の音が吹き払った。

「さっさと行け」

その声にミスラは振り返りこそしなかったが、背中でレイが剣を手に取った事は察することができた。

その甲斐もあって、扉は目の前。最後の最後まで振り返らずに、扉は後ろ手に閉められた。

「……ああ、行ってしまったわね。貴女を一人置いて」

扉が閉まる音を潮に女の魔力の密度が極端に落ち込んで、空気にも張りが無くなり雰囲気が弛緩した。

「なに、若人が老い耄れを置いていくのは当たり前じゃろう」

ギシリ、と部屋がまた軋んだ音を立てる。それは完全にこの部屋が隔離され密室になったことを示している。

それを嫌でも感じ取ったのか、女は辺りにゆっくりと目を配ってから深く溜息を付いた。

「……奇怪な体じゃの」

レイが漏らした言葉の元はその言葉の通り女の体の事。更に言うならば、今まさに繋がって傷さえも修復した切り裂かれたはずの女

の右手だ。

「お蔭様でね。色々体を弄ったから長寿と再生力を引き換えに強い光の下には出られないんだけれど、まあ日光は肌の敵だから、そんなに気にしてはいないわ」

「肌か。成程、そんな異臭を放ちながらまだ女を捨てておらんとは見上げたものだ」

「羨ましいわねぇ。お化粧もしていないみたいだし。お肌も綺麗。洋服も綺麗だからお化粧したらきっと誰よりも美人になれるわよ？」

「死化粧をか？」

「話の落ちを先に言わないで。嫌な女ね」

うるさい人間が居なくなったからか、もう一度女は王座に腰を下ろした。

「幾つか聞きたいことがある」

「どうぞ。どうせ暇だもの」

くあ、と手を当てて小さく欠伸をすると、女は背凭れに寄りかかってレイの言葉を待つ姿勢になった。

「昨晩うちの小僧にやられた男は貴様の仲間か？」

「ああタウロスね。そうよ、あの男はワザと考え無しに動くから扱い辛くて仕方がないの」

なるほど、と己のの推測が間違っていなかったことを確認すると、二つ目の質問に移る。

「そやつは今どこに居る？」
「それは駄目よ。ルール違反だわ」

なるほど、と答えた時と同じ言葉を返す。不穏な物を感じたのか、それともからかわれて不快を感じたのか女が眉を潜める。

「では、闘技場の方に隠すように張られた結界は何か関係があるのか？」

盲点だった。城の近く、それも兵達が常に見張りをしているような場所だ。警戒をするどころか、近寄りもしなかった。

巧妙に、それこそ一番力を入れて作り上げたのか、その完成度は大したもので一近く《ここ》に来るまでは意識の外に隠れているような感覚だった。

今もこの場所を離れてしまえば違和感ごと忘れてしまいそうな小さくそして、何らかの力が邪魔しているような、そんな感覚。

しかし、女の強張った表情が余りに愉快すぎて、その違和感は強く記憶に刻み付けられた。

「――もう、貴女が嫌いだわ私」
「儂もさ。恐ろしく気が合うな。友人になれるんじゃないか？」
「冗談」

弛緩していた空気が先程のそれを越えて強く鋭く緊張していく。

放っておく訳にはいかなくなった。それほどこの戦争において重要な要因があの場所にあると考えるのが妥当である。

「……しかし待て。あの隊長様があの太陽を調べようと思えば自然と足は闘技場に向かうのではないか？」

恐らく何か人払いのような結界を張ってあるのだろうが、それでも明確な目的を持って近づく人間が居れば、そう長く持つはずも無い。

当たり前の事を言ったつもりだったが、その言葉で女の強張った表情は見ることは出来ず、見られた物といえば見飽きた笑みをかたどった口元だけ。

「大丈夫でしょ。それ所じゃないでしょうから。――あくまでチェスに例えるならば終盤に近づくにつれて歩兵はその意味を無くしていくけど、唯一戦いの切り札になれる手段があるでしょう？」
「……我々にとって都合の良い物じゃないんだろうのぅ…」

答えの代わりに、女はより一層笑みを深くする。それはもちろん肯定を示している。

「一度思わぬ強化が一度あったけれど、あれは思わぬ特典だったから。それとは別にちゃんと進化の機会（チャンス）を与えたのよ」

「……聞こうか」

先程と同じやり方で、女はまたしても肯定を示す。

視線を窓の外に。しかし、街並みを眺めている訳でも、浮かぶ荘厳な太陽に願をかけている訳でもない。

見ているのは、今まさに進化を遂げているその存在。

「私の騎士（ナイト）が、最後の手札よ」

――瞬間。

切り取られた暗幕の隙間から眼が眩むような閃光と、地面を揺らすような轟音が響き渡った。

雷に似た現象だが、その規模は既に自然のそれを上回っているようにも思える。

「忠実でしょ？　――でも、それはあちらに任せればいいじゃない」

そして、その光に一瞬女の影が何倍にも肥大する。

「――”影法師”」

べり、と壁に掛けた絵でもはがしたように壁を伝って天井にまで広がっていた女の影が実体化する。

「――私、貴女をいたぶりたくてしょうがないの」

「おい」

女の前に立ち塞がるように影の巨人がそそり立つ。その異物に無遠慮に近づきながら、レイは低い声を漏らした。

「えらく饒舌に自分の有利を語るのが、そういう物は程々にしておけ」

「……何が、言いたいのかしら？」

額に寄せた皺に隠しもしない不快を滲ませる女に、レイは悪役面で笑い上げる。

「――なに、そう怯えるなと言っているのさ」

「死ね」

無遠慮に女に近寄りながらレイが手を合わせる音と、黒い巨人が拳を振り下ろした音が重なった。

◆◆◆

目の前を通り過ぎた目も眩むような灰色に反射的に顔を庇って、再び視界が戻った時には目の前の景色は一変していた。

「これは…、まだこの街には化物が他に居るみたいですね、ラスクさん」

ぽつん、と優しく囁くようにサルド――雷の帝とまで言われてい

た男が削られた地面を見て、儚げにそう言った。

「分かっていたのか？」

まさか、と今までに見た事が無いほど屈託無く、サルドは笑う。

「私は所詮兵隊ですからね。捕まえても何も知りません。ただ他の奴等と違って脳を保護されていたせいか、中途半端に意識と記憶は残っていますがね。」

削られた街道から早くも死体達が影から滲み出るように産まれ始めている。

サルドが現れたのは、ジェミニがライブラを追って行ってすぐの事。侵入を許した警戒してくれ、と城の方に連絡を入れようとして、その姿を見つけた。

屋根の縁。視線の先の死体の波から浮かび上がるように、それはまるで絵から現実に、影から実体になったかのように遠近感を無視したものだった。

そして、その光景に言葉を失っていた時、空虚な灰色の光が町を横断して、背景となっていた死兵の壁を根こそぎ削り取って消し去って、驚きを更に塗り重ねられたのが、およそ十分ほど前。

「色んな人間がいるものです。自分の小ささを改めて知った気分ですよ」
「何とも達観してるな。お前はもう少し若くて勢いのある奴だと思ってたんだが」
「ええ。勢い余って派手に転んで、痛みを知りましてね。それは聞いているでしょう？」
「聞いたのは馬鹿な事に手を染めて、捕まって脱走して指名手配になった事までだな。いつから人間を止めたんだ？」

その言葉に、サルドと思しき男はまた朗らかに笑ってみせた。

「相変わらずですね、ラスクさん。貴方はやっぱり変わらない」
「変われないだけだ。胸を張る事じゃない」
「そういうところも憧れますね。と言うより、貴方達がチームにいた時に入った人間は皆そうでしたが」

サルドには驚くほど何も感じられない。生気はおろか、他の死体達にははち切れんばかりに存在する殺意でさえも。

右腕と左腕で僅かに肌色と長さが違う。それもまた不快な事実を示してはいたが、それよりも何よりも、一番の不自然を呈しているのはその右目。

これもまた右半分だけ輪郭が違う顔の中心に、赤い宝石が埋まっている。

「さて、もうそろそろ時間ですかね」
「時間……？」
「ええ、この町全体に敷かれた魔法が修復を終えます。また忠実な僕に逆戻りです」

それは即ち死を待っていると言っているのと同義だった。しかし、サルドの口ぶりからはこれと言った感情も感じられない。後悔も未練も、そして憎しみさえも。

「煙草、持っています？」
「吸えたのか？　嫌いだったと記憶してるが」

一本抜き取って、箱の中に後一本しか残っていない事を確認すると、ラスクは箱ごとサルドに投げると、それをサルドは崩れかけた腕で受け取った。

「吸えませんが、別に嫌いではありませんよ。吸えなかったから嫌いな振りをしていただけで。大の大人が煙草の煙が嫌いだなんて格好悪いでしょう？」
「気にし過ぎだよ、お前は」
「ええかっこしいなんですよ。私は」

いかにも個性的なマントを羽織ってみたり、気品を塗り重ねた口調や仕草を真似してみたり、と。

この町の冒険者なら誰でも知っている事だ。当然、サルドも含めて。

サルドが煙草を咥えて指を擦り合わせて指を離すと、親指と人差し指の間に電気が流れ、それを煙草に近付ける。

ぼっと、小気味良い音と共に一瞬で火が付き、しかし、サルドは吸い慣れていないことをありありと示すように、肩を上下させて思い切り煙を吸い込んで吐き出した。

キィラルの物と同じ銘柄だ。かなり強い煙草のはずだ。しかしそれを思い切り吸い込んで咳き込みも涙ぐみもしないのは、もう味すらも感じていないからだろう。

「いい魔法だ。珍しく、強い」

煙草を口に咥えたままラスクが素直な感想を口にすると、サルドは驚いたようにラスクの顔を見つめた。目を見開き、煙草を取り落としそうになって慌てて咥え直す。

余程予想外の言葉だったのかその表情のままボーっと視線を前に戻し、一度大きく煙を吐き出してから、渇いた笑い声を続いて吐き

出した。

「皮肉、ではないんでしょうね。貴方の事だ」
「嘘を言ったつもりもない」
「……はっ、もう少し若い頃にそれを言ってもらえていたら、僕も違っていたのかも知れませんね」

要領を覚えたのか、目の前で煙を燻らせて、それが空気に溶ける様を見ながら、続けて口を開いた。

「僕は多分この町の人間を殺しに行きますよ。キィラルさんを始め、逆恨みしているんです」
「それはいかんな。まあ共に一服した好だ。無視はしてやらんよ」
「……格好良いですね。ラスクさんは」

皮肉半分本心半分でひとしきり笑うと、サルドは自分の顔に埋め込まれた赤い宝石を叩いた。コンコン、と人の体を叩いても決して出ない音だった。

「ここを破壊し……」

言葉の途中で、サルドの残った目が大きく見開かれた。

「……ぁ゛？」

瞬間、ズブンと音を立ててサルドの顔の中にその赤い宝石が沈んで消えた。後には何も残らず、空虚な眼窩が空気に晒されている。

「……い、げない。これは禁句（タブー）だった、みたい〝、です」

ずるり、とサルドの顔から余裕が剥がれて消えた。

凹凸しか存在しない右目はもちろん、左目にも光は宿っておらず、それはつまりサルドが景色を見る事が二度とないことを示している。

「キィラルさんに、負けっ放しは悔しかっ、たんですけ、どね……」

咥えていた煙草が、口から落ちて、火が消える。

「では、……御迷惑を、お掛け、しますが、どうか不肖、の、後輩に、教育を」

「お前がそんな柄か？」

最期だと言うのに煙草を咥えたまま皮肉を言ってのけたラスクに、それでもサルドは羨ましそうに笑って――。

――同時に、辛うじて人の形を保っていた〝それ〟が、人の皮を脱ぎ捨てた。

〈――悲劇惨禍・串刺しの刑〉

突然、目の前と地面が赤に染まった。世界が終わったかと思い違うような光景だった。しかし違う、そうではない。これは魔方陣だ。余りに巨大な、魔法の根底。

そしてそれを元に、ゆっくりと人間を辞めていくサルドも、睨み付けるようにそれを見つめるラスクにも構う事無く、戦争は状況を変化させる。

「っ……！？」

地面の底から響くように伝わってきたその声と、屋根の下から何本もの紅い杭がサルドを貫いた。

――しかし、貫かれたそれは一瞬体を強張らせただけ。しかもそのまま杭を飲み込むように肥大していく。杭が圧し折られ、咀嚼するような音が連続する。

そして、口であったはずの穴が、空に向かって大きく広げられて――。

《――――――――――――――――アッッ！！》

悲痛な殺意が、膨れ上がって爆発した。

転

抑え付けられていた体が、抑え付けていた何かを撥ね退けて世界に広がっていく。

抑え付けていたそれは、自我だったり自尊だったり人間性であっただろう。人間として必要不可欠なはずのそれ等が、体が人の形を失っていくにつれて同様に何処かに溶けて消えていく。

ズズン、と重く空気を震わせながら、その巨大さと質量をもって立っていた屋根を踏み潰した。

物理的にはありえない。しかし、絶え間なくこの身を貫く杭が答えを補完してくれる。恐らくは、町のあらゆる所から沸いていた死体が、――いや、そもそもこの体の中に沸くように状況が移行された。

成長する膨れ上がる肥大する進化を遂げる。

余りに歪で死肉を塗り固めて土台にするという神をも恐れぬ所業だが、それでもこれは進化に他ならない。

その進化は緩慢な物で、しかしその変化を止め得る存在は稀有だ。

――■■■■■■ッ！！

咆哮する。口の端から血の泡を垂れ流しながら。

自分をを見てくれと。自分は強いぞと。自分はまだやれるぞと。可能性を主張したかっただけの見栄が、膨れて外れて狂気と化していた。

空気中を伝って、電気信号が辺りに手当たり次第に放出される。杭に晒されている死体はびくびくと痙攣を繰り返し、地面の死体はずりずりと地面を擦りながら”それ”に殺到する。

取り込んだ時点でその死体の個は消える。ならばしつこく体に食い込むこの杭もさして効果はない。使える脳髄は、杭が届かない部分に寄せ集め互いに補いながら組み合わせられる。

既に体は目の前の屋根を越え、家一件分の体積を軽く凌駕し、それでもまだ肥大を続ける。

今、家三軒分。五軒分を越えた。しかしまだ更に更に進化を続ける。

これ程肥大化したならば、二足歩行は不可能。しかし、これは進

化だ。適した方向に形を変えれば良いだけの話。

選択したのは、まるで肉団子のような下半身。上半身はそれが未だ人間だった時の名残がくっ付いているだけ。

しかし、その全長は家を五軒積み重ねたような高さを誇り、横幅はあの異様に広い大通りの幅いっぱいまで広がる。――それでも、進化は止まらない。

ズズ、とその巨体を揺らしながら、人間が歩く早さと変わらないような速度で”侵略者”はその名に許された唯一つの行為を開始する。この町の中心に行き着く頃には、あの城を踏み潰す事を夢想しながら。

ズン、と脱力してぶら下がっていた上半身に、何かが突き刺さった。

杭ではない。杭はせいぜい屋根の上ほどまでしか届かないので明らかに違う。しかし園に既に己が心臓はなく、右の眼窩を貫いたそれも既にない。

そうだ。これは風の刃。かき集められた脳の記憶野に幾らでも内容がある。規模と精度こそ桁違いではあるものの、基底となっているものは風の基本的な魔法だ。

その発端は脇にある崩れかけた家屋の上。

顔に見覚えはある。名前の割り出しも可能だが、必要は無いと判断する。

手段は掃いて捨てるほど。魔力は大海のように体の中で波を打つ。

――ならば、選択は迷う必要もなし。

仲間に。わが身の一部に。

ゴボンと音を立てて”下半身”から”腕”が伸びる。太くはないものの何本も何本も。主に軽くて固い骨だけで構成したもので、余計な肉が入っていない分機動性と範囲性に優れ、更に薄く”影”が纏わり付いて補助を行っている。

警戒も何もない。全力の速さで挑む訳でもない。いつも潜っている扉のノブに手を掛ける様な気軽さで手がするすると伸びていく。

届く範囲は二十メートルほど。右から上から左から、時には屋根を突き破ってその男の足元から無数の腕が伸びる。

しかし、パキンと渇いた音と主に”腕”は切り刻まれ形を失った。
じわり、と言い様のない感覚が体を駆け巡り、幾つかの脳髄を刺激する。

きょとん、とそれは半ばから捻じ切られた腕を無数の目で見つめた。驚きも当然。”侵略者”としての記憶と経験は、進化の邪魔となる為召喚される度に全て初期化される。

一つ一つ学習――いや、進化をやり直してかなければならない。

そして、今回また新たに学んだのは同化を拒む存在と、痛み。そして、――敵と味方の見分け方。

味方は一人。麗しき我が主。

敵は自分に攻撃を仕向けるもの。
敵は同化を拒むもの。
敵は痛みを与えるもの。

死体の方の記憶も手伝って、敵と味方について細分化されていく。
それも一秒足らず。いくつもの思考回路を抱えた”侵略者”に即断

はそう難しいことではない。

そして次は検証。

味方ならば一つとなろう。それはいい。ならば敵はどうする。素通りするか――否、取り込めば良い。

幸いこの身は略奪と暴力の権化である。

許された攻撃方法は、”腕”“足”、それに”雷”。余りに統一性がないその選択肢に不満も不可解も感じることはなく、それは迷わず一番殺傷能力が高いそれを選択する。

ぐん、と今まで力なく項垂れていただけの”上半身”が痙攣しながら身を起こす。右目は落ち窪み、左目にも生気や自我と言ったものは抜け落ちている。

しかしそれは絶えず笑みを浮かべていて、狂っているという言葉がこれ以上なく似合う事だろう。

躊躇いもなく予兆もなく、一斉に体中から魔力が放出された。ただ無闇に吐き出されたわけではなく、直ぐに一箇所――起き上がった上半身の眼前に集結していく。

その間に”雷”という性質を付加され凝縮と集約を繰り返し、結

果魔力放出から約一秒後、形成されたのは高密度のエネルギーを持った雷の球体。

中に手でも入れようものなら一瞬で骨ごと炭化されてしまいそうなエネルギーを持っているにも関わらず、その大きさは三メートルを優に越える。

そして、ただ一人のためにその暴力は振るわれる。

――”雷業（らいごう）”

トリガーとして祝詞を一言乗せて、それは起動する。

ただでさえ凝縮されていた魔力の塊が、キュンといかにもな音を立てて更に凝縮する。その小ささは普通の人間の手の平に納まる程。

束縛に束縛を重ねられたそれは、まるでのた打ち回るかのように振動し、耳障りな音を喚き散らす。

そして後は、ほんの一部だけ。針を刺したほどの穴をその球体に用意してやればそれで事足りる。

そうするとその球体は嘘の様に悲鳴を止め、代わりに穴の表面から圧縮された魔力が奔出する。

音は無い。いや、付いて来れないだけか。それはそうだ。これは雷（いかずち）。光には及ばずとも音に後れを取るほど鈍くは無い。

小さい球体だった魔力は細い線に形を変える。

長々と説明しはしたものの、事はものの数秒だった。一言で言い表して十分に足りる。

細い線となった魔力が、嘗め上げるかのように町を横断し、町中に轟音と閃光と、――何より、暴力と破壊を振り撒いた。

結果として、幅３０ｍを越えるこの街自慢の大通りがもう一本。考え無しの場所に出来上がった。

その幅３０ｍにあった家屋は文字通りその壁も柱も”消失”し、地面は赤く焼け焦げ異臭を放つ。いずれ火の手が上がり町が炎に包まれるのも時間の問題だろう。

土煙と家屋の破片が、”侵略者”の頭の上にまで舞い上がっていた。砂塵が視界を覆い尽くし、”新道”の両脇から家屋が立て続けに崩壊する音が連続する。

そして視界が戻った後、”侵略者”の視界に広がったのは誰の気配もない変わり果てた町の風景。

最初から誰もいなかったのかそれとも自分が消し去ってしまったのか、どちらにしろ焼け焦げた木の屑だけが熱風に踊っていて、物寂しさが誰かの頭をチクリと刺した。

＞――■■■■■■■■■■ッぁ！！＜

この咆哮は、雄叫びではない。当然痛恨でも悲哀でもない。

寄せ集めた体を動かす為に、喝を入れたに過ぎない。精神的な問題ではなく、集中力を高める習慣（ルーティン）に近い物。気を切り替え体をトリガーに過ぎない。

実際、それをを潮に頭の中が一気に整理され始める。

大量の脳髄を必要となるのは、考える事よりむしろ忘れる事の方。

その証拠に、とまでは言えないかも知れないが、現にもう個としての人格は深い場所に押し潰され、ラスクの事も既に処理済として刻の中から抹消されている。

迅速に、たった一つの命令をいくつもの脳髄を総員させて全身に伝えていく。

そして。

腐肉を鎧に、暴力を剣に、騎士（ナイト）は歩み始める。

敵が集まる牙城に面を向けて。

◆
◆
◆

戦争の終わりをいち早く敏感に察知したのは、町民や商人と言っ

たいわゆる一般人達だった。

不安げに膝を抱える者。壁に寄り掛かって俯いている者。その辺りはまだいい方だ。

怪我をして呻き声を絶えず漏らしている者。治療の痛みでのた打ち回る者。逸れてしまった家族や友人を探して人混みを掻き分ける者。何をしていいか分からずただ壁際ですすり泣く者。――そして、力無く横たわり顔を布で隠された者達。

誰も彼もが顔に疲れや不安、そして少なくない絶望を映している。今日は一年で一番町に笑顔が増える日の筈だったのに、と。

そしてだからこそ、町の更なる変調は敏感に察知された。それを察する事が出来た理由としては、数えてみればかなりの数がある。

まずは音。何十万の人間が集まる城の喧騒を上から塗り潰すように鳴り響いていた音が止んだ事だ。

その音はなんだったのか。死体達の呻き声もあっただろう。怨嗟の声もあった。腐肉を引き摺らせる音も含まれていた。何か一つという物ではなく、折り重なって戦争の空気を作り出していたのだ。

――しかし、その空気はそれを作り出していた音ごと綺麗に一瞬で消え去ることになった。

〈――悲劇惨禍”串刺しの刑”〉

町中に重く沈むような声と共に、町中に魔方陣が走った。

赤く妖しい光に戸惑い恐れたのも数秒だけ。直ぐに、その光が取り払った物にほぼ全員が気が付いた。

音が消えた。

町の上から覆いかぶさるように降ってきていた、戦火の音が綺麗に一つ残らず消えていた。

最初こそ呆ける事しかできなかったものの、指し示す事実が徐々に理解を始める頭に浮かび上がっていく。

やっと終わったのか、と。

明日からは普通に眠って過ごせるのかと。

突如振ってきたかのような静寂に呼応するように、城の中に沈黙が広がっていき、時間をかけながら今度はそれがざわめきと戸惑いに変わっていく。

――もし、そのまま静かな時間があと十秒でもあったのならば、誰かが歓声を上げていたかも知れない。

しかし、用意されていたのはそんな時間などではなく、そして当然平穏でもなく、

町を染め上げるかのように照らし上げた、閃光と地を揺らす轟音だけ。

不吉な気配を察知したのか、最初に走った黄色い閃光を見たものは少なくなかった。――そして当然、高い城壁越しに巻き起こった破壊の波もその目に映す事になる。

最初に見えたのは、先も言ったように一筋の閃光。それが嘗め上げるように町を横断し、次の瞬間にはそれを追う様に赤と黄色が混じったような火柱が連続した。

地面が揺れる事は正直もう珍しい事ではなくなっていた。轟音も、悲鳴もそう。

しかしそれらに鑑みても、今度のそれは遥かに限度を超えていた。

遠くから鼓膜を揺らして不安を煽るだけだった轟音は、人々の耳を反射的に塞がせ、揺れる地面は人々が跪く事を強要する。

当然のように悲鳴が上がり、パニックになった人間があちこちで叫び散らす。数秒後、遠く離れた城にまで熱風が届き阿鼻叫喚の図は更に色を濃くしていった。

こういう事態で一番怖い事態はパニックが起こる事だったが、兵が優秀なのかそれとも民度が高いのかこれまでは何とか踏み止まる事が出来ていた。

しかし今、堰を切ったかのように穏やかだった状況は崩れ去る。

こんな町に来るんじゃなかった。どうして自分が。と他の人間を押し分けながら進もうとするが、そんな事をする前に道にも庭にも広場にも既に人が埋まっている。

恐れられていたパニックは、結果として多少の怪我人を出しただけで状況的に封じられた。

――袋小路に詰まってしまった人間は、曲がる前に進む先が行き止まりだとは考えない。

余裕を持つ人間は、得てしてこうすればまだ何とかなると常に頭の中に予防策を残している。それが無意識か意識的か、また紛い物か本物かは人によるだろうが。

無い訳は無い。そう無い訳は無いのだ。こうして手も足もまだ動

く。戦争などこの一晩で終わる。

片付けは面倒だし、亡くなった人間も不憫だとは思うが、こんなものは一過性の災害のような物だ、と。

そしてまた得てして。

縋る物が虚像だった時の事を、人は考えない。それが自分にとって大事である程、考えない。真実が自分の理想と違う事を嫌うからだ。

だって仕方が無い。

城から出たとしても、どうやらこの町からは出られないのだ。外に出れたとしても、その道中でいつ何かが出てきてもおかしくは無い。

何も出来る事が無かったじゃないか。

追い詰められている事は分かっていた。危険が溢れそうなほどある事も分かっていた。そのせいで人が死ぬなんて事も分かっていた。

それでも今まで、本当に行き止まりが見えるまで動けなかったのは、下を向いているからだと言う事にも気付かずに。

しかし今回の場合。

まだ一つ。縋る物が残っていた。

何を潮にしたわけでもなく、人々の手が合わさり始めた。手の平を合わせて額に持っていく老婆もいれば、胸の前で手を組んで祈りを捧げる子供も居た。

この世界では、依り願う力が形になる事もある。

下を向いていた視線を、前に向いても行き止まり。

しかし。

袋小路で見上げてみれば、灰色の空に太陽が浮いている。

◆
◆
◆

瞼の裏に明かりが浮かび上がり、その仄かな眩しさに目を開けた。

薄ぼんやりとした明かりの正体は、傍らに置かれたランプの物だった。表面がガラスで作られているせいか高級感があり、鉄の取っ手の部分には意匠が施されており、芸術性も感じられる。

良く見た覚えのある骨董物（アンティーク）な作りだ。

背中には硬い木の感触。独特の埃臭さと半開きの目に映った山積みにされた木箱に、ここはどこかの倉庫なのかと頭が勝手に当たりをつけた。

脈動が大きくなったかのような大らかな頭痛を感じながら、頭が勝手に記憶と状況の再構成を始める。

直ぐに終わる。

そう難しい事はなかったからだ。ただ再び連れ去られて、あの男と同じ状況にいるだけ。

過ぎ去った今となっては、あの無気力で惰性と隷属のの連続だった毎日も一瞬の物にしか感じられない。

「……やっと起きたかい？　良いご身分になったねぇ、シア」

聞こえた声に半開きだった瞼をもう少しだけ開けて顔を向けた。その先では黒い手袋に包まれた手が伸びてきていて、その更に先には――微笑を浮かべた道化の仮面があった。

「ッ……！」

途端に寝起きで朦朧としていた頭が一気に覚醒し、口から小さく悲鳴が漏れそうになったのを何とか飲み込んだ。居るのは分かっていたのに、意識と一緒に恐怖まで戻ってきてしまったらしい。

恐怖は悲鳴と一緒に飲み込んだはずだったが、心境まで筒抜けになっていたのか男はつまらなそうに鼻を鳴らすと手を引っ込めた。

「ねぇ、シア」

代わりに名前を呼ぶ声が鼓膜を揺らした。その声はいつものように奴隷を見下げ果てたかのような声だった。体の半分を夜の闇に溶かしているかのような格好も、何時ものまま。

「君の母親の話はしたよね」

何をいきなり、と言葉にも出さないし、思う事もない。”いきなり”は奴隷にとっては当たり前の日常だ。

そして、その問いの答えは”知っている”。そして、知っている事も相手は知っているだろう。

元より会話をするつもりではないのだ。コミュニケーションを取る事はできるだろうが、この男がそんな面倒なことをした覚えは一度も無い。

ただ相手が一方的に話し、シアはただその言葉に服従を持って従うだけ。

ともあれ、男は事ある毎にシアの母親の事を語っていたので知らないと言うことはありえない。

顔は知らない。そもそも奴隷なんて長続きするものでもなく、子供を生ませてやるというのも珍しい話だ。

条約のせいで奴隷の数が減っているので、有り得ない事ではないかもしれないが、それでもどうせ犯罪行為だ。攫って調教師た方が簡単で安上がりだ。

そう考えるとシアはかなり特殊なケースだと言える。

「一度聞いてみたかったんだけどさ」

しかし、この男が理解できない行動に出ることは珍しい事ではない。

そもそも奴隷の子などさっさと捨てればいいのだ。この歳までわ

ざわざ育てたことも謎だし、売らずに貸し出しをする奴隷なんて普通は有り得ない。

もっとも、シアが日の目を知ったのは奴隷として初めて起用された十の時なので、今の今まで不思議に思った事もなかったが。

「……奴隷として生まれた人間ってのはどんな気持ちだい？」

馬鹿にしている、もちろんそれもあるかもしれない。しかしどちらかと言うとそれは、本当にただ純粋に質問だったかのように思えた。

声も出せないシアに対しての物と考えれば信じ難いが、初めてシアに返答を欲しているのだ。

少し拍子を抜かされたシアだったが、その間にも思考が勝手に廻る。

どういう気持ち。

それ程意味の無い物はない。顧客側としてはそんな物は求めておらず、使役される側にしてもそんな物を律儀に意識していれば耐えられない。

だからそう、――奴隷にするのだ。

心が死んでしまえばそれで終わってしまう。だから生かさず、殺さず。そういった術をこの男が自分に教えてきたはずだ。

困惑している表情を返答に窮していると判断されたのか、ライブラが顔を逸らして考える仕草を見せた。

不自然がシアの頭の中を駆け巡る。

この男との時間にこんな長閑とした時間は珍しい。男の機嫌が余程良くないと駄目だったはずだが、今はその条件に合致している状況とは思えない。

そんな考えをを知ってか知らずか、ライブラは顔をこちらに向けなおした。当然感情の機微など隠し切った仮面を挟んで。

「――じゃあさ……」

どこか声色の違う声に自然と耳を傾けて、――しかし、その続きの言葉は出て来なかった。ライブラの視線が入り口に向けられる。

そして、一瞬後に爆音が倉庫内に響き渡った。

ぱらぱらと壁の破片が舞い、薄い砂塵が視界を塞ぐ。

その向こうに人影が一つ。その人影に目を凝らそうとした瞬間、シアの首元に男の手が伸びた。

虚を付かれたのか、それともそもそも自分が反応できる速さを越えていたのか、その手は何の抵抗を受ける事無くシアの首を掴み取り、締め上げ、持ち上げる。

呼吸が止まり、苦悶を移すシアの顔に道化の仮面が寄せられる。

「シア。僕はお前の事が大嫌いだよ」

そして、今まで出一番感情が込められた声が耳に入り込むと同時に、首を絞める手の力が増していく。

やあ、ジェミニ。お買い求めかい？　と男の声が遠くに聞こえる。

終わりやライブラ、と聞きなれた個性的な口調が続いて耳に届く。

しかし、その中に聞き慣れない単語が一つ。しかしそれが示していると思われる内容もまた一つ。

ああ、自分はこの人の名前さえ知ろうとしなかったのか、とそれ

に気付いて、その発見に何らかの感情が沸く前に意識が黒く塗り潰された。

◆

離せ、とジェミニが言う前にラィブラはシアを乱暴に木箱の上に置いた。くたっとその体は木箱に倒れ込み、既に意識が無い事を教えてくれる。

「さて、あんまり間延びした展開も退屈だよね」

おもむろにラィブラはどこからともなくナイフを取り出し、それを”空中に並べていく”。ありえない空間。それは既にジェミニの感覚の少なくとも一つが幻惑の中に囚われている証拠だ。

わざわざ誘き寄せたのだ。何も準備が無い方がおかしい。

ジェミニは溜息を付いてシアから目を離した。胸が僅かに上下していたので命に別状はないだろう。

ひゅん、と風を切ってナイフが飛来する。

しかしジェミニの姿は既にライブラの背後。仮面越しでもその驚きようが分かるほどライブラが大仰に振り返る。

もう慣れたのだ。

ジェミニはその能力と無理矢理鍛え上げられた感覚ゆえに、魔術の仕組みを理解する能力に長けている。

こんな裏をかくような魔法は普通の人間にもそう何度も通用しないのに、ジェミニになら尚更だった。加えて密閉された空間だ。既に魔力の流れまでが手に取るように分かってしまう。

初見の相手にはそれこそ必殺の威力を持つほどの魔法だが、同じ相手ならば戦う度にその威力は低下し、これは幻術だと強く意識されてしまえばそれだけ殺傷能力も低減する。

先ほどの言葉がそれを知っての事かどうかは知らないが、もう戦いを長引かせることも出来ないほど、二人の戦闘力には開きがあった。

要は、もう戦いさえ起こらないのだ。

――ジェミニの右拳が、一方的にライブラの仮面を叩き割った。

力は一欠けらも漏れる事無く、ライブラの体に流れ込み、その体が浮く。

威力を殺す事も許されなかったのか、その体は派手に吹き飛ぶ事も無くその場に前のめりに倒れこむ。

仮面の破片を散らしながらそれでもライブラは起き上がろうと肘を立て、――そのまま力無く崩れ落ちた。

「……」

ジェミニは黙って脈と呼吸を確認し、息がある事を確認すると小さく息を付いた。

殺す事は出来た。いやむしろ殺してしまいたかった。そもそも殺さないように加減する方が面倒なのだ。

しかし殺さなかった。それは決して情にほだされた訳ではない。理性的に考えれば殺すことはあまり良策とはいえなかったからだ。

後々の事を考えれば、ただひたすらに殺意の対象と見るよりは情報源と考えた方が圧倒的に有利に事を運べるだろう。

幸い魔法の仕組み上、魔装具を外してしまえば敵は無効化できる。まさかハルユキの様に常識外の力を持つ訳もなく、ユキネの様に魔装具を必要としない訳でもないだろう。

体を探ると指にそれらしき指輪が一つと、二の腕に予備の腕輪が一つ嵌っている。

それをそれぞれ取り除くと、持参したロープで手足を縛り上げた。

「さて……」

少ない敵の中一人と言えど生きたまま捕縛できたのは大きい。とりあえず城に運んで情報を搾り出せば戦況も大きく傾くだろう。

「その前に……」

ロープが硬く結ばれている事を再度確認すると、木箱の上で静かに寝息を立てるシアに向き直った。

「シアちゃん」

ゆっくり眠っていて欲しい所だが、流石にこの状況で自意識が無いのはいざと言う時に対応できない。

すぐには起きれないかと思ったが、意外にも少し瞼を震わせた後、シアはゆっくりと目を開いた。ジェミニさん、と小さく口が動く。

「大丈夫か？　ごめんな、遅うなってもうて」

そう言うと、泣きそうな顔で首を振ってごめんなさいと再び口が動いた。返答の代わりに小さく頭を叩くと、それでも申し訳無さそうに小さく笑っていた。

そして、ライブラにその視線が向けられて、また瞳の色が深く沈む。

「殺してないから、生きてるで」

町では少なくない人間が死んだ。今は生かしたものの情報を搾り出してしまえばジェミに自身にももう庇う理由は無い。

それを知ってか知らずかシアは小さく頷いて、ありがとうございますと口を動かした。てっきりまたごめんなさいが来ると思ったが、来たのは別の言葉。意味はよくは分からない。

ただ、シアにとって。それがどんな意味でも、ラィブラが他に代えようも無い存在だと言う事ぐらいは分かった。

もぞり、とラィブラが身動ぎをした。

どうやら意識を取り戻し始めたらしいが、魔法使う気配も無く、ロープで体の向きを変えるぐらいしか出来てはいない。どうやらもう魔装具の類は持っていないらしい。

「話してき。シアちゃん」

それをじっと見つめていたシアに、ジェミニはそう言った。

驚きの顔だったが、それは何て事を言うのかという驚きではなく、どうして心中を悟られたのかとそう言った感じの驚きに見える。

「もう、負けちゃ駄目やで」

最後にそう言って頭を撫でると、口を真一文字に結んで強く頷いた。

少し寂しい気持ちになったのは秘密にしてほしい。表情を隠すのは得意なのを、珍しく得に思った。

◆

完全に目を覚ますと、立場は逆転していた。

地面に転がっているのが僕で、見下ろしているのが奴隷の少女。

「……良い、ご身分になったね、シア」

口の中が切れているのか、思ったよりも途切れ途切れになった言葉になった。皮肉を言ったつもりだったが、ただの負け惜しみにしか聞こえない。

シアは、何の反応も示さずライブラの傍らに座り込んだ。

丸裸だった。

竜の鱗を織り込まれて作られた服も、半分欠けた仮面も薄皮のように頼り無い。魔装具も無く、身体能力もそう強い方ではない。

スッと音も無くシアの手がライブラの首元に伸びた。

少し驚いてライブラはシアを見つめた。この女は人を殺せるような性格ではなかった。しかしどうやら短い間に大分強くなったらし

い。

「……大したもんだ」

しかし、シアの手はラィブラの首に届く前に左右にずれた。そのまま体を持ち上げられ、木箱に寄り掛かかせられる。

「何だ。首を絞め返されるのかと思ったよ」

まあ、考えてみればそうだろう。そうそう人間は変われる物ではない。何の事は無いな、と意味を込めて口角を上げる。

しかし、シアはそんな物には目もくれず、一心に地面に何かを書き綴っていた。

気付けば皮肉を言ってやろうとしていた口は止まり、黙ってその出来上がっていく文字を見つめていた。

『いくつか質問してよろしいですか？』

文字は自分が教えたので書けても不思議は無い。家事も時には料理も教えた。身の回りの世話を覚えさせるためで別に深い他意があった訳ではない。

シアには奴隷として奉公した家で教わったと思わせているが。実際にはライブラの手元を離れた事さえ無かった。当然、ここ数日を除いてだが。

胡散臭そうな目を向けるライブラを見て、答えも待たずにシアはまた地面を削り出した。

『二つだけです。お願いします』

不満げに小さく鼻を鳴らす。

シアがそれを肯定ととろうが否定ととろうがどうでも良かったが、シアは前者として認識したらしい。

地面をならして文字を消すと、更にその上に文字を重ねていく。

『どうして私を育てて、売らなかったんですか？』

「商売だよ。お前の母親は今までの奴隷の中でダントツで高値だったからね。父親は普通の顔だったけど。その娘と言うだけで利益はある。

それとお前は看板だったんだ。一見の客にうちの商品の質の良さを確かめてもらうには好都合だった」

よくもこれだけ白々しい嘘をつけるものだ、と自嘲してみる。しかしまあ、これはいつも使っていた嘘だ。自分ですらも騙せるのに、他を騙せない訳がない。

『本当ですか？』
「嘘なんて吐いた事がないね」

その言葉を受けて、また一心に地面を傷つけ始めた。あまりの心の込め具合にもしかしたら罵詈雑言でもくれるのかと、書き終わった一行を覗き込んだ。

『そんな台詞を言えるのは嘘吐きだけです』

は？　と白けた声が自分の口から漏れた。

呆れ返った表情を自覚しながら、シアの顔を覗き込む。会話を始めた頃から変わらない、今にも鳴りそうな歯を食い縛って強くあろうとする表情のまま。

「なあ、もしかして僕が実は良い人だったなんて馬鹿な事思ってんじゃないだろうな」

シアは何も言わない。ただ黙ってこちらを見つめるだけ。それが今までで一番反抗的な態度に見えて、酷く気に触った。

「馬鹿かお前は？　そんな訳無いだろうが。お前を育てたのは商売だ。お前の事を思ってだあ？　もう一度言うぞ！　僕は！　お前が嫌いなんだよ！！」

言葉をぶつける度に、語調を強める度にシアの肩が恐怖に跳ねる。

あれだけ怒鳴った。あれだけ蹴った。あれだけ殴った。それをそう簡単に体が忘れる訳は無い。

やはり変われはしない。奴隷は一生奴隷のままだ。

――それでも、目だけはライブラの目を見つめたまま、決して逸らさない。

やはり、気に触る。

「ジェミニ！　魔装具は無くなってもまだ一度なら魔法は使えるぞ！！　離れさせろよ！」

木箱に寄り掛かって黙って目を瞑っていたジェミニは、しかし目を開けようともしない。

強く舌打ちをして、シアに向き直る。

未だ視線は強くこちらを向いていて、こちらが先に目を逸らしてしまったことに気付き、もう一度強く舌打ちをする。

苛立ちを乗せてシアの目を睨み返すと、それだけで肩が揺れる。しかしこちらも大声を出しすぎたのか、息が荒れて小さく肩が揺れていた。

そのまま言葉は無く、睨み合いが続いた。

また目を逸らしたのはライブラが先だった。こんな事に意味は無い、そんな理由から。

「……」

それからあともう少しだけ沈黙が続いた後、また地面に何かを書く音がした。

嫌気が差しながら、それでも惹かれるようにその文字を目が追っていく。出来上がったのは、三つ目の質問だった。

『先程言い掛けた言葉を教えて下さい』

先程――？

記憶を探って、直ぐに行き着いた。

ジェミニが乱入してくる直前に言い掛けた言葉。しかしそれは約束に違ったものだ。

「それは三つ目の質問だろ？　答えないよ」

大方『本当ですか？』は当初の予定に入っていなかったのだろう。核心を最後に持って来るからこんなミスを犯すのだ。

僅かに気を晴らしてライブラは視線をシアに戻す。

視線の先でシアは既に次の文字を地面に描いていた。

『これはお願いです。質問じゃありません』

「ふざけるな。元々お前の質問に答える義理さえないんだぞ」

これ見よがしに顔を逸らして、否定の姿勢を作った。

しかし、その視線は直ぐに戻す事になる。

腕、詳しく言えば、手首の辺りに針で刺したような小さな痛みが走ったのだ。

驚き、というよりは虫にでも刺されたかと思って顔を戻すと、そこに虫は居らず、代わりに小さな腕が先程痛みを感じた場所から手を引っ込めていた。

「……は？」

思わずまたシアの顔を見つめていた。

多分。恐らくだが……。今、自分（ライブラ）の腕を抓ったのかではないかと。いや、しかし何故。恐ろしいほど全く意味が分からない。

『教えてください』

見れば、びくびくと肩を震わせながら、強く地面に先ほどと同じ内容の文字を書き直していた。

意味が未だに図りかねる。しかし、もしかしたら、もしかしたらこうではないかという仮説が頭に浮かんできて、仕方なく口を開く。

「……お、脅してんの？　ひょっとして」

有り得ないだろうと思われた言葉だったが、ややあってシアは力強く頷いた。

正気を疑うの不思議な事ではない。

いや、恐怖のあまり混乱していても不思議ではないが、それでもこれは酷い。抓られたぐらいで意思を変える人間がどこにいるというのだ。

「はは……」

しかし、その事はライブラの驚きの中の半分も満たしていなかった

それよりも多く驚きを作っていたのは、シアが確かに我侭を言った事。今までも要求が無かった訳ではない。しかし、こちらの意思を無視しようとまでは決してしなかったはずだ。

明らかに今までには有りえなかったやり取り。

「本当に、良い身分になったねぇ！　あっはっはははははははぁ！！」

脅した、まあ脅してはいるのだがそれは手段だ。そして、恐らく目的は教えてもらう事じゃない。

それで教えてもらえると思うほど、この女は馬鹿ではない。

抓った理由は脅しているのではなく、変わったのだと言う事を教えたかったのだ。異論は認めない。こいつの事を一番知っているのはまだ自分のはずだ。

「――でも、教えねぇよ」

意味が無い。もう質問の答えは分かってしまった。それがいい事かどうかは分からないが、どちらにしろそろそろ人生も終わりだ。

引き際を悟ったのか、シアは今までのしつこさを微塵もみせずに頷いた。

――いや。

頷いたのではなく、俯いているのだ。そして思考を廻らせている

事に遅れて気付いた。

しばらく、口が開いたまま塞がらなかった。

まだ、諦めないらしい。

どんな馬鹿に影響を受けたのか、育て親としては文句の一つでも言いたい所だが、まあ言う資格も無いだろうのでこちらは簡単に諦める事にする。

それから、全くどんな思考回路を通ったのか、シアの腕がまたライブラの手元に伸びた。

脅しにもならない。何も伝えられもしない。今度こそただの愚考の末の愚行だ。

――でも。ああでも。痛いのは嫌いだ。

抓られるのは、勘弁してほしい。

「……なあシア。お前も答えろよ。嫌とは言わせないぞ」

二つ、今度はお前の番だと静かに告げるとシアはキョトンとした顔のまま固まった。

バカが、と内心で毒づく。表情の隠し方はあれだけ教えていたと言うのに、もう丹念に教えた笑い方は忘れてしまったらしい。

「――なあ、奴隷として生まれたのはどんな気分なんだ？」

視界に入っていた二つの顔が、一度に表情を変えた。

ジェミニは目を開けて、ただそれだけ。目尻が下がっているので笑っている様にも見える。絶対に笑っていない事も同時に分かったが。

そして、シアの表情は別。

意味を悟ったのか、一瞬顔を強張らせた後また口を一文字に結び直した。

そして、小さく首を振った。

答えられない、なのか。分からない、なのか。それともももっと複雑な意味をそれだけの動作に込めたのか。

なまじ付き合いが長いだけに、何となく理解できる感覚が鬱陶しい。

別に追求する気は無い。

この質問に意味は無いし、答えも大体分かった。

「ならさ、」

そして、これからする質問も同じ。

答えは分かってしまったし、もう九割死が決定した自分には質問自体に意味も無いはずだ。

なら、何故。

答えを出す事も諦めて、口を開いた。

シアの視線をしつこく感じながら、口を開いた。

弱く脆い自分を見せながら、口を開いた。

「――奴隷として生まれたら、奴隷として死ぬしかないのかなぁ……？」

シアの表情が、劇的に変わった。

しかし、もう見えない。顔を見る事も出来ない。自分の”個”が剥き出しになっているのが良く分かる。

近くで、誰かの口が動く気配がした。

「当たり前だろう？　お前は天秤で測れもしない程に無価値に過ぎるんだからね」

聞き覚えのある声。幼さが残る自分に良く似た宣告に似たその声

に。

背中に無数に刻まれた烙印が、酷く疼いた。

◆

満ちる。

満ちていく。

魂と言う物があるのならば魂が。心と言う物があるのならばその心が。欲望と言う物があるのならばその塊が。

血は足りた。祈りは足りた。敵も居る。それでもあと一つ。

決定的に足りない物がある。

それは眼下に。

近代にして稀代の王。少女とは言えどその光は侮りがたい。

さあ、お前で最後だ。

祈れ。

頼れ。

縋れ。

貴様が望む物を全て用意し、貴様が憎む命を奪いつくし、貴様が守る物を全て護ろう。

貴様の黄金の野の末席に加えてくれればそれで良い。

――ところで。

貴様は誰だ。

「悪いが、君が戦場を跋扈するのはもう少し後にしてもらえるか」

声。

未だ耳は無い。目は無い。鼻は無い。肌は無い。

しかし感じるのは声。視界が眩みそうな黄金。少女のそれと比べて余りに欲に染まった金だった。

手にしているのは、何か。

それは息づいている。手に持ったそれも、たなびく黄金自身も。

そもそも人の身ではここに近づける筈も無い。魔力に当てられて発狂するのが必然のはずだが。

「今の体は人の物じゃなくてね。君と変わらん物で何とか構成して

いる」

未知。

久しぶりの感覚が脳髄を引っ掻いて刺激を隅々に染み込ませていく。

同時に首筋に手を添えられる。

その存在ごと黄金の手中に収められるのを感じた。

「名乗ろうか。私はオフィウクス、この体にいる間はそう名乗っている」

名乗り返せ。と言外に伝えられる。

残念ながら口は無い。従う術も無い。

男の手に乗っていた何かが、手を離れゆっくりと溶けていく。

しかし、黄昏の王よ。

貴様は遠い。目の前で声を賜ることが出来たのならば、万敵を打

ち倒して見せると言うのに。

飢えが、渇きが、目の前の金色に意識ごと眩んでしまいそうだ。

――その隙を縫うように。

”神”の声が響いた。

転（後書き）

あれです。桜の森のあれです。そんなもん忘れてるよハゲとか言っちゃ駄目。

名前（前書き）

再開します

名前

何の手も入っていない、赤茶けた土の上に屋根と壁だけを取って付けたような倉庫の中。その中に無造作に積まれた木箱の上に、その闖入者の姿を認めた。

小さく幼い、子供の姿。

「さて、再会の挨拶でもしておこうかジェミニ」

ぱん、と場を仕切り直すかのように手を叩くと、その子供は歳不相応な流暢な言葉で声を上げた。その姿と言葉があまりに不釣合いで、どこか違和感が残る感覚が鬱陶しい。

何年経っても変わらない、虫唾が走る声だった。

「久しぶりやのう。何年ぶりやろか」

しかしそれでも、ジェミニの言葉に心情はさほど滲んではいない。先の子供の表情に比べれば無表情には徹してはいないが、代わりに形だけの笑顔が顔に嵌っている。

「まあ、思い出話に花咲かせたい所だけど、僕も色々忙しくてね、っと」

どこまでも軽く適当な感情を言葉に滲ませて、子供は地を蹴った。
立っていた場所は、無造作に積み上げられた木箱の上。
そして降り立つ地面には、何も聞かされていなかったのか仮面越しにでも驚きを隠しきれていない憐れなピエロが一人。

「どーん☆」

避けれない速さではない。
子供の声が最初に聞こえた時からライブラは目を離せずにいたほどだし、子供の方もただ落下していただけ。

しかし、手足は縛ってしまっている。――いやもしかしたら関係なかったかもしれない。ライブラは思考も体も固まらせて、そして道化の仮面は当然可笑しく笑ったまま、落ちてくる足を受け止めた。
ぐしゃり、と耳を塞ぎたくなる音と混ざって、くぐもった悲鳴が小さく聞こえた。

「さて、質問だ。お前は闘技場で僕を待ってないといけない筈だったんだけど、何でここにいるのかな」

地面に顔面を叩き付けられて起き上がろうとしたライブラの顔面が蹴り上げられる。

「君を探す為に僕が歩き回ったんだけど。それはおかしいでしょ？」

「あ……ばっ……！」

湿った音と共に夥しい量の血が地面に撒き散らされた。

「全く、手間、ばかり、掛けさせて」

一度目の蹴りで仮面が完全に剥がれ、一度目の踏み付けで地面と血でグロテスクな顔面が汚れ。そして、二度目の蹴りは後ろから掴まれた感触に気を取られて、空を切っただけに終わった。

「ん？」

掴まれた服を追うと、未だ薄くしか肉が付いていないか細い腕が繋がっている。そしてそれを更に辿ると、子供の記憶にもどこか引っ掛かりを覚えさせる蒼い髪。

一瞬、驚きすらも忘れて表情が固まった。

そして、直ぐにいつもの顔に戻る。

「なぁるほどね。でもジェミニ。流石にそれは無いんじゃない？」

一見無邪気にも見える笑顔を残して、子供は姿を眩ませ、シアの手の中からも消えた。

ぎょっとして目を見張るシアの視線の先には、既にライブラもい

ない。

「そんな残酷な事するなんて、僕にはとても出来ないや。尊敬するね」

声はジェミニとシアの後ろから。

無造作に髪を持たれたラィブラは、いつの間にか拘束は解けているものの、血だらけの顔を隠す事も出来ていない。

ラィブラの体は子供の体よりも大分大きく、子供の腕に特別力強さも感じないにも関わらず、ラィブラは足を宙にぶら下げて成す術も無く捕まっている。

「お前も相当なもんや。そいつ、一応仲間やないんかい」

「相変わらず仲間想いだね。その考え方に反論する気は無いけど、ラィブラ(こいつ)は特別だ。焦らす事でもないからさっさと言ってしまうとね、――まあつまり、こういう事なんだよ」

そう言って、軽く広げた手の平でラィブラの顔をゆっくりと横断させた。

「何、だと……？」

当然、一瞬だけラィブラの顔は隠れ、直ぐにもとの顔が現れるは

ずだった、が、そこにあったのは鼻や唇が削ぎ取られた猟奇的な顔とは別の顔。

しかし、全く見た事が無い顔と言う訳でもなかった。

事実、恐ろしいほどよく似た顔がその隣で溜息を付いている。

「ジェミニ。僕を知ってる君なら少しは思わなかったかい？　こいつの魔法も声も話し方も、どこか僕と被ってただろ？」

「無茶言うなや……」

確かにジェミニの頭の片隅に、似ているかもしれないという思いは、無意識下の中に少しも無かったとはいえない。

しかし、顔は潰されているし、兄弟が居るなんて話も聞いたことが無く、まさか”同じ顔で似たような能力の人間がそう都合よく二人も居る訳は無い”。いや、”作れるとは思わない”。

「相変わらず何でも有りやな、お前は……」

「その分、時間と手間と魔力が必要だけどね。まあ重宝してるよ。でもね、流石に知能と思考を兼ね備えた存在までは作れないよ。一万年魔力を溜めても足りない足りない」

得に力を入れた訳でもなく、ラィブラの体が完全に地面から離れる。

「だからね、これは”魔法”じゃなくて”技術”なんだ。まあ正確に言えば魔法半分技術半分って所なんだけど。その技術はね？　クローンって言うんだ、知らないだろうけど」

おもむろに子供が立てた人差し指をライブラの前で横に振った。

「……？」

それに合わせるように、あれほど強固だったライブラの黒装束が切り裂かれて地面に落ち、ライブラの肉体が露になる。筋肉質な訳でもなく、大して痩せ細っているわけでもない普通の体型。

しかし、その体を見て吐き気を催さない人間がどれだけ居るのだろうか。

×。

×××××××××××。

服が剥ぎ取られたのは上半身だけ。しかしそれでも数えきらない烙印がそこにあった。

胸、腹、背中、脇の下、首の下、脇腹、腰骨付近。あまりに多く

押され過ぎて、もう何の形を象った焼印なのか分からない物も多くある。

後ろから小さくシアの悲鳴が上がる。

体中がひどく痛むだろうに、ライブラは未だ気絶は出来ていないのか引っ張られる髪を押さえて、小さく呻く声が前からも聞こえた。

「笑えよ」

短く告げられた声は刃物のように冷たく鋭く、その冷たさに道化はびくりと身を竦ませる。

やがて、唇が削ぎ落とされた口がぎこちなく吊り上った。目は笑い、口は笑い、それでも大粒の涙を零しながら。それこそ、道化（ピエロ）のように。

「良く出来ました」

「……！」

声に隠れて短く音がした。同時にライブラの肩から大きい剣が生えていた。

ライブラの目が驚きと痛みで見開かれる。それでも、呻き声一つ漏らさずただ息を荒くしている。それを見た子供は溜飲が下りたかとでも言うように、さっさと視線を逸らした。

「今考えれば何でこんな奴作ったのかって話なんだけど。まあ、今回は役に立ったよ。転移するにしても座標を求めらんないからね。憎たらしい事にこいつは何処に居ても分かるようにしてあるんだ」
「転移……？」
「……ん？　ああ、はいはいそうだ、言うの忘れてたけど」

ゆっくりと口角が上がり、裂けるんじゃないかと言うほどに唇を薄くしながら笑みで顔が歪む。反応が楽しみでたまらなかったのか、もったいぶった言い方で言葉を紡いだ。

「来てるよ、〝彼〟」

短く、たった一言で、具体的な単語すら無かったものの、ジェミニが耳から入ってきたその言葉の意味を噛み砕いて、表情を凍りつかせるのに時間はかからなかった。
どんな思考が駆け巡ったのか、それとも脊髄反射で殺意が沸き起こったのかジェミニの姿が掻き消える。

一瞬後、耳を劈くような轟音と共に壁ごと子供の姿が吹き飛ばされた。

雨露が最低限避けられるよう簡易に作られていた壁はいとも簡単に崩れ去り、倉庫の中の湿った空気を掻き出していく。

地面が湿っているからか、あまり土煙は上がらない。

結果、首元を押さえつけられて地面に抑え付けられている子供と、笑顔が殺気で崩れて、憎しみが形を作ったような表情で子供を押さえつける男の姿が露になっていた。

しかし、そのまま首をへし折りそうな表情であるにも関わらず、男――ジェミニは軽く舌打ちをして手を離す。手を離した時には、組み伏せていた筈の子供は既にいなかった。

指の先から逃れ出たかのように残っているのは霞だけ。それから視線を逸らすと同時に後ろから声。馬鹿でも煙でもあるまいに、その姿はまた少し離れた木箱の上。

「やっぱりまだ怒ってるんだね。いいじゃない代わりもいるみたいだし」

「――黙れ」

「黙ります」

小馬鹿にした態度にジェミニの表情がまた一段と険しくなるが、子供は笑ったままでジェミニも攻撃を仕掛けようとはしない。

「ほら、やっぱり僕も暇って訳でもないからさ。むしろやる事は他の皆よりもたくさんあるんだよ。まあ、今一つ終わるんだけどね」

言って、おもむろに取り出した短刀をライブラの背中に添える。

「やめろ」

反射的にジェミニが口にした静止の言葉に、子供が目を丸くして手を止めた。

「あれ？　何で君がそんな事言うの？　情でも移っちゃった？」

別に大した理由があるわけじゃなかった。そちら側の人間だ。殺すならば殺せばいい。

しかし。

ちらりと肩越しに後ろで蹲っているシアを見た。

決着をつけなければならないのだ。ライブラの出生のルーツがどうであろうと、たとえ卑小な存在でしかなかったとしても、ライブラは深くシアの過去と心に関連している。心因性で声が出ないのも恐らくそのせいだ。

決着を。

それが憎しみに任せた復讐行為でも、馬鹿正直に赦しを与えるにしても、シアがライブラにアプローチを掛けて、そして決着が求められる。

「ああ、そういう事ね。まあ、大体の事情は聞いてはいるよ」

相変わらずの目聡さで、ジェミニのシアへの視線の意味を悟ったのか、大仰に溜息を付いて感嘆してみせた。

「僕もどうしてもこいつが殺したい訳じゃないからね。君が処理してくれるのならそれでもいい。ほら」

そう言って、ライブラを掴んでいた右手を無造作に振った。

振られた腕の延長戦を伝って、不自然なほど勢いよくライブラの体が宙に舞う。動くまでもなく落下点はジェミニの立っている場所で、受け止めようと足に力を込める。

「まあ、嘘だけどね」

そして、その声によって、自分の愚に気付かされた。

「お前は好く出来ていたよ。道化としては」

気付いて視線を戻した時には、既にそれは子供の手から離れて一直線にライブラの背中に向かっていた。

その小さな腕では持ち上げることすら出来ないのではないかと言うほど大振りの剣が、それも複数本。

ライブラを受け止めようと地面に足を据えていたジェミニが動けるはずも無く、ライブラの体に足に腕に。

「道化として生まれて、道化のように滑稽に生きて、なら後は道化のように虚しく死ぬべきだろ？」

そして、道化の仮面が完全に剥がれ落ちたその醜い顔も、黙って剣を受け入れていた。

相当な質量を持っていた大剣はラィブラの体を予想されていた落下地点を大幅にずらして、皮肉にもシアの目の前までラィブラを運ぶ。

シアは絶望するでも、当然喜ぶでもなく、ただただ目の前の光景を受け入れられず、呆気にとられた顔で動かなくなったラィブラを見つめていた。

「……シアちゃん、しっかりして」

助けを求めるような目がフラフラとこちらを向いた。酷なようだが、ラィブラと敵対していた時よりも遥かに状況は悪い。

「身内の恥を晒すのは恥ずかしくて。教育して、同じ顔を削り取ってもやっぱり好きにはなれないね」

こみ上げてくる笑いを噛み殺しながら、子供は肩を竦めてみせた。

「ええと、じゃあ僕はそろそろ行こうかな。やる事が多いんでね」

「――奇遇やな、ワイもや」

お前を殺さなければならない、とジェミニは言外に伝え、子供に

もそれは伝わったのか『仕方ないな』と、もう一度笑って肩を竦めた。

「……シアちゃんはここにじっとしとき」

それだけ言って、ただでさえ細いジェミニの両目が更に細められる。

そして、まず子供の小さな姿がゆっくり薄らいで消えた。

消えた訳でも、この場所を離れたわけでもない。まだじっとりとした嫌な雰囲気が背中を這い回って証明してくれている。

集中によって細められた目で、ジェミニは倉庫の中を次々と見定めていく。

赤茶けた地面。薄くも厚くもない木で出来た壁。無造作に積まれた木箱。未だ茫然自失としている少女。半壊した壁から覗く灰色の空。何かを亡くした道化。舞う木屑。――戦火の明かりに黒光りする短剣。

「お見事」

切っ先はシアの眼前に向かって突き出されていて、それをジェミニが寸前で掴み取っていた。

逃がさない、との意を込めて骨が軋むほどジェミニが子供の腕を握り締める。そして、もう片方の手も負けないほどに強く握り締められ拳となる。

しかし、先に子供の拳の方がジェミニの腹部にめり込んだ。

やはり尋常ではない力が拳から伝わり、肋骨が悲鳴をあげ完全に折れる前に後ろに跳ぶ。しかし掴んだ手は離さず、子供も引き連れて。

拳のダメージを殺しきるには壁まで跳ぶ必要があり、ついでに子供のその軽い体を壁に叩き付けた。

この二人を閉じ込める檻としてはあまりに脆い木の壁はいとも簡単に崩れ去り、子供の体はそのまま地面に叩きつけられ、宙に浮く。

それを、投げ付けた勢いそのままで一回転したジェミニが思い切り横から蹴り付けた。

子供の軽い体は玩具のように体重を感じさせず、くるくると飛んで行く。

しかし、わざとらしい程に胡散臭い手応え、もとい足応えがまだ子供が健在だと言う事を忠告している。

横目で、シアの姿を見やる。

相変わらず、ジッとライブラを見つめるだけで動きは無い。

放って置ける状態ではないが、あの男を攻め手にして戦うのはあまりに愚かだ。

僅かに逡巡した後、もう一度「ここにおってな」と釘を刺して子供の姿を追って、地面を蹴った。

◆

無残に串刺しになってしまった目の前の人を私は見つめていた。

大した感慨は沸かないはずだった。私は確かにこの人を憎んでいたし、私の母も時間も声も奪ったのもこの人。

鎖を付けられ烙印を押され、この人以外と関係を作る事さえ許されなかった。人柄が良さそうな人が他の奴隷を買って行く事はあったし、私もそうなりそうな事があったが直ぐに連れ戻された。

最初は分からなかったが、私は売り物ではないという事だったのだろう。

当然そんな事は自分には知らされず、自分に不届きがあったから

だといって折檻をくらった。

中途半端に外の存在を知ったせいで、苦痛にも孤独にも慣れる事が出来なかった。

だからいつの間にかこの人は、自分の世界の中で唯一変わらないものとして途轍もなく大きな存在になっていて、絶対的な支配者として君臨していた。

それなのにそれはただの幻想（おもいこみ）で。

その幻想は更に恐ろしい人の一吹きによって消え去った。

――この町に来たのは確か二年ぶりだった。

定期的に住処を変え、馬車で一纏めにして運ばれるのはいつもの事で、馬車の中では一言すらも許されない。

あれは確か夜で、いや、人が大通りに集まりやすくなる夕暮れ時で、慣れない石畳を蹄を付けて走ったせいで馬が転倒したのだ。

何かが弾け飛んだ様な音がした後、ぐるりと視界が回った。体の至る所を軽くぶつけたが、特に外傷も無く頭を振りながら顔を上げ、

そこで、目に入った。

破れた布張の向こうに、光が踊っているのを。

光の中には笑い声や歌声が優しく交じり合っていて、以前に一度だけ飲んだ事がある温かい牛乳と蜂蜜を混ぜた飲み物を連想させる。

だから逃げようとか、もう嫌だからとか、きっとそんな理由ではなかったのだ。

いつのまにか。

それこそ誘蛾灯に群がる蛾のように。

私の足はフラフラと町の中心に私を運んでいった。

意味が分からなかった。

第一印象がそれだけの言葉で埋め尽くされた事をよく覚えている。

何でもない道端で杯を交し合う人達、肩を組んで歌う人たち、手を繋いで飽きもせず語らいを続ける人達。

薄暗さに慣れていた視界にその煌びやかなその世界は斬新で、漂ってくる香ばしい匂いは黴の臭いに冒されていた鼻には背徳的なまでに甘美だった。

歩いた。ただ只管に。

常に減っていた腹はいつも以上に空腹を訴えてきたし、ボロ布を羽織っただけの格好に時々奇異の視線を感じたが、そんな物は些細なもの。

それ以上に、枯渇して死に掛けていた好奇心とか渇望などが、刺激によって潤いを取り戻していく感覚が何より重要で、自分の中を占めていたのだ。自分が犯した愚に気付いたのは、日付が変わり人の通りが疎らになって来た頃。

そして、当然そのまま帰れなくなって。物凄い罪悪感と後悔にフードを被って町を彷徨った。でもその代わりに色々な人達に会って。皆が皆、色んな形で優しくて。話の中でしか聞いた事が無いような生活を送って。

世界は、確かに広がったはずなのに。

この人が自分の世界の全てを支配していた時間はもう終わったのに、それでも自分の世界が半分以上削り取られているのを確かに感じる。

何故。

確かに恨んでいた。それでも親しみや愛情も感じた事も無かった。

あるのはただただ怖かった記憶だけ。
ならば何故。
優しく教えてくれるのか、それとも知りたくない事を無理矢理見せ付けたいのか。脳裏に住む別の自分が、目の前の男の怯えた表情を思い出させてくれた。
そして、必然的に気付く。
私は、同情しているんだ、と。
無意識下だとしても、醜く見下している故の憐憫の感情を。
だって、しょうがないだろう。
頭の中の記憶が剥がれ落ちて腐っていくように偽物の臭いを強くして、その下から身に覚えの無い記憶が真実味を増していくのだ。今、この瞬間にも。それは、きっとこの人が死に近づいているせいなのだろうが、それにしても、何故。
よりにもよって、最後にこんな記憶を残していくのか。
奴隷として他の人間の元に言った事なんて一度も無かったじゃないか。
一番辛かった数人の男に嬲られた事も、腕が上がらなくなるまで殴られた事も無かった。妖精が毎日食事を運んできた訳も無い。体が壊す度にいつの間にか脇にあった水と薬も独りでに出てきたわけ

ではない。冬に凍え死ななかったのもいつの間にか毛布があったからだ。

良い人だったのだと言いたいわけではない。それだけの事、普通の人間が考えれば当たり前の事かも知れない。優しい人ではない。優しさとは隔たりが無い物だ。つまり、少なくともこの人にとって私は特別だったはずなのだ。

それぐらい、気付く事もできたはずなのに。

私はそれこそ邪神の様にこの人を見ていたのではないか。不安も覚えず、恐怖も感じず、もしかしたならば体のつくりからして違う人間味など欠片も無い人間だと。

そんな事は、ありえるはずも無いのに。

――前から気配。

顔を上げれば、手。

か細く震え、生気が指先に灯っていた。

◆

背中から思い切り地面に叩き付けられて、意識を失った。
次に目を開けることは無いかも知れない、と心のどこかで確信染みた予感はしていたが、その予感はどうやら裏切られたようだ。

（まあ、何の意味があったのかは分からないけど）

指一本動かすのも億劫な失血具合だ。
致命的な頭部への投擲だけを何とか誤魔化すのが精一杯で、他の剣まで誤魔化すのは苦だったし、それに余り大雑把に魔法を使うとあの男は騙せないだろう。
結果的に体中に剣が突き刺さり、致命的といえる傷は避けられていなかった。

しかしまあ、少しは溜飲も落ちると言うものだ。
あの男を騙せるのは、自分くらいのものだろうという考えは前からあった。当然犬の餌にもならないちっぽけな嘘に限ってしまうが。ならば今誤魔化せたお前の命は犬の餌にも劣るのか、と言われれば苦笑するしかないが。

すぐに眠気が視界を狭めて、思考を鈍らせていく。
今度こそ、二度目覚めることはないだろうと確信しながら自分の人生に思いを馳せてみる。

大した事はない、以上。

一番印象に残っている出来事と言えば、顔が似ているのが気に入らないと自我に目覚めた途端顔中のパーツを削ぎ落とされ、奴隷の烙印を体中に捺され、去勢された事なのだ。

まあそれなりの事はあったかもしれないが、それでもやはり思い返すほど大した事ではなく、最後に騙し返してやれたと言うならばそれが一番。十分にハッピーエンド。文句は無い。

不満ならば、後から精神論や心情をやりくりさせて感動的に装飾するのもいいだろう。

例えば、”嘘”で作られた自分が作ったあいつに”嘘”を付けた事が、最後に平等になった証だとか。

例えば、死ぬと言う事が自分を人間だと証明しているだとか。

例えば、あいつの筋書きから逃れて、自分は永遠に演じるはずだった道化（ピエロ）の仮面を脱げるのだとか。

例えば、

例えば。例えば。ｅｔｃ。ｅｔｃ。

……成程、もしかしたならば作家は無理でも脚本家ぐらいにはなれたかもしれないな、と思えるほどに、わざとらしく着飾った最期が煩わしいほどに想像できた。

「……？」

さて、その結末から犬の餌の山のような我が人生をどう綺麗に締め括ってやるか、と腐心していた所で、隣に誰かいる事に気付いた。

視界は既にぼやけて、それが人の形をしていると言う事しか分からない。

（何やってんだよ、こいつ……）

しかし特徴的な髪の色は、ぼやけた視界にも目の奥に染み入るように主張してくる。

蒼い蒼い、海の色。入道雲の隣の際立った濃い空の色。夏の色。

不意に、頭が勝手に物語（じんせい）の結末を新たに紡いだ。

――例えば。自分と同じような境遇のくせに一人だけ幸せに生きようとしている少女を道連れにしたりだとか。

「……」

ギッと拳を一度軽く握り締めてまだ体が動いてくれる事を確認する。魔法は魔装具を奪われたお陰で魔力は一発で枯渇するが、使用は可能。

手が伸びる。

細くてか弱くて、羨ましくも今は何の鎖も首輪も付いていない、その首に向かって血にまみれた手が。

そして、手が喉に触れる。

「あ……」

ライブラの甲高い声ではない。

少女の柔らかい声が、しんと周りの空気を揺らした。

――例えば。同じような境遇で、自分の自己嫌悪を押し付けていた女の子に謝ってみたりだとか。

（……ごめん、って言ったら怒るんだろうな……）

言い訳するつもりは無いが、自覚はあった。

自分の仲間を見つけた気がして、無理矢理死んだ奴隷の子供を奪ってみたり。

でも、奴隷と主人として人間関係しか知らなくて、結局楽な育て方を選択してしまったり。

こちらを怯えた目で見る子供に、憤ってしまったり。

ぐずる度にどうやっても泣き止まない子供を魔法で辛い目にあわせて、恐怖で行動を縛ってしまったり。

大した屑だ。良い悪役にもなれない。無駄にプライドが高いだけのただのチンピラがいいところ。

しかし、もし謝れば、重荷になってしまう。さぞ鬱陶しい物を背負わせてしまうことだろう。

自分が悪人のまま死ぬのは当然で、罰で、望む所だったはずだった。でも、迫る死があまりに透明で空虚で、自分は誰の心にも残らないのではないかと。

自分は結局、アイツが怖くて、痛みが怖くて、現実が怖くて、死が怖くて。そして今度は忘れられるのが怖いだけなのだ。

謝る理由は死ぬほどあるが、謝る意味は一つもない。

悪役としてのプライドでさえも作れないまま、道化（おまえ）は死ぬ。それだけなのに。

「名前を、教えてもらえますか……？」

――改めて久しぶりに聞いた声は、記憶の中にある泣き声とは似ても似つかない、女の声となって鼓膜を揺らした。

そして、その言葉も酷く優しいもので、必死に強がろうとして偽装したプライドも簡単に溶かしていく。

その優しさに甘えて、笑って、そして謝ろうとして。

（……ああ）

直ぐにその努力を放棄した。

それはそうだ。そもそも自分は笑えない。

動かす為の瞼は痙攣するぐらいしか能は無く、綻ばせる筈の唇は削り取られている。こんな顔で笑おうとしても、それはやはりあの男が喜ぶような醜い物しか出来ない。幻術を作ろうにも、既に魔力はからっけつ。いつでも笑っていた道化（ピエロ）の仮面ももう無い。

自分は嘘を付くか、仮面を被るしか笑顔を作る手段が無いのだ。

（止めだ……）

と言うよりそもそも、何故ここまで悩んでまで何で笑顔を作ろうとしているのか。

先程言ったように忘れられたくないからか？　実は良い人だったと思って欲しいからか？　最期を綺麗に飾り付けたいからか？

残念な事に言い訳と嘘は得意な方で、その代わりに言葉にすればたちまちそのどちらかに変わってしまう。

なら止めよう。似合わない。名前も教える必要なんか無い。どうせ皮肉で付けたただの記号だ。そんな物は僕の最期には相応しくは無い。

「笑えよ、シア」

何度も何度も繰り返した言葉。

何とか絞り出したその声に、シアは俯きかけていた顔を上げると表情を変えた。笑えと言ったのに、その顔は笑顔とは程遠い。

その表情が可笑しくて、思わずライブラは苦笑する。

「笑ってろ……」

そして、ライブラはぎこちない笑顔のままその人生を終えた。

◆

弾かれるでもなく、受け止められるでもなく、手の端から零れ出るように拳から感触が消えていった。

「おお怖い」

おどけた様に笑いながら、薄らいで消えた姿は一つ先の屋根の上。

闇雲に攻めても捕まえられない。そう悟ったジェミニは追撃の足を止めた。それを確認してやっと一息つけるとでも思ったのか、子供は暢気に視線を外す。

「うーん、どうも慣れないね」

「……？」
「いやね、さっきのアレの魔法を肩代わりしてるんだけど。これが中々負担になってね」
「……嘘付け」
「嘘です」

魔法を肩代わりしているのは本当だろう。ライブラはもういないのに未だ町に半円状に広がった結界は未だ健在だ。
白と黒と灰色の絵具を空にぶちまけたようなモノクロの空。その異様な光景は一切の乱れも無く戦火の空を装飾している。

「さて、そろそろ旧交も暖まった頃合かな？」
「……逃がすと思うか？　オフィウクス」
「うーん、まあ難しいとは思うけど、出来なくは無いって感じかなあ？」

嘘。

気付けばいつもそうだ。いつから騙されているのかどうやって騙しているのか、そもそも”何を”騙しているのかも分からない。
目を凝らしても、魔力を追ってみても何ら普通と変わるところは無い。

しかし間違い無く、もうこいつは目の前に居ない。こうして話していること自体に意味も無いので黙って背中を向けると、背後から

溜息が一つ。
それをも無視して思考を続ける。ライブラはいい。直接関わってはいなかった。しかしこいつは駄目だ。必ずここで殺す。

ここで逃げると言う事は、目的は自分ではないのだろう。恐らく組織的な目的もあり、そしてこいつは自分の目的以外にはほとんど動く事が無い。ならば。

「……ああ、言い忘れてたね。僕が今は”レオ”だから。彼の一身上の都合でね」

不意に。

聞き逃していたはずの言葉が、無理矢理割り込んで思考に燁を入れた。

「な、に……？」
「僕の名前の方が良いって事だからさ。交換したんだ、別に未練も無かったし」

何でもない事を話すように子供は言葉を続ける。それはそうだ。名前（そんなもの）こいつにとっては当たり前の偽名に過ぎない。他のメンバーもそうだろう。
しかし。

違う人間もいる。はずなのに。

「だから、僕の事はこれからレオって呼んでね。皆が混乱しちゃうから」

「待てよ”オフィウクス”……！　説明しろ……！！」

「あはっ、やっぱりそこに一番怒っちゃうんだねぇ。でもさ、僕は求められたから応じただけで真意なんて知らないよ。どうしても聞きたければ――……」

肩越しにこちらを見る顔は胡散臭く、しかしふつふつと煮え滾る物を感じてジェミニの思考は鈍い。

言葉の先を続けながら、オフィウクスは指し示す。

小さな人差し指の先は、町の中心のほんの少しずれた場所。何度か足を運んだ闘技場。

「――直接聞けば良い」

飄々とそれだけ言って、子供――”オフィウクス”は嘘のように姿を消した。

黄金の夜

多少意識が虚ろになっている自分に気付いて、ノインは寄りかかっていた壁から背中を離した。

意識が無かった時間があったようだが、一瞬だったようにもかなり長い時間だったようにも感じる。しかし少なくとも目の前の景色は何も変わっておらず、寝過ごしたと言う訳ではないようだ。

「……無理するな。寝てていいぞ」

そして傍らで立っていたハルユキも、一寸たりとも動いていなかった。壁に背も付けず、焦りがあるのか後ろめたさがあるのかただ黙って立ち尽くしている。

それはそうだ、とノインは暗然とした表情で溜息を付いた。

ムイリオとユキネが戦った時も、試合であったにも関わらずのあの怒り様は身を凍らせる物があった。

口では何だかんだと言うが、それでも周りの人間を人一倍大事にする男だと思う。無理矢理自己中心的に見せようとしている所があるが、本意はその周りの人間ならば誰でも分かる事。

なればこそ、今は居ても立ってもいられない心境だと言う事は手に取るまでもなくよく分かる。

「あのね……」

ノイン自身ももちろんそうだが、それは自業自得に過ぎない。衝動的に謝意を示そうと、横を向く。

向いた先に彼の人差し指が待ち構えていて、パチンと額に軽い衝撃が当たった。

「痛い……」
「黙って寝てろ」
「……何よ」

私の心配してる暇なんて無いくせに、と言おうとした口が勝手に閉じた。

何故かと言われても答え難い。心配して貰って言う事でもないからかも知れないし、格好付けさせようと思ったのかもしれないし、もしかしたらまた甘えたくなるからかも知れない。

今はもう少し人肌にあたっていたかったが、もう甘える時間は終えたつもりだ。

しかし焦りも身の寒さを手伝って体の調子は一向によくならない。

分からない。何も分からないのだ。

敵がどんな手で攻めて来ていて、それにどんな対応をしていようが、救出が遅れていれば遅れているほど状況は困難を極めているはず。

もしかすれば、想像もしたくない最悪の事態かもしれない。しかし、身近な人間の死など死体を突きつけられてもそう納得できるものではない。絶望はただの空想を超える事は出来ず、ただ焦りだけが募っていく。

ノインとハルユキの間で言葉数は減らない。

だがそれは半ば焦りを誤魔化しあっているようなもので、そうしている事をどちらも自覚していた。ここに閉じ込められて何時間が経ったのか、斑に黒と白が混じり合った空には月も見えず、時間の感覚も曖昧。

今の状況が全て焦りを助長するかのようにさえ思えるのだ。

（……）

ノインは横目でハルユキを覗き見た。

その顔は強張っているとも、冷静を保っているとも言える微妙な物で、これまでのハルユキのどの表情も感情を読み取る事ができない。

不安を覚える。

無為な時間が、むしろ増え続ける口数が、そしてハルユキの表情が、どうしようもなく不安を増大させる。

「……ねえ」

また不安を埋めるだけの言葉を口にしようとして。

その瞬間。

その不安は世界を塗り替えるような重苦しい空気として形となった。

「――ッ！」

明確な変化があった。

最初、と言うより最も著しい変化だったのは何だろうか。

飽和して雫として漏れ出そうな魔力か。それとも、獅子の前にでも立ったかのような肌の薄ら寒さか。はたまた、空気が溶けた鉛に変わったのではないかと言う程の息苦しさか。

跳ね上げるようにハルユキが顔を上げた。

「何かいる」

短い言葉だったが、その声には有らん限りの警戒が滲んでいる。

遅れて、ノインも空を見上げた。薄ら赤い結界の壁を越えて、更に夜の太陽を遮って、それは空中に佇んでいた。

最初に感じたのは、金色。自分の炎とは似て非なる黄金だった。

自分の色を黄昏時の空の色だと例えるならば、あれはそのまま純金。欲望を指し示す、作られたかのように完全な金。

逆光でその表情の機微までは伺う事はできない。しかし、隠そうともしない視線だけはひしひしと感じる。

こちらを、見下ろしている。ジッと、あの距離から心の内まで見通すかのように。

その視線に驕りも優越感も感じない。ただ、目の前に飾られた絵画を見上げてその芸術性を黙って味わっている、そんなむしろこちらが畏まってしまう様な視線だった。

「……気に入らんな」

しかしどうやら隣の彼はどうにも気を悪くしたらしい。

その言葉を聞き取ったのか、ただタイミングが重なっただけなのか、男は緩やかに下降を始める。太陽が上がっているのは、剣が飾られていた王座の真上。よって降り立つは王座の傍らに。

不意に男と目が合った。

いや、これだけ離れているのだ。目が合ったと言うよりはたまたまノインと男の視線が一瞬重なっただけ。

しかし、その一瞬で体中を薄ら寒い何かが襲った。

「な、に……あいつ……」

ぞわり、と背中に氷の塊でも押し付けられたかのように背中に悪寒が走る。

切れ長の大きな金色の目。生暖かい戦火の風に揺れる目と同じ色の髪。黒い瞳孔までが、目を瞑っても瞼の裏に映りこんでしまうのではないかと言うほどに、神々しい。

いや、恐れはする、が畏れはしない。神々しさも確かに存在するが、それと同じほどに混ぜ込まれた凶々しさが確かにある。

何処までも現実的な金塊の金と、野生の中で研ぎ澄まされ誇りと威厳を手に入れた獅子の金を混ぜ込めんだような、矛盾したイメージを感じさせる。

王座を背にしても尚曇らない男の隣の存在感に、ハルユキすらも言葉を失って警戒を露にしている。

「初めまして、になるかな。御二方」

聞こえた声に、もう一度寒気が背中を這い上がった。

凛とした声と言う訳でもよく通る声でも、ましてや大きな声でもないと言うのにその声は隣で囁かれたかのようによく聞こえる。

よもや空気が意識を持って声を運んだと言う事でも無いだろうに、その声は距離など無視して闘技場中に響き渡った。

そして、男の横に人影がもう二つ。

「ここでお待ち下さい」

一人は、枯れたように白い長髪の女。顔中に大小深浅様々な傷が走り、この平和な時代には有り得ないほどに、目が殺気に侵されている。

「わぁ、ホントに一瞬なのね。私でも出来そうにないのに。下準備が有ったからかしら？」

そして、もう一人。

声がした途端、王座から見渡した途端に、はずみで漏れた魔力に身が凍った。

肌が痺れ、心臓が一際大きく跳ねるのを感じる。いや、これはそもそも魔力なのか。余りに大きすぎて濃過ぎて全く未知の物に感じてしまう。

不意に、女の姿が霞んだ。

一瞬後に、頭上で音。

「――あは！　凄い二人ともちゃんと見えたのね！　凄いわこの子達！　持って帰っていいかしらオルフィウス！」

とん、とその速さには不似合いな軽やかな音で、ノインとハルユキを囲っている”箱”の上に降り立ち、手を合わせて無邪気な声を上げる。

その表情に言葉以上の意味は感じられず、隠そうともしない意思に感じるのは無邪気さとそれ以上の気味の悪さ。

「スコーピオ。今は客人の立場だ。あまり騒ぎ過ぎんようにな」

そして、再びオルガンを思わせるような深い声が闘技場の中に静かに響き、その声の主が再び暗がりから姿を現した。

「はぁい。……あら、この結界も面白いわね。私にも出来るかしら」
「それはタウロスの魔法の一つだろう。興味があるなら後で聞いてみるといい」

異色。

その言葉が幾つも折り重なって頭の中を埋め尽くしていく。魔力が溢れるのは当たり前。その身が人外に見えるも当然だとでも言うようにその男は、外れていた。

何がだろうか。金色の髪か、その瞳か。それともその奥に潜む覇気の濃さか。

作られたかのような芸術性を見ていたくない。この男が踏み締めた地面が続く場所に居たくない。はっきりと言えるのはそれぐらいだ。

「それにアリエス。王座（そこ）は遠慮しておく。今は王の前だ。檻からは出せないが、せめて視線を合わせるのが礼節だろう」

長身だが、細い訳ではない。いやどちらかと言えば細い方だが、それは引き締まっていると言う言い方がしっくりくる。

浅い黒と灰色で作られた服は無骨で、その上から更に濃い灰色の外套をかたから羽織っていて、しかし貧相ではない。

「いえ、後は私共にお任せ下されば……」

「少し話がしたくてね。彼等はその他大勢と類していい人間ではない」

「は。失礼を致しました」

長々と口答えする事無く女は短く了承の旨を口にすると、静かに頭を上げ――跳んだ。

女の身は王座に続く階段の最上段。高さは十五メートルは下らないはずだ。しかし女は家の敷居を跨ぐかのような気軽さで空中に身を投げ、

――そして、石畳を粉々に砕きながら着地した。

一枚二枚ではない。辺りの十数枚にまで罅を伝染させ、近い物は捲りあがって砕かれる。

重い。流石にあの高さからと言えどただ落ちただけでは、ああはならない。この女もまた奇特な才の持ち主なのだろう。

女の目が細められる。

二人を見定めているのが三割、警戒を向けているのが二割。残りの五割はただ殺意が当たり前のように混じっている。

「――さて」

女の派手な登場に意識のほとんどを奪われていたノインが、その声に反応してピクリと肩を揺らした。いつの間に王座の横から移動したのか、例の男が女の直ぐ後ろに佇んでいる。

そんなノインの驚きなど捨て置いて、おもむろに男はその場に腰を下ろした。その場、つまり階段の一番下の段を椅子代わりにしてだ。

少なからず驚いてしまったのは何故だろうか。

別に特筆するほど汚い訳ではない。薄く土埃ぐらいは乗っているかも知れないが、二三回叩けば取れる程度の物。しかしそれでも、あの男が地面に座るという事に違和感を覚えたのだ。

しかし、座ってしまえばそれはそれで絵になるようで、変わらず近づき難い空気が滲んでいる。

「まずは自己紹介だが、私は君たちの事は知っている。故に一方的に名乗らせてもらう。オフィウクスだ」

オフィウクス。

聞かない名前だ。これ程の魔力、存在感を考えれば無名である事は考え辛いが、それは間違っても油断には繋がらず、ただ不気味さだけが残った。

「さて、先ずは話をしたい。構わんだろう？」

静かに威圧感が肩へと圧し掛かる。鬱陶しいその感覚を振り払いながらノインは初めて言葉を向けた。

「……話？」

「なに、他愛の無い話で構わんさ。一応私はこの状況を作り出した当事者だ。現在情報に乏しい君達にも損は無い」

「……では、目的と状況を教えなさい」

敵からの意見を完全に信じる訳はないが、それでも推測の材料ぐらいにはなるだろう。

男は意味有りげに顎に手を持っていくと、少しの間考えた後口を開いた。

「ふむ、そうだな。正直に言ってしまえば状況は今のところ私にも詳しくは分からない」

と、同時に。

「それは、現場の人間に説明してもらう。――貴兄もそれでいいか、タウロス」

首を傾げて男は視線を後ろに向けた。

「ああ？　まあ、やるこたァやって来たから良いけどよ」

視線を追うとその先には、先ほどの食人男（カニバル）。

体の所々に付着しているのは自分の血なのか返り血なのか。男の生半可ではない再生力を知っているからには安易に特定することは出来ない。

「気になるか？　まあ安心しろよ。手前ェ等の知り合いは揃って食い損ねたからよ。――まあ、誰も死ななかったなんて言わんがな」

「貴様……」

独りでにノインの歯が噛み締められて、軋んだ音が鳴った。
その表情を眺めて邪な笑みを深くしながら、タウロスは二人を通り過ぎ金髪の男の元に向かう。

「ねぇ、オフィウクス？」

今まで発言を我慢していたのか、スコーピオと呼ばれていた女が焦れったそうな声を出した。菓子を目の前に出されてお預けを食らったような表情で、その視線は城に真っ直ぐ固定されている。

「匂いがする。ああもう我慢出来ないわ。行って良いわよね……？」
「ああ済まなかったな。もう時間も無いのでな。手早く済ませてきてくれ」
「五分で戻るわ」

言うが早いか、再び女の姿が霞んだ。追った先で女の姿は見失ってしまい、一瞬後、バキン、と何かが無理矢理叩き壊されたかのような音が響く。

「……おい、ライブラの結界に穴空けて行きやがったが、誰だよあの女」
「大体察しは付いているだろう？　同胞だよ。それに結界の方は腹

心殿が受け継ぐ事になっている。心配はいらんさ」
「ちっ……。また面倒そうな奴が……」

面倒臭そうに頭を振りながら、闘技場の入り口からゆっくりと近づいてくる。ぽつぽつと金髪の男と言葉を交わしながら危機感も無い。
それを憎々しげに睨みつけながらノインは周囲を軽く見渡した。
敵の数は数えて3人。本当に先程の女が五分で帰ってくるとすると全部で四人。そして恐らく闘技場の外にもまだ複数の敵が居るだろう。

まだ見ぬ敵の力量を推測するのは難しいが、一筋縄ではいかない連中ばかりだと思われる。
目前の金髪の男に始まって、傍らで直立を続ける白髪の女もそして近寄ってくるあの男も滲み出る空気から尋常ではない。

「ハル」

相変わらず壁に寄り立って不動を貫き、一言も言葉を発していなかった隣の男の名前を呼んだ。
目の前の光景に興味が無くなったかの様にあっさりとした無表情がこちらを向いた。

「……どうする？　人数は結構いるみたいだけど」
「何か状況が変わったのか？」

「はいはい、頼もしいわね」

それだけ言って笑うと、ノインは立ち上がろうと地面に手を付いた。

「……ん」

しかし立ち上がった瞬間、視界が眩暈に乱され足元がふらついた。

「だから座ってろって」

いつの間にか肩に置かれた手に誘導され、気付けばもといた場所に座り込んでいた。

こうなる事は薄々分かってはいたのか、ノインは諦めたかのように溜息を付くと視線は地面に向けたまま、また口を開く。

「魔力は少し回復したけど、戦える状態じゃないわね、やっぱり……」

そう言いながら、これ見よがしにノインは四方上下を囲っている壁に触れて軽く撫でた。嫌に滑らかな感触が憎たらしい。

「言いたい事は分かる？」
「……子供が生意気言うんじゃない。何で俺がここに閉じ込められてると思ってる」
「そうね。分かってるわ。貴方が優しいって事でしょう？」
「違う」

少し言葉に詰まる。
少しでも戸惑ってくれれば口約束だけでも取り付けてしまえたのだが、そこは自称一億歳の年の功か、それともただの頑固さなのか主導権までは握れない。

「――勘違いしないで。私を殺してでもと言っているんじゃない。私はそんな根暗な性格じゃないわ」

ならば強い言葉を。これは少し卑怯かも知れないが、と自覚しながら言葉を続ける。

「私はあんな三下達に殺されないわ。信じてくれるでしょう？」
「……嫌な言い方だな」
「……ごめんね」

当てが無い訳ではない。
ギィが今この瞬間にも誰かを連れてくるかも知れないし、いい加減この闘技場の異変に気付く人間がいても不思議ではない。
ギィに至っては城に行って直ぐ戻ってくるだけだ。そう難しい事

ではないが、それが出来ていないのだから何らかの問題があったと考えるべきだ。

実質、ここに誰かが来る可能性は乏しい。ならば状況を変えるには、運を天に賭けるか、命を賭けるか。

どちらが良い判断かは結果でしか決められないが、どちらが好みかは簡単に決められる。

「さて、お待たせしたかな？」

聞こえた声に反射的に目を向けると、金髪の男がタウロスとの会話を終えてこちらを向いていた。頑固なハルユキに口約束ぐらいは取り付けておきたかったが、話を聞く方が先だろう。

「状況の説明をしておきたいところだが、それは長くなりそうだ。ならば先に我々の目的を知ってほしい。構わないか？」

「好きにしなさい」

では、と一呼吸空けて男が右手を前に突き出した。

「一つは召喚獣だ。これについては既に目的は終えているといっても良い」

「それ、どうして……！」

手の中に転がっているのは拳大の赤い宝玉。
見間違うはずも無い。剣にあの宝石を嵌める作業を見届けたのはノイン自身だ。間違い無く世界に三つと存在しないほど強大な、この国の守護神の心臓だ。

しかし驚きはその事実ではない。
奪われた、すりかえられたと言うのならばそう不思議ではあるが不可能ではない。しかし、それを核としているはずの太陽が未だ頭上で輝いているのはどういう訳なのか。

反射的に太陽に視線を向ける。

一目では違いは分からない。しかし目を凝らせば確かに気付いてしまう違いがあった。

太陽自体の高度が上がっている事と、太陽の大きさが加速度的に肥大している事。そして、その中心に黒い何かがある。――いや、いる。そしてそれもまた太陽に追い縋るように成長を続けている。

「それと、まあこれはついでだが――」

声に反応してノインの視線が忙しなく地上に戻る。
視線の先では男が手の中で宝玉を弄びながら、淡々と口を開いて。

「この町を地図から消してしまおうと思っている」

そんな、荒唐無稽な事を言い放った。

黄金の夜（後書き）

前話は短かったので、前々話と統合しました。

阿鼻叫喚。

その言葉がこれ程顕著に表された光景は中々無いだろうと、呆然とした頭の裏側でユキネはそう思った。

「そこの君！　避難民か！？」

「あ、ああ、怪我人を……！」

「ここは駄目だ！　少し迂回すれば下りれる階段があるからそっちに回ってくれ。そこならここまで多くは無いはずだ！」

何が、と疑問に思う必要も無い。視線を落とせば答えが蠢く波のように形を成して広がっていた。ユキネが居るのはどうやら南の城門の上。後ろを向けば歩いてきた戦場が、前を向けば城の裏庭がある。

「凄いな……」

その裏庭の地面を覆い隠しているのが、人の波だ。

皆が皆、背中を焦がされているような焦り様を顔に浮かべて門に迫っている。そして、それとすれ違うように北に走っていく兵士も居る。

「やっぱり北で何かあったのか……？」
〈そうですね。きっと先程の閃光と地震が原因。――いえ、その閃光と地震”の”原因が問題でしょう〉
「分かるのか……？」
〈歪な魔力をそれはもうふつふつと〉

変わりゆく状況をメサイアと分析し合いながら、足早で城壁を走って眼下の人の層が薄くなっている方向に向かって移動する。

それにしても凄い数だった。パニックでなければゆっくりと非難した方が良いのかも知れないが、こうなってしまっては避難時に軽くない怪我人が出てしまう。

更にどうせ町からは出られないし、この人数だ。誘導するにも兵士の数は足りず、守るのならば一箇所に集まってもらう方が都合が良いだろう。

結果的に、安全なのはこの城の中だけだと言えるのかもしれない。

「あれか」

暫くも歩かない所に先程の兵士が言っていた細い階段が見えた。

ほとんど全員が門に殺到しているせいか、側に民間人の姿は無い

がそれでも数人の兵士が武器を持って物々しい雰囲気を纏っている。

足音に気付いたのか一番手前の兵士がこちらを見て声を出した。

「怪我人か？」
「ああ、何処に連れて行けば良い？」
「怪我人は全員中庭だ。城に入れば直ぐに分かる」
「ありがとう」

一瞬だけ垣間見えた警戒も言葉を交わしてユキネの姿を確認すると、階段への入り口に道を空けた。もしかすると一度すれ違った事があるのかもしれない。ユキネの外見は男ならば中々忘れられないものだ。

「……急ごう」

下にずれ落ち始めていたアキラの体を一度背負い直して、城の恐らく裏口と思われる扉に向かって足を踏み出す。

「ん……」
「……アキラ？」

もぞ、と背中で動く気配を感じて、肩越しにアキラの顔を覗き込

むと瞼が小さく痙攣して、そしてゆっくりと瞼が開いた。

「アキラ！　良かった中々目を覚まさないから……」
「ぅあ……？　うん、あ、え？　うおぁっ！　ユキネ！？」

寝惚けた目がユキネの顔を見て一瞬で覚醒する。

「あ、暴れるな……！」
「わ、悪い。いや、色々……」

女に背負われているのが情けなかったのか、それとも間近でユキネの顔を見たのが拙かったのか、覚醒していきなり慌て始めたアキラにユキネは一喝する。状況を少なからず察したのかアキラも大人しくなった。

「あ、歩けるから、下ろしてくれ……」
「嘘を付くな」

先程暴れた時も、ほとんど体に力を感じなかった。あれがどんな魔法かは知らないが、体を変形させる魔法だ。負担が少ないはずがない。

更に反論しようとアキラは口を開くが、自分の体の状態を自覚したのか悔しげに口を閉じた。

「俺は、どうなってたんだ……？」
「……覚えてないのか？」
「ああ、どこからがじゃなくて、何か、途切れ途切れだ……」

アキラは、出来るだけユキネから体を離しながら頭に手を当てて記憶を探るが、それでも記憶は戻ってはこないようだ。教えていいか少し迷った後、ユキネは探り探りに口を開く。

「金色の狼の事は……？」
「……」

なった、とも、出会ったとも言ってはいないのにアキラの顔色がさっと変わる。心当たりがある、と言う事はつまり自分があなる事を知っている可能性が高い。

「そうか……。結局、なっちまったか……」
「……あれは、何だったんだ？」

聞きながら半開きだった扉に体を滑り込ませる。同時に横殴りに聞こえていた喧騒が小さくなり、逆に扉の先の通路の奥から聞こえてくる音が近くなる。

「……俺の国は、小さな村みたいなもんでさ。山奥にあって他と隔絶的な国だったんだ」

聞いてしまってから踏み込み過ぎてしまったかと感じたが、信頼して話してくれているのだ、無碍には出来ない。

「それは別に皆が排他的な考え持っているからとかじゃなくてさ。何て言うか、こう、言い難いんだが……恐怖の対象でな」

「ああ……」

琥珀色の毛並み。古龍をも凌ぐような巨躯。金色の目。

成程、俄かには信じがたい話かも知れないが、実際にあの姿を見た者ならば何らかの神性やそれに因をなす恐怖を感じ取るのも不思議ではない。

「実際に国の軍事はかなり極端な少数精鋭でさ。成人した”コノエ”なら飛竜よりもずっと強いんだ」

ふと、疑問が過ぎる。

それならば何故アキラの国は滅んでしまったのか。小さな村といっても国、そしてこれといって敵も居ないのならば、成人した男もかなりの数がいたはずだ。

アキラの話では、”コノエ”の名を持つ人間が３０人。そして普通の人間が約５００人。

「十になると男女問わずに儀式が行われるんだ。それは戦える”コノエ”を全員揃えて妖弧に変化した子供を抑え付けて耐性を付ける為の物なんだけど……」

「狐……？」

ユキネの疑問が分かっていたのか、アキラは躊躇わずに続けた。

「――俺は、その中でも少し特殊でさ。それが儀式まで分からなかったんだ」

曰く。

その儀式は一年に一度のかなり大掛かりなもので、長の息子であるアキラの儀式は一番最後に行われていたらしい。

そして、事が起こった。

本来なら大人一人が跨がれるほどの大きさの一尾の妖弧を抑えるだけの儀式であるはずだった。しかし、現れたのは小山の様な琥珀色の魔狼。

呆気に取られた人間を一人。また一人。

目を奪われた人間をまた一人。また一人。その歯牙に掛けていった。

最後に、実の父である六尾の大狐に止められるまでの時間はほんの三十分ほどで、しかし被害にあった人間は三十では済まなかった。

奇跡的に死人までは出なかった。しかし、小山のような体躯におびえだした普通の人間が居た。

今まで畏怖の対象だった一族でさえ抑え切れない化物が生まれた。

その事実は誇大されて国中を巡り、やがて恐怖に追われた国民達が政治体制の改めを企て、――そして、今回はその企みの中心が義ではなく欲だった。

要約すればそういう事らしい。

「だから、やっぱり復讐なんて的違いだと思ってる。でも、今でも親父達は化物扱いされてるのは、やっぱり許せん。俺のせいだってのも分かってる。でもこのまま国を食い潰されるのも親父達が化け物のまま扱われるのも耐えられない」

後は以前も聞いた通り、親族は殺され、しかし岩戸に幽閉されて

いたアキラは難を逃れ、国は荒れ、今この状況に至っている。

通路を抜けると、そのまま中庭に出た。途中に幾つも扉や別れ道があったが、そうやら音を頼りに道を進んできたのは正しかったらしい。

そこら中に逃げる気力の無い人達が蹲ったり仰向けに寝転んで中空をボーっと眺めている。

「……すまん、今は関係ないな。また、負けちまったし。国を取り返すのはまだ先の話だ」
「負けてないさ。あの男を撃退したのはお前だ」
「そうなのか？」

欠落した記憶の中に男の逃げ帰った背中も含まれていたらしく、アキラは本心からの驚きを見せた。

もっとも男が逃げ帰ったのがアキラの影響だと断定は出来ないが、負けてはいない以上撃退というのが一番真を得ている。

「ま、なら今日はこれで満足しとくよ」
「そうしてくれ」

とりあえず兵に言って毛布を用意してもらうと、その上にアキラを座らせた。

「状況を全て把握している訳じゃないが、ここにいるのが一番安全だと思う。だから……」
「動けないって」

壁に背を預けてフラフラと振る手も小刻みに震えている。放り出すといえば聞こえは悪いが、まだ自分はやる事がある。

「じゃあ行く」
「無理すんなよ」

◆

〈主。出来ればレイ殿かジェミニ殿、もしくはフェン殿と合流しましょう〉
「……確かにな。もしかしたらハルユキの事も知ってるかもしれないし」
〈フェン殿はここに居るのでしたね。動けない分言伝か何かを受け取っている可能性もあります。先ずは彼女を……〉

人の波を避けながらとりあえず北で何があったのか確認する意味も含めてフェンを探していると、メサイアの言葉を遮って後ろから

名前を呼ぶ声に振り向いた。

「ユキネ！」

「エゼ。無事だったか、良かった」

足を止めて、後ろから人の波を掻き分けながら近づいてくるエゼと合流した。

フードから除く頬は朱色に染まり、うっすらと汗も浮かんでいる。気味の悪い空の影響か、この町の気温は下がっている。なら、余程慌てていたのか、それとも今までフェンを探して走り回っていたのか。

「ええ、でもごめんなさい、フェンが何処にもいないの」

「フェンが……？」

そう言えば、ハルユキはもちろんの事、フェンにもそしてレイにやジェミニ、シアにさえも会えていない。

小さく、体が震えた。

改めて寒さを思い出したからではない。何か薄ら寒い予感が脳裏を掠めたからだ。

嫌だ、と否定すると嘘のようにその感覚は消えていく。あまりに

あっさりとした引き際は肌寒さだけを残していった。

「……エゼ。北で何があったんだ？」

しかし、やる事は増える一方。寒さになんて構ってはいられない。

自分はもう強い。だから大丈夫。言い聞かせるように頭の中でその言葉を繰り返す事を忘れない。

たとえ傲慢だと笑われようが、この状況では自分は弱者だと悲観する強者などよりも、強者だと勘違いした弱者の方が余程多くを救えるはずだ。

もっとも、独りになっただけの事で思い込まなければ動けないのなら、強いなどとはいえないかもしれないが。

「北って言うと、さっきの爆発ね。私も良く知らないけど多分城の上の方に行けば直接見れると思うわ。入るのは難しそうだけど……ってユキネ！？」

「悪い！　なら直接見てみる！　エゼは避難しておいてくれ！」

「って言うかそれ、どうやってのよ……。まあいいか、頑張って。私ももう少しフェンを探してみるから、ついでに私の連れも」

一度跳躍して、空中に足を置いたユキネにエゼは頬を引き攣らせながら見送りの言葉を返した。それに対してユキネも苦笑いを見せると更に中空に向かって足を次々と踏み出していく。

〈お慣れになってきましたね。感覚を掴みましたか？〉
「……不思議な感覚だ。覚えたって言うより思い出したって感じがする」
〈その感覚です〉

メサイアの言葉に首肯で返すと、城壁の高さを越える一歩を踏み出した。そして、勢いのまま数歩踏み出して、目に入った光景にほぼ強制的に足が止められる。

「何だあれは……！？」

城壁の向こうには兵士達と冒険者達が総勢で”それ”を相手取っており、”それ”はまだ遥か遠くに居るというのにここまで異様と破壊の気配を感じさせ、目を奪われるとはこういう事だったのかと感心してしまうほど、視線は”それ”に釘付けにされる。

それはそうだ。あんな汚らわしさだけを詰め込んだような代物、悪趣味な小説の中にさえそう登場しない。

喉と目が急に乾きを思い出して、息苦しさが倍増する。

腕は無い。足は無い。顔は無い。個は無い。自由は無い。命は無い。——しかし。

腐臭が有る。苦悶が有る。破壊が有る。憎悪が有る。狂喜が有る。狂気が有る。

その大きさは幅云十メートルはあるはずの大通りの両端を越えて、乱暴に家屋を踏みつけにし、上縁は灰色の空に今にも触れてしまいそうなほど高い。
しかし雄大さは感じられず、感じるのはただただ嫌悪と吐き気。

町の中に踏ん反り返っていたのは、それはそれは巨大な亡者の塊。

――■■■■■■■■■■■■■！！！！！

この位置からでも耳を塞ぎたくなるような絶叫が響き渡る。悲鳴と歓喜と共存し得ない二つの感情が折り重なった不協和音。

なるほど、恐怖の対象としては十分に過ぎる。

〈主……〉
「あれは、何なんだ……？」

漏れた声は霞んでいて、メサイアに届いたのか分からないがメサイアがいつも通り毅然に口を開く気配がする。

〈――違います、主。後ろです〉

「え……？」

予想外の言葉に驚く前に後ろを振り向く。目の前にあったのは当然城の壁と窓。

――の、はずだった。

「穴……？」

ガラス張りの大きな窓がそこには有る筈なのだろう。几帳面に並んでいる窓を途中から切り取ったかのように大きな穴が開いている。

〈主、行きましょう〉

「中に、何か……？」

〈レイ殿の魔力を微弱ながら感じます〉

「レイが！？　……分かった行こう！」

少しだけ、仲間の顔を見ておきたかったと思った事は否定できない。顔を見せて、先程過ぎった悪寒を否定して欲しかった。

部屋の中の暗がりと静けさに僅かに恐怖が過ぎるが、そこは剣の感触を強く確かめて頭の隅に押し込める。ここから見えているのは太陽の光が照らしている部分だけ。部屋の奥の壁と意匠が施された柱が一つ。

躊躇っていても仕方が無い。いつの間にか逡巡していた自分に気付いて、一際強く臆病な自分を締め出すと一息に部屋の中に飛び込んだ。

入ってしまえば、部屋の中にも灯りが幾つか点いていて、むしろ緩やかな空気が流れている。何故恐怖を覚えたか今ではもう分からないほどだ。

しかし、中にレイは居ない。

あったのは誰も居ない影が差した王座に、所々が切り裂かれたカーテンや赤い絨毯。それに。

「あら、可愛いお嬢さん。持って帰っていいかしら?」

見知らぬ、一人の女の子。

悪寒（後書き）

明日も更新すると思います

二人

まるで悲鳴を上げているかのように、また町が揺れた。

”それ”の進み方を一歩と表すのかどうかは疑問ではあるが、それが町の中心に近づく度に町は地面ごと揺らされ、泣き叫ぶ。

町中から沸いて出る死霊はいなくなった。結果として敵を一纏めにする事に成功し、民間の被害に気を配る必要も少なくなり、こちら側も戦力を集中する事ができるようになった。

しかし、”略奪者”が現れて三十分。

一度たりとも、一瞬たりとも、その孤軍の進行を止める事は出来ていない。

「キィラル」
「ラスクか」
「へばってるな」
「何しろ歳でな。早く若ぇのに育って欲しいもんだ」

言葉を交わしているのは、城に近い屋根の上。呆れ気味に化物を

眺めながら、キィラルは疲れたように溜息を付いた。

今はミスラが前線に出てきて指揮を取っているが、それでも圧倒的に火力が足りていない。

単純に威力を足すには、儀式魔法でも行わなければならないだろう。何千の火花を飛ばしたところで、それだけではマッチの火程度にしかならない。

「老体を荒っぽく使いやがって、バチがあたるぞ」

また街道に何列にも並んだ光が点って、一斉に”略奪者”に向かって飛んでいく。

しかし、数多に伸びる骨の”腕”がそれを打ち落とし、何とかそれを潜り抜けた魔法が肉の壁に当たる。

が、余りにも質量が違いすぎる。あれでは城壁に待ち針で挑むようなものだ。何年経ってもあの肉の壁を崩すことは出来ないだろう。とは言っても、キィラルもあれと比べれば竹槍のような物。さして違いがあるわけでもない。

きっちり同じ数だけ人の頭大の雷の玉が、魔法の使い手に向かって飛んでいく。それを地面が盛り上がって壁となり弾き飛ばす。そしてまた魔法を返す。

ジリ貧だ。恐らくこちらが攻撃しなければ迎撃も無いのだろうが、ただ町や城が踏み潰される光景を見ているわけにもいかない。

化物の姿も既に姿形を変えており、体中に目や気孔。腕や足が無数に伸び、しかも未だ変則的な進化を続けている。

「あー…、逃げちまうかなぁ……」

敵の尋常の無さは見るも明らかで、思わず感想が口から零れた。

「心にも無い事を言うじゃないか」
「お前、俺の無責任さ知ってるだろ？」
「ルウトが生まれるまではな」

ラスクの言葉に、キィラルは仰け反る様に半分身を引いて苦い顔になると、一つ溜息を吐いた。化け物の方を見る目はどこか遠く、物寂しげに見える。

「……大人になっちまったなぁ。責任感だってよ。昔の俺だったら考えられん」
「良い事だろう」
「どうだろうな」

再び肩を鳴らしながら、やれやれと重い腰を上げる。思い切り伸びをすると腰と背中がぽきぽきと音を出した。

「まあ、子供は可愛いし、煙草は旨いし、酒は美味い。それだけで大人になった甲斐はあるってもんだ」

「俺も身ぃ固めるかな……」

「五つ若い女にしとけ。先人からのアドバイスだ」

キィラルの奥さんは同い年。思い切り尻に敷かれている事を後悔しているようだが、本気で後悔している訳ではない事もラスクはよく知っている。

「こんな景色の中で死んだ奴は不憫だよな」

対してキィラルは暢気にポケットに手を突っ込み、緊張には程遠い動作でゆっくりと煙草を取り出し口にくわえた。

「俺はこの町が好きだよ」

「そうか」

「いつもうるさくて騒がしくて、気取ったような外観で石の地面が続いてて、今の王女様が死ぬ気で支えて、仕事で駆けずり回って汗を地面に染み込ませまくったこの町が、割りと好きだ」

空を見上げてもみても、町を見下ろしてみても、ただ眺めてみて

も、目を閉じてみても、キィラルが知っている町並みは何処にもない。

「だから、許さねぇよ俺は」

灰色の空が、力無く横たわる死体が、町中に蔓延る異常が、町中に響く怨嗟の声が。町を端から崩していく。

「あれ、サルドなんだろ」
「……ああ」
「馬鹿な奴だ」
「ああ」
「殺す」
「ああ」

ラスクは視線を侵略者――サルドに戻すと、目を細めた。

町中からの敵意を一身に受けながら、サルドはそれに目もくれず歩を進める。ずるずると妄信的ともいえる愚直さでただひたすらに憎悪を抱えて。

「俺が大人だってんなら、あの時説教の一つでもしてやるべきだったんだろうなぁ……」
「考えても仕方ない事だ」

どうしようもない奴だったが、あれも町の一部で、何より手間をかけてやるべき後輩だった。

放棄したのは自分。家族を優先した。それにきっと、やり直しても同じ選択をするのだろう。

町（すべて）を救う為に町（サルド）を殺す。痛みはある。しかし自分にも責任があるのなら、痛みは背負わなくてはならない。

「で？　どう攻める？」

「いつも通りだ。俺が前でぶち殺し。お前は晩飯の献立考えながら後衛」

「あいよ」

話している間に意思に応じてか魔力が体の端端まで満ちていき、口から吐いた空気にさえ魔力が帯び陽炎のように空気が歪む。

「さて」

屋根から見下ろせば、丁度魔法で攻撃を続けていた戦士の列が近くまで下がってきている。当然接近して攻撃する訳もないのでそこからサルドまではおおよそ三十メートル。

「――”芳煙”」

後ろで小さく呟いて自らの力の一部を引き起こす気配。何度も何度も背中で聞いた言葉だ、頼もしくてしょうがない。

口元が思わず緩みそうになっているうちに、キィラルの体の回りとそしてサルドの近く、いや、ここら一帯にまで薄い煙が充満し始める。

小さく口元で炎を出すと、一瞬で煙草が燃え尽きた。準備は終わっている。

屋根を蹴り宙に身を投げる。

そのまま落ちる事はない。炎が自らの体を押し上げ更に強い風が目的の場所まで悠々と体を運んでいく。そのお陰で屋根の上から下りた割にゆっくりと地面に下りた。

既に、敵は目の前。立ちはだかるは肉の壁。

――■■■■■■■■■■■！！！

その咆哮に、比喩ではなく空気が震え地面が揺れる。しかし、その猛りはキィラルに向けられた物ではない。

ここから見るならただの壁だ。余りに大きすぎてキィラルの姿など見えてはいないのだろう。

喧嘩と一緒だ。相手にされないのならばまずはこちらの敵意を示さなければならない。喧嘩の時には思い切り胸倉を掴むか、若しくは横っ面を軽く叩いてやるか。

だから、先ずは横っ面に軽く張り手を。

ズン、と音を立てて化物から伸ばされていた無数の腕が焼失した。

伸ばされた腕は骨の一つ一つを筋繊維のように絡ませた太い物から、鞭の様に細いものまで様々。しかし一つの例外も無くその腕は根元から焼き切られた。

後に残ったのは、炎の壁。いや、それは塊と言った方が正しいのだろう。揺らめく炎が物凄い密度で押し固められ、既に石の地面を炭に変え始めている

そして。続いて三つ続け様に炎の塊が地面を揺らしながら着地する。

質量を持った炎の塊は、しかし炎としての柔軟性を持ったまま壁として屹立している。常人ならばそれを通り抜けることは敵わず、目の前の人外でさえも通り抜けるならただでは済まない。

それが四つ。”侵略者”の背を越え鉄のような強かさを持って壁となり、そして檻を作った。

「一対一（タイマン）だ」

しかし、それでも侵略は止まらない。それはそのはず、”侵略者”から見れば目の前の矮小な存在など今まで攻撃してきたその他大勢と変わりは無い。

耐えて、進んで、殺して、啜る。それだけだ。

しかし。

「お前に言ってんだよ。サルド」

ぴたり、と今まで止まるどころか速度を緩める事さえ知らなかった”侵略者”が嘘の様に前進を止めた。

——そして、一瞬の沈黙の後。

体中の目が、一斉にキィラルへと焦点を合わせた。

それを待っていたかのように、キィラルの口が挑戦的に吊り上がる。

——■■■■■■■■■■■！！！

焼き千切られた腕が地面に捨てられ、また新たな腕が一瞬で形成されキィラルへと迫りそしてまた形ある炎によって灰燼となる。

「もう、終わりにしようぜ」

唯一開いた天井から大量の空気が雪崩れ込み、その空気は長年の相棒の魔力により薄く白んでいる。

それを吸い込みながら、キィラルの炎が増大していく。一階の高さを越え、屋根を越え、そしてサルドと背を並ばせるほどの、

炎の魔人が立ち上がった。

◆

「キィラルさん……！」

立ち上がった炎の壁に目を奪われて固まったのも一瞬、その向こうで誰が身体を張っているかを俺は悟った。

「ガラフド。これは……」

「ミスラ。兵を下がらせよう。少し離れた所に防衛線を張った方が良いだろう」

「……そう、ですね」

炎の壁を改めて見つめて事情を悟ったのか、申し訳なさと悲しさが入り混じったような声を残して兵の方に駆けて行った。

兵に大声で後退を命じる姿を見届けてから、改めてガラフドも炎の壁に視線を戻す。

ミスラは悲観的な声を残して行った。中にキィラルさんがいて、命を賭して足止めを買って出たとか、おそらくそういう事を考えているのだろう。

しかし違う。あの人はそんな人じゃない。

ラスクさんに始まり、ムイリオさんや昔のブレイズロアの人間、と言うよりギルドで活動してた頃のキィラルさんを知っている人間なら皆そうだし、きっとサルドも、そして当然俺もそう思う。

皆腹を抱えて笑いながら、あいつがそんなタマかと。

「あんな化物に負けるかよ」

加えて、今日は後ろにラスクさんがいる。

ラスクさんが居るところでキィラルさんは負けないし、逆もまたそう。

キィラル＝リグズにラスク＝リン。悪名高い二つの名前。

この名前を聞けばチンピラは震え上がり、子供は泣きやみ、商店街の親父どもは笑い、母ちゃん達は溜息を付き、酒屋は儲かり、酒

場は盛り上がる。

いきなり飛竜を討伐してきたり、チーム同士の喧嘩もしょっちゅうだった。そのとき俺は十ぐらいだっただろうか。

その時代の子供は、親父からはあれぐらい強くなれと言われ、お袋に暴力的な人間は駄目だと、それぞれ右耳と左耳で正反対の事を言われながら育った人間ばかりだ。

「あの二人はこの町のヒーローだぞ」

別に特別美形でもないし、正義漢という訳でもない。しかし、きっと世界一の格好付けだ。

自己犠牲なんて不完全な格好良さなんて求める人間じゃない。

「負かす（こえる）のは俺なんだよ」

やっぱりまだ無理だけど、とその言葉を最後に俺は黙ったまま、追いかけた背中の大きさを炎の中に見つけていた。

◆◆◆

何の前触れも無しに、闘技場から見える北東の空が明るさを取り戻した。

このタイミングで花火も篝火も有る訳は無く、それならば間違い無くあれも戦火の一部だろう。

「おォおォ、あっちも派手にやってんなァ」

「……」

「そう、つれなくすんなよ。お前ほど俺を痛め付けた奴もいないんだぜ？」

「病み付きなのか？　なら死ぬまで付き合ってやるからここ出せよ」

当然そんな言葉で状況を打破する事はできず、タウロスはその表情を愉悦に緩ませたまま。

ぎり、と小さく歯を噛み締める音が小さく鼓膜を揺らした。

俺が発した音ではない。

滲み出るほどの歯痒さを漏らしてしまったのは、故郷を地図から消すと宣言された若き王。先ほどはその言葉を一笑に付して平然とした顔をしていたが、胸中には焦りと怒りが渦巻いているのが嫌に成程良く分かった。

ニヤニヤと笑いながらこちらを見る目は余裕で緩んでいて、焦りも手伝い逆にこちらが逆上してしまいそうになる。

「……タウロス、だったか？　お前」

苛立ちを発散させるべく、少し思考を巡らせた後思わせぶりに口を開く。

「ああ？　何だ、自己紹介でもやり直すのか？」
「いや、少し聞いてみたくてな、いいか？」
「どぉぞ。御気の済むままに」

仰々しく一礼して見せる様に青筋を浮かばせそうになりながら、小さな抵抗を開始する。

「お前さ、何で今笑ってられるんだ？」
「なんだと……？」

この檻から三歩。それから先は近寄ろうとすらしない。唯一近づいてきたのは先程結界の上に乗ったあの馬鹿みたいに無邪気な少女だけ。まるで猛獣にでもなった気分だ。

「ああいい。一応聞いては見たがお前みたいな奴はな、そりゃあた

くさん居るんだ」
「……はァ？」
「俺も戦争は経験してでな。戦争の中でも同じでな、大体自分がやってる事に対して色んな反応を見せるんだが、これが大体が三つに分けられる」

三つ。と分かりやすいように三本指を立てて、タウロスに見せ付ける。

何か言う事があるかと少し待ってみるが、少し険しい顔になっただけで何も言う気は無いらしく、ノインからも送られてくる怪訝な視線には手振りで黙っているように伝えて言葉を続ける。

「まず、受け流すのが下手でそのまま悩んじまう奴、そして仕方の無い事終わった事だと割り切る奴。それと最後に」

一つ、二つと指を折っていって残った一本を、こちらを睨みつけている男に向けた。

「自分は狂っているから、とそんな馬鹿みたいな割り切り方をする奴だ」

びしり、とタウロスの額に青筋が浮かび上がる。

「考え無しの馬鹿を気取って。自分の欲望にしか興味が無い狂人を騙って？　獰猛な肉食獣だと虚勢を張って。まあ、お前にどんな悲しい悲しい理由があるかは知らんけどな」

タウロスの姿が近づく。挑発だと分かっているだろうに、小さな拳を握り上げてたった三歩の距離を詰めていく。

「俺にこっ酷くやられただろ？　プライドも傷付いただろう。憤ったりもしただろ。それなのにお前は檻の向こうでしか強がれない」

既にハルユキの口を閉じさせようと、殺意に満ちた視線をこちらに送るが、それでもこちらに歩み寄る速さは酷く鈍間だ。

「俺から見ても、お前は草食動物にしか見えないぜ？　牛野郎（タウロス）」

「――黙ってろ」

怒りに任せた拳が壁を襲う。本気ではないだろう、何しろこいつは草食動物。自分から死にに行く事など決してしない。

「嫌がらせには嫌がらせだよ」

しかし万が一にでも壁は壊させない。それは俺の望む結果と違う。瓦割りの要領で壁にはダメージを与えず、添えた手の平で全ての衝

撃を受け止める。

使うのは随分と久しぶりだが、壁を一枚隔てた上で相手を討つ技も存在する。

我が身を今だけ鉄のバネに。踏み込めない分の力を回転で、ついでに先程受けた衝撃も僅かに上乗せして撃ち返す。体中の力を零から百に、百から零に。

――”裏当て”

一瞬で全身の筋肉が伸縮し、その力を壁の向こうの手の平に叩き込んだ。

「……ノイン！」

腕に引っ張られて吹き飛ぶ男など見届けるはずもなく後ろを向くと、キョトンとしたノインの顔を見つける。俺が顔の近くに広げた手のひらを持っていくと、意味を察したのか強張っていた顔を少しだけ緩ませた。

「私も苛ついていたの。褒めて使わす」

そう言って、とてもハイタッチとは言えないほど強く俺の手の平を引っ叩いた。

「このクソ餓鬼がァあァああアア！！」

「……懲りねぇな」

分かりやすく拳を握ったあの格好から被弾地点を予想するのは容易い。

また、壁に手の平を添えようとして、――しかし拳と手のひらの間に何かが割り込んできた。それは突進していたタウロスの腕をいとも簡単に掴み上げる。

「控えろ、タウロス」

「ちっ……」

手の正体は白髪の女。

目の前の空気が爆発した事に驚きで口を閉ざしていたタウロスが、助けられた事実に気付いて苦い顔に戻り、舌打ちをしながら掴まれた腕を振りほどいた。

「そう苛めないでやってくれ。誰も今の状況にゆとりがあるとは思っていない」

相変わらず階段に座ったままの男から苦笑交じりの言葉が飛ぶ。その妙な落ち着き振りが鼻に付くが、見栄を張るような人間にも見えないので言っている事にも嘘は無いだろう。

「そんな事はどうでもいい。ただの挑発だよ。あわよくばここを出して、お前等を縊り殺させてくれないかとな」

敵意と悪意をふんだんに盛り込んだ視線を向けるが、しかし今度もまた横から割り込んできた人間に邪魔をされる。

割り込んできたのはやはり、金髪の男と同じような軍服を着た白髪の女。

「殺しますか？　この男」

「閉じ込めてばかりはつまらないとは私も思うが、腹心殿から絶対に好奇心を出すなと釘を刺されていてな」

ハルユキの殺気に応じるように、ギシリと空気が軋む。恐らく殺気が魔力として漏れ出して、空気を侵しているのだろう。

その機微などは全く感じる事は出来ないが、どれだけ人から離れた力かは冷えていく空気が教えてくれる。

町を消す、と普段の生活で使うなら正気を疑われるような言葉も、

頭の中で想像される惨状の中でならそれも酷く鮮明な現実感を帯びていた。

「タウロス、アリエス、スコーピオに、……オフィウクスだったか？」

今まで頭の片隅に引っ掛かっていた疑問を口に出す。

突っ立ったままで、何の工夫も無くただ口にしただけだが、いつもとは違う空気が口調に滲んでいたのか自然と闘技場内視線がハルユキに集まる。

「お前等とジェミニとの関係は？」

短く告げられた質問に、各自がそれぞれの理由で驚きを表した。ノインはこのタイミングで顔見知りの名前が出て来た事に。

そして周りの敵達は一様に、謎掛けの答えを出題する前に言い当てられた様な感心を驚きに混ぜ込んだ顔でだ。

「……いや驚いた。それはこちらから言って驚かせるつもりだったのだが、ジェミニから聞いていたのか？」

「違う。そんな分かり易い名前してればいやでも気付くだろう」

「……何だと？」

その言葉に、同じ種類の表情をしていた敵の中で、その中心である金髪の男だけが更に表情を変えた。

常に浮かべていた微笑は消え、言葉の意味を疑う――いや、有りもしない言葉の真意を探しているかのように目が細められる。

そしてどういう結論に達したのか、男は耐え切れないかのように吹き出してそのまま小さく笑い出した。今までのどこか人間離れしたような表情とは違い、まるで昔を懐かしむかのように朗らかに。

それは、身内の人間にも中々見られないものだったのか、一部を除いた敵の人間すらも、男の様子に凍ったように顔を強張らせて驚いた表情を見せていた。

「……いや失礼。まさか星座（そんなもの）を知っていたとは思わなくてね。知っていたならばさぞ滑稽に映っただろうな。こんな幼稚な名前を付けて回って」

耐え切れないとばかりに、拳を口に当てて口の中で小さく笑いながら、それでも漏れ出した感情は隠しきれない。いや、感情的になっている自分を面白がっているようにも見える。

「まあ習慣――、いや名残のような物だ。ジェミニも自分の名前は大切にしていただろう？」

実に興味深いな、と聞こえるように呟くと、男は先ほどまでよりも少しだけ感情を滲ませた微笑を顔に浮かべた。

「どうかな、私達と一緒に来る気は無いか？」

「ない、死ね」

その答えに、男が小さく自嘲する声と、俺の後ろから聞こえたくすくすと笑う幼い声が重なった。

「こっ酷い振られ方をしたね。と言うか何でも手に入れようとするのはやめてくれる？　あんなの身内に入れたら共食いおこるよ」

「来ていたか。貴殿の懸案は片付いたのか？」

「粗方ね。メインがまだなんだけど。その前にちょっと僕も彼の顔を見ておきたくて」

闘技場の入り口からやれやれと子供らしくなし草で肩を竦める子供は見覚えがある。桜の森でふざけた逃げ方をやってみせた子供。

「久しぶり、って言っても一年も経ってはいないけど。覚えてるかな？」

「……生憎まだ痴呆は始まってないんでな」

兄貴、九十九に続いていつか殴ると決めていた人間の一人だ。忘れるはずも無い。

こうして改めて見てみれば、こいつも普通の人間ではないのが直ぐに分かった。そもそも絶対に見た目相応の歳ではない。それだけで旧時代の常識を持ち越している自分には大事だ。

（数えて……四人か）

小さく舌打ちをして状況の悪化に心中で悪態をつく。

暫くすればあのスコーピオという女も帰ってくるはずだ。五人がかりだから倒せないと言う事は無いが、助けに来た人間が近づけなくなる可能性は非常に高い。

「さて、彼に顔も見せたし僕もさっさと自分の懸案を片付けてくるけど、君もまだ帰らないの？」

「ああ、もう少し待たせてくれ」

男の言葉を聞いて子供は空を見上げた。視線の先には太陽とその中に黒い塊が未だ肥大を続けている。ここから見ればその黒い塊は人の頭大にしか見えないが、恐らく実際の大きさは既に人の体の大きさなど優に超えている。

（嫌な感じだ……）

じとりと背中が薄く汗をかいている事に気付いて小さく舌打ちをする。

この汗は嫌な雲行きから、と言う事もあるが、理由の大半を占めているのはそちらではない。

どうやら、ハルユキは閉じ込められると言う事が少し精神障害（トラウマ）になってしまっているらしい。

この結界の中だけ空気が重く呼吸がし辛く感じ、拳を握りなおすたびに汗の湿りを手の平に感じる。懐かしい心因的ストレスが蛇口で流し込まれるかのような勢いで増えて行くのも感じる。

壊したい。目の前の壁を粉々に、いや、粉末にまで磨り潰して外の空気を思い切り肺に入れたい。

繰り返して言うが問題があるわけじゃない。

永遠にこんな所に閉じ込められるはずは無く、空気も有り、一億年を耐え切った経験は伊達ではない。

「……ノイン。大丈夫か」

「？　ええ、大丈夫」

不思議そうに首を傾げたノインを見て苦笑する。訳が分からないのか少し不機嫌な顔でそっぽを向いたノインには申し訳ないが、後で説明すれば分かってくれるだろう。

もし、此処に独りだったら（ノインが居なかったら）、怒り狂って暴れだしていたかもしれないと。

「うん、まあ、もう少しみたいだしね」

「……いや、もう待つのは終わりのようだ」

空を見上げて言った子供の言葉に呟いた男に、ふと違和感を覚えた。会話というならば繋がっているものの、どこか意味が食い違っているような、そんな感覚。

視線を上げ男に目を凝らして、その思いが確信に至る。男の視線は上には微塵も興味が無いように床に向いていて、”待っている”のは間違ってもあんな得体の知れない黒い何かではない。

ならば何か。まさかあれとは違う企みをまだ隠し持っているのか。

そして、気付く。

闘技場に向かって疾走してくる、覚えがある気配に。

「――来た……」

気付いたのは、その気配に覚えがあるのはハルユキだけではないらしく、一瞬遅れて男が微笑を携えたまま、慌てる様子もなく口を開く。

「レオ。数少ない友人が来た。結界を開けてやってくれ」
「……いや、もう破られた。来るよ」

その言葉の直ぐ後。

この場に殺気に満ちた存在がもう一つ、いつの間にか闘技場の入り口に佇んでいる事に気付いた。

ハルユキには嫌というほど見覚えがある顔。しかしこれまでに垣間見せた事もないその表情は恐らく隣の男の方がよく知っている顔なのだろう。

二人の――、金髪の男とジェミニの視線が交わった。

結局の所、ジェミにとの関係は聞けなかったが、しかしジェミニの表情が全てを補って余りある程色濃く表している。

ここからでも分かるほどに奥歯は固く噛み締められ、笑い皺ができるほどいつも笑っていた目は見開かれて、その奥では一つの感情に染まった瞳が男を見据えている。

憎悪を溜めて溜めて、余りに憎すぎて表情を無くしてしまったかのような顔。その顔が憎しみの捌け口をようやく見つけて、爆発する。

それは流星のように疾く、矢のように鋭く。

「――ッレオォオオオオオッ！！！！」

「今はオフィウクスだ。ジェミニ」

どれだけ魔力を込めているのか、周りの空気を歪めるほど魔力を放出しながら突き進む。恐らく自転の勢いを体にその勢いを拳に乗せれば岩を砕き鉄を穿つだろう。

しかし、男は余裕の顔を崩さないまま微動だにしなかった。

その代わり、男を庇うように躍り出るのは白髪の女。突然の闖入者にも一切動じる事は無く、自分の才能の一端を呪詛に乗せて形に

する。

魔力に当てられて、女の眉間から左頬に浮かび上がったのは、血と冷たさを連想させる〝鉄〟の文字。

「――〝鋼鉄の愚女（アイアン・メイデン）〟」

一瞬でしわがれていた白髪が、光沢と強かさを持つ銀色を手に入れた。その密度と重さで石畳に罅が走る。

「――ッ！！」

響く轟音が石床に広がる罅が唸る空気が、ジェミニの攻撃の凄まじさを語る。しかし、女は女でその流星のような一撃を耐え切ってみせる。

しかし勢いは殺しきれず、足元の地面を削りながら押し切られ、壁に叩きつけられそうになったところで後ろから伸びた手に支えられた。手の主は先ほどから階段に座っている金髪の男。

「ありがとう、アリエス。下がってくれ」

「いえ、この男は危険です。私が」

言いながらも、女の口の端からは赤い筋が顎まで伝っている。その原因である男はいつもは笑っている糸目を開いて、茶色の瞳で二人を見据えている。

その様子はいつもとは一線を画していて、漏れる吐息にも殺意が飽和していそうだ。

しかし、女の鉄の体を傷つける事は敵わず、弾かれたジェミニの右拳から血の糸が引いて地面に赤い線を描く。

「――――」

いや。

弾かれたのではない、引いたのだ。接近は一瞬。右拳を引いて代わりに左の掌が女の腹に当てられる。続いて体を引き絞りながら左足を地面に叩きつけ、石畳を叩き割る。

見覚えがあるかと聞かれれば、余りに知っているその動き。

――”裏当て”

ただの見様見真似。力も速さもまだ拙い。しかし、決死の一撃が軽いはずも無く、女の口から赤い液体が吹き出しその場に膝から崩

れ落ちる。

ジェミニの視線は、崩れ落ちた女の身体を悠々と跨ぎ再び金髪の男の視線と重なる。

「……レオ、ずっとお前を殺したかった」

夜の闇にはそぐわない太陽の下。

笑顔も妙な口調も剥がれ落ちた男が、自らの殺意を曝け出した。

牙剥く牛と、固い羊（前書き）

ｐｃ直りましたので更新をば

牙剥く牛と、固い羊

「――――」
「――――」

睨みあいは一瞬。

片方は憎悪と殺意に濁った目線、片や郷愁と喜びが混じった目線。

その二つが相容れる事はなく、全く対極の感情で戦意が交差し魔力が膨れ上がった。

先手はジェミニ。時間の流れにまで干渉し、その体を少しでも早く敵の懐まで。拳はいつの間にか固く握られ振りかぶられている。その動作に一秒の半分の時間すらかかってはいない。

しかし、対する男もその動きをしっかりと目で追って、ゆったりと手を掲げた。

向かう掌はジェミニではなく空に向いている。

「ちぃっ……！」

しかし、それにも関わらずジェミニは飛びずさって距離を取った。

傍から見れば臆したかと揶揄されるだろうが、そうではない。

近づくだけの行為にも最大の警戒を。一瞬で収束した男の魔力は、迂闊さ一つで容易くこの世を離れる事になる事を物語っている。

「ジェミニ。私はお前と戦う気は無い」

「何だと……？」

改めて攻める機会を探していたジェミニが、その言葉に顔を上げた。

「フェアじゃないだろう、今の私とお前では」

「……知るかよ。お前がどうしようと俺はお前を殺す。過程なんてどうでも良い。お前が死ねばそれでいい」

ジェミニの言葉は想定していた事なのかそれとも他に思う所があるのか、自嘲するように笑うと男はジェミニから僅かに目を逸らす。

「何、退屈させる気は無いさ。――アリエス、タウロス」

決してこの集団は団結が取れているというわけではない。むしろ個々がばらばらに動いているようにさえ見える。しかし一人一人が

どうであれ、この頭となっている金髪の男は良く配下の人間を理解しているのだろう。

名前を呼ばれただけで二人が直ぐに戦闘体勢を取ったのは、その賜物だと言える。

片方は確かに忠誠心から主の言葉を汲み取って、もう片方はただ原始的な衝動に身を任せて。

動機は違えど結果は同じ。多少やり方は歪ながらも統制だけ取れていればいい。

「さて、元はと言えば俺ァお前を殺す為にこんな場所まで来てんだ。ちょっと味見させろや」

「足を引っ張れば貴様を殺すぞ、タウロス」

片方は愉しげに首と拳を鳴らしながら、もう片方はただ自らの殺意を加速させながら身体を起こし。――一瞬で両者がその姿を眩ませた。

「――――」

ジェミニも阿呆ではない。後ろから手練が二人も迫ってきていると気付いた途端に、金髪の男への殺意を収め、タイミングを合わせ

て後ろ回し蹴りを叩き込んだ。

不意打ちのつもりで警戒が薄かったタウロスは防御こそ出来たものの回避は出来ず、蹴りの勢いで数メートルの後退を余儀なくされる。

そして、もう一人。ジェミニはタウロスを退けた蹴りの勢いをそのままにその場でもう半回転。再び回し蹴りを鋼鉄と化した女に向ける。

あの能力に大して半端な打撃は意味が無い。

よって狙われたのはその足元。

剃刀のように鋭い足払いが、女の体を宙に浮かせ、その身体に掌を添える。

そして、また衝撃がその身体に叩き込まれる。ゴボッと女の口から尋常ではない量の血が吹き出し、これもまた数メートル吹き飛ばされて地面に堕ちた。

「……終わったぞ」

「流石だねぇ、ジェミニ」

聞こえた無邪気な声に、ジェミニが鋭い目のまま視線を向けた。

視線の先にはからからと笑う子供の姿。

言葉もなく、今度はその子供に向けてジェミニは拳を握る。

「アリエス。僕も加勢してあげようか？」

「――貴様は下がっていろ。寄生虫」

平然とした声に今度は後ろを振り向くと、またあの女が立ち上がっている。

その足取りにも表情にもダメージがある様には見えず、口の端から顎に走る線がなければ、今までの攻撃が全て夢幻だったのかと思えるほどだ。

「強いな貴様」

まるで痛みなど感じていないかのように、平然とした表情で目だけは殺意をより増幅させている。

「だが私も弱くはない」

ゴキリ、と不適に首を鳴らす動作からか、その格好からか、ジェミニとそう変わらないほどの背丈のせいかとても女には見えない。

「さて、殺し合いだ」

女の言葉に隠れるように、ピシピシと何かが罅割れる音がしている事に遅れて気付く。

（……何だ？）

周りに目を凝らせば、辺りの石床が一斉にひび割れ始めていた。同時に足元にかすかな振動を感じる。

「跳べ、ジェミニ！！」

――瞬間。

石床を捲り上げて地面から黒塗りの刃が、天を衝いた。

しかし、その刃はジェミニの服の裾を僅かに切りつけただけに終わっている。ハルユキが飛ばしたその声のお陰で、一瞬だけ早く反応できたのが幸いだった。

声に行動を委ねて考える前に地面を蹴り、空中に身を投げる。

しかし、変わらず地面は足元にあった。

「ち……」

いや、追って来たのは地面ではなく、その上に重なっていた床石だけだ。しかしそれでも決して簡単に持ち上がるようなものではない。

更にそれが目的だったのか、自分の下半分の視界を奪われ、同時にて敵影を見失う。

間髪入れずに再び石畳がピシピシと悲鳴を上げる音。気付きはしたものの、身体は空中だ。ただやって来る物を待ち構えて臨機応変に対応するしかない。

一瞬で周りの空気さえも落ち着いて重くなったかと錯覚するほどにに、急激にジェミニの集中力が高まる。

迫る石畳。ぶつかる速さではない。しかし同時にその石床に切れ込みが入る。下からの攻撃。否。自分で障害を作っておいてわざわざ壊すわけが無い。よって――。

――先ずは右。

「――ハッははははァ！！」

迫るのは空間が割れたような大顎。覗く口腔からは腐臭に似た異臭が漂い、吐き気を催しそうだ。

手の平で軽く空気の流れを操作して、爆ぜさせる。推進力により身体を回し上顎に上から思い切り踵を振り下ろした。

顎は空間が分かれているその辺縁だけが物質化しているようで、外から触っても裂け目は鋭く牙と化していて、間を狙ったと言えど多少は足に傷が付く。

しかし、その代わりに大顎は強制的に閉じられ、その先にいた男の姿が視界に入る。男もほぼ同時にこちらの存在を捉えて、また大顎を出現させた。

「何……？」

しかし、出現したその場所はジェミの近くではなく、タウロスの足元。

疑問に一瞬だけ思考が止まったジェミニを愉しそうに笑いながら、タウロスはその大顎を思い切り蹴り付けた。

空中に居たはずのタウロスの身体が力を得て、ジェミニのいる高さまで一直線に飛んでいく。

驚きはあった。タウロスには動きも膂力もある。しかしその殴り方が素人だ。敵を壊す事しか考えていない真直ぐすぎる拳。

「――っし！」

敵が伸ばした拳と腕に隠すように、拳を振り抜く。相手の腕と自分の腕で十字を描きながら肩口からその頬へと拳を叩き込む、所謂クロスカウンター。

無防備なタウロスの頬に拳が減り込む。

その、一瞬前。

タウロスの”頬”が”大顎を開いた”。

「な、に……！？」

拳を寸前で止めるが、しかし完全には間に合わない。耳の傍にある口の端が、小さく吊り上り喜び勇んでその牙を交差させた。

ミヂ、と小さく肉が抉り取られる音が否応無く鼓膜を揺らした。

「っ……」

持っていかれたのは拳の先となっていた指の背の薄皮一枚。その一片でも飢えの代わりになるのならと、美味しそうに頬の顎が咀嚼して嚥下する。

しかし、そのおぞましい行動にジェミニは怯みも一瞬。

「――首と交換だ」

あくまで冷静に、嚥下した瞬間を狙って首筋に蹴りを叩き込んだ。

足が触れた瞬間、タウロスの首がまるで刃物にでも当たったかのように裂け、首の半分ほどまでを断ち切ったところで慣性が追いつき錐揉みさせながらタウロスを吹き飛ばす。

（一人……）

気は抜かない。もう一人は未だ間違い無く健在だ。

直ぐに残るもう一人の姿を探して、余りに分かり易いその姿を地上で見つけた。

黒い渦。

その黒い渦はまるで生きているかのようにうねりを繰り返しながら増殖していき、その度に石床が捲れ湿った柔らかい地面が外気に晒される。

「――”鉄柩（リッサ）”」

最終的に為した形は、黒い立方体に直方体、そして綺麗な正四面体。そのそれぞれがまるで中で生きた人間が暴れているように動いている。

一目で分かる。あれは盾であり刃であり鈍器であり足場であり。ありとあらゆる人の殺し方を可能とする武器だ。

「……砂鉄か」

女が軽く跳ぶとその下に潜り込む様に立方体の塊が潜り込んだ。そしてそのまま軽やかに宙に浮く。

同時にジェミニは地面の上へ着地した。

瞬間。

何の口上もあるわけは無く、何の脈絡も無しに黒い直方体がそのまま空を転がってくる。

巨大な体積を感じさせないほど動きは速いが、避けられないほどでもない。身をかわそうとして、そこで初めて何処にも三角錐の黒い塊が無い事に気付いた。

そしてその直ぐ一瞬後その在り処に気付く。紙の様に薄く形を変え地面の上を這うようにこちらに接近している。

細かに振動と移動を繰り返していて、恐らく触れれば皮は裂かれ肉は抉られるのだろう。

「”閉”」

言葉に呼応するようにその黒い地面が上空へと噴出し壁を作り、それは結果的に檻となる。

「”封”」

そして唯一外と繋がった上空から、残った直方体が唸りを上げて砂の檻ごと地面まで叩き潰した。

「逃げてるよ」

女の耳に愉しそうに忠告する子供の声が入り込み、同時に目の端に何かが走りぬけた残像を捉える。その影を追えばその逆で上で下で後ろで前で。縦横無尽に影が通り過ぎる。

「ちっ……」
「ひゅ～ひゅ～」

馬鹿にしたように子供の口笛に苛立たせながら、女は全身を鉄鋼化。いつでも迎撃できるようにと影を追うのを止め、ただ受けの姿勢を保つ。

しかし、気付く。

その姿が捉えられない訳ではなく、完全に消えている事に。

「意趣返しだよ、アリエス」
「……下か」

その言葉が無くても気付いていた、と言うほどのタイミングでアリエスが反応する。砂鉄をすべて足元から顔まで続く一直線上に。

そしてその防御も完全ではない内に、地面の下から当たり前のように拳が突き出した。

「甘い」

傍目から見れば何の工夫も施しているようには見えない裸拳。

「なっ……」

しかしそれが、地面を抉り砂鉄の盾を次々に砕いて、敵を穿とうと迫ってくる。その簡潔さは美しさほど感じるもので、しかし最後の砂鉄の盾を砕いたところでその拳の勢いは完全に殺される。

結果的にジェミニの攻撃もアリエスの防御も死に、結果的には目の前で再び対峙した結果となった。

それでも決して両者が同じ条件とは言えない。

奇襲された側とされる側で準備のし様はまるで違う。加えてアリエスが攻撃を加えるのに砂鉄を操らねばならないのに対して、ジェミニはその攻撃の簡潔さ故にもう一つの拳を握るだけで良い。

「退かないなら死ね」

その拳は振りかぶられ、女の頬へ減り込み、力を集約した一撃は鉄の身体といえど軽くない傷を与える。

――はずだったのに。

「ん？」

間近で女の顔を見たジェミニの拳が、女の顔の寸前でピタリと止まる。

「……君、女の子なん？」

「馬鹿にしているのか貴様」

砂鉄の攻撃をまともに喰らい、ジェミニは呆気無く吹き飛ばされた。

◆

◆

◆

吹き飛ばされてこちらにごろごろと転がってきたジェミニを見て

言うべき言葉は、そう多くは無かった。

「……馬鹿かお前は」

発した声に反応して、ごろんと身体を転がしてジェミニが今見つけたかのようにハルユキを見て驚いた顔をしてみせた。

その身に纏った空気が、拍子抜けするほどいつも通りで、先程の鬼気迫った表情は何処に言ったのかと突っ込みたくなる。

「いやね、女の子の顔殴るんはなぁ、ちょっと抵抗あるというか、いやうん無理」
「お前腹に思い切りかましてただろ」
「あれはハルユキの技やから、お前の責任」
「て言うかお前。やっぱりその口調素じゃないのかよ。まあ元から不自然だったけど」
「ワイのこれは不自然が自然なんよ」

調子の良い言葉に頭を抱えながら、しかし少し安心してしまった自分が居るのも否定は出来ない。何しろこちらが目に入らないほど怒り狂っているのかと思っていたところだ。

「お前この結界解除できるか？　壊すのは無しの方向で」
「……出来ん、事は無いやろうけど。調べて解く間にあいつらが大人しく座っといてくれたらの話になるわな」

「……そりゃそうだ」

ハルユキが先程壁の中から攻撃を仕掛けたせいか、敵は近寄っては来ないがジェミニがこの壁をどうにかしようという動作を見せればたちまち襲ってくるだろう。

それで無くともじりじりとこちらににじり寄ってきているのだ。

「何でアイツ生きてんねん……」

迫ってきているのは二人。

先程の言葉を侮辱と受け取ったのか、目の中の殺意をより一層濃くした鋼鉄の女と、そして、半分以上が千切れた首を無理矢理抑え付けて繋げている男。

ほんの数秒で元通りにくっ付いた首の稼動を確かめるようにゴキゴキと鳴らすと、にぃ、と愉しげに笑った。

「あれは、中々死なんぞ。縛り付けたほうだ速いだろうな。お前等は魔装具とやらがなければ魔法使えないんだろ？」

「女の子も縛るんか？」

「それも嫌か」

「……いや、望む所」

「変態だな」

さて、と最後の言葉と同時にジェミニの顔から笑顔が消える。相手は二人。しかもまだ余裕を持って戦いを観戦している敵ももう二人。

実際問題として、ジェミニにダメージを与えるのは困難だ。

打撃も斬撃も火も風も、全てを受け流してしまうのだ。ダメージを与えようとするならば、何らかの形でジェミニの処理能力を超えなければならない。

力でも速さでも手数でも、なんならば不意打ちでもいい。受け流しは全自動ではないので、確実にダメージを与える方法は存在する。

しかし、あの二人ではその壁を破る事は出来ないだろう。

だからこそ、もう一人。もう一人誰かが居てくれればジェミニが時間を稼ぐか、その誰かが時間を稼ぐかしてくれれば簡単に状況は覆る。

長かったが、好転は一切ジェミニの登場以外何一つとしてなかったが、それでもあと一手で解放される所まで来ているのだ。まあそのもう一人の条件がかなり厳しい事も承知しているが、心当たりはある。

理解も出来なかった数式が、上手い具合に解けて解答までの道筋が見えてきた気分だ。自然と身体にも力が入る。

そんな中、音も無くジェミニが目の前から掻き消える。とほぼ同時にタウロスが顔の横で交差させた腕に勢いが乗った右足が叩きつけられる。

「あの男……。さっきはあんなに強かったかしら？」

「……なに？」

ノインが掠れた声で問いかけてきた疑問に思わず疑問で返す。

改めてジェミニと渡り合う男を客観的に眺めてみて、ノインの言葉が誇大どころか少し物足りないほどである事を知る。

元々そういう能力なのか、それとも何か飛躍的な成長を促す何かがあったのか、

ハルユキがあしらった時にはあれ程の素早さも力強さも無く、雑魚とは言わずとも何人居ようが問題が無いレベルだったはず。

今、もしあれが十人居るならば、噛み付かれるかもしれないと、そう思えるほどには。

「でも、それ以上に強いのね、貴方達は……」

――それでも、ジェミニは負かすにはまだ足りない。

そもそもジェミニは今この場を除けばタウロスを見た事さえないはずだ。

今まさにその能力を膨れ上がらせているとしても、それは実力を隠しているようにしか見えず、その可能性を鑑みて戦っているジェミニには実際の戦闘力向上以外に意味は無い。

そして、戦闘力が上がった男と拳を合わせながら、女性相手に決め手を欠きながらも、優勢に事を運んでいる。

だから、問題は日和見を決め込んでいる残る二人。

確かに負ける事はないだろうが、圧勝できる訳でも、無傷で勝てるほどでもない。恐らく傷を負った状態では残った二人を相手取る事はできないだろう。

子供と金髪。そして、今はどこかに消えたあの娘も。あれらは一対一で、そして出来るなら確実な算段を用いて戦いに望むべきだろう。

それはジェミニも分かっているのか、時々金髪の男を憎々しげに睨みながらも今は回避と防御に集中している。

「誰か待っているのか？」

ふらっと、いつから近づいていたのか視界の端から金の髪が姿を現し、ハルユキのすぐ隣に並んだ。

並んだと言っても当然壁は隔てており、先程タウロスを吹き飛ばした距離とほぼ同じだ、当然攻撃の手段はある。その事は間違い無く分かっているだろうに、男は無警戒にすら思える余裕を保っていた。

「レオが受け継いでから益々町の結界は強固になっている。誰かを待つ事に意味があるとは思えんが」

「……」

改めて空を見上げてみても、魔力とも魔法とも縁が無いハルユキにはその結界とやらを見る事も敵わない。

結界の有無などやはり分かりはしないが、しかし、外と切り離されているのは感じる事が出来た。

人の死の臭いも、死体と爆煙の臭いもしない。外の気配も、音も希薄だ。今はジェミニたちがけたたましい騒音を撒き散らしてはいるが、少し離れたここではその騒音の奥にどこか白けたような静寂を感じる。

「みたいだな……」

ハルユキでは力尽くでしか壊す方法は無いだろう。すり抜ける方法も華麗にかわす方法も知らない。

しかし、そういう事に長けている奴は知っている。

――とん、と軽やかに地面を蹴る音が聞こえた。

それはジェミニが地面を滑るように移動する音とも、タウロスが食欲を持て余して歯を鳴らす音でも、アニエスが殺意を砂鉄に混ぜ込む音とも違う。

もっと涼しげに。軽やかに、皮肉気に。

雪駄か草履かよくは判らない履物で地面を強く擦る音が後に続いた。

きっとまだ自分しか気づいていない。しかし、妄想でも幻聴でもないと確信を持って断言できる。確かにこの闘技場を外界と分かつ壁は大きく厚いのだろう。あの女が仲間意識を持っているとも思わない。

しかし、あれは負けず嫌いで性格が悪いのだ。

ハルユキが下手を打ったと知ったのならば、嬉々として貸しを押し売りにやってくる。絶対、などとは言えないが、少なくとも逆の立場ならハルユキもそうするだろう。

「……”普通なら”などと、君達とは無縁の言葉を前提に使っても仕方なかったか」

隣の男も気付いたのか、まるで自分の迂闊な言葉がその存在を引き寄せたかのような言い回しで溜息をつく。

とん、とん、とん。と男の言葉を聞き流している内にも力強い愛音が連続で鼓膜を揺らす。

そう。ジェミニもここに辿り着いた。ならば、あれがここに辿り着けない理由も見つからない。むしろ、これ以上遅れるはずもなかったのだという思いすらある。

その足音が一向に近づかないのは、まさかその場で地団太を踏んでいるわけではなく、恐らく彼女が地面とは直角に走っているから。

おおよそ四歩。

それだけで闘技場の反り高い壁は踏破され、彼女の姿を白日の下に押し上げるだけの足場と化した。

「彼女は陽の下よりも月下の方が似合いそうだ。無粋な事をしたようだ」

少しばかり気障ではないかとも思える男の言葉はしかし、濃い灰色の空を背負った吸血鬼には少し物足りないほど。

風に靡く黒い髪は夜の闇と同じ色だが、決して溶け合って境界を無くす事はないだろう。

黒い瞳も藍色の着物も同上。夜に住みながらも、闇に溶ける事は決してない。

「……やっと、来たか」

皮肉混じりに言ったハルユキの言葉は、込み上げて来る歓声を押し潰すのに力を入れすぎたせいか、口の中で聞こえただけで誰の耳にも届いていない。

しかし、まるでその声に応えるように彼女の体が空中に飛び出した。

わずか一歩で客席の中腹を抉り、二歩目で舞台の縁に足をかける。

そして、最後により一層強烈に闘技場の縁が蹴り飛ばされ、日が指す舞台には似つかわしくない筈の吸血鬼が躍り出た。

「レイちゃん――！」

ジェミニは待ちかねていたかのようにその闖入者の名を呼び、それ以外の人間は一瞬動きを固まらせる。

勢いのわりに静かにレイは舞台へ下りた。

ゆっくりと闘技場を見渡す様はいつものように悠長で憎たらしく、しかしその顔に何時もの微笑は無い。

牙剥く牛と、固い羊（後書き）

ジェミニが女の子殴るのに不自然さを感じたらこうなってしまった…。

ちょっとリアルで忙しくて、更新は週一で許してください。

暗転

――ユキネが城に着く十五分前。

無数の剣群となり飛来する血の色の刃と、それを迎え撃つように、ヴァーゴの足元から鋭利に伸びた影が交錯する。

片や人外の力を纏った紅の剣。片や平面から生まれ出た故に極限まで研ぎ澄まされた暗い刃。均衡すらせず、すれ違うように剣戟の音を残した後、そのどちらも敵の身に届く事無く空気に霧散する。

――〝影絵〟

呪詞に応じて、女の影が新たにこの三次元（せかい）に形と質量を持って誕生する。

刃、巨人と来て、生まれたのは女そのもの。女の黒尽くしの格好が後押ししてそれぞれの真偽は間近で見ても分からないだろう。

それこそ部屋中に女と完全に姿形を同じくした木偶（デコイ）が無数に量産

され、――しかし次の瞬間には、それもまた無数の切っ先に貫かれ形を失くし、空気に溶けていく。

「ぐ……っぎ……！！」

的確に木偶を狙い打った剣は、一寸の狂いも無く腹部の中心に突き刺さり、そしてそれはその中に紛れ込んでいたヴァーゴ自身も例外ではなかった。

そして、ほんの一瞬怯んだ隙にヴァーゴの懐の内で殺意の気配。

次の瞬間には、体に尋常ではない衝撃がぶつかり体が成す術も無く吹き飛ばされた。追撃するように地面に倒れこんだヴァーゴの首元の床に剣が突き刺さる。

しかし、その剣の横を影となった体がするりとすり抜ける。同時に数体の影の巨人が足元からせり上がり、拳を振るった。

「……ふん」

それを一瞬で見渡した後、レイは腕を横に振った。その僅かな動作で幾多もの剣が飛び影の巨人を壁に縫い付ける。

その間に今度は女の足元の影がそのまま伸びてレイの足元に接近する。もし捕まれば足元から影に沈むのか、それとも動きを縛られ

てしまうのか、どう考えても良い想像はとても出来ない。

「くっ……！」

しかし、結果として触れもしないのだから、そんな妄想には意味は無かった。

一方的な展開が続いている。その一因となっているのが、身体能力が余りに違いすぎる事。

ゆったりとした動作から考えても決してレイは全力で動いていると思えないが、それでもその動きはヴァーゴがギリギリ目で追えるほどの速さ。

「ちょこまかと……！」

下調べは行っていた。信じ難いがヴァーゴと相対している女は吸血鬼。童話の中そのままの生き物だと言うならば、常軌を逸した生き物がどれだけ常軌を逸した行動が可能だろうと驚きは無意味。しかし、それは納得に繋がる訳ではなく、ただ理不尽による苛立ちが募るだけ。

巡らせるヴァーゴの思考の中、レイの姿が視界から消える。何の事は無い、思考に意識を傾けすぎた事と、ただ遂に目が動きに追いつけなくなっただけ。

しかし、それにより被る実害は”だけ”では済ませられない。

「八回目」

ズルリ、と、まるでそこから生えたかのようにゆっくりと、胸から剣先が飛び出した。

「お……ッぁ……！！」

決して演技ではありえない生々しい喘ぎを漏らしながら、それでも女のは腕を振り自分の体の下から影が伸ばす。

黒塗りの刃のようなその影は研ぎ澄ます必要も無いほど薄く鋭い。その分切れ味は申し分無く、体を二つに裂けば痛みに気付かせる事なく絶命させる事も可能だろう。

しかし、その影に脅威も恐怖も感じないかのようにゆったりとした動きのまま疾風のような攻撃をすり抜けて、紅い剣を手の中で煌かせる。

その剣筋に躊躇いは無く、投擲された剣は吸い込まれるようにヴァーゴの首のすぐ側に突き刺さった。

「こ……ッの……ッ！！」

自分の命が見逃された事に安心してしまう一瞬の後に、ヴァーゴはその顔を怒りに歪ませ影を振るう。

しかし当たらない。

壁のような物量と、その速さをもってしてもレイの体はまるで指の間をすり抜ける水のように掴み所が無い。

「なんの、つもりかしら……？」

一回や二回ならまだしも、命を刈り取られそうになった回数はもう十に手が届く。それにも関わらず、未だヴァーゴはこうして息をして悪態をつけている。

いくら回復力が高いとは言っても不死身ではない。あの女ならば殺す手段は幾らでもあったはずだ。

「……別に同情しているわけではないから安心しろ。しないのではなく、出来ないだけじゃ。無論、お前が死ぬ事に心も痛んだわけでもない」

ぴたりとそこで歩みを止めると、レイは何の危機感もその身に纏わずに話し出した。

「他に首謀者が居て、恐らく我等の鬼札も同じ場所に。ならば雑兵（おぬし）の相手をする意味も無いだろう？」

憎々しげにレイを見つめるヴァーゴは、そこでようやく気付く。

「――会話で時間を潰せるのなら、別にそれでも構わんのじゃよ」

その目に。相対しているはずの女の目に、意識が灯っていない事に。

「――ッ！」

「おや、ばれたか」

激昂に駆られて、影の刃が振り乱れながらそれに殺到し、レイの体はそれを避けようともせずまともに受け止めた。五体が十分割されるほど細かに切り刻まれ、しかし、手応えは薄い。

その内部は表面ほど精巧に作られておらず、血の塊となってそれは地に落ちた。

「貴様……！　今何処に……！」

「何、まだ壁一枚挟んだ先じゃよ。離れるのはこれからじゃ」

床に散らばった血の塊は、ただの血黙りに戻ることは無く、元の形に戻る事こそないものの未だ主の声を中継する。

「しかし、また妙な結界があるようじゃのう。今度はあれを解かねばならんのか」

ふむ、と新しい頓知噺でも持ちかけられたように愉しげに唸ってみせる、その様子が目にも浮かぶようだった。

目指しているのは闘技場。他に結界を張っている場所なんてそこにしかありはしない。まさかこのタイミングで町の外に出ようとする訳も無い。

「――さて、ならばまた一つ力比べといこうじゃないか」

「……なに？」

「お主は儂の、儂は闘技場の結界を。どちらが先に解けるのか。楽しみじゃろう？」

言葉の端から。口調の軽さから。相手の顔から心情までが突きつけられるように思い浮かぶ。

遊び感覚。

こちらは頭を働かせて、魔法をこねくり回して全力を使っていると言うのに、その言葉はあまりに残酷すぎる。

おまけに、今まで戦っていた相手がただの人形。それも今まで一方的に圧されていただけに歯痒さは何倍にも膨れ上がった。

「化け物が……！」

「ふむ、まあ賛辞として受け取っておこうかの」

しかしな、とレイは言葉を続ける。まるで子供をあやす大人のようにその言葉は優しく穏やかで、しかし明らかに挑発の類のそれだ。

「まだ負けを認めるなよ。チャンスはあるじゃろう？　儂がこちらを解く前にお主がそちらを解けばいい。そちらから仕掛けた遊びだ。飽きたからと言って途中で投げださんでくれ」

一つ、ため息をついた音の後。

「――ほれ、頑張れ」

それだけ言って、部屋の中から今度こそレイの気配が消え去った。

静かになる。もう血の人形が奔る事も、自分が影を繰る事も無い。余りに静かな空間に暫し呆然として置いて行かれた事を自覚する。

完全にこの密室に置き去りにされたのを確認――、いや自覚して、ヴァーゴは神経が逆立つ程を感じた。

「あの女……！」

怒りに任せて影で部屋中を覆った。光を透過していた窓も、燭台の炎すらも包み込んで飲み込んでいく。と言っても自棄を起こしたわけではない。この結界を粉々にしてやろうと言う思いの上でだ。

――しかし。

ばきん、と、この小さな世界にすら拒絶されて影は脆くも破砕する。

「くそ、……くそ、くそっ！！」

駄目だ。

と、一度失敗を経ただけで一方的に投げかけられたこの競い合いに勝ち目が無い事を悟ってしまう。過度に悲観的になっているわけではなく、力量の差を感じた故にだ。

町中に張り巡らされた杭の魔法はその仕組みさえ理解できず、恐

らく即興で作られたこの結界でさえも、自分の手が届かない領域だと感じさせられる。

そもそも、あちらが勝手に用意した戯れだ。当然あちらが有利になるように仕組まれているのだ、元々勝ち目などあるはずが無い。

ならば無理に相手にする必要も無いのだ。

「……あ」

しかし、気付く。

そちらから仕掛けたじゃれ合いだと、女はそう言った。こちらから仕掛けた事などあの死体の行軍の他には無い。

そう、だからこれは意趣返しだ。

用意された盤の上、片方に圧倒的に有利な状況。つい先程目の前でそれを引っくり返されたばかりじゃないかと。

”自分は出来たが、お前はどうなんだ”と、そう言われているのだ。

「あの、女ァ……！！」

しばらく振りに自分の口から感情にまみれた言葉が飛び出た。

あの吸血鬼と比べれば稚児のようなものかも知れないが、ヴァーゴも一般的にはもう子供といえる年齢ではない。

何が特別という訳ではなく、感情をそのまま吐露する機会など無く、つまりその時は久しぶりの怒りの感情で周りが見えていなかった。加えて言うならば、隔離されている状態でそんな物に気を配る理由も無かった。

「貴女、ヴァーゴさん？」

だからこそ。

「こんにちは。人を探しているのだけど、時間よろしいかしら？」

当たり前のように後ろに立っていた女にも気が付かなかったのだ。

◆
◆
◆

「……そういう事を言われたのは二度目だ」

持って帰ってもいいかしら。と、言われたユキネは言った娘に溜息交じりにそう返した。

改めて思い返せば果てしない昔だった気がするが、あれは確かほんの半年程前。まだ力を手にする前で、母の友だと言う霊龍の死を見取ったその直ぐ後の話だ。

あの時もまた、場に似合わぬ男だった事をよく覚えている。

「へぇ、その時には何て？」
「”馬鹿なのかお前は”と」
「あら」

胸の前で嬉しそうに小さい体も、手を合わせて首を傾げる様子も、何の裏も無く朗らかに笑う顔も平和的で思わず微笑んでしまいそうな物だ。背景が、いつもの町の風景か、もしくは祭りの最中のものであったのならば、だが。

しかし残念ながら、今は戦乱の真っ只中で、そしてここは恐らく王座の前。

戦闘の跡もまだ新しい背景の前に、その少女は異様が服を着ているようにしか見えなかった。

「ヴァーゴさんには先に行って貰って少しこれを眺めてたの。なんだか微笑ましくて」

そう言って指差された先には、大理石の床と赤い高級そうな絨毯と、そして薄っすらと紅色の魔方陣が広がっている。しかし、発せられた言葉はその魔方陣ではないはずだ。その造りは精巧で複雑で、とても”微笑ましい”などという言葉が出てくるものではない。

しかし、もしそうならば。これ程の物が稚拙に見えるのならばそれは――。

人知れずユキネの剣を持った柄が軋んだ。

戦闘になる空気ではない。しかし、危機感がユキネの右手をそう反応させる。

「そんなに怯えないで？」

とん、と軽い音と共に視界の中から娘が消え、更に剣を握った右手に軽い感触。温かく、まるで流れる血にそのまま手を包まれたような。

「――っ！」

反射的に手を弾いて距離を取る。

反応できないほどの速さを見せられた後では、その行動はただ自分の恐怖心に準拠しただけで、ほとんど意味は無くむしろ愚考といえるものでさえあったが、幸か不幸か女が見ているのは。

女が欲しているのはユキネではない。

「すれ違いなの。この世界はままならないのね。一つ勉強したわ」

そう言って、スンスンと何度か鼻を小さく鳴らすと、穴が開いている方向に顔を向けた。

そして、またその姿が掻き消える。

「じゃあ、また縁があったら逢いましょう？　その時には――…」

貴女の血で再会の祝杯を。部屋中に不思議と響く声を最後に、完全に娘の気配は消えた。

◆◆◆

雪駄が地面を噛み締めて、結構なスピードで進んでいたレイの体にストップをかけた。

「これか……」

到着した闘技場を見上げて、人知れずレイが呟いた。こうして実際に見てみても得に変わった所は無く、中から人の気配を感じる訳でもない。

しかし、ほんの僅かにこの場に似つかわしくない魔力の気配を感じる。

そう偽装する事がこの結界の効果であり、そしてまた恐らく何の対策もせず足を踏み入れた者にも何らかの仕掛けがあるのだろう。

また派手な爆発音が背中から聞こえて、思わず後ろを振り返る。視線の先ではここからでも視認出来るほど巨大な化物が町を侵略している。

ここに兵士が居ないのも、あの敵あの場所が最期の敵だと思って

いるからなのだろう。

いや、少し見渡してみても兵士どころか人っ子一人見当たらず、賑やかだった時のこの場所を知っているレイには奇妙に映っていた。

実際には、まだ敵は居る。むしろあれは囮なのだろう。良くは分からないが敵の”キング”とやらと、そして、あの夜の闇に浮かび上がるように浮かんでいる太陽。

心なしかその光は胡乱で、どこかぼんやりと妖しい光を放つように変わったように感じる。

「……まあいい」

さっさとあの阿呆を自由にして、面倒なことは全て押し付けてしまおう、とレイは太陽から視線をはずした。

それにはまず目の前のこの結界。改めてその境界を見定めて、手を伸ばす。

「やっと追いついた。移動するの速過ぎるでしょう貴女は」

自分の想定の中では聞こえるはずが無い声に、耳を疑った。

勢い良く後ろを振り返れば、間違い無く先程密室に置き去りにしたはずの黒尽くめの女の姿を認めた。

「……速かったのはお主の方だろう？」

正直な感想が口から漏れた。

あの結界は即席とは言えど、出来うる限り強力で難解なものを作り上げたつもりだったのだ。そもそも事が終わるまであの場所に閉じ込めておこうと思って作ったものだ。

技量を見誤っていたのか、それとも見誤るように謀られていたのか。どちらにしても余り良い状況ではない。

「私？　私は違うわ。そもそも長い時間光に当たっていたくないから、予め各所に移動する為の拠点を置いておいただけよ」

言いながら顎で後ろを指せば、その先に兵士が一人倒れている。あれが拠点、と言う事は恐らく支配した人間の影を渡れるとかその辺りの能力なのだろう。

「それで、どうする？」

「……どうする？　別にどうもしないわ。ここにはただ様子を見に来ただけだもの」

女の態度の煮え切らなさに、レイは眉間に皺を寄せる。

ここまで高速で移動した理由はそれで十分だ。しかし、部屋から離れた理由が未だ謎のまま。それに女の態度も気に掛かる。

最後に話したときには、こちらにかなり苛立ちを向けていたようだったが、今それはない。それどころか興味すらなくなっているように見える。

今までの慌てた様子も怒る様子も全て演技だったと考えれば、否定は出来ないがしかしとても演技だったとは思えない。

「……でもそうね。折角だからここで雪辱でも返しておくとしましょうか」

女の言葉に必要以上に警戒を露にしている自分に舌打ちしながら、手の中に数本の剣を精製しいつでも投擲できるようにそれぞれ指の間に挟みこむ。

何のきっかけも無しに、女の足元から刃のように研ぎ澄まされた影が伸びる。

「……？」

普通の人間になら十分に必殺の一撃になるだろうが、それは先程の応酬の時のそれと何ら変わらず、これと言った工夫も見当たらない。

これをかわすと同時に剣を投擲し体制を崩した女に接近する。それは先程の戦いで嫌というほど経験したもののはずだ。今更こんな単調な攻撃をする意味が分からない。よもや自棄になっている訳でもないだろう。

ならば何故。

疑問を抱えながらも、とりあえずは迫ってきた刃をかわした。

しかしその疑問が、剣を投擲するのを止めさせ、女を警戒しながらも通り過ぎた影の姿を追って。

その先に町娘が一人歩いているのを見つけた。

「――っくそ！！」

女に気を取られすぎたのか、驚きが自覚しているよりも大きかったのか、何故気付けなかったと叱責しながらも剣を投擲し、微妙な耐性から力任せに跳んだ。

影の刃の数はそう多くは無い。投擲した剣が悉く影を地面に縫い

付けるが、一つだけ場所が悪かったのか自らの体の半分を引き千切りながらも、少女に向かって突き進む。

「貴様……」

しかし、剣に影の一部を削り取られて一瞬動きが止まった隙に、レイは紙一重のタイミングで少女を抱き止めて影の刃から逃れていた。

体に傷は無い。その代わり無理な体勢で跳んだせいか、右足首に鈍痛と、――そして着物の袖が切り裂かれた。

破れた袖に視線をやり、レイは判りやすく表情を変え額に井形模様を浮かべた。

「やってくれたのぅ……」

後ろ手に娘に逃げるように伝えて、怒気の篭った目線は女に向けたまま静かに手を合わせる。

体内の各所に隠してあった魔方陣の殆どが一度に起動され、辺り一帯を真紅に照らす。

魔方陣の大きさは直径十メートルはあるだろうか。そんな巨大な魔方陣が合わせて十二個。

その全てがレイの前で女に向かって一列に並び、その中心が更に強く発光しだした。

「――”神殺し《グングニル》”」

真紅の光の標的にされた女の顔は驚きで気が抜けただ目だけを見開いている。

「消し飛べ」

「ちょ、ちょっと――…！」

姿を現したのは真紅の巨大な槍。

それは間違い無く血で作られてはいるが、魔術的な効果のためか細部まで細かい文字や装飾が刻まれていて、そしてその大きさは見上げるほど。

一秒で、槍は折り重なった魔法陣の中から完全に姿を現し、次の一秒で辺り一帯の空気中の魔力まで全て其の身に取り込んだ。

そして次の一瞬で闘技場の一角ごと吹き飛ばす。

しかし、その最後の一秒が訪れる事は無く。

「素敵……」

後ろから聞こえた感極まった声に、思わず魔法の制御が僅かに乱れた。振り向く前に、優しく首筋を撫でられる。たったそれだけ。それだけの行為で、全てを奪われた。

言葉を、意識を、そして、自由も。

意識が暗くなる寸前に、後ろから姿を現したのは先程助けたはずの町娘。

ゆっくりと近づいてきたその娘は、もう一度悩ましげにレイの首筋に手をやると――。

和服のせいで露出している首筋に、深々と牙を突き刺さした。

◆

「ハッははァッ！！」

技術など欠片も盛り込まれていない力と野性任せの一撃を下から小突いて自分の頭の上を通過させる。

そのまま流れるように、拳と肘で三回連続打撃を加える。一撃の間隔が刹那とすら言えるほどの速度で、しかも一撃で岩をも砕く一撃。

打ち下ろし打ち下ろし、最後に打ち上げ。

ダメージを与える為に最初の二発、相手を吹き飛ばす為に最後の打ち上げ。それも狙いは鳩尾だ。これなら十分に戦闘不能に出来るはずの技だった。

しかし、食らったタウロスの身体は二メートルほど後ろに飛ばさ

れた所で、足の指が地面に噛み付くように押し付けられ、それ以上吹き飛ぶ事も、そして当然膝を付く事さえもない。

その痛みを噛み締めるかのように暫しその体勢で固まったまま、溜めに溜まった肺の空気を吐き出した。それに合わせる様に腹から薄い湯気のような物が立ち上りタウロスが受けた傷を治癒していく。

回復力は尋常ではない。しかし数瞬相手の動きを止めたのに、わざわざ回復を待っているほどジェミニも甘くは無い。

男が顔を上げても既にジェミニはそこには居らず、その体はタウロスの直ぐ後ろ。丹田に力を入れ、身体は低く地面に這うように。移動してきた勢いもそのままに首を刈り取らんばかりの脚撃がタウロスに迫る。

更に加速。

時間の流れを瞬時に最高遅。一瞬で世界は息切れを起こしたかのように失速し、ジェミニの背中を見失う。

だから、手加減をしていたつもりは無い。それこそハルユキレベルの人間にしか捉えられない速さだったはずだった。

しかし。

ぎょろり、タウロスの瞳がジェミニの視線と重なった。

「な、に……！？」

その目に、その反応に、一気にジェミニの警戒度の針が振り切られた。がちん、と歯を鳴らす音。その音のする先など見もせずに、無理矢理蹴りの軌道を捻じ曲げる。

右足が無くなる事を想像してしまいそうになりながら、結果わざと空振らせた右足はタウロスの頭の上を通過し、その勢いのままジェミニはタウロスから距離を取る。

「何や、それ……？」

ジェミの問いに答えるつもりだったのか、それとも食欲を持て余しただけなのか、がちん、とまた歯と歯が打ち鳴らされる。

しかし、その動作がどんな理由であるにしても、それもまた異常の表れに類されるものでしかない。

口で、また牙が打ち鳴らされる。それだけならまだ良い。しかし過ぎた食欲は異常となって体中に現れ始めている。

頬で額で後頭部で首で胸で腹で臍で肩で二の腕で肘で手の平で腰でわき腹で足で膝で、周りの空気さえもが。

飢えに飢えて、物欲しげに歯を打ち鳴らしていた。

「今日は、気分が良ィ……。最高ォだ……」

胡乱なその目はジェミニなど見ていない。

夢を見ているわけでもなかろうに、目の前のありもしない御馳走に思いを馳せているかのようだ。

ひひっ、と”何処かの口”が堪えきれないように笑い声を漏らした。

吊られるようにまた別の口が。そしてまた、また、また、また、また、また。

大小様々な口がそれぞれ違う声と形で笑い上げる。その不協和音にも似た声は混じって重なり、闘技場の空気を盛大に揺らした。

余りの異様に、ジェミニは足を止め、ただ頭の中に鳴り響く警戒信号に身を委ねる。

そして、笑い声が徐々に小さくなり始めた。十秒足らずでその声は萎んで行きそして、今完全に静寂が戻る。

――接近は一瞬。

気が付けば目の前に大きく拡げられた大顎があった。

漆黒。常闇。拡げられた顎の奥に広がるのは、そんな言葉が良く似合う黒。唯一色が違う白い唾液の糸も、臭う腐臭と同じくただ吐き気だけを加速させる。

しかしジェミニも然る者。

正面からの攻撃をまともに喰らいはしない。頭から食い千切ろうとする顎を避けながら後ろに跳ぶ。

しかし、未だに顎は目の前。もう一つ、タウロスは人間を外れていた。

手の平にあったはずの大顎。いや、未だ手の平にいるといっても良いのだろう。しかし届かないと分かった右手の口は、首を伸ばし

ていた。

「う、お……！」

まるで、口と食欲しかないミミズの様な姿形。

今初めて実現させた能力の一端なのか慌てて数歩下がったジェミに目の前でガチンと歯を打ち鳴らせ、それ以上の前進を止める。

「忘れられるとは舐められたものだ」

しかし食欲の権化の次は、鉄と殺意の塊が待ち構えている。

「成程、貴様を殺すには力と重さでは効率が悪いらしい」

言葉と同時に何かがジェミニの顔に飛来した。空気を切り裂く音を発しながらジェミニの頬を掠めたのはやはり小さな黒い塊。

「手数と速さ。これならば貴様を死に至らせる事が出来ると確信した」
「……正解」

黒い塊といっても、あの馬鹿でかい立方体や三角錐ではなく、その形は小さく、その代わりに薄く細い円盤。

物凄い速さで回転しているのだろう。空に停滞している今でも小さく風を切る音が幾重にも折り重なって聞こえる。そして少しでも手数を増やそうという算段なのか一際大きい歯が一枚に付き四つほど刃が突起している。

その攻撃手段も工夫も、全く持って効果は抜群である。

「女の子がそんなん使ったら駄目やでー？」
「ならば、その下らん理念（フェミニズム）ごと挽肉にしてやろう」

女の言葉で、一度に周りの砂鉄達が意思を持ったかのように動き出す。

より一層回転しだした円盤は鋸に似ていて、町中の草刈が一人で出来るだろうなと現実逃避にも似た思いを巡らせている内に、その鋸たちが唸りながら殺到した。

上から下から斜方から右から左から視界いっぱいを覆い尽くすほどの物量が雪崩のように押し寄せる。

防ぐ。無理だ。斬撃に加えてこの量。

流す。不可。上に同じ。

ならば。逃げろ。

瀕した危機も手伝って、ジェミニの集中力が更に研ぎ澄まされる。それこそ魔法を使わずとも時間が遅く感じられるほど。

どの方法でどの身体運びならば突破できるか予測を立てる。その予測した自分のほとんどが鋸に切り刻まれながらも、ほぼ無傷で切り抜ける道もある。

ならば、後はただ実行するだけ。

時間を刻んで引き延ばし、円盤の腹を叩いてはたき落とし一転突破。

「ちっ……」

女の舌打ちが回避の成功を知らせる。追い討ちとしてまた幾つか

の砂鉄が飛び出すが、足元に向かっていたそれを跳んで避ける。

そして今度は狙い済ましたかのように、隠し切れない食欲が歯を打ち鳴らす音として背後から鼓膜を揺らす。肩越しに視線をやれば相変わらず悪趣味な、常闇が続く口腔が視界の端にちらりと映った。

「――――」

行ったのは、時間干渉とほんの少しの自転干渉。一秒の半分の半分の更にその十分の一ほどの時間、自分の身体をこの星から切り離す。

空中にも関わらず音速を超えた推進力を得たジェミニの身体は、脇をすり抜けるように大顎の脅威を逃れた。

「……っと」

二人から十メートル以上離れた位置まで移動して、体勢を整えた後漸く一息つく事が出来た。

二人はそれぞれ違う意味を込めた視線をこちらに送っているが、相変わらずの殺意の濃さだけは共通している。

改めてこの二人を相手に捕縛と言うのは少し難しいんじゃないか、と頭を抱えたくなった所で、――変化が訪れた。

とん、と軽やかな足取りで背後に誰かが降り立つ気配。

警戒心を最大に瞬時に振り向き、その姿を確認して安堵の余り思わずその名前を呼んだ。

「レイちゃん！」

奇抜ながらも艶やかな藍色の和服という格好に、三つ編みで一つに纏めた黒く長い髪は優雅に揺れていて、そんな個性的な存在は二人と知らない。

だからジェミニに警戒心は無かったのだ。この場、このタイミングでの助けに味方なのだと信じきっていた。

――人外の力を込めた拳が、ジェミニの無防備な鳩尾に食い込むまでは。

ジェミニに一握りほどの警戒心が沸き起こったのは、その痛みと苦しみに膝を付いてから。

「れ、い……？」

しかし、その警戒もたった一瞬の事。

名前を呼び終える時間すらも待ってはくれず、首の裏に強い衝撃を感じてジェミニの意識は黒く塗り潰された。

◆
◆
◆

霞のように消えてしまった娘を探してユキネは部屋中に視線を巡らせていた。

〈主。どうやらあまり良くない状況のようです〉

「え？」

〈閉じ込められます〉

「ええ！？」

女がもう既にここを離れたと断定して、とりあえずメサイアの言葉の意味を探す。閉じ込められると言われて初めて視線をやったのが王座から廊下へと続く大きな扉。

しかし、先刻も今もぴっちりと閉ざされていて何も変わってはいない。

視線を移してやっと今なお変化を続けているそれを見つけた。

「何で……！」

その”穴”に向かって毒づきながら地面を全力で蹴り飛ばす。

目指す壁に開いた穴は――いや、開いていた筈の穴は今この時にもその面積を縮めていく。

〈ふむ。どうやらあれは物理的な物ではなく魔術的なものだったようですね〉

「暢気な……！」

いや待て、と身体は全力で動かしながら一つ疑問。

メサイアが閉じ込められると言ったから走ってはいるものの、閉じた所で普通に扉から出ればいいだけではないのだろうか。

〈何か強い結界らしきものを感じます。主ならば出れない事はないでしょうが一秒でも拘束される時間は回避すべきかと〉

「そりゃそうだ……！」

メサイアと返答を繰り返しながら最後の三歩を大幅に踏み切り、未だ縮まり続ける穴に頭から飛び込んだ。

壁の天井から床までを直径とするほどの大穴が、今ではその幅五十センチほど。身体のあちこちを妙な間隔の穴の縁に擦りながらも、何とか身体を捻じ込む事に成功する。

爪先が外気に触れた瞬間に穴が完全に消えてなくなった。

「……あ」

〈主、足場足場〉

我ながら凄い速度で走り抜けたのが幸いしたのか、落下の始まりが緩やかな内に空中に足の指を咬ませて姿勢を正す。

最近肩口で切り揃えた髪が、いつもより大きく体を揺らす。いつもより多めの風を首筋に感じながら、ユキネは口を開いた。

「レイが何処に行ったか分かるか？　メサイア」

〈いえ。その結界のせいで謁見室のレイ殿の気配が大きくなっていたようで。加えて今は杭の魔法のせいで今は町中から彼女の魔力を感じます〉

そうか、と呟いて次に出てきそうだった言葉を飲み込んだ。そのまま感情に任せて口に出してしまえばそれがそのまま現実になりそうで怖かった。

（そんな、訳はない……）

フェンは姿を消し、ジェミニも居らず、シアもレイも居なかった。そして、ハルユキさえも、今この不安を消してはくれない。

まさか、もうこの町に皆は居ないんじゃないかと。漠然とした不

安が付き纏って離れなかった。

〈……主〉

最悪の結末を、決して消えはしないユキネの弱い部分が脳裏に投影する。

〈主――――!!〉

「え……？」

メサイアの言葉に自分が呆然としていた事に気付いて、咄嗟に顔を上げる。

その目前にまで、白い何かが迫っていた。

転々

その光景をただ眺めていた。
いや、眺めているしかなかったのだから仕方が無いといえば仕方が無いのかもしれない。それが言い訳にすらならないのだとしても。
結果、力を失ったジェミニは誰からも支えられる事無く地面に体を打ち付けることになった。その隣に居るはずの、手を届けばジェミニの体を支えられるはずのレイの視線の前を横切って。

「――、……ぁ……？」

逆転を確信していたハルユキの表情が固まって、まだ中途半端に笑ったままの顔でそんな声とも付かぬ音が口から漏れた。

視線は、きっとハルユキがこの世界で最も信頼している部類に入る二人の元。しかし、そのうちの一人はもう片方の一人の暴力によって力無く地面に沈んでいる。

「どうして……？」

ハルユキの表情が一瞬で凍りついた事に気付いて、重い身体でノインもハルユキの視線を追い同じ感情が篭った声を漏らす。

その先では、見間違うはずも無い着物の麗しい吸血鬼がただ胡乱な表情で倒れ伏したジェミニの傍らに突っ立っている。皮肉にもその姿はいつも以上に人形染みていてどこか厳かさも感じさせた。

「……レイ……！」

思わず手を伸ばして、しかしやはり薄い肉の膜のような壁に阻まれて小さく音を立てた。

「……く」

その音で我に返り、少しでも近づこうともう片方の腕も壁に押し付け、喉を震わせた。

「レイっ！！　お前、何やってんだよ！　……ジェミニ！　返事しろ！」

歯を思い切り軋ませた後、ハルユキは思い切り声を出した。その声はどこか悲鳴のように聞こえたが、それでもレイは微動だにせず、目の前に倒れたジェミニにすら視線を向けない。

様子がおかしい。

薄々気付いていた事実に、ハルユキはそれ以上レイへ向ける言葉をなくしてしまった。

「……何を、した？」

代わりに言葉を向けたのは隣で相変わらず余裕の体を保っている金髪の男。

ハルユキの言葉は反応としては妥当だったが、どこか動揺を誤魔化すための言葉にも聞こえる。それはきっと間違いではなく、そうでもしなければこの余りに脆い檻を壊してしまいそうだったのだろう。

「私ではないさ。まあ、想定していなかったかと聞かれれば、していたと答える他無いがな」

「どういう……！」

「なに、君達には最高の評価と、そして最大の警戒を持っていただけだ」

ハルユキの言葉の途中で、男は黙って前方を顎で指し示した。指が示しているのは、レイとジェミニが居る場所。

しかし先ほどとは違い、満面の笑みを携えた女が一人、レイの傍らで愛おしそうにレイン身体を撫でていた。

この場には不自然なほど普通の格好で、血も埃も服には付いておらず逆にこの面々の中では浮いている。しかしその格好よりも印象的な何かが女の周りにはあった。

そして数十分前にハルユキは同じ感想を抱いている。

「見て、オフィウクス！　彼女格好良いでしょう？　凛々しくて綺麗で強くて、それにね！　綺麗な信念（せいぎ）もあるの！」

ハルユキの感情を傍目に、女は無邪気な声を上げる。

「それは羨ましい。私も部下に欲しいほどだ」
「だーめ。この娘は私のだから」

にこにこと嬉しそうに笑うスコーピオと名乗る女と対照的に、体中をべたべたを触られ続けるレイの表情は一切変わらず、ただ虚ろな目を虚空に向けている。

後ろから更に黒尽くめの女が滲み出るように姿を表すが、そんなものは目に入りすらしない。

もう一度、今度は名前を呼ぼうと思ったのかハルユキの口が開きかけて、しかし届かない事を悟ったのか、言葉を発する事無く口は閉じられ歯は噛み締められた。

一瞬だけ、ハルユキが地面に視線を落として、直ぐに戻ってくる。

その目からはおよそ人情だとか温かみだとか、そういったものが

根こそぎ抜け落ちてしまっていた。

「――貴様ら」

改めて、ハルユキは口を開く。

今までの余裕のある言葉と比べて、明確に敵意が表れた言葉。自然と全員が口を噤みその声に集中したのはその敵意を感じ取ったからなのだろう。

「そいつに、……レイに、何をした？」

その口調は恐ろしく静かで、しかし油を一滴でも注いでしまえばどれほどの烈火が燃え上がるのか想像も出来ない事を思わせる低い声。

「？　私が私の物をどうしたって私の勝手でしょう？」

いけない、とノインは目を見開く。

それ程長い付き合いではないが、それぐらいは分かる。穏やかな

のは堪えているからなのだ。きっと耐える事には慣れているのだろう。その表情からは少し冷たいのではないかと思えるほどの平常心が戻っている。

しかしそれはただ下火になっているだけなのだ。

女の言葉に誘発されてか、力付くで押さえつけられた蓋が開き、少しだけ怒りが漏れて言葉に乗る。

「――何をしたのかって聞いてるんだよ、小娘」

しん、と闘技場の外からの音も沈黙したかのように、その言葉を最後にして闘技場から音が消えた。

言葉の内容が大して変わったわけでもない。それなのに、それを受けた頭はまるで違う反応を示す。

答えなければ殺す。はぐらかせば殺す。意にそぐわない回答をしたら殺す。そう言葉尻に付けて殺意を叩き付けられたかのように、嫌な汗がいきなり背中を濡らす。

「……何かするのはこれからよ？」

傍に居ただけのノインですらそう感じたというのに、直接言葉をぶつけられた女は涼しい顔でそう言った。

「これから、だと？」

「そう。みんな一緒に糧になって、みんな一緒に大きくなるの」

「か、て……？」

「そう、彼等の。そして私の。仲間入り」

そう言って、スコーピオは三日月形に唇を歪めた。

すると何が合図になったのか、ずるりと生々しい音を立てて何かが地面から湧き上がるように姿を現し始めた。

それは赤黒い何かの液体。ハルユキは知らないが、それはレイを度々襲っていた正体不明の妖。

ハルユキには初めて見る物だった。しかし、それが、それの仲間に加わるという事が、限り無く死に近い現象だという事だけは分かってしまった。

怒りにもう言葉すら出てこず、ただ拳が握られる。しかし、目の前には大して厚くも丈夫でも無い割にどうしても超える事ができな

い壁が邪魔をしている。

「大丈夫よ。取り返せばいいんだから」

取り乱した事が伝わったのか、ノインがハルユキに声をかけた。間違い無くただの気休めだが、間違っている訳ではない。そう、まだ。まだ諦める事はない。

――しかし、まるでそれも予定調和の一部だとでも言うように、もう一つ事態は悪くなる。

「悪いが、そんな機会は与えてやれない」

「……？」

小声が風に乗って届いたのか、敵陣の一番奥にいる金髪の男が勿体付けるように口を開き。

「何しろ、我等はもう帰還するだけだ」

当たり前のようにそう言った。

「な、に……？」

金髪の男はゆっくりと歩を進めて、ジェミニの傍に立つと、自らジェミニを肩から背負う。

「総統、私が」
「ああ、頼む」

言って、男は回りにも声をかける。

「タウロス、レオ、スコーピオ、ヴァーゴ、貴兄等はどうする？」
「……俺ァ帰る。また少し気分が悪ィ」
「私も。漸く二人とも揃ったんだもの。早く並べたいわ」
「僕は残らないと駄目でしょ。結界は保たなくちゃいけないし。まだ用も終わっていないし」
「すまんな」
「まあ、僕は裏方が仕事だからね。納得してるよ」

意識の裏側でそれを聞いているような気分だった。耳は確かにその会話を聞いていて、しかし脳を綺麗にかわして反対の耳から抜けていく。

「タウロス。結界はまだ保ってもらうぞ」
「……あ？　ああ、ありゃあの女の魔力奪って作ってる。消そうとしなけりゃ消えねェし、俺が死んでも消えねェよ」
「それは僥倖」

ようやく、自分の口が動くのを感じた。焦りのせいか擦れていて声になったかどうかも怪しかったが。

「帰る、だと……？」
「何だ？　そんなにおかしな事を言ったつもりは無いが」
「お前……、この町を消すんじゃなかったのかよ……？」
「まるで壊して欲しいように聞こえるが、まあそれはいい。気持ちも分かる。しかし町を消すのは私の役目ではないし、それに私達の用は粗方済んだのだ。留まる理由がないだろう」

そう言って、男は何も無い目の前の空中に手を翳す。
ジェミニを躊躇させたあの手の形。それが魔法という神秘に類するものだという事は分かる。しかし、その手の意味も現れた現象もまるで理解する事はできない。

ギッと空気が嫌な悲鳴を上げたかと思えば、空中にぽっかりと穴が空いていた。
直径二メートルほどの円形で一帯何次元に存在するものかも良く

分からない。その円の中は黒か青か良く分からない色が交じり合っていて、少なくともそれに触れようとする気だけは起きない。

「さて、突然になったがお別れだ。何か言いたい事はあるかね」

恐らく何万歩よりも遠く移動する一歩を控えて、金髪の男はその微笑をこちらに向けた。

思考が止まっていた。

考えなければいけない。何か言って引き止めなければいけない。

それは判っているのに思考がそれ以上回転しようとしないのは、もうこの状況を覆す事が不可能だからなのか、――それとも、余りに判り易い選択肢が残っているからなのか。

「ハル」

そんな心境を見透かしたかのように、ノインの声がハルユキの背中に届いた。

たった一言で何を言いたいのかももう判る。頭ごなしに否定する事は、もう出来なかった。

「貴方がここに閉じ込められているのも元を辿れば私の責任。それにね、こんな状況でこれ以上役立たずを演じていたくはないの」

その強がり半分自信半分どこかに隠した不安一割といった声を聞きながら、改めて敵の姿を見やる。

一人。体中が返り血に染まった食人男。
二人。ハルユキは初めて見る黒尽くめの女。
三人。殺意の塊のような鉄の女。
四人。レイをまるで従えるように後ろに連れている少女。
五人。子供の体の中に老人が入り込んでいるかのような矛盾した子供。

そして、最後の六人目。最後まで厳かな空気を崩さなかった獅子のような男。

あの連中があの妙な穴を潜るまでに、助けがくるとは思えない。そして、レイとジェミニを手玉に取った連中を易々と倒せるだけの人材にも心当たりが無い。

だから、やはりもう選択肢はそう多くない。

「……あ、あのね。勘違いしないでよ」

座ったままの大勢では格好が付かないと思ったのか、ゆっくりと

ノインは腰を上げる。その動きに危なっかしさは感じられなかったが、感じないように見せているのだという事は感じた。

「確かに。……確かに貴方はあの時、その、ああいう風に言ってくれたけど。それは私が貴方に頼り切るって事じゃない」

傷付いているはずなのだ。数時間前までハルユキの腕の中からは出られなかったほどに。

それでなくても、昨日のユキネとの試合で魔力も体力も底を付いていると言っていた。しかし、彼女は力強く胸を張っている。

「言ったからには、支えてもらうし、助けてもらう。だけどね、別に貴方の庇護下にいたいわけじゃない」

それは、虚勢だったし、見得張りだったし、限界だった。

「私が弱い部分を支えてもらうなら、私も貴方の支えになりたいわ。私はね、別に貴方が強いから好きなわけじゃないのよ」

それでもやはり彼女は強い女性だった。

「――――ノイン、すまない、本当に」

「馬鹿ね、良いって言ってるでしょ、私は。最初から」

返ってきた言葉は強い言葉。
心強くて、あまりに彼女らしくて笑ってしまいそうになるような言葉。

しかしそれでもハルユキが、ハルユキだけは彼女の強さに頼る事はしてはいけなかったのに。

「あいつ等殺したら、何でも言う事聞いてやる」
「あら、私は欲張りよ。王女様だから」

冗談交じりの声に小さく笑って見せてから、壁に手の平を当てる。
その感触は柔らかく、まるで人肌のように僅かに温かい。

”この壁を壊せば、ノインが死ぬ”

どうかあの男の言っていた事がハッタリであって欲しいが、魔法に関する事だ。ハルユキの常識ではいまいちは借り切れず、その考えは希望的な妄想だろう。

「……っぁ」

ぐ、と壁に力を入れると壁がほんの僅かにたわみ、それと同調して後ろから苦痛に喘ぐ声が聞こえる。

一息にいった方がいいと直感的にそう判断して、

――しかし。

貴様らの葛藤など知った事かとでも言いたげに、壁に変化があった。

「――――っ」

反射的に腕の力を緩めて止めた。壁の感触は変わらない。ただほんのり赤かったその色をほんの僅かに濃くしていた。

一瞬遅れてその色の秘密に気付く。今触っている壁には何の変化も無く、ただ色が重なっただけだという事に。結界の外にもう一つ結界が重なった事に。

「駄目よ。おイタしちゃ」

今にも壁を突き破りそうだった腕を反射的に引っ込めた。

色が変わった結界をまじまじと見つめる。ノインのそれよりほんの僅かに赤みが強い壁の色。それは血の色に良く似ている。

「貴、様……！」

何を行ったのか、見る事無く悟った。殺意に溢れた視線を上げれば、その想像通りレイが胡乱な表情のままスコーピオの胸の中で荒い息を付いていた。

「無理は止めてね。その結界は見様見真似だけど、きっと弱ってるこの娘は死んでしまうわ」

恐らくタウロスの技を無理矢理真似した分の負荷が、媒体であるレイに押し付けられたのだろう。意識は無いものの、気丈なはずのレイが蒼を通り越して真っ白な顔で荒く息を付いている。

「……殺す。貴様は必ず殺してやる」

「殺されるのは嫌ね」

顎に当てて、少女は考えに耽る。その様はただのポーズにも見えず、本当に思い悩んでいる風にしか見えない。

そして、少女はただ本当に名案を思いついたのだろう。それはもう花開いたような朗らかな顔で。

「――じゃあ、殺される前に殺せばいいかしら？」

殺意を剥き出しにした。

一瞬で、本当に瞬きを一回するような時間で、その殺意が如何に巨大な物かをスコーピオは形で示した。

所謂、魔力といわれるものがスコーピオの小さな体から噴出して迸る。それはだんだんと圧縮され集合し集約し、この世に魔法として生まれ変わっていった。

「な……に……！」

巨大で、赤黒い塊。それは削り取った氷山の様に荒々しい表面で、所々は鋭利に尖っている。

幾つもの刃を折り重ねて出来上がったようなその凶器が、また幾つも宙に浮き、――闘技場から見える空一面を覆っていた。太陽の光を背に受けて、それは更に血を欲するかのように鈍く光っている。

驚きはハルユキだけではない。

金髪の男と子供は感心したように声を漏らしつつも微笑は保ったまま、アリエスは僅かに目を見開き、残る二人は忌々しげにそれを見つめている。

「さて、通り抜けるように作ったつもりだけど。失敗したらごめんなさいね」

女の指先一つで空一面の赤黒い血の結晶が一斉に力のベクトルを得て動き出す。あれだけ密集しているにも関わらず、一切ぶつかる事も音を立てる事すらなく。

ハルユキの頭上を中心にゆっくりと闘技場上空を跋扈する様は、

異様と表現するほか無い。その荒々しい中に規律を感じさせる動きは、さながら訓練された郡狼のようだ。

見上げればそれは視界すべてを覆うほど。空を余すことなく埋めるそれは加速に加速を重ね、そして、ゆっくりと高度を下げ始めていることに気づく。

ひたすら回転と加速を繰り返し、まるで万華鏡の中に放り込まれたかのように闘技場に鮮やかな光が散りばめながら。

空が血の色に染まり、ひび割れ、堕ちて来る。

「くそ……！」

猶予は無い。

加速度は高く、殺意も増大しているかのようだ。

結界内は狭い。あの血の塊一つで結界よりも遥かに大きい。避けるのは不可能だ。

その光景は終わりを連想、いや――直感させる。

終わるのが世界か、この乱痴気騒ぎか。

その後ろ向きな感情は、倒れ伏したジェミニの姿や、敵の手に落ちて自我すらも見失っているレイの表情から来たもので、その光景はただ諦めようとする言い訳だったのかもしれない。

だから、そんな直感は掃いて捨てた。

しかし何か打開策を考える時間も無いようで。

威嚇するように血の塊の一つがハルユキのすぐそばを突き抜けていった。越えられないはずの壁を易々と通り抜けている。ハルユキの事は硬く拒絶した壁は、ハルユキを守る盾にはなってくれないらしい。

視線を逃がすように肩越しに背後を見やる。

一度は起きようとしたのか、壁に背中を預け硬く瞼をつぶり、荒く息を吐くノインがいる。

風を切る音だけで辺り一帯を揺らすほどの兇器の群れはもうすぐ隣に。しかし、今はそれに背を向ける。

一つ一つ砕くにしても塊は大き過ぎてノインを逃す空間的余裕は無く、避けようにも同じ理由で出来はしない。

受け止めればその瞬間に足元の結界が砕け散るだろう。

ならば、ならば。

足元にさえ一切の衝撃を逃がさずに攻撃を受けるしかない。

無茶苦茶だ。

「くそったれ……」

もう一度軽く悪態をついて、意識がないノインを押し倒しその体に覆いかぶさる。

瞬間。

その背に向かって敗者の誹りを刻み込むかのように、殺意の群れが殺到した。

◆◆◆

灰色の空の下、底冷えする暗がりの中を小柄な影が警戒に路地を進んでいた。

「フェーン！」

そして、その小柄な影――エゼは立ち止まる度にその喉を振るわせる。

呼ぶのはどこか危なっかしく、それでも心根は優しい少女の名前。

いつも無口で人付き合いが苦手そうで、あまり自分の感情を表に出さない。それはそれは危なっかしいとは感じたが、今胸中に渦巻いているのはそれを起因としたものではなかった。

「フェぇン……、どこ行ったのよぅ……」

ユキネには言わなかった。

数刻前に人がうごめく城内でフェンを見かけたことを。

寝ているように言ったはずなのに出歩いていたその背中。人込みに飲まれて捕まえることができなかったのが悔やまれる。

――――いや。

そもそもあれは自分が知るあの優しい少女だったのか。

「……決まってる」

暑くないのかと言いたくなる黒いローブに、秋の空のような淡い空色の髪。歩く度にひょこひょこと不器用に揺れる身の丈を超える木の杖。個性的な外見だ。見間違うはずも無い。

しかし、ならば何故。

何故、無理矢理にでも振り向かせてでも顔を――、あの無愛想な無表情を確認しなければと、強迫観念染みた物を感じたのか。

どうして、あれほどの危うさを感じてしまったのか。

「もう、あの馬鹿も結局何処にもいないし……！」

危うさを感じるというのならば、もう一人。仲間とも友とも家族とも言えない妙な連れが一人。数日前から姿を眩ませている。

危うさと言ってもこちらはまったく別種のもので、どちらかと言えば今この町を包み込んでいる嫌な雰囲気と同じ類のもの。

危ない。狂っている。――なんだ、こいつは。

色鮮やかな血が舞う中で抱いた初見の印象は色褪せることは無い。

数週間ぶりの雨を喜ぶかのように全身で血を受け止め、掻き抱き、哂い、飽き、表情を、感情を透明にして。そいつは――、現れた。

死を求める求道者とも違う。破綻を夢見る不幸論者とも、削り合いを望む戦闘狂とも違う。その表情が見ているのはもっと単純な、いや、純粋な。

今まで行動を共にしたのは、そいつの中にその綺麗な願望の中に、自分と似たものを感じたから、

「……なんて事はないけど」

実際、一緒にいるのはひょんな事から。簡単に言うなら共通の趣味のせい。どうせなら我が野望に付き合ってもらおうという、そんな安易な腹心算。

共有した時間は短くは無く、しかしどういう関係を構築している

かもわからない。

知っているものがある。理解できない事があった。知っている部分が本当にあっているのか判らないものがある。あとどれだけの理解できな物を持っているのかは判らない。

奇病のように突然血に塗れて帰って来る事もあれば、黙って寝ている事もある。起きている時は殆ど本を片手に文字を追っているのも全く似合わなくて不自然だ。

「……」

聞けば、フェン達も旅をしているらしい。

エゼ達とは違い何か目的があるわけではなく、ただの根無し草だそうだが。

だけど、そのせいか当たり前のようにその輪の中に加わって一緒に旅をしている自分たちを想像してしまったりもした。

出会って間もないのに、相変わらず馬鹿正直な自分の欲望に苦笑いしながら、その朝は清々しく、やっぱり少し肌寒くもなる。

しかし、きっと彼等はあいつの狂った琴線に触れてしまうから。そして、世界の主になる自分があの危ない男を御してやらなければいけないから。

「――――……！」

恨めし気に、手のかかる連れの名を呼ぶ。

アレのことだ。きっとこの状況ならば何処かで何かを破綻させてやろうと牙を研いでいるはずだ。

「……ト！」

半分自棄になりながら連れの名前を叫ぶ。

この甘く香ばしい非日常。

麻薬のように脳髄を痺れさせる感覚はエゼの中にさえ恐怖と共に混在し、心臓を強く叩く。

そして、しかしアレの場合。

心臓を高鳴らせるだけではすまないのだ。

昂ぶるために。
静めるために。
傷つけるために。
傷つくために。

あいつは、この戦場を甘受するだろう。

「どこ行った、」

だから、もう一度、何度でも、見つかるまで、その名を呼ぶ。
もし今アレが何かを摘み取る瞬間で、その手が一瞬でも止まるようにと。
一人では大事な友達を見つけられないから、少しは手伝えと。

「――――ラストォ！！」

終わりを意味するという、その名前。

◆
◆
◆

闘技場中がどす黒い血の色に染まっていた。

その赤は敵の攻撃である赤い結晶の色であり、ハルユキの周りを囲んでいる赤であり、そしてハルユキの体中から溢れ出る血の色でもあった。

さすがに揺らぎ始めた意識の中で、ハルユキは一旦攻撃が収まったことを確認する。

目だけを動かして地面を確認する。

地面には鉄板が敷いてあり、その下には更に衝撃吸収のゴムマットを敷いてその下に結界がある。

少しでも衝撃を和らげようと、無理矢理ナノマシンで作ったものだったが、何とか堪えてくれたらしい。

結界で覆われた地面は憎々しげながらも変わらず健在で、ハルユキの体の下ではノインの胸が僅かに上下している。

どうやら、あの無理難題も成し遂げられたらしい。

「……っ」

しかし、その代わり攻撃を受け止めた己の体は無事ではなかった。

込み上げて来た血を目の前のノインのぶちまける訳にもいかず、結界の隅に口の中いっぱいにたまっていたそれを吐き出した。

べしゃり、と生々しい音を立てて地面を汚したその量は、大体コップ一杯分ほど。

大した量ではない。体中から今も溢れ出している血の量に比べれば。ノインの服は汚してしまったようだがそれは我慢してもらうしかない。

空を覆ったあの血の塊は一切の容赦も無くハルユキを打ち付けた。

その塊は硬質であったがために一撃毎に砕け散り、砕けた破片をまた叩きつけ、また砕けてを繰り返し砂利ほどまでの大きさになっ

たら今度は傷口から入り込んで中から皮と肉を抉り削った。

ハルユキの体は柔軟で強靭だ。

何故か戦いの度に精度と性能を向上させるその体は、強化された硬質ゴム――それもドラム缶一杯のそのゴムを繊維の太さまで凝縮し、それを使って筋肉を編み上げたかのような強かさだ。

恐らく常人のそれとは、”質”どころか、”素”や”造り”まで異なってしまったであろうその体。

幸か不幸か、万軍に対して用いるような魔法を一身に受けてもその体はまだ命を手放さず、そして恐らくまた、この攻防で何らかの変化を遂げていた。

ノインに覆いかぶさっていた体勢から上半身を持ち上げると、ぎちり、と錆びた鉄を擦り合わせたような音が体内から鼓膜を揺らした。

それはきっと体の悲鳴だったのだろう。

しかし、そんなものは気にも留めず、あちこちで出血の量を増やしながらも、上半身ごと視界を持ち上げた。

その拍子に零れた血がパタパタと地面を叩く音もまた耳を素通りする。

辺り一帯の石畳は粉々に砕け散って砂塵となり光を遮断して、先

ほどの攻撃の激しさを暗に物語っていた。

ふらふらと安定しない焦点を無理矢理固定させると、砂塵だらけの景色と、ノインの顔が輪郭を取り戻していく。

「――――ぁ……」

ノインの顔に、赤い線が走っていた。

額の中心から整った眉と平行にくっきりと。白い肌にその傷は余りに生々しく、正視に耐えない。

ぎちり、と先ほどと似たような音がハルユキの頭の中で反響した。

先ほどと同じく筋肉が軋んだ音なのか、歯が擦れあって搾り出された音なのか、――それとも、それを切欠に虚ろになっていた激情が目を覚ましたのか。

所構わず暴れまわりたくなるようなその感情はしかし、今回に限り一瞬でその矛先の気配を感じ、定め、収束された。

まぶたは硬直でもしてしまったのか瞬きを忘れ、ただその瞳がぎょろりと〝矛先〟を見据える。

ぎしり、と今度は空気が軋んだ。

感情が見事にろ過されて分離し、頭に残ったどす黒い感情がエネルギーに変換されていく。

ごぼ、と音を立てて何かが沸騰する感覚。頭の中が白熱していく中で、手足だけは急速に冷えて感覚を無くして行く。

それこそ、生温かい血を浴びようが何ら気にならないほどに。

〈殺したいなあ、堪らなく〉

脳の中に住み着いた嫌な存在の耳障りな声に、今だけは賛同したい。

この冷えた手を暖める為に、血を。

――血を。

「良い表情だ、ハルユキ」

不意に。

陰がハルユキの足元の地面の色を塗り替えた。

◆

もうもうと、砂塵を撒き散らす光景をヴァーゴは呆れたように眺めていた。

「やれ、派手にやったものだ」

豪風を超え、最早爆風と呼ぶほどまでに至った空気の流れをその身に受けながら、それでも眉一つ動かさず金髪の男――オフィウクスはそう言った。

「だって殺すなんて言われちゃったら、先に殺すしかないじゃない」

「道理だがね」

何気無くヴァーゴが指を鳴らすと、傍に立ち尽くしていたレイが崩れ落ち砂塵の向こうで結界の内の一枚が消える。

オフィウクスは少しだけつまらなそうに微笑を曇らせて砂塵が立ち込める空間を一瞥すると、肩に背負ったジェミニを担ぎなおした。

幼稚な側面を隠そうともしない二人に疲れが祟ったのか、その二人の間に居た少年――レオがため息を付いて肩を竦めた。

「じゃ、僕はまだ用事があるから」
「すまんが、レオ。君は勝手に帰ってくれ」
「判ってるよ」

そんな男に驚く事も無くレオは首を竦める。

レオを除いて残っているのはオフィウクス、気絶したジェミニとただ立っているだけの女。それにスコーピオにヴァーゴ、アリエスとタウロス。後はただ砂塵が濃く舞っているだけだ。

「……オフィウクス……？」
「総統。ご帰還なさりますか」

スコーピオとアリエスの声が重なり、アリエスはスコーピオに顔を向けるがこちらを見もしないので無視してオフィウクスを仰ぎ見る。

もうもうと煙を上げる闘技場に敵影は無い。アリエスは闘技場を一見しただけでそう判断し、軽く頭を下げて『ご帰還なさいますか』と再び同じ言葉を発した。

「そうだな。戻るとしよう」

当然の判断だった。国の一軍でも壊滅し得る攻撃をその身に受けたのだ。間違っても生き残ってはいない。避ける事も防ぐことも不可能。受ければ必死。

そういう攻撃だったはずだったのだ。

「――オフィウクス！！」

スコーピオが未だ発した事が無いような金切り声に、場が僅かに緊張感を帯びた。

「何……？　これ」

スコーピオの声は、初めて聞くものだった。その声には、困惑もあった。感じ得る事の無かった感情に戸惑いを感じていたのだろう。

払っても落ちない虫を見るような目で自分の腕を見つめているスコーピオの目も、同一の感情で染まっている。

スコーピオの腕は下唇と同様に小刻みに震わせていた。意思と反して、恐らく本能と呼ばれる部分から。

そして、瞬間。

空気が凍えて固まった。

「――――っ」

声を、いや息を詰まらせる。

自然と視線がそこに移動する。

砂塵の向こう。閉じ込めているはずの黒髪の、輪郭すら疎らな灰色の影。

周りの視線も気付けばその一点に集中していた。

殺意。

視線に乗っていたその意思はもっと禍々しい何かに変容してしまったかのように荒々しく、どろりと粘着質で濃厚だった。

琴線に触れたのだ。いや、それとも許容量を超えてしまったのか、どちらにしても己等は越えてはならない一線を越えてしまったらしい。

怪物だ。

ヴァーゴは口元を押さえて今にも膝を突きそうなほど、顔を土気色に変えていた。

今この瞬間に周りの砂塵がどす黒い腕に変化して心臓を抉り取りに来るやもしれない。そんな妄想を可能性として考えてしまうほど

に、殺意は充満している。

砂塵で姿が隠れてしまっているのが、この時においてはヴァーゴ達には都合が悪かった。

壁が見えないのだ。いや、砕かれれば判るだろうし、砕かれているのならばすでにその殺意をぶつけてくるだろう。

壁は、檻は健在だ。

しかし、それが確認できないと言うだけで恐怖は膨れ上がり、背中に冷たいものが伝う。

「――くはっ」

しかし、その殺意に同じく当てられている筈の金髪の男の顔に浮かぶのはどうしようもない程に歪んだ喜悦の形。

唇の端が吊り上り、単色の願望に頭が塗りつぶされていた。

その顔は余りに人間離れしていて、笑っているにもかかわらず、まるで深淵のように底深く仄暗い。

◆

今日は朝から調子がよかった。

目を覚ましてから、思わず自分の手が人外のそれに変わっていないか確かめてしまうほどに。

呼吸は浅くとも、普段の二倍は動けた。

気分が良かった。

あの黒髪に”相当数殺されて”エネルギーを補充するために馬鹿食いしたのが良かったのか、それとも他に理由があったのか。

とにかく、気分も調子も最高潮だったのだ。

――今、この瞬間までは。

眺めていた砂塵だらけの光景は濃い朱色に染まり、明滅を繰り返している。

〈何でだが、判るか？〉

判るかよ。

明滅した意識は判断と常識を鈍らせ、頭の中から鼓膜を揺らす声に疑問も沸かない。

〈言われただろ。お前は、草食動物（タウロス）〉

ああうるさい。判っている。その先は聞いても仕方がない。

〈身に過ぎたものを喰っちまえば、食中りだ〉

ふと、周りから人間が居なくなっている事に気づいた。煩わしい同士様共の姿も砂塵に変わっている。

――いや。

独りでに進んでいる自分の足を見つけて、自分が移動しただけだと見当をつける。

〈お前が決勝に進むって言うから、わざわざ潜り込んだってのに、全く遠回りだった〉

あんな化物と戦えるかよ。俺は弱いんだ。

ひょんと出て来て、目の前で世界を終わらせるような光景を指先一つで操って見せる女の背中を思い出し、諦めにも似た心情が吐露された。

俺には、性欲と睡眠欲が欠けている。

黒髪には色々言いはしたが、どんな状況でも下半身が反応した事は無く、感じる情は食欲だけだ。

寝るにしても、毎夜定時に酩酊感が襲い、気絶する用に眠るだけ。

だから自分には、その感情（しょくよく）が全てなのだ。

だから自分が求めていたのは、戦いじゃない。強者でもない。ただ安全に定期的に比較的自由に腹を満たせる環境だ。

〈なら舞台から降りろ。これ以上この場を白けさせんじゃねぇ〉

不意に。

いやきっと、いつでもそうできたのだろう。

こいつはただ眺めていただけだ。

タウロス達が人を殺める行為を、それに憤って戦う人々の姿を。
まるで絵本でも眺めるかのように楽しげに。

そして、絵本を眺めることに飽きたら絵本の中に入りたいと、そんな子供みたいな感情を実現させる。

タウロスの体から腕が伸びる。

その腕は血に濡れて、いつの間にか目の前にあった半透明の壁を汚した。

タウロスから伸びている腕の根元からブチブチと何かを引き千切るような音が連続する。

それはそうだ。

肩から伸びている腕ならともかく、この腕は腹から、――しかも腹の中から生えている。

「良い表情だ、ハルユキ」

そしてその言葉から察するに、もう目の前のこいつはタウロスへの興味すら失ったのだろう。

◆

足元を暗くした影に顔を上げると、血飛沫が目の前を塗らしていた。

目の前の血に遮られて、壁の向こうで何が起こっているかは判らない。

不意に、頭の中が勝手にさまざまな光景を蘇らせて一つ一つ辻褄を合わせていく。それこそ、怒りを下火にさせるほどの勢いで。

〈……死んでるな〉

〈結構時間も経ってるみたいね〉

最初に浮かんだのは、ノインと行った飛竜の討伐任務での事。岩窟の中で討伐対象の龍が全て殺されていた光景。

そう、そうだ。おかしい。

あの時は外の竜の群れが殺したのかと思ったが、あの時外の竜は岩窟に入ろうとはしていなかった。

龍達が死んでいたのは岩窟の中。匂いや気配が嫌だと言うのならば、そもそも中に入って戦わないはずだ。飛竜達の目的が殺す事だけだったとしても未練がましく岩窟の周りに留まっている理由が無い。

――そもそも、アレは竜同士が戦った跡だったか？

今思い返せば、爪や牙の跡は無かったようにも思える。しかしそれでは何故別のドラゴンに襲われたのだと考えてしまったのか。

理由は二つ。一つは単純に巣の外に別なドラゴンの群れが屯っていたから。そしてもう一つは、その破壊の跡がとても人が為したものとは思えなかったからだ。

押し潰され捻じ切られ踏み潰されていた。

人間の仕業ではない。だから、周りの竜達だろうと当たりを付けてしまったのではないか。

〈――あの子、妙に怯えてなかった？〉
〈あー…、確かに不安げには見えたが、この雰囲気のせいじゃないか？〉

引っ掛かっているのはもう一つ。

ギィのタウロスに対する尋常ではない怯え方。ノインは初めて会った時のようなと言い表していたが、その言葉は的を得ていたのかもしれない。

最初はタウロスに生き物の本能として怯えていたのかとも思ったが、そうではない。

タウロスと初めて病室であったとき、ギィは寧ろ敵意を剥き出しにしてノインを庇っていた筈だ。

ならば。何かが変わったのだ。

ハルユキがタウロスを撃退した昨日の夜から、この時までに。

――例えばそう、傷を癒そうと獲物を探していたタウロスの腹の中にナニカが潜り込むとか。

「よお」

ハルユキが結論付けた瞬間を待っていたかのように、血の幕が完全に垂れ落ちる。その向こうには男が一人。

それは、真っ白な男。

ユキネの魔力の色とは違う、もっと退廃的で擦れた白の色。

「――なあ」

唐突に男の気配が膨れ上がった。

「楽しい祭囃子に誘われて出て来ちまったよ」

殺意が凶器が闘志が興奮がそして恐らく魔力と呼ばれる力の源が、

練り混ざって右手に集約する。

以前は白い湯気のように立ち上るだけだったそれは、無駄をなくし右手の周りに円を描きゆっくりと循環している。

拙いながらも、それは洗練の気配を感じさせた。

「――引き篭もるのは無しにしようぜ」

体に雪の精霊でも取り憑かせているのかという妙な感想は、その拳が千の刃よりも危険な物だと思い出した途端に霧散する。

「く……！」

受け止めれば問題は無い。

ただ、今目の前にはどうしても超えさせるわけには行かない壁が存在している。無意識が警告したのか、ノインの荒い息遣いが聞こえていた。

男の拳は硬く握られ、帯びた白い影は白い線となって拳の軌道を装飾する。

音は無い、空気が追いついていない。

思い切り振りかぶられたその一撃は目を見張るほどに力強く、その上神速を誇っていた。

――その拳に、ぎりぎりで掌を合わせる。

「――っハははははははァ！　奇術師かてめェはよォ！」

笑いながら男は壁から拳を離した。その拳は全ての勢いと力を吐き出していて、しかし壁には一切の罅すら入っていない。

ただ代わりに、ハルユキの口から夥しい量の血が吹き出し目の前の壁を真紅に染めた。

「て、ぇ……」

確実に内臓が傷付いた。いや、引き千切れた。

それもそのはず、本来は受け止めて足から地面に逃がしていく力を無理矢理体内の筋肉で押し止めたのだ。

そんな人間には不可能な所業は作用も反作用も相まって、挙句、無理も祟ってハルユキの体内を掻き混ぜた。

後から後から口の中に溜まっていく血は体の状態を顕著に表している。

消化管に穿孔。内臓及び胆管の破裂。左肺穿孔による気胸状態、動脈の破裂、及び剥離が多数。

（くそが……）

動く事を最優先にハルユキの体は作られでもしているのか、骨と心臓は無事。

しかし、それを除けば大型トラックに轢かれたかのような重体だと言っていい。その上、状況は依然として変わってくれない。変えられない。

いや、状況は変わっている。ただこの壁の中だけが凍りついたように何も変わってくれない。

「成るほど成るほど。この壁の外に出たいがこの壁は壊せない。また面倒くせェ状況だな」

タウロスの遊びのような一撃とはまるで違う。
タウロスのそれを金槌の一撃だとすれば目の前の化物の一撃は戦車砲のそれだ。

威力も違うが、何よりただ純粋に殺す為だけに練り上げられた力がそう喩えるに相応しいと思った。

襤褸切れを巻き付かせただけの様な格好は何とかローブだと誤魔化せるような物でしかなく、それも今はタウロスの血に染まって町を歩けるような物ではない。
肌は病的なまでに白く、しかし見えている部分だけ見てもとても病人の体とは思えないほど引き絞られた体だった。

好き放題に伸ばしたしわがれた白い髪も後ろは肩甲骨の辺りまで伸びて、前髪は顔の半分を隠し、時折髪の間から真紅の瞳を覗かせている。

その目がさらに細められ、さぞ愉快そうに口の端が吊り上りこれまた病的なほど白い歯が見えた。

「いいねェいいねぇ、相変わらず御人好しで大いに結構。俺も思う存分人で無しになれるってもんだ」

一先ず、口の中に溜まっていた血を無理やり飲み下した。

自分の体がどういう造りをしているかは知らないが、材料さえ残していればきっとどうにか修復するだろう。幸い背中の出血も止まってきている。

「お前の……相、手をしてる、暇、はねぇよ。他……当たれ」
「ああ、取り敢えずはそうしよう。このまま殴り続けてもお前は死ぬまで抵抗しそうだ。今更お前に死なれちゃ悲しくて死んじまうよ」
「乙女……かよ、お前は」
「ああ、そうかも知れねぇ、夢見がちで一途な所はな」

そして、好意的な敵意を剥き出しにしたまま、ラストは楽しげに告げる。まるで、先日読んだ小説の内容を楽しげに伝えるように。

「だから、お前の為には如何なる犠牲も厭わないんだぜ？」
「――ラスト……！」
「何だ、名前まで憶えてたのか」

忘れる訳が無かった。

出会ったのは半年前。旅を始めて間もない頃だったが、ここまで世界を見てきた中でこいつほど印象にこびり付いた人間はいない。

「まあ、状況がどうだか考えるのも面倒だが、一つ言えることは――」

古龍を肉弾戦で圧倒するほどの暴力を撒き散らし、そして何より、こんな平和な世界でここまで理解が追いつかない人間はハルユキの記憶には他にいない。

そして何より印象的なのは――。

「ここにいる人間全員殺せば、二人きりに為れるんだろう？」

不吉な血の匂いと、破滅の香り。

◆

ヴァーゴがオフィウクスの表情に凍り付いていた時、不意にタウロスが砂塵の中に飛び込んだ。

「タウロス……！？」

その唇はオフィウクスと同じように歪み、しかし何処か身に過ぎる喜悦を表している。

その姿は砂塵に呑み込まれて消えていく。追いかける事は誰もしなかった。オフィウクスは微笑を保ったまま成り行きを見守っているし、他はこの砂塵の中にわざわざ踏み込もうとは思わなかった。

何しろ、未だあの鬼の仔のような化物がこちらに睨みを利かせているのだ。

――そして、幾許か後。

ぎちり、とどこか遠くで音がして、同時に。黒髪の怒りの視線が僅かに緩み。

再び、世界が変わった。

「……！」

臭う。酷い臭いだ。

夥しい量の血の臭いを、じくじくと侵食して別の何かに変容していく。

ヴァーゴは直感する。

状況が変わった。

この化物連中の中では一番弱いという自負があるせいか、危険には敏感だった。

何しろ自分はこの顔まで隠した黒尽くめの衣装が無ければ太陽の下にも立てない。基本的には裏方の人間なのだ。

「な、に……これ…？」

確信があった。タウロスはもう死んだと。呑み込まれた。いや、あれの場合は喰われたといった方が良いのだろうか。

「なぁアあんでしょう？」

明らかに、第三者の声だった。

男の声だということは判るが、タウロスでもシキノハルユキの物でもない。

「……え？」

すぅっと、あれ程濃く立ち込めていた砂塵が薄らいで消えた。まるで何かにひれ伏したかのように砂の粒は地面に落ち、景色が透明度を取り戻した。

取り戻さないほうが良かったのに、と頭が何処かで悲鳴を上げる。

しかし、晴れてしまったからには、もう目を逸らす事すら出来ない。

――ぽつん、と何かが闘技場のちょうど中心に立っていた。

臭う、臭う、臭う。

鼻を庇ったところで匂いは消えず体中の毛穴から入り込んで全身を蝕んでいくようだ。

それは感覚を麻痺させ、思考を腐らせ、喉の渇きを思い出させる。

何も判らない。

素性も、正体も、何の生き物なのかも。

ただ例外的に判るのは。

あの怪物が、ここにいる全ての敵だと言う事。

転々（後書き）

感想アドバイス等いつでもお待ちしております。

遭逢

ヴァーゴがオフィウクスの表情に凍り付いていた最中、不意にタウロスが砂塵の中に飛び込んだ。

「タウロス……！？」

その唇はオフィウクスと同じように歪み、しかし何処か身に過ぎる喜悦を表している。

その姿は砂塵に呑み込まれて消えていく。追いかける事は誰もしなかった。オフィウクスは微笑を保ったまま成り行きを見守っているし、他はこの砂塵の中にわざわざ踏み込もうとは思わなかった。

何しろ、未だあの鬼の仔のような化物がこちらに睨みを利かせているのだ。

――そして、幾許か後。

ぎちり、とどこか遠くで音がして、同時に。黒髪の怒りの視線が僅かに緩み。

再び、世界が変わった。

「……！」

臭う。酷い臭いだ。

夥しい量の血の臭いを、じくじくと侵食して別の何かに変容していく。

ヴァーゴは直感する。

状況が変わった。

この化物連中の中では一番弱いという自負があるせいか、危険には敏感だった。

何しろ自分はこの顔まで隠した黒尽くめの衣装が無ければ太陽の下にも立てない。基本的には裏方の人間なのだ。

「な、に……これ…？」

確信があった。タウロスはもう死んだと。呑み込まれた。いや、あれの場合は喰われたといった方が良いのだろうか。

「なぁアあんでしょう？」

明らかに、第三者の声だった。

男の声だということは判るが、タウロスでもシキノハルユキの物でもない。

「……え？」

すぅっと、あれ程濃く立ち込めていた砂塵が薄らいで消えた。まるで何かにひれ伏したかのように砂の粒は地面に落ち、景色が透明度を取り戻した。

取り戻さないほうが良かったのに、と頭が何処かで悲鳴を上げる。

しかし、晴れてしまったからには、もう目を逸らす事すら出来ない。

――ぽつん、と何かが闘技場のちょうど中心に立っていた。

臭う、臭う、臭う。

鼻を庇ったところで匂いは消えず体中の毛穴から入り込んで全身を蝕んでいくようだ。

それは感覚を麻痺させ、思考を腐らせ、喉の渇きを思い出させる。

何も判らない。

素性も、正体も、何の生き物なのかも。

ただ一つだけ例外的に判るのは。

あの怪物が、ここにいる全ての敵だと言う事。

◆

最初に襲い掛かったのはアリエスだった。

男の足元に転がったタウロスは微動だにせず、アリエスを援護する事も無い。

「――”鉄柩（リッサ）”」

紡ぐのは鉄の箱の名。

今までの戦いに用いていた物と合わせて、闘技場中から集められた鉄の砂が空を覆う。

「――”影法師”」

それに続くは、何処からかその巨体を持ち上げた影の巨人。重量を感じさせない動きで腕を伸ばすと、ラストの体を掴んで中空に持ち上げる。

「――”鋼鐵啼（ファラリス）”」

拙くも連携という物を用いたのは無意識下でラストの脅威を感じ取ったからなのか。

持ち上げられた蹉跌は、影法師がラストを地上から１０メートル

ほど離した瞬間に、影の巨人の腕ごとラストに覆い被さった。

瞬間、思わず耳を塞ぎたくなる様な錆びれた音が火花と共に闘技場中に溢れた。

細かく振動する砂鉄の一粒一粒は、さながら鋸の様な切れ味を持って火花を散らしながら相手を粉微塵にする。

更に更に更に。

地面を削りその底から砂鉄を巻き上げ次第、ラストに叩きつけていく。

「――圧」

既に球状にすれば直径二十メートルは下らないのではないかと言うほどその体躯を増した砂鉄の巨軍は、長たる女の一声によって一息にその体を半分以下に収縮させた。

ギシリ、と鉄同士が擦れ合う音が闘技場内に響き渡る。

しかし、まだ女達の気は休まらない。

「――”影縫い”」
「――”嶺王の杭（ウラド・ツェペシュ）”」

打てば響くように、祝詞に誘われてその魔法が体現する。

影の刃は黒尽くめの女から溢れる様に沸きあがり、鋼鐵の杭は地面に待ち構える傷物の女の血と魔力を糧に。

――それぞれ膨大な物量と数量を以って、砂鉄の檻の中を余す所無く刺し貫いた。

沈黙は一瞬。次の瞬間には影はヴァーゴの足元に還り、鉄の杭は砂鉄の中に風化していく。

余りに圧力を加えすぎた砂鉄は薄く赤熱し、巨大な鉄の塊となりアリエスの支配から解放された後、今度は重力にその体を拘束され、ゆっくりと自由落下を開始し、地面を揺らして着地した。

スコーピオが黒髪を攻撃してから僅か数分の出来事。

それだけの時間で闘技場の石畳は細かに砕かれ端に追いやられ、地面は通常の高さから数十センチ降下し、舞台の中央には人の手ではとても除けられない鉄の塊が陣取っていた。

「……アリエス」

ヴァーゴの声に頷くでもなく、アリエスは鉄の塊に近寄り手を添える。

殺せていない。

ヴァーゴは心中でそう断定した。

理由としては理由として成立しないような感覚が一つだけ。

纏わり付くように毛穴から入り込んでくる不穏な空気もそのままなのだ。いや。むしろ加速度的に大きく濃くなっている気すらする。

「下がれ、アリエス」

「そうと……っあ」

いつの間にか後ろに立っていたオフィウクスに驚き、アリエスは振り向こうとする。

しかしその前に腰を捕まえられ、数歩後ろに下げられた。

「総統、何を……！」

瞬間、鉄の塊の一部が盛り上がって、その外皮を突き破った。

中から伸びてきたのは一糸纏わぬ裸の腕。鉄の中を進んできたとは思えない速度で伸びてきた腕は、アリエスの首があった場所を握りつぶした。

息を呑んだのは女二人。

笑っているのはアリエスを抱え込んでいるオフィウクスと、そして恐らく目の前の腕の主も。

見せ付けるようにゴキリと指を鳴らした後、腕はゆっくりと鉄の塊の中に戻る。

ゆっくりと、本当にゆっくりと。

まるで切り落としてくれても構わないとでも言うように、腕は暗く影の中に潜って行った。

「アリエス」

オフィウクスがアリエスを離すと同時に、アリエスの名前を呼ぶ。

何をしろと言われた訳ではない。しかし短くアリエスは仰々しい返事をすると、静かに直立したまま、目に殺気を漲らせて鉄塊を見据えた。

その視線にこめられたのは魔力。魔法の源。
オフィウクスの意思は、再び彼の男を殺し直せと言うことだった。
だからその僕たるアリエスは思考を止めてでも感情を殺してでも魔を繰る。

そして、その鉄の塊が宙に浮く。

「……命令を聞きません。どうやら制御から離れたようです」

しかし、持ち上がったのはアリエスの意思によるものではない。
原因は判りやすく、鉄塊の周りに薄く白い魔力が纏われていて、
――そして、鉄塊の下に片手でそれを支える男が居た。
何か面白い事でも思いついたのか、口は三日月形に割れ、ギヒッと判りやすい笑い声が歯の間から漏れる。

不意に。
ギチリ、と最初に音を立てて鉄塊が歪みはじめた。
どろりと形を無くすように崩れた塊は、地面に落ちきる前に持ちこたえ、収束し、洗練され、形を変えていく。

「嘘……」

身の丈を超えるだとか、その様な陳腐な大きさではない。太さはどこぞの神殿の柱よりも遥かに太く、そして大きさは闘技場の壁の高さより長いだろう。

そして、それを何に使うかなど考えるまでもない。

「――――」

聞こえさせる気も無いのか、小さく男の口から声が漏れる。

その声は余りに小さすぎてアリエス達の耳には届かないが、その口は明らかに単純な事を伝えようとしていた。

ただ。

――死ねと。

男の手の上で最終的に形をとったのは巨大な三又槍。太く、大きく、しかしそれだけの素朴な鉄槍。

それが大きく身を反らし、振りかぶられる。

「総員回避行動」

短い言葉、しかし発したのはオフィウクスだ。

金縛りにあったかのように身を固まらせていた面々が一斉に縛りから解き放たれ、全員がその危険度を察知し、迫り来る巨槍の先の延長線上から身を逃がした。

そして、凶器が振るわれる。

横薙ぎにしたわけではない。上から振り下ろしたわけでも、突き出したわけでもない。

男が選択したのは、残る最後の槍の使用法で、そして最も被害が大きくなると思われる方法。

投擲。

風を巻き上げ、唸りを上げながら巨槍は突き進む。そして、轟音と共に砂塵を巻き上げた。槍が通過した後の地面は抉れ、空気は裂かれ、その巨躯は余りの速さに霞んで引き伸ばされる。

戦いの囲いに作られた強固なはずの闘技場の壁が、今は砂糖を押し固めただけの拙い壁に思えるほどに容易く砕かれた。

しかし、槍の勢いと重量はそれだけではとても全ての力を吐き出しきれていない。

やや上方に投げ上げられた槍は客席を舐め上げるように粉砕していき、客席の半ばから建物の中に潜り込み、しかしまだ止まらない。

止まったのは、闘技場を半壊させながら外壁を突き抜け、一番近くの民家の壁に食い込んだ後。

その時には既に破壊された部分から闘技場は崩壊を始めていて、円の形になっている闘技場の壁の十分の一が崩れ落ちていた。

「あんな生き物も居るのか、この世界には」

放射状に広がった破壊の跡を見て、感慨深げにオフィウクスは呟いた。

立っているのは客席の半ばの、それも今にも崩れ落ちそうな崖の先。隣にはいつの間にか子供の姿があり、他の面々も遠からない場所で未だラストに警戒を露にしている。

「……また、想定外なレベルの奴が出てきたものだね。こんな所で偶然出会うようなもんじゃないだろうに……」

「廻されているのかも知れんな。私共もあの白い男も、鬼の仔殿を中心に」

「……まあ、彼が居なきゃ出会わなかっただろうね」

子供は肩を竦めながら、横目でちらりとオフィウクスの顔を見てそしてやれやれと溜息を零す。

オフィウクスの顔に、いつもよりほんの僅かに濃い喜色が浮かんでいた。

「どうするんだい？」

返ってくる答えをほぼ間違いなく予測しながら、レオは溜息と苦笑交じりにオフィウクスに予定調和を投げかける。

「結界はどうなっている？　ここにこれ以上部外者が混じるのは避けたい」

当たり前の質問。少しタイミングがおかしいが、闘技場の外観に深刻な変化があったのは明らかだ。その質問は集団の中心として義務ともいえる言葉だった。

しかしレオにはその言葉が、まるでこの場所この状況を尊び、汚されたくないが為に発せられたかのように感じて、そしてそれは恐らく間違いではないのだろう。

「一つ精度を上げたよ。長くは持たないけど、もうこの場所には近寄りも出来ないはずだ。万が一近づいたとしても感知できる」

「助かる。流石は我が腹心だ」
「どうも」

短く返して、次に来るはずの言葉をレオは待つ。

先の応答で集団のトップとしての責は終えた。ならば、素通りされた先程の質問の答えが返ってくる。

「では、少し言葉でも交わして来ようか」
「まさか、仲間に加えるとか言い出さないだろうね？」

レオの言葉に意味ありげな笑みを残して、オフィウクスの体が薄らいで消えていく。

その後ろには先程作り出した空間の穴。信じ難いが見えている範囲と座標に印があるならば何処にでも移動が出来るらしい。

この町に来ることが出来たのも、ラィブラの魔力を感知できるレオと協力して行った事だ。

その姿は消えながら、必ずどこかに現れ始める。

移送は一瞬。一秒の半分のそのまた半分もかからない。

既にオフィウクスの姿はラストの正面に。

◆

滲み出るように目の前に現れたオフィウクスに、驚きもラストはただ唇の端を更に歪ませる事で反応を見せた。

可視の白い何かが薄く体中から立ち昇り、それは神聖な羽衣とも陰鬱な死装束とも思わせられる。

太陽が出ているこの夜でもその存在は浮いていて、目を閉じれば残光のように瞼の裏に映りこみそうだ。

ゆっくりと太陽を背にオフィウクスに近寄りながら、強い光のお陰で濃く引き伸ばされた陰がオフィウクスの足元に届こうとしたところで、ラストの足が止まる。

「さて、初めましてだ」

言葉を聞いているのか無視しているのか、ラストはただ黙して拳を軋ませる。

それを確認したオフィウクスも返答は要求せず、ただ浮かべた微笑にほんの一握りだけ子供染みた残酷さを滲ませる。

――それで？

小さくラストの口が言葉を発する。

その頬は吊り上り、それに呼応するようにオフィウクスのそれも三日月形に歪んだ。

「何、一応この場を仕切っていてね。柄にも無いのは判っているが。挨拶だとでも思ってくれ」

一瞬だけ、両者の視線が重なる。

直ぐに両者の視線は足元に落ち、代わりに両者ともあからさまな笑みを顔に浮かべた。

キヒッとラストの歯の間から笑い声が漏れる。

くっくとオフィウクスが口の中で小さく笑う。

笑顔を保ったままラストの握られた拳が、地面と平行に持ち上げられる。

瞬く間にその腕に収束するのは、密度が高すぎて触れただけで毒されそうな純白の魔力。

拳を握った、力を入れたというだけではとても納得できないほど大きな、まるで鋼の弦を鋸で弾いたような濁った音がわめき出す。

余りに濃厚な魔力はラストの右拳を白く霞めさせ、うまく視認すら出来ない。

対するオフィウクスは、変わらずゆったり右手を前に持ち上げるだけ。ふわり、と優雅に腕を差し出す様は、ラストの所作と同じ行為だとは思えない。

それは綺麗過ぎる怪物が異常なのか、それとも粗暴に過ぎる化物が歪み過ぎているのか。

オフィウクスの背後が歪む。波打つように歪んだその奥から顔を出すのは、そのまま削りだされたような掌で包める程の小さな石。

何処にでもありそうな小石はしかし、その小さな体には耐え切れないはずの力が圧縮され内包されている。

「どうだ？　折角の出会いだ。交わせるのならば言葉でも交えたいが」

しかし、その脅威はラストに見せ付けるように解かれた。

その所作は、攻撃の意思が無い事を伝えるには十分で、そしてラスト自身もその事には気付いたのだろう。

しかし、その博愛的な行為にラストが返したのは、更なる殺意と歪んだ笑み。

祝詞も不要。

魔法ですらないのかもしれないそれは明らかにこの世のルールから逸脱したもので、ただ力を込めることの延長線上でしかないのかもしれない。

背後で先程自分が起こした破壊と劣らない破壊を見もせずに、ともすれば感心すらもなく、ただラストはその拳に力を込めて――その姿が霞んで消える。

気付けば、ラストの姿はオフィウクスの頭上。

「総統！！」

健気な忠臣の声と共に、オフィウクスの背後から鉄の槍と影の刃が飛ぶ。

空中に踊り出たラストは避けられなかったのか、いやそれとも避けようとしなかったのか。

――その刃も槍も、薄皮一枚貫通した所で勢いを失った事から考えると、避ける必要がそもそも無かったのかもしれない。

ラストの紅い目が夜の闇にも、太陽の下にも不思議と良く映える。更に大きく魔力が纏われたその腕は、太陽さえ昇っていなければ白月のように鮮やかで、

――そして、本当に月が落ちてきたのではないかと言うほどの破壊をもたらした。

轟音は当然、震撼は当然。

闘技場は哀れ、更に形を無くす事になった。

何の抵抗もなかったように地面に吸い込まれた拳は地面を砕き、捲り上げる。

地割れの伝染は闘技場の隅々まで行き渡り、何処も彼処も等しく砕き捲れ上がれ、隆起していく。

それはまるで闘技場の中心に巨大な花が咲いたかのように、不規

則に地面と壁がそそり立ち花弁と為した。

ただでさえ不安定になっていた観客席が更に崩れ落ち、盛大に音と土煙を吐き出す。

「……これはまた」

いつの間に移動したのか、地面から十メートルほどの中空に浮くオフィウクスは呟いた。

視界の中にラストは居ない。

隠れようとした訳ではないのだろうが、結果として闘技場が半壊してしまって視界は利かない。

地面には既に平坦な場所は無くなってしまった。オフィウクスはまるで危険を楽しむ子供のように表情を綻ばせたまま空に向かって割れた切っ先を向ける元地面に着地して改めて辺りを見渡す。

「凄まじいな。まるで怪物か、もしくは悪魔だ」

不意に、砕かれた地面の破片の一つが持ち上がった。

隠そうともしない気配と禍々しい殺気が、そこに何がいるか無意識に伝えてくる。

破片と言っても、小さな欠片を手の中に持っている訳ではない。”土”文字持ちの人間が１０人がかりでやっと作れるような巨大な塊。その切っ先は鋭くまるで土の巨槍のようだ。

間を空けずに、それが全力で投擲される。

対したオフィウクスがやる事と言えば、相変わらずゆったりと片手を持ち上げるだけ。

空間を波打たせて現れたのは、先程と変わらない小さな小石が幾つか。しかし今度は無闇に突撃する事はなく、オフィウクスを中心にゆっくりと円軌道を描き出す。

まるでオフィウクスを守るように周回するそれは、まず飛来してきた石槍の切っ先を砕いて、殺傷能力を殺した。

白い線が体の周りを回っているようにしか見えない速さで、石槍が十センチも進まないうちに別の小石が下から石槍を穿った。

顎先に拳を叩き込まれたように、石槍が腹を見せる。

しかしそれでも、勢いが止まらない石槍にオフィウクスは右手を

翳す。

「狭苦しいのは苦手でね」

じわり、とその右手から今までとは違うベクトルの何かが滲んだ。

元より色を持たない魔力が変換されて、出来上がったものもまた色がないのなら感じれるはずもない。しかし、地面に向けられたその手からは、どうしても不吉なものを感じざるを得ない。

オフィウクスの魔力が出鱈目に壊された闘技場の隅々に行き渡るまで、要した時間は一秒も無かった。

そして、地面が大きく縦に揺れる。

オフィウクスが行った事は、説明するなら簡単だった。

ラストとは逆の事をやってのけたのだ。

ラストの拳でひび割れ捲り上がった地面を、上からそのまま押し戻した。

まるで空気が巨大な重石にでもなったかのように、更にその身を

崩されながら闘技場の地面は”平らに馴らされていた”。

それでもしかし、闘技場が元に戻ったとは言いがたい。

壁はほぼ全ての場所に罅が入り、今もぼろぼろと崩れている場所がある。

床にぴっちりと嵌っていた石畳は、既に砂利に成り下がった。

ほんの僅かに湿っていただけの普通の地面は、砕かれ押し潰され今や砂場と言ったほうがいい。

「言葉を交わす、か。成程、どうも私は無粋だったらしい」

慣れない事をするものではない、溜息を付く。

しかし、それも結局は言葉に過ぎない。オフィウクスも歩み寄るラストに返事は期待していなかったし、ラストも殺意を笑みの中で捏ねるだけ。

足元まで伸びた長い襤褸切れの外套はあまりに軽く風に揺れ、亡霊と並んでもそう違和感は無いかもしれない。

「――お前は」

風に乗って、ラストの声がオフィウクスに届いた。

「悪の怪物か、それとも正義の味方か？」

淡々と告げたその言葉に、ふざけた様子もましてや冗談を言ったようにも感じられない。そして、ラストの足はいつの間にか止まっていた。

答えを待っている。

言外にそう伝えていた。

「知らん。善だ悪だと拘った事は無い」

オフィウクスの言葉に、つまらなそうに鼻を鳴らすとラストは再び歩を進め始める。

ゆっくりと、走るわけでもなく近寄ってくる。しかし、一歩毎に身に纏う魔力と殺意の濃さは目に見えるほどに増していく。

しかし、その顔は曇ったまま。

対極的に口の端を吊り上げているオフィウクスを見据えて、

「が、傍から見ればそれはもう悪党だろうな」

――そしてその言葉に、またぴたりと再び足を止めた。

数秒の後。

キヒッとラストの歯の間から笑いが漏れる。
吊られるようにオフィウクスも口の中で小さく笑う。

「――ギャはははははははっはは！！！」
「――っハハハハハハハハハハ！！！」

静かな闘技場の中に、両者の笑い声が酷く閑散と響いていく。可笑しくて可笑しくて堪らないと何処かが捻れて歪んだ二人は外野を置いて、目の前の享楽に歓声を上げる。

「悪党か、成程。――なら、殺すぜ？」
「ああ、実を言うと私も会話より殺し合いの方が得意だよ」

顔に笑顔を、視線に熱を。

そして拳に掌に、彼等は殺意を躍らせる。

最凶、最狂

音も無く、ラストの足元の砂が波打ちながら除けられた。

それは足元からも迸る魔力の奔流を受けて押し流されただけであったが、その魔力のあまりの禍々しさに砂が必死になって逃げ出したかのようにも見えた。

今までの事は全て御遊戯だったのかと疑いたくなるほど、その光景は常軌を逸していた。

あの力の元で拳を握れば、それは破城槌となり、体は城壁となり、全ての意思は狂気に変わるだろう。

技と言う物すら見当たらない。しかしそれは確かに強者の証。

そして、瞬きをするにも足りない程の時間の中でラストの姿が掻き消えた。

残っているのは白い魔力の残滓と、蹴り足の勢いで噴火のように空高く吹き上がった砂と砂利だけ。

「――え？」

気の抜けた声を出したのは遠く離れた客席にいたはずのヴァーゴ。

闘技場上で繰り広げられていた今までの戦闘は、二人の様子から明らかに小手調べでしかなかったのに、それさえヴァーゴの常識か

ら超越していたものだった。
だから、怯えながらも、戦慄しながらも、何処か遠くにそのやり取りを見ていた。

正直に告白すると、ヴァーゴは今もいつ崩れるかわからない足元のほうに注意が行っていた。

だから。
目の前にいきなり現れた男にただ呆けた声を上げる事でしか反応を示せなかったのだ。

とは言え、他の人間もそう変わりはない。レオやスコーピオでさえも突然現れたラストに視線を向けるだけ。

一二三四五六、と。
その化物は、ヴァーゴ、アリエス、スコーピオ、レオ、ジェミニ、レイをそれぞれ指差しながら確認していく。

「――あと、七人」

その言葉を皮切りに、顔に笑顔を貼り付けたままラストの体がゆらりと揺れたようにヴァーゴは錯覚する。

実際には身に纏った襤褸切れが風に揺れた事と、体中から例の白い魔力が吹き上がり、陽炎のようにラストの体を歪ませた事が原因。

そしてそこから、衆人の視線を身に受けながらラストがその拳に白い魔力が集約させ、ギシリと指を軋ませるまで一秒の半分の半分の半分ほど。

当然、ヴァーゴはまだ体を凍らせたまま。

最初の標的を決めたのか、ヴァーゴに向かって地面を蹴り出そうとラストは体を沈めた。

「――ヤンチャが過ぎるだろう？」

しかし、また唐突にラストの後ろに影が揺れる。

ぽん、と。

ラストに対するには、あまりに緩慢な動作でラストの右肩に左手が乗った。

無遠慮に乗せられた腕の持ち主は見目麗しい金髪の美丈夫。

今度は言葉も笑顔も交わす事無く、ただオフィウクスの殺意が魔法となってラストに圧し掛かった。

一瞬でラストの体は掻き消える。

ヴァーゴは知っていた。

いや、知っていると言うよりは以前タウロスが屈服された光景から推察したと言うほうが正しいだろうが、目の前に広げられた光景にその推察は確信に変わる。

重力。

オフィウクスはその力を魔を持って手中にしている。

ラストの姿がヴァーゴの視界から消えたのは、堪えようとしたラストの力にただ客席の地面が持たなかっただけ。

依然として隠し難い破滅の気配は階下から吹き上がってくるようだ。

「――下がっていろ」

放り投げたかのようにぞんざいな言葉がヴァーゴに送られる。

言われるまでも無く、ヴァーゴは足元の影に沈みこんで体を移動させた。

瞬間。

ヴァーゴが立っていた場所が。

いや、オフィウクスが居た場所も。
否、闘技場の一角そのものが。

下から襲ってきた巨大な何かに根こそぎ吹き飛ばされた。

「な……！」

一瞬送れて崩れた客席の破片の影から顔を覗かせたヴァーゴが見たのは、白い腕。

光る訳でもなく、ただ薄らと透けて見えるそれは光だとも霧だとも喩えることはできない。

ラストの体を包んでいるあの魔力。今まで見た中であんな物はそれしか見覚えは無い。それが朧気ながらも具現化したものだとヴァーゴは確信する。

月でも掴んで握り潰そうかと企めるような巨大な掌は、空が厚い灰色で覆われている事に拗ねてしまったかのように薄らいで消えた。

残るのは巻き上げられた大小さまざまな破片と、いつ身をかわしたのか、その破片の最高到達点の更に一つ上で地上を睥睨する金髪の男。

灰色の夜を背に、それはまるで魔王のように。上空の風に煽られて乱れる長髪は、まるで地上の何もかもに手を伸ばす強欲さを表しているかのよう。

その強欲の手に捕まったのか、ぴたりと宙を跳んでいた破片の全てが静止し、そして一斉にオフィウクスの元に集いだす。

同時に、折り重なった破片の山の中心が吹き飛んで孤高のそれが姿を現す。ただ純粋に殺意のみの視線を空に向ける様はさながら魔獣。

そして次の瞬間には、魔王の背後の空間が一斉に歪み、そして魔獣は天を衝かんと跳躍するために身を屈ませる。

その歪みから顔を出し一斉に主の元に集うのは、先程と同じただの石。しかし、今度は一つ二つではなく、大小さまざまな――拳大の石から、果ては直径一メートルほどある岩まで。そしてやはり、その一つ一つには触れる事も躊躇われるような神秘の欠片を内包している。

その石が、一つ、二つ。いや、十、二十。否、更に今この瞬間にも、石の群れは増殖を繰り返し、その数はもう一桁を超えて二桁を越え三桁に達し、そして恐らく今もう一つ桁を繰り上げた。

幾千の石が織り成す空は、まるで塗りつぶされた灰色の空に星だけが帰ってきたかのよう。

「――”零星（ランス）”」

そしてその言葉によって、星空はただの凶器に成り下る。

一番星が斜め上から一直線にラストへと突進する。
ラストはそれを見極めた挙句首を逸らして”それを避けた”。

所詮は拳大の石。一筋の線にしか見えないほどの速さを誇ってはいたが、それに反応できるなら僅かに体をずらすだけで避ける事は出来る。

結果として、石はラストの髪を数本巻き込み、後は地面になけなしの体当たりを叩き込むだけ。

瞬間。

ラストの背中に爆風が襲った。

髪と襤褸が大きくはためき、吹き飛ばされないように足の指で噛んだ地面が軋む。

ラストの背後に広がっていたのは、放射状に広がった破壊の跡。

それはただでさえラストに砕かれた闘技場を更に痛めつけ、地面を削り破片を吹き飛ばし更地にしている。

それぐらいの威力がある事は判っていたのだろう。ヴァーゴとアリエスの攻撃を物ともしなかったラストがわざわざ回避行動をとった事からもそれは伺える。

「――”流星の軍勢（アヌ・ヘタイロイ）”」

そして、王の指揮が振られ、一切の躊躇いも無くその身を捧げんと星が殺到する。

一粒で町の一区画は破壊しうるような威力。数は幾千。――そして、敵は一人。

ただ一方的に暴力に晒されるはずのその一人は、しかし、愉しげに笑いながら地面を蹴りつける。

不安定な足場。下から上に移動するための重力の弊害。

降ってくる星達よりも明らかに速く空を上るその姿は、そんな物を一切感じさせず、そもそも空気の抵抗さえ無視しているかのよう

だった。

しかし、正面からぶつかり合うとなれば、その速さは寧ろより大きい衝撃を体に負担させる事になるだろう。

しかし、既に身は空中。速度を緩める事さえ簡単ではない。

しかし、ラストの頬は相変わらず吊りあがったまま。

しかし、最早ラストの視界一面が箒星となったオフィウクスの殺意に覆われている。

――そして、ラストはただ馬鹿正直に、上肢に下肢にその体躯に、ありったけの力を込める。

まず、一番先端にあった石を出会い様に蹴り付けた。

その反動で、ラストはほぼ真横に体を滑らせる。

そしてそこには二つ目の石。

また、今度は斜めに蹴り付ける。

その先には5番目の石。

また蹴る。

十五番目。蹴る。

三十八番目。蹴る。

七十七番目。蹴る。八十一番目。蹴る。九十九番目。蹴る。百十五番目。蹴る。百四十五番目。百九十九番目。二百十三番目。三百一番。三百八十九番。四百二十三番。五百七十六。六百五十四。八百三十二。

蹴る。

すり抜け、蹴り上げ、ジグザグに空を上っていく様は正に渓谷を

駆け上がる魔獣のよう。

――そして、千と二百十八番目。
蹴り砕いて蹴り落とす。

ふわりとラストが地面を蹴った力が零になり無重力を覚えた時、
オフィウクスはすぐ目の前。
既に右手は拳を握り、ぎりぎりぎりぎりと音がする。

そして、オフィウクスに向かってその拳が振り被られた。

「――千と、二百十九だ」

しかし、王の手の中に最後の伏兵。

目の前にあったラストの顔面に、オフィウクスは手の中に持っていた最後の石を叩き付けた。

小さいと言っても最初の石と大きさは同じほど。

ほぼ零距離からの発射にラストの頭は弾け飛び、体ごと地面まで

吹き飛ばされる。

――かに思われた。

ともすれば頭蓋骨ごと粉砕したのではないかと言うほどの勢いで吹き飛ばされたラストは、後ろに折られていた首をぐりっと生々しく元に戻して、オフィウクスに視線を戻した。

その歯と歯の間に挟み込んだ、箒星を粉々に噛み砕きながら。

唐突に、オフィウクスのバランスを崩すように足を引っ張る感触。

見下ろしてみれば、それは白い腕。

薄く溶けるような色のそれは、生身でも無機物でもなく、しかし決して身に覚えが無いものではない。それがラストの腕から続いているのだから尚更だ。

足を引く力が強くなったかと思えば、オフィウクスは下にその反動でラストは上に立場を入れ替え、そして既にその右腕に渾身の力を込め、振り被っている。

避けられない。

そう判断したオフィウクスは、やはりただ腕をかざす。

これに反応したのは、背後から生み出された箒星とは別に、舞っていた破片。一瞬でラストの腕に体に顔にまで纏わり付き、動きを止めようと健気に震える。

しかし、とてもではないがそれでは止まらない。止められなどしない。

更に魔力が増大し、右手も纏わり付く破片を物ともしないように更に引き絞られる。

そして、獣の牙が王の身に届く。

その拳の強さは等しく速さとなり、それに打ち抜かれたオフィウクスも、先の箒星のように一筋の線になり地面へと叩き落された。

しかし、素直に殴られたわけではない。本来なら重力に従い加速していくはずのオフィウクスの体は、まるで重力が何倍もの力で逆に働いたかのように加速度的に落下速度を落としていく。

それでも勢いはほとんど殺せてはおらず、オフィウクスは地面に叩きつけられ、砂塵を撒き散らす。

「――”木星（ジュピタ）”」

しかし、オフィウクスはその膝すら地面に付ける事は無い。

それどころか、その顔に浮かべていた笑みは猟奇的と言えるほど深く、微笑とはとても呼べないほど凶々しく歪んでいる。

足から着地してオフィウクスは力尽くで体を支えると、”翳したままだった”右手を振る。

ふっと、世界が陰った。

同時にラストがその身に覚えたのは強烈な拘束感。

その拘束している力が重力で、そのせいで自分の体の落下が止まっていると。そう気付いた時には、それはもうすぐ背後まで迫っていた。

巨星。

いや、大きさは星と言うにはまだ程遠い。しかし、今までの石と比べると、思わず一瞬思考が止まってしまう。

いきなり現れるには余りに巨大で、じっと見ていると遠近感が狂ってしまいそうだ。

とりあえず、その星の影が闘技場の大半を覆っているとなれば、

少なくともその存在を軽んじる人間はいないだろう。

そしてそれは堕ちてくる。

先程の箒星と勝るとも劣らないほどの速度で落ちてくるそれは、物理的なエネルギーはもちろん、多大な魔力もふんだんに詰め込まれている。

空中に拘束されたラストは全力で殴りつけた技後硬直もあって、それを無防備に背中で受け、そしてそのまま地面と巨星の間に押し潰された。

轟音。

震撼。

多大なエネルギーは今度こそ跡形も無く闘技場の北側を踏み砕く。

余ったエネルギーが空気を揺らし、豪風となって土埃や石や岩。

更には民家ほどの大きさがある破片さえも、問答無用に吹き飛ばした。

それは、さながら爆心地。

邪魔なものを粗方吹き飛ばした、その場所の中心地は見通しが良く、その中心には見上げるほどの魔力の塊が鎮座している。

「――――」

そして、間髪を入れずにそれが始まる。

ぎりぎりぎりぎりと鋼の弦を掻き鳴らすような耳障りな音を立てながら、地面に落ちてクレーターを作っていたそれが震えだす。

始まったのは、終わり。

星はその身を崩しながら収縮を始める。その身体を。纏う重力を。そして、星としての命を。

最初は赤熱しだして、次に黄色、白。

その色は膨張し、そして逆に星自身は収縮し、次第に分離していく。

それらの色は全て炎の色で、体積を犠牲にして徐々にその温度を上げている事を示している。

――しかし、そこでオフィウクスが翳していた右手が下りた。

そして純白に燃え上がっていた炎が一瞬で最初の赤色に戻って行く。再び爆発が起きるが、吹き飛ばすものも無く、ただ空気だけを震わせてクレーターの中を焼き尽くしていく。

◆

「あのね、一応今ここに居る事を隠してるって言うのは理解してる？」
「ふむ、出来る限り規模は小さくしたつもりだが」

いつの間にそこに居たのか、子供――レオが、オフィウクスの背後で燃え盛る炎を眩しげに見つめながらそう言った。
その声を背中で受け止めたオフィウクスは、そこに居る事が判っていたのか、前を見据えたまま滞る事無く言葉を返す。

「あれでかい？　ここを死の大地にするつもりなのかと思ったよ」
「そんな事をしては、私も死んでしまうよ」
「またまた、今の身体じゃ君は死なないでしょ？　死ぬのは僕らだけ」
「いや、きっと名も知らぬ怪物殿も生き残るのだろうさ。攻撃を止めたのはそもそもそれが理由だよ」

ぴくんと、その言葉にレオの肩が揺れる。辟易したような顔で、視線を炎の中に向け、次に冗談を言っているのではないかとオフィウクスの表情を見て、そしてため息を一つ付いた。

「……それはつまり、……そういう事？」
「そういう事だ」

「ああ、止め止め。僕は逃げます。君達ほど人間止めてはいないんだ。助太刀も出来ないし、そもそも戦うのも好きではないし」

構わんさ、とオフィウクスが告げると同時に、前方からの光が一瞬で消える。

瞼の裏には煌々とした白い残光が残っているが、目の前に既に炎は存在しない。

酷い暴風雨に晒されてもこうは行かないだろうに、まるで平伏してしまったかのように、炎は姿を隠していた。

平伏させたのは、クレーターの中心で変わらず、――いや、ほんの少しだけ笑みを深くした白い魔獣のような男。

身に纏う白い魔力は防護する機能もあるのか、そこだけ燃え残ったかのようにゆらゆらと揺れている。

地を蹴れば、何の助走も無いにもかかわらず一跳びで焼け焦げた地面を飛び越える。

その身体には傷一つ無く、服の端さえも燃えていない。

「それでは――」

既にレオの姿は無い。

闘技場の上にいるのは、相変わらず何がおかしいのか静かに笑い

合う男が二人。

「――続きをやろうか」

愉しげに告げたオフィウクスに対して、生理的に嫌悪感を表すような笑い声をラストも漏らす。

ラストはゆっくりと右手を上げた。

「……？」

そして、間髪を入れずにその右手が縄でも引き寄せるかのように引かれる。

「あっ……！」

背後から声が聞こえて、そこで初めてオフィウクスはラストの右腕から薄く魔力の腕が続いている事に気付く。

伸縮自在な魔力の腕。

そして、聞こえた声は恐らくスコーピオの物。自分の玩具を無理矢理大人に奪われた子供の声によく似ている。

「まず一人」

一瞬後、ピクリともしない着物の女の姿が白い手に鷲づかみに浚われて行った。

そしてそれを迎えるのは、身体を命を何もかもを、打ち砕かんとする破滅の拳。

◆

ずん、と町ごと地面を揺らすような振動がスコーピオの足元を襲った。

オフィウクスが放った魔法は闘技場とその下の地面ごと、突然現れた白髪の男を押し潰していく。

「酷いね。化物だ」

「どっちが？」

そりゃどっちもだよ、とレオは肩を竦めて見せる。

「あーあ、やばいって。結界解けちゃうって」
「そうなの？」
「いや、嘘だけどね」

けらけらと笑いながらのたまう様を見て、スコーピオは人間にも色々居るのだな、と何処か遠い感想を思う。

オフィウクスもそうだし、目の前のレオもそう。あの白髪も、一人ひとりがまるで別々の生き物のように多種多様で、理解できないものが多い。

そして何より、あの黒髪が。

スコーピオはまた震えそうになる手で、立ち尽くしているレイの手を強く握った。

「終わったかなー？」

レオは目の上に手を翳して燃え盛りはじめた炎を見ながら、そう呟くと首だけをこちらに向けた。

「じゃ、僕ちょっと様子見てくるから」
「私も行きましょうか？　退屈なの」
「ん～。ま、ここに居てよ。すぐ帰ってくると思うからさ」

それだけ言うと、その姿が見えなくなる。
そもそも実体ではなかったのだろう。そしてこれからオフィウクスの元に向かう身体もまた偽物だろう。

改めて、人間とは難儀だ。
同族内では気に入っている固体もあったが、その難儀さ、難解さが気に入ったのだろうか。まあ理解できなくも無い。

「ただいま」
「あら、本当に直ぐなのね」

あっちに行ってからほんの一分かそこらと言った時間で、やっぱりレオの虚像が元居た位置に現れた。

「まだ続くんだってさ」
「そう」
「……君。どうかしたのかい？」
「いいえ、どうもしていないと思うけれど……？」

その言葉が終わって直ぐに、燃え盛っていた炎が立ち消えた。その中心に佇む男は、何処か消え残った白い炎にも見える。

とん、と何の助走も無しに黒く焼け焦げた地面を飛び越え、ラストはオフィウクスの正面に。

それを見て更に笑みを深くしたオフィウクスとの距離は二十メートルほど。

「スコーピオ！！」
「え……？」

突然、レオの鋭い声。

呆けた声を出しながら、レオの顔を見る。

するとレオが自分の方を指差していたので、暢気に視線を往復させると、そこに白い腕があった。
え、ともう一度呆けた声を出している間に、強く握っていたはずの手が離れて、レイが連れ去られていた。

「い――」

ぞくりと喉が震える。
レイを手放したくない。それもある。しかし、今は誰かに手を握っていてほしかった。

「嫌ぁッ！！」

我に返り、空中を引きずられていくレイに手を伸ばす。
そして、再び震え始めている自分の手に気付いた。

そんな手で何かを捕まえられるはずも無く、震える手は虚しく宙を掻く。

「あ、あ……！」

震える。
手が、足も、首も、本能後と何かに脅かされているかのように。

原因が判る。
視線を上げる。

忽然と。

名も知らぬ白髪と愛しい玩具との間に、黒髪の人間（オニ）が立っていた。

この場に立つ、その殆どに殺意を向けて。

最強（前書き）

本当は、もう一小節書きたかったけど、眠い、限界、夏休みはまだか……！

白い何かの直撃を顔で受け止め、ユキネはくぐもった悲鳴を上げた。
何しろ立っているのは空中だと言う事もあって、ユキネはパニックになりながら顔に張り付いた白い何かを引き剥がした。
銀色の鱗に白銀の毛。そして、極め付けに「ギィ」と切なげな声。
「ギィ、だったか……？」
〈はい。覚え易い、良い名前です〉
鳴き声をそのまま名前にしたのはどうも手抜きを感じさせもするが、覚え易くそして同時に親しみ易いと言う事だ。
ユキネは一度撫でた事があるくらいしか接点はなかったが、不思議なほど恐怖は感じない。
恐怖は無いが、空中に立っているユキネにのしかかる格好なのでかなり重い。短い期間にも成長して、全長五メートルはあるのだ。
「ど、どうしたんだ……？」
ギィ、ギィと袖を引っ張るギィの身体は良く見ると所々に傷が入っていて、鱗が剥がれている所もある。

〈付いて来い、と言っているのではないでしょうか？〉
「ど、何処に行けばいいんだ、ギィ？」

よほど聡いのか、その言葉を聞いて弾かれたようにギィは顔を上げる。
直ぐに袖を引っ張っていた離すと、翼を広げる。
その場に停止する事は出来ないのか、一度下降してユキネの周りを一周した後、こちらに視線を向けてから飛び去っていった。

「……追おうと思う」
〈そうですね。他に手掛かりがある訳でもありません〉

その言葉に一つうなずくと、城に向かって飛んでいくギィを追って空中を蹴りつけた。
走ると言うよりは、連続で跳ぶ様な感覚でギィに接近する。速度を落としてくれていたのか、直ぐにその隣に並ぶ事が出来た。

その横顔を見て、ユキネは目を見張る。
それほど竜と言うものを見てきた訳ではないが、その横顔には確かに感情と言うものが存在しているかに見えたのだ。

〈ドラゴンは人間とそう変わらない知性を持っています。まあ、それは異常な事ではありますが……〉
（異常……？）
〈同じ程度の知性を持った、しかも全く別の生命体が然したる争い

も無く共存を維持している事が、です〉
（それは、良い事じゃないのか……？）

もちろん良い事です、とメサイアが言うと同時に、ギィが飛行高度を上げた。
城の壁に沿うように上昇していくギィを追って、ユキネも壁と空を交互に蹴りながら高度を上げていく。

飛び出たのは天井まで吹き抜けになっている中庭。一切の迷いも無くギィはその中に飛び込んで行った。

「どこだ……？」
〈あちらです。あの、通路の奥〉

メサイアの言葉の直ぐ後に、メサイアが示した廊下の奥から例の鳴き声が聞こえた。

「ここは……」

通路を進んで、豪華な赤い絨毯が敷かれた階段を上がった先。
辿り着いて見上げたそこにあったのは、これまた真紅の大きな扉。
その下でかりかりとギィが扉に爪を立てていた。

〈入ってみましょう、主〉

「……鍵が掛かってる」
〈壊しましょう、主〉
「えー……？」

勝手に開けるのもどうかと思ったが、結局緊急事態だと言い訳をして、剣を構え斜めに一閃した。
切った部分を軽く押すと、扉の下から一メートルほどに小さな穴が出来る。切羽詰った様子で飛び込んだギィの後を追う。

そこにあったのは、最低限の体裁だけを保った質素な部屋だった。ただ広さだけは無駄にあり、部屋の中心には巨大な長卓が置かれている。

「ギィ、ここに何が……」

ユキネは部屋の奥に行ってしまったギィに声をかけようとして、それを見つけた。

机の上に無造作に置かれた一振りの剣。

手に持ってみるとずしりと重く、柄を持って引き抜くと真紅に光るその刀身が露になった。

「これ、ノインの剣だ」
〈どうやら、彼女の私室のようですね〉
「みたいだな……」

物珍しさから何となく部屋を見渡そうとして、そして、またカリカリと爪が何かを引っ掻く音が鼓膜を揺らした。

メサイアの言葉を聞く前にそこに駆けつけると、案の定ギィが一心不乱に壁に爪を立てていた。

〈魔術的な仕掛けが施してあるようですね……。高度で古い物です〉

「……どうする？」

実際に手を触れると、感触は普通の壁と変わらない。叩いてみても分厚い壁の音しかしない。

しかし、ほんの僅かに、触れた掌の裏側に何か動いているような、妙な感覚を覚える。

〈解除呪文（ディスペル）は難しいでしょう。かと言って正当な解錠法に当て嵌まりもしないでしょう〉

しかし、とメサイアは続ける。

〈我が主の前では紙の城壁に等しいでしょう〉

「持ち上げすぎだよ、メサイア……」

最早言われなくとも、やる事は判る。

そして既に部屋の扉も叩き切っている。ノインにはうるさく言われるかもしれないがそれについては後で考えよう。

〈集中して。深く深く〉

声に応じて目を閉じる。

とは言っても、やる事はそう難しくは無い。ただ目の前に向かって何の捻りも無い魔力を流し込むだけ。

右肩に付された”白”の文字が部屋の中を照らしだした。

どこか自分の力を切り離したような感覚。

失う、と言った感じではなく、まだ無駄になってしまった部分があったと、そちらの感覚に近い。

恐らくこの力の能力を引き出しきってはいないのだろう。

しかしそれでも、目の前の壁は悲鳴のように甲高い音を立てながら弾けとんだ。

「扉……！」

弾けとんだのは、まるで壁紙のように薄く壁に張り付いていた何か。

引き千切られ、飛散した壁紙は地面にたどり着く前に空気に溶けていく。そして、その後に現れたのは無骨な木の扉。

懊悩する必要は無く、壁に翳していた右手でそのまま壁を押し開いた。

「ここは……？」

例によって脱兎の如く駆け出したギィを傍目にとりあえず現れた通路の確認をする。

地下牢のように冷たい空気。しかし窓すらないにもかかわらず湿った空気は感じられない。

延々と続く通路の先は暗闇に溶けていて、全速力で走っていくギィの白銀の身体が既に米粒のようになっている。

「あ、待てギィ！」

別れ道などがあれば目も当てられないので、ユキネも通路を走り出した。

追い付いたのは、ギィが止まってから。

幸い別れ道などは無く、数分もしない内にそこにたどり着く事が出来た。そこと言っても、ただの通路の途中だったが。

「……進まないのか？」

足を止めたギィは、やっぱりただギィと鳴く。しかし当然それでは意思は伝わらない。

〈主……！〉

「……いい。判った、何となく」

相変わらず闇に溶けた通路の先。その先に何か不吉な物を感じる。

時間と手間と悪戯心と嗜虐心を大量に盛り込まれた何かだ。この通路の最終地点はここで合っている。

感覚に任せて目の前の壁を押すと、その指がそのまま沈み込んだ。音も無く目の前の壁に切れ込みが入り、扉が慣性だけで開いていく。

中は小さなくぼみの様になっていて、直ぐに行き止まりになって

いる。が、目を細めてみると僅かに光の線が切れ込みのように走っているのが見えた。

「……入ろう」

今回だけは先に行かずその場に留まっているギィの頭を撫でて、先を促す。

ギィが翼と尻尾を折りたたみながら身体を窪みの中にねじ込むと、直ぐに後ろの扉が閉まり、続けて前の壁が音も無くせり上がって行った。

いや、はたして本当に無音だったのかは判らない。

一目見る分には重々しく分厚い石の壁だったし、結構な速さで開いたのだ。無音と言う事はないだろう。

しかし、少なくともユキネの意識の中にすらそんな物は存在し得なかった。

ノインの部屋の隠し通路を抜け闘技場に現れたユキネの目に最初に飛び込んできたのは、巨大な惑星。

余りに場違いな空気を振りまきながらそれは地表に向かっていた。

あまりの巨大さと非現実に、思考が止まり遠近感さえもつかめない。

〈――主！〉

「……え？」

メサイアの声にユキネは我に返る。

何か言われた訳でも、指で指し示されたわけでもないのに何かに導かれるようにユキネの視線が移動して、――それを見つけた。

見慣れた背中。見慣れた黒髪。

「――ハル？」

しかし、纏う空気はまるで人外のそれ。

両腕で抱えたノインはぐったりとしたまま動こうとはせず、ハルユキはその場で膝を突いている。

嫌な想像が頭に浮び、脳裏を冷やす。

〈主。違います、良く御覧に〉
「……動けないのか」
目を凝らすと、薄く何かの壁が二人の周りを囲っている事に気付く。
「あれは、ハルユキでも壊せないのか……？」
見た限りではそう頑丈そうな壁には見えない。
〈いえ。相性の問題でしょう。搦め手に捕まってしまったのかと。しかし主の力ならば救出は可能です〉
「……メサイア」
絞り出した声は今までに無いほど険が混じっていて、しかしその事にあまり驚きも無い。
〈――はい、ぶっ壊して差し上げましょう〉

ああ、と小さく頷くと同時にユキネは魔力を身体に巡らせる。

身体の中に飽和しきった魔力は剣に流れ、そこも満たした後は空気に漏れ出して形を作っていく。

ユキネの身体は重力には縛られない。空中さえも縛れない。

だから一直線に。

最短距離で走り抜ける。

気付けば、ハルユキの姿は直ぐ目の前に。ただ、薄い肉色の壁が邪魔をしている。

それを、逡巡すらなく切り裂いた。

「え……？」

ユキネの声は驚きに染まる。

既に目の前にハルユキの姿が無くなっていた。

残されたのは喉から体内に流れ込みそうなほど濃厚な殺意。

どろりとした感触さえ残しそうなその殺意は。悪意は。害意は。吐き気を催させる。

仲間を、大切な人を解放するために振るった剣が。今はパンドラの箱を開けた鍵のように見えた。

◆
◆
◆

浚われて来たレイの体と、既に振り下ろされ始めていたラストの拳の間に、ハルユキは体を捻じ込んでいた。

左腕でレイを受け止め、右手で今まさに最高速に達したラストの拳を手首を捕まえて停止させる。途端に慣性が風となり、ハルユキの髪を派手に揺らし、地面の細かい砂利も吹き飛ばした。

そこで初めて、ラストは目の前に異物が入り込んだ事を知る。

「――――ッ！！」

腕を振り解き、後ろに跳んだのは本能的な回避行動だった。

しかし、そこでがくんと身体が傾き、視界が乱れる。無意識な回避が失敗に終わり、更にラストの意識は混乱していく。

何の事はない。

ただ振り解けなかっただけだ。

本能的な行動だったが故に振り解かんと全力で力を込めた右手は、ハルユキの右手を振り解く事が出来なかった。

いや、それどころか、空中にあらゆる角度から何十本もの杭で固定されたかのように一寸たりとも動かなかった。

当然後ろに跳ぼうとした力も跳ね返り、前につんのめる様にラストはその場でふらつく。

右手は離され、しかし反動でととっと数歩前に歩を進めさせられる。

「ハ――」

じわり、とラストの頬に汗が滲む。その顔に浮かんだ笑みは、もう痙攣しているようにしか見えない。

そこに滲んでいるのは愉悦よりも呆れの方がよっぽど色濃く、そして確かにささやかな恐怖があった。

そんな隙だらけと言う言葉だけではとても足りないほど無防備なラストの横っ面に、ハルユキの拳が減り込んだ。

肌は裂け、奥歯は折れ、顎が外れ、頚椎が嫌な音をたてる。

ラストの身体だけでは受け止め切れなった力は、当然ラストの身体を浮かせ、その拳の軌道の延長線上に弾き飛ばした。

す、とハルユキの足許に影が差す。

空を見上げれば、満面の星空があった。

とは言っても、空はまだマーブル模様の灰色の空が広がっている。

その星々は空の隣ではなく空の下に。煌めく事も無く、ただこちらに殺意を向けている。

一、十とそこまで数えた所で数えるのをやめた。

その星の数は夏の空にふさわしく数え切れないほどに存在したし、そして今にも落ちてきそうだったから。

そして剛毅果断に星々は牙を剥き、空を翔る流星群となった。

オフィウクスは両手を繰り、先程よりも速く多く星を集わせる。

しかし、あとほんの刹那で直撃しようと言うところで、オフィウクスの視界が黒く染まった。

それは、手。

瞬きをしたわけでもないのに、いつの間にかオフィウクスの鼻先までハルユキの手の平が迫っていた。

余りに唐突過ぎて、オフィウクスが感じるのは恐怖などではなく、ただ時間が引き延ばされた感覚。

しかし、引き伸ばされたのは感覚だけで身体は動かない。

オフィウクスには、指の間から覗く、魔法の星が一つ一つ丁寧に砕かれ形を無くしている光景を眺めることしか出来なかった。

そして無意識からの時間の引き延ばしが、地面に頭を叩きつけられた事で元に戻った。

ずん、と闘技場が一度大きく揺れる。

また一つ闘技場内に出来た小さくないクレーターを作り上げ、その中心でハルユキはさっさとオフィウクスから手を離した。

「――”箒星（ランス）”」

か細い祝詞の声。

拳大の石がオフィウクスの目の前の空間から現れ、ハルユキに突進する。

「……くはっ」

呆れが多大に混じった笑い声は、オフィウクスの物。その源は右手で流れ星を捕まえた目の前の怪物に。

「化物め」

ハルユキの隕石を握ったその手が、そのまま硬く握られる。

そして、未だ微笑を保ったままのオフィウクスに振り下ろされる。

結果、更に深く地面は抉られ、闘技場は再び大きく揺れ、そしてオフィウクスの頭蓋は砕かれた。

血に濡れた拳を地面から眼球だけを動かして、残りを確認する。

居るのはここからかなり離れた客席の半ば。

そこには、身を凍らせている女が二人。表情を強張らせている子供が一人。

「――貴、様……」

そして、こちらに変わらず殺意を向ける白髪の女が一人。その肩には未だ意識を取り戻さないジェミニが乗っている。

女がこちらに攻撃でもするつもりか、両足を曲げ三十メートルほどの距離を詰めようとする。

ハルユキはその勇み足を刈った。

女の視線は未だ三十メートル先を見つめたまま。

余りに鈍間な凡人に思うところは無い。

足の位置と頭の位置が入れ替わった女が投げ出したジェミニを捕まえ、がら空きの胴に回し蹴りを叩き込む。

「がっ……！？」

伝わるのは鉄の感触。

構わずに足を振り切ると、何のことはなく女の身体は吹き飛び、瓦礫の中に突っ込んで沈黙した。

「やあ、化物」

直ぐ後ろから聞こえた声に振り向き様に裏拳を叩きつける。

しかし、手応えは嘘のように無く、確かに拳が通過した後に年端もいかない子供の姿を認めた。

「化物だね。形容する言葉ではなく、君はまさしく化物だ」

ぞろり、とその後ろにも大量の同じ姿があった。

どれもこれも同じ姿同じ顔同じ表情同じ声色で存在している。

「……」

ハルユキは子供の額に掌の中に作りだした銃口を向けた。同時に足にも手にも腹にも肩にも膝にも耳にも目にも。

目の前の一人にではない。いや、そもそも特定の誰かに狙いを定めたわけでもない。

魔法の幻など判りはしないし、正攻法で破れるとも思わない。

しかし、負ける気も全くしない。

十、百、千と。そこまで銃口を増やすのにかかった時間が一秒と少し。

「なんだい……、それは……？」

この時代の人間にはこの黒筒の先に定められたという意味が判ら

ない。

当然、それを教えてやる事も無く、ナノマシンの擬似神経がトリガーを引いた。

千丁のマシンガン。それぞれ９６発ずつ装弾された弾丸。合計９６０００発の弾丸が闘技場を舐め上げる。

程なくして、千丁のマシンガンが一斉に静かになる。痛いほどの沈黙に人の気配は感じられない。

しかし、ハルユキはある一点に足を運ぶ。

一瞬。その場にたどり着くまでにハルユキの手には黒い塊が握られている。

握っているのは捻れ曲がった銃口。

その先に続くのはひたすらに銃。折れ曲がって押し固められて、適当に丈夫で大きければ何でも良いという理由で作られた即席の武器。

それを、ノイン達がいる方向に向けて振り下ろした。

切っ先はノイン達がいる1メートルほど手前で地面に叩きつけられ、そして振り下ろした銃の固まりは容易く形を無くす。

銃だった物が細かく分解しながら空気に溶けていく中に、子供が抉れた地面で倒れ伏している姿があった。

「しくじった、ね……」

その姿はノイン達の直ぐ近く。

再び人質にしようとしたのか、それともその辺りだけ弾丸が無い事に目ざとく気付いたのか。

そのどちらにしても。子供は集中力を乱し、立ち上がることも出来ないでいる。

そんな子供の首を握り、締め上げながら空中にぶら下げた。

「幻、かもしれないよ……？」

力無い声が聞こえた。

しかし、どちらにしても手にしたこれを逃す理由は無かった。

よって、首を圧し折る。

「……く……お、ぁ……」

ほんの僅かに力を込めると、赤色だった子供の顔に青色が差し込み何とも奇妙な顔色になる。

更に力を入れる。

びくん、と子供の身体全体が痙攣する。

「ば、け……物め……！」

搾り出された声は的外れな怒りに滲んでいる。

そう的外れ。全く的外れなのだ。

仮にとは言え仲間を知人を害された。ハルユキ自身も手酷い傷を負った。

これは怒りによる感情。何処が化物だ。むしろ何処までも人間らしい感情だ。そしてそれに基づいた行動だ。

（おかしいだろう。だってお前は化物だ、間違っても人間じゃない）

自嘲の声なのか、それともあの妄想の産物の声なのか、どちらにしてもその声は遠い。切り離されたかのように頭を素通りする。

（化物が人間の振りしているのは、おかしく、可笑しく、愚かで、滑稽だ）

「ようやく――」

だから、そんなレオの余りに的外れな意見に、ハルユキの顔は笑顔の形に歪む。

「年相応の声が聞けたな、糞餓鬼――？」

本当の子供のそれと変わらないレオの首を、更に強く握り締める。

さて頭に巡るのは三つの選択肢。右に折るか左に折るか、それともこのまま握りつぶすか。

不意に、どっと背中に何かを押し付けられたかのような感触を覚えた。

視線を向けると脇腹の辺りに決して小さくはない刃が突き立っている。巨大な黒曜石から切り出したかのような無骨で巨大な黒光り

の巨剣。

切っ先をハルユキの体に食い込ませて、しかし一瞬で凝縮した筋肉に絡めとられ、刃は薄皮を貫いたところで止まっている。

「……化物」

揃いも揃って口にするのは全て同じ。

その剣にはあまり似つかわしくない小柄な娘が、剣の柄から手を離した。がらんがらんと大げさな音を立てて剣が地面に転がる。

「……どうして？」

「どうして、だと――？」

スコーピオのその疑問は、なぜこんな生物が居るのかという疑問でしかなかったが、ハルユキには別の疑問に聞こえていた。

ボロボロになったノインの姿が脳裏にフラッシュバックする。

倒れ付したジェミニの姿を思い出す。

空ろなレイの瞳が頭から離れない。

ギチリギチリギチリギチリと、神経が思考がどろりとした感情に飲まれ、自分の無力さごと苛んでいく。

「判れ。怒ってるんだよ、俺は」

殺してやる。

殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる。

その小さな身体に向けて、レオの身体を投げつける。

玩具のように錐揉みしながらレオはスコーピオの腕の中に収まり、その瞬間。レオの身体の上からスコーピオを蹴り付けた。

肋骨、胸骨、鎖骨。

蹴った場所から近い順に砕かれていく骨の感触が心地良い。名残惜しくもその感触だけを残して、蹴られた人間は視界から消えていた。

だが、死んではいない。

揃いも揃って普通の人間の身体でない事は、手応えからもこれまでの状況からも想像に易い。

左腕に抱えていたレイとジェミニを地面に、練成して置きっぱなしだったゴムマットの上に寝かせて、辺りを軽く見渡す。

飛んで行った二人を追うか、それとも他に生きている奴がいないか探すかで懊悩していると、視線が一つ頬に当たった。

視線の元を追うと、金髪の男が立ち上がろうとしている。

不思議な事にその身体に傷は無い。

その他の大勢もそれはそれは普通ではない体だったが、あれはどうやらそれとも違うようだ。

そもそも殴った感触が肉のそれではない。

恐らく、実態ではないか、身代わりか、意思と動きが伝わる木偶人形か。

魔法という要素を加えては想像に歯止めが利かないが、おおよそこんなところだろう。と、ハルユキは考えを纏める。

――ハッははハはははハハハは八ははァッ！！

何処か狂って所々裏返った笑い声が空気を震わせた。

オフィウクスから視線を外し、声のする方に視線を向ける。その先には予想通りラストの狂った笑顔があった。

同時に、視線を外したオフィウクスから何かが膨れ上がって頬を撫でる。

所謂、魔力と言うものなのか、それとも殺意が濃度を増しただけなのか。

どちらでもいい、とハルユキはその考えを廃棄する。

考えるべくは、向かってくる二人の殺害方法。

しかし、どうすればこの感情が晴れるのか。

ノインの顔を、ジェミニの姿を、レイの瞳を思い出す度に怒りは飽和していく。

奴ら全員が死骸を晒したところで気は晴れそうに無い。絶望に歪んだ顔を見せてくれても到底足りない。

足を削ぐか、手を?ぐか、目を抉るか、耳を千切るか。

人間としての尊厳を全て奪った所で、気が済む想像は出来なかった。

思考の時間を待ってはくれず、まるで殴ってくれとばかりに鈍間なラストが迫ってくる。

定まった思考は一つ。

――とりあえず、玩ぶかと。

一回二回三回と、拳の硬さを確かめるように握っては開くを繰り返す。

四回目。ギチリと拳に殺意が満ちる。

今までで最も硬く。最も強く。振るえば最も速く。そして最も広く大きく破壊をもたらすだろう。

ラストの脚は神速。力は豪快、羅刹の如く。

その速さよりほんの少し。その膂力からもう少し。ハルユキは強く、そして速く体を調節して動かした。

拳が、腕が、交差する。

みちり、とラストの鼻先に拳が減り込んだ。

首から上だけがハルユキの拳に押し止められ、勢いに乗ったラストの体が宙に浮き、ハルユキの拳を支点にぐるんと回転する。

あれほど硬く握られていた拳はラストの意思から離れたことで、静かに解かれ中途半端な手の形に。

そこから再び闘技場の外まで吹き飛ばされるのに、刹那の時間も必要としなかった。

ただ、どん、と。

ラストが吹き飛ぶ直前、鈍い衝撃がハルユキの脇腹を叩いた。

ダメージは無い。吹き飛ぶ直前にラストの蹴りが当たっただけ。

苦し紛れの一撃で、当然技は無く、そして力も込められていなかった。

すっと、ハルユキの足許に影が差す。

見上げれば夜に昇った太陽を覆い尽くすように、巨大な星が迫ってきていた。

びりびりとハルユキの身体が拘束されている感覚は、二つの星の重力に引っ張られているからなのか。

足を肩幅に開き、自身をカタパルトと化す。

撃ち出すのは手の中に集めた空気の球。一瞬で集束し凝縮した空気は白く発熱し、小さな太陽に。

空気を巻き込みながら巨星に突き進み、接触、穿孔の後、巨星もろとも爆散した。

一瞬、もう一つ太陽が増えたのかと言うほど炎の塊が視界一杯に広がり、その中にある何もかもを燃やし尽くしていく。

ぱらぱらと落ちてくるのはグズグズになった星の成り果て。

魔力が元だからか、それも地面に付く前に空気に溶けてしまって

いた。

「――”星神（アストライオス）の唄”」

一際大きいグズグズの破片の後ろ。

そこで、オフィウクスの巨大な魔力が渦を巻き、その身に練りこまれた。

そして、優雅な金髪を揺らし、相変わらず微笑を保ったまま、オフィウクスはハルユキに拳を向けた。

荒々しく、確かにハルユキをも害する威力を持ったその拳。

それを、敢えて拳で迎え撃つ。

拳と拳がぶつかり、発生した衝撃で周辺から破片や砂の一切が吹き飛んでいく。

しかし、均衡は一瞬。

グロテスクな音を立てて、オフィウクスの拳が拉げた。

力と硬さを失ったオフィウクスの拳は跳ね飛ばされ、そのままハルユキの拳が胸に吸い込まれた。

オフィウクスの肋骨、胸骨は間違いなく砕かれ、そして胸は拳の形に陥没する。

口から嗚咽を漏らしながら、オフィウクスはたたらを踏む。

それでも頑なに微笑保ったままの横顔に、情け容赦ない回し蹴りが叩き込まれた。

オフィウクスの決して小さくはない体が、蹴鞠のように吹き飛んでいく。

振り下ろされた右足の蹴りにより、オフィウクスは地面にバウンドしながら勢いが削られ、闘技場の壁を破壊した所で動きを止めた。

血で濡れた拳を解くと、僅かに痛みを感じた。

ラストに蹴られた脇腹が、僅かに熱を持っている。

瞬間。

正面から、白い何かが吹き上がった。

それはさながら間欠泉のように天高く迸っている。混じる狂気は

酔ってしまいそうなほど。

それに呼応するように。

オフィウクスが突っ込んだ壁の向こう。闘技場の傍らでも濃厚な気配が膨れ上がる。

ラストほどあからさまではないが、確かに魔力が変容し、世界ごと塗り替えてしまおうかと言うほど。

ほんの僅かに感謝が沸き起こった。

今自分は怒っている。

こんな感情を、日常の中に持ち込みたくは無い。

だからこそ、その怒りの対象が、塵芥でない事にほんの一握り、いや、一撮み。——否、一粒の感謝を。

指先一つで死んでしまうような存在では、きっと自分は残った激情で狂ってしまう。

そのことは確かに喜ばしく、ハルユキの表情を綻ばせる。

しかし、それでも感情を全て発散できる気はとてもしない。

一体、この拳を何度血に濡らせば、この感情は晴れてくれるのか。

しかし、諦める気は無い。耐える事には慣れている。

（使うかァ――？）

嫌な声。

しかし、今はそれを肯定したい気持ちが確かにあった。

以前、ラストを相手にした時に角が生えてきた場所がジワリと熱を持ち始める。

一回二回三回と、拳の硬さを確かめるように握っては開くを繰り返す。

四回目。ギチリと拳に殺意が満ちる。

今までよりも更に硬く。最も強く。振るえば最も速く。そして最も広く大きく破壊をもたらすだろう。

血が滴り、殺意に押し固められたその拳。

――そんな拳を。

誰かが後ろから握った。

「ハル……！」

その名前の呼び方に、心当たりはそう多くない。

頭のどこかで、錆びた歯車がぎこちなく回っている時のような音が鳴る。

それは、急激に感情にブレーキをかける音で、しかし加速した物がそう簡単に止まるはずは無く、握られた手を力尽くで振り切る。

柔らかい手の感触が消えた後、直ぐにまた同じ感触が拳を包み込んだ。

今度は両手。

絶対に離さないという強い意志が鬱陶しいほどに伝わってきていた。

「――ユキネ」

ハルユキを結界から解き放った剣を放り出し、頑なにハルユキの拳を捕まえて離さないユキネと視線を合わせた。

◆

◆

◆

目の前のハルユキの手を握ってしまったのは、半ば反射的だった。

冷たい手。硬い拳。その冷たさと、あまりの硬さに驚き、そして少し悲しくなる。

でも、自分の体温が少しずつ広がっていく。

「ハル……！」

止めろ、と口にしなかったのは、少なからずユキネの中にも同じ感情があったからか。

傍らのノインの体はぐったりと力を無くしている。
レイはただ虚空を見つめている。
ジェミニは微動だにしない。

怒りが無いわけがない。今すぐにでもこれをやった人間達を剣の錆びにしてやりたいという激情がある。

しかしそれでも、まだ皆生きている。

意識すらない三人より、今は目の前のハルユキの方が危うく見えて仕方が無かった。

ハルユキの拳を握っていた手が、乱暴に振り解かれた。

その背中を見て、途端に恐怖に襲われる。

またその背中が遠ざかってしまう気がした。ハルユキがまた人間

から離れてしまうようなそんな気が。

だから、今度は両手で握り込んだ。

剣を放り出して、絶対に離さないと言う意思を込めて。

「――ユキネ」

頭上から声がして、目を開けて目を硬く瞑っていた事に気付いて、顔を上げて俯いていた事に気付いた。

顔を上げれば、いつも通りのハルユキの顔。

もしかしたらハルユキに似ているだけの何かではないかという思いは消え去る。

しかし同時に、やり場の無い何かを覚えた。

怒りだったのか、同情だったのか、哀しみだったのか。

複雑に混ざりすぎて正確には判らないが、思わず泣きそうになった事と、それがハルユキの表情に起因している事だけは明らかだった。

危い。

こんな場違いで規格外な力も。

こんな状況で、あんな無為な目をしているくせに、今にも笑い出しそうに見える表情も。

何もかにもが危うくて、今にも何かを壊してしまいそうで。

その目の中に狂気を見た。

狂って、狂って、狂い直して、狂い狂って、それでも足りなくて、狂って狂って狂って狂って、たまたま今の人格に行き着いたのか。

それとも、それらの狂気を跳ね除けて飲み込んで、叩き伏せて、強く強く己の人格を保っているのか。

恐らくそのどちらか。

しかし、そのどちらにしても今のハルユキは危うく、哀れで、悲しい。

消えてしまいそうだ。

目の前に見える黒髪の人間はこれほど強く、確かに存在しているのに。

ハルユキを探そうとすると、途端に灰色に気配が霞み、背景に同化して消え入ってしまいそうなのだ。

何がきっかけで、何に為ってしまうか判らない。

だから、強くハルユキの拳を握りこんだ。

強く強く痛いぐらいに握りこむ。

ユキネの体温がゆっくりとハルユキに移り、拳は解け、手が繋がった。

最強（後書き）

来週資格試験があるので来週はお休みします。
再来週からは多めに時間が取れると思うので、少しペースが上がるかもしれません。

御遊戯戦争

それは、言ってしまえば美しいとさえいえる光景だった。
粗暴に見えて、その実一切の無駄は無く、全ての動きに意味が有り、そしてその洗練さは間違いなく美しかった。

ただ、その動きが全て人を殺す事に費やされていなければ。

歩を進めれば一瞬で敵の視界から消え、または懐の中に潜り込み、拳を振るえばどんな人間でも容易く吹き飛んだ。
相手の攻撃も防御も抵抗も、まるで砂糖の壁のように容易く砕く。

それは間違っても戦闘ではない。戦いでもない。決闘でもない。
ただ只管に、そしてささやかに美しい暴力だった。

たちまち、美しさは怖さに変わる。
唾を飲み込む喉を自覚する。後退りしそうな足を意識する。

怖い――？
ふと、自分が抱いた感情に疑問を覚える。

恐怖だろうか。
いや、正しくはそうではない。

怖くはない。そういえば嘘だろう。
しかし、あの殺意を向けられている人間達が感じているであろう
それとは恐らく違う。

――手を伸ばしたのは。
おぼろげに消えていきそうなその人を、どうしたかったからなの
だろうか。

◆

ああ、心地が良い。
その中はまるで温やかな人肌に包まれているかのよう。

ああ、素晴らしい。
その中心にはまるで新しい命が萌芽を出したかのように。

ああ、代え難い。
殺意は根絶やしにされた。退屈は失われた。狂気は飲み込まれた。

暖かく我を包む光は、まるで陽光か、はたまた母の水か。

我が身は御身と一つに。

溶け合い、混ぜ合い、絡み合い、巻かれ合う。

ひらり、と音もなく頁（ページ）が捲れる。
全ての頁に。その全て同じ場所に。全て同じ色で。全て同じ筆跡で。全て同じ意味の。全て同じ一節が綴られていた。

意味は判らない。
ただそれは、やんわりと己の歩みに手を添える。

それは気付かないほどに緩やかで、優しく、抗い難い。

いや、気付く事も出来ない。誘われるように、手を引かれるように。

そも、進む景色は真白なのだ。自分がどう歩んでいるのか、自分は何処に向かっているのか。
それに気付く事も出来ない。

ただ、進むごとに、育つごとに、堪らない幸福と熱が全てを包み、その先に見つけたものならば、——それはきっと正義なのだ。

ぱちり、と瞼が開く。
同時に、自分が今まで瞳を閉ざしていた事に気付く。

眼下に広がるのは、どこまでも風に果てた荒野のような箱の庭。
元はさぞ華美な装飾に彩られていたのだろうが、どんな悪鬼が暴れたのか、もはや建物の形を繕っているだけだ。

己は、それを照らす太陽の中。

誰も目を向けない。
己（かみ）の目覚めはかくも当たり前にやってくるのかもしれない。

己は太陽の中。

余りに大らかな気配に、全人の隣人に、だれも疑念も気配も感じることは無い。

己はただ目を瞑り、世の流れを波と音と空気で感じるだけ。

——ただ、一度瞼を開けた時には。

”ああ、あれだ”

ぽつねんとそこにある黒い髪。

自分が行うべき正義の形が、見つかる。死臭と腐臭に塗れた穢れた町が見える。

純白に染まったそれに、それは何処までも穢れきった世界の害悪に見えた。

悠長に言葉を交わすそれを見て、確かに自意識が憤りを覚える。

何を人間の真似をしているのかと。何を優しい振りをしているのかと。何を笑う振りをしているのかと。

怪物（がいあく）が——。

人間になりたいのか。

いや、許されない。貴様は悪として正義に処断されよ。

ああ。

我は貴様が人である事を許さない。

死ね、化け物。

悪のお前は、正義の錆となれ。

◆

「……あ？」

それは、とても白ける光景。

闘技場中の気配が一変した。いや、その虚無感と喪失感は気配が

消え去ったと言い表した方が近い。

まるで、平和な日常の一頁だ。

長閑で、間延びした、緩やかな毒を孕んだ何時も通り。

視線の先には、何でもない女に手を取られただけで惚けてしまった想い人。

「……そりゃあ、無いだろうよ」

恋焦がれて、再会を演出して、貴様を殺す為の全てを求めた。

どれほど狂おしかったか。

まだ道半ば。貴様に届くとも、並べるとも、役不足だとも思ってはいない。

しかし、それはないだろう。

手を繋いでいる。

それだけで、貴様はあれほどの怒気も、殺意も、狂気も、空気と綯交ぜにしてしまった。

誰も望んでいないのに。

そんな展開にあるのは決まりきった美しさだけ。有り体な友情にも、見慣れた愛情にも興味は無い。

――いや。

あいつの事だ。

あの女との間にはさぞ掛け替えが無い、力強い、それこそ触りがたいほどの強い絆があるのだろう。

女の容姿は美しく、繋がれた手は尊く有り難く。そして短くは無い筋書きを辿ってきたのであろう。

言葉に力があるのは、それに裏付けされた物語と経験と力があるからで。

そしてそれは、何処からどう見ても美しく、純粋なもので――。

しかし、俺の中では白けたものでしかない。

ああ、しかし。

この偶然に感謝しよう。

たまたま行き着いたその領域に。お前を殺したいと闇雲に手を伸ばして掴んだこの手の中に、面白い物が転がっている。

お前がそのつまらない舞台に上がるというのならば。

俺はその舞台を根幹から破壊しよう。

――ラストの体から吹き荒れるのは、白い力の暴風。

正しくそれは今までの行為と変わりは無い。

しかし、地面を揺るがし空気を吹き飛ばし、その魔力が闘技場中に充満するほど濃度を増せば。

一風変わった現象を引き起こす。

前兆は、まるで空気が致死量の毒を吸い込んだように甲高い悲鳴。

そして。

飽和しそうな魔力を、滴り落ちそうな殺意を置き去りにして、ラストの姿は消え失せた。

しかし、誰にも聞こえず誰にも見えないその高みで、ラストは変わらず拳を握る。

更に強度を増した不可視のその拳の向け先は――。

――想い人を誑かす雌猫に。

ああ。

俺は。

俺を置いて勝手に回る世界（すじがき）を許さない。

目を覚ませ化物。

その顔は、まるでお前が人間のようで不愉快だ。

◆

「無事だったか」

聞こえた声は、やっぱり不自然なほどにいつも通りだった。

しかし、服は所々が破け肌が露出し、残った服の面積の半分以上に染み込んだ赤い血が痛々しい。

”ハルも無事で良かった”。と、言う事はとても出来なかった。

「離してくれ」

ハルユキは穏やかに淡々とそう告げた。

その声に殺意があるはずも無く、怒気も何もかもが押し込められている。

しかし、無いはずがない。

それは、ハルユキが攻撃を受けて血を流したからではなく。倒れ伏した三人が起因である事は容易に想像できて。

だからこそ、こんなに平然としているわけが無いのだ。

「――離せ、ユキネ」

案の定、と言うべきか。

堪え切れないかのように、凶暴で冷たい殺意がじわりと空気に溶け始める。

それは当たり前にハルユキに馴染んでいて、ここで言葉を交わせているのが不思議なほど。

「……」

しかし不思議なほどにユキネの心内はその殺意に反抗的で、逆に繋いでいた手を強く握りなおす。

ハルユキの視線が繋がれた手に落ちる。

ハルユキにとって、それは正しく戒めであり、締め付けだった。

殺したくて殺したくて仕方が無いと、その意思は表情は変わらずともユキネに伝わる。

理解もした。
納得も出来た。

しかし、とても許容はできない。

ハルユキからは、自分勝手な馬鹿女に見えるだろうか。綺麗事しか言わない偽善者に見えるだろうか。

「あいつ等を逃がさないのなら、許さないのなら。殺す以外の選択肢は無い。それは、判ってる」

そう。

たとえここで殺さずにこいつ等を捕まえるなどした所で、待っているのは処刑だ。

計画的に町を壊し、王女を誘拐し、民を殺戮せしめた。情状酌量の余地も無い。民の溜飲を下げるのに使われて終わりだ。

なら、同じ理由でなら、ここで殺した所で誰も困りはしない。

「あいつ等を見逃せってのか？」

聞きながら、ハルユキの目が細められる。

返答を誤れば、繋いでいる手を振り解かれ、邪魔が出来ないように意識を刈り取られるかもしれない。

そうなってしまっては、ユキネには抵抗すら出来ないだろう。

だから慎重に、それでも嘘偽り無い言葉を選ぶ。

「違う」

その一言で、自分の中でも言葉になっていない全てを伝えるつもりで、否定する。

しかし、ユキネの気持ちの何百分の一しか伝わらなかったのか。
ここが戦場と言うのならば、余りに間抜けな質問は続く。

「あいつ等を許せって言ってるのか？」
「違う」

首を振る。

「あいつ等を死なせるなと言ってるのか」
「違う！」

三度目の質問で、ハルユキの手に力が篭もる。

頑ななユキネの言葉が癇に障ったのか、それともももう感情に我慢が利かなくなってきているのか。

「私は、正義を諭すつもりはない。情を説く事もできない。だから

何を言っても自分勝手にしかならないけど」
「……」
「それでも、お前が手を汚すのをただ見ている事は出来ない。――例えそれが、ノイン達の為だったとしてもだ」

不愉快そうに、ハルユキは顔をしかめる。

”何も判ってはいない子供”に切々と己の感情を言葉にする愚を犯す。

「あいつ等が生きているのは結果論だ。――もし全員が殺されていたとしても、お前は同じ事が言えるのか？」

「――言うさ。例え誰の死体の隣でも、私はお前が人を殺すことを是としない」

しかし、想定していなかった即答に、ハルユキの目が大きく瞠られる。

ユキネの言葉に嘘は無く、目を逸らしさえしないその強い表情に、ハルユキも嘘ではない事を知る。

「……本気で言ってるのか」

「ああ」

もう一度、ハルユキは言葉で確認した後、もう一度表情を確認する。

目が合ったユキネは、言葉を続けた。

「私は、ノインも、ジェミニもレイも。そしてハル、お前も。皆比べられないくらいに大切だから。

だから、誰かが死んだとしても、そのせいで他の誰かが死んでしまうのは、傷付くのは。どうしても嫌なんだ」

だから、とユキネは更に奥まで覗こうとするかのようにハルユキの顔を覗き込む。

「――お前が殺すぐらいなら、私が殺す」

「……は？」

は、と一瞬様々な感情も忘れて、呆けた顔を晒す。

その顔に表れていたのは、驚きもあり、おかしさもあり、しかし何より呆れが色濃く現れている。

「……ふざけてんのか……？」

「ふざけてなどいない」

びきり、とハルユキの額に井形模様が浮き上がる。

腕の筋肉が僅かに盛り上がり手に力が篭もる、が。それはどちらかと言えば、ユキネの手を握り潰さないように感情の奔流から守っているのだろう。

「っガキがませた事言ってんじゃねぇぞ！」

「子供はどっちだ！！」

視線がぶつかる。

荒々しく、握った手はぎりぎりと軋みを上げ始める。

今にも胸倉を掴み上げ、額と額をぶつけ合うのではないかと言うほど、二人の視線は強くぶつかり鬩ぎ合っている。

「お前にとって、私は何だ。子供か、被保護者か？　違う。私とお前は対等だ。少なくとも私はそうありたい。――私は、確かに強くなれたんだ」

「……だから、お前が殺す？　筋違いも大概にしておけよ」

確かに強い感情の一部が、ハルユキの言葉に乗った。

びりびりと空気を震わすほどの声に、孕んだ怒気に。しかし、ユキネはたじろがない。それどころか、ユキネは胸を張る、息を吸い込む、ハルユキの目の中を覗き込む。

「……私に殺させないというのなら、私だってお前に誰かを殺させる気は無い」

大して大きくも無い声だったが、不思議とその声は深く大きく広がった。

しん、と耳に痛いほどの沈黙が闘技場を覆う。

「……お前に、人を殺して欲しくない。ハル、お前が私にそう言ってくれる同じ理由で」

伝わらないとは、思わない。

いつの間にかハルユキから伝わる力は弱まり、その手はただユキネに握られているだけ。

また沈黙が続く。その痛いほどの沈黙を嫌うように、ハルユキが口を開いた。

「俺は、何人も人を殺してる。何十人、何百人だ。今更――」

「何人殺しても一緒だと？　違う、そんな訳無い。そんな訳無いよ、ハル」

ユキネが驚く事を想像していたのか、強く言葉を重ねてきたユキネにハルユキは僅かに目を見張る。

ユキネには何も話していなかった。

鉛弾と爆薬が主流だった頃の戦場に身を置いた事があることも、それどころか自分が一億年という途方も無い時間を生きている事すらも。

当然、今握られているその手を、血に濡らした事さえも。

無論、特別隠していたわけでもない。

普通ではない戦闘力や、振る舞いから想像を膨らませる事が出来ない事もない。

しかしならば、何故この女は平然と手を握っていられるのか。

「人の命だ。人のために怒れるお前が、自分を削ろうとまでするお前が、たかが人の命だなんて言わないでくれ」

苦しげにユキネの表情が曇り、歪み、それを見せないようにか、初めてハルユキから視線を外し、俯いた。

しかし、繋がれた手は益々強く握られる。

「お前は、人の命を歯牙にもかけないような、そんな器用な強さは持っていないじゃないか……！」

なあ、春雪。

と、ユキネは珍しい呼び方で、彼の男の名を呼んだ。

「私が見てるお前は、いつも我侭で、中途半端で頑固で、人間臭くて、情けに弱くて。そんな、綺麗な弱さを持った人間なんだ……」

いつの間にか両手で掴まれた掌からは、ユキネの熱いほどの体温がハルユキの掌に伝染していく。

それは、毒素が強い劇薬が血管に乗って体中に蔓延していくように、息苦しい。

それでもお前が誰かを許せないのなら、と。いつの間にか俯いていた顔を、ユキネは上げる。

その目は。

涙で潤んでいるくせに、瞳は揺れているくせに。

どうしようもなく頑固で暑苦しい。

「お前が手を汚すなら、私も汚れる。お前が私を守ってくれるなら、私は私の全てでお前の支えになりたい」

「……俺は、お前を守ってるなんて思った事はない」

「……そうか。でも、それなら私は、私の我侭でもハルの為になりたいよ」

毒が回り、力を失ったハルユキの掌から、ユキネはゆっくりと手を離した。

ハルユキの手は名残惜しそうに一瞬その場に留まったあと、ゆっくりと下ろされる。

そして、ため息を一つ。

「……重いなぁ、お前」

「お、おもっ……！？　わ、悪かったな！　重い人間でっ！」

露骨にショックを受けるユキネに、今度はハルユキから手が伸びる。

その動きは緩慢だったが、ユキネは遠慮がちにその手を見つめて戸惑うだけ。

その手が自分の頬に触れた瞬間、ユキネはびくりと肩を揺すらせて、恐る恐るといった風に

「ハル……？」

手は添えられたまま、ハルユキは口を開いた。

まだ馬鹿な質問を続けるつもりだったのか。それでも自らの殺意を押さえるつもりは無いと独白するつもりだったのか。

――結局、その言葉が発せられる事は無かった。

ばちん、とハルユキの手が弾かれる。

「――――は？」

一瞬遅れてびりびりと強い痺れを手の甲が脳に伝えてくる。

攻撃された、と脳が気付いた時、同時に目の前にユキネが居ない事に気付いた。

どすん、と何かが何かに打ち付けられる音。

視線を向ければ、そこに。闘技場の端にユキネが横たわっていた。

◆

――圏境、と言う技術がある。

それは、謂わば眉唾物の技であり、文献に残っているものでしかない。

しかし確かに存在したといわれている。

ラストがその身に付けたのは、偶然発祥したものでしかなく、その現象を発した経路もまるで違う。

たまたま、結果が同じところに行き着いたと、ただそれだけの事。

圏境とは、己の気配を限りなく薄くし、周りの木々や空気、風や地面と気配を同化させ意識の裏に隠れるといった物。

対してラストは、この逆。

己を薄めて、己を押し止めて、己を変える圏境に対しての逆。

つまり、変わったのは周りの方。

己を強める、それは周囲の全てに己が毒となるほどに。

己以外を押し止める。それは、周囲の全てを制圧するほどに。

己を変えない。それは、周りのそれがその強さに憧れ、追随するかのように。

それは、正しく支配だった。

ラストは、ただ更なる強さを求めただけ。

その副産物として魔力は濃く大きく変化していき、それは周囲を毒するまでのものになった。

結果、さんざ悲鳴を上げ抗った後、周囲の全てがラストに屈した。

自分変えて周りに溶け込む圏境。

周りを変えて己に溶け込ませるラストの――謂うならば、殺境。

通った点は己と周囲が境界を無くす事だけ。

しかし、そこを可能としたラストの殺境は、圏境とほぼ同じ効果を生み出した。

圏境にはありえない、命に有害となりそうな殺意と魔力を置き去りに。

ラストはその姿を世界に秘匿された。

重ねて言うが、ラストが望んだ訳ではない。

ただもっと強く、もっと早くを望んだ末、世界がそれ以上に怯え、理の外に追い出してしまっただけ。

結果、そこら中に放り出された殺意が撒き散らかされた代わりに、ラストは更なる力を手に入れた。

姿が消えた、それは大した事ではない。

空気にも水にも地面にも、この世界に属する何もかもに制約を受けない。

それは、一つ天井を越えた瞬間。同時に、人間とそうでない物との境を跨ぐ行為。

その一足は十里を跨ぎ、その腕は山を握り潰す。

人外の拳を振り切れば、ハルユキの手の甲の上から泥棒猫は吹き飛ばされた。

僅かに邪魔をされた。

追撃しようと、足に力を込める。

しかし、既にハルユキがユキネの元に到着し、ぐったりと動かな

いその体を抱き上げている。

「――寄越せ」

その絵画になりそうな光景を砕くより、言葉を欲情を露にしたのは、これから必ず起きる何かへの恐怖を誤魔化すためか。

聞こえるはずは無い。

声が伝わるはずの空気はラストに怯え、震え、音を伝えてはくれない。

しかしだからこそ、煮え滾るような感情を――いや、膨大な感情のほんの一部を。とても言葉にできない欲望の一欠けらを。

喉を震わせて形にする。

それは、心臓が燃えて、血が沸騰して。全身が一瞬で気化するような――。

――そんな感動と興奮を。

「――俺に寄越しやがれェッ！！！！」

しかし、その声がまるで聞こえたかのように。ハルユキの視線が、ラストの視線と重なる。

感じたのはデジャヴ。既視感。一度感じたことがある、視線。

ハルユキの、灰色の瞳の中。

――再び、その中に住む何かと目が合った。

〈あーあ、馬鹿だろお前〉

以前は、押し込められた狂気の奔流にしか感じられなかったのに、

今は”それ”が愉しげに笑っている事。こちらを見ている事が理解できた。

それは、ラストが半歩分人を外れたからなのか。

ああ、そして後一つだけ。

目の前の化物が、既に人から外れ切っている事も、嫌になるほど実感する。

――そして、鬼が目を覚ます。

◆
◆
◆

「起きれるかな、腹心殿」

「ま、痛みを騙してれば何とかね。帰ってから地獄見そうだけどさ」

瓦礫に埋まって遠い目をしていたレオが、オフィウクスの声にレオは手酷い怪我を感じさせない動きで立ち上がった。

「それで？　満足したの？」
「いや。しかし時間切れだ。”彼”が起きる」

視線を動かし、上を見るように促すと、レオはそれに従って上を見て『ああ』と、納得した声を出した。

その視線の先には灰色の空だけが広がって、既に太陽は存在しない。

「成程。じゃあ僕も急ぐよ。アリエス達は？」
「帰したよ。どさくさに紛れてだがね」
「ま、しょうがないでしょ。相手が相手だったし、君はそんな体だし」
「ああ、もう完全にガタが来ている。程なく瓦解するだろうな」

小さく掌を数回開閉させると、その反応速度からオフィウクスはこの仮宿の体の限界を確認する。

辺りを軽く見渡すが、もう辺り一体街中の風景とは思えないほどに破壊されつくされていた。

闘技場の一角だったこの場所も、地面は砂地と化し、強固だった壁もただの破片に成り下がっている。

「そろそろ、お開きかな」
「ああ、年甲斐も無くはしゃぎすぎた」

じゃあ、とレオは何を告げる訳でもなく背中を向ける。

「何だ、行くのか」
「？　君も帰るんじゃないの？」

肩越しにオフィウクスの顔を見て、レオは駄々を捏ねる子供を見るような表情を見せる。

「全く君は愚かだね。〝レオ〟」
「貴殿の醜さには負けるさ、〝レオ〟」

笑うでもなく、怒るでもなくただ皮肉気に肩を竦めると、レオはその体を暗ませた。

同時に、闘技場の周りから結界の全てが消え失せる。これで破壊し尽くされた闘技場が露になるだろうが、既にあまり意味は無い。

後はもう役者を舞台裏に引っ込めて幕を下ろすだけだ。

しかし、まだ幕を下ろしたくないとばかりに、駄々を捏ねる人間が二人。

それも、どちらも怪物役。

片方は確かラストと言ったか。

あの視認し辛くなる技は、どんな概念と理論の元に成り立っているのか。それは判らないが、あれを技と言うのは少し語弊がある。

技とは、弱者が強者を砕く為に用いるものだ。

しかしあれは、そうではない。

勝つ為に磨き上げた技術でもなければ、強者を打倒しえる物でもない。

圧倒して、威嚇して、屈服させ、支配する。

要は威圧の最高到達点であるというだけ。

当然致命的な意味があるのは自分より弱者に対してだけ。

しかし、ラストが思う弱者に分類されるものの中には、空気も地面も重力も含まれている。

含まれていないのは、あの化物と。そして、この自分も。

つまりは、簡単な事だ。

――ビビるな。己の方が強い。それが第一。

自分でも下品に過ぎると思う、何かが破綻した笑みがオフィウクスの口元に浮かぶ。

片や、形からすら人間の形を無くし始め、片や世界ごと押し潰しそうな魔力を大海の様に溢れさせている。

これ以上無いくらいに驚いていたつもりだったが、その存在感にしばし酔い痴れそうになる。

しかし。

この身は元より闘争の化身である。

気色悪いほどに優しいこの世界で、”戦争すらも起こらない”この世界で。この身は持て余したものだったが、今この時は違う。

例え今の体が仮宿だったとしても、相手が化物であったとしても。

幸い此処は闘争の舞台。

誰かの敵になるという点に置いて、誰かに遅れを取るとも、役者不足である事も有り得ない。

「――”星母神（バビロン）の箱庭”」

鬼の子が世界を脅かし、魔の化身が世界を支配すると言うならば、私は世界を変えて御覧に入れよう。

◆

「あ……」

目を覚まして直ぐ、自分が程なくまた気を失う事をユキネは悟った。

凄まじい衝撃がユキネを襲う一瞬前、何処からか現れた白い大剣がユキネを守るように目の前に現れたところで記憶は途切れている。

しかし、そう長い時間は経っていないようで、目の前にはまだハルユキが背中を向けて立っている。

「……ぁ」

しかし、折角引き戻した”ハルユキ”がまた薄くなって、その分何かがその気配を色濃くしている。

「ハ、ル……」

ならもう一度、とユキネは手を伸ばす。

しかし、その声は届かず、手は触れず。

タイミング悪く踏み出したハルユキに触れることすらできずユキネの手は宙を掻く。

もう、届かない。

そんな諦観じみた思いと共に、ユキネの意識は再び闇に沈んだ。

◆
◆
◆

杖を向ける先を無くして、フェンと言う少女はただゆっくりと町中を徘徊していた。

何の理由も無くぼんやりと空を見上げると、目に入るのは灰色の空と陰った屋根とそして晒された死体。

どのタイミングで空を見上げてみても、同じような光景だけが続いていて、そしてそれは恐らく町の何処に行っても変わらないのだろう。

死体はまるで何日も風に晒されていたかのように腐り切り、鼻をつく異臭を放ちながらただ風に揺れ、黒と白が混じりあった灰色の空は蠢くように模様を変えていく。

風は何処までも生温く、しかしじっとりと冷えた空気が足元にたまって、まるで体を這い上がってきているかのよう。

石畳の地面は固く、歩みを進めるたびに足の裏を強く冷たく押し返す。

それが、まるで町から拒絶されているようで、今にも血の杭で脳幹を砕かれようとも不思議に思う事無く死に行く事が出来そうにすら思う。

理由（わけ）は至極簡単。きっと自分は普通の人間よりも、この腐った死体に近い存在だから。

人の死が怖かったのもきっとそう。

森で狼に死を突きつけられて心が凍ったのも、ハルユキが誰かを殺してしまうのが嫌だったのも、桜の森でイサンの死を受け入れられなかったのも、この死体達を見て頭が割れそうなほど痛んだのも。

全て、きっと。思い出したくなんかなかったからだなのだろう。

おぞましく、生き汚く、それこそ泥の塊で人の形を象っただけの人形のような、汚らわしさを思い出したくなんてなかったのだ。

泥。

泥だ。

ただ積もり積もらせて塗り固めただけの。夏の強い雨がどうか押し流してくれないかと空を見上げてみても、曇天に似た空からは何も落ちてはこない。

ひたりと空から何かが落ちて来た。それは灰色の空から垂れてきたかのような濃い色で、頬に当たってどろりとした感触を伝えてくる。

雨ではない、ただの血だ。

腐った血。それを右手で拭うと肌に吸い込まれたかのようにその感触が消える。

残るのは、そう。

冷たい雨。熱を失った肌。零れた血と舐めた土の味。命の消え行く気配。そして、何もかもをうやむやに■■■感触。

理解はしているのだ。

感情が凍えているのではないかというほど冷静な思考は、恐らく今の状況をほぼ確実に把握していた。

しかし少女の足はただ目的も無く町をうろつくばかり。

恐らく今も何処かで戦い、または奔走しているであろう顔見知り達の顔はまるで傍らで見ているかのように鮮明に想像することが出来る。

顔見知り。

友人だとも、仲間だとも、もちろん家族だとも。

心の中で彼らをそう呼ぶことを躊躇われた。

嫌な訳ではない。そう呼ばれるだけでくすぐったくなる様な幸せを感じる。

しかし、そう気軽に呼んではいけない事も強く感じていた。自分が知っている友人とは掛け替えが無い物で、仲間とは互いに命を預け合うもので、家族とはもっと通じ合っているのもだった。

彼らに不足がある訳ではない。

悪いのは自分。足りないのは自分。汚いのは自分。

だから、少女は彼等と顔見知りという関係以上にはなれない。

現に、彼女はただ自分勝手な感情一つで彼らに近づく事さえも出来ないでいる。

怖い。

ただ、それだけ。

命を奪う事にではない。奪われる事でももちろん無い。

あの恐怖は、この自分を取り戻したくなかった事から来た物だ。

至ってしまった今では死など最早通過した物でしかない。

落胆の目を知っている。

拒絶の目を覚えている。

離別の味を思い出せる。

そしてその目が、自分を見つめる、自分に笑いかけてくれる彼らの目に投影される。

怖い。

唐突に地面から湧き上がる冷気が倍増したように感じて、自分の体をかき抱く。

自分の手を覗き込む事さえも。怖くて怖くて怖くて、怖い。

見つめた先が溶けて、泥になるようで。そしてそうなったらきっと、そのまま自分は無表情のまま生を諦めるのだろう。

そんな記憶が体の中にごまんと存在している。

その記憶の中で、この自分は何の変わりも無く、ただ周りが優しく在ってくれただけ。

死んでいった、諦めていったその他と自分の見分けは付かない。いずれは、溶けて、混ざって、消えるのだ。

記憶が元に戻って、大きな大きな泥の塊に既に自分は埋没している。

もう、以前の自分がどんな形の土くれだったのかも、定かではなくなっていた。

――いや、きっと。

そんな物は最初から無かったのかもしれない。

ただ何かに憧れて、身に余る何かを願って、泥の自分に目を瞑って。嘘をついていたのだ。

「結局さ、君は誰なんだろうね」

幼い声がした。

柔らかく高いその声は聞き違う訳もなく子供のそれだったが、その口調も話し方も雰囲気もどこか老獪な雰囲気を感じさせる。

「いくら記憶を探してみても、君はこんな所に居る訳は無いんだよ。

決してね」

いつからそこにいたのか、大通りに続く路地の終わり。その傍らの壁に小さな体が背中を預けている。

「そりゃあ、数は有る訳だから可能性がゼロだとは言わない。だけど、君程の出来なら忘れる訳は無いんだ」

意味ありげに目を瞑り、ゆっくりと壁から背を離しその小さい体同士が向き合った。

「何かの奇跡で君が戻ってきてくれたのなら、僕は嬉しいよ。だけどね、」

伏せていた目が、ゆっくりとこちらに向けられる。

「もし君が勝手にその姿を使っているだけだと言うならば、肉の一片さえもこの世に残さず殺し尽くす」

その目は鋭く、どろりとした殺意が体の自由すらも奪っていくようだ。

「私は――、」

口は淀み無く言葉を繋ぎ、もしフェンを知っている人間ならば違和感を覚えるほどだろう。

そしてきっと、次の言葉で耳を疑うのだ。

「フェニア・ミストガルナです、お父様」

それを聞いた目の前の子供も、目を丸くして言葉を失くしている。しかし、暫くもせずにその唇が醜く歪む。額には期待からか汗が浮かび、きっとそれは嘘ではない表情。

「……へぇ、君はフェン・ラーヴェルではないのかい？」
「ラヴェルは記号（ラベル）。その名前は、――ただのレッテルです」

嘘には敏感なこの男。感情が見え隠れしていた表情を一旦隠し、一欠けらの嘘も見逃さないつもりなのか少女に近づいて顔を覗き込んで、笑ってみせる。

「それじゃ、君はまた僕のために笑ってくれるのかい？」
「はい、お父様」

そう言って、フェンは目を細め唇を綻ばせた。

視界の端に、たまたま行き着いた闘技場が映っている。

御遊戯戦争（後書き）

短かろうが、力尽きるまで毎日更新してきます。
何かあれば感想欄か、拍手からどうぞ。

神の御手

足りない。
時間が。力が。肉が。まだ、足り得ない。

あの巨悪は想定を超えて穢らわしく、強大だ。
如何にこの身が御身と共に有るといえど、万が一にも正義が負ける事は許されない。

迷う事はない。

御身は万能。そして至高。
ならばこの身にも不可能などあるわけは無く。

そう、簡単な事だ。

足りないのならば、他から持って来ればいい。
何処からか。何、御身の僕ならば誰でも良い。そしてこの天地に御身の僕でない物はない。

終末を迎えたかのような町並みを眺めて、興奮に濡れた息をつく。

嗚呼羨ましい。

妬ましく、嫉ましく、どうしようもなく焦がれてしまう。

だって。

なんといっても。

御身の為に己を犠牲にするなどと――。貴様ら卑小には過ぎた光栄である。

ああ、そしてここには天に手を伸ばす者がこれ程いる。

何たる忠義か。何たる献身か。何たる信心か。

貴様らに最大の敬意を以って。喜べ。貴様らは全て神の下僕だ。

手を伸ばせ。また、祈れ。

さすれば、御身は手を差し伸べる。

だが、努々勘違いはよしてくれ。

貴様らの為に御身がある訳ではなく、御身の血肉となる為に家畜（きさまら）が存在しえるのだ。

さあ、迎えに行く。

貴様らは祈り、そして迎えるだけ。

再三言おう。喜べ。

汝らに差し伸べられるのは神の御手だ。

◆

「――あああっらあああああ！！」

ごぼん、と質量を持つ炎の腕が”サルド”の腐った体を容易く貫通する。

しかしその腐肉の体が誇るのは防御力ではなく、圧倒的な回復力とその物量。

炎の腕が突き抜けた途端に腐肉が穴を塞ぎ始め、僅か三秒ほどで元通り。一瞬で出鱈目に骨格が構築され、腐肉がその上に重なり薄皮が覆う。

襲い掛かってくるのは無数の白骨。

か細い子供の腕。大人の腕。折り重なるように塊となった物。一本一本が筋繊維のように編みこまれた巨大な物。

そのどれも、赤黒い腐肉と相まって不気味な白さが目立つ。

体中に不規則に設置された眼球は一切の死角を許さないかのように、ぎょろぎょろと忙しなく動いている。

明らかに日常の一部ではない。登場するとしたら趣味の悪いスプラッタ小説かホラー小説の中にだけ。

しかし闇の中で見たならば戦慄しそうなそのおどろおどろしい姿

も、四方を覆う炎の壁に照らされては、その異様な威容も半減だ。

「――まだまだァッ！！」

裂帛の怒号と共に、炎の腕が振るわれる。

全力。

キィラルの全力は未だ続いている。

キィラルの全力は並みではない。
サルドの回復力も尋常ではない。

しかし、その二つが競われた時、ほんの僅かに、――より具体的に言えばほんの肉片一欠けら分だけ、キィラルの攻撃力が上回る。

だからこそ、キィラルの全力はこの炎の檻に己を閉じ込めてから三時間以上続いている。

一瞬でサルドの魔力が雷に変換され、数多の腕の指先から発射される。

それは極光の網。

手当たり次第に発射された紫電は空気を切り裂き、質量を持つ炎の壁さえも半ばまで破壊する。

その凶刃にはキィラルの姿も例外ではなく、”一度に何十人もの”キィラルが貫かれた。

――■■■■■■■■■■■■っ！！！

苛立たしげに声を上げたのは、サルドの方。

その隙を縫うように、また高温の炎の塊が、重さと鋭さを持ってサルドの体を壊していく。

熱地獄。

乱れた空気の層はレンズとなり、標的であるキィラルの姿を歪めさせ複製させ眩ませる。

温度と共に透明度を増した炎は殆ど視認することが出来ず、しかしその高すぎる温度も周りの低音の炎で緩和され外に漏れる事はない。

そしてまた一欠けら。

炎の腕が腐肉を削り取る。

何度繰り返しただろうか。削り、抉り、焼き、時には押し潰し、サルドの体は既に三分の一ほどが再生されずに放置されている。

しかし、まだまだだと言うように深くキィラルの吐息が濃い魔力に当てられ炎を帯びる。

”炎の魔人”

最初にキィラルをこう言ったのは誰だっただろうか。

魔人、とその由来は間違いなくその戦う姿から。

圧倒的な熱量で、圧倒的な持久力で、圧倒的な魔力量で。

炎と戯れるように愉しげに戦うその姿。

それがきっと、まるで神秘的なものに映った人間が居たのだろう。

一対一では相性の関係もありラスクには一歩及ばない。

しかしそれでも、より人の目に当たったのは中心にあったのはキィラルだった。

ラスクでさえもその周りに居る事に居心地を感じるのだから、そのキィラルとサポート役のラスクを中心とした”ブレイズロア”は無敵だった。

ラスクに勝てないのは、魔法の相性と言うよりも性格の相性だ。加えてラスクの魔法の多様性が、馬鹿正直なキィラルをうまくかわす事に向いていたから。

当然、頭を使った戦い方が出来ない訳ではない。

しかし良くも悪くもキィラルは気分屋である。

そのモチベーションが好む戦いと嫌う戦いとで激しく上下するのは珍しい事ではない。

そして例えば。

火力と体力と魔力だけが要求されるこの状況で。

キィラルのモチベーションは最高潮に達し、集中力は髪の先一本一本に炎を点せるほど研ぎ澄まされていた。

しかし、その表情に昔のような楽しげな表情は無い。

ただ集中、ただ壊す。

自分を見失っているわけではなく、ただ必要な物以外を封じ込めただけ。

それは年齢を重ねた事による責任感と、使命感が良い方向に作用したもの。それは誰かが見れば、炎と戯れると言うよりは炎を従えているように映っただろう。

昔よりも更に、彼は炎の魔人だった。

そして、終わりの時は特に劇的でもなく緩やかに訪れる。

最初の異変は、巨大で堅固で、そして矛にも盾にも使われていたその腕がぼとりと地に落ちた事。

直ぐにそれが異変だとは気付かず、キィラルはただ更なる好機を求めて炎を繰って腐肉を抉る。

そして、もうそれが再生する兆しを見せない事に、漸くキィラルも終わりを悟る。

「……ぁ……っｌっ……ｗｗわｓｗｍ、ｋｑａｅあｏ……ッ……！」

その体を維持するのに、どれだけの魔力を使っていたのか、何もかもが尽きた”侵略者”は残った体をも崩し始める。

あれだけ空気を震わせ、恐怖を煽った咆哮もあれだけの大きさがなければ、ただの陰気な呟きにしか聞こえなかった。

次々に崩れていく。

骨も、皮も、肉も、命も、尊厳やら何やら、恐らく代え難いほど大切な物も。

同時に、キィラルが炎の壁を解除する。

質量を持った炎の壁は、そう簡単に燃え移らない。面していた家屋は黒く焼け焦げて形を無くしていたが、それでも出来過ぎだと言えるほど被害は少ない。

「終わったぞ、ラスク」

「ああ、ご苦労さん」

「ほんとだよ、疲れたの何のでてんやわんやだ、この野郎」

ふわりと顔に似合わず着地したラスクに、冗談交じりでキィラルが悪態を付く。

その言葉と、辺りの光景に思わずラスクも失笑を漏らすと、煙草を取り出し口に咥えた。

「最後までやれ。まだ残ってる」
「……ああ、そうだったな」

”侵略者”の亡骸。

今はただの死体の山でしかないそこに近付きながら、キィラルも煙草を口に咥える。

そして、未だもぞもぞと動く腐肉の山の中にそいつを見つけた。

人の形を保っているのは右半身だけ。

他の部分は粘度のような腐肉で埋め尽くされているが、確かに知っている顔。

「――か――い、――ッ――ぱg―ッィ……」

しかし唯一残った右目は光を失い、口からは意味の無い音が零れるだけ。

そんなサルドに。

近付きざまキィラルは手を伸ばした。

優しく触れる訳でもなく、手を取る訳でもなく、ただ首根っこを引っ掴んで死体の山の中から引き上げる。

しかし正面から睨みつけるキィラルに対して、サルドは白痴の様に視線を彷徨わせるだけ。

「――俺の勝ちだ、サルド」

びくり、とサルドが肩を震わせた。

「お前はお前なりに頑張ったが、まあ俺は大人だからな。子供にゃまだ負け――」

どすん、とキィラルの腹に柔らかい衝撃が当たった。握りこぶしも作られていない右手のストレート。

「……負けず嫌いは嫌いじゃないが、残念そんなへっぴり腰じゃあ、俺には勝てん」

投げ捨てるように、キィラルはサルドを地面に座らせる。

背中に腐肉の山があって、姿勢こそ崩れはしないがもう腕は小さく震えるだけで持ち上がることも無い。

「……どうして、勝てないんですかね」

聞こえた声に、今度はキィラルが肩を震わせ、目を見開いた。

間違いなくサルドの声。顔を向ければ確かに表情に自我があった。しかし、その目は白く濁っていて何処も見れてはいない。

「そりゃお前がガキだからさ」
「そんなもんですか」
「そんなモンさ」

ふー、と大きく紫煙を吐き出しながら小さく笑う。

「お前は助からん。だから、餞別だ」

サルドの口に一本煙草を咥えさせる。

驚いて取りこぼしたので、もう一度、声をかけてからしっかりと口に咥えさせる。

「煙草、ですか。嫌いなんですよ」
「知るか。俺はお前が嫌いだ」

知ってますよ、僕もですから。とサルドは吐き捨てるように軽口を叩きながら、ぎこちない笑いをその顔に浮かべる。

「すいません、火を」
「ん、ああ……」
「とびきり、派手なやつを。お願いします」
「……ああ」

咥えた口ごと、サルドの体ごと、凭れ掛かった死体の山ごと、炎は煙草を燃やしていく。

うねってくねりながら炎は大きく一つになっていく。

そんな中、一瞬でほとんど燃え尽きてしまった煙草を吸い、サルドが煙を吐き出す真似をして見せた。

「これで、僕も大人かな」

「リベンジなら、あの世で受け付けてやるからな。化けて出んなよ」

冗談交じりにそう言うと、漸くサルドが小さく噴出した。

「そうですね。――じゃあ、また」

「おう、また」

キィラルは名残惜しそうに燃え尽きる煙草を抱えるサルドに背を向ける。

助ける事は出来なかった。

別に後悔は無い。息子を苦しめた張本人だ。別に恨んでいる訳ではないが、特別好意を寄せていたわけでもない。

壊す事は得意だったから、さほど困難だったわけでもなかった。

しかしただ、救う事の難儀さだけが胸に残った。

最後の煙草。

それで少しは未練でも無くなってくれれば、とそんな思いを込めて煙を空中に放つ。

――そんな中、何かが背中を撫でた。

「キィラル――!!」

見えたのは、今までに見た事が無いほど表情を強張らせる友人の姿。

背中に到来する、言葉にならない危機感。

その二つが、否応無くキィラルの意思を誘導して、体を前に飛び込ませた。

「キィラルさん！！」

ごぼり、とキィラルの体の下の地面が盛り上がる。

それは倒れこんでいたキィラルの体を押し上げ、未だ視認していない脅威から遠ざけた。

跳ね飛ばされたキィラルは炎を所々に噴射させ空中で姿勢を正すと、ラスクと、先程地の魔法を使ったガララドの横に立つ。

「何だ、ありゃ……？」

そして、初めて視界に入れたそれは、生理的な嫌悪感を感じずにはいられない物だった。

白く細い手。

全く質量を感じさせず、ふらふらと漂うように伸びている。

しかし、それが通った後はキィラルの炎をも存在できず、そしてそこらの腐肉を一つ一つ、どんなに大きな物でも苦も無く拾い上げていた。

半透明のその頼りない手。

指は短く、手首も肘も見当たらない。それは赤子が好奇心をもとに手を伸ばしているかのように見えた。

「あ、ああ……、あああああああああ！！！」

「サルド！」

それに連れて行かれる腐肉の中に、先程別れを済ませたはずの顔見知りもいた。

数本の腕に連れて行かれるその顔は強張り畏れ、しかし何かを求めるかのように、手を伸ばしている。

手を伸ばしているのは、腕の根元。

”漸くそれを見つけて”、キィラルとガララド、ラスクの三人とも表情を強張らせる。

一体どうやって今まで認識を掻い潜って成長したのか。

そこには、町中の上空を全て覆ってしまうほど大きく膨張した太陽があった。

――いや、それはもう太陽ではない。

あまりに大きい薄皮の中に、確かに胎動する何かがある。

胚。

それは命が生まれる前兆の印。

◆

◆

◆

「――押さえろ！！」

ミスラの金切り声が発端となり、その光景を呆然と見つめていた兵士達が連れ去られようとする同僚に跳び付いた。

しかし、重力を感じさせず軽々と運ばれていく体はあっという間に上空まで運ばれていき、伸ばした手は届かずに宙を掻く。

軽くない怪我をして、しかし何とか治療して一命を取り留められるかと言った所だった。

その手がやって来た事に、そして、その手が同僚の体を攫って行くのに無抵抗で見送ってしまったのは、余りにその光景が神々しかったから。

もしかすれば、助けなのではないかと思ったのだ。

余りに必死に救おうとする姿に心打たれた神様が、手を差し伸べてくれているのかと思った。

実際に、同僚の体を掴まえ切れず地面に降りた後も、本当は見送って良かったのではないかという思いがあった。

しかし、希望を含みながら視線を上げ、そして、半笑いの中途半端な顔のまま、兵士達の顔は強張った。

闇夜も照らす白い太陽。

それは眠らない町の象徴として、この国の守護神として我らの背

中を照らしてくれる物だった。

しかし、今は違う。

あれは何だ。形容する言葉をその場に立ち尽くす誰も持ち合わせてはいない。

月が落ちてきたのかと言うほど町から見える空のほぼ全てを覆うその球体の外皮。

大きすぎてただの線としか認識できない輪郭。

そこから無数に伸びる白い手は、まるで闇を刺し貫く神の後光のように畏ろしい。

伸びる腕は、そこら中で杭により晒されている死体をゆっくりと回収していく。

先程、キィラルが倒して退けた侵略者も。

ここら一体だけではない。

既に町の面積と並び立つほど大きくなった、白い”何か”はその表面全てから手を伸ばし、町中に蔓延り始める。

浚って行くのは、死体、腐肉、そして先程キィラルが倒した”侵略者”すらも。

――そして時には生きている人間すらも。

それは全て命を失う寸前の者だったり、心を壊してしまった者だったり、自暴自棄になってしまった者だったり。

その誰もが向かってくる白い手に救いを求めるように自ら手を伸ばしていた。

そして、先程捕まえ損ねた仲間が、白い太陽に飲み込まれ、消えた。

いや、消えてはいない。確かに居る。ただ分解され、個を亡くしたのだ。

「ああ……」

誰かが膝を突いた。両手を組み合わせた。

悪い冗談だろうと、あれは自分達を救ってくれるはずだろうと。

――ああ、どうか神様。

そう祈った誰かの肩に、音も無く白い腕が乗る。

神の御手（後書き）

鬱々で申し訳ない。

落色（前書き）

ギリです。
急ぎ足になったのでクオリティ低すぎたらすいません。

落色

ぎりぎりぎりと空気が捻れている様な音を錯覚する。

ラストの視線の先にはその原因となっている一人の男。

「――なあ」

人は怒れば叫び散らす。

臨界点を越えれば逆に押し黙るという。

ならば先程まで臨界点を越えていたであろうこの男がまた言葉を発するのは、内包した怒りがどう変化したからなのか。

「そんなに、俺を怒らせたいのか？」

「ああ、俺はお前を怒らせて、あわよくば憎んでもらえればと思ってる」

「――そうか、なら、いい」

町の中で、今年の闘技大会で決勝に進んだ男はまるで鬼の子供のようだ、と誰かが言っていた。

なるほど、確かにそれは言いえて妙だ。しかし、その人間が今のこの男を見ていたとはとても思えない。ならば、その渾名を付けた人間は何かを見抜くという点で優れた才を持っていたのかもしれない。

――”ただ殺して啜る”

男の口から零れた言葉が呪詛のように重くラストの鼓膜を揺らす。

今の男の姿こそ、鬼と言うに相応しい。

何しろ、男の存在感は人間のそれを明らかに逸脱し、額が罅割れ、そこから”明らかな角が覗いている”。

ああ、しかし。これを自分は待っていたのだ。

鬼。これが、この姿こそがこの男の本質。そして全力なのだ。この姿のこの男の全力と、この一本角の灰色の鬼と対等に拳を交わせれば、自分の胸にどれほどの感動が去来するのか。

拳を握る。震えは無い。自分も渡り合えると確信し、顔を上げ――。

”――糧となれ。壁となれ。何方も押し靡べて塵となれ”

ばきん、と。

響いた音に思考が飛んだ。

「……は？」

不規則に曲りくねった角がもう一本。太腿から顔を出している。
それは先の一本と同じように、力であり、狂気であり、そしてまた剣のようでもあり。

「は、は……」

乾いた笑いが、ラストの口から漏れる。

しかし、心も魂も今までに無いほど潤い、そして唇は綺麗な三日月形を作り、目は爛々と光っている。

だがしかし、幸福感は吹き飛び、代わりに絶望に似た恐怖が残さ

れた。

全力だと、底だと思っていたそこから、更に何段階か。

一本角が生えた瞬間、その存在感は圧力は狂気は、桁を一つ上げた。

それでもまだ。

その瞳の中には理性が残っている。それが何より歪に見えた。

「――まだ……！　何かあんのかお前はよォッ！！！」

それは間違いなく歓喜の声。

そして、その声を潮にラストが動いた。

低く低く、体を地面に擦らせるほどの低姿勢で、ハルユキの懐に潜り込むまでほんの刹那。

その刹那の間に、すっと白い何かが入り込んだ。

それはそっと男の頬に触れる。その寸前、男が警戒するように後ろに跳んだ。

ふらふらと布のように揺れるそれは、腕の形をしていた。

成人した人間のような骨ばった腕ではなく、赤子の手のような柔らかで触り心地が良さそうな純白の腕。

何かを感じたわけではない。ただ何かに導かれるようにラストとハルユキ。二人の視線が上を向いた。

一面の白。

遠目から見れば苔の様な、近くから見れば天井に生えた草原にも見える。その腕がそれら植物と違うのは、透けるような白さを持っている事と、風に靡く事無く一点を向いている事。

そして向かう先は、黒髪の男。

殺到する。

それはきっと霊魂や幻に近い存在なのだろう。その数は勢いはこの世の物理法則に縛られていないのか、勢い余って地面に当たろうが一切地面に影響を与える事は無い。

ハルユキは表情を変えることも無く、津波のように押し寄せるそれらを一瞥し、体から力を抜いた。

その手に意思は無く、ハルユキのその行為に疑問すら感じることは無く、ハルユキに覆いかぶさる。ハルユキの姿は瞬く間に白い腕に覆い隠され、それでも矢のように腕の群れはハルユキに突き刺さっていく。

――そして、爆ぜた。

何のことは無い。白い手が持ち上げようとしてしまっただけ。それは物理的に干渉するという事であり、今のハルユキにそれを悪意を持って行えば、それは即ち自殺行為だ。

「――行くぞ、化け物ォ！！！」

ばらばらに砕けて宙を舞う腕の破片に紛れるように、ラストが拳を振り上げる。

神速。その名を冠するに何の遜色も無いその速さ。しかし、ハルユキには何処までも愚鈍な拳。

「――”星母神（バビロン）の箱庭”」

しかし、そこで僅かに世界が変わる。発せられた声は背中から。

声を発したオフィウクスを中心に作られたのは、重力が入り乱れる無法の世界。

重力特異点とも呼ばれるその場所は、光も時間の流れもさえも容易く意のままに歪ませる。

結果。

ラストの拳は鈍まなまま、しかし確実にハルユキの体に吸い込まれる。

その拳の重さに自然ハルユキは目を見開く。

見れば、その右拳以外にラストには魔力が通っていない。つまり、あれ程の頑強さを捨て、全て拳の先だけに魔力を集中させたのか。

つまりは、決死の一撃だった。

ダメージがある訳ではない。むしろラストの拳が拉げ、魔力を伝わせていなかった肩から奥の肉が弾け飛んでいる。

それを当てさせるために、オフィウクスが動いた。

それは連携か、――いや。

「――旭光（レゴール）」

重力も時間も入り乱れる空間の中、オフィウクスが極光の槍を放つ。

星色に輝く、隕鉄の槍。

岩盤から削りだしたような荒削りな形で、大きさは手に掴める程度。しかし魔法の技術を研鑽する人間が見れば卒倒しそうなほどの魔力を内包している。

振るえば町の一角を灰燼と化し、突けば神の喉さえ貫ける。

それが、無防備なハルユキの背中に突き刺さる。

ラストから攻撃を受けた直後だというのに何処から抵抗する力を持ってきているのか、背中に槍が突き立った途端右腕が肩から消失したのではないかと言うほどの衝撃がオフィウクスを襲う。

しかし、構わずオフィウクスは槍を突き出し、そしてハルユキの体が宙に浮く。

――そして。

「……貴殿は」

空中に押し出されたハルユキは、五十センチほど”吹き飛ばされた”後、ふわりと地面に降りた。オフィウクスの全力は見事、ハルユキの意思を無視して五十センチ押し遣る事に成功した。

「――本当に嫌になる程、糞ったれだ。鬼の仔殿」

「心配するな。お前もだ」

ごきり、と己の健在を示すようにハルユキが首を鳴らし、同時に。

何かが割れるような音と共に、三本目の角が顔を出した。

◆

腕は出来た。足は出来た。頭は出来た。脚は出来た。手は出来た。胸は出来た。背中は出来た。頭は出来た。目は出来た。鼻は出来た。耳は出来た。

そして心臓もある。

その瞬間、人知れずそれは生命として完成した。

意思もあり、心臓もあり、魂もある。

間違いなくそれは生命であり、しかしこの地上にこの生き物を指す名前はない。

地上で無い場所から探すとするならば、神か、悪魔か。

成る程。その高潔な魂は神のそれに近いだろう。
成る程。その穢れた体は悪魔のそれに違いないだろう。

しかし、神は完全に完全で有らねばならなく、悪魔は完全に不完全で有らねばならない、

だとするならば、どちらも含むそれは神にも悪魔に近いだけで、そのどちらかに定義することは難しい。

悪魔と神の間。
しかし、そう定義するのに相応しい生き物に、人間がいる。

――しかし、人間だけではありえない。
この何かが、人間である事だけはありえない。

龍よりも鬼よりも狼よりも、火よりも水よりも風よりも土よりも、

蛞蝓よりも蜥蜴よりも蛙よりも蛇よりも蛭よりも蛆よりも、埃よりも塵よりも。

人間と言い表す方が、相応しくない。

ドクン、と大きく鼓動する。

生誕の時は近く、終焉の時は直ぐそこに。

◆
◆
◆

五十センチ。

それが、怪物だ傑物だと畏れられたオフィウクスの全力の末路だった。

それも、一度ハルユキの体に攻撃する事に成功してから、一切攻撃に成功していない。いや、攻撃に移ろうとさえしていなかった。

今も正に常人では立ち入っただけでその磁場により何らかの影響をもたらすであろう重力特異点を展開し、ハルユキに負荷を、そし

て自分に加護を与えている。
それは常人でも飛竜と渡り合えるほどの物だ。

その事実は今まで畏怖の対象ですらあったが、今は自分に己の卑小さを突き付ける矛となっていた。

事実、飛竜と常人の力の差を覆すその場所で、それでも防戦が続いている。

今までの経験を。研鑽を。才能を。
全てつぎ込んで、そして漸く命を今まで繋ぎとめる事に成功している。

そう、成功しているのだ。どうか、賞賛を送って欲しい。

二対一で、限界を超える能力を使って、地の利を使って、時には敵の仲間に攻撃を放って。

――”たったそれだけの事で”。
この鬼の前で息をしていられるのだから。

振られた拳の延長線上にいるだけで肉は弾ける。
一歩で千里を越える神脚が踏まれた傍にいれば地割れに飲み込まれる。

視界の中から鬼が消えるたびに、死の予感が全身を舐め上げ、全身の感覚が生存本能から跳ね上がる。

――後ろ。

受け止める。――馬鹿げている。触れた瞬間肉塊だ。

なら、避けろ。しかし、足に力を貯めている時間は無い。

ならば、魔力を巡らせろ。我は魔王。魔力は伝達神経よりも速く自分の意思を伝えてくれる。

重力が真横に作用する。

ずれた時間が、歪んだ力の場がオフィウクスの体を痛めつけながら、無理矢理引き摺った。

その僅か数センチ横を、拳が通過していく。

とてももうそれは拳には見えない。触れれば弾ける。近付けば引き裂かれる。事実オフィウクスの体は切り刻まれ、吹き飛ぶスピードが加速する。

突風に晒されたかのように十メートルほど吹き飛び、地面に一度体を打ち付けた後で、素早く体勢を整え顔を上げる。

当然、先程居た場所に鬼の姿は既に無い。

――左。

直感か、はちきれんばかりの緊張感が何かを掴んだのか、視線をやった先で轟音。

一瞬遅れて、またしても突風が吹き荒れる。

そこに居たのは白髪と黒髪の何ともコントラストが利いた、二匹の化物。

あれ程膨大だった魔力を足の先一点に集中させ、ハルユキの腹部を打ち据えていた。

しかし苦痛に顔を歪ませるのは、その体を血に染めるのは白い魔獣のほう。

弾かれるようにラストの体が後ろへ下がる。しかし、同じ分だけ移動したハルユキとの間隔は、計ったかのように縮まりも開きもしない。

そして、ハルユキとラストが腕を上げたのが同時。

一瞬後に顔の前で交差させたラストの両手と、ハルユキの拳が衝

突した。

ぐしゃり、とラストの腕が潰れる嫌な音が響き、ラストの体が消え去った。

ほぼ同時に、闘技場の壁が破裂し、その辺り一体が吹き飛び崩れだす。

今度は何処まで飛んでいったのか、――しかし、死んではいないだろう。

防御した腕が交差された時には、既に白い魔力が一点に集中していた。その大きさおおよそ拳一つ分。その他は無防備に一切の魔力は通っていなかった。

間違いなく勘だろう。

しかし、それがもう4度目ともなれば、それは本能と置き換えていいのかもしれない。

それは怖かっただろう。

先程の拳の半分の力でも、防御した他の部分に当たっていればその瞬間ただの肉塊に変えられる。

しかし、ここから見た限りラストの顔は至福に満ちていて。

――そして、端正な顔をいや体中を、埃と泥と血でどろどろに汚したオフィウクスの顔も期待と興奮に満ち充ちていた。

――”色とりどりの世界を知っている”
――”世界を取り巻く星々を覚えている”
――”漏れる光は、我が退屈の中”

「――旭渦光（レゴルボルクス）」

三小節の詠唱を吹き飛ばし、ハルユキの周りで舞う塵が埃が欠片が石が、いや、闘技場内にあるそれら全てが、オフィウクスの光の従属と化す。

目も眩むような閃光に、ラストを追おうとしていたハルユキの足が止まる。

連携しているわけではない。

先程吹き飛ばされて無防備になったオフィウクスをラストが庇ったのも決して打ち合わせたわけではない。

ただ、この場でもし一対一になれば、三手以内に殺される。

それが判っているからこそ、二対一と言う現状を壊すわけにはいかないだけ。

大小様々な光の槍が、ハルユキに殺到する。

その全てが当たるとは思っていない。当たったとしても何がどうなるとも思わない。

突破口が無い。
まだ、光の槍が地面を叩いている最中。
後ろには更に左頬から一本角を増やした灰色の鬼。
ぼっとオフィウクスの胸から下が消し飛んだ。
「ち……」
死ぬ訳ではない。この体は仮宿だ。
ただ敗走する。それが闘争の権化たるこの身には耐えられない。
仕留め切れなかったことを悟ったのか、右腕と胸と首より上以外を全て持っていった右足を引っ込め、握り拳が振り上げられる。
瞬間、鬼の体が硬直した。
鬼の視線が肩越しに闘技場の入り口だった場所へ。
そこには、邪悪に笑うレオとつれられた青髪の少女。
同時。

反対側から、興奮の猛りを響かせながら闘技場に戻ってきた魔獣の君が、闘技場の壁を吹き飛ばしながら終り鬨を吼える。

見る。

鬼の顔からほんの少し殺意が薄れ、この自分が意識の外に。

ささやかな屈辱と、見つけた勝機に。

意地汚い笑顔が表情を乗っ取る。

全力を。

可能なのは、たかが五十センチただの半歩分のみ。

しかし今はそれを切に願う。

「貰うぞ、その半歩――！！」

手にするは、手に余るほどの旭光の槍。

刃の行方は、自分を害虫ほどにしか見ていない鬼の脇腹。

刮目せよ。

――貴様の負けを。

脇腹に突き進んだ槍は薄皮一枚貫く事すら叶わない。
柔軟で剛直な筋肉は、内包した力を吸収して殺しつくす。

――しかし、ほんの半歩分だけ。ハルユキの体が宙に浮く。

地面に這うように近付く魔獣の影。地面に浮いた鬼の背中を強かに打ち上げる。

「――オベリスク！」

そして、近付いた太陽から巨腕が伸びていた。

その幅何十メートルか、その長さ何百メートルか。

今まで何処に隠していたのかと言いたくなるほどの巨腕が、その巨腕を見失うほどの速さで振るわれた。

そして鬼の姿が彼方へ消える。

死んではいない。

あの巨腕がどれほどの速さで振るわれたのか、霊体か若しくは”神の身”だからかあの大きさでは物理的に有り得ない速さであった事は確か。

しかしそれでも。あの鬼が死に臥している所をどうしても想像できない。

今まで曲がりなりにも戦いになっていたのは、恐らくあの女子（ユキネ）の言葉が迷いか何かを生じさせていたのだろう。

動きにムラがありすぎたのだ。

もし、殺す気だったのならば刹那の間に挽き肉だろう。それ以前に追っていったラストがいなければ、太刀打ちも出来なかった。

余りの幸運の重なりに笑みが零れ、思い出したようにやってきた恐怖と充実感に更に表情が歪む。

そして、残った人間達に視線を向けた。

◆　◆　◆

「ハル、ユキ……？」

その姿を見て、思わず呟いてしまった事を直ぐに後悔した。

聞こえるとは思わなかった。いや、そんな事すらも考えずに呟いた一言だった。

しかし、聞こえてしまった。聞いてくれてしまっていた。

もしかしたら、心のどこかに留めておいてくれたのか、気にかけてくれていたのか。

いつもの表情をこちらに向けようとしてくれたハルユキを。

優しい彼を。

怨敵共が一斉に襲った。

卑怯だと思ったし、憤りがあったし、何より余りにハルユキが哀れだと思った。

古龍の口から尻尾までも一突きにするような巨大な槍を背中に打たれ、いつか見たあの破滅の化物に槍と同じ場所を殴り付けられ、最後に天から伸びた腕に打ち払われた。

「酷、い……」

あまりにも非情な光景だった。

槍先に挙げられ、地上から追い出され、更には神にすら汚らわしいと拒絶されたように見えた。

周りの全員が敵であり、よってたかって殺意をぶつける。

何故そんな酷い事ができるのか。

彼が何をしたというのか。

「よくやってくれた」

「え……？」

ぽん、とフェンの肩にレオの手が置かれた。

「これで、逃げられる」

”お父様”。
取り戻してしまった記憶の中に大きく幅を取って存在する人間。

「合流するよ」

指し示されたのは、先程は確かに胸から下を失っていた金髪の男。
いつの間にか体は形を取り戻し、ある場所に歩を進めていた。

「一応偉い人だからさ。粗相は出来るだけないように」
「あ……」

その言葉に返事をしようとした訳ではない。

思わず零れてしまった声は、金髪の男が向かう先にその三人を見つけたから。

ジェミニが。レイが。ノインが。

そして、その奥には壁に寄りかかるようにユキネが。全員、死んだように動いていなかった。

「あ、あ……！」

それだけの、どんな感情が、どうやって、自分の中で働いたのかは判らなかった。
ただその中で一番大きな感情が、彼らに嫌われたくないという自己保身だったことだけは判っていて。

気付けば、震える両腕で杖を正面に構えて、その先を”お父様”の背中に向けていた。

後ろを付いてきていない事に気付いたのか、”お父様”の顔がゆっくりとこちらを向く。

杖を下げろ、と頭のどこかが厳しく命じるが間に合わない。

向けられた杖と、幼稚な敵意を含めた視線を確認して。

お父様は、冷めた視線をこちらに向けられた。

◆
◆
◆

咄嗟に防御して、折れた腕を直して、立ち上がる。

巨大な腕に殴り付けられてから、ハルユキの体が止まったのは、町の外延に設けられた灰色の結界の直ぐ傍。

空中から街中に吹き飛ぶ場所を移してから町を尽く破壊してきたのか、一直線に削れた地面が闘技場から続いていた。

（――急げ、戻れ！　速く！！）

「判ってるよ、喚くな」

頭の何処かが焦りを隠そうともせずに叫び、また何処かが気だるそうに返答をし体が闘技場のほうを向く。

そこから地を蹴ってから、闘技場に帰るまでおよそ三十秒ほど。

「ああ、流石だ。鬼の仔殿」

そこで見つけたのは、レイとジェミニをそれぞれ脇と肩に抱えている金髪の男。

「――離せ」

言葉と同時に、男の顔面に拳を叩きつける。

しかし、水蒸気を殴ったかのような軽すぎる感触だけが拳に伝わ

り、オフィウクスの姿は平然と佇んだまま。

「あまり時間が無いので、手短に言うと――」

その後ろには、一度帰ると言い出したときに現れた毒々しい青色の穴があり、そして、レイとジェミニの体ごとオフィウクスの体は透け始めていた。

「今日は我らの勝ちだ」

それだけ言って、呆気なくオフィウクスの姿は消えた。

もう一度振りかぶっていた拳が、今度こそ何も無い空中を通り過ぎた。

「レイ……？」

名前を呼ぶ。

「ジェミニ！！　レイ！！」

しかし、声は返ってこない。何処かに連れ去られた。ここにはい

ない。

「――、あ」

嫌に冷静な頭がそう告げた。

「あああああああああああああああッ！！」

単純に怒りからかその冷静な思考が嫌だったのか。怒号が腹の中から飛び出した。

「畜生がァッ……！」

ぼろり、と体中から生えていた数本の角が崩れ落ちて砂に還る。思い切り両手を地面に叩きつけ、砕けた地面が腕と体と顔を傷つけた。

逃がすと思うなよ、と呪詛を零しながら幽鬼のようにその体を起き上がらせる。そして、とりあえず闘技場から離れようと残されたノインとユキネを見つけて――。

「……フェン？」

足りない一人に気付いて、辺りを見渡した。

先程、一瞬しか確認は出来なかったが、確かにいたはずだ。しかし、その横にも誰か、そうまるで子供のような――。

――ぞくり、と。

絶望に似た嫌な予感が背中を撫でた。

「フェン！」

もう恐怖といって良いほどの、感情がハルユキの中で首を擡げる。

「居た……！」

まだかなり鋭敏化されている聴覚が、小さい足音を見つける。

そう遠くは無い。しかし、その足音は二つ。それも片方は弱々しく歪なリズムを刻んでいる。

一直線にその音に向かって地面を蹴る。

「――除けぇッ！」

その進行方向にあった闘技場の壁と家屋を吹き飛ばしながら、一瞬で闘技場の建物を飛び出し敷地を超え、そのままの勢いで家屋に突っ込む。

「フェン！！」

「あれ、いらっしゃい、どうしたんだい？」

そして足を止めた路地裏に、二人を見つけた。

一人は黒塗りの物騒なナイフを持つ子供。そして、もう一人は壁際に追い詰められナイフを突きつけられた見慣れた青い髪の少女。

「――離れろ」

「残念。流石にこれに関しては僕も妥協するわけにはいかなくてね」

首筋にナイフをあてがったまま、子供はフェンを盾にするように後ろに回った。

「人質ってやつだ。どうだい」

「そのナイフが貫く前に、俺がお前を殺せないとでも思ってるのか

？」

「またまた、判ってるくせに」

ち、とハルユキは小さく舌打ちをした。

ハルユキが立っている場所から子供の居る場所までほんの十メートル。

今のハルユキならばほんの一息だ。

しかし、それはあの子供とフェンが実体だった場合。

ならば、今も逃げているのか。

――否。

じりと足を僅かに前に動かせば、ぴくりとナイフが揺れる。

つまりまだどこかで見ているはずだ。じっくりと確実に逃げられる機会を狙っているのだろう。

場が膠着する。

ちらりと首に腕を廻されたフェンを見る。

「……？」

怯えるようにびくりと肩を揺らしたフェンに疑問を覚えるが、大丈夫だと小さく頷いて意向を伝える。

そうすると、今度は小さく目を見開いた。

フェンの無表情を読む事は得意な方だと自負していたが、今ばかりは疑問が残る。

「――じゃあさ、こうしようよ」

構わないだろうとフェンに声をかけようとした所で、子供が一瞬速く口を開いた。

「取引だ。僕がこれを連れて行くのを見逃してくれたら――…、”さっき浚われた二人を返して上げる”」

「……っ！」

思わず目を見開いたのはハルユキだけではなく、フェンもそうだった。

驚いたのは、二人浚われた人間がいると言う事に対してだったが、同じように疑惑半分の視線をレオの顔にぶつける。

「本当だよ？　僕は――、いや僕に限らずうちの組織は目的の為ならいつでも裏切っていい事になってるからね。まあ当然誰かの目的を阻害する事になるからリスクはあるけど」
「ふざけるなよ……？」
「ふざけてないさ。一人と二人だ。そちらに得がある取引だろう」

一度レオの顔を見る。

驚いているフェンとハルユキの顔を確かめるように薄く笑っている。

「フェン」

びくり、ともう一度フェンが肩を揺らして、いつの間にか落としていた視線を上げた。

その目が、瞳が判り易いほど震えていて、今目を合わせている事にすら怯えているように見える。

それが、ハルユキ自身に怯えているのなら、少しショックもあったが、恐らくそうではないのだろうな、とハルユキは察しをつける。

どうせまた、後ろ向きな被害妄想で悩んでいるのだろう。

「大丈夫だ。今、助けるから」

フェンの表情読みも、掛けた言葉も間違ってはいなかったらしい。

フェンの顔が泣きそうに歪んでしまったが、少しその顔に安心する。

ち、と小さく舌打ちしたのは子供。

何か言おうとしたのか、子供がフェンに視線を移す。

――瞬間、ハルユキは足に爆発的な力を込める。

一瞬で推進力を得た体は、とりあえず幻のレオの顔を貫き、驚いた気配を感覚神経を全開に探し出す。

はずだった。

「……あ？」

実際には、足に力を込めたはずのハルユキの体がそのまま地面に沈んで、地に伏しただけ。

驚きはきっちり三人分。

ハルユキと、フェンと、そして子供も。驚きを隠せずにそのまま表情に反映していた。

〈……馬鹿が。いきなり四本もいくからだ。動けなくなる事も判ってただろう〉

絶望的な声が、頭の中に響く。

「――あ、ッハハハハハハハハ！！！」

耳障りな声が一瞬遅れて、頭上から降ってくる。

不愉快と怒りを源に、荒々しく地面に手を付くが、それでも体が持ち上がらない。

あの星屑龍の洞窟で、ラストを相手に九十九を使った時と同じ感覚。

「ハルユキっ！」

しかし、聞こえた声に無理矢理上半身を持ち上げる。助けるといったばかりだ。情けない姿を見せる訳にはいかない。

思い切り力を込め、しかし震える体はゆっくりとしか持ち上がってくれない。

ひゅん、と黒塗りの刃が飛ぶ。

刺さりはしない。力が無いだけで、今やハルユキの肌は岩肌より硬いだろう。

しかしそんな蚊に刺されたような刺激で、ハルユキの腕は力を分散させられ、再びハルユキの体は地面に叩きつけられた。

「――っく」

ならばもう一度。

不愉快な視線が上から降ってきているのは判ってはいたが、それはむしろ行幸。いつ飽きられて逃げ始めるか判らないのだ。

もう一度、上半身を持ち上げたところで。

「――ハルユキ」

フェンの声が聞こえた。

「やっと、口開いたじゃねぇか……」

「……ごめ、ん、ごめんなさい」

冗談に馬鹿正直に答える会話が少し懐かしい。

「あのね、ハルユキ」

無理などしてない、と即答するとフェンは一瞬口を噤む。どうか今はそのまま黙っていてくれと、切に願いながら、上半身を起こし、地面に膝を立てる。

しかしフェンは小さく首を振ると、

「私は、もう一緒にいられない。でもこの人は私の父親だから」

早口で伝えられたその事実に、ハルユキは驚きに目を見開く。

その顔に安心させるように一つ頷いて。ただ、帰るだけだから。と小さく続ける。

「だから、私は大丈夫」

だから、無理はしないで欲しいと嫌に饒舌な話し方でフェンは続けた。

そして。そう言った後。

安心させるようにもう一度頷いた後。

何かを思い出したかのように。

フェンは目を細め口元を綻ばせ。

確かに。

――笑ってみせた。

「……フェン」

体中から力が抜けた気がした。

「そんな……」

しかし、違う。

一瞬だけ脱力して、一気に膨れ上がった筋肉がぎちりと軋む。

軽々と持ち上がった右腕が路地の湿った壁にを掴み、その指をレンガの壁に食い込ませる。

「――そんな顔で、笑ってんじゃねぇよッ！！！」

ゆらりと立ち上がったハルユキに、もう非力さは感じられない。

踏み出された一歩が、石畳の地面を割る。

それを冷めた目で見ていたレオが、淡々と口を開いた。

「――いいよ。判った判った」

ひょい、とフェンの体を子供は押し退けた。

声の意味を噛み砕く前に、ととっとつんのめりながらフェンの体がハルユキの方に近付き、実質的に開放された。

上半身を起こしたハルユキと振り返ったフェンが、一様に驚いた顔を子供に向ける。

「いいさ別に。仲良くやってよ。その代わり先に浚われた二人は勝手にどうにかしてよ。僕は邪魔しないからさ」

そう言ってつまらなそうに子供は奥の角を曲がって消えた。

「ま、待て……！」

せめてレイとジェミニの場所を聞き出そうと、ハルユキは足を進める。しかし緊張が切れたせいか、また僅かに体が重く力が入りにくく、小さくよろけ、視線がぶれる。

ぶれた視線のその先で――。

「まあ、嘘だけどね」

フェンの背中でナイフを構えている、先程角を曲がって行ったはずの子供に気付いた。

「フェ……！」

しかし、そこでまた体から力が抜ける。

視界がまた地面に接近しそうになった所でしかし、何とか踏ん張り顔を上げる。

――そこで、深々と胸の中心に貫通したナイフを呆然と見つめ、口から血を吹き出すフェンを見た。

◆

君は要らない、と小さく言った子供は既にいなくなっていた。

「フェン……？」

あれからどれだけの時間がたったのか、一瞬だった気もするし、三日三晩立ち尽くしたような気もする。

呼ぶ声に返事は無い。直ぐ目の前にいると言うのに。

気付けばふら付く様に足が目に進んでいて、ぱしゃ、と水溜りが足を濡らす。

「フェン？」

膝を突くと、また水溜りで水が跳ねる。

水溜り――？

ここ一週間は雨なんて降っていないのに――？

ぶつり、と思考がそこで途切れる。

余りに不自然な思考の途切れ方に疑問も沸かない。

膝を突くとフェンの顔が目の前にあった。

頬に手を当てようとして、びくりとあまりの冷たさに指先が跳ね

るように逃げた。

触るのを恐れた事に強く罪悪感を感じ、慌てるように首と足に手を回して持ち上げる。

持ち上げたのか分からないほどの軽さも、暑苦しいローブもそのまま。何時も通り。

べしゃりと、フェンの髪についた”白い”液体を見つけた。

そこで、景色が世界が、白と黒と灰色でしか構成されていない事に気付く。

殺風景なモノクロの世界がどうしようもなく怖くなって、ハルユキは腕の中のフェンを抱きしめた。

「……？」

冷たい。と感じたわけではない。ただ布の感触。布の暖かさしか伝わってこない事に小さな疑問が首を擡げる。

「――――、あ」

少し強く抱きすぎた事に気付いて、謝ろうとして、

その。

あまりの。

無意味さに気付いた。

世界がゆっくりと色を取り戻す。

水溜りは赤に。地面は赤に。フェンの髪は赤に。体は赤に。支える腕は赤に。

それが血である事を気付かないで済むほどに、ハルユキは鈍感でいられなかった。

フェンの視線は中空で止まっていて、瞳孔は開き始めている。

ぱしゃり、とフェンの手が血溜りに落ち、跳ねた血がハルユキの頬を汚した。

その。

余りに冷たい感触。

「――――、あ」

最後の言葉も残さないままに。

フェンは。

死んでいた。

不意に。

薄暗い闇が、晴れた。

戦火の火ではなく。狂った目に光る物ではなく。

それは確かに暖かい、太陽の光だった。

結界が解けた、つまり、あの子供が町から離れたのかと頭の隅で誰かが呟く。その暖かい朝日は、それまでの全てが夢だったように思考を促す。

「――――――、あ」

その暖かい朝日を背中に、何かが町を見下ろしていた。

それは雄大で、厳かで、神々しく、きっと神の形をしていた。

――否。

その姿は。

雄大と言う言葉で表せないほど大きく、浮いているその体はもし地面に立てば膝だけで町の最高点である城を上回り、倒れこめば町の八割を破壊し得るほど。

その威厳は。

厳かという言葉では表せないほど純白で美しく、六本の腕のうち四本が胸と頭の上で手を合わせて何かを願い、その無垢な表情は怒っているようにも悲しんでいるようにも笑っているようにも見える。

その在り方は。

神々しいという言葉では表せないほど汚らわしく、まるで、冷たく

なったフェンを祝福しているようで——それどころか。フェンを喰らってそこに存在しているようで。

「————————————、あ」

神がああいう存在だというならば、もうフェンが帰ってくる見込みは無くて。

神様、と祈る前に、拒絶された気がして。

「——

——、あ」

一瞬視界が暗く落ちた後。

「今日は大盤振る舞いだな」

少しだけ輪郭と明度を取り戻した、九十九と。

灰色の世界で再会した。

落色（後書き）

オウズガル編は恐らく次回で終了です。
重ね重ね鬱々ですいません

続（前書き）

少し修正しました。

続

がやがやと喧騒を取り戻しつつある町を眺めながら、ノインは客室へと続く城の廊下を歩いていた。

町の半分ほどの家屋が半壊するか、完全に壊れてしまっていたが、幸か不幸か、あの神を気取った化物が死体を全て連れ去ったまま死んだので掛かる時間も費用もだいぶマシになったそうだ。

しかし、その分死体が無い葬式が何日にも渡って行われる事になる。

だから町が復興が行いやすくなったその事実にも、手を挙げて喜ぶものはいなかった。

この町の人口は約九十万人。そして今回の誕国祭を目的に町に訪れた人間が七十万人。

合計百六十万人があの『戦争』時にこの町に滞在していた。

その中で、怪我人が全部で七十万人。そして、死傷者がおよそ十万人。

ぎり、とノインは声に出して当り散らしたい思いを、奥歯を思い切り噛み締めてやり過ごす。

悲しい人間は他にいる。苦しい人間は他にいる。悔しい人間は他にいる。

だからこそ、その原因たるあの戦争を引き起こす事を許してしまった自分がそれらの感情に振り回されることは有ってはならない。

そうこう考えているうちに一つ階段を降り、二つの廊下を進んで、目的の客室にまで辿り着いた。

小さく木の扉をノックして、どうせ中からの返事は返ってこないのでそのままノブに手をかける。

「ユキネ、居るでしょ」

ぎぃ、と明らかに扉を開ける音がしたというのに、部屋の中から反応は無い。

日が指す方向の窓は暗幕で光まで遮られ、部屋の中はどことなく薄暗く、中から明確な人の気配がしない。

ひょっとして居ないのかと部屋の中に視線を巡らせて見れば、何時もと同じベッドの横で椅子に座って背中を向けるユキネを見つけた。

一つ溜息をついて、その背中にゆっくりと近寄った。そして、びしり、とその頭に手刀を振り下ろす。

びくり、と肩を揺らして、半眼でこちらを向いたユキネに溜息を

もう一つ。

「ノイン。ノックはするべきだ」
「したわよ。何回目よこのやりとり」
「そ、そうだったか……？」

そう言って律儀に自分の記憶を探るユキネの頭にもう一度強めに手刀を振り下ろす。

「……痛いぞ」
「ちゃんと寝なさいって言ってるでしょう。酷い顔してるわよ」
「……お前もだろ。クマが凄いぞ」
「まあ少し忙しいかしらね。それでも一日二時間寝ればそんなに問題はないわ」

四六時中眠い事以外にはね、とノインは噂をすれば影を差した欠伸を噛み殺す。

「……どう？　具合は」
「ああ、まだ起きないよ」

すっと、ノインは椅子に座っているユキネから、ベッドで眠る男に視線を移動した。

布団一つ乱さず眠る様はとても起きていた時の雰囲気を感じさせない。

呼吸は驚くほど深く長く、胸もほとんど上下していない。加えて体温はおよそ１５℃。触れば思わず手を引いてしまいそうな冷たさを保っている。

しかし、それでも生きているのだ。

医者が言うには、冬眠しているような状態なのだという。

汗もほとんどかかず、排泄する事も無い。どんな症状なのかと医者が頭を抱えたくなるのもよく判る。

そして、一番顕著な変わり様は、その髪。

塗りつぶしたような強い黒髪は、疲れてしまったかのように所々に純白に染まっていた。

いや、純白と言っては聞こえが良すぎるかもしれない。それは、もっと濁った、そしてやはり塗りつぶしたような灰色の髪。

町を救った英雄が、静かにここで眠っている。

――あの、戦争から六日が経っていた。

◆

ユキネが目を覚ましたのは未だ戦火の最中。しかし、暖かな朝日を感じての事だった。

目を覚ました事を自覚して、跳ね上がるように立ち上がった事を良く覚えている。

「ここ、は、……私は……？　確か……」

記憶を探って現状を把握するのに数秒。

「あ……」

思い出す。

自分ごと削り取ってしまいそうな怒りを抱えて、目に見える全てを殺し尽くそうとしていた大切な人を。

そして同時に悟ってしまう。この場所が更に破壊の限りを尽くされている事。血の臭いが、明らかに濃くなっている事に。

「ユキネ……？」
「ノインっ！」

聞こえたか細い声に、ユキネは必死に視線を巡らせ瓦礫と破片だらけの地面から立ち上がろうとしている彼女を見つけた。

「ノイン、一体何が……！」
「……ごめんなさい、私も気絶してたから。判らないわ」
「あ、いや、すまない。私もこんな事言える立場じゃないな……」

まだ立てないらしいノインの肩を担いで、ユキネは黙って立ち上がった。

辺りを改めて見渡すと、気を失ってからの時間でどれだけの戦いがここで行われたのか良く判った。

いや、正確に言えば、どれだけの戦いが繰り広げられたのか想像も付かない事が、判った。

闘技場は壁どころか、殆ど形を保っていない。

専門家ではないから良くは判らないが、恐らくもう修復は出来ないだろう。外壁まで吹き飛ばされ、その向こうの大通りが覗いている。そういった場所が多すぎるのだ。

全体の三分の一。いや、四分の一ほどしか、”闘技場”が残っている部分が無い。

たまたま残った闘技場の壁が切り立った崖のようにそそり立っていて、僅かに残った闘技場の名残が滑稽だった。

「何、よ、あれ……」

落ち着け、と声をかけたノインが驚いてユキネの顔を見た。

その表情に、ユキネに僅かに疑問が起こる。ノインは冷静な人間だ。滅多な事では取り乱さない事は短い付き合いながらも判っている。

だから、その疑問――いや、会話の違和感は。

ノインの茫然自失とした声が、闘技場の惨憺たる成れの果てを見て出た物だとユキネが勘違いしたことに因る。

すっと、夜明けの黎明を遮って、ユキネの足許が、いや闘技場中が、いや町の西から中央にかけての数キロが、陰って黒ずんだ。

瞬間、背中を舐める悪寒に似た何か。

一瞬それを視界の中に入れるのを本能的に躊躇した自分が居た。

半ば強制的に視線を上げさせられたのは、その存在感に縛られてしまったから。そして朝日を背に空に立つそれを見た瞬間。

思考が全て吹き飛ばされていた。

白。巨大。神。穢。有り得ない。断片的なイメージが頭の中で錯綜する。

白い体躯は街の面積と同じほど巨大で、白い大理石を研磨して作ったような顔にはあらゆる感情を含んだような表情を浮かべている。

白い瞳は何かを見定めるように町を見つめている。

この町の巨大な大通りとを超えるほど太い腕は、全六本のうち四本が祈るように組み合わされ、残る二本は誰かをいつでも掬えるようにと中空に定められている。

それはまるで誰かがエゴの元に担ぎ上げて想像した、安い神の偶像に見えた。

何だあれは、と思わずノインと同じ言葉を零していて。

成る程。確かにあれを見て落ち着けなどと瞬時に返答できれば驚くだろうと、妙に納得をした。

「ユキネ、速く、城に……！」

「分かってる！」

肩に担いだのでは何かと動きづらいので、さっさとノインを背中に背負いなおすと、体の中から重力を追い出した。

空を踏む。

僅か十歩で闘技場を踏み越え、そのまま一番近くの通りに飛び出た。

飛び出したそこは、城と神の偶像の間。

反射的に視線を上げて、先程の神の偶像を目で確認する。

「――――っ！？」

思わず息を呑んだのは、あの巨体で僅か数秒で姿勢を変えていた

から。

ただ組ませていた四本の腕を伸ばしただけ。しかしあれほどの巨体となればそれだけで生じる力は計り知れない。

それを示すかのように、一瞬遅れて衝撃波が突風となって吹き抜ける。

吹き荒ぶ風はしっかりと地面に指をかませていないと吹き飛ばされるほど強い物で、思わず両腕で顔を庇う。

腕の隙間から覗くその表情は姿勢と共に僅かに変わっていて、それは怒りではなく喜びではなく、人をこの町を哀れむような表情で。

何を思っているのか。

血に塗れてしまったこの町を嫌悪しているのか。

それとも、一丁前に沈んだ人々の心を救済しようとしているのか。

判る事は、その表情の中に、身勝手な正義と明確な殺意が映っている事だけ。

がばん、と大きな音を立てて偶像の口が大きく開けられた。慎ましかった顔は歪み、はしたなく上下に伸びている。

そして、その殺意と正義が交じり合い、白い極光が口から漏れ出す。それは偶像の口の前で光の玉となり、見る見るうちにその大きさを増していく。

それは俯瞰して見れば美しいといえる物かもしれなかったが、とてもあれを神の後光だと手を合わせて心を委ねる気にはなれなかった。

「ユキネ！　城へ！　急いで！！」
「どうするんだ！！」
「狙いは城の中の人間よ！　一箇所に留まらないようにさせないと！！」

頷きながら、城へと駆けつける。

闘技場と城はそれほど離れていない。全力で走るユキネは、町の景色を追い越しながら一分と経たない内に城の外壁の上に到着した。

外壁の上に移動したのは偶々門が閉まっていて、必然的にそうならざるを得なかったからだったが、そこから城の中を覗き込んだユキネは門からいきなり入らなくて正解だったと胸を撫で下ろす事になった。

外壁に足を掛け、その向こうを覗き込んで、最初に感じたのは、その異様な空気。

小さく呟かれる祈りの声が折り重なって唸りとなった不快な音。

そして、まるで異民族の儀式の中心に放り込まれたような、そんな疎外感とどうしてもその感覚を飲み込めない距離感を感じていた。

そこには数えるのも億劫になるほどの人間が居た。

しかし、その中で正しく人間だと言える様な人間がどれほど居たのか。

少なくとも半数。いや、空気に呑まれて次々と膝を付く人間を考えれば、もうその半分も残っていないのか。

その場を支配し、その空気を作り出しているのは残りの四分の三だ。

信徒の衆。

主を敬愛する御身の下僕が、そこら中で手を組んでいた。

目を瞑り、引き攣った笑みを浮かべ、膝を突き、地に平伏す。根拠の無い信心に身を任せ、自分の命の行く末さえも神に委ねる人間達がそこに居た。

「――――ッ貴様等ァ！！」

しかし。

唖然とするより速く。

驚くより速く。

ユキネの背から飛び降り、怒号を上げた人間が直ぐ隣に居た。

声質からか、諦観じみたこの空気だからか、それとも持って生まれた何かが、彼女を引き立てているのか。

彼女のその声は、たった一言で確かにその湿った空気と、呪詛とも取れない祈りの声を吹き飛ばした。

祈っているにもかかわらず下を向いていた人間達の視線が、何かに追い縋る様に上を向く。

しん、と静まり返った城内とこちらを見上げる人間達を確認して、ノインが静かに口を開く。

「私が判るか。自分をまだ持っているか。――まさか、神になど祈っていないだろうな」

叱咤染みた声に、びくりと何割かの人間が反射的に背筋を正した。

「少し遅れてしまったが、残る”敵”はあれだけだ。――それなのに貴様等は。何を怯えている。何を恐れている。何を震えている。何をつまらない事に現を抜かしている」

責め抜く言葉に、城の至る所で膝を付いていた人間が悔しげに唇を噛む。

己の矮小さに打ちのめされ、非日常に痛めつけられ、挫けて再び落ちてしまいそうな視線を、――しかし、食い下がるように王女に向けたまま。

中には王女に挑戦的な視線を向ける者も、憎しみに似た視線を向ける人間もいた。

「縋るな！　怠けるな！　甘えるな！　神に命を捧ぐ覚悟と暇が有

るのなら！　目を開け！　拳を作れ！　この眠らない町（アリベス）で、真っ先に目を瞑ろうとするとは何事だ！！」

一人、また一人と。

立ち上がる人間が居た。兵士を始め、冒険者、体力自慢の商人達。女子供。昔からこの町に住んでいた老人達も支えられながら膝に力を入れる。

その全員が、悔しげに口を結んでいて。

そしてユキネの隣にも、ユキネにしか判らない程度で確かに唇を硬く噛み締めている少女を見つけた。

この中で一番、己の矮小さに怒りを抱える少女が、それでも己が責任を果たさんと、ただ言葉を紡ぐ。

「――聞くぞ」

既に、下を向いている人間は愚か、膝を付いている人間も見当たらない。

「オウズガルの民は、未だ誇れる我が民として生きているか！」

応、と重なった合闘は、人が人として人らしく力を合わせる意思を重ねた音。

その勝ち鬨は、城を確かに大きく揺する。

「我が剣は、その刃を錆びれさせていないか！」

至る所で一斉に、戦士達が心臓の前に剣を構える。

剣の重なる音、踵を打ち鳴らす音。その鉄臭い空気は、確かに戦いの音。

声を合わせた人間に、剣を捧げた戦士達に。そして、その目の全てに、好戦的で、人間らしく、何処までも生き汚い光が宿っている。

それを見て、少女の王はユキネが背負っていた己の剣をサヤから引き抜き、天に向かって切っ先を向ける。

「ならば容易い。我が背中に民が、我が手に剣があるのなら」

少女は大声で嘘をつく。そも、少女にはもう飛竜一匹打倒する力

は無い。

その姿は正しくは無い。

それはそうだ、嘘の誓い。神が居るなら最も嫌う行為だろう。

しかしそれでも、朝日を背に勝利約束するべく掲げられた剣は。
朝日に煌くその紅の髪は。その決意に満ちた瞳は。

そして、その姿は。

確かに、美しかった。

「――神ですら打倒してみせよう」

その剣に誓いを。

民を神から奪い返した少女の王は、その歓声を背に外壁を外に進んだ。

間違いなく何処からも見えない場所まで歩いていき、そこで彼女――ノインは糸が切れたように倒れこんだ。

それを、ユキネが抱き止める。

「避難させるんじゃなかったのか」

「駄目ね。あの様子じゃ後ろ向きな事を言ったらまた逆戻りでしょ」

「……凄いな、お前は」

「知ってるわ」

減らず口を叩くノインに苦笑いしながら、ユキネは顔を上げる。

「しかし、もっと凄い事をしなくてはならないらしい」

「……そうみたいね」

城とは反対方向。

しかし余りの高さと大きさに、この町の中で見えない場所は無い。

いや、見ないほうが難しいその巨体。

その大きく開けられた口に蓄えられた白い魔力は、既に偶像の頭の大きさを超え、そろそろ膨張の速度を緩め始めている。

それは時間が無いと言う事を確かに示していた。

「――ノイン様、ノイン様っ！！」

ばたばたと階段を上がって来る音に目を向ければ、そこにちょうど二人を見つけて一瞬体を強張らせたミスラが居た。

かと思えば、物凄い加速でダダダダとこちらまで一気に近寄ると、ユキネに捕まるノインの肩をがっしと捕まえた。

「お怪我は!?　ご無事ですか!?」
「あー、無事無事。心配ありがとうね。でも先ずはあっち」
「……はい、そうでしたね」

一瞬で表情を立て直したミスラは、改めてあの偶像を見やり、露骨にげんなりとした表情になった。

「どうするんですか、あれ」
「さあ。とりあえず皆」

どれだけ全力でここまで走ってきたのか、ミスラ以外の人間は肩で息をしながらもつれ合うように階段から顔を出した。

「生きてたか、ノイン」
「貴方もね、ガララド」
「ガララド。何じゃありゃ」
「神様じゃろうて。ついに人間に愛想を尽かせてしまったらしい」
「神ね、もう少し愛らしい姿をしていると思っていたが」

ぞろぞろと、ノインの姿を見つけて登場したのはガララドはもちろん、キィラル、ムイリオ、ラスク。それに大勢の兵士達。

「まあ正直作戦なんて考える時間も実行する時間も無いから、各自最大限を尽くしてとりあえずあの嘔吐砲をどうにかする事。作戦はそれからね」

こくりと全員が一斉に頷いてから、緊張感が一気に最高潮まで跳ね上がった。

〈――メサイア。あれ消せるかな〉

自分の魔力は起源と理論はどうあれ、魔力を相殺できる。

流石にあれだけ膨大な物を相手にした事は無いが、特性上、相性はいいかもしれない。

〈はい。完全には難しいですが、ある程度は〉

返ってきた答えは期待通りだった。

しかし、メサイアには珍しいその声の沈み方に少し驚かされた。

〈しかし、必要ないでしょう〉
「……え……？」

どういう意味か聞き返そうとして、しかし、そこで時間が無くなる。

「――来るわよ！！」

鋭いノインの声。

見上げれば、発射の寸前にそうなる仕組みだったのか、先程見たときよりも二周り以上多きなった魔力の塊が、はるか上空の神の偶像から打ち出されていた。

大きい。

遠近感が狂っていたのか。それとも、未だ大きくなり続けているのか。

城一つどころではない。

地上に当たれば、間違いなくこの町は跡形すら残らない。

「――――ぁ」

それほどの確信を持たせるほどの巨大さに、外壁に集まった精鋭達の体が一瞬だけ強張る。

このままでは、無理だ。たかだが数人で防げるレベルを遥かに超えていた。

それでも数人は、なけなしの力を魔力に変え、打ち出そうと手を伸ばす。ユキネもその内の一人で剣に有りっ丈の魔力を流し込んだ。

――しかし。メサイアの言う通り。

そんな物は最初から必要なかったのだ。

視界全てが純白に染まるほどの魔力の壁の中。

それを見つけた。

それは、ただその小さな拳を振るう。

それだけで白い魔力は弾け跳んで何かに触れる前に空気に溶けてしまった。

何の魔法か。

――否。視界の全てを覆うほどの魔力を吹き飛ばしたのは、詰まる所はただの風圧だった。

そして、それは何の個とは無い様に平然と地上に降りた。

余程の高さから落ちてきたのか、それだけで着地した通りの石畳が拉げて砕ける。

角。

それは、体中に歪な刃のような角を拵えていた。

額から肘から頬から肩から足から腕から手の甲から膝から背中から米神から後頭部から。

まるで触れることを許さないとばかりに、刺々しいその角はしかし動きの邪魔とはならない位置に生えている。

印象的な黒。その肌が角が、朝日が照らす中には浮いてしまうほど濃い黒を誇っている。

足許まで延びたしわがれた九十九髪がその黒さに際立っていて。

――びちりと。

その白い髪の間から伸びた〝尻尾〟が地面を叩く。その尻尾もま

た刃の角を継ぎ合わせたような格好で、いよいよ触れる場所は見当たらない。

鬼。

見た事は無いが、鬼を見たという人間は、あれに似た生き物を見たのだろう、と呆然とした思考の中でぼんやりと思う。

「……あ」

――それに気付いたのは、直感だとしか言いようが無かった。

しかし、間違いないという核心が心にあって、自分で否定する事もできない。

「あ、……あ……」

名残など一つも残っていない。ユキネの目さえ、それはもう全く人間になど見えなかったのに。

「ハルユキ……っ！！！」

それは静かに右手を横に伸ばした。

ばきん、とハルユキの体より大きいのではないかと言うほどの角が腕から伸びる。

ばきん、とその角からまた最初の角よりも明らかに大きい角が伸びる。

ばきんばきんとそれは連鎖していき、やがてハルユキの隣に大きな黒い塊が構成されていく。

それが幾つ目かの家屋を倒壊させそうになった所で、ハルユキは空中へと躍り出た。

家屋の一部を生じた衝撃波で土台ごと破壊し尽くしながら、その鬼は無理矢理宙を踏み荒らしながら数秒で神の隣まで足を運ぶ。

その間に、生える速度も本数も大きさも乗数倍に増していった鬼の右腕は巨大な掌の形となり、その掌の幅は神の偶像の全長に迫ろうかと言うほど。

そして、頭の端が霞んでしまうほどの巨躯を誇る神の偶像を、”横から引っ掴むと”。

そのまま町の外まで投げ飛ばす。

当然それだけで町の一部が衝撃で悲鳴を上げ、一部の屋根の家が吹き飛んでいく。

その巨体ゆえに緩慢に見える動きで町の敷地の外、――広がる草原の上に叩きつけられたそれの上で、既に巨大な拳が握られている。

そして振り下ろされた一撃の下に、容易く神は死んだ。

◆

「シア、帰ったよ」
「あ、お帰りなさい」

ハルユキが眠る寝室に戻ると、パタパタと小走りで近付いてくる音がして、律儀にシアが出迎えてくれた。

シアはこの間の騒動の間に声が出るようになったらしい。

できれば大げさに喜んでやりたかったが、あまり大声で笑うのも憚れる時期なので良かったと小さく笑顔を作る事しか出来なかった。

きっとそれに笑顔でお礼を返してくれたのはシアの思いやりだったのだろう。

ノインにたまには外の空気を吸えと仕事がてら連れ出されてから、帰ってきたのは日が暮れてから。

「水を汲んできた」
「あ、じゃあ私御夕飯を貰ってきますね」

そう言って部屋を飛び出したシアとすれ違うと、城に入ってからの急ぎ足を再び稼動させ、いそいそとハルユキの眠るベッドの傍に寄った。

一旦桶を置いて、手を握る。

伝わるのは、布団の温度に合わせたような中途半端な体温。

次に唇に触れる。僅かながらも吐かれる呼気に胸を撫でると、椅子に座る。

シアは強くて、聡い人間だった。

ジェミニとレイが浚われたと言った時、その時だけは酷く落ち込んで自分を責める表情をしたものの、それっきり。

気丈に振舞いつつ、時々城を抜け出しては何か手がかりが無いかとアジトに使われていた場所を訪れている事は知っていた。

虐げられた記憶がある場所を選んで、自ら足を運ぶ。そこにどれだけの勇気が必要か想像もできない。

もちろん、入れ替わりでユキネも町に出ていた。

何か奴等を追う手がかりはないかと。

しかし、それも三日目まで。

いつ完全に冷たくなるか判らないハルユキの傍を離れるのが怖くなり、今では殆どの時間をここで費やしている。

判らない。

小さく呟くと、ユキネは眩暈を覚えてボフンとハルユキが眠るベッドに倒れこんだ。

手探りでハルユキの手を探し出すと、それを握りなおして。

もう起き上がる気力も無く、そのまま目を瞑った。

◆◆◆

――同刻。

大き目の燭台が、部屋を十分以上に照らす中、机を挟んで椅子に座る女と可愛らしい服装をした女が向かい合っていた。

「――聖女（マリアン）」

「聖女はやめてよウェスリア。肩が凝るわ」

「それでは、ウィーネ様」

「何、ウェスリア」

眺めていた書類を机の上に投げ出し、半眼でギルドの受付嬢の格好をした女を睨みつける女の視線を軽くかわすと、ウェスリアと呼ばれた少女は改めて口を開く。

「ウェスリア様。オウズガルの三聖骸がゾディアックに奪われました」

「……という事は、オベリスクね。ウチのに続いて二つ目か」

「いえ、恐らくもう三つ目も手に入れているでしょう」

「手が早い事。この時代、戦争なんて起こしてどうしようってのかしら」

「……」

「冗談よ」

今度はウェスリアの厳しい視線を女は飄々とした態度でかわすと、思わせぶりな態度で小さく笑う。

何を思ったのか女はそのまま立ち上がると、荘厳な装飾が施された部屋を、何の関心も無いように横切ると、窓を覗き込んだ。

窓の外は町が広がっていて、夜にもかかわらず程よい喧騒と町明かりが余す事無く存在している。

しかし、女はその美しくさえある光景に意識まで注いではいない。

大き目の燭台で照らされた室内は、窓の反射越しにちらちらと思わせぶりな視線をウェスリアに向ける女を判り易いほどに映し出していた。

そしてそれがわざとだと言う事もウェスリアには判っていて一つ溜息をつくと、口を開いた。

「スノウ様に関してですが……」

「流石ねウェスリア。主の意向を読む事において貴方の横に並べる人間はいないわ」

「ありがとうございます。続きを話しても？」

「お願い」

予定調和ともいえる会話を手短に終えてウェスリアは溜息を一つ、女は小さく笑った後、手にした書類をウェスリアが読み上げ始めた。

オウズガルの城に単独で攻め込んだ所から始まり、闘技大会で知己であるムイリオを打ち破り、そして、あの紅蓮の王女ノインと鎬を削りあった事。

そして、戦争において人々を助ける為に戦場を奔走した事。

まるで、絵本を読み聞かせられる子供のように、次々と目の色を変えて話を聞いていた女は、報告が終わった後、嬉々とした口調で口を開く。

「さっすがユキネ！　ああもうっ、早く逢いたいぃ……」
「ユキネなどと。何故そちらの名前で呼ぶのですか」
「何でって言われても、いい名前じゃない。ネーミングセンスにも感心しちゃうわ」

そして、女は窓が開いている訳でもないなんでもない壁を見つめる。

「それにしても、ムイリオにまで勝ってしまうなんて……」

その女の紅い目は。

「――さすがは私の愛娘」

知ってか知らずか、ユキネがハルユキのベッドで寝息を立てている方向を向いていた。

◆
◆
◆

〈――――だ〉

九十九の憎たらしい捨て台詞を聞いてから、ハルユキはゆっくりと目を開けた。天井を一通り眺めて、もう一度目を瞑る。

眠っていたという感覚ではない。実際、今の今まで九十九と話し通していた。扉を開けて別の部屋に入ったとその程度の感覚だ。

冷めている。何処と無く色褪せたような視界も、それを俯瞰的に眺める自分も。無機質な鉄のように温かみが無い。

こちらでの最後の記憶は、目の前に現れた八つ当たりにお誂えな敵に当り散らして、止めの拳を振り下ろした所まで。

そしてその八つ当たりの動機も、あの感触ごとまだ覚えている。

少しだけ冷めた部分が熱を持ち、ぐり、と歯を噛み締めてから、ハルユキはそのまま上体を起こした。

「――ユキネ」

そして、隣でベッドに突っ伏して眠るユキネに声をかける。

その肩には薄い毛布が掛かっていて、夜通しここに居てくれた事を暗に教えてくれる。

もう少し眺めていたい気持ちが無い訳ではなかったが、流石にそんな事はしていられないので手を伸ばして肩を揺らした。

まるで久しぶりに眠ったかのような勢いで深く眠っているユキネは中々起きようとしなかったが、薄目を開けて起き上がったハルユキの姿を確認すると、瞬く間に目が開かれていった。

「は、ハル……？」

目を覚ましたユキネが信じられないような顔で固まった。

そこで視界の上端に灰色の髪がチラついているのに気が付いた。

それは間違いなく黒髪だったはずの自分の髪で、しかしそれほど驚きも感じていなかった。

「……っと」

のしりと抱き付いて来たユキネを支える。

「俺どれくらい寝てたんだ？」

「……六日」

「心配かけたな。だが大丈夫だから。離れてくれ」

「……うん」

離れるユキネの頭をあやす様に撫でながら、とりあえず辺りを見渡す。

見覚えがある部屋だった。

たしか、この町に来たばかりの頃ユキネが馬鹿をやって城で治療を受けることになり、担ぎ込まれた場所がこの部屋だったはずだ。

「ハルユキさん！！」

聞こえた声に覚えが無さ過ぎて、びくりとハルユキは肩を揺らした。

「シア、声出るようになったのか……」
「はい、お陰さまで」
「俺は何もしてないよ」

透き通るような声。

成る程、こんな事を考えるのもどうかと思うが、声を取り戻したシアは声以外の魅力も増してしまい、奴隷にして傍に置きたいと思うのも少し理解できてしまう。

「さて、いきなりだが時間が無い」

再会の挨拶もそこそこに、意識的に声のトーンを落として本題に入る。

「時間が無い……？」
「……レイなんかは正直いつ殺されるか判ったもんじゃないだろ」
「そう、か。よし、急ごう」

そう言って立ち上がったユキネを見て、シアを見て、――他には誰も居ない部屋を見て、どうしようもないほどの喪失感に襲われた。

胡散臭い笑顔で話しかけてくるジェミニが居ない。
したり顔でハルユキのふがいなさを詰って来るレイが居ない。
――そして、無表情で淡々と朝の挨拶を交わすフェンの姿が、何処にもない。

いつから自分こんなに厚かましくなったのか。
いつからこれほど依存していたのか。

しかし、行動の阻害になるものはとりあえず無視する。

「――”二人共”、無理矢理にでも連れ帰るぞ」

それだけ言ってベッドの縁から足を下ろす。
そこでまた力が上がっている事に気付いた。これまでの成長と比べてもかなり顕著。昔の漫画に似たようなキャラが居たなと思いながら、――そこで、不可解そうな表情を浮かべているユキネを見つけた。

「……二人？」
「？　どうした」
「ジェミニと、レイと、フェンと。三人だろう……？」

不意に。暴れだしそうになる理不尽な怒りを。無理矢理押さえ込んだ。
噛み締めた奥歯がぎちりと軋む。布団に隠れたままの右手がシーツを巻き込んで拳を作る。

「――ユキネ、二人だ。フェンはいない」
「え……？　でも、何処にも居なくて……」

ユキネの後ろで顔を蒼白にさせるシアを目の端に捉えた。

そのままシアは、小さく首を振って後ずさり、ソファにぺたりと座り込んでしまう。聡い子だ。きっと言うまでも無く伝わったのだろう。

話すべきか。
どちらにしろいずれ判る事だ。しかし、話せばきっとユキネはここに残る事になるだろう。

話すべきだ、と、ハルユキは結論付ける。理由はいくつかあるが。しかし何より、そんな打算的な理由でフェンの死を隠す事に少し抵抗を感じた。

「フェンは――……」

とんとんとん、と小さく扉をノックする音が、ハルユキの声を遮った。

「ノインだ……！」

瞬間、逃げるようにユキネが扉に向かった。

その様子は、確信は無くともその可能性に気づいていしまった事を示していた。

椅子に座ったシアは、ハルユキと目が合うと、その目に涙を浮かべて俯いてしまう。きっと、ユキネも同じ顔をするのだろう。

ノインが来たというなら丁度良い。

逃げられないようにユキネを押え付けてでも真実を伝えてしまおうと決心して――。

「ハル……」

そして、呆然とこちらを向いたユキネと。手を繋がれて隣に立つ青い髪の少女を見つけた。

心臓が妙な跳ね方で鼓動する。

気付けば立ち上がっていて、いつの間にか近寄っていて、無意識の内に思い切り肩を掴んでいた。

「……っ」
「フェン……？」

肩を掴んだ感触は、少なくとも幻のそれではない。
しかし、目の前の少女は視線を何処かに向けたままで、何処と無く何かの齟齬を覚えた。

もう一度名前を呼ぼうとして――。

「残念ながら、違います。私も常連様のお連れ様だったのでお手を加えさせて頂いたのですが」

予想していなかった声が、勝手にハルユキの疑問に答えていた。

中肉中背の、何処にでもいる背格好の男。大き目の編み笠を被り、顔は良く見えない。

声は、辛うじて男だという事が分かる以外にこれといった特徴はなく、その傘の下が子供の顔でも老人の顔でも驚かないだろう。

余りに曖昧に記憶に残るその姿。そして背負ったわらの大籠。

その余りに普遍すぎる男の存在は、しかしハルユキの記憶の隅に残っていた。

「確かに彼女は私があの場所で拾って、治療した人間ですが、貴方が思っている人物とは別人です」

その名前を呼び起こそうとする前に、その奇妙な男が淡々と口を開く。

「それは……」

「どういう意味かは、判りますね？」

判る。

いや、正確にはこれだと予想する答えがあるが、いきなりすぎてその予想を信じられない。

「魔法的な何かか、それとも”クローン”か。それは判りませんが」

「ハル……」

ユキネが、握っていた青い髪の少女の右の掌を開かせて、こちらに差し出した。

何を示したいのか、まじまじとその手の中を見てみるが、特におかしいところはない。色白で、小さく、それでもほんの少し普通より指が長い見慣れた右手。

疑問に満ちた目をユキネに向けると、黙ってユキネは自分の、―

―ユキネ自身の右の掌をハルユキの前に差し出した。

フェンより少し日に焼けていて、少し大きくて所々剣ダコがある普通の手。

――その中心に刻まれた物だけが、その中で異彩を放っている。

黒い、タンポポの刺青。

たしか、フェンと御揃いで同じ場所に入れた筈の、チームタンポポの人間の証。

それが、青い髪の少女の右手の中には存在しない。

予想が確信に変わる。

「そこにいる少女は、あなた方が知っているフェン・ラーヴェルとは、体も心も魂も。何もかもが完全に別物です」

「あ……」

「一杯食わされましたね」

じくり、と胸を刺す何かがあった。そこから何か漏れ出して、乾いた所に潤いを冷たい所に体温を少しずつ戻していった。

「あの糞餓鬼が……」
「ハル……？」

じっとこちらを見つめるユキネの頭を力任せに撫で繰り回す。妙な悲鳴を上げて頭を押さえるユキネの肩に手を置く。

「――行くぞユキネ、シア。奪還（リベンジ）だ。〝三人共〟、拉致ってでも連れ戻す」

レイには足を引っ張りやがった借りを返させ、ジェミニにはシアの声を褒めさせなければならんし。何よりあのネガティブ娘に、言わなければならない事が死ぬほどある。

「さあ行くぞ。今行くぞ。そんで五時には帰って飯はここで食うぞ」
「今日ですか！？」
「ああ、今日しかない」
「……そうは言っても、場所が判らないぞ」

驚くシアと、頭を好き勝手にされて不機嫌になったユキネをとりあえず置いて、傍の男に向き直る。

「判るよ。そうだろ？」
「？　はて？　何のことでしょうか」
「〝憑き物〟とか言う角の報奨金が、まだ後半分残ってるんだよ。

本当はフェンに言ってからじゃなきゃ使っちゃいけないんだけどな。結構ある。何でも買えるぐらいには」

ああ、と男が得心したと小さく頷いて、唯一笠で隠れていない口を笑顔の形に歪ませた。

「成る程。ええ、当然取り揃えておりますよ」

目を白黒させるユキネとシアに、男は笠の縁を小さく下げて一礼すると、商人の顔を覗かせる。

「――私、万売りと申しまして」

続（後書き）

という訳で、一応オウズガル編は終了です。

獅子、双子、水瓶。

意識が覚醒して、目を開ける前にジェミニは辺りの気配を探った。
時折水が何処からか滴る音以外は何も聞こえない、耳が痛いほどの沈黙。頬には僅かに光が当たる感覚。瞼の裏にも僅かに光が映る。

自分は座らされ、右手は何かに繋がれているようで宙に浮いていた。
この空気の湿り気はあの時、――ユキネの城の地下牢と同じ。恐らく地下。そして牢。
跳ねる水滴の音からそう大きな部屋ではない。恐らくは独房。壁と床は石。唯一木の扉が左奥にあるようだ。そして恐らく、誰もいない。

そのまま数秒。己の体の状態と辺りの気配を感じ取る。驚く事にその間ジェミニの体は身動ぎすることすらなかった。
ゆっくりと目を開けた。

広がった光景は想像にほとんど違っていない。
光の元は机に置かれたランタンの光だったのか、と感想はそれぐらいだ。

鎖に繋がった右手を見て、舌打ちを一つ。
嵌められていた事にではない。この悪ふざけに対する舌打ちだった。

指輪の魔装具は外されている。しかし、ジェミニは体の中に高精度な魔装具を埋め込まれている。

だから、囮の魔装具をはずしたところで意味は無い。本来ならジェミニを無力化したと敵の油断を誘うのが目的だが、それは、奴も知っているはずだ。ならば、今回はそもそも無力化が目的ではないのだろう。

事実、魔法も使える。

強化された右腕の力だけで鎖は容易く千切れた。そして牢の鉄格子も指先で曲がっていく。

そして、ぽつんと部屋に置かれた机と、その上に乗る指輪と、そして指輪と机に挟まる一枚の羊皮紙を見つけた。

『上へ』

ただ一言だけそう書かれた紙を一目見て放り出し、指輪を嵌めながら扉へ向かう。

扉に付いているリング型の取っ手に手を掛けようとして、ふと、ジェミニの手が止まった。

何かおかしい。

部屋の様子ではなく、自分の行動に疑問が残った。——いや、それも少し違う。正しくは今の自分の行動と比べて以前の疑問が浮き彫りになった。

どうして。自分は。あの時――。

思考はそこまで。

襲い掛かった頭痛にジェミニの思考は白く染まり、そして一瞬で通り過ぎた頭痛は、その頭痛の存在もそして疑問の記憶も無かった事にした。

そして当然ジェミニは何の疑問を浮かべるでもなく、扉を開けて外へ出た。

出た瞬間、扉の横に兵士がいる事に気付いて目を見張る。しかし兵士は持っている槍を向けるどころか、視線すら向けない。

成程。

オフィウクスお得意の洗脳兵士と言うわけだ。

そう言えば、オフィウクス――いや、今はあの老獪な子供はレオと呼ばれていたか。

思い出した事実に奥歯を噛み、速くなった歩調で一般房とその奥に続く昇り階段の上まで一息に移動した。

出たのは丁寧に赤絨毯が敷かれた、大理石の廊下。

後ろは地下牢だ。一階の、そしておそらく入り口から一番遠い場所だろう。

そして見た限りそう小さくない建物だろう。ジェミニの立っている場所から続く廊下だけ見ても相当な長さ、高い天井。そして一定感覚でシャンデリアまで飾ってある。

城。

思いつくのはその単語で、そしてそこから更に連想するのは以前

拠点としていた森の中の古城。

しかし、その城の中にいると言う訳ではないようだ。あの城は日が中々当たらないせいで、もっとかび臭い。

何より直ぐ横にある嵌めごろしの窓の向こうに町が広がっている。そして、驚く事にその向こうには地面が広がっていない。流石に宙を浮いている都市など聞いた事はないが、切り立った山の上にある断交的な国にならば聞き覚えがある。

雲が近い。抜けるような青空が広がっていた。

『上へ』

その誘いに乗るのならば、階段を探すべき。しかし、今のジェミニはそんな悠長な選択肢を選択しなかった。

向き直ったのは窓。手を添えて、一瞬後。壁ごと吹き飛ばした。

パラパラと欠片が舞う中で、視界に入ったのは綺麗に手入れされた庭。庭師の老人がこちらを見て驚いている。操られてはいないらしい。

「ごめんなおっちゃん。後で掃除しに来るわ」

それだけ言って視線を上に。

『上へ』。その言葉が指す場所は簡単に見つかった。

庭を囲うように綺麗にシンメトリーを保った城。その中心の、三

角錐状に伸びたその頂点。その存在を確かに感じた。
助走無しの跳躍で二階の窓に足を掛け、そのまま更に跳ぶ。
高い。元々山の上にあるせいで薄い空気が更に薄くなる。

十四階の白いテラス。
行き着いたその場所は、周りの山々のどの頂点よりも高く、町の全景はもちろん、余りに遠すぎて霞がかった地上までもが見て取れた。

「絶景だろう。初めて見た時は私も年甲斐無く目を奪われたよ」

強い風が吹いた。振り返り、長い金髪を揺らすその男――”オフィウクス”を認め、目を細める。

「眺めはいいが、今日は少し風が強い。中に入るぞ」

そう言って、肩に羽織っただけの白い外套を押さえながら、ガラス張りの扉を潜っていった。
少しだけ逡巡して、ジェミニもその背中を追って中に入った。

一度視線を右から左に往復させて、部屋の戦場をほぼ全て頭に入れる。
出入り口は向かって左。右に王座。やり方が判らなくて、とりあえずマニュアルを沿った様な様式美がそこら中に。

「君の他に、二人ここに招待した。青髪と黒髪の令嬢だ」
「――――！」

――時間を引き延ばす。
床の反跳を利用し、踏み込むその速さは神速のそれ。
しかし、別の時間軸に置いてきたはずのオフィウクスはジェミニと同じ速さを持ってジェミニの拳を受け止めた。

重力特異点。
オフィウクスの体の回りに張り巡らされた力の乱力場と時軸は、その中心にいるオフィウクスの意向以外の変化を認めない。

「ち……」

一つ舌打ちをすると同時に、捕まれていた手を振り解き、一歩、二歩下がって警戒する。
自分から手を離したオフィウクスは、そのまま王座に腰を下ろした。

「……王気取りか」
「馬鹿な。私はただの人間で、これはただの椅子だ」

そう言うと、何がおかしいのか自嘲的に笑いながら、ゆったりと肘掛に頬杖を立て凭れ掛かる。

「そう、私などまだまだ人間だったよ。生き残れたのは偶然だった」
「逃げられると思ってんのか？　あれから」
「とりあえず、町ごと消し飛ばす為の手段は講じたんだが、まあもしまだ生きているのなら、」

言ってから、ジェミニはここに乗り込んでくるハルユキを想像した。

容易に想像できる。困った事にあれは人一人のために動くのだ。自分一人ならいざ知らず、レイとフェンが居るのならそれこそ鬼の形相で攻め入るのではないか。

「無理だろうな。一応あの城を手放して、色々と策も講じたが、隠れていられるのも半月程だろう」
「……何を考えてる」
「簡単だ。卑小に成長を続けるだけだよ。何と言っても人間なのだから」
「……その、精霊獣の体と何か関係があるのか？」
「ほう、流石だよ」

オフィウクスは肘掛から体重を持ち上げると、完全に体重を背凭れに預けた。

「”神依代（ゲンガー）”。レオに無理を言って作って貰った人工精霊獣だ。頑丈な筈なのだが昨晩徹底的に壊されてしまってな。泣きの二体目だよ」

笑う、他に何か有る訳ではなく、ただ笑っている。そんな顔だった。しかし、それに反比例するようにジェミニの顔は強張っていた。

「それ、は、――」

「ああ、アクアにその責を果たして貰っている」

その言葉が終わらない内に、ジェミニが立っていた大理石の地面が弾けた。

一陣の風となり、玉座の間を一直線に風が走り抜ける。その速さたるや迅雷の如く。その体は一筋の線となり、その拳は矛の先となる。

しかし、その拳は先程と同じ結果を繰り返した。ぱしん、と乾いた音を最後にジェミニの力はどこぞへと消えうせた。

ただ、今度はジェミニは引かなかった。単純に筋力のみでぎりぎりとオフィウクスに肉薄する。

激情に駆られ歯を剥き出しにするジェミニの表情。

その表情とはやはり反比例するように、オフィウクスの表情は冷たく凍てついていた。

「何故、そこで貴様が怒る」

「お前が、殺したからだろうがぁッ！！」

「私が殺したのではない。彼女が私に殺されたのだ」

「同じ事だろうがァッ！」

「――違うわ、戯けが」

至近距離で競り合っていた二人の間の空気が明らかに変わる。
ジェミニはもう一つの拳を振り上げ、しかし、その時にはオフィウクスの傍らから飛び出した彗星がジェミニの腹を打っていた。

「飛べ」

その言葉に真摯に従うように、ジェミニの体は接近の時と変わらないほどのスピードで王座の正反対――、出入り口の巨大な扉と、天井との境目まで吹き飛んだ。
幾らかジェミニ自身が威力を殺したからか、その衝撃は着弾部分に罅を入れるだけで事なきを得る。

しかし、ジェミニはそのまま十メートルほどを地面に落下して鈍い音を立てた。

「思い出せ。彼女は笑って死んだだろう。あの時がアクアの生涯の終着だった」
「違うッ！」
「それに、だ。――彼女がもう生涯を終えたと思ったからこそ、お前も代わりを見つけたんだろう？」

頭に過ぎる。
声高に否定できる事ではない。いやきっと、確かにそうなのだろう。

地べたに腹を付いたまま、否定しようと口を開けて、しかしそのまま歯軋りに変わった事が、ジェミニの心情を如実に物語っていた。

「お前が代わりを求めた事を責めはしない。しかし、そのお前がアクアの事で知った風な口を利く事が全く理解できない」

「がっ……！！」

言葉と同時に、ジェミニの背にもう一つ彗星が落とされる。

それでもジェミニは体を起こそうとするが、直ぐに目から焦点が無くなり瞼が閉じた。

「手酷いね。手は出さないものだと思ってたけど」

すい、と音もなく開いた扉の向こうから姿を現したのはレオ。小さな歩幅でジェミニに近付き、その背中を覗き込むとそう言った。

「余りに直情的だったからな。会話が出来るとは思えなかった。そうでもなければこう簡単に倒せんよ」

「ま、そうだね。僕の印象ではもっとしなやかに強い男だったし。で、どうする？」

「そうだな。魔法を封じる事は出来るか」

「ん～？　僕達は結構複雑な位置に魔装具埋め込んでるし、それも一つじゃないから難しいかな。一定時間薬で眠らせることは簡単だけど」

「ではそれで構わない。残念だが今は時間と魔力が僅かでも惜しい」

「……鬼さんこちらってね。何なら逆に呼んでみるかい？」
「私は遠慮しておこう。少し眠りたい。この体は魔力伝導も反応速度も悪くないが、如何せん睡魔に弱い」
「君、一日の半分は寝てるもんね……」

オフィウクスは羽織った軍服を翻して王座に座り直すと、頬杖と背凭れに体重を預ける。
視線を先程まで居た場所に戻すと、ジェミニもレオも姿は無くただ割れた床だけがあった。

水を打ったように静まり返った玉座を耳で確認して、窓の外の景色に視線を移す。ここから見える景色は空の青だけ。この陰った室内が対照的で心地良かった。

睡魔に任せてゆっくりと目を閉じる。
瞼に浮かぶのは、胎動する自分の体。
感慨深げに思い起こすのは、誰一人欠けていなかった日々。取り巻く世界。

「ああ、憎い、憎い」

静かに呪詛を吐くその口は、それでも緩やかな微笑に歪んでいる。

獅子、双子、水瓶。（後書き）

書き上げ次第更新していきます。

残暑の夜

結論から言えば、今日中に助け出すなどと言う事は無理だった。
如何に万(なにもかも)を売り棚に揃えているといえど、選別に一晩かかると、そう言われてしまえば是非も無く一晩を待つしかなかった。

不思議とハルユキに焦りはなかった。
それは更に鋭敏化した神経が何かを感じ取っているからなのか、それとも情が鈍化したのか。

そんな無為な事を考えながら、ハルユキは城の外壁の上で夜の闇と溶け合う町を眺めながら、久しぶりの煙草を吸っていた。
ユキネに見つかれば大目玉だろうが、まあ一度くらいなら愛想を付かされずに済むだろう。

つまり問題はこいつだ。

「……」
「……」

恐らく、フェンの代わりに刺されフェンを死んだと思わせる為に残された青い髪の少女。
身代りと言うだけあって、その外見も無表情も完全にフェンと一致している。それこそ、例の刺青が無ければ判別するのは難しかったかもしれないほどだ。

万売りがこの少女を助けたのはあの子供にも想像できなかった事なのだろう。

現に命だけは助けたといっても、希少で高値で危険度が高い劇薬を致死量ギリギリで使いそれでも何とか助かったと言った具合らしく、脳には少なくない障害が残っているだろうという事だ。

ほとんど何も話さないし、自発的に動こうともしない。ただ、ハルユキを見つけてからはその後ろを黙って付いてくるようになった。

恐らく、脳が傷付く前に傍に居たからかそれともハルユキの顔だけは記憶に刻みつけられ”作られたか”だ。

フェンと同じ顔でじっとハルユキの後ろに立つ、”フェニア”の顔を見る。

無表情。

人間的とはおよそ思えないその顔が、フェンの表情と嫌でも重なる。思わず頭に手を伸ばしそうになって、しかし拳を作ってそれを止めた。

◆

「クローン、ではないでしょうか」

「……今、なんて言った？」

彼女の正体。

双子か、姉妹か。そっくりさんか。整形か。

魔法の類かもしれないとも思ったが、完全に独立した存在に見える。魔法は得体が知れないし理解も出来ないが、命を作り出せると

は思えない。

結局ドッペルゲンガーかなにかじゃないかと言う意見で適当にまとまりそうだったが、シアが言った意見に引っくり返された。

「あ、あの、この間の敵の人達の中に同じような人達が居て、その技術がクローンだ、って……」

「……どんな奴だ？」

「子供でした。十歳ぐらいの。でも何処か……」

「胡散臭い」

「……はい」

クローン、確かにそう考えれば納得はいかないこともない。

しかし、この科学技術皆無の時代に、電気すらない時代に果たして可能なのか。知識が時間が資料が大規模な機器が大量に必要なはずだ。

「……」

横目でフェンの顔をした娘を見る。確かに、クローンだとでも言わなければありえないほどの似方だ。

それも、相当厳密な管理の下でなければあれ程は似ないだろう。

「なあ」

自分が呼ばれたと判ったのか、娘がこちらにその無表情を向ける。

背筋が寒くなるほどに似ている。双子だとかそういうレベルではない。こだわりではない、その杓子定規な表情には固執だとか執着とかいう怨念染みた物すら感じる。

呼ばれたと思ったのか、ふらふらと立ち上がると、やはりふらふらと歩いてハルユキの目の前で止まった。

隣でユキネかシアが喉を鳴らした音が聞こえた。それほどだ。それほど似ていて、しかし何かが決定的に欠けている。

「……どうするんだ、この娘（こ）」

「後で考えて良いだろう。どっちにしろ明日はここに置いて行く」

「そうだな……」

じっとハルユキの方を向いている瞳は、きっと何も映していないのだろう。

目の前で手を振ってみても反応はなく、何処から来たのか、何者なのかと聞いても全く反応はない。

「名前は？　なんて呼べば良いでしょうか？」

「呼ぶ機会があるか？」

「不便だし、可哀想だろう」

フェンと呼ぶわけにも行かないし、とまた三人で頭を捻る。

「フェニア……」

その声もまた怖くなるほどフェンとそっくりで、背筋が寒くなる。

「フェニア・ミストガルナ」

その名前。

聞いた事もないその名前はまた新たな疑問をハルユキ達に投げ掛けるだけに終わった。

◆

今、フェニアはハルユキが座っている所から人一人分だけ離れて座り、足を中空に投げ出して正面の何処かをひたすら見つめている。

つい最近、似たような事があったなとハルユキは無意識に記憶を探る。場所は違う。隣に座っている人間も違う。座っている位置の

距離も違う。

それでも思い起こしてしまうほどに、フェニアはフェンに似すぎている。

「ずいぶん感傷的じゃねぇかよ」

「出てくんな九十九。大人しくヒッキーやってストレス溜めてあわよくば死ね」

月明かりで薄まった闇の中に一層濃い影が浮かび上がった影に一瞥をくれて、ハルユキは暗い町並みに視線を戻す。

昼間の作業の疲れと、まだ修復し切れていない危険な場所とそして少なくない火事場泥棒の存在からか、眠らない町は眠ってしまっている。

魔法を使った復興作業の効率は凄まじく、六日の間に復興作業は十分の一程まで進んでいるらしい。

「何だ。驚くかと思ったんだがなぁ」

「幻聴に幻覚が加わったんだろ。益々頭がおかしくなっただけだ」

「ノリが悪いな。ダチにゃあなれねぇタイプだ」

「俺以外に話す奴もいねぇだろうが」

実際、九十九が化けて出た事に驚いていない自分に驚いているほどだ。

更に力は強くなった。視力も、聴力も上がっている。

力は気を付けなければドアを破壊してしまいそうになるし、目は闇が視界を塞ぐ事を一切許さなくなり、耳はこの更けた夜に喧騒を感じて眠れないほど。

人間離れもここに極まれりだ。霊視か何かが身に付いてしまっても不思議には感じないのだろう。

「煙草か。寄越せ、俺も吸う」
「……」
「んだよ」
「……いや、別に」

マッチと煙草を投げ付けてやると、すり抜ける事は無くそのままそれを受け取った。そして、厚かましくもハルユキの横にどかりと座り込んだ。

小さく舌打ちを一つ。聞こえただろうに、九十九は涼しい仕草で煙草に火を付け、顔を顰め、直ぐに煙を夜に吐き戻した。

「何だこりゃ。こんなもん吸って何が楽しいんだお前等」
「煙草は肺で吸うんじゃねぇ。見栄で吸うんだよ」

ちっと九十九が舌打ちして、煙草をハルユキへ放り返した。それ

をポケットの中に突っ込み、もう一度町を眺めてから、視線はそのままにハルユキは口を開いた。

「あと、何日だ」

「三日。まあお前の無理次第で幾らでも短くなるだろがな」

「十分だ」

「また負けるんじゃないか？」

「負けないだろ」

「あっそ」

最後に咥えていた煙草を握り潰すと、九十九は立ち上がった。

「ま、殺すか殺さずに捕まえるかぐらいは決めとけ。じゃないとまた足掬われる」

それと、と。

九十九は明後日の方向を見て、口元を上げた。三日月形に歪んだその口の中だけが、肉々しい赤色だった。

「――お客さんだ」

闇が薄い夜の月の下。

襤褸のような白い外套を風に揺らしながら、そいつが紅い眼光をこちらに向けていた。

くっと親指で指した背中の方向に有るのは、未だ復興の手が付けられていない闘技場。

◆
◆
◆

「……ハル？」

当たり前のように夜中に目が覚め、寝ていたソファから身を起こして、かけていた毛布を押しやる。

小さく寝息をつくシアが向かいのベッドに居て、しかしハルユキの姿がベッドに無かった。

靴がない。

別に騒がしさを感じたわけでもないから、トイレかそれか風に当たりに行っているのかだろうか。

「ハル……？」

探しに行こうかと立ち上がったところで、ユキネは顔を顰めた。

流石に。これは。いくらなんでもみっともないのではないかと。

冷静に考えて、ちょっと目が覚めて外を出歩いているだけだ。
親犬と一緒に眠る子犬じゃあるまいし、いつもいつも引っ付いている必要はないのだ。

「……私は、重くなんかない」

そして結局一歩も動かないうちに、ユキネは毛布の中に再び潜り込むと無理矢理目を瞑った。

十五分後。
ユキネは不安げに眉を下げながら廊下を歩いていた。

最初はトイレに行くと自分で宣言して部屋を出て、どうせだから行ったところがない所に行ってみるかと最寄のトイレと反対方向に歩き出して、そして今階段を上がり三つ目のトイレを通り過ぎた。
正直もう部屋に戻ろうと思い直していたが、同じような景色に既にもと来た道も見失っていた。

「あー…、もう」

肩を落としてユキネは角を曲がる。

見覚えのある景色を期待したが、同じようなのにどこか違うと判る廊下が現れて、また一つ溜息をつく。

「何してるのよ、貴女」
「うひあっ！？」

叫んだ声は声に驚いたからではない。その前に、うなじに冷たい何かが押し当てられたからだ。

「うひあだって。ふふ、可笑しい」
「……引っ叩いていいか？　ノイン」

◆

ノインが持っていたのは、強めの酒で今はそれがゆっくりとグラスに注がれていた。

「よく飲むのか？」
「今日は少し長く眠れそうだから。少しだけ」
「……眠れないのか？」
「少しだけね」

ノインは行儀など気にしないのかベッドの小脇にある机を引き寄せ、ベッドに腰掛けたまま酒を口に運んだ。

ユキネはその対面にあるソファに恐る恐る腰を下ろす。

「貴女も少し飲む？　明日出発なんでしょう？　と言うか何で起きてるのよ」

「トイレに……」

「行ってないじゃない」

「……ハルが、居なくて」

「うわぁ……」

「くっ……！」

呆れたような馬鹿にしたような笑いを堪えているような表情のノインに、言わなければ良かったと恨めし気に睨みつける。

「……ノインは、来ないのか？」

「え？　ああ、そりゃあね。そんなレジャー感覚で行ける訳無いでしょ。それに復興が先だと思ってるし、果たして行っても意味があるのかとも思うわ」

馬鹿にするのは止めたのか、まじめな表情で机に飲み終えたグラスをを置くと、ノインは小さく溜息をついた。

「意味が、ない……」
「判ってるでしょ、貴女も。貴女をここに呼んだのは少しその事で話をしたかったから」

まあ、一人酒が寂しい事もあるけど、とグラスの底から一センチ程だけノインは酒を注ぐ。からん、と氷がバランスを崩してグラスの音で涼しい音を立てた。

夜は耳に痛いほどに静かで、氷の音を最後に部屋の中にも沈黙が下りる。

そして、酒をノインが口に運んで、また口を開く。

「私が居なければハルはきっと捕まらなかった。ジェミニとレイがいなければハルはきっと傷付かなかった。フェンがいなければハルはあんな髪になって一週間生死の境を彷徨う事は無かった」
「それは、でも……！」
「違わないはずよ、一つもね」

小さく喘いで、ユキネは苦しげに視線を落とした。

「寄って集って足を引っ張って。そこを敵に袋叩きにされて。味方なんて一人も居なかった」

ハルユキにそう言ったとしてもそんな事は関係ないとハルは言い

張るだろう。

ノインは敢えて言わなかったのだろうが、ユキネにも足を引っ張ったという事実は該当する。

後悔はないのか。

しかし、もしあそこでハルユキを止めなかったら、わざわざ迷うような事を吹き込まなかったら、きっとハルユキはあの場の敵を圧殺していただろう。

殺す殺さないのやり取りの中で、一瞬気持ちがぶれる事がどれだけの足枷になるかはユキネも理解している。

だから、あんな規格外達相手にそれは決定的な勝因になったはずだった。

ならば止めねば良かったのか。

駄目だ。

それでは駄目。別の後悔がこの身を苛む。

だから後悔するのは、選択の如何ではなく、一人では仲間さえも救えない脆弱を、敵を殲滅できなかった無力を。ただ只管に呪う。

恨むべく怨むべく憾むべく。

どうして無力を恨まずにいられよう。彼らに自分がどれだけ助けられてきた事か。

夜も眠れなかった悔恨がまたむくりと首を擡げる。ハルユキが回復した喜びを押しのけて、荒れ狂いそうになる。

掌に爪が食い込む。放って置けば掌を穿ちそうな所で、ノインが察したように話題を変えた。

「シアは多分、行かないと言うと思うわ。頭が良さそう、と言うか考え過ぎそうな娘だから」
「……そうだな」

思えば、ハルユキが助けに行くと言った時シアは少したじろいだ様に見えた。

確かにシアはそう言うかも知れない。きっと、悔しそうに奥歯を噛み締めながら、それでもそれを隠して笑いながら。

シアがジェミニにどんな感情を抱いていたかは知らないが、それでも多大すぎるほどに感謝の念を持って日々過ごしている事を知っている。

だからこそ、浚われたと聞いた時の、――自分の無力さを叩き付けられた時の心情は想像に難くない。

仕方無しに俯くユキネも、それを見て苦笑し酒を勧めるノインも、カーテン越しに光る闘技場の様子には気付かない。

決勝

迫ってきた拳を避けそのまま腕を取り、引きながら足を駆る。

避けた拳が風を巻き起こし、引っ掛けただけの足がジワリと鈍痛を覚える。が、それだけ。

宙に浮いた相手の体を握った腕を引っ張って一回転させ、背中から地面に落ち始める相手の体に掌底を叩きつける。

かなりの勢いで地面に叩きつけられるが、地面がほぼ砂利に変わっているので大したダメージにもならないだろう。

その証拠に手と足を最大限に使ってカモシカのように跳ね上がりながら、相手は体勢を立て直した。

「……まだやるのか？」

言葉は無い。ただ嗤い、ただ例の白い魔力を体中から噴出させる。肌に痛いほどのそれはしかし、ハルユキの眠たげな目を開かせもしない。

そんな事には構いもせずにラストは馬鹿正直に突っ込んでくる。

ストーカーだ。こいつは。とハルユキは密かに溜息を付く。自意識過剰の様で自分で言うのは嫌だったが、間違いない。こいつはス

トーカーだった。

迫ってきた拳を避けると、勢い余ったラストの体がハルユキを通り過ぎた。その青痣ができた顔はそれでも楽しげに歪められている。

「楽しそうだなぁ、お前」

「お前のお陰だ」

最初こいつの顔を見た時は、ユキネの姿が思い起こされてここまで付いて気もしたが、何発かどついた今ではそんな気ももう薄れていた。

ユキネはそんな事口にもしなかったし、恐らく言わなければ思い出さないほど些事なのだ。それを何時までも自分だけ怒っているのも何だか馬鹿らしい。

それに、余りにこいつには邪気が無いのもその一因。殺意は有るのに、敵意は健在なのに、その直向さには狂気すら感じるのに、驚くほど邪気が無い。

戦場を背にした時はあれ程禍々しく感じた雰囲気を今は感じない。

それが一体ハルユキトラストのどちらが変化したのかまでは判らないが。どちらにしても、毒気を抜かれてしまった。

振り向き様にラストの左拳が三度唸る。

それを右手で流し、体をラストの左側に移動させながら右手をそのまま肘先に、左手を手首に移動させ、テコの原理で一瞬ラストの腕を逆関節に極め、本来曲がらない方向に九十度折り曲げる。

一瞬動きを止めるラストに向かって一歩踏み出し、ラストの肘先に宛がっていた右腕をそのまま折り曲げ、肘鉄をラストの脇の下に叩きつけた。

ラストの体が浮き、数メートル飛ばされて地面に叩きつけられる。ある程度手は抜いたが、人体急所の一つだ。ダメージはあるはずだ。

人体急所のひとつ。当たれば呼吸困難に陥りほぼ間違いなく気を失うはず。

しかしそれでもラストは一度地面に激突して体勢を立て直すと、グロテスクに仕上がった左腕を力尽くで元に戻し、二三度曲げてみせ、また笑う。

その化物具合にも慣れてしまって、ハルユキは顔を顰めて溜息をつくだけ。

また、身体能力が上がっている。

それも今迄で一番顕著にだ。慣れていなければ少し日常生活に支障を来たすレベルだ。そういう意味ではラストの構ってちゃんも都合は良かったのかもしれない。

成程。ラストは強い。

恐らくまともに戦えばフェンよりもレイよりもジェミニよりもノインよりも強いだろう。

才能だとか、そういった問題ではない。こいつは異質だ。魔法の如何はよく判らないが、これは魔法ではないのではないかとも思う。

ただ視認できるほどの魔力を吹き曝し、本来なら枯渇するだけで何の意味も無いはずの行為が戦闘力に繋がっている事がラストをこの戦い方に定着させたのだろう。

目に留まらないほど速く、それで古龍を殺せるほどの力があれば、確かにこの戦い方で問題は無い。

「……」

しかし同等以上の身体能力があれば、それはただのテレフォンパンチの連続でしかない。

「……何で、負けたかなあ」

こうして見れば、ますます負ける要素はない。これにあの金髪の男が加わったとしても、負ける気はしない。

今はそれこそ昔の自分にすら勝てそうなほど強くなっているのに、

それでも勝てなかった――、否。殺せなかった。

「あー…、悔しいな、畜生め」

殺していれば良かった。殺す機会など山ほどあった。しかし殺さなかった。

二度と負けないというのならば、敵を全て殲滅していけば間違いはない。事実、自分はそれに似た事を決行した事がある。

しかし、そこであの馬鹿娘だ。殺すななどと。どうしろというのか。

正直に白状すれば、殺す事にそこまでの後悔も抵抗も無い。ただ実感と感触が手の中に残るだけ。だから、殺す事で殺した自分がどうにかなるなどユキネの言葉は勘違いでしかない。

自分は優しい人間ではない。あくまで利己的な人間だと思っている。

もし、ユキネがハルユキを優しい人間だと言うのならば、きっとそれは、ユキネの前で優しい振りをしているだけだ。

殺せば楽だ。効率的だ。まあ、楽だから殺すというのに少し疑問はあるが。些細な物だ。

――思えば、余りに気を抜き過ぎていたのだろう。

気付けば、ラストの拳が目の前まで迫っていた。どごん、と中々大げさな音が頬から鳴って、ハルユキの体が否応なく吹き飛んでいく。

また追い討ちでもかけようとしていたのか、ラストの足音か破砕音か判らない音が聞こえ、しかし、何を思ったか直ぐに止まった。

「……いって」

来ないのならと、頬に鈍痛を感じながらごろんと仰向けに寝っ転がった。

「……何で負けたかだあ？」

「ん？」

そして、何を思ったか人間の真似事を始めた。その顔には確かに知性がある。考えてみれば当たり前だが、どこか驚きを隠せない自分がいた。

「半端だからさ。戦争だったんだろ？　なら殺すか殺されるかだろうに」

「……そうだな。そうに決まってる」

しかし、今ここにはそんな決まりきった問答はやはり不毛に感じた。

そんな事を今更考えるのも、自分が誰に負けようと勝てようと。余りに意味がない。

力ももう要らない。才能も日常も余りに意味がない。ただ明日一度だけ勝利があればそれでいい。

不毛だ。ここでわざわざラストに付き合うのも。今後どうしていくかも。何もかもが。

ただ、明日が悪くない日であれば、それだけで良いというのに。

「なら、」

――それなのに。

「しょうがないから、俺はもう二度と人を殺さない」

余りに無意味に。そんな誓いを、胸に立てる。

「なら俺は、お前が生かした尽くを殺し尽くそう」

しょうがないからな、とラストが嗤う。いや、馬鹿な誓いに笑い合う。

同時に、いやラストが笑うたびに何かが悲鳴を上げるような音を幻覚する。

愉快。喜悦。悦楽。歓喜。そう言った同じような感情が入り混じり、気色が悪い程に実直に感情を吹き出す。

自分の欲望に染まった笑みは、確かに無垢で邪気など感じないが、それだけに直向で残酷で薄ら寒い何かを感じさせた。

「ラスト」

名前を呼んだだけのその言葉に、空気が一度に張り詰める。

ハルユキの体にその腕の半ばに、人ならざる異形の角が余りに自然に姿を現す。先程までとは違い全力で握りこまれたハルユキの拳を、避ける術も防ぐ術も今の所ラストには無い。

狂気を孕む。殺意を噛み砕いて養分に変える。

対してラストは、この幕劇の最後を悟ったのか。不適に笑って、一時の負けと拳を受け止めるべく諸手を広げた。

◆

「それじゃ、行って来る」

町から出てしばらくした所の巨大な鉄の鳥のようなカラクリの前で、ハルユキはノインに挨拶を交わした。

朝早くから万売りが告げた場所はオウズガルから相当離れた国の名前。

しかし、地図で位置を確認するとハルユキは三時間ほどで到達できると言っている。恐らくこの鉄の鳥がそれを可能にする物なのだろう。

それをユキネはノインの横から見上げていた。

ハルユキがどこからともなく取り出した鉄の鳥は、とても即席とは思えないほど巨大で、神経質なほど均整が取れたその形には芸術性すら覚える。

「ユキネ」

その鉄の鳥に目を奪われている時、隣から聞こえた自分の名前を呼ぶ声に顔を向ける。

そこにはいつも通り燐としたノインの顔があって、無言で結局付いていくのか行かないのかと問うている。

「わた……」
「ユキネさん」

既に迷いは無い。目的も役割も鮮明に胸にある。少しだけ冷たい感触と共にだが。

だから言葉に勢いを乗せて、――いや乗せすぎていたせいか、後ろから聞こえた耳障りの良いシアの声に、無様に肩を跳ねさせた。

海の色を思わせる深い青の色の髪。青い髪と言うのは珍しいが、奇異の視線より先ずはそのしなやかさに目を奪われる事が多いだろう。

そして、何故かその髪に隠れるように背負われた小さなリュックを見つけた。

「……シア？」

すっとユキネの横に並んで、少し躊躇った後、シアはおずおずと

ユキネの手を握った。

「行きましょう」

「え……？」

驚きに目を見張ったのは、視界の端にいたノインもだ。

小さな手がユキネの手を捕まえ、引かれる手を信じ難いものを見るようにユキネは見つめて、続いてシアの顔を見る。

その横顔はともすれば私よりも何かを定めていて、その視線は強くぶれる事は無いかのように思えた。

「ちょ、シア……！」

大した力ではないにも拘らず、ユキネの足がシアの手に引かれてよたつく様にシアに続いたのは、その目に只ならぬ何かを感じたからだ。

「駄目」

しかし、そのまま鉄の鳥に続く階段にシアが足を掛けようとしたところで、すっと目の前に影が立ちふさがった。

「言ってはなんだけど、貴女じゃ何の役にも立てない」
「私が邪魔になるのは承知しています。でも、すみません。今回は迷惑をかけます」

強く、棘さえも感じるほどしたたかな言葉だった。

その言葉にすっとノインの目が細められる。シアの本意を、考えを、覚悟を見定めようというのだろう。その視線は悪意こそ感じないが、無言で相手を威圧するには十分だった。

「数少ない友人として言うわ。行くのは止めておきなさい」
「聞けません」

シアは引こうとしない。しかしノインも道を譲らない。ピリピリとした空気の中、シアは視線も逸らそうとしなかった。

それは心が強いからなのか。――否。握られた手が小さく震えている。

そんな物をおくびにも出さないその表情はどこか危うい物も感じるし、同時にとても実直さも感じてしまう。

「今私にある選択肢は、死地で死ぬか。生きて帰ってくるかです。待つという選択肢も、ここで何か出来る事をやるという選択肢もありません」

「捕まったらどうするの？　人質になったらどうするの？　それで、誰かが死んだらどうするの？」

ノインは怒らない。ただ只管に理路整然とした口調で言葉で相手を説き伏せる。戦闘にしろ会話にしろ、感情を出す事がないのだ。

感情で攻め落とす事はできない。温度差に愕然とするだけだ。

だからシアはにこりと笑って、手の震えさえも止めて、告げた。

「どうしても捕まりそうな時は、舌を噛んで死にます」

”出来る訳がない、口だけだ”と。

そう言ってしまえば、シアにそれ以上の反論は無いのかもしれない。しかしノインはその一言を言わない。いや、シアの空気がそれを許さなかった。

言ってしまえば、それを証明しようとしても不思議ではなかった。それこそ、舌を半分噛み切ってでも。

「皆さんに拾って貰った命を、皆さんの為に使えるのならば、私は」

手に胸を当ててそう謳うシアの表情はにこやかな形を保ってはいるものの、とてつもない強情さも同居している。

ひくり、とノインの表情が苦笑に似た形に引き攣った。

「……怖い女」

「はい。ありがとうございます」

「褒めてないわよ」

すっとノインの呆れた目がユキネの方に移動して、その目を覗き込んで溜息を付いた。

「私もだ。私は、責任がある」

「……責任？」

「ああ」

「……そう、行ってらっしゃい」

これじゃ私が悪者じゃない、と小さく呟いてノインは鉄の鳥を見上げた。

「まあ、舌噛み切る事態にならないぐらいにはフォローはする。それにお前あれだ。シアには昨日の晩必殺技伝授したしな」

「はい！」

「必殺技ぁ……？」

鉄の鳥の入り口から顔だけ出したハルユキがそう言うと、最後にシアはノインに力強く握りこぶしを作ってみせる。

それから、ユキネとシアも恐る恐るといった風に階段を上って中に消えた。

「……」

果たして、大丈夫なのか。

信頼はしているが、そもそも緊張感が抜けている連中だとノインは思っている。

自分がやる分ならば全く不安は無く、また手伝えるだけでも大分不安は減るはずだが、自分の背中には町が広がっている。

「ノイン」

最後にひょこっとハルユキが顔を出す。

「まあ、なんだ。なんか美味い物でも用意しといてくれ」
「銀貨１０枚になるわね」
「自腹かよ」

しっしと手で追い払う仕草をするノインに、ハルユキは笑って船内に消えた。

その背中が消えて直ぐに、大げさな音を立ててその入り口が閉まっていく。完全に閉まりきる前、ノインの足が動こうとして、その直前に扉はぴたりと閉じた。

◆

「さて、ちゃんとシートベルトはしろよ」
「シートベルト？」
「その腰のベルトだ。その連結部分に、そう、それを、そう」

二人の席を確認して、ハルユキは運転席に腰を下ろす。

最後に離れるように指示したノインが、十分に離れているのを確認してエンジンを入れる。

「シア、本当にいいんだな」

離陸してしまえば、もう引き返すつもりは無い。最終通告のつもりで言ったつもりだったが、シアは小さく笑って首を振る。

「優しすぎますよ、ハルユキさんは。悪い意味で」

「優しい振りするのが上手いだけだ、年寄りは」
「優しい振りが出来るのは、とびきり優しい人だけですよ」
「……あっそ」

溜息とも取れない中途半端な仕草でそう零しながら、ハルユキはまっすぐ広がる地面に視線を戻す。

「一応掴まっとけよ。偉大な一歩（ビックフット）まで一時間だ」

ハルユキは運転席。ユキネがその横。シアがハルユキの後ろ。

もぞりと壁を隔てた客席で、少女が一人身を起こした事には誰も気付かない。

塗り重ねるは

泥の匂い。
魂魄にまで染み付いたのではないかと言うほど嗅いだ、その匂い。
今度は誰の記憶か、誰の目か。言うほどに興味はない。どうせ出てくる役者も結末も全て一緒。
誰かは手を伸ばす。
生き汚いと判っていても、生を喜んだ事もないけれど。ただ萎んでいく自分の命に縋り付く。手を伸ばして伸ばして、そして現れるのは青い髪の少女。
手を握られる。いや、握ったのか。
謝られる。いや、謝ったのだったか。
そこで唐突に、幕は下ろされ視界は黒い帳に包まれる。
次。
始まるのは何時も泥の匂い。
美しさが試されたのか、私の顔は剥ぎ取られている。その他も全て嘘っぱち。

しかし、諦めないのだ。何処までも生き汚くどこかに救いが無いかと土を掴みながら泥に塗れて私は前進する。

誰かがその手を握る。いや、握ったのだ。

謝られる。謝る。

幕が下りた。

次。

泥の匂いがあった。

足りなかったのは強さか。私の腹は獣の牙と角が蹂躙した後でもう肌の色はない。

手が温もりを求める。求められる。

謝る。謝られる。

幕が下りた。

次。

泥の匂い。

足りなかったのは心。表情を浮かべられた唯一の私。ただそれが嘘でできていただけ。

手が繋がる。何か言った。

幕が下りた。

次。

泥。

体がほとんど無い。嘘を拒否したから。

重なる。

幕が下りた。

次。

泥。

当の昔に息はない。何も無い。手が重なる。

幕が下りる。

次。
ツギ
次。
次次次。
次次次次次次次ツ次次次次次次次次々次次次次次次次次次次
次次――……。

――泥の中。

終焉は、幕引き役の幕引きは、記憶が薄い。ただ覚えているのは、奇麗な奇麗な金色の髪。

◆
◆
◆

「やあ、起きたね」
「え……」

目を開けて、柔らかなベッドの感触に驚いた。そして、どうにも

眠りから覚めた感覚ではない。

先程までオウズガルの町の路地でハルユキの前にいたのに、瞬きをした瞬間にこのベッドの上に移動させられたような感覚。

しかしそれでも不思議と、時間経過の感覚は体の中に残っている。

あたりに視線を巡らせると、妙に格式ばった装飾が施された壁や床が目に入った。

しかしそれに意識をやったのも一瞬、その部屋にはとても似合わない機器が、道具が、臭いが、既視感をくすぐった。

「これは……」

最初に見つけたのは巨大な透明の筒。その材質はガラスにしてはしなやかで、しかしガラス以外にあの透明さを持つ物を知らない。

しかし、既視感が無いわけではない。恐らく”この目で見た記憶でこそないが”、記憶の中に該当する風景があるのだろう。

「ここはビッグフット、その城の地下の迎賓室でね。一番広かったから間借りさせて貰ってるんだ」

その声の主を見つける。なにやら世話しなく机の上の何かを指で叩いている子供の姿。

確かにかなりの広さを誇るこの部屋にその姿は紛れ込んでいるように感じる。

城にある大食堂ほどの大きさはあるだろう。しかし、先に述べた通り、半透明の筒と鉄製のパイプがそこら中に密集していて、開放感は皆無だ。

「まだ丸二日だ。疲れてたらまだ寝ててもいいし、何か飲むなら用意するよ」

白い大理石の壁。

それを伝った先にある大きな両開きの扉を指差して、レオはそう言った。

「あの、オウズガルは……」

「うーん、壊滅させる気だったんだけどね。やっぱりあの黒髪君にやられたみたいだ。凄いね君の友人は」

茶色の短い癖が入った髪をぼりぼりと少年は無造作に掻きながら溜息をつく。

「――そんなことよりも、だ！　君だよ！　凄いのは！」

ぱん、と思い切り手を打ち鳴らして、満面の喜色を顔に浮かべた。

その顔には好奇心と気体もちらほらと混じっていて、どこか胡散臭い表情すらも今はなりを潜めている。

「少し髪の毛を貰って調べてみたんだけど、成程ね、君のその自我形成はああやって行ったのか」

ぶつぶつと独り言を続けたり、時々こちらに向かって感激の声を上げたりとレオは忙しく口を回す。

「ああ、そう言えば」

その言葉を皮切りに、今までの表情と感情が一瞬で抜け落ち、いつもの胡散臭い表情をフェンに向ける。

「出歩いてもいいけど、地下からは出ないように。いつ鬼がここに来るか判らないからね」

鬼。とはハルユキの事を言っているのだろうか。そう言えば、街中でハルユキがそう呼ばれているのを聞いた事がある。

鬼。それを聞いて首を傾げた事を覚えている。彼は鬼ではない。

あれ程我侭な人間臭さを持っている人間が何処にいるというのかと。

「ジェミニと吸血鬼を助けに。ああ、あと僕を殺しにかな」

意図的にフェンの名前を外した事を、フェンは驚きも無く受け止めていた。

「多分、程無くして彼は来るだろうけど。それでも君を助けには来ない。何でだか分かるかい？」

「私が、裏切ったから……？」

「……いやいや、君は悲観的になりすぎだ。裏切ってなんかいないだろう。ただ少し自分の身を優先しただけ。最終的にはそれも怖くなって自分の身を放り出そうともしたけれど。多分そんな事は気にしない人種だろう彼は」」

僕が言っているのはもっと実質的なことだ。とレオは口に手を当てて小さく笑う。

「君と同じ体を残してきた。話すとばれるだろうから、死体をね」

ああ、とその一言だけで納得がいく。納得した事も分かっただろうに、レオはどこか自慢げに言葉を続ける。

「つまりは、彼は復讐に来たとしても君を探しには来ないんだ。そして、僕は上でどんな戦いが起ころうと一切関与しない。出て行かない」

「出て行かない……？」

「僕がこのゾディアックに居るのは、金と場所とそしてこの技術が欲しかったからだ。上で誰が死のうが誰が取り戻されようが今回は知らぬ存ぜぬだ」

そう言って小さく肩を竦めて見せる。

レオの言葉にさして驚きは無い。そんなものだ、協力できる時には協力するが、自分の損害の方が大きい時は姿を隠す。

それはレオだけではなく、この組織がそうならざるを得ない体系になっているのだろう。

「僕がこの城に居るのを知っているのは、数人だけ。それに地下室の入り口も見つからないように隠す。と言うか、見つかるとすればまずは元の拠点が先だろうから心配しすぎなのかもしれないけど」

長々とした台詞を嫌ったのか一度言葉を切り、まあつまり、と話をレオは纏めに入った。

「僕も君も、次回の騒動は不参加。この地下で引き篭もりだ。如何せん小手先以外に取り得が無いんでね」

小さく肩を竦めて見せると、レオは再び手元の台に視線を落とし、まるでピアノのキーボードを叩くように次々と指でそれを叩き始めた。

「少し手が離せないから、好きに歩き回って構わないよ。その扉から左に行けば地上にも繋がってる。内側からは簡単に出れるようになってるから」

「え……？」

それはつまり、外に行けるという事か。

言葉の意味を上手く噛み砕けないフェンに、その困惑した表情を予想していたのか笑っているレオを見つけた。

その顔を見て、その意図が何となく理解できた。

「逃げないよね」その声に、ゆっくりと顔を上げた。「君は」

その時自分はどんな表情をしていたのか分からない。

不器用に笑って強がっていたのか、虚に核心を付かれて強張った顔をしていたのか、それともその穏やかな声に驚いていただけなのか。

優しげに微笑むその顔が、余りに穏やかだったからだろうか。

たん、と強くキーボードを強く叩いて、レオはこちらを向いた。

ごぼごぼと、筒の中に半透明の青い液体が溜まっていく。

「人を好きになるって言うのは、怖いよね。彼等を知りたいけど怖い。彼等に知って欲しいけど怖い。近付きたいけど怖い。会いたいけど怖い」

「……？」

何処か違和感を残す表情でレオは続けた。

とてもこの人物が言うような言葉には聞こえず、字面だけ見るならばその内容は、実に滑稽で都合の良い自己弁護にしか聞こえず嘘くさい。

「時々、その怖さが好意を上回ってしまう事さえある。例えば、酷い自己嫌悪に陥った時とか、騙していた後ろめたさあった時とかね」

「……っ」

しかし、間違いなくそれはフェンの心情を余す所無く表していた。

「僕は良く分かるよ。嘘じゃない」

びくりとフェンは肩を震わせる。それも、予期していた事のようにレオの表情は変わらなかった。穏やかで大らかで、それは、まるで――……。

「君がここ居れば僕から彼らに危害を加える事は無い。言ってはなんだけど多分あの黒髪君にとって一番相性が悪いのは僕だ。取引になる」

「……取引？」

「君がここに居るなら、必然的に僕は彼らに用がない。付け狙う事もない。それは会わなくていい言い訳になるだろう？　そういう事にしてしまえばいい」

こんな所に居たくは無い。目の前の子供に、情や感慨があるわけでもない。しかし、ハルユキたちの元に帰りたいかと言えば、そうではなかった。

元の鞘に収まる事はもう出来ないのだ。戻れば、今までの嘘を話すか、嘘を吐き続けるか。そのどちらかを迫られる。

そのどちらも一握りの勇気が必要で、自分はそんな物も持ち得ていない。

こんな事で嫌いになるはずがない。オウズガルの城でもハルユキはそう言ってくれた。

それを、嘘ではないかと疑ってしまう。そんなはずはないと、思えたならどれだけ楽だっただろうか。

結局、信頼すら出来ていないのだ。恩人にも、友達にも、仲間に

も、自分にも。

友達と称すれば、ぎこちない笑顔を向けられそうで怖い。
仲間と呼べば、手を振り切られそうで怖い。
家族だと驕れば、背中を向けられそうで怖い。

どうしようもなく、皆の嫌悪の念が怖い。

故に、思う。

しかし、もし自分が既に死んでいるのならば、レッテルを貼った嘘塗れの自分を、それでも以前のまま記憶に残してくれるのならば。

もう、死んだままでいいのだと。

◆
◆
◆

子供が地下迎賓室を出ると、壁に寄りかかっていた女と目が合った。

「立ち聞きかいアリエス？」

部屋の中での声とは一変した軽い口調に、女は憮然として腕を組んだまま言った。

「嘘八百を盗み聞きして何になる」小さく鼻を鳴らした。「それも、あんなモルモットに対しての」

「嫌だな、あの娘に嘘なんて付く訳無いじゃないか。それにちゃんと言ってあるよ、”君は要らない”って。もちろん正直にね」

それを聞いて女は不愉快に眉を顰めたが、我関せずと意思を示すかのようにもう一度鼻を鳴らして、女は壁から背を離した。

「来い。引き篭もる前に閣下がお呼びだ」

「おや、閣下に呼び方を変えたのかい？」

「当然だ。彼の御方は今や王。遅すぎたぐらいだがな」

へらへらと返事をしながら、子供は女の目の前を恐ろしいほどの無警戒で通り過ぎる。

「少し耳に挟んだが、あれは貴様の……」

あれ、と言い表した時に女の視線は子供が潜ってきた扉に向いた。

「うん、そうだよ。僕の愛しい愛しい存在だ。愛しい愛しい踏み台

で、愛しい愛しい未来だよ」

女の視線など見てもいないだろうに、子供は変わらぬ声色で告げる。

「……本当に？」

「僕は嘘吐きだよ？　なら、決まってるだろう？」

「矜持も忠義も度外視して殺したくて堪らない人間は貴様ぐらいだ。誇っていい」

「怖い怖い」

そう言い残して、子供の姿は階段を上って消えた。それを女も追う。

追いながら思う。

あの男は生粋の嘘つきだ。

しかし、嘘つきは嘘しかつかないから嘘つきなのか——否。嘘しかつかない人間ならば信じる部分も出来る。それはもう世界で一番愛らしい正直者だろう。

正直な事も言うからこそ、嘘つきは信用出来ない。この組織の中では人間臭くて、とてもとても。

「この場所は、まだ隠さないのか」

廊下に出る。あまりに開けっ広げな入り口に思わず疑問が口に出た。

「隠すよ。戻ってきたら直ぐね。誰にも分からないように、気付けないように」

その反応が面白かったのか、子供は楽しげに腕を広げておどけてみせる。

「ま、街ごと吹き飛ばされるなんて事になれば、流石に見つかるだろうけどねぇ」

来襲

「街ごと吹き飛ばすか」
「却下だ、馬鹿者」

コンコルドが雲一つない空を翔けている。ユキネの呆れた視線を避けるように、すれ違う景色を見つめた。

「……まあ、それは冗談だとしてだ」

後は自動操縦に任せて、操縦席の後ろに下がり、地図を広げてそれを囲うように三人で座り込んだ。

「正午には着く。それまでに少し打ち合わせをするぞ」
「打ち合わせ……？」

不思議そうな顔をするユキネをハルユキはじとりと睨め付ける。
以前どこぞの誰かにも言われたが、こいつもどうやら自分が正面から突っ込むものだと思っていたらしい。

そもそも、ユキネとシアを連れて来たのは正面突破ではない役割

がそれぞれあるからだというのに。

まずはユキネ。

正直ユキネは戦力的に外せない。敵を殺して回る事が目的ならハルユキ一人でも何の問題もないが、今回は違う。

ハルユキ一人では、魔法に対して無防備なのだ。先手を取れれば使う前に無力化も出来るが、事前に対策を練られていれば随分面倒になる。

そこで、ユキネだ。

実に都合がいい事にユキネの能力は魔法に対して圧倒的なアドバンテージを持つ。呪いも結界も全て無効化出来そうだと言うのだから大したものだ。

「まあ、ユキネは判ってると思うが、魔法関係で何かあったら助けてくれ」

一通り説明すると、ユキネもそんな役回りを想像していたのか、迷いなく頷いた。

「んで、シアだが」

「すみません、我侭ばかり……」

「まあ役立たずだったら後で文句を言うが、来たからには役立たずにはさせんから安心しろ」

「はい！」

「よし、それじゃ確認だが、シアが姿を見られたのは例の薄気味悪

い子供だけだな」
「はい。もう一人は……」
言いにくそうに口を噤んだシアを見て続く言葉の内容を察する。
確かシアの長年の敵の死体が倉庫街で見つかったらしい。それはシアの敵だったらしく、心中は残念ながらハルユキには想像も出来ない。
「それで、その子供なんだが」
言葉を遮ると、恐らく遮った意味まで察してシアがこちらを向く。
「恐らく、今回はこちらが来たと分かった瞬間に隠れる。と言うより安全な場所に引き篭もっていると考えている」
「……万が一にでも生きているフェンさんを見せたくないから」
「そうだ。わざわざダミーを用意して本物を野放しにはしないだろうし、本人も出てこないだろうな」
「それは……」
「監視したいって言うのもあるだろうが、なんせ怒り狂った俺に殺されるからだよ」
ある言葉に過敏に反応して顔を上げたユキネに溜息を吐きそうになったが、その不安げな顔を見てその気も失せた。

仕方無しに、判ってるからと念を込めて頭を軽く叩いて、話を続ける。

「俺が万売りから買ったのは、奴等がいる場所と三人が居る場所。そして、そのどちらもビッグフット」

「はい」

「まあ既に隠れているつもりだろう。しかしあの子供はそこからもう一度隠れる。そこでシアだ」

万が一にでも知られない為に、仲間内にさえもフェンの存在は隠すだろう。

相手にとっての最善手は、ハルユキ達にフェンと子供が別の場所にいると思わせること。

次善策として、フェンを押し込め自分だけ出てくる。しかし、これではハルユキに殺される可能性が飛躍的に高くなる。出来れば選択したくないはずだ。

よって、見つかり難い――いや、正攻法ではとても見つからない何処かにフェンと共に身を隠す確率が一番高い。

ならば、その子供にしか顔を知られていないシアはこの中の誰よりも自由に動ける。

加えてあちらは、事細かに居場所を知られているとは思わない。

それは万売りの少し怪しげな手腕による物だが、レイと古来からの顔見知りであるという事、鎧が欲しい時に鎧だけを持って現れた事。明らかな致死だったフェニアを助けて退けた事。

この三つの点から考えても、情報にある程度の信頼、は無くとも怪しさも相まって商品の品質に信用は置ける。

「それで、私とシアは一緒にいれば良いのか？」
「ん？　ユキネは顔を知られてるだろうからそれじゃ意味が無い。別行動だな。それぞれレイとジェミニを探してくれ」
「……私はともかく、シアは危なくないか？」

危ないか否かと聞かれれば確かに危険だ。敵地なのだそれは当然。

しかし、それにいまいち実感が沸かない自分もいて、その理由も判っている。

「危なかったら叫べ。多分判る」

今も集中すれば、音速に近い速度で移動している似非コンコルドの排音を掻き分け、通過した地上の村の喧騒の一つを聞き取れそうだ。

毒だ。これ程の感覚は過敏すぎて常人には毒になる。毒にならないのはつまりもうそういう事なのだが。余りにも今更な話だった。

「それじゃ、ハルユキは？」
「俺は、フェンを探す」
「……でも」
「まあ簡単じゃないだろうが、何とかする。しかし手間取る事は手間取るだろうから、出来ればお前達に二人を見つけてもらいたい」

納得したのか、二人とも互いを見合わせてから深く頷いた。

その顔には稚拙なが適度に張り詰めた緊張感が伺える。

オウズガルの一件はかなり陰惨な戦場だった。それを乗り越えているならば、そう後れを取る事も無い、と願いたい。

「それで、結局具体的にはどうするんだ」
「お前達二人は見つからないように下ろすから城に向かってくれ。信じ難いが、奴等はオウズガル襲撃の昨日にビッグフットの実権を掌握したらしい。いるのは城だろう」

また少女達は小さく頷く。

「じゃあハルユキは……？」
「決まってる」

正面突破だ、と言うと、やっぱりかと返って来た。

◆
◆
◆

あと数分で目的の街まで着く。

大雑把な打ち合わせも終わり、ハルユキは何やら煩雑に設置された機器を弄っている。ユキネ達は飛び降りる事になるので、気圧を調整しているらしい。

シアが興味があったのか機内の探索に行ってしまったので、ユキネは言われた通りに鼓膜の違和感を唾を飲んで解消しながら、その横顔を眺めていた。

思えば慌しい出立だった。

ハルユキはまだ意識を取り戻して二日と経っていない。それにそもそもあの大騒動から一週間なのだ。

しかし巧遅より拙速を尊ぶとも言う。そもそもあんなイカれた連中にいつまでも3人を浚われておいて良い訳がない。

だからこの不安はどうせ自分への不信感の集まりなのだろう。

じっとしているのは嫌いだ。

動いていないと、またうじうじといらない思考が回りだす。こんな時はいつも剣を振るが、今回はそんな暇も無かったから。

（……駄目だ）

両腕を頭に持って行って、頭皮に軽く爪を立てる。

何も考えなければどれだけ楽か。しかし駄目だ。偏頭痛のように、気付けば悩みが頭を苛めている。

通用するのか。邪魔にならないか。いま少しでも出来る事はないのか。この辺りはまだいい。

しかし、本当に来てよかったのか。本当にあの時ハルユキを止めてよかったのか。止めた事で最終的に誰かが死ぬ事になって今度こそ後悔する事になるんじゃないのか。

過去の事まで掘り返し始めると、もうどうしようもない。

がり、と頭皮に爪が音を立てる。短く切った髪の隙間から流れてくる空気すら鬱陶しい。

目の奥に疲れを覚えた。それ以上疲弊するのは芳しくない。目を瞑って、背凭れに体重を預けた。

今更ながら、この妙に柔らかいソファは何なのか。後頭部を埋めて行くと、少しだけ頭痛に似た思考が緩まった気がした。

「あ」

ボーっと視線を投げ出した先で。

「また分かりやすいな」

調節を終えたのか、呆れたように笑っているハルユキと目が合った。

「うるさい……」

未だ頭に残っていた右手を慌てて下ろして、ユキネは顔を逸らして更に体重を背凭れに預ける。

そろりと、ハルユキの手がその椅子の傍らにあるレバーに伸びた事は気付かない。

「すかしてんじゃねぇ」

「あひゃあ！」

半笑いの声とともに引かれたレバーは背凭れのロックを外し、これ以上ないほど背凭れに寄りかかっていたユキネを引っくり返した。

「あひゃあだってよ。愉快な奴め」
「おのれ……！　どいつもこいつも……！」
「悩め悩め。若い内なんかは買ってでも悩め。一端に悟ったつもりの人間ほど馬鹿な生き物はいないもんだ」

起き上がったユキネの頭にハルユキ手が乗っかり、何となく怒鳴る気概が抜かれてしまう。

ぽんぽんと宥めるように数回頭を叩くと、ハルユキは一歩下がって自分の席の肘置きに腰を下ろして、今度は純粋に笑った。

「悩め。頑張れ」
「あ……」
「それとも、もう疲れたか」
「……ん。いや、頑張る」

ふと、視線を向けてみる。

「じゃあ、ハルも悩むんだな……」
「いやいや、俺は生後五秒で超人だったから。悩んだ事なんてない」
「じゃあ、馬鹿な生き物だったのかお前は」

「……まあ、思春期はあったよ。それなりに」

がちゃり、と扉が開く音がした。

視線をやると、こちらに困った顔を向けているシアが立っている。

「あのハルユキさん。少し、……何と言うか、問題が」

「問題？」

「来てもらえれば、分かるかと……」

はいはい、と返事をしてハルユキは立ち上がり、ふと足を止めてユキネを見て言った。

「悩めよ若人。婆になるまで悩めてりゃ上等だ」

最後に小馬鹿にするようにユキネの額を指先で小突くと、客席の方に悠々と歩いて消えた。

◆

◆

◆

「およ、アリエス。なあにしてんだ？」

壁に背を預けて目を瞑るアリエスに、如何にも軟派でひょうきんな声がかかった。

アリエスが目を開けると、その先に予想と違わぬ軽薄な格好と軽薄な表情を引っ掛けた小男が一人と後ろに続く黒尽くめの女が一人。

「貴様を待っているんだ。２０分前からな」
「ありゃ、どうしちゃったの。発情期？　パンツ脱ぐ？」
「あら、こんなに人数集めたと思ったら、乱交でもするつもりだったの。気付かなかったわ。パンツ脱ぐの？」
「幼稚な茶々は止めろ。貴様等で最後だ。キャンサー。ヴァーゴ。下着なぞ脱がん」
「俺が脱ぐ？」
「むさい醜男のパンツ見ても楽しくないわ。部屋で一人でやって頂戴」
「……よし。なら折衷案だこうしよう。三人でパンツを脱いでそれを片手に部屋へ……」
「つまり何度殺せばその口は閉じるのだ」

喉元に刃が触る。つ、と男の目が明後日に逃げた。

「こりゃ失敬。お詫びといっちゃなんだがヴァーゴが明日からパンツ二枚ずつ履くから許してくれ」
「貴方は頭に被りなさいね」
「変態談義はやめろ。行くぞ、お待ちだ」

キャンサーの喉元に突きつけた鉄槍を体の内に引き戻し、静かに言を制しながら白髪の女は壁から背を離した。そして直ぐ隣の巨大な扉に足を運ぶ。

紅く豪奢に塗られるは王の扉。やれやれと肩を竦める馬鹿二人を意識の外に外しながらそれを押し開いた。

「揃ったか」

扉を開け切った途端、別段大きくも無い声が不思議と部屋の中に木霊した。

その姿と、思い思いの場所で時を待つ、名ばかりの同胞共を見やる。本来なら十三人居る筈だが背中の二人を合わせても十に満たない。

そも十三人が揃った事は一度も無い。

死ぬ者も珍しくは無く、所謂永久欠番も存在する。揃った。と主たるオフィウクスが見下ろす前には現在、自らを含めても6人ほど。

欠番はジェミニ、アクエリアス、レオ、サジタリウス、タウロス、ライブラ、キャプリコ。中には当然もう帰らない者も居る。

「さて、」

「……鬼事でもする気か？　生憎俺は児戯に付き合えるほど童心が残っていないが」

疑問を声にするのは、オウズガル事変に参加していなかった男の一人。

オフィウクスと同じ金髪だが、分相応に肩より上で切りそろえられ、顔は何処か尊大な色に塗れている。

「戦士向け勇士向けの遊びだ、ピスケス。殺すも由、殺されるも由」

アリエスがそう言ってやると、キャンサーが賺した様子で短く口笛を吹く。

実際、この組織には好戦的な人間が多く、奴もその多分に漏れないがそれでもあの化物と相対する事を楽しみにしているのかと思うと、どうしても愚かに見えて仕方が無い。

「そうだな。倒し果せた者にはこの国をくれてやる。励んでくれ」

なればこその閣下のこの発言。

驚いた顔が三人、それは有り得ぬと眉も動かさぬ人間が四人。その四人は全てあの化物と相対した人間である。

「……ホントに良いのかい、大将さんよ。と言っても俺はそんなモン要らないんだが」
「構わんよ。この国は只の副産物だ。気を引く物が有る訳でもない」
「――その言葉、違いは無いだろうな」

食らいついたのは案の定、尊大を絵に描いたような男。

「止めときなさいピスケス。少なくとも功を急いで単独で行けば綺麗に挽肉よ」
「黙れ売女。貴様等が仕損じたからといってその無能さをこの俺にまで押し付けるな」

影に体を潜めるように警告を発したヴァーゴは、貴族然とした言葉に肩を竦める。

「それと、お前には名を返すようにレオに頼もう」

感情を抑えるのを嫌うかのように、オフィウクスが言葉を続ける。

その言葉がピスケスを焚き付けるのに有効だったのは、憎々しげに見張られた目を見れば誰でも悟っただろう。

「敵戦力は」
「一人か。多くても5人以下だろう」

またしても、その場にいる3人の顔が強張った。

「貴様は今、戦争だといわなかったか」

「戦争だよ。我等が闘争は全て戦争だ。一人と一国が鎬を削る戦もあるだろう」

「あるものか！　貴様等は何人がかりでオウズガルの殲滅に失敗したか、記憶に新しいだろうが！」

「待て」

オフィウクスが止めたのは、高慢なピスケスの言葉ではない。

その喉元に今にも突き立ちそうだった、鉄の手刀。その腕は酔いどれそうな程の殺意に満ち満ちている。

「アリエス、構わん」

「は」

「ピスケス。作戦行動自体は成功を収めているつもりだ。戦果も少しは見てくれれば助かるが」

「……ち」

引かれた鉄の刃にピスケスは忌々しげに舌打ちをし、そのまま大仰な外套を翻して扉に向かう。

「待て」

その背中に、柔らかに声がかかる。
ピスケスは今度は何だと不愉快だけを露にして振り返った。
しかし、アリエスはその声に僅かに眉を顰めた。何やらオフィウクスの声がいつもと何処か違う事に。

「鬼は地の底に住むものだと記憶していたが」

それは、いつもより僅かに穏やかで、僅かに澄んでいて、僅かに傲慢。その声は言ってしまえば心地よくほろ酔いを満喫しているような声だった。

そして、その声は見えるはずも無い正鵠を打ち抜いた。

「天から、御出でになったぞ」

的を得ない言葉。しかし、皆が一様に太陽を覗き込む。
目を眩ますその光球の中に、今にも不吉を告げてきそうな黒い点がこちらに向かっていた。

◆

「また、でけえな」

ユキネ達を下ろして三十分。一度通り過ぎた街に減速しながら戻ってきていた。

二人は城までは同行して（ユキネが担いで）、今頃は城の門前程にまでは到着しているだろう。

時刻はちょうど正午ぐらいか、太陽を背に涼しい影が体を包んでいる。

そして眼下には敵の住まう町並み。賑やかに、しかしそれほど人通りは多くは無い。ビッグフットの首都、『ガリヴァ』。その人口、数えて五千。今現在は一万ともう一万ほど。

少ない。余りに少ないその人口。

当然少ないのはこの切り立った岩山の頂点に乗っかった町だけ。他の町村では農業やら畜産なども盛んだとか。

しかし、”偉大な歩み”。その名を有名にしているのは、膨らんだギルドチームが国を飲み込んだ事と、そして、その圧倒的な軍事力。

戦争でも起こるならば、この天然の城壁は登る事さえも難儀であり、慣れていない者なら空気の薄さに膝をつく。

しかし、そんな事よりも。

今は魔法の時代なのだ。一定の戦力の平均的向上より、個々の能力がどれだけ戦況を左右しても不思議ではない時代だ。

よって、この時代の軍事力とは即ち兵力である。

そして。

よりにもよって、チームとして最大になり国にすら成り遂せたこの国には。

冒険者ギルドの、総本山が存在する。

それは即ち、いつでも傭兵の補充が利くという事であり、常に街中に戦士が溢れているという事。

そしてそれにより治安を荒らさない為に、住む”きっかり五千”の民は全て選ばれた武者なのである。

主な特産は、剣、刀、槍、鎧、盾、兜、その原材料、――そして兵力。

無論、他な町では先に述べたとおり農業も畜産も有るには有るが、それも殆どは自給のための物。

優れた鍛冶技術も、優れた医療技術も、そして優れた戦闘能力も

全て魔法で持ちえる事が可能だからこそ有り得る国である。

無頼国、覇国、武国、鉄国。鬼国。婆娑羅国。

そう呼ばれる国。

異なるではなく、異常な国と書いて異国である。

既に、幾つかの視線がこちらに向いていることを悟る。ならば、そう待たせるのも無粋と言うものだろう。

ちょうど太陽と町を繋ぐ線上の辺りで、失速を続けていたコンコルドが重力の鎖にとらわれる。

頭を垂れ、翼が翻り、落ちる。

落下を始め。落下し。まだ落下する。

壁のようにすら感じる風を体中で受けながら、ふと思い起こす。

同じような事を半年前にもやった記憶がある。状況もほとんど同じ。今回は陽動と言うわけではないが実際には同じような事になるだろう。

あの時手を組んだ少女が今度は囚われる側ではあるものの、代わりに助けた少女が今回は助けるに回っている。

なんとも奇妙な縁だと思う。

直に地面が目前まで迫ってくる。

町の中心の開けた広場。いち早くどこかに駆けつけるのならば、ここに陣取るのが都合が良い。

既に危機を察したのか、辺りには誰もいない。

コンコルドの鼻先が頭が体が翼が。地面と対決し、拉げて潰れて砕けて、爆ぜ。拉げて潰して砕いて、爆ぜた。

爆炎が広場を舐め、鉄の破片を撒き散らす。

それもつかの間、燃え盛るコンコルドは元はナノマシン。破片が待ちの景観を損なわないうちにさっさと消すと、火も瞬く間に下火に変わり、一筋の焦げを地面に残して消える。

「おじゃまします」

そう、あの時もこう言った。わざとなぞった訳だが、嫌に懐かしい感覚に頬が緩みそうになる。

「御用件は？」

しかしあの時とは違い返って来たのは、慌てふためいた声ではなく芝居がかった用向きを問う声。それと、肌に痛いほどの闘志の視線。

気紛れに吹いた風の一陣が、残っていた砂塵と煙を浚っていく。

「……」

ぐるりと周りを見渡す。

顔。

顔。時々兜。編み笠。

剣。拳。刀。槍。槌。短刀。棍。刺又。針。杖。苦内。弓。斧。

いつの間に集まったのか、とりあえず数百人が周りに人垣を成している。大した錬度だった。これから相手をするとなると面倒な事になるのだろう。

しかし今はその前に。先程シアが見つけた機内に潜り込んでいた少女――フェニアを見下ろして声をかける。

「耳がごわごわ」

「……唾飲み込んでみ」
「治った」
「よし」

下ろそうかとも思ったが、うろうろされても迷惑なので小脇に抱え上げる。

「御用件は？」

そんな暢気な空気の中、辛抱強くももう一度声がかかる。

同時に空気が凝り固まって熱を帯びていくような感覚を覚えた。人の視線は重ねればこれほどの圧力を持つらしい。

さて、それはともかくなんと答えたものか。

無視して突き進んでもいいが、それはいくら何でも無粋である。

戦争か。――否、人死には避けるととりあえず誓っている。
逆襲（リベンジ）か。――否。この人間達には恐らく関係が無い事だろう。
ならばどうしたものかと、考えているうちに当たっている視線が何かを語ろうとしている事に気付いた。

そんな大した物ではない。ただ、爛々と光らせながら期待しているのだ。

すとん、と心地良いほどに納得がいった。

「喧嘩を売りに」

一瞬の空気の静止があって。

決戦の鬨が、町を根こそぎ震わせた。

鉄血はかくあれかし

広場の中心に上がった爆煙を見て、王座に集まった一同は様々な表情でそれを見ていた。

「あれか」
「それだ」

くっくと口の中で笑いながら肩を揺らすオフィウクスは、まるで子供の愉快な悪戯に当てられたかのよう。

その視線は何を見ているか判らない。視線を辿るならばただの天井の隅。しかし馳せている想いの場所は別なのだろう。

他の連中が城下を見下ろしている中、ヴァーゴは横目で起きた騒ぎに目をやろうともしないオフィウクス見定める。

あれは化物のような男だった。
しかし今はどうだ。オフィウクスを化物だとはもう思えない。現にあの鬼の前では赤子も同然だった。

それならば、今のオフィウクスは人間なのか。

――否。
身を切りそうだった怖さは既に無い。しかし人間らしさは逆に薄

れているかのように思える。勘違いだ、妄想だと言われればそれまでだが。

変わったのは劇的だった。

一体何があったのかと、何がどうなってそうなってしまったのかと、問わずに胃の中に仕舞い込むのが一苦労だったほど。

化物に叩きのめされて、人に堕とされたと言うのならばまだ分かる。

牙は抜かれたのか押し潰すようだった覇気はどこか薄れている。が、しかし薄れた量の倍ほどの妖しさが体の回りで揺蕩っているようだ。

心地好く酔っているような、それでいて微睡んでいる様な、しかし覗き込む瞳の奥は冷たく醒めているのだ。

彼は未だ刻々と変化を遂げている。

行き着く先はどこなのか。その時彼は何を成すのか。見届けたならば待っているのは狂乱か死か。何にしても、ろくでもない物が口を開けている。

（……キャプリコが居ない）

オフィウクスは、ほとんどアリエスとレオ、キャプリコ。そして新入りのスコーピオとしか接点が無い。

自身が弱いと認めているが故に、ヴァーゴは他の団員の情報を出来るだけ頭に入れるようにしている。

その中で圧倒的に情報が少ない人物がオフィウクスとキャプリコである。

キャプリコは完全に非戦闘員。

主にレオと共に精霊獣の強化や作成。それに団員の身体能力の向上などの研究を行っている。

と、いっても実際にそれらを表に出すのはレオの役目であり、キャプリコは基本的にどこかに引き篭もっている。

今も何処に居るかは知らないし、恐らく顔も見た事が無い団員も少なくないはずだ。

だからこの場に居ないことも不思議ではない、のだが。

集中からか、自然とオフィウクスを見ているヴァーゴの目が細まった。

知らなすぎる。オフィウクスがあのような能力を持っている事も、この間のオウズガルではじめて知った事だ。

そして目的もそう。

他の連中はある意味実直だ。見ていれば何を目的としているかなど簡単にわかる。

例えば先程のピスケスは没落した貴族。目的はお家の復興だ。だからこそ先程のオフィウクスの提案に食いついたのだろう。

タウロスはわざとらしいほど食欲に愚直だったし、ライブラは命令で、キャンサーは愉悦から、アリエスは忠誠から。そして自分は金目当て。

ならば、それを提供している男は何なのか。

誰もが思った事が無い訳ではない。ただどいつもこいつもそんな物を気にも止めないだけ。

しかし、ヴァーゴはそう大物ではない事を自分で知っている。だからこそ不信感は当然。

その不信感を奴は咎めもしないだろうが、最近は少し不気味に過ぎる。

――と。

「あ……」

そのオフィウクスの視線が、遠くの景色から離れてこちらを覗いている事に気付いた。

「う、あ……」

反射的に脳髄が目を逸らそうと命令を出す。しかし、眼球は受け付けない。微動だにしない。目を逸らした瞬間五体がばらばらに裂かれる映像が脳裏に浮かんぶのだ。

その時、肩に手が乗らなかったら。自分はどうなっていたのだろうか。

襲い掛かっていたかもしれない。へたり込んでいたかもしれない。若しくは――。

「キャンサー……？」

黒い皮手袋を嵌めた手が肩を軽く二度叩く。小柄な醜男がヴァーゴの一歩前に歩み出た。

「大将。ちょっと良いかい？」

「ああ、なんなりと」

気安い顔で、キャンサーはそう言った。

「あんたの目的が知りたいんだけど、良いかな」

ヴァーゴは目を見張るのを止められず、一斉に部屋中の視線が二人に集まったのを感じた。

しかしなるほど、聞けばいいのだ。それだけの胆力が自分に無い事も分かっていたが、しかし確かに聞けば嘘無く教えてくれる。嘘を付く男ではない。

注目されている。

その事にオフィウクスはふと気づいたようだ。少し視線をずらし、答える言葉を見つけたのか口を開いた。

「戦えなくなるまで、戦う事だな」

淡々とした言葉。

当たり前の事実を繰り返しただけだと主張したいのか、その声はあまりに理性的で起伏というものを感じない。

「それは、死ぬまで？」
「戦えなくなるまで、だ」
「……なるほど」

キャンサー。

この組織の中では、戦闘力は低い方だ。ともすればヴァーゴよりも低いのかもしれない。見た目も悪く、背は低くまるで物語に出てくるドワーフのよう。

しかし、誰を一番敵に回したくないかといえば、レオとオフィウクスとキャンサーで票は割れるはずだ。

それはキャンサーの能力に起因する事で、オフィウクスとて例外ではないだろう。無論、ヴァーゴもその多分に漏れない。

「よし、じゃあ俺はここで敵を待とう」

そして一体どういう意図からか、キャンサーそう言って王座へと続く段差に座り込んだ。

それは傍若無人な振る舞いで、ヴァーゴの視界の端ではアリエスが警戒に目を細めている。オフィウクスは依然愉快気なまま。

「おや、話し相手でもしてくれるか」

「話しますし、守りますよ。他ならぬ我等が大将殿下の為だ」

小さくヴァーゴは舌打ちをする。どうしようもなく癖がある人間ばかりで本当に嫌になるのだ。

切るべきだこの組織を今すぐにでも。そうヴァーゴの勘が告げる。今までこの感覚に従って生きてきた。

しかしそうなれば手に入る金の額が大きく減ってしまう。

ならばこの国を獲るか。そうすれば離れる事は出来るだろう。―

―しかし無理だ。あの鬼を打ち倒すなどありえない、愚策にすぎる。

凡庸な頭を必死に回転させる。

今判るのはこの組織は大きな岐路に立たされていると言う事。

ここの所大きな作戦が多かったし、強行的なものが増えた。大きく形を変わるのだ。それかあの鬼に食われて塵と消えるか。

どちらにしても、また誰かが死ぬ。少なくとも組織から脱落はする。

あの鬼から逃げる事すら難しいのだ。それなのにこの連中はあまりに危機感に鈍すぎる。

「んん？　おいヴァーゴ。聞いていかないのか？」

「……遠慮しておくわ」

どちらにしても、自分は付いていけない。あの化物に殺されたくはないし、これ以上の変化に付いていけるほど精神的にも長けてはいない。

タウロスの呆気ない最期が目に浮かぶ。いつの間にか死んでいたライブラを思い起こす。

（……死ねない）

黒いヴェールの下で下唇を噛み締めてから、ヴァーゴは扉へと向

かった。

◆◆◆

派手に踵を鳴らしながら、やたらに煌びやかな格好の男が廊下を突き進む。

名は、ピスケス。

本名ではなかった。本名は既に無い――いや、奪われている。最初に名を受け取ってくれないかと頼まれたのはあのオフィウクスからだ。

様式美でしかなく持っているだけで別に名乗らなくても良いというので、貰ったのだ。

しかし、いつの間にか真名は記憶の中から消えていた。そこだけくり貫いたかのようにわざとらしく、厭らしく。

奪ったのはオフィウクスではなく、あの子供。

いや、人の記憶を偽装するのは大変だったと、わざわざ術式を作り時間をかけてまで。そして問い質せば、『仲間外れは可哀想だと思った』、などと抜かしてのけた。

「っ――！」

やり場のない感情を廊下の壁に叩きつける。

確かにこの組織に、特に名前に頓着を持つ人間はいない。どいつもこいつも誇りなどない平民なのだ。歴史を感じれない猿であると言ってもいい。

殺したい。

ばらばらに引き裂いた上で絞首にかけて斬首に処せればどんなにいいか。

しかし、それによりもし名を永遠に失う事になれば、例えこの国を我が物にした所でまるで意味はなくなってしまう。

――『君は、魚（ピスケス）だね。水の中が一番広いと思ってる。空も大地も知らない小魚だ』

耳障りな言葉がいつまでも耳に残っているのもまた、記憶が弄られているからなのか。どちらにしても一刻も早くあのような猿の集団とは離別したい。

「……さて」

しかし、窓から覗いたあの男。見た限りでは中々一筋縄ではいかないだろう。

その化物染みた力は見ていれば十分すぎるほど判った。

加えて、オフィウクスが言った人外だという意味を考えると、決闘だの何だのと誇りをかけて戦うような相手ではない。

討伐の対象、ないしは災害とでも考えればいい。

それならば、ある程度疲弊させて城に来た所を待ち伏せした方が良いだろう。幸いこの国の人間の錬度は舌を巻くほどだ。どちらにしろまだ様子を見る段階だ。

出来れば、何らかの搦め手を用意したい。正面からでは分が悪い。

先日のオウズガルではタウロスの能力を用いたようだが、既に奴は死んだらしいし、時間も無しにそう発動できる物ではない。

それが出来るであろうスコーピオとやらは、自分の獲物から離れてまで手伝おうとはしないだろう。

「おい」

今正面から角を曲がろうとした給仕の娘を呼び止める。

「……はい」
「武器庫はどこにあったか」
「武器庫、ですか」
「ああ」
「……はい。こちらです」

歩き出した給仕の娘に続く。

ふと、その髪の色がピスケスの目にとまる。この城に来てそう日が経っていないので初見なのは仕方が無い。

しかし、中々見る事が無い深い青色の髪は新鮮そのものだった。

◆

とりあえずユキネは階段を駆け上がっていた。

城の中だとは思えないほど人間の数が少ないのは、やはり連中の無理な侵略がたたってだろうか。

オウズガル侵略の数日前に完了させたとハルユキは言っていた。しかし、町に破壊の跡はなく、城内にもそれらしい気配は感じられない。

少なくとも、これから先この国を統治しようとか支配しようとか言う時の独特の繊細さは感じられない。

「仮宿か……」

〈はい。特別この国である必要も無かったのでしょう〉
「”たまたま”？　ビッグフットを攻略したと？」
〈は。正面から征服したというわけではないようですが〉

矢のように廊下を走り抜けながら、扉を見つけ次第蹴り破って中を改めているが、未だ兵士の一人たりとも接触していない。

せいぜい給仕の娘の頭上を飛び越えたくらいだ。

「誘い込まれてる、かな……」
〈は。囮だと考えればこれほど判り易い作戦もないでしょう。ですがまだ詳しく判断できる状況ではないかと〉
「どちらにしても、私が暴れれば暴れるほど有利になるか」

それで敵が集まればシアが見つかる可能性は少なくなるだろうし、ハルユキの負担も少しは減るだろう。

出来れば、ハルユキと相性の悪そうな人間はこちらで倒してしまいたい。

しかし最悪は捕まってしまう事。

それだけは避けなければならない。極論を言えばそれを達成するだけでハルユキの窮地は消える。そうすればフェン達三人の救出率は高くなる。

〈敵は殺すのですか？〉
「……誰かが殺すぐらいならな」
言っていて酷く的外れな言葉に聞こえて、ユキネは顔を顰めた。
〈主！〉
響いた声に一気に空気が張り詰めた。
〈足許！〉
ぞる、とこの世のどの音とも似つかない音。
行く先の地面が黒く塗りつぶされている。影だ。踏み入ってはいけない。いや、影を重ねる事も禁忌だと悟る。
跳び、影に達する寸前で中空に垂直に着地し、翻って着地した。
「曲芸じみてるわね」
「……敵だな」
問答はいらない。それにどこかで見た覚えがある風貌だ。

「待って待って。ストップ」

床に蔓延っていた影が一瞬で女の足許に引っ込んだ。誘いだろうか、とりあえず剣を下段に下ろし女の顔を見やる。

「何だ」

「剣呑な女ね。もう少し女らしく奥ゆかしさは持てないの？」

「……余計なお世話だ」

「つまらない答えね」

言葉の代わりにすり足で一歩前に出る。それに女は溜息で返した。

「私は今回は何もしないわ。だから生かしておいた方が得かもしれないわよ？」

「それは知らないが、お前を倒すメリットなら私にも分かる。それに敵意は先程確認した」

「あれは貴女が問答無用で斬りかかって来そうだったからよ。ま、信用できないのは判るわ。だからこうしましょう」

日光の下を嫌うように、女は陰った壁に背を付けた。

「首謀者の居場所を教えてあげる。まあ隠れている訳じゃないから時間をかければ見つかるでしょうけど、時間が惜しいのは皆共通で

しょう？」
「狙いは何だ」
「それは秘密」
「このまま共に一時を過ごしたいのか？」

もう一歩。いや二歩前に出る。

「……お金をね。出来るだけ盗んで私は消えるの。だから頑張ってよ？　あの化物と協力して全員皆殺しにして欲しい」

小さく肩を竦めて、女はそう言った。

「金……？」
「そうよ。オウズガルでは実入りが少なかったから……ってあらいけない」

下段から振り上げた剣が女を庇うように立ち上がった影を切り裂く。

女の顔は余裕の体を崩さないまま。今にも影が襲ってくる。

ユキネは左手を剣から離し女の胸倉を掴んで、地面に引き倒した。
その喉仏に剣の横刃が乗る。

怖いほどの静寂が戻っていた。

「――お前、オウズガルでノインを浚った女だな」
「そうね。ついでに言えば主犯かもしれないわね。ああ、でも主謀は別にいたのよ？」
「三人は何処だ！」

喉に当てた刃に僅かに体重が偏る。

ぷつりと皮膚を裂き、紅い絨毯へ向かって血が伝った。

「さあ、あの三人が目的だったのは私ではないから。でも、知っている人間は知ってるわ」
「何処にいる」
「言ったら話してくれるのかしら？」

無言。

返すべき言葉は見つからなかった。

それをどう取ったのか、女は小さく笑って口を開く。

命を刃の上に置かれているとは思えない慇懃な態度で口の端を吊り上げながら、ただ『上へ』と。

聞いた。女の目はただ薄く細められるだけ。言うべき事は言った

のだと悟る。

だから、腕に、力を。

「……っ！」

ふと息をついて瞬きした瞬間に、女の姿が黒い泥くずとなって地面に溶けた。

そのまま黒い沼と化した足許を切り裂き、後ろへ跳ぶ。

「駄目よ。落とせる首は落とせる時に。刃は血で磨いてあげないと。そんな綺麗な剣を錆びさせてしまうのは忍びないわ」

高く売れそうなのに、と。そう女は言う。

そしてそれっきり、女の気配は戻ってこなかった。

〈どう致しますか？〉

「……行く。敵地で穴熊に篭もる訳にもいかないだろう」

〈委細承知〉

顔を上げれば、股を開いた売女のように警戒が無い階段が目に入った。

走り出そうとして、剣に付いた血に気付きそれを振り払った。

壁に赤い斑点がこびり付く。

頭に沸いて出た感慨は、言い方を変えようとやはり苦悩の痛みと同じものだった。

◆◆◆

宙に浮いた見上げるほど巨大な大男の足首を引っ掴む。

「んん！」

その即席の武器で一度大きく周りを薙いで、手近の建物まで放り投げた。

男の足の関節が外れた感触がしたが、死んでいないという事で一つ勘弁してもらいたい。

見渡せばそこら中にのびた男が転がっている。それでも猛者の人

垣に穴は無いようだ。そもそもここから動く気は無かったが、一呼吸も置けないのは中々面倒である。

「――隙ィ！」

その証拠にハルユキの頭上から声と槍。

しぶとく攻撃をかわし続ける幾人かの内の一人。その手には一本の槍。顔は練兵のそれ。握る槍は疾く強い。

ただその男と全く同じ姿が十六人も居る事がハルユキの常識の裏をかいている。

他にも目の前からいきなり剣先が出てきたり、足場が砂の渦になったり、視界がいきなり利かなくなる。

そもそも絶え間なく遠距離攻撃を得意とする人間の火水土風、時には鉄や木で溶岩などで出来た刃と弾のアメアラレ。

まるで万国ビックリ人間ショーだ。

それに、出来るだけ一撃で倒しているにもかかわらず敵は増えていく一方に思える。

恐らく敵は一人だと聞いたので控えていたが、それがまだ倒されないとなったので続々と町中から集まってきているのだろう。

何しろこの連中――。

「見事ォ！！」

手近な槍を二本ずつ引っ掴んで柄を持ち主の胴の中心に突き込んだ後、降りて来た残り十二人の内3人ほどを当身で吹き飛ばす。

そして、広場の端まで吹き飛んでいくそいつ等を見ながらも、喜色満面で突っ込んでくる野郎共。

ギルドの傭兵は、名高いビッグフットに名を刻もうと意気込んでくる人間ばかりで、この町の人間も戦いに身を捧げた人間ばかり。

つまりは、全員が全員戦闘狂だった。

「最近の若い奴等は、全くッ」

決まりの文句を零している間に、剣先が魔力が殺意が迫る。

一歩前に出てきたのは両脇に居合い刀を提げた痩身の男。それでも貧弱ではなく、腕だけ見てもその体が限界まで引き絞られているのがよく分かる。

この男も先程から中々仕留められない人間の一人。

その鍛え上げられた武技はもちろん、男固有の魔法がどうにもその武を引き立てている。

そう複雑な魔法ではない。
ただ、握っている剣の一切が消えてしまうだけ。

「ちぃッ！」

しかし、これが厄介極まりない。

男は両脇に刀を提げている訳だが、二本ではないのだ。両脇に三本ずつ。そして背中に野太刀を一本。どれも長さが違う刀が納まっている。

見えているのは鞘だけだ。今男がどの刀を握っているのかどの刀が鞘に収まっているのかがまるで判らない。

刀の長さは野太刀の五尺から、小脇差の一尺まで。おおよそ五倍の間合いが変幻自在。

鍛え上げられた腕力と技の前に、見破ることも難しく、まるで何も手に持たずに舞っているかのよう。

誰かに追撃をかけようとすると、この見えざる刃が文字通り躍り出てくるのだ。この男は最たる例ではあるが、こんな癖がある人間ばかり。中々に歯応えがある。

しかし。

「これで、三本」
「――糞ッたれめ……！」

指の先で摘んだ刀を砕く。

運良くそれは最大の武器であった野太刀だったらしく、男の顔が悔恨の形に歪む。

再び後退する男を追おうとすると、それに勝るとも劣らない猛者達が群れを成して前に出た。

ほぼ視界の全ての角度から数えるのも面倒なその数。しかし、武器は武器。一歩引いて、しかしそれでも追ってくる刃先に追い出されるように空中に跳び上がる。

そして、その先で。

「――っ」

視界一杯の閃光が目を焼いた。

火は火と混ざり合い炎となり、水を飲み込み一部が気化し雲となり、風が吹けば雲を巻き込み嵐となり、大地の腕や槍がそれに運ばれて唸りを上げる。

その全てがどういう訳か殺し合う事もなく、ただこちらを飲み込もうと迫っていた。

津波である。

質も量も脅威も殺傷力も、そう呼んで足りない物は何一つ無い。何人。何十人の魔力が一塊に詰まっている。

町の半分を飲み込む気かと言うほどの規模。

地上からは、さあこれでどうだ化物、と込められた自信とハルユキの死体を心望むその殺意が露骨に叩きつけられている。どうもあの男も最初から一役買っていたらしい。

再び津波を見て、ハルユキはそれを見定めるように目を細めた。

罅が入るほどに歯を噛み締め、意識を、神経を、右足に注ぎ込む。

出来るのか。

同じ事をやったのは大分前。対象は比べ物にならないが、自分も今や十分に化物だ。不可能ではない。

そう決意すると同時に一度大きく筋肉が脈動し、何か言い表しにくい力が流れていく。

「……っぎ」

不意に、ぼろりと何かがこそげ落ちた。

これ以上で恐らく”角”が出る。まだまだだと叫ぶ体を今度は抑え付けるために意識を使う。

最後に、無理矢理口の端を吊り上げて、思い切り右足を横薙いだ。

右足が振り切られ、風が吹き、津波はそこらの屋根と一緒にかき消えた。

吹き抜けた風が音まで連れ去ったかのように、静寂が広場を包む。広場に蠢く人間の全てが口を開けて動きを止めている。

それは、人間をやめる手前の線の上に立っているハルユキにとって、あまりに致命的な隙だった。

反動で吹き飛んだハルユキは、広場の端の家の壁を蹴り、また元の位置に戻る。

くるりと反転し、まだ余韻と火照りが残っている右足を再び構える。そして加速しながら今度はそれを地面に叩き付けた。

地面が罅割れて捲れ、地面の上の何もかもを飲み込んでいく。

押し潰されれば怪我は免れないだろうが、あれだけ鍛え抜かれた兵士達ならば死なないだろう。

と、辺りを見渡すと案の定瓦礫を押し退けその場で倒れこむ人間が多く見られる。

「そうトントン拍子にはいかないか……」

地割れが届かなかったのか、攻撃はしてこないもののまだ奥の方には敵の人垣が見える。

「……ちょっと強すぎるなああんた。こりゃ勝てねぇわ」

そんな風に遠くを見渡している中、声がした。年ではなく、使い過ぎで掠れた聞き取りにくい声だった。

「……嫌に、さばさばしてるな」
「まあ今はな。御国の為には戦えない」

がらりと足元の瓦礫のを押し退けてその下から出てきたのは、叩き折れた槍を持った先程の男。

戦う力も無くなったのか、男は役に立たなくなった刀を放り出すと遠くにそびえる城を見やった。

「あんた。あいつ等倒しに来たんだろ？　頼むよ、俺等の王様助けてやってくれ」
「……判らないな。お前等でもこの人数と実力なら問題無いだろう」
「違うよ。俺達じゃあ駄目なんだ。少なくともこの国じゃあそうなってる。アンタが”たまたま”助けなくちゃ駄目なんだ」

辺りではとりあえず怪我人を運び出す事にしたらしく、こちらに攻め手は無い。

こちらが自発的に攻撃しない事を前提にしているのだろうが、何とも暢気な風景だ。そんな中、男が胡坐をかいてこちらを向いた。

「この国の王様はな。一番強いからそのまま王様になったんだ。全員守ってやるってな。だから建て前がある」
「建て前？」
「負けたまんまじゃあ、もう王様が胸張れなくなる」
「……言っとくが、ほぼ間違いなくあいつ等は正攻法じゃなかったぞ」

それでもだ、と男は諦めたような自嘲を漏らす。

「俺が来なかったらどうするつもりだった？　都合が悪くなったら殺されるぞ」
「俺達は骨の髄まで戦士だ。命より誇りを取るさ」
「……なら、何で俺に助力を頼む？　他力本願が誇りなはずもないだろう」

笑ったまま、男は言った。

「俺達は家族（チーム）だ。俺の誇りなんぞより家族の命をとって何が悪い」

この国の人間は戦士だという。

単純明快な生き物だと思っていたが、思ったよりも難儀な生き物であるらしく、溜息と苦笑が出た。

「……質問がある」
「何だ」
「ここ最近で青い髪の少女を見た奴はいないか」
「あれじゃなくてか」

男が指差した先には、離れた家のテラスで数人の女子と共にブレイクタイムを満喫している少女が居る。無論その手の中にタンポポの刺青は無い。

「……ここはあれか。託児所も兼ねてんのか？」
「子持ちも多いからな」
「あっそ……」

また暢気な風景に気概が削がれそうになるのを耐えつつ、まずは形から。表情を引き締める。

「あれじゃなくてだ。外見は同じだが、手の平に薄く花の刺青がある」

「……探して見よう。城下にしては広くはない町だ。探すのにそう苦労は無い」

そもそもハルユキとしては、あの子供が”殺されに出てくる”のを当てにしていたのだ。

もう一体子供の死体を用意しそれを殺させる。そうすれば、少なくともあの子供の想像の中の俺は子供と関わる理由が無くなる。

出来ればそこで何らかの接触を持つべくここで判りやすく暴れていたのだが、どうにも徹底的に引き篭もる事に決めたらしい。

そして、それはほとんど難儀な場所に隠れている事を証明もしている。そう考えれば、計算していた訳ではないがこの戦闘は良い結果に転がってくれたようだ。

山の上の町だ。普通の城下町よりはやや小ぶりだといっても、もし何でもない家の中に監禁されていたらそれだけで相当の時間を食ってしまう。地理に詳しい人間の助けは出来れば借りたかった所だった。

こうなれば、人海戦術だろうが何だろうがどうにかして見つけ出さなければならなくなった。

「最後の質問」
「ん？」

壊れた町並みを改めて見渡す。

「……いくらなんでも、本気出しすぎじゃないのお前等」
「それは戦士の嗜みだ」
「あ、そう」

さて、ならばこれからどうするか。
完全に引き篭もって居留守を決め込まれた以上、特にやる事も無くなった。

ますます出て来なくなるかもしれないが、先に城に行ってその他全員をこの広場にでも吊るしてみるか。
そんな事を半分以上本気で考えていると――、

「やあ、相変わらず怖いね。君は」

そんな待ち望んだ声が聞こえた。

鉄血はかくあれかし（後書き）

すみません遅れました。
少しリアルでごたついているので目標は週一更新でいきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9400k/

ハイイロ ノ カナタ

2011年10月6日19時56分発行